

現代文學全集

XXII



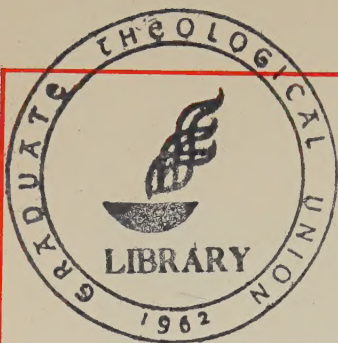












# 永井荷風集

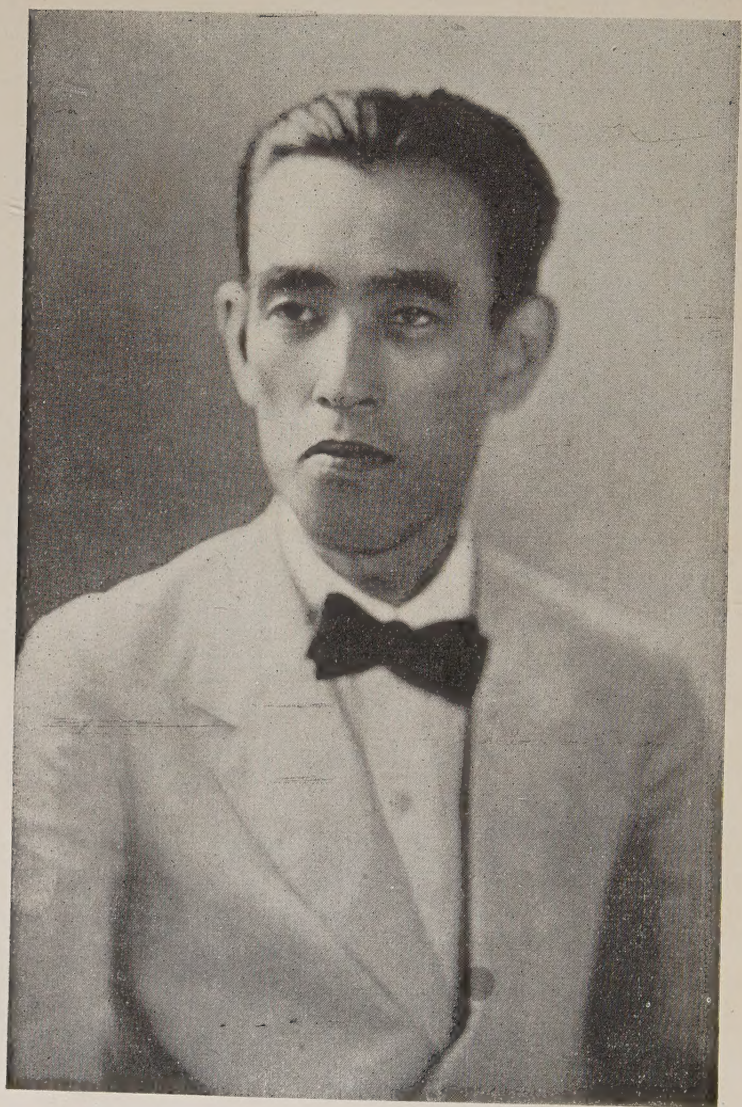
改  
造  
社  
版

杉浦非水裝幀









影 近 者 著



PL755.6

.G38

v.22

# 「永井荷風集」目次

卷頭寫眞（照影）  
序 辭（筆蹟）

おかめ笹……………三

新橋夜話……………七三

掛取り……………七三

色……………七九

風邪……………八九

名花……………九六

松葉巴……………一〇三

五月閣……………一〇

浅瀬……………一五

牡丹の客……………一九

短夜……………二四

晝す……………二六

見果てぬ夢……………三三

祝盃……………四三

すみだ川……………一五二

あめりか物語……………一七五

船房夜話……………一七五

牧場の道……………一七九

岡の上……………一八三

醉美人……………一九一

長髮……………一九六

春と秋……………二〇一

雪のやどり……………二〇六

林間……………二〇九

悪友……………二二三

舊恨……………二二八

寢覚……………二三四

一月一日……………二四〇

曉……………二四四

市俄古の二日……………二四二

夏の海……………二四七

夜半の酒場……………二五二

落葉……………二五四

夜の女……………二五七

支那街の記……………二六五

夜あるき……………二六九

六月の夜の夢……………二七二

妾宅……………二八一

腕くらべ……………二九三

二人妻……………三六二

散柳窓夕榮……………三九二

雨瀟瀟……………四一五

砂糖……………四三〇

斷腸亭雜橐……………四三二

築地草……………四三三

矢はずぐさ……………四三五

矢立のちび筆……………四四六

雨聲會の記……………四四八

一……………四四九

初硯……………四五二

築地がよひ……………四五三

草箒……………四五五

何ぢややら……………四五七

葡萄棚……………四六〇

松の内……………四六二

夏ごろも……………四六三

來青花……………四六三

曝書……………四六三

夕立……………四六四

立秋所見……………四六五

書かでの記……………四六六

小説作法……………四八一

年譜……………四八七





## お か め 笹

## はしがき

小説の題名あまり濃りすぎたるはいやなり  
 りどうでもよきは猶更いやなりこの小説  
 大正七年の正月雑誌中央公論に書  
 始めの十回ばかりを掲載せんとするに氣  
 に入つた題名を得ず。門人とせんか畫工  
 とせんか、或は主人公の名を其のまゝ、上  
 石とせんかなど思案につき、筆抛ちて庭  
 に立出でけるに折から、園丁の來りて蘇  
 鐵の箱よけなしゐるに、小説の事しばし  
 打忘れ、いつぞや頼み置きたる小笹はい  
 かゞせしや。そこらあたりの土手崖など  
 に生茂る野笹の事なるぞ、移してわが家  
 の垣に植ゑなば野趣ありて面白からんに  
 といへば、園丁漸く思出したる類つきし  
 てあのおかめ笹のことか、西の市にて唐  
 の芋をつるすあんな笹がどうしてお氣に  
 めしましたかと、またしても更に氣にと  
 めぬ様子なりけり。其の時門口より聲高

にお約束申せし期日なり御草稿を頂戴し  
 たしといふは、中央公論の編輯子なれば、  
 兎角考案のいとまなく、園丁が云ひける  
 おかめ笹なる名のをかしきがまゝにいそ  
 ぎ草稿の初に書きつけて渡しけり。そも  
 そも竹は風雅のものなり。然るを竹に同  
 じき笹の中にもかのおかめ笹は人にふ  
 まれ小便ひつかけてられて、いつも野の末  
 路のはたに生茂り、たま／＼變屋親爺が  
 えせ風流に移して庭に植ゑよとたのみで  
 も園丁更に意とせざる氣の毒さ。つまら  
 なきわが作の心とも見よ。又はこの小説  
 の主人公が身の上とも見なばさまでこじ  
 つけたる題にもあらじと、後日に至りて  
 心つきければ、今年大正九年の春舊稿を  
 改作して梓行せんとするに當りてもおか  
 め笹の題名は其まゝに残してかくなん。

大正庚申年二月晦日

作者識

富士見町何丁目何番地といふ番地ばかりを  
 目あてに山の手邊にはあまり來た事のないもの  
 が始めて鶴崎巨石の住居を尋ねると、近處一帯  
 の様子からこゝも同じく待合ではないのかと暗  
 い晩などはわけて途惑ひするさうである。然し  
 それは鶴崎の住居が意氣に艶めて見える譯で  
 も何でもない。矢竹が二本ひよ／＼と生え  
 た小さな門のある普通の二階家で、書見れば滅  
 多に拭いたこともないらしい格子戸の内には、  
 泥のついた古下駄が亂雑にぬぎ捨てられた随分  
 ときたならしい古びた借家であるが、電車通  
 から鳥渡曲つたこの横町は鶴崎の家をのぞい  
 て殆ど門並藝者家と小待合ばかりになつてしま  
 つたが爲である。しかも此の賣に向くやうに  
 と新しく建直された家はほんの二三軒で、後は  
 大抵今まで普通の人の住んでゐる古家をば其ま  
 ま門口の電燈の名前を書替へる位の事。中には  
 これが客商賣の家かと呆れるばかり二階の障  
 子の破れたのを張らぬ家さへある位なので、つ  
 まり鶴崎のぢゝむさく仕荒した二階家もその汚  
 れ目がさして目立たぬと云ふ譯である。意氣だ  
 とか華奢だとかいふ事からではなくて、如加減

CABLE ADDRESS:  
"KARUHO."

KARUIZAWA HOTEL,

TEL. No. 20 (KARUIZAWA)  
KARUIZAWA, JAPAN.

HOMELIKE PLACE  
3,200. FT. ABOVE  
THE SEA.  
Y. SATO, PROPRIETOR.

THE BEST SUMMER RESORT AND THE CENTER FOR  
WINTER SPORT IN JAPAN.

**KEPT OPEN THROUGH THE YEAR.**

本書ノ編纂ニ邦技定ニ日高浩英君ニ委  
任被シマシク英君ノ快骨有テ成謝被シマス  
尚ニ他ノ業績ト序辭トヲ掲ゲン定メササ  
ウデスガ拙著ニハ既ニソレノ叙カワケテアリマス  
今更ニ贅言ヲ加ルニモ及ビマセヌ且又旅中ノ事歟  
掲ヘテ素マセンテ知ペンヲ借リテ之ヲ旅窓ノ燈  
ニ識シマシク丁卯歲秋八月荷風生記



「今日はもうしたんですか、まだ學校から歸つて参りません。」

さうか、ぢや爲次をつれて行かう。

「あなた、爲次も此頃は言ふ事をきかなくなつて仕様がなくなりましたよ。私が用をしてゐる中に内證で學校の包みを臺所へ投込んで遊びに行つてしまふんです。この裏の藝者家の子供とお友達になつてからほんとに皆な仕様がなくなりしました。昨日なんども、あなたの方の御飯時分になつても二人とも歸つて来ないんですよ。今の中に厳しく小言を云つて下さらないとほんとに困ります。」

鵜崎は急に汚い出歯をむき出して饒舌り出したお慶の顔を不思議さうに眺めて居たが、「それぢやいよ、何處かへ引越すかな。」

するとお慶は俄に元氣づいた様子になり臺所のことも打忘れたやうに膝を進めて、御屋敷の御近處に空いた家があるといふんですがね。さうすれば何かにつけてあなたも御便利でせうし、私だつて先見たやうにちよいと御手傳ひにも付へますしね。」

「あの邊は大きな屋敷ばかりだよ。吾々の借るやうな家はなさうだ。」

「何方でも能御座います。こゝぢや御用があつ

て家へいらつしやる方にも全く御氣の毒です。佐倉の弟御さんなんぞも此のお正月おいで

の時、軍服を着ちや氣まわりがわるくつて此の通

は通れなくなつたつて、さう仰有つていらしつ

たぢやありませんか。その時分から見ると鳥渡

の中にまた烈しくなつたんですもの。直お隣

で待合になつて了つたんですから。」

「これぢや全くやりきれないな。喜んで遊び

に來られるのは屋敷の若旦那ばかりさね。は、

は、は。」

「あなたは冗談ばつかり云つて笑つてお居でな

さるけれど、あの方の事ですもの、何かひよつ

と間違ひでも出来ようものなら、お屋敷の方へ

も申譯がありません。」

其の時突然隣の待合から、「只今お二階は掃

除をして居りますから。」と客を案内する甲高な

女中の聲。

「藝者だ藝者だ。二三人呼べ。」ともう何處かで

飲んで來たらしいお客の怒鳴る聲。

「な、な、繁昌する。驚くべきものだ。」と鵜

崎は笑ひながら髭をひねつたが、お慶は何とつ

かず溜息をついて下へおりて行つた。ついで

鵜崎も座を立ち机の抽斗から湯銭を取出し、欠

伸をしたついでに又鳥渡窓の外なる待合の方を

居目に見返しながら體でのそり／＼掃子段を降

りかけた。

鵜崎は早晩どこかへ轉居しなければならぬと

思ひながら、何しろ十年近くも住み占してしま

つたので、つい其日々々の事に追はれてそのま

まになつてゐるのであつた。鵜崎はもと中六番

町に居るを傳へてゐた宿室技藝員内山海石と

いふ輩の玄關に長年食客をしてゐたのであ

るが、如加減年も取つて來るので、先生の媒介

でこれも同家に多年賃働たしてゐたお慶を娶

り、始めてこゝに家を持つたのである。その頃

この横町には招魂社の廣場に添うた長通へ近

い處に以前から居付きの待合らしい家が二三軒

あつたけれど滅多に三味線の音も聞えず、とし

て人の目にもつかかなかつた。鵜崎は中六番町な

海石先生の屋敷からあまり遠くない處をとり、

この邊の體の横町を足にまかせて住家をさがし

歩く中、現在目の前なる某町の右町と茂つた間

が日につき日當りはよくないかも知れぬが至極

静さうな裏通、仕事をするにもよからうし、

それに小さいながら門があつて家賃が八圓とは

恰安だと大喜ばし取極めたのであつた。翌年

良男の庄太郎が生れた年たつて又次男の爲次

が生れたが、其の頃までこの裏通は日本暮れる

ぢむむさいと云ふ處から待合に見違へられると  
ぶふのも甚不思議な次第である。

主人は年の頃四十前後、五分刈のせむかまだ  
白髪は目につかぬが狭い額にはもう大分深い皺  
がきざまれてゐる。小柄ではあるが一體にがつ  
しりとした身體付。色の黒い眼の大きい顔のこ  
けた顔は眉毛と口髭の目立つて濃い處から顔の  
様子が何處となくせゝこましく、上の方から押  
し潰したやうに見える。洗晒しの久留米絆に  
よれ／＼になつた紺色メレンスの兵児帯をだら  
しもなく後で結び、毛脛のみか襪までも見えさ  
うな大胡坐。土鍋を側に杵へ張つた繪絹へ頻り  
に熱水を引いてゐたが、横手の窓から次第々々  
にさし込む西日にとう／＼顔を照され、鵜崎は  
顔をしかめながらぬつくと立上つた。けれども  
別に窓の簾を下さうともせず、二階の座敷に立  
ちすくんだまゝ大きな眼を一層大きくして窓の  
外を窺いた。

窓のすぐ下は椎の若木を目かくしに植込んだ  
待合の小庭である。この不招魂社の祭禮時分ま  
では保険會社が何かへ勤める人が仕んでゐるた  
引越すが早い如く明月といふ今の待合になつたの  
である。欄干をつけた二階の眞向は道路を隔て  
て地面が一帶にずつと高くなつてゐる舊華族の

屋敷の裏手で頑丈な石垣を築上げた上にも又  
頑丈な土塀越し櫓と吉野櫻を植込んだ中に  
餘程年數のたつたらしい櫓か何かの大木が往來  
の眞中まで枝を伸してゐる。石垣の盡きる處、  
地面のがつたり低くなつた處からは芋屋車屋  
煙草屋荒物屋などがゴタ／＼と續いて山の手の  
裏町のさびれた光景を見せてゐる。

屋敷の棧にはいつか鰯の聲も少く、九月も  
早や半を過ぎたが二三日前から急にまた蒸暑く  
なつて、じり／＼照りつける西日に往來はひつ  
そりとしてゐる。隣近處の藝者家の格子戸もし  
まつたきりで女の聲も下駄の音も聞えない。窓  
下の待合では山出しの下女が裾を端折つて頻に  
縁側を拭いてゐるのが植込の間からすき見える  
ばかりであつた。鵜崎は西日のとどかぬ床の間  
の前に胡坐をかき續けさまに手を鳴した。

生際の薄い手束の髪ぼう／＼と振亂した細君  
らしい瘦せた身長の高い女が、汚れきつた白か  
なきんの前掛けをふき／＼襦袢掛けのまゝ上つ  
て來た。おでこで、出歯の馬面、見るからと體氣  
なくすがれてゐる上に塵ほども身なりをつくら  
はぬので年の程も亭主よりはぐつとふけて見え  
る位である。

「お慶」と鵜崎は仔細らしい調子で、一胸形の

縁際まで出掛けらるゝ、夕前は早目にしてく  
れ。

「もう何時で御座いますか。」  
「もう四時過ぎだらう。」と鵜崎は唯だひねり  
ながら眉をひそめて燈の上の西目を見てゐる。  
「あいにく今日はまだ何にも買つて御座いま  
ふけれど。」と妻のお慶は疲れたやうにべたりと  
縁側に坐る。

「晝食べた早手が残つてゐるだらう。鮎ももう  
ないのか。」  
「腐りやしないかと思ひましていたゞいてしま  
ひました。」

「新芋はお前まだ高いんだぜ。御料理屋で使ふ  
位だよ。無暗にお前の物業にされちやたら  
ん。」

「玉子と摘菜が御座いますから御したしにで  
も……。」

鵜崎はもう面倒くさいと云ふ風で、一何でも  
い。早いものがい。  
「はい。」と細君は立かけて始めて氣がついたや  
うに、「大變目がさし込みますね。」  
「今の中湯へいつて來ようかな。」と鵜崎は吠を  
囁みしめて、「庄太郎も連れて行かう。家にゐ  
るか。」

く、鰯の肉の出張つた爲めに象のやうな小さい目はいよ／＼細く見え、小鼻の開いた大きな鼻ばかりが一段日立つて顔中にはびこつてゐる。鵜崎の先生なる内山海石の一人息子翰といふのである。スバ／＼ふかす葉巻の匂あたりに高く漂はせながら、然しう云へば何處やら少し舌たるい調子に態度のみ甚豪然として、「いやに笑ふな。まア湯へ行くなら行つて来たまへ。上つて待つてゐてもいい。」

「湯は後にいたしませう。實はこれから一寸淺草まで用たしに行きますが、まだかまひません。」

「淺草へ行くのか。それぢや君、その邊まで一所に行かうよ。途中でゆつくり話をしよう。細君の前ぢや少しいかな事があるんだ。」

「はゝゝ、さうですか。」

「おい君、眞面目な話だつたら。いかなア、さう笑つてちやア、僕の結婚について一件だ。僕は電車のところまで待つてゐる。早く来たまへ。いゝか。」

「おい、お慶。もう飯はいらんぞ。」「あら、どうなすつたんです。」「居眠の坊ちゃんにつかまつた。と内へ上ると共に帯を解きながら、何か御用ださうだから道々お話を伺ふ事にした。往來に待つておるでだから早く着物を出してくれ。」「お慶は呆れたやうに良人の顔を見たが、其の身に収つても矢張舊主家の若旦那の事とてまきかに困つた坊ちゃんだとも言ひかねたらしく、黙つて簞笥の抽斗から、もう七つ下りの絹の羽織に洗晒の薩摩紬の兵兒帯を取出す。」「矢張袴をはいて行かう。いつものセルでいい。」「と鵜崎は友度もそこ／＼急いで電車通に出ると、翰は以前馬場であつた靖國神社前の櫻の下からステッキを振り／＼出て来て、三非常に早かつたな。坂下まで歩かう。淺草はどこへ行くんだ。」「胸形まで参ります。」「さうか。ぢや、君、まだ少し早いが何處かその邊で飯を食はう。僕は少し方角ちがひだ。白山の方面へ行くんだ。」「坊ちゃん、今日の御相談と云ふのは、その方面の事ぢや無いですか。どうです。當りませんか。」「

「まづ御推察の通かね。はゝゝは、度紹介して置くとよかつたんだが、君は僕がさそふといつも巧に逃げてしまふもんだからな。」「はゝゝは。今度はどう云ふ女です。藝者ですか。」「

「まアその邊のところだな。」「

「藝者ならまア始末がいゝでせう。事件は餘程面倒らしい模様ですか。と鵜崎はまだろく／＼話も聞かぬ先からもうどうやら談判らしい調子に、さすがの坊ちゃんも少し面喰つた氣味で、

「いや君、今度のはまだ別に手を切らうと云ふ話ぢやない、すこし問題が複雑してゐるんだ。」「九段坂を降りて、人は神保町邊の牛肉屋に上つた。鵜崎は翰が内々での急用と云へばもう女の室にきまつてゐるので、今日も其様子から直にそれと推察してしまつたのである。翰は今年三十一、法科大学をば大抵きまつて一年おき位に落第しつゝ、漸くこの夏卒業はしたものゝ、無論就職の口もなく今だにぶら／＼遊んでゐるのである。大酒呑のぼろツ賢で、これまで通學中も再三女で手を差か度毎いつも鵜崎に頼んで尻振をして貰つてゐるのである。」「最初は大學に進んだ翌年の暮に居眠のそばなる三番町通の唯ある西洋料理屋の娘を娶ま



と氣味の悪い程度として冬の夜などどうかすると向のお居敷の樹に鼻が鳴きますとお鷹がよく怖がつた位であつた。

鶴崎白石の製作が前後にたつた一度文部省公設展覽會の會場に陳列せられたのはその頃の事である。全くたつた一度である。其後はついで四五回出品したがいつもさまつて落選であつた。鶴崎は審査員中に内山海石先生と云ふ後援がありながら此の調子ではといひよいて心細く、次第に意氣も沮喪するし、生計も追々子供の大きくなるにつれて苦しくなつて來る處から、展覽會の仕事は萬一當選した處で買手がなければつまり時間と繪具代を損するばかりだと遂に功名の念を斷つた。もとゝ鶴崎は極めて薄給な官吏の家に生れ、自分から好んで畫工になつた譯ではない。彼の父は巨石を頭に男の兒三人女一人にそれゝ高等の教育を授けて行く資力がなかつた。男は皆官費で學問させた俾句運さへよければ總理大臣にでも親視監にでも何にでもなれる軍人、女は師範學校に入れる事にした。現に二番目の弟は大尉となつて佐倉の聯隊に勤務し木の弟は早くも海軍少尉候補生になつてゐるが、長男の鶴崎ばかりは不幸にして軍人は身體検査で勿ね

られ、商船學校へ廻つて見たが、矢張り同じ高等師範學校は學術試験に不合格であつた。折から世話する人のあるまゝ一時何といふことなく内山海石先生の居敷へ食客に仕込んで、年と共にいつか畫の道を習ひ覚え此を職業とするやうになつた次第である。かゝる身の來歴を顧み其の書才に乏しきを嘆じて鶴崎が漸く失意の淵に沈みかけて來た頃、富士見町の花柳界は日一日と發展して鶴崎の家の近處を犯し始めたのである。するともとより人通のない靜な横町を藝者は眞書間着衣に半纏引かけて細帯のまゝ洗湯への往來、人の家の門隙勝手口處嫌はず通りすがりに大きな聲して聞くに堪へない狠な話をして行くものもあるもので、お鷹は最初馴れぬ中は此方から氣まをわるがり買物にも湯にも行きかねた位であつた。

この間に家賃が一回つ二度上つて十圓になつた。家主は藝者家なれば拾貳參圓にしても結構借手があると見て折あらば猶追々値上げもしかねまじき勢。それと共に鶴崎がいづれば晩かれ早かれ引越さねばならぬと思定めたのは、中々番町なる海石先生の屋敷がいよいよ市區改正で玄關前四間通買上げといふ事になり先生はそれを幸に代々木溝谷と諸處郊外の宅地を

探索の末遂に芝の白金と決定して屏風に一年ばかりを仰した後、この夏新緑の頃既に盛大な新宅開の披露をされた。鶴崎は師家の玄關を出てからも相變らず食客の時分と同じやうに其家の執事をしてゐるのである。

## 二

上汐に打上げられたやうな占下駄を引ずり古手拭片手に今しも湯へ行かうとする義家の門前。

「おい、君、鶴崎君」と呼びかけられ鶴崎は振り返り、

「や、坊ちゃん……」と笑ひながら軽く頭をこげた。

「湯か。」

「いえ、かまひません。」

「さうか。今日はすこし眞面目な用だ。」

「はアさうですか。と鶴崎は矢張りやゝ突ひながら坊ちゃんの顔を見た。

坊ちゃんといふはれたのはバリー帽に白地セルの背廣白い半袖太い洋杖を腕に引掛けた見事なほど丈の高い當幅のいゝ三十がらみの男である。腹の出張つた身體のみならず顔まで圓々と肥つて酒氣を帯びてゐるかと思はれる程度色よ

な。」

「その代り君、これが最後だよ。この後は僕もさう世話を焼かさないうつもりだ。結婚すれば何ぼ何でもさう馬鹿な真似もして居られんからな。」

「全くです。老先生も追々お年を取られますし、さうく御心配をかけては全くお氣の毒ですからな……」

「だから僕も今度の結婚を機会として大に改良するつもりなんだよ。それについて少しとまつた金がほしいんだ。ちよいくした借金を綺麗にしてしまはないと、それが引掛りになつていつまでも切がつかんからな。」

翰は頻りに申譯らしく述立てながら絶えず杯を干しては鵜崎にさす。鵜崎はこの一二年家ではきまつて一合程晩酌をする位酒は好きであるが、然し酒量は到底翰には及ぶべくもないので、牛鉦を間にして對酌してゐると知らず知らず飲み過ぎ傾きになる。翰は始終それとなく鵜崎の様子を窺ひながら、

「急な用事でなければ、どうだ君、今夜は一つ僕につき合ひたまへ。こゝちや何だか落着いて話も出来んし……久しく君とも在まんからな。」

だ日には動けなくなつてしまひます。坊ちゃん

は相變らず強酒ですな。一升は平氣でせう。一

「いや何ぼ何でもさうは呑めんよ。鵜崎君、僕は酒も斷然やめて見ようかと思つてゐるんだ。

この頃のやうにから肥つて來ちや苦しくつてた

まらんからな。なまじつか節する位なら斷じて

禁酒する方が心持がいい。僕は何でもさう云ふ

流儀だ。やるなら大にやる。その代りやめると

なつたら斷然やめる。その方が男らしくツてい

い。ねえ、鵜崎君、大にさうだらう。道樂だつ

て、止めるとなれば僕はばつたり綺麗にやめて

見せるぜ。」

「はア、その方はちつと信用が出来ません

な。」

「いや、止めべき時が來れば今夜からでも止め

て見せる。女だつてさう何時までも面白いも

んぢやない。僕は實際もうさうと思つとるん

だ。結婚を機会にして新生活に入りたいよ。

だから今夜はお名残にあつさり遊んで見ようぢ

やないか。まだ早いぜ。決して迷惑なんぢ掛け

やせんよ。」

翰は頼むやうな、駄々を捏るやうな、又命ずるやうな不思議な調子で頻に同行を強ひる間も始終杯の取造りを休ませないのであつた。

### 三

翰は飲み出すと一升位は平氣な大酒家であるが平常家にゐる時などは一週間でも二週間でも飲まずにゐられる。これとは違つて鵜崎は毎日少しでいゝからちびちび味ひたいと云ふ方。三四合が丁度いい處、五合以上飲過すと呂律が廻らなくなる。翰はその邊の事をよく知つてゐるので、酔はして白山へつれて行かうと思つたのである。ところが、それと知つてか鵜崎は今夜に限つてなかく酔ひさうにも見えない。鉢子(はちこ)の数は八九本に上つた後、兎に角勘定をすまして外へ出たが、鵜崎の足元は矢張りつかりしてゐる。

翰はこゝに於て已むを得ず最後の手段を取らうと決心した。それは我まづ先に亂酔して、連立つ鵜崎に流石自分を捨て、は行きかかれるやうにする事である。翰は電車通へると急に大きな聲で詩を吟じ出したのみか、通りすがりの女にからかひ、彼方へひよろ／＼此方へひよろひよろ／＼ながら、ビヤホールと見れば戸外から、おい、ウイスキーだ。と怒鳴つて、一鵜崎君、今夜きり僕は禁酒するぜ、今夜きりだから許したまへ。ねえ、君、いゝだらう。今夜は思



せ始末に困つて事の次第を鶴崎に打明けた。それを手始めに次は牛肉屋の女中ついでにヤトナと呼ぶ賣春婦に引掛つた。女中の方は鶴が女の着物と指環とを融通したとかしないとかぶふ事から損害賠償の談判、ヤトナの方は夫婦の約束をして彼方此方と女を引張り廻した舉句、馳の道をきめられては女の身が立たないからと三百代言を差向けられ、鶴は初めの權様に似ず忽ち背くなつて鶴崎へ泣きついたのである。これは話が大部分面倒になつた例であるが、單に待合や小料理屋の勘定の事でごたくした末鶴崎が頼まれて出掛けた事件を挙げたら数へ切れぬ位であらう。鶴は運動家の間には今以て其の名を知られてゐる位、中學から高等學校を経て大學生になつた後までも野球と短艇の選手、柔道は弘道館の二段である。それ等の爲めか、學術の成績はいつも不出來なばかりか品行も追々修まらぬやうになつて來たのである。學生を墮落させるのは柔弱淫卑な文學ばかりともかぎらぬらしい。鶴は教科書も小説も、何に限らず讀書は大嫌ひ。高等學校の寄宿にゐた頃などは殆んど手のつけられぬ程粗暴で鶴崎なども其頃は車夫諸共度々撲飛ばされた事があつた。酒量は運動できたへ上げた體格相應すば

らしいもので、酔へば今だに處きらはず詩吟とフレー／＼をやる。一度女の味を覺えてからは酔ふと忽ち手あたり次第相手の美醜を選ばないので、自然藝者なんぞよりも牛肉屋の女中ピヤホールの女ボーイなぞつまらぬものに引掛つて果は手切金を取られるやうな事になるのであつた。

「鶴崎君、今度のはなしは切れる切れないと云ふ問題ぢやないんだ。今度僕が正式に結婚するだらう。その事は白山のやつにも打明けて話をした……」と鶴は鈍しが來ると共に早速話をしはじめた。鶴崎は始終仔細らしい顔をして、

「それについて何か苦情らしい事を言ふのですか。」

「いや今度の奴は感心に何とも言はん。尤も別に苦情をいふ譯もないんだが、向がさういふ風におとなしく出てゐるからは僕の方でも結婚するからと云つて急に手を切る必要もない……」

「成程。」

「そこで……そこで君に一ツ頼みたい事があるんだ。それは女の方の事ぢやない。僕の家に對してだ。家へ對して白山でも何處でもいいから僕に悪い女がついてゐる。その女がついてゐ

ると折角きまつた結婚について僕が一苦情でも云出すと面倒だからと云ふ事にしてたね、親爺からツ君の盡力で手切金を取つて貰ひたいんだ。」

「はゝア女の方が何ともいはんのにですか……」

「言つても言はんて……それとは君、別問題だよ。僕が直接に何か言つたつて信用がないからね、それで君に頼むんだ。何ともいゝやうに理由をつけて、ねえ君、……ツやつて見てくれんか。實際僕うさ拾圓しか毎月小遣を貰つて居らんのだぜ。」

「それぢやつまり白山の女を利用してあなたが手切金を使はうと仰有る譯ですな。」

「そんな事はまあどうでもいいから、ね、君、兎に角盡力してくれ。無業論君に御禮はする、折半してもいい。」

「坊ちゃんあなたもなかく隅へは置けなくかりましたな。はゝゝゝは。」

「え、君、いゝだらう。助けると思つて一ツやつて見てくれ。煙草屋だの唐物屋だの女々に借金はあるし、實際窮道してゐるんだ。」「どうも困りましたな。拵へ事をしてくれ先生に心配を願ふのは、どうも少しやりにくいです

ろりと二人の様子を見て見ぬやうに、茶をつきなから、大層いゝ御機嫌ですね。

翰は茶碗をつかむやうにがぶりと茶を一缶に  
して、「おい早く酒だ。」

「もう好加減上つていらしたんでせう。此方  
ほんとに握々見たやうだよ。」

「いゝから早く持つて来いよ。今日は借りやせ  
ん。今夜は非常に持つてくるぞ。」と翰はポケット

を上から一寸叩いて其儘上衣を脱いだ。  
「藝者衆は君ちゃんに……あなた御馴染は……」

「鶴崎は矢張髭を拵つて、君ちゃんを預見に來  
たんだ。」

「鶴崎君、誰か知つてる藝者があるだらう。い  
つでも君は、僕にはいやに隠してゐるが、こつ

そりとなか／＼事をする男だからな。うつか  
り出来んよ。」

「いや、それなら結構ですが、全く田舎者同様  
ですな。お話になりません。」

「陽氣にさわぐ人がいゝわね。あなた、お羽織  
をお取んなさい。唯今お浴衣を持つて來ます。」

と女將は降りて行つた。  
「鶴崎君、君は全く謹直なのか、君の近處は

どうだ。怪しいもんだぜ。」

近處もあゝ隣同志ぢやあんまり近過ぎて、燈  
臺もと暗しですな。人した美人もゐないやうで  
すな。

お饗どんのやうな山出しの女中が鉢子に杯  
洗、焼方のわるい鯛せんべい、ぶんと干物のや

うな匂ひするのをチャブ卓の上に並べる。翰  
は先刻牛肉屋で欲んだ時のやうに再び鶴崎へ

休みなく杯をさしたながら、女中が鉢子を取り  
に座を立つ隙を見ては決こく父海右翁から金を

貰つてくれるやうにと頼むのであつた。翰は中  
學生の時分から西洋料理を喰散し高價な舶來煙

草や西洋小間物を買散す癖があつた。奢侈とい  
ふよりは唯無分別に金を浪費するのである。幾

歳になつても水坊のやうに、あれが欲しいと思  
ふとそれを手にしなければ何しても気がすまな

い。手にすれば忽ち惜氣もなく打捨つてしまふ  
と云ふ風で、學校からも家庭からも厳しく監督

された結果は却ていつ／＼悪い智慧を働かす  
やうになつたのである。翰は兩親の慈愛をは

棄る其の弱味のやうに解釋してゐる。自分が  
萬一新聞に名の出るやうな不始末でもしてかす

やうな場合があつたとしたら、兩親ばかりか親  
類一同は一家の名誉の爲めに手をつかねて傍

觀する氣遣ひはないとすつかり高をくゝつて

ゐる。で、來月早々、いよ／＼結婚式を舉げる  
についてはこれを機会に何とか小遣錢がほし

いものだとその手段については、これまで三  
度女の事でぼろを出してゐるから此の際もこれ

を應用するがよからう。それには從來の關係  
上鶴崎が是非とも必要なので、もしツ返事に

らむと言はなかつたら、一晩それとなく藝者で  
も買はして、幾分の弱味をこしらへてさるより

外はあるまい。それには先何でもいゝから酷漬  
してしまふのだ、と翰は手順をきめてゐるいで

ある。  
鉢子の一二本は忽ち空になつた時、君男とい

ふ翰のお馴染に、小花といふ銀杏返と三太とい  
ふお酌のやうな若い妓が前後して現はれた。君

男は翰が此夏大學を卒業する半年程前から買は  
れてゐるので端折つたお代の上に藝者の縮

緋の羽織、細い金鎖を紐にした流行遅れもこの  
土地では左程目立たぬものと見える。年は十

前後、すこし癖のある髪をハイカラにした平顔、  
鼻も低く目も小さいが、七難をかくす色の白々

と口許に鳥渡愛嬌のあるのが男の眼を強く惹  
きつける。身體は小さいが厚出の肉付、肩い

つて贅太く坐つた鴈のあたりは單衣の條目もいた  
みはせぬかと思はれる程なので、どこやら藝者

残りのないやうに飲めるだけ飲もう。」

鶴崎は忽ち閉口してこの先どうなるか分らぬよりはまだしも、白山へ送込んだ方が無事だと覺悟したらしく、折から東鴨行の電車が来るのを幸ひ有無を云はせず鶴の手を引張つて乗込んだ。

小石川指ヶ谷町の停留場で電車を降りる。

紙屑間屋などが目につく何となくごみくした所である。右へ曲つて突當りのつれば本郷西片町邊の屋地をひかへた裏通、板葺屋根のぼろぼろに腐つた平家立の長屋のみ立ちつゝいた間々に、ちらばらと新しい安普請の二階家、松なんぞ申譯らしく植込んだ家もあつて、白山の色町は其處此處に松り、のんき、おかめ、遊樂、祝ひ、いさみなんぞとぶふ灯をかじやかし、金切聲振絞る活路に折から景氣を添へてゐる家もあつた。

鶴崎は自分の家の近處の事から思合はして、何處へ行つても藝者家のひろまる勢力を今更らしく一驚する様子、あたりをきよ／＼見廻しながら、

「鶴さん、お馴染はどこです。こゝまで來ればもう逃げはしません。案内して頂きませうかな。」

「眞直つき當つてから右へ曲るんだ。今夜は用をかゝして實にすまんよ。然し今夜きり明日から聖人君子になるんだからな。まア許してくれ、なア鶴崎、そのつもりで今夜はゆつくり大に飲直さう。」と鶴は崖下の薄暗い裏通、片側に廣い溝を控へた屋敷つゞき片側はごみくした小家の間に待合や藝者家の立交つた其の中の一軒、いやに瘤だらけの門の柱に美登利と蟲喰の板を掛けた家へと鶴崎を連れて格子戸をがらり、靴をぬいで上りかけたが誰も出て來る様子がな。

「何をしてゐるんだらう、不景氣だな。鶴崎君、かまはずに階へ上れ。」と鶴はそのまゝ案内知つた梯子段の方へと練を明ける物音に始めてそれと心付いたか、周章でながら出て來た女中、出合頭に腰を抜かさぬばかりの頓狂聲。

「あら。」と云つて、まアほんとに、びつくりしちまつたわ。

「お客が來たのにびつくりする奴があるかい。」  
「だつて、旦那、この頃はやかましいんですもの。」

「はゝゝは。點檢だと思つたのか、馬鹿。おかみはどうした。居ないのか。」と鶴は二十貫近くもあらうかと思はれる重みに安普請の梯子段を

みし／＼云はせながら、「鶴崎君、頗る不思議なところだらう。」

鶴崎は鶴の様子と二階の座敷とを唯じろく／＼見廻す。二階は柱の細い木口／＼いかに悪い安普請で長押をつけた六疊に三疊、建て／＼からまじいか程にもなるまいと思はれるのに、根岸の壁にはところ／＼干割が出來、透棚の板ははじめに反り返つてゐる。其の上に瀬戸物の漆磨が飾られ床の間には縁日物の盆段と並んで鴉物見本のやうな何やら分らぬ石塊をば蒲團をつけた臺の上に載せ、掛物は夜店の品かと思はれる山岡鐵舟の讀みにくい書である。

「坊ちゃん。」と鶴崎は何やら仔細らしく垢を拵つた。

「坊ちゃんはお掃除してくれ、あんまりお甲がわり過ぎるよ。」

「いや、失禮々々。つい口癖になつてゐるんで。それぢや鶴さんにしませう。」

梯子段に覺音がして煙草盆と茶を持つて來たのは四十前後のやつぱりした巨婦、色の黒い角張つた顔、肩のいかつた身體つき、眉、文字に、どこやら眼付に陰がある。

「人らつしやいまし。」とぶふ聲も土州なまり、どつしり重さうに坐つたが別にお辭儀もせずじ



心持になつた。實は昨日の晩出掛けようとした處を突然翰の爲めに白山へ行き思ひがけぬ亂醉に今日は一日仕事も出来ず頭ばかりいやに重たい二日酔。それもこの一合の迎酒で好い工合にすつかりと酔ひを戻して胸もすが／＼しく頭も餘程輕くなつた。藝者を揚げて無暗矢鱈に飲んだと何が面白いのだ。家の坊ちやんにも實に困つたもの。一晩に五圓拾圓満の中に括てるやうな馬鹿なまねをせずとも世の中に愉快はいくらもあらう……鵜崎は頻にげえい／＼と喫をしながら掛二つに鉄子一本規定はいくらになると胸算用した後あたり相客のないのを幸、縁蔭堂から受取つた包金をそつと開き五圓札を一枚々々その折日のついたのや縁のまくれたのを丁寧に引伸し、三度方法をかへて数へた後よく角を揃へて鐵にならぬやうに自分の紙入に収めた。

鵜崎は同じ畫筆一本ながら海石翁の如く華族のやうな邸宅を起すものとある世の中に天分のない身の是非なきは唯根氣のつくかぎり稼いだものを一服一錢人の氣がつかない處へ氣をつけて蓄めるより仕様がなと考へ出したので、その多寡によらず金を受取つた時と割の安い品物を目付け出した時ほど幸福満足を覺える

事はないのである。紙入は今俄にふくらんだ。蕎麥屋の勘定は元より安く、しかも案内に酒であつた。鵜崎は外へ出て初秋の夜風に面を吹かれると忽ち我知らず、

「此地燕丹二別ル。川土髮冠リテ街ク。古人今何レニ在ルヤ。蕭々トシテ易水寒シ。」と小聲に吟じた。流行歌も義太夫も唱歌も何も知らない鵜崎は湯にあつたまつたり酒に酔つたり好い心持でならない時にはいつも此の詩を吟じる。別に理由も仔細もあるのではない。最初中学校に通ふ折遠足の道すがら友達と一緒に吟じたのを、後に海石の處へ來てから同じ門生等と新年會や送別會などで無理やりに隠藝を強ひられた時仕方なしに思出すまゝ此れを吟じた。いつかそれが鵜になつて何か唄はうといふ時には自然と蕭々易水寒がでて來るまでの事である。

茅町の電車通は折から夜店の賑はひ、二三日つゞいての蒸暑さにかけて今宵は人出多く、燈火に照された街の柳の用近い風に吹きなびくさま、何となくまだ夏らしい。鮎佐といふ曲物屋の前を通りかゝつて、鵜崎は綺麗にいろ／＼な漬物の並べてあるのになと歩みを止め、おれが晩酌の者になるやうなものと女房子供への

土産らしいものを買つて片手にぶら下げた。そして猶もぶらり／＼と夜風に吹かれる心地好さ、夜店の間を足の向くまゝ、向柳原の道をば和泉橋通の方へと厚木齒の目下駄を曳摺つて行つた。

向からすさまじい音を立て、駈け來る自動車に、酔歩蹣跚としながら鵜崎はそれを避けようと片側へ歩み寄つた折、ふと路傍に水盤金燈籠手水鉢などを置き据ゑた同口の廣い道其屋の店先、隣近處の店よりも一際明るい電燈が正面に飾つた二樓の甲吉と何やら占めかしい土佐風の六枚屏風を煌々と照し出してゐるのに、何心なく立止つてづらりと一巡見廻し、やがて壁にかけてある五六幅の書畫に目をとめた。

一番手近は極彩色又兵衛風の遊女其の次はいかにも麗らしい鈴木其の若草それから次は何やら古碑の石指に飾して、彩色衣装もぐつと新しい旬に鵜の紺本、鵜崎はこの鵜には何やら見覚えのあるやうな氣がしたので店の中へ一歩踏み込んだのも道理、たしかに自分の描いたものだと思ひて、醉眼を擦りながら首を延して見ると此れは不思議、自分の作ではなかつた。巨石と云ふ署名になくて其の師匠なる海石の名が書かれてある。妙な事もあるものだ

小花といふのは少しふけて二十四五に見え  
るが實はもう七八位になつてゐるのかも知れぬ  
色の黒きをかくす厚化粧に、白粉の乘りのわる  
い地肌が一段日に立つ細面、銀杏返に結つて身  
丈もすなりとしてゐるので、よくふへば伏ッば  
い方であるが、いかにも貧相な額と薄い唇薄  
い髪、一體に品のない顔立から、これは何處と  
なく牛肉屋の姐さんらしい氣がする。

三太といふチビは顔から身體から手足まで  
で十二三の小娘のやう。然し眼の縁の黒ずん  
で雀斑多く頬瘦せて小鼻の兩側から口尻へかけ  
て筋の見えるのが、燈光の工合で一體の顔立を  
甚くすさんで見させる。多年柄の小さいのを得  
手にお酌で身體をつかつた結果と思はれるが、  
それにしても年はまだ二十にはなるまい。女加  
は仇つぽい年増の方がもしお氣に召さなかつた  
ら、可愛らしいこの方を、つい二三日前一本に  
なつたばかりよりぐらゐの事で、何方でもよりど  
りと云ふつもりであらう。

翰は洋服を浴衣に脱替へ大胡坐をかいてチャ  
ブ壱を抱へこむやうに脇を張り日本酒にビール  
のぐい飲み。藝者が覺束ない調子ながらどうや

らかうやらお座付からつゞいて都々一三下りハ  
 アコリヤ／＼と氣味のわるい聲を出す。此方は  
 負けぬ氣らしく大きな聲で雲か山か呉か越かな  
 んぞと怒鳴りながら時々矢處に君男の頭にかじ  
 りついて一座の藝者さへ呆れるやうなまねをも  
 一向平氣でやる。やがて一本迎ひが来て藝者は  
 みんなお直しといふ時分、君男は急に軋きさう  
 な心持になつたと云つて、鶴の膝へ突伏してし  
 まつた。さういへば時々上つて来ては相手をし  
 てゐた上州訛の女將もいつか月の縁を赤くし  
 た程なので、最初の中は馬鹿に景氣よく手並を  
 見せてゐた銀杏返の小花もとう／＼私もう駄  
 目よ頭がふら／＼して堪まらないと、鶴がこは  
 い眼を据ゑて無理に強る。杯をば、次第々々に  
 受かねるやうになる。その度々あなたやアと助  
 を鶴崎の方へ頼んだ。それのみならず小花はど  
 うやら鶴崎をばまだ何ともきまらない先から獨  
 り勝手に自分のお客にしてゐるらしい様子、  
 最初から何かにつけていやにデレ／＼してゐた  
 が酔ふにつれていよ／＼人目かまはずしなだれ  
 掛らうとする。鶴崎は又始終折を見計らひそつ  
 と逃げ歸らうと思つてゐたので、今しも君男が  
 いよ／＼心持が悪くなつて来て堪らないと、  
 ハンケチで口を押へチビの三太と翰とに扶けら

れて、あたふたと下へ降りて行つた騒ぎに、これ幸ひ早速この隙をと座を立たうとして始めて身體の自由にならないうのに心付いた。何しろ神田の牛肉屋で飲始めた時から、下地は好きな酒、今夜ばかり酔ふまい／＼といくら氣をしめしても胸拔けた強酒を相手の長町場、いつか泥酔してしまつたのでふら／＼しながらもやつとこの事で立上ると、今度は銀杏返の小花がこれ今後は／＼／＼に酔つた事句は元より取知らぬかまへに年増盛、このまゝでは歸すまいと夢中になつて鶴崎／＼がみつ付く。鶴崎は逃げようとして暫時立竝つてゐる中いよく／＼日が廻つて來て其場に打倒れると、もう起上る力どころなくなつたか、何が何やらまるで譯がわからなくなつてしまつた。

淺草獅形通つ線蔭堂と云ふ圓扇間屋は鶴崎がまだ内山海石の玄關にゐた時分から扇子圓扇などの板下簾また折々は肉事の揮毫など、鶴崎に取つては絶えず相應の仕事に有りつかせられてゐる大事な老舗である。若干かの謝禮を受けて獨りばら／＼電車通を須賀橋まで歩いて來て鶴崎は角の高茶屋で一酌した。忽ちいゝ

そ實に迷惑千萬、これは打捨つては置かれな  
い。すぐにあの道具屋の店先へ立戻らうか、そ  
れともこれから芝白金の屋敷まで駆付けようか  
と考へた時、丁度泉橋手前の電車通へ出た。  
その邊の店はその戸を開けてゐる  
のがある。折から十時の時計の音と上野の鐘に  
鵜崎は始めて心付きそのまゝ橋を渡つて九段行  
の電車に乗つたが、すると間もなく降つた身體  
を揺られる心地よき、まだ單衣の時節なのに片  
手をふところにしつかりと紙人を押へ、片手に  
鮎佐の曲物を膝の上に握つて何の心配も託  
もない人のやうにぐう／＼斯をかきながら寝て  
しまつた。

## 五

鵜崎は染返しの新の袷織セルの袴に便の厚木  
齒の日和下駄を鳴しながら翌日芝白金なる内山  
海石の新邸へ出掛けた。鵜崎は富士見町に一家  
を構へてから十年一日の如く別にこれと云ふ用  
事がなくても大抵三日目位には必ず出掛ける  
事にしてゐる。その時刻は午前ならば十一時頃  
午後ならば四時過、いづれにしても何かしてゐ  
る中に御飯時分になる頃である。三日目か四日  
目に一度つても餘所で御飯を頂戴すれば、

内の御米のたすかる事十年廿年と塵積つたら大  
したものである。鵜崎は内山家へ行くとき食客  
の時分と同じやうに海石先生の繪具を福き筆を  
洗ひ繪組に紫水を引く外に葬式の代理や銀行其  
他の使歩きもする。暇酌から碁のお相手もし  
夜がふければ隨意に泊つて行く。内山家では一  
時鵜崎が家を持つた後代りの門弟を置いた事が  
あつたが一人は後に新しい美術家にならうと  
した位の男故非常に生意氣で始末がわるく  
其の次のは放蕩者で女中を一度に二人も孕ま  
る騒ぎに、矢張氣の知れた鵜崎が一歩安心だ  
といつとはなく通勤の執事にしてしまつた譯であ  
る。鵜崎の方でも元よりかくあらん事を望んで  
ゐた。それは海石翁の身に接近してゐれば間接  
直接にいろいろ利益があるからで、例へば米  
炭屋の類から繪具屋に至るまで内山家出入の  
同じ商人から商ひをさせてゐれば其の勘定は  
此方から拂つてやるまでいつまでも大きな額で  
待たせて置けるし、殊に細師屋書屋なんぞか  
らは黙つてゐても相應な付居が貰へる。それは  
時と場合によつては鵜崎が苦心の作から得る謝  
禮よりも遙かに多額の現金が包まれてゐる事す  
らある。その外些細な利得を擧げたら先生御夫  
婦始め若旦那の古着古物 摺りにくゝなるまで

減つてしまつた墨のかけ、金粉銀粉の如き高價  
な繪具の使ひ残りなぞ一々には數へきれぬ程で  
あらう。  
鵜崎はその雅號のみ徒に巨石にして更に名  
をなす見込みがない、と云つて畫をかくより外  
に生計の道がないと考へれば自然に守銭奴らし  
い性質になつて来るのを、自分ながらも折々氣  
がつく事があるので、それを蔽ひかくしたい爲  
めにわざと飄逸磊落狂放な風を折はつと力めて  
ゐる。それにつけて鵜崎は兄弟友人よりも世  
間よりも先づ何より先に海石翁がいかに自分を  
解釋してゐるかと思ふ事について、始終非常  
な注意を拂つてゐるのである。

鵜崎は多年其の家に寄食してゐただけに誰よ  
りもよく海石翁の人物を知つてゐる譯である。  
海石翁は現代知名の大家であるがこれまで其の  
家には鵜崎の外には食客玄關番をかけた門人  
を養つた事が無い。海石翁の門人はいづれも盆  
暮には謝禮を持つて来る謙な相應な家の息子さ  
んばかりであつた。表面は世事に疎い美術家  
顔をしてゐるが、金錢上の事にかけては流石の  
鵜崎も屢々舌を捲く位、現に白金の新宅工事に  
ついても最初地割をした大工が中頃到底やりき  
れないと云つて手を引いた程である。この先生



と更に又眼をこすり瞳を据ゑてよく／＼見ると  
落款はいつも先生の用ひ馴れた所陽畫樓といふ

のが押してあるが海石といふ署名は疑ひなく  
先生の筆蹟ではない。海石翁は鶴崎が師事して

以來十幾年署名に行書を用ひられたことはな  
い。岡山派の正系に屬する故郷先生は應舉のや

うに必ず謹嚴に楷書でかゝれる。されば云ふま  
でもなく贋物にちがひないが、それにつけても

この畫はたしかに自分のかいたものだと思つ  
ただけ鶴崎はどうやら狐にでもつまゝれたやう

な心持がして、急におのれが身のまはり懷中  
の紙入、手にさげた船佐の曲物の有無をたしか

めた後、  
「おい、鳥渡その鶴の掛物を見せてくれん  
か」と店先へ腰をおろした。甲冑のかけに居眠

りをしているらしい十七八の小僧、  
「はい、どれで御座います。  
一筋に鶏……それだ／＼鳥渡見せてくれ。  
かしこまりました」と小僧は指された掛物を  
取下して鶴崎の前へ持つて来る。  
鶴崎は例の如く髭をひねつて、なか／＼よく  
描いてあるな。これは矢張昔の人か、一  
いえ、さうぢや御座りません。文展の審査員  
で帝室技藝員です。この先生のものになか／＼

道其屋の店なんぞに出る品ぢやないんです。一  
さうか。いくらだ、

「左様でございますな……」と小僧は袖の處へ  
張紙した符牒を見て、六十二圓桐のいゝ箱が  
ついて居ります。

「さうか。と絶えず髭をひねりながら鶴崎は更  
に眼を据ゑて見れば見る程今はまがふ方なく自  
分の筆である事が判つて来る。それは、鶴の足

の爪をかく時どうした事か薪水が薄くて給具が  
にじみ出した處から困つて後から草をかき入れ

て誤魔化した、その跡が今だに氣をつけて見れ  
はよくわかる。鶴崎は一昨年の暮市ヶ谷見付外

に新しく店を出した雲林堂といふ書畫屋の主  
人から依頼されて謝禮も三十五圓と云ふ事で  
明に思出した。

「あの若草に蝶々の飛んでゐるのはいくらだ、」  
あれですか、あれはお安うございます。三十  
圓です。

道端にうろついてゐた大がいつか鶴崎の側に  
置いた船佐の曲物の匂を嗅付けてそつと横合か  
ら鼻面を突出したのに鶴崎はびつくりして、  
「畜生ッ」と大喝一聲厚木筒で薄板を踏鳴ら

しながら立上ると共に其儘ぶいと店を立去つ  
てしまつたので、小僧は猶更だつくり、薄引ぢ

やあるまいかとさう／＼店中を見廻しはじめ  
た。

鶴崎はこれまで内山海石の筆だと云ふ贋物に  
は度々出遇つてゐる、専門の道具屋からも又書

畫好の素人からも鑑定を依頼された事さへ度々  
である。然し自分のかいたものをば其のまゝ署

名と落款を巧みに取替へたものに出遇つたのは  
全く今夜が初めてである。誠に怪しからぬ事

をする奴があるものだ。誰がやつたのだらう。  
まさか最初の依頼者なる市ヶ谷の雲林堂ではあ

るまい。雲林堂の亭主は道具屋とは云へない位  
裕んど素人も同様なアマイ奴だしそれに今以て

内山家にも又自分の家へも始終用人をしてゐる  
ので大方それからそれと人手に渡つて行つた先

で遂にあんな事になつたものであらうと、鶴崎  
は歩きながらいろ／＼考へるにつけて不圖又こ  
んな事を思出した。それは自分の揮毫したもの  
で、知らぬ中に海石翁の作になつてゐるものか

まだあの外に澤山あるかも知れないと云ふ事  
である。今夜発見した筋に鶏の一幅があるか  
らはその他にもまだ有ると見て差支はない。  
此後さういふ贋物が諸處方々に現はれるやうに  
なつてその爲めに萬々海石翁から自分が故意  
にやつた業のやうに疑はれてもしたら、それこ

「踏躰」と今度は寫眞記者が、  
「そこではお顔が陰になつて眞黒になります  
が……」

「地體白い方でないですから構ひません。」

學習院女子部の生徒なる照子が轉がるやうに  
笑出したので攝影はその笑が止まるまで暫時

中止の形になつた。やがて記者はシャッター  
の手を放すと共に、「どうも難有うございまし

た。」と禮を述べて寫眞器を革包に收める。翰を  
始め夫人令嬢いづれも思ひ／＼に縁側を去る。

訪問記者は都足袋へ引掛けた庭下駄を引掛り引  
摺り縁側に立戻つて、更に海石へ辭儀をしなが

ら、

「いろ／＼御迷惑な事ばかり願ひまして誠に相  
濟みませんが何か畫についてのお話でも伺ひ

たいのでございしますが……」

「私の談話を雜誌へ御出しにならうといふんで  
すか。」

「さうで御座います、畫のお話で無くとも何で  
もよろしう御座います。」

「さうですか。まア此方へお上んなさい。」と海  
石はいかにも慈とらしい鷹揚な態度で輕い咳拂

ひ、十疊の客間から縁側庭上を見廻しながら、  
「いつの間にか皆行つてしまつた。鵜崎君、御

苦勞ぢやが鳥渡、その呼鈴を押してくれ。」

鵜崎巨石に呼鈴を押させて小間使を呼び新に  
又茶を入れさせ、然る後靜に煙草を一服して、

「雜誌は、毎號、なか／＼、何ですな、面白う  
拜見して居ります。」と甲高な聲ではあるが一言

一言臆天から押出すやうにじれつたくなる程ゆ  
つくりした物の云方。生來のせめか或はわざ

と粧つてゐるのか、いづれにしても帝室技藝員  
たる内山海石畫伯の貴目をこれ見よと云ふやう

にしか思はれない。然しその實海石畫伯の容貌  
風采は若し絹布の衣服に代へるに門人鵜崎巨石

と同等のものを以てしたら巨石の方が遙に立優  
つて品よく見えるだらうと思はれる位。實業界

に散見する富豪や重役などの顔にはよく有り勝  
ちな、形を成さぬ一種の妙な顔である。髪は半

白でありながら皮膚は氣味のわるい程いに赤  
くてら／＼輝つて子供顔の顔をその儘に大きくふ

くらしましたやうな顔である。それに準じて身體  
付も四肢と胴との釣合のいかにも悪いのが袴羽

織の上からでも目に立つ程なので、一體身丈が  
高いのか低いのか肥つてゐるのか瘦せてゐるの

か鳥渡見では何れとも定められない。唯無暗と  
顔の大きいのと胴のいやに長いのが目につくば

かりである。

現代畫畫人名辭書と云ふものに次のやうな傳  
が出てゐる。

内山海石、名ハ久助、圓山派畫家、正六位、  
帝室技藝員、公設展覽會審査員、東都畫院

評議員、安政〇年〇月越中國〇〇郡ノ一  
農家ニ生ル家貧ナリ幼時金澤ニ出デ某旅亭

ニ傭ハル偶家ハ誤ツテ主人新調スル處  
ノ襖ヲ傷ケ周章爲ス所ヲ知ラズ久助竊

ニ筆墨ヲ携ヘ來ツテ塗抹一畫ヲナス主人  
歸來ツテ此ヲ見驚イテ曰ク何人カヨク此

ノ畫ヲ成スヤト其久助ナルヲ知リ此ノ小童  
若シ師ニ就イテ學ブ處アラシメバ後世必

ズ名ヲナスベシト翌年京師ノ畫家玉木紫石  
偶金澤ニ來遊シテ某旅亭ニ宿スルヤ主人

即請ウテ久助ヲ其門ニ入ラシム久助紫石  
ニ從ヒ京師ニ在ル事年アリ業忽チ成ル師

許スニ海石ノ名ヲ以テス王政維新ノ後玉木  
紫石朝命ヲ拜シテ其家ヲ東京ニ移スヤ海

石亦隨來ル幾何ナラズシテ内國博覽會ノ  
始メテ東臺ニ開カル、アリ海石嵐山春曉ノ

圖ヲ出シテ金牌ヲ受ク此ヨリシテ其名遍  
ク天下ニ鳴ル海石人トナリ篤實謹嚴山水花

鳥筆ノ行ク處一トシテ佳ナラザルナシ然  
レドモ殊ニ鯉魚鵜鳶ヲ描クニ長ズ時人屢

に對して鵜崎はなまじツかな態度を取るより唯唯哀つぽく持かけるより外はない。正直なばかりで才もなく働きもない臆病な氣の小さい意氣地なしと働くまで思はせ、あまり生活に窮迫したら首でも縊りはしないかと氣遣はれる程に萬事元氣なく情ない姿一手で押通さうとしてゐるのであつた。

日吉坂上で電車を下りすこし歩いて横町へ曲がると新しい板塀つゞき、自動車の二臺ぐらゐは樂に通れるかと思はれるやうな大きな冠木門の太い柱には道行くものゝ誰にも讀めるやうに筆太く内山海石と札を打ち門内一面下用砂利を敷いた式臺付の玄關、西京瓦でらくと輝いた破風造の二階建。鵜崎は横手の内玄關へ廻つてまだ眞新らしい硝子戸格子を明けると、仲働のお仲と云ふ二十二の房州女が草蓆で土間のタ、キを掃いてゐたので、眞面に塵を喰つて、

「や、これア堪らん、お仲さん戸を明けといて掃くもんだ。砂塵がまひ／＼してゐる。よく覺えて置きなさい。又お小言だぜ。」

「さうだかね。」と房州は一向氣にも留めぬ様子である。

「仕様がないな。先生はまだお出ましぢやない

か。」と内へ上る。

「お客様でせうよ。今方お秀さんがお茶を入れて居なすつたつけ。」

「さうか誰様か知ら。」とその儘鵜崎はいつも奥様のお居でになる六疊の茶の間の方へ行きかけると丁度客間から下つて来るお秀といふ十六七の但し甚だ容色のよくない小間使。

「旦那様、奥様も皆様お庭よ。」

「お客様ぢやないのか。」

「寫眞屋さんでせう。」と言つて「それともお客様か知ら。」

「何を言つてゐるんだい。お前さん自分でお取次をしたんだらう。」

「間満俱樂部とか何とか云つたやうだわ。洋服を着てゐるけれど、變な山合平見たやうな聲をする人よ。」

「あ、訪問記者か。」と鵜崎はいかにも卑しむ様に言捨て、腰高の塗骨障子をたてた表玄關の廊下三間ほど入りかはつきになつてゐる處を過ぎ客間の縁側のはづれに膝をついて竊と顔を出す内山海石を中央に其の妻幹子年は五十五

六、長女の俊子とて一度ある醫學士に片づいて出戻りになつた年は三十三四、其の次は後にも先にも男一人の肥滿した翰、末娘の照子とて

學習院女子部に通つてゐる年は十九か二十、一家合せて五人づらりと縁側に腰を掛け間満俱樂部記者が庭上に据ゑた寫眞機の支度でできるのを待つてゐる處であつた。

「鵜崎さん……。」と長女の俊子が先に認めて父に知らせた。

「あゝ鵜崎か。」と海石は此方を見返つたがそれは恰も人名が近付の者を見返るやうな風で、鈍びて皺枯れて居ながら妙に頭の腦天から出るやうに思はれる甲高な聲。「どうぢやお前もここへ来てうつけ。」

「はい。」と恭しく頭を下げたが鵜崎はそのまゝ遠慮してゐると、今度は翰が怒叱るやうな聲ながら何處か少し舌たるい調子で、

「おい君、來たまへ。早く來ないと駄目だぜ。」

「ぢや私はお庭へ下りませう。」と鵜崎は急いで勝手から草履を持つて來て庭へ下り何處までも自分の役は太郎冠者にきめてゐるらしく少し腰をかゝめながら進み出て「どの邊にしませうかな。」

「君、そんなに前へ出ると君ばつかり一人大きくなるぜ。」

「さうですか。」と翰の注意によつて後へすり、海石先生が庭下駄をふまへた御脱石の側に



りません、仕様のない奴ですな。どうも。」

小間使のお秀が後片付に來て、自分の疎相でなかつた嬉しさ半分、「寫眞屋さんが御座敷の疊へ焼ッこがしをこしらへたんですつて。」と大きな聲で響廻つた處から、第一に奥様、第二に出戻りの俊子、第三にハイカラの照子、一家内再び座敷へ集つて焼ッこがしのまはりにぐるりと立並んだ。焼ッこがしは煙草の火玉ではない。

煙草盆の火が巻煙草の先へついて灰と共に落ちたものらしく、一ツならず二ツ三ツも飛び／＼にまだ匂のする青畳の上に深く焼け込んで拭ふ可らざる汚點を刻みつけたのである。

「困りましたね、どういたしまして。」と奥様が云ふ。

「お父さん今の中疊屋を呼んで裏返さしたらどうでせう。」と出戻の俊子。

「事によると裏まで焼通つてゐるかも知れん。」と海石は今は唯恨めしさに疊を眺めるばかり。

「あぶなう御座いますねえ、火事にでもなつたら大變です。」

「これから訪問記者なんぞにはお會ひにならないが宜しう御座います。私が御玄關に居ましたら突返してしまふんですが……。」

「何だ、どうしたんだ。」と二十貫近い重みで

みし／＼縁側を踏みながら出て來たのは翰である。何だつまらない事を大騒ぎしてゐると云はぬばかりの顔付、妹の照子を見て、

「照子、テニスでもしようか。」

「もう直お午よ。」照子は頻にチェインガムを噛みながら、「それに私今日はお午から教習に行くんですもの。」

「今日は日曜日か。」

「呑氣ねえ兄さんは。」

翰は縁側から一人庭下駄を穿いて下に降り急に思出したやうな風で、「鶴崎君、後で鳥渡額をかしにくれたまへ。」

其儘口笛を吹きながら庭の植込を裏の畑の方へと行つてしまつたが、其の時小間使のお秀が何やら白木の臺に金糸の水引奉書紅白の眞綿な

んぞを持つて來たので一家中は疊の焼ッこがしを捨て置いて此の方へ氣を奪はれた。此の程翰の縁

談が取極つたについて先方へ送る納約をば四五日前三越へ注文して置いたのが今届いた譯である。

「よく品物を改めんといかんぜ。」と海石はいかに嬉しきやうな顔付。照子は大きな聲で、

「兄さん／＼。」と翰を呼んだ。

## 六

翰は出戻の姉俊子とは同じ家にゐてもよくよく據座ない場合でなければ口もきかない位であるが、妹の照子にはよく冗談をいつてからかふのである。照子は姉のみならず俊子からも無論兩知からも家中誰からも可愛がられてゐる。

何しろ年は十八九色が白いのと髪がいのと眼がぱつちりしてゐるのとで、顔は少ししやくれて口がちと大き過ぎるが、それ等の缺點はいかに若くしく快活な全體の顔立に打消されて、

學校中でも美人の方に數へられてゐる。これに反して俊子は父親そつくりの平顔おでこで眼が小さく髪にも癖があるし殊に目立つほど血色もよくないので、三十越した其の年から見ても又

その淋しい様子の何となく陰鬱に根性の惡さうな處、出戻でなければ親戚の厄介者と云ふやうに見られる。

俊子は二十の時或當學士の夫人になつたが結婚の翌年夫は朝鮮へ私立病院を建てるつもりで出發した途中汽車の衝突であへなくも世を去つた。まだ子供の出來る暇さへないからので、

双方の両親がとくと相談の上俊子は實家へ歸る事になつたのである。海石はもう一度ここ

擬スルニ當代ノ應答ヲ以テス所以ナキニ非ズ。

訪問記者は何か適宜な話題を提出しようとして刺らない顎髭をざら／＼擦りながら新築の客間をじろ／＼見廻してゐたがやがて床の間にかけつたので、と云出した。眼鏡はかけてゐるが近頃の記者は落款を讀み得なかつたばかりでなく十六年前に死んだ紫石のことなどは少しも知らない。さすがの海石翁もすこし面喰つた氣味で、

「いや、これはあなた、私ではない、私が先生ぢや。」

「はゝゝ先生の先生、それでは今の人ではございませんな。」

「左様、とうに故人になられました。お墓ヶ谷中の天王寺。五重の塔がありますな、あの五重の塔の下を眞直に行くとぢきに分ります。」と海石は長たらく其の師玉木紫石の事を話した。いつぞや若手の畫工達が出してゐる或美術雑誌で海石の畫を攻撃したついでに海石は其の師に對して忘恩の徒であるとふやうな事を書いた。満更捏造した事ばかりでもなかつ

たと見えて海石はひどくそれを氣にし出して其後それとなく先師の記念展覽會を開いたりした事があつた。以來海石は折あれば先師のことをく／＼と語出すのである。記者は家庭雜誌には甚不向きな話だとなん／＼閉口したが中途でよしにしてくれとも言はれないので手帳に要點を書取つてゐる。圓満俱樂部と云ふのは一時ニコ／＼なんぞと稱する家庭雜誌の流行を見て逃走ながら近頃發行しはじめた月刊雜誌である。訪問記者はその編輯者から海石畫伯の新邸には令嬢が二人あつて姉の方は再三お歌所の御題に當選した才媛とやら、又妹は學習院女子部で評判なハイカラな美人だといふ噂だし、それに主人は畫家屋敷はつい此間普請が出来上つたばかりだといふから談話の材料はいくらでも有る筈だと命令されて來たので、海石翁の談話は大抵にして切り上げ、令嬢の談話を聞きたいと内心甚やきもきしてゐるとは少しも察しない老人、丁度鶴崎巨石が座敷にゐるのを幸ひ

「玉木先生の舊の畫は、實に見事なものでちやが……あれア確か岩崎家の御所蔵になつて居つたかな。」と記憶のはつきりせぬ處になるとそれを鶴崎に問ふと、鶴崎は又仔細らしく鑒をひねつ

て、

「玉木先生の御作はどれを拜見しても全く凄いやうな筆力でございますな。一度よく見て置きますと何年たつても眼を眩りさすればありありと思ひ出せます。とそれ相應に海石の喜びさうな話をするので、畫談はいつまでたつても盡き盡きがない。海石は中氣病みのやうなゆつくりゆつくりした調子で折々子供に字でも教へるやうに、

「えゝですか、巖と云ふ字ではない同じイハでも溪と云ふ字です。隠れん新聞屋さんは時々人の話を聞違へるので大變迷惑する事があります。どうぞ間違へんやうに。などと注意する。

さすがの訪問記者も遂に斷念したと見えて敷島の接待草三四本吸散した後やがて手帳をポケットに收めた。鶴崎は大家の執事然として記者を玄關へ送出した後客間へ戻ると、海石は新しい普請の出来栄を調べる心と見えて座敷の隅の壁敷居、欄干、床板、建具など彼方此方と見歩いてゐたが突然狂々な黄い聲を出して、

「誰ぢや／＼新しい壁へいつの間にか焼こがしをしたぞ。」

「や、これは。」と鶴崎も畏怖仰天したやうに座敷の真中に突立つて、只今の訪問記者に相違あ

と成功した道具屋と、この二人の間柄については何しろ幾十年と云ふ長い間の關係なので十年間玄關にゐた鶴崎にさへ折々挨拶のできぬ事がある。出入する他の道具屋の話によると海石翁が當代の畫家中ではまづ第一の金満家になつたのは、幸水堂が骨を折つて株の賣買をしてやつたからだ。それだから海石先生は他へ行つては知らぬ事、幸水堂と差向ひになればいくら畫が上手でも頭は上らない。畫筆一本ぢや何ほ何でもさう急に身代の出来よう筈がない。又畫家仲間の人話によれば幸水堂が今日のやうな大きな店になつたのは、玉木紫石と内山海石とが長年朝野の貴顯紳士へ紹介してやつたお蔭で、あんな運のいい道具屋はない。いづれにしても海石と幸水堂とは兩々離れられぬ關係のある事は明かである。

されば鶴崎は幸水堂に對しては海石先生同様に飽くまで丁寧にして又飽くまで哀つぽく貧乏臭く見せかけて居る。實際金銭上の事については、殊に富士見町へ家を持つて以來鶴崎は海石先生よりも此の幸水堂のお蔭を蒙つた事が多い。月末に困つてどうにもならないと云ふやうな時には幸水堂の爺に泣付きさへすれば何か知らし仕事をさして呉れる。何も仕事が無いとなれば

ば快く金を貸してくれる。流石に身代を仕上げる商賣人だけにどこか太腹な處があると、さう云ふ時には鶴崎は見せかけばかりでなく心から感心するのである。

鶴崎は地所の話が出たのでそれとなく座をはずして奥様と俊子のゐる茶の間で暫く世間話のお相手した後頃合を計つて再び立戻つて見ると幸水堂は丁度歸りがけ、時計は早や九時を打つてゐる。

「鶴崎さんあなたはまだお歸りぢやないかい。電車が一つ遅だから。」

「さうですな、お伴しませうか。先生別に御用はございせんか。」

鶴崎は電車に乗つてから昨夜見た鶴崎の畫のことを話し出した。すると幸水堂は金齒を出して氣味のわるい笑ひ顔。

「先生は何と言ひなすつた。」

「唯笑つて居られました。」

「さうでせう、よくある事でア。然し打捨つて置いてもよくない。今度逢つたら雲林堂を思ふさまいぢめて遣なさるがい。」

「ぢやア、あれア張雲林堂のやつた仕事ですな。」

「まアさ、誰がやつた仕事にしろ、さうく店

先へ夜店の品物同様にぶら下げたりしちや物が安くなつていけない。」

「驚きましたな。私ア雲林堂は素人も同様な日のきかない奴だと思つてゐたんだが、どうも油斷がならん。」

「道具屋に人のいゝ人間はゐない。私等始めみんな碌な事アして來ないのさ。考へるといやな商賣でさ。」

鶴崎は幸水堂の言ふことが、いつもの癖とは知りながら、奥歯に物のほさまつたやうな風に思はれてならなくなつた。もつと明に審に聞きたじしたいと鶴崎はきつと幸水堂の顔を見るとき、爺は禿頭を窓の硝子に鼻の穴を天井に向けて好心持さうに眼を閉ぢてゐる。狸衆入か何か分らぬが「幸水堂さん。」と呼んで見ても更に返事をしない。詮方なく鶴崎は唯ぼんやり電車の中の乗客やら馳せ過る町のさまにその眼を移した。

## 七

鶴は二三年ほど引續いて運動世界といふ雑誌と東洋新聞と云ふ新聞の遊戯欄とに野球と庭球蹴鞠などの勝負がある度その批評をかいいてゐる。その報酬合せて凡そ二十圓ばかりが家か



好い處へ再婚させようと云ふ考であつたが容貌のよくないのと出戻だと云ふ二ツの爲めはどうしても縁遠くいつの間にか年を取つてしまつた。俊子は今日では母の代に萬事一家の事を一人で取りしきつてゐる。と云ふのは母親は海石が玉木先生に従つて東京へ来てからまだ下宿屋住居をしてゐた頃ふと出来合つた下宿屋の下女なので、其後夫の身分が段々よくなるにつれて本々教育も働きもない女の事として外は世間の交際門人の取扱内は子供の教育について折々どうしてよいやら分らぬ事が出来てくる處から、何かにつけて俊子に相談する中いつか俊子が一人で取りしきるやうになつてしまつたのである。俊子はせめて出戻の淋しい生涯をこの家事日常のいそがしさに紛らしたいと思つたので、猶その上の餘暇をば短歌と習字に捧げた結果は御歌所御題の募集に入選する事再三、一家中は唯翰一人を除くの外これを無上の名譽とした。中にもわけて人の好い無教育の母親は自分の生んだ娘をば姉か何ぞのやうに心から敬ひ畏れるやうになつた。

この日飯がすむとすぐに俊子は母親に墨をすらせ小野鷺堂風の書體で奉書にすらしと日録を書き結納の品物に水引を掛けした。曆を見る

と大目と云ふを幸ひ、善はいそぐがよいと主人の命令に鶴崎は早速海石翁の着占した紋付と組の袴の借り着、丁度遊んでゐる車屋の吉公を急がせ慶事の使者に立つた。行先は東鴨〇〇町に邸宅を構へた大須賀顯正と云つて長い間知事をしてすつかり金を蓄め込んだ老官吏の家。その三女蝶子といふのが今度翰の花嫁になるのである。

路が遠いので鶴崎は今日しも始めて秋の日の著しく短くなつたのに心付いた。歸つて來ると間もなく日が暮れたせゐか鶴崎は何だかまだいろ／＼用があつて仕様がないうるな心持がしてゐる。翰には例の白山で飲まれた折の話がまだ其のまゝにしてある。自分には又昨夜下谷で發見した雞の傷物の事がある。烽火がついて鶴崎は先生が晩酌の話相手に呼ばれたのを幸まづ昨夜の事から先に話出すと、海石は一向怪訝な顔もせずさうか乃公の名がかいてあつて六拾圓か、はゝゝゝゝ。ときもをかしさうに、大きな聲で笑出されて、鶴崎は二の句がつけなくなつてしまつた處へ、小間使が麴町の幸水堂さんが御機嫌伺ひにと取次いで來た。「食事中だから待たして置け。」多年出入して様子を知つてゐるものと見え幸

水堂の主人は海石翁が食事のすむ時分を見計らつて案内もなく這入つて來た。

「大分また偏つたらしいな。此の間の賣立はどうぢやつた。」と海石は胡坐をかいたまふで、豪然たるよりは寧ろ家人に對すると同じやうな態度、幸水堂もさして海石を尊敬するやうな風もせず其の邊を見廻しながら、  
「わるくありませんが、二三年前のやうな調子にや行きませんね。」と腰から金金具に古渡の緒メをつけた素破らしい煙草入を抜出す、年は六十越してゐるかも知れない。結城紬の單衣に鐵無地の組の羽織つゞれ織の角帯に金鎖、小指にも金の指環をはめ、亂杭の如き齒にも上下無暗と金を入れてゐるのが物言ふ度々、禿頭の押潰したやうな下賤な拉面に、一種不思議な光彩を添へる。

「中六番町の御地所の事ですな。〇〇病院で買ひたいと云ふ話があるさうで。」と幸水堂は矢張そつ方を向いて用件を話出す、これがその辭と見える。この爺以前はケチな古道具屋で正木紫石の家へ入出してゐたが紫石の歿後其門人内山海石が年々名を賣出したと同じやうに幸水堂も又年々店を仕上げて今では三都合せて骨董商の中でも幅のきく方になつた。成功した畫家

たらそつと外へ呼出し内證で蕎麦屋か汁粉屋へでも連込むことを望んだからである。然し翰の計畫通り君はなか／＼窓からも門口からも姿を現さない。不阿向ひの露地から用たしに行くらしく日傘を手にした發者が一人、見れば此間、鶴崎を引張つて來た時呼んだ小花といふ銀杏返の年増である。避ける暇なく顔を見られたので翰は却つてこれを幸ひと、

「おい小花、君男は家にゐるだらうか。」

「きいたげませうか。」と氣輕く小花は分松花家の窓へ立寄る。そのひまに翰は四五間立離れて佇立むと、小花は直様立戻つて來て、

「自分用で家へ行つたんですつて、もうぢき歸るでせうよ。美登里さんへいらしつて待つていらつしやいよ。」

「お前も用足しか。」

「え、一寸富士見町まで。」

「富士見町、僕も富士見町には用があるんだ。藥者家ぢやないよ。」

「鶴崎さんでせう。」

「おや、どうして知つてゐるんだ。」と翰はびつくりして象のやうな細い目をせい／＼大きく見開いた。白山へはこの間が始めての筈の鶴崎がもうその土地の發者に家まで知られてゐるとは

誠に意外千萬。小花はびつくりした翰の顔の可笑しきについて我を忘れて調子づき、

「ほゝゝ、ちやんと知つてゐるわよ。だつて私の姉さんが富士見町にゐるんですもの。待合してゐるのよ。」

「さうか。待合か。」

「愉快つて云ふのよ。御存じでせう。昨日も鳥渡私用があつて家へ行つたら、ひよいとお目にかゝつちやつたの。」

「何、鶴崎が愉快に……一人か……誰か一緒に。」

翰の驚き方があまりに甚しいのに小花は始めて氣がつき、「唯鳥渡外でお見掛けしたのよ。明月さんのお隣の家へおはいりなさる處を見

たのよ。あすがお宅なんぞでせう。」と急に誤魔化さうとしたが翰は頻に、「鶴崎一人だつたのか、誰か一緒に。」

「何だか御商賣の六ヶ敷い御相談しかつたわ。別に藥者業も來ないらしかつたわ。私は用があつたからすぐ歸つちまつたんですもの。」

「と小花は辻褄の合はない事をいひながら歩き歩き早や電車通へ出たので、翰は流石に中間の目を憚つてか忽ち連ではないやうに二三歩立離れると、丁度折好く來かゝる電車を背ひ

小花はそのまゝ、逃るがやうに乗込んだ。

翰は暫く茫然と電車を見送つてゐる中何か急に思ひ付いた事でもあるらしく再び横町へ戻つていきなり待合美登里の門口。

「おい一寸用があるんだ。紙とををかしめてくれ。」と帳場に半り込んで、この手紙を富士見町へ丁度、車屋に鶴崎さんと云ふ人の處へ届けさせてくれ。」

翰は返事を行つつもりで薄暗い車場にごろごろしてゐたが、これまでの勘定が大分たまつてゐるので主婦は酒も出さず碌に話の相手もしない處から翰はふり／＼怒つて其の儘またもや外へ出た。世間を見ず我儘一杯に育つた翰は自分の思ふやうにならない事があると、無暗にじれ出して周囲の人の迷惑をかまはない厄介な男である。唯今車屋を便に出したすぐ後から翰はいきなり鶴崎の家へとやつて來た。

鶴崎は女房のお慶が買物に行つた留守、翰の手紙を自身に受取つたので、其の儘そつと羽織を引掛けて出ようとする門口で、殆んど血眼のやうに呼吸使ひさへ荒くしてゐる翰に出逢つた。

「どうなすつたんです。今手紙を拜見しました。」

ら貰ふ小遣の外に翰の收入の全部である。今に思はしい就職口がないので近頃運動世界社と相談して、米國市俄吉連の赤本屋で出版するベイスボールやスケートやその他さま／＼な遊戯の方法を書いた書物の翻譯をして萬國遊藝體育全書と云ふ案内書のやうなものを書きはじめた。然し翰は學生の時分にも減多に机に向つて書物を見た事のない男である。講義の筆記も翰は試験前になつてから急に人のものを借りて、中學から大學を出るまで十幾年カンニング一點張で危い綱を流り終せしてしまつたので、原書の讀めない處も妙からぬ始末、骨ばかり折れる處から一日やつては三日も四日も打捨つて置く。然しそのまゝにして置いてはいつまでも原稿料が取れないと其の一念でいや／＼ながらも今日は珍しく朝から午後まで机に向つて頻に辭書を開閉してゐた。肥つた身體の重みでいつも一時間とは坐つてゐられない程なので今はもういかほど胡坐をかき直しても横に足を投出して見ても到底我慢がでさない。膝頭は碎けさうに痛み肩は板のやうに凝つてしまつた。

「あゝたまらん。」とベンを投捨てるや六疊の居間の中央に直立し信濃兵のやうに力一杯兩手を無暗に振動した。翰は居間の壁も天井をも

打抜いてしまひたいやうな氣がするのである。そのあまりに強健過ぎる身體とそれに伴ふ肉慾とを狭い家の中に閉込めておくのは獅子を檻に入れたも同様。彼はよし就職の口があつたにしても銀行員などになつて終日椅子に腰をかけたてはゐられない。土木の技師か何かになつて土塊と人夫を相手に一日外の風に吹かれて居べき人である。

障子を明放した窓からさつと雨のやうな音すゑ風が吹入つて兩手を振動してゐる翰の身體と横顔を吹いた。淺暑全く去つた後秋漸く高く馬正に肥ゆべきを知らせる風である。翻譯の原稿二三枚机の下に吹飛ばされたのをそのまゝに翰はふいと外へ出た。然しどこへも行かぬはない。墓口には五六十錢やつとなので、白山の待合美登里へもまさかこれでは行かれないと承知しながら、翰はやはり其の方面へと路は遠いながら磁石に引付けられるやうに日吉坂をばて／＼降りて行つた。親がかりの翰はいつも遊蕩費が足りない處から藝者でも女中でも女ボーイでも相手の女の何たるか問はず直に夫婦約束をして三度ほど一度はたゞ違ふ算段をする。女の方ではいゝ家の若旦那と見て始めから良くない料簡で掛るものもあれば案外正直に翰の

いふ事を眞に受けだされたと氣がついて怒るものもある。いづれにしても其結果は多少の手切金を取られる事になるので、兩親も弱り切つて大學を出たら一日も早く就職口よりも先づ妻を持たしてしまはう。さうしたら悪い女に引掛るまい。女の事さへ無ければ何處へ出さうが間違ひのない立派な人物、品行さへ備れば其の他に缺點は一つもないものゝやうに思ふのもつまり親の慈目である。ところが翰は元より家庭の觀念も何もないので、結婚については唯若い娘が自分のものになるとさふ好奇心と、此れからは無理な算段をして遊びに行かずとも事が済むと云ふ便利を豫想するばかり。さればそれが爲めに懷中都合のわるい時などは俄に結婚の當日が待遠しく思はれ出して却つて時ならぬ不意の誘惑に苦しむのであつた。

麻布の古川橋と芝の芝園橋とで電車を東鴨行に乗換へて小石川指ヶ谷町まで、駄々／＼廣い東京市の南端から北端までの遠道も、翰は唯或日目的の爲めに藝進して行つた。いつもの貧し氣な汚い横町へと曲つて君の地へられてゐる分松花といふ藝者家の門口をば翰は幾度となく行きて戻りつた。これは君更が椅子戸なり櫺子窓なり又は二階の欄干なり何處からか顔を出し



うぞお連れ申して下さい。と女中が知らせた。  
 一鶴崎さん、堪忍して頂戴よ。ね、ね。と小花は先に立つて、「さアあなた。彼方へ行きませう。」

鶴崎は始終黙つて苦味きつて居たが、隣の座敷へひけてからは又一倍、小花は眞實迷惑をかけて濟まない事をしたと云ふ其のお詫の心か、出来るかぎりのもてなし、鶴崎はそれらゝしいやうな氣もすれば、又何ほ金で自由になる女とは云ひながら勘定すれば祝儀わづか貳圓でこんなにも勤められるものかと思ひ議にも思はれて、今日始めて遊んで見たやうな珍しい意外な心持になり出した。これまでとても全く遊んだ事がない譯ではないが然しいつも人のおごりか交際で唯その時々かぎりの酔興、鶴崎は同じ女を二度買ふやうな折はなかつたのである。ところが小花とは妙な廻合せで、最初は白山で鶴との付合に呼んだ後、二度目は昨日雲林堂におまげられて其の夢まだはつきりと覺めやらぬ中に又今日圖らずも遂に三度目の廻合せを重る事になった。鶴崎は藝者といふものは二度三度と段々馴染になれば必ず金や着物や時計や指環なんぞねだり散した擧句の果はまとめて手切金でも取りにかゝるものと斷定してゐるので、

賣女一般に對する嫌惡と蔑視と恐怖とは容易に胸の底から消えないながら、兎に角酒をちびりちびりやつてはうと／＼とする心持、此れだけは正しく歡樂境溫柔郷に相違ないといつゝ、感じない譯には行かなくなつて來た。

小花が氣をきかして持つて來た銚子一本、振つて見ればまだ音のする中、鶴崎は身も心もいゝ工合に懶く快く疲れて、それなりぐつすり寢込んでから、ふとまた眼をさますと、半分雨戸を引いたらしい窓の障子に薄く夕日がさして豆腐屋の聲と遠い製造場の汽笛。と見れば隣の座敷と燈火を共通に儉約するつもりと覺しく欄間の間に高くつけた五燭の電燈にぼつと灯がついた。然し屏風を引いた座敷の中はこの燈と窓の薄日とで却つて一層暗くなつたやうな、妙に氣の靜まるやうな心持になつた。

隣には誰か居はせぬかと耳をすましたが、其の氣勢もない。鶴はどこか別の座敷に行つたものと見えて二階中は夜半のやうにしんとしてゐる。鶴崎は枕元の水注子を取らうと片手を延したるが居かないので大儀さうに半身を起して再び見ることもなくあたりを見廻した。その晩鶴とも／＼歸らうと云ふ時雲林堂の亭主がやつて來て、始めて内山先生の御子息に

御目に掛つた御禮のしるしと料理を取寄せ更に藝者を呼び、やがて一同自動車で白山の美登里へ上り鶴のお馴染み君勇を呼んで一騒といふ事になつた。鶴崎が家へ歸つた時には一時過ぎであつた。

## 八

一日置いて其の次の日の午前鶴崎は再び待合愉快の格子戸を明けた。鶴崎はその夜の勘定だけは無理算段をしても綺麗に支拂つて置かうものと、不測の災難に用意してある銀行の預金まで引出して五拾圓ほどを懷中にして來たのである。遊んだ勘定の事からかの筭と鶴の偽筆についての大切な交渉がこのまゝ有邪無邪になつてしまつては却つて大なる損害だと思つたからである。鶴崎は内山家からの歸途何となく底意あり氣な幸水堂の活振りに次の日早速市ヶ谷の深端半僧坊の門前から少し先へ行つた處に書畫刀劍骨董寶雲林堂とペンキ塗の看板を出した店先へと談判に出掛けた。すると雲林堂の亭主は唯々びつくりした顔付。それアどうも怪しからぬ事だ。よろしう御座います。手前の方から仲間内へ聞かしてしつかり合議をさせませう。どうぞ其れまで暫く御猶豫を願ひま

「君、昨夜はお楽しみでしたわね。一輪の聲音には  
おりく、羨望と憤慨の情が現れた。」

「え、何が……」

「悪事千里だぜ。鶴崎君、愉快へ連れてつてく  
れたまへ。僕は白山でとうく侮辱された。」

「な、なんですか……」と鶴崎は非常にあわて出  
した。

「僕アもう何處へ行つても鹽花だ。君の行く愉  
快を紹介したまへ。」

「え、愉快……」

「知らばつくれるつもりか、おい君、小花が待  
つてゐるよ。」

「あゝ小花と御一緒でしたか。さうですか。や  
つとわかりました。兎に角お伴いませう。」

鶴崎は今日鶴が白山で小花を呼び昨夜の事を  
聞知つて怒り出したのだと合點した。昨日鶴

崎は少し用談があつて市ヶ谷地端の雲林堂と云  
ふ書畫屋へ出掛けしたが、すると亭主は是非にと

三番町の待合愉快と云ふ鶴崎を誘つた。後で  
聞けば愉快と云ふのはその妻がやつてゐる待合

ださうで、店先ではなしにくい用談の客がある  
と亭主はぢきに愉快の二階（案内するとの事、

鶴崎は昨日偶然その待合で小花に出逢つた一伍  
十什をば歩きながらこま／＼と陳述に及んだ。

鶴は兎に角女にありつく道が出来たので藝者家  
の間をば歩いて行く一歩々々次第に機嫌を直し  
て来る。

大通へ出てから斜に向の横町へ曲つて露  
地へ入ると、汚い下宿屋と小さな質屋との間に

立つてゐる古びた二階家。然し柳を植えた小門  
と船板塀とに表付だけをどうやら斯うやら待合

らしく見せたのが即ち「愉快」である。内へは  
いると先刻の小花が女中よりも先に駆出ていき

なり後から鶴にかじり付いて、

「内山さん、よく連れて来て下さつたわね。あ  
たいの人ツたらそれ薄情なのよ。」と鶴崎の背

中をぼんと叩く様子に、鶴はすっかり御機嫌が  
直つてしまつたが、鶴崎はいかにも迷惑さうに

苦笑しながらじろりと小花を睨みながら一同二  
階へ上つた。

小花は早速白山へ電話をかけ鶴の柙方君を  
呼んだがまだ歸つて来ないと云ふので、臨時に

この土地の妓でよきさうなのをと、帳場から選  
んで掛けると、まだ十七八のぼつちやりとした

高島田。粉をふいたやうな白粉のつけ方。緋の  
よごれた半襟に紋のぼやけた一重の裾模様。酒

も飲まず話もせず、借りて来た猫のやうな様子。  
遊び付けぬものにもすぐに出てまだ間もない丸

抱への妓と思はれる。座敷は小花が一人ではし  
やぐばかり。「鳥渡ぼうふらが湧いてよ。」と云

つても鶴崎は始終ひかへ目に再三杯を促され  
てからやつと一口する位なのを、今日は鶴もそ

のまゝにして別に強ひようともせず、女中がや  
がて「あなた。どうぞ彼方へ。」とぶふのを寧ろ

遅しと待つてゐたらしく座を立つた。女中は直  
に立戻つて、廊下から遠慮なく、

「龍丸さん突當の三層ですよ。」と命令するやう  
な調子である。

チャップ臺を前にぼんやり坐つてゐた龍丸は返  
事もせぬかはりに別に驚いた様子もなく、始終

だまつたまゝですつと立上り風邪でも引いてゐ  
たのか色氣なく無遠慮に水涕をすゝりながら行

つてしまつた。

鶴崎は小花と二人きりになるや否や、「おい、  
小花、困るぢやないか。昨夜の事なんぞ人に饒

舌つちやア、實に迷惑するよ。」

「すみません。別に私の方からお饒舌した譯ぢ  
やないんですよ。あちらがいろんな事を言つて

録をかけるんですもの。」と小花は全く心配さう  
に俯向いた顔をあげて申譯なさうにそつと鶴  
崎の顔を見る。

「おそろなりまして相済みません。小花さんど

「暫くは全く茫然と姉の顔のみ打眺めてゐたが、白髪（しらげ）の母親が上花と煙草（たばこ）盆（ひら）とを持運（もってん）んで來たのに氣がつき、

「おかみさん、一昨日の勘定（かんじやう）をしに來たんだが、どの位（い）になつたね。」

「あれは、頂（いた）かないやうにツて、昨日も旦那（だんな）からさう云はれてますの。よろしんですよ。」

「それアいかん。此處（ここ）と白山（しろやま）と兩方（りやうほう）厄介（やくがい）をかけちや、あんまりひどい……。」云ひながらも鶴崎（つ崎）は主婦（しゅしゆ）の様子（ようす）から目を離（はな）す事が出来（こ）ないのである。主婦（しゅしゆ）は洗脚（せんかく）しの浴衣（ゆい）の胸角（むねかく）に引きはだ

かるのを引合せながら、

「美登里（みどり）さんの方は昨日（けふ）此方（こち）から電話（でんわ）をかけて旦那（だんな）がお拂（はら）ひになりましたわ。」

「どの位（い）だ。随分（ずいぶん）存（ぞん）んだやうだからな。」

「どの位（い）か、つたんですか、私書付（わしじふ）を見（み）ないから知りません。いくら掛（か）つたつていゝわ。旦那（だんな）のお金（かね）ですもの。打捨（うちすて）つてお置きなさいましよ。」

「それちや、せめて此處（こゝ）の勘定（かんじやう）だけでもしようぢやないか。鶴崎（つ崎）と僕（わ）と……。」と云ひながら鶴崎（つ崎）は紙入（しゐ）を取（と）出した。

「旦那（だんな）から叱（な）られますから、ほんとにあなた御（ご）勘定（かんじやう）の事はこの次（つぎ）からにしませうよ。ねえ、母（はは）さん、

さん、ちよいとオー。」とおかみは突然（いふたん）大きな聲（こゑ）をして首（くび）を長く梯子（はし）段（だん）の方（ほう）へ向（む）けて母親（はは）を呼（よ）んだ。その爲（ため）には自然（しぜん）に半身（はんしん）を後（うしろ）へ反（か）し片手（かたて）を後（うしろ）についたの、其（その）拍子（はし）に胸（むね）がぐつと引開（ひら）けた姿（すがた）が鶴崎（つ崎）には云（い）ふばかりなく艶麗（えんれい）に見（み）え、又（また）しても一昨日（けふ）の小花（こはな）のさまが思（おも）ひ起（おこ）されるのであつた。

母親（はは）はのこ／＼上（あ）つて來（き）る。五十前後（ごじゅうぜんご）の身體（からだ）はまだ丈夫（ぢやうぶ）さうであるが眼（め）のしよぼ／＼した如（ごと）く何（なん）にも意氣（いき）地（ぢ）のない氣（き）のきかなさうな婆（ば）さん。

「母（はは）さん、御勘定（ごかんじやう）はみんな昨日（けふ）旦那（だんな）がなすつたわねえ。」

「それちや、これア勘定（かんじやう）と云（い）ふわけでなく置（お）いて行（い）かう。いろ／＼世話（せわ）になつたから。」と鶴崎（つ崎）は紙入（しゐ）に手（て）を入（い）れたが拾圓（しちげん）札（は）ばかりなので惜（うれ）しいと思（おも）ひながら已（や）むを得（え）ず一枚（まい）引出（ひきだ）して二ツに折（を）りながらおかみの前（まへ）へ差（さ）付（つ）けた。

「すみませんねえ。」といたゞいて見て、「あらこんなに頂戴（とうがい）しちゃ……。」

「まあいゝさ。」

「それちや半分（はんぶん）がいたゞいて半分（はんぶん）花（はな）ちゃんにねえ、母（はは）さん、鳥渡（とりわたり）電話（でんわ）をかけておやりよ。」

「昨日（けふ）來（き）なかつたから、今日（けふ）はもう來（き）さうなんだ。」と母親（はは）は下（した）へ降（くだ）りかける。おかみは一層（いっそう）

親（おや）し氣（げ）な調子（てうし）で、

「毎日（まいにち）お午（ひる）時（とき）分（ぶん）にはきつと遊び（あそび）に來（き）るんですよ。小石川（こいしかわ）にやいゝ髮結（かみむす）さんがないんですつて。今（いま）だに牛込（うしご）の御師（おし）匠（しやう）さんとこへ行（い）くんですよ。その歸（かへ）りにはきつと寄（よ）つて行（い）くんですから、御（ご）ゆつくりなさいまし。」

「いや今日（けふ）はもうさうしちや居（ゐ）られん。」と云（い）つたが鶴崎（つ崎）は別（べつ）に座（ざ）を立たうとしなかつた。母（はは）親（おや）が大きな聲（こゑ）で「それちや直（す）ぐおいでよ。すぐだよ。いゝかいお待（まち）たせ申（まを）して置（お）くからね。」と電話（でんわ）で話（はな）をするのがよく聞（き）える。

「御（ご）銚子（しやうし）をつけまするか。」とおかみは電話（でんわ）の話を聞（き）きながら鶴崎（つ崎）の方（ほう）を見（み）た。

「又（また）一日（いちにち）潰（つぶ）れてしまふから今日（けふ）はまあよして置（お）かう。」

「それちや花（はな）ちゃんが來（き）てからにしませう。その中（うち）もうちきお午（ひる）ですからねえ、鶴崎（つ崎）さん、今日（けふ）はみんなで一（いっ）緒（しょ）に何（なん）かおいしいものを食（た）べようぢやありませんか。みんな御行儀（ごぎやうぎ）がいゝかん大變（だいへん）です。ほゝゝゝ。」

母親（はは）が再び（ふたたび）二階（にがい）へ上（あ）つて來（き）た時（とき）格子（くわ）子（し）の明（あ）く音がした。その明（あ）けやうでおかみはすぐに「母（はは）さん旦那（だんな）だよ。」

母親（はは）が下（した）りて行（い）くより早（はや）く上（あ）つて來（き）る雲（くも）林（りん）



す。何しろとんだ御迷惑をおかけして申譯が御座いません。みんな手前の不調法とひたあやまりに謝罪つてゐる中丁度其飯時になつたので雲林堂は鵜崎を己れの差宅同様な待合愉快一案内したのであるが、思ひもかけない小花がゐた爲めに僞單の詮議ばなしはそれなりになつて、今だに何とも返事がない。

格下戸の明く音に丁度其處等を掃除してゐた田舎田の女中、端折つた袴衣の裾を下しめせず、もう聊々しい調子で、

「いらつしやいまし、さアどうぞ。」とすぐに二階へと案内するので、鵜崎は座蒲團に坐るより早く、「今日は鳥渡おかみさんに用がある。」と髭をひねつたが女中は俯くまで馴々しく「小花さんのとこへ電話をかけませうね。」

「おい、馬鹿な事をいふな。今日はそんな事しちや居られん。おかみさんに大急ぎだからとさう云つてくれ。」

「はい。」と女中はすこし呆氣に取られたやうな顔付、そのまゝ下へと降りて行つたが暫くして誰も上つて来る様子がない。隣近所では頻にはたきの音がする。この二階もまだ掃除がしまはなかつたものと見えて障子柳が開放したまゝになつて居る處から、鵜崎は不圖何氣なく

四邊を見廻した時、隣の三疊には今朝か昨夜か知らぬが兎に角客と藝者の歸つた後をそのまゝ片付けずにある亂雑なさまが目についた。

「どうもすみません、お待ちせ申しまして。」と言ひながら上つて来る主婦の聲に鵜崎はびつくりしてそつと元の座に返る。

「先夜はどうも。あらお煙草盆も上花も差上げないで。まア仕様がないわねえ。」とおかみは周章で手をつき鳴した。

年はもう三十三、眉の薄い生際のよくない細面、もとより白くはない顔の色寢起のせゐか血色なく眼の縁の青黒さ際立つて今は色香も全く失せかけてゐるが、然し寢亂れた丸髻の鬢に黄楊の櫛ぐいとさし込み、もう二三日で移替になる此頃の朝寒には、締りのない裡前一際薄寒く見える浴衣の着こなし、幅狭い半袴のゆるみ工合、染返しの小紋の半纏引掛けた肩の様子、待合の主婦と云ふよりは誰が見ても欠張もとの身の藝者である。

「此の間まで妹の小花と同じく神樂坂の或藝者家から吉奴と云つて出てゐたのである。十六の年から此の時まで數へれば二十年にも近い泥水稼業、元より此の間には一二度身請もされたし、ひどい病氣にもかゝつたし、彼方此方

と借金、の付替も度重つたが、何しろ長い年月に身の借金も知らず、輕くなり出した處から、今度こそは一生の身の納方をと考へ出して折から富士見町の待合と藝者家組合に押着があつて二派に分れ互に氣勢を張らうと競争し出した結果は、新に店を出すものには至つて都合のいい事になつたので、吉奴はこれと兼てより馴染の客雲林堂に頼込んで愉快と云ふこの待合を出して貰ひ、それまでは諸處下女奉公に歩いてゐた老妯を引取つた。

鵜崎は初めて雲林堂にこそはれて來た折既に主婦の身の上のあらましと、偶然來合せてゐた白山の小花が實の妹である事をも話して聞されてゐたのであるが、さして氣に留める程の事でもないで、唯不思議な事だと笑つたのみで主婦の様子や顔立などには本より氣を留めて見もしなかつた。ところが今ふいと何心なく差向ひになつて見ると、唯何と云ふ譯もなく成程姉妹だけあつて様子や物言ひまで何處かよく似た處があると始めて物珍らしいやうに氣がつくと、まだ藝者風の尖せやらぬ姉の寢起の姿から鵜崎はどうしたものか、ふと妹小花が一昨日の姿をあり／＼と思ひ浮べた。その心持は今方隣の小座敷を覗いたのと同じやうなもので、

ぬと鶴崎は我慢に我慢して何か仕事に氣をまぎらさうと思つたが生憎と仕掛けた仕事がない。繪絹だけは一週間程前に卒へ張つて焚水も引いて、筆をつけるばかりにしてあるが、これは期日を定めず出来上れば麹町の幸水堂へ持つて行き揮毫料は前年から引續いた借金のなし崩しにすべき約束の仕事なので猶更今日は新に下圖を構へる氣も出て来ない。鶴崎は幸水堂への借金がまだ何の彼のと小百圓残つてゐる事から毎月家のくらしが今は子供も追々大きくなつて来るので初めて家を持つた時よりは殆んど二倍以上とどうしても五六拾圓なくては遣つて行かれぬ事やら、又一度愉快へ行つて遊ぶ費用大抵六七圓に見積れば一日置きに遊んだ日には一箇月二百圓餘になる事などをあれこれと持ちもなく考へ廻した。そして幾度となく鶴崎は銀行貯金の通帳と紙入の中なる紙幣とを数へた。紙入の中には昨日雲林堂が包んで出した參拾圓と銀行から引出した殘金と合せて百圓近くある。

こんな事で午前思ひの外に早く過ぎ、女房のお慶が下から午飯を知らせる聲。鶴崎は鹽の辛い鰯の煮びたしと眞黒に濃の出た蓮根の煮付を載せた膳に向ふと、又しても云ふに云はれぬ手持無沙汰な氣がして、晩の一合を午飯に繰廻して貰ひたいものだと思つた。然しお酒は昨にきまつたものとのみ心得てゐる女房、大層氣をきかしたつもりで冷飯と一緒に番茶をわかし土瓶を持つて来る始末。いつもながら手づくねの束髪振亂した出箇の馬面が今日は殊更見る影なく爺汚く思はれ、障子機から疊縁側まで二人の腕白小僧に散々荒された家内中も亦いつもに増して一倍荒されてゐるやうに見えた。かうなつて来ると、今まではさして氣にも留めなかつた我が家の左隣には明月といふ待合。右隣は分松千代蔭と大層長つたらしい名前の藝者家を始めて二階の窓と縁側から見える近所一帯、若し屋根へでも上つたら三番町の愉快までが望み得られるかと思はれる有様、とても此の汚らしい家の中におつとしては居られぬ。

茶漬一杯何の味もなく掻込んだ後鶴崎は兎に角紙入の百圓近くを手許に置いてはよくないと考へて電車通の銀行まで預けに行つたが、門を出ればすぐと目につく藝者の往來、鶴崎は一時忘れて居た轉居の事をふと思ひ出した。家へ戻ると否や大きな聲で女房を呼び、一天氣がいくから家をさがしに行かう。今日は何でも彼でもさがして来る。ぐづ／＼してゐると直に寒くなるからな。」

## 九

白金の高臺を降り、やがて魚籃坂下から聖坂の方へといくく込入つた幾筋の裏通。まがりくねつた先はどこへ出るのやら見當のつかぬばかりか、どの通も同じやうに寺のみ並んだ門前をば、鶴崎は足にまかせて歩く中、いつか町の名さへも北寺町とした唯ある寺の門内、墓地を埋めた跡らしい處に新しい貸家を見付け、いよいよ富士見町を引拂つた。

土地が變れば自ら氣も變る。今までは晝夜の別なく聞えた唄三味線はお經と銅鑼と木魚に變り、午過湯湯への往來に見るともなく目にした藝者の姿は、摩應義塾から歸つて来る學生の制服となつた。鶴崎は引越した其の日から、誘惑のない平穩な生涯の再來にやつと安堵の胸を撫下した。

鶴崎は東京に生れた男であるが芝も麻布を越した奥深いこの邊は一向不案内なので、近處の様子も何となく物珍らしく、内山家への行き歸りにはさすがに書上だけに魚籃寺功進寺聖瑞寺なんぞ近邊の寺々を見歩いたりするので、譯もなく日が早く經つて行く。する中に内山家ではいよく、總領翰の結婚が間近くなつて来る

堂、梯子段の中途から、「鶴崎先生、丁度いゝ處でした。只今お宅へ伺ふつもりでした。一昨夜は脱線して失禮致しました。」

セルに縋紐の羽織、年の頃は三十四五かと見える。髪を分け眼鏡をかけた様子から早口な物云ひぶり、何處か書生らしい處があるもその筈、雲林堂はかの老翁なる半水堂の如く生拔きの骨董屋ではない。もとは石版屋の板下職工で種々雑多の事に手を出した擧句、縁日や夜店で唐物化粧品の羅賣までやつたが、する中に本郷邊の古本屋の後家を引かへ入婿となりその躰練金を出して米相場で儲けたのを資本に古本の片手間に書畫屋を始めた。然し古人の書畫は鑑定も六ヶ敷いし、よい客筋もない處から主に新進畫家の新作畫を賣ぐ事にしたりが却つて大當り、遂に古本屋を止めて今では全くの書畫屋に、傍株相場をやつてゐる。雲林堂は萬事書生風にお客へも仲間内へも私ア素人だからとばかりで大ざっぱな遣方、それが案外に成功の種となつたのである。

「先生、實にひどい日に合ひました。向柳原のあれア銅古堂と云ふ道具屋です。昨日實は談判に出かけたんですが、あゝ云ふ手合に會つちや、物事がしみつたれで、遣方が汚いから面倒臭

くつていけませんよ。然し何の彼のと參拾兩取つて來ました。」と云つて雲林堂はいかにも先方から取つて來たものらしく、袋に入れたまゝの參拾兩を鶴崎の前へ出して、「先生まアどうぞ此れで勘辨なすつて下さい。」

「いや、これアとんだお骨折だつた。然し僕は金が欲しいから兎や角言ふのぢやない。唯内山先生に對して何だか誠に心持が悪いからなア。」

「さうですとも。ですから私もその事はうんと叩いてやつたのです。これから私もすこし氣をつけて商ひをしませう、又此の次こんな事があつちや全く信用にかゝはりますからね。時に先生、この頃に一ツ番會をやつて頂けますまいか。

參圓から五圓位の處ならこの邊の待合だけでも随分はいり手があります。富士見町から神樂坂四谷と敷へた日にやア五六百軒ぢやきゝますまい。半分とした處で三百軒ですから。初めつから待合向の畫ばかり書いて頂いて當籤のものにや、ねえ先生、内々で一件の和じるしもいぢや有りませんか。なアお町々とおかみを見返り、さうなればお前は半込小花は小石川方面を内輪から遊説するんだ。」

夜店で難をやつた男だけにべら／＼口から出

まかせ饒舌り出したら切がない。

午砲が鳴つた時白山から小花が駆付けて來た。鶴崎は一同と一緒に鳥鍋をつゝいた後今日はこのまゝ歸らうと思ひながら書間赤い顔をして歸るのも變だからと灯のつくのを待てばいつかその夜も又十二時近くなつてしまふ。小花はいつその事お泊んなさいといふのを鶴崎は振堀ふやうにして家へ歸つた。

家へ歸つてぐつすりその夜は寝てしまつたが翌朝九時過眼をさますが否や鶴崎は床の中から我にもあらず小花の事を思ひ出した。戀しいと思ふのではない。唯何となく肌淋しいやうな妙な心持がしたのである。朝湯へ行つてどうやら少しその重い心持を直したかと思ふと今度は咽喉が渴いてほんの一口でもいゝから酒がほしくてならなくなつた。いくら茶を濃くして呑んでも酒を欲する念はやまないのである。鶴崎見ても酒を欲する念はやまないのと思つた事は一度もない。晩酌に一合づつやり出したのもつい二三年此方の事で、それさへ若し止さうと思へばいつでも止せない事はないと自分では思つてゐた。ところが儼かこの四五日愉快へ出入した爲めに忽ちこんな悪い癖がついた。となつては、これはどうしても慎まなければなら



からないが、極く小柄なところからまだ十七八かとも見える位で、何となく餘處目にはいたいたし氣がする程であつた。あくる日には前夜實家から付添つて來た女中がお作をして日比谷の寫眞屋へ行く。歸つて來ると午飯もそこ／＼に新夫婦は箱根へ新婚旅行。後は俄にがらんとした一家中。海石翁を始め一同安心すると共に俄にがつかり疲れてしまつたらしく鶴崎も其の夜は夕飯の御馳走にあづかるが早い家へ歸ると、かの怪しい手紙の事もそれなり忘れたまゝすぐに寢床へはいつた。

「これア閑靜でいゝお住居だ。」と大きな聲で翌日の朝寢起きのまゝの鶴崎を驚かした者があゝる。市ヶ谷雲林堂の亭主相澤である。鶴崎は湯漬を一杯き込んで二階へ上つて來ると雲林堂はいつものそは／＼と落ちつかぬ風で、勝手に二階の窓を明けながら寺の境内を見下し、「どうしたつて畫でもかく人のお住居だ。ねえ先生、茶晶の向に竹藪があつて坊主が掃除をしてゐる處なんざ、どうしても浮世放れがしてますな。随分あつちこつちと搜しましたよ。馬鹿におおきばつかしある處ですな。」

鶴崎はだまつて楊枝で齒をほじつてゐた。鶴崎は雲林堂の顔を見ると自然三番町の待合のこ

とが思出されやしまいかと我と我が心を氣遣ふので實は轉居の知らせさへしなかつたのである。行儀の悪い雲林堂は窓から外へ痰唾をば平氣で音高く吐き飛ばし、「お仕事にや全く以て來いだが、先のお宅とはあんな變り過ぎてお淋しいでせう。」

「なにさ、淋しいなんてそんな事があるものか。」と鶴崎は覺えず聲を高めたが一向にそれとも氣のつかぬ雲林堂は底氣味のわるい笑顔を見せて、

「私もあれつきり、何の彼のと彼方此方驕り廻つてゐたんで、この一週間ばかりはおち／＼酒も飲めない始末ですよ。さうぶへば先生も内山さんの御婚禮で大分おいそがしかつたんでせう。新聞で寫眞を拜見しました。實はわざと御遠慮してまだお祝にも上らないんで……」

「屋敷の若旦那もすつかり……おなりで結構さ。これからは二度と悪いところへ出入をなさらんやうに影ながら僕も注意するつもりだ。」と鶴崎は頻に髭をひねつて一生懸命に嚴格な風を示さうとするが相手は始終平氣な調子。

「女だけの御道樂なら大した事アない。お花の方だと鳥渡厄介でせうがね。女の兒なら遊び方一ツですよ。二百なり三百なり三月半年遊ぶだ

けのものを一度に拂つたつりて掛れば旦那旦那と大きな顔で女一人は好自由、此方のいらない時は勝手に稼がして置きやア儲からないまでも損の仕ツこは有りやしません。今の世の中ア抜日なく立廻りさへすれア打たうが買はうが楽しい事をしただけが徳ですよ。書畫だつてさうでさ。樂しんだ舉句に値賣が出来るやうなものでさ。時に鶴崎先生、その一件で今からお願ひ申して置きたい事があるんで……」

「何です。」

「内山さんの今度御親戚におなんすつた大須賀さんのお屋敷ですな。その中に手前も先生のお顔で是非お出入になりたいんですよ。大須賀さんのお屋敷にやすばらしいものがあるさうですな。」

「兎に角有名な骨董家で居候のか。然し僕はまだ何にも拝見はせん。」

「それに先生、大須賀さんは足利家の御家令だとか御相談役だとかぶふ身ぢやありませんか。もし御寶物の賣立でもあるやうな時には何が

さて置いて大須賀さんのお屋敷へお出入してゐないのは虚言ですか。然し手前なんざまだ駈出しの道具屋ですから幸水堂さんのやうな大きな商ひをしようなどとは夢にも思ひやませ

ので何かと用事が多くなる。鵜崎はまづ日比谷大神宮への申込から當日披露の宴會をする料理屋をば主人の命令で築地の精養軒日比谷の大正閣高輪の萬壽新橋の花月島森の湖月其他六七軒を聞き廻つた。物に抜日のない海石は入札を募集するやうな工合に一番安くして一番體裁のいい處をと論議がなか／＼嚴密なのである。

鵜崎はそんな用事で日をふるまゝに三番町の待合愉快の事をば忘れるともなく忘れてしまつた。兎に角に愉快の事が心から消去してしまひさへすればそれで鵜崎は安心して用事も出来れば仕事も手につくのである。待合はいりに藝者眞茶屋酒などいふ事は自分のやうな身分のものゝすべき事ではない。それをば敢てすればすぐに一家一身の破滅を來すものゝやうな氣がして、面白く知れば知る程唯々空恐しいのである。それも小花と云ふ藝者と直接馴染にならないうまでは、隣近處がいかにほど猥らにいかほど騒がしくならうとも自分の身とはつまり何の關係もない事なので、湯屋の番臺を境に藝者の着物脱ぐさま、夏の夜半わが家の窓から待合の奥座敷を覗いて見るのも加つて時々

が、一度足を踏入れて其の味を知つたとなつた我ながらわが身が危険で危険でならなくなつた譯である。

道樂息子の輪も新婚の日の迫るにつけて流石に身を憤む心になつたのか此頃は殊勝にもずつと家にはばかりゐる。彼岸は既に過ぎて拾の時節となつた。流石翁は輪の結婚が済むのを待つて上野展覽會への出品に着手するとの事で既に繪絹をば鵜崎に張らせ二階の八疊六疊二間の袱を取はづしてすぐにも揮毫の出來るやうに支度をさせた。下の客間には東西兩都の畫家を始め親戚知人からのさまざまの觀物が九尺の床の間に山をなし、俊子照子に母親の女三人は當日の衣類や披露の支度萬端に妙中で日を送つてゐる。幾十通の招待狀を認めるのに鵜崎は一夜を十二時過ぎるまで内玄関の二疊に机を据ゑてゐた。いよく日出度い日も明日と云ふ前の夜になると鵜崎の妻お慶を始め日頃出入をするものもめい／＼手傳ひに來る。鵜崎は間違のないやうにと重ねて日比谷の大神宮から披露の會場と決定した精養軒へ用掛け歸つて來ると出入の車屋を呼付けて當日の事をこまごまと注意するなぞ其の夜もまた十二時過ぎとなつた。

當日は午後から夜にかけて一家残らず出掛つてしまふので留守番の鵜崎は又主人の代理として出入の商人や其他勝手口から祝に來るものどもへ禮を述べて酒を出す役目。灯のつくすし前臺處の女中達はその／＼出入のものへ仕出し料理を出すので大騒ぎの眞最中内玄関の方で頻に郵便々々と呼ぶ聲。鵜崎は聞付けて郵便を受取り何心なく封筒を見ると怪し氣なる筆つきで内山輪様としてある。差出人の裏書を見

るまでもなく、これは變だとながら心やうにそつと袂へかくした。白山の藝者からの手紙にちがひないと感付くにつけて今夜この際坊ちゃんに渡してよいものか悪いものかと鵜崎は思案する間もなく、臺所の板の間へ早くも車座に集つた大工植木屋島の者など六七人忽ち一機嫌で清元浪花節なんぞやり出す賑やかさ。やがて九時になるのを合圖に鵜崎はこの人数一同に定紋つきの紗帳提灯を持たせ、玄関前の砂利場へ並べて花婿花嫁を出迎ひさせた。

花嫁は二十三になると聞いてゐたが鵜崎はその夜出入の者や奉公人を引率して一人々々日通りをさせる時下座敷の床の間の前に大兵肥満の輪と居並んだ姿、勿論ちつと仲向いてゐる上に角かくしをつけてゐるので容貌の善惡はわ

別に何ともしはしませぬからどうぞいまでものやうに來て下さいこの手紙と書き次第おいで下さいおいでがないと電話をかけますそれがおこまりならどうぞ一度でもいゝからおこしの程おねがひ申上げます小花さんのお方もあれきりおいでがないといふ事で小花さんもうらんでをります小花さんは十月から姉さんのゐる富士見町へかはりました私もこゝは思はしくありませんから神樂坂か富士見町へ行きたいと思つてますお目にかゝつてその御相談もしたうございいますから是非是非おこしの程ねがひ申上候

君より

鶴崎はこれまで薄者の手紙など一度も讀んだ事がないので傳名ばかりの惡筆に一通りならぬ苦心をしてやつとの事讀み終つた。そして小花が富士見町へ變つたと知るや、鶴崎は早くこゝへ引越して來てよかつたと思へば、また引越さなかつたらどうしたらうとも思ふ。又さつき雲林堂の亭主は何故その事を黙つてゐたのだらう。まだ知らないのか知ら、いや知らない筈はないと我にもあらざるんな事を考へ出してあゝ馬鹿々々しいと腹立し氣に君勇の手紙を机の下

に投げ込んで立上つた。もうちきお午と見えて本堂の方で木魚の音がし出す。鶴崎は大方今朝あたりから海石先生が文展の用品に取掛つて居られはしまいかと思付いて其の儘白金の方へと出掛けた。

## 十

輪は花嫁の蝶子をつれて塔の澤の一の湯へ車をつけた。谷川に臨んだ二階の八畳に案内されてまだ着物もぬぐかぬがぬ中二人は突然座敷の電燈に灯のついたのを見て、云合したやうに天井を仰いだ。昨日の結婚式のすまして今日の午後家を出てから平日汽車と電車の窓にまぶしい程な小春の日をあげつづけて來たので、箱根へつぐが否や二人の目にはあわたしい山かげの夕暮が一際あわたしく思はれたのであつた。

「何時でせう。」と蝶子は机の上なる輪が懷中時計を早や我物のやうにかまはず引寄せて見て、「まだ五時前ですわ。」

「さうか。」と輪はふひながら洋服を宿の襦袍に着換へてどしりと胡坐をかく。宿の女中は側から輪の洋服をたゝみながら、「東京からお出でいらつしやいましたか。急

行たと譯はございませんでね、好勝に明日もお天氣でございませう。」と行り、鏡舌りつづけた後やがて蝶子の服ぎ捨てた紋羽二重の羽織に縞珍の帯をも手やく纏んで、すぐ風呂敷をおめしになりますか。

「さうだな。飯は後でゆつくり食ふ事にしよう。」と輪は獨言のやうに云捨て、蝶子にはかまはず早くも立つて廊下へ出た。何しろ蝶子はまだ昨夜のまゝの高島田、唯儀式の袴を抜いて銀の平打にさし替へたばかりなので誰が見てもすぐに貰ひたてのお嫁さんと知られる譯。さう思ふと輪は道樂者に似ず宿の女中にも何となく氣まりがわるいやうな氣がしてたらぬ處から蝶子を座敷へ置き去りにして廊下とすた／＼一人でどぶりと湯の中へ飛込んだ。湯の中には誰も居ず四邊はしんとしてゐるので輪はやがて何を考へるともなく結婚といふことは實に妙なものだ滑稽なものだ。放蕩も結婚も事實の要點に於ては少しもちがひはない。然るに一は秘密であり罪愆であるのに一は公明正大でありそして親孝行になる。考へると全く可笑しい。例へば新しい流行の帽子一ツ買つて貰ふにも不斷ならばよくせき根氣よく強請らなくてはならないのに、結婚だと云へば此方は何とも云はないのに



ん。私や損したつていゝんですよ。唯仲間へ  
の名誉になるんですから。徳徳放れて、ねえ先  
生、その中に何かおはなしが出来ましたら市ヶ谷  
のお堀端に雲林堂と云ふケチな道具屋があるつ  
ていふ事を唯何となしに先様のお耳へお入れな  
すつて下さい。是非一つお願い申して置きま  
す。」

雲林堂は既に大須賀の手で賣什賣立の日取り  
で決定してでもゐるものゝやうに頻と鶴崎へ頼  
み込んだ後、御引越しのお祝ひにと水引をかけ  
た商品切手を置いて何かいゝがしさにそはそ  
はして立歸つた。鶴崎は格子戸まで送出して二  
階へ戻ると、始めて當日の夕方そつと受取つた  
怪しい女の手紙のことを思出して机の抽斗を  
明けたが更に見當らない。用算笥か繪具箱の抽  
斗かと急に思ひ惑つて捜したが何處こもない。  
折から二階へ上つて来た女房のお慶、  
「肴屋が参りました。何か取つて置ませう  
か。」

「何があるんだ。」

「生鮭と鱸に比目魚ですつて。」

「鱸がいゝかな。」

「はい。」と立ち掛けるのを鶴崎は大きな聲で、  
「おいゝゝお慶切身は一きれいくらだかしつか

り値段を聞かなくつちやいけないぜ。」

鶴崎はお慶が下へ降りてから始めてあの手紙  
は一夜夜紋付の袂の中へ入れたまゝにして置い  
た事を思返した。急に手を鳴して、

「お慶々々。疊む時紋付の袂に手紙がありやし  
なかつたか。坊ちゃんのとこに來た郵便だ。」  
「簞笥の抽斗へ入れて置きました。つい申上げ  
るのを忘れました。」

「何だ。早くさう言つてくれゝばいいに。落し  
たかと思つていゝ心配をしたぜ。」

「どうもすみません。」

「以前の坊ちゃんとはすこし御身分が違ふから  
な。お里から來てゐる女中さんにも拾はれて  
見る甚だよろしくない。」

「きやしやな弱さうな方ですわね。」

「若奥様のことか。」

「えゝ。御病身なんですつてね。」

「お前どうしてそんな事を知つてるんだ。誰か  
そんな事を言ふものがあるのか。」

「こゝのお寺の和尚様が何も彼も御存じなんで  
すよ。昨日裏の畠で何の氣なしにお屋敷のお話  
をすると、さうかい、それでもまあよくお嫁入  
が出来る様にお成んなすつた。こんなお目出度  
い結構な事はないッて仰有るから、どう云ふ譯

ですつてお聞き申すと、和尚さんの御親類の娘  
さんとかが以前大須賀様のお屋敷にお小間使に  
上つてゐたんですつて。それで色んな事を知つ  
ておゐでなさるんですとさ。」

「ふうむ。さうか。不思議な事もあるものだ  
な。御病身と云つてどこがお悪いのだ。別に  
われゝが見やどこもお悪いやうな様子も  
ないぢやないか。縁起でもない事を云ふ坊主だ  
な。」

「何ですか、私も委しいお話は聞きましたが、  
大變不思議がつてお居でなさいましたよ。」

勝手の方に父も何か御用きゝでも來たらし  
い物音にお慶はそれなり降りて行つた。鶴崎は  
それを辛ひ怪しい手紙を手にとつてまづ切手の  
消印を打眺めた後身をきつた。

「第一申上候。その後はちつともおいで  
がありませんとところを見るともう私には  
御用がなくなつて私見たやうな賤しい  
藝者はいやにお成りなされ候。事とかな  
しくつて仕様がありませんあなた様には  
きれいな奥様をおもらひなさいましたさ  
うで新聞でおやすくない寫眞を拜見いた  
しても私は藝者ゆゑなんともいふ事はで  
きず實にくやしくございますしかし私は

ひかけた折から廊下をいたゞ、駈けて来る從者と共に、をちさん何處よう。」と呼ぶ女の聲。そしてがらりと湯殿の戸を明けたのは二人の若い藝者である。二人とも裾を引いて居るのでこの土地でなければ小田原から來たものであらう。

翰がびつくりしたやうに見詰めるのも一向平氣で、「をちさんやア、もうお上んなさいよ。ふやけてしまつてよ。」

「やかましいな貴様達は。はゝゝゝは。」と杉山はまた大笑一番。「内山君大變なところを見られた。然し人間木石にあらずさ。僕は東京ぢや決して遊ばん。遊んだり飲んだりするのは東京を出てからとかう規則をきめて居るんぢや……。」

「いや決して辯解にや及ばんですよ。いつもなら我輩決して黙つちや居らんのだが今日はいかん。」と翰はどうやら急に羨ましうな調子にもなつた。杉山は湯舟の中からぬつと手を出して、

「おいお前達もこゝへはいれ。いふ事をきかんと我輩が裸體にしてやるぞ。」

「あらア。」と仰山な聲を出して藝者は戸を開放したまゝ廊下へかけ出す。

「あはゝゝゝは。」と杉山は心から面白うに

毛むくぢやらの太腹をゆすぶつて笑ひながら、再びどぶりと滑るやうに身を沈めた。

翰は思ひ切つたやうに湯舟から立出で、「ぢや杉山君、また後程……。」

「御迷惑でなかつたらどうぞ拜顔の光榮を……。」

御迷惑はあなたの方でせう。お樂しみの最中……はゝゝゝは。」

翰はそのまゝ自分の座敷へ立戻つた。見ると蝶子は宿の襦袢を振りそなへ付けの鏡臺を引寄せて化粧をしてゐる。

「お前お湯へはいつたのか。」

「えゝ這入りました。知らない男の方がいらつしやるやうだから、わたしお隣のお湯殿へ這入りましたの。」

「さうか。よく大きな聲をして笑ふ奴さ。あれア東京の本屋だ……。」

「あなた。東京へ葉書か何か書いて下さいまし。きつと皆さんが心配していらつしやるでせうから。」

東京の家か。それなら僕よりお前の方がいい。」と翰は呼鈴を押して翰葉書を取寄せた。そして蝶子が學期試験の答案でもかくやうに机に向ふ様子をば見えて見ぬやうにぢつと眺めやるの

であつた。翰はこれまでいろ／＼道樂はして來たがまだ純潔な良家の處女に對した經驗は一度もなかつた處から、今度結婚によつて始めて

我がものとなつた蝶子が昨夜から今日へかけての一舉一動については自然深い興味を起し、日頃の粗放に似ず仔細に注意するやうになつてゐる

のであつた。蝶子の様子は結婚以前翰が内々想像した處とはちがつて、何かにつけて左程惡び

れるといふ事なく、或場合には殆ど馴々しいと云つてもいい位なのに翰は、甚意外な心持が

してゐるのである。まづ第一に蝶子は昨夜結婚の式場から親兄弟に別れ、たつた一人見も知らぬ家、見も知らぬ人の中へと連れて來られて

も別に泣出しさうな顔もせず、いざ見も知らぬ男の手に引渡されるといふ瞬間にもさして顔

へをのゝく様子もしなかつた。却てどこやら深く覺悟する處がある。寧ろ何か期待する處があるとも云ひた氣な様子さへ見えたので、翰は

果して蝶子が純潔な處女であるや否やについて幾分疑ひを挟むべき餘地がありはしないかと思

つた位である。やがて深夜に及んで翰はふと目を覺ましたまゝ、四邊を見廻した時蝶子が始めて

の家、始めての寢床の中で、いかにもぐつすり寝込んでゐる様子に、いよく、以て女といふもの

親達は着物から下駄まで買揃へてくれる。その上にも箱根へかうして遊びに出掛ける費用まで惜しまずに出す。はゝゝは、實に不思議だ、識者も奥様も女に變りはないぢやないか……とこんな途方もない事を考へ出して翰は覺えず聲を出して笑はうとした時、がらりと湯殿の戸があいた。座敷へ置去りにして來た蝶子であらうと思込んでゐるので翰は大きな身體を大の字なりに湯の中へ浮したまゝ別に振向きもせずゐると、どしりと流場へ下る音の遅しき。そして突然「や、これア……内山君か。」と云ふ太いどら聲。此方は猶更びつくりして起上ると年は四十三四、頭を坊主のやうに一厘刈にして鼻下に鬚を蓄へた如何にも頑丈な精面、翰にも負けぬ大兵肥滿の大男である。

「や、杉山君か、箱根とは珍しいぢやないですか。」

「はゝゝは。」と杉山と呼ばれた大男は突然大きな聲で笑ひ出したが、急に丁寧な言葉便になつて「あの先日は遊戯書書の原稿をありがたうございました。おかげで暑氣もわるくは無いやうです。」

「いやどうも。翻譯が思ふやうでなかつたからどうかと思つてゐたです。」

「いや結構でした。時に御結婚はまだですか。」

「昨夜しました。はゝゝは。」

「なに昨夜……それぢや新婚旅行ですな。」

「はゝゝは。」と翰は少し顔を赤くして氣まりの悪さを再び笑ひにまぎらした。

「それアお目出度い。我輩謹んで祝意を表します。」と云ひながら杉山は遅しい毛むくぢやらの身體をどぶりと湯の中へ沈めて直に大きな欠伸をしつづけた。この杉山といふのは即ち運動世界社の社長で、毎月翰はこの男からなにがしか原稿料の小遣取をしてゐるのである。杉山は以前陸軍士官學校の生徒であつたが在學中病氣になり肺炎加多兒と診斷され退校の命令を受けたので餘儀なく郷里の信州松本へ歸り其地方の新聞に關係し再度上京の後には久しい間政治運動に熱中してゐたが一向うだつが上らないので、數年前ふと思付いたまゝ學生を相手に體育運動の雜誌を發行して見た處案外の大當りに始めて家一軒を借り追々に手をひろめて雜誌の外に軍事冒險探偵等の小説類又は愛國尙武等の事を標榜する際物の出版に度々利を得て目下は本郷町に店構だけ西洋館のやうに造作をした家を持ち妻をも迎へ運動世界發行所、愛國圖書出版軍國社と云ふ大きなペンキ塗

の看板をかゝげ女房の實兄で瓦斯會社の集金人か何かしてゐたものを番頭に、その他若い男の二三人も使つて出版物の荷造や注文取りとさせるなど、先づは一廉の出版商になりおせたのである。

「我輩などは四十近くなつてからの晩婚ですが、面白くも可笑しくも何ともなかつたんだが、貴君なんぞは正に青春の盛りだから、いや實にお羨ましい。後程拜顔の榮を得たいですな。」と杉山はすこし酒氣を帯びてゐるらしく翰が今はどうやら娘さうに顔を他向けて黙つてゐるにも係らず、「新夫人はおいくつですか。」

「さア二十二か三でせう。とてもお目にかけるやうな、そんな氣のきいた女ぢやないです。」

「いや實に結構だ。年をとつちやいかん。若い中が花だ。同じ藝者を揚げるにしても、ねえ内山君、四十面になつちや人一倍金をつかつても

女の子が嬉しいぢやせんのおやからな。はゝゝは。」と杉山は獨りで面白さうに笑ふ途端喉が咽喉にからむのを音高く無遠慮に流しへ吐散す。

翰は座敷へ置去にした蝶子が今だに湯殿へ來ないのであんまり打捨つて置いてもどうかと少し氣にもなり出した處から好加減に上らうと思



宿屋にゐる中蝶子は軍國社の主人杉山を始めその招んでゐる藝者ともすぐに親意になつて一緒に湯へ這入る一緒に酒を飲む。遂に花合戦の仲間入りまでして始めて覺えたに似ず二三回の練習に忽ち上達の手際を示した。

# 十一

蝶子は生れてから今日が日まで生の母の顔を知らない。蝶子は實父の大須賀が〇〇縣の参事官をつとめてゐた折茶屋女の腹に出来た兒であるが、生れるとすぐ正妻の手に引取られ實の子と同じやうに育てられた。大須賀夫人は良人の不行跡を憤るよりもまづ世間への外聞をば非常に恐れ憚つたので戸籍さへ無論實の娘にして置いた處から蝶子は成長した後まで久しい間自分の素性を知らなかつた位である。さればこの度の結婚についても貰つた方の内山家では蝶子は先妻の第三女であるとのみ信じて疑はなかつたのも尤もの次第である。蝶子が十六の時大須賀の先夫人は病死し翌年に今の後妻が來た。その時分大須賀家では先妻の産んだ令嬢は二人とも蝶子より年上だつたのでいづれも相應な處へ縁付いてゐた後であつたし、又二人の男の子も一人は洋行中一人は一年志願

兵に出てゐたので、つまりその當時家に残つてゐたのは蝶子一人であつた處から大須賀は誰にも遠慮のいらなまい、孫か娘見たやうな若い後添を迎へた。蝶子とはいくらも年がちがはないので二人の間は兎角折合はなかつたが、幸にして大須賀はその折始めて某縣の知事に任命されたので、若い後妻を任地に伴ひ蝶子をば一人東京の本邸に留守番同様残して行つた。然しそれにも係らず後妻は良人が地方官會議や何かの折ともよく上京する時蝶子がゐてはと甚しく嫌つて一日も早く何處へなりとも片付けてしまふやうに勸めて止まなかつた。されば大須賀は兎角する中に年もやがて六十を越え内閣の變更と共にそろ／＼退隱すべき時期が近づいて來たと自ら知つて、終身月給の取れる勸選議員か富中顧問官をと内々慈の深い獵官運動を始めたが其折には、それと共にいよいよ蝶子を片付けべき口をも連急にさがさればならぬ譯となつた。獵官運動の結果は不成功であつたが然し大須賀は様式界には意外の勢力ある親任官何某伯の周旋で何某銀行の監査役と併せて舊藩主足利家の相談役になつた。もと大須賀知事は維新前から足利家の御門閥者何某の家に生れたもので、上役に取入ることの

上手なつと辯口に巧なことはまづ先代々々傳といつても差支はない。正徳の時分門前の小僧習はずして少しく實論を開きかじつた外には何一つ學問をした事もないに係らず小才と辯口とで立身出世の資をばまづ區役所の書記から振出し四十一年の後知事になりすましつかり俸給をため込んでいよく東京の本邸に隠居したのであるが、すると若い後妻と蝶子との衝突は毎日の口喧嘩から忽ち母子つかみ合の騷ぎもかねまじき勢に、大須賀はもとより據處なく養育した私生兒の事として世間普通の親心とはちがひ決して押退きはせず、話のあり次第蝶子をば内里家へ片づけてしまつた。大須賀は餘が學生の時分からあまり品行もよろしくらず卒業の後今に就職の口なくぶら／＼遊んでゐるといふ事は與信所探索をまつまでもなく人の噂でよく承知してゐるであつたが、これに反して内山家では蝶子の素性を知らう筈がないので戸籍面の通り舊知事の令嬢とのみまたとはない縁組のやうに「常にほれ込んで貰ひに來た譯である。

四日ばかり逗留して二人は内金の家へ歸つて來た。ついで二三日後東方を親戚まはりをするが、氣の合つた二人は毎日々々書となく又

は處女と賣女の差別なく、甚無聊經な太々しいものだと思えずすこし面の憎いやうな氣さへしたのであつた。

今朝になつて手水を使つた後の蝶子を見た時、翰はまた更に意外の感に打たれた。それは蝶子の顔の色が見合ひをした時とは全く別の女かと思はれるほど黒い事であつた。見合ひをした時、翰は極分した蝶子は十人並よりも遙かに色の白い女のやうに見えたのである。蝶子は無論その目を一生の晴れと念入りに白粉をつけてゐたには相違ないがそれにしても翰はまさかそれほどまでに地色を塗りつぶしてゐるものとは全く氣がつかなくかつたのである。實に藝者以上の化粧だと翰は大に驚いたのであるが然し幸にして嫌惡の情を起すまでには至らなかつた。

顔を洗つてしまつた後、翰は蝶子が舅姑や小姑それから家の女中など凡一家のものに對して、昨夜日出度いことのあつた其翌朝のこととて定めし非常に氣まを惡がるだらうと内心聊か滑稽に感じてゐたところ、此も亦意外であつた。蝶子は明晰した聲でお早うございませと此方から先に挨拶してみんなと一緒に茶の間の食卓で朝飯の箸を取つてから義姉の俊子や義

妹の照子が雜談につれて以前自分の通つてゐた女學校の話をする。やがて俊子と母とにつれられて海石翁の書室へ御辭儀に行くとわざとらしく子供々々した聲で海石翁の事をすぐに「お父様」と呼ぶのであつた。何も不思議に思ふ程の事は無いのであるが、然し親を親とも思はず我儘一杯に育つて來た翰の目には舅姑に對する蝶子の様子や言葉使がいかにもそれらしく取つて付けたものゝやうに思はれた。それと共に翰は再び女と云ふものは猫と同じやうに貫はれて來て一度飯さへ食へばすぐにその家のものになつてしまふ、妙に馴々しいものだと思はざるを得なかつた。

然し翰は花嫁に對して最初から底意地のわるい皮肉の觀察を下さうと待構へてゐた譯ではない。唯物珍しいあまりつまり嬉しあまりに考へないでもいゝ事まで考へて獨りで可笑がるのに過ぎない。さればやがて家を出て二人ぎり國府津行の汽車に乗込んで見ると今度は急に心持が變つて、翰はどうやら女學生が何かを誘惑して墮落でもするやうな浮いた氣がし出した。親がかりの氣樂な翰の身には結婚は遂に人生の大問題として取扱はれるには至らないのである。

氣をきかして宿の女中が酒肴を置いたまゝ立去つた時、翰は蝶子に始めて酒をのまして見た。蝶子は勿論これまで杯を手にした事はないので三四杯飲まれた後それでも一向顔も赤くならず心持もわるくならないのに自分ながら不思議さうな面持。

「まだ何ともないのよ。わたしお酒飲みなんだから。」

「ちむお前なんか、感心だ。飲める性なんだ。」と翰は大よこび。今朝方蝶子が色の黒きに大分罰をさました其つ失望も今はすっかり忘れてしまつて、にた／＼笑ひながら、蝶子、煙草はどうだ。稽古しろ。」

すると蝶子は持馴れぬ妙な手付で、翰が渡す巻煙草をばすべくと吸ひはじめた。四日箱根に泊つてゐた間に翰はすつかり蝶子に惚込んでしまつた。蝶子は全く翰とは似たもの夫婦ともふふべき者であつた。到底良妻賢母にはなれなさうな仕様のない女であるらしい。寝る時にも起る時にも良人の着物は愚自分の着物や帶さへ疊んだ事はなく卑さへあれば色の黒い顔へ白粉を塗りつけるばかり、一日ごろ寝てべつたまゝ小説ばかり讀まうとしてゐる。

つたつて怪しい事はない。俊子一人が勝手にやるのは兎に角間違つて居る。と翰は遠廻しに焚きつけた。

「お母さんはなぜ御自分でなさらないんでせう。」

「あれア馬鹿だからさ。愚圖で何にもわからなからさ。」

「それぢや俊子さんを信用しておまかせなすつた譯ぢやないのね。」

「信用するもしないもありやアしないさ。俊子が出しやばるから自然にいつの間にかさう成つちまつたんだ。だから蝶子。これからお前がやるやうに追々こつちへ全權を奪取つたらどうだ。今の中はどうでもいいが此れから先さうして置かないと困る事があるぞ。」

「さうね。然し今すぐにさうしようたつて、とてもあの俊子さんが駄つてやしない事よ。お母さんだつて屹度御不承知だわ。」

「だから機會を見てさうしろと云ふのさ。親父がいつまでも長生をして居た日にや、何だぜ、僕もお前も二人していつまでもあの俊子から小遣を貰つてゐなくつちや成らない。いやぢや無いか見つともなくつて。」

「ほんとやうね。だけれども毎日八百屋だの魚屋

だのお金の出入れをするのは面倒臭いわね。きつと厭になつちまふわ。」

蝶子は長年繼母といがみ合つてゐたので根性の強いことは人一倍まさつてゐるが、まさして金錢の慾を起すほどの年齢には達してゐない。これに反して俊子は年も早や三十三四、どこへも再婚する目當がないとすれば行末は家督を相續する翰の厄介になるのは知れてゐる。俊子は血を分けた翰一人の厄介になるのならば

まだしも忍ぶ處であるが翰に附随したあの色の黒い蝶子の厄介になるのはいかにも厭だ。さすれば今の中に兩親の丈夫な中に何とか相談して自分が一生一人で食べて行けるだけのものを分けて置いて貰はなければと遠い末のことまで内々心に懸けはじめたのである。それについて

は先づ自分から平素行つて見たいと思ふ處へも行かず着たいと思ふ着物も着ず間食したいと思ふものまでも自然に儉約して自分の小遣錢を貯蓄して行かねばならぬ。それなのに蝶子の方は同じ女身として翰のづばらをいゝ事に毎日毎夜勝手次第にあそびに行く。それが俊子の目には何とも云ひやうのないほど憎らしくもあり口惜しくもあるのだ。もしや妹の照子までが翰にさそはれて一緒に遊び歩くやうになりはし

まいかと餘計な事にまで氣を廻して、蝶子さんや翰さんには誘はれても一緒に外へ行かないやうにおしなさいお行儀がわるくなるからと内々意地をつけ始めた。然し嫁と小姑の間柄はさすがにまだ面と向つていがみ合ふ程には至らなかつたが、やがて或日の夕方、母の幹子姉の俊子妹の照子と翰夫婦五人が大きな一團張の食卓を圍んでいつものやうに晩飯の箸を取つた時である。蝶子のお惣菜の中に女の髪の毛が這入つてゐたのを蝶子が「お、汚い。」といつて箸で長々と挟み出した。すると翰は夕飯のお菜が今日はどれもこれも氣に入らないものばかりなので、それをいゝ事に横合から、

「僕の方にも何かはいつてゐやせんか。用心しくなくつちや、汚くつて食べられやしない。」

「ほんとやうね」

蝶子は唯何の氣もなく相槌を打つた。ところが折悪しくこの日のお惣菜は俊子が新聞の料理案内を見て自分で煮たものであつた。俊子は一時にくわつとして顔の色を變へ、「どうも悪うございました。これからもう私は客所の事はしませんから蝶子さんあなた御自分でござる方がいゝわ。其の方が私もどんなに手かすいていゝか知れませんか。」



夜となく揃つて遊びに出掛ける。蝶子は活動寫眞ならば朝から晩まで毎日でも飽きないといふ位なので、それも娘一人の夜遊びとはちがひ今は翰といふ立派な良人が同道とあれば誰を憚る譯もないと、淺草公園から市中の活動寫眞をば片端から見歩き始めたので、歸りはきまつて十二時近くなる。翰は活動寫眞にはさしたる興味を感じてゐる譯ではないが、家にぼんやりしてゐるよりか、藝者でも女中でも女でさへあれば實に何んでもよいのだ、要するに女を連れて何處と云ふ事なく散歩してゐる方がよい。それには翰の方でもいかゞはしい女とちがひ公然とした妻といふだけに何處へ連れて行かうが世間をかける心配はない。そのみならず翰は又蝶子が嫁入當座の用意としてその多量にはわからぬが、實家から大分小遣錢を貰つて來たらしい様子で、活動寫眞の木戸錢は勿論その歸りに翰がバアだのビヤホールだので飲んだり食つたりする勘定をもだまつて拂つてくれるので、翰は大よろこび蝶子をば下にも置かぬやうに甘やかすのであつた。

されば新婚夫婦の間は琴瑟天に相和した譯で兩親は何より目出度い事と喜びはするものゝ、毎日昼夜二人揃つての出歩き方があまり激しい

ので世間體は勿論家のものゝ手前もある事とそろそろ眉を顰めはじめた。出戻の姉俊子は以前から翰とは仲がよくないので、母親の困つた様子を見るときは我慢ができず、ある事無い事舌の廻るかぎり新夫婦の惡口を云ひ出した。

「翰さんの仕様がなひのは今に始つた事ぢやないけれど、あのお黒さんもお黒さんですよ。」（俊子は蝶子が色の黒い處からいつとなくお黒さんと綽名をつけたのである。）女のくせに俗煙草を吸ふんですよ。お客様のお座敷に出してある銀の箱に敷島が一ぱい入れてあつたのが、いつの間にか一本も無くなつてしまつたから、變だと思つてゐたら、お黒さんと翰さんと二人して内證でみんな吸つてしまつたんですよ。お父さんに申上げて何とかならないと今に仕様がなくなりますよ。煙草位ならいゝけれどあの調子で打捨つて置いたら何をし出すか知れませんが、私はそれが心配です。」

俊子はその外に翰夫婦が自分勝手に出入りの車屋から車呼んで無暗に乗歩くので、この分ではいつたら月末の諸勘定も今までは大變な違ひになると云添へた。俊子は出戻つてから生來働きのない母に代つて家事一切を取仕切つてゐるので是非にも父澁石に事情を打明けてみつし

り叱つて貰はうと主張する。かうなると母はさすがにあまり荒立たぬやうに唯只心配するばかり。

これと同じやうに蝶子の方でも小姑の俊子をば始めから何の譯もなく甚煙つたと思つてゐるので、翰と一緒に家の門を出ると會話はきまつて俊子の惡口から始められる。

「姉さんは實に陰險なのねえ。今日もあの、お庭で植木屋が垣根を直してゐる時、私がそばに居たら、もう好加減に雨が降りさうなもんだつて、いやに私の顔を上目でじろりと見るのよ。私張子ぢやないから雨が降らうが降るまいが行きたいところがあれば行きますよつて餘程さう言はうかと思つたのよ。」

すると翰は面白半分蝶子の肩を持つて、出戻の女だもの。意地がわるいにきまつてゐるさ。僕等二人が遊びに出るのを見るとつまり焼餅をやくんだ。ますく焼かしてやれよ。いゝ氣味だ。」

翰は母に代つて家計を取つてゐる俊子に、これまで學生の時分から度々小遣錢の無心を云掛けては勿付けられた多年の怨みがあるのである。

「僕の家の會計は俊子がやる位ならお前がや

見たくなつたのか、やがて蝶子の肩へ胸をまはさうとして不圖見れば蝶子は袂に顔を蔽うてどうやら泣いてでもゐるらしい様子。翰は驚ろ興覚め顔小鼻の大きな鼻の穴を猶更大きくして、

「おい、どうしたんだ。今夜はよつぽど嫌だな。」

蝶子はふいと顔をあげて月の光と街燈の光とにうつと翰の顔を見上げ、あなた。あなたはほんとに無神経ね。何にも世の中の不幸つていふものは知らないんだから。

翰は蝶子がこんな生意氣な事を云はうとは合ふと思ひもかけない。彼は蝶子の事をば唯藝者も及ばぬ位淫猥な代りに案外罪のない女だと、今では色の黒いのも髪が縮れてゐるのも全く氣に留めない程。専らかやうな點に於いて蝶子を愛してゐる。愛してゐるとぶよりはいゝ遊び相手にしてゐる。無理算段して藝者なんぞ買ひに行かないでもどうやら斯やら氣が濟むと思つてゐるので、

「はゝゝは。俺が世の中の不幸を知らない——はゝゝは。それぢやお前なんぞ何だ。不幸の不幸の字もわかりやアしまい。」

いかに 馬鹿にした様な調子で翰は再び鼻の

穴を空ぎまに鼻のやうな口を一層細くして大層に笑ひ出した。すると蝶子は突然翰の手を取つてひつたくるやうに自分の膝の上に引寄せ聲まですこし顫せながら、あなたは何にも知りやアしないのよ。わたし程世の中に不幸な女はなんでしょう。あなたと握つた手に一層力をこめて睨むやうに眼を据ゑ「あなた。わたしの秘密に同情して下さい、ね、あなた。わたしはどうしてもあなたに打明けずにはゐられないんですから。」

云終らぬ中に蝶子は既にほろ／＼涙をこぼす。翰は呆れて口もきけず茫然蝶子の顔を見てゐたが「わたしの秘密」と言つた言葉から不圖翰は結婚の當夜にいろ／＼と感じた不審の事、純粋の處女にしてはあまりに落着いてゐた事なんぞ其れや此れやと思ひ出して、「秘密」といふのはてつきり結婚以前に男があつたと云ふのにちがひないと浮蕩な翰だけに一途にさうと早合點。

「お前の秘密：聞かないだつて大抵わかつて居る……いゝや仕方がない。もう歸らう。」

「あなたは圓つきり私にけ同情がないんだわね。いゝわよ。それならそれで……」

一馬鹿 同情があるから止せつていふんだ。お

いもう歸らう。

翰はさすがに腹が立つたと見えてふいと腰掛から立上り其のまゝ翠平神社の方に向いた公園の出口近くまでたゞ／＼歩いて来て何の氣もなく振返ると後からついてくるものとのみ思つてゐた蝶子は意地悪くすねて見せたものか、其の後は見えない。「おい早く来ないか、置いて行くぞ。」と駄々ツツのやうに怒鳴りながら翰はしづし其の場に佇立んだが曲つた小徑は植込に遮られて見えづ更に人のあるいて来る様子もない。

「仕度しないかだ。あんまり馬鹿にしやがるとほんとに怒るぞ。ぶつ／＼言ひながら翰はたゞ／＼立小便をしながら大欠伸。やがて本のベンチまで歩み戻つて見るとハンケチが落ちてゐるばかりで其の持主はいつと間にどこへ行つたのやら。幹に始めてこれア冗談ぢやないと俄にきよ／＼うろ／＼公園の植込の間々をのぞき歩いた末、雷車通へ出ると、幸月の光で溜池へ入道はいつもより明るく日に見渡される。

やがてそれらしい人影を見付けて翰は腹滿した身體をやつと思せき斷付ると、人影はそれと知つてか急に三年町の樹の繁つた暗い横道へ曲らうと小橋を渡りかけた。女とは思へぬ程足が早い。翰はやつと追付き後から、

きつぱりと云切つたが蝶子はもとより此の位置の事を言はれたとて驚く女でない。十六の時から多年繼母といがみ合つて來た根性曲り、俊子の方に向き直つて、

「あら義姉さん、をかしいぢやありませんか。私は何もあなたの事を冤や角いつた覚えはありませんよ。いやですよ私は臺所の事なんか、おさんどんぢやありません。」

「おさんどんで無いものは餘計な事をするな。

倅が迷惑だ。食へないものを拵へるからな」と翰はわざと喧嘩を大きくしてやらうと又もや側から惡まれ口を叩く。俊子は口惜しさに涙さへ浮べながら聲を顫はして、

「翰さんあなたに言つてるんぢやありません。」  
「さうか少敬々々。然し兎に角今日のおかずは甚だまづい。」

「兄さんそんな贅澤言ふもんぢやなくつてよ。

これでも姉さんと私が一生懸命になつてこしらへたのよ。」と照子が見かねて仲裁するらしく云添へた。

「さうか、それぢや我慢して食はう。然し頭髪は全く恐れるからな。」

「翰やおよしなさい。」と母はもう嘆願するやうな調子である。それなり一同黙つて夕飯を

すましたが、すると蝶子と翰はわざと俊子の手前へびらに洋服を着換へて散歩に出かけた。

其の晩二人は日比谷公園に昨日から菊が植付けられたと聞いて一廻り見歩いた後菜橋の活動寫眞館へ這入つた。活動寫眞は西洋のものでもと女役者の腹に宿つた私生兒が或慈善家の手に養育され生長の後或温泉場へゆくりなく零落した其の實母にめぐり逢ふといふ仕組である。

蝶子は夕方俊子と言争ひをしてから精神が餘程興奮してゐる矢先この活動寫眞に甚しく感動したと見え、外へ出ると思ひながら突然翰の方へ寄掛つて、

「かはいさうだわね。あのマイリは、ほんとにかはいさうだわね。」

「何だ活動寫眞のことか。」と翰は暫くしてから漸くに思ひ付いたらしい様子である。

「わたしすつかり身につまされちまつたのよ。

と蝶子は歩きながらもぎつと仰向いて、「あ、ほんとに可哀さうだ。」

翰は何のことだか一向譯が分らないので不思議さうに蝶子の顔を見遣りながら、「すぐ電車に乗らうか。まだ早いだらう。銀座へ廻つて見ようか。」

その中に琴平神社前の公園近くまで來た。空

には月が皎々と輝き道幅の廣い淋しい往來には自動車馳交ふばかりで人通りは少い。蝶子はいきなり、「あ、私ほど世の中に不幸なものはいわねえ。」とすた／＼と一人で公園の方へ行きかけた。前はびつくりして、

「おい蝶子どこへ行くだ。」

あなた私の事かはいさうだと思はなくつて。」

翰はます／＼譯が分らない。然し允諾を云つてからかふつもりであらうと近くにあるベンチに腰を卸しながら、「僕はどうか、かはいさうには見えないか。」

蝶子は何とも答へず唯月の光にちつと當つてを見詰めながら同じくベンチに腰をかけた。すると向側の一際小暗くなつた木陰から書生風の男と庇髪に結つた女とが二人の語聲にさも驚いたらしく急いで琴平神社の方へ出て行つた。

「おい蝶子、密會だぜ。月のいい晩におやすくない。」と翰は蝶子の袖を引いたが蝶子は別に見向かうともしなかつた。

「いや乃公も随分馬鹿なまねをしたよ。」翰は中六番町にゐた時分九段の公園や三番町の土手なんぞへ西洋料理屋の女をつれ出した事なぞを思出すと共に、急に其時分の戯れを繰返して



いので、「一體どういふ譯です。」

翰は昨夜の始末を語り出した。蝶子は家へ歸つて寢床についてから良人の翰をゆり起しその身の私生兒であるといふ素性を打明け、世の中に私ほど不仕合なものはない。實家はあつても無いと同様天にも地にも頼りにするのは全く良人一人だからと徹宵べそく泣きくどいては時々狂氣のやうに翰の身を力一ぱいに抱締める始末。

「君、實によわつちまつたよ。何だか氣味がわるくてね。あれア氣ちがひに違ひない。」

「今まで大層お氣にいつてゐるやうでしたがな。」と鵜崎はいかにも弱つたといふやうに腕を組み、「女といふものは氣が小さいもんですから、何に限らず時々妙な事をいふもんです。」  
「氣ちがひでないにした處が、甚けしからんぢやないか。素性の知れない女に出来た娘を堂々と嫁入させるなんて、人を馬鹿にしてゐる。どうしたもんだらう。僕はまだ親にも誰にも言やせん。それよりか先づ君と相談して決心するつもりだ。」

「それが事實だとすると容易ならん事ですな。然しかういふ事は沈重にお考へにならんといいません。」と言ふ中に鵜崎はふといつぞや蝶子の

事について妻のお慶が〇〇寺の住職から聞いたといふ話を思ひ出したが然しこの場合そんな事を話してはよくないと一人胸の中に秘してゐた。

「大須賀の親命といふ奴は怪しからん奴だ。ツ新聞で叩いてやらうかな。」

「坊ちやんまア二三日お待ちなさい。わたしも今すぐにはどうしていいものか一寸考がつきませんからな。兎に角坊ちやんのお顔が立てばいいのでせう。かういふ事はあんまり荒立てちやいけません。」

「ぢや二三日たつたらまた來よう。それまでによく考へて置いてくれたまへ。」

そのまゝ翰は鵜崎の家を出た。然し妙に氣がいら立つてゐるのでこといふ當もなく電車道をば古川橋のたもとまで歩いて行つた。すると乗換の電車待つ人の四五人立つてゐる中に、ふと紫縮緬の大分日に焼けた紋付を被つた藝者が一人、淡紅色の日傘に顔を見えぬが、白粉の鼠色になつた頸筋に烏川の髻を亂した様子や、空氣草履をはいた素足の裾前をば流れる風に顔をす様子。翰は立止つて物珍しさうにじろじろ見てゐたが、ふと結婚して以來蝶子をつけずに一人外へ出たのは全く今日が始めてだと氣

がついて見ると、何の理由もなくこの隙にいで遊んで見たくなつた。古川橋を渡ればすぐ三ノ橋、向側に麻布の藝者家の開けた事はとうから知つてゐるので、路傍に立つてゐる待合小料理屋の灯を日當に翰はいそいで疾い横町へ曲つた。

然し小春日和の朝はまだやつと十時頃なので、縦横十文字になつた同じやうな横町はどこもしんとして三味線の音もきこえず女の姿も見えず勝手口で下女の洗濯してゐるのと、芥箱をあさる野良犬と御用聞の小僧や前夜の血小鉢を集めて歩く男の往來。普通の町のさまと變りはない。翰は藝者家と覺しい家の格子戸をのぞき「同じ横町を二三通ぐる／＼と歩き廻る中、先刻向角で會つた西洋料理屋の出前持に又ばつたりと出會つて妙に顔のをぞき込まれ急に氣まりがわるくなつたまゝ、行きあたりばつたり曲角の小門にハツ手の鉢物を出した家へ飛込んだ。」  
近頃かういふ土地にはどこにも見られる安普請の二階建である。初冬の朝日を一面にうけたため掲げ子をはめた障子の紙の眞黒に煤けたのが殊更日に立つ八疊の表座敷。今朝はまだ掃除もせずしめきつてあつたと見え、建付のわるい

「こら、おい。冗談もいゝ加減にしろ、どこへ行くんだ。」

蝶子は返事もせず振向きもせずどしどし自分の好きな方へ行かうとする。翰はむずと蝶子の手を捕へ、「不埒なやつだ。貴様は公然姦通するつもりだな。」と一喝して返事の如何によつては其の場に引据ゑ踏みめしめてやらうと早くも拳を握つて睨みつけたが、すると蝶子は更に恐れる様子もないのみか、ふふふと何とも云へぬ妙な氣味の悪い笑ひを漏しげくと翰の顔を見返した。髪は崩れて色の黒い顔は月の光に青味を帯びて土色に變つてゐる。これア氣ちがひだと翰は急におそろしくなつて思はず二三歩たじろぎ、「おい蝶子どうしたんだ。さ歸らう。人が來ると見つともない。さ歸らうよ。」

向の方から二三人の來る様子。翰はこはごは寄添つて手を把り無理に連出すと蝶子ははしく泣き始めた代り今は爭ふ力も歩く力も共果てたらしく稍ともすれば倒れさうにも思はれるので翰はよんどころ無く抱くやうにして扶けながらやつと電車の停留場まで歩いた。

## 十二

文部省公設展覽會開始の期日も二三日中の

こととなつた。都下の新聞紙は既に半月ほど前から籤つて諸家の出品又はそれについての消息を世に紹介してゐる。審査委員内山海石の出品は某富貴からの依頼とやら。岸上の松と池中の鯉魚をば極くあり來りの圖取りながら唯一息に勢込んで墨色淋漓たところを見せた金屏風一雙である。寫眞版になつて新聞に出ると日頃海石の傲慢な態度を憎んでゐる反對派の畫工はいかににもわざとらしく磊落な筆致を見せようとした街氣満々たる不真面目極まるものだとも早くも攻撃の矢を向ける。書畫屋の連中は善惡何でもかまはぬこの時期に乗じて所藏の品物を一箱なりとも値賣をしようと思つて氣勢を添へる。兎に角に展覽會の噂は國技館の菊人形と共に例年の如く市中の人氣を引立たせるのであつた。

鶴崎巨石は既に幾年となく展覽會の出品には斷念してゐるが然しこの時節になると自然と世間の人氣につられるせむか日頃とはちがつて、云はば朝日をさまして顔を洗つた時のやうな持になる。自分ももう一度何かいて見たいやうな持になる。實際この時節には毎年さまつて幸水堂雲林堂なんぞといふ骨董屋から新に急ぎの仕事依頼される。又素人から海石氣が畫

幅の鑑定をたのまれたりするのも矢張この時節が一番多い。

鶴崎は今朝方朝飯をすますが否や二階の押入や縁側の棚なんぞに紙屑屋も同様無暗と押込んである粉本の写しやら何時描いたとも知れぬ下圖の古い物抔手當次第に取出して居る中ふと幾年前にたつた一度——恐らくは一生涯にたつた一度——公設展覽會へ當選したかの「武藏野」の下圖を見出し俄に感無量の面持。胸を批いて眺め入つた。其の時梯子段の下から女房お慶の聲。

「あなたお屋敷の坊ちゃんが見えました。」

「やア今度の家は充分廣いな。何だ。勉強か。」

翰は案内を待たずどしどし二階へ上つて來た。そしてお慶が茶をすゝめた後下へ降りて行くといふさま「鶴崎君、實にこまつた事が出來た。相談に來たんだ。」

鶴崎はおや／＼又かと云はぬばかりの顔付。早くもそれと見た翰は急に嚴然とした調子になり、「一應君に相談して然る後僕は其を離別しようかと思つてゐる。」

鶴崎は翰がまた例の手段で何か虚言をつくのであらうと竊に疑ひながらだまつても居られ

れにはちと閉口したらし、先刻女中を地きすくめようとした勇氣もどこへやら。チャブ臺を楯にして隠れてゐると、藝者の方では御酒も何にもないし、つけた座敷のさまにすぐそれと察したものか、づか／＼と遠慮もなく寄添つて来て手も取りかねまじき勢。翰は逃ぐるがやうに座を立つて下へ降りた、すると久刻の女中が便所の開戸の前で、

「あなた。もういゝのよ。お支度はできてます。」と手廻しの早いのを誇耀の調子。

「まあ待つてくれ。あれアいかん。」

「あら、どうして。」

「どうしてつてお前、あれア少しこまるよ。」

「お氣にめきさないの、まア、そんな擇りごのみなさるもんぢや無いことよ。物はためしよ。あな、あの妓、湘崎で魁してゐたんですとさ。評判なのよ。此の土地ぢや。」

「誰かもう一人呼べ。と翰は命令したが、昨場では藝者の前定に愛想をつかしたのか、何の彼のと云つて呼ぶ様子もない。翰は已むを得ず案内されるまゝ、別間へはいつたが、然し十分たつかたゝぬ中翰は何やら非常に狼狽した風で再び便所へかけ込み、奥氣に取られた女中を後に、朔定は前拂にしてあるのを丁度幸ひ逃

げるが如く戸外へ飛出したのである。

電車通へ出て後を振り返り誰もついて来るといゝないのを見て、初めて稍安心したやうにほと息をつき、暫くぼんやり其の場に立ちすくんでゐたが何やら急にまた思ひついた事でもあるらしく、雷車に飛乗つて、九段上、雷間を切つてくれ。と車掌に切符をきかせた、

翰は最初白山へ廻らうかと思つたが不圖また雲林堂の店主の出したゐる三番町の待合愉快の事を思出してその方へ駈けつけたのである。がらりと椅子戸をあけた時丁度十二時の午砲が鳴りひびいた。

「あらまアお久しぶりね。どうなすつたの。と出迎へたのは主婦のお明である。寝亂れた丸髷の髪をぐいと櫛でかきあげ、大馬まがひの銘仙に浴衣の扉着。かけてゐた襷をはづしながら、「うまい風でせう愛想がつきるわね。と半帯のだらしなく解けかゝるのを後手におさへながら二階へ案内した。

いづこも同じ小符合ながら書畫屋の後楯があるだけに床の間には一寸名の知れた當世の畫家何某の筆描笛が瀧口入道の麻室を訪ふ圖を掛けその下には博覧會などでよく見る銅製の岩に鶴のたまつてゐる置物が据ゑてあつて髯もど

やら近頃に取り替へたらしいので、すゝけた障子に青蛇の翅を鳴してゐた麻布の待合に比すれば遙々居心地のよい譯である。翰はお明が床の間の隅から持出す脇息にいきなり腰をかけ椅子もまだ越つたまゝで、

「どうだ。湘崎は時たまやつて来るかね。」

「いゝえ、あれつきりお見えになりません。お引越しになつたんですつてね。」

「おきの中へ引越した。實は乃公も今日始めて行つて見たんだ。」

「あら、そんなら御一所に誘つていらつしやれはいゝのに。」

「こゝへ来るつもりなら誘つたんだがね。……いやひどい目に遇つた。湘崎の家を出てからふいと遊ぶ氣になつて麻布の行合に上つたのよ。顔に腫物の出来てゐる藝者が來たぢやないか。無理にあちらへつてやアがある。あちらへ行つてからまたびつくりした。ひどい藝者があるもんだ。實に危険だよ。」

「ほゝゝゝ。ほ。ぢやアお口直しに誰を呼びませう。さう／＼あのいつか白山からお呼びになつた藝者衆——もうとうに御存じでせう。」  
「君勇の事か、それがどうした。」  
「一あら知らばつくていらつしやると。後で何



襖を明けるとむつとした温氣と共に壁へしみ込んだ酒や、鷹の匂が烈しく人の鼻をつく。馬にたかる大きな青蛇が二匹、礫のやうに障子の紙へぶつかつてゐる。垢じみた茶格のお衣に申譯ばかりの半帯だらしもなく、襟掛けのまゝなる二十四五の女中茶を待運んで來て坐るが否やぶつきら俤に、

「疾者はだアレ、お馴染さんは。」

「お馴染なんかない。」

「ぢやあなた始めてでいらつしやるの。」と女中は手をつき止めて俄にぢつと翰の様子を打眺めた。翰は仕立直した久留米緋の袴に同じ羽織を重ね毛織の紐をだらりと下げ、銘仙の兵児帯一足袋もはいてゐない。翰は一時野球や柔道の選手になつた位なのでいくら道楽にしても今だに細く着物をひけらかす氣はない。柔かい絹物に對しては翰はその縮柄も色合も何も分らないので唯何となしにでれ／＼したやうで服な氣がする處から、紳士風に立派に見せたいと思ふ時には背廣の洋服を着てステッキを振廻し來卷をふかすのである。

「あなた慶大へいらつしやるの。」と翰の顔を見てゐた女中は突然思ひ出したやうに質問した。「學校調か。どこでもいいぢやないか。それよ

りか早く藥をよべ。」

「そんなにおいそぎなの。」

貴様がいふ事をきくや、疾者はいらん、と翰は寝臂をのばして女中を突きすくめようとした。

「あら、あなた。はゝゝゝ、はゝゝゝと笑ひながら早くも身をすり退けて、あゝゝゝ、あゝゝゝ、誠にすみませんけれど、あの……此の土地の規則な

んでございます……」

翰は規定の前拂をしろといふ事は百も承知してゐながらわざと、なに規則だ。遊ぶのに規則があるのか。」

「お馴染さまの外は御規定を……あのいかほどでも……規則なんでございますよ。」

「さう規則々々ツていふな。一體いくら出しやいゝんだ。」

「いかほどでも……ほんとにすみません……いかにいふでもぢや分らんぢやないか。いくらだいい體裁者は。一味紙も何にもひかなくつていゝんだ。酒も何もいらん。三十分でいゝ、いそぐからな。參閱ありやいゝだらう。」

「あら、あなた。それぢや駄目よ。」

「駄目な事があるものか。御視儀が參閱それに五拾錢増してやりやアいゝんだらう。」

「あら、平でも貳圓とこゝは。はゞかりさまで

すが、女中は稍憤懣の氣を漏らした。

貴様。始めてだと思つて馬鹿にしちやいかんぞ。武圓なら貳圓でもいい、席料參圓に後は五

本だ。」と翰は袂から臺口をつかみ出して參圓札二枚に五拾錢銀貨を三ツチャア臺の上に載せ、

「さア早くよべ。瘦せた奴はいかんぞ。」

女中は目敏く翰の臺口にはまだ確に二三枚はいつてゐると見て取つたらしく「何もかも御存じのくせに、ほんとに人がわるいよ。」とチャア臺の上の錢を渡すかみにして立上つた。

「あゝゝゝ。と笑つたついでに翰はそのまゝ仰向きに身を伏しチャア臺の上に大きな兩足をのせ、片手につかんだお通しの豆をば一粒々々

口の中へ入れる。建付の悪い襟がやがてびりびりと引き明けられる音がして案外早く疾者が來た。翰はがばと匆起き冷えきつた茶を一口がぶ

りと呑みながらその顔を見ると年はもう二十四五にもならう。山出しの下女を少しどうかしたやうな平べつたい顔の油ぎつた小鼻の側と笑ひ

掛上つたおでこの生鬚とに地ばれのした大きな吹出物がある。身體は見世物の大女に出して、

いゝほどがつしりと肥つてゐるが眼の縁氣味わるく黒ずみ、人を食ひさうな大きな口の前齒四

五本に金を入れた様子。いかほど亂暴な翰もこ

てくるから待つて、頂戴よ。箆しちやいやよ。わたしおかみさんにちやアんと然ういつて置くからいいわ。」

丁度好い鹽梅におかみが御鉢子を持つて上つて来た。

### 十三

道が遠いのでその晩翰が歸宅したのは夜も一時過であつた。夜のおそいのは今に始まつた事ではないので家で裏門のくぐりを明けたまゝにして女中も奥も皆疲てしまふのを、結句翰の方でも氣が痛まなくてよいとしてゐる。然しそれは結婚しない時分のことで、蝶子が來てからはまだ一度もこんなに晩くなつた事はない。翰は裏門をくぐつて自分で掛金を掛けたが、どうやら今までに覺えた事のない程我が家の敷居の高きを覺えた。おのづから足音を忍ばせてそつと内玄關の格子戸を明けかけると、内からは早くもそれと知つたらしくバツと電燈に灯がついたかを見ると、障子の開閉あら／＼しくいきなり上へ立現はれたのは妻の蝶子である。流石の翰も面喰つて何とも云ひ得ず土間の上に突立つた。

「あなた。まあ何處へ行つたのよ。早朝からこ

んなにおそく……。」と蝶子は眼をつるし上げ腦天から黃色い聲を絞り出す。翰は何か云はうとした途端に咽喉許に込上げる大きな嚔に、酒臭い息を吹いた。

「あら、あなたのお酒に酔つてゐるのね。」

「いゝぢやないか怒らない。」と翰は冗談にまぎらすつもりか、せうら笑ひをしながら蝶子の頬邊を軽く指先で突いて再び麥酒のおくび。すると蝶子は物を言はず唐突に翰の身體にしがみついた。不意を喰つて翰はよろめきながら危く踏み止り、「何をやるんだ。あいた／＼喰ひつく奴があるか。」振りほどかうとすれば益々しがみつくので、翰は止むを得ず女の片手をむづと掴んで捻上げ向へ突退けると、以前柔道は二段までとつた腕力。あり餘つて蝶子はどしんと後の障子へぶつかつて諸共に倒れる物音、「あれ——。」と泣き出す叫聲。夜半家中總立となつた。

蝶子は何事によらず一時くわつとすると忽ち前後の辨へなく半狂亂になるがその時が過ぎると後はけろりとして、自分ながらどうしてそんな馬鹿な騒ぎをしたんだらうと思ひに思ふほどである。されば翌日の朝は昨夜のつかれでいつもより却つて喰ひ起きた。蝶子はまだ嫁

入りせず實家に居た頃には二度目の繼母と十日目に一遍位はきまつて口喧嘩の果半狂亂の騒ぎを押始めるのであつた。さうすると流石に女中の手前を憐れついても相手の繼母の方が負けて退くので、此方は半分調子に乗つてます／＼狂り狂つて困らせてやる。それがいつとはなく習慣になつて自分では別にやる氣もなく、何か事あればすぐに荒れ出すやうになつてゐた。

あくる朝蝶子は自分だけでは最早ヤケロリと何事も忘れたやうな氣になつてゐたが、實家とはちがつて四邊はなか／＼さうは行かない。氣の弱い母親の蝶子は蝶子の睡れぼつたい眼とドス黒い土のやうな寢起の顔色を一す見たばかりで、妹の照子と共に矢張り前後と同じく途方に暮れた顔つきで、成りたけ側に寄付かないやうにしてゐる。小間使も仲働も御飯焚も可笑しいほどびく／＼してゐる。意地のわるい姉の俊子も同じく怖がつてゐるらしい様子であるが、然し又何處か卑しむやうな、或は怪しからぬ事だと憤るやうな妙な眼付でそつと見て見ぬやうに蝶子の様子を遠くから注意する。主人の流石は昨夜の物音をば盜賊と思ひたがへて周章を現危く二階の梯子段を踏みはづさうとした位なので、これは騒ぎの中での大騒ぎ。畢

かお奮なさいまし。」

「何だかさつぱり譯が分らん。」

「ぢや、ほんとに御存じぢやないのね。君ぢや

ん此の土地で稼いでます。」

「さうか、そいつは面白い。と翰は手を拍つは  
ずみに力を入れたので腰をかけた脇息はみりみ  
りとつぶれる。驚く翰は中心を失つて後へど  
つさり紫檀のチャブ臺の角でいやとぶっ程頭を  
をぶつた。

「あいたツ。」

「どうかなさりやアしませんか。冷水で手拭を  
絞つて参りませう。」

「なアに。そんなに騒がないでもいゝよ。それ  
よりかお酒だ。」

「はい。かしこまりました。」とおかみは踏潰さ  
れた脇息を情なさうに抱へて下に降りかけなが  
ら、「早く掛けてやりませうね。君ちゃん、どん  
なに嬉しいるか知れませんよ。」

君は三十分ほどたつと衣服は端折つたまゝ  
髪もハイカラの庇髪に今日は「一層女優か女ボ  
ーイらしく巻」をくはへたまゝ平氣で座敷の  
襖を明けた。翰は襖の明く音と共に振り返るや否  
や「さア一杯。」と素的な景氣。野球のボールで  
も投げるやうな勢で杯を持った片手を君勇

の方に振り伸ばした。翰は結婚の事をば何か言  
はれやしないかと内心びく／＼してゐたので、  
それをまぎらさうと虚勢を張つて見せたのであ  
る。

ところが君勇は唯にや／＼笑ひながらチャブ  
臺の前に坐つて、「どなたかと思つたわ。お珍ら  
しいのね。私大變にふとつたでせう。苦しくつ  
て仕様がないうのよ。」と衣服の着心地でも悪いの  
か顔に襟の合せ目を氣にしたがら身をねぢつて  
ゐる。

翰は少しく拍子抜けのした體。力一はいに  
差付けた。杯を下に置いて、じろ／＼顔を見な  
がら、「いつ此方へ来たんだ。ちつとも知らなか  
つた。」

「移替の時分だつたわ。もう一月ばかりになる  
わ。随分お見かぎりだつたわねえ。」と今度髪は  
ないぢり始めたが急に思ひ出したやうに、「あゝ  
内山さん今日は何かおごつて頂戴よ。私の方  
からもお祝物するわ。いゝもの。」君勇は突然  
翰の方に寄添つて何やら其耳に囁いた。

馬鹿ッ。」

「ほゝゝゝほ。」ときも可笑しさうに君勇は暫く  
の間一人で笑つてゐたが又べつたり摺寄つて、  
「内山さん。ゆつくりしていらいしやいな。ね。」

いゝでせう。わたし今日これからお約束がある  
のよ。一時に魚久さんへ行くのよ。おかみさん  
と御飯でも上つて待つてゝ頂戴よ。私鳥渡電  
話をかけて来るわ。ね、ね、ね、ね。」と云ひな  
がら君勇は翰が俄に不興な顔を出すのも構  
はず、つと座を立つた。

君勇は始めて白山へ出た折翰が學士になつた  
ら奥さんにしてやるとの話を心から眞に受け  
た譯でもないがさう云はれて見れば悪い氣のす  
る筈はないので翰のぶふがまゝ、その時分には二  
三度參語をかこつけに内々で逢引した事もあつ  
た。然し間もなく商賣の道がわかるに従ひ大  
婦約束なんぞはつまりたゞで逢引しようといふ  
男のずるい手だと知つて大に警戒はしたものゝ  
其後も引つゞき呼んでくれゝばお客にはちがひ  
ない。商賣してゐる中は一入でも馴染をなくす  
のは損だと先頃翰が結婚の折怨みかましい手紙  
を出したのも全く商賣氣からなので、それから  
二月近くもたつた今日となつては手紙を出した  
事もすつかり忘れてゐた位であつた。

取残された翰は一人手酌で呑んでゐる處へ  
君勇はのそ／＼立戻つて来て、「あらお酌する  
わよ。わたし御催促が来るまで此處にゐるわ。  
怒つてるの。あなた。無理だわよ。ぢきに貰つ



る。鶴崎は厄介な事だと思つたが仕様がな  
女中を雇つてから近處の自動電話を口付けて、  
先づ第一は白山の待合美登里といふ名前を電話  
帳で繰つて見たが掲載されてゐないので五百  
番へ開合はした後やつとの事で掛けて見るとそ  
の後には更にお出でがないとの返事。まんざら虚  
言をついて隠してゐるのでもなさうなので、  
その次は神田の軍國社へ掛けて見ると、今日午  
過にお出でになつたが其れから先の事は分らな  
いと云ふ。扱てはつてきり三番町の待合愉快  
にちがひない。鶴崎は三度目の料金を用意しよ  
うと蓋口をさぐると五錢の白銅はもう一個もな  
い。

自動電話の箱を出て煙草屋を見付けて立寄る  
と、其の隣のビヤホールで電話の鈴の鳴る音が  
してゐるのを聞付け、鶴崎は同じ五錢拂ふもの  
ならと持前のケチな考から、ペンキ塗の硝子  
戸を明けて内に入りビール一杯を命じて咽喉を  
潤した後電話を借りた。「もしく、私は鶴崎で  
すが、内山さんがおゐでぢやないですか——何  
だと——私は鶴崎だよ。おかみさんに一寸電  
話口へ出てもらはう。」

すると直様おかみの聲。「あら鶴崎さん。さつ  
きからお待兼ねのよ。何處にいらつしやるの。

自動車を止しませうか。」と云ふ調子に鶴崎はも  
う二の句がつげなくなつた。  
「あなた花ちゃんも来てゐますよ。今電話口へ  
呼びますから。」

鶴崎はますく、狼狽して兎に角電話を切つ  
た。お猿のやうに頬紅を濃くつけたビヤホール  
の女中が二三人電話の様子からいづれも鶴崎の  
顔を見て何か冷笑してやりたさうに笑つてゐ  
る。鶴崎は初心らしくも顔を赤くして逃げだし  
た。兎に角この儘打掛けて置くわけに行きま  
い。翰の居處がそれと知れたからには無理にも  
連れて歸るやうにやれるだけの事はやつて見な  
ければなるまい。鶴崎は三番町はまことに困  
つた處だとは思ひながら、仕方なしに遠路  
を再三電車の乗換をして、漸く九段の坂上に着  
いた。

堀の向兵衛から頻に喇叭の音が聞える。そ  
れを聞くと鶴崎は突然何處か遠い旅先から久振  
りで自分の家へ歸つて来たやうな妙な心持がし  
た。かの喇叭の音はそも、最初中六番町なる  
岳陽畫塾の食客になつた時から、其の後女房  
を貰ひ子に設けた此の年月——正しく彼が半生  
の間朝な夕な聞くとともに聞馴れて深く耳の  
底に刻みつけられた響である。此の響と共に、

九段坂の燈明臺、遠く駿河臺を見晴す眺望、  
靖國神社の鳥居、大村の銅像、あたり一帯の街  
の様子は東京市中にまだ電車が敷設せられぬ時  
分から、毎日々々行きにも歸りにも見馴れ見馴  
れた景色である。

この秋芝のけづれへ突然引越してから今日ま  
で一度も九段の坂上に來た事がなかつたと思ふ  
と、鶴崎は通り過ぎる長通の商店人家のさ  
まにも自然と深い興味を催すのであつた。別  
に口をきいた事はないがいつと店番をしてゐる  
女房や番頭の顔には大分見覺えたものがある。  
又突然見馴れぬ新しい店を見つと譯もなくその  
店以前には何屋であつたか知らず餘計な事に  
氣をとられ石につまづき路傍の柵にぶつからう  
とした。最初の横町の曲角には魚久といふ料  
理屋、近頃新しく建直した二階には大分お客  
があるらしい。次の横町は昔から表通りより  
もその街幅は廣い位、その片側なる萬源樓には  
以前岳陽畫塾の新年會が催されて海老先生も  
二度出席された事があつた。その時分には  
まだ文政といふものはなかつた。萬源はつづれ  
て今は清水と云ふ料理屋が後をつぎ、少し見付  
きを替へた板敷の外には胡變らず自動電話があ  
る。表通りの角の雜貨店は鶴崎が一家を構へて

竟それも此れも皆翰の品行よろしからぬに原因するのとあつて、翰は今朝早く二階なる父の書室に呼びつけられて一時間ばかり散々にお目玉を頂戴した。すると翰の方では蝶子があんな大騒ぎさへしなければ何も彼も知れずにすむのを賀に仕様のない女だと親に叱られた口惜しさいま／＼しさを蝶子の罪に歸してしまふので、二人は互に口もきかず、兩方できり／＼おこつてゐた。次の日その又次の日になつても二人はまだ口をきかない。恐ろしい強情な女だと翰のみならず家中皆来れてしまつたが、然し誰もこはがつて當らず觸らず傍觀してゐるばかりである。

こんな騒ぎのあつたとは少しも知らぬ鶴崎は石はその日例の如く箇のへつた鼻緒のゆるんだ厚木齒の日和下駄に門内の砂利を踏みしめながら勝手口から上つて来た。海石家は丁度午過ぎでから所用で外出した後だつたので鶴崎は家の間をふだんの居間にしてゐる俊子と母の幹子の處へ顔を出すと、話はいふまでもなく蝶子のことばかりである。二三日前の訪問を受けてから鶴崎はそのまゝにして置けないので女房のお處がはなしから〇〇寺の住職に面會して内々大須賀家の様子をも聞いて見たので、今

は眞實心配さうに、全くそれは困りましたな。いづれ先生の御意見もよく伺つて見ませうが、又私も折を見て何とかうまく伺直りをなさるやうに、一ツお話して見ませう。翰さんは御部屋にお居でするか。

「二三日珍しく家にゐますよ。何しろ大變に叱られたんですもの。」

「さうですか。」と鶴崎は翰のゐる部屋の方へと座を立つたが稍暫くすると何やら落ちつかぬ顔付をしてこそ／＼茶の間に立戻つて来て、聲をひそめ、「お居でぢや無いやうです。」

「あら。それぢやお父様がお出掛けになつたもんだから、いつの間にか復出て行つたのよ。ねえ母様」と俊子は眼を見張つた。母親は肩を擧めて、

「蝶子は何をしてゐます。」

「お休みになつていらつしやる様です。あんまりお静ですからそつとお障子を明けて見ました。坊ちゃんはお見えになりません。若い奥様はお休みになつていらつしやる様ですから其儘そうツと出て参りました。少し静にしておやる方がいゝでせう。」

そりア然うだけれど

又翰が此の間のや

うに喰くなつて歸つて来るとほんとに困るからね。お庭か雪隠にでも入つてゐるんぢやないだらうか。」

「お庭なんぞに居る氣遣はありませんよ。母様。そんな趣味なんぞ有りません。」と俊子は飽くまで卑しむ調子。

「ほんとに困つたものだ。鶴崎さん、どこへ行つたのか當りはないかい。」と母の幹子はそつと溜息までして鶴崎の顔を眺め、「嫁が出来たら少しはおとなしくなるだらうと思つたら、ほんとに困りましたねえ。」

「其の中きつとお歸りになるでせう。坊ちゃんだつて皆さんのお歸りになる位の事は知つてお居でせうから。若し夜分にでもなつてまだお歸りにならんやうでしたら、私が心當りを捜して見ませう。な、今日はきつと夕方までにはお歸りになるでせう。」

鶴崎は母親の心配する様子の氣の毒さに口から出まかせの氣やすめを言つて内山家を辭して歸つた。やがて夕飯を済ましてから鶴崎は子供をつれて清正公様の縁日へ行かうと、居の門を出ようとした時、仲働のお仲が迎ひに来るのに出會つた。翰が今だに歸らないから心當りをさゝ合してくれといふ大奥様からのお使であ

そろ焦げつき始めた。當は鬼のやうな真赤な顔をして牛飲馬食にも飽きたといふ風箸も杯も投捨てたまゝ唯口のはたを舌なめずりしながらとりとした眼で君男の顔をじろく／＼見てゐるばかりである。

「え、お二階のお客様、度おやかましう……。」と裏窓の下の露地から摩色屋が何やら摩色をつかひ出した。

「誰のつもりなんだらう。下手だねえ。」

「音羽屋さんよ——ホラ——きつとさうだよ。」

鶴崎は摩色屋の拍子木を聞くと譯もなく急に夜がふけたやうな気がして覺えず帯の間の時計をさぐると、それを見た翰が、

「おい君、何時だ。今日はさうつと家を逃げ出して来たんで、時計も金も何にも持つて来ない。ひどい目にあつた。」

鶴崎はしめたと思つて、もう十時です。あなた。」と可笑しいほど嚴格な調子をつくつたが、その時女中が唐紙を明けて突立つたまゝ、

「内山さん鳥渡お顔を……。」

「何だ乃公か。」

女中にはや／＼妙な笑顔をしてゐるので翰は忽ち其の意を得た如く突と座を立つて女中と共に

に廊下の方へと出て行つたので、鶴崎は氣の毒な程恨めしさうな情ない顔をして其の方を見送つた。商賣に馴れた君男もすぐにそれと察して女中が戻つて来るのを待たず、徐ろに自分の煙草人やハンケチなどを始末して立ちぎにはチャブ袋の隅に載せてあつた朝日の袋までを忘れずに握んで行つた。

「あなた、今日はちつとも上らないのね。」と二人差向ひになつた小花は冷えた杯を下して鶴崎へさしつけ、「どうなすつたのよ。今日はお泊んなさいよ。ねえあなた。久しぶりだからさア。」

鶴崎は四んだ眼を圓くむき出して、泊るなんて其様事をしちや大變だ。もう歸らなくちやならんのだが、困つたな。翰君——内山君はどうしたんだ。便所か。どうやら立ちかけさうな様子に、小花は叱るやうな調子で、

「あちらは彼方でい／＼ちやないのよ。邪魔するもんちやなくつてよ。」と手を握る。

「いや今日は實際早く歸らなくつちやいかなのだ、困つたア。おかみさんは下に居るかしら。」

「ほんとにお急ぎなの。それぢや彼方へ行きませう。いつかのやうにゆつくり飲みませうよ。その方がい／＼わ。ねえ、あなたと薄氣味わる

く鶴崎の顔を見返してつたり欠ひながら續けざまに手を叱して女中を呼び、如さんお急ぎなんですとさ。」

「もうい／＼のよ。突當の三疊……。」と云つて女中はどつさりチャブ袋の前に腰を下ろし、有合ふ箸を取つて焦げついた糸の鳥を一口むしやむしや、「鳥釣さんの鳥は全くい／＼ね。」と云ひながら皿小鉢を片付け始めた。

鶴崎はもう斯うなつたらいくら急ぎ立てた處で仕様が有るまい。屋敷へは兎も角翰さんの居處の分つた事とぢきにお歸りなさる事だけ電話で知らして置いて十二時打たぬ中に屋敷の門を這入れればよからう。もうそれより外に仕様はないと父もや時計を見ながら便所へ降りた時翰に氣取られないやうにそつと戦場の電話を借りて掛けた。原盛稼に今夜はまだ御主人海石先生も御歸宅にならず蝶子さんも別にお歸りはないと小間使の返事に鶴崎は稍安心して宵の起きて来るのを待つ間、小花に引張られるまゝ見覚えのある一間へ這入つた。

いつの間にか十一時を打つ時計の音。そしてあたりが妙に寂としたやうな氣がした。鶴崎はびつくりして枕から顔を起すと窓の外に雨溜の音がしてゐる。



から後近頃に出たものだが、その隣の繪双紙屋牛肉屋藥屋などは古い中にも又古い店である。その店について曲ると則ち兩側とも三番町の藝者家待合の立ち並んだ間に一軒理髪店があつて、此處から露地にはいと書雲館といふ半分壊れかゝつた下宿屋の筋向、質屋の土藏と並んで雲林堂の待合は「愉快」といふ灯を出してゐる。鶴崎は露地の芥箱に餌をあさつてゐる近處の犬にも何となく見覺えのあるやうな氣がするのであつた。

格子戸をあけるが早い、「どうぞ此方へ。」と鶴崎は直様二階の座敷へ案内された。

チャブ臺の上には鳥籠が煮くり返つてゐる。油ぎつた湯氣と煙草の烟酒の香の立迷ふ中に、

翰は待合の丹前を着て正面に大胡坐をかき、例の高價な蓑巻を指先にはさみ片膝を張つて酒を呑んでゐる。右側にはいつもの通り素破らしいハイカラの君勇、左側には銀杏返の小花、其の姉なるこの家のおかみ——この四人から四方一度に歡迎されて鶴崎はまづ氣を吞まれてしまつた。仔細らしく髭も拵られず妙にテレた形で座につくと、

「をぢさん。お酌」と君勇が銚子を把上げた。鶴崎は已を得ず一口嘗めて下に置くゝ小花が

小皿に鳥を取つてその前に勧めながら、「大變遠いところへお越しになつたんですつてね。」

「先生、頂戴いたしませう。」とおかみは杯を催促して、「先生やつぱり不思議な御縁なんです。ね。花ちゃんは今居る家は、先生が先にいらしたつた、明月さんのお隣の家なんです。」

「ナニ鶴崎君の家が藝者家になつた。それア面白い。」と常は手を拍つて笑出した。

おかみと小花は二人して、今度小花が白山からこの上地へ移つて看板借で出た新龜千代富士といふ藝者家は永らくこの先の寫眞屋の裏露地にゐたが、鶴崎先生の家が明いて貸家札が張られたのを見るが早い、「家が明いたと云つて大急ぎで引越した。それから間もなく小花がその藝者家から看板借で弘めをするやうになつたのだと話した。」

「あらさう。全く不思議だわね。」と君勇はいかにも不思議な事のやうに目を睜つてしみるゝ小花と鶴崎の顔を見くらべた。

鶴崎も可笑しいやうな又何ともつかず不思議なやうな今まで全く覺えたことのない妙な氣がして、唯譯もなく安からぬ思ひを淋しい笑ひにまぎらすばかり。小花は膝をすゝめて寄添ひ顔を出して、「ねえ、あなた。いゝ家だわね。」

あの八疊のお二階で繪をかいいていらしたんでせう。アラまたあんな怖い顔をするのよ。二階の機や障子なんかに繪が刎ねかつてますよ。窓から見ると明月さんのお庭がまるで一日ねえ。大きな木のある御座敷は何なの。學校病院ととべら／＼饒舌り立てる。

鶴崎は心中一刻も早く翰を連れて歸りたいとは思ふものゝ、大勢居る前では唐突に云出されおせず、又この場合うっかり言出したら唯さへ怒つぽい翰は屹度腹を立て、故意と手こずらせるにちがひない。杆を干しながら頭に思案してゐる中鶴崎はふと結婚の當夜が式場へ行つてゐる留守中君勇がよこした手紙を袂にかくして出し遅れたなりとう／＼翰には渡さずにしまつた事を思出した。鶴崎は君りが翰にあてゝ手紙を出した話でもし出さなければいゝがと思ふと急に氣味がわるくなつて折々見て見ぬやうにその顔を見た。

君勇と小花は借家のはなしから、いつかお客をそつち除けにしてべちやくちやと互に藝者家の主人の噂や白山と富士見町ではどつちが稼がいゝかと云ふやうな話に夢中になつてゐる。おかみは先刻銚子の代り目に下へ行つたなりまだ上つて來ない。座敷は少しづつ鳥籠がそろ

す。と喚いた聲に鶴の氏名詐稱が即座に發覺した。鶴は鶴崎の名をそのまゝ自分の名にして申立てたので、忽ち何方が真正の鶴崎だかわらなくなつた。こゝで折角放免になつた二人は兎に角一應警察署まで引致といふ事になつた。鶴崎が半分泣牌での精疏も最う駄目である。二人は麴町警察署の留置場に放り込まれた。

#### 十四

二人は幸しくその夜を留置場に明し翌日の朝もいつか十時過ぎてからやつと呼出されて係の役人の室問を受け厳しく詰責されて放免となつた。昨夜の時雨は不幸中の幸にも今朝はすっかり晴れて一天拭ふが如き小春日和、然しあまりいい天氣にあたり明るさ、二人はすゞ／＼と警察署の門を出るや否や、其のまゝ足の向く方へと殆ど斯出さぬばかり息を切つて半町あまり、とある横町の曲角まで來て始めてホツとつく息と共に顔を見合した。

「君。」

「坊ちゃん……」

「實に君、人を思鹿にしてゐやがる。失敬な奴だ。」と鶴は忽に堪へぬが如く拳を握つて自分の眼を叩き、「ヤケだ。飲み直さう。胸糞がわる

くつていかん。」

「まあ坊ちゃん……と鶴崎は呆れたとよりは驚る恐るゝ如く鶴の顔を見たまゝ何とも云ひ得ず、昨夜一睡もしなかつた爲め眞赤にした眼を掌で搦つてゐる。

「僕ら腹がへつてたまらん。一體何時だ。」

「もう直きお午です。十一時半です。」と鶴崎は帯から引出した時計を手に握つたまゝ恨めしいうにいつまでも時間を眺めてゐる。

「道理で腹のへる筈だ。君どこかで飯を食はう。愉快へ逆襲しようか。」

「何です。また愉快へ……。」と鶴崎は少し顔顰になつた。

「さうさ飯を食はせる位は無論の事だ。吾々お客にあんな迷惑をかけて其儘にして置くといふ法はない。市ヶ谷の雲林堂へ直接談判に行つてもいい。どうだ君、談判に行かう。」

いつまで横町の角に立つてもゐられないので鶴崎は兎角鶴の行く方へと二三歩あるき出した。その時後から、「もしく内山さん、鶴崎先生、いやもうどうも何とも申譯がありません。

と中折斷子を片手にひよこ／＼お辭儀をしから断寄つたのは雲林堂の亭主相澤である。

二人は振返つて見るともなく雲林堂の顔を見て

んだ。「私が居りやア何とかしたんですが、生憎昨夜は仲間の都合で、今朝になつてその話をきいて喫驚仰入しちやつたんです。取るものも取り敢ず駆け付けたんですが、實にどうも面目次第もありません。」

「家へは歸れんし、世間には顔出しが出来ないし、君、實に困つたことになつた……。」と見たまんだらう。と鶴崎は雲林堂の顔をぢつと見詰めながら、何ともいへぬ程情ない恨めしさうな調子。流石の雲林堂も此の場合返事にこまつて頭をひよこ／＼唯無言に「すみません實に相済みません。」

「鶴崎君煙草はないか。」と鶴は言ひながら又歩き出した。

「あります。こゝに有ります。」と雲林堂は兩方の袂へ一度に左右の手を差入れ數島の袋とマツチをつかみ出して鶴の方に差出しながら、これを機会に、「このまゝぢやどうも私の氣がすみませへ。一先手前の市ヶ谷の店なり、三番町なり、す御立寄りなすつて下さい。もうお午ですし、改めてお詫をしなくっちゃ、どうも氣がすみません。」

一程のところへ行つたつて營業停止だらう。」と鶴は冷かに横を向いた。

「これは弱つた。」

「まあびつくりしたわ。」

「雨ぢやないか弱つたな。」

「やらすの雨だわ。あなた歸れやしない事よ。」

事だつて芝まで大變だわ、ねえ。」と小花も今は

鶯崎の口からこま／＼事情を聞かされた後なの

で、さすがに氣の毒さうに顔を見ながら、あなた、

二三日中にお一人でゆつくりいらつしやいよ。

書間がいわよ。氣がおちついて——。」

「うむ、うむ。」と鶯崎はしばらく雨の音に耳を

澄ましてゐたが、久しぶりの遊びにどうやら身

體も大儀さうに日までを細くして急には起直ら

うともしなかつた。

その時突然下の方で火事が喧嘩でも始まつた

か魂切るやうな女の聲がしたかと思ふと矢處に

どや／＼と梯子段を駈上る荒々しい聲音。小

花と鶯崎はびつくりして起上りさま唐紙を明け

ると、出合頭にいきなり「こらッ。」と一聲鬼の

やうな手に兩人ともむずと肩をつかまれた。

「何だ失敬な。」と鶯崎が叫ぶと、

「僕は刑事だ、靜かにしたまへ。」

小花は脱ぎ捨てた衣服の上にべつたり腰を抜

かしてしまつた。鶯崎も事の意外に爲す處を

知らず其まゝ棒立ちに突立つてしまふと、廊下

のはづれの一案にも早や一人の刑事が踏込んでゐて、押入の中へ首だけ突込んだ鶴と君勇の二人をば足をつかまへて引張り出してゐる滑稽にして悲惨なる有様が、廊下の電燈で見通しによく見えた。

「おいお前はどの藝者だ。」と此方の刑事は手帳を取り出した。年は四十前後日にやけた首の太い藝栗頭の格好、身丈は低いが肩のいかつた如何にも頑丈な身體つき。襟のよごれた萬筋銘仙の袷裾短く、廣げた胸からメリヤスの襦衣を見せ、鼻緒ずれの處へ大きなつぎを當てた紺足袋。羽織は着ずメリヤスの兵兒帯を後で結んで古ばけた煙草入をさし、絶えず袖口がうるさいと云ふやうに袖を肩の方へたくし上げながら、

「名前は何といふ。」

「小花と申します。」と云ふ聲も顔へて聞えぬほどである。刑事は笑ひながら小花の様子を見遣つて、

「小花——どの抱へだ。うむ其のさまは。何處から見たつて現行犯だな。」

鶯崎もわが身のさまを見廻して云ふに云はれぬ羞恥の念に忽ち耳朶まで眞赤にする。

「今度はあなたの住所御姓名だ。」

「君どうか許して下さい。僕の名譽に皆まで云切れず鶯崎の聲もどうやら泣き出しさうな調子である。」

「職務です偽名はお爲めにござりませんよ。二十九日間拘留ですぜ。」

鶯崎は覺えず顔へ上つた。急に咽喉がからからになつて何か言はうとしても聲が出なくなつたやうな心持。頭に唾を存込みながら、

「年齡。」

「四十一。」

「職業。」

「繪をかきます。」

「間違ひはありませんな。」

「はア。」

「ではよろしいです。今夜はいゝです。以後おつしみなさい。」

刑事は云捨て、腰を抜かした小花を引立てようとする。小花はわつと聲を上げて泣き出した

が鶯崎はほと／＼息。韓の安合いかゞと直様突當りの座敷へ駆け寄るとこゝでも同じやうに丁

度韓の間がすんで君勇が現行犯で引立てられようとする處、君勇はおい／＼泣きながら「内

山さんどうかして頂戴よ。あやまつて頂戴よ



合弟は否應なしに父の死んだ後の家事一切の始末と、老母の身を引受けなければならぬ羽目となつた。無論其の時、弟は兄へ對して海石翁の遺を引拂ひ家へ歸つてくれねば困るからと相談したが、鶴崎は別に責任を逃れようといふずい考へからのみではない、實際その時には繪筆一本ではとても自分一人食べて行くのもどうかと思はれたので、いろ／＼泣言を並べたり又おだてたりして、弟の方へ責任をなすりつけ背負はしてしまつたのである。

一體總領の鶴崎は、両親はじめ、弟、玄松から、妹の辰子からも馬鹿にされきつてゐた。妹は小學校からついて、尋常師範學校に入り父の死する前の年には早くも四谷邊の小學校の教員になつて月給を取る身分、その又前の年には玄松が士官候補生になつて新しい林色の軍服に提げた洋刀をびか／＼輝らせてゐるのに、總領の音は源陸の士官學校は勿論のこと、前、師範學校も師範學校も士官の學校といふ學校は、一ツ錢らず入學試験に落第して、詮かたなしに内山先生の屋敷へ書生に住込んで畫工になつたもの、二向名が出ない始末。もと／＼裁判所の書記を職めてゐた父は、薄給な官吏のくせとて、大男玄松の新しい軍服と三女お辰が

小學校教員兼命の辭令を見るや、その嬉しき頼母しさに、つて、總領の胸甲斐なき意氣地なきが俄に目につき、あんな愚阿はもうゐても居なくともどうでもよい。玄松と辰子さへゐれば老の身の行末はすこしも案じる事はないと思ふ心はおのづと何かにつけて鶴崎の目にも知られるのであつた。鶴崎は大に憤慨もし悲觀もしたがつとも仕様がなない。情遮と悲觀の結果彼は両親や弟の手前空とほけて、美術家たる身は世の中の事は何が何やらさつぱり分らんやうな顔付をして、そのまゝ幾年たつても家へは歸らず海石翁の玄關に居られるだけ兄を落ちつけて見ようと度胸をすゑた。年々月給が増え、身分が上る。弟や妹とは何となく一緒の家にけ居辛くも思はれるし、其れと共に鶴崎は又源石翁に對しては先方から出て行つてくれと云ひ出すまで何年でも玄關にゐて家事の用をしてゐたら遂には家族の一人も同様に内山家ではどうか行末この身の立つやうに心配しなければならぬやうになるだらうと隱忍極まる考を起したのであつた。

かくて鶴崎は愚鈍と無能を滿にして老母を弟と妹に託したなり、總て父の三週忌がすぎんだ頃内山家の仲餽、お慶といつて實家は碑々

谷在に少しに田地もある農家の娘を買ひ當土見町へ家を持つたが、さうなると玄松も妹のお辰も、だまつては居ない。もと／＼總領である以上は母を引取るから然らずば月々養育料を出すが當然だと云ふ。鶴崎は以前一家から無慮された怨みを晴らすは此時といよく／＼とほけて、口先では頻に弟、玄松と妹、お辰の才能や地位身分をほめそやし、自分のやうな貧乏愚師の家へ母親を引取つてまづいものばかり食させるよりは國家の干城たる軍人さんのおやに御置申した方が第一、母自身にも世間へ對して何程肩身が廣いか知れまいと云ふやうな面皮で巧に逃げを打つた。玄松は軍人だけに氣も短くブウブウ云つて怒りながら面割臭いので其の翌年母が病死の折も葬式の費用は大方苦しい中を算段して立派に執行した始末。それ以來兄弟の間は、だに甚だ氣まつくなつてゐた。

鶴崎はこの氣まつい、弟に昨夜符合から警察へ擧げられた不始末を知られては兄の身として何ほ何でもつう／＼しく白をきる氣にはなり得ない。それと共に内山家に對しても分四十面をさげてのめ／＼と昨夜は蘭の坊ちゃんを御一緒に遊びましたと詫られせぬ。鶴崎は家へ歸れず師家へも行かれず、思へばつく／＼進

雲林堂は向の四角に迂待してゐる車を手招きして塀に角時分ときだからと程遠からぬ貝坊上の西洋料理へ連れて行つた。愉はヤケ半分空腹に正宗のあついのをぐいぐいやつたので、忽酔つ拂つてしまふと、もう昨夜のお灸などは忘れ果てたものゝ如く、雲林堂を捉へて何處かで遊び直さうといふ始末。鶴崎は家のことや屋敷の事が氣になつてたまらないので、何は兎もあれ私は一先歸つて様子を見た上出直すからと、西洋料理屋の門口から逃ぐるが如く別れて一人電車に乗つた。

白令下で降ると初冬の晝はいつか傾き崖下の寒町はもう薄暗く、早や灯をつけてゐる家さへあるのに驚いて時計を見ると四時過ぎである。鶴崎は息を切らして北吉町〇〇寺の石段を上りわが家の戸口まで来て何心なく内をのぞくと上間には一足大きな長衣がぬいであつて、上間の二疊には柿色の外套とサアベルの置いてあるのが半分明け放ちにした障子の間から見えた。

鶴崎は佐倉の聯隊にゐる弟の亥之松が問のわるい時にやつて来たものだ、と昨夜の不始末に氣おくれがして其儘格子戸の外に佇立んだ。一待つてゐたつて歸らん筈だ。こら此の夕朧を

御暗なさい。

突然亥之松の編鐘聲が聞え出した。何やらそれに答へるらしい女房お廣の聲一ついて弟の對鐘聲が、これア確に貴にちがひないです。内江崎(十郎崎管一)。

これを聞くと鶴崎は格子の外にも居たゝまれず、その儘音を忍んで再び寺の門を出たが無論何處へも行くとくろはない。足の向くまゝに白令下の電車通の方へ来ると四辻で新聞賣が夕朧々と呼んでゐる。鶴崎は毎夕新聞を一枚買つた。懷中から錢を出して新聞を買つたのは生れてこれが始めてである。内山源石の玄關をやって富士見町へ家を借りてからも鶴崎は新聞を取らなかつた。三日に海石翁の屋敷へ行つた折讀めばよい。又け電車にでも乗つた時隣席のものが廣げてゐる新聞を盗み讀みすれば月に四五十錢がものは日に見えて經濟になると考へてゐた。然るに今四十一歳の冬に至つて始めて鶴崎は身錢を切つて夕朧を買ふべき必要にせまられたのである。初冬の夕日は折しも斜に低く向側の人家の軒裏までさし込んで来たが日陰になつた此方は却つて俄に薄暗くたそがれてしまふので、日がちらつて潤のわるい新聞は一層讀みにくい。鶴崎は停留場の柱の下に立

つて、電車を待つふりで眼を皿のやうにしたがら、わが身の取らぬ場所はこかしがした。容易に見當らぬのも、一度紙つ折目になつた襦袢に出てゐる。

落花飛燕 近頃山の玉露處の待合にて内々花札を片ふものある山にて昨夜廻町四谷の角袖各手分をなし時間前不意を冠ひ數々處の待合に踏み込み相應の御物あり津ノ守にては——富士見町にては——！  
鶴崎は仔細に待合の名と藝者遊客の名とを讀み下して深い／＼溜息をついた。佐倉の聯隊から出て来た實弟陸軍大尉鶴崎亥之松が讀んでゐたのもこの夕朧にちがひはない。家には新聞はない筈なのに自分の歸宅を待つ間子俱にでも買はせたのが運悪く眼についたものであらう。それは兎も角自分分はこれからどうしたものであらう。亥之松のゐる間はどうも家へは歸りにくい……  
鶴崎は弟の亥之松とは先年父の死んだ折其の母の引取方について一時不和を生じた間柄であつた。もう十年程前のことである。その時兄の鶴崎はまだ舊陽書塾の玄關にゐたが弟の亥之松は陸軍士官學校を卒業して早くも聯隊附の少尉になつてゐたので、その時の場

「いゝえ、いゝえ。私は二度と家へは歸りません。書置をして出て来たんですから家へは歸れません。」

蝶子は涙を拭ふと共に再びスタ／＼歩き出した。鶴崎は又もやしつかり袂をつかみたいにも今は通りがかりのものが二人の様子に振り返るのみか立止まるものさへあると知つてはさうも出来ず、萬一巡察にでも怪しまれてはいよく大變と途方にくれ、蝶子の行く方へと唯ぼんやりその後について行つた。

蝶子は昨夜徹夜良人衛の歸りを待たかし軀で今朝も九時近く姑の幹子と小姑の俊子と一緒にいつもの様に茶の間で朝飯の箸を取つたが二人とも愉の事はうんとすんとも云はない。それと共に御給仕の小間使までがじろ／＼と見て見ぬ様に人の顔ばかり見るやうな様子に、蝶子はたまりかね朝飯の膳をはなれるが否や家を飛出さうと思つた。然し午前には海石先生へ面會を請ふ來客が多いので玄關先から表門は人目につき易く、又勝手口から横町の通用門も午前には御用聞を始め人の出入りがはげしい。乗角する中、午飯の時刻になつてしまつたが愉は依然歸つて来る様子もなく、家の人は蝶子の姿を見ればいよいよ臍物にでもさはるやうにおぢ／＼してゐ

るので蝶子はますます居づらく竊と一通の書置を残して庭先から通用門の方へ忍んで行かうとしたのであるが、其の時も折悪しく妹の照子が學校から友達二人まで誘つて歸つて来た賑やかさ、とう／＼夕暮近くまで家を抜出す誰がなかつたのである。

姉を始め家中のものは此の前愉が夜ふけて歸つた時蝶子との大喧嘩に恐れをなし何と云へて慰めてよいものやら、慰かな事を言つて知つて心持を悪くさせるよりはと當らず觸らず知らぬ顔をしゝめたのである。それが憐みきつた蝶子には家中のものは皆自分の不仕合を好氣味だと嘲つてゐるとしか思はれないので、蝶子は愉に對する嫉妬の恨みよりも今は家中のものに對して何かびつくり腹を抜かすやうな事をしてやらなければどうしても腹がいえないやうな氣になつてしまつたのだ。蝶子は書置に、

私はこちらのお家には用のないものだと思ひます。居りましては却つてお邪魔になるやうですから逃げ出します。どうぞ死んだものだと思召して下さい。里にも私け歸りません。どこへ行くか私にも分かりません。然しどなたへも御迷惑はかけませんから其の事だけ御安心なすつ

て下さい。私の良人は私の事を妻だとは思はずさういふ待遇をしてくれないのですから私も良人に對しては愛情も尊敬も持つのは不必要だと思ひます。お歸りになつたら皆様からよろしく仰有つて下さい。では左様なら。

捨てられし女より

皆々さま  
と認め鏡臺の上へ載せて着のみ着のみ家を引出したが、白金の大通へ出て吹きさらす冬の夕風に覺えず身ぶるひすると、案外氣が靜まつて最初は庭の松の木で首でもく／＼うか非／＼へでも勝込んでやらうかとまで思ひ詰めた遊船もどこへやら、やがて日吉坂を下りかける頃に往來の電車あたりの人家に早くも灯のつき初めたのに、自分はこれからどこへ行つてどうしていいのやら、蝶子は俄に心細くてたまらなくなつた。

さういふ折から突然鶴崎に呼留められ蝶子は急に再び淵川へでも身を投げかねまじき勢を見せたものゝ然しそれは全く行がかり上云はば虚勢を示したのに過ぎなかつたので、自分の後に鶴崎が途方に暮れながらつき従つて来るのを承知しながら蝶子はもう別に逃げようとも



退こゝに谷つた心持になつたのである。然し  
いつまでも電車停留場の柱の下に立ちずく  
でゐるわけにも行かないので、途方にくれなが  
らとぼ／＼と歩みを日吉坂の方へ向けた。

夏冬とも晴天とさへいへば駒下駄では歩けぬ  
ほど砂はこりのひどい日吉坂は馬鹿げて路幅が

ひろいのに坂上の空が高く開けて見えるのと  
で、兩側には樹の茂つた崖が聳えてゐるにも係

らず坂下のごた／＼した街から上つて来ると、  
鶴崎はいつも野原に出たやうな気がするのであ

る。ましてや丁度初冬の夕陽すさまじく坂上の  
大空を焦すさま、鶴崎は一層荒寒悲痛な心持

がして立止るともなく坂の中途に立止つて行手  
を見上げると、すぐ目の前に坂の上から砂ほこ

りもかまはず、走るやうに急いで降りて来る一  
人の女。もし道を譲らずば突當りさうな勢に

一歩傍へ寄りながら何心なく其顔を窺ふと、  
誰あらう屋敷の蝶子ではないか。十一月末の夕

方といふに不斷着らしい銘仙の上には羽織も着  
ず外出の襟巻もせず、下駄も竹の皮の鼻緒をす

げた庭下駄をはいてゐる様子。一目見てたゞ事  
ではないと鶴崎はわれを忘れて、

「もし若奥様。もし、もし、もし。」  
その時目黒行の電車が崗の浮くやうな響に線

路をきしりながら砂煙を立て、坂を上つて行  
く。此の物音に呼ばれた聲の耳に入らぬのか蝶  
子はそのまゝス／＼行掛けるので鶴崎は追ひ

つくや否や夢中で後方から袂をつかみ、  
「若奥様。私です、鶴崎です。」

蝶子は立止つて振り返つたが即座には何とも口  
がきけないらしい。

「若奥様。申譯がありません。どうぞ御勘辨な  
すつて下さい。」と鶴崎は稍聲を頭はせ腰と共に

膝まで曲げて、どうやら其の場じ上下座でもし  
かねまじき様子。

蝶子は呆氣に取られたやうに唯ちつと鶴崎の  
顔を見詰めた。夕刊の新聞など見る暇もなか

つた蝶子は昨夜鶴崎が良人の翰と一一緒に富士見  
町の待合から警察署へ拘りされた事などはす

こしも知らぬ處から、どうぶ／＼譯で鶴崎がペコ  
ペコ謝罪つてゐるのか譯が分らなかつたのであ

る。  
「鶴崎さん。あなた此れから家へ行くんです

か。」と蝶子は暫くしてやつと口をきいた。  
「はい……お屋敷へ上るつもりで参りましたん

ですが、何と云つてお託をしていゝのか、實に  
面目次第もございませぬ。」

「鶴崎さん、あなた家へ行つたら黙つて、下さ

いな。お願ひですから私にこゝで逢つたこと  
は、義母さんにも義姉さんにも誰にも言はない  
で下さい。」

「へ。それア言ふなと仰有れば申しませんが、  
若奥様、あなたはこれから何方へ被行るんで

す。」  
「ちよいとそこ迄……心配しないでもいゝんで

すよ。」と云ひさま蝶子は歩き出さうとした。  
「奥様。若奥様、まア御待ちなすつて下さい。」

と鶴崎は狼狽へて再び蝶子の袂を取つた。蝶  
子はもう駄目だと思つたのか、靜に鶴崎の顔を

見返つて、  
「私はもう家へは歸らないんですよ。ですから

誰にも私に逢つたことは言はないで置いて下さ  
い。私は見送られた人間なんです。良人

にも見捨てられるし、實家の人達からはとうに  
見捨てられてゐるんだし、みんなから見捨てら

れた身なんです。……」  
皆まではぶひ切れず突然音高く涙をすゝり上

げると共に蝶子は片袖を顔に押當てた。この様  
子に鶴崎は穴へも這入りたい心持。

「みんな私がおわるいのです。お屋敷へ行つて  
ゆつくり御託をしますから、奥様、どうぞ、御

一緒に……」

の拘留が新聞に出た矢先ついでに蝶子が身技でもした日には内山家の名譽は滅々々々である。

御歌所の御題に再三人選した後子の名譽もまたつてしまへば、學習院女子部に通つてゐる照子もきまりがわるくて當分は通學もできなくなつたらう。どうしたらよからう實に困つた事になつた。

とばかり途方に暮れてゐる最中鶴崎の妻お慶が若奥様は御無事との知らせに一同覺えず飛び上るほどに喜んだ。餘程嬉しかつたものと見えて海石は即座にお慶が夫に代つての訃言を聞き入れたが然し何れ何でもその儘にはして置けないので、輪の歸やを待ち翌日鶴崎と二人を並べて海石はきびしく詰問に及ぶと結局慄しからぬのは我兒の輪ばかり。鶴崎の方はいつも輪の爲めに迷惑こそして居れ決して師家の息子を唆すやうなものではない。いつも小心翼々たる正直な男である事が、詰問の進むにつれていよいよ明白になつて来るので、その信用は却つて以前より深くなる。鶴崎は一變して「鶴崎君の後も何分よろしく注意してくれたまへ。又どんな馬鹿な真似をしだすか知れんから」と何やら輪の監督を依頼されるやうなお言葉に「及ばずながら」と大に面目を施して引下ると、家には雲林堂の亭主相澤が一時間ほど前から鶴崎の

歸りを待つてゐて、重ねて一昨夜の訃言を述べ無理押付に三越の切手三十圓を置いて歸つた。

鶴崎の仕合はこれのみではなかつた。家出騒がすんで一週間ほど経つた或日の朝蝶子の實家なる大須賀家から突然使の車夫が大きな菓子折と書狀とを持つて来た。粗菜と立派に書いて糊入紙で包んだ箱には紅白の水引がピンと結んである。其の間に挟んだ大形の封筒の表には筆太く、「鶴崎白石先生侍史。」裏には「正三位大須賀顯正。」

鶴崎は覺えず坐り直して膝小僧の用る衣服を頻に引合へながら封筒を丁寧に切り師匠が祝詞でも讀むやうに恭しく中なる巻紙をひろげる。

「お慶、お使は車屋さんか。お茶を上げろ。御返事を書くのだから。おい／＼、あの上等の巻紙はどこへしまったか。それ、毎年盆暮に胸形の團扇屋から貰ふ小箱入の巻紙さ。狀袋も本麻皮のが一緒についてゐる奴。と鶴崎は立ちかけた女房を呼び留めながら頻に机にまはりをさがしてゐたが、「お慶。あつた／＼。ここにあつた。」

鶴崎は環も日常つかつてゐるのでなく、海石翁が車臺用なる古板間の名畫の折り残りを繪具箱から取出して筆も亦飾しいしををろし、

御書齋へ本拜師候見事なる珍菓御菓與極下御禮申述べき様も無御座只管感涙に咽ぶのみに御座候。尚今夜御屋敷へ御用との御せ實以て光榮身に餘り候次第夕景仰せに從ひ參邸御機嫌御伺可奉候其御親しく拜肩の上重て御禮可申上候得共先は不取敢御返書

旁々御禮如斯に御座候。尚令夫人様へも宜敷御風聲の段々願上候。

大須賀眞三位様 御執事

鶴崎は文章と共に書體まで全力を振絞つて書いたので大事にしまひ込んだかの綠蔭堂の上等の巻紙をも惜氣なく三四度裂き捨てたのであつた。書き終つてがつかりしたやうに息をついたが、人分暇取らしたと我ながら心付いたか鶴崎は返書を手にして二階を下り、格子戸に待つてゐる車屋に手渡しして、「若衆さん。お待ちどほだつた。よろしく申上げて下さい。遠い處を御苦労だつた。」

鶴崎は上櫃につくばつてゐたお慶を見返り、

二月十五日 晉頓首再拜

大須賀眞三位様 御執事

鶴崎は文章と共に書體まで全力を振絞つて書いたので大事にしまひ込んだかの綠蔭堂の上等の巻紙をも惜氣なく三四度裂き捨てたのであつた。書き終つてがつかりしたやうに息をついたが、人分暇取らしたと我ながら心付いたか鶴崎は返書を手にして二階を下り、格子戸に待つてゐる車屋に手渡しして、「若衆さん。お待ちどほだつた。よろしく申上げて下さい。遠い處を御苦労だつた。」

鶴崎は上櫃につくばつてゐたお慶を見返り、

二月十五日 晉頓首再拜

大須賀眞三位様 御執事

鶴崎は文章と共に書體まで全力を振絞つて書いたので大事にしまひ込んだかの綠蔭堂の上等の巻紙をも惜氣なく三四度裂き捨てたのであつた。書き終つてがつかりしたやうに息をついたが、人分暇取らしたと我ながら心付いたか鶴崎は返書を手にして二階を下り、格子戸に待つてゐる車屋に手渡しして、「若衆さん。お待ちどほだつた。よろしく申上げて下さい。遠い處を御苦労だつた。」

鶴崎は上櫃につくばつてゐたお慶を見返り、

二月十五日 晉頓首再拜

大須賀眞三位様 御執事

隠れようともせず日吉坂を降りきつて白金志田町から街路の行くがまゝ魚籃坂の方へと歩いて行く。街はもうすつかり夜になった。鵜崎は人通りの絶え間を見計つて再び繁り寄り、

とこまで……私の家までいらつしやいまし。もう真暗です。お風邪でも付すといけません。私の家へ参りませう。さうしてよくお話を伺ひませう。それがよう御座います。さアさう致しませう。と鵜崎もいつか子供をあやなすやうな調子になつてゐた。

「そんな事云つたつて書置まで書いて出て来たんぢやありませんか、今更のめく」歸れますか。それこそみんなに笑はれて馬鹿にされます。」

先刻日吉坂の前には自分の家へも這入りかねて日常もなく日吉坂の方へ歩いて行つた事なだけも此の場合兎や角思案する暇なく鵜崎は魚籃坂下からはもう半町とは隔つて居らぬ〇〇寺の境内なる借家へと、蝶子をだましつすかしつ酒の事で連れて來ると、かの氣まづい弟の亥之松はもう歸つてしまつたものか格子戸の土間には長靴も見えず、子供の騒ぐ聲もせず、家の中はしんとしてゐる。

「困つてしまふわねえ。私見たやうなもの如何なつたつていゝぢやありませんか。」

一若奥様、きたない家ですが、さアどうぞ」と鵜崎はがらりと格子戸を明けると共に大きな聲で、「お慶々々。」

「知らない事なら仕方がありませんが往來でかうして御話を伺つて見れば、どうでもいゝと云ふわけには行きません。兎に角お屋敷へ参りませう。」

お慶は勝手手の三疊で子供と一緒に夕飯をかきこんでゐた最中非常な大聲で呼立てられ口をもぐ／＼させながら出て來たが若奥様の姿を見てあまりといへば事の意外なのに澤庵のおくびを袖で覆ふ暇さへなく、「まア」と云つたり、鵜崎に對しては佐倉の弟さんが今日半日待つ

「いやいやッ。歸るのはいやッ。」と蝶子はまだ取られもせぬ袂をばまるで駄々っ兒のやうに其の身體と共に振り動しながら、「どうしても誰が何と云つても家へ歸るのはいやッ。」

てゐた事も又は夕刊新聞の一件も何も彼も云ひ出すどころの事ではない。今日はあいにく夕方掃除をせず取り散したまゝ座敷を片づける側から、座蒲團を出すやら火鉢に火を取るやら茶を入れるやら、その最中意氣盛りの子供が喧嘩をして泣き出すのを叱るやらでんでこ舞の大騒ぎ。それを目の前に見ては蝶子もさすが氣の毒になつてもう死ぬの生きると駄々をこねる譯にも行かず大騒がすゝめるまゝに悄然と床の間の前の座蒲團に坐つた。

## 十五

蝶子の家出騒ぎは鵜崎の身に取つてけ此の上もない仕合であつた。この騒ぎがなかつたら鵜崎は拘留の不始末から所家の出入は差留められてしまつたにちがひない。海石が二階で新聞の記事に氣がつきびくりして夫人を呼んだ時、階下では俊子が蝶子の書置を見付けて一家中俄に歸き出したのである。いつもなら早速鵜崎を呼び寄せる處も今は夕刊の記事から俄の不信用、家にあるかどうか分らないと云ふので已むを得ず直接電話で大須賀へ問合せいよいよ蝶子の行方不明となるや、海石夫婦に俊子の三人額を集めて吐息を洩らすばかり。俵輪



と共に、掛物や置物など座敷の装飾品をも又  
一層整くいかにも稀世の珍品らしく見せるので  
ある。骨董賣買の秘訣は第一が信用第二が最初  
品物を一見した時の物込み方とである。大須賀  
老人はよく此間の消息を知つてゐるので居室と  
離座敷とは去年の春新しく建直したが表玄關  
と門構と此の客間だけはわざと古びたまゝに  
して置いた。そして多年出入の骨董商から内密  
に依頼されるがまゝ其の店の品物をば自分の珍  
藏品と取まぜて折々此の客間にかざつて置く。  
すると鑑定の依頼や何かの用事で老人に面會を  
求める成金紳士が大須賀家の御座敷にあるもの  
だから大したものに相違ないと頭から崇拜して  
深く目に留めて歸るのが聴て其の品物に案外な  
価値と冒手をつける絲口になる事がある。さう  
いふ折々老人は道具屋から莫大な禮金を貰ふの  
で此の薄暗い十畳の客間は云はゞ體のいい道具  
屋の店先も同様である。

書生に案内された鵜崎はそれと知らず唯只  
恐縮してすゝめられる座蒲團をも辭退し煙草  
ものもまず主人の出て来る間引込んだ眼をばち  
くりさせて恐るゝ床の掛物屏風額書棚の上に  
載せてあるものなぞを遠くから打開てゐた。  
正面の扁額に此の前内山家の結納を持つて始

めて使に來た時から見覚えの大久保甲東が閑氣  
布衣の四字、屏風は文姫が水磨山水の二枚折、  
七寶の大きな鉢に佛手柑を盛つた床の間に燦  
庭に壽老人の一軸。鵜崎は袈裟の古びた工合か  
ら譯もなく探幽が誰か何にしても大したものに  
造ひなにとばかり出入の模様に小さくなつて坐  
つてゐるので首をのぼしても筆者の名までは目  
がとじかなかつた。

輕い咳嗽拂と共に襖があく。鵜崎は伺した  
首を龜の子のやうに引込ませると共にお尻が後  
の襖へつくかと思はれるまで後じさりして平蜘蛛  
の如くにつくばひ、

一今朝ほどはわざ／＼お使をいたゞきまして、  
其の節は又結構な頂戴ものをいたしまして

「さア／＼鵜崎さんもつと此方へ御進みなさ  
い。夜中は大分寒くなつて來ましたな。遠慮な  
く蒲團をお敷き下さい。あなた煙草はあがらん  
のかな。」と親しい調子で大須賀は紫檀の盆に載  
せた鎌倉彫の巻煙草入の蓋を取つて鵜崎の方へ  
押し薦める。

年齢は六十近く半白の頭髮を五分刈にしおそ  
ろしく細長い額のこけた頬から突出た額をば  
此れも半白になつた長い髭に蔽はせた様子。大

島紳士上に車ねた厚綿の八丈の書生羽織とよ  
／＼つり合つていかにも豊かな上品な隠居らし  
く内々で骨董屋の上臈とはれる人とは夢にも思  
はれない。大須賀は舊幕時代の御茶坊主や御太  
鼓醫者に特有な智と技巧と情華とを傳えず遺  
傳してゐるので起居振舞から言葉使もおのつか  
らしとやかに、權門に取入る事の妙はその天稟  
とも言ふべきものであるが父相手によつてはぐ  
つと體大に構へて腰服させる術をも心得てゐ  
る。この老翁なる大須賀に取つては鵜崎巨石の  
如き小心翼々たる人間をこぼ殺するのには實にお  
の粉さい／＼朝飯前の仕事である。大須賀は

生れの正しくない娘の蝶子が家出の一件から鵜  
崎を此方のものにして置かなければならぬ。今  
度は無事に済んだものゝあゝ蝶子の事だから此  
後も又どんな馬鹿な眞似をしだして親の恥を世  
間に出さぬとも測られぬ。その豫め策としてほ  
何は兎もあれ内山家の執事も同様の鵜崎を懷  
柔して其れとなく蝶子のお目付にして置くに如  
くはないと、先づ其の手始めに先夜蝶子が一方  
ならぬ世話になつた返禮を名として晩餐の馳走  
に呼び寄せ膳の持ち出される時分を見計つて珠  
子といふ若い後妻までを引合せた。

珠子は追ひ出すやうに珠子を片づけさせた其

「今夜は、大須賀様の御屋敷で御馳走になるんだぞ。」

「さうで御座いますか。」と云つた時座敷の掛時計が十一時を打出した。お慶は耳を傾けながら、「それぢや午飯は御惣菜だけでようございませう。」

「うむ。いゝとも。その代りに飲む奴、あれをおひるに繰上げて貰はう。」

「何です御酒ですか。」

「さうさ。毎日一合ときめてあるんだらう。今日は晩に大須賀様のお屋敷でいたゞくから欲まなければ一合餘る譯ぢやないか。ケチ／＼せずにお燗をしなさい。もう十一時ならそろ／＼支度をしてもいゝぜ。」

「そんなに御急ぎになつたつて、今やつと朝のお膳をふいたばかりです。今朝はどうしたんだかまだ八百屋も来ません。」

「腹はすいてゐない。飯はくひたくない。寒いからお燗をしろといふんだよ。寒いはずだ、大變な風になつたな。」

鵜崎は時ならぬ一合の酒に眼の中まで水くした。窓臺の岸から吹下す風をも今日の日は平氣で近所の床屋へ出掛け髪を刈り髭を剃りそれから洗湯へはいつて歸つて来ると急に眠くなつて

坵まらぬので、足の爪をば半分ほど切りかけたなり汚れた座蒲團を枕に鵜崎はごろりと横になつたかと思ふ間もなく、

「お父さん唯今。」と着物も顔も土だらけにして學校から歸つて来る子供の聲。

「やアこれアきつと御菓子だよ。お父さん／＼、この御菓子あけてもいゝの。」

大須賀家から進物の菓子折に素早く目をつけた子供は、鵜崎が目を促まして欠伸をするひまに汚れた手で水引を引張らうとした。

鵜崎は人に驚かす大喘一聲。

「こらッ。何だ。意地のきたない。これはよそへ上のおつかひ物だ。おやつのお菓子なら御母さんに貰へ。」

子供は一齊におツかきア——と呼びながらばた／＼と二階を駆け下りた。鵜崎は机の抽斗から鍍金の削けたニツケルの懷中時計を出して、

「三時半、まだ少し早いかな。」と獨言をぶつたが矢張氣が落ちつかぬと見えてのそり／＼と襖の段を下り、「お慶紋付を出してくれ、そろそろ支度をしよう。三時半だから出掛る中に四時になる。それから單鵜のお屋敷までどうしても一時間はかゝるだらう。電車のご最中だし、

日が知れからな。」鵜崎は着物を着換へて足袋も珍しく新しいのを穿いた。下駄もいつもの原本商ではなく、

海苔のお古を大掃除の折頂戴して来た、正月でなければ穿かない事にしてゐる桐の障子下駄、本鹿皮の太い鼻緒のすがつてゐるのを穿いた。

菓物の停留場で電車を降ると豫想の通り前にはもう灯がちらつと其の邊の屋敷の柵木は黒く空に響いて、風に枝を鳴してゐた。鵜崎は案内知つた横町を曲り曲つて大須賀家の表門を這入ると敷家付の玄關の障子に火影の映つてゐるのを見たが、わざと内玄關の方へ廻つて犬に吠えられながら格子戸をあけおそ／＼、「御免下さい。」

十八九の書生が取次に出て、鵜崎を土疊の客間に通した。座敷は緋シゲ塗の障子の紙と疊表の新しいのが一際目に立つばかり。四方の長押柱束の間大井建具のいづれを見ても漆が何かで塗つたやうに古色を帯びてピカ／＼輝つてゐる處から電燈は相應に大きいのが點じてゐるにも係らず何となく薄暗い氣がした。朝の書院へでも通つたやうな此の薄暗さはいかにも世に知られた貴族家の客間らしい心持をさせる

て内の方をすつかり見せながら五圓札に一圓札三枚持合せただけの紙幣を渡した。

其時奥の方で手の鳴る言と共に大奥様幹子の聲。「お秀、先生のお歸りですよ。」ついで縁側をば此方へと醫者の立出る足音に鶴崎は勝手の方へ翰は紙幣を袂に便所の方へと姿をかくした。

鶴崎は門内の砂利を軋て醫者の車のかけざる物音に時分を計つて再び茶の間へ顔を出す。夫人幹子に俊子ばかりか海石先生までが坐つて居られたのに、これは事態容易ならずと又もや胸をはずませ唯敷居の上へ手をつくと海石は、「やア鶴崎か。大須賀さんへ電話でお知らせ申せ。蝶子が妊娠したさうぢやからな。」

「若奥様が御妊娠……それは……お目出度うございます。」

怖氣のついた鶴崎は最初大須賀と云ふ一語にぎよつとした矢先一度に安心すると何やら腰でも抜かしたやうに即座には立ちも得られなかつた。幹子は嬉しさに、

「さつきはほんとに悔りました。朝御飯の最中急に腹が痛いつて言出して顔の色が眞青になつたぢやありませんか。悪阻ならば何もそんなに慌忙で、御醫者を呼ぶほどの事でもなかつた

のに。」

出戻の俊子は妊娠の経験もなく又蝶子とはもとと仲がわるいので老父母の喜ぶさまをば寧ろ不平らしく冷かに打眺めてゐた。

「翰はどうした。早く知らせてやれ。と海石は立上りながら、「鶴崎大須賀さんへ電話をかけたら御苦勞ぢやが日本橋の銀行まで行つて来てくれ、今日は忘れとつたが砂糖會社の拂込ぢやつたから、請取書を貰つてな。」

「かしこまりました。」

鶴崎は當座預金の通帳と印形とを受取り門を出て横町から表通へ來かゝると後から「おいおい。」と呼ぶものがあるのに振り返つて見ると翰なので、道中護摩の灰につかれたやう。思はずぞつとして通帳の包を内懷中へ入れ替へた。然し翰は事實病氣で弱つてゐるらしくとばとぼと歩いて來て、

「どうもいかん、づき／＼しやがつて歩けない。君は實際何ともないか。」

「何ともありません。」

「運がいゝんだな。僕はどこで傳染つたのか知ら。兎に角臺者は危険だ。君も用心したまへ。ひどい目に逢ふぞ。」

「此から何方へお出かけです。」

「醫者さ。先刻君に借りたぢやないか。家の醫者にや氣まりがわるくつて見て貰へないやね。仕方ないから麹町の愛養病院へ行つつもりだ。番向にゐた時分一度見て貰つた事があるからね。」

「番向におゐての時分、そんな病氣にお罹りになつた事があるんですか。ちつとも知りませんでした。」

「赤門へ通つてゐる時分だよ。よく一緒に遊んだ田島とぶふ奴がね入院したんで見舞に行つたついでに僕も見て貰つたのさ。一度やると後は大丈夫だつていふから安心してゐたんだが、驚いた。女房がゐるだけに工合がわるい。」

「御養生なすつて早くお直しにならんとはいけません。若奥様は御妊娠だといふ事ぢやありませんか。」

「うむ。ポテンだとき。鶴崎君いさゝか時期を失したね。此間君に相談した蝶子の私生兒問題だな。あれも今日になつちやもう仕様があらまいな。今の處彼これ云出して僕の方にも例の一件で聊かひげ目があるしなア。」

鶴崎は迷惑と不承との兩方から覺えず顔を見詰めた。翰は獨言のやうに、

「ボテになつちやもう仕様がな。それ



の發頭人なので萬一離縁にでもなつて歸つて來られてはそれこそ迷惑至極だと女だけに又一倍の取返苦勞から平素あまり客の出入を好まぬ性にも係らず此の夜は心底熱心に鶴崎を歓迎した。

鶴崎は舊「縣知事正三位勳三等」と云ふ肩書ある主人と言葉を交へるのさへ難有くてならぬ處へ一方ならぬ大人の待遇に全く感涙に咽ばぬばかり。唯一度の御馳走に身命を抛つてもかまはぬやうな心持になつた。八時か九時らしい時計の音に鶴崎は辭して門外へ出るに俄に發する酒の酔に覺えずよろ／＼と路傍の石につまづいて大それた／＼桐柵の下駄の角をかいたと心付かず横町を曲る折には何といふ事もなく屋敷の方を振返つて帽子をとつた。

## 十六

あくる日の朝いつもならば午飯をあてに十一時一寸前頃といふ刻限を今朝はぐつと早く鶴崎は内山家へ出掛けた。鶴崎は海石先生の非常に嫉妬深い人たる事をよく知つてゐるので昨夜先生には無斷で大須賀家へ行き馳走になつたと知れゝば必ず御機嫌を損ずるにちがひないと、酒もすつかり醒めた今朝になつて急に心配でたま

らなくなつた。通門をくぐると直ぐにも二階へ上らうと思つたが表玄関に帷が一足車が一臺あるのを見てじむを得ず茶の間の方へまはり、

「鶴崎でございませう。といひながら靜に襖を明けると奥様も俊子様もお居でにならない。唯一人小間使のお秀が茶棚からお客用の茶碗を取下して茶をついでゐる處なので、

「お秀さん。お客様かい。」  
「え、お醫者さま。」

「お醫者。どなたがお悪いんだ。先生か。」  
「いえ、岩奥様」とぶつたまゝお秀は茶托に茶碗をのせ若夫婦の居間になつた奥の間の方へといそがしさうに立つて行つた。

取殘された鶴崎は譯もなく胸を轟せ悄然茶の間の隅へ坐つたが、がらりと障子の明く音にびつくりして振返ると帷が突立つてゐるので、

「お早う御座います。とわざと盤へ手をついた。あの一件以來鶴崎は自分一人が好い兒になつたやうな丁合から帷に對しては誠に氣まづくてならぬので顔さへ見れば馬鹿丁寧に御醫儀ばかり。すると帷の方でも至極冷淡に折々は鶴崎が

「醫儀をしても知らぬ顔をしてゐる事さへあるの、で何となく底氣味わるくは思ふもの、結局以前、のやうに二後で僕の部屋へ來てくれたまへ。」

と例の迷惑な相談を掛けられぬのを何よりだと内心喜んでゐた。されば今しもお秀から聞いた蝶子が病氣の事も此方から先には口を出さぬ方がとそのまゝ知らぬ顔に黙つてゐると、帷は何やら縁側の方を見返りながらツカ／＼と鶴崎の身近に進んで氣味わるく聲をひそめ、

「鶴崎君。君は其後身體は何ともないか。」  
「へ」と此方は意外の問ひに狼狽して、

「さうか、そりやア結構だ。と聲はまたしても縁側の方へ氣を配りながら更に聲をひそめ、僕

は實に弱つてゐるよ。先年にやつた床が又わるいんで實に閉口してゐるんだ。醫者へ行きたいんだが一件以來僕は一文なしで醫者へも行けない。女房がゐなければ暗計でも何でもボんにやるんだが今や其れも出来んし、君、氣の毒だが十圓貸してくれ。十圓。十圓。きつと返すよ。」

帷は言葉の調子もせはしく詰め寄つてもう手を出さぬばかりの様子。鶴崎はこんな處で帷とひそ／＼話をしてゐる處を先生に見られてはと氣が氣でない。又こゝで拒絶しては、ね／＼坊ちゃん、の怨みも空恐ろしい氣がするので其の事、の眞偽はいさ知らず、快く懷中の紙入を出し

ならもう構はないぢやないの。此の家は姉さんの名前で商賣してゐるんでせう、今の中に早くどうかしちまつたらいいぢやないの。」

「花ちゃん。お前さんにもまだ誰にも話をしないだけけど、此の家はとうに旦那が抵當に入れちまつたんだよ。それも御商賣の事か何かで融通したとかさふのならいいけれど、まさかの時私にどうかされやしまいかと思つてさ。電話までお友達からお金を借りたやうにして抵當に入れた事を私ア其のお友達——兜町の矢さんね、あの入から聞いてあんまりだと思つて泣いた事があるんだよ。」

「まあ随分薄情な人ねえ。」

「考へて見ると私アつく／＼情なくなつちまふ。」と姉のお町は袷衣の袖で眼を擦り始めた。小花は言ひ慰めたいにも言葉なく同じやうに俯向いて吐息をついたが思出したやうに、

「姉さん。お春さんは。」

「何か用かい。」

「いゝえ、用ぢやないけれど、いやに静かだから……。」

「もう居ないよ。昨日の晩返しちまつたんだよ。産賣がなけりやアお米の高いのに女中を置いたつて仕様がなからね……。」

「ほんとうね。だけれど何だか陰気になるわね。母さんでもどつかへ行つたの。」

「吾羽の先生へお伺ひを立てに行つたよ。もう歸つて来るだらうよ。大變にあらたかなんだとさ。」

「姉さん、それぢやほんとうに出るつもりなの。」

「だからお伺ひを立てにやつたんだよ。どつちにしても春には間に合ふまいよ。もう斯う押詰つてしまつちや……。」

「姉さん。何處……此の土地。」

「何ほ何でも此の土地ぢや稼ぎにくいねえ。今までおかみさん／＼て云はれてゐたのが出れば此方から皆に挨拶しなくちやならないから。どこがいゝんだらう。牛込も先に出てゐたし……。」

「姉さん、私も外の土地へ行くわ。何だか心細くなつちまつた。」

「お前さんは、折角これまで辛抱したんぢやないか。今の家見たやうな樂なところは捜したつてありやしないよ。お前さんがまるで御主人も同様ぢやないか。」

「それだから辛抱したのよ。私さうでもなけりやア姉さん、全く此の土地にや居られやし

なかつたわ。今だつてお湯だの髪結さんだの大勢藝者衆のゐるところへ行くのと何となく顔を見られるやうで氣まりが悪くつてたまらないんだもの。」

「拘留の一件を言出されては姉も吐息をつくより外に言葉もない。」

「世間はいろ／＼ねえ、姉さん、家の御主人は來年早々旦那のところへお嫁入するんですとさ。計まで入れたほんとの奥様になるんですとさ。」

「それぢや藝者家の方はどうするんだらう。」

「どうするんだか。一昨日からお揃ひで熱海へ行つてゐるわ。だから家は女中と私きりよ。時計が四時を打出した。小花は煙草入を帶の間へしまひながら、一母さん迎ひこね。わたし何ほ何でもあんまり出歩いてゐるやうで悪いから自渡家へ歸つてまた遊びに来るわ。」

立掛けた時あわただしく勝手口の障子を開けた母親。下駄も脱がぬ先から、お町や大急ぎだよ。旦那が花ちゃんのお客様と表の煙草屋さんで煙草を買つておゐだよ。お寄りになつたんぢやないのかい。」

「いゝえ。」と云ふより早く立掛けてゐた小花は狭い勝手口をば母親を突退けるやうにして露地

に考へて見れば蝶子も可哀さうな女だからな。

大通をいつか電車の停留場へ来た。鶴は立止まると袂から朝日の袋を取出して、「君、煙草はどうだ。」

「ありがたう御座います。」

「遠慮せんでもないよ。これア蝶子の小遣で買った煙草だ。君、僕のワイフは實に不思議だね。僕は今日まで一文もやつた事がない。それなのに白粉でも香水でも皆自分の小遣で買ふ。不思議だよ。實家からは今だに時々郵便爲替で小遣を送つて来るんだ。だから彼女はいつも金持だ。ところが僕の方はあの一件で東洋新聞の方

も軍國社の方も其れから野球倶楽部の方も四方八方一時に敬遠主義と來たぢやないか。實に始めなものだ。それだから今の處大にワイフを優遇する必要がある。法學士もかうなつちや實に哀れだな。はゝゝゝは。」

鶴は呆れて返事も出来ない。

「はゝゝゝは」と鶴は獨で笑ひつゝけた後、「それにね、君、彼女は色が黒くつて縮毛だらう。素性なんか面倒臭い。

何うでもいいや。今の處秘密を知つてゐるのは僕と君だけなんだからな。」

やつと電車が來た。明いた席が離れてゐたまま二人は別れわかれに腰をかけ鶴は金杉橋鶴は赤羽根橋の寒換切符を切らした。

## 十七

縁起棚を後に薄暗い帳場の長火鉢に煙杖をついた愉快のおかみ、蓑衣に半纏、髪もいぼじり巻のまゝ沈みきつた調子で、「花ちゃん、わたし實は思ひ切つてもう一遍商賣に出ようかと思つてゐるんだよ。今日はもう二十三日ぢやないか。もうすぐお正月だつて云ふのに何時までものんべんと斯うしちや居られないもの。」

「姉さん、ほんとにもう如何しても許可にやならなさうなの。」と呑み掛けた長煙管の手をとめて氣の毒さうに姉お町の顔を見たのは、妹の小花である。小花はかの一作で五日間の拘留を一日壹圓ヅツの罰金にして貰つて藝者家の二階へ引籠つた後、下町とはちがひ然ういふ事は折々ある山の手の事として今では相變らず商賣に出てゐたが待合愉快の方は其の時かぎり營業禁止になつた。金主の雲林堂は勿論の事組合事務所の方からも今だに引續いて其の領へ喧願の運動はしてゐるが、もう彼れ此れ一ヶ月ばかりたつた今日になつても一向許可の模様がない、とい

ふのは雲林堂が三日に上げず兜町の仲間と多い時には同勢七八人愉快の二階をの引き處にしてゐたのが早くも其の節へ知れてゐるが爲めとやら。

「どうしても駄目らしいんだとさ。昨日も事務所の方先生が來ても困つたつてさう云ふんだよ。あの方の間違ひならいくら長くつても十四日の停止で禁止にやならないんだけれどお花の事があるからバケ敷からうつて云ふんだよ。」

「姉さん、あの時にや誰もお花なんぞ引いてやしないぢやないの。」

「あの時はさうだけれど、不開始終旦那がいけないぢやないか。あの頃の事もつまりそれが原因なんだとさ。」

「姉さん、旦那はさうしようつて云つてゐるの。商賣に用でもないゝつて云ふの。」

「どうでもいゝんだらう。此頃は何か相談してもちつとも身を入れて聞いちゃ下さらないんだよ。當分素人で遊んでゐりやいゝぢやないかつて、さう云ふんだけれど、それぢや行木が心細くつて仕様がないやね。此間中からどうも怪しいんだよ。淺草の方へ出來たんだつて云ふ話だけれど……」

「だから男はいやねえ。姉さん、先がそんな風



ら大賀老人が手紙で足へ侯爵家の執事取調に就いて人員不足の虞から貴下の御高足鶴崎巨石君を侯爵家政務所の臨時雇員に御借用申したいが先生の御内意如何に候哉幸に御許容あらば何卒先生より巨石君に其趣御承諾あるやう御話が願ひたいと言つて來たが巨石お前はどうかする考へちやと相談された。鶴崎は何事も先生の御下命次第との容に海石は別に不知を云ふ譯もない。其の日鶴崎は大賀家へ出頭して厚く禮を述べた。大賀賀老人は先夜の逃走以來兩三度の會見に小心翼々とした鶴崎の人物をすつかり見抜いて此れなら大丈夫だと此頃竊に内議の決定した侯爵家實什賣立の事務について己が腹心のものとして巨石を使ふ事にしたのである。實什賣立の事は侯爵家では何の相談もない先に既に去年の秋頃道具屋連中が頻に騒ぎ立てたため新聞にまで載された事があつたが、その時には大賀賀が大反響を稱へて其のまゝ中止させた。大賀賀は實什の賣立をば一世一代金儲のしをさめにしようとして深く畫策する處があつたからである。それは「先客評判に世間の人氣を煽らせて置いてじり」と陰から道具屋をいぢめる一方にはゆつくりと手を廻して貨物下調のついでに盗んでも知れないう

なものは盗めるだけ盗んで自分の家藏品と混同させてしまはうと考へた事である。もとく足利家のお供者であつた大賀賀の家には升領の物品も少くないので、よしんば怪しいと脱むものが出て來た處でどうにでも云拔けられる。大賀賀はそれや此れやの事から此頃しきりに自分の手先に使ふ腹心の人物を物色中、鶴崎を見てこれに白羽の矢を立てた譯。そんな事とは露知らぬ鶴崎は侯爵家から月給六拾圓大賀賀の手許からは自家の所藏品もついでに目録なんぞを作つて置いて貰ふから別に四拾圓と云ふ話に唯只有難く忝く、事務は來春五日からと云ふ事であるが、早速昨日は四谷坂町なる家令團に何某の家に名刺を置きに行き今日は又砂土原町なる侯爵邸内の事務所へ顔を出しに行つた其の歸途、屋敷の土塀について急な塀を抜けてとすぐ雲林堂の店先なので別に用事はなが通るかゝりに立寄ると主人相澤は丁度出掛けようとする處、そのまゝ話しながら新見附を抜けて知らず富士見町の電車通へ出るや否や忽ち小花に目つかつてしまつたのだ。鶴崎は來春まづ四五月頃にならうと云ふ實什賣立の事については堅く秘して口を噤んでゐたが、すると雲林堂は道々頻に自分の計畫を話

し出した。この十月以來砂糖株と紡績株とでざつと小一萬圓儲けた處へ地方の金主もついたので巨社組織で銀座から野廣小路邊へ當代新畫展覽の賣場を開かうといふ計畫中來年早々株式の募集をする手筈である。さうなつた晩には鶴崎先生に新畫仕人の方の監督でもして戴くばと云ふのである。鶴崎はどこへ行つても館ころ餅で頬邊を叩かれるやうな話ばかりなのに今まで空虚な財布が俄に重くなり酒なんぞはどこへ行つても合めると云ふやうな大きな氣にもなれば、又どうやら狐にでも化されて目が覺めれば何もかも心持もつてしまふのではないかといふやうな心持もする……。「先生、お茶のかはりにどうぞ一杯」といはれて鶴崎は始めて我に歸り今更らしくあたりを見廻した。一同杯を取遣りしながら何處の待合がよからうと再びお町に小花と母親との話が女だけになか／＼決しないのを幸ひ鶴崎は兎に角今日は雲林堂を残して營業禁止の待合愉快の暇場を立つたが、もとより目のない酒の事知らず知らず一合ほど飲んでしまつたので眼の縁はもうほんのり赤くなつてゐた。

の間道を表通へ駈出すと、丁度雲林堂の亭主相澤と鶴崎石の二人が煙草屋の店先から九段の方へ歩き出した行手の正面。

「旦那。まあ素通りですか。先生も随分ねえ。」

小花は急込んで聲まで少し顫せたが雲林堂は落ちついたもので

「停留場まで先生をお送り申して、それから寄らうと思つてた處だ。年の暮で身體が幾個あつても足りやしねえ。」

「姉さんが大變心配してるわよう、旦那。」

「先生、困りましたな。どうしませう。」

「私はこゝで失禮しませうよ。君はおかまひなく……。」

「あら、先生、それぢやあんまりよ。あなた。」

鶴崎はもう二度と待合へは足を踏み入れまいと怖氣がついてゐるのであるが、何の彼のと往來端で小花に付纏はれるのも又迷惑なので人目を避けたいばかりに横町へ曲つた。曲ればすぐ

兩側とも待合のついた新道の出口まで一同を迎ひに来てゐたお町。半纏だけ羽袖に取換へた寝衣の前を羽へながら駈け寄つて、

「先生、先日……」と云ひかけたが此の先日は何よりの禁物とすぐ心付いてか獨りて慌忙で、「先生、先生、どうぞ上り花でも召上つてい

らしつて下さい……。」

あたりの待合では冬の日の短かきにもうそろそろ門口へ水をまいたり鹽を盛つたりしてゐるのに、愉快の門のみは空屋も同然扉が閉めてあつて街燈の火屋に空しく其の名を留めるばかり、冬枯れの柳がいかにも淋しく哀れに見えた。

「これぢやどうにも法がつかない。勝手口からお通り下さいちや何ぼ何でもあんまり失禮だ。お町、どこか心安いとはないか。お向うはどうだ。」と雲林堂は立止つて卓月と書いた街燈の出してある向側の待合の方を見返つた。

「相澤君、僕の爲めならそれにや及ばん。今日はどうせゆつくりしては居られないんだから……。」

「それぢや上花だけでも、ほんとうに失禮なんですけれど。それから、ねえ、花ちゃん、何處がい……。」

「さうねえ、家のお隣の明月さんはどう……。」門口でさう何時までもごたごたしては居られないので、鶴崎も雲林堂も仕方なく開放したままの勝手口から一先内へ上つた。然し二階はそれ以來謹慎の意を表する爲め雨戸がしめてあるといふ始末に、一同はごたごたと長火鉢のまは

りに坐つた。

外から這入つて來ると靴場の暗さは又一層、人の顔も見えわかね程である。鶴崎は直様深夜の騒ぎと留置場の薄暗さを思出して着たまゝなる二重廻の襟に首を縮めて身ぶるひした。相澤は長火鉢の火を掻きほじつて、

「お町、もつと火をおこさないか。それから早くお燭をつけな。」と云つたが、鶴崎はどうしたのか止めもせず、小花が持出す上花をも取上げず唯ぼんやりと考へ込んだ。

空恐ろしい氣がすると共に鶴崎は其後の成行を思返して俄に不思議な氣がし出したのである。昔と自分の二人が此家の二階から時雨のびしよびしよ降る中を警察署へ引致されて留置場で一夜を明した、それが爲めに蝶子が書置を置いて家出をした。蝶子が家出をした爲めに自分は今大須賀家へ出入をするやうになつた。それからまだ一個月もたないのに大須賀家への出人から茲にこの押詰つた年の暮今まで夢にも思はなかつた開運出世の道がついて來た。此の分で行つたら來年の春にはどんな福の神が舞込んで來るのやら。全く不思議でなくて何としよう。

二三日前の事である。鶴崎は突然海石先生か

よ。」

冬の日は折からの黄昏時、明いやうな薄暗いやうな妙に目のちらつく時である。不意の驚愕と心配と不審とに甚しく精神の混亂した鵜崎は「一層夢のやうな何とも云へぬ心持、引かれる袖を拂ふ力もないらしく全く氣の抜けた人のやうに小花の云ふがまゝに唯ぼんやりと自分の舊宅へ上つた。

## 十八

その夜鵜崎は案外早く八時頃家に歸つた。

身も心も疲れきつて九時を打つか打たぬ中お座に床を取らせて寝ようとした時「おたのみ申します。」と呼ぶ來客の聲。

取次に出たお慶が立戻つて來て差出す名刺を見るときで心當りのない知らぬ人である。

「間違ひぢやなからうな。」

「鵜崎先生にお目にかゝりたいと仰有いました……。」

「ふーむ。さうか。どんな方だ。」

「眼鏡をかけた洋服をきた色の白い若い方です。」

「なに、眼鏡をかけた若い方……。」と鵜崎は覺えず聲を高めたがお慶の手前やつとさあらぬ體

を粧ひ、「兎に角お通し申してくれ、二階がよい。」

鵜崎は先に二階へ上つて待つ間もなくお慶に案内されて上つて來た來客。年の頃は二十八。背廣の洋服を着て油で分けた頭髮をばテカテカひからせた色白の男である。

「始めてお目にかゝります……。」

「は。私は鵜崎で御座います……。」

「昨年まで私はあの……大須賀さんのお屋敷に書生をして居ました。」

「大須賀さん……。」

「は……。」

二人は黙つてしまつた。相手ともに電燈の光をいとふやうに横を向きながら又互にそつと様子を窺ひ合ふ。色白の男はやがて決心したものの、如く少し聲を顫はせ息を切らして、

「外の事でもありません。今日はあの……途中の事で……往來の事で……まことに失禮をいたしました……お詫に何つたのです……此れは輕少ですが……。」と云ひながら商品切手を入れたらしい薄い桐の箱を風呂敷から取出して鵜崎の前へ差出した。

「いや、お詫ならば私の方から何はなければならぬのです。こんな御心配をなすつては……」

却つて困ります。これはどうか其方へ……。」

「それぢや私が困ります。どうぞ。どうぞ……。」

「然しどうも頂戴する譯がないですから……。」

「いや、どうぞ、其様事を仰へらずと、どうぞどうぞ……。」と今は夢中で桐の箱を突付ける男の聲はいよゝゝ顫へ、手をついて鵜崎の顔を見

上るその眼は睨むやうに据つてゐる。

鵜崎は氣を吞まれ座蒲團から後退りしながら、「どうも困りましたな。」

「どうぞ……。」

「困りましたな。困りましたな。」

「どうぞ……。」私はお請取り下さらなければ私は歸れませんから……歸れませんからどうぞ、どうぞ。」

男の様子は稍物狂はしいばかりになつた。鵜崎は遂に止むを得ず「何の事ですさかさつぱり譯が分りませんが、それでは一先お預りして置く事にしませう。」

男はやつと安心したらしく「それではいづれ又お伺ひを致します。それではどうぞ今日のことはあれなり、どうぞ、何にも御存じない事に……それではどうぞ何分よろしく。」と座を立つた。そして格子戸をあける時再び、「何分よろ



小花は送り出すとも又尾いて行くとも何方ともつかぬ態度で同じく勝手口から下駄をはき、「うーさん、九段でお乗りになるんでせう。わたしも家へ歸るんだからそこまで一緒に行きませう。あなた。きたないけれど露地を抜けて行きませうよ。そんなら一緒にでもかまはないでせう。」

鶉崎は小花がいくらついて来ても愉快の家さへ出てしまへばもう大丈夫だと安心したものが今はさして迷惑な顔もせず導かれるまゝに新道から露地を抜けて又向うの新道へと、いづこも同じやうな待合つゞきの軒下を歩いて行つたが、すると唯ある待合の門口に幌をかけた車が二臺、狭い新道は下した梶棒の間でも跨がねば通れさうもない處から鶉崎はどうしようかと立止まる途端、待合の格子戸がガリとあいて二人連の男女、格子戸からいきなり梶の内へと飛び込むやうに身をかくさうとする。此方も元より人に顔を見られたくない場所柄とてびつくりして後じさりすると後から知らずに一步踏み出した小花にぶつかり、その反動で微酔の鶉崎はよろよろと前の方へよろけ出して梶棒へぶつかった。車がぐらぐらと動いたので丁度片足を踏込へ踏み載せようとした女の客は踏みそこな

つて聲を立てながら梶へかじりつく騒ぎ。深く半面をかくしたその肩掛はころ／＼と轉がつて来た鶉崎が古帽子の上に落ちる。こゝに相方圖らず顔を合せあつと叫んだが女の方は早くも梶の中へ身をかくしたので車はそのまゝ何の事もなく曳き出された。

「うーさん。どうなすつたのよ。」と小花は白痴のやうにいつまでも口をあいて茫然と車の後を見送つてゐる鶉崎の様子に、「どこか御怪我でもなすつて。」

鶉崎は歩き出したが拾つた帽子も手にしたまま、「あゝ實に弱つた。大變な人に見つかつてしまった。だから二度とこんな處へは来まいと思つてゐたのに、あゝもう仕様がなない。」

小花を見返つた目には涙と共に云ふに云はれぬ憤怒の色が現はれた。何の事やら仔細は分らぬが容易ならぬ鶉崎の様子に小花はおそるおそる、「あの女の方御存じなの。」

「御存じどこぞか。……實に弱つたな。藝者を連れてゐる處なんぞ見られちや實際僕はもう立瀬がないんぢや。」

「あら。だつてあなた向の方男と御一緒よ。お連込のお客様ぢやないの。あなたの顔を見た時の様子ツちやなかつたわ。」

「男の方はどんな人だつた、白い髭のあるお耶さんぢやなかつたか。」

「いゝえ、あなた。金縁眼鏡かけた綺麗な若い人だつてよ。」

「ふーむ。」と鶉崎は首をかしげながら立止つてしまつた。

車へ乗つた婦人といふのは大須賀顯正の若い後妻であつたのだ。鶉崎はわが身の信用のみを氣にかけ向の事情などは全く思ひを廻す餘地がなかつたのであるが思返せばいかにも不思議だ。どういふ譯で今頃待合なぞへお出でになつたのであらう御一緒に若い男と云ふのは誰であらう……鶉崎は立止つて彼の待合の方を城返つたがもう車も何も見えよう筈はない。いつか新道を抜けてしまつて別の横町を歩いてゐる。と氣がつけば、ふと見上げる片側の石垣から狭い横町へと長く枝を出してゐる大木の形にどうやら見覚えがあるのも道理。この秋芝へ引越すまで十年間住み馴れた家のある横町である。

「あなた。すぐその家ですから鳥渡寄つていらつしやいよ。あら、さうだつたわ。私の家はうーさんの先にいらしつた家だつたわねえ。丁度いゝわ。あなた。御主人は熱海へ行つて家は私と女中きりなのよ。鳥渡寄つて御覽なさい

白いといふ事もなくお客とさへ云へばもとより誰彼の差別もない商賣柄老壯美醜に對する好き嫌ひの念も全く失せてしまつたが流石女の身の行末を思へば心細い氣がすると見え、どんな醜男でもいゝから此人は私のお客だといくら氣をゆるして我儘の一つも云へるやうな人が一人ほしい。だましてお金を取らうといふほどの謀計は元よりないので、綺麗を張つて大勢にちやほやされる危険なお客よりも唯おとなしい親切な人であればよい。そしてよく困つた場合にその人から小遣錢でも貰へれば結構だと至極ひけ日な望みを起してゐた。これには最初白山で逢つた時から何となく鵜崎先生がいゝやうに思はれてならなかつたのである。遊びに來る度數の少ないのが却つてますゝ頼母しく思はれてゐた矢先、昨日の約束を堅く守つて今日は向うから自分の家まで迎ひに來てくれたのかと思へば、もう日頃の望みは叶つたのも同様である。小花は嬉しいあまり拘引の一件さへ此の人と一緒だつたのは矢張深い因縁ではなかつたのか知ら。俄にそんなやうな心持さへして二階の座敷へ南向ひに坐ると共に膝の上に男の手をぎゅつと引寄せ、

「ウーさん、ほんととうによく來て下すつたわね。」

ゆつくりして頂戴よ今日は。今お出を入れて來ますから。ねえあなた。此れがほんとに私の家で、あなたが旦那だつたらどんなに嬉しいだらう。

然し鵜崎は唯さよるゝと四邊を見廻すばかりである。昨日の夕方より今日は朝だけに自分の古机が置いてあつた跡には小花の筒笥が据ゑられたばかり、疊の上の焼焦しから押入の唐紙や壁の腰眼に繪具のはねかつた痕まで十年間自分が古した生活の跡はそつくり其儘残されてゐる。鵜崎は何とも知れず深い思ひに沈められた折から茶を汲みにと下へ降り行つた小花のやがて再び上り來る聲音。それが不圖其の瞬間お母が上つて來るのであるやうな心持がして鵜崎は見返るともなく見返れば、もとより別人ならぬ小花の手いゝ髪を撫でつけ薄く白粉さへつけた姿、十人並より以下の容貌も鵜崎の目にほのぼの馬面と比較して實にびつくりする程艶麗に見えた。

「あなた。どこにしませう。お隣の明月さんにしませうか。」

鵜崎は黙つて不審さうに小花の顔を見てゐる。

「ねえ、あなた。こゝでゆつくり二人ツきりて御飯でも食べたいわねえ。」

鵜崎はだしぬけに、「昨日車の置いてあつた家はどこだ。」

「あなたの置いた處。あれは溝邊村さんよ。お弘めた時から一番よく掛けてくれる家だわ。靜かでない家よ。」

「お前、よく知つてゐるのか。あの家は。さうか、さうか。それぢや昨日のお客さまの事。男の人はどう云ふ人だか、お前内證できいて見るわけには行かないだらうか。」

「あのお連込みの方……。」

「何、連込み……。」

「あの素人さんの事でせう。」

「どうして待合なんぞへお出でになつたんだらう……。」

「戀は思案の外よ。逢ひたけりやア仕方がないわ。誰だつて同じ事だわ。」

「……………」

「あすこの家は年を取つたおかみさんと娘さんきりでせう。だから能く連込のお客さまがあるわ。いゝとこのお弘さんで自動車運んでこそ遊びに來る方があつてよ。藝者なんぞより近頃の奥様やお嬢さんの方が、そりやア大

しく。」と繰返して寺の門をくぐるが否やどうやら石段をば駆け下りたらしい様子であつた。

鶴崎は何に限らず不時の収入は女房に知らせず内證で銀行に預けてしまふので無理押付にされた商品切手の箱もその夜は熨斗のついた包

紙のまゝ机の抽斗にしまひ、一家中枕を並べて下座敷の夜具の中へ這入つたがなか／＼寐つ

かれない。夜半の二時頃便所へと起出たまゝ竊と二階へ上り机の抽斗から薄い桐の箱を取出し

中を改めると金五圓と書いた九段下の或草子屋の切手なので、すこし安心したらしく其儘元の

やうに蓋をしようとして誤つて箱を落すと切手の下から何やら紙幣らしい紙片が見えた。これ

は不審と再び取上げて切手を取れば其の下には正に百圓札……然も一枚二枚三枚まで重ねてあ

る。鶴崎は電燈をば紐の引切れるほど力まかせに引下げて紙幣の裏表を改めたが冗談に入れ

た玩具の紙幣ではないらしい。鶴崎は恐るゝ如く急に身のまはりを見廻し暫くは茫然としてゐ

た。

寢床へ歸つてもいよ／＼以て寐就かれるものではない。夜が明け電燈が消える頃始めてうと

うとして眼をさますと子供はとうに學校へ行つた後丁度八時頃であつた。鶴崎は朝飯をすま

すや否や商品切手に正金三百圓を懷中にして

一日散に弟鴨なる大須賀邸の門前まで駆けつけたが急に又考へ直したらしく幾度となく扉外を

行きつ戻りつした後市ヶ谷の雲林堂へと志した。鶴崎は思案にあまつて百圓紙幣の始末を誰

にか相談したいと思ふものゝ差當つて雲林堂の亭主より外にはこれと云つて差支のない知己が

思出せな。然し電車の中で鶴崎は再び思返し今度は直接昨日車のぶつかつた待合へと見

覺えた新道へ這入つたまではよかつたが、昨日はその場の周章初狼に今日となつては何の家

であつたのやら、いづれも同じやうな見付に見當がつかなくなつた。もう斯うなつては小花を

呼んできより道がないと少し躊躇ひながらも決心してまづ横町をば昨日立寄つた小花の家の

前まで歩いて行つた。

すると小花は丁度起きた處と見て細帯一つのだらしもないなりを構はず二階の雨戸を

あけながら往來を見おろしてゐた。びい／＼笛を鳴して行く羅字屋の車の外往來は丁度八通

りが杜絶えた處なので、小花はすぐに鶴崎の姿を見つけて、

「あら、嬉しい事ねえ、さア御上んなさい。」と呼ぶより早く二階をかけ下り表の格子戸を明け

て顔を出した。

小花は昨日の夕方鶴崎が「また出直して来よう今日は全くいそがしいのだから来られたら

明日にでも乾度来る。」とその場を飄忽化して歸つた今朝の事とて、何と云ふ義理の堅い頼もし

いお客だらうと其の瞬間しみ／＼嬉しい氣になつて格子戸に立寄る鶴崎の身體に女中の前も

憚らず抱きつた。小花はその姉と同じく又かういふ山の手の賤族一般の例に漏れず年十五六

になるを遅しといづれも本所深川溝草邊の貧民窟から周旋屋の手に狩出されて女工にあられざ

ば藝者と先天的に運命のきまつてゐる女の一人である。いづれにしても抱へた主の使役と命令

と其の周囲の習慣に盲従して奴隸の生涯を送るやうに出来てゐる女の一人である。影ではい

つもうるさいほど不平を云ひ愚痴をこぼしながら人に惡意地をつけれない限りには自分一人

ではどうしようとも考へつかない意氣地のない愚鈍な女の一人である。いくら馴れた馬でも

時には荒れて人を蹴る事もあるやうに急に逃げ出したればはたたりする事もないではないが其

の結果は先へ行つて矢張り別の人の喰物になる女の一人である。小花は長年この商賣に馴れ

きつて今ではさして辛いこともない代りに別に面



## 新橋夜話

## 掛取り

お葉はその朝朋輩のお松と枕を並べた寢床から起きるが否や、いつものやうに鯉口の半纏を着て、手拭を姉様かりに座敷の掃除にかゝつた。

お葉は待合衣川の女中である。奥の四疊半には昨夜から泊込みのお客様があるので、そこだけ

を除いて二階の欄干や梯子段まですつかり雑巾掛けをして下りて来ると、帳場の長火鉢には内儀さんがもう楊枝を使ひながら、昨夜の埋火を

かき立てゝゐるところであつた。何處となく酒の香の立ち迷ふやうな薄暗く濕ほい家内に引變

へて、障子の磨硝子からは表の格子戸を越して、往來の向側に輝く冬の朝日が、如何にも暖

く麗かさうに見えた。内儀さんは「お早う。」と挨拶するお葉の姿を見ると直ぐに、

「それぢや、お葉。御飯をたべたらすぐ行つて来ておくれ。遠いんだからね。」

云はれて、お葉はその儘お松よりも御お焚のお鐵よりも先きに朝飯の箸を取つたのであるが、それでもお化粧をして着物を着換へ、内儀さんから重ねて用向きの口上やら何やらを聞いた後、去年のお歳暮に入りの藝妓衆から貰つた新しい下駄をば自分て揃へた時には、もうかれこれ十一時近くで、勝手口には昨夜の皿小鉢を取りに来る仕出屋の男の聲が聞えた。

お葉は家の前の見馴れた裏通りから藝妓屋の間の露地を抜けて、朝日の一面にあたつてゐる銀座の大通りへ出ると、今更らしく驚いたやうに四邊を眺めた。通り過ぎる電車の音に譯もなく胸をはすませた。内儀さんから吩咐つた用事をすつかり忘れてしまつたやうな氣がしたばかりか、家を出る時にはよく呑み込んだつもりで電車の道順さへ、もう何が何だか分らなくなつたやうに行先が猶更に遠く思はれた。お葉は十四の秋に待合衣川へ住込んで以來もう五年ほどになる。箱根へも江之島へも行つた事がある。羽根川も成田さまも知つてゐるのであるが、そ

れはお客様と藝妓衆のお伴をして大勢わい／＼騒ぎながら行つた迄の事である。女身ながら帶の間へ二三百圓の正金をはさんで、一人で夜道を歩いたこともある。然しそれは僅か五六町とは隔つて居らぬ行きつけの銀行へ内儀さんの代りに行つた次第である。ほんとの遠道を唯つた一人で電車に乗るのは年に一二度、南千住の親元へ數入りに行く時ばかり、東京の端れと云へば深川と品川と淺草より外には何處も知らない下町の女の身には、今日家の前定を取りに行く山の手の大久保といふ名を聞いてさへ、まるで狐か、狸でも仕んでゐる處のやうに氣味わるく想像せざるを得なかつた。一足も早く電車に乗らないと、其の目には歸つて来られぬいやうな氣もして、銀座の大通りをば松屋や三上屋や天賞堂の店先の美しさに立ち留る餘裕がなく、直ぐに尾張町の四角まで来た。

「お葉姐さん。お早う。」

いきなり電車を得つた人の間から聲をかけられて、お葉は振り返ると、庇髪に高貴織の半ゴートを着た王近江屋の抱へ子であつた。

「君ぢやん。お詣り？」とお葉は女の顔として、珍しくもない藝妓の髪から衣裳を見た。

「いゝえ。實家に病人があるもんですからね。」

膽なのよ。」

「ぢやア矢張りかなア。實に驚いた。」

「私がうまく聞いて見るわ。だから、あなたは黙つてお客さまになつていらつしやいよ。」

鶴崎は目を白黒させて懷中の三百圓をそつと握りながら俯向いてしまつた。

「着物着替へるから待つて、頂戴。」小花は立上つて簞笥の抽斗を明け、「お作さん。」とびつくりするやうな大きな聲で女中の名を呼び、「あたいの足袋がない事よウ——」

## 十九

正月は過ぎ二月の始めに新龜千代富士とやらいふ小花の家の姐さんは暑氣よく噂の通り旦那の家へ乗込んだ。小花は其後の看板を借受け姉のお町が雲林堂と手の切れた後その日迄ぐづぐづと素人屋の二階にくすぶつてゐたのを説きつけて姉妹二人で稼ぐ事にした。その資本といへば鶴崎の持餘した三百圓と雲林堂から姉が貰つた手切金二百圓とである。鶴崎はどう考へてもあの三百圓は持つてゐても心持がわるい處から日頃の吝嗇には似もやらず捨てたも同然綺麗に小花にやつてしまつたので、其の後は新龜千代富士といふ藝者家の旦那も同様毎日侯爵

邸内の事務所と大須賀家へ通勤の歸りそつと人知れず立寄つて長火鉢の前で一杯やる身となつた。

四月の末いよいよ侯爵家の賣什賣立があつた。鶴崎は事務所からの慰勞金やら大須賀家からの心付やら、又幸水堂を始め其他の骨董商からの禮金に加へて殊に雲林堂からはその際鶴崎の口添へで大須賀家へ出入するやうになつた爲め十二分の御禮。それと共に藝者家の方は姉妹二人水入らずの稼ぎに鶴崎一人の身はどうやら懷手してゐても喰つて行けさうだといふ話。雲林堂はとうに淺草の方へ河岸をかへ翰は勘當同様亞米利加へ留學に追ひやられた後可哀さうなのは蝶子一人であつた。蝶子は鞆の病骨を受けた爲め一時姉妹のやうに思はれたのは荷病狀鬼胎とかいふ病症で其年餘時分手術の效もなく病院で死んだ。

「この小説は大正四五年の時代の寫したるものと御承知あたし大正七年以後物價の騰貴人情の變化其しければこゝに一言御斷り致す也」

## 死のよろこび

シャル・ボオドレエル

蝸牛飼ひまはる泥土に、

われ手づからに底知れぬ穴を掘らん。  
安らかにやがてわれ老いさらぼひし骨を埋め、

水底に鱧の沈む如忘却の淵に眠るべし。

われ遺書を厭み墳墓をにくむ。

死して徒に人の涙を請はんより、  
生きながらにして吾輩の鴉をまねぎ、  
汚れたる春體の端々をついばましめん。

あゝ蛆蟲よ。眼なく耳なき黒の友、  
汝が爲めに腐敗の子、放蕩の哲學者、  
よろこべる無賴の死人は來れり。

わが亡骸にためらふ事なく食入りて、  
死の中に死し、魂失せし古びし肉に、  
蛆蟲よ、われに問へ。猶も憎みのありやなしやと。

〔珊瑚集より〕

浮かして、

「もし、こゝは何處です。」

頬骨の出た、顔の平い、眼の釣上つた車掌は、お葉のあわてる姿を流明に見て知つてゐさうでゐながら車掌臺の上を動かさず寒さうに肩をすぼめて、あらぬ方に顔を外向けながら、平気でチリンと釣革を引張つたので、お葉は動き出す車と共に浮かした腰をすくはれ、出口の方に腰をかけてゐる土方の小頭見たやうな男の膝の上に身體の重さのありたけを投げかけた。びつくりするやら、きまりが悪いやら、お葉は急いで起き直らうとすると、鐵のやうな重い太い腕がぢつと身體を掴みすくめるやうに、背中の上に載つてゐるのに心付いて、我れを忘れて身を跳いた。

「えへムムム。」と云ふ賤しい氣味のわるい聲と共に、酒臭い匂がして、「女の子にかじり付かれちやア、こてえられ無えや。」

「何んで間がいゝんでせう。」と前側にゐた仲間の人と同じやうに聲を合はしてどつと笑つた。

お葉は顔を火のやうにして、動いてゐる電車の上からでも構はず飛び下りたい位に思つた。それからといふものは車中の眼は一つ残らず何

時までもお葉の上にのみ注がれて動かないやうな氣がする。土方に抱きすくめられたと知つた其の瞬間の恐ろしさが今だに胸の動悸を休めさせない。お葉は此の時ふと車の中には、自分のやうな風俗のもの——少し抜衣紋にした襟付の銘仙に、鼠地の縫紋の羽織を重ね、終織の前掛けをきちんと締めてゐるやうな女は一人もゐず、女と云へば皆底髪の高襟ばかり、男の乗客の大半は兵隊である事に氣がついた。知らない人の中に交つて知らない道を行く心細さが一際深くなる。丁度、乗換切符を改めに來る車掌に向つて、新宿の手前で下ると云ふ行先を聞きただすに及んで、お葉の當惑と心細さとはいよいよ激しくなるばかりであつた。

「あなた。これア青山行ですよ。新宿へ行くのなら仕方がないから青山一丁目でお乗換なさい。それから鹽町でまた乗換なんです。」車掌は乗換切符をお葉の膝の上に投げ捨て、急いでボナルのはづれたのを直しに行つた。

乗換なしで行けるものとばかり存み込んでゐたのが、一度ならず二度までの乗換へと聞いて、お葉はもう今度こそは眞實に歸つて來られたい八幡の藪へ投げ入れられたやうな心持になつた。

## 二

彼方此方とまご／＼しぬいた擧句の果に、それでもお葉は漸く、新宿の手前の傳馬町一丁目といふ停留場の位置を知り得たのである。知れない行手の雜儀はまだだけ續くのであらう。お葉はもうどんなに叱られても、二度と再び知れない遠い處へなど使には出まい。家にゐて今頃は掃除の後、夜衣を干したり、お容様へ出す浴衣の洗濯でもしてゐた方がとつくづく後悔した。案外に賑かな大通りをば、右へ曲るのか左へ折れるのか今く見當がつかない。と云つて往來の眞中に立止つてもゐられないのでお葉は内密で小遣の身金と切つて車に乗りうかとも思ひ掛けた時、丁度とある横町の溜りから鞍を掛ける車夫を見て大久やまどと云ふと、

「五十錢おやんなさい。」

「馬鹿におしでないよ。」

お葉はあまりの腹立しさに、後から聲をかける車夫にはもう見向きもせずどし／＼歩いて目當もなく横町へ曲つてしまつた。そして有合ふ煙草屋の店先に十五六のまだ肩掲のある娘がゐるのを見て、



抱ッ子の君ちゃん抱へ主の質問にでも答へるやうに、申請らしく云つて、「如さんはどちら？」

「大久保ッて處よ。新宿行に乗るんだつて。茲でいゝんでせう。」

「新宿……それぢや如さん、向側よ。向側で乗るのよ。」

「あら。」とお葉は驚くほど大きな聲を出した。そして抱へ子が如さん、またどうぞ……。」と紋切形の挨拶をするのさへも聞えぬやうに、夢中で四辻を向側へと突切つた。額には冬の朝ながら汗がにじんだ。お葉はカッフェー、ライ

オンの硝子戸の前に立つて初めてほとと息をつき、電車の鳴き交ふ四辻の真中で、よくも機殺されなかつたものだ、不思議さうに服部時計店の立つてゐる向側を眺めた。その時玉近江屋の抱へ子は込み合ふ車掌臺の上に押し潰されさうになつて、三原橋の方へ行つてしまつたが、

そして其の後からは殆どあきになつた電車が幾輛もつゞいて動いて來たけれど、然しお葉の待つてゐる線路の上には、條々として柵をつんだ荷馬車が行つたばかり。カッフェー、ライ

オンの硝子にはいつか乗換を待つ人が敷石の上に溢れた。お葉はふと冬の青空を見上げる拍

子に服部の屋根の上の時計が、丁度十一時半をさしてゐるのに氣がついて、もう居ても立つても居られないやうに心が急ぐ、乗換を待つ人達が斷線だとか停電だとか大きな聲で不平をぶつてゐるのが、丁度わが家の燃ける火事の知らせを聞くやうに胸を騒がす。お葉は立ちくたびれて、人々と同じやうにカッフェーの硝子戸へ背を寄せて首を垂れた。突然あたりの人の色めき立つのに心付いて、自分も後れどと駆けつけたが、然し最初に來た電車には、女の身のはかなさは、無滴車の近くへ立ち寄る事も出来なかつた。そして、其の次の電車にさへ、お葉は

横合からづいとい立現はれた色の黒い大男の爲めに折角片足踏みかけた臺から押除けられてしまつた揚句、二重廻しの袖でいやといふほど、銀杏返しに髪を揺盪せにされた。もう何うなつたつて構やしない。半日でも一日でも待たされるだけ待つんだと、早くも拾杯のお葉はその次に動いて來る電車にはわざと人より後れて乗り込んだ。

日比谷公園に來た時腰掛があいたので、お葉は初めて立ちくたびれた腰を休めると、それから丁度車の中もずつと静かに、窓外の往來も廣々として静かに、そして頸から先一面

後から日光に照りつけられる閉切つた車内の暖かさに、お葉は軽い車の揺搖につれて、われ知らずうつとした。毎夜を早くも一時過ぎまで用のある身體のつかれが、一時に臉の上に押しかゝつて來たのである。お葉は兎飼からの奉公人として内儀さんから重寶がられてゐるだけに、お客様の座敷のみならず、小間使のやうに内儀さんの手助けをしなければならぬ。急しい中をば旦那の面酌のお相手はまだしも、一番いやなのは、もう六十に近い旦那の總入歯をば御成の度毎に、うがひ茶碗で綺麗に洗つてやる面は奥さである。電車がく動かずにゐると、乗客の出入する氣勢とに、お葉はふとわれに歸つて、驚いて窓の外を眺めた。こんもり繁つた樹木と、高い上手と、水のかれた堀にかつてゐる低い橋とが見えた。向角の新しい家の前には車掌が氣味わるいほど大勢集つてゐる。空の電車が捨てゝあるやうに幾輛も並んで留つてゐる。お葉はこの見馴れぬ町の有様に何とも云へない淋しさを誘はれると共に、今までぼんやりしてゐる間に、帯の間のものでも取られやしなかつたかと狼狽へもする。同時に若しや茲が自分の下るべき場所でないかとも思ひ惑つてもう堪へられずに腰掛けから身體を

まい。人力車にも乗らず、たつた一人でこゝまで、たいして廻り道もしないで來られたらしい事が、今では自分ながらえらいやうに思ひなされて、お葉はしばし足のつかれをも忘れたが、さていよいよ坂を上りかけると一難去つて又以外なる一難に出遇はねばならなかつた。

下町は埃が立つて困るほどの天氣つゞきといふのに、山の手は昨夜雨でも降つたのか、廣からぬ往來は避けて歩く片側もなく、一面泥濘になつてゐる。乾く間もない日陰の道の霜解けである事をお葉は初めて物珍らしく惜り得た時には、已に新しい駒下駄の爪先ばかりでなく、洗ひ立ての白足袋の踵へも、大きなはねを上げてゐたのであつた。片側は积雪の土手、片側は枯れかゝつた杉垣根の人通りがないのを幸ひに、お葉は懷紙を出して壁の泥を拭き取つたのも、幾度だか知れない。巡査の教へた三ツ口とかの横町は多分酒屋の小僧の出て來たあの曲角であらう。

## 三

霜解はますくはげしい。大きな野良犬が薄氣味わるく歩き廻つてゐる。齒の浮くやうなヴァイオリンの音が聞える。あたりの樹木に物

凄風(せいふう)の音がする。遠く横町のはづれは門が坂になつてゐるらしく、新しい人家の屋根と其の後一面の深い木立には冬の日光がいかに物靜かに照りかゞいてゐたが、横町は兩側ともに日陰の薄暗く、いづれも同じやうな四分板の塀と溜戸付の小門が並んでゐて其の表面にけ大方近所の子供が悪戯したものであらう、霜解した赤土の泥土をば汚らしく塗り捨てた痕が洗ひもせずに残されてゐる。

お葉は一軒残らず兩側の門札を眺めて行つた後漸くに目的の希地(きぢ)と姓名(せいせい)を見出したのは汚らしい中にも汚らしく泥土の跳上つた小門の柱であつた。

大山猛昌：お葉は門をはいる前に、希地と名前とを重ねて見直した。大山さんと仰有るのは衣川へ遊びにいらつしやるお客様の数ある中にも、これほど暗い察しのない、無理な方はないと云ふ位だつた。どんなに外のお座敷がいそがしい時でも、お葉を初め家中の女中をつかり自分の座敷へ呼び上げなければ承知しない。内儀さんがお遊びにお出での度毎にちやんと挨拶に出て來ないと人を侮辱しちよるとか、冷遇するとか云つてお怒りになる。議員さんはつまらんから止めて、今では政治屋さんとかい

ふ商賣(しょうばい)をして居らつしやるとの正(ただ)若いねん、のやうな藝妓(げいき)がお好きで、それが云ふことを聞かない時には、實に手のつけられない程人を困らせるので、お葉はお客様の中では一番嫌ひなばかりでなく何となしに其の逞しい相貌(さうまう)と太い聲とに恐れを抱いてゐるのであつた。いかな時でも洋服ばかり召してゐる方で、いつも二人の車でおいでになり、電車(でんしゃ)下等な奴が乗るからとて、お歸りには必ず車をお呼び申すのである。内儀さんが何からの話から、一此の節はお遊びも藝妓衆の御祝儀が高くなりましたばかりぢや御在ません。お車代だけでも大變なもので御在ますね。」と云ふと、大山さんは、内儀、つかふために儲ける金ぢやよ。あはゝゝゝ。」とお笑ひになつた。

ところが此の如き御全盛(ごぜんせい)も三月とはたゞぬ中、其の年も早十二月にはいるか遠(とほ)いらず、大山さんはふいと颯(さつ)の道を切つたやうになつて、其の月の御約定二百圓近くの上に、其の前の月の殘金五十圓をも合せて、いかほど手紙で御催促(ごびそく)申し上げて、一向に御返事が無い。衣川では止むを得ず最初に大山さんをば松本樓(まつもとろう)とかの崩れから連込んで來た藝妓に對して、おきまり通りの掛合ひをして見たが、いづれにしても無

「姉さん。すみませんが大久保の余丁町つて云ふのは、どつちへ行つたらいいんで御在ませう。」泣かぬばかりの調子である。

「余丁町ですか。」と、娘は氣輕く、「こゝを眞直に行つて、坂を下りて左の方へ曲ると交番がありますよ。それから……交番でお聞きなすつた方がよござんす。」

お葉は初めて生き返つたやうな氣がした。

「どうも有難う御在ました。」溢るゝばかりの感謝の情をば、あはしやうのない簡單な此の一言に託して、廣からぬ横町をば初めて、兩側の様子を物珍らしさうに眺めながら歩いた。

片側に活動寫眞の西洋館があつて、其の傍の露地から二三人の藝妓が何か大聲で笑ひながら出て来るのを見て、お葉はまアこんな處にも藝妓があるのかと思議さうに其の後姿を振り返つた。突然凄じい物音がする。何事かと思ふ間もなく大通りの方から、この狭い横町へと、馬に乗つた兵隊さんが幾人となく揃つて駈けて来るのである。丁度坂の下り口の其の片側にお寺の門があつたので、お葉は少しばかりの空地を幸ひ其處へ身を避けたのはよかつたが、すると、其の門前には電信の工夫が六七人地面に蹲踞んで午飯の辨當を食つてゐる處であつた。往

來の向側に立つてゐる電信柱には竹梯子が寄せかけてある。

「いよ。別嬪。」と工夫の一人が、狼狽へて駈け込むお葉の姿を見ると共に叫んだのが手始めであつた。

「とんだ辨天さまの御入來だ。」

「姉さん。一杯着上げようかね。」といふ奴がある。地面の上から凄い眼を輝して倅目も振らずお葉の裾の合せ目を覗く奴がある。折から突然、風がさつとばかり褌袴の裾を、翻さしたから堪らない、一同はわつと騒ぎ立つた。

「見るけ果報だ。」

「新宿へ行きやア二貫の處よ。」

「赤い褌襦は年季が長えとよ。」

それから聞くに堪へない雜言がついた。けれどもお葉はいかほど逃げ出したくても、馬に乗つた兵隊さんの行列はまだなか／＼通り切らずに、四邊一面に砂煙を立てゝゐるではないか。

漸くにしてお葉はこの難所を逃れるや否や駈けるやうに坂道を下り行つたが、すると突然石につまづいて、辛くも足を踏み止める、直ぐ其の前に何か蠢く體積のやうなものがあつて、

「お通りがかりの奥様方や旦那様どうぞ一交。」と云ふ聲がする。

二目と見られぬ癪病の食が二三人往來の砂の上にひよ／＼お辭儀をしてゐるのであつた。坂下の町は谷のやうな凹地の底に、ごたごたと小家の汚れた屋根を並べてゐる。お葉は何と云ふ事もなく、之れから先きは×町ではないのかと思つた。

下り切つて、煙草屋の娘に教はつた通り左へ曲ると直ぐに交番所があつた。丁度人のよささうな、指のない巡査が往來の眞中に立つてゐたので、お葉は行先の町を尋ねると、

「余丁町は何番地だね。」

「六十二番地でございます。大山さんて仰有んでございます。」

「六十二番地……それぢやアこゝを眞直に行つて、大きな酒屋の前の坂を上るんだ。」

「はい。」

「それからずうつと何處までも眞直に行つて三ツ日の横町だつたかな……右へ曲ると六十二番地だ。」

「どうもお世話さまで御在ました。」

お葉は半町と行かぬ中、すぐにそれらしい酒屋と坂道を見付けたので、もう行先は誤はある



り欺されてゐたのだとしみ／＼氣の毒なやうな氣がした。

お葉は再び電車に乗つた時、力抜けのした疲勞と共に、初めて堪へられぬほどお腹のすいてゐる事を知つたが、もう何うする事も出来ずに銀座まで来てしまつた。日がもう傾いてゐる。今朝電車を待つ時に見た服部の時計臺を思出して見上げると、あゝもう四時近くになつてゐるではないか。お葉はいつも遠道の使ひから歸つて来る時、早かつたねと云つて呉れた例のない主人の眼の輝りを想起して、今は氣の急ぐよりも自然と心は滅入つてしまつた。商店の中にはもう電氣燈がついてゐる。

## 色男

芝居を見る度、自分は大阪の芝居に出て来る色男と、東京の芝居に出て来る色男とは全く面目を異にしてゐるのに心付く。伊左衛門も活兵衛も忠兵衛も、大阪の色男はどれもこれも、皆吧く迄柔和で親切で、そして何處にか恐ろしい程我慢つよい處、蘭切のしない處がある。封

印切の忠兵衛が若し江戸ッ子であつたならば、封印のきれるまで、あんなに何時までも八右衛門の侮辱を忍んでは居まい。封印の切れる騒ぎの前に、爛癩を起して八右衛門をばかりとやつ付けてしまつたかも知れぬ。先代菊五郎のやつて、到底、龍治郎の河庄には敵しないと云ふ。番羽屋の紙治はどことなくいき過ぎて、さつぱりして、女々しさが足りなかつた爲めであらう。「冥土の飛脚」の作者が如草か默阿彌であつたならば、忠兵衛は封印の切れるのを見ると共に直ぐと氣が變つて、くるりと尻を捲くり、泥棒になつて高飛びをして仕舞つたに違ひない。女に見惚れて自分の肩先から羽織の落ちるもの知らずにゐる程の若旦那三郎と雖も一度切りさゝいなまれて生き返つた後は、まんまと豪傑なゆすりになつたではないか。坊の修行をしてゐる清心は女犯の罪を悔いて入水したものゝ、いざ死にきれないとなつた晩には翩然として鬼薊、清吉と化した。江戸の作者の筆になつた色男は馬鹿に手早くあきらめを付ける代り、おいそれと黙つては引込まない。どこか品で悪賢く、一度もう駄目だと思切つたら、さりと氣を入れ替るが早いか、直ぐに捨身になつて惡に

出る。それも最初から大概の見當をつけて置いて、何かの機に逢ふや、また誤もなく、もう加減に年月の納め時だと、自分から綺麗さつぱり萬事の結末をつけてしまふのである。

自分の知つてゐる若旦那京さんの遣口は、何かにつけて一寸然う云ふ趣きがある。京さんと云ふのは銀座通の唐物屋の息子で、其の年の俵、二十八の聲を聞くと、どう思つたのか突然もう惚れたはれたでも有るめえと云つて、媒介口の兄合もせずに、堅氣の娘を買つて馬鹿におとなしくなり済して仕舞つたが、それまでには随分はげしく新橋界隈を荒して歩いた。

京さんは色の淺黒い細面の、小氣味よく締つた口尻と、剃立の髯の青く見える際立つた頃の様子とに、どことなく意地のわるさうな凄味があつて、例へば銜煙管でもして、鳥渡人を横目に見る時などには、殊更にこの特徴が初対面の人の目に印象を留め易いのである。大勢の人の中などでは一向目立ない代り、私や伊井さんに見たやうな人は大嫌ひと、頼まれもしないのに妙にすねて見せる連中に對しては、往々にして京さんのやうな種類の容貌が甚だ成績のいい事は、京さん自身も已によく之れを承知して居たので、京さんは極く遊び初めの時分か

袖の振れぬ事は初めから分つてゐるので、何  
のかのと云ふ中一月も早く過ぎ、二月になつ  
た今日、まづ偵察かたゝ女中のお葉を御屋敷  
へ差出した次第である。

お葉は大山さんばかりでなく、其の他にもさ  
ういふお客様の趣からぬ事實を知つてゐる。  
けれども、それ等をば單に人の悪いなさり様だ  
としか思つてゐない、どうせお遊びになる方は、  
家へいらつしやらなければ、他の家へ往つてお  
遊びになつてゐるのに違ひない。そんなら少し  
は此方の都合も察して下さればいゝのと思ふ  
位のものであつた。お葉が進み入る前に門札を  
見直したのはつまり大山さんの日頃の大言壯語  
に比較して、お屋敷の御門があまりに汚な過ぎ  
たからである。然し此れから先補解の道をば、  
目當なく歩く難儀を思へば、まづ這入つて聞い  
て見るにしくはないと、其儘くすぶつた破れ障  
子の玄關先から、何方がお勝手口かと左右を見  
廻した。

右側は腐りかゝつた狛仁寺垣を隔てゝ見すば  
らしい庭樹の蔭に、しづくひの落ちた平家の屋  
根が薄寒さうに横はつてゐて、垣根の竹の隙間  
からは物干竿にかけた古ぼけた赤毛布と、汚れ  
汚れた木綿の襦袍とが見えた。左側にはずつ

と奥へ下つて別の貸家らしい格子口造の平家が  
二三軒あつて、梅の蕾のちら／＼日につく車井  
戸のほとりには、魚屋が鰯鮓を切つてゐる。

襦袍の下に子供をおぶつた庇髪(ひがみ)のぼう／＼たる  
下女が二人、いづれも鼠色になつた白カチキン  
の西洋前垂を結めて、魚屋の男と馬鹿口をき  
いてゐる最中らしかつたが、風俗の異つたお葉  
の姿を見付けるや否や、下女共は日に角を立て  
て、寧ろ恐るゝ如く、不審さうにその爪先から  
頭の上までを眺めた。井戸端から勝手口までは  
炭俵が敷いてあつて、霜解の泥水は依の下か  
ら其の上を歩む人の足元にじく／＼湧き出る。  
お葉は進退極まつて、其の場に立ちすくみ、腰  
をかためて、

「御免下さい。」

けれども下女は驚いたやうに口をあいたまゝ、  
二人とも黙つてゐる。

「大山さんのお屋敷は此方(こちら)で御在ますか。」

下女の二人は俄にもぢ／＼し出した。お葉は  
それと察して、「京橋から、お使いに参りました  
んですが、旦那様はおゐで御在ますか。」  
「お留守です。」その時背中の子供が泣き出し  
た。

お葉は内儀からさう云ひつかつた通り、もし

お留守と云はれたら、烏波お勝手口で奥様にと  
云つて、内儀の名字なる水田からのお使だとい  
ふ事だけを云ひ置いて來べき手筈は、ちやんと  
心得てゐたものゝ、流石まだ十八九の若さだけ  
に、何となく氣後れがして、霜解の水が低い駒  
下駄の磨いた櫛を渡して危く壁の上までしみて  
しさうなのも忘れて、その儘依の上に立ち止つ  
てゐた。下女の背中で子供がますます泣く。  
「千代。千代。」と突然耳元近くから女の呼ぶ聲  
が起つた。

お葉はびつくりして振り向くと、二間とは隔  
らぬ勝手口らしい破障子の間から眼の間の  
おそろしく離れた馬のやうな大きな女の顔が見  
えた。下女にもまけない達々たる庇髪(ひがみ)汚れて  
皺だらけになつた被布姿の目上げるやうな大き  
なで／＼した奥様である。

丁度魚屋が鰯鮓の切身三片ばかりを、血  
に載せて奥様のお手元へ奉りに行つた。奥様  
は何やら魚屋と話をして居られる。お葉は何  
といふ譯もなく初めて目のさめたやうな、同時  
に深い絶望を感じて、その儘逃げがやうに門  
の外へ出てしまつた。遠道を難儀して茲まで來  
た事が、いかにも無駄足であるらしく思はれた  
からである。内儀さんは山師にかゝつてすつか

痛ましくも秋風の日常りに曝し出されてゐるのを見とめて、金春の事通しも欠張り大層除にちがひあるまいと思ふと、京さんは何と云ふ事もなく咄嗟に起る好奇心に誘はれるまゝ、買立ての埃及煙草の煙をば御臭い塵埃の中に稠くせつゝ、四邊を見て見ぬやうに横町の方へ歩いて行つた。果して格子戸つゞきの裏町は時ならぬ煤拂ひの大混雑。細ネルの腰巻に布子の裾をはしよつた下女や小女は、頬冠りの車屋らしい若衆と入り亂れて立ち働いてゐたけれど、その邊には追出されの飼猫と共に、藝妓らしい女の姿は更に見えない。京さんはぶら／＼横町を通過けて、横川町の堀割から再び銀座の方へと、博品館の前まで来ると意外にも其處の停留所には往來の人の目を引く一團の紅裙隊があつた。しかも其の中からは京さんの顔を見て目禮を施すものさへあつたではないか。京さんは思はず小走りに歩み寄つて、「お揃ひですね、追ひ出されたんですか。」

「行き處がないから、浅草へ遊びに行くのよ。」

「京さんも一緒においでなさいよ。」

願つたり叫つたりと云ふ處であるが、わざと京さん、躊躇ふやうな遠慮するやうな風を見せて、返辭を口籠らせた。商賣人の女に對して

は、あんまり岡々しい風を見せずに、何となくおほ、こらし猫を冠つて置く方が、相手に油斷をさせるだけでも後日の爲めになると目頃から氣づいてゐたからである。

電車が来た。京さんは行くとも行かないとも全く曖昧な態度で、女達の後について電車に乗つたが、すると直様知れぬやうに、自分を入れて一同六人分の切符を買つて仕舞つて、軀て女達が帶の間から銀貨人を出しかける時、「切符ならもう済んだんですすよ、乗替はいらないですね。」

電車はかなり込んでゐる。一行の中の三人の女は腰をかけたが、立つてゐる残りの二人は、自然と京さんの左右から其袖につかまつた。

京さんは電車が留つたり動き始めたりする度に、竊と厭味のないうやうに二人の身體を押しなぞして劬りながら、心中に一同の容貌風姿を品評した。立つてゐる中の一人と腰をかけてゐる中の二人とは、てんで一顧の價もない。一人は

いかによく見てやつても西洋料理屋の女ボーイとしか見えぬ田舎臭い鹿髪のふとちやうであり他は見た處から仇じけなさうな名古屋女で、又他の一人はあまり申分のない美人過ぎて、一寸おいそらと京さんなんぞの持物には

なりさうもない。で、京さんは早速残りの二人に眼を移す。二人共にそれほど容貌ではないが、流石賣り物だけにそれ／＼の特徴がある。然し一人の方は少し年が若過ぎはしないか。まだ二十になるかならずの、多分丸抱への兒に違ひない。達明の上燈までして男をよぶほどの智慧も道楽もあるまいし、遊んでも誰だぞ和し向き一方と云ふ玉らしい。京さんは能く遊ぶ人の云ふ通り、色にする藝妓と云へば自前は慾が出て世に媚く、主人持は自由がきかず、其處へ行く

と何方付かずの「分け」と云ふ年増盛りに越したものはないと一説を、尤も極と是認してゐたので、丁度見た處二十四五かと思はれる最後の一人の方に、専ら空想の目的を移した。中肉中丈、色は白い、髪はいくのと服のはつちりしてゐるのが、いかにも剛れやかに見える。氣もさく方と見えて、まだ京さんは初対面でありながら、最初から一番多く話をしかける。

「白木屋と三越の前を通る時に、あゝ、いゝ友禪だ。京さん、あたいに彼れ、似合ふと思つて。」

京さんは嬉しあまりに憚らしいやうな心持にもなつた。此の女を物にしたいと思ふ念の



ら、自分ばかりはもう三十代の男のやうな、一切悪い物づくめにしてゐたのであつた。尤もこれは草に衣服の趣向からばかりではなく、何につけ人から世間見ずの、甘え、お若いお坊ちやん扱ひにされるのをば、此の上もない侮辱のやうに感ずる負けぬ魂から、京さんは誰かや先代高島屋の松島千太に似てゐると評した其の頃の特徴をば自分からも唯一の頼みにして、言葉使ひから身振まで五分のすきもないやうに心掛けてゐるのであつた。けれども要するに其れは一人よがり終つたかも知れない。いかほど自分ではかりすぎがないつもりでも、何處か知ら、投げやりな協同な態度が、どうしても若旦那たる本来の境遇を説明せずにはゐなかつたからである。

然り京さんは若旦那である、部屋住みの身の上である。衣食住には何一ツ不自由のない結構な御身分である代り、手元の小遣錢と來たりいつもく、全くの不如意である。然しこの點に於て京さんはいか程身の代命を聊つたとて、この生活難の世の中に誰一人同情の意を表するものがあらう。京さんは一時やけになつて亂暴もして見たが、自分から己れの不始末を、露して親に泣きを入れるなどは、考へて見るま

でもなく餘り器量のいゝ話ではない、と云つて二度とはない二十歳の盛りをむさぐと、勸善懲惡孝子鑑になりすまして、年寄共から褒めちぎられてばかり居るのも、ちと氣がきかな過ぎはしまいか、お日出度すぎはしまいか。金いらずに遊ぶ法とは此れいかに。京さんは人知らぬ苦心鬱澹たる結果、いつとなく自分の腕といふ事に對して自信を抱かざるを得ぬやうになつた。人並みの高い錢を出して遊ぶのなら、何處の土百姓にでも出来る話だ。乃公アかう見えても銀座の土地つ子ぢやねえか。何も此方から貰はうと云やしねえ。お互に出す入らずで、面白可笑しく遊ばう、遊ばれよう、そこが即ち腕だといふ事を感じるに至つたのである。京さんはつまり此の社會の人の所謂客色と稱するものにならうと心掛けたのである。米八からの仕送りに其日を暮した丹次郎の境遇は、梅暦時代の古い夢である。新しい今の世の中の色男は女に對して出来るかぎり金錢上の負擔少くして、而も最も金錢上の負擔多き歴とした一旦那一同等若しくは其れ以上の好遇を、女から受けようと思ふに過ぎない。然しこれとてなかなか容易の業ではない。それには先づ多少なりと女からつかねなければならぬ。好かれる

には、先づ第一に女から認められなければならない。こゝに於て、京さんは新橋千人近くと數へられる藝妓の中誰れか一人、自分を認めてくれるものはあるまいかと、凡そ藝妓の多く集まる處と云へば、芝居寄席茶屋を始め、外出の機會毎に必ず横町や露地を歩くやうにと目頃から怠らず心掛けてゐた。

京さんは既に銀座の土地つ子であるから、小學校時代の同級生で、今では有名な娘さんになつてゐる誰れ彼れをも知つてゐたし、また折々は自分の店へ香水や白粉紙を買ひに來る若い女とも顔馴染になつてゐたので、心中では必ず自分の希望の成就する日のある事を確信してゐたのであるが、然し其の期待の餘りに堅實であるだけに何とも云へぬ心の焦立ちと、待遠しさが、折々は反動的に譯もなく深い絶望を吁起すこともあつた。

## 二

十月のうらはしくも晴れ渡つた或朝京さんは舶來の巻煙草を買ひにと、自分の店からはついで四五軒先の煙草屋までゴム裏の雪駄を履き行つた時、ふと見返る横町の片側に、汚れた家財道共のさま／＼が、疊や藥屑や紙屑と共に、

づ上つて見た上で、更に考へ直さうと思つたのである。女中は二階の一間に案内しながら、「暫くですね。若旦那どうなすつたの。」

「お捨さん。お前菊松ツて云ふ藝妓を知つてゐるかい。」

一新橋家でせう。先の中はよく家へ來ましたよ。」

「あれアどうだい。便利な方かい。」

「また。知りませんよ。若旦那。」

「旦那があるのか。」

然し女中は徹頭徹尾職業的な無差別な調子で、

「掛けて見ませうか。氣のさくい面白い人よ。私大好きなの。」

京さんは今方浅草から一緒に歸つて來たのだとも云はれず、何気なく、

「居るだらうか。」

「今時分出來ない事があるもんですか。女中は心得て其の儘下に降りて行つてしまつたが、直様電話をかける鈴の音がする、耳を澄して聞くと、「新橋〇〇番……もし……新橋さんですか。こちらは松月ですよ。菊松さんお座敷……あら然うですか。それぢや急いで下さい。」

それなり家中は寂とした。隣近所には三味線

の音もなく電車の響が風のやうに聞える。京さんは無意識にお通しのかき餅を菓子皿の中から掴み取つて、冷めきつた茶の残りを一口吞まうとする時、女中がお鉢子を持つて來て、

「今お湯ですつて、直ぐ参ります。」

けれども待つ事一時間ばかりであつた。銚子の一本は早くも残り少くなつた頃、椅子段を上る足音も聞えずに、突然スウツと襖を開けて、菊松が羞赧くやうに顔を出した。

「あら……とさとも驚いたやうに、そしてスタく」と歩み出て、京さんの膝の上に自分の膝頭を載せるやうに寄り付いて、鳥渡京さんの顔を見てにつこり笑つた後、

「姐さん、暫くぶりだね。またどうぞ。……この様子に京さんは、今日は又どうして斯う運が向いて來たのかと寧ろ自分を怪まずには居られなくなつた。萬事は皆お誂へ通りに行くのである。酒酣たる頃一先づ席をはづした女中が、「菊松さんお電話」となつて來たが、菊松は呼び立てられた其の電話口から歸つて來るや否や、氣に喰はないお座敷だから斷つてしまつたのだと云ふ。それから二人で、お酒の後お茶漬をすました時、京さんは噓くやうに調子を低めた輕い聲で、菊ちゃん、いゝのかい。」と云つ

た。此れは單手に對して全然露骨の權利を行使するから、服なら遠慮なしに御だと云つても差支はないのだとの意味を呑込ませると共に、萬が一服だと云はれた場合に際しては、自分の方でも其れほど強てお願ひしたのぢやないからと、相應の餘裕を示して失敗の時の器量を成りたけ下けないやうにとの豫防にしたのであつた。ところが菊松は輕く京さんの膝をつねつて、一御迷惑なんですか。済みませぬね。」と云ふやうにすねた様子さへ見せたでは無い。

この晩を初めとして、年來夢みてゐた京さんの希望は、遂に度毎に事實となつて現れて行つた。毎日一度づつ電話が手紙を交換する事、お湯が髪結さんへの行き歸りを待ち合し顔を見ようと云ふ事、お詣りをかこつけに忍會ひをする事。三度に一度は家への手前表向きの客對藝妓で遊ぶ事はあつても、向見あたりへ遠出でしけ込むやうな時には、菊松は自分で自分の身體をつける事など、凡そ藝妓が其の色男たるべき相手に許す凡ての特權を京さんは一舉にして贏ち得てしまつたのである。

#### 四

毎月五日の水天宮。十日の金毘羅さまに、朝

押へられぬ程激しくなるにつけ、もしや自分より先にちやんと情人ができてゐて、自分は後れ走せに指を銜へて引込まなければならぬやうな場合に遭遇したら、どんなに情なく癪にさはる事であらうと思ふと、一層初めから話なぞせぬ方がよかつたやうな氣にもなるのであつた。然しわれ知らず身體と心とが其の女の方ばかり引付けられて、京さんは電車を下りてから一同揃つて仲店を歩く時には自然とその女と肩を並べ袖を拵合して行くばかりか、あんなり人込みの烈しい處々では、何方からとも知れず手をさへ引き合つた。

御手洗で手を洗ひ參詣をすました後、一同はすぐに活動寫眞へ行くか、それとも翌飯を先にするかといふ議論になつた。

「何時だい。一體……」

「まだ十時半だよ。」

「私は今朝おまんま食べないんだよ。」

斯う云ふ會話が通りすがりの人を驚かした。

京さんは一先づお汁粉屋へでも行つて休んだ上で、ゆつくり相談しようと思ひ出したので、一同は忽ち同意してぞろ／＼公園の端れの松村へ押し掛けた。さて活動寫眞を二軒立てつゞけ

に見て仕舞ふと、今度はいよく／＼池のほとりに

立止つて、食事は中清の天麩羅にするか、金田の鳥にするか、それとも一層きばつて大金にしようかと云ふ三議案が提出された。然し歩きながら議論して行く中、いつか仁王門の下まで来ると、一行の中の一人が一分一秒も早く便所へ行きたくなつたと騒ぎ出したので、其の儘二部近い鳥屋の金田へ駆け込む事になつた。鳥籠を二つにした其の一方には別に云ひ合はしたのでもないのに京さんは呼び目的の女と膝を突合はして坐つた。すると、

「人前があるよ。菊ちゃん。」

「今日のは、京さんと菊ちゃんのおごりでせうね。」

先刻から早くも目をつけてゐた岡焼連の冗談が、急にいばかり湧起るが中に、菊ちゃんと呼ばれた其の女は、「うるさいね。百も承知だよ。ねえ、京さん。」と云つてわざと京さんの方にびつたり寄添つて見せた。

菊ちゃんは一同行の中で一番眼の縁を赤くするほど飲んだ。そして京さんが勘定をしようと思ふのを無理に止めて、自分の紐入れから五圓札を出して外へ出ると、少し千鳥足のふら／＼するのを、人目も構はず京さんの方に寄添ふのであつた。

### 三

一同は四時頃に筆橋へ歸つて來た。京さんは三銀と青柳の間の露地口で別れて一人銀座通りを我が家の方へ歩いて行つたが、何か大きな手で軽く兩脇をすくひ上げられるやうに、足が地面へ付かないやうな心持がする。もう十の九まで成功したと思ふと、一刻も早く最後の運だめしをせずに居られなくなつた。京さんは此儘すぐに信樂新道の知つてゐる待合へ行つて菊ちゃんを掛けようかと、電車道を横切りかけたが、それで何だか餘り心の底を見透されるやうで出來る處も却て出來ずにしまふ恐れはあるまいか、一人で料理屋へ行つて呼んで見るのも少し事が改まり過ぎて妙でない。三十間堀の富貴亭か、仲通りの喜仙あたりから、一寸晩飯でもと云つてやりたい處であるが、それには唯だ今鳥屋の金田から歸つて來たばかりで、あんなり時間が早過ぎる。京さんは夕方燈のつくまでは、到底待つて待たね煩悶のあまり、再び博品館の方へ引返して汐りの彫割を三十間堀の方へと、徒に秋の夕暮の晚きを嘆じながら歩いて見たが、遂に策盡きて通りかゝる信樂新道の待合の格子戸をあけてしまつた。心休めに、先



か。べん／＼だらりと引張つて置いた舉句に、申譯がないぢや、お茶屋が困ります。お茶屋がお客様へ頼向けの出来ないうやうになつて仕舞ひます。

全く其の通りである。腹立しさに他の女を呼ぶにしても、もう時間過ぎではどうにもならぬ。京さんは歸るにもあられず、幾月か前から空想してゐた此の蕭條な雪の夜を空しく獨り寐の夢目に遇はねばならぬ。一箇中眠られぬまゝに菊松の事をば、あゝか斯うかと考へられる限り考へ盡した。

京さんは折角の書き入れ日をふいにされた事に對して云はうやうもなく業を煮やしたのであるが、然しそれは何れも外のお客と遠出をして泊り歩くからと云ふ譯ではない。そんな野暮らしい甚助筋は京さんの最も賤しむ處である。

已に京さんは常人の口から菊松の身には旦那が二人ある。そして一人は免明のお客、他の一人は實業家の某と云ふ名前までをもちやんと打明されてあつて、此の二人の旦那の來る時には電話が何かで出先のお茶屋までも知らせるから、野暮を云はずに飽くまで陰の人になつて居て貰ふと約束までしてある。然るを今日の雪の日に限つて、初めてだんまりで行く先知れず、

而も昨日の午後から二晩も遠出をするとは甚だ意外である。いづぞや箱根へ旦那と出かけた時などは旦那の寢てゐる隙を窺つて長距離の電話まで掛けて來て、「商賣だから堪忍して下さい。」と云ふ嬉しい聲を聞かしてくれた事さへあつたぢやないか。それを今度に限つて、而も先方から云出してお互に都合して待つてゐべき筈の雪の目を、此の始末に至るとは。此れア事によると是非にも秘密にしなければならぬ。他の色男があるんぢや無からうか。それとも或は突然何處かのお座敷から、丁度大掃除の日初對面の自分と偶然出来合つたやうに、珍し好きの新色を拵へやがつたのぢや有るまいか。京さんの堪へられぬ煩悶苦惱は尙らこの點に存したのである。

然し全くの手掛のない此方ではかり想する此事の真相は、要するに常人の菊松について相應の手腕を弄して、聞き正して見ない中は、どうとも今の處では判斷のつきやうがない。判斷のつかぬ不分明に對する不安の懊惱は即ち菊松の顔を見ざる限り、結末を告げぬ次第である。京さんはもう雪の夜を遊びたいと云ふ事よりも、戀しいから會ひたいと云ふ事よりも、此の堪へられぬ不安を排除する必要上、一刻の猶

豫もなく菊松に逢はねばならぬ。いよく激し此の必要に迫められるにつれて、ますます日下行先の知れぬ菊松の事が憎らしく又頼りなく思はれ、京さんは次第々々にいつともなく乃公はもう屹度寢返りを打たれたに違ひない。眞底商賣氣離れて惚れ込んだなぞと云やがつたのは、皆嘘だ。矢張り懷中の寂しい奴は、末の見送がないと云ふので、もつといゝ奴を見附けて今頃はいまい／＼くデレついて居やがるに違ひない……叢り湧く最初の想像をば我れ知らず動かしがたき事實のやうに、絶望の意識を明確にさせて行くのであつた。

夜はおそろしいまで靜かに深け渡つた。雪はいつか止んだらしく、凜然と吹起る風と共に、廂の雪の吹き拂はれる響がした。京さんは枕元に置いた水さしから一口ぐつと醒めぬの水を飲み、糞と便所へ行つて歸つて來ると、自分ながら怪しむまで沈靜した心の中では既に菊松を他人に取り入れたものとして、夫れに對する自分の身の振方はどうすべきかと考へてゐるのであつた。そんな先の事まで考へるのは、まだ少し早過ぎるとは知つてゐながら、一度が起つた疑念に對する自問自答の結局は順序としてどうしても一應其處まで考へて置かねば氣が済

日二十八日の御不動様と、その日その日は過ぎ  
て、恰は忽ち婦人と變つて行き、池上のお會  
式からは聞もなく西の市の物日が来るかと思ふ  
と、大概のお客はそろ／＼遠廻しに逃を打ち、  
女は無い智慧を絞つて腕によりを掛ける年の暮  
になつたが、京さんは何處を風が吹くかとぶふ  
境廻。菊松からはお揃ひにするのだからとて、  
却て其年流行のラクダの毛織の襟巻を買ひ受け  
るほどの景氣であつた。されば春のお約束とて  
京さんは唯だお茶屋への禮儀だけに二日程付け  
てやつたに過ぎない。然し松がとれると間もな  
く、横町の過ぎには、羽子板の響も次第に  
消え失せ、簀に白襟の往来も日に／＼少くな  
る頃、連日の曇天は遂に一日一晩を小降きもな  
い大雪となつた。

「雪が降つたら帳度よ、奥の植半へ行つて遊ぶ  
のよ。」斯う云はれた約束の日をば京さんは今  
日か明日かと、實は寒の入りになるかならぬ先  
から待ち兼ねてゐた事として、何となく其の色さ  
へ鈍つてにじんだやうに見える雪の夕暮の燈火  
と共に、世間一帯も何處となく蕭條としたやう  
に思ひなされる其の如しき。京さんは自づと三  
千歳を訪ふ直次郎のやうに、何とも云へない哀  
愁の情味に酔はされながら、傘に吹雪をよけつ

つ、竹川町の自動電話からまづ今宵の首尾を聞  
かうとて、菊松の内へ電話をかけた。聞き覚え  
ある内箱の女の聲で、  
「出て居ります。」  
「お座敷ですか。」  
「はい。」  
「何時頃歸るでせう。分りませんか。」  
「はい。只今出ましたばかりで御座ますから。」  
京さんは近所のビヤホールで時間を潰した  
後、再び掛けて見たが要領を得なかつた。箱  
屋の口からは藝妓の出先は一切云はぬと云ふ  
此の社會の習慣をもよく知つてゐる身分だけ  
に、さう野暮な質問も出来ず、京さんはもう斯  
うなつたら據所なく待合の手を借りて即合すよ  
り仕様がな。去年の暮から期定があまり綺麗  
にしてないけれども、背に腹は換へられぬと覺  
悟して、例の信樂新道へ越した。女中のお陰に  
電話をかけさせると、矢張り簡單にお座敷へ出  
てゐるとの事。更に聞き直させると、「唯今出  
りになりましたから。」と云ふのである。時間を  
計つて再び貰ひをかけると今度は、一出先へ通  
して置きましたから、當人から御挨拶致させま  
す。」然しいかほど待つてゐても、一向に當人菊  
松の出先からは挨拶がない。いつか十時も過ぎ

て、雪の夜は次第に静まり返るにつけ、待つ心  
はいよ／＼焦立つて来る。女中を呼して其れか  
らといふものは、立続けに五六度も催促して見  
た結果、やつとの事で「時間までには間違ひな  
く伺はせますから。」との内箱の返事に京さんも  
もう仕方がない。どうせ情夫は「け過ぎだと、  
稍氣を落付かせたが、いよ／＼其のお時間の十  
二時も打つて一時にもなつたが、菊松の来るべ  
き様子は更でない。京さんはもう堪まり兼ねて  
又もや女中に電話をかけさせると、噫こは何事  
ぞや。菊松は明日の午後から何處へか遠出に行  
つてゐるので家でも大抵今夜はもう歸るだらう  
と思つてゐた處、此の始／＼で何とも申譯がな  
いとの事實が判明した。

「ねえ、あなた。それならそれと最初から話の  
わかるやうに云つて呉れ、ばい、ちやありません  
んか。あんなドジな箱屋ツちや在りやしない。」  
と女中のお捨までが眞實の語氣を包み得ない始  
末である。内儀も同じやうに、  
「此の節の藝妓衆は、あんまりつら／＼過ぎます。  
其れア家業ですから、打明けてお話をすれば身  
も蓋もないやうなものですけれど、同じ細工を  
するなら、ねえあなた、ばれても心持のいゝや  
うに、綺麗に細工をするがいゝぢや有りません

うなつたんぢやなくッてよ。随分いやなお座敷も勤めなくつちやなら無いんですもの、可愛いと思ふ情人の一人や半分なくつちや、壽命が縮まつちまふわ。」

と云つて菊松は他の藝妓のやうに役者や藝人見たやうな薄情なものに血道を上げる氣にはどうしてもなれない。それから堅氣のぢやんとした人で、何も彼も承知してゐてくれる——つまり京さんのやうな物のわかたつた人を色にしてゐたいのだと云ふ事を、情を含んで暗々として語り続ける。然し京さんは何を云やがるんだ、欲徳なしでと二口日にはいやに人を色扱ひにしやがるけれど、此れがつまり此の女の手なので旦那の來ない暇なんぞも、商賣をしてゐる以上は、一夜たりとお茶をひかないやうにとの、まさかの用心に、最初から金のないお客は金のないやうにと大概の値踏をして居やがるのだ……と腹の中ではすつかり制斷をつけながら、京さんは口説きつづける菊松の唇の絶えざる開閉につれて、折々小さな舌の先、白い齒の間からちら／＼動くのを、不思議さうに眺めて、互に寄添つて握り合ふ女の手先のダイヤモンドをば、指でグル／＼廻して弄びながら、菊松の云ふ話を黙つて聞いてゐた。する中にどう云ふ拍子

か、ダイヤの指環は菊松の細い指から抜けて、コロリと臺の上に轉がった。

「あッ。」

これは菊松と京さんと兩人同時に發した軽い驚きの聲である。然し指環を最初拾ひ取つたのは京さんの手であつた。指環はつまり菊松の指からそれを弄つて廻してゐる京さんの指先を経て、京さんの膝の上をつたはつて、そして臺の上に落ちたからである。

「よく輝るなア。」と京さんは取上げて電氣燈の光に照して見ながら、「随分大きいぢやないか。幾何俵したんだい。」

「あなた……」と我れ知らず訴へるやうな調子で菊松は京さんの質問に答へるよりも、先づ繩をやらに其の袂を引いた。菊松の此の様子や顔色には誤つて火鉢の中へでも落して呉れぬやうに、萬一の間違ひのないやうに、何ででもいゝから早く元の私の指に嵌め返して下さいと云ふ、寶石に對する女性の真情が溢るゝばかりに、ありありと現れてゐた。と見て取るや否や、京さんは此の女に對して雪の夜以來の鬱憤をもうどうしても押へてゐる事は出来ないと感じた。此の大きな見事な眩しい指環を得々として貰つてやつた若い富んだる華族の妾と、それを貰つ

て貰つた時の菊松の様子ばかりか心の底までが、身振として京さんの眼の前に浮んだ。京さんは春まだ寒い三月の夜の小さな座敷を暖める火鉢の底も通れとばかり、其の中へ叩きつけてやりたい處を、まさかにならぬならず、ぢつと指環を掌の中に握り潰して、引かれた袂を手荒く振り拂ひ、

「大夫火だよ。見たつて減りやしないよ。」

菊松は池の縁に遊んでゐる赤兒を遠くから見やるやうな心持で、許方なしに黙つてしまつた。

「僕には似合ないか知ら。」と京さんは面白半分、からかひ半分、すこし堅いと思ひながらぐいと力まかせに左の薬指へさし込んで、再び電燈の光に照して見た。

その時女中が襖の外から、「菊松さん電話です。」

「そら又お爺さんの御催促だ。中貰ひだから行かなくッちや成るまい。構はないよ。僕に歸るから。」

京さんは指環を抜いて返さうと思つたが、無理に力任せに入れた指環はなかく抜けさうもない。

「あ痛。……これア大變だ。」と京さんも少しく驚いた。



まないのである。駄目ぢやあないかと疑ふや否や、殆ど本能的に咄嗟の意識がそこまで透徹して仕舞ふのである。

京さんの考へつゝいた結果の手段は、新しい戀の敵と菊松の仲を邪魔してやらうか。邪魔するにはどうしたらよからう。どうしたら一番相手二人が閉口するだらう。それとも寧ろ其様あくどい罪なことをせずと、お前がさうなら此方も此方だ。此方ではお前よりききに疾から飽きが來てゐたので丁度いゝ都合だと思はせるやうに、一思ひに綺麗さっぱり切れて仕舞はうか。或はその方が一段器量を上げるかも知れない……。

降り積つた雪の上に照り輝く朝日の光に、その夜はいつもより早く明けてしまつたのである。

## 五

京さんが菊松からの消息を得たのは實に其の翌々日であつた。鬢の後毛一ツないままでに、いやにわざとらしく髪を綺麗にして現れた菊松の顔を見ると、矢庭に京さんは飛びついて引摺倒してやりたい位に氣の急ぐのを、わざと瘦我慢して、悪く落ち付いた風を見せると菊松の方で

も其れ相當の覺悟があつたのか、男がまだ口をきかぬさきに、「實はね、京さん、斯ういふわけなのよ。まア怒らずにお願ひだから聞いて下さいよ。」と無理やりに男の膝へ凭れかゝつて、如何にも其の白狀する通りらしく其の夜の顚末をさらりと流みなく打明けた。お茶屋さんと家の姐さんと共に頼まれて、退引きならぬはめになつて私一人ならば一晩だけで歸るつもりで、姐さんの旦那や何か一緒にゐるに、どうする事も出来なかつたのだとの事である。そして、「さう云ふ譯なんだから、ね、京さん、私とお前さんの仲は屹度今まで通りよ。」と云ふ。で、京さんは其の夜の中に見事たわいもなく軟化してしまつた。

けれども其後菊松は兎角に遠出し勝ちである。此の次には何日の何時頃にと約束して置いた其の夜さへも、どうかすると出たなり歸つて來ぬばかりか、三日も四日も座敷が貰へぬといふ其等の數ある失態の舉句の果に、菊松の口からは大阪の年寄つた商人で東京へ出て來ると、呼びつゞけに呼ぶ野暮な客だと云ふ事になつてゐた其の相手は、豈計らんや、丁度京さん位の年頃、而も金のありさうな色の白い好男子であるらしい事が露顯した。或朝京さんは天賞堂へ

買物に這入つた二人の姿を、てつさり見届けてしまつたのである。無論其の前にも一度國民新聞の花柳たよりに、六號活字の三行ばかり菊松は此頃赤坂邊の華族様を手取にしてゐるとか云ふ噂が出てゐた。それかあらぬか、貰へない座敷を無理に中貰ひして呼んだ奥、京さんは菊松の薬指には今まで見なかつた大きなダイヤの指環が燦然たる光を放つてゐるのを認めた。

「おや、菊ちゃん、そんな指環を持つてゐたのか。」

「これ？ 大阪に買つて貰つたのよ。厭なお爺さんにつとめるんだもの。此の位の事して貰けなくつちや。ねえ、あなた。」

京さんはいよいよ此の畜生と腹の立つだけ、猶更とぼけて、「幾時になるんだい、そのお爺さんて云ふなア。四十か、五十か。」

「五十八ですとさ。いやだわねえ。」

「まア辛抱するさ。己がもう少しどうにかなれば……家の親父でも死んでしまへば、ちつとは何うにかなるんだけれど、お前も己にや愛想が盡きてゐるだらうね。」

「あら、またそんな……私や初めッから京さんに頼んで、どうの斯うのして貰はうッて、斯

つて聞く人があれば、京さんけ憚る處なく其の顛末を物語つてそして何時もかうぶのである。「乃公アから見えても銀座の土地ツツだア、今時の水轉なんぞに甘く見られるなア業腹だからね。然し罪な事をしたよ。」

けれども暫くすると京さんは何を感じたのか突然變ななんぞいぢめたつて始まらないやと云出して、總て天賞堂から其の指環と同じ位な價格のブロッチを買ひ、「あの指環にそなたの形見」とあのまゝ頂戴いたします。此の品に御成功のお祝ひまで後れ走ながら、何卒お受取り下され度く候。」として現在の居處が分らぬから菊松の元居た家へ届けてやつた。蓋し其のブロッチの代金は自分の店の番頭に泣きついて無理やりに才覺して貰つたのださうである。

京さんが見合ひもせず結婚して、けろりと變つた人のやうに堅くなつてしまつたのは其の翌年の事である。

## 風邪ごゝち

梅一輪一輪つづの暖かさ。春の日向に解け

やすき雪の中裏なかなかに愛き事つる假仕居。それさへ兼て米八が、三筋の絲しか愛さの、女の、今眞實に思込んだる仕送り、請けてその日の活業は、世間つくる丹次郎……

と差向ひの暫短燈。男が中舌に讀み聞してゐた「春色梅屑」の一節は、突然梯子段の下から鳴りだす消魂しい電話の鈴の音に遮られた。

女は今朝方からの風邪心地、惡寒を凌ぐ八反の襦袢の襟に埋めた其頤を起し、肩を擧めて、聞耳立てる間もあらず、勝手の方からは障子の開閉物荒く、あわてゝ駈け出る下女の足音。やがて、梯子を二三段みし／＼踏み鳴し、「姐さん。提箱からもうお支度に上つてもよござんすかつて。」

「もうそんな時間かい。」といかにも驚いたらしく女は用輩の上の置時計を顧みたが、男はいつもより今日は又一層朝寢した冬の日の短さは斯くもあらうと以前から覺悟してゐたやうな沖着いた聲で、もう五時なんだね。と掛蒲團の下から煙管を搜り出しながら、「お前。心持はどうなんだい。何なら一晩位無理をしないがいよ。」

女は黙つて考へてゐたが、梯子段の欄干を

片手につかまへて、下から顔を出してゐる下女に心付き、「今すぐ此方から電話ごかけると然う云つてお置き。」

下女は再び頑丈な足音をさして姿をかくした。

「三日も前からのお約束なんですからね。それに地の事で春若さんからもくれ／＼頼まれてるのよ。」

「春若が踊るのか。いゝ度胸だね。」

「私の地ならわざ／＼手合せしないで済むからつて……昨日も電話で念を押されてるんですよ。困つたわね。」

「一體心持はいゝのか悪いのか。」と男は手を差伸して女の額を押へる。

「まだ熱があつて？」

「うむ。少しあるやうだね。」

「わるいでせうか。」

「わるいにやア極つてらアね。お前は兎に角あたり前の人の身體だと思つちや、大間違ひだぜ。」

「ほんとだね。去年から見るとまた瘦せた事よ。もう後何年位生きられるんでせう。」

女は氣味悪いほど沖着いた調子で云つたが、男は最早それには答へなかつた。そして女の視

「菊松さんお電話ですよ。」と別の女中の聲がする。

「はい。お世話さま。」菊松は電話口へ下りて大分長く話をしてから戻つて來たがまだ指環は京さんの指から取れずにゐるのである。眞實取れないらしい事は、京さんも今では顔は眞赤にしてゐる上に、唾をべた／＼塗つけた薬指は眞赤に服れ上つて而も指環の間へる骨の處の皮膚には血がにじんでゐるではないか。

「困つたなア。どうしよう。あく痛い。ぴりぴりする。」と暫かは汗を出して、京さんは溜息をつく。菊松はもう泣き出しさうな顔付になつた。

女中が出て來て、金盥に湯を運び、石鹸で洗はして見たが、洗へば猶更指がふやけて太くなるばかり。髪付油も、樟油も、氣が急は急くほど駄目である。かくする中に中貰ひを急がす電話は、二三度に及んだ後、内箱の蓋が今がたお帳場まで様子を見に來て歸つたと云ふ始末である。車はとうに門口に待つてゐる。

最後に内儀が中へ還入つて、此の場合取れないものはどうにも仕様がなない。まさか京さんの薬指を切つてしまふ譯にも行くまいから、菊松の方では今夜の處にお客様の方へ對して、

そこは昨日今日弘めをした藝妓でもないから、何とかいゝやうに掩へて置く。京さんの方は後でゆつくり内儀が手傳つて女中も其々家中總がかりで再び指環を抜きにかゝる。若しそれでも抜けない時には、明日の朝早速お醫女様に行く」と云ふ事に話がついた。

## 六

ダイヤモンドの指環はとう／＼其夜の中には取れなかつた。京さんは翌日醫者の處へ行つたけれど、昨夜あんまり無理な事をした故か、骨を痛めて熱を起し、其の爲めに指環を取るところか一寸觸つても飛び上るほどの痛さに、其の儘靜に昇来水で冷してゐる騒ぎだからと手紙で書いてやつた。返事が更にないので次の日の夕方電話をかけて見ると、前々夜からのお座敷が引ついてゐてまだ、家へは歸らぬとの事。三日四日五日と消息なしに日数はたつて行く。京さんはもう菊松が死なうと生きようとそんな事は乃公の知つた事ぢやないかとぶふやうに、唯だ獨りで薬指に残つたダイヤの指環を眺めて、此の位の大ききぢやアと……驚かに其の値踏をしては痛快に感じてゐた。然しまた三日四日五日と、遂に其の夜から數へれば彼れこれ十日程、

菊松の方からは何の消息もない。

藝妓から指環を返さ上げたまゝで、まさか此の儘にも濟むまいと、少し心配になつて、京さんは内々で様子をさぐる爲め、いつもの待合に行つて聞いて見ると最初は一寸云出しにくさうな内儀から、又しても意外な事實を聞かされた。菊松は已に二三日前に話がついて、萬事物費の少ないやうにと、この簡の藝妓衆の事だから、親元身前と云ふ事で人知れず引いてしまつたとの事。お客様は云ふまでもなく指環の華族様であらう。

はア。それで判つた。と京さんは喉を打つた。もしか此の乃公が野暮な事を云ひ出して騒ぎ立てた日には、あんな悪足があつてはと、大事の鳥を逃がす恐れがあるので、奴め一生の智慧を振つて指環を盗まれたとか落したとか云つて、一方を誤魔化し、又乃公の方にはだんまりで、齒を喰ひしる程に残惜しい品物も催促が出來ずに、其の儘どろんをきめやがつたのだ。

京さんは菊松の仕打を無念と憤るだけに、自分の指に残つた指環をば此の上もない腹癢にしてながめやるのであつた。

京さんの薬指に輝くダイヤの光は忽ち友人間の評判になつた。大したもんですねと云



上つた。長らく此の社會に沈淪してゐる男は、藝者と云ふものがお座敷の掛つた其時に懷く一種特別の感情をば簡くまでもよく了解してゐるので、其の眼は依然として梅暦の插繪を眺めたまゝながら、獨語のやうに、

「それぢや、早く行つて、早く歸つて来るさ。」

「でも、無理をして又どつしり寝込むやうだと困るわねえ。」

「だからさ、風邪でも引いた時なんぞは、順當な身體ぢやないんだから、後口へ廻らうなんて慾を出しなさんなと云ふのさ。」

「なんぼ私が向見ずだからつて。」

増吉は調子だけ腹立しきうに云ひすて、梯子段の下口から政や。」と大きく女中を呼んで、一揚箱へ電話をかけておくれ。そろ／＼支度に來てもいいから。」

一足ばかり梯子段を下りかけたが、突然立戻つて用筆筒の曳出から小菊の紙を取出し、空閒の何連巻を引きしめながら、増吉は降りて行つたが、再び上つて來ると、直様電燈を向うの方へ引張つて行つて、窓際に据ゑた鏡臺の前に坐つた。下女が癖直しのお湯を持つて來る。増吉はもう今朝からの風邪心地をも、今日一日は湯にも行かず、頭痛がすると云つてゐたのを、

萬事は全く忘れ果て、仕舞つたやうに、あるかぎりの全身の魂と精力とを鏡の中に打込んで、火の氣の乏しい裏二階の、しかも二月の餘寒の夕まぐれと云ふのを更に順着する氣色なく、くると兩肌をぬぎすてたのである。そして電光石火の如くに挿してゐる櫛と簪と鬘留などを抜き取るかと思ふと、前髪の中と兩鬢の翼の下に入れた梳毛の珠とを取り出し、熱湯にひたした布巾を擦んで適度に絞るや否や、髪の毛は根元からも抜け落ちよ、とばかり力任せに兩鬢を揉んで擦つた。

男は電話を掛終つた下女が如さんの長襦袢を炬燵へかけに來るのを機會に、少し後じきりに後方の壁に背をよせかけ、半は感嘆に半は傷しさに堪へぬ様な目容で弱々しい撫肩に貝殻骨の瘦立つて見える後から、その化粧するさまをばちつと打目成つた。無論二人ともに交すべき話もない。話をしかけたとて、男は女の髪に氣を取られた時には碌々返事をする餘裕もない事を承知してゐるに於てをや。外には日暮を急ぐ下駄の音、人力車の鈴、羅字屋のビィ、商人屋の鼓の音。此方は折々じれつたさうな舌打の響につれて明放した鏡臺の抽屢、幾個と知れぬ櫛や毛筋棒の中から氣に入つたのを取り

出さうとする手元な物音と共に、風邪心地の寝亂れた御衣返しは、昨日の過ぎこの土地で老手のお若さんが結つた時のやうに變つてしまつた。鬘は長く肅然として金鶏鳥の尾の如く意氣な柔味の中に幾分の氣品をさへ帯びて、浮立つやうに前かな結足から稍々蒼白い頸の上に伸び、兩の鬢は左右から挿す毛筋棒の上に、水櫛の齒の曲線と鮮かに、ふうはり休んでゐると、前髪は凜として勇ましく額の上に直立し、鬚の兩輪は電燈の光を浴びて漆のやうな輝きを示してゐるのである。

然し増吉は、恰も己れの製作品を眺める美術家が、此れで満足したのではないが、満足して置くより仕様がな。手をつけ出すと切がないかと云つたやうな、寧ろ遺瀧ないやうな目容で、合鏡の一瞥を終つたかと思ふと、一秒間の休息もせずに、今度は白粉下の花筏を取つて溢る／＼ばかり掌のくぼみにつき、兩手で顔から頸から、咽喉から胸から、肩の後も手とどくかぎりべた／＼塗りつけた後には、ついで御園白粉を水刷毛にひたして目も鼻もないやうに一面に塗り立て、しよぼ／＼瞞きする睫毛と眼の縁を手拭でふき、次には粉白粉のついた大きな軟い毛の牡丹刷毛で、鼻の口から、顔

線から避けるやうに置炬燵の上なる梅簾を開閉  
ぢしつゝ、處々の描畫をさがして眺めてゐた。

かう云ふ差向ひの傷しい沈黙は、日に一度か二  
度は必ず二人の間に襲ひかゝつて来るのであ  
る。けれども二人は、云はゞもう馴れ切つて仕  
舞つたと云ふやうに、初めの中は實に堪へられ  
ぬばかりの悲痛に覺えず涙を浮べた事も、度々で  
あつたし又中頃はお互によくない事は口にせぬ  
やうにと、出来るかぎり氣をつけてゐた事もあ  
つたのであるが、遂にけ凡ての事を成行次第に  
まかして仕舞つて、敢て事新しく悲しまぬやう  
にまで立到つてゐるのである。悲しいと思ふこ  
とがあれば、あるだけ、故意と反抗的にそれ等  
の悲しい事を云つて見て、せめての腹癢にする  
のである。

思へば一昨年の秋の事であつた。まだ自前の  
増吉にはならず、玉扇家から分出てゐた時  
分、急性の肋膜炎にかゝつた後、女は不治の肺  
病といふ醫者からの宣告を受ける身となつた。  
然しこの一大不幸はその當時の増吉の身に取つ  
ては、同時にまた幾分かの幸福をも齎し來る原  
因ともなつたのである。四五年に渡つて増吉を  
世話してゐた旦那は、増吉が肺を悪くしたから  
と云つて、流石に薄情な切れ方もできない處

から、入院中の玉扇一切を支拂つてやつた上に、  
猶若干かの見舞金をやつて、此の後も商賣をつ  
づけるなら、綺麗に呼んで最上にするとの事、  
又抱へ主の玉扇家では、煉瓦地の狭い二階に四  
五人の抱へと、これから仕込んで出さうといふ  
子供二三人も、どた／＼に雜居してあるの  
で、若し傳染りでもしてはいふ見え透いた事  
實をばそれとは云はずに、唯だ増吉の方さへ其  
の心持ならば今までの借金も月々出来るだけ  
を入れる事にして、自前の看板を分けてやらう  
との事であつた。増吉は抱主と旦那とからつま  
り敬遠主義を取られた事は能く承知しながら、  
寧ろそれをば有難いと感じて、  
外の理由ではない。増吉は丁度其の當時、同  
じ家の朋輩に對して、藝者したものでなければ  
分らない藝者特有の意地として、縦ひどんな無  
理をしても早晩自前の看板を出さねばならぬ時  
期に迫られてゐたからである。玉扇家から出て  
ゐた藝者の中で一番古鎮の姐さん様と云へば、  
増吉と小兼との二人で、後の三四人は皆二三年  
も後れて弘めをした二十前後の若い妓ばかりで  
ある。小兼と云ふ意地悪は五年前の同じ年、増  
吉よりも三月ばかり早く弘めをしたのである  
が、好い旦那がついて、已に三月ばかりも前に

立派な自前になると同時に抱への人まで置いて  
貰つて、豪儀な姐さん面を出した始末に、  
口頃から何かにつけて自然と競争の地位に立つ  
てゐた増吉は、自分から世間を狭めて、寧ろ外  
の土地へ住替へしようかと思込んでゐた矢先、  
病氣に取りつかれて仕舞つたのである。

それ等の事情に加へて、茲にまた一層増吉の  
嬉しく思つた理由は、此れまでも度々新聞など  
に書かれて旦那をもしくじりかけた程思ひ込ん  
だ男をば自前にさへなれば自由に自分の家へ  
引入れて夫婦同様に暮されたいといふ事である。  
増吉は其の思ふ男が萬一病氣が傳染したつて、  
戀の爲めなら命を捨てても惜しくはないと云ふ  
に至つて、一夜を涙に明すほど嬉しく思ひ、ま  
だ病み上りの血色もすぐれぬ中から、二人して  
金泰、仲通り、板新道から信樂新道と、それぞ  
れに名のついた横町や露地の貸家をさがし歩い  
て、丁度今から一年ほど前増玉扇といふ新看板  
を掲げたのであつた。  
一足掛け二年になるわね。斯うして一緒に暮し  
てゐられたんだから、もう私やいつ死んだつて、  
實際のところ思残りはないのよ。」  
増吉は黙つてゐる男の顔を覗き込むやうに、  
炬燵の上に前身をのしかけた後、大儀らしく立

二

日の全く暮れ果てた戸外の寒さは、建付の窓の隙間から、絲を引くやうに侵入して来る。男は仕度事のない退屈しきつた身體を如何にも押しひかねると云ふやうに起き直らして、再び置炬燵の上に褥を開いたが、もう挿絵を見るのでもなく、唯だ茫然と電燈の光に照らされた亂雑な二階の身のまはりを眺めるのであつた。たつぷり夜になると共に、電燈の光は戸外の薄明かつた夕方よりは、幾分か其の力を増したらしく、四邊一體を何ともなく新しく見せるやうに思はれたからであらう。

俗に三等煉瓦の食長屋と云はれてゐる此の家の二階は、今日では明治初年を追想させる荒廢した一種の記念物とも見られるだけに、不思議な程拙なく不便に出来てゐる。立てば丈身の居くほど低い天井は紙張りにしてある爲めに、二日とは見られぬばかり、鼠の小便と雨漏りの斑點と、數知れぬ切張りにと汚され、間敷は襖を引き得べき敷居の溝を以て境とすれば三間と數へられたのであるが、硝子の下口の間と、それに續いた次の間とは、丁度西洋室の燐爐の煙筒を見るやうな太い煉瓦の柱が突出して

ゐる爲めに、孰れも二疊半と三疊半と云ふやうな不思議な疊の半數を示してゐる。他の一間だけは稍廣く八疊ほどの疊が敷かれてあるが、後から付出した一間半の押入がこゝにも亦邪魔らしく突出してゐる上に、次の間を區切る敷居の上には、どう考へても解釋のつかない、飛んでもない處に、細い柱が而も二本並んで立つてゐる。最初男は増吉と二人で此の貸家を見に来た時、猫に爪を磨せる爲めわざ／＼こんな柱を立てたのぢやないかと云つて、笑つた事があつた。

男は一昨年の秋から毎夜々々同じ電燈の光で、増吉のお座敷へ行つた後一人でぼんやり眺め廻す三間打通して此の二階をば、今夜もまた仕度事なしに眺め廻すにつけて、此れもまた毎夜のやうに自分の身の行末はどうなるであらうと、矢張同じ事を思ひつづけるのである。今では女達から兄さんとか旦那とか或は單に逆さんなどと呼ばれてゐるが、以前庭とした祖先の姓を名乗り親の家から丸の内へ、會社へ通勤してゐた頃には凡て正當なる事は馬鹿々々しく思はれ、一日半日の怠惰をも許さぬ職務の束縛には遂に堪へられずして毎日に加えられる雪達磨の下から次第に崩れ出すやうに、この藝者家

の二階に主人同様に入りびたつて仕舞つたのである。それも今になつては、あまりに爲す事なき退屈の折々には自分から抛つた規則正しい生活の活氣ある男しさを、成程返つて來ない昔の夢だと追憶して見たくもなる。けれども男は直様、かうまでに持ち崩してしまつた現在の身體では、唯でさへ根氣の續かなかつた勉難な生活には到底歸られるものではあるまい。寒い寒い冬の朝日覺し時計に起されて慌忙しく洋服を着る辛さ、雨の降る端端に電車を待つ果敢さ、乗つてからは難習の苦しさ。それから漸く會社の入口を潜れば、人々皆それ／＼の階級に従つて、其れ相應に立身出世の野心をば唯だ露直と云ふ名の下に押隠して、凡そ人間の多く集る處には必ず免れがたい反目やら競争やら阿諛やら讒譖やら、其れ等一切の不快な陰險な感情をば亦もや交際と云ふ假面の下に何事もないうやうに包みかくして行く。そんな事を思ひ出すと、こゝに斯うして藝者家の二階にころついてゐる現任の方が、どれだけ幸福だか比較にはなるまい。會社の人達が嫌のやうに、明けても暮れても、月給と賞與金との増減をのみ夢みつづけるのも、其の最終の目的は榮華と安樂に耽りたいと云ふに過ぎない。詩人でもなく仙



中燃元、耳朶の後まで、水白粉の濃淡のないやうに磨きをかけた。

「箱屋で御座います。」と云ふ聲と共に格子戸のあく音。下女は周章で、櫛子段を駆け上り、

「如さん。お召はどれを出すんです。」

増吉は頬紅を淡くぼかして、樂屋使ひの引眉毛を施しながら、

「さうだったね。あなた、鳥渡その抽田の帳面を見て下さい。」

「二十五日……鳥屋さま……五時。」と男は女が覺書の帳面を讀みにくさうに讀む。

「へい。今晩は。どうもお婆う御在あす。」と双子の羽織に同じやうな着物の裾を端折つた四十

年輩の、頭をくるくると刺つた楊箱の男は、替間や落語家などに見るやうな、何處となく角

のとれた腰の低い態度で、櫛子段を上りきつた壁際に小さく身を寄せて膝をついた。

「爲さん。着物は出でなくつても可かつたんだね。」

「へい。別に何ともいいや参りません。」

「それぢや、あのお召……雪胸の櫛模様を出しておくれ。」

増吉は下女に命じながら音高く錦臺の抽田を閉めると共に、白粉のこぼれた寝衣の膝をばた

ばたと拂いて立ち上つた。箱屋の爲さんも同じく座を立ち、増吉が新しい足袋をはき替へて

立直るや否や、下女が取出す置炬燵の長絨絆を引取つて、後から着せかける。増吉はその裾を

踵で踏へながら、終模様の半袴をかけた衣紋を正して、博多の伊達巻を少しは胴のくびれるほ

どに堅く引き締めると、箱屋は直ちに櫛模様の二枚重を取つて、後から着せかけて置いて、

女がその襟を合せてゐる暇には、もう兩膝をついて片手では長く敷く裾前を直してやり、片

手では鷹の上なる紋羽二重の長さは全一反もあらうと云ふし、ぎをさつと捌いて其の端を女

の手に渡してやつた。着せかけるにも、着せられるにも、其々に飽くまで専門家的の熟練と

沈着とが備つてゐて、聊かの混雜も流滞もなく、凡ては輕妙に迅速に取扱はれて行くのである。

この年月、見馴れに見馴れた事ながら、男は流石に始終脇枕の眼を離さず眺めてゐる中、こ

れも今夜初めてと云ふではないが、藝者がお座敷といふ一聲に、病を目して新粧を凝らし勇

ましくも出立つて行く時の様子は、恰も遠寄せの陣太鼓に慄も涙も抱つて、武智重次郎のやうな若武者が、緋絨の鎧美々しく出陣する。

その後姿を見送るやうな悲哀を催させるものだ……と思つた。

箱屋は袋につゝんだ三味絨を持つて、這入つて来た時のやうに腰をかためて出て行くと、増吉は男の傍に膝をつき、締めたての帯の間から、

今挟んだばかりの煙草入を抜き出しながら、お化粧したら却つて氣がさつぱりしたやうだわ。それぢやア、私行つて来ますよ。早く貰つ

てすぐ歸つて来るから、待つて、頂戴よ。喉の御飯一人で食べちまつちやアいやですよ。」

「如さん。車が来ました。」と下の方で下女の聲。

男は半身を起して唯だ領付いてゐると、女は其の手を軽く握つて、「お腹が空いたら、私の牛

乳があるから、あれでも飲んでお置きなさい。」それから何ともつかずに唯だ、「よくッて？」と

嬌然して見せて、増吉は棲を取つて櫛子段を下りた。

直接切火をかける音が聞える。男は再びごろりと置炬燵へ脇枕をして、大きな長い欠伸を

しながら、置炬燵を眺めると、丁度六時を指す鐘と共に、其の中に仕掛けたオルゴールが艶潤

の落ちるやうに懶く、「宮さん……お馬の前で。」を奏し出した。

間の雀焼はもうなくなつたのか。」

「もう暫くだから御平抱なさいよ。姐さんだつて楽しみにしてお腹をすかして居らつしやるんぢやありませんか。」

下女は丁度物馴れた新造が若いお客をすかさうな調子で答へながら、其の邊を取りかたづけて階下に行つてしまつた。

同時に電話が鳴出す。男はまだ少し時間が過ぎるけれど、もしや増吉がお座敷から迎ひの車を寄越せとの事ではないかと、取次ぎに出る下女の聲に耳を澄したが、欠張り豫想通りさうではなくて、他のお茶屋から明日の何時にお約束といふ電話であつた。

「旦那。」と階下から下女が聲をかけて、「あちらへ直ぐ通して置きませうかね。」

「受けてしまつたのか。」

「いゝえ。唯今お座敷ですからと云つて置いたんですよ。」

「さうかい。そんなら出先へさう云つてやつてお呉れ。」

かく吩咐けたものゝ、男は家の下女からまで、そんな商賣のお座敷に關する相談など仕掛けられたくないと云ふ心の苦痛を、眉の間の皺に現はさずには居られなかつた。自分より外に

は誰もゐない二階の中ながらも、猶人に見られはせぬかといふやうに、其の顔をさへさあらぬ方に外向けさせた。下女は増吉がお座敷へ出た留守に起る家業の用事や掛引の少し込み入つて来る場合には、其の挨拶や返事のしやうをば、一旦那々々。」と云つては何時としもなく男に相談しかけるのも、思へば既に久しい以前からの事であつた。實は男も最初は面白半分に増吉が種々玉帳の總高を算盤にはじいて見るやうな事も無いではなかつたが、いざ全くの無職業の身となつて、二階にごろ／＼してゐるより外には仕様のない現在に至つては、時に觸れ物に感ずる折々、云ふに云はれない慚愧と苦痛の念に責められてならぬ事がある。

休みなく鳴らし立てる電話の鈴の音についで、階下からはまたもや下女の聲。

「旦那。困つてしまひますよ。電話がいくら掛けてもお話中なんです。」

男は今度はもう答へなかつた。今方火を入れ直した炬燵に燒き立てられる苦しさに、男は坐りくたぶれ寝くたぶれた身體を立ち上らせ、ゆるんだ帯を締め直したついでに、階下の便所へでも行つて置かうかと思ひつたが、突然又何か思ひ返したらしく、櫛子段の下り口から竊と

は誰かゝつて見ながら、其の儘立戻つて座敷の眞中の細い柱に背をよせかけてしまつた。階下の座敷といふのは元來は二階同様の廣さであつたらしいのを、手で押せば直ぐに抜けるかと思ふに危まれる薄壁に燒して、今の煎餅屋との二軒に後から分割したものらしく、僅かに三疊の一間も勝手道具のさま／＼に狭められて下女一人やつと寝起きされるばかりになつてゐる。下女より外にけ誰もゐないのである。けれども男は其の三疊に置いてある長火鉢を見ると、左官の職をしてゐる増吉の實父が、折々こゝへ酒を飲みに来る度々、極つて娘と口喧嘩を始める事から、ついでに増吉が毎月その親に仕送る二十圓の爲めに、瘦れぬ健康を犠牲にしてまで思はぬお客をさへ取つてゐるやうな秘密を連想せねばならぬし、猶其れよりも一層避けたく思ふのは、薄い障の壁越しに絶間なく聞える年寄つた煎餅屋の老注の咳嗽の聲である。それは何といふことなしに男の不身持を嘆いてゐる自分の母親の事を思ひ出させてならぬからである。

鉦焼うどん、熬立て豆やの呼聲と、支那饅頭の鈴の音に、横町の夜も少し深け出したかと思はれる頃、男はいつか父娘喧へもぐり込んで、獨りで淋しく、梅屋の物語口説に強ひても興味

人でもない吾々の安樂榮華とは、つまる處美衣と美食と美人とに圍繞されたい事を意味するのであらう。然りとすれば、自分は社會的名譽を抛てた報酬としては已に既に餘りある程の安樂を得てゐるのではないか。惜しむ事は無い悔む事は更でない。男は重ねて二階中から自分の身のまはりを見廻した。

押人と相對した一方の壁際には、新しい桐の箆筥が二棹と、時代の知れぬ程古びたのが一棹と並べてあつて、其の上には用箆筥やら箱入の人形やら羽子板やら稽古本を入れる見臺やら、其の他さま／＼な玩具や小道具が、天井の片隅なる酉の市の熊手や、穴守様の河豚の提灯などと一様になつて、どう云ふ譯か堅氣の家には決して見られない艶しさを帯びて見える。向うの窓際には、大小の鏡臺があり、此方の窓に添ふ壁には、お召の不斷着が古びた長襦袢を重ねたまゝだらりと下つてゐる。置炬燵の掛蒲團が古臺の上に、其の花やかな更紗模様を延べた端には、紋縮緬の裏をつけた八反の襦袍と、浴衣を重ねた絹の短衣とが細帯と共に、脱ぎすてたり、其の襟のあたりの處などは、丁度藻脱の鼓のやうに女が着てゐた時の儘の形さへ残して花廊の上に狼藉としてゐる。見廻す二階中の壁と

壁と天井のいたましまで古びた汚れ目に對して、いかにも優しい其等の家財道具と見るからに艶なる女の衣類は、全く一致しない各日の特徴を互に鋭く引立たせ合つてゐるので、それをば同時に眺めやる男の心には、いつも斯うした藝者家の二階といふものに對して、一ツは放蕩の身の末の尾羽打ちからした哀傷と、又一ツには云ふに云はれない柔かな住心地を感じさせるのであつた、それは今夜のやうに女のゐない留守の間に於てさへも其のぬぎ捨てた衣服のさまざまからは絶えず一種の重い生暖い氣が吐き出されてゐて、聳へる事のできない程手觸りよく、男の身を蔽ひ包むやうな心持でも云はうか、この快感と同時に古びた家から感じられる彼の哀傷とは、常に相混和して、遂に／＼今ある如くに男の良心と、男が誰でも持つてゐる生活に對する固有の奮闘力とを根柢から麻痺させてしまふのである。男は此頃になつて朝湯の行き歸りなど、女着を仕立直した半纏を引掛けて戸外へ出る折々、横町の彼方に見える銀座の大通の忙しうな生活を傍觀してさへも、何となく其の空氣の荒々しさに堪へ得ぬやうな心持がして、直様この二階なる絹の柔かみと

白粉の匂の古果へもぐり込んでしまふのであつた。されば男が一向に増吉の病氣も悪れず、傳染したとて構はぬと云つてゐるのも、つまりは何うにも斯うにもならぬ程じだらくに持堅してしまつた我が身の成行の、寧ろ早く片が付いてくれる事を絶望的に希ふ爲めに外ならぬ。否、男は死といふ事よりも今は、増吉が先きに死んで自分ばかりが無病息災で後に殘されたら其れこそ見じめなものだと氣遣はずにゐられないのである。

### 三

自動車が二階の箆筥の環をゆすぶる程、恐ろしい地響を立てゝ通つた。車隣りになつてゐる小待合の二階からはサノサ節を歌ふお客の聲が聞え出すと、横町の彼方からは、これは今年の九星八卦よみに御在ます。といふ敏喉れた讀賣の聲が近付いて来る。下女が澤庵臭い嗅をしながら増吉の短衣を炬燵へかけに來た。

「大分腹がへつて來た。何かないかなア。」男は振向くと、斯うした稼業の家には年久しく使ひ馴らされた三十前後の下女は、わざと調子をすげなくして、「旦那一人に先へ御成なんぞ上げると、後で私が叱られます。」「だつて食はずには居られないぢやないか。此



は第一の呼物として待ちかまへてゐたものらしく、紅白の引幕がまだすつかりと引きのけきらぬ中から、早くも襪子の上に並んだ美形を眺めようとて、無遠慮にも席から及腰になつて立ち上るものすらあつた。新橋の藝妓といふ名稱が持つてゐる魔力は恐ろしいものである。然しさうなると、何に限らずこゝに一種の反抗者、冷笑者の生ずるのも亦自然の勢であらう。「藝妓の三味線が聞きたけりや待合へ行くがいや。」などと云ひながら、わざと騒々しく席を去つて階下の便所の方へ行くものもあれば、または斯う云ふ折を利用して、人込の空氣の蒸暑さを逃れ、休憩所でゆつくり茶を飲まうといふ連中も少なくなかつた。

圖らず會場の中で出遇つて今までは一緒におとなしく聴いてゐた自分の友達ながしは、矢張この時、突然自分の袖を引いてそして振向く自分の顔をば、寧ろ不審らしく眺めた後、「どうです。咽喉が渴いたぢやありませんか。お茶でも飲みに行きませんか。」

舞臺の方では既に囃子を入れた前奏の一節がすんで、今しも兩鬢のおそろしく抜けた上つた紙色の老妓が、立唄の貫目をつけて、重々しく唄ひ出した。然しかなる素人耳にも纏じて女

の聲の長唄を、かう云ふ廣い會場の明るい燈火の中で聞く時には、場末の小芝居の下座にも劣つて、妙に力抜けがして、間拍子よくきりの付かないやうな、頼りのない心持するものである。友達はおう癪癪に觸つてたまらないと云ふやうに、「まづいなア。」と舌打をして、今度は急ぎ立てるやうに自分の顔を覗んだ。

自分はいして避けたくもなければ、又たいして聞いてゐたくもない連中の一人なので、促されるまゝに座を立つた。今まで人の頭で後からはよく見えなかつた舞臺の前側までよく見通される。立唄と立三味線と、其の脇とは、いづれも年寄つた此の舞臺の女に見られる澁紙色の顔色をしてゐたが、上調子の三味線に笛、太鼓の連中には、裾模様色の華やかに、烏田の音も水際立つたものが目についた。自分達は會場の壁に沿つて廊下に出ようとした時、舞臺の方では臨時に拵へた揚幕から現れる登衣裳の踊子が、滿場の視線を奪ふ處であつた。

## 二

休憩所の縁側に腰をかけながら、何ともつかぬ雑談のしばし途切れてしまつた時、友達は膝の上に弄ぶ番組の刷物を繰ひろけて出演者の

名前を見るでもなく見てゐる中、ふいと何か思ひ出したやうに、自分を顧みて、「君、この小鍛冶といふ、藝妓を知つてゐますか。」

「鼓をやるんですね。」と自分は番組を差覗くと共に、今方瞥見した舞臺の様を回想しながら、

「いゝえ、知りません、綺麗な女らしいやうでしたね、新橋の名妓ですか。」

「名妓……は……は」と友達は大きく笑つて、面白い話があるんですよ。今の世の中は何でもあの調子で行かなくつちや駄目です。」

友達は現代の社會一般に對する嫌惡の、これも其の一例として、會場を出てからの歸途、次のやうな藝妓の内幕話を聞かしてくれた。

さうですね、もう彼れは是れ十年にもなりましかね。私が初めてあの藝妓を知つたのはまだ大學にゐた時分の事で、あの女も其の時にはお君と云つて湯島の小さな天鼓羅屋の女中をしてゐたんですよ、まだ肩揚を取らずにゐた程の年頃でした。が此は寸にして人を存むと云ふ方なんでしょう。年長の女中よりも酒は強いし、男をあやなす腕に至つてはどうしてなか／＼凄いもので

を得ようと努めてゐる時、突然格子戸の外に車夫の聲がして、思つたよりも早く増吉が歸つて来た。

「政。すぐ御膳の支度をするんだよ。」甲走つた聲と共に梯子段を踏む音が一段々近いて來ると、此方幾分か待びち俵びてゐたと云ふ弱點のあるだけに、瞬間に起る男の意地が自然とその場合、歌澤の文句にある通りな思ひせぶりな空襲入をさせる。女は梯子段を上り終るや否や、襦袢を解き捨てながら歩みよつて、「早かつたでせう。」と小聲に云ひながら男の肩の上に身體を載せた。

氷のやうに冷えきつた女の着物に頬を撫でられ、男は覺えず身顫ひして女の手を取つたが、

「大變な熱ぢやないか。」

「背中がぞく／＼してとてもお座敷にゐられなかつたのよ。矢張無理をしたのが悪かつたんだわね。」力のない調子で申すらしく男の顔を見た。

「だからさ。云はない事ツぢやない。」

「もう叱らないで頂戴よ。私が悪かつたんだから。」覺しく謝罪と同時に、女は又甘えるやうに其の不平等を訴へて、「それでも今夜は

一杯もお盃なんぞ受けやしなかつたのよ。この上身體をわるくしちや大變ですもの。いつたつて少し頂いたと思ふと、直ぐ内密で厠へ行つちや頬紅を薄く塗つて、醜態つたやうな眞似をしてゐる位に、それア用心してゐるんぢや有りませんか。」

「だから、何もお前が好んで不養生すると云やしないぢや無いか。いゝから早く着換へておしまひ。何かよく暖まるもんでも食べて早く寝た方がいゝよ。」

「あなた。お腹が空いたでせう。もう一體何時です。」男の身體に凭りかゝつた儘で羽織を脱ぎ帯留の金具をはづしながら、置時計を見返つて、「九時過ぎたばかり……割に早いわね。」

「お聲者さまを呼ぶのなら、今の中に早く政に行つて貰つたらどうだい。」

「さうね……と考へて、「ほんのちよいと風邪を引いただけなんだから、此の間の衾服がまだ残つてゐるから……。」

下の方から其の時強い綿飾の包が立ち昇つて來た。女は何も彼も忘れてしまつて、

「あゝ嬉しい。政やが窓飾をこしらへたわ。」

「さあ早く服いでおしまひ。襦袢一枚でどうするんだよ。」

「アッ。熱い。焼けどするわ。あなた。」増吉は男が煩悩から取出して着せ掛ける褌衣の陰に、早や肌襦袢もない眞白な身を艶しく閃かせた。

格子戸があいて箱屋の聲、「姉さんもうお歸りで御在ますか。」

「どうも御苦勞さま。」と暫くしてお政が香の物でもきざむらしい組板の音がし出した。

二人は唯何といふ事もなく顔を見合はすと共に、さも嬉しうに微笑んだ。

## 名花

何々俱樂部と云ふやうな名のついた或る廣い會場で、何々研究會といふやうな名稱をつけた半興行的な催しのあつた折の話である。

東洋の文明がどうかのうのと云ふやうな御大層な趣意書のあとに、續いて書き列ねられた番組の通り、三曲の合奏、長唄、常磐津、新内などの間に交つて、下方まで、すつかり撞つて新橋鐵道連中の手踊機が始まつた。

見物はいづれも此の踊をば當夜の番組中で

いわけには行かなかつた。定めしいけ、好ない奴だと思つた事でせうが、何しろ先方は暇もつ足の氣味わるさ、遂に度胸を据ゑたものと見え、丁度一座の宴席もそろ／＼騒々しくなりかける頃から、忽ち最初の敏達主義を一轉さして、今度は妙に馴々しく媚を呈し出します。隣席の生酔が「君どうもお安くないですなア。」などと冷笑しても花鳥は悪びれず、「だつて仕方がないわ。」と上手を打つ。便所へ立つ時にも、すかさず附いて来て世話をしてくれるといふ調子。つまり私を籠絡してしまはうと云ふのでせう。太い奴だと思ひながら、若い藝妓にちやほやされるのは誰にしても悪いものぢやありません。殊にかう云ふ場合には酒と云ふ魔物が誘惑を助けます。騒々しい酒宴の席からは、罪の深い野心家がそろ／＼隙を窺つて二次會へしけ込み始める。其のまた隙に乘じて慾の深い藝妓は後口を受けた外の座敷へと逃げるやうに消えてしまふ時分私は誰でもがよくやるやうに、花鳥を廊下へ呼び出して囁き聞かせました。すると花鳥は、私をばそんな人ぢやないと思つてゐたのに、案外だと云はぬばかりの顔付をしました。が、今からさう狼狽して、お客の機嫌を悪くしてしまはないでも、まだ／＼、いよく切端つまつた

其の場合に立至つてからでも、逃げる手段は臨機應變にいくらも有らうからと、さすがは經歷の多いこの女の事、お茶屋の内儀に睨まれて唯だもう泣かぬばかりにべそをかくやうな出たての子とは違ひます。花鳥のお君は表面だけ羞恥を含んではんけちを口の端に弄びながら、どこか泰然自若たる様子で、

「それぢや、あなた、一足お先へ行らしめて掛けて頂戴。すぐ貰つて伺ひます。」

「きつとだぜ。」と念を押して、私は云はれるままに一足先に料理屋を出で、唯ある横町の唯ある待合に行きました。そして花鳥の来るまでの間、私は其の家の内儀や女中を相手に内々花鳥のことをきいて見ました。

「随分よく賣れる兒で御在ますよ。藝妓はあの位のところが一番世話が焼けなくつて、重寶で御在ますからね。」

「あゝ見えても、それ相應にお高く留つてゐるんだらう。」

「なに、あなた。商賣ですもの。お客さま次第ですよ。」

「いつ時分から出てゐるんだい。」

「さう……まだ半年位になるかならずで御在ませうよ。」

やがて花鳥はかなり暇を取らした後、わざと綺羅を張つて見せるつもりか、別の衣裳に着換へて髪飾りまで取りかへて來ました。

女中は折を計つて早くも座を外す。私は花鳥と二人ぎり狭い座敷に差向ひになつたが、さすがに以前の事——殊に友達から手切金を取つた一件などを今更口に出すのは、何となく氣のと、向では案外にも、「葛田さんはどうなすつて……」と突然友達のことをきく出すのです。

「〇〇縣の裁判長になつてゐる。」

「あら、さう……。」

「凄腕を振つたね。あの時は……。」

少しは面憎くもなつて私はかう云返してやると、それから花鳥は一寸身體に嬌を作つて見せながら、「だつて、私、あの時にはほんとにあの方と一緒にいたかつたんですもの。逆上せると、すぐ夢中になつちまふんだから、若い時はしやうがないわね。」

「現在はどうなんだい、もうあんな男の事なんぞ夢にも見やしない。」

「夢に見るほど思つたからつて、もう始まりやしないわ。身分ぢがひのものが、いくら思込んでつて、あなた見たやうな人が寄つてたかつて、



した。今では法學士でさる地方の裁判所長をしてゐますが、其の男があの御坊のいやにこまぢやくれた厭らしい風に迷ひ込んで散々生血を絞られたもんです。下宿屋へ轉げ込んで来て是非未來の學士さんの奥様にして下さいと云つて、泣いたり喚いたり、そしてどうでも望がかなはないのなら不召池へ身を投げるといふ騒ぎです。仕方がないから遂に私が中に這入つて、手切金の相談をして、やつとの事下宿を引上げて貰つたといふ始末。

その後お君は何處へ行つてしまつたのやら、私も友達もその消息を知りませんでした。細君にして下さいと強請んだ御本人の友達にさへ、お君は其の實家をば唯だ淺草の芝居町邊とばかり、兩親があるのかないのか、それさへも話の斷片には漏さなかつたさうです。私も未だに當時のお君、今日では新橋の小鍛冶の身元については何事も知つてゐません。其翌年私達は大學を出てしまひました。友達は間もなく地方へ赴任する。私は次第に墮落してぶら／＼遊び歩いてゐる中圖らずお君に再會したのは、まアどこだと思ひます。公園六區の銘酒屋の戸口でした。其れから半年ばかりたつて私は新聞社に這入つたのですが、すると或日机を並べてゐる

仲間の記者が濱町の優物だと云つて、白癡らしく示した寫眞……見れば間違ひもなく天麩羅屋のお君が三度目の變身です。私はその男から濱町や鰻煮町邊の小待合に出没する女の事を、いろ／＼に話して聞かされ、いつか一度案内して貰ふやうな約束までして置いたのですが、する中その男はお君が突然行方をかくして仕舞つたと云つて、大いに情氣返つてゐるので、其れなり私も濱町へは行かずにしまひました。

こゝに滿三年の月日がたちます。濱町の話をした新聞記者は運よく足を洗つて朝鮮へ行つてしまひ、私は他の新聞社へ轉々して、ある宴會の席上で偶然にも今度は四度目に藝妓姿となつたお君を見たのです。

然しお君はまだ其時には、今のやうに小鍛冶なんて、變に姐さんぶつた名前をつけてはゐませんでした。若い便利な新橋の藝妓にはよくある花千代だの龍龍だのかしくだのと何となく華魁か引越新造のやうに聞える名前を付けてゐました。——お君の名は花鳥と書いて其れを花鳥さんと讀ませるのです。

お君の花鳥さんは思ひがけなく舊知の私と顔を見合せて、内心きよつとしたらしかつたが、

呼ばれてゐる藝妓の身として逃げもならず、と云つて黙つても居られず、始終恐るゝ如く嘆願する如く、私の氣色ばかり窺つてゐました。無理もありません、これが溝谷か、公園か、津の守か、乃至は富士見町、神樂坂あたりならば知らぬ事、兎に角新橋といふ本場の土地で、而も其の扮装は思ふさま張り出した虎斑に日のさめるやうな荒いお召縮緬縞珍の丸帶と云ふ、どう見ても世間見ずの素人如から、今日初めてお私めをしたんですと云はぬばかり、若いと、綺麗と、柔順いと三拍子を看板にしてゐるらしい矢先へ、天麩羅屋の姐さんから銘酒屋濱町と波つて歩いた經歷を裏破抜かれた日にや、身も蓋もない話ですからね、實際お君はどう見てもそんな恐ろしい境遇を通りぬけて來たものとは思はれませんでした。初めて遇つた時から數へると、云はずとも、最う二十を二ツ三ツ越してゐる筈なのが、再び十六七の若いあどけない様子になつて、お客のさす杯をも、「わたしちつとも頂けないのよ。」とさも困つたやうに、遺瀧なく唇をつけるだけにして居ます。

私はあまりに、其の變裝假面の巧妙なのに、寧ろ多大の興味と好奇心を呼ばれ、御當人には氣の毒だと知りながら、その一舉一動に注目しな

髪結さんだのに困るばかりぢやなくつてよ。家の女中や部屋に鳥渡物を頼むにもみんなお金がさきでせう。今月はもう如さんにも随分借りが出來ちまつたんですからもう此上は頼めないんですしね。なぞと何時終るとも知れず嘯々と事情を陳述する。また或る場合には足元から鳥の飛び立つやうに、「ねえ、あなた、後生だからどうかして下さいな。」と云つて先づ人に臆を潰さして置いて、一時の融通に質入した大切な指環をわづかな利子の爲めに流されてしまふのは惜しいから助けて下さいと泣聲で訴へて見る事もありました。

十圓二十圓三十圓と、両も積ればなかく馬鹿にはなりません。私はふとした好奇心から此様女に引掛つて馬鹿な金をつかつた事を無念に思ふものゝ、そんな事に未練を残してゐた日には、まだ此の上でどれだけ鼻毛を讀まれるか知れないと氣がついたので、そろ／＼お盆が近くなりかける頃、體よく逃げてしまふと、先方もさううは続れないと大概の見切をつけたと見えて、其れなり何とも云つて來ませんでした。けれど其の後は折々間接に私は色々な處で色々な方面から花鳥の噂を耳にしました。耳にすればするほど自分の馬鹿であつた事が我な

がらも笑止に感じられてならないのです。花鳥は私に對しては大方昔の習性を知られてゐるだけに却つて虚勢を示さうとでも思つたのでせう。最初の晩にもゴタ／＼したやうに兎角藝の賣目をつけて見せようとのみ力めてゐたのですが、噂を聞いて見れば同じ新橋の女の中でも極めて下等な部類に屬するものだから、一層驚くべきは西洋人と支那人を亭門にするとか云ふ處から、それを知つてゐる朋輩からは、あゝあの人がかと思ひきされてゐるのださうでした。

然しそんな事は花鳥の更に意とする處ではありませんまい。私は其れからまた三年ばかりの間大阪の新聞社へ移つて再び東京へ歸つて來た時には、花鳥は早くも立派な自前の藝妓になりましたしてゐました。つまり無意地を張つて何時までも抱への身に積る借金に苦しめられてゐるよりか、手段を選ばず成功して樂をした方が當世といふものです。私は新聞記者といふ職業柄或日歌舞伎座へ行きますと、樓敷外の廊下で圖らず出遇つた花鳥は、別に應ずる色もなく寧ろ得々として向から私を呼びかけ、已に私が噂を聞いて知つてゐるのにも係らず、「おかげさまで私も去年から一本立ちになつたんです

よ。もう花鳥ぢやないんですよ、名前も變へましたの。小銀治ツてぶふんです。ほゝゝゝ。おばアさん見たやうな名でせう。お氣にめすかどうかですか知れませんが家に於いて若いのが居りますから、どうぞね、また御最良に。と勝手次第に自分の事を吹聴した後で、「あゝ、さうですか、暫く大阪の方へ……へえ、まだ御獨身なんです。色々は兎角身が持てませんね。然し却て其の方がお氣樂でよう御存じますよ。男でも女でも世帯臭くなつたらもうおしまひですよ。」と略に現在の小銀治は昔の花鳥ではないといふ事を吞込ませようとしします。やがて次の幕間に花鳥改めの小銀治はます／＼新橋の如き一株たる勢力を示すつもりか二三の若い奴と共に私を勧めて三階の食堂へ行き、ビールに海老のフライを御馳走してくれる始末。そして是非一度家へ遊びにいらつしやい。この頃はもうお稽古一方でろく／＼お参詣に行く暇もない位なんです。それから、中間は屹度家にゐます。と頻に私を誘ふのです。

生木を毀くんですからね。」

「ふつ、今時分葛田が東京にゐたらどうする。」

「どうもしないわ、内密でせめてお顔なりと見に行くことよ。」

「馬鹿にするがい、どこまで浅いんだか譯が分らない、到底太刀打ちは出来ない。」

「よしして下さいよ。人聞が悪いぢやありませんか。」

今度はつんとして横向きに巻煙草を吸ひ始めました。

もと／＼私は女の舊惡を語る爲めにわざわざ此處へ呼んだのぢやない。偶然會つた宴會の席上で、何となしに媚を呈された迷ひから酔に乗じて思ひ立つた事なので、暫時沈黙の後、「ねえ、花鳥」と改めて呼びかけますと、花鳥の方もさう氣なく、一般のお客に對する藝收らしい笑顔を此方へ振向けます。

「今までの事は一切云はない事にして、お互に今夜から改めてお知にならうぢやないか。」

「え、どうぞ。」

何ともつかない雜談が又一しきりつゞきます。

私は再び切込んで見ようとその隙ばかりを窺つてゐると、先方も矢張り馴れたもので、お座つたぎの雜談に時間を空費して、他から

お座敷の掛つて来るのを待つか、然らずば切端つまつて十二時の時間の来るのを待ちそして家から迎ひの車の来るのを機會に、家ではほんとに姐さんが喧ましいんですからなぞと、體よく逃げようと云ふ計略らしい。そんな常套の手段には此方だつてまんまと載せられるやうなへマではない。花鳥も大に窮したと見えて、鴛鴦鯉の挨拶の中につまり此處の家は馴染でないから、他のお茶屋からもつと早く宵の口に掛けてくれとの事、そして自分の馴染のお茶屋といふのは河内屋とか若松屋とかもつと格式の上な處である事をそれとなく仄せました。

かうなつたらもう乗りかゝつた船です。意地づくにでも無理を通さなければ承知が出来ません。夜はいつか十一時を過ぎたのにも係らず、車を二臺吩咐けて私は無理やりに花鳥をば所謂格式の上な別の家へ引張つて行きました。局外者から見たら放蕩者のなす處ほど馬鹿々々しいものは有りますまい。

其の夜の出来心は飛んでもない損害の原因でした。私は一箇月ならずして忽ち方々へ不義理を拵へるやうになつたのです。それが矢張り放蕩したものでなければ想像の出来にくい馬鹿々々しい放蕩者の意地からです。最初は妙に手強く

見せて置いて、其の舉句、一度男の自由任せたとなると、丁度本郷の天狭羅屋時代に私の友達を悩ましたと同じ筆法で花鳥は急に向から逆せ上るやうな風を見せ、電話や手紙に呼出しをかけて、一日だつて男を安穩にはさして置きました。で、一度逆へばすぐ其の次の何日にはお約束をつけたといつてと強請る家がづらいからと訴へて遠出を促す。かくて知らず／＼逢ふ事の度重なるに従ひ、自然と情の濃かになる汐時を計つて、一寸其の場合男の口からは見得にでも厭だとは云はれぬやうな、巧な辯舌と表情とでつまり金銭物品を要求するのです。

お笑ひ草まで、一寸その一例を云ひませうか。まづこんな鹽梅です。ねえ、あなた。何ぼ何でも藝妓の口から、こんな事はきまりが悪くて、外のお客様には云へやしないわ。」と私は以前の身分を知られてゐる特別な深い間柄だからと飛んでもない事を思にきせるやうな前置の後、「これが、せめて一本とか半分とか纏まつたお金なら一か八かでお頼みして見るお客様も無い事は無いんですけれど高が其の日のお小遣なんですか。全くきまりが悪くて誰にも云へやしないわ。だけれども藝妓は一番お小遣のない時ほど困る事はなくつてよ。お湯屋だの



さん、喜樂さんなどと、新橋一流の料理屋待合の名を並べ其處へ出入する華族様や大巨方や諸會社の重役社長様の名前を親し氣に饒舌りたてます。私は成程々と、唯だもう恐入つて拜聴してゐますと、先方はますます「お調子づいて、「あなただから話すけれど、家のやうな新しい看板をこれまでにするにや、それアほんとに一ッ話だわ。あゝ云ふ大きなお茶屋さんへ出入する藝妓衆は、この土地でも何人ときまつてゐるんですからね……」と其れからは欠伸の出るほど長々しく所謂新橋一流の名妓となつて顯官富豪の宴席に侍するやうな地位になるまでの専門的苦心談を聞かせるのです。

いやや、其れだけならまだしもよい。小鍛冶は私が新聞記者である事を利用して、何とか折を見て、小鍛冶の事のみならず、其の家の抱妓の評判までをそれとなく新聞に書いて提灯を持つて呉れと云ふのです。それもお仕舞の云ひ草が恐しいのです、——家へも毎日のやうに、やれ、花柳俱樂部で御在ますの、美人新報で御在ますのつて、いろ／＼な記者が寫眞だの訪問談の種なんぞ取りに来ますけれど、あゝ云ふものを一度家へ入れると、後がうるさうござんすからね。とばかりでつまり私なら比較的タチの悪

くない新聞記者だから、よろしくお頼み申すと云ふのです。これには流石の私も閉口して何とも返事をしかねてゐますと、小鍛冶はいよく出でていよく奇怪千萬な事を云ひます。「これから、ちよい／＼遊びにいらッしやいよ。若くつて柔順しいのを取持つて上げるわ。これは大方抱妓がお茶でもひいてゐる時私に呼ばせようとしても云ふ抜目のない下心なんぞでせう。

私はそれなり小鍛冶の家へは行きませんでした。のみならず其の後は新聞社の近邊の横町や芝居宴會などで出會つても例の調子で話しかけられるが厭さに、此方から強ても避けるやうにしてゐたので、一年二年とたつ中次第に知らぬ人のやうに、今では顔を合はしても、もう全く挨拶さへしないやうになりました。私は小鍛冶がいつの間に鼓なんぞ稽古したのか、今夜はじめて見て憫りしたのです。以前は三味線もろくすつば弾けはしなかつたのですがね。尤も鼓は間拍子さへ覺えれば中年からでも案外やれるものださうです。

### 三

友達はかく語り終つてそして最後に更にその藝妓の人物性格を明瞭ならしめる爲めか、次の

やうな一節を付け加へた。

「全く現代主義の權化ですね。あの藝妓に限つて役者買ひをしたと云ふ話も聞かないし、隠した色男といふやうなものもないやうです。つまり一度も心から男に惚れたなんて云ふ事はない女なんぞでせう。戀といふ心の要求を感じないで、唯だ年増さかりの激しい肉慾と利益の慾とを満足させて行きさへすればそれでいゝと云ふ女なので。弱味といふものは一厘一毛もない強い恐ろしい女ですよ。あゝ云ふ女を若し男にして現代の社會に活動させたら、どんな人が出来ると思ひます……」

友達はさも痛切にをぐつたと云はぬばかり其の調子さへ強めて語つたが、然し自分は最初から、たいした興味をも感ぜずに聞いてゐたので、別に何とも思はずに別れて歸つた。

## 松 葉 巴

勇吉は今年でもう十幾年とつゞけて歌澤節をやつてゐる。本名の勇の字にちなんで師匠から歌澤芝葉男といふ名前さへ貰つたが、猶これ

ですか。」と小鍛冶の家の格子戸をあけて見たのです。いや實際取つたお話ですよ。

仕込の兒かとも思はれる十二三の少女に取次されて、私はすぐ二階へ上りますと六疊に三疊の二間が如さんの居間です。小鍛冶は窓際の机に向つて唯一人何やら物を書いてゐたが此方を振向いた時初めて私の來たのに氣がついたと云ふやうな、いかにも態とらしい様子をつくつて、

「まあ汚いところへよく入らして下さいますた。」

「おいそがしいでせう。」

「いゝえ、何……。」と机の上を片付けながら、「お手習を初めたんですよ。古今集の序文を習つてゐますの。假名だつて馬鹿にはできませんね。」

私は返事に窮して其場をまぎらす爲めに何と云ふ事もなく二階の様子を眺め廻しますと、成程これが經机で手習でもしようといふ當代の藝妓の嗜好なのでせう。第一に私の目についたのは漆塗に蒔繪をさへ置いた圓火鉢に、それから西洋風の三面開きになる大きな化粧鏡、二枚折の金屏風、紫檀の臺子、唐木の經机と云ふやうな、凡て木屋漆器店から然らずば三越の三

階から正相付きのまゝ運んで來たとしか思はれない生々しい色をした新しい家具一式、それは此の藝妓屋の二階をば新華族の花嫁さんのお部屋とでも云ひたいやうに、何とも云へないほど不調和に上品がらせてゐます。

凡て遠成的に成上つた人達が持つてゐる此の上品がりたいと云ふ妙な嗜好、寧ろ欲望は其の時代々々の流行と其の人々の職業や階級に従つていろいろちがつた形になつて現はれるものですが、其の内容はいつも一定の傾向を取つてゐるのは一寸面白い事だと思ひますよ。相當に金の出來て了つた實業家ならば其の子女を利用して當路の權門と姻戚になり、株相場で儲けたあぶく銭を振りまいて博愛慈善を種に己れも爵位の肩書を得ようとする。多年の官海游泳術にやがて鰻上りに大臣の椅子でも占め得た老成の官吏ならば目ぼしい新聞記者を籠絡して、己れの功績を陰に陽に稱揚させて、生きてゐる中から早くも銅像にならうといふ支度に忙がしい。さて下つて下町の町人風情となれば正直な家業はそつちのけにして、フロックコオトに園遊會の果が市會議員の運動といふ手段取り。かの人道正義を標榜して表面はいやに失意不遇を銜ふ在野の論客と雖ども、要するにこれ、

瘦犬の鼻齧かして社會の祕密、個人の私行を嗅出し、何の彼のと騒ぎばかりを大きくして、物質的非物質的に己れの腹を肥さうと云ふに過ぎない。園遊會はかういふ人達の大好きなものです。何とか會だの何とか俱樂部だのと名をつけて氣の弱い無關係な者共から會費を取立てるのも此人達の癖ですよ。白木に破風造りの洋混合のお屋敷はかう云ふ人達の趣味から作り出されたものです。自動車に帝國劇場は考へて見るまでもなく全く時代の要求に適したものと云ふより外はありません。

私は已に御存じの通り藝妓小鍛冶の今日に至るまでの經歷をよく知つてゐるだけに、急速な現在の成功振りが他の社會一般の現象と同じく、飽くまで現代の色調を帯びてゐるのに、今は却つて多大の興味を覺え、ますます仔細に其の様子を観察してゐますと、それは氣づかぬ小鍛冶は廣大なお屋敷の客間からお小間使でも呼ぶやうに、ボン／＼と手を叩いて臺所で洗物してゐる下女を呼び、紫檀の臺子から九谷の茶器を取下させて茶を私に薦めながら、丁度其時どこかのお茶屋から電話で明日の何時にといふ口がかゝつて來たのを機會に、小鍛冶は私がきくもしないのに、顔と口ささん、藝妓

が禿げてゐたけれど、漫ろ昔の侶はれる皮膚の綺麗な面長の下ぶくれ、いつも少し抜衣紋に着なした着物の懷中を大きく膨ませ、本博多の縁上に、濫い好みの煙草入をば毎日のやうに差替へて来ると、待合千代香の親方の方も其の身分相應に幡隨院長兵衛の講で聞くやうな銀鎖の提煙草入を腰低くぶら下げ、手拭浴衣の平袖から國芳風の刺青を隠見せながら、この二人は毎日缺きず霞餐の休茶屋に落合つては閑靜な境内の涼風を稱美し、吉原や堀の舊遊を談じて笑ひ興じながら終日飽きずに將棋をさすのである。次第に顔馴染になつた勇吉は折々將棋の仲間入りもした。又かう云ふ昔の人から話される、回舊談には小説や講釋と同じやうな興味を覚えるので、時には此方から進んで御維新前の世の中の事はいふに及ばず年々の神田祭に關する逸話、多町の花車人形、鐘麩の出来、又開化の御世の眼鏡橋、筋違御門後の見世物場の賑ひなどあれやこれやと質問すると、元々極く人の好い老人達は百年の知己を得たるが如くに喜び、お若いのに似合はず感心な方だと賞めちぎつて、遂に或日の夕方多町の隠店には非に一杯と勇吉をばわざと妻戀坂の己れが妾宅へ招待するに至つた。

## 二

お妾はもう三十近くもとは講武所で名を賣つた藝妓と云ふだけに酒肴の用意も極めて手早く手綺麗に、そして初對面の、殊に年の若い勇吉には萬事氣心のおけぬやう、氣輕に心安くしながら、又決して禮儀を失はぬ誠に程のよい物馴れた態度を示すのであつた。  
二一杯熱いのを取遣すると、旦那はもう獨りで悦に入つて茶の間の三味線を取り寄せさせる。お妾は輕く笑つて勇吉を見返り、「大變で御座ますよ、親類中で二段聞く方の連中なんぞ御座ますからね。」  
勇吉は唯だ笑つて其の場を紛らしてゐると旦那は急に思ひ出したやうに、  
「今夜見たやうな時に、お玉が遊びに来ればいいんだのに。お前見たやうなお婆さんのお酌ぢや、お慰みにならないやな。」  
「ほんとに。」とお妾は始終微笑みながら、「暑い中はだして忙しくもないんでせうから、呼びにやつて見ませうか。」  
近所の仕出屋から二品三品料理が来る時分、使にやつた女中と一緒に連立つて、荒い浴衣掛の若い綺麗な女が甲高い陽氣な聲で格子戸

を開けて這入つて来た。小玉といつて、殆ど毎日のやうに晝間この妾宅へ遊びに来ては三味線など渡つて行く當時講武所で賣出しの藝妓である。

「お敷きなさい。」とお父は皮膚團を薦め眞身の妹に對するやうな極く親しい調子で、「いゝ鹽椒に家にゐたね。」

「丁度いゝ處だつたわ。お座敷から歸つて来てお湯に行つたところだつたのよ。いつ迄も暑いわね。私今日なんぞはほんとに死ぬかと思つてよ。」遠慮なしに團扇をつかひながら、一旦な、久し振だわね。お後で一段伺はして頂戴な。」

「たつた一段でいゝのか。」

「夏向の事ですからね、何なら半段にして頂くかも知れませんよ。」

「此い、年寄だと思つて人を馬鹿にしやがる。」

今夜は源氏十二段すつかり渡つて見せるぜ。夜が明けるかも知れないよ。」

「いゝ事よ。旦那にこまかつたらもう其の覺悟だわ。神妙だと思つて、どうぞお手柔かに……」

こゝで小玉とお妾さんの連彈で隠居が白慢の一巾節を半段ばかり。やがて又冗談に時を移



から先死ぬ迄も歌澤は止められない。若し死んだ時にはお經の代りに歌澤でお通夜をして貰はうと思つてゐるほど、歌澤節は勇吉の生涯からはどうしても引離すことの出来ない深い關係を持つてゐるのだ。

勇吉は或専門の學校を卒業すると其儘二年ほど其の學校の囑託講師をしてゐたけれど、將來教員で果てゝしまふよりはと思返して或保險會社に轉じた處不幸にして會社が解散されてしまつたので、暫くの閑浪人してゐた後、遂に今日の銀行に口を求め、やがて妻子も出来て年と共に行内では一寸顔の賣れた地位に進むまで、その境遇にはそれ相當の變化があつたけれど、歌澤のお稽古ばかりに至つては實に十年一日の如く何の變りもないのである。

そも、勇吉が初めて本式に師匠を取つて歌澤節を稽古しようと思ひ立つたのは、丁度浪人時代から銀行の口にあつた時分の事で、勇吉はその當時誰にも話す事の出来ない心の悲しみをば、何とかして自分から慰め忘れさせる爲め清元なり長唄なり何か一つ藝事の稽古をして見ようと思立つて歌澤を擇んだのであつた。勇吉の身分は其の時分浪人してゐても、まだ獨身なので書生時代と同じやう兩親の家に

ごろ／＼してさへ居ればよかつたのである。又西洋で新刊される經濟學書類の翻譯でもすれば時には保險會社の月給よりも多額な原稿料が取れる事もあつた位なので、若い身空の氣風氣儘な境遇は會社に就職してゐる時よりは却て遊ぶには便利であつた。何しろ年頃け二十七八の獨身と云へば若い中にも何處か分別らしい處も出来、男らしい強みも備はつて頼もしいうにも見える處から女には一番惚れられやすい時代であらう。それに一晩や二晩家をあけたからとて、兩親始め誰も學生時代のやうに干渉はしないし又自分の力だけで多少は金の覺もできるといふのだから、勇吉は足らず勝ちに遊びながらも時々世の中に自分ほど氣樂なものはあるまいと竊に思ひ返す事もあつた。全くこの浪人時代の面白い月日は勇吉に取つて生涯忘れられない懐しい追憶の種になつたのである。

世のありさまも亦今日に比すればまだ、其の時分は氣樂なものであつた。市區改正といふ事がほんの圖面の上のみに描き出された其の頃の東京は、既に電信や電話や、赤馬車や鐵道馬車などに徐々たる進歩は示してゐたが、まだ左程今日の如くに、鐵と電氣と煤煙との恐怖すべ

き近所の都市たる怪力を現さずゐた。隅田川には長蛇の如き木製の橋が幾つも横たはつて居たし、市中の堀割には昔の猪牙に等しい早船があり、自動車は廻り廻らぬ往來は必ずしも左側を行かざるべからずとも定められて居なかつた。菊は團子坂、朝顔は入谷といふやうに、市民の娛樂は昔からなる年中行事を繰返すに過ぎなかつたので、自然青樓妓家の噂も嚴格な道德上の問題とはならず、淨瑠璃にある通りた他愛もない詩情の泉となるばかりであつた。

勇吉は湯島に住つてゐた處から、丁度夏も眞盛りの書過ぎを暮しかねる折々、浪六組並などの小説本を手にして神田明神の境内の岸上と並んでゐる休茶屋へ涼みに行つたり、又雨でも降る日には白橋亭の書席へ國定忠次の講釋などを聞きに行つたりしてゐたが、忙しい世の中から全く隠れた斯ういふ處には昔ながらの緩慢な習慣に従つて昔ながらの暢氣な月日を送つてゐる連中がまだ、大分生残つてゐた。勇吉はいつともなく然ういふ氣樂な人達の中でも、殊に氣樂さうな多町の隠居と、又一人は明神社内の待合千代香の親方だとかいふ老人と懇意になつた。多町の隠居はもう大分頭

夜深に戸を叩いても起きてはくれまい。女連の泊客に都合のよい宿屋と云へば、まづ根岸の志保原か、入谷の松原か、根津の紫明館か、さらずば遠く向島の水神あたりかと考へた末、丁度合乗の車を見つけて相談は入谷といふ事になつた。田圃の多い場末の夜を徹して夕立の降瀝ぐやうに啼きける蟲の音と、太郎稻荷の森を彼方に遠くもあらぬ遊廓の騒ぎは覺めても覺めやらぬ二人が夢の思出となつたが、さて改めて、ついどうも斯う云ふ譯合になりまして、問はれもせぬのに、妻戀坂のお妾や隠居に向つておのろけらしく一伍一什を打明けもならず、と云つて此儘知らぬ顔をしてゐるのも何となく氣がすまず何とか先方で體よく粹をきかして呉れ、と、やがてさうなるまでの間、これから暫く勇吉と小玉は人目を忍んで、暗れて途はれぬ戀仲に、却つて後々までも忘れられぬ嬉しき心遣ひや氣苦勞の嬉しさを味つた。

## 三

其の年も暮れて、次の年の春も梅の散る頃、勇吉は兼ねてから就職口をたのんで置いた人の世話で、信用のある某銀行へ勤める事になつた。小玉との間柄はもう隠居にもお妾さんに

もよく知られてゐた後の事として、其の夜、隠居は勇吉さんが出世のお祝ひにと一同を明神社内の待合千代香へ呼んで酒宴を開いた。無論これはいつも暇で仕様のない隠居が、何かといふと其れを口實に、人を集めて遊ばうといふ思付である事は云はずと分つてゐるのであるが、然し勇吉は何となく人の情の身にしみんと嬉しく思はれるにつけ、自分と小玉との行末は果してどうなるのであらうと唯だ譯もなく悲しいやうな心持になるのであつた。其夜隠居がさびた咽喉で何の氣もなく歌つた端唄の——人としぎ見よ。薄きが散るか、濃きがまづ散るもので候。——といふ節廻しが勇吉の胸には云ふばかりもなく凄艶幽哀の情趣を傳へるやうに思はれた。

實際勇吉はこの一二月、小玉との間柄がいよいよ深くいよ／＼離れがたくなるにつけ、嬉しいとか面白いとかいふ浮いた氣よりも、悲しい果敢い思ひに迫られる事の方が多くなつたのである。小玉はこの夏一ばいで年季を勤め上げるので、さうしたならば何も厚面しと奥様には云はぬから、末長く見捨てずに、せめてお妾さんにでもと逢ふ度毎に口説き訴へ、同じ着

物や半襟を買ふにしても、堅氣になつてから役に立つやうなのをと、いつも綿柄や色合の見立を勇吉に相談する位である。然し勇吉は今年六十近くなるまで芝居一ツ見た事がないといふ頑固一點張の親爺を持つ身としては、云はずとも其様自由勝手が出来やう筈もないので寧ろ早く衝突して家を出てしまひ、浮世の義理のない里へ行つて好いた女と手錦下げての賤じい暮しをして見ようかと思ひながら、さてまた能く考へて見ると自分にはとても其れだけの勇氣と熱情がなさうである。いつそ頑固一點張りの男親ばかりなら、却つて都合がよいかも知れぬが、此れまでも度々仲に立つて、近頃の自分の品行を父に知らせまいと苦心してゐる極く氣の弱い哀れな母親の事を思つて見ると、流石に勇吉は氣の毒になつて申譯のないやうな心持になる。勇吉は縦ひどれほど深く離れがたく自分と小玉が思ひ合つたに似た處で到底末長く添ひとげられるものではない、二人して韓死か、水でもする位な無分別を起さない限りには、二人の間はいつか必ず絶え果て、仕舞ふであらう。何故かといふ理由は簡單である。勇吉は多町の隠居のやうに藝妓を煙草と同じやうに愛玩し得る程の結構な身分でもなければ、又待合

す中、戸外を通る新内の流しを聞きつけて隠居は石燈籠の灯影涼しき庭先へ呼入り蘭蝶一段を語らせながら杯の数を重ねる。勇吉は其の時分まだ小唄一つ覚えてはゐなかつたけれど、嘗て學生時代には俳句に凝ったり義太夫が好きだつたりした性質とて、われながら怪しむ程な感動をさへ覺え、何となく残り惜しいやうな氣がしながらも、其夜は十時迄に辭して歸つた。

これが縁となつて其後勇吉は度々妾宅へ招かれる。其の折々、お詣りの行掛だとかお稽古の歸りだとか云つてはお妾さんの處へ遊びに来てゐる藝妓の小玉とも話をするやうになる。毎日遊ぶ事ばかりしか考へてゐない贅澤三昧の隠居は物見遊山や芝居見物などの折にはお妾をはじめ馴染の藝妓や待合千代香の親方と共に必ず勇吉を誘つて行つた。勇吉はそれやこれやで日に増し若い藝妓の小玉とは近しくなるばかり。遂には顔を見ぬ日は何となく物淋しく、其れが昂じては、われ知らず胸を焦すやうになつて、吉原の仁和賀を見にと夕方から一同仲の町へ繰り込んだ歸り道、其の場の都合で偶然にも勇吉は小玉と合乗車へ乗り合はした事があつた。左衛門河岸の船宿から船を仕立て、向島へ月見に出かけた折には、大方舟の搖れたせゐか惡酔の

酒に慥む小玉をば勇吉は心のかぎり介抱してやる事が出来た。或夜いつものやうに妾宅から歸る時、何方が云出すともなく、道づれになつて、お茶の水から橋を渡つて、わき／＼駿河臺の眞暗な淋しいところを通つて、勇吉は小玉を講武所の露地口まで送つて行つた事もあつた。互の心は互によくそれを察し合ふ事が出来るだけ少し興意になり過ぎた二人は却て云ひ出しそびれて、まるで初生な男と生娘との初戀のやう、お互に何方からか先に口をきつて呉れ、ばと氣まりのわるい事をお互になすりつけ合つてゐるやうな間柄になつた。夏の八月はいつか過ぎて残暑の九月も早や彼岸に近く、夜毎澄み渡る秋の空には銀河の影氣味悪いほど鮮かに、風は折々高い木の梢に雨のやうな響を立てる。勇吉はまたもや或夜小玉と二人夜道を連れ立つて歩く機會を得た。今夜こそはと勇吉はいよく決心の脚をかけたが、實はそんな心の戸口まで来て見ると思ひの外に夜がふけてゐたと見え二聲三聲呼びながら叩いて見ても、表を閉めてしまつた家内はなかく起きる様子がない。

一おや／＼閉め出しだよ。あんまりお座敷をな

まけて歩くもんだから……馬鹿にしないねえ。」と小玉は舌打をした。

御成街道の大名計がいかに夜の更けたらしい響を立てた。見れば近所の家々も戸をしめてゐる。勇吉は振り捨て、自分ばかり歸れもせず心配さうに路傍に突立つてゐた。

「あなた。」と小玉は振向いて「いよく閉出しだわ。どこか宿るところを搜して頂戴な。」

「困つたねえ。」

二人は横町の導くがまゝに何處へ行くといふ的もなく河岸通りへ出る。筋違の空地は寂として夜風にもまれる葉柳の影暗く、人通りの絶えた眼鉤橋の上には吉原へ行くらしい車が幾臺となく提灯を振りながら威勢よく走つて行く。夏の儘なる浴衣の肌には夜更けた初秋の露の寒さがしみ／＼と感じられ、見上ると落ちて来さうな銀河の色の淋しさと、見渡せば屋根のみ靜かなる大通の小暗さに、人の足音を聞き付けて氣味わるく集つて来る野良犬の三四匹。勇吉と小玉は駈落する人のやうに互に身を措寄せ浴衣の袖口から互に手を差入れて握合ひつゝ、今宵の宿はいづこぞと思案しながら歩いた。明神の境内は靜だけれど同じ土地は人の口がうるさい。さりとて知らぬ土地のお茶屋では、この



であつた。

#### 四

勇吉が内々で歌澤の稽古所へ通ひ出したのは此の時分からの事である。或日の某方銀行の歸りの道づれに、歌澤に凝つてゐる同僚の一人が頻りと誘ふに、勇吉は何の氣もなく西仲道の靜かな横町に松葉巴の燈を出した細い格子戸の中に這入つて見た。

何たる別天地、何たる懐しい思出の里であつたらう。甞に過ぎし日のしるされる三味線の音色のみではない。極めて手狭な處をば不思議な程小ぎれいに、小ざつぱりと取片付けて住んでゐる。斯うした町中の小家の様子一帯が、かの妾戀坂の妾宅と全く同じやう。そして、その年頃さへ彼のさばけ切つたお世辭のよいお妾さんと、かれこれ同じ位かと思はれるお師匠さんは、全く違つた顔立身附付きにも係らず、其の着物の着しなしや物の云ひ様まで矢張り同じ時代の同じ階級の人である事を示してゐた。已に三四人詰め掛けてゐるお弟子の中には身分の上下身代の大小に無論相違はあらうけれど、矢張り多町の御隠居や待合千代香の親方など、同じ類型に入れて差支なさうな人が見受

けられ、嘗て明神の涼茶屋で將棋をさしながら彼の老人達が笑ひ興じてゐたのと、同じやうな時代おくれの酒席や冗談さへ聞かれるのであつた。

勇吉は去つて返らぬ昔が突然に立ち戻つて來た嬉しき懐しさ。覺えず深い空想に引き入れられる折から、師匠の絃につれて歌ひ出される稽古の唄。

初秋や名も文月の戀の謎、銀河まつりのたはむれに、いつか女夫の約束は

勇吉は初めて小玉を連れて入谷へ泊りに行つた時の深更の空、二人して車の上から見上げた銀河の色の淋しさを思ひ出さずにはゐられなかつた。あゝ、それからといふもの、自分と小玉との間は、

ほんに思へば昨日今日、月日たつもの上の空、人のそしりも世の義理も、思はぬ戀のみちせ川

みちせ川

然しその憎らしい程かはゆかつた戀中も、遂には義理といふ字の是非もなく、あはれ、唯だ、雪の消ゆる思ひ、口説の床の涙雨に、夜もすがらしんに啼く蛙を聞いた陸じさも、また、奥の座敷の爪弾きに中直りする、思はせぶりの空、寝入の可笑しさも、一度び別れては早や唯折節

の月、鴉にふと眼をさまさされ、逢ひたさ見たさも苦しさも、酒でしのぐすがさへ無き身は、いつそ一日半時も早く命といふ苦の世界を候かいとと思詰めた事もある位。勇吉は入代り立

代りお弟子が稽古する唄をば、耳傾けて聴けば聴くほど、今までは人にも話されず、口にも出されず、唯だ一人胸の底に蟠まらして置いた深い心の苦しさ、切なさ、遺漏無さは、何と餘すところなく、歌澤の歌謡と節廻しによつて何とも云へない程幽婉に吸ひ盡されてゐる事を知つた。其の一粒那勇吉には歌澤節と稱する音曲は自分の心を慰めてくれる爲めに安政の起原から明治の今日までも滅びずに残つてゐたものゝやうに思はれたのだ。云ひ換れば勇吉は堪へがたい己れが過去の夢を託すべき理想的形式の藝術を捜し當てたのである。最初と同僚の友に誘はれるまゝ、何の氣もなく來たのであるが、勇吉はもう明日とは待たれず、其の夜すぐさま月謝を納めた。

#### 五

毎日のやうに勇吉の歸宅時間、後れる處から、秘密の稽古屋遣入りは忽ち露顯となつて、夫人から嚴しい攻を受けた。けれども今まで

千代香の親方のやうに、思想から遠信から凡て藝妓と境遇を同じくする階級の人でもないからである。いつも妻戀坂の安宅から湯島の我家に歸つて来る時彼方では夜の十時と云へばまだ特の口、たつた今夕た飯が済んだ位といふ處を、此方の我家ではもう燈火が消えてしまつて、下女の艀に鼠が天井を宛れ廻る眞の夜中である。此れだけの相違を見比べるにつけても、勇吉は嚴格な道義的反省を俵つに及ばず、自分はつまり彼の入達が何の差觸りもなく平氣でする事をもなか／＼容易に爲し得る境遇ではないといふ事を感じるより外はない。

いよく銀行へ出勤して月給五十圓といふ日出度さは直様ついで、勇吉が此の日頃の煩悶を一舉にして解決すべき大事件を呼起した、勇吉の両親は我子の身分がきまつたとなると忽ち結婚の相談に取りかゝる。同時に小玉の方でも勇吉の身分を木頼もしく思へば思ふほどいよいよ堅く契つて離れまいと迫つて来る。いつの世にも變りなき人情は、こゝに於て、又同じやうに變りなき義理と出會つて衝突する。芝居にも小説にもよくある通りな涙の幾帳が演じられた後小玉と勇吉は逢はぬ昔のやうな他人となつてしまつた。そして、眼鏡をかけた色の白

い肥つた大きな令嬢が勇吉の新夫人として清波に現はれ出た。やがては必ず華族にもなるべき陸軍將官の令嬢とやら、和歌をよくし書をよくし文章をよくし、英語をよくする上に學校時代には雄力を習つた事もあるとか云ふので健全なる思想の宿るべき體格もまた此の上なく立派なのである。勇吉の両親は我が子の嫁には過ぎたものとして喜んだが、然し勇吉は一度小玉と別れてからは、殆ど何と云ふ譯もなくあれが我一生の若い美しい夢の見納であつた。かゝる樂しさ面白さは二度と再び繰返されるものではない。又繰返さうと云ふ勇氣も力も全く消失してしまつたやうな氣がしたので、家庭の萬事は自分の趣味に合ふと否との論なく、一切擧げて此れを冷嘲な新夫人の手に一任して、自分は唯機械の如く夫たる義務を盡してゐるより仕様がなくなつた。

新夫人は相當の持參金もある身分なので、先づ男や姑と別居しようとして自ら進んで青い邊の門構ある二階建の借家へ新家庭を移し、今日は歌の會、明日はお茶の會、其の次の日は校友會の談話會、その又次の日は米國婦人ミステアを訪問といふ工合に毎日々々勝次郎に出で歩く。そして時たま家にゐるかと思へば、

それはロングフェローかテニソンのやうな英詩を校友會雜誌へ掲載するため字引と首引してゐるのである。夫人は無論赤十字社を初めとして其他名譽ある婦人團體の會員になつてゐて、其の總會などには缺さず出席する。

然し勇吉は最初から覺悟して深く諦めをつけてしまつた後の事として、いかほど自分の性情や趣味に一致しない事が家庭の中につつても、更に此れを意とせず、いつとなく覺えた皮肉な冷笑の興味を以て自分の生涯までを他人のものゝやうに客觀するのであつた。されば氣位の高い新夫人から、折々は其の和歌や文章を讀み聞かされても、或は父、米國婦人の茶話會で公爵や伯爵の夫人令嬢などに面會したなどといふ自慢話を聞かされても、一向平氣で唯うむうむと頷いてゐるばかり、別に深く感服したやうな様子も見せない。いつも／＼氣の抜けたやうに茫然してゐる良人の態度に、新夫人は甚だ嫌らず、銀行なんぞに勤める月給取なんていふものはこんな平凡なつまらない人間か知らと、宛ら駿馬痴漢を乗せて走るが如き身の薄命を嘆じたものゝ兎に角何をしても一切氣任せに干渉しない亭主馬鹿の人の好きに、夫人は結局此れをいゝ事にます／＼我儘勝を増長させるの

はなかつた。

「『布のお家から』屋さんが手紙を持つて来たんですよ。急用ですとさ。」

「あら、どうしよう……。」と葛代は直様途方に暮れてしまった。もしや此の間から病氣だと聞いてゐた可憐い清坊が急にどうかしたのではあるまいか。さうでも無ければ、わざ／＼家から使など寄附す筈がない。と思ふと、もう息苦しいまでにいよ／＼動悸が高まる。

「今すぐ手紙を持つてッて上げますよ。」とそれなり電話は切れてしまつた。

葛代は身も世もあらぬ思ひを、さすがお座敷の横へ手をかけると共に、殊勝にも氣を取り直したが、然し早くもそれと怪しんだ廻氣な旦那はわざと調子だけさり氣なく、

「おい、葛代、お座敷なら行くがよい。」

「いゝえ、いゝんですよ。斷つたのよ。」

然し暫くすると、葛代はまた竊とお座敷を抜けて、箱屋が届けに来る手紙を受取らなければならぬ。手紙を受け取つた後には、人知れずそれを讀むためた、またそつと廊へでも立たなければならぬ。怪しまれまい氣取られまいとする葛代の苦心は一通りではない。

丁度好歸梅に、いつも賑かしの呼んで騒いで

貰ふ藝妓衆が今夜はいづれも来られないといふ

處から、お茶屋の女中の取計らひで其のまゝ早く歸れの小座敷へといふ事になつた。葛代は其

のおつとめさへ済ましてしまへば、大抵おとまりにはならず、お歸りなさる旦那の事故、今夜は案外いつもより早く自由の身體になれるかも知れぬ。よし十二時が過ぎたとて今夜中に車でか

けつけられ、ば……と、葛代はそれを頼みに何でもない時よりも却ていそ／＼して死地に趣いた。そして枕頭に置いた紙入の中で、幽かな

響を立てる懷中時計の音に、一秒一分でも早く、たゞ旦那のお歸りを念ずるばかり。

何ともつかぬ雑談は、何ともつかずに、暫く途切れてしまつた時、旦那は突然に、

「おい、葛代。」と呼びかけた。

「なアに。お煙草……。」と葛代は軽く閉ぢてゐた臉を艶しく半ば開き聲にさへあらんかざりの情を含ませて答へた。

「お前、今夜は餘程どうかしてゐるなア。」

「あら、どうして。」

「何か心配事でもあるのか。」

葛代は氣取られぬやう、巧みに云紛らしたといふでばかり焦りながら、さて然ういふ時に限つて思ふやうに唇が動かず、僅に一言、

「いゝえ。」と否定するのみであつた。

「でも、先刻から妙に鬱き込んでるぢやないか。隠すな。」

「隠しやしません。」葛代は覺えず聲を高めたが直様心付いて軽い調子を作り、「顔色でも悪くツて。え。あなた。」

旦那は黙つてゐる。何か心配してゐるやうに見えて。え、ちよいと。此方向いて頂戴ツたらねえ。あなたア。」

何の事はない、解けた水筒の流れ出すやうな言葉使と、それに伴ふ厭らしい様子で、見事相手をぐんにやりさせてしまふ計略。然し不幸にもそれは無効であつたのみならず却て旦那

の猜疑心を鋭くさせ、そして隠れた事情を計かうと云ふ其の意氣込みを強めさせるに過ぎなかつた。葛代の旦那は實に尋常一様の旦那では

ないのであつた。よく落語家が話すやうに膝の上にしなだれ掛つて、柔い腹の先でぐりぐりの二三度もきめ込めば、何でも云ふ芽が出る

といふやうな、そんな古手な薄野呂間な旦那ではない。年は五十を越えながら英氣壯年に増して新進國の實業界に活動して居られる。其の奮

闘的毅力の餘勢を鎮壓させるために劣等動物と稱してゐる藝妓をば絞れば血の出るピフテエキ



何一つ反對しない勇吉は、今度に限つて一步も譲らぬ意外なる強硬な態度に、夫人も少しく面喰つて退いてしまつた。勇吉は家庭の事のみならず、銀行内の職務上に關しても、何か不平らしいこと、耳にしたくないやうな事でもあれば、直ちに覺えにくい六ヶ敷い節廻しの事を考へ出して、其の方に心を轉じてしまふ。何處の會社や銀行にもよくある通り、高商出身、庶應出身、帝大出身といふやうな下らない學問の軋轢と奉公人根性の淺聞しきから、勇吉は一時重役の親戚だとかいふ、虎の威を借る若い學士さんの爲めに、大分意地のわるい事をされなければ、歌澤のおかげで衝突もせず無事に其の難關を抜けたばかりか、後にはその爲めに却て廣く銀行内の同情を得た。忘年会だの送別會だの云ふ宴會の折には、同僚のものが屢々勇吉を誘惑した事があつたけれど、何に限らず一度び専門の音曲を専門に修業したものに、若い藝妓のお座敷藝ほど、あぶなつかしく、且つ氣の毒に感じられるものはないので、それを聞かずに、勇吉はいつも體よく逃げてしまふ處から、見かけによらない堅人だといふ信用さへ得るに至つた。

歲月は流るゝ如くに過ぎて行く。年と共に大

都の生活は其の騒がしい外觀の示すが如くに、些かの餘裕をも許さず市民の心を責め立てる名利に飢ゑたる狼の群は白晝にも隊をなして到る處に横行し、正直と謙遜の頸輪をつけた羊の子を斃す。思へば幾年前、小玉と二人してよく見馴れた彼の眼鏡橋の空地に、柳がなびく景色はどこへ行つてしまつたのであらう。勇吉は年と共に銀行員としての地位が進め進むに従ひ職務上の心配と共に生活の勞苦も次第に重く身に積るにつけ、夢のつぶやきかとも思はれるやうな果敢い歌澤の一節をば、浮世にあらん限りの慰和と頼んだ。年ほど恐しいものはない。一時は米國式の女丈夫にでもなりはせまいかと思はれた勿返りの細君も、男の子が二人、そして三度目の産後に病みついた大病からは、めつきり元氣を失してしまつて、夫が晩酌の折なぞには、どうかすると、「私も若い時分三味線でも習つて置けばよう御在ましたね」と云ふ事さへあるやうになつた。意外なその優しい言葉は聞くのも、勇吉の身には却て云ひ知れぬ悲しさの種である。まだ左程に白髪は目立たぬけれど、勇吉の額にはゑぐつたやうな深い皺が彫み込まれた此頃、いよゝ沈痛な調子を帯びて來た其の聲柄、いよゝ凄慘な錆びと滋味を

添へ出した其の節廻しには、折々の溫習會などへ行つて聞く人達、一人として覺えず啖賞の聲を發せぬものはない。

「實にうまいもんだすな。流石は名取りの蠟です。」

さう云はれると、其の時ばかり勇吉はまるで子供のやうに心から嬉しさうな顔をするのである。其の時ばかり、深い額の皺を拭つたやうに消してしまふのであつた。

## 五月 間

日頃は飲めない酒をも萬代はその夜さへれるまゝに心よく引き受け、有るかぎりの愛嬌を作つて、大事な旦那様のお座敷をつとめてゐた時、折からお鏡子の新しいのを持運んで來た待合の女中から、「萬代さん、電話ですよ。」と耳打ちをされた。

萬代は大方他から座敷が掛つて來たことと思ひながら、どういふ機會か、その刹那胸がどきツとした。帳場の電話口へ出て開いて見ると矢張蟲が知らしたのにちがひない。電話は箱屋のお千代さんの聲であつたが、然しお座敷の事で

もせぬ用事までして呉れる。髪結さんへ行けば、年上の姐さん達までが腰を低くして、「あちらへどうぞ宜しくねえ。」と萬代の御推薦によつて此頃の不景氣に幾分の御最良をと云はぬばかりの頼みである。待合の女将からは折々電話で何か用事でもあつたら遠慮なく云つておくれとの事。萬代は別に此れと専門の藝があるのでもなく素人から中年でばつと出た藝妓の身としてはどうせ時間過ぎてからの商賣を當てにしなければならぬ。それならいかほど辛くても一人ときまつた旦那の方がまだしも身體の觸りになるまいと漸く商賣氣の諦めをつけた。それと共に將來に對しても幾分の希望を抱いたのは抱主の外には誰にも打明けない隠し兒の前途についてである。萬代は十八の時或所へ嫁に行つたが姑のためにいびり出されて了つたのが不幸の原因で、其の後間もなく實母の大病から譯もなく藝妓に身を墮して、今年で丁度三年目、年は二十五になる。離縁された時赤存兒のあつたのを女親の情として前後の考なく女の兒は女につくものとして無理やりに引取つてしまつた。それが今萬代の此の世にある限りの樂しみである。どんな辛い事でも其の爲めならばと思ひ込んでゐる大事なく、子供が二三日前から百

日吸らしい様子で熱もあるからと、毎月養育費を送つて頼みである薩布の叔母からの報知。萬代は旦那から責め問はれるまゝに、一層の事結麗さつぱり打明けて、一刻も早く駆け付けようかと最初から口の端まで出さうにしながら、僅か二三時間勤めさへすればお歸りになる方の事と未練らしい商賣氣をも交へて遂に口から出放題に斯う答へた。

「實はあの母さんが病氣ですから……。」

すると旦那の眼は忽ちきろりと輝つて、

「ふーん。お前には幾人母さんがあるんだ。」

萬代はハツと思ふともう呼吸がつかまるやうな心持がした。旦那は平然として、

「お前、いつだつたか、私と呼んだ時、母様の御命日だから、家へ歸つてゐたとか云つて、呼んでも来ない事があつたぢやないか。」

全く其の通り。母さんは萬代が其の晩代の爲めに藝妓にまでなつたかひもなく、半年とは保たずに死んでしまつたのである。咄嗟の場合、

萬代は何とも誤魔化しやうがなく、胸の動悸と共に言葉も亂れて、

「赤ん坊が病氣なんです……私には子供があるんです。」

云切つて初めて萬代はどうなる事かと、我ながら身を顛はしたが、又しても意外の意外、旦那は清純童子のやうな眞赤な大きな口を咽吸佛まで見えるやうにして、

「あはゝゝゝは。好勝手に出放題を。あはゝゝゝは。」

萬代は再び何とも云出す言葉がない。旦那は狭い離座敷の屏風や襖がゆすぶれるかと思ふほど、暫くは哄笑しつづけたが、其れが済むと、最前から胸の底に秘めて置いた悪感情を最早押へてゐる必要はないと云ふやうに、

「そんなにまで、いろ／＼嘘がついて見たいものかな。」

實際のところ、旦那には此の場合萬代が子持であること云ふ事は嘘としか思へなかつたのである。そも／＼最初に、待合の女将から、まだやつと十八九の柔順しい、ぼつちやりした妓ですと勧められて、試みに呼んで見た折の様子が成程いかにも若々しく生娘らしく思はれたし、扱即座の御意に召して、扮装の皮を剥ぎ散々に仕度三昧の試験にかけて見たが、そこは株相場の上下を洞察する旦那でも未だ實験醫學の知識に缺くる處のある限り、萬代が今年二十五歳の子持の女とは更にお氣づかれなかつたのである。無論萬代の方でも、いざ身を切り賣の商賣をす

を囁むやうに片ツぱしから無造作に薙ぎ倒して居られる現代的豪傑なのである。何で最も最初は會社の受付位から段々に經上つて今日の地位を得たやうも。所謂立志傳中の模範的人物の事として天才的に細微いところへ眼を付け、容赦なく經費節縮の手腕を見せるばかりか、一體堂々たる男子が賣春婦などの手管に載せられて、名義のない金銭を詐取されるなどは最も恥づべき事と思つて居るので、若し此方が何とも手を出さずにゐるのを女の方から少しでも意外な優しい艶しい態度でも見せる時には、直様此奴怪しいぞと眉に唾をつけるのであるが、然し恐れてその儘逃げるのではない。却て相手の弱味を洞察した上に虚に乗じて思ふさま我意を振舞ふのである。さればこの旦那の如きは今の世に破廉恥な新聞の雑誌なるものがなかつたならば、わざ／＼待合などへ出入はせず、手當り次第、其れ以上に便利なのを提へて、老いて益々盛なる精勵主義の餘裕を示すことであらう。けれどもそれは一つ間違へば一文惜みの百損となる事を豫測して時々馬鹿々々しい氣がつきながら、まづ／＼知れても其れほど不名譽にはならぬ花柳界に雄飛してゐるのである。

旦那は先刻萬代が一寸電話にと立つてから、

どうもそれは／＼と落付かぬ様子を見て取るや否や、日頃油斷なく氣を過してゐる疑念をいよいよ熾にさせた。然しこの嫉妬は薄志弱行の徒輩が愛する女から捨てられはせまいかと悶えるやうなそんな若い清い情からではない。惡を憎む嚴しい懲罰の念を伏藏させた一種の道德的憤怒である。

「隠さずに云うたらえ、ちやないか。お前が今夜どこか行く處があるのぢやらう。私は知つてゐるぞ。」

盛のない厚い唇の端に微笑を浮べ、子供にでも言聞すやうに、嚙喰れた聲の調子をわざと低く柔げ充血してゐた臉を半開にしたがら、

「うむ／＼うむ／＼と豚のやうに咽喉を鳴して返答を迫る。萬代はもう何と云ふわけもなく恐しくてならないやうな心持がした。近けた枕の上から仰ぎ見ると赧らんだ旦那の顔の面積は髭のない野べら棒だけに、殆ど見渡し切れぬ程廣く思はれ、胡麻餅の毬栗頭と逞しい太い頸筋と巖石のやうに突起した咽喉肯とを示した大兵肥満な身體はまるで仁丁の木像を横倒しにしたやう。萬代はそも／＼一番最初に、此家の内儀からお泊りになる方ぢやないのだから、是非にと白羽の矢を立てられた其の瞬間から、實を

云へば單に厭だとはかりではなく、妙に身のすくむやうな空恐しい氣がしてならなかつたのである。成程内儀が何々會社の重役だといふ身分まで打明けての掛合通り、わづか二三時間でお泊りにはなつたものゝ然し其の二三時間は並大抵の一夜よりも猶辛かつた。呼ばれてゐる時聞中は云は／＼秒の休みもなしに、あの御身分に對して御自分からでもよくまあ氣まが惡くならないものだと思はれるやうな言語道斷な勤め方を強ひられた處から、萬代は何ほ何でも餘りに情けない思ひがして其の夜女將から包金にして下さつた五十圓をば、この社會の習俗に従つて早速二十圓を女將に、十圓を女中衆へのお禮とし、残り二十圓を懷にして歸つたなり、もう二度とあの旦那ばかりには出まいと決心した位であつた。けれども弱小家業の果敢さには女將から折入つて、實はあちら様へは出る放がなくつて困るんだからと頼み込まれ、遂に逃げる道なく、何しろ一度承知して包金まで受取つてしまつたのが此方の誤り。辛い／＼と思ひながら、一週間にきまつて二三度は物泣い御寵愛に與る事となつてしまつた。

その代り萬代の氣氣は豪儀なものになつた。地主からは際立つて大事にされる。第屋に頼み



ら、早く辻行の車を見付けたいものと、無我無中に急いで行く。石に躓いて轉びさうになつたのも幾度か知れない。潰しの島田はがつくり根が抜けて、夜風になびく後毛と共に、棲を取つた晴衣の襟や裾の亂れる上にも其姿は、活動寫眞の繪看板によくある繪客事が實地になつて活動してゐるに外ならぬ次第となつた。

忽ち不良少年の一群が萬代の身を取卷いた。

萬代は悲鳴を上げた。角袖の巡查が歸付けた。

萬代はその場の危難を救はれた代り、かゝる闇の夜に姿を亂して市中を歩くとは甚だ怪しからぬ次第とあつて、否應なしに警察へ引張られてしまつた。

子供が急病の爲めだといふ、萬代が泣いての申譯が、いよゝ事實相違なしと承認せられだ上、左様な次第ならば、人目にたゝぬやうな質素な姿をして歩くがよい。髪を亂し裾を亂し、無暗に赤い色の刺し物をひらかして、夜道を通過するなどは、以來如何なる事情があつても、例へば親が急病といふやうな孝道のためでも、社會の風紀上きつと慎しねばならぬ事ぢやと、くれぐれも説諭されて、地主を呼び出してお引渡しになつたのは、翌朝の彼れ此れ十二時近くであつた。

悪事千里。その日の夕刊新聞には、何れも二號活字で、新橋藝妓の危難といふ記事が掲載せられた。其の中にはどうやら萬代は辱めに遭つてしまつたものとやうに書き立てたのもあつた。藝妓家の格子先へは、汚じみた顔に無性格も刺らず、頭髮ばかり油で光らし、鹽鮭の皮のやうな洋服を着た紳士が、入れ代り立ち代り、借金の居仲促でもするやうに詰めかける。朝に至つて、諸新聞の記事はますます盛になり、噂から生ずる噂によつて、萬代はとうとう事實危難に遭遇したものにされてしまつたのである。萬代の迷惑はそれのみではない。不良少年の檢舉について、もしや其夜何が見覺えの廉でもないかといふ事から、一度ならず二度ならず其の館へ呼出される始末、萬代は世間が狭くなつて、上地では商賣が出来なくなつた事と、子供を病院に入れねばならぬ事とで、さらでも身に積る借金の上借りをするために、とうとう朝鮮へ落ちて行つた……。

# 浅瀬

新歸朝者なにがし君の歡迎會を開く爲めに、

其の舊學友の中から選み出された幹事の三四人が、其の中の一人なる醫學士の家に會合した。相談は先づ會場を日本風の料理屋にするか、西洋風のホテルにするかと云ふ事に對して、西洋から歸つて來た人に日本の西洋料理などは物笑ひの種でせう。と氣遣つたのは幾道院に出て居る工學士である。

井物産にゐる法學士は、「さうかと云つて、私なんぞも覺えがあるが、西洋から歸つて來て、すぐ料理屋の疊の上にならされるのは一役ですからね。」と云ふと、此れは今だに親の金で坐食してゐる無職業の文學士が、「この頃のように交通の頻繁な世の中に、さう一々歡迎會だの、送別會だのしなくてもいいんだがね……。」

「それも然うですな。先刻から退屈まされに頻とハンカチで近眼鏡の曇りを拭いてゐる教授の理學士が、絲のやうに細くした眼を上げて答へた。

相談は忽ち宴會の不便に且つ愚劣な實談に移りかけたのを、さすがに年役らしく大分白髪の日につく醫學士が巧に腰ぎ止めて、「それやア、アア電角趣向なんぞ説かないで、世間ありふれたお義理一遍の歡迎會にして置く

るとなれば、出来るだけ若く若くとつくるのは髪や衣裳ばかりではない。まさかの時には殊更に腕の振ひどころ、飽くまで男なぞは知らぬ顔の生娘らしく、それも唯だ猫に鼠の怯氣を見せるばかりでは能がない。却てこはいもの見たさの思切つて大それた真似に至極結構。年寄衆には孫のやうにじやれ、若い方には落花流水の風情を見すべしと、おひめする前からくれぐれも海山千年の抱主より授つたる秘法の幾分かをいつとなく見やう見真似に實行してゐた事とて旦那はいよゝ葛代が今夜の様子を唯だく怪しからんものとのみ最初の疑念を固くしてしまふのであつた。阿母さんの病氣も嘘子供病氣も嘘……とすれば何でも今夜は私に秘密な若い男と出逢ふ約束のあるために、一寸した電話の挨拶から急にそはくし出したに違ひない。怪しからん奴だ怪しからん奴だ……。

何處かでボン／＼時計が十時を打つてゐる。いつもならばもう御歸館の時間であるが、旦那はそれから後代が何處へ行つて、何うするかと思ふと、もう腹が立つて腹が立つて堪まらない。葛代の方では最早や一度事實をばらした上からは、どんなにしても早く座敷を貰はうものと、泣かぬばかりに申譯をすればするほど旦那

の痼癪はますます高まる。是非にも今夜は歸る事相成らんと叫ぶものの、旦那は下宿屋にゐる書生ではない、名刺の厚書には五ツも六ツも會社の名前が並べてある位公用を帯びてゐる忙しい御身分。お屋敷には奥様もある、年頃のお嬢様もある。大學に行く息子さんもある。いかほど甚助を起しても一夜を悠々待合に明すことは蓋し不可能である。

旦那は遂に一策を案じだした。十二時近くまで葛代の身體を此のまゝに引留めて置いて、句自動車に乗せて一所に屋敷の門前まで送らせれば、よし歸つてから逢ふにしても、幾分なりと彼等の會合の時間を減す事が出来よう、旦那は枕元にウイスキーを持つて來させ、愈々自動車を命じてお立ちといふ其の間際になるまで、手段を盡して相手を疲勞させた上に、強い酒を無理強ひして、いざ已れが歸つた後、好いた男と出ふと云ふ時分には頭が痛み眼もくらんで折角のお楽しみもふいにならうと、さういふ無慈悲な豫測を以てせめての腹癪せにした。

いくら泣いても聞いても、金で買はれてゐる身は是非もない。葛代は何とか折を見て、女將や女中に火急の場合の助けを請はうと思つて

も、さうぶ時に限つて、いづれも體よく相手にならぬ處から、遂に旦那の思ふ通り、葛代は十二分に苦しみを受けた後、青山のお屋敷の門前でやつとお暇を頂戴した。

雇はれた自動車の運転手は旦那の吩咐通り葛代を新橋まで送り届けようとする。葛代はもう氣が氣ではない。青山一丁から麻布の叔母の家までは飯倉を抜ければ遠くはないと地理を知つてゐるだけに、猶氣が急いで、

「私は鳥渡近所に用があるんだから、その邊から人力車で行きます。」

ぶふり早く葛代は一生懸命に駆け出した。もと／＼待合の電話で、時間幾何と雇はれた自動車は、強ひてこの藝妓を新橋まで送り戻さなければならぬといふ譯もないので、其の儘例の不愉快な音と臭氣を放ちながら大通りの方へ行つてしまつた。けれども葛代はいつまでも、後から追ひ詰められるやうな心持がして自動車の通れなさうな暗い狭い横町から横町へと紛れ込んだ。山の手の町の深更には人通りも絶えて、樹木に風のそよ音と犬の吠える聲ばかり。まして、昨日あたりから入梅になつた闇の空からは、小降り雨が音もせずに着て來る。それを葛代は更に氣付かど、息もきれ／＼なが

有ったんぢやア無いですか。昔だつたら身を雲水にまかすとしてもぶつたやうな……」

「それなら話の種になるんですが、からもう駄目なんです。つまり私は初にあんまり思過ぎでゐたからなんです。道樂の面白味と云つちや少し變ですが、私は道樂をしない先から其の面白さ楽しさ悲しさ果敢さを、餘り誇張して考へ過ぎてゐたからなんです。つまり實際が豫想ほどでない事を知つたのですよ。」

醫學士を始めとして、一同は頻にその理由の具體的説明を促したので、文學士は袂から取出す銀細工の巻煙草入を開きながら話しつづける。

「こんな事を今更らしく悟るのは既に遅いかも知れないですが、一體放蕩といふものは、束縛された境遇のものが行つて見ればこそ、極度は情死といふやうな深刻神祕の境まで進んで行けるので、私のやうな全く自由な身體のものには要するに放蕩は不適當ですよ。御存じかも知れないが、私の父は以前から紐育に商店を持つてゐるので、一年の中で日本に居るのは三月月とはいふ位。それにまた留守居の母は私の小さい時から、何をしてもし一向干渉しない人だったので私は大學を出る其の日から、全く天下

に何一つ憚り恐れるものもない自由勝手な身の上になつたのです。無論其の以前學生の時代から遊びは知つてゐました。矢張り其の時分が一番無邪氣で面白かつたです。日が暮れて夜になるといふこの單純な事さへ二十歳の胸の底には居ても立つても居られないやうな、歡喜と懊惱と神祕の情と湧起させた位です。唯だ夜に乗じて禁じられた場所に入込むと云ふ事が、もう此の上もない Belle Aventure の限りだつたのです。戀でも涙でも何でもありません。唯だ異

つた性の珍しさに存されて、二三年を夢のやうに、此れといふ追憶の種もなしに送つてしまつたのです。其時分亞米利加に萬國博覽會が開かれたので、家の用事を兼ねて私の氣輕く彼の地に渡り翌々年に歐羅巴を見物して歸つて來ました。歸つて來ると又、寸物珍しい氣がして、友達に誘はれるまゝに再び遊び出したのです

が、もう駄目です。已にお話した通り、私は最初にあんまり面白い遊びをしたいと思ひ過ぎたせゐるか、深入りして見るほど其のつまらなさが癢に觸るばかりです。凡ての事は空想に限りまゝ。放蕩の情味が知りたかつたら何もわざわざ遊びに行く必要はない。一中節の名人でも呼んで、『黒髮の亂れて今朝の憂き思ひ眼には泣

かねど氣につかへ……』なんて云ふ節廻しでも聽いてゐればそれで十分ですよ。」

「早く遊んで早く締ると云ふんです。それに限るんです。と醫學士は頻に感心して、『昔から四十越して覺えた道樂は、七ツ下りの雨だなんだと云ひますからね。』

「然し私はつまらないと知りながら、矢張りまだ遊びたいんですよ。生活の倦意と單調を破つてくれるものは、何と云つたつて女より外には有りませんからね。」

「君は一體どんな女が好きなんです。一法學士が横合から質問した。

「どんな女でもいいです。心底から私を有頂天にさせて呉れる、身も世も忘れさせて呉れるやうな女なら、どんな女でもいいです。若く

つても妾でも美人でも醜婦でも、何でもいゝです。兎に角其の女に捨てられたといふ時には、多少なりと精神上に傷害を残す位な濃艶に狂瀟な女が欲しいのです。私は一時評判な腕利きだと云はれた新橋の或藝妓に引掛つて見た事があるんですが、矢張り年たつた人ではない中に厭きてしまつたのです。土地の評判によ

ると高橋お傳の生れ代りでもあるやうに、彼の女に掛り合つたら大變だと恐れられてゐるの



んですな。なりたけ會費を安くしてそれでお酒にビールに藝妓が出るといふ日本料理がいゝてせう。何の彼ひと云つて藝妓の来る會には、矢張り人が大勢集つて幹事が樂ですからな。」一章程……と教授の理學士は新しい科學の解説でも聞かされるやうに、重々しい聲を咽喉の奥から押し出す。

「場所はどこにしますね。萬安ぢや餘り直過ぎるでせう。さうかと云つて、例の如く伊豫紋あたりへ持ち出されるのも、随分道程が不便ですからね。」

芳町から柳橋、それから新橋あたりの料理屋の名前が、幾軒となく論じ出された。幹事の中で一番かう云ふ事に馴れてゐるらしく見えたのは、矢張り年役の醫學士で、それに應待する三井物産の法學士も、なか／＼限には置けない經驗家らしい。教授の理學士は眞面目な聴講生の様な態度で、一同の論ずる處を黙つて聞いてゐたが、相談は一先づ新橋の綠屋と云ふ事に決了された時、自分ばかりは全く何の話相手になる資格のなかつた事を申請でもする様な調子で、「僕も一度は世間を知るために遊んで見たいと思つて居るんだがどうも化學の先生といふ商賣ぢや、一寸さう云ふ機會がないの

でね。」とバひながら端席の工學士の方を見送つて、藪から棒に、「愉快でせうな。」

これは敢て其人一人にのみ云掛けたのであるが、此方は不意を喰つて一いやかつたのであるが、此方は不意を喰つて一いや別に……愉快と云ふほどの事も……。と鐵道院のお役人様だけにひどく狼狽した矢先、氣輕な半白な醫學士は凡ての事を茶にするやうな世馴れた調子で、

「二十年前後のものなら知らん事、吾々のやうな年になつて、心から愉快で遊ぶやうなものは先づ少いでせう。無駄な金を使つて遊びにでも行かうと云ふ時は、必ず不愉快な事があつて家にゐても面白くないからです。不愉快な時遊びに行くほど、また不愉快な事は恐くありませんぜ。然しさう云ふ奴に限つて、幾歲になつても道樂が止まない。丁度私見たやうにね。は、は、は。」

「まつたく、考へて見ると厭な不愉快な處ですからな。」相腿を打つたのは矢張り遊び馴れた三井物産の法學士である。然しその不愉快な事が分るやうになつた時には、もう時既に遅しで、止さう止さうと思ひながら惰性で、なかなか止める事が出来なくなる。尤も吾々のやうな境遇のものには、屋酒を飲む事位より外に

は、世の中に娛樂と云ふものがないのだから、面白くないと思つた處で、外に遊びやうがないのですからね。これア、ツは社會の罪です。日本の習慣の罪です。吾々實業界の人間などは、矢張り藝妓買ひ位の事に興味を得てゐる方が無難でいゝのです。高尚な藝術の鑑賞だとか、或は讀書の趣味などを持つやうになると、あれア變り者だとか何とか云はれて、一同から別物扱ひにされたり薄氣味わるく思はれたりして、つまり出世の妨けになりますからね。」

「さうかも知れませんがね。して見ると、私なんぞはまア幸福だと諦めなくちや成らんですかな。止めたい時に勝手に止める事が出来たんだから。」文學士はわざとらしく沈痛な聲と共に、咽喉の奥から深く暖ひ込んだ煙草の煙を吐き出した。

「君も一時は随分御盛なやうでしたがね。それぢやア、此頃はさつぱりお出掛けにならんのですか。」

「えゝ、もう三四年もさるで遊びませんよ、尤も去年の秋結婚したんですが……。」  
「どうして、さうお見限りになつてしまつたんです。何か情りをお開きになるやうな悲劇でも

乃ち寐たい時に寐かして、食べたい時に食べさせて置いてやるだけの寛容な處置を取りさへすれば、日本全國の職業婦は盡く良家庭の一員となし得るのです。だから、さういふ朴訥な女達によつて組織された花柳界には、私は到底厭かずにはゐません。一體吾々は何の爲めに、良心と戦つてまで悪い場所へ行つて、良からぬ行ひをしようと思ふのか。その欲する所は、嚴格な社會、清潔な家庭に於て敢てし得ざる事を敢てしたい爲めぢやないですか。それがどうせう。諸君も定めし御經驗の通り、何處の料理屋へ行かうが待合へ行かうが、夜の十二時を打てば大きな笑聲も出来ない。それ位なら自分の家にゐた方が餘程自由です。黙つてチビリチビリ飲み明かさうとすれば、女中がぢきに疲れて厭な顔をしなす。或る一人の藝妓に馴染んで仕舞ふと、この社會ではまるで正式の結婚でもしたやうに、あの方は誰々姐さんのお客様だと云ひなして容易に他の新しい女を取持たない。此の禁を敢て犯すものは「爺」といふ誹謗をあびせかける。はゝゝゝ。そんな堅苦しい一大夫婦の規則を遵奉してゐる位なら、何も遊ぶには及ばないぢやありませんか。これは昔の習慣の残りだから、却て懐しい江戸の思出になる

なぞと洒落る通人があるかも知れないが、それにしては、電話だの自動車だの機巻だのギョコトだのと、今の藝妓はあまりにまた現代的過ぎますよ。私は遊びたいと思へば一生涯遊んでゐられる身の上であるだけに、その窮屈なものと平凡なものと、寧ろ遊びは止めるに如くはないと悟らざるを得なくなつた次第なんです。然し單純な文明を持つてゐる此の國の社會では、待合といふ卑俗な處より外には「Anterie」とか又近世的の語をかりれば「Lounge」とかぶ洗練陶冶された兩性間の感情の勝負を試みる冒險の世界が存在してゐないのですからね。さうかと云つて、乗馬や銃獵のやうな遊びをするには平野が狭過ぎるし、文藝趣味に耽るには風致の壓迫が甚し過ぎるし、素人の畫家にもなつて、萬國に秀でた郷土の美でも寫生して歩かうと云ふには、到る處あまりに陸海軍の要隘區域が多過ぎるし、自動車旅行にはまだ道路が出来上つてゐないし、釣りをするには工業が都會の河川の魚類を殺してしまつたし、實にみじめなもんですね。寧ろ隱退して、歌、俳諧、香、茶の湯、一中、河東にゐり返つて仕舞はうかと云ふに、それには又古本を伐り河を埋め土手を開いて、都會を全くの修繕場になしな

ねば止まぬ新氣運の襲來があまりに強過ぎます。せめて其の其の時に頼まれませぬ憎まれ口でもきいてゐるより仕様がありません。敢てハイカラな近世的と云はず、舊式な江戸風と云はず、凡て貴族的端麗なる遊戯を望むもの——佛蘭西の小説家 *Maurice Pevron* などの使用した語をかりて云へば、専門的の道樂者 *Amateur* の紳士に取つてはつまり、こんな辛い時代はありません。一座の談話は新しい國と云ふ事から突然支那の革命談に移つてしまつた。

## 牡丹の客

小れんと云ふ藝妓と二人連、ふいとした其の場の機會で、本所の牡丹を見にと兩國の橋だもたら早船に乗つた。

五月も木だから牡丹はもう散つたかも知れない。實は昨日の晩、芝居で圖らず出會つたままだ地の待合へ泊つて、今朝は早く歸るつもりで處を雨に止められたなり、其の霽れるのをば書過ぎまで待つてゐたのだ。一日小座敷に閉籠つてゐただけに、往來へ出ると覺え胸が開け

に、私は夢からず好奇心を起したのですが、實際は皆つまらないものです。三十を三ツ三ツも越してゐましたから、普通の藝妓よりは嘘も口説も手管も多うござんしたし、又天性と其の後の習慣から熟練を経た多淫な肉慾とがぶは、其の女の價值を作してゐたのですが、たいして淫婦だの毒婦だのと云はれるほどの女ぢやないのです。二三度人の妾にもなつて惡辣に男を縛つた事もあるさうですが、それは貪慾な繼母の爲めと自分の身に積り積つた借金爲めなんぞで、當人の性質はそれほど淫澤を欲するのぢやないのです。例へばNolaの描いた女優Ninaのやうな、我ながら測る事の出来ない、底知れぬ欲求の念に日夜休まなく虐まれてゐるといふのでもなければ、又Roger Meemieの描いたかの西班牙の毒婦Cunilaのやうに、または近頃 Pierre Lanyが寫した之れも西班牙の女Cunilaのやうに、不圖した男の出来心につけ込んで男の眞情を底の底から齟齬し、其の肉慾を極點まで擾亂させ、一步一步知らぬ中に男を汚濁のない墮落のどん底まで沈めさせ、いざと云ふ間際にぶいと振り捨てゝ行つて了ふやうな、其様恐しい女ぢやないです。ぶがまゝに落籍して姦宅に圍つて置いたんで

すが、いつまでも逃げずに柔順しくしてゐましたよ。私がそろ／＼厭き出して外の女に眼をくれるやうになると、此れなり捨てられはせぬかと却つて向うから心配する位なんぢや有りません。夫れ丈けならまだいゝです。藝妓をやめて一月二月と日數がたつと段々に風俗から様子までを骨に奥深風にして、遂には愛國婦人會の徽章でも下げたがやうになつて來た。爪弾だの、薄化粧だの、引揚帯だの、床亂姿だのとぶ凡てこの種類の不正な女のEuseneを自分から減して行く事に汲々としてゐるやうな譯なんです。昔の草双紙などを見るとさうでもないやうですがね、此の頃の藝妓や女郎には、一體あつた不規則な複雑な生活を送らねば生きてゐられないと云ふやうな女は此だ少いやうですね。カルメンは歌ふぢやありませんか――

Le ciel ouvert, la vie errante.  
Pour pays l'univers, pour loi la  
volonté,  
Et surtout la chose envivante,  
La liberté! La liberté!  
Là-bas, là-bas si tu m'aimes,  
Là-bas, tu me suivras.

見渡す空や、所定めぬさすらひや  
宇宙はわが國境は身傳、  
とりわけ嬉しきものとしては  
自由、自由。  
心から好いた惚れたと云はんすぢや、  
私と一所に行ひしやんせ。彼方遙く處  
定めず、  
そして頭堅の男を浮浪人の群の中へ引込  
んで故郷の親も家も血統をも捨ててしまつ  
た。ところが何うでせう。御人層な評判を取  
つた私の藝妓と來たら、少し身が樂になつたと思  
ふと、もう銀行の通帳ばかりひねくつて、寢  
物語にさへ、一頁波あなた郵船會社の株つて云  
ふのはどうして買つたら可んでせう。一箇に驚  
かざるを得ませんね。南部伊太利亞の人の血  
には、どうしても文明の境内に踏躑してゐる事  
の出来ない宿命的なる不撓不屈の滲透性があつ  
て、今だに古風な山賊の横行を見るといふぢや  
ありませんか。日本の賤藝婦は海外に雄飛する  
のぢやない、雄飛させられるほど柔順なんです。  
宗教家などは眞面目に、いゝ／＼心配してゐる  
やうですが、元々善良愚鈍な受動的な日本の醜  
業婦なぞに救済しようと思へば、いつでも救済  
されます。吾々が飼犬に與へるだけの自由――





て、人家の間を河から吹き込む夕風が、何ともふへぬほど爽に酔後の面を吹くのに、二人とも自然と通りが、柳橋の欄干にもたれた、

雨霽りの故でもあるか、口は今日から突然永くなら出したやうに思はれた。丁度寺院の天井に渦巻く狩野派の雲を見るやうな雨後の村雲が空一面幾重にも層をなして動いて居る。其の間々に光澤のある濃い青空の色と次第に薄れて行く夕炎の輝きが際立つて美しい。神田川を真直に上流の濃い緑色の水の面は遠い明神の森に沈んだ夕陽を受けて、今だに磨いた硝子板のやうに光つてゐたが、荷船や小舟の輻湊する川口から、正面に開ける大河の面は眺望の遠いだけに夕暮の水は猶更さら／＼と目を引く。角處の正しい石垣の兩側に瘦せた柳の繁りが絶えず風にゆられて居ながら如何にも傾く靜に見える。岸に近い藝妓屋の稽古三味線も今は途絶えた。あたりは一刻々々、雲の動くにつれて夕方ながら却つて明くなり往來の人の顔や衣服の縞がはつきり見えるばかりか、雨に濡を洗はれた後の町全體が如何にも清らかに落ち付いて心持よく見える。湯歸りの女が化粧道具を手にして行交ひざまに話して行く。其の襟角が驚くほど白く浮き上つてゐる。早くも蝙蝠

の飛出したのを子供が早く見付けて追掛けて居る。近くに絶えざる電車の響、遠くに汽船の笛の音が長く尾を引いて消えたが、すると川口へ大きな屋根を突出した龜清の二階で幾近の三絃が一度に調子を合して響き出した。雨に濡れたまゝまだ乾かない柳光亭の板塀の外には蹴込に紅い毛皮を敷いた漆塗の新しい人力車が二臺ばかり置いてあつた。裾襷様の袴を取つた藝妓一人と、目覚めるばかりな友禪染の振袖を着た半玉が、早足に柳の垂れた門口へ還入つて行く。其れをば通りがかりのものが珍らしさうに振返つて見て居た。

「行きませう。」小れんが云ふので自分は大通を兩國の方へ歩き出した。  
「すぐ家へ歸るかい。車をさう云はうか。」小れんは軽く首を振つたまゝずん／＼歩いて行く。

自分は大通から川の方へ廣る夕方の空を仰げるだけ廣く仰いだ。橋の手前は近所の飲食店から物賣る匂の立迷ふ中を、電車の行交ひ、其を待つ人、橋を渡る荷車などで非常に混雜して居る。ふいと其の瞬間自分は女をつれて待合から出て來た自分と此やうに休まず活動して居る世間との間には、全く交通しない隔離があつて、

自分と世間とは別々の運命に支配されて別々の方向に動いて行くやうな心持を深く感じた。いつの日か暮れに感ずる心の沖靜が重なる原因であらうけれど、譯もなく力抜けがして心が落付いてしまつて、其れ一何處にか言ひ得ない幽愁が蟠つて居る。別にわかれを惜しむと云ふでもない。一日の遊蕩を悔悟するでもない。水の流に感動するでもない。唯だ、都會といふものが、都會に生れた人にも與へる人工の歡樂を自分は今日までに見盡した。其の夢のさま／＼を一時に思返すやうな氣がしたのだ……

「あぶないよ。」

手を引いてやつて電車の線路を横切つたが、すると小れんが河端に立たた晝札の文字を「早船、四ツ目の牡丹……大人四錢」と讀んだ。

一行つて見ようか。」

女はいつもにない若々しい元氣な聲を出して、「え、行きませう。まだ私一度も行つた事がないのよ。」

自分等二人は其れなり石垣へ掛けた板の歩みを渡り、古い傳馬船を傳つて、薄べりを敷いた荷足舟へ乗つたのである。

着古したメリヤスのシャツの上に十文字に腹掛を結めた二十二三の若い船頭が鼓んで繁いだ

いか。

「馬鹿々々しくつて、先からお金を貰つても眞平よ。先の中は人から冷笑かされたり何かすると、内々嬉しくつて堪らなかつたけれど、この頃ぢや時たま、あなたの事なんぞ云ひ出されたつて、へえさうですかとばかりでね、もう可笑しくも面白くも何ともないわ。」

「全くさ。人の噂なんぞもう珍しくないな。然し其れで居て、いざ一緒になつて見ると矢張り駄目なんだ。」

「心中でもしまひたいわね、寧ろ……」

「出来たら其れもいゝね。」

「世間ぢや何て云ふでせう。」

「いろ／＼に勝手な事を云ふだらう。然し三日たない中に忘れてしまふさ。」

「ぢやつまらないわ。」

「つまらないさ。」

二人で又欠伸をした。

「だから、其様事を考へるよりいつそ男も色も何にもなしで暮せるやうに量見をきめた方が、餘程利口かも知れない。」

「あなた見たやうに、道樂をしぬいた人なら、女なしでも暮せるでせうね、考へ次第で。」

「お前はどうか。役者も買ひ飽きたと云つたぢやないか。」

やないか。」

「役者はいやさ。役者と亭主とは違つてよ。」

「ぢや、唯だ男として置かう。」

「昔から捨てられちまつてさ。外に誰れも此れつて云ふ人を見當らなければ、却て氣樂に獨りで暮せるでせうよ。だけれども世間の人が面白く相に泣いたり笑つたりしてゐるのを見るとほんとに寂だわ。ねえあなた、田舎で暮して見なくつて。どこか遠い山の中で世間離れて……」

「それもほんの當分だ。箱根にだつて一週間と我慢が出来なかつたから……」

「仕様がなないねえ、じれつたい。」

船頭が「旦那」と聲をかけて、荷船の間に浮べた傳馬船に早船を着けた。河岸は倉庫の間が少しばかり物揚場になつて居て其の向うに人力車の溜り場が見えた。上ると狭い往來を隔て、直様、建仁寺垣の門口に牡丹園と書いた札がかけてある。

唯さへ濕氣の多い場木の事で往來は随分泥濘つて居る。自分は女と二人で水溜りをよけながら門を這入り、大きな古木の鉢物を並べた庭石の間を傳つて行くと、雨を防ぐ低い葺簷の天井に夕暮の光を遮つた奥庭は一面にもう眞暗であつた。丁度二三人の女中が方々に釣したラン

プに火をつけ廻つて居るところで列をなして植

つけた牡丹の花は折からの鈍く黄いランプの光に朦朧として、僅に夕闇の中から浮出して來た。然し人方はもう散りかけてゐる。散らない花も既に情なく色褪めて蕊ばかりが黒く大きく開けて居る。強い日の光や爽やかな風に晒して置いたなら疾に潔く散つて了つたものを、人の力

で無理やり今日までの盛りを保たせた深い疲勞と倦怠の情は、庭中の衰へた花の一輪づつから湧出して、丁度其れに能く似た自分達二人の心に流れ通ふやうな氣がした。佇立んで見て居ると風もなければ歩く人の足音もないのに、

彼方の花も此方の花も、云合したやうに重さうな花癡を絶え間なく落す。花癡は黒い葉の面に止まるのもあれば、ランプの光の達かない葉蔭の上に滑り込んで了ふものもある。時間が遅いのと時節が過ぎたのとで、見物の人は一人も這入つて來ない。外の河岸通りでは依然として子供

の囁き聲が折々は、夥しく人数が増えるらしく高まつて聞える。

「本所の牡丹で、たつた此れだけの事なの。」

「名物に甘いものなしさ。」

「歸りまよう。」

「あゝ、歸らう。」



た。自分はおれんと二人で一時築地へ家を持つた事もある。然し半年ほどで相談の上女は元の藝妓になった。

「あなた、もう一度私と家を持つて見ない事：いやですか。」

「いやな事はない。だけれども矢張り駄目だよ。先見たやうに直き飽きてしまふよ。」

「さうねえでも私藝妓して居てもつまらないから。」

「何をしても、もうつまらないんだ。女房になつて暮しの苦勞なんかしたら猶つまらない。お前が三十僕が三十五六になるまで、もう三四年は矢張り若い氣で、浮いて暮した方がと云ふので、お前も承知の上で彼處の看板を借りて見たんぢやないか。」

「それアさうですけれど、どうかすると家を持つて居る時より却てあなたにも御厄介をかけるから、私矢張りもう内儀さんでくすぶつて仕舞はうかと思つたの。」

「其れも悪くはないがね、一度道樂したものに茶屋小屋の勘定は借しにくい、生活の苦勞と來たら實際馬鹿々々しく出て來たもんぢやないよ。お前だつて、何々さんの總見だとか、何々さんのお弘めだとか、どこそこの付届だな

んて云ふと、随分よく氣をつけるが、水道部の屑書だとか、何とか云ふと、おきに閉口しちまふぢやないか。」

「私達は何時まで經つたつて夫婦になれッこ無いわね。」

「さう云つたものでもないさ。つまりもう少し年をとればいいのさ。惚れようとも惚れられようとも思は無くなればいいのさ。世の中の樂しみに未練がなくなればいいんだ。お互に浮氣でもされやしないかと心配したり苦勞したり厭味を云つたりする中が花さ。二人とも夫婦なんぞになつてもならないでも、何うでもよくなれば自然と沖着いて一緒に居られるよ。」

「つまらない世の中ね。」

「あゝつまらないさ。」

電車の通る二ノ橋を越すと何處まで行つても眞直な河原には同じやうな木造の低い橋がいくつとなく掛つてゐる。一ツの橋をくぐるか滑らぬ中に又他の橋が現はれて来る。何れの橋の欄干にも子供が蟻のやうに集つて騒いで居る。橋の上のみならず物場場のやうな空地にも惡戯盛りの子供が群れ集り、其の中には男に劣らぬ女の子までが加つて兩方の岸から負けず劣らず、

向う河岸の

金太郎

頭が三寸

長いな……

と互に聲のかぎり喚き合つてゐる。其の金切聲は水を渡り岸に傳つて後から追掛けて來て自分等が舟の進みを急すやうに思はれた。風の絶えた夕暮は俄に沈み返つて、水に映る倉庫の白い壁の色が鮮かに澄み、荷物の物置る如の色が先刻よりも餘程赤く見えるやうになつた。屋根の形に美しく薪を積上げた物陰はもう薄暗い。橋の袂の處々に竹屋の竹竿が幾束にもなつて立掛けてあるのが、夕方の空に對して如何にも高く黒く鋭く聳えて見える。然し何處まで行つても眺望は少しの變化をも示さないで、最初は珍らしかつた舟にゆられる心持も今では倦み疲れて薄べりの腰が痛くなつた。

「この川、何處まで流れてゐるんでせう。」

「龜井戸まで……」

「牡丹までまだ餘程あつて……」

「あれが三ノ橋だらう。もう大した事はあるまい。」

自分はおれんと共に欠伸を噛みしめた。「どうだね。もう役者なんぞ買つて見る氣はな

薄暗くたい何となくしめやかに、立て連る座敷の障子も、荒海の瀾風に自づと濕る物思ひ。然しお前は其處に、何にも知らずにあどけなく無邪氣に育つた。養澤に、わが儘に、流れ渡りの大勢の女にちやほやされて、まるで大名の姫君のやうに育つた……

### 女のことば

とはぶふものゝ私とて、また或時は絢縮緬のしごきに、兩手を縛られ、眞暗な倉の中へ一日一夜、御飯もたべずに閉ぢ込められた事も度々でした。お針の婆やが縫つてくれる新しい帯の模様は、氣に入らぬとて、古い破れた帯ばかり締めようとした時、又は御飯のおかずの選好みに、駄々をこねて泣いた時、跡の稽古がいやだとて、出稽古のお師匠さんを困らせぬいた時、私はいつも奥庭の倉の中へと送られました。けれども幾度となく送り込まれるに従つて、しまひには馴れるともなく幾分か恐さも薄らぐこの倉の中は、やがて私の身に取つて、何といふ不思議な面白い處になりましたらう。泣きながら疲れて寝入ってしまった後、ふいと眼をさまして見た折々、私は鐵の格子の小窓から進み入る幽暗な晝の光に、倉の外の世界では一度も見たこと

のない古い道具や、古い衣裳や、古い繪本を見付け出しました。定紋のついた大きな長持、蒔繪の衣桁、朱漆の煙草盆、きらびやかな金線の縫の桶織、籠甲の簪や弁など、まるで助六の狂言の折芝居の樂屋へ行つて見たやうな、其れ等はいづれも何十年の昔、私の養家に抱へられてゐた名のある遊女の形見だと、後で私は人から聞いて知りました。冷い古い道具にのみ時代の色と匂を残して、其の待主の人間は何處へ行つてしまつたのでせう。冷の割けた道具よりも、蟲の餌ふ着物よりも猶ほ果敢く猶ほ早く滅びてしまふ、忘れられてしまふ人の身の行末……

### 男のことば

それだから私は生きてゐる間、ある限りの生命を藝術に注がうとしてゐるのだ。この間はるばる佐渡が島から渡つて來た盲目の樂人が、吾々の爲めに文藝節を語つた。幾世紀昔の哀調よ。文彌と云ふ作曲家の生涯を知るものは一人もない。けれども吾々は其の單純なる旋律に怪し氣なる夢を見た……戀人よ。いつもいつも醜い現實の壓迫に苦しみ虐げられてゐる胸の思ひを遠いお前の故郷、私の見たこと行つ

た事もない都の物語に愚めてくれ。見知らぬ土地と、過ぎ去つた昔といふ此の二つの條件は、いかに平凡な事件をも、私の胸には美しい詩として反映させることが出来るであらう。お前が十二の夏の夕方、どうしたんだ。抱へる女達を相手に縁先で、七夕祭の色紙を切つてゐた時……

### 女のことば

女達は不圖、中庭の植込みの蔭をば恐るゝ如く早足に歩いて行く人々の姿を見付けて、何事か秘密のあるらしく囁き合ひました。そして互に「今日はよく……あゝ可笑想に。」と云ひます。私は何事かと子供の好奇心に縁先へ立上つたばかりか、遠慮なしに大きな聲で訊かうとしますと、そばに居た一人の女が、いけませんよ。お客さんですよ。と手で制します。その中に植込みの蔭を行く人々の姿は、いかに世を忍ぶらしく插簪す髪に夏の夕日をよけるやうに顔をかくして、離れの小座敷へと、先に立つた女中に案内されて這入つてしまひました。それ待つてゐるにして、私の質問を手で制した女の一人は私の耳に口を寄せて「小菊さんのお客さんです。道成寺の安珍さまよりも綺麗な若いお客さ

## 短夜

### 男のことは

戀人よこの間のやうな話を聞かしてくれ。  
眠れない夜の寝物語に、またこの間のやうな、残酷な恐ろしい、また美しい、京傳の草双紙のやうな話を聞かしてくれ。幾度聞いても、聞きたびごとに、お前が故郷の幼い追懐の夢物語は、シュウマンの「ロンド」の曲のやうに、私の魂を柔かに遠いところへ連れて行く。同時にまた、私の身體中にいづこと知らず、ボオドレエルの詩を読む時のやうな戦慄を覚えさせる。私はもうつかれきつた私自身を空想だけではとてもあの若い新進作家の書いた少年のやうな、強い力の籠った製作を仕上げる事ができないのだ。戀人よ。どうぞお前のやはらかな手祝の上に、不眠症にかゝつた神經衰弱の私の頭をよせ掛けさせ、私の耳朶にお前の呼吸の觸れるまでに、唇を近寄せて、そして一番うれしかつた時の秘密を囁くと同じやうな、低いやさしい調子で、長々とこま／＼と夏の短夜を話し明してくれ。お前も私もまだ

吾々が小さな時分に、乳母の話を寝ながら聞いた紙張りの枕行燈また米八と丹次郎が添寝の横顔、薄くぼんやりと照したやうな、彼行燈といふものが、最早今日の東京には無いと云ふならば、仕方がない、寧ろ天井からぶら下つてゐる其の醜い電氣燈を消してしまつてくれ。雨の降らぬ入梅の夜の重苦しさに半分あけてある小窓の外の夜の光は、白く、お前の横顔の輪廓だけを、どうかかゝるか、四疊半の間の中から區別させてくれるであらう。丁度カリエエルの描いた朦朧とした竹像畫のやうに……。窓を其のまま明けておけ、誰も見るものか、夜はしん／＼と深けてしまつた。窓の外なる屋根の上には瓦の間に生えたペンペン草の花が實を結び、物干臺にはこの前二人して盗みで買った眞白な鐵砲百合が夜露の潤ひに思ふがまゝ、其の厚ぼつた花弁を開かせ、精つた蕊の先から、有るかぎりの甘い匂を吐出してゐるばかりであらう。金五郎といふ名をつけたお前の飼猫は臺所の鼠を打たれて、露地のはづれの忍返しを傳はつて、どこかの小三をさがしてゐる時分であらう。戀人よ。このしめやかな夏の夜。この暗い小座敷の窓の光に、一層遠く一層夢現のやうに、遠い故郷の傷しい追憶の話を聞かしてく

れ。繊細な然、鋭いお前の爪先で弛んでしまつた私の心の絲を弾け。

### 女のことは

寒い恐ろしい波の荒い眞暗な北國の海に臨んだ昔からなる古い港町。五つの時から養女に貰はれて行つたこの町第一の、古い大きな遊女屋に、私はいつか十二の春もすごして、黄昏のいつまでも續く夏の夕方、湯上りの化粧を済ました抱への内藏奴達幾人と、軒の深い薄暗い部屋の前で、まだ燃火もつけず、明日終る七夕の色紙を切つてゐました……

### 男のことは

恐ろしい胸のをの／＼きよ。ひそ／＼語るお前が話の一語づつに、燈火を消した闇の中には、さま／＼な景色がとき／＼に浮び出す。物思はし氣におこんがぐむ油屋の店先の朦朧とした行燈の灯影やら。博多の海賊の一隊が毛刺を頭に、手拍子打つて舞ひ騒ぐ廣間の燭臺。また小女郎が宗七の臂撫でつける鏡の曇り。古い港の古い遊女屋の趣は、河東節の清掻歌かに、達引と喧嘩に名を賣る江戸吉原仲の町、雪洞に八重櫻散る華美な舞臺と事變り、たい何となく



たまし。博徒の親方に根引させられた小菊は、思はぬ人にその身は任せてゐながら、心の意地は何處までもと立て通す。荒くれた男の怨みはまたしても思ひ立つ恐ろしい復讐の段取。或夜女を縛つて蚊遣火の松葉いぶし、其の果は大勢の子分を呼んで、其女を哭れてやるから、皆なしていゝやうに弄べとまで云放つた。小菊は生命もからゝ隙を窺つて逃げ出しはしたものの、博徒の祟りに誰れ一人庇つてくれるものゝ無いのを知り、幾里の夜道を町はづれる尼寺に駆け込んで、それなり黒髪を切り落してしまひました。

### 男のことは

### 女のことば

三年は過ぎた。かしましい一時の略も掻き消すやうに忘れられて、丁度私の養家が破産する前の年の秋の暮。傾く日光は荒海の霧につつまれ、毎日吹きつゞく北風の激しさ。沖の方遙に響く太鼓のやうな波の音に交つて、をりくは悲しい船歌の途惑したやうに聞えて来る船着場の方からは、群れ集る鳥の鳴聲一際騒しく、

町々の古い人家の軒裏には、燕の群れが相合ふやうにつながり合つて早くも南へ渡る相談をはじめます。珍しくはない。毎年同じやうに繰返される季節の推移が、毎年きまつて何か知ら恐ろしい天災の前兆かと思はれる片寄つた北の國の秋の暮。それをば一層悲しく不安にさせる西國巡禮の小娘の御詠歌、黄光寺参りの燈の念佛その他虚無僧、行者のたぐひに至るまで、種々な姿に身をやつした放浪者の、裏淋しい單調な音楽が、私の養家の店先にはあゝした商賣柄とて、殊更絶え間なく引きつゞく。折から北風に翻る暖簾の外に、南無阿彌陀佛の鈴の音靜に、聲を揃へて立止つた尼の四五人づれ。古くから居る店の男が、さし出す一人の尼の托鉢の中に、おひねりを入れようとする時、何の氣もなく覗き見た深い編笠の中、それは間違ひもなく昔の小菊であつたとか。店の男の知らせに二階の女達は、われもくゞと駆け下りたが、其の時は既におそく、尼の一行は早向うの横町を曲つてしまつて、相變らずの北風に唯涼やかな鈴の音ばかりを残して行つた。女達は云ひ合したやう、一度に涙を吸つて泣き始めたので、私も急に、風に途切れるの音に春仲びをしつづ長い袂に顔を蔽ひました。

### 男のことは

然の死んだ亡骸を見たものは滅多にない。戀には不幸であつた抱の遊女小菊は、世にかくれた清浄な最後の安息所を見つけた。彼女は最後の幸福の何たるかを悟つてしまつたのであらう。それを思ふと私のやうな罪の身は今にどうなつて死ぬのだらう。どんなに悶え苦しんで、後生の覺悟もわるく死ぬのだらう。

### 女のことば

あれ、いつの間にか窓の外が白みかゝつて来ました。夜半の襟元に浸み入る夜明けの冷たい風。入梅の今日もまた、雨は降らないと見えます。やさしい下駄の響が聞こえました。若い女達が連れ立つて朝参に行くのでせう。眞珠のやうに輝きながら薄く曇つて、まだ日の照らない空の下に、面白さうなあの笑ひ聲をお聞きなさい。

### 男のことは

すさまじい音して車が橋を渡つた。感勞のいい岩衆が魚河岸へ急ぐのだらう。夜毎の薄寒と酒にもあの人達の疲れない若い力がおそろ

までです。一私は幼心にもこの時初めて、戀の別れの傷しさを何とも知れず身にしみて、話してくる女達の口から聞きました。

### 男のことは

若い綺麗な僧と古い港町の女の戀……

### 女のことは

たゞさへ世間をかねて逢はねばならぬ二人が戀は、この土地の鬼神とも綿名された恐ろしい博徒の親分が無體の横懸墓に、忽ち逢瀬を圖たれることになりました。若い美しい戀人のある限り、思ふやうにはならぬ女を憎しみ、親分は力づく金づくに女を根引して連れて行く。誰一人手向ふものがありませう。家中のものは唯かはいさうに嘯き合ふばかりでした。いつもなら、夜ふけて二階で忍び逢ふのをば、其の日は殊更に四邊を憚り、若いお寺さまは離れの小座敷で、最後の名残りに小菊を見た後、夏の夕方のまだ夜にならぬ薄ら明りの切、忍んで来た時のやうに、横込みの蔭に姿をかくして、中庭づたひに消えるが如く店の暖簾を分けて出て行かれました。間もなく蔽ひかゝる夜の暗さ。北國の海邊の夏の常として、書中の暮さの後は、

いつも突然と秋が来るやうに肌寒くなる夜風と共に、今夜女を身受けする大一座のお客様。風のやうにとや／＼と這入つて来ました。

### 男のことは

お前の話は、丁度此頃の若い人達が紅さした竹本美光の唇からでも聞かうとするやうな、太棒のさはりの節を思はせる。あゝ十年を放蕩に送る此年月。人間の踏むべき正しい道を知るよりさきに、いつともなく私は彼のあゝがれと云ふ心の惱みの甘さを知り、まだ二十歳にもならぬ真若さに、初めて、かのおそろしい罪を犯した晩。身も心をものゝきながらに泣いた晩。

いつも斯うした罪の甚の夜ふけから夜明へかけて、彷徨ひ歩く無宿の音楽者が、すがれた咽喉から語つて聞かせた罪と情と因果の物語。思は時代と共に、時休まず變つて行くが、軟い二十歳の胸に喰ひ入つた其の物語の心持。戀人よ。戀した二人のそれからさきは。別れた後は……

### 女のことは

美しいお寺さまは寒い淋しい故里に住むのが厭になつたのか、秋の來ぬ中京都の本山へ修業

に行かれたとやら、それなり家中のものは、一度と便りを聞きませんでした。京都の本山へ行かれたといふのは偽り、實は東京へ旅立たれて間もなく還俗してしまはれたと噂するものもありました。今くお寺さまにして置くには惜しい男振。誘ひの多い東京の風に吹かれて、薄暗い故里の思出も一時に消えてしまひませう……

### 男のことは

然しその美少年も今頃は、月日か醗す癖と云ふ苦味の酒の味を知り、きつと私と同じやうに眠られぬ夜の折々に二十歳の若い身空をは、追憶と云ふ綺麗な詩に造り上げて、事實を事實よりも猶美しく、猶悲しげに誇張して、せめての慰めにしているであらう。活氣な男の皮肉な心は捨てられた戀の怨みをも、時々たてば嬉しい記憶の夢に數へ、また自分から振捨てた戀までも、或時は却つて捨てられたものやうに、わざ／＼自分の運命を物哀れに造りなして、悲衰の快味に酔はうと企てる事すらある。

### 女のことは

それに引きかへ、女はたゞ狭い心一筋のい

て行く事せう。

## 来客

どこか散歩するやうな處がありますまいか。  
 而當がましい天氣ではありませんか。

## 主人

お諦めなさい。自動車の通れないやうな脆弱い勾配のはげしい木の橋が、もう東京中に幾何残つてゐるでせう。昔を忍ぶ町中の堀割つたひも却て傷心の種となります。今から僅か七八年前、日本が戰勝國といふ名譽に酔はない頃の時代を顧みると、まだ頼しいがりました。深川は唯だ彌勒の橋のほとりとばかり。あなたのお馴染の藝妓が病氣で親元へ引込んでゐるのを、忘れもしない丁度花火の晩、兩國橋は人込みで通れない。濱町河岸も駄目だらうと云ふので新大橋へも廻らず、とうとう永代橋まで下りて漸く同河岸へ渡つた事がありました。

## 来客

夜の水に浮ぶ幾知れぬ船の提灯に、得も云はれぬ美しい夜の景色は、忽ち變る暗い淋しい堀割つたひ。渡る度毎に蹟く板の腐つた木橋の

数々。あちこちと尋ねて歩く裏長屋の露戸横町を空しく抜ければ、そこ此處に築立つ古びた寺。荒れしが儘なる墓場の破垣。この年月親の慈悲人の情も上の空。頼りない仇し女の仇し情を追うて迷ひ歩く悲しさが、單衣の脚薄く、濕氣の多い夜風と共に、身にしみんと浸み入るやう。かゝる私の心持も知らず顔に、彼方遙の川面ではやがて降りかける夏の空を氣遣うてか、次第に烈しく打上げる花火の響、人の呼び聲。あゝ、あの夜の情調はどうしても今の世のものとは思へません。

## 主人

それも皆、古びに寺と云ふ廢れた美術の力でせう。忘られた人々の其の名さへも、雨風に磨滅した小さな石塔の列、腐つて倒れた卒塔の束。やがては貸地となるべき荒れ果てた泉地のを後に、かうした古寺の多い貧しい裏町ほど、人の心を沖着かせるものはありませんまい。東京の市内は何で今更に新しく、請負仕事の瘦せた植木を申請らしく植ゑ置べ、公園と云ふ名稱の下に、壞れた大砲だの不用の水雷、鐵砲王なんぞの置場を拵へる必要があります。東京の町には到る處其の名さへ寺町と云はれる

古寺の多い町が流つてゐます。古寺の周囲の開けて行くのは決して私達の悲しむ處ではありません。周囲が開ければ開けるだけ、古、の其の古びた建築と幾百年の樹木とを保存させる必要を感じるのです。まづたくあの晩の趣きは、私も自分の身の上的やうに忘れられません。暗ねる人を尋ねかね、迷ひ迷つて行く先々の横町の角、古寺の門の前、堀割の橋袂には、角いでも見えない花火をば唯だ其の響だけに迷はされ、若い男女の立騒ぐ様子と云ひ、燈火の少いその遠い夏の夜の薄暗さ、どこからともなく立迷つて來る蚊遣りの煙。それでもとうとう溝泥臭い引込の、唯ある溝川に架けられた殊に危い木橋を渡つて、幾度か下駄の鼻緒を切らうとした凸凹な露地道に、漸く思ふ人の佗伴居を尋ねあてた其の時の光景……

## 来客

私は幾度それを描かうとしては躊躇したか知れませんが、辰巳恭三「葛飾砂子」などといふ小説を御記ですか。此の種の題材は最もや有ん限り、あの泉鏡花氏によつて歌ひ盡され、今の批評家からは古いものだ、作つたものだ、低いものだと見做されてしまひました。藝



しい。戀人。眠られなかつた夜の後には、私の身に取つて夜よりも猶退屈な目的のない晝間がやつて来る。起きよう。仕方がないから吾々も亦、あの優しい下駄の響の後を追うて、朝詣にでも行かうぢや無いか。夜明けの空氣は幾分か私の頭を冷すだらう。堀割のまだしんみりと睡眠んでゐる満潮の水は、私の心を休めたらう。行かう。そして「落人」のやうに二人して、あの美しく、東が白む横雲を橋の上から眺めよう。

## 晝すぎ

### 主人

いゝ天氣になりました。どうです、あの空の色は。いよく陽春の時節が來ました。お宅の方では、散りかけた紅梅の梢に、さぞや鶯が鳴きしきつて居ることです。

### 來客

寂びた古庭は花がさいたり鳥が啼いたりしますと、却て身の淋さが増つてなりません。昨鶯は正に抵死して啼くとても云ひませうか。この

頃の四五日、春の寒さ一層に、秋の時雨か梅雨のやう、暗く悲しく降りつゝいた雨の後、今日はまた突然に鏡の面を拭つたやうな此の青空。住み占した家の隅々まで俄に暖かい春の日光がさし込むやうに思はれて、一冬を無性らしく着古した綿衣のよれが我れながら目につき、仕立直しの一枚小袖に着換へて見た時の氣輕な心持。唯だわけもなく誘はれるやうな心地して見飽きた古庭の花よりも河岸の柳に燕の飛びかふ町中の戀しさ。ふら／＼と春の泥濘を歩いて來ました。いまだに私は、あの樟腦の匂の鋭い簞笥の抽斗から、新しい着物を取り出して着換へて見る瞬間と云へば、其のひやりとする襟元袖裏、裾前の肌さはり。後手に角帯を引締め上げる心持……唯だわけもなく何處へか出掛けて見たいやうな氣がしてなりません。あ、今だにまだ昔の夢が覺めません。

### 主人

お互に十年昔の初夏の初給。羽織も着ない着流しの着心地はどうでした。それがもう、今年も去年も、とう／＼梅見にも出かけなくなりました。御覽なさい。私の家にも、お馴染の瓢箪はあの通り鳴だらけになつてゐます。あなた

と二人橋本で一酌したのは、何時頃の事でしたらう。

### 來客

それさへいつか三年前、薄曇りの秋の晝過ぎ、萩寺の歸り。橋本の二階から清川に落ちる場末の淋しい夕日を眺め、やがて蟲の音の多い田圃の夜道を向島まで突切ると、思ひもかけない明月の光に、待乳を見渡す限田川。然し其の翌年の大水に、萩も秋草も皆腐つてしまひました。

### 主人

日本が朝鮮を取つた驕もその頃の事……。

### 來客

つゞいて翌年の春には吉原から山谷の火事……。

### 主人

その代りに日本橋も新しくなり、魚河岸も西洋造りに變りました。帝國劇場の舞臺開きもその頃の事と覺えます。世の中は驚くほど變つて行きます。こんな話をしてゐる中にも私たぞの知らない處に、定めし銅像のつや四つは増え

り取りの煎りを残してゐます。浮れ女に終りある誠を強めるのは無理でせう。

## 来客

A Jemma と云ふ小説の終りに *Maintenant* が云つたやう、女には *Il faut toujours pardonner* です。巴里の浮れ女には戯れ遊ぶ紳士の歸つた後に、辻馬車屋の馭者と云ふ悪足がある。狂暴な沙汰の女が誠をつくすのは、荒涼たる原頭の羊飼でした。川育ちの露地の女に矢張それ相應の男があつたのでせう。私達よりもつと勇みな、手荒な、酒癖の悪い凄みな男があつたのでせう。

## 主人

非常な風になりました。花時分の天気はきまつて此れです。閉めませうその窓を。大變な塵埃です。

## 来客

遠くへ出かねないで宜ござんした。向島の土手あたりで、此の風に吹かれたらどうでせう、急に時候も寒くなつて來たやうです。曇りまし

## 主人

風だけに雨にはなりますまい。お急ぎでは無いのでせう。と云つて別に話の種もありません。矢張昔馴染んだ女の話を、丁度今日見たやうに、麗かな午後が急に大風になつた傷しい経験も、數へて見ると私達の身の上には、もう随分度重なつてしまひました。

## 来客

Catulle Mendès と云ふ人の詩に、唯だ幾行となく女の名前ばかりを韻に合して列記して其の末に、自分はまた此の外に忘れてしまつた女の數が幾人あるか知れないと云ふやうな心を歌つたのが有ります。私は時中の堀割や川筋の橋を、今も猶折々散歩して見る度毎に、あゝ彼の時、あの橋際で待合した彼の女はどうしたであらう。この川筋を一所に歩いた彼の女は何處へ行つたかと、橋の景色と水の流れの變るにつれて、いろ／＼に思ひ出る心のさまを寫して見たらばと思つた事もあります。

## 主人

面白いぢやありませんか。何故お書きになら

なかつたのです。

## 来客

ふと考へついたその時には新しいものゝやうな氣もしましたが、今更年にする氣力がありません。餘りに見馴れてしまつた川筋の景色と、餘りに馴々しくなり過ぎた追憶の哀傷とはもう私の心には何等の新しい藝術的感興をも起させません。

## 主人

見古した粉本の丁度糲め果てた繪具の色を見るやうです。

## 来客

見飽きた景色、歩き馴れた川筋を、唯だもう型にはまつた心持で歩いてゐる其の遺溺無心心持を、激ひ盡し書き出して仕舞つた詩材の中から、又しても繰返して、古い情緒の残りをは歌ひ直さうと苦しむ其の苦痛のいた／＼しさ。何に譬へたらいいでせう……

## 主人

破掛つた塙木の芝居小屋に掛つてゐる、彼の

術家は其の内心の深い急所に觸れた經驗の凡てをば無理にも作品に仕上げて、底意地悪い批評家と不人情な公衆の前に提供しなければならぬと云ふ義務がありますまい。藝術家は其の暇み多い一生涯の中で、せめて漸と見出した親愛な情緒の秘密をば、半生の努力の末、藝術なる形の下に結晶させて、成功と云ふ彼の轟然たる稱贊の聲から、やがて普遍と云ふ粗雑な響の中に其の弱々しい懐しみの大半を失さして仕舞ふよりも、却つて唯いつまでも形をなさぬ追憶を其儘に残して置いて、人に知られぬ胸の奥底から時に觸れ折に従つて、未成の詩の悲しさと美しさをこつそりと、大事に自分一人ではかり味つてゐる方が、或は遙に幸福ではなからうか……と私はよくそんな事を考へて見ます。

## 主人

まことに汚い暗い露地でした。

## 來客

それも夏の夜なればこそ、曇りながらも空の光と、明放した家々の燈火の光とで、やつとの事に其番地と名前をつき留めたのです。

## 二人

格子戸の外から御免なさいと聲をかけると、人の居ないやうに寂とした家の中が俄に色めき立つて、恐るゝやうに障子をあけたのは誰あらう、其の年葉楓の茂る頃から、唯だ病氣とばかり、いづこともなく姿をかくした其の人でした。藝妓はかうでなければと自慢にして、烏田にばかり精通してゐた髪の手を、無造作な櫛巻にして洗刷した浴衣に纏だらけな引掛け帯、白粉も簪も指環もない、如何にも貧しげな淋しい姿……

## 來客

それが私の眼にはどんなに悲しく美しく見えたか知れません。明い茶屋の座敷でばかり見馴れた華美な姿とは打つて變つて、貧家の薄暗い燈火を背に受けた病上りの憔悴をさも遺溺なげに煤けた格子戸の間に見せた有様は、馴馴と古寺と木の橋の多い裏町を彷徨ひ抜いた不安な其の夜の心持に一致して、いかに忘れられぬ調和を作つてくれたでせう。さながら何かの讀本にでもあるやうに、其れと見て取る母親が氣轉をきかして出て行つた後私達は一間の破壁に敷き

延べた濃紙の上に坐つて、薄暗い吊洋燈に顔を照させ、場末の恐ろしい蚊を扇扇で追ひながら此年月の馴染がひもなく、唯だ唐突に病氣とばかり行先知れず姿をかくしてしまつた情なきやら、それでも斯うして漸くに暮れ當て、無事な顔を見る事の嬉しきやら、又一日も早く舊の土地に歸つて呉れるやう。そしてその時は以前に變らず遊びたいと云ふ約束やら、凡て初心な世間見ずの遊郎が、どうかして女に愛されたさの苦心から絞り出す戀の繰言を繰返し、外には花火の遠い轟きも稍静まりかけたかと思ふ頃、これは阿母さんにと若干かを包んで渡し、歸り際にも猶くどいほどに、是非手紙をと云ひ置いて其の夜は別れた……然しそれが矢張り最後でした。

## 主人

あゝした流れ渡りの女の身の上に、二十代の世間知らずの男の戀が何になります。此方の心持は先へは通けず、遂に失つた戀なればこそ、今だに其のなつかしさが繰返されるのでせう。あの女ばかりと云ふではない。其後も度々、あなとも私も、人こそ違へ同じやうな仇し女な仇し情に憫んだ束の間の夢は、皆忘れられぬ取



して兩手を懷にしたまゝ、縁先の庭下駄を突掛けて空の方を見ながら二足三足と池の方に歩いた。

蒼白い空は其の一方だけ猶もかすかな夕日の名残に色づいたまゝ、雲一ツなく晴れてゐる。ふと見ると半ば落葉してがらりと明くなつた櫻の梢に十日頃の片割月が白くかゝつてゐる。苔を踏む庭下駄の下に落葉は聞き取れぬ程の響を立てた。今だに生残つた、蜂が芝生のかげに鳴き始める。水際の石の上から龜の子がどぶりと古池の中にかくれた。その波紋の靜るまで彼は石の上に立止つて古池の水を眺めたが、然し波がいつも眺めては愛する自分の姿や空の浮雲や岸の樹木の反映は、あたりの小暗いために水の上にはもう見られなかつた。迷つた落葉が一片水を覗く給の機を掠めて飛んだ。落葉は早くもしつとり秋の夜露に濡れてゐるので彼は其の冷たさが總身にしみわたるやうに感じて、驚くともなく振返つて、しげしげ身のまはりを見廻した。

庭は小暗いので、猶さら廣く見られる。優しい柳、とげとげとした海眞黒な松など、さまざまの樹木は大きな屋敷を取り巻いて、肅然として聲なく立つてゐる。大きな屋敷は丸窓をあけて茶室のやうな突出した彼が居間の八疊を除いてどこも彼處もすつかり雨戸がしめきつてある。夕月の光がこの雨戸の上に樹木の影をおぼろに映し始めた。屋敷の雨戸は主人の彼が父から譲り受けたこの庭園の邸宅をいよく賣拂はうと決心した其の夕から、もう彼れ此れ一箇月あまり、晝も夜も同じやうに一枚残らず閉め切られてしまつたのである。小間使も仲働も書生も皆既にそれ／＼解雇の處置をつけてしまつて、今では、父の車を二十年近くも曳き通した老車夫助造と、簡焚の婆の一人しか残してない。

老車夫は死んだ父と同年であつた。木更津邊の農家の倅であつたさうだが賭博で田地を失した爲め東京へ出て來て車夫になつた。身替が火夫なばかりに六十近くなつてもまだ車を曳く。父は段々自分の身體が老衰して行くにつれ、其れに引比べて助造の行末を心配してどうにか老後の計畫を立てるやうにと度々云開したのみならず、何か商賣の老本にと訛からぬ金さへ奥房に死なれた助造は車を曳くより外には何一つ世渡りの道を知らないいで、父子親切もつまりは仇になつて、一時助造はふれた老車夫に落ぶれ冬の夜中に凍死にさうになつた事さへあ

る。父は止むを得ず以來は下男にして再び屋敷で使ふ事にした。けれども性來の愚圖で氣のきかない處から下女其の他の奉公人の不平と嘲罵の的になるばかりであつた。

「おい、助造。」  
若い主人は明め忘れたらしい裏の庭木戸を開けてゐる助造の姿を見て呼びかけた。

助造は腰をかゝめて、潮吹のやうな顔で猶更可笑しく、眼をばちくりさせるばかりで返事をしない。しようと思つても吃つて返事ができないのだ。「へい」と勢のいい返事のできない爲めに彼はこの屋敷に來るまでは幾度も車夫の目得に行つても失禮な奴だと云ふ事で直様しくじつて仕舞ふのであつた。若い主人はこの事をよく知つてゐる。そしてお世辭を云つて人の機嫌を取る事のできない助造の身の上を其れが爲めに一層氣の毒だと思つて居る。助造は此の末どうなるであらう。自分の屋敷はもう今日ならずして人手に渡つてしまふ。いかに氣の毒だと思つても自分はどう助造の一生を見てやるだけの資力がなない。

「助造、お前どうするつもりだ。何かいゝ考へをつけたか。」  
「へい。」と助造は曖昧な返事をしてぼんやり

見古された狂言の拙い絵看板……

## 來客

美奴アモンチャタが最後の姿をナボリの陋巷に見たる即興詩人の心持……

## 主人

流れもえせぬ溝川の水溜、其の面にうつる立枯れた柳の倒まの影……

## 來客

冥府の古道具屋の店先に掛けられた縁もなく皮も破れた古い味線……

## 主人

廢れた祠の墓にくはれて空虚となつた鳥居の危さ……

## 來客

何處かで頻と駒鳥が啼きます。春の日永も最う近くなつたと見えます。床の間の隅の方が大分暗くなりました。村にかゝつてゐる瓢箪のふくらみが妙に輝つて來ました。燈火のつかない中、それではお暇ませう……

## 主人

花見の騒ぎも瞬く中です、やがて世間一帯が疲れたやうにひっそりした時分葉の暗い蔭に音もなく行く春を、私達は悪いことでもするやうに、こつそりと見送りに行させよう。それでは……

## 來客

左様なら。御機嫌よう……

## 見果てぬ夢

### 一

ふところ手して露側に、彼は衰へた黃い十月の夕日が次第々々に青黒く濁つた古池の水の面から消えて行くのを眺めた。池のほとりから向うの築山を蔽ふ芝生の芝は刈つたことのない雑草と共に延び放題に延びたまゝ、已に黄く枯れて居る。植込の落葉はその上一面に散り亂れてゐるばかりか、池の石から池の水の中まで散々に落ち込んで、色の變つた藻草の間にとまつて腐つてゐる。濕つた土地だけに

一面の青苔が植込の日陰などは殊更に厚くつやつやと輝いて居る外には、鮮やかな方のある色は一つも見えない。去年あたりまでは其れでも何うやら斯うやら落ちた種から手入はせずとも自然に、鶏頭や紫菀などの秋草が生え居たけれど、それさへ今年はどうも根が絶えてしまつた。花のない庭、雑草の立ち枯れた廢園の淋しさを、夕暮の餌に飢ゑた小鳥が歌つてゐる。彼らはちつと打睡めて悲しいよりも却つて今は何となく懐しい心持になつた。何故と云つて、彼は荒廢衰頹のさまに對して抑へ切れぬ詩味を感ずる性情を持つてゐた。彼は今日のやうな有様になが家の庭の荒れはてしまふのをずつと以前から豫期してゐた。覺悟してゐた。落葉とか草の庭も同様、自分の生涯も哀に荒れすすんでしまふのをちやんと知抜いてゐたからである。

柿の間から古池の水の上に落ちる夕日の黄い模様に、もう消え失せな。空氣は俄に濕つて冷く、しみ返つたけれども何處となく淋しい風の音がして木の葉が頻に枯れた芝生の上に落ちる。植込の榎木の幹は小暗い夜のかけの中に見えるなくなつたが枯れた其の葉や草の色は黄昏の光に却つて鮮に浮き出して來る。彼は依然と

個は放逸の生涯を去つて健全な清潔な生涯にはிரたい爲めに友人の家の骨牌會で用會つて美しいと思つたある令嬢と正式の結婚を試みた。その望みは直様遂げられたけれど性格の相違から不和を生じて三年ならずして離婚するに至つた事である。新しい時代の教育を受けた新しい細君は恐しく峻格な人で、又恐しく正義に對する虚榮心の強い女であつた。彼は細君が恐しく名譽と義務とを重んじ峻格な道徳を説くのも、つまりは人から後指をさされまい、人から賞められたいと云ふ虚榮心が第一の原動力であつて決して良心の満足内心の時安から出るものでない事を知つた。ある慈善事業の寄附金の事について彼は飽くまで無名の寄附を出したが、細君は其れに反對したばかりでなく、誰々さんが百圓出したから自分はどうしても百五拾圓やらなければならぬと口論したので破綻の最後であつた。日比谷の公園に夏の夜の音楽を聴きに行つた時、細君は木立の薄り處、香しい花を前にして、聴衆の雑沓からは遠く離れた其處此處の腰掛に、若い男女のひそくと語り合つてゐる有様を見て、實に猥らな厭なことをしてゐる人達だと云つた。其れに對して彼は例ひ猥らな事であつたにしても、花壇の花

と云ふ花は盡く香しい種りを放つ夏夜、月よりも蒼い燈火の光のかげに手を握り合つて音楽を聴いてゐるのは美しいではないか。世の中は何もさう道徳からばかり判斷してしまはないで、情熱からも味ふ事を忘れてはならないと痛解した事があつたのも、聴て來るべき破裂の動機であつた。

彼は一時ある銀行の雇人になつた事がある。無職業と云ふのはいかにも世間の聞えが悪い。名義だけでもいゝから何處かへ勤めに出てくれと細君がたつての勤を退けられたからである。彼は名望のある父の威光で容易く勤め口を見つけたけれども、もと／＼自ら進んでやつた事でもないから、其れほど眞直に其れほど規則正しく勤めはせず、内心では體よく向うから解雇して呉れ、ばよい位に思つてゐた。ところが事實は全く相違して其の年の末に經濟界一般の不振と共に、銀行部内に改革が行はれて、彼よりも最つと勤勉で且つ生計に苦しんで居る幾多の社員が解雇された。それにも係らず彼は無事／＼而も等級が昇進した。彼は自ら正義の如何を疑つた。自個の存在を心疚しく思つた。銀行の頭取と大藏省の官吏であつた自分の父との關係を不快に感じた。彼は一度び遠かつた花柳界に

意識して再び近づき、そして離婚と斷行すると同時に銀行をも辭職してしまつた。

二

縁側の障子に薄赤い燈火の光が映つた。燈火の光は開けたまゝなる障子の間から長く流れて、縁に近い植込の葉裏の一枚一枚を斜めに照すと、露にしめつた苔と散敷く落葉の上に横はつた木の影から更にまた他の影が重り生じて、小暗い夜の庭面は燈火のない時よりも却つて一段と暗く淋しくなつたやうに感じられた。彼は月の光も空の光も逆かない遠くの深い木立の闇に對して障子に映るしめやかな燈火の色をば何心もなく見較べると、あの光のかけ、あの屋根の下に生きてゐた此の年月の自分の生涯が、まるで他人のものゝやうに冷靜に覗き知られるやうな心持がした。それは何とも云へぬほど苦味く又沈痛である。彼は恐れ慄るやうに庭下駄の足音も靜にそつと座敷に上つた。

いつ見ても變りのない飽き／＼した八疊の間である。父が死んで弟が母をつれて地方へ行つてしまつた後、屋敷中は一度も手入れをしなないので、去年の暴風から折々に雨漏りのする其の汚黥か床の間の壁の上に殘されてゐる。掛物



若い主人の顔を見てゐる。

「金はいくらでもやる。百圓でも二百圓でもまゝとめてやる。然し此の前親父のゐた時見たやうに黒圖々々に遣つちまつちア困るよ。乃公も家を賣る侍だから、この後はいくらお前が困つても最う世話はできないんだからね。」

「へえ。」暫く黙つた後、「若旦那、お金なんぞいりません。」

「だつて、家を出てから金がなかつたら困るだらう。」

「困つてもよござんす。どうせ末は困るんですから、却つてお金なんぞない方がよござんす。」

「其れぢや乃公が困るよ。助造、お前一體どうする考へだ。又車でも曳くつもりか。」

「まア、さうでもするより仕様が御在ません。」

「困るなア。」ちつと助造の顔を見たが、助造の方は主人の目の前を唯だ恐縮するらしいばかりで、別に己れの前途を氣遣ふ様子もなく問のぬけた馬鹿な顔をしてゐる。

「一車を曳くにしたところで身體がさうはきくまい。お前もういくつだと思つてゐるんだ。」

「助造はひよこ、お劉儀をして謝罪つてゐる。」

「困るなま。」再び云捨て、彼はもと來た古池の方へ猶もふところ手したまゝ俯向いて歩いた。

落葉と苔苔を踏む遅々たる庭下駄の歩みにつれて、老車夫の最後の運命があり、心の中に描き出される。金をやれば其の金のある中だけぐづぐづに飲んで暮し、金がなくなれば再び寒い夜の河端や暗い辻の角に客符をするのであらう。それも老い行く年と共にいよゝ梶杓を取る事も出来なくなれば何處かの軒の下に飢ゑるか凍えるかして死んでしまふに違ひない。それをば助造はすこしも氣にかけて居ないやうだ。

氣にかけても無駄だと自分から諦めて、木の葉の風にさそはれて落ちるやうに、平然として其の生涯を運命の手に一任してゐるらしい。若い魔術の主人は重ねて古池の石の上に立止つて、はら／＼、はら／＼、止め度もなく落ちて来る

木の葉をば深い感慨を以て打眺めずには居られなかつた。微光の黄昏は早くも過ぎて、今は眞蒼な狭霧が深くも木立を包んだ明るからぬ月夜である。月は白く、古池の死んだ水の面、枯れた藻草の間に其の影を映してゐたが、雨のやうな木の葉に打たれる波紋につれて其の影はゆら／＼と細かく動く。

彼は未來に對して少しも恐怖を感じない老車夫の身の上を幾度か羨んだであらう。愚圖で氣

がきかなくて、酒がすきで、仕様がなない奴だと助造の噂が家人の口の上る度々、彼は自分の身の上を其れとなく心澄に比較した。彼は三十五歳、今日まで全く粥民半食の徒であつた。

昔は某藩の儒者として知られた彼の父は明治になつても矢張學者として官吏として一世の名望を負うてつい四五年前に死んだのである。彼は名家の子弟として世に出る機會は無論あり過ぎる程澤山あつたに違ひない。然し彼は長い年月を原則に縛られた學校を卒業するや否や、經

験のない若い身空は直に烈しい快樂の誘惑を受けた。すると父の名聲が世に知られてゐるだけ、彼の名も忽ち道樂息子として世間に喧傳される。其れを好い事にして新聞の雑誌は幾度となく躍つぱい材料を殊更に彼の私行から探り出す。嘘と云はず眞と云はず噂は更に噂を産むもので、彼は今更に改心して見ても最う時は既に

晩く、一度び定められた評判はどうしても動し得ない事を知つた。さうなつて見ると最初は單に二十歳の無分別と、其の後は無意識の反抗でやつたのに過ぎなかつたけれど、次第々々に自暴自棄となつて、一度と再び立身の志たぞは起さなかつた。

彼は二個の苦しい記憶を持つて居る。其の一

どうしたであらう。あの力彌は。と彼は考へ出した。その年の秋の夜深。吉原の引手茶屋の二階で内儀や女中の二三人と仁和賀の傭しを見た後の雑談に酔後の時間を費してゐた時、力彌は手古舞の姿のまゝでばた／＼と成勢よく椅子段を上つて来た。女中の一人が絶えず燭臺の蠟燭を剪りながら一昨年の仁和賀の時には、「落人」へ出た藝妓の何子が清元の上調子を弾いた男と出来合つて眞正の落人に成つたと話して居た處なので、ついそれに誘出されて力彌もまた語るともなく其の初戀の話聞かしてくれた事があった。まだ藝妓などにはならぬ前、立派な商家の娘であつた時分。踊のおさらひに行つて狐申宿を踊つた歸り道、爺より愛してゐた店の若いものと、地下に結つたまゝの姿で後先の考へもなく斷落ちしたと云ふ確い調子で話す而も色彩の強いこの逸話は、「仁和賀」の雑沓の靜つた後の疲れた夜半の心持と合致して如何に深く彼の心を醉はしたであらう。力彌は其の夜から久しい間彼の戀人であつた。

彼はいつても其の夜の屈調と其の夜の光景とが殆ど生涯に二度と會ひがたいほど美しいものであつたと思つて居る。場所は彼が何れほど繰返して詩化しても猶飽く事を知らない歡樂

の巷の、而も其の騒ぎと狂ひとが絶頂に達して却つて一種身に迫る寂しさを生じた時、踊の假装をした人が、歌舞の世界から突然抜出して来て、現實界に起つた戀の物語をする。技巧の天地と自然の人生とが妙に纏れからんで更に一種特別の世界が現出された。彼はこの洗練の極に達した技巧と形式の世界に這入つて、初めて人生の出来事に感動する事が出来るのであつた。

「阿波の鳴戸」の淨瑠璃堦があるが故に、彼は街に彷徨ふ巡遊の小娘に哀れを催すのである。参詣の男女の雑沓と彩色の濃厚な形式の雄大な山門とを背景にして、初めて非人乞食の群に同情するのである。其後に彼が深く柳橋の藝妓に迷つたのも、新唄の「紫」をどうかして家元の咽喉から出るやうに歌ひたいと夢中になつた結果、唄の節について誘はれて浮氣ものになつた事があると語つた彼女の一々話からであつた。彼が新興の明治時代のいかなる方面の社會にも興味を持つ事の出来ないのもつまりは其の外形にあまりに難雜に、趣味のあまりに陶冶されてゐない事が第一の原因であつた。この點からして彼は二十世紀的文明の激しい呪詛者であつて、國民の泥濘で踏みにじられた浮世の十八世紀と、水

野越前守の打撃を受けた江戸時代の夢想家である。立木と花と噴水と彫刻とを幾何學的に列させた路易ジ朝の庭園衛と、燭臺の光に照して緋毛氈の上にわざ／＼植物を居待して其の枝を捻曲けて見せる石州流の生花と、或はかの那婦人の纏足と西洋婦人のcorsetの如き、男子も猶粉黛を施した藤原時代と、額を刺つて頭髪を調へた徳川時代の如きは、彼が眞實文明の極致と信ずる處であつた。

いかに彼は江戸の浮世流に現れた懶き衣服の曲線と、le cancanismeの疲れたる人物の姿態とを愛したであらう。清朝の軟弱纖細なる香粉體の詩と、佛蘭西の幻覺的なsymphonieの詩とを愛したであらう。歴史を讀んでも時代の變遷英雄の霸業については、地震か火事のやうな偶然の出来事位にしに感動しなかつたけれど、例へば傾城の勝山とか、Molano le impudiqueとか、ふ、代の流行の誘起者に對しては必ず特別な崇拜の念を催すのであつた。

十八世紀末の英吉利から起つたらしい、Dandyismeについて屢々考へた事がある。その点である藍色の胴衣が詩人 Byron をして夜も眠れぬ程不眠ならしめた、ふふかの酒客、Benjamin の生涯を彼は、エナボレオン大帝の最

はもうかけてない。水をやらなかつた爲めに楓の盆栽が紅葉を待たずに枯れかゝつてゐる。煙草盆と古びた座蒲團を傍にして、大きな紫檀の机の上には徒に思想の苦悶を教へた書物と、空しく過去の夢を思出させる手紙の綴と日記の断片とが亂雑に置かれてある。彼はこの机を避けるやうにして、離れた床の間の柱に力なく背を寄せかけて坐つた。再び庭の方を眺めると夜の空に黒い枯木がその影を映かしてゐる。水蒸気包まれた淡い月の光が古池の水の面を氣味悪くひからして居る。蟲の聲が暗く見え

ない地面から聞える。

自分からも強ひて退けて、今では友達と云ふものも一人もない身の上をよく知つてゐながら、彼はふいと訪ねて来てくれる人でもあつたならばと思つた。例ひあつたにした處が夜になつてこんな遠い場所まで来るものゝあらう筈がない。屋敷は上野から根岸から入谷から、猶も遠い金である。近所には古寺が多い。田圃はずつと北豊島郡から荒川の淵まで續いてゐる。深く行く夜の沈黙は人の肩を押へるかと思はれるほどで、風に誘はれる落葉の軒を掠める細音がどうかすると喫驚するほど強く明かに聞き取れる事がある。夜の都會を出て北の方へ

走り去る凄じい最終列車の響も絶え果てゝしまふと、彼ははいよく静まり行く深い寂寥の中に、夜が深けりて從つて却つて底深く轟き出す遠い車の音を耳にした。收校の後の打捨てた儘な田圃を越して、埋立地の狭い往來をば夜遊びの人達が人力車を吉原の遊廓に走らせる響である。

毎夜彼はこの響を廢宅の柱にもたれて聴き捨てる事を愛した。この響は無限の空想を深げ渡る燈火の下に誘ひ出すからである。彼は遊廓をば美しい詩の世界だと感じてゐる。遊廓のみではない。世のあらゆる罪惡人間のあらゆる弱點も美しい詩であるとしか思ふ事が出来ない。詩の生命は惡であるか惡の生命は詩であるかと疑ふ事さへ度々であつた。貞操の妻と燕愛の親が眠つて居る時を窺つて、不正の戀に囚はれた若い人達が悔恨の涙に暮れながらも拒み難い力にひかれて暗黒の夜を走り彼處には人工の詩の間が造り出されてある特別の世界に徘徊ひ、扮飾と虚偽との間に瞬時の欺かれたる夢に酔ふ。詩でなくて何であらう。

彼は盜賊や公金の費消者などをも法律や道德が見るやうには見て居ない。忠兵衛を書いた近松、鼠小僧を書いた默阿彌のやうに天下の罪人

を物入れに父勇ましく美しく見てゐる。と云つて何も積極的に惡を鼓吹するのではない。唯だ惡徳が産んで呉れる悲哀を嘗ぶのだ。この點に於いてのみ彼は罪を罰し惡を憎む道德の存在に感謝してゐる。人生に厳格な道德がなかつたなら其の半面の惡徳、其れに對する同情悲歎、バラドックスの興味と云ふものは全然産れて來ないからで。彼が十年一日の如くに花柳界に出入する元氣があつたのも、つまり花柳界の不正暗黒の巷である事を熟知してゐたからで。されば若し世間が放蕩者を以て忠臣孝子の如く賞美するものであつたなら、彼は即ち它を人手に渡してまでも其の稱賛の聲を聞かうとはしなかつたであらう。正當なる長女の僞善的の榮心、公明なる社會の詐術的活動に對する義憤は、彼をして最初から不正暗黒として知られた他の一方に馳せ赴かした唯一の力であつた。つまり彼は眞白だと稱する壁の上に汚い様々な汚點を見るよりも、没れてられた醜態の片に美しい縫取りの残りを發見して喜ぶのだ。正義の公殿に往々にして鳥や鼠の糞が落ちて居ると同じく、惡徳の谷底には美しい人情の花と香しい涙の果實が却つて澤山に摘み集められる……。



らしい男連の中には熟つた赤い桜や野菊と楓を下げてゐるものもあつた。

彼は銀座の通りを一人でぶら／＼新橋の方へ歩いた。尾張町の人込の間に何心もなくイんでそして見るともなく其の邊に立つて居る女達の姿を眺めた。それ／＼の身分を示すそれぞれ違つた姿から、然し彼は一般の風俗流行の今年は去年、去年は一昨年と段々に變つてゐた事を今更心付いたやうに感じ、續や前髪は大きくつたかと思ふと又小くなり、緩くなつたかと思ふと又引詰まる。狩織の小紋は絨物となり、絨物は更に無地のいろ／＼に絶えず定まり、變つて來た。それを回想すると此の意味もなく跡形もない馬鹿々々しい外形の變化は、彼が身に取つては直に此れまでの生涯の色ある歴史を語るに等しい。實に十年、彼は櫛簪から下駄の鼻緒の變遷までをつぶさに知り盡した身でありながら、もう數へるの中に去つてしまふ今年の月日の名残にして、續いて來るべき年からの先を見て行く事が出來ないのかと思ふと、彼は近頃になつて著しく日につくあの柔い緑の色の翡翠の珠の古貝の細工と、わざと光澤を消したやうな染色の羽織や紋の縫取りをばちツと口を放さず日戔らねばならなかつた。

屋敷は既に裏渡しの手續きを済ましてあるので、今日にも明日にも身は新橋の停車場から都會を後にせねばならぬ場合になつて居るのである。父が死んだ時に其の遺産を三分して一を母親、他の一を弟が譲り受けた。弟は永く米國に遊學して果樹栽培と牧畜とを研究して歸つて來た一種の理想家である。其の母と共に伊の郷里なる遠州の野に大きな養蠶所を起して其處で平和な *The Time* の家庭を作つてゐる。二人はこれまで一度も物を争つた事はない。然し餘りに一致しない思想の相違から或時は互に敬遠主義を取つて音信不通になつてゐた事もあつた。然し弟の方は兄よりも先に親しく碎けて來て殊にこの二三年は嘗てトルストイ伯に私淑すると稱して都門の生活を罵つたやうな論文的の手續を全廢して、まるで違つた柔い穏な調子で、且つ子供らしく、兄さんも出來る事なら一日も早く東京に住居をよして一家昔の子供の時のやうに母の膝元に集つて正月のお雑煮を食べてくれるやうに書いて來るやうになつた。

行き處のない彼は、半屋から退放された *Genius* の主人公をば喜んで迎へたかの眞正のやうな弟の家の扉を叩くより外に仕方がな

い。弟と母とは自分を見て眞心から喜んでくれるに違ひない。弟の家には暖い火と明るい日光と、青々とした樹があるであらう。あゝ、然し其れが果して何であらう。彼は書で見る英吉利風の曇つた空の下に聲もなく靜に廣る牧場の景色と、熟つた葡萄の葉かげに *Monks* の群が *Truone* に戯れる日のあつた泉のさまを思ひくらべた。北方の野に移り榮えた教義と、南の海のほとりに其の名残を止めた教と何れが眞のものであらう。窓を閉して眠るべきか。

青草の梅に蝶の飛ぶを眺むべきか……

日はすつかり暮れ果てた。湧起る燈火の殊更に明い寶石屋と唐物屋と呉服屋の前には人が大勢佇んでゐると其の人込の中から日に立つ若い女を見ようが爲めに更に立止まる人もあるらしい。竝んだ柳の木蔭には深夜の露店がそれぞれ品物を並べ始める。廣告の樂隊と電車の響の騒がしい中に天獸羅屋と洋食屋の油の臭ひがぶん／＼立迷ふ。横町の薄暗い靜な通りからこの騒しい人通りを越して、更に向うの靜な薄暗い方へと鑓敷を越せた人力車がチン／＼と鈴を鳴しながら、時々五五臺もついで行く。それを通りすがりに見返ると、着物を扱衣紋に着こなした頸巾のみが街の灯影に眞白く浮

後よりも遙に悲壯に感じてゐる。英吉利の貴族プランメルと云ふ人は馬鹿に華美な色の着物を着て、片眼鏡をかけ、喫煙草をかきながら貴族の賓席や庭苑を横行して歩いた伊達者であるが、妙にひねくれた性癖を持つてゐて、殊更に、His Majesty からの invitation を拒絶して見たり、Prince of Wales を罵つて見たりするかと思ふと自分があるが爲めに、意氣地のない少年の貴族が失態に沈んでゐるのを覗ひ知つて、自分の苦痛を犠牲にしてまで其の愛してゐる女を意氣地のない貴族にやつて了つたりする。然し富貴の榮華も忽ち滅びて、彼は巴里の木賃宿に身をかくし管て陛下の招聘を拒絶した其の氣取つた語を繰返しながら貧と病の手に死んでしまつた。嘗ては大門を閉ぢさせたかの紀文人が晩年に至つては純金の茶碗に其の口の酒を請うて歩いたと同じやうな一種の奇骨と氣概をば彼は宗教に對する如き無限の權威を託して此れに信賴して居るのであつた。

其れ故、彼は今その身の破滅を日暮する場合になつても決して後悔しまひと云んでゐる。物質上の恐怖はあつたにしても思想上の疑問を起しはせぬ。花は何故に散るか夢は何故に覺めるかと云ふやうな詩的哀傷の情に打沈められ

るばかりである。

更によく心を溶して彼は再び遠い車の轟きに耳を付けた。波浪の起伏するやうに弱くなつたり強くなつたりして絶えず續いてゐる車の響は、その低く弱く沈んで行く折々突然起る庭の樹木の戦ぎに遮られる事がある。すると廣い魔宅の欄間の障子ががたり／＼と動く音を立てたが、然し彼は夜の庭に夜の風の吹き起つた爲めだと云ふ氣はしないで、靡なき月光の中に立ち竦む樹木の林れた枝々が自然にかゝる悲愁の叫びを放つ。其れに對して家の障子も同じやうに獨でがたり／＼と動くのであるやうに思つた。肉體の知らない寒さをば彼の心の底に感じたる。焼けたじれた紅葉の最後の一片をも吹き拂つてしまふ、冬と云ふものゝ姿をあり／＼目に見る如く感じた。一度で極凍された車の轟きがまた高まる。冬の寒さ暗き淋しさの中を行く夜遊びの人の車、あゝ、自然はいかに穩で、冷で、沈着き拂つて且つ公平なものであるか。それに反して「人情」はいかに暖く、驟しく、休みなきものであらう……

### 三

空の青い、日の光の強い、空氣の乾いた小春日

和の平日が、夕暮と共に突然變る空氣の冷却と濕氣とに、殊更濃くなる寒霧の中に暗くなつて行つた。西の方の空は今日に等しい明日の晴天を豫知させる烈しい夕照に染められゐる中、その反對の方角の空は已に黃昏の静しく寒げな光に滿されて蒼白く底深く透通るやうに輝つてゐる。早くも灯のついた一直線の大通りは寒霧の薄衣につゝまれて、一帶にぼつと紺鼠色に霞み渡つてゐた。屋根や建物の壁の角度に著しく色の濃淡が生じた。遠くの方は並木も、人も車も屋根も、一齊に影のやうに薄く見える。其の猶更遠い街のはづれは立續く兩側の建物の間が丁度深い谷の底でも仄々と同様、塵埃と相混ずる水蒸氣が煤煙のやうに黒く暗く立迷ひ、やつと其の奥に灯の光だけを數へさせるばかりである。道行く人は皆な急いで歩いて居ながら、電車の混雑や商店の戸口を飾る新しい灯の光や又は己れと同じ様に急いで歩く他人の達を珍しまうに見遣つて行く者が多い。辻々の電車の乗換場には人が大勢列をなして立つてゐた。日曜日が祭日であるらしい。電車を待つてゐる女は何れも外出の晴衣を着て居る。幼い子供は田舎の休が屋などでよく見る薄の穗で作つた木鬼を持つて居る。少しは酔つても居る

聞の身體に限りのない歡樂を味ひ盡す力にもつかれて、重くなつた臉をば又來べき明日までも閉ざなければならぬ時刻になつた。

「お宿までお送りしますわ。いゝでせう。」と小登美が云つた。

二人一しよに外へ出ると夜は靜に蒼く烟つて、風のない沈んだ空氣の冷かな濕りが心持よく感じられる。寢靜つた裏通りの街は板敷の根木と人家の屋根と橋の影なぞ、柳の間に立つ蒼い瓦斯燈の光に朦朧と霞み渡る蕭條な夜の畫面を作つてゐる。Kortune と云ふ題で近頃の巴里の詩人がよく歌ふ夜の情調も此れであらう。彼は程近い歌め伎座の手の旅館にこの儘歸つて仕舞ふのを如何にも残り惜しく思つた。もう少し溝渠の眠つた水のほとりに沿つて歩いて行きたい……

「お前の家はどこだ。あんまり好い景色だから今度は僕の方が送つて行つて上げよう。寒くはあるまい。」

「え。」と云つて小登美は總るやうに片手で男の腕につかまり、片手で取上げた襟をば帶留めの間にはきみ込んで、巻煙草をふかしながら歩いた。

時々其の邊の暗い横町から出て、また向うの

暗い灯火の達かない方へと行く車の上からは、座敷の歸りらしい藝妓が見えぬやうに二人の連立つて歩く姿を見て行くらしい思はれた。

「どうしたつて、いゝ仲としか見えないね。」

「結構、願つたり適つたりよ。ほゝゝゝほ。」

小登美の笑ふ聲がびつくりするほど透き通つて夜の中に響いた。派出所の赤い燈火の下に立つてゐる巡查は靴の中から猜疑の眼を光らした。指れちがひになつた二人連の男が非常に厭はしいものでも見たやうに惡罵の聲を放つて過ぎたばかりか、四五間行過ぎた向うから小石を取つて投げつけた。石は無論見當が外れて路傍の小犬を驚かしたに過ぎない。彼は先刻小登美が笑つたよりも更に大きく高くあはゝゝゝと笑つて、二重廻の袖の下に小登美の小さい身體を抱くやうに庇つて、

「馬鹿な奴等だなあ。」

#### 四

細い横町の何れも同じやうな格子戸づくりの家の戸口へ女を送り込んだ後再び銀座通へ引返して見ると亦いぢをつけた最後の電車が思ひの外大勢の乗客をのせて馳過ぎた。それなり、徒に明い大通には見渡すかぎり歩いて

行く人の影は全く絶え、一度閉めた商店の戸口を細目にあけて星の多い夜つゞをば遺蹟なげに眺めて居る手代らしき若い男の姿の見られゑる位のものであつた。牛肉屋の新しい大戸は軒先の電燈の下に猶更眞白く、西洋料理屋の二階の廊下には食卓の上に椅子を傾きに藏せたのが引掛けたカーテンの硝子越しに見える。道路の面は兩側の煉瓦道も同じやう。急に地ならしでもしたやうに、平かに靜に廣く見えて、雨のやうに飛ぶ並木の柳の葉が一枚々々、瓦斯や電燈の強い光の中に、時々黄金の片の翫へるやうに見えた。

深け渡る街頭の夜半の風に人知れずに飛んで行く、あゝこの柳の落葉。彼は其れと同じ様に、今は早やすつかり寢て仕舞つた綿曾の表面に唯一人じきて彷徨つてゐる人である。さう思ふと忽ち孤獨の寂しき、明日の恐怖、昨日の追回とが潮のやうに胸の中に湧返つて來る。瞬間前の出來事は凡て茫として夢の如くに遠く離れてしまつて、唯だ今別れたあの藝妓、今夜始めて見た小登美がまるで久しい間の戀人であつたやうな氣がした。無暗にもう一度、一度でいいから送つて見たい、何故自分泊つてゐる旅館まで無理にも連れて行かなかつたのであら



き立つて、兩角の計を許さぬ一刹那の印象として其の横顔が何とも云へぬ程に美しい。彼は同じ方向へとを向けた。丁度空腹を感じる折から、箸を、どこぞ嗜好に造つた川沿ひの二階で準へたいと思つたからである。水邊の小樓と云ふ言葉はさまざまな情景を描き出させる。夜の掃會の唯中をば濁りに濁つて聲もなく流れる溝渠の水に動きもせず映つてゐる石垣の上や橋の袂の二階の灯影。簾を卷いた其れ等の家の障子に映る人の影と漏れて聞える三味線や唄の聲をば、こなたの岸の瘦せ憐んだ柳のかげから、或は同じ二階の欄干から殊更嬌の多い肌寒い夜深に窺ひます哀傷の情と……もし又吉間であるならば、春鳥のしとくと降る生暖い午過満汐に漂ふ芥を啄まうとして熱の群が頻りに飛び交ふ水の面を空方なげに眺め暮す倦みはてた心持と……彼が丁度徳川三百年の泰平に渡れた不健全な軟弱な餘りにR.R.に過ぎた文藝を産出させた江戸の都會詩人と同じやうな心持で、今夜もまた築地の河岸通にある唯ある家の磨き込んだ細い格子戸をあけて這入つた。

今夜かぎりだ。もし今夜の最終列車に間に合ふものならば宿屋へ歸つて既に交度のしてある

華包を持つて用立しても差支はない。彼は昨日も一昨日もさう思へば思ふほど堪へられぬほど残り惜しい氣がして、始めは用立する便宜のためほんの一晩泊るつもりで旅館にも、もう今日で五日ほどになつて仕舞つたのである。

六疊ほどの小座敷に少し夜も深かけた時分、中庭を越した向うの二階で、小聲ながらも好い咽喉で端唄を唄つてゐる男があつた。女の強く三絃は爪びきらしい。何心なくどう云ふお客だときいて見ると、女中は聲を潜めて、世間誰もが知つてゐる若手のある俳優の名を示した後其の俳優が先頃何とか云ふ老華族に落籍された以前の戀人と、忍び會ひの果敢さを唄つてゐるのだと答へた。すると今夜始めて酒の相手に呼んだ二十歳許りの小登美と云ふ藝妓が何か昔の事でも思ひ出すらしく、ほんとに世の中はまゝにならないものねえと云つて、火針にかざす彼の白い手をばじれつたさうに握つた。彼は美しい女の話す戀物語と云へばそれがどんな平凡な事であつても、一ツとして懐しく忘れがたく感じないものはないので、握られた手、其の儘に握り返して、

「何か悲しい話をきかしてくれ。」  
小登美は始めの中暫くは何の彼のと話をそ

らして居たけれど、長の河岸通りを彼ら新内の流しが太い一の絃の響の間々へと、上調子の殊更細い三の絃を響かせながら通り過ぎてしまふ時分になると、もう剛へきれぬかして今度は此方から、お聞きなさいよ。何でも奢ります。と云つて自分の爲めに銀行をしぐじつて朝鮮へ行つたとか云ふ人の事を長々と話し出した。

逢へないのかと思ふとそれアしく逢ひたくなるものよ。どうせ何時か一度死ねもんなら死んでもいいから逢ひたいと思ふわねえ。だけれまゝにならないわ。お金で縛られてる身體なんですもの。

彼は人間欲望に限りがないにつけて、人間の生活が其れを満足させるには、何故かくも適しないやうに出来て居るものかと思はざるを得ない。三社祭を飾つたあの美しい力彌は病氣で死んだ。紫の唄をよく歌つてくれた柳橋の小唄が知らぬ人の妻になつた。熱情は唯徒に燃えて色もなく記憶の灰を残すばかり。人はやがて寂しく首を垂れて、まゝにならない浮世だと云ふ最後の言葉を繰返す爲めに、泣き、笑ひ、怒りまた狂ふに過ぎない。夜は已に深けた。夜廻りの拍子木が聞え出した。燈には油も枯れ、時來れば酒の酔も醒め盡き、限られた人

になる。それ故自分は今彼が差出す祝盃のいはれをば、無理にも彼に代つて話して見たいのである。

私は〇〇組といつて世間でも人の知つてゐる御用商人の家庭に生れたお坊ちゃんであつた。團子坂の菊人形だの奥山の見世物などは家へ入りの若い者や抱車夫などに連れられて行つたので學校へ行く前からよく知つてゐた。

兩親が遊山の件をして柳島や向島などの風流な茶屋に上つた時には役者の手拭を凝掛にして茶屋の女中や船宿の姐さんに御飯を食べさせて貰つた事もある。芝居見物の折にはぢつとしてゐない子供の事として、棧敷の母親から體よく遠けられて花簪の見事に並べられた運動場の廊下や暖簾と提灯のさがつた茶屋の二階で晩白さかりの半日を遊び暮した。そのみならず自宅に宴會のある時は大勢お酌に來る藝妓から坊ちゃんと呼ばれて膝の上に抱かれた事もあるし、お客様のまだ來ぬひまを鑑妓と遊んだ事句、枕割の番をこはして母親から叱られた事さへあつた。

さういふ境遇から、私は尋常中學の學生になつても芝居や演習、草双紙や小説などが好

きだといふよりは寧ろ其等のものは日常の必需品と同じやうに思はれてゐたので、其等の話をするのが當時の教育を受けた他の一般の學生の恐れ憚る罪惡とも汚辱とも思ふ事が出来なかつた。出来なればかりでなく、いつか知らなかつた校風に對して輕い反抗心を起すやうになつた。第一に教師の容貌風采の土臭い言葉の詛る事が私には一種の輕侮を感じしめる原因であつた。あんな土百姓に叱られたり物を教つたりするのは馬鹿々々しい、氣がきかないといふ鬱憤を絶えず起させた。それと共に當時學生の風習として寒中にも足袋をはかず短い着物に脛を露出し劍舞詩吟狂言歌をやる體勇は柔弱に育てられた自分の堪へ得るところでないので、表面だけでは反抗するが内心は恐れ引込んで運動會や遠足などには決して顔を出さなかつた。で私は全級の友達から自然と遠けられ身體つきの柔弱な事や顔色の生白い事からミッスだとかレデーだとか綽名をつけられ遂には私と口をきくのは學生として厭はしいものゝやうに思はれてしまつた。する中、毎年四月各級に新しい入學生の顔が見え初める學年の變更期に、私の級へ辯護士の息子の岩佐といふ少年がはいつて來た。丁度私と同じやうな柔弱な様子

から、私の爲めに先入の判斷に囚はれてゐる全級の生徒は深く交際もせぬ先から、彼をば激烈に排斥したので、その結果はやがて私と新入生の岩佐との間を此の上もなく親密にしてしまつたのであつた。

吾々は已に十六になつてゐた。級中には廿歳に近いもの、又最上級の生徒には已に廿を越したるものも交つてゐた。乃ち各教場で教科書を朗讀する生徒の聲が毎日二人と盛に聲がはりして行く時分である。既に聲がはりしてしまつた年長の生徒は新に聲がはりする者を捕へて運動場で胴上げをして唯すが例である。何故かといふと聲がはりして大人になつたものは年下の生徒に對して新に男色の權利を得る譯からであつた。

男色はその當時薩摩琵琶歌「賤の小山巻」にある平田三五郎が傳記にも歌はれたやうに海國男兒が慷慨悲憤の意氣を養ふに是非必要であるといふ事から盛に學生の間に行はれた。こゝに全級の生徒はいつとなく私と岩佐との交情をも男色に原因するものと見なして、「イーチアザー」だと嗤ひ始めた。「イーチアザー」とは二人の中の何れが年長者の權利を有するのでない。二人とも「義兄」でも「義弟」でもなく同等の

うかと思つたが直とまた、いや、幾度か返して見ても同じやうな、どうせ末は別れる切れると云ふが浮世の態であるならば、つまり今夜のやうに、ふいと逢つて、ふいと思設けず互に過去をしみつゝ語り合つて、そして又ふいと別れてしまふ。機會が見ず知らずの他人と他人とを不意と結び付けて不意と又引離してしまふ。これが一番情趣の深い夢であらう。然しそれにしても餘りにあつて無かつた。何か記念になるものでも遺り取りして置けばよかつたのに……と云ふ氣もした。

今方二人で歩いて來た横町を大坂町の方へ曲らうと思つて出雲橋の手前まで來た。深げ渡る溝渠の眺めはますます靜に静しく見えて、沈みきつた水の面には、寢靜る兩側の人家の屋根の倒影と共に、若し覗いたなら自分の姿さへ見られる様に思はれたので、彼は橋の上に立止つて欄干に身をよせかけた。右側の眺望は近く岸の石垣の上に立ちつゝく人家の列に限られてゐたが、左側には已に戸口をしめた待合らしい二階家つゞきを後にして往來が溝渠と共に長く延びて、その盡きた丁度眞正面に新橋の停車場が一日に望まれた。角に立つ高い旅館の灯とクラッ洗粉の大きな廣告が、塵船の夜泊りする水

の上に其の反映をばはしてゐる。最終の列車は既に去り又已に着した後と見えて階段の前から埋割の岸まで廣がる廣場には、平素込み合ふ人力車の影は一ツもない。其れ故、建物の内部に青く澄んで海の如く張り渡る硝火の色の中に、折々二人三人と多分驛夫か赤帽らしい人影が動いて見えるのが、大涯無限の旅情とも云ふべき一種の鋭い哀愁を引起させた。

彼は今迄何車と云ふものをこんなに遠くからこんなにしみつゝと、まるで畫のやうに靜かに見た事はなかつた。都會の出入口と自分なるものとを、こんなに明かに對峙させて見た事はなかつたのだ。あゝ、都會の出入口。その此方には燈火もある音楽もある。富貴、功名、罪惡もある。その彼方には林、山、寒い冬の空が限りなくひろがつて居るのだ。彼は地面の上をば限り知れず匍つてゐる鐵の線路と、其れをつたはつて走つて行く汽車と云ふものは實に恐いものだと思つた。縛られて悲しさうに鳴く家畜や、黙つてごろ／＼して居る荷物と同じやうに、汽車はいかに別れまいとする戀人をも、一瞬間の中に百里も二百里も引離してしまふではないか。彼は今日までに雨の降る夕、日の照る朝、

幾度かこの同じ停車場に送つたり迎へたりした人々の、或は祝すべく、或は痛むべき運命のさま／＼を思返した。そして明日朝か晩か、或はまた其の次の日か、自分ながらも知る事の出来ない——然し極く近い將來に、夜寒に冷えるあの石の階段をば、見送つてくれる人もなくして悄然として外つて行くべき自分の後姿を、彼は他人の姿のやうに心の中に描き出して見た。

(明治四十二年十一月稿)

## 祝盃

祝盃を挙げたい事があるから是非お出で下さいといふ意外な電話に促されて、自分は或日の夕方久しく訪ねなかつた舊學友の一人と新橋の料理屋で會合した。今日では互に、一家の主人となり、いくらか社會上の地位も出來て至極眞面目な顔をしてゐるが、わづか十年の昔、まだ二十歳の若い血の狂つてゐる頃には、自分達二人の交情は同じやうなその境遇から、兄弟よりも親しかつたので、今日當時の彼が事を話すのは直ちに自分の身の幸福な昔を語る事



いて頭が痛む。重苦しい神人から恰に着換へると身中が俄に軽くなつて、自分の手ながらも自分の肌をば摩擦して見たいやうな気がする。

私は書物を読む事も物をちへる事も出来ない。どうかすると原因もなく無心に心臓の鼓動が激しくなつて何か知れない一大事件が身に切迫してゐるやうな気がする。そして其の一大事件を済ましてしまへない中はいかに勉強したくも勉強する事は出来ないといふ事が、別に事實として證明されたわけでもないのに、證明されたよりも却て動しがたく意識されて來た。

私は心の中だけでは早やすつかり覺悟をきめてしまつたが然し前にも言つたやうに、私の身近に寢起してゐる召使の女にはどうしてても意中を打明ける手段や機會が今もつて見出されない。私は子供の時分に能く見知つてゐる藝妓や茶屋の女中の事を思出した。男を恐れず却て向から人を誘つてくれる花柳界の女に囚らなければ、私はとても此の問題の解決をつける事はできまいといふ事をば次第々々に了解しはじめた。今は唯自ら進んで其等の女に接近して見さへすればよいのである。

遂に最後の機會が到來した。それは學校の同級會から一同尋常中學を卒業した祝賀會を

かねて鐵倉へ一泊の徒歩旅行を催す廻狀の集書の來た時である。それは以前から同級生とは反目してゐる關係もあり先方でも無論私の參會を豫期してはゐまい。此方でも行つた處で面白くないと思つたので、往復集書の片ひらに直線斷りの文言を書送つたが、父母に對しては問はれもせぬのに朋友の義理を説き過分な旅費を請求して、公然外泊の許可を得る事となつた。

其の日の夕方兼て打合して置いた通り、親友の岩佐が自分を誘ひに來た。岩佐も今度この好機を逸しては他に外泊の口實を見出す事が出来まいと思つてゐたので、二人は早や夏らしい夕風の吹きそめる往來へと親の家をば逃るやうに飛出し四五町がほどは何にも云はず互の想さへ見ず非常に急いで、そして世間を憚るやうに町の溝際を歩いて行つた。その頃初めの家は市ヶ谷の濠外に在つたので足にまかせて來かゝつた處は九段の公園であつた。往來はまだ明い。公園の菜圃の蔭ばかりが早や夜らしく暗くなつてゐるのを見るや、私と岩佐とは同じ秘密を包む身のいづれが言出すともなく殊更に暗い木立の奥の腰掛を擇んで腰をおろした。

「君はいくら貰つた。」  
「拾圓。」

「さうか。僕の處に拾五圓ある。」  
「拾圓に拾五圓プラス二十五圓だね。大丈夫だらうな。二十五圓あれば。」

私は不安らしい調子を漏すと岩佐も同じく、大丈夫だらう。僕もたしかに大丈夫だと思ふがね。君は讀まなかつたのかい。一昨日の都新聞に又出てゐたぜ。今度は寶來樓ぢやなくつて安尾張つていふ樓だ。三圓の測定が拂へなくつて馬を曳いた奴があるつて。」

「うむ。三圓か。そんなら何な馬鹿な日に會つたつて二十五圓ありや大丈夫だ。」

二人はこの今年ほど互に都新聞の花柳便りを研究してゐたので、其れから得に特別知識を此處に再び繰返していろくと言ひ合つた。する中あたりは夜になる。菜圃の間から町の灯が見える。一人は腰掛から立ち上つた。全體私達二人は互にかうと覺悟をきめた後、

さらば待合に行かうか遊廓に走らうかと實は大に迷ひ込んだのであるが、第一の案内書なる都新聞其の他の研究から藝妓はどうも高僧であるらしく、又すぐに吾々の要求に應ずるものか否かの要點が無經驗のものには甚不明である。それに引換へて吉原の遊廓は丁度私の親類の墓が千住の法華寺にある處から度々の墓參りに

權利を以て交際してゐるとの意味である。私も岩佐も此の汚名に對して甚だ憤慨したが然し解すれば猶更烈しく嘲したてられるので、全くどうする事も出来ない。二人はますます孤立して内心男色慾に對して非常に反抗の念を強めるやうになった。その結果その腹いせに同じ色情的汚名を蒙るならいつそ大膽不敵に女に敢てしよう。學生が道德上恐れ戦く禁制を犯して見るのが一番痛快であると思つた。吾々は實際その頃から嘗て覺えた事のないさまざまな激情の發動を感じ始めたのだ。昨年から今年へかけて身の丈が一度に二三寸も伸びてしまつた。顔に飽が出来はじめた。五分間でも身體を静止させてゐると坐つてゐても立つてゐても、筋肉を通じて一種の苦惱を覺え、無暗に蹴起して腕の力一ぱいに美少年でも大でも猫でも木の幹でも何でもよい。自分以外の何物かを抱きかゝへて見たくて堪らない。遂には自分で自分の身體を抱へて見た事も度々であつた。凡て角度を有する直線よりも圓味を持つた曲線的の物體が驚く程目につき出した。今までは無頓着であつたが自分の身體から出る汗や唾液などにも一種の匂のある事を感じ得るやうになり、家に召使はれてゐる下女が、自分と同じ

屋根の下に裸幾重を隔てゝ生活してゐる事實をば切ないほど明瞭に意識し出した。然し私は自由な野生の動物ではない。それ故人間傳來の習慣や教育の感化に妨げられて容易に肉情の如隸にはなり得なかつた。私には一體男がどういふ順序方法で女に云寄るべきものか、實地にさし當つて見ると、どうしても解釋が出来なかつた。私は絶えず下女に接近して機會を覗つてゐたけれども、つまり何とも手の出しやうが分らなかつたのである。その頃から夜と燈火とが無邪氣な子供の時とはちがつて私の身に不思議な作用をなすやうになつた。私は日が明んで晩飯の後机の上にランプの光の美しく輝くのを見ると、もうぢつとして家の内に坐つてはゐられず、風が吹かうが雨が降らうが、雨なぞ降れば猶更に何處へ行かうといふあてもなく家を出てぶら／＼人通の多い往來を歩き、やがて寄席通ひを覺えた。夜店の人込みに交つて古本屋の前に佇んだ結果に幾度となく躊躇逡巡した後、次第に大膽破廉恥になつてさまざま小説繪畫又は醫學類の書籍を手に入れ、苦惱の一時的慰安にしたのみならず又冷靜に他日實驗の参考に供しようと熱心に熟讀した。

これとは別の話であるが、私が父は教師の目をしてゐるで喫煙しはじめたのも矢張その頃の事である。私は生れて初めて巻煙草の一本を喫し終つた時には忽ち烈しい眩暈を感じて倒れかゝつたけれど、然し馴れてはよいいたと云ふ強烈な希望にすがつて、決して勇氣を沮喪させなかつた。親友の岩佐は竊に父が吸煙の徳利を盗んで初めて酒を味つて見たが唯苦味ばかりで一向世間の人のいふ如く解美する程のものでないと思つたのも、同じく此の時分のことである。吾々はつまり如何すれば一日も早く世の惡習に染り得られるかと急り立つてゐたのである。かう云ふ煩悶と準備の時間は随分長く一年あまりも續いた。然し最後の決心と實行との機會は尋常中學を卒業する晩を待つて初めて吾々の身の上に起つて來たのである。

二

櫻の花が散り盡して庭中は萎茂する若葉に一日と小暗くなつて行く。恐しい毛蟲が枝々に湧出して這ひまはる。雑草が盛に生長する。筍や葎が雨の降る度び濡つた地面から頭を出す。ベストの袍が流行する。生温い風が吹

な聲で私を呼んだが、然し私も唯驚愕するばかりで、實際どうする事も出来ない。

「ちよいとお上んなさいよ。お座敷がいて居るんだから。」

他の女が岩佐を捕へた女と一緒にたつて煙草を吸付けて出す。入口の臺の上に坐つてゐる男が、「先生、決して御散財は掛けません、お約定でお二人さん、一圓五十錢、へい、決して御散財はかけません。」と云つてゐるのが僅に私の耳にはいつた。

### 三

私達はどう決心して此の樓へ上つたものか今になっては殆ど説明する事が出来ない。何れでも格子先で捕へられて女から登樓をすゝめられてゐる處を、ぞろ／＼歩いてゐる人達に顔を見られるのが恥しくて堪らぬので、否應なしに上つたのであるらしい。私は足が頓へて廣い入口の上草履をはかうとしても穿けなかつた事を覚えてゐる。そんな間にも然し又東京育の私達には妙な負けぬ魂があつて、初めて遊びに来たと思はれるのが何よりもいま／＼しく、其れと共に初心と見られては無法な暴利を食はれる處があると知つてゐたので、私は一生懸

命に氣を落ちつかせ、折もあらば何とか此の社會の通語の一つも振り廻してやらうとさへ心掛けた。

そのせゐか、私は表梯子を上つて、お客さまアと凄じく叫ぶ聲の中にいざや引付部屋の座蒲團に坐るとなると、案外にも虚心然たるやうになつた。それに付いても、此の場合私が心底から感謝せねばならぬのは新聞の三面記事、寄席の落語は無論の事、春水が梅屋紅葉が御羅枕、柳浪が今戸心中等の著作と共に、私が日頃行馴れた理髮店の若い者の實驗談である。其等から得た知識によつて私は番頭や遣手に對する應答も皆一々に思當る事ばかり。代り臺の請求をも一通りは手敵しく拒絶する勇氣があつた。然し書物は要するに書物である。公式は到底公式に過ぎない。それ故にはいろ／＼豫想以外の事件に驚された中にも其の最も甚しかつた一例は、格子先で岩佐の袖を捕へた女が座敷へ來ると、いきなり私の顔を見て濟生學舎の齋藤さんに能く似てゐるから頼母しといふつて笑出す。つゝいて、白足袋をはいた禿頭の

番頭がいやに腰を低くしながら座敷の片隅にちよこんと坐つて、「御遊興中甚恐入ります一寸御宿所御姓名を。」と膝の上に帳面をひろ

げ出した事である。

私も岩佐も共に覺えず顔を見合はして途方に暮れてしまつた。すると幸女の一人が、

「きつと本郷だよ、此の人は、ええ、齋藤さん。お前さん東陽館ぢやないの。」と冗談を云つてくれたので、私は漸く出鱈目をいふだけの血路を見出した。

兎に角に其の夜はあけた。私達は一晚中わかれわかれになつて、互にどうしてしまつたらうと心配してゐたので、朝早く一緒に揃つて遊脚を出た時には言葉にいへぬ嬉しさ懷しさを覺えた。然し又互の身を省みては何とも云へぬ氣恥しさに口もきかず顔さへも正面には見ぬやうにして足の行くまま淺草の公園まで歩いた。二人とも早く家へ歸つて疲を休めたいと思ふのであつたが鎌倉へ一泊旅行といふ口實に對して、さう早く歸定するわけにも行かない。止むを得ず疲れた足で午前は向島を歩き午後は公園の見世物を見廻つて漸くの事、灯のつく頃に別れて家へ歸つた。

私は両親に顔を見られるのが辛さに晩飯も食はず、満足のかれを云譯にすぐさま寐床をとつて人のゐない處で一人つぶさに昨夜の事を回想した。第一に私はよくあんな不知案内の



日本堤を通る時外からない／＼様子を見て置いたので、かくは冒險の第一歩が自然と此の方面に向けられた次第であつた。

私達二人は公園の木下闇を去るに臨んで家の手前止むを得ず穿いて出た小倉の格をぬぎすて風呂敷に包んで片手に抱へた。そして三番町通を真直に九段の坂上まで來ると丁度暮れそめた市中の燈火が一而見渡すかぎり眼の下に輝いてゐる。突然私は此の急な長い坂一ツ降りさへすれば、あの美しい燈火の海のはづれに白粉を塗つた幾多の女が赤い袴袴に立膝して吾々の來るのを待つてゐるのかと思ふと一種名狀すべからざる感情に打たれて慄えず立止つて遠くを眺めた。

坂を下り神保町通の牛肉屋で晩飯をすまし再び往來へ出ると曲角のたまりに客待してゐる向來卷の車夫共が「旦那、口あけです。廊までお安く参りませう。」と云つた。我等二人は人の祕密を見抜く車夫の炯眼に顫へるほど驚き物をも云はず三四町ばかり駆けるやうに歩きつゝけた。然し小川町通へ出ると賑な晩春の夜の人通の中をば日まぐるしく空車を曳き歩いてゐる車夫が散步の書生ときへ見れば其の後からいづれも一旦那廊まで。と勸めてゐるのに氣

がつき私達はやつと安堵したばかりか、勸誘に應じてまづ此れも都新聞の研究で知つた膽腕組の車夫が否かを幼能な質問で確めた後、賃金をきめて二人乗りの合箱に乗つた。車夫が黄い掛簾で往來の人を叱咤しながら、淡路町から眼御橋、御成街道から廣小路へと一散に馳行く繁華な夜の町々をば、私達二人は田舎ものゝやうに物珍しく打眺めた。上野の山下へ出るとあたりの暗さに突然何ともつかぬ恐怖を覺える。其時車夫は走つてゐる歩みを不意に止めて、「旦那、つけませう、お馴染はどちらです。」と言つた。私達には最初その意味が分らなかつたが、やがて分ると共に私達は更に當惑してしまつた。車は軒の低い人家についた場末の町を過ぎ間もなく衣紋坂から仲の町へと駆け下りた。私達は賃錢の外に過分の酒手を渡して車を下りた。

引手茶屋の並んだ仲の町通は薄暗く見えたので、吾々最初の遊客には却て氣味わるく思はれたが、娼樓軒を連ねた左右の大通は恠りする程明く、その明い灯の中から女の着物が眩しいばかり眼を射た。通りすがの人々を呼び込まうとする黄い女の聲が耳を劈く。私達は已に細見記と稱する小冊子で廊内の地理は

すつかり研究して置いたのであるが、今は早や方角も分らず胸の動悸が無暗に高まり顔が火のやうにほてるばかり。折々息をつく爲めに仰向いて見ると兩側の高い屋根の間から、大空の星が下界とは如何にも關係のないやうに遠く小さく輝いてゐた。私達はいつか最初の目的も計畫も忘れ、唯々遊廓の外へ逃れ出たいと云ふ急激な感情に追はれて、其の出口を見付けようとして夢中になつて足に歩き出した。道を行くがまゝに忽ち狭い横町へ出た——こゝを河岸通と稱へてゐるのを知つたのは餘程後の事である。

立並ぶ娼樓が左右から驛道のやうに蔽冠つてゐる。兩側の格子から叫ぶ女の聲と、ぞろぞろ歩いてゐる遊客の雜沓とが、狭い横町は行止りになつてゐるやうに思はれた。私達は廊外へ逃れ出るには元の廣い通りへ戻つた方がよいと思ひながら後から押して來る人込に知らず知らず歩いて行くところ、もう後前いづれへ行つても横町の盡る處には容易に出られないやうな氣がして自然とろ／＼後方を見返りながら立止つた。その時格子から長煙管を突出した一人の女が巧に岩佐の袖を引捕へた。「おい、君、おい、君。」と岩佐は泣き出しさう

に羨しく思つた。戀愛そのものを羨んだよりは戀愛が與へる特權を羨望したので。戀愛といふものは金銭其の他の煩ひなく男をしてあんな美しい女の所有者たらしめたのかと思つた時私は初めて愛の眞價値を知つたやうな氣がした。私は是非何かを所有せねばならないと昨日にも増してますます急り立つた。

私はいつも岩佐と一緒に連立つてかの西洋料理屋に行つてゐたので、岩佐がどうして最初娘お富の心を捉へたか其の成行きはよく目撃して知つてゐる。岩佐自身にも全く意外の賜物であつたので、私も其の通り偶然の機會を待つより仕方がない。機會を待つ。こんな不確な氣の長い話はない。私は遂に無法にも或々方私の部屋にランプを持つて來る信使を呼び留めた。僅三四回遊廊へ行つたばかりに私は以前どうしても取てし得なかつた事をば今け無造作に爲しとげる勇氣が出た。經驗は大なる知識である。

#### 四

私は熱病から全快したやうなすが／＼しい心持になつてその後は夜も滅多に寄席などへは行かず、一生懸命に勉強したが、然しこゝ

に一つ絶えず私の心を苦しめる事があつた。それは小間使と私との關係が人に知れはせまいかと云ふ事である。若しや姫姫でもされた時にはと思ふと私は覺えずソツと身顫ひした。世の辛酸を嘗めた事のない其の頃の私にはまだ深く人の眞情を解する能力がなかつたので、私に身をまかした處女が、どれほど精神的に私を思つてゐてくれたのか、そんな事は少しも頓着しなかつた。私は女の容貌とても其の美點とすべき優しい目付よりも寧ろ口の大きい缺點の方をよく知つてゐた位で、萬一祕密が現れて手切金を取られるとか或は止むを得ざる事情が私に結婚でも強ふるやうな事になつたらどうしよう。私はかゝる恐怖に襲はれてゐるよりも却て禁欲の苦痛を忍ぶ方が容易であると思ふ事さへ度々であつたが、淫卑な新聞の記事を讀んだり通學の途に苦い女を見たりすると、疑

惑と恐怖はそのまゝ忘れずにゐながらどうしても決然と反省する事が出来なかつた。私は民法や刑法講義の筆記を清書する時など折々妙な事を考へた。個人の罪惡は犯す以前若し十分に隠蔽の準備をして掛つたなら理論上どうしても發覺せられるものではない。裁判所判決の如何なる實例に徴して見ても罪の發覺は探

偵者の機軸を證するよりも必ず何處かに犯罪者の用意の周到ならざる事を示してゐる。私はつまり學生の間だけ一個の女性をば何等の後難なく弄んでゐたいといふ誠に自分勝手な性しからぬ淺ましい考をやいてゐたのである。道德上許されないとしても、實行としては決して不可能ではないやうに思ひ始めたのである。

全く不可能の事ではなかつた。半年ほどたつた時小間使はその實父が大病とやら云ふ事で暇を取りに迎ひに來た母親につれられて八王子佐の家へ歸つてしまつた。まづ何事もなく済んでしまつたのかと思ふと、私は云ふべからざる安心と共に其れに伴ふ疲勞につれて、悪い事をした、かはいさうな事をした。折があつたら罪を謝したいやうな氣もすれば又災難がいよくないとなつて見ると、今度は自ら進み出て、かの娘の生涯を保護してやりたいやうな心持もしたのである。私は恐く此の瞬間ほど清い心で彼の娘の容貌から其の他凡の事を優しく悲しく思つた事はあるまい。入れ代りに新しく奉公にきた小間使は東京の町の者で以前のよりはすつと様子がよかつたに關らず私は別に手を出さうともせず、いつも妙に氣が沈んでしまつて學校の事も女の事も世の中の事もつまらなく悲

處へ出掛けられたものだと思ふ。驚き呆れるにつけて私はかゝる無類の冒険を敢てせしめた其の原動力について、更に烈しい驚きと不思議を感じたが、それに反して生れて初めて経験した事の印象其物が、今になつては却て薄弱不明である事を怪しんだ。従つて私はあんな事があれ程までに私の精神肉體兩方を苦惱せしめたのかと思ふと、何に限らず現實の豫想に何はなかつた時経験する落膽氣拔けを覺えた。何しろ一日歩き暮した疲労でその夜はそれなり熟睡してしまつたが、翌朝はどうしたものか非常に早く眼がさめる。室内の様子が昨日の朝日を覺して見た座敷の部屋とは全く違つてゐる——女着の引掛つた小屏風や長火鉢のなゝの相違の點から、私はかへすゝも其の夜の冒険を動じがたい事實として明瞭に意識した。同時に冒険後の私は最早や其の以前の私ではな

い。その間に進歩とか變化とか、何とか名づべき差別が出来たやうな心持がして、私はやがて寢床から起出ると昨日まではあれ程私を苦惱させた小間使の姿をも今では大方落ちついて眺め遣る事が出来た。私は凡て経験者なる得意を感じないわけに行かなかつた。すると今度は次第々々に斯る経験を與へてくれた對手に對し

て感謝といふやうな一種の柔い感情を覺え、もう一度折を得て其の人に近いて見たいやうな心持になる。そこで私は自然とかつ禮樂の容貌態度を回想したが、どうしても自分ら望むやうにはつきり其の姿を描き出す事が出来ない。白粉を眞白に塗つて、おそろしく大きな髻を結び赤いビカビカした着物をする——引掛つてゐた……といふだけである。つまり一昨夜自分が初めて見て驚いた格子の中、明い燈火の光の中に動いてゐる、數多の女の其の一人であると云ふのに止つて特別の個性的印象が極めて薄いのであつた。その辭女の一舉一動些細な言語までが思ひ返す



支那料理屋になつてゐる。近所で聞き合せるとお富の家はつまり商賣が思はしくなかつたので芝邊へ引越したとばかり、愛しい事は更に分らなかつた。私は驚きもする喜びもする。直様岩佐に向つて厄難に去つたから安心して歸京しろといふ手紙を發送した。

## 五

それなり私達は娘お富の消息を知らなかつた。やがて定期の年限に學校を卒業して岩佐は銀行に會社に雇はれ土曜日日曜日と云へば必ず二人連立つて東京中の遊廓から待合料理屋をば散々遊び廻つた。時にはいまいしい病氣にかゝつた事もあるが其様秘密は誰も知るものもなく私達は二人とも其の會社の先から信用されて地位も年々昇進した。やがて結婚をして私達は子供を持つた。私達は初めて遊んだかの吉原の小格子の名も小間使の名も西洋料理屋の名もいつか忘れ果てゝこゝに早くも十年。岩佐は職務上の所用を帯びて一日前靜阿へ行つたさうである。其の折停車場前に小綺麗な休屋を出してゐる女房の様子が何處となく見慣があるやうなもので、それとなく聞いて見ると、間違なく昔の西洋料理屋の娘お富であつ

たと云ふ事である。岩佐は其日まで思出せば流石に心疚しい私生兒の事を聞いて見ると四ヶ月目に流産してしまつた。其の時分からお富の家は生計がいよゝ立たなくなつたので、お富は静岡の藝妓になり間もなく落籍されて今では子供もあり太公人の三四人も使つてゐる有福な休茶屋の内儀になつてゐるとの事であつた。

「祝盃を舉げざるを得ないぢやないか。たつた今新橋へ着いたばかりだ。まだ家へも歸らんのだ。何しろ一刻も早く君に逢つて話がしたいと思つて電話をかけたのだ。我輩のむかしの罪惡もとうとう消滅してしまつた。僕がお富を弄だんといふ事がお富の身の上には少しの不幸にも幸福になつてゐない。世の中は不思議なもので、あの時さうと知つてゐたら僕は今日までこんなに良心に咎めて苦しみはしなかつたのだ。」

岩佐は云ひ畢つて杯を私にさした。私は一口飲んで、「宗教家や教育家が學生を囑すのと實際の世の中とは可笑しいほど違つてゐる。バイブルなんぞ見ると虚言一つ吐いてもすぐ地獄へ落ちさうな氣がするが、僕等見たやうに散散悪い事をし盡してもお互の身の上に少しも應

報がないやうでは聖書や論語に對しても何だか氣の毒のやうな心持がする。實に不思議だ。君のところの子供は皆な健康かね。僕なぞはとも子供なんか出来まいと思つてゐたが、もう二人になつた。醫者に見せた處が少しも悪い遺傳病なんぞはないさうだよ。はゝゝは。僕も祝盃を上げなくちやならん。はゝゝは。」

(明治四十二年四月)

## 暖かき火のほとり

ボアル・ヴェルエレン

暖かき火のほとり、燈火のせまきかけ、片眩つて頭支ふる夢心地、愛する人と隣子を合すその眼とその眼、語らふ茶の時、閉せる書物、日の暮れ感ずるやさしき思ひ。くらきかけ、静けき夜をまつ時のいふにいはれぬ心のつかれ、あゝわが夢心地、幾月のまぢこがれ。幾週日の遺瀾無き、猶ひたすらに其等を追ふ。

(「珊瑚集」より)

しく思はれた。

三ヶ月程して八王子の娘から一通の手紙が届いた。お屋敷にゐた時分の事け夢のやうな氣がする。ふつゝかな田舎の娘の身には若様のお情が一生忘れられぬ。いかな憂苦勞をしても最一度東京へ出て一目なりとお目にかゝりたいと云ふやうな事がこま／＼と書いてあつた。私は再び空恐しくなり寸時も早く何處にか妾をかくさねばなるまいかと思つた。無論返事など出しはせぬ。若しつまたぬ後日の證據になつては大變だと思つて其の儘強ひて心を冷靜にしてゐた。するとまた二三月月過ぎて、今度は娘の母親から私の家へ當てゝ一通の端書が到着した。長年お世話に相成候、娘事同じ在のさる處へ日出度嫁入したとの禮手紙である。あゝ私にして若し幾分の宗教心があつたなら地に跪きて天を仰いで感謝の涙に咽んだであらう。一人の處女を弄んだ大罪惡が私の身の上に何等の懲罰も應報もなく過去つてしまつたのかと思ふと私はいっそ不思議な氣がした。同時に又この分で行けば締めたものだと漸く大膽不敵になつて、私は新に來た第二の小間使に目をつけ始めた。

丁度學年試験の成績が分つて以後三ヶ月は暑

中休暇にならうと云ふ其の晩の事、夕立の過ぎた後の黄昏は一しほ涼しく蒼い夕闇の光の中に垣根の夕顔が眞白く咲いてゐる。晚飯をすまして一人縁側に腰をかけてゐると隣と地境の高い柵の植込から涼しい風が木の葉を揺りながら流れて来て心地よく單衣の裾をまくり上げた兩足兩脛の皮膚を撫でる。垣根の外には女の聲と共に行水をつかふ音が聞える。蟲の音がそれにも驚かず早や秋の夜らしく鳴いてゐた。私は其の日の午前試験の成績を見にと學校へ行つた時生徒控所の壁に牛乳配達をしてゐた同級の學生が苦學と勞働過度の結果病氣になつて死んだについて校友會の有志者が葬式の寄附金を募集する旨の揭示を読み世の中には悲慘な事があるものだとか心から氣の毒に思つたが、今ではもう其様事は跡方もなく忘れてしまつた。私はどれだけ私の身の上が幸福であるのかそんな事をも氣に留めなかつた。私は唯二三日中に兩親初め一家中が避暑に出掛けた後になれば心のままに小間使に近付く事が出来ようと、怪しからぬ事ばかり考へてゐた。折から突然が狐へた風で訪ねて來たのは例の親友々佐である。

「君、どうしたんだ、今日は學校へも來なかつたぢやないか。」

「實によつた事が出来た。どうしたらいいだらう。」

岩佐の様子が如何にも恐かならぬので私も調子をせかして質問すると、

「あの西洋料理の一件さ。レコになつたのだ。」

と岩佐は手眞似をして俯向いた。

「さうか。それア大變だ。」

「三月だとき。と岩佐は俯向いた顔を上げる勇氣さへない。

「仕方がない。仕方がないから逃げるさ。丁度夏休みだから何處でもいゝ鯛の道をきめてしまふのだ。さうすればよし先方の親が君の家へ何とか云つて來ても當人の君さへゐなければどうする事も出来なからうぢやないか。」

「さうだ。それより外に方法はないかね。ちや僕は房州へ行かう。」

岩佐は後の事を私に頼んでその翌日房州へ旅行した。この一件から私も何となく空恐しくなつて折角手を出しかけた小間使にも當分見向きさへせず、兩親と共に大磯の別荘へ行き秋九月の半學校の始まる三日前に東京へ歸つて來た。早速其の後の様子をさぐらうと或日私は裏神保町の西洋料理屋へ出掛けた。すると不思議や其の家はたつた夏三月の中に代が變つて汚しい

鷗の羽の色が際立って白く見える。宗匠は此の景色を見ると時候はちがふけれど酒なくて何の己れが櫻かなと急に一杯傾けたくなつたのである。

休茶屋の女房が縁の厚い底の上つたコップについて出す冷酒を、蘿月はぐいといと飲干して其のまゝ竹屋の渡船に乗つた。丁度河の中程へ来た頃から舟のゆれるにつれて冷酒がおひひきにきて来る。葉櫻の上に輝きそめた夕月の光がいかに涼しい。滑な満潮の水は「お前ど行くと流行唄にもあるやうにいかにも投遣つた風に心持よく流れてゐる。宗匠は目をつぶつて獨で鼻唄をうたつた。

向河岸へつくと急に思出して近所の菓子屋を探して土産を買ひ今戸橋を渡つて眞直な道をば自分ばかりは足許のたしかなつもりで、實は大分ふら／＼しながら歩いて行つた。

そこ此處に二三軒今戸茶を賣る店にわづかな特徴を見るばかり、何處の場にもよくあるやうな低い人家つゞきの横町である。人家の軒下や露地口には話しながら涼んでゐる人の浴衣が薄暗い軒燈の光に降立つて白く見えながら、あたりは一體にひっそりして何處かで大の吠える聲と赤兒のなく聲が聞える。天の川の浴渡つた

空に繁つた大立を聳かしてゐる今戸八幡の前まで来る。蘿月は間もなく並んだ軒燈の間に常磐津文字豊と朗亭流で書いた妹の家の灯を認めた。家の前の往來には人が二三人も立止つて内なる移古の淨瑠璃を聞いてゐた。

折々恐しい音して鼠の走る天井からホヤの曇つた六分心のランプがところ／＼寶丹の廣告や都新聞新年附録の美人畫などで破れ目をかくした襷を初め、節色に古びた簞笥、雨漏のあとのある古びた簞など、八疊の座敷一帯をいかに薄暗く照してゐる。古ぼけた葺戸を立てた縁側の外には小庭があるのやら無いのやら分らぬほどな闇の中に軒の風鈴が淋しく鳴り蟲が靜に鳴いてゐる。師匠のお豐は幾日もの柿木鉢を井べ、不動尊の掛物をかけた床の間を後にしてべつたり坐つた膝の上に三味線をかゝへ、櫛の櫛で時々前髪のおたりをかきながら、掛聲をかけては弾くと、稽古本を廣げた桐の小机を中にして此方には三十前後の商人らしい男が中音で、「そりや何を云けしやんす、今さら兄よ、妹と云ふに云はれぬ戀中は……」と「小稻半兵衛」の道行を語る。

蘿月は移古のすむまで縁近くに坐つて、扇子

をばちくりさせながら、まだ冷酒のすつかり醒めきらぬ處から、時々我知らず口の中で移古の男と一しよに唄つたが、時々は目をつぶつて遠慮なく暖をした後、身體を輕く左右にゆすりながらお豐の顔をば何の氣もなく眺めた。お豐はもう四十以上であらう。薄暗い釣ランプの光が痩せこけた小作りの身體をば尙更に老けて見せるので、ふいと此れが昔は立派な質屋の可愛らしい箱入娘だつたのかと思ふと、蘿月は悲しいとか淋しいとか然う云ふ現實の感慨を通過して、唯だ／＼不思議な氣がしてならない。其の頃は自分も矢張若くて美しくて、女にすかれて、遊樂して、とう／＼實家を七生まで勘當されてしまつたが、今になつては其の頃の事はどうしても事實ではなくて夢としか思はれない。筑紫で乃公の頭をなぐつた親にしろ、泣いて意見をした白鼠の番頭にしろ、所詮を分けて貰つたお豐の女主にしろ、さう云ふ人達は怒つたり笑つたり泣いたり喜んでたりして、汗をたらしして向きずによく働いてゐたものだ、一人一人皆死んでしまつた今日となつて見れば、あの人はこの世の中に生れて來ても來なくてもつまる處は同じやうなものだつた。まだしも自分とお豐の生きてゐる間、あの人達は兩人の



# す み だ 川

俳諧師松風庵蘿月は今月で常磐津の師匠を  
 してゐる實の妹をば今年に孟蘭盆にもたづねず  
 にしまつたので毎日その事のみ氣にしてゐる。  
 然し日盛りの暮さにはさすがに家を出かけて夕  
 方になるのを待つ。夕方になると竹垣に朝顔の  
 からんだ藤の口で生水をつかつた後其のまゝ眞  
 裸體で啤酒を傾けやつとの事膝を離れると、  
 夏の黄昏も家々で焚く船遣の烟と共にいつか夜  
 となり、盆裁を並べた窓の外に往來には簾越し  
 に下駄の音職人の鼻唄人の話聲がにぎやかに  
 聞え出す。蘿月は女房のお流に注意されてす  
 ぐにも今月へ行くつもりで格子戸を出るのであ  
 るが、其邊の涼臺から聲をかけられるがまゝ腰  
 を下すと、一か機嫌の話好に、毎聞きまつて埒  
 もなく話し込んでしまふのであつた。

朝夕がいくらか涼しく樂になつたかと思ふと  
 共に大變目が短くなつて來た。朝顔の花が日毎  
 に小さくなり、西日が燃える焔のやうに狭い家  
 中へ差込んで來る時分になると鳴きしきる蟬の  
 聲が一際耳立つて急しく聞える。八月もいつか  
 半過ぎてしまつたのである。家の後の玉葱黍の  
 畠に吹き渡る風の響が夜なぞは折々雨かと誤  
 られた。蘿月は若い時分したい放題身を持崩し  
 た道樂の名残とて時候の變目といへば今だに骨  
 の節々が痛むので、いつも人より先に秋の立つ  
 のを知るのである。秋になつたと思ふと唯わけ  
 もなく氣がせはくしなる。

蘿月は饑に狼へ出し、八日頃の夕月がまだ  
 眞白く夕焼の空にかゝつてゐる頃から小梅五町  
 の住居を後にテク／＼今月をさして歩いて行つ  
 た。

堀割つたひに舟通から直ぐさま左へまが  
 ると、土地のものでなければ行先の分らないほ  
 ど迂回した小徑が三圍花荷の横手を遡つて土手  
 へと通じてゐる。小徑に沿つては田圃を埋立て  
 た空地に、新しい貸長屋がまだ客家のまゝに立  
 竝んだ處もある。廣々した構への外には大きな  
 庭石を据竝べた植木屋もあれば、いかにも田舎  
 っぽい茅葺の人家のまばらに立ちつゝいてゐる  
 處もある。それ等の家の竹垣の間からは夕月  
 に行水をつかつてゐる女の姿の見える事もあ  
 つた。蘿月宗匠はいくら年をとつても昔の氣質  
 は變らないので見て見ぬやうに竊と立止るが、  
 大概はぞつとしない女房ばかりなので、落膽し  
 たやうに其のまゝ井調を早める。そして賣地や  
 貸家の札を見て過る度々、何ともつかず其の胸  
 算用をしながら自分も懐手で大儲がして見た  
 いと思ふ。然しまた田圃づたひに歩いて行く中  
 水田のところ／＼に蓮の花が見事に咲き亂れた  
 さまを眺め青々とした稻の葉に夕風のそよ響を  
 きけば、さすがは宗匠だけに、錢勘定の事よ  
 りも記憶に散在してゐる古人の句をば實に巧い  
 ものだと思返すのであつた。

土手へ上つた時には葉櫻のかげは早や小暗く  
 水を隔てた人家には灯が見えた。吹きはらふ河  
 風に櫻の病葉がはら／＼散る。蘿月は休まず  
 歩きつゞけた曇きにほつと息をつき、ひろげた  
 胸をは扇子であふいだが、まだ店をしまけずに  
 ゐる休茶屋を見付けて慌忙で立寄り、一おか  
 みさん、冷で一杯。」と腰を下した。正面に待乳  
 山を渡す隅田川には夕風を孕んだ帆かけ船が  
 頻に動いて行く。水の面の黄昏れるにつれて

か話題の變化を望む矢先へ、自然に思ひ出されたのは長吉が子供の時分の遊び友達でお糸と云つた煎餅屋の娘の事である。羅月は其の頃お糸の家を訪ねた時にはきまつて甥の長吉とお糸をづれては奥山や佐竹ッ原の見世物を見に行つたのだ。

「長吉が十八ぢや、あの娘はもう立派な姉さんだらう。矢張稽古に来るかい。」

「家へは来ませんがね、この先の作屋さんにや毎日通つてますよ。もう直き霞町へ出るんだつてぶひますがね……」とお豊は何か考へるらしく話を切つた。

「霞町へ出るのか。そいつア豪儀だ。子供の時からちよいと口のきゝやうのませた、好い娘だつたよ。今夜にでも遊びに来りやアいゝ。ねえ、お豊。」と宗匠は急に元氣づいたが、お豊はボンと長煙管をはいたいて、

「以前とちがつて、長吉も今が勉強さかりだしね……」

「はゝゝゝは。間違ひでもあつちやならないと云ふのかね。尤もだよ。この道ばかりは全く油斷がならないからな。」

「ほんとき。お前さん。」お豊は首を長く延して、「私の憎目かも知れないが、實はどうも長吉

吉の様子が心配でならないのさ。」

「だから、云はない事ッちやない。」と羅月は軽く握り拳で膝頭をたゝいた。お豊は長吉とお糸のことが唯何となしに心配でならない。と云ふのは、お糸が長吉の稽古歸りに毎朝用もないのに屹度立寄つて見る、其れをば長吉は必ず待つてゐる様子で其の時間頃には一足だつて窓の傍を去らない。其れのみならず、いつぞやお糸が病氣で十日程も寝てゐた時には、長吉は外日も可笑しい程にぼんやりして居た事など息もつかずに語りつづけた。

次の間の時計が九時を打出した時突然格戸ががらりと明いた。其の明け様でお豊はすぐに長吉の歸つて來た事を知り急に話を途切らし其の方に振り返りながら、

「大變早いやうだね、今夜は。」

「先生が病氣で一時間早くひけたんだ。」

「小の。父さんがお居でだよ。」

返事は聞えなかつたが、次の間に包を投出す音がして、直様長吉は温順しさうな弱さうな色の白い顔を機の間から見せた。

## 二

残暑の夕日が一しきり夏の盛よりも烈しく、

ひろくした河面一帯に燃え立ち、殊更に大層の艇庫の眞白なベッキ塗の板目に反映してゐたが、忽ち燈の光の消えて行くやうにあたりは全體に薄暗く灰色に變色して來て満ち來る夕沙の上を滑つて行く荷船の帆のみが眞白く際立つた。と見る間もなく初秋の黄昏は暮の降りるやうに早く夜に變つた。流れる水がいやに止しきらく光り出して、渡船に乗つて居る人の形をくっきりと黒繪のやうに黒く染め出した。堤の上に長く横はる葉櫓の木立は此方の岸から望めば恐しいほど眞暗になり、一時は面白やうに引きつゞいて動いてゐた荷船はいつの間に一艘残らず上流の方に消えてしまつて、釣の歸りらしい小舟がところどころの葉のやうに浮いてゐるばかり、見渡す限田川は再びひろくとしたばかりか靜に湛しくなつた。遙か川上の空のはづれに夏の名残を示す雲の拳が立つてゐて細い煙が絶間なく閃いては消える。

長吉は先刻から一人ぼんやりして、或時は今戸橋の欄干に凭れたり、或時は岸の石垣から渡場の棧橋へ下りて見たりして、夕日から黄昏、黄昏から夜になる河の景色を眺めて居た。今夜暗くなつて人の顔がよくは見えない時分になつたら今戸橋の上でお糸と逢ふ約束をしたからで

記憶の中に残されてゐるものゝ、やがて自分達も死んでしまへばいよく何れ彼も煙になつて跡方もなく消え失せてしまふのだ……

「兄さん、實は二三日中に私の方からお邪魔に上らうと思つてゐたんだよ。」とお豊が突然話した。

稽古の男は小稻半兵衛をさらつた後同じやうなお妻八郎兵衛の語出しを二三度繰返して歸つて行つたのである。蘿月は尤もらしく坐り直して扇子で膝を叩いた。

「實はね。」とお豊は同じ言葉繰返して、「駒込のお寺が市區改正で取拂ひになるんだとき。

それでね、死んだお父つあんのお墓を谷中か染井か何處かへ移さなくちやならないんだつてね、四五日前にお寺からお使が来たから、どうしたものかと、其の相談に行かうと思つてたのさ。」

「成程。」と蘿月は頷いて、「さういふ事なら打捨つても置けまい。もう何年になるかな、親爺が死んでから……。」

首を傾げて考へたが、お豊の方は着々話を進めて染井の墓地の地代が一坪いくら、寺への心付けが何うのかうのし、それについては女の身よりも男の蘿月に萬事を引受けて取計らつ

て貰ひたいと云ふのであつた。

蘿月はもと小石川表町の相模屋と云ふ質屋の後取息子であつたが勘當の末宿隱居の身となつた。頑固な父が世を去つてからは妹とお豊を妻にした店の番頭が正直に相模屋の商賣をつ

けてゐた。處が御維新此の方時勢の變遷で次第に家運の傾いて来た折も折火事にあつて質屋はそれなり潰れてしまつた。で、風流三味の蘿月は已むを得ず俳諧で世を渡るやうになり、お豊は其の後亭主に死別した不幸つゞきに昔名を取

つた遊藝を幸ひ常磐津の師匠で生計を立てるやうになつた。お豊には今年十八になる男の子が一人ある。零落した女親がこの世の樂しみと云ふのは全く此の一人息子長吉の出世を見よう

と云ふ事はかりで、商人はいつ失敗するか分らないと云ふ経験から、お豊は三度の飯を二度に

しても、行く／＼はわが兒を大學校に入れて立派な月給取りにせねばならぬと思つて居る。

蘿月宗匠は冷えた茶を飲干しながら、「長吉はどうしました。」

するとお豊はもう得意らしく、學校は今夏休みですがね、遊ばしといちやいけなと思つて本郷まで夜學にやります。」

「ぢや歸りは晚いね。」

「えゝ。いつでも十時過ぎますよ。電車はありますからね、随分遠路ですからね。」

「吾輩とは違つて今時の若いものは感心だね。」

宗匠は言葉を切つて、「中學校だつてね、乃公は子供を持つた事がねえから當節の學校の事はちつとも分らない。大學校まで行くにやまだ餘程かゝるのかい。」

「來年卒業してから試験を受けるんでさアね。大學校へ行く前に、もう一ツ……大きな學校があるんです。」お豊は何れも彼も一口に説明してやりたいと心ばかりは急つても、矢張り時勢に疎い女の事で、忽ち云浚んでしまつた。

「たいした経費だらうね。」

「えゝ其ア、大抵ぢや有りませんよ。何しろ、あなた、月謝ばかりが毎月一圓、本代だつて試験の度々に二三圓ぢやきゝませんしね、其れに夏冬ともに洋服を着るんでせう、靴だつて年に二足は穿いてしまひますよ。」

お豊は調子づいて苦心の程を一倍強く見せようためか聲に力を入れて話したが、蘿月はその時、其れ程にまで無理をするなら、何も大學校へ入れないでも、長吉にはもつと身分相應な立身の途がありさうなものだといふ氣がした。しかし口へ出して云ふほどの事でもないで、何



が遙か年上の姉であるやうな心持がしてならぬのであつた。いや最初からお米は長吉よりも強かつた。長吉よりも遙に臆病ではなかつた。

お米長吉と相々傘にかゝれて皆ながら囁かれた時でもお米はびくともしなかつた。平氣な顔で長ちやんはあたいの旦那だよと怒鳴つた。去年初めて學校からの歸り道で待乳で待ち合はさうと申出したのもお米であつた。宮戸座の立見へ行かうと云つたのもお米が先であつた。歸りの晚くなる事をお米の方が却て心配しなかつた。知らない道に迷つても、お米は行ける處まで行つて御覽よ。巡查さんにきけば分るよと云つて、却て面白さうにずん／＼歩いた。

あたりを櫓はず橋板の上に吾妻下駄を鳴らす響がして、小走り突然お米がかけ寄つた。

「おそかつたでせう。氣に入らないんだもの、母さんの結つた髪なんぞ。」と駈け出した爲めに殊更ほつれた髪を直しながら、「をかしいでせう。」

長吉はたい眼を圓くしてお米の顔を見るばかりである。いつも變りのない元氣のいゝはしやぎ切つた様子がこの場合寧ろ憎らしく思はれた。遠い下町に行つて藝者になつてしまふのが少しも悲しくないのかと長吉は云ひたい事も胸

一ぱいになつて口には出ない、お米は河水を照す玉のやうな月の光にも一向氣のつかない様子で、

「早く行かうよ。私お金持だよ。今夜は。仲店でお土産を買つて行くんだから。」とすた／＼歩きます。

「明日、きつと歸るか。」長吉は吃るやうにし

て云ひ切つた。

「明日歸らなければ、明後日の朝はきつと歸つて来てよ。不歸んだのいろんなものを持つて行かなくつちやならないから。」

待乳山の麓を聖天町の方へ出ようと細い露地をぬけた。

「何故黙つてゐるのよ。どうしたの。」

「明後日歸つて来てそれから又彼方へ去つてしまふんだらう。え。お米ちゃんはその其れなり向うの人になつちまふんだらう。もう僕とは會へないんだらう。」

「ちよい／＼遊びに歸つて来るわ。だけれど、私も一生懸命にお稽古しなくつちやならないんだもの。」

少しは聲を曇したものの、其の調子は長吉の満足するほどの悲愁を帯びてはゐなかつた。長吉は暫くしてから又突然に、

「なぜ藝者なんぞになるんだ。」

「又そんな事きくの。をかしいよ。長さんは。」

お米は已に長吉のよく知つてゐる事情をば再びくどく／＼しく繰返した。お米が藝者になるとぶ事は四五五年いやもつと前から長吉にも能く分つてゐた事である。其の起因は人王であつたお米の父親がまだ生きて居た頃から母親は手

内職にと針仕事をしてお米が、その得意先の一軒で橋場の玄室にゐる御新造がお米の姿を見て是非腹分にして行末は立派な藝者にしたいと云出した事からである。御新造の實家は霞町

で幅のきく藝者家であつた。然し其の頃はお米の家はさほどに困つても居なかつたし、第一に可愛盛の子供を手放すのが辛かつたので、親の手許でせい／＼藝を仕込ます事になつた。其後

父親が死んだ折には差當り頼りのない母親は橋場の御新造の世話で今の蔵屋を出したやうな

關係もあり、御新造が金銭上の善理ばかりでなく

て相手の好意から自然とお米は霞町へ行くやうに誘はれるとなく／＼いつて居たのである。

百も承知してゐるこんな事情を長吉はお米の口からきく爲めに質問したのでない。お米がど

うせ行かねばならぬものなら、もう少し悲しく自分の爲めに別を惜しむやうな調子を見せて貰

ふ。

ある。然し丁度日曜日に當つて夜學校を口實にも出来ない處から夕飯を済すが否やまだ日の落ちぬ中ふいと家を出てしまつた。一しきり渡場へ急ぐ人の往來も今では殆ど絶え、橋の下に夜泊りする荷船の燈火が磨養寺の高い木立を倒に映した山谷城の水に美しく流れた。門口に柳のある新しい二階家からは三味線が聞えて、水に添ひ低い小家の格子戸外には裸體の亭主が涼みに出はじめた。長吉はもう來る時分であらうと思つて一心に橋向うを眺めた。

最初に橋を渡つて來た人影は黒い麻の僧衣を來た坊主であつた。つゞいて尻端折の股引にゴム靴をはいた請負師らしい男の通つた後、暫くしてから、蝙蝠傘と小包を提げた貧し氣な女房が日和下駄で色氣もなく砂を蹴立て、大股に歩いて行つた。もういくら待つても人通りはない。長吉は諦方なく疲れた眼を河の方に移した。河面は先刻よりも一體に明くなり氣味悪い雲の影もなく消えてゐる。長吉は其の時長命寺邊の堤の上の木立から、多分舊曆七月の満月であらう、赤味を帯びた大きな月の昇りかけて居るのを認めた。空は鏡のやうに明いのでそれを遮る堤と木立はますます黒く、星は宵の明星の唯だ一つ見えるばかりで其の他は

盡く餘りに明い空の光に掻き消され、横ざまに長く細曳く雲のちぎれが空の色に透通つて輝いてゐる。見る／＼中満月が木立を離れるに従ひ河岸の夜露をあびた瓦屋根や、水に濡れた樺杭、満潮に流れ寄る石垣下の落草のちぎれ、船の横腹竹竿などが、遙早く月の光を受けて蒼々輝き出した。忽ち長吉は自分の影が橋板の上に段々に濃く描き出されるのを知つた。通りかゝるホーカイ節の男女が二人、まゝ御覽よ。お月様。とぶつて暫く立止つた後、山谷城の岸邊に曲るが否や當付がましく、

書生さん橋の欄干に腰打かけて――

と立ちつゞく小家の前で歌つたが金にならないと見たか歌ひも了らず、元の急足で吉原土手の方へ行つてしまつた。

長吉はいつも忍會の藝人が経験するさまざまの懸念と待ちあぐむ心のいらだちの外に、何とも知れぬ一種の悲哀を感じた。お糸と自分との行末……行ふと云ふよりも今夜會つて後の明日はどうなるのであらう。お糸は今夜兼てから話のしてある霞町の藝者家まで出掛けて相談をして來ると云ふ事で、其の道中をば二人一緒に話しながら歩かうと約束したのである。お糸がいよいよ藝者になつてしまへば此れまでのやう

に毎日逢ふ事ができなくなるのみならず、それが萬事の終りであるらしく思はれてならない。自分の知らない如何にも遠い國へと再び歸る事なく去つてしまふやうな氣がしてならないのだ。今夜のお月様は忘れられない。一生に二度見られない月だなアと長吉はしみ／＼思つた。あらゆる記憶の數々が電光のやうに閃く。最初地方の小学校へ行く頃毎日のやうに喧嘩して遊んだ。やがては皆ながら近所の板屋や土蔵の壁に相々傘をかゝれて嘲された。小杉の伯父さんにつれられて奥山の見世物を見に行つたり池の鯉に鉄をやつたりした。

三社祭の折お糸は或年節屋臺へ出て道成寺を踊つた。町内一同で毎年汐干狩に行く船の上でもお糸はよく踊つた。學校の歸り道には毎日のやうに待れ山の境内で待合せて、人の知らない山谷の裏町から吉原田圃を歩いた……。あゝ、お糸は何故藝者なんぞになるんだらう。藝者なんぞになつちやいけないと引止めたい。長吉は無理にも引止めぬばならぬと決心したが、すぐ其の傍から、自分はお糸に對しては到底それだけの威力のない事を思返した。果敢い絶望と諦めを感じた。お糸は二ツ年下の十六であるが、此頃になつては長吉は殊更に一日とお糸

れてしまふだけ、長い夜はすぐに寂々と更け渡つて来て、夏ならば夕涼みの下駄の音に遮られてよくは聞えない八時か九時の時の鐘があたりをまるで十二時の如く静にしてしまふ。蟋蟀の聲はいそがしい。燈火の色はいやに澄む。秋。あゝ秋だ。長吉は初めて秋といふものは成程いやなものだ。實に淋しくつて堪らないものだと思ひにしみ／＼感じた。

學校はもう昨日から始つてゐる。朝早く母親の用意して呉れた辨當箱を書物と一緒に包んで家を出て見たが、二日目三日日にはつく／＼遠い神田まで歩いて行く氣力がなくなつた。今までは毎年長い夏休みの終る頃と云へば學校の教場が何となく懇しく授業の開始する日が心待ちに待たれるやうであつた。其のうひ／＼しい心持はもう全く消えてしまつた。つまらない。學問なんぞしたつてつまものか。學校は己れの望むやうな幸福を與へる處ではない。……幸福とは全く無關係のものである事を長吉は物新しく感じた。

四日目の朝いつものやうに七時前に家を出て觀音の境内まで歩いて來たが、長吉はまるで疲れきつた旅人が路傍の石に腰をかけるやうに、本堂の横手のベンチの上に腰を下した。い

つの間に掃除をしたものか朝露に濡つた小砂利の上には、投捨てた汚い紙片もなく、朝早い境内はいつもの雜沓に引かへて妙に廣く神々しく寂としてゐる。本堂の下には此處で夜明ししたらしい辻散な男が今だに幾人も腰をかけて居て、其の中には垢じみた單衣の三尺帯を解いて平氣で禪をしめ直してゐる奴もあつた。此頃空釋で空は低く歸色に曇り、あたりの樹木からは蟲囀んだ青いまゝの木葉が絶え間なく落ちる。烏や鶯の啼聲鳥の羽音が爽かに力強く聞える。濡れた水に濡れた御手洗の石が翹へる奉納の手拭のかけにもう何となく冷いやうに思はれた。其れにも拘らず朝參りの男女は本堂の階段を上る前に何れも手を洗ふ爲めにと止まる。其の人々の中に長吉は偶然にも若い一人の藝者が、口には桃色のハンケチを銜へて、一重羽織の袖口を濡すまい爲めか、肩白な手先をば腕までも見せるやうに長くさし伸してゐるのを認めた。同時にすぐ隣のベンチに腰をかけてゐる書生が二人、

「見ろ／＼、ジンゲルだ。わるくないなア。」と云つてゐるのをさへ耳にした。

鳥田に詰つて弱々しい雨の撫で下つた小作りの姿と、口尻のしまつた圓顔、十六七の同じ

やうな年頃とが、長吉をして其の瞬間危くベンチから飛び立たせようとした程お糸のことを連想せしめた。お糸は月のいゝあの晩に約束した通り、其の翌々日に、其れからは長く霞町の人たるべく手荷物を取りに歸つて來たが、其の時長吉はまるで別の人のやうにお糸の姿の變つてしまつたのに驚いた。赤いメリンスの帯ばかり締めて居た娘姿が突然たつた一日の間に、丁度今御手洗で手を洗つてゐる若い藝者その儘に姿になつてしまつたのだ。薬指にはもう指環さへ穿めてゐた。用もないのに幾度となく帯の口から鏡入れや紙入れを拔出して、白粉をつけた直したり鬢のほつれを撫で上げた。戸外には車を待たして置いていかにも急しい大切な用件を身に帯びてゐると云つた風で一時間もたつかた／＼ない中に歸つてしまつた。其の歸りがけ長吉に残した最後の言葉は其の母親の、御師匠さんのをばさんにもよろしく云つてくれと云ふ事であつた。まだ何時出るのか分らないから又近い中に遊びに來るわと云ふ懐かしい聲も聞かれなないのでなかつたが、其れはもう今までのあどけない約束ではなくて、世馴れた人の如くない挨拶としか長吉には聞取れなかつた。娘であつたお糸、幼馴染の戀人のお糸はこの世に



ひたいと思つたからだ。長吉は自分とお糸の間に、いつの間にか互に疎通しない感情の相違の生じて居る事を明かに知つて、更に深い悲みを感じた。

この悲みはお糸が土産物を買ふ爲め仁王門を過ぎて仲店へ出た時更に又堪へがたいものとなつた。夕涼に出掛ける閑かな人出の中にお糸はふいと立止つて、竝んで歩く長吉の袖を引き、「長さん、あたしも直きあんな扮装するんだねえ。絹緋だねきつと、あの羽織……」

長吉は云はれるまゝに見返ると、烏田に結つた藝者と、其れに連立つて行くのは黒絹の紋付をきた立派な紳士であつた。あゝお糸が藝者になつたら一緒に手を引いて歩く人は矢張あゝ云ふ立派な紳士であらう。自分は何年たつたらあんな紳士になれるのか知ら。兵児帯一ツの現在の書生姿が云ふに云はれず、何なく思はれると同時に、長吉は其の將來どころか現在に於ても、已に單々なお糸の友達たる資格さへないものゝやうな心持がした。

いよゝ御神燈のついでた霞町の露地口へ來た時、長吉はもう此の以上果敢いか悲しいとか思ふ元氣さへなくなつて、唯だぼんやり、狭く暗い露地裏のいやに奥深く行先知れず曲込

んでゐるのを不思議さうに覗込むばかりであつた。

「あの、一、二、三……四つ日の瓦斯燈の出るところだよ。松葉屋と書いてあるだらう。ね。

あの家よ。」とお糸は屢々橋場の御新造につれて來られたり、又はその用事で使ひに來たりして能く知つてゐる軒先の燈を指し示した。

「ぢやア僕へ歸るよ。もう……と云ふばかりで長吉は矢張り立止つてゐる。その袖をお糸は軽く捕へて忽ち廻るやうに寄添ひ、

「明日か明後日、家へ歸つて來た時きつと逢はうね。いゝかい。きつとよ。約束してよ。あたしの家へお出よ。よくツて。」

「あゝ。」返事をきくと、お糸は其れですつかり安心したものの如くすた／＼露地の溝板を吾／＼下駄に踏みならし其返りもせずに行つてしまつた。其の足音が長吉の耳には急いで駈けて行くやうに聞えた、かと思ふ間もなく、ちりん／＼と格子戸の鈴の音がした。長吉は覺えず後を追つて露地内へ這入らうとしたが、同時に一番近くの格子戸が人聲と共に開いて、細長い張提灯を持つた男が出て來たので、何と云ふ事なく長吉は氣後れのしたばかりか、顔を見られるのが厭

さに、一散に通りの方へと遠かつた。圓い月が形が大小小くなつて光が蒼く澄んで、靜に聳える裏通りの倉の屋根の上、星の多い空の眞中に高く昇つて居た。

### 三

月の出が夜毎おそくなるにつれて其の光は段々淡えて來た。河風の濕つぽさが次第に強く感じられて來て浴衣の肌がいやに薄寒くなつた。月はやがて人の起きて居る頃にはもう昇らなくなつた。空には朝も書過ぎも夕方も、いつでも雲が多くなつた。雲は重り合つて絶えず動いてゐるので、時としては儼かに其の間々に殊更らしく色の濃い青空の残りを見せて置きながら、空一面に蔽ひ冠さる。すると氣候は恐しく蒸暑くなつて來て、自然と浸み出る脂汗が不愉快に人の肌をねば／＼させるが、然し又、さう云ふ時にはきまつて、其の強弱と其の方向の定まらない風が突然に吹き起つて、雨もまた降つては止み、止んではまた降りつゞく事がある。この風やこの雨には一種特別の底深い力が含まれて居て、葉の樹木や、河岸の葦の葉や、場につゞく貧しい家の屋根根に、春や夏には決して聞かれない音響を傳へる。日が恐しく早く暮

校へは遅くなった。休むにしても今日の半日、これから午後の三時までをどうして何處に消費しようかと云ふ問題の解決に迫られた。母親のお望は學校の時間割までをよく知抜いてゐるのでも、長吉の歸りが一時間早くても、晩くても、すぐに心配して煩く質問する。無論長吉は何とでも容易く云紛らすことは出来ると思ふものの、其れだけの嘘をつく良心の苦痛に逢ふのが厭でならない。丁度來かゝる川端には、水練場の板小屋が取拂はれて、柳の木蔭に人が釣をしてゐる。其れをば通りがかりの人が四人も五人もぼんやり立つて見てゐるので、長吉はいふ都合だと同じやうに釣を眺める振で其のそばに立寄つたが、もう立つてゐるだけの力さへなく、柳の根元の土木に背をよせかけながら蹲んでしまつた。

さつきから空の大半は眞青に晴れて來て、絶えず風の吹き通ふにも拘らず、じり／＼人の肌を燎附くやうな濕氣のある秋の日は、目の前なる大川の水一面に眩しく照り輝くので、往來の片側に長くつゞいた土塀からこんもりと枝を伸じた繁りの蔭がいかにも涼しさに思はれた。甘酒屋の爺がいつか此の木蔭に赤く塗つた荷を下してゐた。川向は日の光の強い爲めに立續く人家の瓦屋根をはじめ一帯の眺望がいかにも汚らしく見え、風に追ひやられた雲の列が盛に煤煙を吐く製造場の煙筒よりも遙に低く、動かすに層をなして浮んでゐる。釣道具を賣る後の小屋から十一時の時計が鳴つた。長吉は數へながら其れを聞いて、初めて自分はいかに長い時間を歩き暮したかに驚いたが、同時に此の分で行けば三時までの時間を空費するのゝもして難くはないと稍安心することも出来た。長吉は釣師の一人が握飯を食ひはじめたのを見て、同じやうに辨當箱を開いた。開いたけれども何だか氣まりが悪くて、誰か見てゐやしないかとときよるきよる四邊を見廻した。幸ひ午近くのことで見渡す川岸に人の往來は杜絶えてゐる。長吉は出来るだけ早く飯でも菜でも皆な鵜呑みにしてしまつた。釣師はいづれも木像のやうに黙つてゐるし、甘酒屋の爺は居眠りしてゐる。午過の川端はます／＼靜になつて大さへ歩いて來ない處から、流石の長吉も自分は何故こんなに氣まりを悪がるのであらう臆病なのであらうと我ながら可笑しい氣にもなつた。

兩國橋と新大橋との間を一廻した後、長吉はいよく淺草の方へ歸らうと決心するにつけ、「もしや」といふ一念にひかされて再び霞町の露地口に立寄つて見た。すると午前ほどには人通りがないのに先づ安心して、おそる／＼松葉家の前を通つて見たが、家の中は外から見ると非常に暗く、人の聲、味線の音さへ聞えなかつた。けれども長吉には誰にも咎められずに戀人の住む家の前を通つたと云ふそれだけの事が、殆んど破天荒の冒險を敢てしたやうな満足を感じさせたので、これまで歩きぬいた身の疲勞と苦痛とを長吉は遂に後悔しなかつた。

四

その週間の残りの日數だけはどうかやらからやら、長吉は學校へ通つたが、日曜日一日を過すと其の翌朝は電車に乗つて上野まで來ながらふいと下りてしまつた。教師に差出すべき代數の宿題を一つもやつて置かなかつた。英語と漢文の下讀をもして置かなかつた。それのみならず今日は父、凡そ世の中で何よりも嫌ひな何よりも恐しい機械體操のある事を思ひ出したからである。長吉には鐵棒から逆にならさがつたり、人の支より高い棚の上から飛び下りるやうな事は、いかに軍／＼上りの教師から強ひられても全級の生徒から一齊に笑はれても到底出來得べきことではない。何によらず體育の遊戲にかけては、

はもう生きてゐないのだ。路傍に寝て居る犬を驚して勢よく駆け去つた車の後に、えも云はれず立迷つた化粧の匂が、いかに苦しく、いかに切なく身中にしみ渡つたであらう……。

本堂の中に消えた若い藝者の姿は再び階段の下に現れて仁徳門の方へと、素足の指先に突掛けた吾妻下駄を内輪に軽く踏みながら歩いて行く。長吉は其の後姿を見送ると父更に恨めしいあの車を見送つた時の一刹那を想起するので、もう何としても我慢が出来ぬといふやうにベンチから立上つた。そして知らず／＼其の後を追うて仲店の盡るあたりまで來たが、若い藝者の姿は何處の横町へ曲つてしまつたものか、もう見えない。兩側の店では店先を掃落して品物を並べてゐる最中である。長吉は夢中で雷門の方へどん／＼歩いた。若い藝者の行方を究めようと云ふのではない。自分の眼にばかりあり／＼見えるお米の後姿を追つて行くのである。學校の事も何も彼も忘れて、駒形から藏前、藏前から淺草橋……其れから葎町の方へどん／＼歩いた。然し電車の通つてゐる馬車町の大通りまで來て、長吉は何の横町を面ればよかつたのか少しく當惑した。けれども大體の方角はよく分つてゐる。東京に生れたものだ

けに道をきくのが厭である。戀人の住む町と思へば、其の名を徒に路傍の他人に漏すのが、心の秘密を探られるやうで、唯わけもなく恐しくてならない。長吉は仕方なしに唯だ左へ左へと、いゝかげんに折れて行くと藏造りの間屋らしい商家のつゞいた同じやうな地割の岸に二度も出た。其の結果長吉は遙か向うに明治座の屋根を見てやがて稍廣い往來へ出た時、其の遠い道のはづれに河蒸汽船の汽笛の音の聞えるのに、初めて自分の位置と町の方角とを覺つた。同時に非常な疲勞を感じた。制帽を冠つた額のみならず汗は袴をはいた帯のまはりまでしみ出してゐた。然しもう一瞬間とても休む氣にはならない。長吉は月の夜に連れられて來た露地口をば、これは又一層の苦心、一層の懸念、一層の疲勞を以て、やつとの事で見出し得たのである。

片側に朝日がさし込んで居るので露地の内は突當りまで見透された。格子戸づくりの小さい家ばかりでない。書間見ると意外に屋根の高い倉もある。忍返しをつけた板塼もある。其の上から松の枝も見える。石灰の散つた便所の掃除口も見える。塵芥箱の並んだ處もある。其の邊に猫がうろ／＼して居る。人通りは案外に烈し

い。極めて狭い溝板の上を通行の人は互に身を斜めに捻向けては行き交ふ。皆古の三味線に人の話が交つて聞える。洗物する水音も聞える。赤い腰巻に裾をまくつた小女が草蓑で溝板の上を歩いてゐる。格子戸の格子を一本々々一生懸命に磨いて居るものもある。長吉は人目の多いのに氣後れしたのみでなく、さて露地内に進入つたにしろした處で、自分はどうするかと初めて反省の地位に返つた。人知れず松葉家の前を通つて、そつとお米の姿を垣間見たいとは思つたが、あたりが餘りに明過ぎる。さらば此のまゝ露地口に立つてゐて、お米が何かの用で外へ出るまでの機會を待たうか。然しこれもまた、長吉には近所の店先の入りが盡く自分ばかりを見張つて居るやうに思はれて、とても五分と長く立つてゐる事はできない。長吉は兎に角思案をしなければすつても、折から近所の子供を得意にする栗餅屋の爺がカラ／＼と杵をならして來る向うの横町の方へと遠かつた。

長吉は濱町の横町をば次第に道の行くまゝに大川端の方へと歩いて行つた。いか程機會を待つても書中はどうしても不便である事を催かに悟り得たのであるが、すると、今度はもう學



と忽ち風が出て乾ききつた道の砂を吹散す。この風と共に寒きは日にまし強くなつて閉つた家の戸や障子が絶間なくがたり／＼と悲しげに動き出した。長吉は毎朝七時に始まる學校へ行くため晩くも六時には起きねばならぬが、すると毎朝の六時が、起きるたびにだん／＼暗くなつて、遂には夜と同じく家の中には燈火の光を見ねばならぬやうになつた。毎年冬のはじめに、長吉はこの鈍い黄い夜明のランプの火を見ると、何とも云へぬ悲しい厭な氣がするのがある。母親はわが子を勵ますつもりで寒さうな寝衣姿のまゝながら、いつも長吉よりは早く起きて、暖い朝飯をばちやんと用意して置く。長吉は其の親切をすまないと感じながら何分にも眠くてならぬ。もう暫く炬燵にあつてゐたいと思ふのを、無暗と時計ばかり氣にする母にせきたてられて不平だら／＼、河風の寒い往來へ出るのである。或時はあまりに世話を焼かれ過ぎるのに腹を立て、注意される標卷をわざと解きすて、風邪を引いてやつた事もあつた。もう返らない幾年か前、羅月の伯父につられお糸も一所に酉の市へ行つた事があつた。毎年その日の事を思ひ出す頃か間もなく、今年も去年と同じやうな寒い十二月がやつて来るのである。

長吉は同じやうな其の冬の今年と去年、去年とその前年、それから其れと幾年も潮つて何心なく考へて見ると、人は生長するに従つていかに幸福を失つて行くのかを明かに経験した。まだ學校へも行かぬ子供の時には朝寒ければゆつくりと寝たいだけ寝て居られたばかりでなく、身體の方もまた程に寒さを感じる事が烈しくなかつた。寒い風や雨の日に、却て面白く飛び歩いたものである。あゝ其れが今の身になつては、朝早く今戸の橋の白い霜を踏むのがいかに辛くまた晝過ぎにはいつも木枯の騒ぐ待乳山の老樹に、早くも傾く夕日の色がいかにも悲しく見えてならない。これから先の一年々々は自分の身にかなる新しい苦痛を授けるのであらう。長吉は今年の十二月ほど日の早くたつのを悲しく思つた事はない。觀音の境内にはもう年の市が立つた。母親のもとへとお歳暮のしるしにお弟子が持つて来る沙糖袋や鯉節などがそろ／＼床の間へ並び出した。學校の學期試験は昨日すんで、一方ならぬ其の不成績に對する教師の注意書が郵便で母親の手許に送り届けられた。初めから覺悟してゐた事なので長吉は黙つ

て首をたれて、何かにつけてすぐに親一人子一人と哀ッぽい事を云出す母親の意見を聞いてゐた。午前古古に來る小娘達が歸つて後午過には三時過ぎてからでなくては、學校歸りの娘達はやつて來ぬ。今が丁度母親が一番手すきの時間である。風がなくて冬の日が往來の窓一面にさしてゐる。折から突然まだ格子戸をあけぬ先から、

「御免なさい。」とぶふ作美な女の聲、母親が驚いて立つ間もなく上柜の障子の外から、

「をばさん、わたしよ。御無沙汰しちまつて、お詫びに來たんだわ。」

長吉は顫へた。お糸である。お糸は立派なセルの吾々コオトの紐を解き／＼上つて來た。

「あら、長ちゃんも居たの。學校がお休みあら、さう。」其れから付けたやうに、ほ／＼と笑つて、さて丁寧に手をついて御辭儀をしながら、

「をばさん、お變りありませんの。ほんとに、つい家が出にくいものですから、あれツきり御無沙汰しちまつて……。」

お糸は縮緬の風呂敷につゝんだ菓子折を出した。長吉は呆然に取られたさまで、物も云はずにお糸の姿を目成つてゐる。母親も一寸煙に巻かれた形で進物の襪を述べた後、一きれいに

長吉はどうしても他の生徒一同に伴つて行く

事が出来ないで、自然と輕悔の聲の中に孤立する。其の結果は、遂に一同から意地悪くいじめられる事になり易い。學校は單にこれだけでも随分厭な處、苦しいところ、辛い處であつた。されば長吉はその母親がいかに望んだ處で今になつては高等學校へ這入らうと云ふ氣は全くない。若し入學すれば校則として當初の一年間は是非とも狂暴無残な寄宿舎生活をしなればならぬ事を聽知つてゐたからである。

高等學校寄宿舎内に起るゝの逸話は早くから長吉の膽を冷してゐるのであつた。いつも畫學と習字にかけては全級誰も及ぶものゝない長吉の性情は、鐵拳だとか柔術だとか日本魂だとか云ふものよりも全く異つた他の方面に傾いてゐた。子供の時から朝夕に母が渡世の三昧線を聴くのが大好きで、習はずして自然に絃の調子を感じ、町を通る流行唄などは一度聴けば直ぐに記憶する位であつた。小梅の伯父なる蘿月宗匠は早くも名人になるべき素質があると見抜いて、長吉をば桐物町でも楠木店でも何處でもいゝから一流の家元へ弟子入をさせたらばとお豊に勧めたがお豊は斷じて承諾しなかつた。のみならず以來は長吉に三昧線を弄る事をば口

喧しく禁止した。

長吉は蘿月の伯父さんの云つたやうに、あの時分から三昧線を稽古したなら、今頃は鬼に角一人前の藝人になつてゐたに違ひない。さすればよしやお糸が藝者になつたにした處で、こんなに悲惨な目に遇はずとも済んだであらう。あ

あ實に取返しつかない事をした。一生の方針を誤つたと感じた。母親が急に憎くなる。例へられぬほど怨しく思はれるに反して、蘿月の伯父さんの事が何となく取纏つて見たいやうに懷しく思返された。これまでは何の氣もなく母親からも亦伯父自身の口からも度々聞かされてゐた伯父が放蕩三昧の經歷が戀の苦痛を知り初めた長吉の心には凡て新しい何かの意味を以て解釋されはじめた。長吉は第一に小梅の伯母さんといふのは元金瓶大黒の華姫で明治の初め吉原解放の時小梅の伯父さんを頼つて來たのだとやら云ふ話を思出した。伯母さんは子供頃の自分をば非常に可愛がつて呉れた。其れに係らず、自分の母親のお豊はあまり好くは思つてゐない様子で、盆暮の挨拶もほんの義理一通らしい事を構はず素振に現してゐた事さへあつた。長吉は此處で再び母親の事を不愉快に且つ憎らしく思つた。殆ど夜の目も離さぬ程自

分の行ひを目成つて居るらしい母親の慈愛が窮屈で堪らないだけ、もしこれが小梅の伯母さん見たやうな人であつたら——小梅のをばさんはお糸と自分の二人を見て何とも云へない情のあ

る聲で、いつまでも仲よくお遊びよと云つて呉れた事がある——自分の苦痛の何物たるかを能く察して同情して呉れるであらう。自分の心がすこしも要求してゐない幸福を頭から無理に強ひはせまい。長吉は偶然にも母親のやうな正しい身の上の女と小梅のをばさんのやうな或種の經歷ある女との心理を比較した。學校の教師のやうな人と蘿月伯父さんのやうな人とを比較した。

## 五

午頃まで長吉は東照宮の裏手の森の中で、捨石の上に構はりながら、こんな事を考へつづけた後は、包の中にかくした小説本を取り出して讀み耽つた。そして明日出すべき紙席扇にはいかにして父母の認印を盗むべきかを考へた。

一しきり毎日毎夜のやうに降りつゞいた雨の後、今度雲一ツ見えないやうな晴天が幾日と限りもなくつゞいた。然しどうかして空が曇る

暖かい目をぶら／＼散歩に出掛けた。すっかり  
金快した今になつて見れば、二十日以上も苦  
しんだ大病を長吉はもつての幸ひであつたと  
喜んでゐる。とても來月の學年試験には及第す  
る見込みがないと思つてゐた處なので、病氣  
缺席の後と云へば、落第しても妙に對して尤  
至極な申譯ができると思ふからであつた。

歩いて行く中いつか淺草公園の裏手へ出た。

細い通りの片側には深い溝があつて、それを越  
した鐵柵の向うには、處々に冬枯れて立つ  
大木の下に、五區の揚子店の汚らしい裏手が  
ついでに見える。屋根の低い片側町の人家は丁  
度後から深い溝の方へと押詰められたやうな氣  
がする。大方其のためであらう、其れ程に  
混雜もせぬ往來がいつも妙に忙しく見え、うろ  
うろ徘徊してゐる人相の悪い車犬が一寸風采  
の小綺麗な通行人の後に煩く付き纏つて乗車  
を翻めてゐる。長吉はいつも巡查が立番して  
ゐる左手の石橋から淡島さまの方までがずつ  
と見透される四辻まで歩いて來て、通りがかり  
の人々が立止つて眺めるまゝに、自分も何とい  
ふ事なく、曲り角に出してある宮戸座の繪看板  
を睨いだ。

いやに文字の間をくツ付けて模様やうに太

く書いてある名題の木札を中央にして、その左  
右には恐しく顔の小さい、眼の大きい、指先の太  
い人物が、夜具をかついだやうな人い着物を着  
て、さまざま誇張的の姿勢で活躍してゐる  
さまが描かれてある。この大きい繪看板を蔽ふ  
屋根形の軒には、花車につけるやうな造り花が  
美しく飾りつけてあつた。

長吉はいか程暖かい日和でも歩いてゐると流

石にまだ立春になつたばかりの事として暫くの  
間寒い風をよける處をと思ひ出した矢先、芝  
居の繪看板を見て、其のまゝ狭い立見の月口へ  
と進み寄つた。内へ這入ると足場の悪い梯子段  
が立つてゐて、其の中段から曲るあたりはもう  
薄暗く、臭い生暖い人込の溫氣が猶更暗い上  
の方から吹き下りて來る。頻に役者の名を呼ぶ  
の聲が聞える。それを聞くと長吉は都會育ち  
の觀劇者ばかりが經驗する特殊の快感と特殊  
の熱情とを覺えた。梯子段の二三段を一躍びに  
駈上つて人込みの中に割込むと、床板の斜にな  
つた低い屋根裏の奥は大きな船の底へでも下  
りたやうな心持。後の隅々についてゐる瓦斯  
の樑火の光は一ぱいに照つてゐる見物人の頭  
に遮られて非常に暗く、妙苦しいので、猿の  
やうに人のつかまつてゐる前側の鐵棒から、向

うに見える劇場の内部は大井ばかりがいかに  
も廣々と見え、舞臺は色づき濁つた空氣の爲め  
に却て小さく甚遠く見えた。舞臺はチョンと  
打つた拍子木の音に今丁度廻つて止つた處で  
ある。極めて一直線な石垣を見せた臺の下に汚  
れた水色の布が敷いてあつて、後を限る書割に  
は小さく大名屋敷の練堀を描き、其の上の空一面  
をば無理にも夜だと思はせるやうに隙間もなく  
眞黒に塗りたてゝある。長吉は觀劇に對する  
此れまでの經驗で、夜と云ふ事から、  
きつと殺し場に違ひないと幼い好奇心から大仲  
びをして首を伸すと、果せるかな、絶えざる低

い大太鼓の音に例の如く板をバタ／＼叩く音が  
聞えて、左手の近番小屋の裏から仲間と薩を抱  
へた女とが大きな聲で争ひながら出て來る。  
見物人が笑つた。舞臺の人物は落したものを搜  
す體で何かを取り上げると、突然前とは全く違  
つた態度になつて、極めて明瞭に淨瑠璃外題海  
柳中宵月、勤めます役人……と讀みはじめ  
かけた。再び輕い拍子木の音を合圖に、黒衣  
の男が右手の隅に立たた書割の一部を引取ると  
袂を意た淨瑠璃三人、三財綱強二人が、  
窮屈さうに狭い臺の上に並んで居て、直ぐに彈



おなりだね。すつかり見違へちまつたよ。」と云つた。

「いやにふけちまつたでせう。皆さう云つてよ。」とお糸は美しく微笑んで、紫縮緬の羽織の紐の解けかゝつたのを結び直すついでに帯の間から緋天鵲絨の煙草入を出して、「をばさん。わたし、もう煙草喫むやうになつてよ、生意氣でせう。」

今度は高く笑つた。

「此方へおよんなさい。寒いから。」と母親のお豊は長火鉢の鐵瓶を下して茶を入れながら、「いっつお弘めしたんだえ。」

「まだよ。ずつと押詰つてからですつて。」

「さう。お糸ちゃんなら、きつと賣れるわね。」

何しろ綺麗だし、ちゃんともう地は出来てゐるんだし……」

「おかげさまでねえ。」とお糸は言葉切つて、「あつちの姉さんも大變に喜んでたわ。私なんかよりもつと大きな癖に、それア随分出来ない娘があるんですもの。」

「この節の事だから……」お豊はふと氣がついたやうに茶棚から菓子鉢を出して、「あいにく何にも無くて……道了さまのお名物だつて、鳥渡おつなものだよ。」と箸でわざ／＼摘んでや

つた。

「お師匠さん、こんちは。」と甲高な一本調子で、二人づれの小娘が騒々しく稽古にやつて来た。

「をばさん、どうぞお構ひなく……」

「なにいゝんですよ」と云つたけれどお豊はやがて次の間へ立つた。

長吉は妙に氣まりが悪くなつて自然に俯向いたが、お糸の方は一向變つた様子もなく小聲で、

「あの手紙届いて。」

隣の座敷では二人の小娘が聲を揃へて、嵯峨やお室の花ざかり。長吉は首ばかり領付せても

ぢもぢしてゐる。お糸が手紙を寄越したのは一の西の前時分であつた。つい家が出にくいと云

ふだけの事である。長吉は直様別れた後の生涯をこま／＼と書いて送つたが然し待ち設けた

やうな、折返したお糸の返事は遂に聞く事が出来なかつたのである。

「観音さまの市だわね。今夜一所に行かなくて。あたゝい今夜泊つてつてもいゝんだから。」

長吉は隣座敷の母親を氣兼ねして何とも答へる事ができない。お糸は構はず、

「御飯たべたら迎ひに来てよ。」と云つたが其の後で、「をばさんも一所にいらッしやるでせう

ね。」

「あゝ。」と長吉は力の抜けた聲になつた。

「あの……」お糸は急に思出して、「小梅の伯父さん、どうなすつて、お酒に酔つて羽子板屋

のお爺さんと喧嘩したわね、何時だったか。私怖くなつちまつたわ。今夜いらッしやればいゝのに。」

お糸は稽古の隙を窺つてお豊に挨拶して、ぢや、晩ほど、どうもお邪魔いたしました。と云ひながらすた／＼歸つた。

## 六

長吉は風邪をひいた。七草過ぎて學校が始つた處から一日無理をして通學した爲めに、流行のインフルエンザに變つて正月一ぱい寢通してしまつた。

八幡さまの境内に今日は朝から初午の太鼓が聞える。暖い穏な午後の日光が一面にさし

込む表の窓の障子には、折々軒を掠める小鳥の影が閃き、茶の間の隅の薄暗い佛壇の奥まで

が明く見え、床の間の梅がもう散りはじめた。春は閉切つた家の中までも陽氣におよづれて来たのである。

長吉は二三年前から起きてゐたので、此の

ら一瞬間とても消失せない清心と十六夜の華美やかな姿の記憶が、羽子板の押繪のやうに又一段と際立つて浮び出す。長吉は劇中の人物をば憤り程に羨んだ。いくら羨んでも到底及びもつかないわが身の上を悲しんだ。死んだ方がましだと思ふだけ、一緒に死んでくれる人のない身の上を更に痛切に悲しく思つた。

今戸橋を渡りかけた時、掌でびしやりと横面を張撲るやうな河風、思はず寒さに胴顫ひすると同時に長吉は咽喉の奥から、今までは記憶してゐることも心付かずのゐた淨瑠璃の一節がわれ知らず流れ出るのに驚いた

「今さら云ふも愚痴なれど……」

と清元の一派が他流の模すべからざる曲調の美麗を託した一節である。長吉は無論太夫さんが首と身體を伸上らして唄つたほど上手に、且又そんな大きな聲で唄つたのではない。咽喉から流れるまゝに口の中で低唱したのであるが、其れによつて長吉は已みがたい心の苦痛が幾分か柔げられるやうな心持がした。今更云ふも愚痴なれど……ほんに思へば……岸より覗く青柳の……と思出す節の、ところへ長吉は家の格子戸を開ける時まで繰返し繰返し歩いた。

## 七

翌日の午後にも又もや宮戸座の立見に出掛けた。長吉は戀の二人が手を取つて囁く美しい舞臺から、昨日初めて経験した云ふべからざる悲哀の美感に酔ひたいと思つたのである。其ればかりでなく黒ずんだ天井と壁襖に囲まれた二階の宝がいやに陰氣臭くて、燈火の多い、人の大勢集つてゐる芝居の賑ひが、我慢の出来ぬほど戀しく思はれてならなかつたのである。長吉は失つたお糸の事以外は折々は唯だ何と云ふ譯もなく淋しい悲しい氣がする。自分にも何う云ふ譯だか少しも分らない。唯だ淋しい、唯だ悲しいのである。この寂寞この悲哀を慰める爲めに、長吉は定め難い何物かを一刻々々に激しく要求して止まない。胸の底に潜んだ漠然たる苦痛を、誰と限らず優しい聲で答へてくれる美しい女に訴へて見たくてならない。單にお糸一人の姿のみならず、往來で摺れちがつた見知らぬ女の姿が、鳥田の娘になつたり、銀杏返の藝者になつたり、又は丸詰の女房姿になつたりして夢の中に浮ぶ事さへあつた。

長吉は二度見る同じ芝居の舞臺をば初めてのやうに興味深く眺めた。其れと同時に、今度は賑かな左右の棧敷に對する觀察をも決して閑却しなかつた。世の中にはあんなに大勢女がある。あんなに大勢女のある中で、どうして自分一人も自分を慰めてくれる相手に邂逅はないのであらう。誰でもいい、自分に一言やさしい語をかけてくれる女さへあれば、自分はこんなに切なくお糸の事ばかり思ひつめては居まい。お糸の事を思へば思ふだけ其の苦痛をへらす他のものが欲しい。さすれば學校とそれに關連した身の前途に對する絶望のみに沈められて居まい……

立見の混雜の中に其の時突然自分の肩を突くものがあるので驚いて振向くと、長吉は烏打帽を眉深に黒い眼鏡をかけて、後の一段高い床から首を伸して見下す若い男の顔を見た。

「吉さんぢやないか。」

さう云つたものの、長吉は吉さんの風采の餘りに變つて居るのに暫くは二の句がつけなかつた。吉さんと云ふのは地方町の小學校時代の友達で、理髮師をしてゐる山谷通りの親爺の店で、此れまで長吉の髪をかつてくれた若衆である。それが細ハンケチを首に巻いて、重廻の下から大島紬の羽織を見せ、いやに香水を匂はせな

出す。三味線からついで太夫が聲を合してかたり出した。長吉はこの種の音楽にはいつも興味を以て聞き馴れてゐるので、場内の何處かで泣き出す赤兒の聲と其れを叱咤する見物人の聲に妨げられながら、而も明かに語る文句と三味線の手までを聴き分ける。

「朧夜に星の影さへ二ツ三ツ、四ツか五ツか

鐘の音も、もしや我身の追手かと……

又しても輕いバタ／＼が聞えて夢中になつて

聲をかける見物人のみならず場中一體が気色立

つ。それも道理だ。赤い橋袴の上に紫襦子の

幅廣い襟をつけた座敷着の遊女が、冠の手拭に

顔をかくして、前かゞまりに花道から斯出たの

である。「見えねえ、前が高いッ。」帽子をとれ

ッ。「馬鹿野郎。」などと怒鳴るものがある。

「落ちて行方も白魚の、舟のかゞりに網より

も、人目いとうて後先に……

女に扮した役者は花道の盡きるあたりまで出

て後を見返りながら臺詞を述べた。其の後に叫

がつく。

「へしばしイむ上手より梅見返りの舟の唄。

「忍ぶなら／＼闇の夜は置かしやんせ、月に

雲のさはりなく、辛氣待つ宵、十六夜の、内

の首尾はエーよいとのおいの。へ聞く辻

占にこそ／＼と雲足早き雨空も、思ひがけ

なく吹き明れて見かはす月の顔と顔……

見物が又騒ぐ。眞黒に塗りたてた空の青割の

中央を大きく穿抜いてある圓い穴に灯がつい

て、雲形の蔽ひをば絲で引上げるのが此方から

でも能く見えた。餘りに月が大きく明いから、

大名屋敷の塀の方が遠くて月の方が却て非常

に近く見える。然し長吉は他の見物も同様に少

も美しい幻想を破られなかつた。そののなら

ず去年の夏のイ、お糸を霞町へ送るため、待合

した今月の橋から眺めた彼の大いなる圓い／＼月

を想起すと、もう舞臺は舞臺でなくなつた。

着流し散髪の男がいかに思ひやつれた風で

足許危く歩み出る。女と指れちがひに顔を見

合して、

「十六夜か。」

「清心さまか。」

女は男に縋つて、「逢ひたかつたわいなア。」

見物人が「ヤア御兩人、三よいしよ。やけま

す。」などと呼ぶ。笑ふ聲。「静かにしろい。」と叱

りつける熱情家もあった。

舞臺は相愛する男女の入手と共に廻つて、女

の方が白魚舟の夜網にかゝつて助けられる處に

なる。再び元の舞臺に返つて、男も同じく死

ぬ事が出来なくて石垣の上に這ひ上る。遠くの騒ぎ唄、富貴の義勇、生存の快樂、境遇の絶望、機會と運命、饑饉、殺人。波瀾の上にも脚色の波瀾を極めて、遂に演劇の一幕が終る。耳許近くから恐しい黄い聲が、變るよーウ」と叫び出した。見物人が出口の方へと崩を打つて下りかける。

長吉は外へ出ると急いで歩いた。あたりは

まだ明いけれどももう日が當つて居ない。ごたご

たした千束町の小賣店の暖簾や旗などが激しく

翻つて居る。通りがかりに時間を見るため腰

をかめて覗いて見ると軒の低い其れ等の家の

奥は眞暗であつた。長吉は病後の夕風を恐れ

てます／＼歩みを早めたが、然し山谷堀から今

戸橋の向に開ける隅田川の景色を見ると、どう

しても暫く立止らずにはゐられなくなつた。河

の面は悲しい灰色に光つてゐて、冬の日の終り

を急がす水蒸氣は對岸の堤をおぼろに霞めて

ゐる。荷船の帆の間をば鷗が幾羽となく飛び

交ふ。長吉はどん／＼流れて行く河水をば何

なしに悲しいものだと思つた。川向の堤の上

には一ツ二ツ灯がつき出した。枯れた樹イ、乾

いた石垣、汚れた瓦屋根、日に入るものは盡

く褪せた寒い色をして居るので、芝居を出てか



廻りの拍子木の何たるかを知らない見物人が、すぐにも幕があくのかと思つて、出歩いてゐた外から各自の席に戻らうと右方左方へと混雑してゐる。横手の棧敷裏から斜に引幕の一方にさし込む夕陽の光が、其の進み入る道筋だけ、空中に漂ふ塵と煙草の煙をばあり／＼と眼に見せる。長吉はこの夕陽の光をば何と云ふ事なく悲しく感じながら、折々吹込む外の風が大きな波を打たせる引幕の上を眺めた。引幕には市川〇〇丈へ、淺草公園藝妓連中として幾人とな書連ねた藝者の名が讀まれた。暫くして、「吉さん、君、あの中を知つてゐる藝者があるかい。」

「たのむよ。公園は乃公達の細張中だぜ。」吉さんは一種の屈辱を感じたのであらう、嘘か誠か、幕の上にかいてある藝者の一人々々の經歷、容貌、性質を限りもなく説明しはじめた。

拍子木がチヨン／＼と二ツ鳴つた。幕開の頃と三味線が聞え引かれた幕が次第に細かく早めの拍子木の律につれて片寄せられて行く。大向から早くも役者の名をよぶ掛け聲。たいくつした見物人の話聲が一時に止んで、場内は夜の明けたやうな一種の明るさと一種の活氣を添へた。

## 八

お豊は今戸橋まで歩いて来て時節は今正に爛漫たる春の四月である事を初めて知つた。手一ツの女世帯に追はれてゐる身は空が青く晴れて日が窓に射込み、筋向の「宮戸川」と云ふ鰻屋の門口の柳が緑色の芽をふくのにやつと時候の變遷を知るばかり。いつも兩側の汚れた瓦屋根に四方の眺望を遮られた地面の低い場末の横町から、今突然、橋の上に出て見た四月の隅田川は、一年に二三次と數へるほどしか外出する事のない母親お豊の老眼をば信じられぬほどに驚かしたのである。晴れ渡つた空の下に、流れる水の輝き、堤の青草、その上につづく櫻の花、種々の旗が閃く大學の艇庫、その邊から起る人々の叫び聲、鐵砲の聲、渡船から上下りする花見の人の混雑、あたり一面の光景は疲れた母親の眼には餘りに色彩が強烈すぎる程であつた。お豊は渡場の方へ下りかけたけれど、急に恐るゝ如く踵を返して、金龍山下の日蔭になつた瓦町を急いだ。そして通りがかりの成るべく汚い車、成るべく意氣地のなさうな車夫を見付けて恐るゝ、

「車屋さん、小梅まで安くやつて下さいな。」と

云つた。

お豊は花見どころの騒ぎではない。もう何していいのかわからない。望みをかけた一人息子の長吉は試験に落第してしまつたばかりか、もう學校へは行きたくない、學問はいやだと云ひ出した。お豊は遠方に暮れた結果、兄の蘿月に相談して見るより外に仕様がなと思つたのである。

一度目に掛合つた老車夫がやつとの事でお豊の望む賃銀で小梅行きを承知した。吾妻橋の午後の日光と塵埃の中におびたゞしい人出である。着飾つた若い花見の男女を載せて勢よく走る車の間をば、お豊を載せた老車夫は梶を振りながらよ／＼歩いて橋を渡るや否や櫻木の賑ひを外に、直ぐと中の郷へ曲つて葉平橋へ出ると、この邊はもう春と云つても汚い、鱗茸の屋根の上に唯だ明る日があたつてゐると云ふばかりで、沈滞した堀割の水が麗な青空の色を其のきゝに映してゐる曳舟通り。昔は金瓶樓の小太夫と云はれた蘿月の戀女房は、綿衣の襟元に手拭をかけ白粉揚げのした皺の多い顔に一ぱいの目を受けて、子供の群がめい／＼と獨樂の遊びをしてゐる外には至つて人通りの少い道端の格子戸先で、張板に張物をして居た。駈けて

がら、

「長さん、僕は役者だよ。」と顔をさし出して長吉の耳先に囁いた。

立見の混雑の中でもあるし、長吉は驚いたまゝ黙つてゐるより仕様がなかつたが、舞臺はやがて昨日の通りに河端の暗闇になつて、劇の主人公が盗んだ金を懷中に花道へ駈出してながら石礫を打つ、其れを合圖にチョンと拍子木が響く。幕が動く。立見の人中から例の「變るよーウ」と叫ぶ聲。人々が狭い出口の方へと押合ふ間に幕がすつかり引かれて、シャギリの太鼓が何處か分らぬ舞臺の奥から鳴り出す。長吉は長吉の袖を引止めて、

「長さん、歸るのか。いゝぢやないか。もう一幕見てお居でな。」

役者の仕着せを着た賤しい顔の男が、濫紙を張つた小笥をもつて、次の幕の料金を集めに來たので、長吉は時間を心配しながらも其のまゝ居残つた。

「長さん、綺麗だよ、掛けられるぜ。」吉さんは人のすいた後の明り取りの窓へ腰をかけて長吉が並んで腰かけるのを待つやうにして再び「僕ア役者だよ。變つたらう。」と云ひながら、小紋縮緬の襦袢の袖を引き出して、わざとらしく脱

した黒い金縁眼鏡の曇りを拭きはじめた。

「變つたよ。僕ア初め誰かと思つた。」

「驚いたかい。はゝゝゝは。一吉さんは何とも云へぬほど嬉しさに笑つて、一轆むぜ。長さん。かう見えたつて憚りながら役者だ。伊井一座の新俳優だ。明後日から又新當町よ。出揃つたら見に來給へ。いゝかい。樂屋口へ廻つて、玉水を呼んでくれつて云ひたまへ。」

「玉水……」  
「うむ、玉水三郎……」云ひながら急しく懷中から女持の紙入を探り出して、小さな名刺を見せ、「ね、玉水三郎。昔の吉さんぢやないぜ。ちゃんともう番附に出て居るんだぜ。」

「面白いだらうね、役者になつたら。」  
「面白かつたり、辛かつたり……」然し女にやア不自由しねえよ。一吉さんは鳥渡長吉の顔を見て、「長さん、君は遊ぶのかい。」

長吉は「まだ」と答へるのが其の瞬間男の恥であるやうな氣がして黙つた。

「江戸一の梶田様ツて云ふ家を知つてるかい。今夜一緒ににお出でな。心配しないでもいゝんだよ。のろけるんぢや無いが、心配しないでもいいわけがあるんだから。お安くないだらう。はゝゝゝは。と吉さんは他愛もなく笑つた。長

吉は突然に、

「役者は高いんだらうね」

「長さん、君は役者が好きなのか。微澤だ。」と新俳優の吉さんは意外らしく長吉の顔を見返したが、「知れたもんさ。然し金で女を買ふならんざア、ちつとお人が好調ざらア。僕ア公園で二三軒待合を知つてゐるよ。連れてツてやらう。萬事方寸の中にありさ。」

先刻から三人四人と絶えず上つて來る見物人で大向はかなり雑沓して來た。前の幕から居残つてゐる連中には待ちくたびれて手を鳴すものもある。舞臺の奥から拍子木の音が長い間を置きながら、それでも次第に近く聞えて來る。

長吉は窮屈に腰をかけた明り取りの窓から立上る。すると吉さんは、

「まだ、なか／＼だ。」と獨言のやうに云つて、「長さん。あれア廻りの拍子木と云つて道具立の出來上つたつて事を、役者の部屋の方へ知らせる合圖なんだ。聞く迄にやアまだ、なかなかよ。」

悠然として巻煙草を吸ひ始める。長吉はさうかと感服したらしく返事をしながら、然し立上つたまゝに立見の鐵格子から舞臺の方を眺めた。花道から十間間の櫺の間をば吉さんの如く

少しも恐れずに観音堂へと急いで、祈願を凝した後に、お神籤を引いて見た。古びた紙片に木版摺で、

災 輓 時 々 退

名 顯 四 方 揚

改 故 重 乘 祿

昇 高 福 自 昌

お豊は大吉と云ふ文字を見て安心はしたものの、大吉は却て凶に返り易い事を思ひ出して、又もや自分からさまぐな恐怖を造出しつゝ、非常に疲れて家へ歸つた。

九

午後から龜井戸の龍眼寺の書院で連歌の會があるといふので、蘿月はその日の午前を訪ねて来た。長吉と茶漬をすました後、小梅の住居から押上の堀割を柳島の方へと連れだつて話しながら歩いた。堀割は丁度眞晝の引汐で眞黒な汚い泥土の底を見せてゐる上に、四月の暖かい日

光に照附けられて、溝泥の臭氣を盛に發散して居る。何處からともなく煤煙の煙が飛んで来て、何處といふ事なしに製造場の機械の音が聞える。消端の人家は道よりも一段低い地面に建てられてゐるので、昼の日の光を外に女房其がせつせと内職して居る薄暗い家内のさまが、通りながらにすつかりと見透される。さうぶふ小家の曲り角の汚れた板日には賣樂と易占の廣告に交つて至る處女工募集の貼紙が目についた。然し間もなくこの陰鬱な往來は迂曲りながらに少しく爪先上りになつて行くかと思ふと、片側に赤く塗つた妙見寺の塀と、それに對して心持よく洗ひざらした料理屋橋本の板塀のために突然面目を一變させた。貧しい本所の一區が此處に盡きて板橋のかゝつた川向うには野草に蔽はれた上手を越して、龜井戸村の品と木立とが美しい田園の春景色をひろげて見せた。蘿月は踏み止つて、

「私の行くお寺はすぐ向うの川端さ、松の木の下に屋根が見えるだらう。」

「ぢや、伯父さん。こゝで失禮しませう。」長吉は早くも帽子を取る。

「いそぐんぢや無い。咽喉が乾いたから、まあ長吉、鳥渡休んで行かうよ。」

赤く塗つた板塀に沿つて、妙見寺の門前に渡簀を張つた休茶屋へと、蘿月は先に腰を下した。一直線の堀割はこゝも同じやうに引汐の汚い水底を見せてゐたが、遠くの品の方から吹いて来る風はいかに爽やかで、天神様の鳥居が見える向うの堤の上には柳の若芽が美しく閃いてゐるし、すぐ後の寺の門の屋根には雀と燕が絶え間なく囀つてゐるので、其處此處に製造場の煙出しが幾本も立つてゐるに俅らず、市街からは遠い春の午後長閑さは充分に心持よく味はれた。蘿月は暫くあたりを眺めた後、其れとなく長吉の顔をのぞくやうにして、

「さつきの話は承知してくれたらうな。」

長吉は丁度茶を飲みかけた處なので、領付いたまゝ、口に出して返事はしなかつた。

「兎に角もう一年辛抱しなさい。今の學校さへ卒業しちまへば……母親だつて段々取る年だ、さう頑固ばかりも云やアしまいから。」

長吉は唯だ首を領付かせて、何處と當もなしに遠くを眺めてゐた。引汐の堀割に繋いだ土船からは人足が二人して堤の向うの製造場へと頻に上を運んでゐる。人通りと云つては一人もない此方の岸をば、意外にも突然三臺の人力車が天神橋の方から駈けて来て、二人の休んでゐ



来て止る車と、其れから下りるお豊の姿を見

て、「まあお珍しいぢやありませんか。ちよいと今戸の御師匠さんですよ。と開けたまゝの格子戸から家の内へと知らせる。内には主人の宗匠が萬年青の鉢を並べた縁先へ小机を据ゑ、頻に天地人の順序をつける俳諧の選に急がしい處であつた。

掛けてゐる眼鏡をはづして、蘿月は机を離れて座敷の真中に坐り直つたが、襷をとりながら這入つて来る妻のお満と來訪のお豊、同じ年頃の老いた女同志は幾度となくお辭儀の議合をしては長々しく挨拶した。そしてその挨拶の中に、「長ちゃんも御丈夫ですか。」「はア、然し彼にも困ります。」と云ふやうな問答から、用件は案外早く蘿月の前に提出される事になつたのである。蘿月は靜に煙草の吸殻をはたいて、誰にかぎらず若い中は兎角に氣の迷ふことがあつた。氣の迷つてゐる時には、自分にも覺えがあるが、親の意見も仇としか聞えない。他から餘り厳しく干涉するよりは却て氣まかせにして置く方が樂になりはしまいかと論じた。然し目に見えない將來の恐怖ばかりに滿された女親の狭い胸には斯る通人の放任主義は到底容れられ

べきものでない。お豊は長吉が久しい以前から屢々學校を休む爲めに自分の認印を盗んで、肩書を偽造してゐた事をば、暗黒な運命の前途である如く、聲まで潜めて長々しく物語る……

「學校がいやなら如何するつもりだと聞いたから、まあどうでせう、役者になるんだって云ふんですよ。役者に。まあ、どうでせう。兄さん。私やそんなに長吉の根性が腐つちまつたのかと思つたら、私やもう實に口惜しくつてならないですよ。」

「へーえ、役者になりたい。一訝る間もなく蘿月は七ツハツの頃によく味織を弃物にした長吉の生立ちを回想した。一當人がたつたと望むなら仕方のない話だが……困つたものだ。」

お豊は自分の身こそ一家の不幸の爲めに遊藝の師匠に零落したけれど、わが子までもそんな賤しいものにしては先祖の位牌に對して申譯がないと述べる。蘿月は一家の破産滅亡の背を云出されると勘當までされた放蕩三昧の身分は、何につけ禿頭をかきたいやうな當惑を感じる。

もとゝ藝人社會は大好きな趣味性から、お豊の偏屈な思想をば攻撃したいと心では思ふものゝ、そんな事から又しても長たらしく「先祖の位牌」を論じ出されては堪らないと危むので、宗匠

は先づ其の場を圓滑に、お豊を安心させるやうに話をまとめかけた。

「兎に角一應は私が意見しますよ、若い中は迷ふだけに却て始末のいいものさ。今夜にでも明日にでも長吉に遊びに来るやうに云つて置きなさい。私が此處改心さして見せるから、まあそんな心配しないがいゝよ。なに世の中は案じるより産むが安いさ。」

お豊は何分よろしくと頼んでお満が引止めるのを辭退して其の家を出た。春の夕陽は赤々と吾妻橋の向うに傾いて、花見歸りの混雑を一層引立てゝ見せる。其の中にお豊は殊更元氣よく歩いて行く金ボタンの學生を見ると、それが果して大學校の生徒であるか否かは分らぬながら、我兒もあのやうな立派な學生に仕立てたいばかりに、幾年間女の身一人で生活と戰つて來たが、今は生命に等しい希望の光も全く消えてしまつたのかと思ふと實に堪へられぬ悲愁に襲はれる。兄の蘿月に依頼しては見たものの、矢張安心が出来ない。なにも昔の道樂者だからと云ふ譯ではない。長吉に志を立てさせるのは到底人間業では及ぬ事、神佛の力に頼らねばならぬと思ひ出した。お豊は乗つて來た車から急に雷門を下りた。仲居の雜沓も今では

へ崩れてしまつた水溜りのやうな古池の中へ、幾個となくのめり込んで居る。無論新しい手向の花などは一つも見えない。古池には早くも葦の中に蛙の聲が聞えて、去年のまゝなる枯草は水にひたされて腐つて居る。

長吉はふと近所の家の表札に中郷竹町と書いた町の名を讀んだ。そして直様、此の頃に愛讀した爲永春水の「梅屑」を思出した。あゝ、薄命なあの戀人達はこんな氣味のわるい濕地の街に住んでゐたのか。見れば物語の挿繪に似た竹垣の家もある。垣根の竹は枯れきつて其の根元は蟲に喰はれて押せば倒れさうに思はれる。潜門の板屋根には瘦せた柳が辛くも若芽の縁をつけた枝を垂してゐる。冬の書過ぎ竊かに米八が病氣の丹次郎をおとづれたのかゝる侘住居の戸口であつたらう。半次郎が雨の夜の怪談に初めてお糸の手を取つたのも矢張斯る家の一間であつたらう。長吉は何とも云へぬ恍惚と悲哀を感じた。あの甘くして柔かく、忽ちにして冷淡な無頓着な運命の手に弄ばれた。と云ふ止み難い空想に驅られた。空想の翼のひろがるだけ、春の青空が以前よりも青く廣く日に映じる。遠くの方から節賣の朝鮮笛が響き出した。笛の音は思ひがけない處で、妙な節をつ

けて音調を低めるのが、言葉にふない幽愁を催させる。

長吉は今まで胸に蟠つた伯父に對する不満を暫く忘れた。現實の苦悶を暫く忘れた……

# 十

氣候が夏の末から秋に移つて行く時と同じやう、春の末から夏の初めにかけては、折々大雨が降りつゞく。千束町から吉原田圃は珍しくもなく例年の通りに水が出た。本所も同じやうに所々に出水したさうで、蘿月はお豊の住む今戸の近邊はどうであつたかと、二三日の過ぎてから所用の歸りの夕方に見舞に來て見ると、出水の方は無事であつた代りに、それよりも、もつと意外な災難にびつくりしてしまつた。甥の長吉が釣臺で、今しも本所の避病院に送られようといふ騒の最中である。母親のお豊は長吉が初給の薄着をしたまゝ、千束町近邊の出水の混雑を見にと夕方から夜おそくまで、泥水の中を歩き廻つた爲めに、其の夜から風邪をひいて忽ち腸窒扶斯になつたのだと云ふ醫者の説明をそのまゝ語つて、泣きながら釣臺の後について行つた。途方にくれた蘿月はお豊の歸つて來るまで、否應なく留守番にと家の中に取り残されて

しまつた。

家の中は區役所の出張員が硫酸と石炭酸で消毒した後、まるで煤掃きか引越しの時のやうな狼藉に、丁度人氣のない寂しさを加へて、葬式の棺桶を送出した後と同じやうな心持である。世間を憚るやうにまだ日の暮れぬ先から雨水を閉めた戸外には、夜と共に突然強い風が吹き出したと見えて、家中の雨戸ががた／＼鳴り出した。氣候はいやに肌寒くなつて、折々勝手口の破障子から座敷の中まで吹き込んでくる風が、薄暗い釣ランパの火をば吹き消しさに揺ると、其の度々、黒い油煙がホヤを曇らして、亂雑に置き直された家具の影が、汚れた壁と腰張のはがれた壁の上に動く。何處か近くの家で百萬遍の念佛を稱へ始める聲が、ふと物哀れに耳についた。蘿月は唯た一人で所在がない。退屈でもある。薄淋しい心持もする。かう云ふ時には酒がなくてはならぬと思つて、臺所を探し廻つたが、女世帯の事とて酒盃一ツ見當らない。表の窓際まで立戻つて雨戸の一枚を少しばかり引き開けて往來を眺めたけれど、向側の軒燈には酒屋らしい記號のものは、ツツも見えず、場木の街は宵ながらにもう大方は閉めてゐて、陰氣な百萬遍の聲が却てはつきり聞えるばかり、河

る寺の門前で止つた。大方慕参りに來たのであらう。町家の内儀らしい丸髷の女が七八ツになる娘の手を引いて門の内へ這入つて行つた。

長吉は蘿月の伯父と橋の上で別れた。別れる時に蘿月は再び心配さうに、

「ぢや……」と云つて暫く黙つた後、「いやだらうけれど當分辛抱しなさい。親孝行して置けば悪い報はないよ。」

長吉は帽子を取つて軽く禮をしたが其のまゝ、駈けるやうに早足に元來た押上の方へ歩いて行つた。同時に蘿月の姿は雜草の若芽に蔽はれた川向うの土手の陰にかくれた。蘿月は六十

に近いこの年まで今日ほど困つた事、辛い感情に迫められた事はないと思つたのである。妹とお豐のたのみも無理ではない。同時に長吉が芝居道へ這入らうといふ希望もまたわるいとは思はれない。一寸の蟲にも五分の魂で、人にはそれだけの氣質がある。よかれあしかれ、物事を無理に強ひるのはよくないと思つてゐるので、蘿月は兩方から板ばさみになるばかりで、何れにとりとも賛同する事ができないのだ。殊に自分が過去の經歷を回想すれば、蘿月は、長吉の心の中は問はずとも底の底まで明かに推察される。若い頃の自分には親代々の薄暗い質屋の店先に

坐つて麗かな春の目を外に働くらすのが、いかに辛くいかに情なかつたであらう。陰氣な燈火の下で大幅帳へ出入の金高を書き入れるよりも、川添ひの明い二階家で洒落本を讀む方がいかに面白かつたであらう。長吉は路を生じた堅苦しい勤め人などになるよりも、自分の好きな遊藝で世を渡りたいといふ。それも一生、これも一生である。然し蘿月は今よんどころ無く意見役の地位に立つ限り、そこまで自己の感想を暴露してしまふわけには行かないので、其の母親に對したと同じやうな、其の場かぎりの氣安めを云つて置くより仕様がなかつた。

長吉は何處も同じやうな貧しい本所の街から街をばてくく歩いた。近道を取つて一直線に今戸の家へ歸らうと思ふのでもない。何處へか廻り道して遊んで歸らうと考へるのでもない。長吉は全く絶望してしまつた。長吉は役者になりたて自分の注意を通すには、同情的な深い小梅の伯父さんに頼るより外に道がない。伯父さんはきつと自分を助けてくれるに違ひないと豫期してゐたが、その希望は全く自分を欺いた。伯父は母親のやうに正面から烈しく反對を稱へはしなかつたけれど、聞いて極樂見て地獄の響

を引き、輕道に成功の困難、舞臺の生活の苦痛、藝人社會の實際の煩瑣な事を長々と語つた後、母親の心を推察してやるやうにと、伯父の忠告を待たずともよく解つてゐる事を述べつけたのであつた。長吉は人間といふものは年を取ると、若い時分に経験した若いものしか知らない煩悶不安をばけりて忘れてしまつて次の時代に生れて來る若いものゝ身の上を極めて無頓着に訓戒批評する事のできる便利な性質を持つてゐるものだ、年を取つたものと若いものと、間には到底一致されない懸隔のある事をつくづく感じた。

何處まで歩いて行つても道は狭くて土が黒く濕つてゐて、大方は露地のやうに行き止りかと危まれるほど曲つてゐる。苔の生えた鱗草きの屋根、腐つた土臺、傾いた柱、汚れた板目、下してある檻樓や襦袢や、并べてある駄菓子や荒物など、陰鬱な小家は不規則に限りもなく引きつゝいて、其の間に時々驚くほど大きな門構の見えるのは盡く製造場であつた。瓦屋根の高く聳えて居るのは古寺であつた。古寺は人混荒れ果て、破れた塙から裏手の亂塔場がすつきり見える。束になつて倒れた卒塔婆と共に苔苔の斑點に蔽はれた墓石は、岸と云ふ境界さ



## あめりか物語

## あめりか物語序

明治三十六年の秋十月の頃より米國に遊びて今茲明治四十年の夏七月フランスに向ひてニューヨークを去るに臨み、日頃旅窓に書き綴りたるものを採り集めて、あめりかものがたりと題し、謹んでわが恩師にして恩友なる小波山人巖谷九生の机下に呈す。

明治四十年十一月里昂にて

永井荷風

## 船房夜話

何處にしても陸を見る事の出来ない航海は、殆ど堪へ難い程無聊に苦しめられるものであるが、横濱から亞米利加の新開地シアトルの港へ通ふ航海、此れもその一つであらう。

出帆した日、故國の山影に別れたなら、船客は彼岸の大陸に達する其の日まで、半月あまり

の間、一ツの島、一ツの山をも見る事は出来ない。昨日も海、今日も海——何時見ても變らぬ太平洋の眺望と云ふのは唯だ茫漠として、大きな波浪の起伏する邊に翼の長い嘴の曲つた灰色の信天翁の飛び廻つてゐるばかりである。其の上にも天氣は次第に北の方へと進むに連れて心地よく晴れ渡る事は稀になり、先づ毎日の様に空は暗澹たる鼠色の雲に蔽ひ盡さるゝのみか動もすれば雨か又は霧になつて了ふ。私は圖らずも此淋しい海の上の旅人になつた。そして早くも十日ばかりの日數を送り得た處である。晝間ならば甲板で環投の遊び、若しくは喫煙室で骨牌を取りなぞして、何うか斯うか時間を消費する事が出来るけれど、さて晚餐の食卓を離れてからの夜になると、最う殆ど爲す事が無くなつて了ふ。且つ今日あたりは餘程氣候も寒くなつて來た様だ。外套なしでは到底甲板を歩いて喫煙室へも行かれまいと思ふ所から、私は其の儘自分の船房に閉ぢ籠つて、長椅子の上に身體を横へ、日本から持つて來た雜誌で

も開かうかと思つて居ると、其の時室の戸を指先でコト／＼と軽く叩くものがある。  
「お這入んなさい。」と私は半身を起しながら呼び掛けた。

戸が開いて二どうした。又少し動く様ぢや無いか。弱つとるのかね。」

「寒いから引込んで了つた。まあ掛け給へ。」と云ふと、

「全く寒いな。アラスカの沖を通るんだと云ふからな。」と餘り濃くない髭を生した口許に微笑を浮べながら長椅子の片隅へ腰を下したのは柳田君と云つて航海中熱意になつた紳士である。

中肉中丈、年は三十を一ツ二ツも越して居るらしい。鵜地の背廣の上に褐色の外套を纏ひ、高い襟の間からは華美な色の襟飾を見せ居る。何處となく氣取つた様子で膝の上に片脚を載せ、指環を穿めた小指の先で葉巻の灰を拂ひ落しながら、

「日本なら今頃は随分好い時候なんだがな。」と云ふ。

「さう、全くだよ。」

「何か思ひ出す事でも有りや爲ないかね。」

「は、は。其ア君お隣りの先生へ云ふ事だ。」

の方から烈しく吹きつける風が屋根の上の電線  
をヒュー／＼鳴すのと、星の光の滙えて見える  
のとで、風のある夜は突然冬が来たやうな寒い  
心持をさせた。

蘿月は仕方なしに兩月を閉めて、再びぼんやり  
釣ランブの下に坐つて、續けざまに煙草を喫  
んで桂時計の針の動くのを眺めた。時々鼠が  
恐しい響をたてゝ天井裏を走る。ふと蘿月は何  
かその邊に讀む本でもないかと思ひつゝ、箆  
筒の上や押入の中を彼方此方と覗いて見たが、  
書物と云つては常磐津の稽古本に綴磨の古いも  
の位しか見當らないので、とう／＼釣ランブを  
片手にさけて、長吉の部屋になつた二階まで上  
つて行つた。

机の上に書物は幾加も重ねてある。杉板の本  
箱も置かれてある。蘿月は紙入の中にはさんだ  
老眼鏡を懷中から取り出して、先づ洋装の教科  
書をば物珍しく一冊々々ひろげて見てゐたが、  
する中にばたりと熨の上に落ちたものがあるの  
で、何かと取上げて見ると春吉の藝者姿をした  
お糸の寫眞であつた。そつと舊のやうに書物の  
間に收めて、猶もその邊の一冊々々を何心も  
なく漁つて行くと、今度は思ひがけない一通の  
手紙に行當つた。手紙は書き終らずに止めたも

のらしく、引き裂いた巻紙と共に文句は杜切れ  
てゐたけれど、讀み得るだけの文字で十分に全  
體の意味を解する事ができる。長吉は一度別  
れたお糸とは互に異なる其の境遇から日一日  
と其の心までが遠かつて行つて、折角の幼馴染  
も遂にはあかの他人に等しいものになるであ  
らう。よし時々手紙の取りやりはして見ても  
感情の一致して行かない是非なきを、こま／＼  
と恨んでゐる。それにつけて、役者が藝人にな  
りたいと思定めたが、その望みも遂に遂げられ  
ず、空しく床屋の吉さんの幸福を羨みながら、  
毎日ぼんやりと目的のない時間を送つてゐるつ  
まらなき、今は自殺する勇氣もないから病氣に  
でもなつて死ねばよいと書いてある。

蘿月は何と云ふわけもなく、長吉が出水の中  
を歩いて病氣になつたのは故意にした事であつ  
て、全快する望はもう絶え果てゐるやうな  
實に果敢ない感に打たれた。自分は何故あの時  
あのやうな心にもない意見をして長吉の望み  
を妨げたのかと後悔の念に迫められた。蘿月  
はもう一度思ふともなく、女に迷つて親の家を  
追出された若い時分の事を回想した。そして自  
分はどうしても長吉の味方にならねばならぬ。  
長吉を役者にしてお糸と添はしてやらねば親

代々の家を潰してこれまでに浮世の苦勞をした  
かひがない。通人を以て自任する松風庵蘿月宗  
匠の名に愧ずと思つた。

鼠がまた突如に天井裏を走る。風はまだ吹き  
止まない。釣ランブの火は絶えず動揺く。蘿月  
は色の白い眼のはつちりした面長の長吉と、圓  
顔の口元に愛嬌のある眼尻の上つたお糸との、  
若い美しい二人の姿をば、人情本の戯作者が  
口論の意匠でも考へるやうに、幾度か井ぐて心  
の中に描きだした。そして、どんな熱病に取付  
かれてもきつと死んでくれるな。長吉、安心し  
ろ。乃公がついてゐるんだぞと心に叫んだ。

(明治四十二年)

じて居ると、外を吹いて居る暴風雨と云ふものは、何となしに趣味のある様に聞えるですな。」  
 「眞實、これが大船に乗つた心持と云ふのでせうな。然し若しか、帆前船見た様なものだつたら、如何でせう、随分難船しないとも云へませんぜ。」と岸本君は眞面目らしく云つた。  
 「何事に依らず皆な然うですよ。一方で愉快を感じずるものがあれば、其の爲めに一方では乾度苦痛を感じるものが起るです。火事などは焼かれるものこそ災難だが、外のものには三國一の見物だからね。」とウキスキ一の酔が廻つたのか、私は何か分らぬ屁理屈を云ふと、  
 「眞理だよ。實際眞理だよ。」と柳田君は深くも何か感じたらしい様子になつて、「君の比喩に従ふと、僕なんぞは正に焼出された方の組なんだな。焼出されて亞米利加三界へ逃げ出すんだ。僕は實際去年日本へ歸つたばかりなんだ、行李を開けるか開けない中、又候海外へ行かうなぞとは、全く自分でも意外な心持がするです。」  
 私と岸本君ともよく熱心に柳田君の今回の渡米に付いての眞實を質問した。島渡した話にも柳田君は必ず大陸の文明島國の狭小と云ふ事を口癖のやうにしてゐるので、定めた大抱負を持つて居る事と想像したからである。

一は、一は。其様抱負などと云ふ人したものはい無いです。しかし、……と濃くない聲を括つて柳田君は先づ自家の經歷を述べ始めた。  
 彼は最初或學校を卒業した後、直條會社員となつて、意氣振々と歐洲の地へ赴いたのである。そして久振に故郷の日本へ歸つて來たが、滿々たる胸中の得意と云ふものは、最初出立した時の比ではない。舊友の歡迎會を初めとして、彼は到る所逢ふ人毎に大陸の文明と世界の前途とを説き且つ賞讃した。豆粒の様な小い島國の社會は必ず自分を重く用ゐて呉れるに違ひ無いと深く信じて疑はなかつた。處が事實は本社詰めの翻譯員にされて了つて、其の月給幾何かと問へば、本位の低い日本銀貨の僅か四十圓と云ふのであつた。然し彼はよく、日本の事情を考へて、先づ黙して此れを受取つたものの、胸中には絶えず不平が蟬り易い。で、此の不平を慰むべく、彼は體色優れた貴族の令嬢をでも妻に爲ようと、人に此の方面へ運動しはじめた。心中では洋行歸り……と云ふ此の呼聲が確に世の娼や母親の心を惹くであらうと信じたが事實は増々反對して來る。彼が日掛けた或る子爵の令嬢と云ふのは彼が最も冷笑する島國の大學卒業生と結婚して了つた。

彼は二度まで得意の鼻を折られたばかりでは無く、今度は確に遺憾なき失戀の打撃をも蒙つたのだ。  
 然し柳田君は猶全く絶望してしひはせぬ。苦痛の反動として以前よりも一層過激に島國の天地を罵倒し始めた。そして再び海外へ旅の愉快を試みようとする決心したのである。  
 日本なんか居つたら、到底心の底から快哉を呼ぶ様な事ありやアせんからね。了度好臨海に横濱の生絲商で亞米利加へ視察に行つて呉れと云ふものがあるから、此れ幸ひに依頼されて出掛けて來たです。事業と云ふ事に付いてちや如何しても海外へ行かなければ不可んですからね。僕は同胞諸君が渡米されるのを見るに、實際嬉しく思ふです。と洋書を取つて咽喉を潤したが、身體の方向を一轉させ、岸本君。君は米國へ行つてから學校へ這入るとか云はれたですね。  
 …さうです。と岸本君は和服の襟を引合せた。「大學へでも這入られるですか。」  
 「さ。其の心算ですが、今の處ぢや今で語學が出来ませんし、未だ事情も分らんですからな……」  
 「柳田君。岸本君は細君や子供までを残して學



又例の如く引込んで居るんだらう。呼んで見ようぢや無いか。」

「よからう。」と私は壁をトン／＼と二三度叩いて見た。少時は答へが無かつたが、纏て隣りの船房に居る岸本君と云ふのが、私の船房の戸口へ顔を出した。

「ハロオ！カムイン！」とハイカラの柳田君は早速氣取つた發音で呼掛けると、  
「有難う。此様風を爲て居るですから……。」と岸本君は其の儘猶佇立んで居る。

「さ、這入り給へ。」と私は長椅子から立つて立掛けてある鼻椅子を廣げた。

岸本君と云ふのは矢張三十近くの稍身丈の低い男で、紬の袴とフランネルの一重を重ね着た上に大島の羽織を被つて居る。

「ぢや、失禮します。」と鳥渡腰を屈めて椅子に坐りながら「洋服はどうも寒くて不可んですから、最う寝衣で寝ようかと思つて居たです。」

すると柳田君は、岸本君の顔を見ながら、「洋服は寒いですか。」と如何にも不審だと云ふ語調で、「私なんぞは、然うすると全く反對です。増して此様航海中なんか日本服を着ようものなら、襟首が寒くて忽ち風邪を引いて了ふです。」

「さうですか。其れぢやア、私は未だ洋服に慣れ無いですな。」

「柳田君、君は飲る口なんだから、どうです、命じませうか。」

「いや。今夜は餘り欲しくは無いです。唯だ退屈だから談話に遣つて來たです。」

「だから、話をするには矢張コップが無いと面白くないでせう。」と私は鈴を押しながら「又例の氣遣を聞かうぢや有りませんか。ねえ、岸本君。」

然し岸本君は返事をせず倒けた顔を起して、「又、大分動いてゐる様ですね。」

「君、何にしても太平洋だよ。」と柳田君は再び薄い髭を拵つた。ボーイが戸を開ける。

「柳田君、君は例の如くウキスキーですか。」

「勿論」と云ふ返事を聞いてボーイは靜に戸を閉めて立去つたが、其の時吠える様な太い汽笛の響に續いて、甲板へ打上げる波の音がした。

「成程、少し動搖するね。まあ可いさ。今夜は一つ愉快な雜談會を催したいものだ。」と柳田君は安樂さうに足を踏み伸したが、和服の岸本君は明るい電氣燈の輝つて居る室の天井を見廻しながら、

「どうしたんです。非常に汽笛を鳴らすぢやあ

りませんか。」

「霧が深いからでせう。」と柳田君が説明し掛けた時ボーイは早や命じた酒類を盆にのせて持運んで來た。そしてベッドの傍の小さいテーブルの上に置きコップへついで後再び室を出て行く、

「ゲツドラック！」と柳田君が第一にコップをさへげたので、私等も同じ様に笑ひながらゲツドラックを繰返した。

何時になつたのか遙に時間を知らせる淋しい鐘の音が聞える。波は折から次第に高まり行く

と見え、今はベッドの上の丸い船窓へ凄じく打寄せる響がすると、甲板の方に當つて高い橋を掠める風の音が、丁度東京でぶふ／＼月のカラ風を聞く様で、其れに連れては何處にも知ら

ずギイ／＼と何か物の轆轤も聞え始めた。然し我等は最早や船派には馴れて了つた處から別に酔ふやうな處は無い。窓や戸へ帷條を引き

蒸氣の温度で狭い船房の中を暖かにして、安樂椅子に凭れながら外部の暴風雨を聞いてゐる

と、却つてそれとも無しに冬の夜に於ける爐邊の愉快が思ひ出される。ハイカラの柳田君も同じ感情に誘はれたのであらう、ウキスキーの

洋蓋を下に置いて、

「ねえ、君、自分の身體が安全だと云ふ事を信

ら早や己が船房の方へと次第に其の聲音を遠くさせると、隣りの室では同じく歸り去つた岸本君が淋しい寢床に其の身を横へるのであらう、ベッドの帳帷を引き寄せる音が幽に聞えた。

(明治三十六年十一月)

## 牧場の道

タコマに滞在して居た時分、その年も十月の確か最後の上曜日であつた。

秋は早や暮れ行くので、往來の兩側に植ゑられた楓の並木を初め公園や人家の庭に、一夏の涼しい蔭を作つた樹木と云ふ樹木は、昨夜の深い霧で大概は落葉して了つた。このタコマのみならず米國の太平洋沿岸は最う一週間を過ぎずして、所謂悲しい十一月の時節となつたならば毎日霧と雨とに閉されて來年の五月になるまで、殆ど叫れた空を見る事は出来ない。今日の晴天は恐らく今年の青空の見納めであらうと云ふ。私は此の地の風土や事情に通じて居る或る友に勧められて、とも／＼此の一日を此秋の曠原に自動車を馳らせる事にした。

タコマ大通と云ふ日の手の一本道を東へと

走る。この一本道から眺望するとタコマの市街はビューゼットサウンドと呼ぶ出入の激しい内海に臨んで、著しい傾斜をなして居る處から、無數の屋根と煙囪、廣い埋立地、波止場、幾艘の碇泊船、北太平洋會社の鐵道——全市街は唯だ一目に瞰されて了ふ。而して入江を隔てた連山の上には日本人がタコマ富士と呼ぶ白雪を戴くレニヤール山が巍然として聳え、夜明の曉い北方の朝日が丁度その斜面を眞紅の色に染めて居る。我等二人は街端の大きな溪の上に架けてある橋を二ツばかり渡り、特別に造られた廣い自動車道を四哩ばかり馳つて、南タコマと呼ぶ村落を通り過ぎると、直に廣漠たる野原に出た。道の通ずる儘に或ひはヒリ或ひは下る事恰も波に揺られる舟の如く、遂に行き盡して櫛の林に這入つた。道は稍險しくなり、此の地方殊にワシントン州の各所に黒い深い森林を造つて居る眞直な黒松は櫛の林に引續いて此處にも忽ち我等の行手を遮つた。我等は漸くに苔むす一條の小道を見出し、その導くが儘に、林間の湖水アメリカン・レーキの畔に休み、更に轉じてスチルカムと呼ぶ海岸の孤村を訪うたのである。

一歸り道に此の山の土の瀧狂院を案内しよう。

ワシントン州の州立瀧狂院だから、此の邊では一寸有名なよ。」

此の時友は悠々云つたので、私は彼の後に續いて後の丘陵へ上ると、遠くの彼方には氣も晴々する牧場を望み、近くは隱微な林の前にして、宏莊な煉瓦造の建物か、直ぐ様其れと知られるのであつた。

白いペンキ塗の低い垣で境された廣い櫛内は、人の歩む道だけを残して、一面に青々とした芝生が其の上に植ゑられた枝の細い樹木や色々な草花と相對して日にも覺めるばかり鮮明な色彩を示して居る。裏手の方には宏大な館子張の溫室の屋根が見え、小徑の所々には櫛掛、廣場の木蔭には腰掛付の鞦韆なども出来て居たが、見渡す限り森として人の氣色も無い。

私等は鐵の門前を過ぎる一條の砂道をばゆるゆると自動車を進ませ、もと來た牧場の方へと下りて行つた。女は色々説明したついでに、「この瀧狂院には日本人も三三人收容されて居るよ。」

何事もないやうに云つたが、私には此れが非常な事件である様に思はれた。同時に友は、「皆な出稼ぎの労働者さ」と附加へた。出稼ぎの労働者と云ふ一語は又しても私の

間に出て來られたのださうです。」と利が云ひ添へると、柳田君は身體を前へ進ませながら、「岸本君。君は最うお子様があるんですか。」「え。」とばかり岸本君は稍其の頬を赤らめた。

「其れぢや、非常な大決心を持つて出て來られたのですな。」

「まあ、此れまでにして、出て來るには随分奮發したつもりなんです。親類などには厳しく止めるものも有りました。」と今度は岸本君が語る可き順序となつた。

此の人は矢張東京の或る會社に雇はれて居たが、將來に出世する見込のないばかりか、何時も人の後に蹴落されてのみ居た、と云ふのは、畢竟何處の學校をも卒業した事がない。乃ち肩書と云ふものを有つてゐない其の爲めである、とつくづく考へ始めた折から、今度社内の改革に遇つて解雇される事となつた。けれども幸ひ其の細君の身には尠からぬ財産が付いて居たので、普通の人々の遭遇する様な憂目を見ずに済んだのである。否、其の細君は寧ろ好い折である、と云ふ様に、此様な喧しい東京に居るよりか、自分の身に付いて居る財産で何處か静かな田舎へ行き可い可愛い子供の三人着しで安樂に暮した方がと云出した。

暮した方がと云出した。

けれども、岸本君は此の優しい妻の語に従ふどころでは無い。細君が其の亡父から譲られた財産で、自分は出来る事なら一年なり二年なり米國へ行つて學問して來たいと相談し掛けた。

すると細君は決して金を惜む爲めでは無く、唯だ唯だ愛する夫に別れるのが可厭さに堅く其れには反對したのである。無理な出世などは爲て呉れなくても可い。書生上りの學士さんに先を越されても少しも恥する事は無い。人は其の力相應の働きをして平和に其の日が送れさへすれば可いでは無いかと云ふのが細君の意見であつたが、是非飽くまでもと云ふ夫の決心に到頭細君も涙ながらに岸本君を萬里の異郷に出立させる事になつたと云ふのである。

「ですから、私の考へでは成りたけ時間を短くして何なり學校の免狀を持つて歸りたいと思つて居るです。卒業免狀が先づ處へ見せる一番の土産なんですから。」云ひ了つて、岸本君は自ら勇氣を勵ます爲めか、苦味さうな顔をしながらも、グツと一口ウキスキーを飲干した。「うむ。全くお察し申すです。然し其れと共に僕は満腔の熱情を以て君の壯舉を祝するで

す。」と柳田君は續いてコップを上げたが又調子を變へて、「然し何かにつけて思ひ出したがるでせうな。僕は未だ細君の味は知らないですね。」

「はゝゝは。もう此處まで踏出して、機意氣地のない事が……はゝゝは。と殊更に笑つたが其の様子は如何にも苦し氣に見受けられた。

カン／＼と折から父もや鐘を打つ音が聞えた。硝子戸一枚で僅かに塊されこある船窓の外には依然として波と風とが丸れ廻つて居たが、閉切つた船房の中は酒の香氣と煙草の烟に最う暖か過ぎる程になつて居る。いつか談話にも疲れた掛けた私等は船房中に揺き渡る電燈の光を今更の様に眺め廻した。柳田君は軈て思ひ出した様に時計を引出して、

「最う一、時だ。大變お邪魔をしました。其れぢやうですか。大變お邪魔をしました。其れぢやア最うお暇ませう。」と岸本君が先に座を立つた。

「まあ可いぢや有りませんか。有難う。今夜はお底で非常に愉快だったので。明日も又怎う云ふ風に送りたいですな。其れぢや……と戸を開けて、グッドナイト！」と柳田君は何か分らぬ英語を口の中で唱へながら



を振つて各自の網の中へ獲物をつかみ入れる。彼等夫婦は宿屋の案内と稱する一人の男に連れられて、大きな荷馬車と人相の悪い亞米利加の勞働者が彼方此方にころ／＼して居る汚い町から、唯ある露地に入り、暗い戸口を押明けて、狭い階子段を上るのでは無く、地の下へと下り、薄暗い一室に誘はれた。

此處で過分の周旋料を拂はせられた後妻は市中の洗濯屋に働かす男は市からは十哩ばかり離れた山林の木伐に雇はれる事となり、甚も猶薄暗い林の中の一軒家に送り込まれた。此處には三人の日本人が同じく木伐となつて寝起して居たが、其の中の親方らしい一人が、

「知らねえ國へ來たらお互が頼りだ。此れからは皆な兄弟の様にして働かうよ。」と云ふので、彼も殊の外安心して、毎日仲間と共に西洋人の親方に監督されながら、一心に働いて居た。

仕事から歸つて來ると、寂しい此の小屋の中で、新參の彼は三人の仲間から問はれる儘に色々と身上品をする……と親方らしい一番強きうな男が眼をぎら／＼として、

「噯アをシアトルへ置いて來たツて……まア何て云ふ不用心な事をしたもんだ。」と如何にも落いたやうに、大聲で他の仲間を見廻した。

「だつてお前さん、此の國へ來たからにや稼ぐのが目的だから、噯と別れて居る位の事は覺悟の上だア。」と新參の彼は然し悲しきうな調子で云ふと、彼男は續いて、

「乃公の云ふのは然うぢや無え。それアお前さんの云ふ通り稼ぎに來たからにや其の位の覺悟は無くちや成ら無えが、女一人をシアトルへ置くなア、川邊へ小兒を遊ばしとくよりも喰存だと云ふのさ。」

「へーえ。どうして？」

「お前さん、まだ來たでだから知らねえのも無理は無え。シアトルてえ處は……シアトルばかりにや限らねえ、此のアメリカへ來た日にア、何處へ行つたつて女一人を安穩にさしとく處は有りやア爲ねえ。まア瑕をつける位ならまだしもだ。お前さん、悪くすると最う二度と噂の顔は見られねえぜ。」

「全くさね。用心するが可いよ。」と他の一人が付加へた。以前の男は暫く無言で、只だ最う泣き出しさうな顔をして居る新參者の様子をば、上目で見ろ／＼見遣つて居たが、先づ大きなパイプで煙草を一吹きながら、

「この國へ來たら、何様厄ツちよでも、女と云ふ女は皆な生きた千兩箱だ……千兩ぢや無え

千兩箱だ。だから續いて女術商賣をして居る奴が、鶴の目鷹の目で女を搜してゐるんだが、時には随分無慈悲な仕事をやるよ。此れア眞實の話だぜ。夫婦連で往來を歩いてゐる處をいきなり、後から行つて亭主を撲り倒して女房を搔撓つて、それなり雲隠れを爲つた。此の廣いアメリカだもの最う分るものか。一晚の中に何處か遠い處へ行つて女郎に賣れア、千兩は満手で粟だ。お前さん、悪い事は云はねえ、早くどうか爲ないと飛んでもねえ事になるぜ。」

新參の彼は最う眼に涙を浮べて居た。と云ふものゝ今の身分では如何する事もできない。以前の男は他の仲間二人と暫く顔を見合して何やら互に合點した様に目と目で領付き合ひながら、

「此うしたら如何だね。一層の事、此處へ噯を呼び寄せたら……。」

「何ほ何だつて、其様事が……。」

「出來ねえと云ふのかね。其れア表面は何うか知らねえが、此の山の中の一軒家で、日本人は乃公達三人きりだ。心配する事はねえ。此處へつれて來りやア、お前も毎日女房の顔が見られるし、乃公達だつて煮炊や洗濯もして貰へるし、食ふものだつて、乃公達四人で、分けてやりやア、

心を動かさずには居ない。思ひ返すまでも無く、過ぐる年故郷を去つて此の國に向ふ航海中、散歩の上甲板から、彼等労働者の一瞥を見て、私には如何なる感想に打たれたか。

彼等は人間としてよりは寧ろ荷物の如くに取扱はれ、汚い船底に満載せられてゐた。天氣の好い折を見計らつて彼等はむく／＼甲板へ上つて来て茫々たる空と水とを眺める、と云つて心弱く我等の如く別に感慨に打たる様子もない。三人四人、五人六人と一緒にゐて、何やら高聲に話し合つて居る中、日本から持つて來た煙管で煙草をのみ、吸殻を甲板へ捨て、通り過ぎる船員に叱責せられるかと思ふと、やがて月の夜などには、各自の生國を知らせる地方の流行唄を歌ひ出す。私は彼等の中に聲自慢らしい白髪の老人の交つて居た事を忘れない。彼等は外國で三年の辛苦をすれば國へ歸つてから一生樂に暮せるもののみ思込んで、先祖が生れて而して土になつた畠を去り、伊太利の空よりも更に美しい東の空に別れ、移民法だの健康診断だのと、いろ／＼な名目の下に行はれる幾多の屈辱を甘受して、此の新大陸へ渡つて來るのである。然しこの世は世界の何處へに行かうとも皆な同じ苦役の場所である。彼

等の中の幾人か其の望みを達し得るのであらうと、色々悲しい空想の湧起るにつれて、私の目には今まで平和と静安の限りを示して居た行手の牧場は、忽ち變じて云はん方なき寂寥を感じしめ、松の森林は暗澹として奥深く、恐怖と秘密の隠家である様に思はれた。

友とはある木陰に車をよせて休息するのを幸ひ、私は近寄つて、「君は知つて居るかね。どうして狂氣などに成つたのだらう。」

「あの、労働者のことかね。と友は暫くして後初めてその意を得たものゝ如く、一大概は先づ失望と云ふ奴が原因になるんだが、一人はそればかりぢや無い。實に可哀相な話さ。然しさう云つた様な話はアメリカには珍らしく無いよ。」

「どう云ふ話だ。」

「僕も人から聞いた話なんだが、いくら日本人の社會が無法律だつたからつて、此れなんぞは随分激烈いと云つて可いね。もう六七年前の事だつて云ふ話だが、と友は衣囊から煙草の袋を取り出し指先で巧に巻煙草を作りながら話した。

その頃には丁度シアトルやタコマへ日本人が

頻と移住し始めた當時のことで、今日の様に萬事が整頓して居ないから、種々の罪惡が殆ど公然に行はれて居た。カリフォルニアの故から彷徨つて來た無頼漢や、何處の海から漕ぎて來たのか出所の知れない水夫あがり、親類など、少しく古參の滯米者は、爭つて案内知らぬ新渡米者の生血を吸つたものだ。此う云ふ危險な惡所へと彼——發狂者の一人は其の友と二人連で日本から出稼ぎに來たのである。

一體日本の農人が渡米の野心を起す最大の原因は新歸朝者の誇大な話を聞く事であるが、彼も止しく其の中の一入であつた。彼は舊夢の花咲く紀州の野に住んで居たが丁度その村へ十五年目で布哇島から歸つて來た男があつて、アメリカと云へば金のなる木が何處にも生えて居る様な話をする處から、ふいと未だ見ぬ極樂へ行く氣になり、殊に女の労働賃金は男よりもよいと云ふ様なことから到頭夫婦連の渡米が實行される事になつたのである。シアトルと云ふ其の地名さへ發音するには舌が廻らぬ程な不知案内の土地へ上陸すると波止場の上には船の着くのを待つて居る労働日の周旋屋、宿屋の宿引、醜業婦密輸入者など云ふ、何れも人並よりは鋭い眼を持つて居る輩が、それ／＼腕一杯の力

も仕方がないよ。と云つて二三間車を馳らせながら、後なる私の方を振り向き、「さうだらう、君、強いものには抵抗する事は出来ない。だから我々は Mighty God... 乃ち我々よりは強い全能の神に抵抗する事は出来ない。いやでも服従して居なければ成らないのだ。」

一人彼は愉快さうに笑つて、夕陽の光眩き牧場をば、一散に車の速度を早めたので、私は無言の儘彼に遅れまじと、頻にペダルを踏みしめた。

何處からともなく野飼の牛の頸につけた鈴の音が聞える。南の方ポートランド行の列車が野の端れを走つて居る。

(明治三十七年一月)

## 岡の上

最初この亜米利加へ来た當座、私は暫く語學の練習をする目的で、その時滞在して居つた市俄古の都會からはミシシッピーの河岸に沿つて凡そ百哩あまり人口四千に満たざる小さな田舎町に建てられた某と呼ぶ大學へ通つて行つた事がある。已に人も知つて居る通り、米國

のカレッジと云へば大概は同じ宗教組織の私立學校で、誘惑の多い都會をば遠く離れた景色のよい田舎に建てられ、教師は生徒と一緒に先づ理想的の純潔な宗教生活を營んで居る。今私の通つて行つた學校も其等の一つで、私は最初此うぶ邊鄙な土地へ来たならば、最う日本人には會ふ事もあるまいと思つて居た。處が意外にも、私は此に不思議な煩悶の生涯を送つて居る一人の日本人に邂逅したのである。

市俄古を出てから四時間ほど、何處を見ても眼の達く限り玉蜀黍の畠ばかり。茫々とした大平野の眞中に立つて居る小さな停車場へ着くや否や、私は汽車を下り、重い手鞆を下げながら、鶏や子供が大勢遊んでゐる田舎街の筋道を行盡して、小高い岡の上、繁つた樹木の間に在る學校を訪問れると、如何にも深切らしい老つた校長が、市俄古の西洋人から貰つて來た私の紹介状をも見ぬ中に、最う極く親しい友達同士であるかの如く顔中を皺にして笑ひながら、

「好く尋ねてお出でなすつた。渡野氏はさぞ貴下を見て喜ぶ事であらう。何しろ彼の人は私の處へお出でになつてから、丁度三年近く、一度も日本人にはお會ひなされないのですか

ら...」  
私は茫然として何の事か其の意を解し兼ねて居るにも關らず、老人は猶滿面に笑を浮べて、「ミスター渡野とは日本におゐるの時から御存じなのですか、又は米國へ御出でになつてから御交際なすつたのですか。」

校長は私が日本人である處から、此の學校に居る同國人の渡野君を尋ねて來たものとのみ早合點して了つたので。然し此の誤解は直様無邪氣な一場の笑ひとなり、私は續いてミスター渡野なる人に紹介された。

年は三十七八であらう。破れぬばかりに着古した縞の背廣に、色の褪せた黒い襟飾。華美な市俄古の街などでは見られぬ位な質素な風をして居たが、黒い光澤のある頭髮は亞米利加風に長く生じて金の鼻眼鏡を掛けた日鼻立女にしたらばと思ふほど美しい。顔色は白いよりは少し蒼白い方で、その大きい眼の中には何處か病的に神經過敏な事が現れて居た。

彼は、校長が私に云つた言葉とは全然違つて、最初私を見ても別に嬉しいいふぶきも見せず意外だと驚く氣色もなく、無言で握手した後は殊更らしく大井を見て居た。「どういふ風で私の方が彼に劣らず、極く人好きの悪い無愛



女の一人位大した事は有りや爲ねえ。」

「怎う云はれたが、然し彼は此の意見に對して同意する力も無ければ、又不同意を稱へる資格もないのである。萬事は直ぐ様彼男の云ふが儘になつた。乃ち次の日に、彼は彼男と共に市中に出て妻を連れて林の中の小屋に歸つて來たのである。」

暫時は事もなく、彼は幸福に妻と共に其の日を送つて居たが、丁度今日は日曜日と云ふのに朝から雨が降出し、一同は外へ遊びにも出られず、日小屋の中で酒盛りを始めて、飲むやら唄ふやら、何時しか夜も晩くなつた。最う寢床へ行かうと云ふ時になると、彼男は座を立ちかけた新參者をば、

「おい、鳥渡相談があるんだ」と呼び止めて他の仲間と目を見合せた。

小屋を蔽ふ深林は雨と風とで物凄いいりり聲を立てゝ居る。

「何です。」

「鳥渡お願ひがあるんだ。」

「何です。」

「外でも無い。今夜一晩喰を貸して貰ひてえんだが……。」

「はゝゝゝは、大變酔つてゐるね。」

「おい。酔つて云ふんぢやねえ。冗談でも無い、洒落でもない。相談するんだが、どうだい、はゝゝゝは。」と新參者は餘儀なさきうに笑つた。

「相談するのに笑ふてえ奴が有るかい。と今度他一人が、どうだい、兄弟の泣だ。今夜一晩乃公達三人に貸して呉れめえか。」

「……。」

「物は相談だ。どうだい。不承知なんかね。不承知なら先ア可いや。然し能く考へて見な。」

此の山の中で、四人此うして働いて居てよ。お前一人好い目をして居るからつて、其れでお前は氣が済むのか。能くある事つた、風の吹く晩に山火事が起つたら、乃公達四人は死なば一緒だ——一人ぼつち仲間を置き去りにして逃げる譯にも行くめえ。本部からまかり間違つて食料が届かない事でも有りやアお互に食ふものも半分づつ分けなきやア成るめえ。人間は皆な兄弟分自分ばかりが好きやア其れで好いと云ふもんぢや無えんだぜ。乃公達ほな、此のアメリカへ來てから最う五年になるんだが、たまに一廻だつて柔かに手に觸つて見た事もねえんだ。お前の寶物は誰のものでも無え、チャンとお前様の物だと云ふ事は分つて居らア。だからな、乃公

達はその無理無體に據等つて乃公達のものに爲て了はうと云ふんぢやねえんだ。叫い、唯だ貸して貰はうとお願ひ申すんだ。」

「一早い話がよ。お前は乃公達の持つて居ねえものを持つて居るから、それを分けて呉れと云ふのよ。」

「どうだい。話が分つたら、早く返事を聞かうぢや無えか。」

男は死んだ人の如く眞青になり軀身をぶるぶる顫すばかり。女はその足許に泣き仕れて早や救を呼ぶ力さへ無い。

風雨は猶盛に人なき深山の中に吹狂ふ。やがて小屋の中には一聲女の悲鳴、それを聞くと共に男は失心して其の場に倒れて了つた。

彼は條生したが、それなり氣が狂つて最う再び元の人間には立返らなかつた、彼は痴狂院に收容さるゝ身となつたのである。

＊

＊

＊

＊

私は殆ど茫然として了つた。友は早や草の上に横へた自轉車を引起し、片足をベケルに掛けながら、

「然し仕方がないさね、然う云ふ運命に遇つたのが不運と云ふより仕様がなないさね。我々は自分より強いものに出遇つたら、最う何をされて

の宗教生活に接近したのであるとの事。

彼は無論生活の爲めに職業を求むる必要がないとは云ふものの、此くも眞面目な煩悶の爲めに、已に學業を卒へた筈も、猶ほ故郷へは歸らず、獨り旅の空に日を送つてゐるのかと思つた時には、私は心の底から非常な尊敬の念を生ぜずには居られなかつた。

## 二

私はこの畏敬すべき友と寒く、米國の一冬を甚だ平和に愉快に送過して、やがて四月といふ昇天祭の其の日から、折々暖かい日光に接する様になり、程もなく待ち焦れた五月の訪問を迎へる時となつた。冬の寒氣の忍び難いだけに、此の五月の空の如何に楽しいか。昨日までは全く見るに堪へぬ程寂しい不愉快な色をした平野の面も忽ち變して一望限りなき若草の海となるので、其の柔かな緑の色を麗かな青空の下に眺め見渡す心地、あゝ、胸に響へようか。

私は林檎の花吹く果樹園を彷徨ふやら、牧場に赴いて野飼の牛と共に柔かな馬肥草の上に横臥るやら、或は小流れの邊に佇立んで、草の花の香に酔ひながら野雲雀と共に歌ふなど、

少くとも毎日三哩以上を歩まずには居なかつたであらう。富有な農家では毎日の午後を待兼ねる様にして、馬車を馳らせて野遊に出て行く。女や子供の笑ひ喜び聲は到處に聞えるのであつたが、此に唯一人、彼の渡野君ばかりは此の麗し春の來ると共に次第々々に陰鬱になり、遂には一度として私の誘出す散歩に應じた事もなく、自分の居室にのみ引籠つてしまつた。

或夜のこと私はその居室に訪問れて、無理にも想像しかねるその原因を聞きたゞし、出来るものなら幾分か慰めて見ようと思つて、その室借をしてゐる下宿屋の門口まで行つて見たが、いざとなつて見ると、何となく妙に氣怏れが爲て了つた。事實私はまだ断然と渡野君の人物を解釋する事が出来ない。恰も英雄偉人に對する時吾々は尊崇の念に伴うて或る畏懼の念を生ずる如く、私は今だに渡野君に對しては何となく氣味悪い感じを取除ける事が出来なかつたので、其のまゝ歩みを轉じて彼方此方と春の夜を來るともなしに去年の冬初めて渡野君と話をした丘の上に来た。

その時分には衰衰へて居た一株の朴木にも、今は雪の様な林檎の花が咲き亂れ、云ふに云は

れぬ香氣の中に私の身を包んだ。柔かな草の上に佇立み四邊を眺めると、此れこそ地球の表面であるといふやうな氣のする程廣々した大平野の上に、朦朧たる大きな月が一輪、所々の水溜りは其の薄い光を受けて幽暗な空の色を映して居る。後の學校では女生徒の樂み遊ぶ音楽が聞え、近くの田舎街には家々の窓に、く静な燈火の光が見える。

あゝ魔術が作出した様な夢とも思はるゝ異郷の春の夜。

私は忽ち恍惚として自分ながら解せられぬ優しい空想に陥つて居たが、突然後から肩を叩いて、

君。と一聲、思ひ掛けた渡野君である。彼は何が用あり氣に、今君の處をお尋ねした。私の處を……と私は戸口を叩き兼ねた事は云はずに了つた。

實は急にお話したい事がある。それで君の處へ出掛けたいのですが……何です、何様事です。と私は頗る驚かされ

た。まあ此處へ坐らうや有りませんか。彼は私よりも先に林檎の花の下に坐つたが、暫くは無言で、大方私と同じく、異郷の大平野を

想な性質である處から、私は唯彼が此の學校の哲學科で東洋思想史の研究に關する資料蒐集の補助をして居る傍ら、折々聖書研究の講義室へ出席すると云ふの外は如何なる經歷を有つて居る人物か、一向聞き知る機會が無かつた。

然し三月程経つた或る土曜日の午後である。私が此の地へ來たのは未だ暖かい九月の末であつたから、其の頃には深緑の海をなした玉蜀黍の苗も今は暗澹たる灰色の空の下に一望遮るものなき曠野となつて居る。

午後の四時を過ぎたのみであるが太陽は早くも見渡す地平線下に没し去り、灰色の空の間に低く一條の力なき紅色の光を残すばかり、空氣は沈靜して骨身に浸透る寒氣はしん／＼と荒野の底から湧起つて來る。私は停車場内の郵便取扱所へ行つた歸途、校舎に近い岡を上つて行くと、一株枯木の立つて居る此の岡の頂上に悄然と立ちすくみ、云ふに云はれぬ悲痛な顔付をして、寒さに凍る荒野の端に消え去らんとする夕陽の影を見詰めて居る渡野君に出會つた。

渡野君は私の姿を認めると唯一言、「荒れ果てた景色ですなア。とちつと私の顔を見詰めた。」

私は異様な様子に驚いて直には何とも答へられなかつた。渡野君は俯向いたが今度は獨言の様に、

一人は墓碑の夕暮を悲しいものだと思ふけれど、それは唯だ「死」を聯想させるばかりだが、見給へ此の景色を。荒野の夕暮は人生の悲哀生存の苦痛を想出させる。

其れなり無言で二人は靜に岡を下つた。渡野君が突然私を呼掛けて、

一體、君は如何思つて居られる。人生の目的は快樂であるか、或は又……と云ひ出したが、不意と自ら輕率な問を發した事を非常に恐れた如く鋭い目で私の顔色を伺ひ、更に、「君は基督教の神を信じて居られますか。」

私は信じようとして未だ信ずる事が出来な、然し信ずる事の出来た曠野には、如何に幸福であらうかと答へた。すると、渡野君は聲に力を入れて、

懷疑派ですね。よろしい／＼と腕を振動かしたが、軀に靜に、君の懷疑説は如何云ふのだね。私も無論アメリカ人見た様な信仰は持つて居ないのだから……一つ君の説を伺はうぢや無いか。

此處で私は遠慮なく私の宗教觀や人生觀

なぞを語つたが、すると、其れは不思議にも彼の感想と大に一致する處があつたのであらう。彼は生々とした目の色に非常な内心の歡喜を現し頻と私の才能を賞讃して呉れた。

誰に限らず未知の一人が奇合つて、幾分なりとも互に思想の一致を見出した時ほど、愉快な事は恐らく有るまい。それと同時に又此れ程相互の感情を親密にさせるものも他には有るまい。

此れからと云ふもの、私等二人は朝夕相繼ぎに相談する親しい友達になつたので、問はず語りには渡野君の經歷も先づ大抵は知る事が出来た。彼はある資産家の一人息子であつた。七年前前に洋行して、東部の大學で學位を取り、その後暫く此れと云つて爲す事もなく紐育あたりに遊んで居つたが、或る會合の席で此の學校の校長と知己になり、丁度學校で東洋の思想風俗などの研究に關して、一人日本人が欲しいと云ふ處から、自分から望んで此の地へ來た。然し彼自身は其れ程深く東洋の學問は知つて居らぬ。幸うじて研究の材料を蒐集する手助けをする位なもので、此地へ來た第一の目的は、他でも無い、持前の懷疑思想を打破り、深い信仰の安心を得たい爲めに、殊更選んで邊鄙な田舎



影に酔ひ、夕となれば燈火きらめく邊に美人の歌を聞き、何時か二三年の月日を夢の様に送つて了ひました。

然し或日の事、私は東京の人目を避ける爲めに、或る閑靜な海邊の小樓に美人三人までを連れて遊びに行つて居たが、それは丁度冬の夕暮で、午後の轉寢から不圖眼を覺して見ると、私の最も愛して居た美人が唯一人、私の爲めに膝枕を爲せた儘、後の壁に頭を凭せ掛けてうとうとと睡つてゐるばかり、他の二人は何處へ行つたのやら、室中は薄暗く、戸外の方では物の叫ぶ様な寛漫い潮の聲が遠く聞えるばかりです。

私は其の儘再び目を閉ぢたが、考へると今頃此様處で私が此様有様をして居るとは世の中に誰が知つて居よう。世の中は唯だ潔白なる論客として自分のある事を知つてゐるのみだ。

さう考へ出すと私は可厭な切ない感じに責められた。尤も此れは今初めて氣が付いたと云ふのでは無いのです。最初から私は此種の快樂を決して賞讃若しくは獎勵すべき善行とも爲ませんし、又慈善事業の廣告の様に公然に發表すべき性質のものとも爲て居ません。即ち極めて秘密にすべきものとして、今日まで巧に世

間の耳目を潤滑して居たのです。此の後とても秘密にして行く事は容易です。今の世の中に此位の秘密が保つて行けない様では殆ど何事も爲す事は出来ません。私は此點から云へば確に自ら才子と稱しても差支は無いでせう。然し私の今感じたのは若しや私が此う云ふ秘密を有たず、云はゞ青天白日の身であつたら如何であらう。世間が想像する通りの清い身の上になる事が出来たら愉快であらうか。不愉快であらうか。無論私は愉快であると決斷したです。何故ですか。秘密は一つの係累も同じ事で、云はゞ荷厄介な物ですからね。

こゝで私はいよく悔悟の時期に入る事となり、此後け斷じて俗世界の快樂には近寄るまいと決心した。同時に一日も早く獨身生活の危険を避け、自分の決心を斷行する助けともなるやうな神聖なそして賢明な妻を持たうと云ふ心を起したのです。

#### 四

私は如何なる婦人を妻に選びましたらう。それは看護婦でした。

丁度その頃私は劇烈な風邪に冒されて醫師の注意する儘に一人の看護婦を雇ひ、其の手に

介抱されて居た。看護婦は其の時二十歳の處女で、身丈は低い方ではなかつたが非常に瘦せてゐて容貌は何と評しませうか。兎に角醜い方では無かつたですが然し決して男の心を惹く様な愛嬌も風情も無いのです。頗る瘦せた顔の色は唯だ雪の様に白いばかりで、何時も何事をか默想して居ると云ふ様に、沈んだ大きな眼を快目に爲せて居ます。幼い時に両親に別れたまゝ、痛ましい孤兒の生涯をばひたら神の信仰に耽けて居るとの事で。

私は病中屢々夜半に眼を覺ます事があつたが、其の時には必ず私は黄いランプの火影に聖書を讀んで居る彼女の姿を見ぬ事はなかつた。深け行へば夜半に端然と坐つて居る眞白な彼女の姿は何時も私をして云ふに云はれぬ平和と寂寞の感を起させます。此の感の神々しく氣高い事は地上に住む人間以上のもものとしか思はれぬので、私は考へるともなく若し恚う云ふ宗教心の深い婦人と結婚したらば私は如何なる感化を受けるであらうか。私の妻に選ぶ私は病氣が全快すると直ぐ、此の事を申出したのです。

彼女に驚く心をちつと抑靜めて徐ろに辭退

徹ふ春の夜の神秘に打たれたのであらう。然し忽ち我に返つた如く、私の方に直つて、

「私は二三日中に君とお別れするかも知れない。」

「え。何處へかお出でになるんですか。」

「最う一度紐育へ行つて見ようと思ふです。」

或は歐羅巴へ行つて見るかも知らん。兎に角この地を去る事に決心しました。」

「何か急用で……」

「いや、私の事だもの別に用はない。只だ感ずる處があつたから……」と云つたが力ない語調であつた。

「何をお感じなすつたのです。」と質問すると彼は一寸息をついて、「それを今夜君にお話したいと思つたのです。君との交際は未だ半年になるかならないが、何となく最う十年もお交際したやうな心持がするのです。だから、私は萬事残らずお話しして、そしてお別れしたいと決心したのです。然し又何處かでお會ひ申すでせう。君も此れからアメリカを漫遊なさると云ふのだから、淋しく微笑んだ後彼は靜に語り出した。

### 三

日本の大學を卒業してから間もなく私は父親

に別れてその儘家産を譲受けたので、此の財力と新學士と云ふ名前で、此後は自分の思ふ儘の方向に世を渡る事のできる頗る幸福な身分となつたのです。私の修めた學科は文學でしたから私は自分の周囲に集つて来る多くの友人の勸告する儘に一つの會を組織し人生と社會問題の考究を目的に立派な月刊雜誌を發行する事とした。

兎に角私の名前は已に學生の時代から、折々投稿して居た雜誌新聞などの所説で多少一部の人には知られて居たので、今や父から譲られた資産を後橋にして堂々と世の中へ押出した景氣は先づ大したものでした。私の代表した團體は今度初めて世間へ出た若手の學士ばかりで組織されたのですが、其の機關雜誌は廣告を出したばかりで、未だ初號を發行せぬ以前から、最う世間一二の有力な雜誌の中へ數へられて居ました。私の周囲には無論阿諛を呈する輩もある、此の當時私は全く自分に對する讚辭より以外には、殆ど何にも聞く事が出来ない程でした。

その時私は年齢二十七、猶獨身です。虚言か誠か、某伯爵の令嬢は私の演説する様子を見てから戀煩ひをして居るとか、或は何處

とかの女學校では私の人物評論から女生徒の間に一場の紛擾を起した杯云ふ噂は少からず耳にした。否現に二通の艶かしい手紙さへ受取つて居たのです。

で、私は兎に角自分の持つて居る或力が、異性の心情に對して、微妙な作用を爲すものだ云ふ事を自覺せずには居られなくなつた——自覺すると同時に何とも云へぬ愉快を感じたのです。そして其の愉快は自分の主義と自分の人格が、世間から重く迎へられて居ると云ふ事を自覺した時よりも、更に深い快感であつた。何と云ふ事でせう。私は如何に自分を保護しようとしても致し方がない。其の一瞬間、其の一刹那に私の情が然う感じたのですから。

私は斯様に深い愉快を感じると、其れに續いて、直接此の快樂を出来るだけ進まして見たいものだと思つた。すると心の中で、「早く結婚しては不可い。男の側から世に此上の美人は無いと云ふ位な人の妻と、其れ程ではない處女とを比較して見て、何れがより強い空想を起させるか。男の魔力も其れと同じ事だ。」と云ふ様な聲を聞いたのです。

私は最う此の聲の奴隷です。出来るだけ自分の姿を綺麗にして、朝には秋波の光と微笑の

取掛窓に、女は兩腕を載せ襟顔をばひとと其の上に押當て、餘念もなく午睡して居るのです。すると一面に落掛る春の日光と窓を覆うた桃花の反映とで、女の半面は云ひ難い紅の色を呈して居る。十歩ほど此方から眺めると、何うしても繪としか見えません。

一月程前に家へ行儀見習ひとかで奉公に來た小間使、年は十九とやら。然し私は目様事を考へる暇は無い。忽ち綺麗な蝶が一つ、ひらひらと飛んで来て、紅色を呈した女の愛らしい耳朶をば何かの花朶とでも思つたかその上に棲つた。

私は最う世の中の事も自分の身の上も何も彼も忘れて居ます。無論此の瞬間には自分は此の女を愛して居るか否かと云ふ事も意識しては居ません。唯その傍へ行つて、燃える様な頬に觸つて見たいと、私の身の中を流れて居る血の温度が私に慇懃命令したのでせう、私はすつと傍へ近寄らうとした。が、其の時女は不意に眼を覺すや否や驚いて四邊を見廻す途端に、私の姿を認めて、少時は爲す處も知らぬ様に……忽ち顔を蔽うて次の室の方へ逃げ込んで了ひました。

實に瑣細な事件である。然し私の身には正し

く非常な大事件です。私は此の目から自分では意識せぬ間に絶えず以前の華美な生涯を回想し始めた。私の耳には音楽や美人の囁きが聞え眼には紅柑の繻へる様が見える。私は自分の身を救つて呉れる神の化身とまで尊敬し自

中に置かぬ様になつた。單に其れのみならば猶だ可い。段々彼女を嫌ふ程度を強めて來たのです。私は一心にこの惡心を制壓しようと試みた。同時に彼女に對して此の精神の變化を知らすまいと非常に苦心した。然し何も彼も無駄らしかつた。彼女は何も云はず又少しも素直には現さなかつたが、彼の洗んだ伏日でも最う既に何も彼も知り抜いて居るらしく見えた。私は魅

て彼女を恐れる様になり、成りたけ彼女の眼から遠ざからうと爲たです。すると如何でせう。彼女は其れをも既に見抜いて居ると見え、向うからも成る可く姿を見せぬ様にと、終日自分の居間に閉籠つて了つたです。私は實に何とも云へません。唯だ最う泣き度い様な心持になりました。

と云つて私は此儘に打捨て、け置けない、一度妻と選んだからには如何しても彼女を愛さねば成らないのです。私は最う半分夢中で如

何にかして彼女に對する嫌惡の情を取去りたいと焦せれば焦せる程、事實は増々惡くなるばかり。遂には何となく氣が變になつた様に思はれました。或夜私は睡眠中に不意に何か物音を聞き付けた様に思つて、喫驚して眼をさました

たが、すると何時の間にか彼女が眞白な看護婦の着物を着て、端然と私の枕許に坐つて居る様な氣がするかと思ふと、忽ち何處からともなく聖書を読む様な聲が聞える。いや其の聲の陰氣な事氣味の悪い事と云つたら最うお話にはなりません。私は覺えず寢床から飛起きるや否や枕許のマツチを攫り取つて燐火を點けた。誰も居よう筈は無い。唯だ最うしん／＼とした夜です。

これから毎夜の様に陰氣な聖書の聲が聞え出して到底安眠する事は出来ない。一層の事結婚した當時の様に最う一度彼女と並んで寝て見たら如何であらう——想ひ思ひ返して私は然う行つて見たが益々不可い。夜が深けると共に眼はいよく冴えて来る。私の傍に横はつて居る彼女の身體は宛然石の様に冷たく感じられ、次第に私の身體の熱までが冷えて行く様で、若し今夜、晩彼女と同衾して居たら、彼の美しい花を見て愉快を覺え、暖かい酒に觸れて甘きを



しました。然し私は無理にその手を取り今迄の罪惡を残さず儼然として、私は神聖なる彼女の愛に因つてのみ世の快樂世の罪惡から身を遠ざけ誠の意味ある生活に入る事が出来るのだ……と云ふ事を話すと、彼女はちつと聴入つた後、忽ち感激の涙を零しながら、口の中で祈禱を繰返しました。人は笑ふであらう、或は私の事を醒興とでも云ふであらう。然し私は全くその時は彼女は私の身を救ふ天の賜物であるとのみ信じたのです。

然し其れは非常な誤りでした。單に誤りならばまだしも、其れは一層私の身を不憐ならしむる原因になつた。私は彼女をば救ふの神として其手に頼り続けると共に、彼女に對して滿身の愛情を注がうと企てたが、然しかの暖かい柔かい戀愛の情は如何しても湧いて來ないのです。單に彼女に對する尊敬の念を起し得るのみで、つまり二つの聖靈を一つに結付けて了ふ心地には如何してもなれ無いです。

春の日の事、私は彼女と唯だ二人、強ひて色々な談話を私の方から仕掛けながら家の庭園を散歩した——夢の様な麗かな春の日です。青空は玉の様に輝き、櫻や桃の花は今を盛りと咲亂れ小鳥は聲を限りに歌つて居る。若い血潮の燃

える時は此存ならずして何れにありませうか。我等二人は花の下の小亭に腰を掛けようとした時、私は彼女の手を握締めその頬の上に接吻して見た。彼女は私の爲すが儘にさせました。然し彼女の眞白な頬はその色はかりでは無い。全く雪の様に冷く、私の唇が感じた此冷氣は強ひて喚起した滿身の熱を盡く冷して了つたやうに思はれた。彼女は大理石の彫像です。

私は握つた手を放し呆れた様に其の顔を打目成ると、彼女は私の顔を見返してにつこりと滑稽に笑つたのです——私は覺えずゾツとした。何の故か自分ながら解りません。唯何と云ふ譯もなく私の心の中には云ふに云はれぬ不快な嫌惡の情がむら／＼と湧起つたのです。

私は其の儘座を立つて獨り木立の方へ歩いて行つた。彼女は別に尾いて來るでもなく矢張元の處に腰掛けて例の如く沁んだ眼で折々空を見上げて居るのでせう、聽て小聲に讚美歌を歌ふのを聞きましたが、其の讚美歌の調子が、此の瞬間には、何とも云へず不快に聞きなされた。

私は實に自ら解するに苦しむ。讚美歌の調子と云へば私は以前放蕩の生活をして居る最中でさへ、折々星の靜な夕たぞ會堂の窓から漏れるその歌を聞く時には、如何にも人の心を休

める靜な音樂として、少くとも不快な感を生じた事などは無かつた。私は幾分か情無いやうな心地になつて一度に譯も分らぬ色々な事を考へながら、木立の中を過ぎて裏庭の方へ歩いて行きました。

此處はかなり廣い畠になつて居て夏の頃には胡瓜や豆の花などが美しく咲き亂れて、夕月の輝く頃など私は殊更此處を愛してゐたのです。が、まだ種蒔をしたばかりの事とて、平かに耕した一面の土を見るばかり。然し何一つ遮るものが無いので大空から落ちる春の光は日も眩むばかりに明るい。私は滿身に此の光を浴びて蒸される様に暖かく、傾際には薄く汗をかく程となつた。最う彼女の歌ふ讚美歌も聞えず、空中を飛過ぎる燕の聲を聞くばかり。春の日の日盛りは時として深夜よりも靜な事があります。今迄の混亂した考へも何處へか消去り、私は唯茫然として空の果に傾く動いて居る白雲を見詰めながら、今度は畠の端の勝手近い家の傍へ歩を移した。

爛漫たる桃の花が日についた。全然火の燃えて居る様です。すると忽ち此の桃花の間に女の姿……私は覺えず立止つた。桃の花は家の屋根を隠すほどに咲亂れた丁度その木蔭の低い

決斷するかをお知らせする爲めに、遠からず二つの中何れか一枚の眞像をお送りしませう。若し私にして、幸ひにも自分の豫想して居る如く、心の底から快樂の念を去ることが出来て居たならば、貴兄は私が看護婦と結婚した時の眞像をお受取りなさるでせうし、若し然うでなくば、私は……然うです、佛蘭西あたりの妖艷人を懷殺するやうな舞姫の眞像をお送りしませう。それに因つて私の此の後の生活の如何なるかを御考察なすつて下さい。

(明治三十七年三月)

## 醉美人

千九百四年の夏、聖路易市に開始された萬國博覽會を見物するに、私には望んでも得られぬ程な好い案内者があつた。

それはS——と呼ぶアメリカ人で去年市俄町の町端れの同じ下宿に泊り合した事から、非常に懇意になつた畫家であるが、今度の博覽會にはその作をも出品して居ると云ふ上に、去る頃から丁度セントルイスに程遠からぬミゾリ州のハイランドと云ふ田舎に住んで居つたので、

私は先づその男に電報を打つて置いた後、やがて北方のミシガン州から汽車で十六時間の旅路——途中の景色と云へば米國大陸の常として唯廣漠たる玉蜀黍の畠と、折々は家畜が水を飲んで居る小川の邊や二三軒百姓家が立つて居る岡の上などに、果樹園らしい樹の茂りを見るばかり。それでも私は唯一人でいろ／＼な愉快な空想に左程倦み勞れもせずイリノイ州を横斷し盡すと、もうイースト・セント・ルイスの町からミズシッピの大河に架せられたイーザブリッヂと云ふ有名な橋をも後にした。

汽車の窓から河向うにセント・ルイス市の街端れの屋根が見え出す頃になると、北米大陸の諸所方々から此の中部の都會を終點として集り来る鐵道の線路は蜘蛛の巣を見るが如く、到底その數を讀む事は出来ない位である。砂塵と石炭の煙が渦巻いて居る中を種々雑多な物音が一つになつて唸るやうに湧返つて居る停車場の敷地へ這入ると、山の様な大きな機關車が幾輛ともなく黒煙を吐いて行きつ戻りつして居る。

其間をば此れは東部の方へ出發するのであらう二列の汽車が相前後しつゝ、我々の列車と擦れ違つたかと思ふと、向うの端の線路には、又我々と同じ方向に進んで行くのもある。諸君米

國鐵道會社の列車は此の中央大停車場のプラットオーニーに相並んで着するのである。

私は列車を下りて群衆と共に長いプラットフォームを行き盡し、高い鐵柵の戸口を出ると、其處は高い屋根、下はセメント敷の廣場に、男女の帽子は海をなして居る。私を出迎ひに來て呉れた彼のS氏はかう云ふ混雑には能く馴れて居るアメリカ人の事とて、早くも私の姿を見付けて駆け寄り、「Hi do you do」と元氣の可い聲で私の手を握つた。

私は挨拶などを扱て置いて直様如何云ふ作を出品したのかときくと、彼は如何にも満足した様にサンキューを二度も繰返したが、其れは後の楽しみにゆつくり話さうから何れにしても彼の住んで居るハイランドまで来るが可い。市中の旅館は此の暑さに加へて上を下への混雑。とても居られたものでは無いと云ふ。私は尊かれぬ儘に宏大な石造りの停車場を出て、照り輝く夏の日光に馬車と人が押合つてゐる往來をば二町程歩いて行くと、D——氏は、

「あの青く塗つてある電車に乗るのだ。一時間ばかりでハイランドの僕の家に向う角で止る」と云ひながら、體て行過ぎる一輛の電車を呼止めた。二人はそれに飛び乗つて次第にセント。

覺える私の神經は最う二度と再び然う云ふ微妙な働きをする事が出来ない様に次第に無感覺となつて行くが如く思はれる。私は一生懸命に掌で自分の皮膚を摩擦して多少の熱度を得た。いと試みたがそれも無効であつた。私は若し此處で眼を閉ぢて眠つて了つたなら、屹度其の儘死んで行くに違ひない。明日の朝陽の太陽が花園の花を照しても、鳥が囀ひ出しても、私は最う其れ等を見聞する事は出来まいと云ふ様な氣がして眼を瞑る事が出来ないのです。

夜の深け行くまゝに絲の様な彼女の寢息が耳につき始めます。絶えようとしては又續く其の呼吸につれて、彼女の肉體に宿つて居る靈魂は、次第々々に彼女が絶えず夢みて居る天國へと夜の靜寂に乗じて昇り行くのでは有るまいかと思はれ、觸ると無く、私は竊と片手を彼女の胸の上に載せて見た。彼女は仰向けに寢て居る其の胸の上に鼻と兩手を組合せ、全く少しの身動きさへ爲ません。忽ち水の如く冷いものが私の手に觸つた。覺えず私は手を引込めたが漸くに再び手搜りして見ると、それは彼女が何時も胸身圍さず持つて居る金の十字架でした。

此う云ふ風に私は毎夜不眠の結果から身體は

著しく疲勞して、平くも其間の轉移に幾分かの休息を得ると云ふ有様。此うなつては是非とも彼女の傍を遠ざかる必要が出来て來ます。彼女と同じ屋根の下に生活して居る間は到底如何なる手段も無効であると思ひ、餘儀なく私は旅行と云ふ事を思ひ付けて遂に外國行と云ふ事に決心したのです。

私は早速勉學の爲めと稱して米國へ行く事を妻に話しました。彼女は例の如く悉皆私の心中を見抜いて居ると云ふ様に、何の異議も稱へず、直様承知して呉れました。私は財産の三分の一を彼女の生活費として辭退するのを無理やりに受取らせ、飄然此のアメリカへ來たのです。

その後の事は一々お話しする必要は有りません。御存じの通り、何しろ此の米國と云ふ所は人間社會の善惡、兩極端を見る事の出来る所です。人は何方へなりと隨意に好む方へ行く事が出来ず。書と云ふものなき祕密俱樂部の一室、眞赤な燈火の下で、裸美人の肩を枕に鴉片の夢を見るもよし、又は浮世の豪華なぞは何處にあるかと思ふ様な田舎の宗教生活、朝な夕な平和な牧場に響き渡る寺院の鐘の音を聞くのもいせう。

私は兎に角一通り米國社會の大體を見たか

らは此の上此の地に止まる必要もない。何時でも日本へ歸つて而して以前よりはもつと華やかに私の好む如何なる事業をも爲す事が出来る。然し私にはまだ一つの疑問がある。私は今後再び浮世の快樂を回想する様な事はあるまいか。私は故國に歸つて幸福に彼の米の隣に冷

い我妻と生活する事が出来るだらうか、無論人は多少の差こそあれ、何れも兎己の力を持つて居ますから、私だとして決して自分を制して行かぬ事は無い。が、然し私は其で満足が出来ないのです。朝に聖書を展けた手で、夕竊に酒杯を舉げたい位なら、(例へば禁欲し得られるにせよ)寧ろ進んで酒杯のみを手にするが好

い。制欲と云ふことは意思の稍強いことを示すより外には全く無意義のものです。牢獄の中の囚人は一番の聖人です。彼等は牢獄の中に居る間は何か一つ悪い事は爲ません。

私は自ら好んで此のイリノイ州の淋しい田舎に最う三年近くを送つたのですが、私はまだ自分から安心する事は出来ません。私け最う一度都會の生活、都會の街に輝く燈火を見るつもりです。そして私は此後の生活について最後の決断を與へるつもりです。

私は明日貴方と別れします、私は如何に



「私の一番苦心したのは無謂此の微醉に眼だが、然し其れよりも猶苦心したわりに餘り人が注意して呉れないのは有名人種の皮膚の色だ。私の心では酒の暖氣が全身に滲り渡ると共に有りて諸有る血管中には所謂暖國の情熱が湧起つて来る——其の意味を私は眼の表情よりは寧ろ燈火の光を浴びた此の皮膚の色で現したつもりなんだが、何うです、さう見えませんか。」

私は何れとも答へられずに猶無言で見入つて居ると、彼は直ぐ言葉が続けた。

「尤も此う云ふ題目は美術の中に這入るべきもので無いかも知れん。私は以前熱意だった佛蘭西人の實驗からふと此う云ふ作品を試みよう」と云ふ考へを起した……」

猶語り続けようとしたのであるが、此の時室の中には五六人の女達が高聲に話し合ひながら這入つて來たので、彼は急遽その方を振向きながら、

「どうです。そろ／＼見て歩きませう。参考品の陳列場にはミレーやコロを初め英佛の大家の作も少しは集めてあります。」

我々は其の方へと歩いて行つた。遂に中央館の出品は大概は見つたので、今度は東側の

建物に這入り、此處に陳列せられた英吉利、獨逸、和蘭、瑞典などの出品を見歩いて居ると、時間の経つのは驚くばかり早く、閉場時間の六時も間近くなつたので、西側の建物に陳列せられた佛蘭西、白耳義、奧地利、伊太利、葡萄牙、日本などの出品は他日に譲る事として、我々は群集と共に東側の美術館を出で、正面に廣い三條の階段と大な水盤から瀝り落つる瀑布をひかへた大音樂堂の下の腰掛に勞れきつた腰を下した。

此處は周圍七哩以上もある會場中最も壯麗を極むる處である。遙か彼方の正門から、高い記念碑と幾多の彫像の立つて居る廣場を望み、宏壯な各部の建物が城のやうに並び立つて居る間に湖水とも見ゆる廣い池は、我々の頭上に空ける高い水盤から階段の間を流れて落ちて込む瀑布の水を受け、凄じい噴水の周圍に種々の小舟や畫舫を浮べて居る様まで、唯の一日に見下されるのである。

やがて夕日は場内の何處かで打出す鐘の音と共に後方の森に沈み盡すと、望む限りの眞白い建物は一樣に青く赤く取り／＼のイルミネーションに飾られる。すると蒼白い空の下に立竝んで居る無數の裸體は燈火の光を浴びて、階

段の周圍や各館の屋根の上から、今しも其の死せる眠りより覺め、彼方此方で奏し出す折からの音樂につれて、皆な浮き出でて踊るが如くに思はれた。

S——氏は口の中で頷くと齒煙草を噛み碎きながら、階段を上つて來る群衆の姿をば一人々々眺めやる中にも、殊に若い綺麗な婦人が通り過ぎると、獨りて頷づいては其の後姿までを精密に見送つて居る。

「モデルになる様なのが有りますすかね。」と訊くと、彼は齒煙草の唾をば無遠慮に吐き捨てながら、

「滅多に有るものぢや無い。然しモデルには成らないまでも、兎に角肉付の可愛い女を見るのけ非常に愉快なものだ。此の愉快は我々が神様から授與つた大特權の一つなんだから、我々男性は一生を女の研究に委ねる義務があるです。其處へ行くと流石は佛蘭西人です、私の極く親しい友達に、佛蘭西から出張して居た新聞記者があつたが、その男は一體男性の身體は女性からして、何れだけの愉快を感得する事が出来るものかと云ふ研究の爲めに、筆頭中途で若死をしてしまったのです。身を犠牲にしました。最う餘程以前の事ですがね。私は此の

ルイスの賑やかな街を離れた。

汚い小屋と居酒屋や木賃宿などが大きな煉瓦造りの製造場と入り亂れて居る何處へ行つても同じ眺めの——街端れを通り過すと、青々とした野草の上に繁り合ふ楓と榉の林が、電車道の兩側に現れて、行けどもく更に盡る時がない。疊合つた細かい木の葉に射し込む日の光とは何ともいひやうの無いほどである。鹹つてかのカスケード山ロッキーマウンテン或は北米の西北岸一帯の地を占領して居る時黒な濕つた大森林が唯人をして恐怖の念のみを起させる事を思出すと、此のミズリ州の林は實に何と云ふ優しい愛嬌を持つて居るのであらう。

私は此の林を愛すると呼ぶと、S——氏は非常に嬉しさうな顔をして、

「僕の住んで居る處は怎う云ふ楓樹の林の中に立つて居る小な村で、青々とした草とリボンの様な水の流、何時も青い空、此れより外には何にも無い所だ。然し私の宿つて居る家の女房さんはい、牝牛と羊を飼つて居るから手製の甘いクリームを御馳走しよう。」と云ひながら鳥渡時計を引出して見て、最う直きだ。此れからカークウッドと云ふ林の間に村がある。それを

を一つ通り越しさへすればすぐハイランドなんだから。」

云ふ中に大方その村の事であらう。矢張り青々とした樹の間に、石造の大きな寺院が聳えて居る人家の間を過ぎて、道は緩に上つたり下つたり。暫くするとS——氏は私の肩を叩いて、

「此處だ、い。」と云ふ。

下りて見ると、成程藍色の空と青い木の葉を眺めるばかりの静な村である。セント・ルイスを初め繁華な市街では百度以上の涼しい暑さ、此處は木の葉に響く風の涼しさ。林を越して見晴す牧場の方では夏の午後をばさも懶けに鳴く牛の聲が聞え、近く人家の裏畠では鶏が鳴いてゐる。先刻一時間前に通過したセント・ルイス市中の喧騒を思ひ起すと全く夢の様な心地である。

一博覽會へ行くのには少し遠いが、然し電車に乗れば四十分ばかりで行ける。僕と一緒に此邊に宿を取る事にしては……

S——氏が此う云ふのに何で私は反對しよう。丁度此邊の村では市中からの避暑客、殊に今年は博覽會の見物人を目當てに何れの百姓家でも一番綺麗な室をば貸間にと準備して

居るので、私はS——氏の室借りをして居る家から一軒置いて隣へ逗留する事にした。

その翌日からは早速博覽會の見物である。否、見物よりは先づ第一にS——氏の出品を訪ねねばならぬ。

私は彼と共に電車で博覽會の裏門に着し、林の間を潜り抜けると直様一棟に分れて居る美術館に達する。中央の一棟が合衆國の出品陳列場で此の中に彼の作品も陳列されて居ると云ふ。私は直様その場への案内を頼むと、彼は先に立つて陳列室を幾室も素通りした後、やがて稍狭く細長い一室に這入つて、鳥渡立止りながら此方を振向き、

「あれです。と西側の壁に掛けてある一面の裸體畫を指さした。

埃及か亞利比亞あたりの女をモデルに爲たのであらう、頭髮と眼の黒い肥えた女が、長椅子の上に仰向きに横ばり、僅に顔だけを此方に揉ち向け、其の手には半分ほどになった葡萄酒の杯を持つて居る。惘然とした大きい黒い眼は陶然たる微醺に早や臉も重たげになつて居ながら猶何物を見詰めて居るらしく云ふに云はれぬ表情を示して居る。S——氏は暫く無言で自作の裸美人に對して居たが、やがて、

中に餘韻を残して男の心を翻かし、而して自ら愉快とする様々望みは少しも持つて居なかつたが、其の代りに、身體中の神経が感じ得られる愉快は餘す處なく腿毛の細かい戦きから微妙な指の先の働きに至るまで、出来得る限り強い愉快を感じようと企て、居るのでした。

マンテロー君は此の珍奇な發見に對して大に満足する所があつたのでせう。三月ばかりの間は一晩とても缺かした事なく其の室を訪れて居ましたが、然し此う云ふ男の常としてふいと氣候が變り出すと同時に、何か知ら他に變つたものが見たくなつて來たのです。で、彼女を見るのも、いよゝ今夜ぎりで止めて了はうと此う決心したばかりでは無い。彼れは明瞭と彼女に向つて、

「當分の中仕事が急しいから遊びには來られない。」  
と云ひ置いて歸つて來たが、さて翌日の夜になつて毎も晩飯を準備する料理屋まで行つて見ると街の上には燈火の光が美しく輝き、行きかふ婦人の姿が晝間よりは更に風情あり氣に見られる。彼は少時唯有る四辻の角に佇んで居た。すると忽ち今迄覺えた事の無い、妙に氣が急ぐ様な心持がして、何處と云ふ目的もなく頻と早

足に歩き出したが、やがて不圖心付いて見ると、此い如何に、何時の間にか彼の女の宿つて居る家の前に來て居るのです。

愈うなつては今更引返す譯にも行かない。其の儘女の室の戸を叩くと出迎へた彼女はもう今夜ぎり來られないと云つた彼の言葉に對して、少しは驚くか或は喜びでもするかと思ひの外、平素の通りに直様例の二人して坐る長椅子へと、男の手を取つて連れて行く。其の様子は如何しても最前からチャンと彼の來るのを知り抜いて居たものと思はれない。

さてこそ昨夜も來れないと云つた時別に残り惜しいと云ふ様子も爲す如何にも沈着いた風で、「はい、さうですか。」と答へたのだ。其の時已に自分が此處へ來るべきものたる事を知り抜いて居たのだと思ふと、彼は譯もなく無暗と恐怖しくなつて一層室から飛出さうかと危く腰掛から立上らうとした途端、女は彼の手を握るや否や重い半身を彼の膝の上に投掛けました。

女の身體の熱い事まるで燃える火の様です。彼はその熱度をば握りしめられた手で直接に一分間とは感ぜぬ中に、其の胸は忽ち息苦しい程喘んで來るばかりか、己れの身體中の熱度まで

次々々々女の方へ吸取られて了ふ様な心持がする。その時々は其の人な眞黒な眸子を定めてオーツと彼の顔を見入りながら、  
「今夜ぎりお出でになら無いんですか。」と極めて沈着いた聲で云ひましたが彼は最う答へる氣力が有りません。

オーツと見詰めた其の眼には明かに、お前は如何に逃げようと急つても私が一度見込んだからには何處までもお前を自由にせざるに置かないのだから、と云ふ様に思はれ、彼は全身を通じて顫を感ずると共に、もう何様事をしても駄目である。自分は此の女の餌である——鼠が猫の前に出たやうな或は狼の前に小羊が立ちすくんだ様な果敢い犠牲の覺悟が、我知らず心の底に起つて來るのでした。

哀むべし。マンテロー君は最初の中こそ、自分は男である、主人であると云ふ自信を持つて、彼女をば馴れた柔順な家畜として愛し戯れて居たのですが、何時の間にか、知らず知らず、彼女の身體を包んで居る怪しい見えざる刀の下に壓せられて、到底それから脱する事が出来な



男の實驗談の一つを、どうかして、何時か一度自分の作品に現して見たいと思つて居たが、漸く今度あゝ云ふものを描いて見たのです。畫題をお品しましたかね。微醉の裸美人、……あれは「夢の前の一瞬間」と云ふ題ですよ。」

私は云ひ置く事を忘れたが此の……氏は非常な佛蘭西如きの男である。然し未だ佛蘭西へ行つたこともなし、その國語も其れ程深く知つて居ないが、彼は一世紀程前に新大陸に移住した純粹の佛蘭西人の血統を受け、殊に其の祖父なる人が佛蘭西から來た女優と結婚したと云ふことを以て、彼は確に美術家たるべき血液を持つて居ると信じて居る。そして意志の強い、頭腦の餘りに明瞭な亞米利加人は、決して美術に成功すべきものでは無いと獨斷して居るのである。

彼は最う煙草を悉皆吐きすてゝ了つて、今度は果巻を取りだし、私にも一本差出して、あの男の研究は我々には實に價値あるものでした。モツシュ、マンテローと云ふ男でしたが、ね、亞米利加へ來た當座は此種風景な野蠻國には到底居られたものではない。意氣な作りの女などはさて置き鼻の突つた猶太人と唇の厚い黒人はかりで晩飯一つ心持よく食へる

處もないなぞと頻に不平を云つて居ましたが、その中に不思議も不思議、黒人の血が交つて居る或る雜種の婦人に熱中し始めたです。

如何した原因かと云ふと、或町料理屋で夕飯を済した後、彼は一人ぶら／＼散歩して居る中ふと汚い小少居の前を通り過ぎた。入口には彩色した種々の看板や寫眞が用て居る中で、一人小肥りの婦人が片足を高く差上げながら踊つて居る畫があつた。此種畫は本場の佛蘭西では鳥渡往來へ出さへすれば一時間の中に何百枚何千枚眼にするか知れない。だからマンテロー君は無論深い注意を拂ひは爲なかつたが、然し其の儘通過ぎもせず、切符を買つて内へ這入つたです。

アメリカの街には何處にでもある寄席で、輕業、道化踊り、種々な樂器の曲彈など、聴て其れ等が済むと、表の看板に出してある其の主人公であらう、大分黒奴の血が交つて居る一人の女が短く切つた頭髮を真中から分け半身を現はした裾の短い衣裳を着け舞臺へ踊出るや否や盛に踊り始めたです。然し彼の眼には何の珍しい事もない。忽ち咽喉許へ込上げて來る吠を漸と吞込んで居たものゝ、まさか外の方を向いて居る譯には行かないので、據所ないやう

に茫然と舞臺の方を眺めて居たが、する中に彼は不圖、黒人の娘の特徴とも云ふべきでつづりした肉付の如何にも豐であるのに氣が付き、續いて一體白人の女の肉付とは何う云ふ點が違つて居るのか知ら。今日までは別に注意して居なかつたが之れは研究すべき重大の問題であらう……と次第に其の方へ氣を集はれて來ると、

舞臺の女は踊りの一段毎に、鳥渡身體を休める度々、大きな黒い眼に情を持たせて、見物人の方を眺めるのが又もや彼の新しい注意を引いた。あの眼はどうも我々文明の人間の眼付でない。動物の眼付だ。馴れた家畜が主人に食物を請求する時の眼付である、と思ふと、マンテロー君は最うその好奇心を押へる事が出来なくなつて來た……否此う云ふ好奇心は強ひて叫起きさうとする彼の事として、何の猶豫する處があらう、其れから三晩ばかりは毎夜その寄席へ行き續けると、何の譯もない話。互に最初の握手をしてから一時間と經たぬ中にもう馴々しく腕を組んで、一緒に女の宿つて居る家へと遊びに行つたのです。

彼は此處で容易く此う云ふ事を發見しました。此の雜種の婦人は文明國の婦人の様に種々技巧的な身振や様子、又は思はせりな談話の

まで垂らし、短い赤い口髭にリボン付の鼻眼鏡を掛けた若紳士である。

居並ぶ腰掛の人々は何れも奇異の思に驅られたらしく、「あの男は一體何處の國の人だらう。」

「メキシコ人ぢや有るまいか。」

「あの眞黒な毛の色合はどうしても西班牙の種だから大方南亞米利加からでも来た人だらう。」と云合ふ者もあつた。

車は駟者の打振る鞭の下に近く眼の前を行過ぎて、直様後から引續く車と車の間に隠れて了つた。

見物の人々の話題も轉々窮りなき目前の有様につれて次から次へと移り行くのであつたが、自分ばかりは最一度あの藍色の車を見たいと、その行過ぎた大路の彼方を見送つたまゝであつた。かの黒い頭髮の紳士と云ふは最初一寸見た瞬間こそ、自分の眼にも等しく異様に思はれたものゝ、間近く目前を行過ぎる中によく見れば如何に風采を粧ふとも、争はれぬは眉と眼の間の表情は分明に自分と同人種の日本人たる事を證明して居たからである。

そも如何なる日本人であらう。車を共にして居た金髪の婦人は其の妻であらうか。或は單に親しい友達と云ふに過ぎぬか知ら。

幸ひにも一週日ならずして自分は此の押へ切れぬ好奇心を満足させる事が出来た。それは或處で去頃コロンビヤ大學を卒業し今では紐育の或新聞社に關係して居る日本人の一友に出遇ひいろ／＼雜誌の末に、何氣なく其の事を話すと、彼の友はさも豫期して居たと云はぬばかりの語調で、

「さうでしたか、あの男を御覧になつたのですか、全く鳥渡見には日本人とは見えますまい。」

「如何云ふ人ですか、御存じですか。」

「よく知つてゐます。丁度私と一緒に船でアメリカへ來たのですし、其後私がコロンビヤ大學に這入りました時も矢張り一緒になりましたから。」

自分は次の様な物語を聞いた。

かの男、その名を藤ヶ崎國雄と云ひ資産ある伯爵家の長男です。米國に留學してコロンビヤ大學に這入りましたが、然し教場へ出るのは、ほんの義理一通で、米國の華美な自由な男女學生間の交際を専門に、春はピクニックや馬乗、冬は舞踏や氷滑りと、遊ぶ事のみに日を送つて居たのです。

一年二年と過ぎ三年目の夏休みが來た。私は

學費を充分に付たぬ身分故、夏休中に講師某博士の家の藏書書を整理して幾何の報酬を得る事にしたが、さう云ふ必要のない國雄は北米大陸の端西とも云ふべきコロラド山中の温泉場から世界七勝の一に數へられてあるイエロー・ストーン・パークを見物にと出掛けて行きました。間もなく秋になり大學は再び開始され學生は四方から歸つて來たが、國雄は何處へ行つたのやら音沙汰が無い。

私は想像した。國雄は最う學校が厭になつて了つたに違ひない。彼の性質としては其れも無理はない。讀書する事よりは遊ぶ事が好き——遊ぶと云ふよりは寧ろ安逸無爲に時間を消費する事が好きな男である。私は日頃彼が其の居室の長椅子もしくは木蔭の青芝の上に身を安樂に横たへ葉卷の煙をゆつたりと煙しながら、何を考へるともなく、何を爲すともなく、悠然空行く雲を眺めて居るのを見る時、あゝ、此の世に此様な意気な人間があらうかと思ふ事が度々でした。

忠告しても無論效は無いと思つたか又何様か會で復校する氣になるかも知れないと、私は誠實な手紙をば三通ほど、然し旅行から歸つて來たのやら來ぬのやら居所が不明なので、止むを

を取殺して了つたなどと云ふ事もある。して見ると此の佛蘭西の紳士も人間より動物の血を澤山に持つて居る黒人の娘にすつかり見込まれて了つたとしても云ふのでせう。

彼は如何かして彼女から遠かりたいと絶えず悶えて居ながら、依然として其の彼へ引寄せられて居る中、さうです、一年ばかり過ぎた後の事でせう。非常に健康を害して米國の寒い冬を避ける爲め一先佛蘭西へ歸り、伊太利の暖地へ行きましたが、不圖砂漠の風が持つて来る熱病にかゝつたので、衰弱しきつて居た身體では到底たまりません。到頭其處で死んで了ひました。」

S——氏は語りと共に微笑みながら私の顔を眺めて、  
「君は如何思ひます、マンテロー君は軍人が戦争で死ぬと同じく、己の好む道に弊れたのですから、私は彼を悲しむと共に賞讃しますよ。もう大分睡くなりました。今夜は彼の主義になつて舌の神經が感じ得られる限りの美しい肉美酒を味はうぢや有りませんか。我々が喜べば我々を作つた神様も無訥喜びます。何處の料理屋が可いかな。先アそろ／＼下りて見ませう……。」

S——氏は久しく腰を下した腰掛から立上つたので、私もそれに續いて、とも／＼に廣い階段を一段々々大體體像の並んだ下を降りて行つた。

夏の夜の涼しさに池の邊や廣場の木影に幾組の男女その數を知らず、今やイルミネーションに輝き渡る不夜城は諸有る音楽と諸有る歡喜の人聲に湧返つて居る最中である……。

## 長 髪

春來れば花咲き鳥歌ふ田園とは事變り、石と鐵煉瓦とアスファルトで築き上げられた紐育では、帽子屋の帽子戸に新形の女帽が陣列せられるのを見て人は僅に春の近きを知るのである。

風の吹く三月は過ぎ折々驟雨の降り来る四月、其の昇天祭が衣更の日と云ふ例になつて居るので、よしや順ならぬ時候の少し位寒い事は有つても、此の日を遅しと待つて居る氣早い紐育の女連中は飾りの多い冬着を捨てゝ酒々たる薄衣の裾軽く意氣揚々と馬車自動車を走らせる。

自分には色彩の變化に富む此の國の流行を喜ぶ一人なので、晴れた日を幸ひに出盛る人々を眺めようと、午後の三時頃然る年の細い杖を携へて、第五大通から中央公園の並樹道を歩いて見た。幾輛とも數限りなく引續く馬車や自動車が見え、在る日光を浴びつゝ、徐に動き行くさま、繪に見る巴里のボア・ド・ブロンヌの午後にも實に此くやとはかり。

並樹道の兩側に据付けたベンチには此の豪客の有様を見え物の人々列をなす中に、自分も懸て席を占め、一輛々と過行く車の主を眺めて、それが流行の選擇嗜好の善惡に一人盡きせぬ批評を試みて居た。

する中、遠くの彼方から四つの車輪と取者の衣服から帽子までをば一齊に濃い藍色にした一輛の車が佇々した木蔭を縫つて進んで来る。

他所ならばいざ知らず、かの華美な藍色が晴れた春の青空と明い新緑の色に調和して誠に好く人の目を惹くので、自分はその近づくを待ち車の主こそは何なる人かと眺めると、帽子を飾る駝鳥の毛をば同じ藍色に染めそれに釣合ふ華美な衣裳——然し年は左様若からぬ一婦人で、其の傍に相乗したのは何處の國民とも知れず、眞黒な頭髪を宛ら十八世紀の人の如く



で居たいと思ふんですよ。」

此の日は其の儘歸宅したが四五日過ぎて、晴れた秋の夕暮、私はハドソン河畔の大通りを散歩して居ると、偶然にも彼と其の家の婦人とが一輛の馬車に相乗しつゝ行くのを見た。

此の國で男女の相乗などは何の珍らしい事もないのであるが、私は殆ど何と云ふ意味もなく若しや二人の間に何かの關係がありはせまいか、國雄の慶學した原因も其の邊に潜んでは居まいかと、疑ふともなく、ふと此様事を疑つて見ると、誰しも一種の好奇心に驅られるが常で、私は自分の疑心が作り出した事實を確かめたいばかりに、其の後はそのとなく引續いて國雄を訪ねました。

度重なる此の訪問は國雄には定めし迷惑であつたかも知れないが、私に取つては頗る興味があつた。私の推察の當らずとも遠からざる事が次第次第に確かめられて来る様です。

私は何時も取次に出て来る黒髪の下女に案内せらるゝまゝ、或日の事、其の客間に這入ると、公園を見晴す窓際の長椅子に、二人が并々と相寄つて坐つて居るのを見たし、又或時は、二人が一つの蓋から葡萄酒を呑み合つて居る様な處へ行き合はした事もあつた。

二人が戀して居る事だけは明瞭になつた。

私は進んで、其の事の原因と婦人の身分、此の二事を知りたいと思ひ、機を見て國雄を責めると、彼も今や最初ほどには臆せず、夏休の旅行中、山間のホテルで懇意になつたのが始まりで、女の身分は阿媽された富豪の寡婦である事を話した。

「何して離婚されたんです。」

私は更に問を進めると、

「畢竟不品行だつたから……」と彼は止むなく其の知つて居る限りを話しました。

「一口に云へば浮氣性とても云ふんでせう。小説などを讀んで面白と思ふと、直ぐ自分も其様身の上になつて見たくて堪らないと云ふのですからね。結婚してから一年も経たない中に、ボーランドから來た聲の種々の音樂家に迷つて密會したのが、つい夫の耳に洩れたので、到頭夫の財産の四分の一を買つて離婚と云ふことになつたのださうです。一度世間へ恥を暴出されて了つてはもう上流のソサイエティーには顔出しが出来ませんからね、つまり、いくら金があつて容色がよくつても世間からは日蔭のものです。斯うなると、誰でも却つて自暴自棄になるもので、夫人は其れからと云ふもの、随分、

種々雑多な男を玩弄にしたさうですよ。」

私は意外の驚きに打たれ、「君は……其様不徳な婦人と知つて居ながら、平氣で彼女を愛して居るんですか。」

國雄は無言だと云はぬばかりに黙つて微笑む。私はよく驚いて、

「一體君はあの女から愛されて居ると思つて居るんですか。其様恐しい女なら……一步譲つて愛されて居るとしても、ほんの一時で、直ぐに又他の男に手を出すかも知れないぢやありませんか。」

「其れア何とも適合へません。然し、私には一時でも關はない。其の一時が苦しい事なら兎も角、スキートな事である以上には五分間でも、一分間でも關ひませんよ。つまり愉快な夢を見ただけで徳ぢや有りませんか。」

彼は再び微笑して讀書ばかりして居る私に學問以外の事が何で分るものかと諷を度すむ様に私の顔を見ました。

私は全く解釋に苦みました——聞くも恐ろしい様な悖德極らない夫人の身の上を知りながら國雄は如何して愛情を催す事が出来るのであらう。

他日私はドーデーのサフオーなどを讀ん

得ず夏休前の寓居に宛て、郵送しました。

然し一向に返事がないので、私は稍失望しつつも或日の夕方散歩がてらに其の家を訪問すると、出て来た宿の主婦から國雄は二週間ほど以前に、一先歸つて来るや否や、直様公園内町〇番地へ轉居したとの話に力を得て、早速その番地をたよりにして行くとセントラル・パークに面した十階ほどの高いアツパートメント・ハウスに行き當つたのです。

私は紫色の制服に金釦を輝かした黒奴の門番に訊くと、日本の紳士は八階目の室に居るとの事で、昇降機に乗つて其の戸口の鈴を押して見た。

大きな建物の事とて外界の物音は一切遮られ、廊下の空氣は大伽藍の内部の様に、かに沈靜して居るので、私の押した鈴の音が遠く室の彼方で響いてゐるのが能く聞取れます。稍暫く取次を待つて居たが一向人の出て来る氣勢もない。此の度は稍長い間ベルを試みると漸く靜かな聲音が聞え、廳で一人の婦人が其の顔ばかりを見せる様に月を細目に開けた。

私は帽を脱つて丁寧に禮をなし、「藤ヶ崎と云ふ日本人に面會したいのですが……。」すると婦人は直に私を客間へと案内して呉

れたが、狭い廊下を行く時何か氣遣し氣に見てみぬ様に私の顔を窺見しました。

婦人はさうです……年頃はもう二十七八かとも思はれます。括り頭の圓い顔で、睫毛の長いバツチリした碧の眼には西洋婦人の常としてぶはれぬ表情があるが、ブロードの頭髮をば極く緩かに今にも其の肩の上に崩落ちるかとはかり後で來ねたのと、豐麗な肩と腕とが見える室内用の寛いアフターヌーン・ガウンを着た爲めであらうか、婦人の姿は私の眼には誠に厭らしく艶かく見えた。

案内された客間に一人残されて私は國雄の來るのを待つて居ると、隣りの室で大方國雄に語ららしい婦人の聲が聞えた。やがて戸をあけて、「どうも失禮しました。」と國雄は一寸私の顔を見て何か氣まづさうに俯向いた。私は極く無頓着な調子で、

「さぞ御愉快でしたらう旅行は……。時に如何です、學校の方は。」

「ア、學校ですか。つい行きそびれて了ひました。もう止めます。」

「今お止めになつちや惜しいものです。もう後一年か二年も教場にさへ出て居れば兎に角學位ぐらゐは取れるぢやありませんか。」

「私も此れなり退學してさふ心ぢやないのです、すが、つい朝……つい朝晩くなつて了ふものですか……。」

云つて又俯向いた。私も云ふべき語を失つて其儘黙つた。薄い霞のやうなレースカーテンを引いた窓越には公園の黄み掛けた木立に午後日光が靜かにさしてゐる。忽ち隣の室で如何にも徒然らしく洋琴を弾ずると云ふよりはただ鍵を弄ぶ響きが聞えたが、五分と立たぬ中にハタと止んで、あたりは又元の靜寂。

國雄は聞くともなく聴き澄まして居たが忽ち何か決心した様に、「君の御深切は全く疎には思ひません、御手紙も拜見したです。然し當分……又その中に復校するかも知れませんが、先づ當分は學校は休むつもりです。」

「さうですか。其れなら私も強ひてとは云はないですが、然し君、一體如何して其様決心をされたのです。」

何氣なしに云つたのであるが、私の決心と云ふ語が、彼には深く意味あるものに聞えたと思ふ、彼は少時驚いた様に私の顔を見詰めて居たが、又何やら思返したらしく、唯少し「いや、別に決心した譯でもないです。唯少し讀書にも飽きましたから、保養がてら暫く遊ん

## 春と秋

市俄古紐育間の鐵道が西から東へと一直線にミシガン州の南部を横斷して居るその沿道の小さい田舎町にK——と云ふ大學があつた。少なからぬ男女の學生中には日本人も三人交つて居た。二人は男子一人は婦人である。山田太郎と呼ばれたのは女生徒の竹里菊枝と同じく神學科の生徒で各自日本の或る教會から派遣されて居るのであつたが、他の一人大山俊哉と云ふのは宗教上には關係の無い身分で政治科に學籍を置いて居るのであつた。

此れ等の三人は同じ年に渡米して、偶然にも此の學校へ來合せたので、初めて顔を見合せた時には互に眼を見張つて暫は挨拶もせずに居た程であつた。殊に法學生の俊哉には此の萬里の異郷に髪と瞳子の黒い同人種の女を認め得た事が、殆ど在り得べからざる程不思議に感ぜられたのである。彼は學校の廊下や食堂などで菊枝の姿を見る時には、何と云ふ誇もなく其の方へ顔を向けずには居られ無かつたので、一月とたぬ中彼は頭から足の先まで菊枝の姿

は悉く心の中に暗記して了つた。然し彼は決してかの姿を賞讃して居る譯ではなく絶えず批評を加へて居るのであつた。年紀は十九か猶二十を越しては居まい。頭髮は黒く光澤があるが、前髪に辮があり、生際は亂れて居る。色は日本人にしては白い方で、低からぬ鼻と締りのある口許の愛嬌丈けが其の特徴であるが、何と云ふ圓大な顔、何と云ふ小さい眼、何と云ふ薄い眉毛であらう。日本製と覺しい粗末な洋服を着た狭い肩のあたりの肥え過ぎ、何か重い荷物でも背負つて居る様に、半身を前に屈まして居る姿勢は何と評しようか。その太くして短い腕、半蟲の様に形を失つた指の形。俊哉は仔細に品評し來つて、日本の女學生と云ふものには、如何して此の様な機型の女が多いのであらう。日本の女の智能と生理上の關係はよろしく科學者の研究すべき重大の問題で、有るまいかと、何やら深い息をついて彼は女學生の往來する本郷や麹町あたりの街の有様を思ひ浮べ出したが、其の中に知らずく此度は自分の過去の事に思を移してしまつた。

彼は其の當時、世間の風潮につれて、大學と改稱した或る法律學校を卒業したもの、思はしい職業を得る事が出来ない處から、相當の

資産ある家に生れた身を幸ひに米國へ渡つたのである。嘗て上曜日の晚と云へば必ずピヤールや牛肉屋の二階で女中に戯れた事やら、寄席へ出る女藝人の批評に口角泡を飛ばした事、向島の運動會の歸りに初めて吉原へ繰込んだ時の事、牛込の忘年會から初めて待合へ泊つた時の事、それから、自分の爲めに開かれた送別會の大騒ぎ、遂に厭つて現在の有様に思ひ合、往來の様子から、街端れの田園の景色まで、皆珍しからぬ物は無かつたが、日を経るまゝに見馴れて了ふと、所謂異國に於ける異國人。俊哉は何一つ適當な娯樂を見出す事の出来ない淋しさに、讀書にも倦む折々詮方無しに神學生の山田を訪れるのであつた。すると山田は毎も黙讀して居る聖書を閉ぢ丁寧に、

「お掛けなさい。如何です。英語はなか／＼困難ですな。」

俊哉は無造作に「何か面白い事は無いかね。」今夜演説があります。山田は相手の質問に對して最も適當な返答であると信じて居るらしく即座に答へて、

「流石クリスト教の國だけに可い牧師の演説が聞けるのが、私には何よりの樂みです。今夜



で、男と云ふものは或る事情の下には随分淺ましい經歷の女をも、非常な嫌惡の情と共に、又非常に熱烈な情を以て愛し得るものである事を知りましたが、國雄の彼の夫人に對するの其れとは又全く趣きを異にして居る様です。

私は彼を見る度々、種々なる方面から遂に其の眞相を探り得た。一時私は一種厭な感に打たれて彼の面に唾したい様にも思つたが、更に一步深く觀察した後には一轉して私は、噫、世にも不幸な性情に生れ付いた男である、殆ど同情の涙を禁じ得ない様になつたのです。

國雄には常々たる強い男性的の愛の感念が微塵も無い。全く男女の地位を反對にして男の身ながら女の腕に抱かれ、女の庇護の下に夢の様な月日を送りたいと云ふ、俗に男妾とも稱すべき境遇、此れが國雄の理想なのです。

日本に居た時分に彼は多くの青年が誘惑されると同様に丁年に達せぬ前から早く狹斜の地に足を踏み入れた。金は有り家柄はよし、其れに美男と來て居るから、随分向から熱心になる若い美しい女もあつたけれど、彼は其等には見向きもせず、己をば弟か何かの様に取扱

つて呉れる或老妓の情人になつて得々として居た。

世には金銭上の慾心から年上の女に愛されたいと思ふものが多いが、彼のみは富よりも猶高價な名譽と地位とを擲つてまで、其の奇異な一種の望みを遂げようとする。彼は一時家名を汚した罪で相當同様の身となつたが、之れは結局、其の望む所、彼は春雨の朝暁く女の半纏を肩に引かけ朝風呂に出掛けるやうな江戸時代の放逸な生活を樂しんだ。

此れではならぬと伯爵家では遂に彼をば外國へ追ひやるに如くは無いと決して、此處に國雄は米國へ遊學したのである。然し運命の惡戯とでも云はうか、伯爵の若殿は幾千哩の外國まで來て再び美しい魔の捕虜になり、其の身は愚今は家を國をも忘れて了つたのです。

私は繰返して運命の惡戯と云ひませう。國雄はもうかれこれ二年ほど、彼の夫人の下に養はれて居ますが、其の間絶えず彼が如何に飽かれない、見捨てられまいと苦心しつゝあるか。笑止と云ふよりは寧ろ涙の種です。

私は云ふに忍びない語を澤山知つて居ますが、此處に其の一つを話せば貴君が公園で御覽になつたと云ふ彼の長い髪の理由です。

一體女と云ふものは男が下手に用れば出る程其の惡に制に成り易いものであるが、殊に彼の夫人の様に世間から排斥され、云はば長く逆境に在ると神祕が過敏になつて、理由もないの腹立つて、日頃は非常に大切にして居る器物や寶石を壊して見たたり、或は非常に愛して居る自分の戀人を打擲したりする事がある。

然し國雄は何事をもおびます。或日夫人は例の如く國雄を散々に苛んだばかりか、遂には自分の美しく結んだ頭髮までを滅茶々に捲つて、插した寶石入りの櫛を足で踏碎いた。其の時の心地は何とも例へられぬ位、丁度夏の日に冷水を浴びたやうであつた……ふいと此れから思ひ付いたのであらう、夫人は國雄にヘンリ一四世の像の様に其の頭髮を長くして見せて呉れと云ひました。

國雄は直様光澤ある黒い髪を房々と肩近くまで延し其の先をば美しく巻纏らした。

貴君は車上の彼が姿を御覽になつて、あの長髪をば定めし極端なハイカラ好みとて、思ひなすつたかも知れぬが、其の實は夫人が癪癪を起した時、彼はその長い髪を引捲らせ、そして狂亂の女に一種痛刻な快味を與へる爲めに外ならぬのです。

の演題を紹介すると、老人は直様、Ladies and gentlemen と呼びかけて講演を始めた。  
 俊哉は近くの席に坐つて居る若い女の容貌の美醜から、帽子や上衣、頭髮や襟飾の結び方まで、仔細に眺め廻して居たが、長い講演の續き行く中には、それに飽きてしまつて、今度は遣り場の無い眼を、熱心に聞き入つて居る菊枝の顔に移した。何時も見ると通りの圓い顔であるが、然しあの小さい眼を最う少しく大きく、眉を濃くしたなら、高い鼻と締つた口許の愛らしさに、或人は美人の名を許すかも知れない……と一々に容貌の缺點と特徴とを分析して居た後、さらに一步を進めて萬一、自分は此の女から、愛されて居るとしたら、そも自分は如何なる態度を取るべきものであらうと、此様途方もない空想に耽り出した途端、演壇の上の長老は忽然聲を強めてハタと卓を叩いた響に、俊哉は喫驚して空想から覺める。と、自分は今外國に來て居るのだ。何處を見ても異つた人種ばかり、自分の所有物と云つては自分の着て居る物より外には何にもない。日本に居た時、下宿屋の二階から往來を通り過る娘を批評したのとは、非常に境遇を異にして居る。然るを測らずも此に凭つて日本の女生徒と相違んで懸掛けて居ら

れるとは、何たる不思議の運命であらう。自分は最う一も二もなく運命の前に平伏して、その賜物を感謝しつゝ受けねば成らない。俊哉は暫く眼を閉ぢ更に明い電燈の光に菊枝の顔を見たのである。

二時間ばかりで、演説は終つた。俊哉は來た時のやうに菊枝の手を取り、山田も共に打連れ、各その部屋に立戻つたが、寢床へ這入つてから俊哉は何やら取り止めのない空想に耽つた。彼はいつか菊枝と面白く間となつて了つた様な心持になると、淋しい此の頃の生活が俄に活氣つき、日曜日の午後なぞ、二人で牧場の草の上に坐つて戯れる有様が日にあり……と見えて来る。そして急に明日が日曜日である様な氣も爲出す。獨で思はずは……と笑つて寢床の上に寝返りを打ち、何か決心した様に獨で頷付いた。

俊哉は全く決心したのである。すると直に成功するかどうか知らぬ疑問が起つて來る。彼は此の疑問を更に二分して見て、全然成功は不可能であるか、或は單に容易でないか云ふに過ぎないか。俊哉は過去の經驗から第一の疑問は否定する事が出來たが、第二に移り成功は容易でないとする、此れは如何なる程度を意味

するのであらう。意味が廣いだけに彼は大に此の返答には窮して了つた。で、先づ理論を離れ、自分の知つて居る實例の方面から解料するに如くはないと思立ち、日本に居た時分某が西洋料理屋のお何を手に入れた節、某が女義太夫に失敗した逸話、誰それが思掛ない事から看護婦を得た奇譚。その他皆で讀んだ戀愛小説中の事件など數限りなく想起して見たが、その中に作者も題目も忘れ果てゝ居る一篇の短かい翻譯小説の趣向が此の場合大いに熟慮參考すべきものであると氣付いた。

何でも磁石の理論から説き起して、或る男が久しい間或女を思込んで居たが、どうも追つて見る機會がない。一夜圖らずも戀の成立つた夢を見たので、男は驚き目覺めたが、最う如何にしても思に堪へやらず、折好くも出合はせた女の姿を見るや、前後の思慮もなく、矢庭に蹣跚つて物も云はずに、女の手を握り締める、不思議や女は久しい以前から已にその男の情婦であつた様に柔順に男の心に從つたとやら。俊哉は箇中の主人公に對して非常に羨しく又如しくも感じたが、さて此の主人公が得た女と云ふのは、一體何様性質の女であつたのか知ら。菊枝とは人種が違つて居るとす

は市俄古のB——と云ふ長老が、下町の教會で説教するさうですから、貴兄も是非如何です。アメリカでも有名な牧師です。」

俊哉には宗教上の事は少しも趣味がないので、

「然し僕には分りますまいから……殊に神學上の演説は……」

「そんな事は有りません」と山田は稍熱心な調子になり、足の短い割に、ズングリした胴の長い半身を前に出して、「貴兄、今夜のけ別に宗教上の演説と云ふ譯では無い。禁酒と禁烟について何か話されるのださうですから、誰れが聞いても分ります。學校の生徒たちも皆な出掛けるやうです……」

「生徒も皆な……竹里さんも行きますかね。」俊哉は返事に窮して意味もなく問うたのである。

「竹里さん……行かれるに違ひありません。女の生徒たちも無諱出掛けるのですから。」

「また、男の生徒が各自に一人々女の生徒を誘つて行くのでせう。米國流に貴兄も一つ、竹里さんを誘つて、腕を組んで出掛けちや如何です。はゝゝゝは。」

「然し、どうも私には……」山田は切口上で、少しく顔さへ赧めたが、俊哉は此様う談を云つ

て居る中、突然菊枝を誘出して、アメリカ人の様に腕を組んで歩いて見たい様氣が爲だして、どうやら抑制する事が出来なくなつた。

山田は傍らから、猶も頻と講演を聞きに行くことを勧める。講演を聞く聞かないは兎も角、只會堂へ這入つて、風琴の音を聞くだけでも精靈に偉大の感化を與へるものであると、試とこめた調子で勧められ、俊哉も今は殆ど否とは拒絶し兼ねた。

どうせ行くものならば是非にも菊枝を誘つて見ねば成らぬ——俊哉はいよいよ其の日の夕暮男女の學生が兩方の寄宿舎から晚餐の食堂に集る時、菊枝の來るのを靜に呼止めて

「あなた、今夜下町の教會へお出になりますか。」と訊くと菊枝は唯、

「はい。参ります。」

「被行るんですか。私も行くつもりですから、それぢやお誘ひします。別に御迷惑な事は有りませんまい。」

菊枝は案の定、返答に窮したらしく、手をもぢもぢ爲せて俯向いて了ふ。

「學校の生徒も皆訪ひ合つて行くさうですから日本人は日本人同士で出掛けて見たいのです。山田さんにも其の話を爲たら大に賛成だと云

ふ事なんですから、ね、竹里さん、どうせ被行るなら、別に御迷惑ぢやありませんまい。」全く別に迷惑と云ふ程の事ではない。唯だ菊枝は男女の交際を禁止されて居る日本の習慣上意味もなく安からぬ氣がする大けなので、到頭其の夜の八時を約束に迎ひに來る俊哉に誘はれて寄宿舎を出る事になつた。

教會までは三十分間ばかりの道のり。冷かな十月半の夜は閑靜である。菊枝は絶えず安からぬ様子で四邊を見廻すと、後にも先にも同じ學校の女生徒が各自男の生徒と腕を組み、早や黄葉し初めた庭樹の下に明るい電燈の光を浴びながら歩調をそろへ、御音高く敷石を踏鳴す。中には口笛でマーチを奏しながら行くものもある。

俊哉は舊と寄り添ひ菊枝の手を取つて、御覽なさい。竹里さん皆あの通り愉快にそ

ろつて行くぢやありませんか。」

やがて教會に這入つた。神學生の山田は先に來て居たので、三人は後側の腰掛を占め、高い天井の模様、奥深い階段の上のパイプオルガン、暖々の窓の繪硝子などを見廻して居る中に、間もなく、フロックコートを着た此の教會の牧師と鼻の先へ眼鏡をかけた大きな禿頭の白い髭のある長老が現れて、牧師が聴衆に向つて當夜



眞青な顔になり總身をぶる／＼顔はせせばかりか、兩眼から涙をはら／＼。

俊哉は流石に途方に暮れた體。然し其の握つた手は猶も放さずに、

「菊がさん／＼。如何したのです。」と慇と沈着いた聲音を作る。

菊枝は其の場に俯伏して猶身を顫はして忍び泣くのである。

以前の牝牛が又歩み始めたのであらう。寂とした牧場の草の間で鈴の音が聞え始めた。

\* \* \* \* \*

最初の失敗には懲りず、俊哉は如何かして最う一度菊枝を靜な野に誘ひ出したとい、一心にその機會を求めたが、以後菊枝は俊哉の姿さへ見れば直様それとなく逃げて了ふ。

次の日曜日には空しく過ぎその次の日曜日は待つかひもなく雨であつた。

十一月の末一度空が曇つて雨になれば最う郊外に出づべき秋は全く去り、一日々々と増り行く寒氣と共に枯木を掃する風は次第に強く、間もなく灰を撒く様な雪が此の風にまじつて降つて来る。冬の天地は以後三ヶ月間と云ふものは積るが上にも積る雪の中に埋盡されて了ふのである。

である。

俊哉の望も共に埋め去られて了つた。然し一度燃えた若い胸の火は毎日米點以下の寒氣——

北方の大潮地方から押寄せて来る寒氣にも消え遣らず、彼は日課の如くに手紙を菊枝の下に書き送つた。

遂に書くべき文句の盡きた時には書棚の上に載せてある詩集の中の一篇をその儘寫し取つて送つた事もある。然し何の返事も無い。俊哉は

最う何通手紙を書いたか、自分ながらも覺えが無いやうになつた。餘りの事と遂に彼は自基半分、我が燃ゆる千度百度の接吻を御身が冷たき頬の上に……と云ふ文句だけを大きく英文で書いてやつた事もある。返事は猶更無い。

俊哉は遂に窮して元氣を失つた。馬鹿らしいと笑つた。而して忘れた様に手紙を書く事をよして了つた。する中或朝ふつと空が青々と晴れ渡り、日光が微笑み、南の風が吹いて、岩よりも堅く凍つて居た雪が解け始めた。

何時の間にか冬が過ぎて春が來たのである。牧場には去年のまゝに野草が青々と茂出す。

小山を昇る果樹園には林檎や桃の花が咲き亂れ若芽の輝く櫛や櫛の林には駒鳥が歌ひ始める。北國の冬と春との違ひほど著しいものは有る

まい。

若い男は若い女の手を引いて再び野の花を摘みに行くては無い。然し俊哉はもう菊枝の此の世にある事も忘れたかのやう。

或日の夕暮、例の如く食後の散歩から歸つて來た時、彼は机の上に置いてある一通の手紙を見て不審さうに其の封を切つた。

「ヤツ菊枝さんの手紙だ。」

彼は遠い／＼昔の事でも思返す様に腕組をして、さて其の手紙を読むと菊枝は去年から何通とも知れぬ男の手紙に對して返事を爲なかつた訃言を繰返した後、重り重る男の手紙男の熱情を思返すと、彼女は最早や自分を制する事が出来なくなつた。愛の力は何物よりも強い。今は只御身の腕に我身を投げようとの意味を長々と書いたのである。

俊哉は時ならぬ頃に此の豫想外の返事を得たので、暫くは呆れ返つて、夢ではないかと思つた。二度三度女の手紙を読み返した後早速返書を送つた。

彼は翌日の午後去年の秋の末に二人腰を下した牧場の小川の畔に、再び菊枝の手を取つた。

その翌日、又その翌日、俊哉は毎日の午後には必ず菊枝と共に村の小道や小山の果樹園、

れば深い参考の材料にはならないかも知れない  
……夜は何時か更けそめて寄宿舎中は寂々として物音なく、運動場の樹木に風の戦々音と、遠い汽車の響が聞えるばかり。俊哉はいろ／＼と考へて見た末手紙をやるにしても時期がまだ少し早過ぎる。とすると、先づ第一に取るべき手段は絶えず近寄つて相互の間を親しくさせるより外はないと、極々平凡な結論に到着し、自分ながらもどかしく腹が立つて来て、夜具の毛布を足でハタと蹴返した。

\* \* \* \* \*

秋も早や逝かうとする。俊哉が初めて此の地へ来た夏の盛りの頃には、高い楓の竝樹が青々とした大きな廣い葉で、静な学校の門前の往來をば天幕のやうに左右から蔽ひ冠せて居たが、今は朝夕の冷かな霧に見る／＼黄葉して、いさゝかの風にばざり／＼と重さうに散りかける。寄宿舎の高い窓から裏手の田舎を見渡すと、小丘の半腹へと斜に上りかける果樹園も道端なる農家の生垣も齊しく落葉して、取り残された林檎の實のみが夕陽の光に宛て大きな珊瑚の玉のやうに輝いてゐる。平な牧場には野草が猶青々と生茂つてゐるが、その間を流れる小

川のほとりの白楊は最う細い枝ばかり。

俊哉は毎週土曜日と日曜日には必ず菊枝を誘ひ出して、自然の美を愛し田園の風趣を味はうと云ふので、成りたけ人の見えない静な野邊を選んで歩くのであつたが、菊枝も今は慣れるに従つて親しくアメリカの男女間に行はれる交際を見ると、全く日本の習慣とは違つて、案外健全で神聖である事が分るので、俊哉に手を引かれる事をば最初ほどには恐れぬやうになつた。

十一月の第二日曜の頃、俊哉は例の如く、牧場の端へ菊枝を誘ひ出し、かすかな音して流れる小川のほとりの柔かな野草の上に腰を下した。

此國ではインデアン・サンマーといふ通り、空は限りなく晴渡り、午後の日光は眩く輝渡つて居たけれど、野面を渡る風は静ながら、最う何となく冷い。裏手の小山から處々に風車の立つて居る村の方を顧ると、櫛櫛の森が一帶に紅葉して居て、其の間から見える農家の高い屋根には無数の渡鳥が群をなして、時々一團一團に空高く舞ひ上る。程なく來べき冬を豫知して南の暖い地方へ歸つて行くのであらう。菊枝は餘念もなく此の長閑な風景を眺めやる

中、突然何處からともなく、からん／＼と静な鈴の音が聞え出してつい四五間先の茂つた草の間から、一頭の大きな牝牛が其の頭につけた鈴を振り動かしながら、のそ／＼歩み出した。

菊枝は日本の女性の常として、訝然として我を忘れ俊哉の方に寄添ふ。俊哉は早くもこの機に乗じて菊枝の手を取つたが、然しさあらぬ調子で。

「大丈夫ですよ。此の近所の農家の乳牛です。馴れて居ますから大丈夫ですよ。」

牝牛は柔和な眼で二人の方を眺めたが何か思ひ出したと云ふ風で、再び頭にぶら下げた鈴をばからん／＼音させながら、元來たがへ立去つて廻て又ごろりと臥て了つた。

菊枝は初めて安堵したらしく息をついたが、自分の手が堅くも男に握り締められて居るのに氣が付き以前よりも更に驚いた。手をば振拂ふ勇氣もなく顔を眞赤にして俯向きつゝ息をはずします。

俊哉も今は胸の騒ぎを抑へ得ない。何と云はう。何と云つて百尺竿頭に一歩を進めよう。彼は火の様な女の耳に口を寄せ、日本語によらずして英語で囁いた。すると菊枝は聲をも立て得ず、極度の恐怖と驚愕に襲はれたと見え、

年に初めて雪が降つた晩だ。

尤も、宵の中には空こそ夢つて居たが風もな  
く寒氣も左様でない。僕は知己の或る家族から  
芝居見物に誘はれて居たんで、會社から歸ると  
早々大急ぎで髯を剃り、顔を洗ひ、頭髮を分け  
直して、さて眞黒な無尾服にオペラハット眞白  
な襟飾に眞白な手袋。いよいよ出掛けようと思  
ふ前に、最う一度昂然と姿見鏡の前に立つて自  
分の姿に最後の瞥を加へる——いやすつきり  
胸が透く様だ。

見物した芝居は例のミュージカル・コメディー  
さ。花形役者は獨逸から來た女だつて云ふが、  
容貌よりはいはい咽喉を聞かしたね。

芝居はねると見物歸りの連中が入込む事に  
きまつて居る角の料理屋・シャンレーで一寸一  
杯。雑談に時を移して再び戶外へ出たのは最う  
一時遅。見ると何時の間に降り出したのか往  
來は眞白。ひどい雪風だ。

僕を招待して呉れた家族の連中とは歸り道も  
違ふ處から、つい居先の地下鐵道の入口で別れ、  
僕は高架鐵道へ乗るつもりで四十二丁目の角を  
曲つたが、すると、いや眞正面に吹付けて來る  
吹雪に僕は向も見えぬばかり帽子を引下げ、俯  
向いたなりかまはずに歩いて行つたので、忽ち

歩いて來る人にとつしり行き當つた。相手も同  
じく行先見ずに歩いて來たものと見えて此方が  
云ふより先に、

「あら御免なさい」  
投遣つた調子の仇つばい女の聲ぢやないか。

「あらKさんだよ。まあ何處へ被行つたの。ひ  
どいお天氣だわね。」

僕の知つて居る女だ。身分なんぞは云はずとも  
分つて居よう。夜半の一時過にブロードウエー  
を歩いて居る御連中だもの……

「お前さんこそ何處へ被行つたんだね。此の人  
雪にスキート前も大概にしないと命に觸るよ。」

「ほゝゝゝほ。私のスキートは此處に居るから  
一人で澤山……」とびつたり寄添つて、「眞實に  
Kさん、しばらくちやありませんか。私はもう  
此處だんまりで日々へお歸りなすつたかと思つ  
てましたよ。」

「結局日本人の厄拂をしたかと思つてゐた處が  
……今夜はお氣の毒さまだつたね。」

「何ですつて。最う一度仰有い。承知しませ  
んよ。」

女は掛けたヴェール越に脱む眞面をして、「さ  
あ、行きませう。眞實に寒くつて堪りやしない。

コラまるで水の様でせう。」と其片頬をびつたり  
僕の顔へ押付けた。

「何處へ行くんだ。寒さ拂ひに一杯かね。」

「酒屋は最う晩いから私の家……私の家へい  
らつしやい。眞實に久振だもの。」

もう一人で承知して女は僕の腕を取りぼつ  
ちやりした身體の重みを凭せ掛ける。

「どう攻めかけられては仕方がない。僕は一緒  
にもと來たブロードウエーへ出ると兩側の建物  
に風を避けて此處は大きに凌ぎよい。」

僕は女と腕を組みながら少時四角へ立止つ  
た。不夜城とも云ふべき芝居町四十二丁目の  
雪の眞夜中。實に見せ度い位の景色だつた。

ずつと見渡す上手は高いタイムス社・アストル  
ホテルを初め、下手はオペラハウスから遠くメ  
ーシーヤ・サックスなど云ふ勸工場のあるヘラル  
ド・廣小路あたりまで、連る建物は雪の衣を着て

雲の如く影の如く朦朧として暗い空に其の頂  
を埋め盡し、只だ窓々の灯のみが高く低く螢か  
星の様だ。燦爛たる色さま／＼の電燈はまだ宵  
の儘に彼方此方の劇場の門々、酒屋、料理屋の  
戸口々々に輝いて居るが、それさへ少し遠い  
のは激しい吹雪を溶びて春の夜の灯火とでも云  
ひたげな色彩。



又は學校から程遠からぬ墓地などを歩いた。森の中で日が暮れ、栗鼠がききと鳴く老樹の梢に星が輝き初めた時、俊哉は夕風が寒いからとて菊枝を己れの外套の中に抱きすくめた事もあるが、菊枝はもう拒むだけの力がない。二人野にさく草を摘んだ時、男は其の一端を襟にさして造るとて、顔を近寄せた拍子に突とその頬に接吻して見たが、女はそれさへもたゞ恥し氣に顔を赧めたばかり。俊哉は一月月ならずして、久しく夢みて居た通な幸福の人となつた。幸福——それは若い新婚者のみが竊に神に謝し運命に謝する幸福である。

二年の月日は過ぎ後一年で卒業すべき前の年の夏、俊哉は暑中休暇の間紐育ボストンあたりを旅行するとて學校を去つたが、それなり秋の開校期になつても歸つて來なかつた。

只一通の手紙をば菊枝の許に——小生都合有之東部の大學に轉校し此處にて學位を得明年は歸國するつもり今日まで数ならぬ小生に對して御厚情の段深く感謝する處に有之候——

\* \* \* \* \*

一年又一年。

俊哉は歸國して後、或會社の有望なる社員になつて居たが、或時新橋の停車場で偶然在米當初の學友山田太郎と云ふ神學者に出遇つた。

山田は牧師となり菊枝を妻にして居ると云つた。菊枝は俊哉に見捨てられたと云ふよりは一時の愚みにきされた事を知つた當時は全く狂氣となり、或冬の夜——ミシガン州の恐しい雪嵐の夜に森の中を彷徨つて自殺しようとしたのを、圖らず山田に助けられ事の始末を懺悔した。山田は惡魔の餌となつた菊枝の身の上をば深くも憐れに思ひ、どうかして菊枝をば此の暗黒な絶望から救ひ出し、元の幸福な女性にしたいと所有力を盡していたへつた。

彼は學位を得てから菊枝と共に歸朝した後、二人の屬して居る或寺院の長老に計り遂に十字架の前で神聖に結婚した。

「大山さん。私は今日では決して貴君の罪を咎めは致しません。菊枝さんは神の恵と私の力で昔の罪から救はれ、以前の通りの温良な婦人となり、善良な妻となりました。ですから貴方も眞情から神様に對して感謝なすつて下さい。」

俊哉はその後會社などで若い者共の間に、クリスト教は可いとか悪いとか云ふ議論が出るに必ず云ふ。「兎に角クリスト教は決して

世に害を爲すものでない事だけは明瞭だ。——そして彼は常に御へて居る葉巻の煙を一吹するのである。

## 雪のやどり

在留の日本人が寄集つて徒然の雜談會が開かれると、何時も極まつて各自勝手な米國觀——政治・商業界から一般の風俗人情其の中にも女性の觀察談が先づ第一を占める。

西洋の女——殊に米國の女は教育があつて意志が強いから日本の女の様に男に欺されたリ墮落したり爲る事は非常に稀である。……と此の夜の會合に座中の一人が最後の斷案を下した。

すると、忽ち他の一人があつて、「然しいくら米國だつて十人が十人皆さう確固して居るとも云へない様だぜ。僕は殆ど信じられない様な話を澤山聞いて居るが……」と横槍を入れた。

「どういふ話だ。」

その男はまづビールに咽喉を潤して語つた。去年の十二月、まだクリスマス前の前で、其の

踵の高い靴の裏で洋燈を担り、巻草の煙をぶーつと吹いて、「家へ来た娘なんぞは：アンニーつて云ふんですよ：。バツフロアから何十呎とか云ふ田舎に居て、其の土地の樂屋か何かに働いて居たんですとさ。ところが自分の家の近所に紐育のある保、會社の役員だつて云ふ觸込で、斯く下宿して居た男が、どうだい利と一緒に紐育を見物に行つちやアつて、或日巧く勸め込んだんですとさ。田舎に居れア誰だつて一度は紐育を見たいと思ひますアね。それでふつと魔がさしたんですね、勸められるまゝに紐育へ来て、其れからは何處か好い奉公口でです。停車場へ着くといきなり二三軒の屋を彼方此方と引廻された句に、此處の家へ送込まれて、男は何處へ行つたか烟見た様に消えて了つたでせう。さア親里へ歸るにも金がない。此家にゴロ／＼してゐる中には、つまり商賣でも爲なきア成らない様になるんぞアね。」

「さう行きお手のものだが、もしか心立の堅い女で、死んでも身を汚すまいと爲たら、如何するね。」

「そんな堅い女が減多欠鯨に在るもんですか。」

ベツシーは所謂海に千年山に千年の輩だ。一

言に僕の語を打消して了つた。

「初めは、誰だつて堅いもんです。利だつて昔は堅いでしたよ。家へ今でもちやアんとニューゼルシーにあります。私ア紐育へ来てから久しく三十三丁目の勤工場で賣子を爲て居たんですがね。一週間に僅少五弗や六弗の給金ぢや、とても遣り切れや爲ませんわ。其ア唯食て行く丈けなら如何にか凌ぎも付きませうが、それぢやまるで死なずに生きて居ると云ふ丈けの節で、若い身空で茫然とこの紐育の賑やかな驛が見て居られますか。人が流行の衣服を着れば自分も着たい、人が少居へ行けば自分も行きたく成ります。其様普澤が爲て見たいばかりに私は誘はれるなりに、一番最初が同じ店に働いて居る或男のものになり、其れから段々泥水に足を入れ始めたんです。其ア或時は私だつて人間ですから、あゝ此様事をして居ちやア行末が心細い。一層の事田舎へ歸つて了はうかと、氣の付かない事もないんですがね。一通紐育の風に吹かれたら最後、例ひ往來へ行けるのが紐育です。若いものにア泣くのも笑ふのも皆な紐育でさ。それですものアンニーだつて今に御覽なさい。よしんば堅氣の家に行つ

て居たからつて、其の儘ぢや居られせん。此の紐育に居るからにや何時か一度は自分から若い中だ、同じ事なら面白い目をした方がつて、別を變へる様になつて了ひます。……」

果せる哉。僕に其の後ベツシーを助ねる度々初めは一緒に酒をのむ、次には矢談をぶふ：。段々に入招れて来る少女アンニーの様子には何時も驚かない事は無かつたね。

今ぢや君、もう立派なものだよ。後にスカートを小意氣に掴み上げ細い佛蘭形の靴の踵で、ブロードウエーの敷石をコツ／＼やる様子。どうだい。お思召があるんなら僕が一つ紹介しよう。

一同は更に笑ひ更に飲み更に煙草を喫して、さて又更に談じはじめた。

## 林 間

シカゴ、ニューヨークのやうな騒しい米國北部の都會を見物した旅人が一度市の方官府なるワシントンを訪ふと、全市は一面の公園かとばかり街々を蔽ふ深い風の木立の美しさと其れに反しては市内到る處に徘徊する醜い黒奴

兩側の人道は齊しく雪で眞白な處へ色電燈の光で或處は青く、或處は赤く、リボンの様に染分けられて居る上を、歸り後れた歡樂の男女互に腕を組みつゝ右方左方へと、或ものは音もなく雪を分けて來る電車に乗り、或ものは其邊の自來車や馬車を呼んで一組二組と次第々々に入影の消え行くさま、僕は此の芝居町の夜深はもう雪に限ると思つたね。歡樂盡きて何となく疲勞した様な夜深の燈火と、如何なるものにも一種犯し難い靜寂の感を催さしめる雪と云ふものが、此處に深い調和をなすからだらう。

僕は辻々の駈者どもが勧める儘に行先は左程に遠くもないが女を扶けて一輛の馬車に乗つた。

日本でも雪の夜の相乗と來れば何となく妙趣なもの。増して柔心地のよい護謄輪の馬車、兩方から手を握り身を凭れ合せ天地は只我ものと云はぬばかり散々に巫山戲散らして間もなく女の家に着いた。

フラット・ハウスだから、表の大戸を這入つてから三階目。女は手にさげたマツフの中から鍵を出して戸を開け先に立つて僕を突當りの空間に連れ込んだ。

壁には色紙の裸體畫が二三枚、室の一方には

ピアノ一方には安物の土手古絨で圍んだコーナー・コーナー。此處に二人は身體を埋めて飲んだり歌つたり、さて接吻したり擦り合つたり、したい限りの馬鹿を盡して遊ばうと思つたら遠慮がちな日本の女よりも先づ西洋の女さね。

する中輕く客間の戸を叩いて此の家の内儀の聲と覺しく、「ベツシー、ベツシー、鳥渡來てお呉れな。」

「何か用？」とさも煩さいと云ふ様に僕の女ベツシーは甲高に返事をした。

「鳥渡で好んだよ。又あの娘が駄々を捏るもんだからね。」

「煩さいのね、私や最う酔つてるのよ。」

悠うは云つたがベツシーは其の儘立つて出て行つた。

隣の室の方で何やらぶつ／＼云ふ太い男の聲に交つて、ベツシーと聞慣れぬ若い女の聲、如何様何か紛擾いて居るらしい。

此う云ふ處には珍しからぬ甚助節でも有らう、暫くすると太い聲の男は止めるも聽かず歸つて行くらしく、内儀の聲も聞えて、遂に表の戸を開閉する音……それから家中は再び寂となつた。

「あゝ、もう煩くつて懲り／＼だ。家の内儀さ

んも又何だつて那樣女を背負込んだんだらう。」

ぶつ／＼云ひながら歸つて來たベツシー。直線僕の側へ坐つて、「すみませんでしたね、大事な人を置去りにして行つて……」

「ええ。爲様がないんですよ。つい四五日前に來た娘だもんですからね。」

「お客をふるのかい。」

「ふるどころか、てんで受け付けないんですよ。尤も自分が承知で此處へ來たんぢやない。つまり欺されて來たんですからね。」

「欺されて……男にかい。」

「田舎からね、女を連出して金に仕ようつて云ふ、悪い者に引掛つたんですよ。」

「それぢや、情人に欺されたつて云ふ譯でもないんだね。」

「さうです。能く有る品ですよ。」

「さうかい。それぢやアメリカにも女街が居るんだね。」僕は最新しい話に興を得て、一體どうして連出して來るんだ。いくら女だからつて、さう無暗と欺されも爲まいぢや無いか。

「それア、いろ／＼と時と場合で、あゝ云ふ悪い華の事でも、手を變へ品を變へするんですからね……。」とベツシーは段々歸り出した。先づ



つ、夕陽の光に水を隔て、遙かに眺めれば、何とはなく人類人道、國家政權、野心名望、歴史と云ふ様なさまゝな抽象的の感想が、夏の日の雲の様に重なり重なり胸中を往來し始める。と云ふものゝ自分は一つ纏つて、人に語す様な考へはなかつた。唯漠として大きなものゝ影を追ふ様な風で、同時に一種の強い尊嚴に首の根を押付けられる様に感ずるばかりである。

自分は暫くして後向いた顔をし、再び四邊を見廻した時には、先程橋の上を歩いて居た兵卒も女づれも、已に待合した電車に乗つて行つた後と見えて、次の電車を待つ新車の人が早や二三人も集つて居た。

自分は電車道に沿うて一二町ほど歩み、道の兩側から蔽ひかゝる林の中へと常もなく分け行つた。

林は重に樾と楓とである。此の國の楓は至つて夜露に脆くまだ黄葉もせぬ先から散り初めるが常とて、羊腸たる小道は何處とも見分ぬまで大きな落葉に蔽はれて居たが、然し樾の林は今が丁度紅葉の盛り時、その深い葉の中に射込む夕陽の光は木の葉の一枚々々を照して、

まるで金色の雨の降り注ぐやうである。けれども聚れて行く秋の足は、移行く事の早い處から、見て居る中に彼方の明い梢が陰になつたかと思へば、此方の蔭なる梢は忽ちにパツと明るくなる。すると明い方では一度に地に落ちいたらしい小鳥が更に鳴出し、蔭になつた梢の方では栗鼠が消滅しく叫ぶ。

自分は聞くともなく耳を澄して、猶も當なく歩いて行つたが、其の時自分の直ぐ行手の本蔭から小鳥の聲でも栗鼠の聲でもない——女の啜り泣く聲が起つた。

驚いて止立る間もなく、自分は直様落葉の中に二人の人影を見出し得た。褐色の制服を着けた兵卒と其の足許に祈禱でもする様に廣げた兩手を胸の上に組んで居るのは、まだ袂く年の若い、半分程白人の血を混へた黒奴の娘である。

兵卒と娘——と云へば事の次第を想像するのには甚だ容易であらう。

「後生だから……と娘の聲は兩手を組んだ胸の底から響く。

「まだ、そんな事を云つてゐるのか。」と兵卒は嚙煙草の唾を吐きながら、如何にも厭はし氣に横を向いて了つたばかりか、早や其の場をも立ち去らうとする氣色である。

「あれ！」とばかり女は倒れながら兵士の手に取り纏つて、「それぢや、もう、どうしても切れて呉れッてお云ひなさるんですね。

「何に……切れて呉れ？ 切れて呉れなぞと此の乃公は頼んで居るんぢや無いぜ。お前が切れよう」と切れまいと乃公が勝手に此れまでの關係は切つて了ふのだ。」

兵士は如何にも憎々しく兩も豪然と云ひ切つた。彼は立派な白人、彼女は以前に隷であつた黒奴の女である。切れて呉れ……と云つた女の語が少からず不快に聞かれたからであらう。

女は返す語もなく取纏つた男の手の上に啜泣くばかり。兵士は暫く其の様子を見て居たが、何か又思ひ出した様に、

「考へて見るがいゝや。えッ。マーサ。」と娘の名を呼び、「初づからが、さうぢや無いか。乃公の方からどうぞ可い仲になつて下さいつて頼んだんぢやない。此の春、おれがM大佐の家へ從卒に行つてゐる時だ……夜お前が裏庭へ出て居る處へ乃公が行合す……乃公ア其の時酒に酔つて居て……はゝゝゝ、まあそんな事はどうでもいゝや。するとお前は其の翌晩に何時の何日に何處そこで會ひたいッて云出したんだらう？」

の夥しきに一驚するであらう。

自分も新大陸を彷徨ひ歩いた或年の秋、この首府に到着して早くも二週目あまり。先づ大統領の官邸ホワイト・ハウス、議事堂、諸官省から、市内の見るべき處は大方見盡し、遂に遙なるポトマックの河上マウント・ヴェーノンの山中に華盛頓の墓をも弔ひ了つて、此頃は唯醜なる異郷の秋をば郊外の其處此處に探つてゐる。その中最も忘れがたきはマリーランド州の牧場の夕暮であつた。

日沈んで半時間あまり燃る夕榮の色は次第に薄らいで、大空に漂ふ白い浮雲の縁にのみ幽な薄紫色の影を残すと、草生茂る廣い野の面は青い。霧の海となり、遠い地平線の彼方は何れが空何れが地とも見分けられぬやうになる。其れに反して、遠い彼方此方の眞白な農家の壁や、四五人連で野を越して行く牛追らしい女の白い裾、又は處々に黄葉して居る木の梢、名も知れぬ草の花などさう云ふ白いものゝ色のみは光線的作用で四邊の薄りく黄昏れて行くに従ひ却つて产出す如く明になつて、暫く見詰めて居ると不思議にも次第々々に自分の方に向つて動き近いて来る様に思はれる。

それけ單に見る眼のみならず、心の底までに

一種云ひ難い快感を誘ひ出す。遂に自分は冠つて居る帽子を振動し四邊が全一夜になるまでも、一心に其れ等の浮き動く色彩を差拍いたのであつた。

次の日も自分はこの夕暮の美しい夢に酔はうとて、同じく日の落ちる頃を計り、此度はポトマックの水を隔てた——其處はもうヴァージニヤ州に隔して居る——向岸の森を志し町端の崖下に架つて居る一條の鐵橋を渡つた。

渡ると橋袂には直様駁ひ危さる様な木の繁を後にして木造の小さな電車の特合所がある。此れは程遠からぬアリンソンと云ふ廣大な共同墓地や練兵場や、兵營、將校の官宅などの有る所に赴く電車の出發點なので、今しも車を待合して居る人達は大抵褐色の制服をつけた合衆國の兵卒で、中には大方士官の家にでも使はれて居るらしい黒人の下婢と、ワシントン市中へ買物に出た歸りらしい白人の年増の女も交つて居た。

自分は兵卒や水兵の姿を見る時ほど、一種の重い感情に胸を壓されるやはない。立派な體格若い身空の諸有る熱情をば、絶間なく軍規軍律と云ふもので壓迫されて居る肉の苦悶が、何處とはなしに其の日にやけた顔や血走つた目の色

に現はれて居る様の外見にはいとも恐ろしく又これに見られるからである。彼等は三人四人と電車の來る間を橋の欄干に身を倚せて、まだ醒めぬ酒の醗を醒して居るものもあれば、嗜煙草の唾を吐きすてながら、初音高く橋の上を散歩して居るものもあり、又は残り惜し氣に水を隔てたワシントンの方を眺めて居るものもあつた。大方午後を訪れた女の事でも思返して居るのであらう。

自分は兵卒と同じく橋の欄干に身をよせかけて四邊を眺めた。丁度、入際の夕日は大空一面を焦げる様に焼き立て、眞向に其の鋭い光をワシントンの方へと射返して居るので、ポトマックの河水に臨んだ公園の色付いた樹一帶は恰も濃艶な土耳其絨の帷のやう。其の上に五百五十五呎、高く直立して居るとぶふかの驚くべき大理石のワシントン記念碑の側面は宛ら火の柱を見るに等しい。稍遠く離れた議事堂の圓頂間も彼方此方に聳ゆる諸官省の白い建物も皆一樣の紅に染出され、市中の高いホテルの窓々は一つ残らず色氣の様にきら／＼輝いて居る。暗々した大きなパノラマである。身は飄然として秋風の中に立ち、あゝ此れが西半球の大陸を統轄する第一の首都であるのかと意識しつ

たの何のと云ふよりは唯だ男が好きなんだ。此様都合のいゝ奴は何處を探したつて有りやしない。一

折から電車が向うの木蔭から響を立て、現れた。

「電車が来たぜ。車の中でゆつくり話さうぢやないか。」

「オーライ」とばかり。二人の兵卒は口笛で——

Im Yankee doodie, sweet heart, Im Yankee doodie joy——と云ふ俗歌を吹き鳴しながら停車場の方へと駆けて行く。

森や林や水は次第に暗くなつた。橋の下堤の木蔭に泊つて居る小舟や釣舟には赤い灯がつき、ワシントン府の烽火は空の星と共に一刻一刻明く輝いて行く。自分は一人、橋を渡つて歸り行く道すがら、何かまだ種々とまとまりの付かない、云現し難い非常に大きな問題を考へて居るらしかった。

(明治三十九年十一月)

## 悪友

一時、加州で日本の學童排斥問題が喧しく

なつて来た時分、日米間には戦争が起るだらうと、紐育を初めとして、國內の新聞は種々な臆説を書立てた。その頃には自然、紐育在留の吾々同人間にも寄ると觸ると太平洋沿岸に關する談話が多くなつた。

或夜、或處で、例の如く、人種論、黃禍説、國際論、ルーズベルト人格論から正義人道問題などの眞最中、或人が不意に思出した様に、

「彼方にや随分、日本の醜業婦が居るさうですね。」と飛んでもない事を訊出した。處が、それは恰も燃立つ炎天の端に夕立雲の湧出した如く、忽ち四方に漲つて、堂々たる天下の論議を一變さして了つた。一座の中には以前よりも一層重大な問題が提出されたと云ふ様に椅子を前に引き進めたものさへあつた。

「女や三味線ばかりぢや無しに、日本流の風呂屋だの大弓場なんぞも有るさうですね。」

「汁粉屋でも鮎屋でも蕎麥屋でも殆ど無いものは無いでせう。日本の國內たつて、邊鄙な地方へ行つたら、到底あれだけの便利はきませんから。然し彼の邊に居る日本人は大抵九州や中

國邊から出稼ぎに來たものばかりだから、料理だつて、女だつて、東京の者にや全然手がつけられませんか。」

「成程、さうかも知れん……。」

「私は桑港からポートランド、シアトル、タコマ、それから加奈陀のバンクーバーと、一通り太平洋沿岸を歩いた事があるですが、何處へ行つても似たり寄つたりで。さう……其の中

で唯だ一人ですよ。東京から來たつて云ふ鳥池邊の割けた女を見たのは……。シアトルの達磨茶屋の酌如をして居た女でしたからね……。」

「何か、面白い冒険をやつたのですか。」

「いや、二三度飲みに行つただけの事さ。どうせ、あの邊に居る女の事だから、悪い蟲がついて居るに極つて居ますからね、身分のないものなら兎に角僕等はうつかり手が出せない。殊に其の女の亭主と云ふのは、書生上りで英語も出来るし、シアトル近邊ぢや有名な無賴漢ださう

ですもの……。あの沿岸にや、随分ひどい奴が居るらしいです。女を誘ひたり、密輸入をしたりして喰つて居る……俗に蟻夫と云ふ奴です。」

辯じ立て、若者はパイプの烟に口を休めたが、其を機會に片隅の椅子から、

「君。今君が話した女は確か僕も見た事がありや爲ないかと思ふです。……君は其の亭主だつ



それアな、乃公だつて會へる中は會ひもしようさ……。」と言葉を切つた。

女はいよく泣く。

「今更、申譯らしく譯を話して聞したつて始らないが、まあ早い話が物には始めがあれば屹度續りつてものがある。時候にだつて變り目があらア……。」

自分け最うこの慘酷な惡な活劇を盗聞きして居るには忍びない様な氣がして來た。丁度最後の日影が眞赤な血の様な色して、自分の足許へと叩込んで來たので、自分は姿を見付けられはせぬかとも氣遣ひ、後をも見ずして急いで其の場を立去つた。

無論、自分け戀と云ふ事よりも長く此の國に存在する黒白兩人種の問題をば今更らしく考へ出すのである。一體黒奴と云ふものは何故白人種から輕侮又嫌惡されるのであらう。其の容貌が醜いから黒いからであらうか。單に五十年前は隷であつたと云ふのに過ぎぬのであらうか。人種なるものは一個の政治的體を作らぬ限りは如何しても迫害を免かれないのであらうか。永久に國家や軍隊の存在が必要なのであらうか……

自分は林を抜け出て元の橋袂まで歩いて來

たが、夕陽は全く沈み果てて空を染めた紅色も已に薄らぎ、水を隔てたりシントンの方では公園の木陰や高い建物の窓々に電燈の光が見える。自分は再び橋の欄干に凭れて蒼然として暮れ行く都の方を眺め渡した。

橋の上には以前のやうに電車を待合す兵卒が幾人も散みして居る。高語笑聲口笛などの騒しい中に自分はふと見返れば、たつた今林の中間に來合したものの、直ぐ自分のいで同じ制服の友達と何か話をして居るではないか。

「どうだい。いゝ女でも目付つたかい」と訊き出すのは彼の兵卒で。すると友達は、

「だめよ。今日なんざ馬鹿を見ちまつた。」

「どうした。賭博にまけたのか?」

「賭博ならまだしもよ。いつもの〇街へ押掛けて行つて、とうとう財布の底を叩いちまつた。」

「はゝゝは。金を出さなければ女が出來ねえのか。餘り腕がなさ過ぎるぢや無えか。」と彼は鼻を嗤ひ草を吐き捨てながら、「どうだい。さう女に困つて居るのなら、一人若いやつを取りもたうか。」

「うむ。耳よりの話だな。」

「然し一つ條件がある。それさへ承知なら

……。」  
「何でもいいや。一文いらずなら此様結構な事は無え。」

「さうとも結構なものよ。」と彼は領付いて「條件と云ふのけ外でもない。黒奴の娘だぞ。容貌は惡くねえが……。」

「橋ぶものか、そんな事で尻込する已れぢや無え。」

「感心々々! それでこそ流行のジャックだ。其の如つて云ふなア外でもない。以前乃公が私卒に行つて居たM大佐の家に働いてるんだが、まだぶ若い船に男が好きでよ。此方が鳥渡日い事を云つてやりやア直ぐ向うから熱くなる奴だ。」  
「さうか、然し餘り夢中になられちゃア後が煩いぜ。」  
「そこは、此の乃公が承知して居る。其の娘つて云ふのは男が好きなんだ。男と遊ぶのが好きなんだ。だから、お前がさんざ玩んだ畢句に、厭になつたら、直ぐと誰でも叫び、お前の代りになる様な男を押付けて逃げて了へば其れまでの事よ。お代りさへ有りやアそれで奴の方には直きと其の氣になつて了つて、何もお前の尻ばかりをさう何時までも追廻しア爲ない。惚れ

唯す。この言語は日本の醜業婦の口を経て或る特別の意味を作り、廣く米國の下層社會に流布して居るのである。

成程、夜になつて、旅宿の窓から見下す街の光景は何と云はうか。私は出發する前にもう暫は見る事の出来ぬ東洋のこれも社會觀察の一ツとして一夜遊廓を歩いて見た事があつた。今眼にする夜の活動もそれと同様のものではあるが、然し私の受けた感動は到底比較にはならない。思ふに初めて見た外國の事とて、善惡ともに目新しかつたからでもあらう。

往來傍には日中其の邊をうろくして居た連中の外に、處々の波止場や普請場に働いて居た人足どもが其の日の仕事を了つて、何處からともなく寄集つて来る處から、唯さへ物の勇氣を絶さぬ四邊の空氣に更にアルコールと汗の臭氣を加へたかとも思はれる。重い靴の響罵る聲につれて土塵れの破れシャツ、破れズボン、破れ帽の行列は黒い影の如く、次第々々に明く灯の點いて居る日本人街の横町へと動いて行く。と、其の横町からは絶え間なく雜然たる人聲に交つて、酒屋や和場場の蓄音機に仕掛けてあるらしい曲馬の囃子や騒しい樂隊の響が聞え、同時にチンテンと彼方此方で互に呼應

ふ様に響く三味線の音、それに續いて女の歌ふ聲男の手を叩く音。

まア、想像して御覽なさい。アメリカと云ふ周圍の光景に對し、汽船の笛、汽車の鐘、蓄音機の樂隊など、「西洋」と云ふ響の喧しい中に、かの長く尾を曳いて吠える様な唸る様な眠たげな九州地方の田舎唄に、ちぎれ／＼な短い絃の音、これほど不調和な不愉快なそして單調ながらも極めて複雑な感を起させる悲しい音樂が他に有らうか。

私は一夜——たしか東部へ出發する前の晩の事、此の三味線が耳について眠られぬ處から、碼頭労働者の列に交つて向の横町へと歩いた。入込んで見ると、いや、大げ場から、玉突場から、其の他の飲食店や路の傍まで日本人のうろ／＼して居る事は非常なもので、然し何れも何處やら落着いて、此處は乃、達の細張中だと云はぬばかり、入込む西洋人の労働者をばさも外國人らしく見違つて居る。と、兩側の木造家の窓からは折々カーテンを片寄せては、外の景氣を窺ふ女の顔が見え、中には黃い聲を出して御かを呼ぶものもあつた。何れも鼻の低い、口の細い、濱の平たい關西地方の女で、前髪を下げた束髪に、西洋風のガウンを着て居る

らしく見えたが、私は外から一瞥しただけで、早や十分の……満足と云はうか、不氣味と云はうか、兎に角それ以上に近いて見るには忍びない心持になつた。

然し猶暫くは路々に佇んで様子を見ようと、東西の労働者は何れも煙草屋だの果物屋だの云ふ小い商店の間々に、暗く穴の様に明いて居る戸口から出入をして居る。と、其の時胸衣の胸には太い金鎖を輝かした立派な風采の紳士が一人、中高帽をば少し阿彌陀に冠り酔つて居るらしい眞赤な顔をして、口には小楊枝を銜へながら労働者に交つて出て來たので、私は四邊の様子から、不思議の感に打たれて覺えず其の顔を見た。

ふいと、何處かに見覺がある様な氣がしたので、行過ぎる其の後姿を見送つたが、すると其の紳士は二三間先の煙草屋の店先に立止る。店の電燈が横顔を照す……横顔と云ふものは能く人相を現すものである。七年留前の記憶が突然呼返された。

私は多分瞬間の感動に打たれた爲めであつたらう、日頃の臆病にも似ず斷付けて後から男を呼止めた。

紳士と云ふのは死んだ兄の親友で、其の頃に

て云ふ無賴漢の名前を知つて居ませんか。一同は皆驚いて質問した男の顔を見た。何故なれば彼は何時も女や酒の話には無頓着な眞面目な人として知られて居たからで。

「島崎君。君がさう云ふ方面の事を知つて居ようとは、實に意外だ。」と驚く聲が二三人の口から同時に聞かれた。

「いや、僕は相變らずの野暮なんだが、其の女の事だけは特別の事情があつて知つて居るのです。年は二十六七でせう? 細面の、身長の高い……それぢや確に僕の見た女です。まア奇遇とでも云ふんでせうな、其の女の亭主ツて云ふ男は元は僕の兄……死んだ兄の親友だった——」

島崎と呼ばれた男は問はるゝ儘に話した。

## 二

私が米國へ來るとき初めて上陸したのはシアトルです、さう最う丁度三年前の事だ。

能く晴れた十月の末、私は暮れ行く日と共に波止場へ着いたが、翌朝でなければ米國の移民官が出張しないと云ふので、其の夜は深く行くまでも甲板の櫓下から、初めて見る異郷の水と山とを眺め、さて次の日になつて無事に上

陸はしたものの、さて東西が分らない。船中で懇意になつた二人連、互に手を引合つて、茫然と行迷つて居た處を丁度客引に出て居る日本人の旅館の番頭だとか云ふ五十ばかりの男に案内されて、電車に乘込み、日本人街へ曲る角の汚い木造りの旅館に送り込まれた。

成程、あの地方で日本人が誤解されるのも無理ではない。宿屋の界限は商店續の繁華な街が、丁度人の身の零落して行く様に次第々に寂れて行つて、最う市が盡きて了はうとする極點である。四邊の建物はいづれも運送屋だの其同の既などばかりで、荷馬車と労働者ばかりが、馬糞だらけの往來を占領して居る。

案内された旅館の窓から頭を出す、遙か市の中の建物の背面が見え、正面には近く港草のバナラマ館を見る様な瓦斯溜所が高く黒く大きく立つて居る。其の邊りから往來が俄に狭くなつて、汚い木造の小家がごた／＼して居る間へ一筋の横町が奥深く行先を没して居る。何でも其の端れは海邊へでも出るらしく、人家の屋根を越しては、船へ荷を積込む倉庫の鐵屋根と無數の帆柱が見え、又鐵道の敷地もあると見えて、機關車の鐘の音につれて波じい黒煙が絶え間なく湧出で、屋根と云はず往來と

云はず、時々風向によつては、向も見えぬ位に細き波つて、あたり一帯を煤だらけにして居る。この横町、この汚い木造の人家、これが乃ち日本人と支那人の集窟、東洋人のコロニーで同時に又職に有りつかぬ西洋人の労働者や、貧と迫害に苦しんで居る黒奴が雨露を凌ぐ處である。

私は石炭の烟を見ただけで、もう體易して了つて、直にも何處か西洋人のホテルへ引移らうかと思ひ、實は手靴まで掛けて往來へ出たが、書生の身の旅費は十分ならず、好し十分持つて居るにしても、西洋のホテルとさへ云へば直様東京の帝國ホテルなどを想起し高帽子でも冠らなければ這入れぬ様な氣がして譯もなく氣後れがする。どうせ長く止る土地でもない。加州から來る友人を待合して、一週間中には東部に出發する身だからと、踏出しは爲たものの其の儘おめ／＼と立戻つた。で、私は上陸した其の日から汚い宿屋の一室に引籠つて居るのが厭きに、船中の疲れを休める暇もなく、市中は云ふに及ばず、市外の北に漲り渡る廣大なワシントン湖水や、其の邊の森林まで朝から晩まで歩き廻つたが、何處へ行つても子供が吾々日本人の顔を見ると「スケベイ」と云つて



に金物を輝して居る様子と其の言葉つきは何處か下卑て聞えるので私は此の地方の事情から察して怎う問掛けした。すると彼は、はゝゝゝと笑出し、「矢張、一種の移民事業さな、移民には必要なもんぢやから。」

少時黙つて、巻巻の紙を吹いて居たが、「どうだ、日本飯でも御案内しようか、東部の方へ行つたら當分はパンばかりぢやらうから……」

私は辭退せず、矢張此の横町の唯ある二階の窓に確か「さくらや」とか書いた行燈の出してある日本の料理屋へと導かれて行つた。最前様子を伺つた女郎屋の入口も同様な暗い入口から階子を上ると、一條の狭い廊下を中にして、左右にペンキ塗の戸が五ツ六ツもあらう。廊下には瓦斯の初火が一ツ點いて居るだけで、薄暗いのが、閉めた戸の中では、男や女や大勢の人聲、三味線の音喧しく、牛鍋の臭がぷん／＼立迷つて居る。

山座は我が家の如く四邊を見廻しながら私を一室に案内して呼鈴を押すと、べつたり白粉を塗つた猪場の飯盛りとも云ひさうな女が洋服に上草履をつつかけて出て來たが、如何にも懇意な間柄だと云ふ様に別にお世辭一つ云ふでもなく、

「何か食べるの……?」と云つて、傍の壁に、大儀らしく背を凭掛けて居る。

「何でも可いや、お雪にさう云つて、よきさうなものを持つて來てくれ。」

女は返事もせず唯領付いたまゝ、ぱた／＼廊下を歩いて行つた。

突然何處かの室から陽氣な騒の三味線、茶碗を叩いて拍子を取る音が聞え出した。私は何の譯もなく嘗て房州あたりの夏の夜に船頭が船付の茶屋で騒いで居たのを見た其等の事を思ひ浮べる、と、急に遠く家を離れて外國へ來た寂しさが胸の中に湧出て、何やら悲しい氣がして來た。折から戸が開く。以前のとは違つた女が香物と鉦子をもつて押入つて來たが、此れもお客あしらひはせず、直に山座の傍に坐りながら、

「昨夜はどうしたの、あんまりぢや無いか。元談も大概にするものだよ。」

呆れて私は其の顔を見た。二十七八、物云から細面の顔立から、港草近邊の小料理屋か牛肉屋の女中に能く見る種類のものである。

流石の山座も私の至前、少しは氣まづい様子で、煙と巻巻の煙を吹立てながら、一來るさうさう、つまらん冗談ばかり云やがつて、早くお

客様にお酌をしないか。」

女は酌をしたが其れを機會に、私の方に顔を向け、

「たまにやア愚痴も出まきアね、こんなアメリカ三界まで連れて來られて、ねえ、あなた、毎晩酒氣ばかりして歩かれるんですもの……ちつと、貴君、意見をしてやつて下さい。」

いよ／＼出て、愈奇と云はねば成らぬ。山座は料理の催促にと、女を去らしめたが、最う秘すべきでないといふ決心したらしく、私の問ふも待たず、

「え、驚いたでせう、膽を潰してしやせんか、はゝゝゝは。」と先づ笑つて後、現在の境遇を打明けた。

彼は私の兄の死んだ事をば新聞の廣告で知つた頃、何かうまい事はないかと、食詰めた故郷を去つて、桑港へ渡り、一般の渡米者が経験する種々の辛苦と失望を知り盡した結果、亞米利加三界は女で食ふが第一と悟つて、一先日本へ歸るや否や、今のお雪と云ふ牛肉屋の女中をば引連れて再び渡米し、根據地をシアトルと定めて、醗業船の船介と賄使をして暮して居るのだとの事。

「人間は一つ悪い方へ踏出したら、途中で後戻

は絶えず兄の許へ遊びに來た男である。

### 三

名をば山座——と云つて兄とは同じ學校を卒業し同じ會社の役員となつて居た。然し私と兄とは二人の姉妹を間にして、長男と季子と云ふだけ年も十年以上違つて居るので、無論私はかの男と話をした事もないが、其の噂だけは兩親初め皆のものゝ口から何かにつけて云聞かされて居た。

其の理由と云ふのは丁度私が尋常中學を卒業しようとして、兄は既に其の以前から放蕩の結果として、この山座と一緒に高利の金などを借り、屢私の父に迷惑を掛けて居たが、それにも關らず今度は山座の他にも二三の同類があつて、會社の名義を種に詐欺取財をやつた。

忽ち露顯して一同捕縛されたが、私の兄は父が所有の屋敷と地面を賣拂つて、會社に辦償金を出したばかりに刑には觸れずに済んだ。山座も幸に陸軍の將官をして居るとやら云ふ其の叔父の力で、此れも何にか罪を逃れたので、つまり庇護も何もない後の二人が最も悲惨な境遇に落ちたのである。然し其の頃の私には未だ充分に罪惡と云ふものを解釋する事が出来ない

ので、唯漠然たる恐怖を感じたに過ぎない。

兄は此の事件があつて後は、宛ら不言の影か疫病神の様に、家中のものゝ恐怖と嫌惡の中心になりながら、唯だぶら／＼爲す事もなく二年ほどの月日を送つて居る中ふと肺病になり其の冬を越し得ずに死んで了つた。すると、私の父も母も急に兄をば悪いものだとは云はなくなり、何かの語が出るゝとあれは皆能く家へも遊びに來たあの山座と云ふ惡友があつた爲めだ……朱に交れば赤くなると云ふ諺が殆ど兩親の口癖になつて了つた位である。兩親のみに止まらず私の一番の姉の如き（兄とは二ツの年違ひで、己にある法學士の妻になつて居たが）家へ遊びに來る度々家族の寫眞帖などを繰つて見て、兄と彼とが一緒に撮影した寫眞に接すると、

「まあ何と云ふ氣障な風だらう、まるで役者か落語家見たやうだ！」と云つてはちつと打目成り、遂には簪の先で其の顔を叩いたりした事のあつたのを私は今だに覚えて居る。

年は一年々々と過ぎて行つたが、丁度兄の死んだ頃の寒い二月が來ると、毎年兩親の口には今更らしく山座の名が呼出され、つゞいて其の時節中は私に對して例の古い諺と古い教訓

が數驚く繰返された。然しこの恐るべき山座なるものは其後何處に何して居るのか家中知るものは一人もなかつたのである。

### 四

「君があの子代松君の弟……さう云へば成程忘れはせん。君はあの時分はまだ、ほんの子供だつたぢやないか。うむ、考へるともう七八年……もつと昔になるかも知れん。」

勞働者の込み合ふ路傍、煙草店の店先で葉巻へ火を點けた山座は流石に驚いたらしく私の顔を目成つたが、忽ち調子を代へて、

「どうして米國へ來たです。勉強ですか。然しこの近邊は君等青年の來る處ぢやないですよ。」

「最う明日にも友人の來次第東部の方へ行くつもりです……」靜に答へて、貴君は今何をなすつて被在るのです。何か御商法ですか。」

「僕か……」と彼は語を切つて少時私の顔をば見詰めたが、「君に聞かしたら喫驚するぢやらう。はゝゝゝは。人間と云ふものは變れば變るもんさ。」

「移民事業の方でも……」立派な八字髭を生して指環だの金鎖だのいや

もうざつと二十年も昔の事ですが……」  
自分が椅子を進めるのを見て博士は語り出し

た。  
もう二十年も昔の事です。私の妻ジョゼフインが丁度貴君と同じやうにかのタンホイザーの意味は何であるかと訊いた事がある。

當時私は新婚旅行のつもりで妻と共に歐洲を漫遊し、丁度奥地利の首府に滞在して居たので、一々この都の有名な客室付のオペラ・ハウスに赴いた。博士は室の壁に掛けてある眞眞の建物を指した。其の夜の演題は乃ちタンホイザーであつた。

私は場内の光景から其の夜舞臺に上つた歌人、或はかの獵の従卒や人名、巡禮の行列などに由る幾多の合唱歌人の顔までをも、一々明かに記憶して居ます。

私は妻ジョゼフインと共に絃索と神石の海をなした場内の定の席に付くと、間もなく頭髮の長い樂長が無臺の下の樂壇に立ち現れ、手にする指揮棒で三撃の合圖をすると、燦たる燈火一齊に消え、無數の聴衆は廣大な場中の滑に包まれて寂となる。管絃樂は先づ滑しく嚴かな流禮の曲より熱烈な遊仙洞の曲に入り、聴て「女神の讚美」に進み、此の樂劇の意味全體

を代表したとも見るべき長い前奏が了る……と幕開いて女神ギナスの山の段。

御存じの通り下手に女神ギナスの寢臺の下に樂師タンホイザー、堅琴を手にした儘居眠つて居る。數多の女神が舞蹈から空中に現はれる幻影

なぞタンホイザーの夢よろしくあつて、樂師は遂に目覺め、此の年月美しい女神の愛に人間の歡樂とふふ、歡樂に酔つて居たが、今は吾世の却つて戀しく別れを告げて歸りたいと云ふ。それをば女神は引止め、もし吾世に歸るならば必ず昔の夢を思起して悔んであらう、女神と共に何時までも戀の堅琴を揺鳴らして歡びの歌を唱へと。然しタンホイザーの心動かず、その唱ふ聖女マリヤの歌に魔界の夢は破れ、女神は其の山もろともに闇の中に消去り、タンホイザーは唯一人、故郷なるワルトブルグに近き山道のほとりに立つて居る。

と、山道の岩の上に幼い羊飼、人、魔に汚れぬ聲も清らかに笛を吹いては歌を唱うて居る。間もなく山の彼方よりはる／＼羅馬へ行く巡禮の悲しい聲が聞え、巡禮の行け山道を直つて行き過ぎる。

タンホイザーは先程から此等の歌に聴き取れて居たが忽ち今まで耽つた我が罪の歡樂の空

怖しくなり、感慨極つて其の場に泣き伏してゐる。

聴いて居た私は覺えず深い溜息を漏らして目を瞑りました。

あゝ長き快樂の夢醒めて己が身の罪に泣く樂師の心の中、私は其の歌、其の音々から、突然こゝに忘れて居た結婚以前の故郷な生涯、一時消失せられた樂の夢を思起したのです。すると私には最う舞臺の上のタンホイザーは我が過去の恍惚、煩悶、懺悔の諷刺としか見え、美しい邪教の神樂、神なるギナスは丁度我が昔の情婦マリアンと呼ばれた若い女優者であると思はれなくなつた。

世に禁ぜられた果物程味深いものが父とまじうか。罪の恐れ、毒の慮りは却つて其等の魔力を増すに過ぎない。今は何も彼も打明けてお話しよう……(博士は恥らふ如く前目になつて、男と云へば一時は誰でも此の種の女の化粧の力に魅せられるものであらうが、と云つて私ほど、魂を奪はれたものも少いであらう。如何なる譯からか、私には美しい衣裳に身を飾り舞臺のフットライトの前で、應とらしい眼付や身振をして舞ひ歌ふ女藝人や女優者、然

は料理屋劇場、劇場又は往來や馬車の途すが



りをしようたつてもう駄目だ。自分ぢや幾程後悔して居たつて一度泥が着いたら世の中が承知しないからね、どこまでも悪い方で押通して見るより爲様がない。君の兄貴千代松君なんざ、中途半端で眞人間に後戻りをしようと思つたから、つまり心勞の結果だ、肺病なんぞになつて死んで了つたんだ。十人が十人先づそんなものさ。世の中を知らん學者なんぞは人間は打捨つて置けば皆ずる／＼墮落して了ふと思つてる様だが、其様心配は御無用だ、良くもならず悪くもならず、つまり中途までは落ちて行くかも知れないが、其れから先まつたく奈落の底へお尻を落ち着けて了はうと云ふにや、一度本の一冊も讀んだものは非常な苦心で時々頭を出さうとする一良心と云ふ奴を、すつかり平伏さして了はなくちや成らん。其れアなか／＼口で云ふ位ぢや無い。食の家に生れた奴が食になる、此ア普通の話だ。良家に生れたものが平々凡凡たる良民になる、何の苦勞もいらぬ、が、いざ其れから一歩進んで大人物になるか、又は一歩さがつて世間の裏へ廻るか、何方とも容易なものぢやないぜ。其の苦心と修行は影と日向の差こそあれ同じ事だ。つまり我輩はナポレオンたらんか石川五右衛門たらんかだ。」

彼は今日吾々が人生だとか神祕だとかを口癖にする時代とは違ひ、天下だの、青雲だの、功名だのと云ふ事を晩の星と望んだ十年二十年前の書生の態度に立返り、肝を張つて飲まず酒杯と共に堂々聲を高めて論じ出したので、我は過去の世の傷付いた人の苦痛の腸から出る奇矯の諷刺として、彼の言を聞くに適當だと思ひ別に反駁も質問もせずに傾聴の體を刷つて居た。戸の外には、以前の驛三味線がまだ止まぬ中に、更に新しい一座の三味線と、日本ではもう三四年前に流行つた東雲節が聞え出す……私は其の翌日、南方から來た友人と共に大北鐵道の列車で東部へ出發して了つた。それから程經て後の事私に母に送る手紙の中に、何心なく山座に會つた一條を書いた事があつたが、すると母の返事にはよいも悪いも今は夢、昔は亡兄の親友であれば、その母が志の記念までに焼海苔一箱を別便にして郵送したから、ついでの節山座さまへ届けてくれよとあつた。

ニューヨークとシアトルとは三千哩も離れて居るとは夢にも心付かぬ老いたる親心。母の情、あゝ私は覺えず涙を落しました。

(明治四十年六月)

## 舊恨

博士B——氏とオペラを談じた時である。談話は濃艶にして熱烈なる伊太利派、清楚にして又美麗なる佛蘭西派の特徴より、やがて純渾宏壯神祕なるワグナーの獨逸樂劇に進んだ。

偉大なるは Das Rheingold につゞく三樂劇、神聖なるは Faust 悲劇なるは Tristan und Isolde 美麗なるは Iohengrin 幽鬱なるは Der Fliegende Holländer……と何れもバイロイトの天才が此の世に残した音樂の天地と共に不朽なるが中に、自分は單だ素人耳の何となく「Famulus」の物語を忘れ兼ねる……

「博士よ、貴君はあのオペラの理想については如何いふ説をお持ちですか。」

「どう質問すると、B——博士は忽ち胸を刺された様にはツと深い吐息を漏し、暫く無言で自分の顔を打口成つて居たが、

不幸にして、私は彼のオペラを學術的に批判する資格がないのです」と俯向いて「何故ならばあのタンホイザーを聞いた當時の事を思出すと無限の感に打たれる お話しませうか、

話に罪もなく笑ひ興ずるのです。が、時としては聞くに堪へない劣等な話に思はずぞつとすると、絶えず自分の弱點を憤つて居る念がむらむらと河起り同時に果敢さが身に滲渡つて利ばかりは兎角無に陥り易い。

この様子を見て取つたマリアンは和をば至極遊樂には初生な男と思つたらしく、「何故、そんなに鬱いで被るんです、もつと大きな聲でお笑ひなさい。」と時には氣の持さうに私の顔を見ました。

夜の二時前まで騒いだ後吾々は二人の女をば例の如く各々その家まで送つて行く事となつたが、往來へ出て馬車と呼ぶ時に、どう云ふ其の場の機であつたか、二人の友はネリーと呼ぶ女と三人一組になり、私とマリアンとは全くの二人連で別の馬車に乗つた。

彼女はハドソン河に近いアツバートメントに住んで居ると云ふので、ブロードウエーを北へ小半時間、市内目めの場所を離れると、直ぐ様眞夜中過ぎの淋しさは物凄じばかり、我を運ぶ馬の蹄の空遠く反響し、車の窓から込む夜の空明りは白彩した女の顔をば蒼く朧ろに照す。

マリアンは毎夜を深す身の疲勞か、今は力な

く頭を後に倚せかけ、重げな臉を折々は押開いて、私の方を流暢に見ながら懇々とらしく話した口許に笑ひを告げる。が、最う強ひて話を爲掛ける元氣も無いらしい。

私は默然として女の身に付けた化粧の盛りを深く吸ひながら凝と其の横顔を打目成つた。

年紀は二十一二か、全體が小作りで頸の長い頤の高らしく尖つた眼の大きい圓顔で、小さくて堅く締つた口許には何か冷笑する様な諷刺がこまれて居る——決して美人と云ふので無い、人なる油畫のモデルで無いが、一筆ペンシルを振つた漫画の風情。人は時として、「完成」よりも、未成の風致に却て強く魅せられる事がある。

私は殆ど仰向に居眠つて居る彼女の唇の上に軽く我が唇を押付けた。柔かな、暖い呼吸は直に私の鼻中に突入る。

マリアンはばつちりと其の大きな眼を開いて私の顔を見たが、その儘再び居眠つて了ふ。

私は車窓の外に並木の影の後方に動いて行くのを見、又遠く空の端に風の走る音を聴いたが、心は早くも夢現に彷徨ひ、今一度と重ねて顔を近付ける——途端に馬蹄の響ハタと止み車は、明い入口の前に止つた。

マリアン——  
私の聲に彼女は初めて目覺めたらしく膝の上に置いた白い鼠の毛の暖手袋で眼を擦りながら、

「好い、心持に夢を見て居たんです。が、それぢや接吻なすつたのは貴君なんですか？」

私は一時の舉動に恥入つて何とも答へず伏目になると、マリアンは高くほくほくと笑ひながら、丁度其の時取者の明ける車の戸から、鳥の様に輕く飛び降りた。

私は彼女が五日目の居間まで送つて人つたが、其の夜は五分ほど長居はせず、その儘辭して家へ歸つた——すると其の翌日の午後、私は使ひの子供から一通の書狀を受取つた。次の様な文句が知られてある。

我が身は君を待たんが爲めに、何丁日なるホテルに引移り候。かの上町の住居は戀の私品に便ならず候へば、我が身は君を一日見て戀し候。我等の戀は此の如し何故とな問ひ給ひよ。

あゝ！ 今宵の逢まで、さらば——  
(と此の最後は佛西語で書いて) 慕するMより

らも其の特種の様子と容貌に人の目を惹く一種の女が、何となく愛らしく好いたらしく見えて成りなかつた。デューマが公爵夫人にもあらず又處女にもあらずと云つた此の種の女には全く云ひ難い美がある。よし畫家の夢みる美人では無くとも其の濁つた眠氣な眼の中、細い不健全な指先や、時には恐しく下賤に見える口許に敵し難い誘惑の力がある。乃ち其の眼色は何時でもお前の云ふまゝにと身を没掛ける心を見せながら、口許では用心するが好い、醜い目に逢ふぞと云はぬばかりの冷笑とすね氣味を含ませて居る。

男の出来心は一度此謎の様な魔力に操られると、魅せられた眼には何時となく教育あり淑徳ある妻や娘は冷い道德の人形の様に見えて来て、「戀は浮浪漢ボヘミヤの兄よと歌ふ放縱な詩趣のみに酔ひ家庭や國家の觀念は失せ、身の行末まゝよと激しい激情の處になつて了ふのです。

私はまだ學業をも卒らぬ中から折々長閑な春の半日畫齋の窓に荳卷の煙を吹きつゝ、一生の中何時か一度は彼の種の人と戀し戀されて見たならばと、さまざま愚な事を空想した事がある。兎に角私は普通の人より高い教育を受け

讀書も爲た身である。飽くまで其の感情の賤しく又想である事を承知して居ながら、さて何うしても其れをば抑制する事が出来ない。能く佛蘭西や魯西亞の自然派の小説に描かれて居る——立派な品性の紳士がかかる劣等の女性の爲めに身を滅す物語などを讀むと、私はヒステリー質の女の様に身につまされて泣き、あゝ此れが運命と云ふものと深く懷疑の間に彷徨うた事も度々でした。

かく一方で理と智慧とが非難すれば爲るほど欲望はますます高まる。私は學校を出ると直ぐ演奏者ばかり寄集つて居る俱樂部の會員となつて、劇場から舞踏場、玉笑場から料理屋と、燈火の輝き紅粉の薫ずる處と云へば場所を選ばず夜を深したもので、當時を回想すると私は如何にしても狂氣して居たのと同じか思はれない。書の中太陽の照り輝いて居る間だけは私は確に正當な判斷を有し充分に自己の力に信頼する事が出来たが、さて夕暮の霧と共に、街頭に燈火がちらちら爲始めると最う最後です。燈火は私の良心を、心希望の凡を灰燼にしてふと同時に、その燈火の影をば往來する女の姿は我が眼には全く快樂の表象としか見え無かつた。私は今でも能く思出すのです、吹雪の夜丁度

方々の芝居が閉場する十二時前後のブロードウェイの光景。此の時此處ばかりは無数の男女無数の馬車の雜沓に如何なる夜のとても人は空氣を感じない。五彩燦爛たる燈火に見渡すかぎり街は宛ら境界の夢の如く、立並ぶホテルの廣間や料理屋の硝子戸の中には、明い燈火の光が幾組となく白い肩を出した女や頭髮を綺麗に拂付けた男の姿を照し、彼方此方の大きな二階の窓からは、玉笑の棒を片手に、深夜の勝負に疲勞を知らぬ男の影も見え、さて其の邊の酒屋やカツエーの彩つた戸口には娼を賣る女の出入絶える間もない。私は四辻に佇立んでは此の有様をデットと打目成り、あゝ如何なる事業も天才も時來れば皆滅びて了ふ人生には、唯だこの青春の狂樂、これより他には何物もないとつくづく感じた事もあつた。

此様生涯を送つて居る中、私はかのマリヤンと呼ぶ女藝人と親意になつたのです。或後例の如く劇場が閉場してから夜を生命の女共が能く集る料理屋へと、私は道樂友達三人連で、獨身時代の銀い眼をキョロ／＼させながら這入つて行くと、唯ある食卓に二人連の女が、知己と見えて吾々の一人を呼び止めた。吾々は其の儘女の食卓に着いて、例の愚な



の敷物の上に垂れて居る様子、私は古い書院の壁から迫る様な冷氣を感じた。

椅子から立上つて天井から釣してある美しい電燈を點じようとする、妻は手振でそれをば制した。しんみりと話でもするには餘り明くない方がよいと思つたのであらう。止むなく元の椅子に坐ると妻は沈んだ聲で問ひ掛けます。

「あなた。私にはどうも合點が行かないのです、タンホイザーが女神に別れて故郷に歸つて来る心持はさきも然うであらうと思ふんですが、さて歸つて來た後自分を慕つて居る領主の姫君エリザベットの目前で一度後悔した女神の事を思ひ出すと云ふのは何う云ふ譯でせう。私にはあの心持が分らないのです。」

私の耳には忽如として、

戀の女神よ……ギナスのみこそ御身に愛を語るなれ。(Die (ötin der Liebe.)

と激しいタンホイザーの聲が聞え出す、同時に心の底にはマリヤンの面影。利は燈火の達かぬ月、天井の一隅に眼を注いだ儘、夢に獨言する様な調子で答へた。

「それがぢや人生とも云ふべきものだ。忘れようとするけれども忘れられない處と知りながら陥り悶える。何に限らず理と情との煩悶、一

歩進めれば肉體と精靈の格闘、現實と理想の衝突矛盾。此の不條理が無ければ人生は如何に幸福であらう……あ、然し其れは及ばぬ夢で私にはこの肉心の煩悶が人生の欠れない悲惨な運命である様に思はれる。」

話す中に私は弱く我身の上のみならず地上に住む凡ての人の運命が果敢く思はれて來て、子供の様に譯もなく大聲を上げて泣いて見た。様な氣がして來た。

「それですから、私達は神に……宗教に依頼するのでは有りませんか？」

此う云ふ妻の聲は、生きて居る女の口からではなく、何處か遠くから響いて來るやう。私は聲を頭はし。

「然し、宗教も信仰も、時としては何の慰藉も與へぬ事がある……例へば彼のタンホイザー、

彼は神の様な乙女エリザベットに勧められ羅馬へ脚足語に行つたが、法王から謝罪の頭が許されぬ。其故再び宗教の神ギナスの山に還らうと云ふ……あの一節は宗教が一度闇に迷つた人間

に何の光も與へなかつた事を諷したのでは無からうか。然し最後には如何に魔界の愛に迷つたタンホイザーも清い乙女エリザベットの亡骸を見て悶絶する。其の刹那に救の歌は遠く響く。

タンホイザーの魂を奈落から救つたのはエリザベットの愛である。清い乙女の愛である。」云ひ切つて聲と妻の顔を見た。妻は白い雨りと廣い胸とを出した卵白色の夜會服を着て居たので、靜止として居る其の姿が薄い緑色の燈火を受け、暗い室の中に浮んで居る様、初女の身の廻りからは氣高い女徳の光榮が輝き發するかと思はれた。

私は一時の感激に襲はれる儘、突然身を其の足許に没伏し、力一杯に其の手を握り締め、「永劫の罪から吾々を救ふものは清い乙女の愛である。ジョゼフィンお前は私のエリザベットである。」と叫んで熱い涙を其の膝の上に漉いだ。

「それぢや、あなたは何かタンホイザーの様な……と妻も今は稍訝し氣に、打仰ぐ私の顔を見下す。私は加特力教徒が懺悔臺の前に膝付いたと同様、唯だ最う懺悔したいと云ふ切ない必要に迫られるばかり前後の考へもなく過ぎた身の一伍一什を残らず打明けて了つた。

結果は如何であつたか。我が妻はエリザベットの様な氣高い愛を有つて居たか。否々。私の話を聞くと共に妻の眼は激しい嫉妬の焰と、鋭い非難の光に、電九の如く……あ、其の

この年月の夢は今こそ誠となつた。私の決心

心は恐らく彼女の決心より迅速であつたらう。

私は取るものも取りあへず其の指示されたホテルに駆け付けると其の儘一年半ばかりの長い月

日を女と二人で夢の様に暮らして了つた。

我等は生きて居る人間の身の歡樂を味ひ得

らるゝ限り味はうと云ふので、或時は凡ての

飲食物が接吻の味を減きは爲まいかと氣に

ひ、飢を支へる水とパンとに口を動かす外は絶

えず接吻して居た事もあり、又或時は若い血の

暖みを消滅なく感じて見たいつもりで、冬の

夜通し窓を明けたまゝ抱合つて居た事もあつ

た位。

然し此の人の世は如何に香しい夢とても、如

何に深い酔とても、時來れば覺め消えるが常で

ある。私は今日となつて考へて見るとあれほ

どまで戀し合つて居たものを、どうして別れ

る氣になつたものか、殆ど不思議で、それをば

説明する事は出来ないです。教育から得た理

智の念が追々麻痺した心を呼醒了た爲めと見て

もよからう。或け男性固有の功名心が次第に

戀の夢より強くなつて來た爲め、或はタンホイ

ザーの物語を其儘に溫柔郷の歡樂につかれて

青山流水の清澄に接したくなつた爲め、或は暖室の重苦しい花の香に酔つた後再び外氣に冷海に觸れなくなつた爲めと見てもよからう………  
兎に角私は止めるマリアンをば打捨てゝ再び社會の人となつたのです。

もう二度と若い時代の愚な夢には耽るまい。

人類の職務は地上の生命と共に消えて了ふ歡樂に酔ふ事よりも、もつと高尚で且つ永久のものがある。先づ善良なる市民となる爲めに正當

な家庭を作れ。幸ひにして私は米國の社會に

は名のある家に生れ父の遺産も少からずあつた

爲め交際社會へ出ると、世は狭くて又廣いもの

で、誰一人私の昔を知つて居るものはない、

程なく私はジョゼフィンと云ふ判事某の令嬢

と結婚しました。

して今日 歐洲に新婚旅行の途すがら、此處

に其々オペラを聴いて居る……利は舞臺で歌つ

て居る樂師タンホイザーの恨をば其の儘に我が

胸の底深く、回舊の涙を吞込んで居たが、それを

ば知る由もない妻ジョゼフィンは上述社會の

女性の常として唯だ信義なく技巧的に修練され

た藝術鑑賞の態度で傾聴して居るのに過ぎな

かつたらしい。

然し貴君も已に感じて居られる通り大天才ワ

グナーの音樂には……博士は鳥渡利の顔を見遣つて……他の凡の音樂とは頗る異に聴く者の心の底に何か知ら強い感化を與へねば止まぬ神祕の方が籠つて居る。

されば一幕日は済み二幕日の廣い富殿の場、三幕日禮の歸り……とオペラ三幕を聴き了つ

た時には、私の妻は何やら物思はしい様子にな

り、擾亂された空想の中から、何か纏つた觀念を探りたいと問えるらしく見えたです。

利の方は又私自身の物思ひに知らず……語

少く、二人は劇場を出ると其の儘、直ぐ馬車

に乗つて旅館に歸つて來た。

二人とも疲れて暖爐の前の椅子に身を落す

と、間もなく妻は片手に頬を支へながら、「一體、

あのオペラの理想は如何云ふんでせう。」と利の

頬を見上げました。

大きな古い旅館の一室、片隅の小机の上に、

緑色の笠を冠つた燈火が點いて居るばかり、窓

の外には何の物音も聞えぬ。吾々米國人には、

この寂とした舊世界の都の夜半には、何處から

ともなく、幾世紀間の様々な人間の聲も聞き得

らるゝ様に思はれ、驚いて見廻せば凡てを暗色

に飾つてある壁と天井に調和して、窓や戸口に

掛けてある重く濃い天鵝絨の帷帳が、肅然と細

時々堪へられぬ程朝風呂に這入つて見たい氣がしたり、鰻の串焼に一杯熱いのを引掛けて見たく成つたり、兎角故郷の事ばかり思ひ出される。故郷には何でもはいく、とぶつて用をする妻もある、一時に内證で闇者を置いた事もある。其様事を思起すと今年最う四十歳になる好い年をして、何一つ不自由のない日本を出て來た事が、何ともふぬ程愚らしく感ぜられ、忙しい會社の事務を取つて居る最中にも、或は疲れて眠る夜中にも折々影の如く娘の如く何やら譯の分らぬ事が胸の底に浮び出て、ハツと心付いてそれに返ると、急に全身の力が抜けて了つた様な物淋しい心地になるのであつた。

彼は自ら其の弱點を愧ぢ又憤り、時にはウィスキーを引掛けたり時には冷靜に事務の事に心を轉じて見たりするが、然し此の空寂無聊の念は更に去らず、何處か心の一部に大きな空洞が出來て其處へ冷い風が吹込んで來る様な心持がするのである。

然し澤崎は此の心持をば如何なる理由とも知らず、又知らうとも思はなかつた。もと／＼其の妻は世俗の習慣に従つて娶つた下女代り、其の家は世間へ見せる爲めの玄關、其の子は生れたるによつて教育してあると云ふのに過

ぎぬので、其の妻、其の家の爲めに思惱むなどは如何にも女々しく意氣地なく感ぜられて成らない。殊に煩悶だの、沖思たのと、内心の方面に氣を向ける事は男子の恥と信じた過渡期の教育を受けた身は猶更なる事、彼は遂に自ら大笑一番して、いや世様な心持になるのもつまる處々に不自由して居るからだ和我と我身を賤しく解釋して僅に其の意思の強さに満足しようとした。

成程、女に不自由して居るのは事實である。

紐育に來て以來時には日本人同士の宴會の歸りなぞ、こつそり遊びに行く事はあつても、何時もジャップと見ながら現金引換通一遍の待遇に長くは居られず、毎夜睡る我が寢床は要するに我が身一人より外に暖めて呉れるものは無い身の上。紐育中今は何處に行つても目につくものは來た當座驚いた二十階の高い建物にはあらずして、コーセットで腹を締め上げた胴の細い臂の大きい女の姿ばかり、其の歩き振から物云ふ風まで憎いほど思はせ振りに見えて成らぬ。

彼は毎日會社の事務所に行く爲め地下電車に乗つて、俗に下町と稱する商業區域と住

るのであるが、朝の九時頃と午後の五時頃とへば殆ど紐育中の若い男や女が何れも此の時刻に往來すると云つても可い位なので、車中の混雜は一道の事ではない。

停車場のフラットフォーム毎に、人の山をなした男女は列車の停るか停らぬ中に、潮の如く車中に突入り、我先にと席を爭つて、僅に腰を下し得たものは、一分の猶豫もせず直様手にした新聞を読みかける。席を取り損ねたものは或は引革にぶら下り或は押しつ押されつ人の肩に凭掛つて早や男女の禮儀作法を問ふ暇はな

く無理にも割入つて腰を掛けようと互に其の際を覗つて居る。

澤崎は來人の多忙を模して、何時も新聞に手にしながらも車の混雜に苦い會娘やオツファイヌ娘などが遠慮なく自分の右と左にびつたり押坐り、車の發着する度々の動搖に柔い身體を適合す、其れのみか次第々々に身へ暖氣を傳へて來ると、最う細い新聞の活字などは見えなくなつて、彼は突然足の指先に輕い痠痛を覺え頭髮の根許に痒さを感じ、やがて身中全體を通じて一種の苦悶を覺える。空氣は地の下の事と車中の熱鬧に肉食人種特有の暖臭の臭氣を加へて一層重苦しく不良の酒の様に絶え



恐しい一瞥!

私は忽ち我に立返ると同時に一時の感激からよしない。密を語つた輕率を悔い、打診びるや、云慰めるやいろいろに心を盡したが、最うそれは眞實の意氣を缺いて居た。云はて技巧的に自分の非を蔽ひ隠さうとするのであつたから事はまず悪い方に進むばかり。

「よくも利を今日まで欺してお在でなすつた……」と此の一語を最後に妻は鋭る利の手を振拂つて次の室へと行つて了つた。

人生第一の幸福なる我等の新婚旅行は其の後如何に悲惨なるものとなつたであらう。翌日に維納を立ち行先は遙に出で直にハンブルグの港から歸航の途についたが、其の道すがらも是は食事のテーブル上、車の発着の上、私には一語も云ひ掛けない。

然し、何時か一度はわが眞心の通ずる時々の怒の打ける折が来よう、と有る限りの勇氣と耐に漸く一縷の望を繋いで居た。が、一度度閉ぢたものの胸は永遠に開くものではない。彼女の娘は一日に肉落ち、その眼は恐しい程に鋭く輝いて来て、幾日の後、紐育へ歸つて来た時には出發當時のジョゼフィンとは宛ら別人の様に思はれて了つた。

で、私は妻の申出づる儘に止むを得ず一時夫婦別居する事になつたが、程なく正當な離婚の請求を受け續いて四年の後に他へ再婚したとの報知に接したです。あゝ、わがジョゼフィン! 此して私は此に二十年あまり孤獨の生涯を續けて居る……

B——博士は語つたと共に椅子から立ち二三度室の中をば手を振つて歩き廻つたが、やがて室の片隅に据ゑてある大きなグランド・ピアノの方に頭く如く走り寄るかと見ると、忽ち顫へる手許にタンホイザー中の巡禮の一曲を奏し出した。

ピアノの上に置いた花瓶から白い薔薇の花が湧起る低音の響につれて、一片二片と散り掛ける。

(明治四十年五月)

## 寢 覺 め

洋行と云ふ店業の聲に醒ひ、滯在手當金幾かの態に醒かされ、名と利との二道をかけて、日頃社内を徘徊して居た結果、澤田三郎氏は〇會社紐育支店の營業部長とやらに榮轉し妻も子も東京の家に打捨てたまゝ、一人喜び

勇んで米國に旅立つたのである。

然し何事も見ると聞くとの相違で、澤田は紐育に於いて一月二月位は、何が何やらで暮して了つたが、稍支店内の事情も分り市中の往來も地味なくなつて歩ける程になると、追々堪へがたい無聊を覺え出した。

朝九時から午後の五時まで事務所に働いて居る中はいが、さて事務所がひけると紐育は廣いけれど澤崎は何處へも行か所がない。學校を出立ての若い書記ならば一夜の馬鹿話に懽晴しも出来ようが營業部長といふ稍地位もある身になつては外面の體裁が氣にかゝり、さう相手選ばずに冗談も云へぬ。かの西洋人が夜を深して遊ぶクラブやホテルへ行つて交際すれば外國の事情を知る上からも有益であるとは知つて居るが、此方面は經濟上から門口へも寄り付けぬ譯。さらば靜かに讀書でもしようか、と云つて既に學校を出た後、幾年浮世の風に吹きさらされた身は新思潮新知識に對する好奇の念漸く失せて、一時は一寸珍らしく感じた外國の事情さへ其程までにして研究する勇氣はない。

で、一日二月半年と経てば經つほど、日常生活の不便と境遇の寂寥とを感ずるばかり。

ムステルダム通と云つて長屋續きの見付の悪い小賣店ばかりに、路幅は廣いが如何にも場末の貧乏街らしく見える大道を行き掛けた時である。風の無い蒸暑い五月末の黄昏、街燈に火は點きながら、四邊は紫色にぼつと霞み渡つた儘まだ明るい。其の邊の開け放した窓や戸口からは無精らしく頭髮を亂した又房や、服裝の汚い刺りに美しく化粧した娘の顔が見え、八百屋だの果物屋だのが露店を出して居る。往來傍では子供や小娘がワイ／＼云つて遊んで居る。

澤崎は譯もなく柳町か赤城下の街あたりの様を思ひ浮べて、佇立むともなく唯ある露店の前に佇立んだ途端に、其の傍の月日から出て来た一人の女——見れば思掛けないかのデニングである。

澤崎は餘りの意外に、遠慮なく其の名を呼び掛けて進み寄つた。女も一方ならず驚いたが、まさかに逃げ隠れも出来ないで、止むなく其の場に立竦んだものゝ、顔を外向けて何とも云出し兼ねて居る。

「御病氣は……もう能くござんすか？」  
「はい、御底様で……。」

此の邊にお住ひなですか。

「はい、此の三階に部屋を借りて居ります。」

「明日はもう何うです、會社へは……。」

「定めしお急がしい處を、済みませんでした。」

「病氣の時はお互に止むを得んです……どうです、散歩にでもお出掛の處ぢや無かつたんですか、御迷惑でないなら御一緒に其の邊までお作しませう。」

「怪う切出されてはいやとも云へず、女は其の儘澤崎と連れ立つて、何處と云ふ目的もなく竝木の植つた廣いブロードウエイの方へ歩いて行つた。ブロードウエイも大分北へ寄つた此の邊になると、兩側とも靜なアツバートメントハウスばかりで、人通りも激しからず建物の間々からはハドソン河畔の樹木と河水が見える。

「どうです、河端まで行つて見ませう、あの眞青な木の葉の色は最うすつかり夏ですな。」

「一町ほど歩いて樹の下のベンチに腰を下した。少時は無言で黄昏から夜に移り行く河の景色を眺めて居たが、澤崎は忽ち思出した様に、

「明日あたりは會社へお出になりましか。女は聞えぬ風で黙つて居たが稍決心したらしく、

「私、實はもうお断りしようかと思つて居りました。」

「どうしてです。何か御不満足な……。」

「どうしまして。と強く打消して、矢張病氣の所爲ですか、どうも氣が引立ちませんから。」

「どう云ふ御病氣です……。」

「女は答に窮したらしく黙つて俯向いた。澤崎は更に、

「オッフアイースなぞへ働きにお出でなさるのは此度が初めてですか？」

「いえ、初めてと云ふ譯でも御在ません。結婚します前は長らく方々の商店や會社に通つて居りました。」

「其れぢや事務には随分馴れておいでなさる譯ですな。」

「いえ、不可せんです。結婚しましてから丁度三年ばかりは、とんと外へも出ず、家にばかり居たものですから、つまり怠け癖が付いて了つたんですな。夫が死亡しましてからは復た元の様子に働かすに出なければ成らない譯になつたのですけれど、最う何ですか、根氣が失りましてね。」

「淋しく笑ふ。

然し私の事務所などは仕事と云つても大して面喰な事はなし、西洋人の女もあなた一人で、

ざる車體の微動につれて人を酔はす。澤崎は熱に病むが如く恍惚となつて、若し此の上へ、十五分間と車中に坐つて居たなら我知らず隣席に坐つて居る女の手でも握りはせぬかと、危く自刺の力を失ひかける其の刹那、車は幸ひにも、いつも彼が下車すべき停車場に着するのである。彼は狼狽て、車を飛出して冷い外の空氣にハツと吐息を漏すのである。

彼は今更らしく幾度ともなく何とか方法をつけねばならぬと云つて居るが、差當り何うする道もない。室借をして居る家には年頃の娘もあり、鳥渡小綺麗な下婢も居るが、要するに事が面位である。若い會社の書記ども同然にさう屢々遊びに行くのも餘りに馬鹿々々しい。つい其れなりになつて、最う彼此れ一年半、渡米以來二度目の春が過來て公園の森に駒鳥の集ふ五月となつた。

彼はいまだで此れ程に春の力を感じた事は無い。輕い微風は肺に浸透つて身を揉る様に思はれ、柔い日光は皮膚に突入つて血を燃す。明渡つた青空の下を歩いて居る街の女は何れも此れも皆自分を惜ます爲めに厚い冬衣を捨て、薄い夏衣の下に見事な肉付を忍ばせ、後手に引上げた輕い裾からはわざと自分を冷笑する爲め

に細い靴足袋を見せるのかと思はれた。

其の朝彼は殊更に地下鐵道内の混雑を恐れ、わざ／＼遠廻りまでして、餘り込まない高架鐵道線によつて會社へ出勤し、自分の机の置いてある支配室へ這入つたが、すると片隅の椅子に見馴れぬ若い西洋婦人が自分の出勤を待つものの如く坐つて居るのにハツと胸を躍らせた。

彼は全く失念して居たのだ。實は昨日限り長らく此の事務所で電話の取次などして居た五十近い老婦人が都合あつて辭職した處から、其の後任として新聞の廣告によつて此の若い女を雇入れたので、今日から事務を引繼ぐ爲めにと彼の命令と説明を待つて居たのである。

電話の應接と其の暇々に英文書狀の整理を手傳ふだけの事であるが、彼は一ツ／＼聞かす中にも此れからは毎日の若い女を我が傍に置いて我が事務を手傳はすのかと思ふと、妙に嬉しい様な氣がして、かの鐵だらけの半白な眼鏡をかけた以前の老婦人が居た時に比べると、事務室全體が明るくなつたやう。

彼は事務を取つて居る最中にも五分と其の横顔から目を放す事が出来ない。年は二十六七にもならう。小肥の身丈は高からず容色も千人並ではあるが、黒い頭髮を真中から割つて烏打帽

でも知つた様に、頭の周圍へ巻返し、上から下まで出来合の勸工型もので小綺麗に粧つた姿は品格の無い處が、乃ち重なる魔力となつて、往來などで一寸指違つた男の目にも長く記憶されるやうぶ其の模範の一例である。澤崎は何かにつけて話をしかけ、早く親意に打解けて見ようと思つたが、女は日本人の會社には初めての奉公、黨事に氣の置ける爲めか、一日金糸辮を口に頬張り相續し構はずに笑つて暮す例のソツ

フィースガールには似も寄らず、至つて無口で、唯だ僅に其の名をミセス、デニングと云ひ、一年ほど前に寡婦になつて今は人下宿日ひをして居るとばかり。折々は何か物思はしく頰杖をして居る事さへある。

やがて一週間ばかりも経つたが、女は一向物馴れた様子も見せず、朝は往々出勤時間に後れて来る事もあり、遂に先週の頃からは病氣とやらで缺勤し始めた。澤崎は何となく淺念な氣がして成らぬ。病氣とばかりで未だ止めるとは云つて來ぬが、矢張り知らぬ日本人の中で働くのが厭なのであらう。最う何とか云つて來るであらうと、澤崎は次の週の月曜日一日待つて其の次の火曜日を空しく過した。

其の日の夕暮、彼は晚餐後に何かの用事でア



出来たのぢや無い。上耳古か彼斯の美人の様に  
薄い霞の様な衣服を着て大きな家の中で泉水へ  
落ちる水の音に其の中もうつとりと夢を見て居  
る女だつて、さう申すんですした。

猶もつまらぬ事をあれやこれやと話し續けて  
居たが、軈て思出した様に、一もう、何時でせ  
う。と時間を訊きそれを機會に立上つた。澤崎  
も今は引止め兼ねて、

「其ぢや明日は……まあ兎に角事務所へ出て  
被入い。待つて居ますから。」

其の儘別れたが、いざ翌日になると、待つた  
ひもなく、女は病氣を云立て、是非にも辭職  
する旨をば電報で云越した。

何と云ふ我儘……日本人と見て馬鹿にする  
る米日本人の常として、直様な愛國的僻根  
性を出し澤崎は大に腹を立てたが、暗嘩にも  
ならず間もなく後任として、今度は十五六の男  
の小僧を雇入れたが、さて五日、十日と經つて  
見ると、去る夏の夜ハドソン河畔の腰掛に話を  
した一條は自分の身にはあるまじき小説の様な  
心地が發出す。殊に女の口づから良人に別れて  
淋しい身の上を嘆く、遂には其の寝起の姿まで  
が如何のかうのと、女の身にしては秘密と云つ  
ても可い様な事を包まずに打明けて呉れた。そ

れやこれやを思合すと女は謎を掛けて自分を  
誘つたのであるとしか思はれぬ。折角の機會  
をば氣の付かぬばかりに取逃して了つたのかと  
思へば、遺憾の念は一層深く忽ち何處やら身中  
の肉を挫られる様に氣が焦立つて來て、澤崎は  
或晩一人こつそりと、かのアムステルダム通り  
に赴き見覺えて居た建物の三階に上つて、それ  
らしい戸口を叩いた。

顔を出したのは囃衣一枚の職人らしい、五十  
ばかりの大男で、晩飯を喰つて居た最中と見え  
て、髭の端に麴の粉をつけた儘口をもぐ／＼さ  
せて居る。

「ミツセス、デニングと云ふのは此方ですか？」  
訊くと大男は忽ち廊下の方を振向き大男で  
その女房らしい女の名を呼び、「おい、又誰れ  
か、彼のヒツちよを訪ねて來た、お前、何とか  
ぶつて見て呉れぬえ。」

今度は何のいよいよした顎の突出た婆が  
現れ出て、胡散らしく澤崎の様子を打目成つて  
居たが漸くに、

「お氣の毒さまですが、あの女は最う家には居  
りませんです。昨日の朝、店立を喰はして  
つたんで。お前さんは矢張何か彼女のお身寄り  
ですかい。」

譯は分らぬが如何にも憎々しい物云振り。  
澤崎は當惑しながらも、僅かに汗着を見せ、  
「私は彼女を雇つて居た會社の支配人ぢや  
ない。」

「へえ。」  
病氣とばかりで一向出勤せんから、鳥渡様  
子を見に來たんぢやが……店立を喰はしたと、は  
又何う云ふ譯だね。

旦那、其れぢや貴君も一杯喰された方なんで  
すね。と婆は俄に調子を變へて問ひもせぬの  
に長々と話し出す。

旦那、あんな根性の太い奴は有りやしません。  
以前御亭主を持つてゐる中は、二人で此のついで  
の五降目に暮して居たんですがね、一日女郎の  
臭つた様な亂交もない風をして、近邊の若い女  
房さん達は其れ／＼商店へ出るとか、又は家で  
手内職をするとか、皆統一村に穆いで居るのに  
あの女ばかりは手前の家一ツ掃除もしないで野  
良野良暮して居たんです。其の中の一つ一昨午  
の暮、急病で御亭主が死んだとなつてからは最  
う何うする事も出来ない。五降目の室は家賃も  
高し、人では廣過ぎるツツ／＼なので、丁度私  
の宅に仲間があつたのを幸ひ、其れなり此處へ  
引越して來たんで。最終年ばかりに何程か貯

別に交際もいらす。何にか御辛れが出来さうなものですがね。

「全くで御座いますよ。あなたのお事務所位結構な處は、紐育中どこにも有りやしません。ですから私も是非御世話になりたいと思つて居たんですが、毎朝つい……と云つて女は覺えず口を嚙み其の頬を舐めた。

然し四邊は最う夜である。明るい様で暗く暗くいやうで明るい夏のである。二人の臂つて居るベンチの後から大きな菩提樹の若葉が、星の光と街燈の火影を遮つて、二人の上に濃い影を投げて居るのに、女は稍安心したらしく竊と男の様子を覗つた。

澤崎は詩も歌も知らない身ながら、美しい若葉の夜の何となく風情深く、人なき腰掛に手こそ取らね、女と居竝んで語をして居る事、それだけが非常な幸福の如く感ぜられ最う話の材料などは一向選ぶ處ではない。

「あなたのお連合は何を爲すつて居らしたんです。」

「保險會社へ出て居りましたんで。」

「お淋しいでせうね、何かに付けて。」

「ええ。もう……一時はどうしようかと途方に暮れて了ひました。」

川風が靜かに鬚つてを撫でる度々四壁に石葉が騒ぐ。近くの家で彈く洋琴の音も聞える。女は何時となく気が打解けて來ると、何と云ふ譯もなく、日中は親しい友達にもみ兼ねる様な身の上の話を相手選ばずに爲て見たくて堪らなくなつた。怪しい夏の夜の星に身の上を映つとも云はうか。

腰掛の背に月眩をつき獨語のやうに、  
「良人の居ます時分はほんとに面白う御座ました！」

澤崎も已に一年以上此國に居る身として何時となく西洋人が露出た魔話には馴れて居た。さうでしたらうね。と如何にも眞顔に相槌を打ち、「どうして御結婚なすつたんです。」

「それは私も他人も上町の會社へ行く時、毎朝同じ電車に乗合はせたのがもとで上曜日や日曜日毎に遊びに出る……直きに話がついて一緒になつたのです。良人は少し貯金が出来るまで

は従前通り夫婦で暮らした方がと申したんですけれど、私は最う朝早くから起きて夕方までキッチンと椅子に坐つて居るのがいやで、ノ……實は其れが爲め一日も早く深切な人を見付けて頼りにしたいと思つて居た位なんですから、到頭我儘を通してしまひました。私には全く朝眠

いのち無理に起きる程辛い事はありません。まして寝い時分なんか、ぐっぐう蒲團の中から起出して顔を洗つたり衣服を着たりするのは、眞個に罪です。仕方がないもんですから、良人も毎朝顔を寢床の中に置き去りにして出て行きました。が、私は其の代り上座の夜になつたからつて、紐育の女の様に、是非へ居へ行か無ければならないと人様に散財は掛けません。毎朝晩く起きて一日家にばかり居ますと、さあ芝居へ行くのだと云つて、わざ／＼衣服を着かへたり、何かするのがおつ／＼になりましてね、却つて椅子へでも凭掛つて小説を読んで居る方が幾何まだか知れやしません。ですから良人も仕舞には結構お金がいらなくて可いと云つて居りました。」

澤崎は餘り奥底なく語されて少しは體易しながらも、猶記を絶すまいと相槌を打つ。此方は唯さへ薩舌な西洋婦人いよ／＼圖に乗つて、

「其ればかりぢやない、良人はどう云ひますの。お前は髪を綺麗に梳上げたり、衣服をキチンと着たりするよりも寢起のまゝの姿が一番美人に見えるつて……ほゝゝほ。私は人を馬鹿にするつて怒りましたら、良人は眞面目らしく、お前は亞米利加の女見た様に働く爲めに

いふこと無に起きる程辛い事はありません。まして寝い時分なんか、ぐっぐう蒲團の中から起出して顔を洗つたり衣服を着たりするのは、眞個に罪です。仕方がないもんですから、良人も毎朝顔を寢床の中に置き去りにして出て行きました。が、私は其の代り上座の夜になつたからつて、紐育の女の様に、是非へ居へ行か無ければならないと人様に散財は掛けません。毎朝晩く起きて一日家にばかり居ますと、さあ芝居へ行くのだと云つて、わざ／＼衣服を着かへたり、何かするのがおつ／＼になりましてね、却つて椅子へでも凭掛つて小説を読んで居る方が幾何まだか知れやしません。ですから良人も仕舞には結構お金がいらなくて可いと云つて居りました。」

と、頭取の細君の遠い親類とか云ふ書生と、時には細君御自身までが手傳つて、日の舞ふ程に忙しく給仕をして居る。

「米國まで来て此様御馳走になれようとは、實に意外ですな。と罷を捻つて殿めしく禮を云ふもあれば、

「奥様、此れでヤツとホームシックが直りました。」とにや／＼笑ふもあり、又は、「サア、最う一杯、何しろ二年振こんなお正月をした事がないですから。」と愚癡らしく申譯するもある。

何れも西洋人相手の晚餐會とはちがひ、スーヴの音の氣遣もない處から、閉切つた廣い食堂には、此の多人數がニチャ／＼嚼む餅の音、汁を啜る音、さては、ごさめ、かずのこを噛み砕く響、煙海苔の舌打など、恐しく鳴り渡るにつれて、「どうだ、君一杯。」の叫聲、手も達かぬテーブルの彼方此方を酒杯の取り遣り。雑談蛙の聲の如く湧返つて居た。

其の時突然、

「金田は又來ないな。あゝハイカラになつちや駄目だ。」とテーブルの片隅から喧嘩の相手でも欲しさうな酔つた聲が聞えた。

「金田か。妙な男さね、日本料理の宴會だと言へば顔を出した事がない。日本酒と米の飯ほ

ど嫌ひなものは無いんだって云ふから……」  
「米の飯が嫌ひ……其ア全く不思議だ。矢張り諸君の……銀行に居られる人か？」と誰れかが質問した。

「さうです。」と答へたのは主人の頭取で、もう六七年から米國に居るんだが……此の後も一生外國に居たいと云つてゐます。」

驟然たる一座の雜談は忽ち此の奇妙な人物の噂に集注した。頭取は流石老人だけに當らず觸らず、「島渡人好きはよくないかも知らんが極く無口な柔順しい男です。長く居るだけ米國の事情に通じて居るから、事務上には必要の人才です。」と穩な批評を加へて、酒杯に舌を潤はした。

「然し餘り交際を知らん男ぢや無いですか。何程、酒が嫌ひでも、飯が嫌ひでも、日本人の好誼として、殊に今夜の如きは一月一日、元旦のお正月だ……と最初の酔つた聲が不平らしく非難したが、すると此に應じて片隅から、今まで口を出さなかつた新しい聲が、

「然しまアさう攻撃せずと許して置き給へ。人には意外な事情があるもんだ。僕もつい此間まで知らなかつたのだが、先生の日本酒嫌ひ、日本飯嫌ひには深い理由があるんだ。」

「はア、さうか。」

「僕はそれ以來人に同情を表して居る。」

「一體、どう云ふ譯だ。」

「正月の話には、ちと適當しないやうだが……」

「と其男け前置して、一つ此間、クリスマスの二三日前の晩の事さ。西洋人に應る進物の見立をして貰ふには、長く居る金田君に限ると

思つてね、彼方此方とブロードウエーの商店を案内して貰つた歸り、夜も眠くなるし腹も空いたから、僕は何かの氣なしに、近所の支那料理屋にでも行かうかと勤めると先生は支那料理はい、

が、米の飯を見るのが厭だから……と云ふので、

其のまゝ先生の案内で、何とか云ふ佛蘭西の料理屋に這入つたのさ。葡萄酒が好きだね……先生は、

生は。忽ちコップに二三杯干してさふと、少し酔つたと見えて、ちツと目を据ゑて、半分ほど

飲残した眞赤な葡萄酒へ電氣燈の光の反射する色を見詰めて居たが、突然、

僕は兩親とも御健在ですか。」と訊く、妙な男だと思ひながら、

「え、丈夫ですよ。」と答へると、俯向いて、

私は……父はまだ酒者ですが、母は私が學校を卒業する少し前に死じりました。」

僕は返事に困つて、飲みたくもない水を飲み



金もあつたと見えて、几帳面に室代だけは拂つて呉れましたがね、其れからは段々と狡猾くなつて此の次々と延し始めた。其ればかりぢや無い。随分と可い働きの口があつても二週間か三週間、すぐ飽きて了つて、此方から止めて了ふと云ふ始末ですもの、此の分で行つたら到底家賃の貸は取れない、と實は心配しながらも、まさか御亭主の居る時分から知つて居る中ぢや、さう凶業にも出られないんで困り切つて居たんでさ。」

「ところが到頭一昨日の夜の事つた。」と今度は傍に立つて居た職人らしい亭主が話を引續いだ。

「一昨日の夜到頭金に困つて來たと見えて、何處からか男を喰へ込んで、己の家を體のいゝ地獄宿にしがつた。其の前からもちよいと怪しい風は見たんだが、證據が無えから黙つて居たんで、一昨日の夜は一時二時と云ふ眞夜中、竝大抵の友達の來る譯が無え、己の處は怎う見えても、睨一ツで秘く職人の家だ、地獄の宿は眞半だ、家賃の貸も何にも要らねえから、と目ぼしい衣服と道具を質に取つて其の朝早く追出して、了つた。」

「何處へ行つたか知らないかね」と澤崎は覺え

ず嘆息した。

「知るもんですか。大方夜になつたら其の邊の酒屋でも彷徨いて居ませうよ。」

澤崎はすく／＼階段を下りて外へ出たが、女の墮落した一條を聞知るにつけて一層の遺憾を覺え、何故あの時さうと氣付かず、見す／＼機會を逸したのであらうと靴で卵石を踏鳴らし齒を噛締めた。

何によらず逸した機會を思返すに、無念で寢覺の悪いものはない。彼は時を經折に觸れて彼の女の事を思ひ起して居たが、遂に再會する機會なくやがて在留三年となつて、歸朝の時節も早や二週間ほどに迫つて來た。

で、多分送別の意か何かであつたらう、彼は能く花背牌を引き馴れた二三の日本人と俱樂部の一室で正宗を飲んだ時、或る日本雜貨店の支配人で、故郷には如もあり係もありながら頻々と美人の眞の蒐集に熱心して居る紳士が、酔つた末の難談に此れは近頃さる處で手に入れた天下の逸品だと自慢で示す二三枚の眞眞。澤崎は何氣なく眺めると何れも厭らしい身の投げ態に様子を變へて居るが、顔は見忘れぬ彼のデニングと云ふ女である。

あゝ、さては彼の女、樂して儲ける家業の

選みなく折々は眞師のモデルにも成ると見え。彼は再び例の遺憾千端に身を顛したがるに運拙くして所會の機なく其の儘歸國して了つた。

以後、澤崎三郎氏から米國に關する其の意見を訊かれる時は何によらず、必ず次の如き論議を以て話を結ぶのであつた。

「つまり米國ほど道徳の腐敗した社會はない。生活の困難な處から貞操なぞ守る女は一人もないと云つて可い位だ。到底上君子の長く住むに堪へる所では無いです。」

(明治四十年四月)

## 一月一日

一月二日の夜東京洋行米國支店に頭取某氏の社宅では、例年の通り初春を祝ふ雜貨師の宴會が開かれた。在留中は何れも獨身で下宿にひ、正月が來ても居無一杯飲めぬ不自由な、銀行以外の紳士も多く來會して二十人近くの大人數である。

キチーと云つて、此の社宅には頭取の三代も變つて最久十年近く例いて居る獨逸種のド女

時に、父の口にせられる孔子の教への武士道だのと云ふものは人生幸福の敵である、と云ふやうな極端な反抗の精神が何時とは無しに堅く胸中に基礎を築き上げて了つた。で、年と共に島渡した日常の談話にも父とは意見が合はなくなりましたから、中學を出て高等の専門學校に入學すると共に、私は親許を去つて寄宿舎に這入り折々は母を訪問して歸る道すがら、自分は三年の後卒業したなら、父と別れて自分一個の新家庭を造り、母を請じて愉快に食事をして見よう……とよく其様事を考へて居ましたが、人生は夢の如しで、私の卒業する年の冬母は蒼泉に行かれた。

何でも夜半近くから急に大雪が降出した晩の事で、父は近頃買入れた松の盆栽をば庭の飛石に出して置いたので、この雪の一夜を其の儘にして置いたなら雪の重さで杉振りが悪くなるからと、下女か誰かを呼び起して家の中へ入れさせようと云はれた。處が母上は折悪しく下女が二三日風邪の氣味で弱つて居た事を知つて居られたので、可哀さうですからと自ら紗衣のまゝで兩戸を締つて庭に出で、雪の中をば重い松の盆栽を運ばれた……母は其の夜から俄に感冒を引かれ忽ち急性肺炎を起した。

私は實に大打撃を蒙りました。其の後と云ふものは友人と一緒に牛肉屋だの料理屋などへ行つても、酒の煙が不淨いとか飯の炊き方がまづいとか云ふ小言を聞くと、私は直ぐ悲愴な母の一生を思出して胸が一杯になり、豫日や何かで人が楠木を買つて居るのを見れば私は非常な慘事を目撃した様に身を顫はさずには居られなかつた。

處が幸にも一度日本を去り此の國へ來て見ると、萬事の生活が全く一變して了つて、何一ツ悲愴な連想を起させるものがないので、私は云はれぬ精神の安息を得ました。私は殆どホームシックの如何なるかを知りません。或る日本人は盛に米國の家庭や婦人の缺點を見出しては非難しますが、私には縦ひ表面の形式偽善であつても何でもよい、良人が食卓で妻の爲めに肉を切つて皿に取つて遣れば、妻は其の返しとして良人の爲めに茶をつぎ菓子を切る。其の有様を見るだけでも私は非常な愉快を感じ、強ひて其の裏面を覗つて、折角の美しい感想を破るに忍びない。

私は春の野邊へ散策に出て大きなサンドウィッチや、林檎を皮ごと横かじりして居る如く見ても、或はオペラや芝居の歸り夜深の料理

屋でシャンパンを呑み、良人や男連には眼も呉れず饒舌つて居る人の姿を見ても、よしや最少し極端な例に接しても、私は寧ろ喜びます。少くとも彼等は楽しんで居る、遊んで居る、幸福である。されば妻なるもの母なるもの幸福な様を見た事のない私の日には此れさへ非常な慰藉やありませんか。

お分りになりましたらう。私の日本料理日本酒癖の理由はさう云ふ次第からです。私の過去とは何の關係もない國で出来る西洋酒と母を泣かした物とは全く其の形と實質の違つて居る西洋料理、此れでこそ私は初めて愉快に食事を味ふ事が出来るのです。

\* \* \* \* \*

怎う云つてれ、金田君は身の上話を聞いて呉れたお禮だからと、僕が止めるのも聞かずに到頭三鞭酒を二本ばかり抜いた。流石西洋通なだけあつて葡萄酒だの、三鞭酒などの鑑別は委しいもんだ。」

辯者は語り了つて再び雜貨の箸を取上げた。一座暫くは無言の中に、女心の何につけても感じ易いと見えて頭取夫人の吐く溜息のみが、際立つて聞えた。

(明治四十年五月)

ながら其の場を紛らした。

「君の父親は、酒を飲まれるのですか？」少時して又訊す。

「いや、時々麥酒位は造るやうです。大した事は有りません。」

「それぢや、君の家庭は平和でせうね。實際、酒は不可んです。僕も酒は何によらず一滴も飲るまいと思つて居るんですが、矢張り多少は遺傳ですね。然し私は日本酒だけは、どうしても口にする氣がしないです……匂ひを嗅いだ丈けでも慄然とします。」

「何故です。」  
「死んだ母の事を思ひ出すからです。酒ばかりぢやない。飯から、味噌汁から、何に限らず日本の料理を見ると、私は直ぐ死んだ母の事を思ひ出すのです。」

聞いて下さいますか——

私の父は或人は知つて居ませう、今では休職して丁ひましたが、元は大審院の判事でした。

維新以前の教育を受けた洋學者漢詩人其れに京都風の風流を學んだ人です。書畫や革を初め、御裁、盆石の鑑賞家で、家中はまるで植木屋と古道具屋を一緒にしたやうでした。毎日の様に、何れも眼鉤を掛けた禿頭の古道具屋と、最

う今日では鳥池見られぬかと思ふ位な、妙な掃間屋の屬官や裁判所の書記どもが詰め掛けて來て父の語相手酒の相手をして十二時過ぎで無ければ歸らない。其の給仕や酒の棚番をするのは誰であらう、母一人です。無論下女は件働に御飯焚きと二人まで居たのですが、父は茶人の癖として非常に食物の喰い人だもので到底奉公人任せにしては置けない。母は三度々々自ら父の膳を作り酒の棚をつけ、時には飯までも焚かれた事がありました。其程にしてもまだ其の嗜好には適しなかつたものと見えて、父は三度三度いざ食物の小言を云はずに箸を取つた事がない。朝の味噌汁を喰る時からして三州味噌の香氣がどうだ、鹽加減がどうだ、此の澤庵漬の切方は見られぬ、此の鹽からを此様皿に入れたら駄目はない。此間買つた清水焼はどうした又破したのぢやないか、氣を付けて呉れんと困るぞ……丁度落語家が眞似をする通り傍で聞いて居ても頭痛がする程小言を云はれる。

母の仕事は悉く永久に賞美されない料理人の外に、一寸觸つても破れさうな書畫や革の注意と盆栽の手下で、其れも時には禮の一ツも云はれなばこそ、何時も料理と同じ様に行届かぬ手抜きを見付用されては叱られて居た。ですから

利が生れて第一に耳にしたものは乃ち皺ひれた父の口小言、第一に目にしたものは何時も襟を外した事のない母の姿で、無氣な幼心に父と云ふものは恐いもの母と云ふものは痛しいものだと思ふべが、何より先に泣泣りました。

私は殆ど父の膝に抱かれた事がない。時々優しい聲を作つて利の名を呼ばれた事もあつたですが、猫の様にいぢけて了つた私は惡くて近き得ないのです。殊に父の食事、前申す通り到底子供に口になぞ入れられる種類のものではないので、一度も膳を並べて箸を取つた事もなく、幼年から少年と時の經つに従つて、私は自然と父に對する親愛の情が疎くなるのみか、其の反對に父なるものは惡無道な鬼の様に思はれ、其れにつれて母上は無調私の感ずる程では無かつたかも知れないが、兎に角父が憎さう私の眼だけに世の中に何一つ慰みもなく樂

みもなく暮らして居られる様に見えた。

此う云ふ境遇から此う云ふ先人の感想を得て、私は總て中學校に進み、圓満な家庭のさまや無氣な子供の生活を寫した英語の讀本、其れから當時の雑誌や何やらを讀んで行くと思ふとか家庭だとか云々々々字の多く見られる西洋の思想が實に激しく私の心を突いたので、同



の上に此れも白粉をべつたり塗つた乳の大きい若い女が、客の出入の少い折を幸ひ、臺の上で入場券と小銭の勘定をして居る、と其の傍には下卑た人相の男が人目を引く色模様の衣服を着て、客らしいものが通らない時でも、絶えず「被入い〜」と大聲に二三度怒鳴つては、頻と切符賣の女に色目を使つて何かこそ話を爲かけて居た。

四邊に電燈のついたのは五時頃であつたらう。空は青く夏の日の暮れるにはまだ間が有りながら、然し一帯の景氣は何處となく引立つて來た。黄音機へ仕掛けた種々な物音、男の客を呼ぶ叫び聲が、彼方からも此方からも響き出すと、向ひのビヤホールでは往來からも見通せる様な處で盛に活動寫眞を映し始める。直ぐ近くは何處かには寄席が踊り場があると見えて、樂隊の太鼓と共に若い女の合唱も聞える。見物の男女は此の制限から次第々々に潮の如く押寄せるばかりで、夜の八時から十二時過ぎまでの盛り時には往來は全く歩く隙間もなく人間で埋まつて居た。總て店の亭主が漸く静まり行く往來の様子を見計らつて、

「どうだもうそろ／＼戸を閉めちやア……」と云つたのは夜の二時である。吾々は路傍の水道で汗になつた顔を洗ひ、煙草でも一服しようとする。と早や三時に近い。雇はれて居る連中の中では一番年を取つた四十ばかりの如何にも百姓らしい顔をして居る男が、東北訛りの發音で、

「さア／＼乃公アもう寝るぜ。お前達のやうな眞似をして居ちやア身體が續きませんや。若え者達はさんざ樂しむが可い。まだ夜は長いや……」と云ひながら、臺の下に圓め込んだ毛布を出して敷伸べ、ごろりと臺の上へ、汚染みた細衣一枚で人の字なりに寝轉んだ。すると頭髮を綺麗に分けた書生らしい男が、

「又今夜も臺の上に寝るのか。好い夢でも見るかい。」

「奥の寢臺は南京蟲の巢だ。お前も少しア板の上に寝る稽古も爲て置くもんだぜ。毎晩々々女の處へ這込む事ばかり考へて居やがつて……」

乃公アまだ若いんだよ。と書生らしい相手が云ふと、同じ仲間の一人が、助太刀と云ふ氣味で、

「お爺つアん、お前、さう金ばかり蓄めてどうするんだい。國にや子もある孫もあるツて譯でも有るまいが……」

「さうよ。國にや十六になる情婦が待つて居ら

ア。お前達見た様に阿米利加三界の女郎に鼻毛を抜かれて、汗水たらした金を取られる奴の氣が知れねえや。此處で一晩捨てる金を國へ持つて行つて見な。朝日が所風へかん／＼さすまで、お大盡さまで遊べるぢや無えか……」

書生どもはもう戲つてもつまらないと思つたか、あゝ暑いと云ひながら店の外へ出て了つた。成程戸を閉め切つた家の中はぢつとして居ても汗が出るやうなものと、自分は今日雇はれたばかりで何處に寝てよいのやら分らぬので、同じ様に片隅の潜戸から外へ出た。軒の下の涼しい處に店に雇はれた連中は皆集まって立話をし

て居る。

四邊は一時間ほど前の雑沓を思返すと、不思議な程氣味の悪い程寂として居る。彼の大仕掛な見世物の樓閣はイルミネーションの光が消えて了つたので、朦朧として彼方此方の空中に白く雲のやうに響えてゐるばかり。廣からぬ往來は何處もヤツと闇にならぬ限り、處々の電燈に薄暗く照されて居る。と、この薄暗い影の中に夢の如く幻の如く白粉を塗つた妙な女が、戸を閉めた四邊の見世物小屋から消えつて現れし

曉

單に紐育ばかりではない、合衆國中に知れ渡つて女も男もよく人が話をするのは、ランダと云ふ夏の遊場の事である。港草の奥山と芝浦を一つにして其の規模を驚くほど大きくした様な處である。紐育からはブルックリンの市街を通過する高架鐵道とハドソン河を下る蒸汽船と、水陸いづれからも半時間ほどで行く事が出来る。

凡そ俗と云つて、これほど俗な雑沓場は世界中におそらく有るまい。日曜などは幾萬の男女が出入をするやうな、新聞紙が報道する記事を見ても其の賑かさは想像せられるであらう。電氣や水道を應用して俗衆の眼を驚かし得る限りの大仕掛の見世物と云ふ見世物の種類は、幾十種と數へられぬ程で、然し其の中には見物人に多少歴史や地理の知識を與へる有益なものもある。又怪し氣な踊り場や珍な寄席も交つてゐる。毎夜日暮しく火花が上がる。河蒸汽で暗れた空に紐育の廣い灣頭から眺め渡すと、驚くべき電

燈イルミネーションの光が曙の如く空一帯を照らす中に海上遙か幾多の樓閣が高く低く聳え立つ有様まるで帝宮の城を望むやうである。

こゝに日本の玉轉し *Jai m se - ching Bai* と云へば廣いコニア일랜드中數ある遊び物の中でも随分と名の知れ渡つたものである。何の事はない、奥山でやつて居る射的や玉轉しも同様、轉した玉の數で店一々に飾つてある景物を取ると云ふのに過ぎない、が、第一が日本人と云ふ物珍らしさ、第二が運よくば金日の品物が取れると云ふ勝負氣とで、何時頃から評判になつたとも知れず、日露戦争以後は一層の繁昌、毎年の夏、此の玉轉しの店は増えるばかりである。

かう云ふ人氣のもので一晝を爲ようと云ふ人達の事であれば、其の主人と云ふ日本人は大概もう四十から上の年輩。生れ故郷の日本で散々苦勞をした畢句、此のアメリカへ來てからも多年ありと有らゆる事を爲盡し、今では何に世の中はどうか成らな、人間は土をかビツて居たつて死にやア爲めえ、と云はぬばかり、其の容貌から物さひから何處となく鯨が着いて、親方らしく、壯士らしく、破落戸らしくなつて居る。で、其の下に雇はれて毎日客が轉す玉の數を

數へ景物を渡してやる連中は、まだ失敗と云ふ浮世の修行がまず、然し雖ては第二の親方にならうと云ふ程度の無職者、又は無鐵砲に苦學の目的で渡來して來た青年である。

自分も其の頃は其の中の一人、何を爲たつて構ふものか。歐洲に渡る旅費さへ造ればと云ふ一心から、ふいとした出來心で唯ある玉轉しの數取りになつた。一週間の給金が十二弗。亭主のいふには外の店ぢや十五六弗出す處もあるさうだが皆な自分で喰つて行かなくちや成らねえ。乃公の處は十二弗で三度飯がついて店の中へ寝泊りも出来る。つまり給金から身錢一文切

る事はいらねえのだ。だから其のつもりで働いて呉れ給へ——との事であつた。自分は雇はれると、直ぐ其場から、他の者と同じ様に店先に据ゑた店臺のわきに立つてお客の立寄るのを待つて居たが、三時、四時過ぎる頃までは見物の通行人も至つて稀れで、あつてあつて夏の夕陽が向側の大きなビヤホルルの板屋根に照輝いて居る。ビヤホルルの右隣は射的場で、眞白に白粉を塗つた女が口々に物を煩張つたまゝで、時々此方に向いては大欠伸をして居たが、左隣は「世界空中旅行」と看板を掛けて鳥渡見掛の大きな見世物である。入口の椅子

うなるつもりでアメリカへ来たのぢや無えかな。」

「見ろ！ 奴等は海の方へ曲つて行つたぜ。遊泳場にやまだ人が居るのか知ら。」

「今頃行つて見ろ。怪しい奴が彼方にも此方にも砂原にごろ／＼して居らア。」

「かうして居たつて爲儀がねえ。ぶら／＼出掛けて邪魔して遣れ。」

「つまらない閑焼をするな。」

然し、海の風は身體に染だぜ。

「何を云ふんだ。かう毎晩夜明しをして居ぢや、藥も絲瓜もあるものか。」

「ぢやア、例の通り、何處かで痔を明けて了ふのかな。乃公達は的のない海邊よりか、矢張りきたれた南京街へ落ちて行かうや。」

連中は二組に分れた。一組は海水浴場の方へ、一組は夜通し通つて居る電車の停車場をさして出て行つた。自分は一人取残されたもの

の、然し家へ這入つて玉臺の上に寝るのも厭だし、と云つて、何處へも行かぬやうな。

星は一つ残らず消えて了つたが、まだ明けきらぬ夜の空はびくばく難い陰鬱な色をして、一帯に薄い霧に蔽はれて居る。明日はまた驚く程蒸暑くなる前兆である。

軒の下に踞んだまゝ、自分は思はずとうとと居眠りしたかと思ふ間もなく、誰やら耳許近く呼ぶ聲にはつと顔を上げて見ると、先程海の方へ出て行つた連中の一人であるらしい。自分と同じ位な若い書生風の男が葉巻を口に銜へて立つて居る。

「どうしたんだ。寝るのなら店の中に寝臺があるぜ。」と自分の顔を見下したが、君はまだ此う云ふタイプに馴れない方だね。と云つて何か思

出すらしく葉巻を口に銜へ直した。

「昔なは何うした。」と自分は少し恥る氣味もあつて態とらしく眼を擦る。

「相變らず淫實だのこいたいの知れない女を捜し歩いてゐるのさ。」

如何にも疲れたと云ふ様に自分の傍へ同じ様に踞んだが、近く自分の顔を打睨めて、「レ、どうだね、君。われ／＼の生活は随分墮落したもんだらう。」

自分は答へずに唯軽く微笑んだ。

「君は何時アメリカへ来たんだ。もう長いのか。」

「二年ばかりになる。君は……。」と自分は問ひ返した。

「今年の冬で丁度五年だ。夢見たやうだな。」

「何處か學校へ行つて居るのか。尤も今は夏で休みだらうけれど。」

「さうさ。来た初め二年ばかりはそれでも正直に通つて居たツけ。尤もその時分にやア、僕は國から學費を買つて居たんだ。」

「ぢや、君は無資力の苦學生と云ふんでもないんだね。」

「かう見えても、家へ歸れば岩口那まの方よ。と淋しく笑ふ。」

成程其の笑ふ口許、見詰める目許から一帯の容貌は、玄關番、食客、學僕と云ふ様な境遇から、一躍渡米して來た他の青年とは違つて、何處か弱い優しい處がある。身體は如何にも丈夫さうで、夏シャツの袖をまくつた腕は逞しく肥えて居るが、其れも勞働で鍊磨へ上げたのとは異

り、金と時間の掛つた遊戯や體育で養成した事が注意すれば直ぐ分る。幾年か以前には開田川のチャンヒオンであつたかも知れぬ。

「日本ぢや、何處の學校だった。」

「高等學校に居た事がある。」

「第一から。」

「東京は二年試験を受けたが駄目だった。仕方がないから、三年目に金澤へ行つてやつと這入れた。然し直に退校されたよ。」



と、忽ち「何をするんだよ。」と云ふ様な女の叱る聲。又はキャッ／＼と笑ふ聲も聞える。何れも一夜見世物小屋で怒鳴つたり踊つたりして居た連中が、今初めて身まゝ氣まゝの空氣を吸ひに出て來るのである。

往來の端の廣い海水浴場の方からは、何とも云へぬ冷たい風と共に雨のやうな靜かな岸打つ波の音が響いて來る——何と云ふ疲れた物淋しい響であらう。自分は大方夜明しに馴れぬ身の甚く弱り果てた所爲であつたに違ひない。一夜湧返る狂亂舞樂の後、この淋しい疲れた波の音は深く心の底へと突入るやうに思はれた。見るともなく灰色に色褪めた夏の夜の空遠く、今や一ツツ消えて行く星の光を打ひ成つて居ると、かの怪しい女どもが戯れ騒ぐ笑ひ聲の途切れ途切れては又聞えるのさへ、遂にはあゝ浮世にはあんな生活もあるのかと、何か不思議な謎でも掛けられる様な氣がして來るのであつた。

玉場に雇はれた連中は目の前を過ぎる女の値踏みや批評に急しい。

「おい、どうするんだい。何時まで立坊をして居たつて始られえや。出掛けのなら、早く出掛けて了はうぢやないか。」

「何處へ行くんだ。最う夜が明けるぜ。」

「一角の酒屋へ行つて見ようや。彼處へは毎晩寄席へ出る女が大勢來て飲んで居らア。」

「いくらだいい？ 二弗位で上るのか。」

「相手によらア。」

「これから二弗も取られる位なら、矢張支那街へ行つた方が安く行くぜ。」

「支那街つてぶへばあの十七番に居た、ぼつちやりした目の黒いジュリヤ……知つて居るだらう。あのジュリヤがビヤホールの踊り場へ來て働いて居るぜ。きつと角の酒屋に來て飲んで居るかも知れねえ。」

「彼奴アもう男が付いて居るから駄目よ。」

「日本人か？」

「うむ。ブルックリンに居る手品使ひの女房見た様になつて居るんだ。」

「女房だつて、娘だつて、構ふ事は無え。金さへ出しやア乃公のものぢや無えか。」

「お義理一遍に……。」

「さう好きな註文を云ふない。此處はアメリカだぜ。」

「アメリカがどうしたんだ。日本人だから惚れられないと限つた事アあるめえ。日本人ならもつたい無い位だ。」

「然し乃公アもう金明替に遊んで居たつて、氣が乗らねえからな。」

「其れぢや強欲でもするさ。」

「まだ、それまでには窮して居ねえや、時節を待つよ。」

「心細いわけだな。」

「心細い事があるかい。其の中に……決してやるから見て居るが可いぜ。」

「公園なんぞうろ／＼して巡査に捕まつて口役人の面へ上を塗るな。」

此の時絶えず歩いて居る怪し氣な女の二人連が行き過ぎながら、日本人と見て戯び半分ハロ―と聲を掛けた。

「お出でなすつた！」

「わるくないぜ。」

「疲せて居るぢや無えか。」

「夏向だからよ。」

「後をつけて見ろ！」

連中の二人が其の儘女の後を尾けて行つた。残つた人数は如何にも面白さうに其の方を見送るが、

「爲様の無え奴等だ。國で親兄弟が聞いたら泣くだらう。」

「太平洋と云ふ大海があるんで、先づお互に仕合と云ふものだ。何事も乃公達だつて初ッから惣

居よう、皆なが遣るやうに先づヘラルド新聞社へ行つて "Jugoso student, very trust worthy, wants position in family, no v let, butler, moderate wages" と云ふ様な廣告を出した。二三日たつと直ぐ返事が二三通も來た。

然し僕は何う云ふ家が可いのか分らないから、行き當りばつたり一番先に尋ねて行つた家へ給金は向うの云ふまゝ三十弗で働く事にした。其の時には下女同様の奉公をして、三十弗の月給が取れるとは、流石はアメリカだと思つて喫驚した。

然し能く辛抱が出来たね。學費を送る位の家なら君は所謂お坊ちゃん育ちの身分だらうが……。

「人間には反抗と云ふものが有るよ。お坊ちゃん育ちだつたからこそ辛抱が出来たのだ。辛抱どころか遂に面白くなつた。君には分らないかも知れない。自渡説明の爲ににくい事情だが……まア慙う云ふ譯だ。先づ僕の家庭から話さなくツちや成らんな。

「父親は何をして居られる？」

「學者さ」——「學院の校長をして居る。僕の親として紳士として、社會的にも個人的にも殆ど一點非の打ち處がないと云つて可い位な人物

だが、然しあまり完全過ぎると物事は却つて不可んよ。水漬くして魚住まずと云ふ事があるからね……僕は餘り健全な家庭に育つた爲め思ひ掛けない處から腐敗し始めたのだ。」

自分が問ひ掛けようとするのを手で制して語つてけた。

「今になつて、此様處で親の評判を吹聴するのは馬鹿々々しいやうだが、實際の處、僕の父は其の頃から世間で云ふ通り、餘程人から崇拝された人物だつたと見えて、家には何時も整同様に書生が七八人も居た。君も父の名前位は何かの書物で見られた事があるかも知れない。兎に角僕は極く幼少の時から、家の書生や附近所の者などから父と云ふ人は非常にえらい先生だと云ふ事を何時となく耳にして居たが、然し如何いふ譯で、何れほどえらいのか知らないから、自分も此の儘大人になれば、自然と先生になれるものだと思つて居た。ところが、たしか高等小學に進む時だつたよ。僕は其の頃から非常に數學が出来なくつて、殆ど落第しかけた時、學校の教師から慙う云はれた事があつた。君のお父様は世間も知つての通り法律の大學者だ。餘程勉強なさらないと君ばかりではない、父上のお名前にも關ります。家へ歸ると無論學

校から注意書が廻つて居たので、第一に母親から叱られる。第二には父親から懇々云訓され、毎夜十時までは熱心に學課の復習をしらの事であつた。

僕は頑固な子供心に、初めて自分は學問が出来ないのだと氣が付いて見ると、もうひどく氣が挫けて了つて、其の後一週間はかりと云ふものは家の書生などに顔を見られるのが辛くて堪らない。あまり外へも出ずに部屋へ引込んで、父から云はれた様に夜更けまで勉強して居たが、何時とはなく、自分はもしや此様に勉強して居ても、父の様にえらくなれなかつたら如何しようかと、子供心に自分の將來が無暗と心細く思はれる事があつた。この心配——將來の憂慮だね、此れがつまり僕の精神を腐らして了つた點だと云つても可い。僕は小學から尋中へと次第に進んで行くにつれて學問は増々々々敷なる。一方では父の名望地位はいよいよ上る。昔父の玄關に居た學費が學士になつて禮に來る。僕は唯だ自分が意氣地なく小さく見えるばかりだ。すると、家の書生や親類などは誰が云出すともなく、僕はやがて父の家を繼ぐ時分には父の様な法律の大學者になるだらうと云ふし、僕自身も父是非さう成るべき責任がある様

「どうして……」

「二年級の時に病氣で落第する。其の次の年には數學が出来なくつて又落第……二年以上元級に止まる事が出来ない」と云ふのが其の時分の規則だから退校された。」

「其れでアメリカへ来たんだね。」

「直ぐぢやない。退校されてから二年ばかりは家に何にも爲ないで遊んで居た。女義太夫を追掛けたり、吉原へ繰込んだり、悪い事は皆な其の間に覺えた。」

「……………」

「母親は泣く父親は怒る。然し其の儘にしちやア置けないので、到頭米國へ遊學させると云ふ事になつたのだ。」

「直ぐニューヨークへ来たのか。」

「いや、マサチューセツツ州の學校へ行つた。二年ばかりは随分勉強したよ。僕だつて何も根からの道樂者ぢや無い。一時高等學校の入學試験に失敗したり、其れから又退校されたりした時には、自分はもう駄目だと思つたが、勉強してみりやア、何にさう僕だつて劣つて居るわけぢや無い。」

「さうとも。」

「マサチューセツツの學校ぢや三人居た日本人

の中で、兎に角僕が語學ぢや一を占めた位だつた……」

「卒業しないのか。」

「中途で止してつた。」

「どうして、惜しいぢやないか。」

「さう云へば其様のものさ。然し今更後悔したつて始まらない。僕は又後悔しようと思つちや居ない。」

「……………」

「仕方のない奴だと思ふだらう。然し僕は全く感ずる處があつて廢學してつたのだ。一生涯僕はもう二度と書物などは手にしないだらう。自分は彼の顔を見詰めた。」

「別に大した考へがある譯ぢやないが、僕は學位を貰つたり肩書がついたりする身分より此様處にかうしてぶら／＼して居る方が結局愉快だからさ。」

「或る意味から云へば、或はさうかも知れない。」

「學校へ通入つてから二年目の夏の事だ。夏休みを利用して紐育へ見物に出て來たのは可かつたが、秋になつてもう學校へ歸ちうと云ふ時分に、どうした事だつたか、居くべき筈の學資が來ないぢやないか。實に弱つたね。今日來る

か明日居くかと待つて居る中に、學校へ歸る旅費は思ふ、愚圖々々して居ると下宿代までが忸しくなつて來た。僕は今日まで自分の腕で銀、文稼いだ事がない。如何にして自分は其身を養つて行くかと云ふ方法を知らない。だから、さア、國許から金が來ない……何れ來るのたらうが最う來ない様な氣がする。と、夜もおち／＼寢られないぢやないか。何だか無暗と飢い様な氣がする。乞食になつた夢ばかり見るのだ。」

「無理はない。」

「已むを得ないから、僕は残つて居る金のある中下宿の勘定をすまして、安い日本人の宿屋へ引移した。其れから二週間も待つて居たが、まだ送金が届かないぢやないか。僕はもう此れアいよ／＼駄目だ。何とか手段を考へなくちや成らない……と云つて友達も相談相手も何にもないアメリカぢや爲様がない。遂に決心して西洋人の家庭へ奉公に行く事とした。」

「ハウス、ウオークだね。」

「さうさ。宿屋に宿つて居る連中は皆なさう云ふ手合だから、毎日詰をして居る中に大體様子は分つた。思つたよりか苦しくも無ささうだから、えい、どうにか成るだらうともう自暴自棄、初めよりか大分膽が据つて來たら、僕も知つて



毎年此う云ふ夏場を目付けて轉付いて歩いて居るんだ。」

「然し、最後には君、どうするつもりだね。」

「どうする……どうするか、どうなるか。」と非常に苦悶の顔色を示したが彼は遂に怎う叫んだ。

「いや、其様事を考へない爲めに僕は此様馬鹿な眞をして居るんだ。自分ながら自分の將來を考へる脚力もなくなつて了ふ様にと僕は働く、飲む、食ふ、女を買ふ。あくまで身體を動物的にしようとするて居るんだ。」

彼は胸中の苦しみに堪へぬかして、自分を置去りにしたまゝどしどし向うの方へ行つて了つた。

一閃の旭日が高い見世物の塔の上に輝き初めた——何たる美しい光であらう。自分は一夜閉込められた魔窟から救ひ出されたやうな気がして覺えず其光を伏拜したのである。

(明治四十年五月)

## 市俄古の二日

三月十六日——市俄古見物に行かうと定めた

日である。

例年よりは大變に暖いと云ふ事で、この二三日降り續いた雨に去年から降り積つて居た雪は大方解けて了つた。天氣は相變らず曇つて居たけれど、久しい冬の眠りから覺めた街の様子は最うがらりと變つて居る。雪の上を滑つて居た低い轡は大きな車輪の馬車となり、その取者の恐しい毛皮の外套は輕い雨着と變つた。房のついた毛絲の頭巾を冠り、氷の上を滑つて居た子供や娘は、洗出されたセメント敷の歩道を、新しい靴の踵に踏み鳴らしつゝ走廻つて居る。子供でなくとも、人家の庭や果樹園に黒い濕つた土と、雪の下に一冬を送つた去年の青芝の現れ來たのを眺めては、程なく來るべき春を思浮べて、誰でも自然と雀躍せずには居られまい。

午前九時半の汽車に間に合ふやう、自分は手提革包の支度もそこゝに、町筋れの四辻を過ぎる電車に飛び乗り、下町のミシガン中央線の停車場に赴いた。

カラマツウ市から市俄古までは凡そ百哩、正四時間であつた。汽車はカラマツウの町を離れると直様波の様に起伏して居る木の少ない丘陵の間や、眞黒に冬枯れて居る林

檜園に沿うて走る。自分は岡の間の凹地に残る鹿子斑の雪の模様や、牧場の小川から溢れ漲る雪解の水が腐つた柵を押し崩すさまなど、まるで露西亞小説中の絳紫の様な景色を幾度も目にして過ぎた。

インデアナ州に這入ると、製造場の多い、汚い小さな街が増え、懸てミシガン湖の畔に出る。然し、湖水の面は曇つた空と共に濃々たる霧に閉され、岸邊に漂ふ大きな水塊と、無數の鴈の飛廻るのを眺めるばかり。見ぬ北極の海もかくやと想、せられるのである。

間もなく汽車は湖水に沿ひながら、市俄古の市中に入り、イリノイ中央線の停車場に着した。午後の一時半頃なので、プラットホームから續く階段を上つて待合室に入り、其の片限の一室を占めた料理店に這入つた。

中は二つに區別してある。一つはランチ・カウンタ―とか云つて、一寸日本の居酒屋と云つた様な體裁。手取り早く立食ひを爲て行く處、他の方は白い布を掛けた食卓と椅子が置いてある普通の食堂である。立食の方は時間もかゝらず、勘定も安いので、殆ど空間もなく混み合つて居る中には不思議に可成り綺麗な扮装の婦人も交つて居た。

にも思ひ、又心から成つて見たいと思ふ。思へば思ふほど氣にかゝつて来るのは自分の實力で、僕は父の云はれる事がしみる身にこたへる度々、とても僕は駄目だ……と譯もないのに獨りて絶望して居た。

然し無論これは世間も何も知らない子供心の事で年を取れば次第に氣も大きくなる。と云ふものゝ、子供の時に感じた事は一生忘れるものぢや無い。僕はやつとの事で入學した高堂學校は退校されて、少し自暴になつた擧句、アメリカへ送られてからも矢張りさうだ……折々父の手紙にでも接すると、妙に僕は、あゝ父はこれほど深切に自分を勵まして呉れるが、果して自分は學術に成功する才能があるのか知らずと云ふ様な氣がして成らない。やつて見れば譯なく出来る事でも僕は自分のイマジネーションで、何時も駄目だと諦めて了ふ。

かう云ふ絶望の最中まア想像したまへ。僕はふいと送金が延引した爲めに、云はゞ一時家との關係が中絶して了つたのだらう。是非にも成功して歸らねばならぬ、故郷へ錦を着て歸るべき責任が失つた——何と云ふ慰安だらう。もう死なうが生きようが、僕の勝手次第。死んだ處で嘆きを掛ける親が無ければ、何と云ふ氣樂

だらうと云ふ様な氣がしたのだ。」

彼は語り疲れて少時黙つた。

「其れで、君はハウス、ウオークと云ふ皿洗ひの勞働を辛抱したんだね。」

「さうだ。送金は程なく情いた、が、もう時已に晩しき。僕は二週間ばかり奉公して、食堂の後で皿を洗つて居る中に、すっかり墮落して了つた。君は經驗があるかどうか知らないが、實に氣なものだ。それア馴れない事だから、初めは苦しい、情ない様な氣もする、随分まごつきもするが、元々人してむづかしい仕事ぢやない。家族が食堂で食事するのをボーイの役目で皿を持つて廻れば可いのだから、譯は有りやしないさ。主人達の食事が済むと皿を洗ひ、地下室の臺所へ下りて、コックの婆に小間使の女と三人、荒木のテーブルを圍んで飯を食ふのだが、境遇と云ふものは實に恐しいもんさね。皿を洗つて居れば、自然々々と皿洗の様な根性になつて行くから奇妙だ。朝午晩二度々々食事の給仕をする外に空間と食堂の掃除をするんで、身體は随分疲勞れるから、手のすいた時と云へば居眠りをするばかり。物を考へたり、心配したりする様な、つまり腦を使ふ様な事は自然になくなる……其の代り肉慾食慾は驚く程増進して來

るものだ。一日の勞働を了つた後の晩飯の甘い事と云つたらお話にならない。食へるだけ腹一杯食ひ込むと其の後は氣がとろりと爲了つて、自然と傍に坐つて居る小間使に戯ひ始める。手を握るばかりぢやない、操つて見ようとして、甚く脇鐵砲を喰ふのだが、其れが又何とも云へぬ程面白い。すると、向うも下女は矢張り下女で、怒りながらもつまる處戯はれて見なければ何だか物足りない様な氣がするのだ。惚れたの何うのと云ふ事は有りやア爲ない。女と男——これアもう必然的に結合すべきものだ。夜は次第に明けて來た。消え行く電燈と共に見世物小屋の女達も何時の間にか姿を隠して了つて、四邊は一刻々々薄明くなるにつれて、いよいよ寂と物靜かになつて行く……聞えるものは落邊の砂を打つ波の音ばかり。此の如く僕の運命は今く定まつて了つた。僕は一方では以前にも増して、いよいよ父に合す顔が無いと良心の苦痛に堪へない、と同時に、一方で此の動物的の境遇がますます、氣樂に感じられる。つまり煩悶すればするほど深みへと落ちて行くんで、冬中は彼方此方の家庭へ給仕人になつて働いて歩く。夏になつて家族が市中の家を引拂つて避か地へ旅行する様になれば、

しい大きな高い凌雲閣の二つ三つ立つて居るのが、丁度雨上りの白い雲の頻りと往來する空模様と調和して、妙に自分の眼をひいたので、自分分は訪ねようとする家の戸の外に佇んだまゝ、暫くは呼鈴も押さずに眺めて居た。

すると、二階の窓の方で、自分には何の譯とも聽取れなかつたが、若い女の聲がして、パタパタと駈け降りる聲音、そして入口の戸が開いた。

「ミスター N ツて仰有る方ぢやありませんか。」十七八かと思はれる小作りの婦人、金色の前髪をふつくりと大きく取り、白い上衣に紺色の袴。見るから愛らしい圓顔の口許に、慈とらしいまで愛嬌ある微笑を浮べ、華美な、無邪氣な、奥底の無い、アメリカの處女特有の優しい聲で、

「ジェームスはまだ會社から歸りませんけれど、此の間から貴兄のお出を待つて居ります。

まあ、此方へお上んなさいまし。」

自分は案内されて客間に通つた。室内の裝飾は只淋しからぬばかりに長椅子、安樂椅子、机、石版の繪額、中古の洋琴などを置いただけで、自分が想像した市俄古の生活としては、其の華美ならざるに驚いた。家の主人

は裁判所の判事、今、自分を接待して呉れるのは、その一人娘のステラ嬢で、自分がミシガン州で知己となつたジェームスの未來の妻たるべき人である。

然り、彼れジェームスは既に度々自分に此の娘の事を話した。懐中時計の裏に貼付けて、肌身放さず持つて居る美しい其の眞實をも幾度となく見せて呉れた。ジェームスの實家はミシガン州にあるので、去る頃歸省して居る最中、自分は一方ならず懇意になつたのである。ボストン電氣學校の卒業生で、シカゴのエヂソン電氣會社の技師となり、この家に宝飾りをして居たが、彼は書生時代から洋琴が上手、娘ステラは胡弓が好きと云ふので、折々試みる晩餐後の合奏は、宵々毎に二人の愛情を結び付け、遂に婚約する事になつたとやら。して、互の心の底に、そも／＼の初め云はれぬ愛の誓をなさしめたのはシェウマンが「夢」の一曲を合奏した瞬間であつたと云ふ事も、自分はジェームスから聞いて居た。

「今夜は私に是非、あの『夢の曲』を聞かせて頂きたいものです。」

云ふと、ステラはさも驚いた様に、しなやかな片手に輕く頬を押へ、「夢！」と叫んだが、

最う激しい回想の念に打たれて、「あゝ！」と大きく息をつき、「ジェームスは其様事まで、貴兄にお話して貰つたんですか。」

「え、何も彼も……」

「まあ、ほゝゝ、ほ。」と高く鈴の様な聲で笑つたが、少しも感情を抑へない此の國の少女が胸の響は自分の耳にまで聞える様に思はれた。

彼女は突然安樂椅子から立ち、すた／＼と次の室へ行つたかと思ふと、一冊の寫眞帖を持つて来て、今度は華と自分の傍へ椅子を摺り寄せ、膝の上に開いて見せて、

「私達の寫眞ですよ。日曜のたんびに撮つたんです。」

日曜日毎に連れ立つて遊びに出掛けた所々の公園で、二人して互の姿をば撮影し合つたのを、一つ／＼月日を記して貼つてある。何と云ふ愉快な記念帖であらう。

ステラは一枚毎に、撮影した場所をば、此れはジャクソン公園の湖邊、此れはミシガン大通の石堤、此れはリンコン公園の木蔭……と語調も急がしく説明する中にも、彼女は折々自分の今や世界中で一番幸福な娘の一人であるとの自信を、深い緑色の目の色に輝かせたが此の眞實の情の光に照らされては、如何なる



自分は食事を済まして、廣い階段を下りて來へ出ようとしたが、さて差當つて困つたのは、まだ不知案内の都會の事、自分の目指す友人の家は西の方やら、東の方やら。

入口の石段下には駁者が馬車を並べて空待をして居るので、自分は手招きして一人を呼び寄せ、「市俄古大學の傍まで幾何だ。」と聞くと、「二弗。」と答へた。

隨分遠方であるとは知つて居たが、少し法外の様子に思はれたので、外國の旅の恥には掻き馴れて居る事として、再び停車場に戻り、居合せた驛夫を捕へて質問した。驛夫は深切に、「停車場の出口から直ぐと市内を往復する汽車に乗つて、五十五丁目の停車場で下りるのが一番便利だ。」と教へて呉れたので、自分は更に切符十仙を拂ひ、プラットフォームに來る汽車を待ち受けた。

間もなく三輛の列車が來て、停車すると入口の戸が驛夫の手を借りずに自然と開いて、進行し始めると同時に再び自然と閉されて了ふ。車中は女客は少く、商人らしい男が多い。自分は市俄古大學の近傍に住んで居る一友人を訪ねて行くつもりなので、隣席に坐つて居る若い男を顧みて、何丁目は、と友人の宿所

を尋ねると、まるで子供に物を教へる様に、細と道筋を示して呉れた後、やがて衣囊の中に入れた手帳の間から地圖まで引出した。

自分は日本流に帽子まで取つて厚く禮を云ふと、

「誰でも外國へ來れば皆困るんですから、其様禮には。」と彼の男は自分の餘りに丁寧なのに少しは驚いた風であつた。アメリカでは男同士の挨拶に帽子など取るものはい人もないからであらう。彼は言葉をついで、

「私も實は外國人です、和蘭人ですよ。最う十年から此の國に居ますが、貴兄は如何です、アメリカはお好きですか。」

「貴兄はいかいです？」と自分は訊き返すと彼は微笑して、

「世界中で一番好い處と云へば矢張生れ故郷。貴兄も矢張さうでせう。」

彼はさる商店の手代をして居る事から、纏てそろくとお國自慢に取りかゝらうと爲した折、汽車は自分の降りるべき停車場に着いた。自分は承ねて禮を云ひつゝ車を出で街に降りました。

辻の瓦斯燈に五十五丁目と書いてある。自分の行先は五十八丁目なので、即ち三丁歩けばよいのだ。初めて來た土地でも怎う容易く見當

の付くのは、規則正しく數字若しくはアルファベットの順に區別されてゐる亞米利加の市街の最も便利なる一つである。番地とても、街の右側が奇數ならば、向側は偶數と云ふ風になつて居るので、東京の人が其の土地の番地を搜し得ぬ様な處は決して無い。

自分は安心してゆつくりと歩いた。久しく空を閉した冬の雲は、先程から幾車にも層をなし、動いて居たが、次第々々に青空を現はし、遂に愉快な太陽の光までを漏す様になつた。

雪雫の往來は宛ら沼の様になつて居るので、自分は稍乾いて居る歩道を拾ひ、歩いて行くと、何と云ふ不順な氣であらう、丁度五月の様な暑氣を感じ、汗は額に流れ出て、今朝までは着心の好かつた外套の今は重苦しい事云ふばかりも無い。

幾軒も同じ石造りの三階建の貸家の竝んで居る中に、やがて目的の番地を見出した。此の邊は急がしい市俄古の市内とは思へぬばかり人通りも少く、町の片側は芝生の廣場、後で聞けば、ミッドウエーとして十餘年前萬國博覽會の一部であつたのを其儘公園にしたのだとの事。その廣場を越して、遙右手には鼠色の市俄古大學の建物が見え、左手には大方ホテルでも有るら

風の婦人が一人、すると案内の細君は、自分を此の中央の食卓に請じたので、かの婦人は今まで一人で退屈さうに食事の運び出されるのを待つて居た所から、殊には外國人とて取つて直接話しかける。

然し話し掛ける質問は十人が十人大抵きまつて居る——何時此の國へお出でになりました。アメリカはお好きですか。ホームシックにお成りぢや有りませんか。日本のお茶は大變よう御在ますね。日本のキノノは綺麗ですね。私は日本の事だと云へば、最う夢中ですよ……

自分は何でもよい、早く話を他に轉じたいと思つたが、折能く、下髪を黒いボンで結んだ十四五の娘が食事を運んで來たので、此れを機會に、ナイフを取りながら、

「あなたは大學へお通ひなですか。」

聞くと、「ええ。文科の方へ……」との答へで

ある。此れに稍力を得て、

「文科……それぢや小説なども御覧になりますか。」

「ええ。大好きです。」と婦人は慥なる所なく答へる。アメリカには日本の様に女學生に限つて小説を禁ずる様な無情な法律はないと見える。

彼女は新刊小説の題目を數多並べて批評をし

たが、不意にも自分は實際アメリカの文學について、此れまで何一つ注意を拂つた事が無いので、折角の婦人が高説も其程には趣味を解し得なかつた。自分が知つて居るアメリカの作家と云へば、ブレットハート、マクトエイン、

ヘンリー・ゼームス、高々此れ位のもので有らう。去年の暮であつたか、紐育の友から其の頃文壇を風靡して居る二三の大家の作を送付されたが、何れも半分ほど讀んで止してしまつた事がある。猶ほ折々は雑誌など開いて見るけれど

も、何故か此の新大陸の作家中には、ドーデー、ツルゲネフの様な優しい面影を見出す事が出来ない。大方アメリカ人にはかゝる哀愁の深い作物は、その趣味に適して居らぬのであらう。

朝食は思ひの外早く済んだ。かの女生徒は、明日の午後には大學構内のマンデル・ホールで春季の卒業式があるから、御見物なさつては……と云ひながら食卓の上に置いた一冊の本を取り片手に前髪の縛れを撫で、出て行つた。

殆ど入り違ひに戸口の鈴が鳴つたかと思ふと給仕の娘が、「お客様です。」との取次ぎ。

出て見るとジェームスであつた。山高帽子を少し阿彌陀に冠り、例の無造作な聲で、グッドモーニングを繰返しながら此れから街の會社に

行くので、自分も一緒に見物旁々出掛けてはと。早速勤めに應じて共々往來に出て、昨日の書閣下車した同じ停車場から市内通ひの汽車に乗つた。

丁度、あらゆる階級のシカゴ人が下町の會社や商店へ出勤の時間なので、車中には殆ど空椅子もない程男や女が乗り込んで居る。彼等は何れも最短時間の中に最多の事件の要領を知らうと云ふ非常な恐しい眼付で新聞を読みあさつて居る。五十分位に停車する何處のステーションにも新聞を持たずに汽車の來るのを待つて居るものは唯の一人もない。何と云ふ新聞好きの國民であらうか。彼等は云ふであらう、進歩的の國民は皆一刻も早く一事でも多く世界の事件を知らうとするのだと……。あゝ然し世界はいつになつても珍らしい事變つた事もなく、同じ紛紜を繰返して居るばかりでは無いか。外交問題と云へばつまりは甲乙利益の衝突、戦争と云へば強いのもの、勝利、銀行の破産、選挙の魂膽、汽車の顛覆、盜賊、人殺、毎日々々人生の出來事は何の變化もない單調極まるものである。佛蘭西のモーパーサンは早くも此の退屈極まる人生に對して堪へ難い苦痛を感じ、水の上的なる日記の中に、厭ふべき同じき事の常に繰り

人とて動されずには居まい。

自分は心の底からステラの幸福を祈る切なる情に迫められると同時に、あゝ、幸なるかな、自由の國に生れた人よと羨まざるを得なかつた。試に論語を手にする日本の學者をして論ぜしめたら如何であらう。彼女はいしたくないものであらう、色情狂者であらう、然し、自由の國には愛の福音より外には人間自然の情に悖つた面倒な教義は存在して居ないのである。

此の夕、自分は忘れる事の出来ぬ楽しい晚餐を試みた。戀人のジエームスが歸つて来る、父親の老判事が歸つて来る。一家母親を合せて食事した後、若い二人は自分の請に應じて、彼の「夢の曲」を演奏したのである。花形の笠着た臙臙たる電燈の光に、男は肩幅の廣い背を此方にして洋琴に向ふと、女は胡弓を取つて倚りかゝる様に男の傍に佇立む。長椅子には白髪のは母親、鼻眼鏡を掛けた大きな禿頭の老判事、硝子窓の外には幽かに濕けた三月の夜を急いで歩いて行く人の足音。

やがて若い二人は演奏し了つたが、娘は樂器を手放すや否や、最う堪へられぬと云ふ様に、ハタと男の胸に身を投げ掛け、二度ほど激しい接吻を試みた。兩親は手を拍つて喜び、その

再演を迫つたが、娘は猶ほ少時は、激しい感動を静め兼ねたのであらう、デツと男の胸に顔を押當てた儘で。然し突然立ち直つて、再び樂器を手にとると、今度は亞米利加人が大好きな、彼の愉快なる「デキシ」の一節、老判事までが椅子に坐りながら足拍子を踏み始めた。

時計はやがて九時を打つた。ステラの家には今生憎と空間がないと云ふので、先程、ジエームスが二軒置いて先きの素人下宿屋に自分を案内すると云つて居た處から、自分は家族一同にグッドナイトを告げジエームスと共に外へ出た。自分は何か一語ジエームスに向つて、御身等の戀は如何に幸福なるか！との意味を傳へたいと思ひながら、空を見ると夜の雲の烈しい往来に氣を取られ自分はその儘黙つて歩いた。彼は何やら俗歌を口笛に吹きつゝ早や素人下宿の戸口に着いた。

下宿屋と云つても別に様子の變つた事は無い。ステラの家とは殆ど間敷も建方も同じ様である。自分は此の家の細君に案内されて、貸間の中では一番上等な表向の一室に入り、五分ほどしてジエームスの立去るや、自分は直衣服を着換へて、靜に寢床の上に身を横へた。

瓦斯燈を消すと、日蔽を差上げた硝子戸から

は夜の空が一杯に見える。空は暗いながらも、往來の雲のかけには月が潛んで居る爲めか何處とはなしに微明く、路傍の樹木や、遙の高い建物か影の様に黒々と見分けられる。然し幸にも今日は汽車の疲れに枕上何の物思ふ所もなく、直様身は海底に沈み行く心地して、深い眠りに入つたのである。

三月十七日——日覺めたのは八時、見ると一面に濡れて居る硝子戸の上に、朝日がキラキラ輝いて居る。衣服を着換へながら、窓際に立ち寄つて、外を見れば、濡れた往來には風に打拂はれた、細い樹の枝が、彼方此方に散亂して居る。暴風があつたに違ひない。それにしても、自分は能く夢一つ見ずに一夜を過す事が出来たものだ。哀れな人間は眠りの最中さへ、絶えず種々の夢に苛まれるものを。昨宵は此の夢一つ見ぬ誠の快眠に、自分は初めてかの牧場の木蔭に横る動物のやうに、生存の勞苦から遠かつた安樂と幸福を得たのである。

九時の定めと聞いた朝飯の食堂に下りて行つた。

四人づつ坐るべき小形の食卓が三間置いてある。商人らしい中年の男が二人一番端の食卓に市俄古新聞を讀んでゐる。中央には學生



と兩足とを動かして、うじく騒いで行く様、此様滑稽な玩弄物が又とあらうか。然し一度此の小さな意氣地なく見える人間が、雲表に高く聳ゆる此高樓大廈を起し得た事を思ふと、少時前文明を罵つた自分も忽ち偉大な人類發達の光榮に得意たらざるを得なくなつた。

人は定まらぬ自分の心の浅果敢きを笑ふであらう。然し人の心は何時もその周囲の事情によつて絶え間なく變轉浮動して居るに過ぎない。例へば夏の日に冬の寒さを思ひ冬の日に夏の涼しさを慕ふ様なもので、ルーテルの新教ルーサーの自由、トルストイの平和、何れか絶対の真理があらう。皆な其の時代と其の周囲の事情とが呼び起した聲に外ならぬ。

ジエームスは會社へ出勤すると共にエレヴェーターで下に降り、商店の戸口に別れた。自分は此れからミシガン大通の美術館へ見物に行くのである。

(明治三十八年三月)

## 夏の海

七月十日の記

自分の宿つて居るM子の住居は炎暑の爲め折

折人死のある東側の貧民町からは遠く七八哩も離れて、殆ど紐育の市中とは思へぬ位、五階の窓からは西の方一帯にハドソンの河上を見渡し、東の方にはコロンビヤ大學の深い木立を望み、極く閑靜な山手でありながら、然し敷石や煉瓦に焼け付く暑はまだ人の目を覺さぬ中から室中を温室のやうに爲て居る。汗は油となつて總身から湧出して來るので、朝飯の食卓についても食慾は全く去り一皿のオートミールさへ啜り了る勇氣がない。

まい。と落膽した調子でぶつたが、永く此の修羅場に馴れて居る所謂敏捷なM子は平氣なもので、自分の手を引きながら、ズン／＼群衆の中へ割つて這入り、どうやら道を造つて、到頭汽船の甲板に上りあり合ふ疊椅子を捜出して腰を下した。

汽船は五分ほどして纜を解いた。波止場の上に往來して居る女の衣服が遠く花園の花の如く見える頃になると、ハドソン河口の偉大な光景が遺憾なく眼前に開展せられる。緑々たる夏の空高く聳ゆる紐育の高い建物を中心として、右の方にはハドソン河を隔て、煤烟雲と棚曳くニューゼルシーの市街を眺め、左の方には世界の港灣から集來る幾多の汽船が自由に其の下を往來して居るブルックリンの大橋、續いてブルックリンの市街。而して此の恐るべく驚くべき平和の戦場をば唯一の目に見下して居るのは、片手に鉾を差上げて港外遙かの海上に立つ自由の女神像である。

自分は今まで此の様な威儀犯すべからざる銅像を見た事は無い。覺えず知らず身を其の足下に抛つて拜伏したい様な氣がするのである。この深い感動は全く銅像建設の第一義とも云ふべき其の位置の宜しきが故に外ならぬ。何れの

返さるゝを心付かぬものこそ幸ひなれ。今日も明日も同じき動物に車引かせ同じき空の下同じき地平線の前同じき家具に身を取り巻かせ同じき態して同じき勤めする力あるものこそ幸ひなれ。堪へがたき憎しみにて世は何事の變るなく何事の來るなく、凡て之れ懶く勞れたるを見破らぬこそあゝ幸ひなれや……と云つて居るではないか。されば、饑ゑたるものゝ食を求むる如く、此の變化なき人生の事件を知らうとするアメリカ人の如きは最も幸福と云ふべき者であらう。

汽車は休まず湖水の波濤を走つて居る。何となく新橋品川のあたりを過ぐる心持がすると思ふ間もなく最後の停車場に着するや、車中の一同は皆忙し氣に席から立つ。ジェームスは此處がバンビュロンの停車場で市俄古中最も繁華な商業地への這入口だと教へて呉れた。

汽車から溢れ出る無数の男女は互に肩を摩り合はせぬばかりに、ゾロ／＼とブラットフォイムから續いた頑丈な石橋を渡つて行く。見渡すと橋向うは數多の自動車が風の如くに往來して居るミシガン大通で、更に此處から西へ這入る幾條の大通には何れも二十階以上の高い建物が相競うて聳えてゐる。空は三月の常として

薄暗い上に左右から此等の高い建物に光線を遮られてゐるので、大通の間々は塵とも烟ともつかぬまるで闇の様な黒いものが渦巻く動いて居る。そして今しも石橋を渡り盡した無數の男女の姿は吞まれる如く、見る／＼中にこの闇の中——市俄古なる闇の中に見えなくなつて了ふのであつた。

自分は非常な恐怖の念に打たれた。同時に是非を問ふ暇もなく自分も文明破壊者の一人に加盟したい念が矢の如く濃り起つて來た。

正直な日本の農民は首府の東京を見物してその繁華（若し云ひ得べくんばに驚くと共に、無上の賞讃と尊敬を土産に元の藝家に歸るのだが、一度時代の思潮に觸れた青年は見るに從ひ聞くに從ひ及びも付かぬ種々な空想に驅られる思ふ。自分は歩む事も忘れて石橋の上に佇んで居ると、ジェームスは何と思つたか微笑みながら振向いて、

「Great City!」と自分に質問するらしく云掛けたので、

「Ah! magnificent」と自分は答へた——何と形容しようか、矢張人々の能く云ふ通り怪物とより外に云ひ方はあるまい。

ジェームスは前面のミシガン大通に聳えた建

物を指さして、あれはアンネキスと云ふ旅館、その隣がオーデトリヤムと云ふ劇場、遠くの彼れは卸賣の計文を取り引する會社の塔である。これは何、あれは何、と一つ／＼説明して呉れた、まだ少し時間もあるからマーシャル・フヒールドと云ふ大商店（案内しよう）と云つた。

「市俄古で一番、紐育でも那樣大きな商店はない。だから世界一と云つても可いです。女ばかりでも七百八人から働いて居ますからな。」

ジェームスの話は恐らく虚言ではなからう。此の商店を見物する事は市俄古を通る旅人の殆ど義務と云つても可い様になつて居るのである。衣服家具小間物靴化粧品など所有の日用品を商ふ店で、市中目抜きのレストラン・ストリート（角）に城廓の如く聳えて居る。自分は群集の中を通り抜けエレヴェーターに乗つて二十階近くある其の最絶頂に上り、磨き立てた眞鍮の欄干に凭れて下を覗いて見た。

建物は丁度大きな筒の様に、中央は空洞をなし、最絶頂の硝子天井から進み入る光線は最下層の床の上まで落ちる様になつて居るので、出入の人々が最下層の石壁の上を歩行して居る様を何百尺の眞上から一目に見下す奇觀！男も女も漸く抑指程の大きさもなく、兩腕

念と、我と我存在を嬉しく思ふ事はない。科學者ならぬ無氣の少女は野に咲く花を唯だ美しいとばかり毒舌なるや否やを知らぬと等しく道學者警察官ならぬ自分は、幸にして肉體の奥に隠された人の心の善惡を洞察する力を持たぬので美しい男、美しい女の歩む處、笑ふ處、樂しむ處は、凡て理想の天國であるが如く思はれる。ましてや、此の夏の海邊は冬の都の劇場舞踏場の如く、衣服と寶石の花咲く暖室では無く、赤裸々たる雪の肌、薰る里であるをや。

男は身輕なジャケツトに麥藁帽子、女は眞白な日傘に帽子を冠らず渦巻く金髪や黒髪的光澤を誇り、短い袴の裾から、皺一ツ無い絹の御足袋に愛らしい小形の靴を見せ、胸さへ透見える様な薄い上衣の袖は二の腕までも捲り上げ腰を振り肩で調子を取りながら、輝く日光の中を歩む様、恰も空飛ぶ鳥の様である。

自分は西洋婦人の肉體美を賞讃する一人である。その曲綯美の著しい腰、表情に富んだ眼、彫像の様な滑かな肩、豊かな腕、廣い胸から、踵の高い小な靴を穿いた足までを愛するばかりか、彼等の化粧法の巧妙なる流行の選擇の機敏なるに、無上の敬意を拂つて居る一人である。

ある。彼等は其の毛髪の色合、顔立、身體付によつて、各巧に衣服の色合や形を選び、十人並の容貌も、能くその以上に男の眼を引くやうにする。翻つて日本兒女の態を見れば彼等は全く此の般の能力を缺いて居る様に見えるでは無いか。尤も日本人と云へば非難と干渉の國民であるから此の社會に養成された纖弱い女性性は恐れ縮まつて思ふ様に其の天賦の姿を飾り得ないのかも知れない。

電車はアシベリイ・パークの海邊に臨む町の四辻に停つた。

茫々たる大西洋を前に四五軒並んで居る高い木造り旅館の縁側、辻の角の藥種屋、波の上に築き出した散歩場、何れも男や女で一杯になつて居る。其の眞白な衣服と日傘は青い空と海の色とに相映じて云はれぬ快感を與へるのである。

自分はM子と共に散歩場の階段から海邊の砂地に下り、何處か着す家はあるまいかと其の邊を見廻したが、不思議や人は大勢波隙を散歩して居ながら游泳するものは一人も無い。衣服を脱ぐべき小家は皆な戸を閉して居る。

「別に海が荒れて居る譯でもないのに、如何したのであらう？」

M子は暫くの間不審さうに四邊の様子を眺めて居たが、忽ち思付いて、

「日曜日だからだ。」といった。

米國では土地によると、宗教上の關係から日曜日には凡ての遊戲を禁制する所がある。アシベリイ・パークも怒る例の一つであつたのだ。

此の州の或町に行くと、日曜日には一切船遊びを禁じながら馬車や自動車を馳らす事を許して居る滑稽な矛盾を見た事もあるとM子はやがて自分に話した。

二人は少時砂の上に腰を下し雲のみ浮ぶ無限の大洋に對して居たが、軀て再び散歩場に出て、レモン水の一杯に渴いた咽喉を濕した後、先刻上陸したアレザント・ペーの公園に戻り、歸りし汽船の出帆するまで一睡を試みる事にして走せ来る電車に飛び乗つた。

公園の入口に下車すると直様二人は水邊の木



美術にしても所謂アクセソリーなるものを無視しては美術の効果を全からしむる事は出来ないが殊に銅像記念碑等について自分は此の感を深くする。人は木の葉に等しい船よりして、彼方に平民國の大都府を望みつゝ渺茫たる大西洋上に此の巨像を仰いだなら、誰とて一種の感慨に打たれざるを得まい。この銅像は新大陸の代表者、新思想の説明者であると同時に、金城鐵壁の要塞よりも更に強力な米國精神の保護者である。自分は此の銅像が佛蘭西より寄贈されたものである事を聞いて居るが、其の非設者なる一美術家の力を思へば、あゝ、神にも等しいではないか。

自分等を載せた汽船は一度は遠く海岸の景色も見分かれほど、廣い沖合に出たが、颯々再び静な陸地に沿うて進んだ。晴れ渡つた青空に満ちた明け夏の日光は水平線上に浮ぶ眞白な雲の峯平な流水、枝も重氣に茂つて居る海岸の樹木を照して、雲の白さ、水の藍色、木葉の緑に、云はれぬ愉快な光澤を與へて居る。見渡すと沿岸は一帯に牧場にでもなつて居るらしい低地続きで、水面には處々に、高く茂つた蘆荻の洲

が現れ、其の蔭をば眞白な輕舟の帆が走つて行く。鵜の群が花の散る様に飛ぶ。自分は此う云ふ水彩畫その儘の小山水を、偶然無名の里に見出した嬉しさ。世界に知れ渡つた名所古跡に遊ぶの比では無い。

去年自分は落磯山を越え、またナイアガラ瀑布を過ぎた折、この世界の奇蹟も豫想した程には自分の心を動かさなかつたが、それに反してミズリ州の落葉の村、ミシガン州の果樹園の夕暮に忘れられぬ詩興を催され漫に感じた事がある——およそ造化の巧を集めたそれ等の名山靈水は久しい間世の人に驚かれ敬はれて居る事。若しミルトンが失樂園ダンテが神曲にも譬へ得べくば、彼の名も無き村落の夕暮の景色は正に無名詩人が失戀の詩とも云ふべき興。トルストイはベトウヴェンの音楽よりも農奴が夕の歌に動かされ、ジョージ・エリオットは古代の名畫よりも小さな和蘭畫を愛したと云へば、自分が常に博士や學者が考究の玩弄物になつて居るクラシックの雄篇大作よりも、ツルゲネフ、モーパッサンの小篇に幾多の興を覺ゆる事、獨り遊學の故とのみ限られはせまい。

汽船は二三箇所狭い海水浴場の波止場に立ち寄り、午後一時過ぎアレザンダー・ペーと云ふ同じ夏場に到着した。水際一帯の低地は公園になつて居て、小さい音樂堂料理屋、玉場などが樹の蔭に散在して居る。此處から電車に乗つて一時間あまり、目的のアシベリー・パークに到るまでの沿道には盡く夏のホテル夏の貸別荘と、木立の涼しい牧場とが入替り立替り續いて居る。

小庭の楓に網床を吊し身を長々と横へて小説を讀んで居る若い姉妹、縁滴る縁側に安樂椅子を並べて往來を眺めながら樂し氣に語り合つて居る若い夫婦、牧場から野の花を摘んで鐵の垣根道を歸つて来る若い戀人同士、手を引合ひ唱歌を歌つて走廻つて居る小娘の幾群、花園を前にした門の月口に其の友を訪れる美少年の幾群、到る處愉快な笑ひ聲と語聲、口笛とピアノの響。

あゝ、此の晴れ渡つた明け夏の日、爽快な海の風吹く水村は世の夢を見盡した老人の隱處では無く青春の男女が青春の娛樂青春の安逸青春の癡夢に酔ひ狂すべき溫柔郷である。

自分は走行く電車の上から幾人かと數へ盡されぬ程多くの美人多くの美男子を見た。自分は美人美男子を見る時程、現世に對する愛着の

アラビヤの女と駱駝を並べて砂漠を歩み、天幕の下に眠つて見たらば如何であらう、かと思ふと、忽ち旅で病にかかり日光の照さぬ奥町の宿屋に倒れる様な運命に出逢つたら、今度は覺えず惺然として明日にも日本に歸り度いやうな、極端から極端の事に思を走せ、遂には氣被れして其のまゝ迷惑の夢に落ちて了ふのである。

異郷の書の夢。單調な我が生涯に嘗て経験した事の無い盡きせぬ情味を添へて呉れたものは實に此の書の夢である。今日も又無く大西洋の潮流れ入るプレザント・ベアの邊に臥して、自分は夢の中に忽ち美妙の音楽を聞きつけハツと目を覺した。公園の端の料理屋で樂隊が何やら静かなクラシックの一曲を奏し出したのである。

然し、自分は猶暫く睡後の意識の朦朧として居る處から眼前の入江から森、雲までを、最う十年も過ぎた遊遊の地を望む如き心持で、何とは無しにしげ／＼眺め入つたが、やがて後の方に近く聲音を聞き付けたので振向くとM君であつた。彼も今方目を覺して、歸りの汽船の時間を

開きに波止場まで行つて來たのだと云ふ。二人は木屐を出で音楽を奏して居る公園の料理屋に入り冷した果物と生薑酒に咽喉を潤した後、夕の五時過に船に乗つた。

途中で日は落ちたので、大西洋上に燃る夕榮の美しきを見盡し、徐ろに紐育の港口に近づく頃には、逸早くかの自由の女神像の高く差上げた手先に、皎々たる燈明の輝き初めるのを認めた。續いて夕波高く漲る彼方に、山脈の様に空を限る紐育の建物、ブルックリンの橋上、無數の硫汽船引つゞく波止場々々々の燈火の一齊に煌き渡るさま、日の中に眺めた景色よりも更に美しく更に意味深く見えるのである。

汽船の波止場についた時は丁度八時、二人は晚餐を準備する爲め、夜は殊に賑ふ十四丁目通りの唯有る佛蘭西の料理屋に這入つた。

(明治三十八年七月)

## 夜半の酒場

紐育市役所の廣場を前にして、何時も人馬の雜沓するブルックリン大橋の入口から高架鐵

道の通つて居る第三大通を四五町ほど行くと、チャタム・スクエヤーと云つて、此處から左へ這入れば猶太街、右手に曲れば支那街から、續いて伊太利街へと下りられる廣い汚い四辻に出る。

一口にボアリーと稱して、此の界限は各國の移住民や労働者の群集する貧民窟で、同じ紐育の市内ではありながら新世界の大都會を代表すべき「西側」からは自と一劃の別天地。彼方は成功者の安息地であるならば、この「東側」の別天地は未成功者もしくは失敗者の隠れ場所であらう。

されば路行く人も地下鐵道の車中で互に衣服の美を爭ふ、西側「とは事變り、女は帽子も戴かず、汚れた肩掛を頭から被り、口一杯に物を頬張りながら歩く。男は雨曝しの帽子に襟もななく、破けた下褌衣から胸毛を見せ、ズボンのポケットには焼酎の小壺を突込んで處嫌はず真い噴煙の煙を吐き捨てて行く。

で、歩道の面は此等の人々の痰唾でぬるぬるして居る上に、得體の知れぬ怪し氣な紙屑やら、襤褸片やら、時としては破れた女の靴足袋が腐つた蛇の死骸見たやうにだらりと積はつて居る事さへある。車道は何處も石を敷いてあるが

蔭に歩み寄り柔かい青草の上に腰を下す。見渡す眼の前の景色は白い夏雲の影を映した平かな入江を隔て、夏木立の低く茂る間から農家の屋根や風車。まるで平和な陶畫を見るときか思はれぬ。

自分は無暗と幸福の念に打たれ、半ば身を草の上に横へながら、更に眼を静な水の上に注ぐと、湖水に等しい入江の唯中に一葉の真白な小舟が飄然として中空から舞下りたローヘンゲリンの白鳥かとも怪しまれた。然し乗手は若い女と男の二人ぎりらしく、男は其の強い腕に力を籠めて漕ぎ行くと見え、舟は見る／＼中に一方に突出た蘆の洲の茂りの蔭に隠れて了つた。

自分はハタと草の上に倒れ全く寢床の上に臥る様に身を伏せると自分の眼の高さは丁度水の面と並行する様になるので、満々たる潮は忽ち身を浸す様に思はれ、青い楓の葉越に見え夏空は平常よりも更に高く、更に廣く見えながら、懶く動く白雲は其に反して次第々々に我身を包むべく下りて来るやうに思はれた。颯々四邊は模糊として霧の中に隠れるが如く、折々水面を渡つて来る微風の静に面を撫でて行くのを感ずるばかり、身體中は骨も肉も皆溶けて氣體となり残るものは唯だ細の様な何事も感じ易い

繊細な皮膚ばかりとなつて、遂に満々たる水と悠々たる雲の間に自分は魚よりも鳥よりも輕くふは／＼浮び出した：あゝ白日の夢！故郷に在る頃自分は紅の花咲く小庭を前にして風鈴の音動く夏の小座敷、さては絃歌の遠く聞ゆる水樓の午睡をば風流の最上であるが如くに愛して居たが、然し一度旅に出てこの廣漠たる異郷の空の下繁茂した野草の中に横はる時の情味の彌深き、全く言葉に云ひ盡し難きものがある。

ミシガン州の片田舎に滞在して居た頃、丁度五月の末であつた。楓、楡、榉などの大樹の若葉は鸛若として村落を包み、野草は葉々として牧場を蔽ひ、林檎、桃、櫻の花は小丘を攀づる果樹園に、紫色のライラック、眞白な雪球花、紅の薔薇は人家の小庭に咲き亂るゝ北國の春の半。南方から春夏を此地に集ひ来る駒鳥と黒鳥は庭と云はず菜場と云はず街と云はず村と云はず、樹のある處、花咲く處には、聲を限りに軽閑な歌を歌ひ続ける。然し大陸の常として日和続きの日中は、日本ならば最う七月の暑かとも思はれる強い日の光に、自分は狭い居室の氣を喘らす爲め、村はづれから起伏する小丘の間を、鐵道の線路に添ひ、次第々々に人

無き櫛の深林に迷ひ入り、白い雛菊や黄金色なすバタカツプスの咲き亂るゝ野草の中に身を投入れると、幾多の栗鼠は物音に驚いて、草の中を四方に逃げ散り遑早く櫛の杓から杓を渡つてキ、と鳴く。

一卷の詩集は例の如く衣袋の中に携へて居るもの、奇しき自然の前に對しては、如何なる美術も如何なる詩篇も、要するに怪異と誇張と時には全く虚偽としか見えぬので、最う日本人工のものには手を觸るゝ氣もせぬ。思ふが儘に身を延して、高い梢越の空を仰ぎ、濕つた土と草の香を嗅ぎつゝ、鳥の歌、栗鼠の叫びに耳を澄まして居ると、自分は全く世間を見捨てた或は世間から見捨てられた様な氣になる。日本であるが随分遠い山里に行つても、土地は多く開拓され盡して居るので、何となく浮世の風の通つて居る氣がするけれども、さすがは新大陸の廣漠たる、町から二哩出るならば、何處へ行つても此うぶ無人の境が現れ、此れに異郷の海突と云ふ主觀的情趣を加味して見ると、樹木の茂り、水の流、空行く雲の有様は、凡て自分には一種云ひ難い悲愁の美を感じさせる。空想は泉の如く湧起り自分は放浪の生活の冷い快味を思ふにつけ、一層の事



様に舞ひ踊るさま、自分は已に浅間しいと云ふ  
嫌惡の境を通越して了つて何とも云ひがたい  
一種の悲痛——嘗て故郷で暗い根岸の里あたり  
から遠い遊廓の絃歌を聞いた時の様なら、その悲  
痛を感じるのであつた。

舞踏の曲は止んだ、男女は各元のテーブル  
に歸ると白いジャケットを着た給仕人が、註文  
を聞いて廻る。最う腰も立たぬ程に酔つて居な  
がら、猶ウイスキーを呷る水兵もあれば、女な  
がらに其に劣らず強いパンチをがぶぐやりな  
がら、時にはテーブルを叩いて大聲に云罵るの  
を聞けば、凡そ英語で劣等な中にも劣等なる言  
語スエヤの數々。

自分は片隅のテーブルに一人ビールを傾けつ  
つこの奇異なる四邊の光景から、醜て汚れた板  
張の壁に掛けてある額などを眺め廻した。

大方フットボールを營業にして居る女の組  
と覺しく、逞しい筋肉を其のまゝ見せた肉體の  
四五人が手を取り合つて立つて居る一枚の寫  
眞に續いては、鬼のやうな顔をした拳闘家が兩  
手を前にいざと身構へして居る肖像畫があり、  
向側の壁には察する處此の近邊を艦艇内にし  
て居るものであらうか、制服を着けた消防夫の  
寫眞が二三枚並べて掛けてある。

忽然二人連の女が自分の占めて居るテー  
ブルの空椅子に腰を掛けた。自分は好奇心の誘ふ  
儘に此の社會に限つて通用する合圖の目瞬きを  
爲て見ると、金にさへ成ると見れば人種の差  
別などは一向に頓着しない連中と見えて、早速  
椅子を自分の方へびつたり引寄せたばかりか、  
其の片腕を自分の肩の上に頬杖をして、「巻煙草  
は無くツて？」と云ふ。

自分は一本の巻煙草を渡した後通過る給仕人  
を呼ぶと、女はコックテールをを命じた。自分  
は更にビールの一盞を新しくさせて、さていろ  
いと冗談話の中から此の人達の身の上を聞  
出さうと絶えず注意したが、一向に要領を得  
ない。

「名前も何にも有りやアしない。只だキッチン  
……黒髪のカッチーで云へば、それで通つて居  
るんだよ。」

「家は何處だい？」

「家は……細育でもブルックリンでも旅館屋  
と云ふ旅館屋は皆な私の家さ。」

「色男はあるのかね。」と聞くと、

「ほゝゝゝ、ほ。」と笑ひ出して、「お金のある奴は  
皆な色男……。」と云ひながら突然、自分の頬に  
接吻した後頭から肩を左右に拂りながら――

will you love me in December, as you do in  
May —— と鼻歌を歌ひ出した。

折から又もやピアノとワイオリン、連中は以  
前の如くに踊り出す。

女は突と握つて居る私の手を引寄せ、「今夜  
……いゝんでせう」と

「何が……」と慇と不審さうに聞返すと女は甚

く不興な顔付になつて、

「分つてるぢや無いか……ホテルさ。」

自分は微笑んだ儘答へなかつた。

「不可ないの。さう……。」と云つて女は一寸

兩肩を揺上げて横を向いたかと思ふと、忽ち

舞踏の音楽に合はせて再び鼻歌を續ける。

自分は呆れて少時は其の様子を打目成つた

が、する中に女は遠くのテーブルから目瞬せす

る水夫の連中を見つけて、自分の方には挨拶も

せず、其の儘すた／＼立去つて又もウイスキー

を呷つて居る。

自分も醜て席を立ちかけた途端、彼方の戸口

からホールへ這入つて來た二人連の音楽師があ  
る。

「おゝ、ジョージだ。イタリアン、ジョージだ！」

と給仕人の一人が乞食の音楽師を見て叫ぶと其

の邊のテーブルに居た地廻りらしい男が、

重い荷車の車輪で散々に曳き崩され、乾く間の  
ない荷馬の小使は其の四みく／＼に溜つて蒼黒く  
濁り淀んで居る。

街の兩側に物賣る店の種々あるが中に、西  
洋にも此様のものがあるかと驚かれるのは電氣仕  
掛けに痛みなく文身仕り候——と硝子戸に看  
板を掛けた文身師の店である。其處此處と殆ど  
門並目に付くのは如何はしい寶石屋と古衣屋と  
で、其の薄暗い帳場の蔭から背の屈つた猶太  
の爺が、キヨロ／＼眼で世間を眺めて居るか  
と思へば、大道の食物店に伊太利の婆が青蠅の  
ぶん／＼云ふ中を欲徳無さうに居眠りして居  
る。

此様工合に、何處を眺めても引續く家屋から  
人の衣服から、目に入るものは一齊に暗鬱な色  
彩ばかり。空氣は何時も露店で煮る肉の匂、人  
の汗、其の他云はれぬ汚物の臭氣を帯びて、重  
く濁つて、人の胸を壓迫する。で、一度此の界  
限へ足を踏入れると、人生の榮華とか歡樂とか  
云ふ觀念は全く消滅して了つて、胸は只だ重  
苦しい惡夢にでも襲れて居る様な心地になるの  
である。

或時——冬の夜の事である。自分は猶太町に  
在る猶太の芝居を見物した歸りぶら／＼此の邊

を歩いて見た。もう十二時過ぎと見えて、例の  
古衣屋も寶石屋も、その他の店も皆燈を消して  
居て、街の角々にある酒場ばかりが今こそと云  
はぬばかり、時を得顔に電燈を輝かして居た。

自分は突と戸を叩いて這入ると、カウンタ  
ーに身を寄せながら労働者の一群が各／＼コップを  
片手に高聲で話合つて居たが、ふと自分の耳に  
付いたのは、奥深い彼方から幽に聞える破れビ  
アノに女の騒ぐ聲々。で、其の儘、突當りの戸  
を押試みると身は流るゝ如く扉と共に眞暗な  
廊下へと滑り込んだ。

女の笑ふ聲は更に五六歩先なる戸の中と覺し  
いので、自分は應ぜずに進んで此の二番目の戸  
口へ近寄ると蹺音を聞き付けてか、此の度は内  
から戸を開けて呉れたものがある。鍵穴から見  
張をして居た番人で、自分が這入ると再び戸を  
ぱつたり閉めた。

外部から此様處に此様廣いホールが有らうと  
は誰あつて思ひ付かう。室の周囲の壁に近寄  
て、數多の食卓と椅子を据ゑ、其の片隅には古  
い大きなピアノが一臺、胴着一枚になつて汚れ

た襯衣から腕を見せた大男が折々片手で汗を拭  
きながら、此のピアノを鳴して居ると、その側  
に坐つて居る瘦せた背嚢の男が青白い横顔を見

せながらワイオリンを弾く。食卓の男女は、一  
組二組と立つて室中を迂曲り／＼舞歩いて居る  
ではないか。

何れを見ても此れはと思ふ風采のものは一人  
もない。太いズボンの水兵連中に交つて、中に  
はせい／＼美装したつもりで、汚れぬ襟に襟  
飾を付けて居るものもあるが、子供の腕よりも  
太さうな其の指と、馬の蹄見た様な厚底の靴と  
で、日中は道普請をしたり煉瓦を運んだり爲て  
居る輩である事が直ぐ分る。

女はと見れば、人間らしい處は少く、年齢  
の多少も分り兼ねるものばかり。白粉をば顔中こ  
てこて塗立てた上に頬へ紅をさしたばかりか、  
中には下腿へ墨を入れて居るものもある。最う  
着古して皺だらけになつたスカートの、洗晒  
しの夏物を着て居ながらも、尚都の華奢を學ぶ  
心か舞臺にでも出さうな踵の高い細い靴を穿  
き、髪を冠つた様に入毛をした髪の間や、頸、  
腕、指などには、無暗と硝子製のダイヤモンド  
を輝して居る。

ピアノとワイオリンの奏樂進むにつれて、是  
れ等の女と抱き合ひながら、水兵や労働者の入  
りつ／＼亂れつ、床の塵と煙草の煙と酒の匂とで  
電燈の光も黄く朦朧となつて居る中を狂する

い。九月の午過の埤へがたい程暑く、人はまだ夏が去り切らぬのかと噂つて居る中、其の夜ふけ露の重さに、柳や榆や菩提樹や殊に碧梧のやうな樹の大きな葉は夏のまゝなるはの色さへ變へずして、風もないのにばさり／＼と重さうに慄氣に散り落ちる。

自分は四邊がすつかり秋らしくなつて、朝夕の身にしむ風に枯れ黄ばんで雨の如く葉が落葉を見るよりも、如何に深い物哀れに打たれるであらう。譯もなく早然した天才の滅び行くのを見るやうな氣がする。

自分は夕暮に一人、セントラル・パークの池のほとりのベンチに腰をかけた。日曜日の雑沓に引變へて平常の日の静けさ。殊に丁度今頃は時間の正しい國の事として何處の家でも晩餐をして居る時分であらう。馬車自動車に無論、散歩の人の聲も絶えて、最後の餌をあさり了つた栗鼠の鳴く聲が杳に高く聞えるばかり、灰色に曇つた空は夜にもなれば雨か。夢見る如くどんよりと重く暮れはてゝ行く。湖のやうな廣い池の面が黒く鉛のやうに輝き、岸邊一帯を蔽ふ繁りは次第々々に臙になつて、その間からは黄い瓦斯燈が瞬きはじめた。絶えずあたりの高い榆の木の間からは細い木

の葉が三四枚五六枚づつ一團になつて落ちて来る。耳を澄ますと木の葉が木の葉の間を滑り落ちて来るその響が聞きとれるやうに思はれる。木の葉同士が互に落滅を誘ひ囁き合ふのであらう。

或るものは自分の帽子、肩、膝の上。あるものは風が誘ふでもないのに、遠く水の上に舞ひ落ち流れと共に猶も遠くへ遠くへ行つて了ふ。

ベンチの背に頬杖をついて自分は何やら耽る物思ひの中に、ふと詩人ヴェルレーンが秋の歌にと云ふのを思ひ出した。

Les frangins longs

Des violons

De l'autonne

Blessent mon cœur

D'une langue

Muette.

Tout suffoquant

Et blême, quand

S'en va, Pleure,

Je me souviens

Les jours anciens,  
Et je pleure

Et je m'en vais

Au vent mauvais

Qui m'empête

Degui, déjà

Pareil à la

Feuille morte.

一季の胡弓の咽び泣く物憂き響きわが胸を破る。鐘鳴れば、われ色青ざめて、吐く息重く、過し昔を思出でて泣く。薄倅の風に運ばれて、こゝかしこ、われは彷徨ふ落葉かな。と人の身を落葉に比ぶる例は新しからぬだけ、いつも身にしむ思ひである。殊に今旅の身の上を思出せば、あゝ自分は早や何處に何處異郷の地に埋るゝ落葉を眺めたであらう。

上陸したその年の秋を太平洋の沿岸に、其の翌年はミゾリの野ミシガンの湖邊ヌワシントンの街頭に、やがてこのニューヨークの落葉も今が丁度二度目である。

去年初めてこの都會の落葉を見た頃には、自分は如何に傲慢で得意で幸福であつたらう。自



「暫く姿を見せなかつたぢや無えか? い、儲口でも有ったのか。」

「何さ、大した事も無えが、暫く田舎を歩いて居た……」とその儘、ピアノの傍に進寄つて空椅子に腰を掛け、頭から纏掛したバンジョーと云ふ樂器を取下して卓に倚せ掛けると他の一人は小形のマンドリンをば膝の上に抱へたまゝで、

「どうだね、親方……」と此度は此方からピアノ彈に挨拶をする。

「相變らずよ。」と胴着一枚に腕巻りのピアノ彈は鐵腹れた聲で、「どうだ、まア一杯やりねえ。」給仕人がビールを近くのテーブルに持運ぶ。

「ありがてえ、頂かうよ。」と二人の伊太利人は早速飲十すと洋琴彈は如何にも親方然と「お禮にや及ばねえ。好隣梅にお客様も大勢だ……早速いつもの咽歌を聞かしねえ。」

伊太利人は、各バンジョーとマンドリンとを取り上げ、ピアノの横へ直立し、さて歌ひ出すのは我々には意味の分らぬ南歐の俗歌である。

然し涙の節は東洋風に極く緩かで、聲は鈍のある顔ひを帯びた何處にか一種の輕い悲みを含んで居る。泥酔した水夫も女郎も職人も丁度

廓で新内を聞くといふた様に、皆な恍惚として少時は場中水を打つたやう。

彼方此方から五仙十仙と、祝儀の銀貨が床の上に投出されるので、自分もポケットから廿五仙貨を食發した。

いや、自分は四邊の目目を牽く事さへ厭はなかつたなら五十仙、一弗位は惜みは爲なかつたのだ。あの多く母音で終る伊太利語そのものが、自分の耳には云ひがたく快いの、乞食の音樂師がゆがんだ帽子に天鵝絨の破衣、眞赤な更紗模様のハンケチを頸に巻いた風體から、房々と額へ垂らした黒い縮れた頭髮、黒い睫毛、薄い口髭、それから南歐の暑い太陽に焼かれた其の顔色が絶えず思ひを兩國に馳せて居る自分には何と云ふ譯もなく深い詩興を呼び起させたからである。

二人は歌ひ了つて床の上を四方に投出された祝儀の銀貨を拾ひ集めて、やがて自分のテーブル近くまで來たので自分は好い機會と、

「お前さん、伊太利は何處から來たんだね。」彼は人種の異つて居る自分の顔を見上げたが驚きもせず、怪し氣な英語で、

「鳥からシ、リーの鳥からです。」  
「何年ばかりに成る。」

「まだ、ヤツと九ヶ月にしか成りませんや。初めは金儲をするつもりで來たんですがね、生れついでに道樂者なんで、酒と賭博の外にはバンジョーを抱へて歌ふのが何よりも好きだ。北の歐羅巴から出づきに來た奴等のやうに地の底や火の中で、様手ひどい家業が出来るものか、怠惰者は何處へ行つても同じ事、慙して處々方々、鳥見たやうに歌つて歩いて居るんでさ。でもまあ神様のお助けでぶふんでせう、どうにか此うにか其の日のパンにや有り付きまさら。」

無蹈の音樂が又奏し出される。男や女は再び夢の世の人の如くに煙草の煙の中を、彼方此方と舞ひ歩く。

すつかり祝儀を拾ひ集めた二人の伊太利人は片隅のテーブルに引退いて又二三杯のビール。

自分は重い空氣の中に長く閉込められて居た苦しさに冷い深夜の風に吹かれようと靜に席を立つた。  
(明治三十九年七月)

## 落葉

アメリカの木は葉ほど秋に脆いものはあるま

著作をする。それを讀んだ女が作者の面影を慕つて訪ねて来る。人生を語る、詩を語る、遂には互に秘密をかたる。何時か自分は結婚してゐる、ロングアイランドか、ニューゼルシーの海邊あたり、ニューヨークからは汽車で一二時間位で往來の出来る田舎に家庭を作る。小さいペンキ塗の村莊で、そのまはりには櫻や林檎の果樹園があり、裏手の森を抜ければひろくした牧場から、ずつと遙かに海が見える。自分は春や夏の午後、秋の日暮前、冬の眞晝など、窓際の長椅子に身を横へて、讀書につかれたまま、居眠むともなく居眠む。と、隣の室からは極く緩かなリッストのソナタのやうなものが可い。妻の弾するピアノの曲にはつと目覺むれば……自分はこゝに初めて夕暮の冷たい風に面を吹かれてベンチの上なる現實の我れに立返るのであつた。

かやうな夢に耽つた春の日も一夏を過ぎて……今は早や秋、飛散る木の葉を見ればさながら失へる戀の昔を思ふにひとしい。

木葉もやがて落ち盡すであらう。寒い北風と共に劇界樂界の時節も再び廻つて来よう。街の辻々停車場の壁は到る處劇場の廣告畫や音樂者の肖像に飾られるであらう。然し自分は去

年の様に大膽な無法な幸福な劇場の觀察者として存在する事が出来るであらうか。また来る春には再びかゝる煙の様な夢に酔ふ事が出来るであらうか。

夢、酔、幻、これ、吾等の生命である。吾等は絶えず、戀を思ひ、成功を夢みて居るが然し、決してそれ等の實現される事を望んで居るのではない。唯だ實現されるらしく見える空なる影を追うて、その豫想と豫期とに酔つて居たのである。

ボードレールは云ふ。——酔ふ、これが唯一の問題である。人の肩を腰へて地に屈ませようとする「時」と云ふ恐しい荷の重さを感じまいとすれば、人は躊躇する事なく酔つて居ねばならぬ。酒、詩、徳、何でもよい。若し、宮殿の階段、谷間の草の上、或は淋しい室の中、時として、酔が覺めてわれに返る事があつたら、風、波、星、鳥、又時計、凡そ飛び、動き、廻り、歌ひ、語る諸有るものに向つて、今は如何なる時かと問ふがよい。風は、波は、星は、鳥は、時計は答へるであらう、酔ふべき時だ、酒でも、詩でも、美徳でも、何でもよい、もし時と云ふものゝ痛しい奴隷になるまいとすれば、絶ゆる間なく酔うて居ねばならない……。

四邊は早や夜である。森は暗く空は暗く水は暗い。自分は猶もベンチを去らず木間に輝く電燈の火影に頻と飛び散る木の葉の影を眺めて居た。

(明治三十九年十月)

## 夜の女

ブロードウエーの四十二丁目と云へば、高き塔の如くに聳ゆるタイムズ新聞社の建物を中心にして、大小の劇場、ホテル、料理屋、俱樂部から、酒場、玉場、カッフェなんぞ、夜を徹して人の遊び歩く處である。されば又人並の遊びには猶物足らぬ人間の更に耽つて遊びに行く處も尠くは無い。

ニューヨーク座と云つて何時も木戸口に肉橋絆などきた、麗しい踊娘の看板を幾枚も出し相當の劇場が休業する炎暑の時節にも大人で打通す例になつて居る小歩居の角を曲ると俄に寂とした横町に出る。

即ちブロードウエーから高架鐵道の走つて居

分は新大陸の各地方の異なる社會異なる自然をつかり見盡して丁つたつもりで、これからは世界第二の都會の生活を觀察するのだと、無意味に自分を信用して、日曜日に毎に、この池のほとりに來ては散歩の人の雜沓を打ち眺めた。

やがて、木の葉は落盡した、寒い風が枝を吹き折つた、雪が芝生を被ひ盡した——藝界社交の時節が到來した。

自分は、シェーキスピア、ラシーンからイブセン、ゾーデルマンに至る種々な舞臺を見て、世界古今のドラマを鷄呑みにした氣になつた。

ワグナーの理想もヴェルヂの技術も盡く味つて其の意を得たと信じたばかりか、自分は早くも將來日本の社會に起るべき新樂劇の基礎を作る一人である。あらねばならぬ様な心持がした。自分は管絃樂を聴いて、クラシック音樂の纖細美麗な處から、近代ロマンチックの自由なる熱情を味ひ、更に破天荒なるストラウスの音樂の不調和無形式を讀賣した。猶これのみに止まらず、折々は美術館の戸口を滑つてロダンの彫刻マナーの畫を論じた事もあつた。

自分の机はプログラムやカタログや切抜の新聞紙の山をなしたが、それをば整理して行く間もなく季節は過ぎて、淋しい梢は若葉と咲く花

に飾られ、重い外套の人は輕い春着の粧ひに變じた。自分も世間の人と同じやうに新しい衣服新しい半靴新しい中折帽を買つた。然しアメリカの流行は商業國だけあつて形が俗である。自分は飽くまで米國の實業主義に感化されないと云ふ事を見せたいばかりにいろいろ苦心した結果は、「戀の詩」を書いた時分の若いドーデーの肖像か、もしくは寧ろバイロンをまねたもののだと毎朝頭髮を繕らし太い襟かざりをばわざ

わざ無造作らしく結ぶのである。人は定めし自分の愚を笑ふであらうが、自分は決して愚とも狂とも思つては居らぬ。自分はかのイブセンが世を去つた當時、ボストンの或る新聞で見た事であるが……イブセンは眞白になつた頭髮をば一度も櫛を入れた事がないと云ふ様に、わざ／＼搔亂し、國王から贈られた勳章を胸にさけて鏡に向つて喜んだと云ふ意外の弱點があつたとやら。

庸言か眞か問ふ處ではない。よいも悪いも泰西詩人の事と云へば隨喜の涙に暮れるあまり、人眞似せずには居られない。自分はわざとこれ無造作らしく帽子を斜に冠り櫻の枝の枝を片手に詩集か何かを小脇にして、少しばかり己れの佇む姿をばちつと鏡に映して見入つた後、

漸く外に出て、春の午後人の出盛る公園に赴くのである。例の如く池のほとりを一廻り歩みれば、必ずシェーキスピア初めスコットやパインスなどの銅像の並んでゐる廣い竝木道に出てベンチに腰を下して、銅像と向合ひに悠然と煙草の煙を吹く。

すると、何時ともなく暖い春の日光に照される身のうつり夢心地になるや否や、自分も已にそれ等不朽の詩聖の列に加へられた様になつて了ふ。自然と口の端の筋肉が緩んで來て深い笑露がよる。遂には自分ながら妙に氣ま

りが悪くなつて、そつと身のまはりを見まはせば道の兩側に竝ぶ大樹の若葉の美しさ。その梢から透き見える大空の青さ、晴れやかさ。道の左右に海の如く廣がつて居る芝生の緑の濃さ、爽快さ、何處から流れて來るとも知れぬ花の香の優しさ懐かしさ。恐らく、自分の一生涯、この

時ほど幸福な事はなかつたであらう。眼の前には絶間なく輕裝した若い女が馬車を駈し馬に乗つて行過ぎるが、何れも皆自分の方を眺めては微笑んで行くとしか思はれない。

自分は若い中にも猶若く、美しい中にも猶美しい女の笑顔を眺めると、譯もなく幸福な戀を空想するのである……自分は麗しい英文で何か



の底に藏つてある——この有名な物語は家中の女ども知らぬものは一人もない。

往來に面した二階の一室が、女將の居間と寢部屋を兼ねた處で、天井から日本製の日傘と赤い鬼提灯とを下げ、戸口に近く矢張り日本製と覺しい黒地に金雞鳥を繙取つた二枚折の屏風が置いてあるの、それ等の花々しい東洋風の色彩が古びた礫石の煖爐と大な黄銅製の寢臺とに對して、一種驚くべき不調和を示して居る。

室の中央には何時も「ジャアナル」に「紐育プレス」と云ふ繪入の新聞を載せた小さいテーブル、其の上に立派な鸚鵡の籠が置いてある。中なる鸚鵡はこの家に住む事既に十年、此の社會でのみ使用される下賤な言語をすっかり聞き覚え、朝から晩まで棲木を啄いては黄い聲で叫びつづけて居ると、其の傍の安樂椅子の上にはトムと呼ぶ鼠ほどの小さな飼犬が耳を動かし、人の來て抱いて呉れるのを待つて居る。

女將は午後の一時期に漸く日を覺ますと、第一に此のトムを抱き上げて接吻し、鸚鵡の鳴き立てるのを叱りながら、黒奴の下女が持運ぶ朝餐を濟して、新聞を讀み、窓際に置いた植木の世話に半日を送つて、夕暮の六時になるのを待つて居る。此れからが漸く此の家の夜明けであ

る。下女が合圖の銅鑼を叩くや否や、女將はしづ／＼トムを抱いて、地下室の食堂に下り、仔細らしく主人席に坐ると、それからどや／＼と二階、三階、四階の部屋々々に寢て居た女共が、都足袋一つの襦袢の上に緩かなガウンを引纏はせ、何れも最う何時頃だらうと云ひさうな怪訝な眼をしながら下りて來て各席につく、其の同輩五人。

女將の右側に坐る第一がイリスと云ひ第二がブランチ、第三番目がルイズ、左側にはヘーゼルとジョゼフィン。

此の五人各それ相當の歴史と人格を持つて居るのである。

第一のイリスと云ふのはアイルランド人の血統で南部ケンタッキー州の生れとやら。年は二十三、四。圓顔で、この人種特徴の額は短く、瞳子の碧い目は小さく、髪は光澤のある金色である。撫肩の何處か弱々しい委をして居るが、腰から足の形の美しい事は自分ながらも大の自慢で、其の證據には二度程美術家のモデルになつた事があると云つて居る。家は地方で相當の財産家、十六七まではカソリック教の學校に居たとやら云ふ事で、折々飛んでも無い時に何を思出してか、口の中で讚美歌を歌つて居る事

がある。一體に浮かぬ性質と見えて男を相手に酒を呑んでも別に騒ぎはせず、さうかと云つて病氣や何かの時でも大して鬱いだ顔をした事がない。

これに反して、隣に坐つて居るブランチと云ふのは親も兄弟もなく、紐育の往來傍で夫と一緒に育つた生付いてのお轉婆者。もう三十になると云ふが極めて小柄な處から、其の瘦せた血色の悪い顔に厚化粧をして、人毛澤山の前髪に赤いリボンでも付けると、夜日には十六七の娘に化けてままと男を欺す。大の酒喰ひで而も手癖が悪く、お客の枕金を掠ねて鳥の監獄へ送られた事もあつたとやら。寄席へ出る藝人と辻馬車の馭者をして居る黒奴二人までを色男にして居ると云ふので、仲間ものからは白人種の感情から一層嫌惡されて居る。

さて三番目のルイズと云ふのは頭髮も眼も黒い小肥の巴里娘で、年はんかなりに成ると云ふが、本場の化粧法が上手な所爲か何時も若く見える。二年前、亞米利加は弗の國と聞いて情夫と一緒に出稼ぎに來たので、金になると云へば、何様事でも平氣で男の玩弄物になる。其代り自分の懷では酒一本買つた事が無いとて、此れも仲間から可くは云はれて居らぬ。



表の客間へ通した。

番頭らしい男はいく年をして此れも友達の義理だと云はぬばかり、いやに沖着きながら椅子に坐る前二座の女共を見渡したが、早くも髪人上りの若いジョゼフィンの姿を見るや、こいつ掘出物と忽ち恥を忘れ、自ら進寄つて同じ長椅子に坐り、「どうだ、一ツ三鞭酒と行かうか。」と膝の上に女の手を引寄せる。

他の地方出の三人は客間へ這入るや否や、正面に掛けた基督教徒迫害の大裸體畫——意外な處に意外な宗教畫を見出して膽を潰したらしく、一同竝んで椅子に付きながら美術館でも見物する様子で少時は畫面を見詰めたまゝ黙つて居る。その席に居た女は勿論次の客間から二人三人境の帷幕を片寄せて進み出で、各三人を取巻いて其の邊の椅子に着くと、黒奴がシャンパンの大罇一本とコップを持出して注ぎ廻る。

「さア縁起に一杯……。」と白髪の番頭が第一に杯を上げ、一口飲んだコップを其の儘ジョゼフィンの唇に押付けてぐつと飲ませた。女將は杯を手にした儘佇立み三人の方を見て、「何れかお氣に召しましたら……。」と客の氣合を伺つたが三人とも少していれ氣味で唯ニヤ

ニヤ笑つて居る……折から客間外の廊下で「左様なら、お近い中に。」と云ふ聲、接吻の聲も聞えて二階のお客を送出した女。ブランチは鼻歌を歌ひ腰を振り、ルイズは後毛を氣にして撫でながら、フロラは態とらしく俯向いて客間へ這入つて来た。

三人は其の儘離れた片隅の椅子に着いたが、ブランチはお客と見るや、他の朋輩には遠慮もなく、狗も鼻歌を歌ひながら一人の客の傍に進み寄り、突然に其の膝の上に腰をかけ、「御免なさい！」と目に情を含ませ指先に挟んだ巻煙草を一服して靜に男の顔に吹き付ける。

此の様に男は今がた一杯シャンパンを引掛けた後の潮々元氣づいた處なので、片手に女の銜へた巻煙草を取つて一服し、同時に片手では其の膝から滑り落ちぬ様にと女の腰を引抱へた。

此れを見て他の一人も今は躊躇せず、一番柔順しい女と見立て、金髪のイリスの方へ、まだ醒みもせぬのに肩を寄せ掛ける。残りの一人は誰れ彼れの嗜好みはせぬ貪慾ものと見え、右から左、左から右と、一座の女の顔は見すに、衣服の上からも推測される胸の形や夜會服の白い肩のあたりのみを打目成つて、獨り賤しい

空想に耽る様子。

此に於て一座の形勢已に定つたと見て、第一に船を立つたのは加奈陀生れの大女ヘーゼル、其の他のもの此れについで二人二人と暮起しなる次の客間へと引き退つたが、椅子に坐るとヘーゼルはこも情なく舌打して、呆れて了ふぢや無いか、あの手長のブランチたら……後から遣つて來やがつて馴染でもないお客の膝に馬乗になつてデレ付くなんて、私ア眞個に呆れ返つて了つたよ。と云へば、其の傍に居た女が、「何しろ、黒人を情夫にして居る恥知らずだもの……。」と相槌を打つ。

此様な風で毎夜お客の取り遣りから起る悶着が其の翌日も引續いて陰口種種となり、遂に噂された當人が聞込んで黙つて居られず、口喧嘩に花を咲すが例である。

然し今の處は幸にも隣の噂は酔つた男の太い笑聲に打消されて聞えぬ最中。ブランチは男の膝の上に馬乗になり絹の足袋をした兩足をぶらぶらさせ、兩手に男の肩を捕へて船漕ぐ様に前身を動し、

一も二階に行きませう。と短兵急に早く均を明けて了はうと迫つた。

一時は金一の格言を身の守護とする舍の都の



左側のヘーゼル。此れは英領カナダ生れの頑丈な大女で、靴を入れた様な其の胸から、逞しい二の腕や肩の様子如何にも油ぎつて、傍近く寄ると肌の臭と身中の熱氣を感じるかと思はれる。身體の割合に恐しい、小さい圓顔の口に締りもなく眼も鋭からず、昔は牧場で牛の乳でも搾つて居た田舎者とも思はれて一同好人物だと馬鹿にして居るが、いざウイスキーに酔ふとなると其の逞しい腕に恐れて、一同冷嘲半分に機嫌を取るのが例である。

最後のジョゼフィン。これは姿も容色も家中での秀逸であらう。年もまだ二十を越したばかり。兩親は伊太利の獅子里島から移住して今でも東側の伊太利街で露店の八百屋をして居るとか。南歐美人の面影を偲ぼする下顰の頬は桃色して、眼は黒い寶石の様な潤んだ光澤を持ち、眉毛は長く描いたやう。十四五の時からリストサイドの寄席や麥酒ガーデンなどに出て流行歌を歌つて評判を取り、其の後は一時期コラスガールになつてブロードウエーの芝居に出た事もあつたが、つい身を持崩して病氣にかゝり、大事の咽喉を潰して了つた。尤も病院を出た後は元の聲には成り得たが、最う怠惰癖がついて、漸次色の巷に身を下して了つたのだ。

けれどもまだ浮世の底を見透す様な苦勞と云ふ苦勞も知らず、同時に死んで見たいと思ふ程な情夫の味も覺えた事なく、唯だ綺麗な衣服を着て若い男と巫山戯て居た眞盛り、悪い事と云へば何でも面白い年頃なので、浮いた今の身は理想の境遇。寝て居る時と物喰うて居る時の外は、夜晝の別なく、一時本職にした流行歌を歌ひつづけ、さらずば可笑しくもない事をキヤツと云つて笑ひ、家中狭しと歩廻つて居る。

この五人。毎日いづれか一度、物爭ひせぬ事はない。が、暴風の過ぎる様に、一時間も経つと何も彼も忘れて了つて又友達になり、一緒に口を合して更に又他のものの陰口に目を送つて居る。

晩食はいつも極つたロースビーフから然らずばロースポークと馬鈴薯クラムベリー・ソースにセレリー。其れが済んでデザートに一片のバイカプディングに紅茶の一杯。めいめいは部屋に戻つて長々とお化粧に取り掛つて夜の十時、女將が家中の呼鈴を鳴らすと此れを合圖に一同は下の客間に下りて、来るべき客を待つ。流石商業國の女だけあつて此れから一夜を皆々營業時間と云つて居る。

で、この刻限になると、家中五人の外に女將と特約して毎夜外から出掛して来る女も四五人はあつて、つまり十人以上の人数が或者は白いウエーストに襟飾した素人風、或者は夥しいレースの飾をつけた夜會服の裾長く、貴族の舞踏會もよろしくと云ふ様で、手に扇さへ持ち各客間の彼方此方に陣取るのである。

## 二

十一時が過ぎて、近所の劇場の閉場時。往來は一時、人の覺悟、車の響、駁者の呼聲喧ましく、やがて十二時が鳴つて寂すると、これから一時二時頃までが、料理屋、俱樂部、正突場歸りの連中の繰込む時分。今方何處かの商店員らしい三人連の若者をば、手癖の悪いブランドと佛蘭西生れのルイズと、夜だけ外から移ぎに来るフロラと云つて、電車の車掌の女房で、もう二人の子持、亭主と相談づくで金儲をして居る其の女とが各二階三階の部屋へ連込んだが、すると其の後直様戸口の鈴が再びチリンチリンと鳴つた。マリーと呼ぶ黒奴の下女が戸を開ける。半白の番頭らしい肥つた男と後には地方の商人らしい三人。金になる客と見て女將自ら出迎へ

しく折々互に顔を見合せる、其の中には、「ああ、お腹が空いた。」と云ふものもあるが然し「それぢや何か買はうか。」と進んで發議するものは一人もない。

突然、呼鈴が家中の寂れを呼覺した。

元氣を付ける爲めか、マリーを待たずして、女將自ら戸口に出ると高帽に毛裏付の外套白手袋に洋杖を持った二人連、何處から見ても間違の無い交際場裡の紳士と云ふ扮装に女將は恭しく先次の客間に案内し、「皆さんお客様ですよ。」と呼ぶ。

大女のヘーゼル最初に立上り次の間に進入る前に女共の顔として物になりさうな客か否かと境の幕から添見したが、忽ち怪訝な顔をして後を振り返り、「シッ!」と一同を制した。

「一件かい。」と一同は直に了解した様子で顔を只合せる中進出でたのはブランチ、同じく幕の間に透れて、

「うむ、さうだよ。」と最も拔足して一同の傍に立戻り、「探偵だよ。夜會服なんぞ着やがつて……女將さんは氣が付かないのかね。私やアチヤんと顔に見覚えがある。」

此の一言に流石は泥水を吸ふ女共も、紐育の警察が月に一度は必ず酒類の脱税販賣と夜

業の現行犯を取押へる爲めに客に仕立て、探偵を入込ます、このお灸には何れも一度や二度の経験のないものはないので皆騒がず慌忙で足足差足、廊下から地下室の食堂に逃れ出で或者は裏庭から隣の庭へと忍入り、或者はいざと云へば往來へ逃げる用意で、地下室の戸口に佇んだ。

女將は二度まで一同を呼んだが誰も出て来ぬので此の社會は萬事悟が早く、さうかと腹で頷ききしヤンパンをと男が命ずるのを利用して、自ら大廳を取つて波々と注いだ後、「旦那、いけませんよ。御冗談なすつちや……。」と云ひながら都足袋の間から二十弗紙幣二枚ばかりも掴出して、其の儘男のポケットに揉込み、「罪ですよ。」と笑ふ。

此に於て探偵二人我意を得たと云ふ様子で、「は、は、は。此れも勤めぢや、其れぢや又近い中に……。」と立上つた。

「どうぞ、よろしく。」

妙な挨拶。女將は漸く送出して戸をばつたり。其の儘客間の長椅子に酒樽を轉した様にどしりと重い身體を落し、「ああ、畜生奴ツ!」と大聲に怒鳴つた。

絶したが、纏てチリン／＼と鐘に付いた鈴を鳴しながら何夫のトム、幕の間から顔を出し心配さうに女將の顔を打目成る。續いて食堂から上つて來たブランチ、同じく客間を一寸差覗き、「女將さん……。」と一聲。

然し女將は最う落膽して返事をする勇氣もないらしい。

「女將さん、それでも今夜はよく柔順しく歸つたねえ。」

「さうともね。」と女將は稍腹立しく、「二十弗の紙幣三四枚も掴ましたんだもの……。」

「二十弗三四枚……。」と捷敏いブランチ、必ず掛値を云つて居ると見て、意を失しく、「お氣の毒でしたれ。」

この時どや／＼と裏庭へ退出した連中が、「おお、お寒い、凍死んではア……。」と云罵りながらもう怖物なしと見て、客間へ駈入る。ブランチは意地悪く又も話を大袈裟に、「女將さんは二十弗紙幣七八枚も掴ましたんだとさ。」

「まア……。」と皆々女將の顔を見た。

女將は女共が同怖と驚嘆の聲に一言いまいましくなつたと見え、忽然椅子に凭れた半身をキツと起し、一同を見渡して、

女共、短い時間に多くを得ようとすればべんべんと一人の男の心任せて大事の時間を潰すは、大の禁物である。處が又女將に取つては酒代は全部其の所得になるので、呑む客と見れば一分なりと客間に引止めて酒を賣らねば成らぬ。此に於て往々女將と女共の間には利益の衝突を免れず……昨夜も私の腕でシャンパン五本も抜いて遣つた癖に唯だ一週間宿賃が待てないんだと……打云ふ不平は常に絶える時がない。

女將は今二度目のシャンパンを注いで廻つた後、座をつなぐ爲めにと自ら洋琴を弾き始め、「ジョゼフィン!」一ッ何かお歌ひな。」と先刻から長椅子の上で半白の番頭を相手にして居た伊太利種のジョゼフィンを顧ると、踊娘上りのジョゼフィンは年も若く慾も少く、相手構はず騒ぐ性質として自分から手を叩き、

I like your way and the things you  
say,

I like the dimples you show when  
you smile,

I like your manner and I like your  
style;

...I like your way!  
と聲一杆に歌ふと其れについて番頭も調子

を合した。

ブランチは此の様に稍焦れ込み、私、もう酔つて苦しいわ。」と三十以上の婆の癖に鼻聲を張り、男の胸の上にピッタリ額を併當て、大きく息を付けば、金髪のイリスも此れに模ひ、「二階へ行つてゆつくり話させう、ね、ね。」と男の指を拵つて引張る。

番頭この様を見て、「いや其方の方ぢや、もう眞猫をきめて居るんだな、女將さん、其れぢや最う一本でお開きとするか。」

女將得たりと洋琴から飛離れ、マリー、早く。

シャンパンの御用だよ。

流石のブランチも今は絶望して運を天に任す

と云ふ風で、「大變な御元氣ですね。」と力なく

云へば番頭一人で悦に入り葉巻の煙を濃く吹いて、

酒に女にお金がありやア何時でも此の通り:

ジョゼフィン、最う一遍先刻の歌を聞かして

呉んな。」

I like your eyes, you are just my

size,

I'd like you to like me as much

as you like,

I like your way!

折柄又もや戸口のベルが鳴る。丁度最後のシャンパンを持ち出したマリー、慌てて御免下さいいとお酌を女將に任して廊下へ飛出した。

どや／＼お客が次の客間へと這入る氣勢、つゞいて其の場に居た大女のヘーゼル、佛蘭西から來たルイズが可笑しな發音の英語……やがて皺枯れた男の聲で、「シャンパンなんぞ抜く金は無えや。」と怒鳴るのが聞えた。

### 三

入れ替り立ち替り人の出入絶間なく、夜も既に三時過ぎになつて一しきり客足が止つた。

女共、同流行毎夜を明し馴れた眼も稍疲れ、

知らず／＼酔ふシャンパンや麥酒やハイボールの混飲みに頭も重くなつて、元氣のジョゼフィ

ンも今は流行歌唄ふ勇氣もなく、ピアノに片腕

ついて生欠伸をし、ブランチは障の方で下つて

來る紙袋を折々引上げる振をしては其の中に

揉込んだ紙幣の胸算用をして居るらしい。

イリス、ヘーゼル、ルイズ、フロラ、皆々長

椅子へ並んで坐り細眼鳥が押合ふ様に、左に肩

と肩とを併合せ、最う話の種噺の種も盡き果

てた模様。今は絶間なく喫す煙草にも飽きたら



「さうか。でも可成出来た方か。」と恥を知らぬ亭主。女房も平然としたもので、

「さうだね。大した事もなかつたが、それでも皆なそれくらい忙しかつたよ、ねえ。」とジュリヤの方を見返ると、

「うむ。と領付き。」一番上手なのは矢張プランチだね、私にや、然しあゝは行かないよ。」

「フロラ、お前も少し見習ふが可いぢやないか。」

「何だつて。よけいなお世話だ。」

「深切に云つて遣るんぢやねえか。」

「いゝよ。」とフロラは手にした暖手套で亭主の顔を打つ。

「はゝゝゝ。怒るない。」

第六通へ出て表月の火は消して居るが内は夜通明いて居る酒場の前まで来た。ジュリヤの亭主は此の酒場の給仕人である。車掌夫婦は、それぢや、あばよ。」と行掛けるのを、ジュリヤは呼止めて、

「其様に急がないだつて可いぢやないか、時には私の可憐い人の顔を見て遣るもんだよ。」

「ちげえねえ。」

ジュリヤが先に立つて車掌夫婦共々 Family Entrance と書いた目立たぬ裏手の戸を押して

内へ這入つた。

冬の夜の明けるには猶間があらう。人通りの絶えた六番通の仲方から酔つて居るのか、或は寒氣をまぎらす爲めか、中音に歌つて来る男の聲……

… I wish that I were with you, dear, to-night;

For I'm lonesome and unhappy here without you,

You can tell, dear, by the letter that

I write.

突然、遠くから街を震動しつゝ襲来る高架鐵道の響。犬が何處かで吠出した。

(明治四十年四月)

## 支那街の記

何うかすると、私は單に晴渡つた青空の色を見た丈でも自分ながら可笑しい程無量の幸福を感じる事があるが、その反動としては何の理由何の原因もないのに、忽如として闇の様な絶望に打沈む事がある。

たとへば薄寒い雨の夕暮など、ふと壁越に聞

える人の話聲、猫の鳴く聲などが耳につくと、もう齒を喰ひ縛つて泣き度いやうな心地になり、突如、筆で心臓を穿破つて自殺がして見たくなつたり、或は此の身をば、何とも云へぬ恐しい惡徳墮落の淵に投捨て、見たいやうな、さまざまな暗黒極る空想に懷される。

からなると、最う何も彼も顛倒して丁つて、今まで世間も自分も美しいと信じて居たものが全く無意義に見えらるばかりか厭はしく憎くなり、醜と云ふ惡と云はるゝものが、花や詩よりも更に美しく且つ神祕らしく思はれて来る。凡ての罪業惡行が一切の美德よりも偉大に有力に見える、眞心から其れをば讚美したくなる。

丁度世間の人が劇場や音楽會へでも行くやうに、私は夜が来ると云へば其の夜も星なく月なき眞の闇夜を希ひ、死人や、乞食や、行倒れや、何でもよい、さう云ふ醜いもの、悲しいもの、恐しいものゝ有るらしく思はれる處をば、止みがたい熱情に驅られて夜を徹してでも彷徨ひ歩く。

されば紅育中の貧民窟と云ふ貧民窟、汚辱の土地と云ふ土地は大概歩き過つたが、この恐るべき慾望を満すにけ人の最も忌み恐れる支那街の裏屋ほど適當な處はないらしい。然り支那

「何も其様に驚く事はないよ、五十年前此方叩上げて来た腕だアね。鳥渡一目見れア、此奴は五弗で黙つて歸るか、十弗で目を瞑るか……其の邊の見つもりはまだ……お前さん達は修行が肝腎さ、何しろ五十年と云ふ月日だよ、大統領ルーズベルトもマツキンレーもまだ涙ぐみ垂しの時分からだ。」

「五十年……と誰かが繰返すと、他の一人が、其の時分にはカーネギーも一文なしの土方でせうね？」と訊く。

「さうだらうよ。私も其の時分には指環一ツ無しで暮したものだ。」

一同返す語なく口を嚙む。女將は意氣昂然と身を反し、「へく」の話し。五十年前は指環一ツなし……と自ら過去の経歴を回想し、人生に打勝つた目下の成功に云ひ知れぬ得意を感じたらしく、しづ／＼椅子から立上り女共を尻目に睨んで二階に上つて行つた。

で、その裾の音が聞えなくなるかならぬ中に、最う堪へ兼ねて、長椅子の上に轉つて笑ひ出したのは無邪氣のジョゼフィン。

「大統領ルーズベルトも未だひつ垂しの時分から……」とプランチが口真似をすると、ヘーゼルが、

「五十年前は指環一ツなし……」。

「ほ／＼ほ／＼ほ。」と一同は吹出して笑つた。

何處かの家で時計が鳴つた。車掌の女房フロラは聞澄して「もう四時だ、今夜は縁起でもない。私やそろ／＼歸らうよ。」と此れも外から稼ぎに來るジュリヤとぶふのを顧みた。

「さうだね。ぢやア行かう。」

二人は二階へ上り夜の装束を脱捨て、外出の小ざつぱりした風に着換へ、帽子を冠りヴェーリから燃巻の支度を済して女將が室の戸を鳥渡叩き、

「四時過ぎましたから歸りますよ、又明晩、さよなら。」

ばた／＼駈下りて廊下の外から一同に、さよならなら、と長く聲を聞いて往來へ出ると、出合頭に佛蘭西から一緒に手を引合つて稼ぎに來たルーイズの情夫、自動車運転手をして居る奴が、

「今晩は。」と歐洲風の妙な手振で烏打帽を取り、ルーイズは「……」と訊く。

「客間に居るよ。お楽しみだね。」

夜明の五時近くから情夫どもの繰込む時刻である。色男は其の儘石段を上つて戸口のベルを押した。

「お、寒い。」と態とらしく身を顫してフロラとジュリヤは六番通の方へ行き掛ける。もう十二月の半とて市中を聴る電車の響は岸打つ波の如くに消えつ起りつ絶間なく聞えながら、何處やら深い寂しさの身に浸みわたり、角の芝居小屋の間からひろ／＼と見えるブロードウェイの大通は初夜の儘に明るく照されながら、其の街燈の光は月よりも蒼く水よりも冷たく見え流石の大都も今が寂しい真盛りである。

二人は云合した様に身を寄せ、四五間も行掛けると例のコーラスガール杯が泊込むホテルの前、二三輛客待をして居る辻馬車の影が、

「今夜は充分早いぢや無えか。」と大きなパイプを銜へた一人の男が立現れた。ジュリヤは四邊の火影に見透して、

「おや、掛け違つて、久振だねえ。」

電車の車掌をして居るフロラの亭主である。

毎夜四時の交代に近所の停車場から制軀制服の儘何時でも此の邊で女房の歸りを待受けて居るのだ。フロラは軽く挨拶して、探偵が這入つたんで縁起でもないから、四時きつかりに切上げ了つたんだよ。

如く帽子を肩深に外套の襟を立て、世を忍ぶ罪人の様に忍入ると、建物と建物の間から見える狭い冬の空に、大きな片割月の浮いて居るのを認めた。光澤の無い赤い其の色は、泣腫した女の眼にも響へようか。弱々しい其の光は、汚れた建物の側面から滑つて遙か下なる空地の片隅に云はれぬ陰惨な影を投げた。扉や帷幕を引いた窓の中には火影の漏れながら人聲一ツ聞えぬ。すると、何處から出て来たとも知れぬ大きな黒猫が一匹、共同便所の板圍ひの上をのそのそと、其の背を圓く高めながら、悲し氣な落月の方に顔を向けて、一聲、二聲、三聲ほども鳴續けて其れなり掻消すやうに姿を隠して了つた。私はこの夜ほど深い迷信に苦められた事はない……

又、或時は夏の夜、一日太陽に照された四方の壁は、容易に熱氣を冷さぬのみか、吹く風を遮つて、この空地の中は油の鍋も同様である。流れ溢るゝ汚水からは生暖かい臭氣が眼に見えぬ煙のやうに、人の呼吸を閉すかと思はれたが、然し、建物の内なる狭い室の苦しきは其れ以上と見えて、悉く開放した四方の窓々からは何れも半ば裸體になつた女共が、逆さになる程身を外に突出して居る。明るい燈影が其の肩

を越して漏れ出づるので、冬と云ふとは全く違ひ、空地の上に落ちる夜の色は明るく光澤がある。向合せの窓と窓からは、罵るのやら、話すのやら、人の耳を裂く様な女の聲の響き渡るが中に、高い建物の屋根裏では、其様物音には一向構はず、大支那人が強ぐのであらう、齒の浮く胡琴の響が、キイ、キイ……と單調な東洋的の旋律を休まずに繰返して居た。私は四邊の臭氣と熱度に射り果て聞くともなしに佇立むと、あゝこの調和、この均齊、私はこれほど痛まし

く人の身の零落破滅を歌つた音楽を聞いたことはないと思つた。

空地を行きずと扉のない戸口がある。這入れば直様狭い階段で、折々嘔吐の吐き捨てあるのを、恐るゝ上つて行くと、階毎に狭い廊下の古びた壁には、薄暗い瓦斯の裸火が點いて居て、米國中他の場所では夢にも嗅げぬ煮込の豚汁や玉葱の臭氣、線香や阿片の香氣が、著しく鼻を打つ。

見れば、ペンキ塗の戸口には、「だとか、一羅だとか云ふ苗字やら、その他縁起を祝ふ種々な漢字を筆太に書いた朱唐紙がベタ／＼張付

けてあり、中では猿の叫ぶやうな支那語が聞える。が、然らざる戸口には、蝶結びにしたリボンなどを目標にして、べつたり白粉を塗立てた米國の女が、廊下に響く足音を聞付けさすれば、扉を半開に、聞覚えの支那語が日本語で、吾々を呼び止める。

この女共は米國の社會一般が劣等な人種とよりは、寧ろ動物視して居る支那人をば唯一の目的にして——其の中には或る階級の日本人も含んで——此の裏長屋の中に集つて来たものである。人間社會は、如何なる處にも成敗上下の差別は免れぬ。一度、身を色然の海に投捨てても、猶ほ其の海には清きあり濁れるあり、或物は女王の榮華に人を羨ますかと思へば、或者は盡きた手段の果が、かくまでにみじめな姿を賜す。

彼等は、何れも其身相當の夢を見盡して、今は唯だ、女と云ふ肉塊一ツを、この零落の底に投げ込み、最う悲しいも嬉しいも忘れて了つた、慾も得もなくやつた。其の證據には戸口へ佇む男を呼び止めても、いきなりに最後の返事を迫め問ふばかりで、世間普通の浮女の様に、媚を含み言葉使い、思はせ振の様子から、次第に人を深みに引入れようとする、其の様な



街——其の裏面の長屋。こゝは乃ち人間が最  
うあれ以上には墮落し得られぬ極點を見せた  
惡徳汚辱疾病死の屠戮場である……

私はいつも地下鐵道に乗つて、ブルックリン  
大橋へ出る手前の小さい停車場に下ると、この  
四邊は問屋だの倉庫練きの土地の事で日中の喧  
が濟んだ後は人一人通らず、辻々の街燈の光に  
照されて漸く闇を逃れて居る夜の空には、窓も  
屋根もない箱の様な建物が高く立つて居るばか  
り。中部ブロードウエーの賑かな夜ばかりを見  
た人の眼には、紐育中にも此様淋しい處がある  
かと驚かれるであらう。路傍には貨物を取出し  
た空箱が山をなし、馬を引放した荷馬車が幾輛  
となく置捨てゝある。其の間を行違すと其處が  
もう貧民窟の一部たる伊太利の移民街で、左手  
にベンチの並んで居る廣い空地を望み、右手は  
屋根の連んだ小家続き、凸凹した敷石道を歩み、  
だら／＼坂を上れば、忽ちブンと厭な臭氣のす  
る處乃ち支那街の本通りに出たのである。

街は彼方に高架鐵道の線路の見える表通りか  
ら滲入つて、家續きに迂曲して二條に分れ、再  
び元の表通りへと出て居る。誠に狭い一區割で  
はあるが、初めて入つた人の眼には、凸凹した  
狭い敷石道の迂曲する工合が、行先き知れず、

如何にも氣味悪く見えるに違ひない。家屋は皆  
な米國風の煉瓦造りであるが、立並ぶ料理屋、  
雜貨店、青物店など、その戸口毎に下げてある  
種々の金看板、提灯、燈籠、朱唐紙の張札が、  
出入や高低の亂れた家並の汚さと古さと共に、  
暗然たる調和をなし、全體の光景をば誠に能  
く夢魘に支那化さして居る。

夜になつて、横町の端れから支那芝居の喧し  
い銅鑼鐘の響が聞え、料理屋の燈籠には一齊に  
灯がつくと、日中は遠く市中の各所に勞働して  
居た支那人も追々に寄集つて来て、各自に長煙  
管を銜へながら、路傍で富籤や賭博の話を熱中  
して居る。其の様子が西洋人には如何にも不  
思議に思はれると見えて、何事にも早早い山師が  
CHINA TOWN BY NIGHT——などと大袈裟  
な幟を立て、見物のオートモビルに好奇の男女  
を載せ、遠い上町から案内して来るもあり、又  
は立派な馬車でブロードウエー邊の女郎を引連  
れ、珍し半分、支那料理屋で夜を更かさうと云  
ふ連中もある……

然し要するに、此れは支那街の表面に過ぎぬ。  
一度料理屋なり商店なり、其れ等の建物の間  
を滑つて裏へ抜けると、何れも石を敷いた狭い  
空地を取圍んで、四五階造りの建物が、其の窓

窓には汚い洗濯物を下げた儘、蛇の如くに突立  
つて居る。  
私が夜晩く忍び行く所はこの建物——其の内  
部は蜂の巢のやうに分れて居る裏長屋である。

此處へ這入り込むには厭でも前なる狭い空地  
を通過ぎねばならぬ。空地の敷石の上には四方  
の窓から投捨てた紙屑や襤褸片が蛇のやうに足  
へ纏付くのみか、月障に板敷ひのしてある共  
同便所からは、流れ出す汚水が、時によると飛  
越し切れぬ程池をなして居る事さへあり、又、  
建物の壁際に沿うては、ブリキ製の塵桶が幾個  
も並べてあつて、其の中からは盛に物の腐敗す  
る臭氣が、只さへ流通の路を絶たれた四邊の空  
氣をば、殆ど堪へがたい程に重く濁らして居る。  
で、一度、こゝに足を踏入れさへすれば、最う  
向うの建物の中を見ぬ先から、……丁度線香の  
匂をかいで寺院内の森嚴に襲はれると同様、清  
濁の色別こそあれ、遠く日常の生活を離れた  
別様の感に沈められるのである。  
で、折に觸れた一瞬間の光景が、往々にして、  
一生忘れまいと思ふ程の強い印象を與へる事  
がある。……確か晴れた冬の夜の事、私は例の

。お前さんはまだ若くつて、いくらでも商賣が出来るつもりだらうが、瞬く中だよ。ぢき乃公見た様になつて了ふ。鏡なんぞ見る心配はいらねえ、何時背負ひ込んだとも知らねえ毒が、何時か一度は吹出さずにや居ねえ。顔の皺なんかよりや、頭の手が御用心。鼻が塞る、手が曲らア、顫へて來らア。足が引ツつて腰が曲らア。物は試した、乃公の手を見なせえ……。

鏡に向つて夜の化粧をして居た女は、覺えずアツと叫んで、兩手を顔に蔽ひ、其の儘寝床の上に突伏した、乞食老婆は氣味悪く「ヒ、ヒ、ヒ、ヒ」と笑つてよろ／＼と女の室から廊下へ出て來たので、戸口から内の様子を覗いて居た私も、急に物恐しくなつて、慌忙で、其の場を逃げ去つた事がある。

思出すのはボードレルが Ruines ! ma famille ! cerceaux e n'égères ! (残骸！わが親族！わが腦漿！)と叫んで、ニューゴーに贈つた LES PETITES VIEILLES (小老婆)の一篇である。

私は支那街を愛する。支那街は「惡の花」の詩材の寶庫である。利は所謂人道慈善なるものが、遂には社會の一隅から此の別天地を一掃しはせぬかと云ふ事ばかり心配して居る。

## 夜あるき

余は都會の夜を愛し候。燦爛たる燈火の巷を愛し候。

余が箱根の月大嶽の波よりも、銀座の夕暮吉原の夜半を愛して、遷暑の時節にも獨り東京の家に止り居たる事は君の能く知らるゝ處に候。

されば一度ニューヨークに着して以來到る處燈火ならざるはなき此の新大陸の大都の夜が、如何に余を喜ばし候かは今更申上るまでもなき事と存じ候。あゝ！紐育は實に驚くべき不夜城に御座候。日本にては到底想像すべからざる程明る眩き電燈の魔界に御座候。

余は日沈みて夜來ると云へば殆ど無意識に家を出で候。街と云はず辻と云はず、劇場、料理店、停車場、ホテル、舞踏場、如何なる所にもよし、かの燦爛たる燈火の光明世界を見ざる時は寂寥に堪へず、悲哀に堪へず、殆ど生存より隔離されたが如き絶望を感じ申候。

燈火の色彩は遂に余が生活上の必要物と相成り申候。

余は本能性に加へて又知識的にこの燈火の色彩を愛し候。血の如くに赤く黄金の如くに清く時には水晶の如くに蒼きその色その光澤の如何に美妙的なる感興を誘ひ候か。碧深き美人の眼の潤ひも、滴るが如き寶石の光澤も、到底これには及び申さず候。

余が夢多き青春の眼には、燈火は地上に於ける人間が一切の慾望、幸福、快樂の象徴なるが如く映じ申候。同時にこれ人間が神の意志に戻り、自然の法則に反抗する月ある事を示すものと思はれ候。人間を夜の暗さより救ひ、死の眠りより覺すものはこの燈火に候。

燈火は人の造りたる太陽ならずや、神を嘲りて知識に誘ふ罪の花に候はずや。

さればこの光を得、この光に照されたる世界は魔の世界に候。醜行の婦女もこの光によりて貞操の妻、德行の處女よりも美しく見え、盜賊の面も救世主の如く悲壯に、放蕩兒の姿も英雄の如くに氣高く相成り候。神の榮え靈魂の不滅を歌ひ得ざる墮落の詩人は、この光によりて初めて罪と暗黒の美を見出し候。ボードレルが一句、

Voilà le sûr charmant, ami du criminel,  
Il vient comme un complice, à pas de

loup, le ciel

面倒な技巧を用ひはせぬ、もしや男が否とも應とも云はずに、素見半分、戯ひでもしたならば、其れこそ大變、彼等は忽ち病犬の如くに吼り狂ひ、諸有る暴言雜語の火焰を吐く。

實際、彼等は、譯もないのに唯だもう腹が立つて立つて堪へられぬのらしい、喧嘩をしたくも相手のない時には、幾杯となく倒ける強い火酒に、腸を焼きたぐらせ、床の上に身を跪いて、大聲に自分の身の上を云罵り、或は器物を破し、己れの髪毛を引捲つて居るなどは珍らしからぬ例である。然し、或者に至つては、早や此の狂亂の時期さへ経過してつて、折さへあれば鴉片の筒を戀人の如く引抱へ、すやくと無の平安を樂しんで居るものも少くない。

あゝ毒煙の天国——ある佛蘭西の詩人は「RADIS ARTIFICIELS (人工の樂土)」と云つた——この夢幻の郷に遊ぶまでには、人は世の常ならぬ絶望、苦痛、墮落の長途を網なければならぬ、が、一度、此處に至れば全く煩悶未練の俗縁を脱して丁ふ事が出来るのであらう。見よ、彼等の眼りながらに覺めたる眼の色を！私は恐るゝ打目成る度毎に、自分は僅ばかり残つて居る良心に引止められて、何故一思にこゝまで身を落す事が出来ないのかと、勇氣と決心の

乏しいのに云はれぬ忿念を感ずるのである。

真長屋の中には、此れ等、惡の女、罪の娘、腐敗の娘のその外に、明い日の照る處には生息し得ず、罪と惡の日蔽の下に、漸と其の安息地を見出して居るものは、猶二三に止まらぬ。

女共を上得意にして、盜品や賤造物のさまざまを賣りに來る猶太の爺がある。研にかけた小箱一ツを生命に、一生涯を旅から旅にと彷徨ふ白髮の行商人がある。萬引を渡世に、其の品物を捨賣にして歩く黒人の女がある。日本の遊廓あたりで、使屋さんとぶふ様な女郎の雜用をして居る親なし宿なしの惡少年がある。然し、其の中にも、殊更哀れと恐しきを見せるのは、明日は愚か今日の夕の生命さへ推量られぬ無宿の老婆の一群である。

吾々ばかりの女郎の身の上をば、此れが人間の墮ち沈み得られる果の果かと連斷したが、其の又下には下があつた。あゝ最後の破滅、最後の平和に到着するまでに、人は幾度如何に多く、惡運の手に弄ばれねば成らぬのであらう。彼等は、其の捻曲つた身をば、やつと裸體にせぬばかり、襤褸を引纏ひ、腐つた牡蠣のやう

な眼には日脂を流し、べはたや紙の爲めに保存してあると云はねばかり、襤褸に等しい白髮を振亂して、真長屋の廊下の隅、床下、共同便所の物陰などに、雨露を浚いで居て、折々は糞まれもせぬのに、女郎の汚れ物を洗つたり、雜用をたしたりして、やつと其の日の食にありついて居るのである。然し彼等は此の方が、社會の慈善と云ふ束縛、養老院と云ふ牢獄に收められて了ふよりも、結句安樂で自由であると信じて居るのであらう、若しや此の穴倉へ還査の紙音の響く恐れでもあると豫知すれば、不思議な確敏活に、其の姿を隠して了ふ、が、然らざる時は、往々にして、天下を横行せんず勢を見せ、夜陰に乗じて彼方此方と、女郎の室々を巡つて物乞をする。これには流石の女共も敵し得ない。若し腹立ちまぎれに打つか蹴るかしたならば、直ぐと其の場で死んで了ふかと思はれるので、僅かに戸の外へ突出せば終夜大聲を出して泣き叫んだり、又は惡たれて其の場に行倒れたまゝ、軀をかいたりする。或時、私は此様

狀がらせを云つて居るのを聞いた。——いゝよ、さう因縁な事を云ふんなら、もう同情は受けますまい。その代り、お前さんも、もう直きだ、みじめを見た、曉に想知だけの事だ、



見えず、低き石段を前にしたる戸口の中は、闇立ち迷ひて、其の縁下よりは惡臭を帯びたる濕氣流れ出でて人の鼻を打つ。女は突然立止まりて、近くの街燈をたよりに、少時余が風采を打眺め候ふが、忽ち紅したる唇より白き齒を見せて微笑み候。

余は覺えず身を顫はし申候。而も取られし手を振拂ひて、逃去る決斷もなく、否、寧ろ進んで闇の中に陥りたき熱望に驅られ候。

不思議なるは惡に對する趣味にて候。何故に禁じられたる果實は味美しく候ふや。禁制は甘味を添へ、反處は香氣を増す。谷川の流れを見給へ。岩石なければ水は激せず、良心なく、道念なければ、人は罪の冒險、惡の樂しみを見出し得ず候。

余は導かるゝ儘に、闇の戸口に入り、闇の梯子段を上り行き候。梯子段には數物なければ、恰も氷を踏碎くが如き物音、人氣なき家中に響き、何處より湧き出るとも知れぬ冷き濕氣、死人の妻の如くに、余が襟袖を濡で申候。

二階三階、遂に五階日かとも覺しき處まで上り行き候ふ時、女はかちと鍵の音させて、戸を開き、余をその中に突き入れ候。濃き闇は此處をも立罫め候ふが、女の點する

瓦斯の灯に、秘密の雲破れて、余が目の前には忽ちとして破れたる長椅子、古びし寢臺、曇りし姿見、水溜れる手洗鉢など、種々の家具雖然たる一室の様、魔術の如くに現れ候。室は屋根裏と覺しく、天井低くして壁は黒ずみたれど、彼方此方に脱捨てたる汚れし寝衣、股引、古靴足袋などに、思ひしよりは居心地好き住家と見え候。されど、それは諸君が、寢臺打亂れたる大小屋、若しくは糞にまみれし鳥の巢を覗見たる時感じ給ふ心地好きに御座候。

眺め廻す中に、女は早や帽子を脱り、上衣を脱ぎ、白き短き下衣一ツになりて、余が傍なる椅子に腰掛け、巻煙草を喫し始め候。余は深く腕を組みて、考古學者が沙漠に立つ埃及の怪像を打仰ぐが如く、默然として其の姿を打目成り候。

見よ。彼女が靴足袋したる兩足を膝の上までも現し、其の片足を片膝の上に組み載せ、下衣の胸ひろく乳を見せたる半身を後に反し、あらはなる腕を上げて兩手に後頭部を支へ、顔を仰向けて煙を天井に吹く様、あゝ！これ神を恐れず、人を恐れず、諸君の世の美徳を罵り盡せし、慘酷なる、將た、勇敢なる、反抗と汚辱との石像に非ずして何ぞ。彼女が白粉と

人毛と擬造の寶石とを以て、破壊の時」と戦へる其の面は狐城落日の悲壯美を小さずや。其が重き臉の下に、眠れりとも見えず覺めたりとも見えぬ眼の色は、瘴煙毒霧を吐く大澤の水の面にも譬ふべきか。デカダンス派の父なるボードレールが、

Quand vers toi mes desirs partent en carnavin,

Tes yeux sont la citerne où b'ivent mes ennemis.

「わが望み、陰商の如く汝が方に向ふ時、汝が眼は病める我が疲れし心を潤す用水の水なり。」と云ひ、又、

Ces yeux, où n ne se révèle

De deux ni d'un,

Sont deux bijoux froids où se mêle

L'or avec le fer.

「嬉し悲しの色さへ見せぬ汝が眼は、鐵と黄金を混合たる冷き寶石の如し。」と云ひたるも、この種の女の眼にはあらざるか。

余は已に小傳の可憐、椿姫マルグリットの幽愁のみに満足致し得ず候。彼等は餘りに弱し。彼等は習俗と道徳との雨に散りたる一片の花にして、刑罰と懲戒の暴風に萎れず、死と破

Se ferme lentement comme une grue le

alcôve,

Et l'homme impatient se change en bête

fauve.

「悪徒の友なる懐しき夜は、狼の歩み靜に其犯人の如く進み來りぬ。いと廣き寢屋の如くに、空、徐に閉さるれば心焦立つ人も、忽、野獸の如くにぞなる……」と。余は昨夜も例の如く街に灯の見ゆるや否や、直に家を出で、人多く集り音樂洩出るあたりに晚餐を食して後、とある劇場に入り候。劇を見る爲めには非ず、金色に彩りたる高き圓天井、廣き舞臺、四方の棧敷に輝き渡る燈火の光に酔はんが爲めなれば、余は舞姫多く出でて喧しく流行歌など激々趣味低きミニューデカル・コメディーを選び申候。こゝに半夜を費し、劇場のワルツに送られて群集と共に外に出るや、冷き風颯然として面を撲つ……余は常に劇場を出でたる此の瞬間の情味を忘れ得ず候。見廻す街の光景は初夜の頃入場したる時の賑さには引變へて、靜り行く夜の影深く四邊を望めれば、身は忽然見も知らぬ街頭に迷出でたるが如く、膽氣なる不安と、それに伴ふ好奇の念に誘はれて、行手も定めず歩み度き心地に相成り候。

然り、夜深の街の趣味は、乃ちこの不安と懷疑と好奇の念より呼び起さるゝ神祕に有之候。既に灯を消し、戸を閉したる商店の物陰に人佇立めば、よし盜人の疑ひは起さずとも、何者の何事をなせるやとて窺ひ知らんとし、横町の曲り角に制服いかめしき巡査の立つを見れば、譯もなく犯罪を連想致し候。帽子を眉深に、兩手を衣囊に突込みて歩み行く男は、皆階層に失敗して自殺を空想しつゝ行くものゝ如く見え、闇より出でて、闇の中に馳過る馬車あれば、其の中には必ず不善の懸道ならぬ交際の潜めるが如き心地して、胸は譯もなく波立ち、氣頻りに焦立つ折から、遙か彼方に、ホテルやサルーンの燈火、更けたる夜を心得顔に赤々と輝くを望み見れば、浮世の限りの樂みは此處にのみ宿ると云はぬばかり。入りつ出でつ探ぐ男女の影は放蕩の花園に戯れ舞ふ蝶に似て、折々流れ來る其等の人の笑ふ聲語る聲は、云難き甘味を含む誘惑の音樂に候はずや。恐しき定め」の時にて候。この時この瞬間、宛ら風の如き裾の音高く、化粧の香を夜氣に放ち、忽ちとして街頭の火影に立現るゝ女は、これ夜の魂、罪過と醜惡との化身に候。少女マルグリットの家の戸口に惡魔が呼出す魔界の

天使に御座候。彼女等は夜に彷徨ふ若き男の過去未來を通じて、その運命、その感想の凡てを洞察し盡せる神女に候。されば男は此處にその呼び止むる聲を聞きそ寄添ふ姿を見る時は、過ぎし日の前兆を今又目前に見る心地して、その宿命に満足し、犧牲に甘んじて、冷た汚辱の手を握り申候。余は劇場を出でてより更け渡りたるブロードウエーを歩み……て、かのマヂソン廣小路に石柱の如く聳立つ二十餘階の建物をば夢の樓閣と見て過ぎ、やがて行手にユニオン廣小路とも覺しき樹の繁り、その間を漏るゝ燈火を望み候。近けば木蔭の噴水より水の滴る響、靜き夜に恰も人の啜り泣くが如くなるを聞き付け、其のほとりのベンチに腰掛け、水の面に燈影の動き碎くるさまを見入りて、獨り湧出づる空想に耽り候。余は何者か、余に近く歩み寄る聲音、續いて何事か囁く聲を聞き候ふが、少時にして再び歩み出せば……あゝ何處にて捕へられしや。余はかの夜の惡女と相並びて、手を引かるゝまにに見も知らぬ裏街を歩み居り候。見廻せば、兩側に立續く長屋は奥に汚れし赤煉瓦の色黒くなりて、扉傾きし窓々には灯も

海を横ざり、彼方の岸に達すると直ぐ汽車で三十分ばかりの距離である。日頃青いものを見る事の出来ぬ紐育の市の中から、突然この島に上ると四邊の空氣の香しさ、野の色の美しさに、人は只だ夢かとばかり驚くであらう。殊更に、自分を狂喜せしめたのは、米國の田園と云つても例の大陸的の漠とした單調な景色に倦み果てて居た曉、この島の景色が全く其の反對で、如何にも小さく愛らしく、そして變化に富んで居る事であつた。汽車道を變にして片側には小さい林や小流のある青い野を越して一帯に靜な内海が見え、片側には緑の濃い雜木林を戴いた小山が高く低く起伏して居る様子、何となく逗子鎌倉あたりの景色を思出させる様な處がある、かと思へば又平地一帯を眼の遠く限り、黄白の野菊が吹き亂れて居る鈴のやうな牧場や、葦、蘆がま、河竹など諸々な水草の葉々と繁茂して居る氣味の悪い沼地などもある。

簡かずにかう云ふ景色を見送りながら、小さい木造の停車場四五個所も通り過すと、やがて自分の下りるべき村の停車場に到着する。板敷のプラットフォームに降りると、直ぐ往來の兩側には向合せに獨逸人の居酒屋が二軒、其の前には何時も濃造の宿屋から案内の乗合馬車が出

張して居る。で、この近所は人家も稍建て込んで居て、荒物屋、八百屋、肉屋、靴屋など、村中の日用品を賣捌く小店も見え、赤子や子供の叫ぶ聲、女房達の罵る聲も聞えるが、此處から一本道を右なり左へなりと、繁つた風の竝木の下を二三町も行くと、兩側ともに會て斧を入れた事もないらしい雜木林や、野の花の美しく、青草の茫々と生茂つた岡があつて、其の蔭にちらばらと汚れた板葺の屋根が見えるばかり。四邊一面絶え間もなく囀る小鳥の歌につれて、折々犬の吠える聲、鶉の鳴く聲が遠くの遠くの方へと反響する。

自分が下宿した家と云ふのは更でも靜な此の本道から、凸凹した小山を越えて遂には遙か彼方の海邊へと通じて居る曲りくねつた小路のほとりに立つてゐる縁側附の二階家である。前方には高い雜草や灌木が風も通さぬ様に繁つた藪をなし、後一帯はこんもりした櫛の林で囲はれて居る。縁先には屋根を蔽ふ櫻の老木が一本、少し離れた芝生の上には此れも二株、大きな林檎の樹が低く枝を廣げて居る。

主人は五十ばかりの頭髮の赤い小男で、この島の鐵道會社に彼れ此二十年近くも雇はれ、毎朝汽車で本局の事務所へ通つて居る。亞米利

加人としては割合に口數をきかぬ靜かな男であつたが、自分が或人の周旋で下宿する約束を済し、初めて市中から引起して來た時には、まるで十年會はなかつた知類を迎へる様な調子で、容貌の悪い齒の汚い其の妻と共に家内は残らず裏の菜園から鳥小屋までも案内し、スポーツと呼ぶ飼犬までを自分に紹介して呉れるやら、此の島スタトン・アイランド全體の地理を説明するやら、さて最後には客間に飾つてある二十年ほど以前のワエプスターの大辭書を取出して來て、英語で分らぬ事があつたら此の字引を使ふがよいと注意して呉れた。

自分は裏手の櫛の森に面した二階の一室を借り、午前の中だけはこの年月シカゴや、リシントン、セントルイスなど、米國の彼方此方を通過ぎた折々、取集めた儘にしてあつた様々の日録やら書類やら其様ものゝ整理をした後、午後には縁先の櫻の木蔭で海の方から小山越に吹いて來る涼風を浴びながら、讀書と午睡に移り行く日影のやがて散歩すべき夕方になるのを待つのであつた。

家族と共に晚餐を済すと、丁度七時半頃である。自分は杖を片手に何時も家の前の灌木と雜草の間に通ずる小徑を辿り、小高い岡を越えて



滅の空に向ひて、惡の夢を延し、罪の業を廣ぐ  
毒草の氣概を缺き居り候。

あゝ！惡の女王よ。余は其の冷き血、暗き酒  
倉の底に酒の滴るが如く鳴りひびく胸の上にわ

が惱める額を押當つる時、戀人の愛にはあらで、  
姉妹の親み、養母の庇護を感じ申候。

放蕩と死とは連る鎖に候。何時も變りなき  
余が愚をお笑ひ下され度く候。余は昨夜一夜

をこの姉妹と共に「屍の屍に添ひて横る」  
が如く眠り申候。

(明治四十年四月)

## 六月の夜の夢

放浪の此の身を今北亞米利加の地より歐羅巴  
の彼岸に運ばらうとする佛蘭西汽船アルタン  
號は、定めめの時間にハドソン河口の波止場を離  
れた。

七月の空に怪しき雲の峯かとはかり聳立つ  
紐育の高い建物、虹よりも大きく天空に横は  
るブルックリンの大橋、水の真中に直立する自  
由の女神像——此の年月見馴れ見馴れた一灣の  
光景は次第々々に空と波との間に隠れて行く  
……、船はやがて縁深いスタトン・アイラン

ドの岸に添ひサンデーフックの瀬戸口から、今  
や渺茫たる大西洋の海原に浮び出ようとして居  
る……

あゝ！亞米利加の山も水もいよ／＼此の瞬  
間が一生の見納めでは有るまいか。一度去つて  
は又いつの日いづれの時再遊の機會に接し得  
よう。

自分は甲板の欄干に身を倚せかけ、名残は盡  
きぬスタトン・アイランドの濱邊の森なり、村の  
屋根なりと、今一度見納めに見て置きたいもの  
と焦り立つた——あゝ彼の島の濱邊に自分は船  
に上る昨日の夜半まで、まだ過去らぬ今年の夏  
の一個月あまりを暮して居たのである——然る  
を七月午前の烈しい炎暑は鉛色した水蒸氣に海  
をも空をも罩め盡し、森や人家と共にかの小高  
い丘陵をも雲か霞のやうに模糊とさせて居る。

名残未練、執着——嗚呼こんな無情な堪難い  
苦悶が又とあらうか。只さへ心弱いこの身のま  
してや一人旅、もしや今夜にも悲しい月の光の  
靜に船窓を照してもしたなら、自分は狂亂して  
水に身を投ずるかも知れぬ……。泣きたい時に  
は泣くより外に爲やうはない。悲しい時にはそ  
の悲しみを語るがせめての心遣りであらう。自  
分は大西洋上、波に捲れながら筆を執る……。

\* \* \* \*

思返すと日本を去つたのは四年前、亞米利加  
は今わが第二の故郷となつた。忘れられぬ事、  
懐しい事の數ある中にも、殊更忘れ兼ねるのは  
昨夜別れた少女の事である、愛らしいロザリン  
が事である。

此年の夏の初め果樹園に林檎の花の散盡した  
頃であつた。自分は此の四年間米國社會の見た  
い處調べたい處も、先づ大抵は見歩いたので、  
此の秋の末頃には國許から歐洲渡航の旅費の届  
くまで、紐育市中の異さを避ける爲め灣口に  
横はるスタトン・アイランドの濱邊に移つた  
のであつた。

スタトン・アイランドと云へば一夏を紐育に  
滞在して居た人は誰も知つて居よう。サウスビ  
ーチのミッドランドビーチのとは處彼處に  
海邊の見世物場涼み場游泳場などのある處であ  
る。然し自分が静養すべく選んだ處は同じ島  
の中ではありながら「王座日曜位」に市中から極  
く釣好きの連中が来るばかり、其の他のものは  
恐らく其の地名さへも知らない位な極く邊鄙な  
不便な海邊の一小村である。

屋形船のやうな橢圓形の平い大きな蒸汽船で

上なる家の方を眺めて居た。

歌は最ういくら待つて居ても二度聞える望はない。木蔭を渡れる窓の灯が不意と消えた、

かと思れば、二聲ばかり大の吠える聲、つゞいて垣根の小門をばカタリと開ける音がした。

自分は初めて空想から覺め早足に岡を越えて、曲りくねつた草徑をわが家の方へと追つて

行つたが、すると突然四五間先に動いて行く眞白な物の影を見た……小作な女の後姿である。

夏の夜の空の明り星の輝き螢の火に自分はその女が蚊を追ふために折々日本製の團扇を

動かす細い手先と、眞白な衣服につれて白い布の半袖まで、薄暗いながらにはつきりと見分ける事が出来た。幽暗朦朧の中には却つて微細な

ものゝ見分けられる事がある。

女の姿は一度草道の曲る處で、其の身丈より高い雑草の中に隠れたが、同時に何か口の中で歌ふ歌が聞えて、遂に其の行き盡した處は意外にも自分の宿つて居る家の前であつた。

自分は驚いて四五間此方に立止る。其れとも知らぬ女は家の外から若い甲高い聲で、ホー——と元談らしく呼び掛けると、何事にも禮儀のない無造作な處が米國生活の特徴で、内からは女房が大聲で——Come in——と叫んだ。

然し女は室内へは入らずハニーサックルの萼草咲き匂ふ縁側の上口に腰を下した。

この女こそ彼の歌の主、この女こそ自分が今忘れようとしても忘れられぬロザリンである。

然し初めて宿の妻から紹介された時には、自分は夢にも此様ことにならうとは思つて居なかつた——いや單に懇意な友達になり得ようとも

思はなかつた位である。何故なれば自分は此の年月の経験で、米國の婦人とは如何しても自分の趣味に適する様な談話をする事が出来ない。

彼女等は極端な藝術論や激しい人生問題の話を相手とするには、餘に快活で餘に思想が健全過ぎるので自分は折々新しい場所で見つけた婦人に紹介されても、其後は單に語學の練習と人情觀察の目的以外には、決して純粹の座談笑話の愉快は期待しない事にして居るのであつた。

さればその夜、初対面のロザリンに對しても例によつて例の如く、若い婦人に對する若い男の義務として、嫌ひなオートモビルの話でも、又は教會の話でも、何でもして見るつもりで居た。處が劈頭第一に、自分はオペラが好きか何

うかと云ふ意外な質問に會ひ、つゞいてブツチニの「マダム、バターフライの事、今年四五年

日で再び米國の樂境を狂氣せしめたマダム、メルバが事、其れから今年の春初めて亞米利加で演奏されたストラウスの「シンフォニー・ド・メ

スチカ」の事など、意外な上にも意外な問題に宛ら百年の知己を得た様な心地で殆ど嬉し涙が溢れて來さうであつた。

自分は白狀するが實際西洋の女が好きである。自分だけ西洋の女と、英語であれ、フランス語であれ、西洋の言語で、西洋の空の下、西洋の水

のほとりに、希臘以來の西洋の藝術を論ずる事が何よりも好きである。つまり自分が妙に米國の婦人を解釋して了つたのも最初あまりに豫期する事の多かつた結果に外ならぬのであらう。

宿の妻は餘に話が高尚なものと又、ツには此國の習慣として、若いもの同士の談話が興に入ると思へば、母親でも教師でも成りたけ其の興味の妨けをせぬ様にと、座をはづすが常とて何かの物語を幸ひに裏手の小小屋の方へと出て行つた。

話はいつか日本の婦人の生活流行結婚の事などに移つて居たので、自分は極く無聊着に、ロザリン嬢は米國婦人の例として矢張獨身論者

海邊の方へと下りて行く。と、波打際一帯は濕けた牧場で、細育本州の海岸の様に怒濤の激する岩や石などは一ツもない。そして沼か澤の様に葦の繁つて居る一條の長い浮洲が濃い藍色の海原に突出て居る。この浮洲の輪廓はいかにも柔かく曲線の緩かな事は、最初一日見た時自分は何と云ふ譯もなく歡樂の夢に疲れた裸美人の横げに横はつて居るやうだと思つた。

浮洲の陰には日頃内海の穩な上に潮の流の猶急ならぬを幸ひ、近村の釣舟や小形のヨツトや自動船などが幾艘となく繋がれてゐる。それ等の舟は何れも眞白に塗り立てゝあるので丁度公園の池に白鳥の浮いて居るやう。日の落ちた黄昏の頃には夕照の紅色と暮れ行く水の青きとが、この浮洲一帯の緑の色と相對して形容の出来ない、美しい色彩を示すのである。

最早や島中の他の勝地妙景を探り歩く望みも餘裕もなくなつた。自分は毎日同じ處に佇んで同じ入江と浮洲ばかりを飽かずに打眺めるのであつたが、やがて圖邊は次第に暗くなつて最後に残る彼の眞白な小舟の色さへ、黒ずむ水と共に見えなくなると、亞米利加の黄昏は消え去る事早く、何時の程にか靜で明い六月の夏の夜となる……。

あゝ六月の夏の夜。何たる空想夢幻の世界であらう。日増しの暑さに四邊は夥しい蚊であるが、同時に野一面森一面、無數の螢が雨の様に亂れ飛ぶ。夕潮が生茂る葦の根に吸泣く。水楊や楓の葉が夜風に私語く。蟋蟀と蛙の歌の絶えざる中に何とも知れぬ小鳥が鳴く。空氣は一夜の中に伸びたいだけ伸びようとする野草の香に満ちて居る。自分は放浪の身のよしや一度は詩人と云ふ詩人が夢に見る瑞西の夏伊太利の春の夜に逢ふ事があるとしても、然しこのスタト・アイランドの夏の夜の様ばかりは如何なる時とても忘れる事は出来まいと思つた。何故なれば自分は今眠れる海を前にし、愈へる林を後にし、高き野草の中に半身を埋め、無限の太空中に無數の星を打仰ぎ、諸有る自然の私語を盗み聴き、殊には蒼然として物凄じい螢の火の雨を見遣つて居ると、此の身は何時ともなく冬の來るべき北亞米利加の大陸に居る様な心地はせず、所謂デカダンス派の詩人の歌ふ夢の郷土の國の空の下にでも彷徨ふ様な一種の強い神祕と恍惚とに打たれるからである……。

この島に引移つてから丁度一週間日の夜の

事である。自分は例の如く黄昏の浮洲を眺め飽きた後、家の方へ歸行くとも心いかず、足の導くがまゝに元と來た草徑を辿つて岡の麓まで來た。

多分氣味の所爲であつたらう。螢の火は常より若く輝き、星の光もまた明に、野草の薫も一際高く匂ひ渡るので、自分は日頃よりも一倍深く、あゝ此れこそ眞刻の愉快な夏の夜だ。地上には花の枯萎む冬も嵐も死も失望も何にもなく、身は魂と共に唯夏と云ふ感覺の快味に酔ふばかりだと感じた。同時に自分は兎か狐の様に、四邊を蔽ふ雜草の中に寝られるだけ安樂に眠つて了ひたい様な氣が起り、枝にすがつて今更の如く星降る空を遠く打仰ぐ……其の時突然前なる小山の上の一軒家からピアノの音につれて若い女の歌ふ聲が聞えた……。

自分はハツとばかり耳を澄したが、するとピアノの調は露の雫の落ちて消ゆるが如く消え失せ、歌も亦ほんの一節、つれづれの餘に低唱したものと見えて、途絶えたなり、後は元の明く蕭然な夏の夜であつた。蟲の聲ばかり、蛙の聲ばかり。

自分は群れ集る蚊をも忘れて久しい間草の上に佇んだ末は、遂に腰まで下してぢつと岡の



の火が幾個となく数へられ、又遠く大西洋の出口サンデーフックの方に當つては終夜危険なる内海一帯の航路を照すサーチライトの反射が望まれた。自分の後と直ぐ目の下には村の夏木立が眞黒に横はつて居る。

自分は覺えず立止ると彼女に夢に物云ふ如く

— Beautiful night, isn't it? I love to

watch the lights on the sea. と言つたが、自分の耳にはこの語が非常に快い韻を踏んだ詩のやうに聞きなされた。

何と答へよう。自分は唯頷いたなり首を垂

れたが其の時彼女はあるたゞしく自分の袖を引いて、鳥が鳴いて居る、何だらう、駒鳥ぢやないか知らと云ふ。

成程、細くて高い笛の様な優しい聲が一度途切れて又続いた。

自分はこの度は躊躇はさずローメオが忍びふ

夜に聞いた一夜の鶯であらう、亞米利加には Nightingale と云ひ Bousignole と云ふ様な夜に歌ふ小鳥は居ないと聞いて居たが現在あの優しい鳴音はどうしても詩に歌はれた其れに違ひは無い、と自分は斷定した。

實際、この國に育つたロザリンもさだかには鳥の名を知らなかつたのだ。二人は別に異論も

なく、ローメオの聴いた鳥と云ふ事にしてしまひ、さて改めて最う一聲なり二聲なり其の鳴く聲を聴かうとしたが、早や何處へやら飛び上つて了つたらしい。

自分は小山の頂からほんの一二歩下りかけた道の右側にある彼女の家まで送つて行き、廣い芝生と花園を圍んだ垣根越に最後の握手と共に Good night の一語。かくして其の夜は別れて歸つたのであつた。

自分は次の日、目を覺ますと前夜の事がどうしても夢であるやうな氣がしてならなかつた。現實にあつた事としてけ餘りに詩的である。餘りに美し過ぎる。同時に自分の生涯には最う二度とあの様な美しい事は起るまいと妙に果敢ない氣もした。

午飯の時に宿の妻が問ひませぬのに、いろいろとロザリンの事を話して呉れた。父親は元英吉利の商人で、度々家族をつれて亞米利加へ來た後、ロザリンをば宗教學校の寄宿舎に預けて更に南亞弗利加のケープタウンへ赴き、其の地でかなりの財産を作つて七八年前に歸つて來た。そして今の處に別荘を構へて隱居して了つ

たので、ロザリンは全く親の手を放れて育つたも同様、その爲めか極く氣の勝つた淋しい性質らしく、今日まで此れと云つて親しい友達も作らず、又何につけ物事をば兩親はじめ誰にも相談などする事はなく、何時も己れ獨りきりで決斷分別をつけ、而も別に淋しい顔付悲しい様子など見せた事もないと云ふ事である。

食事を済すと、自分は例の通り櫻の木蔭に起き讀み掛けたマラルメの散文詩を開いたが、すると其の興味に引入れられるまゝ、次第に昨夜の事も、世の中の事も、自分の身の上も、皆な忘れて了つて、芝生の上に横はる木の影道の上に落つ眩い日の光のみに映じて、あゝ夏は美しいと思ふばかりであつた。夕方になつていざ散歩の折、自分は初めて今宵かの浮洲を見に行くには一本道の是非にもロザリンの家の前を行き過ぎるのだと心付いた位である。

自分は逢ひたいやうな父逢ひたくない様な、極めて臆腫としたまゝで、何時もの草徑を歩んで行つたが、まだ小山の頂まで達せぬ中、嬭の様に暮れかゝる野草の陰から、— Halo! — I am! — と云ふ雲雀の様なロザリンの聲を聞き付けた。彼女は今宵も(自分に)とは明かに云はなかつたが、自分の宿の妻を訪ねて行

ではあるまいかと質問して見た。

すると彼女は「親」と云ふ平凡な例の中に数へ入れられたのを、非常に憤慨したらしい様子で、一寸ドラマチックな手振をなし、「私は決して獨身主義ではないけれども、屹度獨身でゐなければならぬと思つて居る。それも決して消極的結果ではないから絶望した悲惨な憂鬱なフランスの寡婦の様なものにもならず、さうかと云つて米國の獨断な冷酷な老嬢にもなりは爲ない。私はアメリカの教育を受けたが五歳の年まではイギリスに育つて、両親とも昔から純粹のイギリス人です。イギリス人は驚れるまでも笑つて戰ふ。だからもしや一生獨身で暮す様な事になつても、私は死ぬまで此の通り何時までも此の通りのお轉婆嬢でせう。」

云切つたその言葉には英語に特有の強い調子が含まれて居ると共に、成程動しがたい英人の決斷が宿つて居るらしく聞えたが、然し自分にはロザリンの弱々しい小作りの姿を見ると、其の語調の強烈なるだけ深く何とも知れぬ一味の悲哀を感ずるのであつた。夏とは云ひながら餘りに美しく静かな夜の所爲であつたかも知れぬ。自分は總て彼女に問返されるすゝ、此度は自分の主義を述べる事になつた。然しそれは主義

主張意見など云ふよりは全て夢か談話の様な空想であらう——自分の胸には夢より外に何物もない。

自分は結婚を非常に厭み恐れると答へた。此れは凡ての現實に絶望して居るからである。現實は自分の大敵である。自分は戀を欲するが、其の戀の成就するよりは寧ろ失敗せん事を願つて居る。戀は成ると共に烟の如く消えて了ふものである。されば得がたい戀失へる戀によつて自分は一生涯をばまことの戀の夢に明してしまひたい——此れが自分の望みである。ロザリン如く、レオナルド・ダ・ヴィンチとジオ・コンダの物語を御存じかと自分は尋ねた。

宿の裏が裏の井戸から冷い水をコップに入れて再び座に戻つたので、自分もロザリンも云合した様に話を他に轉じたが、間もなく機會を見てロザリンは時間を訊きながら椅子から立つた。夜は早や十一時を過ぎたと云ふ事である。

然し宿の主人は村人の催すボカと云ふ骨牌の會にと、宵の口に出て行つたなり未だ歸つて来ない。家中に男は自分一人の事として義務として、彼女を其の家まで送つて行くべき場合である。自分は宿の妻が點して呉れた小な提灯を片手に輕くロザリンの胸を扶けて、かの海邊に

と通ずる草徑を辿つて行く……。

劇場の舞臺ならぬ現實の生店に此の様な美しい役目が又とあらうか。自分はアメリカに來た後とても夜の道花の陰をば若い女と歩いた事は幾度もあるが、今夜に限つて如何したものか、最初の經驗の如くに無暗と心が亂れて來てならなかつた。

唯さへ靜かな島の夜は小夜ふけて餘りに靜な爲めか。或は驟雨の來る様に木の葉や草の葉の折々妙に物凄く打戦ぐ所爲か。或は蟲の聲蛙の聲の云ふに云はれず鮮に星降る空に反響して天地には今や全く自分とロザリンと此の二人しか覺めて居らぬと云ふ意識の餘に強く心を打つが爲めか。自分はこの何とも知れぬ心の亂れをば理由もなく相手に悟られまいと焦り立つて居た。で、片手に下げた提灯の火が、凸凹した足許を照す光に、自分はもしや顔を見られはせぬかと、それとなしに空のみ仰ぎながら歩いて行つたのである。

ロザリンも黙つて何れかと云へば早足に歩みながら次第に坂道を上つて行つた。やがて高く生茂る草の上に彼女が家の屋根が見えるあたりまで來ると二人の前には忽ち大空が一際廣く打廣がり、暗かな海上瀬戸内の彼方此方には燈臺

間まで平日通りに雑談して居たでは無い。

然し十時を過ぎた後、毎夜の如く自分は彼女を送つて外へ出ると、今宵は即ち十六夜で昨日にも勝る月の光。夜毎眺め飽す身に余りの美しさに、二人は何とも言交す語さへなく草徑を

岡の近くまで歩いて来たが、其の時自分は忽然何とも知れぬ悲しさが身に浸み渡つて来るやうな氣がした。ハツと心を取直さうとする刹那、ロザリンは道傍の石に躓いたらしく突如自分の方に倚り掛つた……自分は驚いて其の手を取る

と彼女は其のまゝひしとばかり自分の胸の上に顔を押當てゝ了つた。

半時間あまりも、夜露に衣服の重くなるまで

も、二人は何の語もなく相抱いたまゝ、月中に立竦んで居たのである。實際何とも云ひ出す言葉はない。二人とも何程戀しいと思つた處で、自

分は旅人、彼女は親も家もある娘、永く幸福の夢に酔ふ事の出来ぬ事情は已に云はず語らず知り合つて居たからで、さればこの上に申出づべき事は唯二つ有るのみである。自分は故郷の關係をすっかり斷つて了つて、獨力で生活の道を

永遠に此の國に求めようか。或はロザリンをして両親の家と此れまで育つた亞米利加の國土を出奔せしめるか。此の二つだけである。然

し自分は如何に切なくとも、到底そこまでは進んで云ひ出し兼ねる。ロザリンとても亦男の身に戀の爲め浮世の凡てを打捨てゝ呉れよとは、如何して云ひ切れよう。

二人は遂に常識の人であつたのかも知れない。亞米利加と云ふ周囲の力が知らず識らず慫慂爲しめたのであらうか。或は吾々の戀が未だそれまでに到らなかつたのであらうか。否、自分等二人の戀は命を捨てたロメオやパウロやジュリエットやフランチェスカの其れにも劣らぬものと信じて疑はない。二人は、今此處で一度別れては何日又逢ふか分らぬ身と知りながら——瞬間の美しい夢は一生の涙、互に生

残つて永遠に失へる戀を歌はんが爲め、其の次の日からは毎日の午後をば村はづれの人なき森に深い接吻を交したのであつたものを。

あはれ船は早や大西洋を横斷り盡して程なくフランスのアーブル港に着くと云ふ事だ。今朝、アイランドの山が見えたとき人が話して居る。もう、長く筆を執つて居る暇はない。僅か一週間と云ふ日數の中に我が身は今如何に遠く彼女から離れて了つたのであらう。

遠く離れれば暮れるほど彼女の面影はありありと目に浮ぶ。彼女は稍黒みを帯びた金髪であつた。西洋人には稀に見らるゝ程長く濃い其の金髪をば、何時も無造作に束ね、顔に垂れる後毛をば絶えず指先で搔上げる様子の如何にも情味が深い。竝んで立つと丁度自分の頭ほどしかない——アメリカの女としては極く小作りの方であつたけれど、然し肉付がよいのと、何時も極端に直立の姿勢を取つて居るので、どうかすると非常に丈け高く、大きく見える事もあつた。潮水の様な青く深い眼と、細くて稍尖つた其の容貌は、熱心に品でもする折には、どうしても神經の過敏を示すだけ、ちツと落着いて居る時には、云ふに云はれない威厳と強くて勇ましい愛戀を現す。——即ち明るい、鮮な輪廓の繪にもしたい様な妖艶な南歐の美人とは全く反對で、何處か鈍い處に一種の悲哀があり、その悲哀の中に女性特有的優しさが含まれて居る北方アングロサクソン人種に能く見られる類型の一つであつた……

突然上甲板の方に人の騒ぐ聲が聞える。アーブル港の燈火が見え始めたのだと云ふ。船房



く處だと話した。

で、其の夜も晩くまで話をして、昨夜の如く夜道をば提灯を片手に、再び名の知れぬ夜の鳥の囀る聲を聞き、彼女が家の垣根陰まで見送つて行つたが、また其の次の日の午前には岡すも村の本道で、彼女が郵便局へ行くとやら云ふ途中に出會ひ、そのさしきさず日傘の下に歩調を揃へて歩いた。

何しろ、狭い村の事、道は多からず、散歩する時間も大抵はきまつて居るので、その後は殆ど毎日のやうに、自分は一日の中、何處かで一度、顔を見ぬ事はない様になつたのである。その結果として或日二日ばかり雨が降通して何處へも出られず、從つてロザリンの姿を見る事の出来ない場合に遭遇したが、すると、自分は寂しくて寂しくて、檐下に唯一人田舎家の屋根を打つ雨の音をば聞澄して居るには忍びない様な心地になつた。尤もこれは紐育に居た三年間、静な雨の音など聞いた事が無かつた所爲でもあらうが——遂に自分は毎晩夜寝る時には、窓から空の星を仰ぎ見て、どうか明日も散歩に出られるやうな好い天氣になる様にと、心からひそかに念ずるのであつた。

早の夏は自分の願つた通り時々日の中に驟雨

の降過ぎるだけで毎日の天氣つゞき。殊に夜は月が出る様になつた。自分はこの年のこの夏ほど毎夜正しく新月の一夜々々大きくなつて行くのを見定めた事はない。

あゝ今となつては却つて此の月の光が恨である。月の光さへなくば、夜の鳥、蟲の聲、草の香、木の葉の囁きに、夏六月の夜は如何に美しくとも、自分は……ロザリンは……二人はかくも輕々しく丘の唇をば接するには至らなかつたのであらう。

自分は此の島の青葉が黄く、また紅くなり居らぬ中、いづれアメリカを去らねばなるまいと云ふ事は、前から已にロザリンには打明けて居た。又、或時には自分は四年が間アメリカの生活をした記念に、せめては長く手紙のやりとりをする様なブロードの女達が欲しいものだ……と云へば、ロザリンも笑つて讀みにくいルーズベルト新式の綴字で手紙を書いて送らうと答へた位であつた。されば二人は唯だ愉快に此の美しい夏の夜を遊んで暮さうと、初めから、明かに互の地位境遇を知り抜いて居た筈である。

然し夏の夜は若いものが唯遊んで暮さうと云ふには、餘りに美しく過ぎた。月は絲の様な其の頃から一夜も缺かさず静な其の光に二人が

語る唇を照し、自然々々知らぬ間に、われ等が魂を遠く夢の郷にと誘き入れて了つたのである。

自分はどうしても自分の意思をば弱いものであつたと云ひたくない。最後まで自分はロザリンを愛する事は出来ぬ。縦ひ心の底はどうあつても、それをば皆い奴に打明けべきでは無いと意識して居たからである。

丁度十五夜の満月をば夜半過ぎまで眺め明し、亞米利加では月の面に人の顔があるとロザリンが云へば、日本では兎が立つて居るのだと答へて、その何れが正しいかと他愛もない議論をした。其の翌日の事、自分は意外にも早く故郷からの音信に接し、秋を待つ間もなくこの二週間以内には是非とも歐羅巴に向はねばならぬ事情に立ち至つた——其の事情をも自分は殆ど何の躊躇もする事なく島渡紐育の市中へでも遊びに行くやうに、極く簡単に無造作に打明けて了つた。

するとロザリンも同じく左程に驚いた様子もせず、行先はフランスかイタリヤか、何日頃に出發するかなど質問して、宿の夫婦とともく客

妾

宅

どうしても心から満足して世間一般の趨勢に伴つて行くことが出来ないといふ知つたその日から、彼はとある糊削のほとりなる妾宅にのみ、一人倦みがちな空想の日を送る事が多くなつた。今の世の中には面白い事が無くなつたといふばかりならまだしも、見たくでもない物の限りを見せつけられるのに堪へられなくなつたからである。進んで其等のものを打壊さうとするよりも寧ろ退いて隠れるに如くはないと思つたからである。何も彼も時世時節ならば是非もないといふやうな川柳式のあきらめが、遺傳的に彼の精神を訓練してゐたからである。身過ぎ世過ぎならば洋服も着よう。生れ落ちてから畳の上に兩足を折曲げて育つた採れた身體にも、當節の流行とあれば、直立した國の人達の着る洋服も臆面なく採用しよう。用があれば停電しがちの電車にも乗らう。自動車にも乗らう。園遊會にも行かう。浪花節も聞かう。女優

の轍も下からのぞかう。沙翁虚も見よう。洋樂入りの長唄も聞かう。頼まれれば小説も書かう。粗惡な紙に誤植だらけの印刷も結構至極と喜ばう。それに對する粗忽千萬なジウルナリズムの批評も聞かう。同業者の訛みにあままり黙つてゐても悪いやうなら議論のお相手もしよう。けれども要するに、其れはみんな身過ぎ世過ぎである。川竹の憂き身をかこつ歌澤の絲より細き筆の命毛を渡世にする是非なさ……オツト大變忘れたり。彼と云ふは堂々たる現代文士の一人、但し人の知らない別號を珍々先生と云ふ字可通である。かくして先生は現代の生存競争に負けないため、現代の人達のする事は善惡無差別に通りは心得てゐようと努めた。その代り、さうするには何處か知れぬ心の隠家を求めて、時々生命の洗濯をする必要を感じた。宿なしの乞食でさへも眠るには猪橋の下を求めではないか。厭な客衆の勤めには、傾城をしり過ぎの情人を許してやらねばならぬ。先生は現代生活の假面を成るべく巧に被り畢せる

ためには、人知れずそれをぬぎ捨てべき樂屋を必要としたのである。昔より大隱のかくれる町中の裏通り、堀割に沿ひ日かけの妾宅は即ちこの目的の爲めに作られた彼が心の安ん所であつたのだ。

## 二

妾宅は上り框の二疊を入れて僅か四間ほどしかない古びた借家であるが、拭込んだ表の格子戸と家内の障子と唐紙とは、今の職人の請負仕事を嫌ひ、先頃まだ吉原の焼けない時分、廢業する藝者家の古道具を其のまゝ買ひ取つたものである。二階の一間の欄干だけには日が當るけれど、下座敷は茶の間と共に、外から這入ると人の顔さへ鳥渡は見分かぬほどの薄暗さ。奥へ出る義先の小庭に至つては、日の目を見ぬ地面の濕け切つてゐること氣味わるいばかりである。然し先生はこの薄暗く濕つた家をば、それがために却てなつかしく、如何にも浮世に遠く失敗した人の隠家らしい心持をさせる事を喜んでゐる。石臼の水針を置いた櫺子窓の下には朱の滑臺の鏡臺がある。藝者が弘めをする時の手拭の包紙で腰巻した襦の上に銀金の包みを着た一味線が二挺かけてある。人さな

の外の廊下をば—— Nous voilà en France——  
(佛蘭西に着いたぞ。)と云つて 駆けて行くものがある。甲板の方では男や女が一緒になつて、

Allons enfans de la patrie,

Le jour de gloire est arrivé.

と歌ふ「マルセイエーズ」が聞え出した。自分達は遂にフランスに着したのだ。

然しこの止みがたき心の痛みを如何にしよう。自分は思ひ出すともなくシモンセがモザルトの樂譜に合せて作つた一詩——

Rappelle-toi, lorsque les destinées

M'auront de toi pour jamais séparé,

Songe à mon triste amour, songe à

L'idien suprême!

Tant que mon cœur battra,

Toujours il te dira :

Rappelle-toi.

「思ひ出でよ。もし運命の永遠に、我を君より分ちなば、我が悲しき戀を思ひ出でよ。別れし折を思ひ出でよ。心の響消えざらば、とこしへに心は君に語るべし、思ひ出

でよ思ひ出でよ。」

心の中に口ずさみながら初めて見るフランスの山に自分は敬意を表する爲めにと、一足々々甲板の方に歩いて行つた。

Rappel-toi, quand sous la fraîche terre

Mon cœur brisé pour toujours dormira

Rapp lie-toi, quand la fleur s'ouvrira

Sur mon tombeau doucement s'ouvrira

Tu ne me verras plus mais mon âme

immortelle

Reviendra près de toi comme une sœur

futile.

Ecoute dans la nuit,

Une voix qui gémit :

Rappelle-toi

「思ひ出でよ。冷き土に永遠に、わが破れし心臓りなば、思ひ出でよ。淋しき花の徐に、わが墳墓に開きなば、君は再びわれを見じ。されども朽ちぬわが魂は、親しき妹が如くに、君が傍に返り來ん。心澄して夜に聞け。さやく聲あり、思ひ出でよ。」

(明治四十年七月)

# 秋

アンリイ・ド・レニエ

枝より枝を渡る風は  
明き夏とまた暗き日に、  
黒き泉と白き鳩啼く  
老木の梢をゆする。

木の葉に滴る雨の聲、  
やさしくも又ものうきは  
さすらふ身には一歩々々  
「悲しみ」の忍び吾と聞かれずや。

緑より黄に、黄よりして紅に  
又黄金色より黄金のいろに  
木々の梢の老い行けば、われは  
秋より秋に散りて行くわが「過去」を思ふ。

林より聳えたる頂よりして頂に  
紅の檜と緑の松を動せども  
吹く風は嚴かに聲をひたり、  
かの「苦み」と「海」の如くに。

『珊瑚集』(44)



きつた淋しい心をゆすぶらせる。家の中はもう眞暗になつてゐるが、戸外にはまだ斜にうつらふ冬の夕日が残つてゐるに違ひない。あゝ、三味線の音色、何といふ果敢い、消えも入らたき衰れを催させるのであらう。嘗てそれほどに、まだ自己を知らなかつた得意の時に、先生に長たらしい小説を書いて、その一節に三味線と西洋音楽の比較論などを試みた事を思返す。世の中には、古社保存の名目の下に、古社寺の建築を修繕するのではなく、却て此れを破壊若しくは簡化する巨師があるやうに、邦樂の改良進歩を企て、却て邦樂の眞生命を殺してしまふ熱心家のある事を考へ出す。然し先生はもう其等をば餘儀ない事であると諦めた。こんな事を云つて三味線の議論をする事が、已に三味線の爲めには此の上もない侮辱なのである。江戸音曲の江戸音曲たる所以は時勢のために見る影なく踏みじられて行く所にある。時勢と共に進歩して行く事の出来ない所にある。而も一思ひに潔く殺され滅されてしまふのではなく、新時代の色々な野心家の汚らしい手にいちくり廻されて、散々慰まれ辱められた身句、驕り殺しにされてしまふ傷しい運命。それから生ずる無限の哀傷が、即ち

ち江戸音曲の眞生命である。少くともそれは二十世紀の今日洋服を着て葉巻を吸ひながら聞く吾々の心に響くべき三味線の咳きである。さればこれを改良するといふのも、或はこれを滅滅するといふのも、何れにしても滅び行く三味線の身に取つては同じであると云はねばならぬ。珍々先生が帝國劇場に於て「金毛狐」の如き新曲を聴く事を辭さないのは、つまり灰の中から寶石を捜出すやうに、新しきものゝ處に、まだ其儘残されてゐる昔のまゝの節附を拾出す果敢い樂しさの爲めである。同時に撰古派の歌舞伎座に於て大陣座を聞く事を喜ぶのは、古きものゝ中にも知らず／＼浸み込んだ新しい病毒に、遠からず古きもの全體が腐つて使れてしまひさうな、其の遺瀾ない無常の眞理を悟り得るが爲めである。思へば却て不思議にも、今日と云ふ今日まで生残つた江戸音曲の哀愁をば、先生は恰も廓を抜け出で、唯だ一人間の夜道を跣足のまゝにかけて行く女のやうだと思つてゐる。たよりの戀人に間違つた處で、本永く添ひ違はれるといふではない。互に手を取つて南無阿彌陀佛と死ぬばかり。若し駕籠かきの惡者に間違つたら、庚申様の數かげに思ふさま弄ばれた身句、生命あらばまた遠國

へ賣り飛ばされるにきまつてゐる。追手に捕まつて元の曲輪へ送り戻され、ば煙管の折檻に、又しても毎夜の曇きつとめ。死ぬと云ひ消えたと云ふが、此の世の中に此の女の望み得べき幸福の絶頂なのである。と思へば先生の耳には本調子も二上りも三下りも皆この世は夢ぢや諦めしやんせ諦めしやんせと響くのである。されば陽で唄ふ歌の文句の、夢とおもひて清心は、「といひ頼むは彌陀の御誓ひ、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。」といふあたりの節廻しや三味線の半に至つては、江戸音曲中の佛教的思想の音楽的表現が、その藝術的價値に於て方に樂劇パルシワル中の例へば「聖金曜日」のモチイブなぞにも比較し得べきものゝやうに思はれるのであつた。

## 四

諦めるにつけ惜るにつけ、流石はまだ凡夫の身の悲しさに、珍々先生は昨日と過ぎし青春の夢を思ふともなく思ひ返す。不圖したことから、かうして困つて置くお亥の身の上や、關初めのむかしを繰返して考へる。お亥は無調藝者であつた。仲之助で一時は鳴した腕。藝には達者な代り、全くの無筆である。稽古本で見馴

如輪の長火鉢の傍にはきまつて猫が寝てゐる。  
襖を越した次の座敷には薄暗い上にも更に薄  
い床の間に、極彩色の豊國の女姿が、石州流  
の生花のかげから、過ぎた時代の風俗を見せて  
ゐる。片障には「命」といふ字を筆の形のやう  
に繋いだ赤い友禪の藩圖をかけた置炬燵。その  
後には二枚折の屏風に、今は大方故人となつ  
た役者や藝人の改名披露やおさらひの習物を張  
つた中に、田之助半四郎などの死繪二三枚をも  
交せてある。彼が殊更に、この薄暗い妻宅をな  
つかしく思ふのは、風鈴の音涼しき夏の夕より  
も、蟲の音清ゆる夜長よりも、却て底冷のする  
曇つた冬の日の、どうやら雪にでもなりさうな  
某方近く、この一間の炬燵に猫を膝にしなが  
ら、所在なげに生欠伸をかみしめる時であるの  
だ。彼は窓外を呼び過ぎる物賣りの聲と、遠い  
大通に轟き渡る車の響と、風の向うの腐  
りかけた建仁寺垣を越して、隣の家から聞え  
出すはたきの音をば何といふわけもなく悲しく  
聞きなす。お婆はいつでも此の時分には火湯に  
行つた留守のこと、彼は一人火火のない座敷の  
置炬燵に眩枕して、折々は隙漏る寒い川風に身  
顫ひをするのである。珍々先生はこんな處にか  
うしていちげて居ずとも、便利な今の世の中に

はもつと暖かな、もつと明い賑やかな場所がい  
くらも在る事を能く承知してゐる。けれども然  
う云ふ明い暖やかな場所へ意氣揚々と出しやば  
るのは、自分などが先に立つてやらすとも、成  
功主義の物欲しい世の中には、さう云ふ處へ出  
しやばつて齒の浮くやうな事を云ひたがる連中  
が、有り餘つて困るほどある事を思返すと、先生  
は寒く薄寒い妻宅の置炬燵にかじりついて居る  
のが、涙の出るほど嬉しく淋しく悲しく同時に  
また何とも云へぬほど皮肉な得意を感じるので  
あつた。表の河岸通には日々と共に吹起る空ツ  
風の音が聞え出すと、妻宅の障子はどれが動く  
とも知れず、ガタリ／＼と妙に氣力の抜けた陰  
氣な音を響かす。その度々に寒さはゾク／＼と  
元へ浸み入る。勝手の方では、いつも居眠りし  
てゐる下女が、又しても皿小鉢を破したらしい  
物音がする。炭圍はどうやらもう灰になつてし  
まつたらしい。先生はかう云ふ時、つく／＼こ  
れが先代々日本人の送り過越して來た日本の  
家の冬の心持だと感ずるのである。甕井其角の  
家にもこれと同じやうな冬の日が幾度となく來  
たのであらう。喜多川歌麿の繪筆持つ指先もか  
かる寒さの爲めに凍つたのであらう。馬琴北齋  
もこの置炬燵の火の消えかゝつた果敢なきを知

つてゐたであらう。京傳・九春・水種彦を初め  
として、魯文・默阿彌に至るまで、少くとも日本  
文化の過去の誇りを残した人々は、皆おのれと  
同じやうな此の日本の家の寒さを知つてゐたの  
だ。而して彼等は此の寒さと薄暗さにも恨むこ  
となく反抗することなく、手鏡をはめられ板不  
を取壊すお上の御成敗を甘受してゐたのだと思  
ふと、時代の思想はいつになつても、昔に代ら  
ぬ今の世の中先生は形ばかり西洋模倣の倶楽  
部やカッフェエの暖爐のほとりに背巻をくゆら  
し、新時代の人々と舶來の火酒を傾けつゝ、  
恐れ多くも天下の御政事を云々したとて何にな  
らう。吾々日本の藝術家の先人的に定められた  
運命は、矢張りかうした置炬燵の眩枕より外に  
はないと云ふやうな心持になるのであつた。

### 三

人種の發達と共に其の國土の底に深くも根ざ  
した思想の遞嬗を鑑み、幾時代の遺傳的修養  
を経たる忍從棄權の悟りに、われ知らず襟を  
正す折しもあれ。先生は時々かゝる外れがた近  
く、隣の家から子供のさらば椿吉の三味線が、  
却て午飯過ぎの眞晝よりも一層賑やかに聞え  
出すのに、眠ることもなく覺めるともなく、疲れ

少の覺悟と勇氣とあつて、初めて酒の徳を知り得るのである。傳聞く北米合衆國に於ては亞米利加印何人に對して絶對に火酒を賣る事を禁ずるは、印何人の一度酔へば忽ち狂暴なる野獸と變するが爲めである。印何人の神經は淺酌微醉の文明的訓練なきが爲めである。修養されたる感覺の快樂を知らざる原始的健全なる某帝國の社會に於ては、婦人の裸體畫を以て直に國民の風俗を墮亂するものと認めた。南阿弗利加の黒奴は闇の如く口を開いて哄笑する事を知つてゐるが、聲もなく言葉にも出さぬ美しい微笑によつて、云ふに云はれぬ複雑な内心の感情を表白する術を知らないさうである。健全なる某帝國の法律が戀愛と婦人に關する一切の藝術をボルノグラフィイと見なすのも思へば無理もない次第である——議論が思はず財路へそれた——某の主人たる珍々先生は此の如くに社會の輿論の極端にも嚴格格差偏狹單一なるに反して、これはまた極端に、凡そ賣色といふ一切の行動には何ともふへない悲壯の神祕が潜んでゐると斷言してゐるのである。冬の闇夜に惡病を負ふ辻君が人を呼ぶ聲の傷しさは、直ちにこれ罪障深き人類の止み難き眞止の嘆きではあるまいか。佛蘭西の詩人 Marcel Schwob

は吾々が悲しみの淵に沈んでゐる瞬間にのみ、唯の一夜、唯の一度吾々の目の前に現はれて來ると云ふ辻君。二度巡り會はうとしても最う會ふ事の出來ないといふ神祕なる辻君の事を書いた。「あの女達はいつまでも吾々の傍にゐるものではない。あまりに悲しい身の上の恥かしく、長く留つてゐるに堪へられないからである。あの女達は吾々が涙に暮れてゐるのを見ればこそ、面と向つて吾々の顔を見上げる勇氣があるのだ。吾々はあの女達を哀れと思ふ時にのみ、彼女達を了解し得るのだ。」といつてゐる。近松の心中物を見てゐる分ではないか。傾城の誠が金で面を張る壓制な大畫に解料されよう筈はない。變る夜毎の枕に泣く賣婦の誠の心の悲しみは、親の慈悲妻の情を仇にした其の罪の恐ろしさに泣く放蕩兒の身の上になつて、初めて知り得るのである。傾城に誠あるほど買ひもせずと川柳子も已に名句を吐いてゐる。珍々先生は生れ付きの旋毛曲り、親に見放され、學校は追出され、其の後は白浪物の辻人公のやうな心持になつて兎に角に強いもの、えばるものが大嫌ひであつたから、自然と巧やして皆い時分から賣春婦には惚れられ勝ちであつた。然しから云ふ業つくばりの男の事故、佐者が好きだと云つ

ても、當時新橋第一流の名花と世に持囃される名古屋種の美人などに目をくれるのではない。深川の堀割の夜深、石置場のかげから這出す辻君にも等しい彼の水轆の身の淺間しさを愛するのである。惡病をつゝむ腐りし肉の上に、爛れたその心の悲しみを休ませるのである。されば河添ひの妾やにゐる先生のお妾も要するに世間並の眼を以て見れば、少しばかり甲羅を經たるこの種類の安物たるに過ぎないのである。

## 五

隣の糠古唄はまだ止まぬ。お妾は人分化粧に念が入つてゐると見えてまだ歸らない。先生は昔の事を考へながら、夕飯時の空腹をまぎらすためか、火の消えかゝつた置炬燵に煙杖をつき口から出まかせに、

「變り行く末の世ながら「いにしへ」を、「いにしへ」に忍ぶの戀草や、誰れに摘めと繰返さうたふ隣のけいこ、宵はまちそして恨みて、曉と聞く身につらきいもがりは、同じ待つ間の置炬燵、川風寒き、櫛子急、急、足音きゝつけて、かけた蒲團の格子外、もしやそれかとぞいで見れば、河岸の夕日にしよんぼりと、枯れた柳の影ばかり。



れた假名より外には何にも讀めない、明日であ  
る。此の社會の人の持つてゐる諸有る迷信と體  
見と虚偽と不健康とを一つ残らず消滅的に滅り  
受けてゐる。お召の繻柄を論ずるには委しいけ  
れど、電車に乗つて新しい都會を一人歩きす  
る事などは今に出来ない。つまり明治の新しい  
女子教育とは全く無關係な女なのである。  
稽古唄の文句によつて、親の許さぬ色慾は悪い  
事であると知つてゐたので、初戀の若旦那とは  
生木を割く辛い目を見せられても、たゞ其の當  
座泣いて暮して、そして自身酒を飲む事を覺え  
た位のもの、別に天も怨まず人をも怨まず、や  
がて周圍から強られるがまゝに、厭な男にも我  
慢して身をまかした。いやな男への屈從から  
は忽ち間夫といふ秘密の快樂を覺えた。多く  
の人の玩弄物になると同時に多くの人を弄  
んで、淫きつ洗ひつ定めなき不徳と淫蕩の生涯  
の、其の果が此の河添ひの女宅に餘生を送る事  
になつたのである。深川の濕地に生れて吉原の  
水に育つたので、顔の色は生れつき淺黒い。一  
度髪の毛がすつかり抜けた事があるさうだ。酒  
を飲み過ぎて血を吐いた事があるさうだ。それ  
から身體が生れ代つたやうに丈夫になつて、中  
音の音聲に意氣な錆が出来た。時々頭が痛む

と云つては顯顯(ハシハシ)即功紙を張つて居るもの、今  
では浅多に風邪を引くこともない。突然お腹へ  
差込みが来るなどと大騒ぎをするかと思ふと、  
納豆にお茶漬を三杯もかき込んで平然としてゐ  
る。お参りに出かける外、芝居へも寄席へも一  
向に行きたがらない。朝寝が好きで、髪を直す  
に時間を惜しまず、男を相手に卑陋な冗談を  
云つて夜ふかしをするのが好きであるが、その  
割には世體持がよく、借金(カネ)の云譚がなかく巧  
い。年は二十五六、この社會の女にしか見ら  
れない其の淺黒い顔の色の、妙に滑つく磨き  
込まれてゐる様子は、丁度多くの人手にかゝつ  
て丁寧に拭き込まれた桐の手あぶりの光澤に等  
しく、いつも重さうな臉の下に、夢を見てゐるや  
うなその眼色には、照りもせず曇りも果てぬ  
春の空の云ひ知れぬ汗の味が宿つてゐる——  
とても云ひたい位に先生は思つてゐるのであ  
る。實際今の世の中に、この珍々先生ほど藝者  
の好きな人、職業婦の病的美に對して賞讃の聲  
を惜しまない人は恐らくあるまい。彼は何故に  
職業婦を愛するかといふ理由を自ら解釋して、  
道徳的及び藝術的の二條に分つた。道徳的に  
は嘗て「見栄てぬ夢」といふ短篇小説中にも書い  
た通り、特種の時代と其制度の下に發生した花

柳(ヤナギ)全體は、最初から明白に虚偽を標榜してゐ  
るだけに、その中には却て虚偽ならざるものゝ  
ある事を嬉しく思ふのであつた。つまり正當な  
社會の偽善を憎む精神の變調が、幾多の無理  
な訓練修養の結果によつて、かゝる不正暗黒の  
方面に一條の血路を開いて、茲に僅なる満足を得  
ようとしたものと見て差支ない。或は又あ  
まりに枯淡なる典範に陥り過ぎて却て真情の  
潤ひに乏しくなつた古來の道徳に對する反感か  
ら、わざと惡徳不正を迎へて一時の快哉を呼ぶ  
ものとも見られる。要するに眼底的なるかゝる  
詭辯的精神の傾向に破壊的な浪漫主義の  
主張から生じた一種の病態である事は、彼自  
身もよく承知してゐるのである。承知してゐ  
ながら、決して改換する必要がないと思ふほ  
ど、この病態を藝術的に崇拜してゐるのであ  
る。されば職業婦の美を論ずるには、極端に流  
れたる近世の藝術觀を以てするより外はない。  
理性にも同情にも訴ふるのでなく、唯過激な  
る感覺をのみ基礎として近世の極端なる藝術  
を鑑賞し得ない人は、彼から云へば到底縁なき  
衆生であるのだ。女の嫌ひな人に強て女の美  
を説き教へる必要はない。酒に害あるは云はず  
と知れた話である。而もその害處を恐れざる多

はるべき、言語に云現し得ぬ複雑豊富なる美感の満足ではないか。而もそれは軽く淡く快き半音下つた rimeur の調子のものである。珍々先生は藝者上りのお妾の化粧粧をば、つまり生きて物云ふ世繪と見て楽しんでゐるのである。明治の女子教育と關係なき賤業婦の淫靡なる生活によつて、爛熟した過去の文明の遠い驕きを聞かうとしてゐるのである。この僅かなる慰安が珍々先生をして、洋服を着ないでもすむ半日を、唯だうつくと此の妾宅に送らせる理由である。已に「妾宅」といふ此の文字が、もう何となく磨滅の氣味を帯びさせる上に、若し此れを雜話などに出したなら、定めし文藝、即ち惡徳と思込んでゐる老人達が例の物議を起す事であらうと思ふと、猶更に先生は嬉しくて堪らないのである。

## 六

お妾のお化粧がすむ頃には、丁度下女がお釜の火を引いて、膳立の準備をはじめる。この妾宅には珍々先生一流の趣味によつて、食事の折には一切、新時代の料理屋又は小待合の座敷を聯想させるやうな、上等ならば紫檀、安ものならばニス塗の食卓を用ゐる事を許さないで、

長火鉢の向うへ持出されるのは、古びて剥けてはゐれど、稍大形の猫足の塗膳であつた。先生は最初感情の動くがまゝに小説を書いて出版するや否や、忽ち内務省からは風俗壞亂、發賣禁止、本屋からは損害賠償の手詰の談判、さ文壇からは引續き歡樂に哀傷に、放蕩に追憶と、身に引受けた看板の取に等しい惡名が、今はいもつけの辛に、高等遊民不良少年をお顧客の文藝雜誌で飯を喰ふ賣文の奴とまで成り下つてしまつたが、流石に節日正しい血筋の昔を忘れぬ爲めか、或は又、あらゆる藝術の放膽自由の限りを欲する中にも、自然と備る貴族的なる形の端麗古り的な線、明晰を望む先生一流の藝術的主張が、知らず／＼些細なる常住坐臥の間に現はれる爲めであらうか。(それは作者の知る處に非ず)兎に角珍々先生は食事の膳につく前には必ず衣紋を正し角帯のゆるみを締直し、縁側に出て手を清めてから、折々窮屈さうに膝を屈す事はあつても、決して胡坐をかいたり毛脚を出したりする事はない。食事の時、佛蘭西人が極つて hôte de l'air のを願ふのから、海掛のやうに廣げて掛けると同じく、先生は必ず三ツ折にした懷中の手拭を膝の上に置き、お妾がお酌する盃を一瞥めしつゝ、徐に膳

の上を眺める。

小さな汚らしい桶のまゝに海風腸が載つてゐる。小皿の上に三片ばかり赤味がかった松脂見たやうなものゝあるのは、鯛である。千石の名産小鯛の雀焼に川海老の串焼と今宵名物の甘い柿味噌は、お茶漬の時お妾が大好物の無くてはならぬ品物である。先生は汚らしい桶の蓋を靜に取つて、下痢した人糞のやうな色を呈した海風の腸をば、杉箸の先ですくひ上げると長く絲のやうにながつて、なか／＼切れないのを、氣長に幾度となくすくつては落し、落してはまたすくひ上げて、丁度加減の長さになるのを待つて、傍の小皿に移し、再び丁寧に蓋をした後、稍暫くの間は口をも付けずに唯恍惚として景海の磯臭い寒りをのみかいてゐた。先生は海風腸のこの匂とびひ色とびひ又其の汚らしい桶と云ひ、凡て何等の修飾をも調理をも出來得るかぎりの人爲の技巧を加味せざる(少くとも表示せざる)天然野生の粗糲が陶器漆器などの食器に盛れてゐる料理の眞中に出しゃばつて、故に何とも云へない大膽な意外な不調和を見せてゐる處に、所謂雅致と稱する極めてハラドツクサルな美感の満足を感じて止まなかつたからである。由來この種の雅致は或一

まだ歸つて来ぬ。先生はもう一ツ、胸にあまる日頃の思ひをおなじ置炬燵にことよせて、へ春水が手鏡はめられ海老藏は、お江戸かまひの、むかしなら、わしも定めし鳥流し、硯の海の波風に、命の筆の水調竿、折れてたよりも荒磯の、道理引つ込む無理の世は、今もむかしの夢のあと、たづねて見やれ思ひ寝の、手枕寒し置炬燵。

とやらかした。小走りの下駄の音。がらりと今度こそ格子が明いた。お妾は抜衣紋にした襟頭ばかり驚くほど眞白に塗りたて、淺黒い顔をば拭き込んだ煤竹のやうにひからせ、銀杏返しの兩鬢へ毛筋椿を挿込んだまゝで、直ぐと長火鉢の向うに据ゑた朱の溜漆の鏡臺の前に坐つた。カチリと電燈を捻る響と共に、黄い光が唐紙の隙間にさす。先生はのそく置炬燵から次の間へ這出して有合ふ長煙管で二三服煙草をひつゝ、餘念もなくお妾の化粧すの様子を眺めた。先生は女が髪を直す時の千姿萬態をば、その有らゆる場合を通じて、盡く此れを秩序的に請じながら、猶飽きないほどの熱心なる觀察者である。まづ、忍び逢ひの小座敷には、剣返した重い夜具へ背をよせかけるやうに、そして立膝した長襦袢の膝の上か、或は又船底枕の横腹

に懷中鏡を立掛けて、かゝる場合に用意する黄楊の小櫛を取つて先づ二三度、枕のとなる鬢の後毛を掻き上げた後は、捻るやうに前身をそらして、櫛の背を櫛に銜へ、兩手を高く、長襦袢の袖口け此の時下へと滑つて其の二の腕の奥に若し入墨子あらば見えやすと思はれるまで、兩腕を菱の字なりに張出して後の鬢を直し、扱てまた最後には宛ら絲瓜の取手でも摘むがやうに、二本の指先で前髪の束れ目を軽く持ち上げ、片手の櫛にて前髪のふくらみを生際の下から上へと迅速に掻き上げる。髻留めの一二本はいつとも口に銜へてゐるものゝ、女はこの長長しい熱心な手藝の間、黙つてぼんやり男を退屈させて置くもので決してない。またの逢瀬の約束やら、これから外の座敷へ行く辛さやら、兎に角す鐵人を殺すべき片言隻語は、却て自在に有力に、この忙しい手藝の間に亂發され易いのである。先生は茅居の棧敷にゐる最中と雖も、女が折々思出したやうに顔を斜めに浮かして、丁度佛畫の人物の如く綺麗にそるへた指の平で絶えず鬢の形を氣にする有様をも見逃さない。さればいよく湯上りの兩肌脱ぎ、家が潰れようが地面が裂けようが、われ關せず焉といふ有様。身も魂も打込んで鏡に向ふ姿

に至つては、先生は全くこれこそ、日本の女の最も女らしい形容を示す時であると思ふのである。幾世紀の洗練を経たるAlexandriaの二音の詩句を以て、自在にミュッセをして巴里嬢の踊の裾を蹴はしめよ。われにはまた來歴ある一巾節の黒髪がある。黄楊の小櫛と云ふ單語さへもが吾々の情緒を動かすに何れだけ強い力があるか。其處へ行くと哀れや、色さまぎまのりボン美しと雖も、ダイヤモンド入りのハイカラ櫛立派なりと雖も、其等の物の形と物の色よりして、新時代の女子の生活が藝術的幻想を誘起し得るまでには、まだく多くの年月を経た後でなければならぬ。新時代の藝術の力をもつとく澤山に借りた擧句の果でなければならぬ。然るに已に完成したつた江戸藝術によつて、溢るゝまで其の内容の生命を豊富にされた斯か下町の女の立居振舞ひには、敢て化判の時の姿に限らない。春雨の格子戸に毒蛇の日開きかける様子と云ひ、長火鉢の向うに長煙管取り上げた手付きと云ひ、物思ふ夕まぐれ襟に埋める頤と云ひ、さては唯風に吹かれる鬢の毛の一筋、そら解けの帯の端にさへ、云ふばかりなき風情が生ずる。「ふせい」とは何ぞ。藝術的洗練を経たる空想家の心にのみ味



るが爲めである。無限の感謝は新時代の企てた女子教育の効果が、專制時代のそれに比して、徳育的にも智育的にも實用的にも審美的にも一つとして見るべきものない實例となし得るが爲めである。無筆のお妻は瓦斯ストーヴも、エブロンも、西洋綴の料理案内と云ふ書物も、凡て下手の道具立なくして、巧に甘いものを作る。それと共に四季折々の時候に従つて俳諧的詩趣を覺えさせる野菜魚介の撰擇に通曉してゐる。それにも係らず私はもとく、賤しい家業をした身體でですから、萬事に謙讓であつて、いかほど家庭をよく修め男に満足と幸福を與へたからとて、露ほどもそれを己れの功として此れ見よがしに誇る心がない。今時の女學校出身の誰々さんのやうに、夫の留守に新聞雜誌記者の訪問をこれ幸ひ、有難からぬ御面相の眞實まで取出して「わらはの家庭談などおつじめるやうな事」決してない。かく口汚く罵るものゝ先生は何も新しい女權主義を根本から否定してゐる爲めではない。婦人參政權の問題なども寧ろ當然の事としてゐる位である。然し人間は總じて男女の別なく、いかほど正しい當然な事でも、それをば正當なりと自分から主張せずに出しやげらずに、何處までも遠慮深くおとなしくして居

る方が却て奥床しく美しくはあるまいか。現代の新婦人連は大方此れに答へて「そんなお人好な態度を取つてゐたなら増々權利を蹂躪されて、遂には浮瀬がなくなる。」と云ふかも知れぬ。若し浮瀬なく、強ひ者のために沈められ、滅されてしまふものであつたならば、其れは所謂月に村雲、花に風の風情。弱きを滅す強き者の下賤にして無禮野蠻なる事を證明すると共に、滅さるゝ弱者のいかほど上品で美麗であるかを證明するのみである。自己を下賤醜惡になしてまゝ存在を續けて行く必要が何處にあらう。潔く落花の雪となつて消るに如くはない。何に限らず正當なる權利を正當なりなぞと主張する如きけ聞いた風な屁理窟を楯にするやうで、實に三百代言的、新聞屋的、田舎議員的ではないか。それよりか身に覺えなき罪科も何の明しの立てやうなく哀れ刑場の露と消え……なんぢが、何となく東洋的な固有の殘忍非道な思ひをさせて却て痛快ではないか。青山原宿あたりの見掛けばかり門構への立派な貸家の二階で、勸工場式の椅子テーブルの小道具よろしく、女子大學出身の細君が風色になつたバク／＼な足袋をけいて、夫の不品行を責め罵るなどは一寸輸入的ノラらしくて面白いかも知れぬが、然

し見た處の外観からして如何にも底からノラらしい深みと嘆みを見せようと云ふには、矢張り髪のを置く眼を青くして、成らう事なら言葉も英語か獨逸語でやつた方が猶一層よさうに思はれる。そも／＼日本の女の女らしい美點は歩行に不便なる長い絹の衣服と、薄暗い紙張りの家屋と、世評の多い緩慢な言語と、其等凡てに調和して動かすことの出来ない日本的女性の美は、動的ならずして靜止的でなければならぬ。争つたり張したりするのではなくて苦しんだり憐んだりする哀れ果敢い處にある。いかほど悲しい事辛い事があつても、それをば決して彼のサラ・ベルナールの長索詞のやうには辯じ立てず、薄暗い行燈のかけに今頃「おじさん」の節廻しその儘身をねぢらし一黙つて鬱込むところに在る。昔から云ひ占した通り海棠の雨に憐み柳の絲の風にもまれる風情は、單に日本の女性美を説明するのみではあるまい。日本といふ庭園的の國土に生ずる秩序なき、漂泊なる、疲勞せる生活及び思想の、弱く果敢き凡ての詩題を説きするものであらう。

## 八

然り、多年の嚴しい制度の下に吾等の生活は

派の愛國主義者をして斷言せしむれば、日本人獨特固有の趣味とまで解釋されてゐる位で、室内裝飾の一例を以てしても、床柱には必ず皮のついたまゝの天然木を用ゐたり花を活けるに切り放した青竹の筒を以てするなどは、成程Joco-式にも Empire 式にも無いやうである。然し此の議論はいつも或る條件をつけて或程度に押留めて置かなければならぬ。あんまりお調子づいて、この論法一點張りて東西文明の比較論を進めて行くと、此細な特殊の實例を上げる必要なく所謂 Mission de Paris (紙の家)に住んで疊の上に夏は昆蟲類と同棲する日本の生活全體が、何よりの雅致になつてしまふからである。珍々先生はこんな事を考へるのでもなく考へながら、多年の食道樂の爲めに病的過敏となつた舌の先で、苦味いとも辛いとも酸いとも、到底一言では云現し方のない此の奇妙な食物の味を吟味して樂しむにつけ、國の東西時の古今を論ぜず文明の極致に沈湎した人間は是非にもかう云ふ食物を愛好するやうになつて仕舞はなければならぬ。藝術は遂に國家と相容れざるに至つて初めて尊く、食物は衛生と背反するに及んで眞の味を生ずるのだ。けれども其處まで進まうと云ふには、妻あり子

あり金あり位ある普通人には到底薄氣味わゐる出て來るものではない。其處で自然と、物には専門家と素人の差別が生ずるのだと、珍々先生は自己の廢趣趣味に絕對の藝術的價值と威信とを附與して、聊か得意の感をなし、荒みきつた生涯の、せめてもの慰藉にしようと試みるのであつたが、然し何となく其の身の行末空恐しく、あゝ人間も斯うなつてはもうおしまひだ、滋養に富んだ牛肉とお行儀のいい鯛の鹽焼を美味のかぎりと思つてゐる健全な朴訥な無邪氣な人達は幸福だ。自分も最う一度さういふ程度まで立戻る事が出来たとしたら、どんなに萬々歲なお日用度かりける次第であらう……。惆悵として盃を傾くる事二度び三度び。唯見ればお妾は新しい手拭をば撫付けたばかりの髪の上のかけ、下女まかせにはして置けない白魚が何かの料理を拵へる爲め臺所の板の間に膝をついて頻に七輪の下をば盥園扇であふてゐる。

## 七

何たる物哀れな美しい姿であらう。夕化粧の戀足際立つ手拭の冠り方、襟付の小袖、肩から滴り落ちさうなお召の巾着、お召の前掛、し

けなく引掛に結んだ黒皮帶、凡そ現代の道德家としては覺えず眉を蹙めしめ、警察官をしては坐に嫌疑の眼を鋭くさせるやうな國貞振りの年増盛りが、まめ／＼しく臺所に働いてゐる姿は勝手口の破れた水障子、引窓の綱、七輪、水瓶、隨その傍の煤けた柱に貼つた荒神様のお札など、一體に汚らしく亂雑に見える周囲の道具立と相俟つて、草紙紙に見るやうな何と云ふ果敢い倅住居の情調、また歌澤の前廻しに唄ひ占されたやうな、何と云ふ三絃的情調を示すのであらう。先生はお妾が食事の友度をしてくれる時のみではない。長火鉢の傍にしよんぼりと坐つて汚れた壁の上に其影を映させつゝ、物靜に男の着物を纏つてゐる時、或はまた夜の寢床に先づ男を寝かした後、その身は靜に男の羽織着物を疊んで角帶を其の上に載せ、枕頭の煙草盆の火をしらべ、行燈の燈心を少しく引込め、引廻した屏風の端を引直してから、初めて片膝を蒲團の上に載せるやうに枕頭に坐つて、先づ一服した後の煙管を男に出してやる——さう云ふ時々先生はお妾に對して口には出さない無限の哀傷と無限の感謝を覺えるのである。無限の哀傷は恐しい草創時代の女子教育の感化が遺傳的に下町の無教育な女の身に傳つてゐる事を知





遂に肉體的に活氣なく、貧乏臭くらだしく、頼りなく、間の抜けたものになつたのである。其の堪へ難き寒淋しさと退屈さをまぎらすせめてもの手段は、不可能なる反抗でもなく、憤怒でもなく、ぐつとさばけて、諦めてしまつて、そして其の平々凡々極まる無味單調なる生活の一寸した處に、一寸した可笑味面白味を發見して、これを頓智的な極めて輕い藝術にして嘲つたり笑つたりして戯れ遊ぶ事である。櫻さく三味線の國は同じ專制國でありながら支那や土耳其のやうに金と力がない故萬代不易の安大なる建築も出來ず、荒涼たる沙漠や原野がない爲めに、孔子、釋迦、基督などの考へ出したやうな宗教も哲學もなく、また同じ暖い海はありながら何う云ふ譯か希臘のやうな藝術も作らずにしまつた。よし一つや二つ何か立派などついたりした物があつたにしても、古今に通じて世界第一無類飛切りとして誇るには足りないやうな氣がする。然らば何をか最も無類飛切りとしようか。貧乏臭い間の抜けた生活の一寸した處に可笑味面白味を見出して戯れ遊ぶ俳句、川柳、端唄、小唄の如き種類の文學より外には求めても求められまい。論より證據、先づ試みに詩經を繙いて、唐詩選、三

體詩を開いても、わが俳句にある如き雨漏りの天井、破れ障子、人馬真獸の糞、便所、臺所などに、純藝術的な興味を託した作品は容易に見出されない。希臘羅馬以降泰西の文學は如何ほど盛であつたにしても、未だ一人として我が俳諧師其角、一茶の如くに、放屁や小便や野糞までも詩化するほどの大膽を敢てするものは無かつたやうである。日常の會話にも下がかつた事を輕い可笑味として取扱ひ得るのは日本文明固有の特徴と云はなければならぬ。此の特徴を形造つた大天才は、矢張り凡ての日本的固有の文明を創造した贅居の「江戸人」である事は今更茲に論ずるまでもない。若し以上の如き珍々先生の所論に對して不同意な人があるならば、請ふ試みに、舊習に従つた極めて平凡なる日本人の住家について、先づ其の便所なるものが縁側と座敷障子、庭などと相俟つて、如何なる審美的價値を有してゐるかを觀察せよ。母家から別れた其の小さな低い鱗葺の屋根と云ひ、竹格子の窓と云ひ、入口の杉戸と云ひ、殊に手を洗ふ邊先の水鉢、桶杓、その傍には極つて蕪蘭や石菫などを下草にして、南天や紅梅の如き庭木が日隠しの柴垣を後にして立つてゐる有様、春の朝には鶯がこの手水鉢の水を飲み

柄杓の柄によまる。夏の夕には縁の下から大な蟲が這つた青苔の上にその腹を引摺りながら歩き出る。家の主人が石菫や金魚の水鉢を縁側に置いて樂しむのも大抵はこの手水鉢の近くである。宿の裏が蕪葺や風鈴が吊すのも矢張り便所の戸口近くである。草双紙の表紙や見返し、の意匠などには便所の戸に掛け手拭と手水鉢とが、如何に多く使用されてゐるか分らない。かくの如く都會に於ける家庭の幽雅なる方面、町中の住居の情趣を、専ら便所、其の周圍の情景に仰いだのは實際日本ばかりであらう。西洋の家庭には何處に便所があるか決して分らぬやうにしてゐる。習性と道德とを無視する如何に狂激なる佛蘭西の畫家と雖も、まだ便所の詩趣を主題にしたものはないやうである。そこへ行くと、江戸の澤世畫師は便所と女とを配合して、巧みな冒険に成功してゐるのではない。細帯しだけなき寢衣姿の女が、懷紙を口に銜て、例の艶かしい立膝ながらに手水鉢の柄杓から水を汲んで手先を洗つてゐると、其の傍に置いた寢屋の雪洞の光は、此の瀟灑の常として極端に陰影の度を誇張した區劃の中に夜の小雨のいと蕭條に海棠の花爛を轉す小所の風情を見せてゐる等は、誰でも知つてゐる、誰

## 腕くらべ

## はしがき

おのれ志いまだ定らざりし二十の頃よりふと戯れに小説といふもの書きはじめいつか身のたつきとなして數ればこゝに十八年の歲月をすごしけり。あゝ十八年曾我兄弟は辛苦をなめて十八年親の敵を打つて名を千載に傳へおのれはいたづらなる筆をなめて十八年世の憎しみを受け人のそしりをのみ招ぎけり十八年が同じ月日も用ゐかたによりて變るためしはもろこしに柳下惠といへる賢者は節のあまきを嘗めて老いたる親を養はんと申しけるを流涕とよぶ處人は人の家の月に塗り香せぬやうに引あけて忍び入らんといひけるにぞ。さはさりながら敵をねらふ兄弟も男と生れしからばそつと人知れず大磯の濡れ事ばかりは免れず今も昔も男と女客と妓女とのいきさつ此のみ定に千古不易の人情とや申すべき。それ

は叔に置き、おのれ今年の夏より秋にかけて宿病俄にすゝみて霜後の蟲を待つたず露の命のいとあやふく思はれければ十八年がこの歲月わが拙き文市に出る度毎に購ひ給ひける方々へいさゝか御禮のしるしまで新に一本をつゞりて笑覽に供せんものと思ひ立ちける折からこの小説腕くらべの一作幸雜認文明にはわづかに草稿の一部を掲げしのみなれば急ぎ訂正改作してその全篇を印刷する事とはなしぬ。然れどもこれとて未尙全く完結に及べるものにあらざればいよくその後篇とも稱すべきもの幸ひにしてまた來ん存まで命保ち得たらんにはやがて書きつぐべし折もやあらんまづそれまでは親切のもの同様偏に御愛讀を冀ふとしかいふ。

大正六年冬の夜

作者識

## 一幕あひ

幕間に散步する人は帝國劇場の廊下はどこもかしこも押合ふやうな混雜。丁度表の階段をば下から登らうとする一人の藝者、上から降りて來る一人の紳士に危くぶつからうとして顔を見合はせお互にびつくりした調子。

「あら、吉岡さん。」

「おやお前は。」

「まあどうなすつて。」

「お前、藝者をしてゐたのか。」

「去年の暮から……また出ました。」

「さうか。何しろ久振だ。」

「あれから丁度七年ばかり引いてゐました。」

「さうか、もう七年になるかな。」

「幕のあく知らせの鐘が鳴る。各自の席へと先を爭ふ散歩の人で廊下は一時一層の混雜。その爲め却て人目に立たないのを幸と思つてか、藝者は紳士の方へ鳥渡身を寄せながら顔を見上げて、

「ちつともお愛りになりませんね。」

「さうかな、お前こそ何だか大變若くなつたやうだぜ。」

「あら御冗談ですよ。この年になつて……。」

く、其の外見は千差萬様なれども、其の輝きの汚き加減はいづれも無やと察せられるものばかりである。彼等は又己れが思想の伴侶たるべき机上の文房具に對しても何等の興味も愛好心もなく、卑俗の商人が賣捌く非美術的の意匠を以て、更に意とする處がない。彼等は單に己れの居室を不潔亂雑にしてゐる位ならまだしもの事である。公衆の爲めに設けられたる料理屋の座敷に上つては、摺物と稱する繪畫と置物と稱する彫刻品を置いた床の間に、泥だらけの外套を投げ出し、掃き清めたる小庭に巻煙草の吸殻を捨て、疊の上に焼け焦しをなし、火鉢の灰に痰を吐くなど、一舉一動いさゝかも居室、家具、食器、庭園等の美術に對して、尊敬の意も愛惜の念も何にもない。軍人か上方の親方ならば其れでも差支はなからうが、苟くも美と調和を口にする書家文士にして、此の如き粗暴なる生活をなしつゝ、毫も己れの藝術的良心に恥ずる事なきは、實にや怪しとも亦怪しき限りである。されば此等の心なき藝術家によりて新に興さるゝ新しき文學、新しき劇、新しき繪畫、新しき音樂が如何にも皮相的にして精神氣魄に乏しきは寧ろ當然の語である。當面の文學雜誌の紙質の粗惡に植字の誤り多

く、體裁の卑俗な事も、單に經濟的事情の爲めとのみはふはれまい……。

閑話休題。某宅の臺所にてけお婆が心づくしの料理、白魚の雲丹焼が出来上り、それからお取り膳の差しつけ押へつゝ、まことにお浦山吹きの一境は、次の窓の出づるを待ち給へと云ひたいところであるが、故あつて此の後は書かず。讀者諒せよ。  
(明治四十五年四月)

## 夜の 小鳥

ボオル・ヴェルレエン

登は高き段より流れに映る己れが姿を  
眺め水に活かしとふひて櫛の木の頂に  
ありながら常に漏れん事のみ恐れき。  
シラ・ド・ベルジュラック

霧たち籠むる河水に樹木の影は  
烟の如くに消ゆ。

その時影ならぬ枝の間より何處と知らず  
夜の 小鳥は泣く。

あゝ旅人よ。いかに此の青さめし景色は、  
青さめし佳き面を眺むらん。  
いかに悲しく、濡れたる君が望みは、  
高き梢に嘆くらん。

(『珊瑚集』より)

無 題  
ボオル・ヴェルレエン

空は屋根のかたに  
かくも静にかくも青し。  
樹は屋根のかたに  
青き葉をゆする。

打仰ぐ空高く御子の鏡は  
やはらかに鳴る。  
打仰ぐ樹の上に鳥は  
かなしく歌ふ。

あゝ神よ。質朴なる人生は  
かしこなりけり。  
かの平和なる物のひびきは  
街より来る。

君、過ぎし日に何をかなせし。  
君今こゝに唯だ嘆く。  
語れや、君、そもわかき折  
なにをかなせし。

(『珊瑚集』より)



を除けると見て、此方から打込んだやうな風を見せ手に入れたのであつた。

吉岡にはもう一人妾、同様にしてゐる女がある。それは濱町に相應な構をしてゐる村咲といふ待合の主婦である。以前代地邊の料理屋の女中をしてゐる頃、吉岡は藝者遊にも飽きかけた人が往々にして飛でもない厄介を背負込むためにしに漏れず、ふと酔つたまぎれに手を出したが、醒めて見るとお茶屋の女中なんぞに手をつけたといふ事が日頃宴會で出逢ふ藝者仲間知られては堪らないと後悔したのが、女の方のつけ目である。一切この事は祕密にして後觸なしにするからといふ約束で今の待合村咲を開業する資金を内々で出してやる事にした。村咲は迎よく繁昌して毎夜お座敷が足りない位の景氣。さうなつて見ると妙からぬ資金を出しつばなしにして寄付かないのも馬鹿々々しいとぶぶ氣が起つて、吉岡は一度二度と呑みに行く中いつか又内所で關係をつけた。おかみは色の白い肉付のいい大柄の女で今年三十になる。再三焼栴檀になつた後今はどうやら腐縁とでもぶぶやうな間柄になつてゐるのであつた。

吉岡はそれやこれやの複雑な關係に比較して、相手の駒代はたしか十八分はたしか二十

五、互に何が何やら分らずに馴染を車ねた其の時分の單純な無邪氣な心の中を思返すと、自分ながら何となく居か小説でも見るやうな美しい心持がして来る。美しいだけにたわいがなく又何やら眞實らしからぬ變な氣もするのであつた。

「や、こゝにおゐるでしたか。先刻から方々お尋ねしてゐたです。」

洋服をきた存丈の低い肥つた男。：階の食堂で大分ウイスキーでも飲けたらしく惠比須のやうな圓い顔をば眞赤にし鼻の先には玉の汗をかきながら、「さつき電話がかゝりました。」

「どこから。」

「いつもの處です。」と存丈の低い肥つた男はあたり人のゐないのを見定めて、吉岡の側に腰をおろし、「近頃は漢家の方へはあんまり御出馬がないと見えますな。」

「君のところへ電話が掛つたのか。」

「實は誰かと思つて少しは自惚れましたね。ところが例の如くで、われながらチトお氣の毒でした。はゝゝゝは。」

「君、力次は今夜彼等がこゝにゐるのを知つてと見えるね。」

「屹度誰か連中の見物にでも來てゐたのが知ら

せたんでせう。お歸りに是非一寸でいいからお寄り下さるやうにといふ事です。」

「江田君、實はそんな事より今夜は少し談話があるんだがね。」と吉岡は金口の巻煙草を江田にすゝめながら四邊を見廻し、「食堂へ行かう。」

「また濱町の件ですか。」

「いや、そんな舊聞ぢやない。ロオマンスだ。」

「え、何です。」

「小説見たやうな話があるといふのさ。」

「さうですか。面白さうですな。」

江田は出櫃を打ちながら廊下を地下室の廣い食堂へといつて行つた。

君は相變らずウイスキーだね。」

「いや、今夜は少し廻つてゐますからビールにして置ませう。まだ腰を抜かすにはさつと早過ぎませう。はゝゝゝは。」

江田は額巾を皺だらけに身を擦上げて笑ひながらハンケチで額の汗を拭く。片の襟子なり其の物云ふ調子なり誰が見てもすぐ吉岡の幫間と知られるのである。額れた薄い頭髮は充分禿げ上つてゐるが年はさして吉岡とは違つてゐるでもないらしい。吉岡の切廻してゐる會社の株式係の一人で、宴會だの閑遊會だのある折にはいつも接待係をつとめる處から、營業

「いや全く變らないな。」

吉岡は眞實に議さうに女の顔を目成るのであつた。この前髪者に出てゐた頃の事を思合はせると其時分十七八であつたから、七年たつたとすればもう二十五六になる譯だ。然し現在目の前を見る姿はお訥から一本になつて間もない其の時分と少しも變つてゐない。中肉中骨丈、眼のばつちりした下ぶくれの頬には相變らず深い笑靨が寄り、右の縁切齒を見せて笑ふ口許には矢張何處やら子供らしい面影が失せずにある。

「その中、一度ゆつくりお目にかゝらせて頂戴。」

「何ていつて出てゐるんだ。先の名か。」

「いゝえ、今度は駒代ツて申します。」

「さうか。その中呼ばう。」

「どうぞ……」

舞臺からは早くも拍子木の音が聞える。駒代はそのまゝ自分の席へと廊下を右の方へ小走に立去つた。吉岡は反對なる左の方へと同じく早足に行きかけたが何と思つたか不圖立止つて後を振向いた。廊下には案内の小娘と賣店の女が徘徊するのみで駒代の姿はもう見えなかつた。吉岡は有合ふ廊下の腰掛に腰をおろして巻煙草

に火をつけ思ふともなく七八年前の事を回想した。二十六の時學校を卒業し二年程西洋に留學してから今の會社に進入つて以來こゝ六七年の間といふものは、思へば自分ながらよく働いたと感心する程會社の益めに働きました。

株式へ手を出して財産をもつた。社會上の地位をもつた。それと共に又思へばよく身體をこはさなかつたと思ふ程、よく遊びよく飲んだ。彼はいつも人に向つて得々として云ふ如く誠にいそがしい身體なので、過去つた日の事などは唯の一度も思返して見るやうな暇も機會もなかつたのである。ところが今夜偶然にも學生の頃初めて藝者といふものを知りそめた其の女に邂逅して、吉岡は自分ながらどういふ譯とも知らず、初めて遠い昔のことに思を寄せたのであつた。

何にも知らないあの時分には藝者といふものが何となく凄愴に見えた。そして藝者から何と云はれるのが眞に嬉しくてならなかつた。今日あの時のやうな初心な前心持にはならうと思つてもなれるものではない——吉岡は舞臺から漏れ聞える合方の三味線を耳にしながら、初めて新橋へ遊びに來た當時の事を思浮べ、我ながら可笑しくなつて獨り微笑を漏したが、そ

れにつけて今は遊ぶが上にも遊馴れしまつた身の上に思及ぶと、これは又一寸人は咄も出来にくい程藝者が我目なく計算用から露出されてのみるものに、自分ながら少し氣まりの悪いやうな妙な氣がした。乃公はこんな方面にまであんまり利口に立廻り過ぎてゐた。どうも乃公は不知不識細密に處に氣が付き過ぎていかんだと初めて自分を知つたやうな心持がしたのであつた。

今く其の通りかも知れない。吉岡は今の會社に進入つてまだ十年にならないのに早くも營業部長の要路に用ゐられ社長や重役から珍らしい才物だと云はれてゐるだけ、同僚や下のものにはあまり受のよい方とは云はれない。

吉岡は新橋に湊家といふ看板を出してゐる力次といふ藝者をば三年ほど前から世話をしてゐる。然し有ふれた旦那のやうにたわいなく鼻息をよまれてゐるのではない。吉岡は力次の容貌のよくないことは其の目で見ると通りよく承知してゐる。容貌はわるいが藝はたしかである。何處へ出してもまづ如きんで通れる女である。吉岡は世の中の仕事をしに行く上から宴會其他の事で藝者の一人や二人は自分のものにして置く方が却て何かの便利にもなるし又無駄な入費

「力次はいよ／＼お下妓女ですな。かはいさうに……はゝゝは。」

「何にありやアあれで構やせんよ。君も知つて通りこれまでに随分世話をしてやつたからね。僕が居なくなつたからつて、今ぢや抱へも五人居るし、きまつた座敷はあるし、困る事はないさ。」

廊下の方から無遠慮に大きな聲で話をしながら這入つてくるお客がある。吉岡はそれと気が付いて話を途切らした。舞臺の方では立廻でもあるのか頻りに付板を叩く響がする。

「おいボーイ、勘定……。」

吉岡は椅子から立つた。

## 二 逸 品

「今晩はようこそ……。」と濱崎といふ待合の女將泰しく手をついて次の間から、「どちらのお歸りでいらつしやいます。」

「帝國座へさそはれた。藤田さんの義理で女優殿の見物だ。」と袴をぬぎかけてゐた吉岡は立つたまゝで、「女優の旦那になるのも竝大抵ぢやないね。終始見物をこしらへてやらなくちやならんやうだから。」

「矢張藝者業の方が無事でございますよ。」と女

將は紫檀の食卓の側へ座を移し、「江田さん、大層お髷さうですね。お着換へ遊ばしたらいかがです。」

「なに髷くつても今夜は我慢しよう。浴衣つていふ奴はどうもよくない。伊勢音頭の芝居で斬られる奴見たやうでな。」

「大府御行儀がいゝぢやありませんか。」

「おかみ、實はすこし寂しい事があるんだがね……。」

「何なりと伺ひませう。」

「ありがたい。今夜はおゆるしで我輩が御主人役だ。いゝか、それで藝者もいつもとはまるでちがつた心を呼んで貰ふんだ。」

「はい／＼。どういふ處をかけますんです。」

「左様さ兎に角力次は呼ばない事にしよう。」

「あら、どうして、あなた。」

「だから頼みたい事があると云つたぢやないか。後で追々わかるよ。」

「それでもあなた……。」

「おかみは怪訝な顔をして吉岡の方を見ると吉岡は唯にや／＼笑つて葉巻をふかしてゐる。女中が酒肴を運んで來た。江田はいそがしうに一杯を干して女將にさしながら、

「大急ぎで駒代といふのを掛けて貰はう。駒代

だよ。」

「駒代さん……。」と女將は女中の顔を見る。

「新奇の兒だよ。美人だぜ。」

「あゝお十さんとこの……さうでせう。」と女中は直様思付いたらしい顔付。

「お十さんとこの、さうかい。」と女將は初めて會得した體で、杯を下に置き、「家へはまだ來なかつたかね。」

「來ましたよ。一昨日の晩も島渡御挨拶に來たぢやありませんか。そら、千代松さんのお座敷で……。」

「あゝさう／＼。それぢや、ぼつちやりした小作りの……年を取ると何もかもみんな一緒になつてしまふんですよ。」

「それから後は誰にしようかな。十吉も暫く呼ばせんな。と江田は吉岡の方を顧みて、「一緒の家のものがいゝでせう。」

「さうして貰はう。」

「畏りました。」と女中はついでに急須茶碗を盆にのせて立去る。女將は杯を江田に返しな

がら、

「何だかきつて譯がわかりませんね。」

「はゝゝは。わかんないのもんだ。今夜急に湧いた話だから。實は僕も大に面食つたん



係長の吉岡さん同様に花柳界には顔が賣れてゐる。何處へ行つても〇〇會社の江田さんと云へばお酒の好きな罪のない馴れた方だと藝者は勿論お茶屋の女中までが心安きに折々は随分失禮な事を云ふが江田は決して怒つたことがない。女達から馬鹿にされたり挑戯はれたりすると益々調子に乗つてわざと自分から三文の直打もないやうに自分の身を軽く取扱ふ。然し家には子供が三人もあり其の長女はそろゝ嫁の口をさがす年頃だと云ふ事である。

「珍談とは一體何です。」とボーイの置いて行つたビールを片手にしながら江田はいかにも聞きなさうに力を入れて、「まさか拙者を抜抜いて荷色のおのけぢや有りませうまいね。はゝゝは。」

「實はさう有りたいんだがね。」

「へゝゝえ。これア大分罪が深さうですな。」

「江田君、ひやかしちやいかんよ。僕は今夜初めて女に迷つたやうな氣がした。」云終つて吉岡はあたりにもやあると見廻したが廣い食堂には遙い片隅にボーイが二人寄つて話をしてゐるばかり、見渡すかぎり人のゐない卓子の内布に照添ふ電燈の光ば、其の上に置いた西洋草花の色をば一層鮮に見せてゐるばかりである。

江田君これア眞實まじめな話だよ。

「はゝゝ此の通譯聽してゐます。」

「いかなんア。いつでも君には冗談ばかり云ふもんだから。」眞剣な話はどうもしにくい。實はその何だ。先刻階段の處で偶然出遇つたんだがね……」

「ふむ……」

「僕がまだ學校にゐた時分知合つた女なんだが」と云ふんでせう。

「氣が早いな。素人ぢやない。藝者だよ。」

「藝者ですか。して見ると随分早くから御修行なすつたもんですね。」

「あれが、その藝が道樂をし出したそもゝ一番初めの藝者なんだ。其の時分駒三と云つてゐたんだ。さうさ、一年ばかりも遊んだかな。さうかうする中に僕は學校を出てすぐ洋行するんで、其の時には相應にまア片をつけて別れたと思ひたまへ。」

「うむ……」と江田は吉岡から貰つた藝券を惜し氣もなくスバリと吸つてゐる。

「七年ぶりで新橋へ出たんだとさ。駒代といふんださうだ。」

「駒代……家はどこです。」

「名前を聞いたばかりだから、自分で店を出したのか、それとも借金をしたのか其の邊の事は何にも知らない。」

「外のものに内々で聞いて見ればすぐにわかりませう。」

「兎に角七年も引いてゐて又出たんだといふから何れ仔細があるに違ひないさ。今までどう云ふ方面の人の世話になつてゐたんだか、實はその邊の事も知つて置きたいんだがね。」

「大分御謬議が細かうございますな。」

「仕方がないさ、かう云ふ事は初めに承知して置くが……」だよ。友達の人と知らずにくどくど出来てしまつた後で恨まれるなんて云ふ話はよくあるやつだからな。」

「さう急に話が進んで来ちゃ拙者も馬圖々々しちや居られませんか。兎に角一度お姿を拜んで置きませうどの邊に居るんです。棧敷ですか。」

「今廊下で見たばかりだから、何處に居るか分らない。」

「お歸りにはどう叶何處へかお行でせう。お作しますから其の時ゆつくり手前に鑑定させて下さい。」

「よろしく頼むよ。」

江田は眞實の老婆心から今夜ばかりは酔つてはお役がすまぬやうな氣がしてゐるのであつた。

御當人の吉岡は猶更の事である。現在胸代の身の上はまるでの抱へか見世倡りか又は遊び半分の勤めか、その邊の事情まで、口に出して野暮らしく聞く必要はない、衣服の着こなし座敷の様子萬事を綜合して日頃藝者を眺めた眼力で一見して推察してしまはうと思つてゐる。

胸代はさゝれた杯を丁寧に洗つて江田に返し行儀よく酌をしながら此れも客商賣の経験で、無論しかとはわからぬけれど今夜初対面の江田さんと吉岡さんとの關係も大概は見當がついたものゝ然し猶大事を取るつもりらしく、何とも付かぬ世間ばなし。

「夢居ももう異くつていけませんのね。」

「胸代。」吉岡は突然ながら然し極めて親しい調子で、「お前いくつになつた。」

「私……年のことはよませう。吉岡さん、あなたは。」

「私はもう四十さ。」

「嘘ですよ。」胸代は子供らしく一寸首をかしげ指を折つて數へながら獨語のやうに、「あの時私が十七……ですもの。それから……。」

江田は側から、「おい／＼人前があるよ。」

「あら堪忍して頂戴、つい……。」

「あの時だの其時だのと、一體そりやアどういふ時だ。」

胸代は愛嬌の絲切齒を見せて笑ひながら、「吉岡さん。あなた、まだ半分位でせう。」

「今夜は一ツ身の上話を聞く事にしよう。」

「あなたの……？」

「お前のさ。私が洋行してからお前いつ頃まで出てゐたんだ。」

「さうねえ。」胸代は扇子を弄びながら一寸天井の方へ上目を使つて考へながら、「彼れこれ二年ばかりも移いでゐましたわ。」

「さうか、ぢや私が洋行から歸つて來たのと彼れ此れ同じ時分だつたかも知れん。」吉岡は心中胸代は其の時誰に引かされたのかと云ふ事をきゝたいと思つたがふひ出しかねて、さあらぬ風に、「素人より矢張藝者の方がいゝかね。」

「好んで出た譯ぢや無いんですけれど、藝者より外に仕様がなくなつてしまつたんですもの。」

「一體、今まで奥様になつてゐたのか、お妾でゐたのか、どつちだい。」

胸代は杯をゆつくり干して下に置き其のままだまつてゐたが決心したやうに、隠してゐたつて仕様がなないわね。」とすこし膝をすゝめて、

「一時はぢやんとした貞潔になつたのよ。あなたは洋行なすつておしまひなさるしき、其の時分にも實は少し悲觀してたのよ。ほゝゝゝ、ほゝゝゝ、あら嘘ぢやない事よ。それでね、丁度その時分田舎の大盡の若旦那で東京の學校へ勉強に來ていらつした方があつたのよ。世話をしてやるからと仰有るから其の方で引いたんです。」

「さうか。」

「その當座はお妾でゐましたの。する中に是非お國へ行つて仰有るんでせう。お國へ行けばほんとの奥様にしてやるからと仰有るのよ。いやでしたけれど何時まで若いんぢやなし、奥様になれゝばとさう思つたのが淺果敢だつたんですね。」

「どこだえお國と云ふのは……。」

「何でもずつと彼方の方よ。そら、あの鯉の出る方よ。」

「新潟だね。」

「いゝえ。遼ふわ。北海道の方ですよ。あの秋田ツて云ふ處、寒くつて／＼實にいやな處でしたわ。忘れもしたいわ。三年半抱したんですもの。」

「とう／＼爲切れなくなつたんだね。」

「それがツて云ふのが、あなた。旦那ツて云ふ

だ。はゝゝは。兎に角かうしてゐる中も返事が待たしい。來られるか知らん。」

「何だか狐につまゝれたやうですね。あなた。」

「いゝから安心して見ておめで、今にはなしが段々面白くなるから。」

女中が戻つて來て、駒代さんはお芝居ですつて。すぐに伺ひます。」

「はゝゝゝは。」と江戸は覺えず笑ひ出した。

「あら……吃驚するぢやありませんか。」

「まあいゝ。それから外の奴はどうした。」

「十吉さんも外の方も皆もう少々伺ひかねるつて云ふんでございますよ。どう致しませう。」

「さア。」と江戸は吉岡の方を見ながら、來られたら來いと云つて置かうぢやありませんか。」

今度は女中を座敷へ殘して女將が電話の返事にと立つた。

「濁事よささうですな。一人の方が話が早うござんすからな。」

「お蝶。一杯やらう。」と吉岡は女中へさして、「お前、知らないか。駒代には誰かきまつた人があるか。」

「いゝ獨者業ですわねえ。」と女中は巧みに逃げで、「先に此の土地にゐたんですつてね。」

「はゝゝゝは。」と江戸は再び大聲に笑出す。

江戸さん先物から何かをかしいなでよ。をかしいから仕様がな。お前知らないのか。駒代つていふのにあれア僕の眞者だぜ。七年ほど前だ、先にこの土地に出てゐた時分一時は随分勝がれたものだぜ。」

「あら、あなたが、ほゝゝゝほ。」

「笑ふ奴があるか。失禮な奴だな。」

「それは全くの……だ。僕が證明するよ。一時江戸さんに熱くなつてゐたんだがね、譯があつて別れたんだとさ。そこで今夜が十年ぶりの御對面なんださうだ。」

「あら、さう、ほんとうなら随分お安くないわね。」

「ほんとうならとは何だい。疑りつばい奴だな。お蝶。その時分には僕だつて乗げちや居ないぞ。もつと疲せて居てすりりとしてゐたものだ。見せたかつた位のもんだぜ。」

兎角する中に、やがて廊下に聲音がして、「如さんこちら……」

江戸はわざと飛上るやうに外へ直した。外を明けたのは駒代である。

髪はつぶしに結び銀櫛すかし彫の櫛に翡翠の簪。唐棧柄のお召の單衣。好みは意氣なれどその爲め少しふけて見えると氣遣つてか、半襟

はわざとらしく裾の多きかけ、帯は古代の加賀友禅に黒満子の文、……くあら、綾の淺葱縮緬の帯ををしめ、髪留は人柱な真珠に緋は青色の濃いのをしめてゐる。

「先程は……と挨拶したが新しい帯の江戸がゐるのに心付いてか少し調子を改め……今晩は。」

江戸は早速杯をさして、今まで芝居にゐたのかい。

「はい。あなたもいらしつて？」

「歸る時實はさそはうと思つたんだがね、どこにゐるのか分らないもんだから……と云ふ中にも江戸はさう氣なく駒代の衣裳から持物から座敷の取持様までに過ぐ心をつけた。何も直接自分の爲に關係する事ではないが、江戸は色氣なしに斯ういふ場所で賑かに騒ぐのが好きな

ので、吉岡の爲めに今夜は駒代といふ眞者の直打をば岡目八目眞實問違のないところを見届けようと思つたのである。一口に新橋の眞者といふものゝ、其中には大からしまである事を知つてゐるので、何ぼ昔のお馴染だからと云つてあんまり安ッばい眞者では吉岡さんの顔にかゝる。書生時代の吉岡さんと今日眞實界に其人ありと云はれた吉岡さんとは少し事がふと、



る。駒代の思に暮れるのはこの身の行末といふ一事である。今年十六と云へばこれから先は年々老けて行くばかり、今の中にどうにか先の目的をつけなければと、唯譯もない心細さと、じれつたさである。十四の時から仕込まれ十六でお酌のお弘め其れから十九の暮に引かされて二十二の時に旦那の郷里なる秋田へ連れて行かれ、三年目に死別した。その日まで駒代は全く世の中も知らず人の心も知らず自分の身の始末さへ深く考へた事はなかつた。旦那の死んだ後も秋田の家にゐようと思へば居られない事はなかつたかも知れない。然しさうするには尼になつてゐるよりも猶一倍身をないものとあきらめてしまはなければならぬ。田舎の金持の一家親族どこを見ても自分とはまるつきり異つた人の中に唯一人取残されてこれから先一生涯くらさうといふ事はとても町育の女の忍び得られる處でない。いつそ死なうかと思つた末はもう徳も徳もなく東京へ逃歸つて来た。歸つては来たものゝ駒代は上野の停車場へつくと共に早速身の落付け處に困つてしまつた。生れた家とは何年となく音信不通なので最初抱へられて行つた新橋の藝者家より外にはこの廣い東京中にさしづめあねべき家は軒もない。駒代は

その時生れて初めて女の身一つの哀れさ悲しさを身にしみ／＼知りそめたと共に、これから先其の身の一生は死ぬなり生きるなり何方になりと其の身一人で何にともして行かなければならないのだといふ事を深く／＼感じたのであつた。以前養女に抱へられてゐる家へ行けば當分の宿は勿論これから先の事も何と世話がして貰へるであらう、駒代はさう思ふと同時に譯もない女の意地で、七年前には立派に引いて出た其の家へ今この途方に暮れ果てた身のさまを見せるのはいかにも辛い、死んでもあそこへは行きたくない。駒代は既に新橋へ向ふ電車に乗りながら唯々思案にくれてしまつた其の横合から突然女の聲で、しかも駒三と云つた昔の名を呼びかけたものがある。びつくりして其方を見ると其時分秋田の旦那が行きつけた待合の女中お満といふ女である。聞けば幾年間辛抱のかひあつて、つい去年の暮から南地へ新しい店を出したといふので、駒代は無理やりしゝめられるのを幸ひ、先お満の家へ身をおちつけ、やがて今の家——尾花家の十吉といふ老奴の家からワケで出る事になつたのであつた。

駒代は突然何といふ譯もなく、あゝ藝者はいやだ、藝者になれば何をされても仕様がな……

「さう思ふと私見たやらのなもので、一時は人家の奥様と大坂の御公人から敬はれた事もあつたのにと覺えず涙ぐまれるやうな心持になる……」

丁度その時急しうに廊下を走つて来た女中が、「あら、駒代さん、こゝに居たの。と座敷の杯盤を片付けながら、「あちら、あの離れのお座敷ですよ。」

#### 四 むかひ火

夜通し人の出盛る銀座の草市も早や昨日と過ぎて、今日の夕暮おとしと藝者家の立ちたたらぶ横町々々をばお迎ひ／＼と／＼つて呼歩く男の聲、丁度その折から表通し新聞社からは何事の起つたのか、荒外々々と叫んで賣兒の駆け出す鈴の響、彼方此方の格子戸からは燈火の響に透出されてお座敷へ急ぐ讀者の車、さても騒々しい町中の夏の夜を空には新月の影宵の明星と共にいかにも涼し氣に輝きそめる。

がらりと尾花家の格子戸を明けて出た老人、「なんだ、荒外だ、また飛行機でも落ちたんだらう。」

何ともつかず空を見上げる後から可愛らしい半長の聲、旦那、もうお迎ひを焚くんですか。」

方が死亡つたんですよ。さうなると私はもともと藝者でせう。親御さんはお兩方ともちゃんとしていらつしやるし、それに弟御さんが二人もあるんですよ。何だの彼だのつて、私一人居られたものぢやないわ。」

「さうか、わかつた。息つきに一杯……。」

「すみません。」と駒代は江田に酌をして貰つて、「さういふ譯ですから何分御座展に願ひます。」

「外の藝者はどうしたらう。もう来ないかな。」

「まだ十一時前ですが。」と時計を出して見たが、江田は丁度其時電話だといふ知らせに席を立つ駒代の後、姿を見送つて、聲をひそめ、

「なか／＼いゝですな。逸品ですぜ。」

「はゝゝゝは。」

「誰も来ない方がいゝでせう。ところで僕も今夜は此邊のところで消えてしまひませう。」

「なに、それにや及ばんよ。何も今夜にかぎつた事ぢやない。」

「乗掛つた舟でさ。當人だつてもう其の氣でせう。恥をかゝせるのは罪です。」江田は自分の前にあつた杯を二ツとも一度に片付け、遠慮なく吉岡の煙草入から葉巻を一本取出してマツチをすりながら立掛けた。

### 三 ほたる草

箱屋から掛つた電話の返事をして駒代はそのまゝ座敷へ行かうとするのを帳場にゐたおかみ、

「あ、鳥渡、駒ちゃん。」

すると駒代は甘つたれた聲をしながらも、素早く先を越したつもりで、

「おかみさん、頂いてもいゝでせうか。」

「あゝ、何つて御覽よ。」おかみも馴れたもので煙草を一服しながら萬事もう話はついてゐると云つた調子、「いつだつてお泊りになる事はないんだから……。」

駒代は早速返事につまつてしまつた。勿論以前に出てゐた吉岡さんの事だから、今更別に否應ふべき處ではない。吉岡さんなら全く結構なのである。然し久振で呼ばれて直ぐ其の晩にさうなつてしまつては、お茶屋の手前何となく昔の丸抱への子供時分と同じやうに安ッぽく思はれやしないかと、唯その事が氣にかゝつたのだ。駒代は實のところ吉岡さんの方に其の心持があるのかどうかといふ事もまだ考へてはゐなかつたのである。何しろ久振偶然芝居で出逢つた其の歸りの事、もし吉岡さんの方にその氣が

あつて呼んでくれたのなら、何も初めての女ではなし、待合のおかみさん杯にさうぶはずとも、直接に鳥渡日ませか何かで知らせてさへくれ、ぼどんなに私の顔がよくなるか知れやしないのに……と少しむづとした氣にもなつた。

「それぢや、おかみさん、時間にはいたゞかし頂戴よ。」

云捨てゝ其のまゝ、駒代は二階のお座敷へ立戻ると、電気燈が杯盤狼籍たる紫檀の食卓の上に輝いてゐるばかりで吉岡さんも江田さんも誰の姿も見えない。廁へでもお立ちなのであらうと氣はついたけれど、何だか自分ながら譯も分らず妙に捨氣味な自暴なやうな氣になつて、打捨てて置けといふやうに、そのまゝ、燈火の下に坐つてしまつた。すると不斷の手癖になつてゐるので、すぐ帯の間の化粧鏡を取り出し、髪を撫でて白粉紙で顔を拭きながら、ぼんやり鏡の面を見てゐる中、駒代はどういふ譯ともなく日頃絶えず胸の底に往來してゐるいつもの屈託に暮れてしまつた。色慾の浮いた苦勞ではない。深く前へ詰めて行つたら或はそれも屈託のものになつてゐるかも知れないが、兎に角駒代自身では自分の苦勞はそんな浮いたものぢやないと堅く信じてゐ

はちと分に過ぎた事だと思つて其のまゝにしてしまひました。」

「分に過ぎるといふ事もないでせう。兎に角惜しい義人でしたな。」

「もう四五年壽命があつたら少しア見られるやうになつたんでせうが、何しろ若輩だ。二十三や四で死んだんぢやいくら性がよくつても、まだまだ此れからといふ修行の中身ですからな。情しいと思ふのはまア内輪の人情、また御最良の慈目だ。それにあまえて一代の名人見たやうにやれ三回忌だの七回忌だのと大袈裟に、追善會なんぞ持出すのは冥利に過ぎますよ。」

「お前さんの氣性から云へばそれも尤き。然し以前の御最良筋から自然とさういふ話が出たんなら、何も此方から無理に頼んで人様に御迷惑をかけるのぢやないからね。いゝやうに任して置いたらどうです。」

「仰せの通り何事も好かれ悪かれ御最良のお心まかせ。老人は口を出さない方がいゝかも知れません。」

老人は小説家を奥の四疊半に案内した。こゝは狭い尾花家の家中では先一番のお座敷。老人と其の女房同様の老奴十吉とが幾年間起臥してゐる居間で、佛壇も飾りつけてある。わづかに

二坪ほどながら行燈籠に火まで入れた中庭を隔て、墓者の出入りする表口の六疊。往來へ張出した燵子窓や格子戸が薄緑の葎戸越しに遠く透いて見え、涼しい夜風け隣の二階との隙間から絶えず吹通つて軒の風鈴を鳴らしてゐる。

「相變らず取り散らして居りますが、どうぞ、お羽織をお取りなすつて。」

「いや、結構、いゝ風が來ます。」と小説家の倉山先生は扇子をばち／＼させながら興味あり氣にあたりを見廻してゐる折から、煙草盆に菓子鉢を持つて來たのは藝者の駒代である。駒代は既に二三度こゝで倉山先生を見知つてゐるばかりでない。宴會やお座敷でお酌をした事もあるし、せ居や演藝會などで折々見掛ける事もあるので馴々しく、

「先生、いらつしやいまし。」

「や、これは、この間の演藝會は結構な出来でしたな。宵つてもいゝ事がありさうです。」

「あら、嬉しいわ。私見たやうなものでも、おごる筋があるんなら何でもおごりますよ。」

「云ひませうか。御主人の前で云つてもいゝなら云ひますぜ。はゝゝゝは。」

「仰有る事があるなら仰有いまし。そんな弱身はない筈なんですから、はゝゝゝは。」と華やか

に笑ひながら立ち上つた時、表の方から半長の花子が甲走つたので、

「駒代明さん——御座敷です。」

「はアい、」と起事をして、「先生、御ゆるり。」と駒代は靜に立つて行つた。

倉山は靜に灰吹を叩いて、「いつも御座敷ですな。幾人お居です。」

「只今天きいのが三人に小さいのが二人ですか。いやどうも願々しい事です。」

「花橋中でも此方の看板などは一番古い方ですうな。明治何年時分からです。」

「左様さ、私がそも／＼この土地で初めて遊んだのが、忘れもしない西南戦争の真最中でしたからな。その時分にや内の十古のお袋がまだ達者で娘と一緒に稼いでゐましたつけ。世の中はまるで變りましたな。其の時分にや花橋と云つたらまづ當今の山の手したやうなものでしたね。佛者は何と云つてもや花橋が一でしたな。それから山谷堀、下谷の數寄屋町なんぞといふ順取りですか。赤坂なんざい此間まで蕎麥屋の二番へお座敷で来て、二世も御祝儀を遣りやすく轉ぶつていふんで珍らしいつて出かけたもんでさ。」

倉山は成程々と謹總の態度をがし、そつと



「さうだな。」と老人は兩手を後に、猶も空を見上げながら獨語のやうに、「お盆だといふのに今年は三日月様が出てゐる。」

「旦那、お盆に三日月様が出る、何なんですか。」

「ゴムでこしらへた鬼灯を鳴らしてゐるお酌の花子には老人の獨語が却て不思議に思はれたらしい。」

「お佛壇の下にお迎ひが買つてあるよ。いゝ兒だ、持つて来ておくれ。」

「旦那、あたいが火をつけて焚いて上げるわ。」

「そうツと持つて来なさい。炮烙をこはしなさんな。」

「大丈夫よ。とび捨て、半玉の花子は公然に火憑殿が出来る嬉しき、あたふたとお迎火を路傍へ持運んだ。」

「旦那、いゝこと。もすことよ。」

「これさ。さう一時に燃さずと。あぶねえから、そろ／＼やんなさい。」

「云ふ中にも表通から吹通ふ夜風に迎火はパツと燃え上つて、白粉を濃くつけたお花の横顔を紅く照らす。老人は躊躇んで手を合せ、

「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」

「旦那、千代吉如さんのところで、あらお向うでも方々で燃してゐるわ。綺麗だわねえ。」

家毎に焚く迎火の烟にあたりは何となく電語や電燈の新しい世の町には似合はしからぬしんみりした趣を示した。尾花家の老人はいつまでも地にかまづに長たらしく念佛を唱へてゐたが、やがて兩手に腰をさすりながら立上つた。年齢はもう何年か前に六十の坂をも越してしまつたに相違ない。見るから古ぼけた洗晒しの帷子に女帯の仕立直しと覺しい黒縹子の帯を締めてゐるので、腰はまださして目に立つほど曲つてはるないが、手足のよく透けて見える老體は全く骨ばかりのやうにいた／＼しく思はれた。頭はきれいに洗げ髪は落ちてしまつたが、眞白な眉毛だけは筆の穂のやうに長く垂れてゐるのが、いかにも福々しく、衰へながらばつちりした眼付と、饒々しい口許、品のいゝ鼻筋、どうしても根から藝者家の亭主とは見受けられぬ容貌である。

「あら、旦那、根岸の先生がいらつしてよ。」

「どれ、どこに……と老人は燃残りの迎火に水打つ手をとめて「成程、子供は日が早いな。」

「いや、お變りありませんか。と二三軒先から老人の姿を見て一寸寒寒帽子に手をかけ往

來の水溜りを大股に踏み越して進寄つたのは、

お酌の花子から根岸の先生と云はれた新聞小説

家翁山南東といふ人……年已四十漸次白髪厚に無地透縹の狩縹、白足袋に雪駄をけい、様子、會社員とも見え、商人とも見え、さうかと云つて藝人也と思はれる風采をしてゐる。多年休みなく都下の諸新聞に續物を書いてゐる。傍折々夢居の狂言もかく。淨瑠璃もかく。演藝の批評もする。そんな事で世間にはかなり名が賣れてゐるのである。

「先生、さア、どうぞ。」と老人は格子戸をあけたが小説家は佇んだまゝ、迎火の烟立洗ふ横町を眺め、

「お彼岸とお盆だけは今だに昔らしい氣がしますな。時にお宅の庄さんは……もう何年目になりますか。」

「庄八ですか、六年目です。」

「六年、早いもんですな。ちや來年は七回忌ですな。」

「左様です。老少不定人の命ほどわからないものはありません。」

「今年は方々で追善興行がありますが、どうです來年あたりは庄さんの七回忌……まだどこ

からもそんな話はありませんか。」

「無い事もありません。實は、昨年、回忌の時にもさういふ話はあつたんですが、家の小僧に

倉山南渠が老人と懇意になり出したのもつまりは久しく吳山の出る席の定速であつた事からである。

「もう一度出て見る氣はありませんか。お前さんが止してから私もとんと講釋場へは行きません。」

「何しろかういふ世の中になつちやもう駄目だ。講釋なんぞゆつくり聞いてゐようといふ世の中や御座いませんよ。」

「今の世の中は活動でなくちや承知が出来ないのだからね。」

「義太夫も落語も總じて寄席はもうすたりでさ。」

「寄席ばかりぢやない。近頃は芝居も同じ事ですよ。考へて見るとそれも無理はないのさ。今の見物は藝を見ようと聞かうとな云ふのぢやない。唯何でもいふんだ。値段が安くて手取り早く一つ處でいろんな物が見たり聞いたりしたいと云ふんだから、こりやア活動に限りませ。」

「全くさ。先生の仰る通り、くつくり役者の藝を見てやらうとか講釋師の讀振りを聞いてやらうとか、そんな事は今のお客にや面倒で面白くないですね。だから席亭は不入でも講談筆記は賣れるといふぢやありませんか。私は善音

機の藝と講釋の筆記はどちらも好きませんテ。ねえ、先生、一體何にかぎらず藝といふものは遣つてゐる中に不知不識氣乗がして來るもんだ。其の氣乗が自然とお客へ移る。そこでお客の方でも不知不識氣を取られて力瘤を入れるやうになる。そこが藝の不思議といふもので、きく方とやる方の氣合が通じ合つて來なかつたら藝にはならない。さうぢやありませんか。」

老ぼれた講釋師と古手の小説家は、冷えた湯茶に咽を潤しながら互に氣焰を吐く最中、「おや入つしやいまし。」と葭戸を片よせて這入つて來たのはこの家の女主人尼花家十吉であつた。

春丈のひくい横柄の廣い肥つた婆さんである。然しよく待合や料理屋の女將にあるやうな見るから憎々しく肥満し、人を見れば無暗とお世辭たらしく後を向けばすぐ舌を出しさうなふてぶてしい様子は少しもない。眼の圓い頬の垂下つた福々しい顔立は誰が目にも腹藏のない好人だと見える。今お座敷からの歸りと覺しく細の鮫小紋に紺朱珍の帯をめめた着こなしから一體の身體つき何となく落ちついて當世らしくあらぬ處、新橋の藝者といふよりは河東か一中節の師匠とも云ひた氣である。十吉は全く見掛け

の通り同じ年頃の老奴からも又生意氣盛りの若い妓からも誰からも悪く云はれた事のない極く穩やかな女である。十吉と同じ年頃の老奴達はいづれも此の土地の幅きゝで皆から大姐さんで立て通されてゐるが、十吉はさういふ幅きゝの老奴達のなす事に善惡ともに一切口を出した事がなく萬事組合の世話人のなすまゝに任しきつて置くので、さういふ人達からは十吉さんは角のない物のわかつた人だと云はれてゐる。

つて組合中へ幅がきかしたくも利かす所の出來ない一部の不平連中または老奴でもなく若くもない中途半端な自前の姐さん達からも十吉姐さん見たやうなさつぱりした慾のない人はないと感心されてゐる。時によつてはもう少し十吉姐さんに何とか口をきかせるやうにしたらばと氣の毒がられるのである。然し十吉にはこの年になつて殊更面白い組合の世話人なぞになつて演藝會だの師のさらひなぞの指圖をして幅をきかせ自分の家の抱へを無理にも賣出させようといふ程の必要がないのである。それも長男の庄八が達者でて今時分は立派な役者になり、又次男の滿次郎が首尾よく學校でも卒業して未だに望があるやうならば、身を粉にして稼ぎもし金をためもしようけれど、一人は死んでしまひ、

懷中から舊書の手帳を取り出して、老人の讀片を書取る用意をした。倉山は許に限りず、年寄つた人の口から親しく過ぎ去つた世の話を聞き、それを書取つて後の世に残す事をば撰録者たる身のつとめのやうに思つてゐるので新橋邊まで來たついでには必ず尼花家を尋ねるのである。

尼花家の主人は倉山先生の註文には誠に以て來いといふ老人である。老人の方からも倉山先生は又とない話相手である。いそがしい今の世の中何處へ行つたとて、倉山先生ほど飽きずに讀んで老人の愚癡や日慢話を傾聴してくれる人のあらう筈はないので、暫く姿を見せないといふ先生はどうかしなすつたのぢや無いかと老人の方から心配する位である。

老人、名は木谷長次郎と云つて嘉永元年の生れ、本所錦絲堀邊に住んでゐた微祿な旗本の嫡子で、八代目三升そつくりといふ美男子だつたとやら。もし世が世なりせば、宛然人情の中的人物たるべきを、丁度二十の聲を聞いた時幕府は瓦解して世襲の扶持に放れ、それからはいろいろ士族の商法に失敗した末は遂に藝が身を助ける不仕合。長次郎は小さい時分から好きで覺えた講釋で口を働りしようと思立ち、當時名の賣れた一山といふ軍書讀みが亡父と知合

であつたのをきひつて弟子となり吳山と名乗つて高座に上つたが、生來の端すと男前の立派なとで、忽ち中に賣出した。する中に新橋尼花家の娘の十吉がさる最良のお座敷で見あはれて入り揚げ、とう／＼晴れて亭主にしたのである。

長次郎と十吉の間には二人の男の兒が生まれ、老人は長男の庄八に學問させ立派な人物にして、潰れてしまつた先祖の家を興させたいと思つてゐたが、藝家家の盛に生落つた庄八は小學校へ通ふ頃から早くも遊藝を嗜む性質を示し始めたので、父親はきびしい意見の末再三手荒な折檻までした事があるが、遂に諦方つきで、そんなら一層其の方面で名を揚げさせるより仕様がなにと、十二の時市川團洲に頼込んで弟子にして貰つた。庄八は市川雷七と云ふ名を貰ひ團洲の歿後二十の時に名題に昇進して仲間から如み嫉まれた程な人氣役者になつたが、不圖流行風邪から急性肺炎に冒され晩くも命を取られてしまつた。

丁度その頃に庄八の弟なる次男の瀧次郎——これは中學校も卒業間近まで進んでゐたが、或時各區の警察署で不良少年の檢舉をした折、こゝろいふ譯かその嫌疑で呼出され説諭を喰つた爲め中學校は退校されてしまつた。それや

これぞ老人はかく世をはかんだが先、講談師仲間と席亭の間着が起り、老人はむしやくしや腹で四方八方へ當散した擧句、講談師の鑢札を返してしまつた。

老人は根からの藝人ではないのでいつも頑固な事を云出して仲間ものから嫌はれてゐた。自分だけでは心底あきらめて世をも自分をもすつかり茶にしてゐるつもりであるが、不知不識昔の氣位と性癖を現はすのであつた。師匠の一山が生きてゐた時分には折々宴會や御座敷なぞへも招かれて行つたが、或時、さる成金紳士の新宅開に呼ばれ、御さし鯛になるやうな事をば興に乗じて滔々と辯じ立てゝ大失敗をやつた。其れ以來御座敷は窮屈でいけないと云つて、どこから呼ばれても一切斷つて寄席の高座ばかりを勤めてゐた。講釋は高座で自由氣儘にやらなくちや面白くないものぢやアねえ。吳山の講釋が聞きたけりやア華族様でも紳士方でも寄席へ來るがよい。吳山は職人衆の前だらうが、紳士の前だらうが、相手をを見て話をするんぢやねえと昔の風流志道もよろしく老いて益々壯に善く照り善く人を笑はすので、これが却て人氣となり吳山の席は八月の不人な時節にも相應に客足を引くのであつた。



「大したものを見付けたな。それぢや商賣が面白くつて止められねえのも無理はない。旦那がいゝ男で消樂に六代目か吉右衛門でも色にすりやそれこそ兩手に花だ。はゝゝゝは。」

「お前さん見たやうな呑氣な人アありやしな

い。」と十吉は呆れて腹も立てぬといふやうな顔付をして灰吹をぼんと叩いた。折から表の方で電話がしきりに鳴出す。「誰もゐないのかね。」と云ひながら十吉は大儀さうに立上つた。

## 五 晝の夢

一時は水道の水が切れると騒いだ早の八月末、暮方近くなつて突然篠つく如き夕立から一夜半日降りつゝいた大雨。がらりと晴れると時候はすっかり變つて、秋は忽ち空の色柳の葉の目にもさやけく、夜ふけた町の下駄の響車の鈴の音にも明に思知られ、露地の芥子に鳴く蟋蟀の聲が耳立つてせはしくなり出した。

馬代は吉岡さんにつれられ箱根か修善寺へ行く處であつたが、かの大雨で鐵道は東海道線のみならず東北線にも故障が出来たとかいふので、吉岡さんにすゝめて森ヶ崎の三春園へ泊る事にした。三春園といふのは新橋中で幅をきかしてゐる木挽町の對月と云ふ待合の別荘で、公

然お客を泊める旅館ではない。初めは對月の女將が榮華のあまり氣保養にと建てたのであるが、地體忽には目のない輩のこと、こんな立派な廣い別荘を不斷明けて置くのは惜しいものだ、と木挽町の待合は養女と物馴れた女中にまかせ、女將はこゝを出店の方にして、御虫屋のたしかなお客筋または出入の藝者衆に頼んで連れ込みのお客を呼んで貰つてゐるのである。お客は宿屋とちがひ相客がないので貸別荘になるのも同様な處から自然と心持よくお茶代も過分にはすむ。藝者は又新橋中で幅のきく待合對月に對して一人でも餘計にお客を連込んでやれば何んとなく自分の顔がよくなるやうな氣がするので、時には自腹でお土産を買ひ東京へ歸つてからわざ／＼木挽町の帳場へ「昨晩は大崎でいろ／＼お世話になりましたわ。と鼻高々と報告に行くものさへある。馬代は三春園を吉岡さんに勧めたのも矢張この邊の魂膽からであらう。

女中が朝飯の膳を下げて行つた時はもう十時過であつた。初秋の空は薄く曇つて徐ろに吹き通ふ風時折さつと縁先の萩の葉の露をこぼしながら、蟲の音はそれにも驚かず夜と同じやうに靜に鳴きしきつてゐる。

馬代は敷島を銜へ腹這ひに寝そべつて女中の置いて行つた都新聞を見てゐたが、生欠伸一つ、やがて顔をあげると急に取つて付けたやうに、「いゝわねえ、困部だわねえ。」

葉巻を銜へて吉岡は最前から女の姿に餘念もなく見惚れた様子であつたが、靜に脇枕の身を起し、「だからさ、悪い事は云はん、好加減に藝者はよしとらうだ。」

馬代は黙つて唯だ花やかな笑顏を見せたばかりである。

「馬代、一體お前は どうして止す氣になれないんだ。乃公を信用せんのだな。」

「信用しなかないわ。ですけれどさ……」

「そら見ろ。矢張信用しないんぢやないか。」

「だつて無理だわ。あなたには力次さんがついて居るんだし、それから濱町の村吹の女將さんもあるんでせう。ですから利なんぞそりやア一時はいゝかも知れないけれど、きつと直ぐにいけないやつてよ。」

「力次の方はもう切れたも同様ぢやないか、昨夜もあれ程話をしたのにまだそんな事を云つてゐるのか。濱明はもと／＼きまつて世話をしてゐるんぢやなしさ。そんなに不安心ならまアそれでいゝさ。」

一人は不良少年となつて勘當同様義絶同様今では父の手前表向は出入をさせぬやうになつてゐるので、云はゞ自分と亭主の吳山と二人きりも

う先の知れた餘生を送つて行けるだけのもさへあればよいのである。それには新橋開けて以來ずつと賣込んだ店だけに他からは非置いてくれと頼込まれる物もあるし、自分も出てさへるれば年來御最良のごく手堅いお客様があるので結構その日の商賣け出来て行く。それにつけ思ふまいとしても思出されるのは矢張倅の事ばかり……。

十吉は靜に佛壇の前に坐つて念佛を稱へた後御明を消して扉を閉め、表口の六疊へ戻つて絨の浴衣に着換へ何やら箱屋の婆さんと話をしてゐる中、來客の南無先生は吳山老人に送られて歸りかける。

「アラお歸りですか、先生、まあ御ゆつくりなさいましな。」

「ありがたう。その中また御禮處に出ます。」

「久振で編等でもさらつて戴かうと思ひましたのに。」

「はゝゝゝは、さういふ事ならいよく以て長居は出来ませんな。この頃はもうとんと怠つて居ます。師匠におひでしたらよろしく仰有つ

て下さい。」

「それではまたお近い中に……。」

十吉は老人と一緒に奥の間に這入つて煙草を一服したが、仔細あり氣に「お前さん。」と呼掛け

て、「駒代は二階にゐますか。」

「今方出たよ。」

「私やちつとも知らなかつたけれど、あの、何だつてね、この間から濱崎さんへ行くのは力次

さんの旦那に呼ばれてゐるんだつてね。」

「ふう、さうかい。」老人は夏蜜柑の皮を干した煙草入を光澤ぶきんで拭きはじめた。

「實は二三日前力次さんと一緒になつたんだよ。すると何だか妙な事をぶつてゐるから變だとは思つたけれど、さうとは氣がつかなかつたの

さ。處が今夜すつかりお客様から其の事を聞いてはゝアと思つたのさ。」

「ぢやアあれも見損によらずなか／＼腕がある

と見えるね。」

「何だか利が知らない顔をして取持でもしたやうに思はれるといやぢやないか。」

「何さ、なまじ口を出さねえがい。打拾つて置きなよ。出来る前に相談でもされたんなら知らねえ事、出来てしまつた後ぢや仕様がな

い。だが此の頃の子供は皆いゝ腕だな。あの妓

ばかりに限つた話ぢやねえ、此の頃の妓は義理といふ事をかまはねえのだから何處へ出てても強いもんさ。」

「ほんとうだよ。今夜いゝ／＼話を聞いたんだがね、旦那の方から身請の語まで持出してあるんだとき。引かして世話をしてやらうと仰有つてゐるんださうだけれど駒代の方ではつきりした返事をしないんだとき。」

「彼奴もこの頃は半分出るやうになつたんで、何か途方もねえ夢でも見出したんだらう。」

「まアあゝして稼いでゐてくれれば家ぢやそれに越した結構な事はないんだけれど、誰にしろいつまでも若くつてゐるんぢや無いから

ね、世話をしてやらうといふ方があるなら、その方の云ふなりになる方が當人の爲めだらうが

ね。」

一體その旦那といふのは何處のお方だ。華族さまか。

「力次さんの旦那なんだよ。」

「だからその旦那といふのはどう云ふ方だ。」

「お前さん、知らないのかい。そら、あの何とかいふ保險會社の方だよ。三十七八かね、まだ四十にやお成りなさるまいよ。お髭のある立派な好い男さ。」

事安手に出来てゐる濱岡の待合村吹のおかみと兎角手が切れないのもつまりは其れや此れやの原因からであつた。ところが茲に偶然、書生時代に買込んだ駒代に再會して見ると、何となく其の情交がしつくりと合つて誠に自然であるやうな氣がした。以前から知つてゐるので、何を爲ようが云はうが氣の置けるといふ處はない。それに年増盛りの容貌もよく人に見られてもさして自分の顔のよごれる處もない。吉岡はそこで駒代を引かして妾にし、日頃望んでゐた別荘を鎌倉邊に新築して、そこへ駒代を置き自分は土曜から日曜日へかけて氣保養がてらに遊びに行かうと思立つたのである。

お前の爲めに別荘を建て、立派に引籠までして身請をしてやると云つたら駒代は二つ返事で承知するだらうと思ひの外、これは兎角はつきりした返答をしないので吉岡は侮辱されたやうに腹も立つ。又早くも掌中の玉を失つたやうに落魄もする。一體どういふ謀で自分のいふ事をきかないのか、女の心中を見定め、とても駄目なものなら此方も男の意地、これなりきつぱり關係を絶たうと決心しながら、さて今日も眼のあたり、いかにも素人らしい丸髭の艶かしくも崩れ亂れて、細帯しどけない姿を見ては、こ

れが思ひ通り自分のものになつて新築の別荘に居たならと兎角未練な氣が出る……

吉岡は眞實駒代の丸髭がよくて／＼ならないのだ。何でも四五度目に呼んだ時、駒代はさる病院へ朋輩の病氣見舞に行つたとかいふので、其の爲めに結つた丸髭のまゝ着物も端折つてお座敷へ来た事がある。其の姿がいつもの濱岡田か銀杏返に裾を曳いた藝者の姿とはちがつて、如何にも日新しく、どこやら新派の河合にも似た處があるやうに思はれ、今まであまり藝者になりきつてゐる力次と、又一方には、いかにも重苦しくそして又時にはいやにちゝむさい村吹のおかみと、此のいづれにも見られなかつた新しい特別の心持を覺えた。其の時から不圖この女を此れなりこの姿のまゝにして置きたいと思出したのが、やがて呼ぶ度毎にいよく押へ難くなつてしまつたのである。

吉岡はこの夏中通して出勤してゐた代り秋口になつてこの一週間ほどゆつくり休暇を取つた處から、是が非にもこの間に駒代を説伏せてしまはうと急つてゐる。それには二人きり鼻をつき合せて外に氣のまぎれやうがない、外に邪魔のはいりやうがないこの三春園は箱根や修善寺の温泉などにも増して猶好都合だと見て取つ

たので、三日目の朝ふと東京の江田から株の賣買か何かの事で電話がかゝり、據處なく一寸市中まで歸らなければならぬ用事が出来たが吉岡は避くも方々までには戻つて来る。其の間誰か友達でも呼んで待つてゐるやうにと十吉の家の花助と別の家の千代松といふ二人へ遠出の口をかけて出て行つた。

駒代は獨り座敷へ立戻ると、ばつたり倒れるやうに坐ると共に疊へ突伏して泣出した。自分ながら何が何やら分らないまでに氣が上つてしまつたのである。この一日二夜といふものゝ、逃げたいにも逃場がなく立通しにしつツく問ひ詰められ、煩さく付きまとはれて、機嫌も氣棲ももう取りやうがない。身體はつかれきつて頭はびん／＼痛む。まだこの上二日も三日もここに留められてゐたらどうなる事だらうと思ふと、最初自分から勤めて泣りに来たこの三春園が牢屋としか思はれなくなつた。どこかで鶏の鳴く聲が聞えた。駒代の耳にはそれが聞立つて田舎らしく聞えると、忽ち遠い遠い秋田にゐた時の辛い事悲しい事心細い事のさま／＼が胸に浮んで来る。鶏についでに鴉の鳴く聲。縁先には絶えずかすかに蟲が鳴いてゐる。駒代はもう堪らなくなつた。もうこゝに居



「あなたにすぐ怒るんだもの。ちよいと——。」と女はきつぱり云切った男の調子に、忽ち鼻聲になり、男の胸の上に顔を押し付けた。

吉岡は全く我ながら不思議でならない。以前洋行する時には平気で捨てゝ行つて此の女が今更となつてこれ程氣に入つて來ようとは全く意外である。つい此の夏のはじめ偶然帝國劇場で用ゐつた晩、築地の濱崎へ呼んだ折には、唯學生時代の昔を思返して見る面白さ、云はば其夜かきりの物好であつたが、一度二度と度重る中にどういふ譯ともわからず唯何んとなしに徹頭徹尾駒代を自分のものにしてしまひたくなつた。

全く不思議だ。さういふつもりでは決してなかつたのだが……吉岡は駒代の顔を見る度自分の心がその思ふやうに自由にならないのを不思議がる。これまで随分遊抜いてゐるが、實際吉岡はかういふ妙な心持になつた事は唯の一度もなかつた。書生の時分から吉岡は非常に規則正しい代り潤ひのない薄情な、折々木で鼻をくゝつたやうな事を言ふ男だとよく人からいはれてゐた。蕎麥屋や牛肉屋へ上つても友達からおごられるのが嫌ひ、又友達をおごるのも嫌ひ勘定は厘毛まできちんと割前にするといふやり

方、其時分初めて藝者を買出し出したのも、云はば確固たる分別あつての事であつた。それはなまじ性慾を抑壓して却て下宿屋の下女のやうな素人の女に引掛り飛んだ恥をかくよりも、金で立派に買ふ女に間違はない。間違のない女を安心して買つて、それで性慾の壓迫を排除し精神爽快となつて學期試験毎に上席を占めればこれ即ち實益と快樂を一舉に兩得する譯であると思つてゐた。所謂現代の青年たる彼には前時代の人々々の心を支配した儒教の感化は全く消失せてゐたので、最終の勝利たる其の目的の貫徹に對しては手段の如何を問ふべき必要も餘裕もないのであつた。其の人の罪ではない。これ則ち時勢の然らしむる處であらう。吉岡は毎月何回遊べば其勘定は大略どの位といつてもきちんと豫算を立てゝゐるので、もし豫算を超過しない場合には、その剩餘は惜しまず女にやつてしまふ代りまた豫算の額より以上にはいかほど買物樂の女から呼出しの手紙を買つても厭として應じなかつた。

社會に出てからも矢張その通りである。これまで漆家の力次の旦那になつてゐた譯は性慾からでも戀愛からでもなく、所謂當世紳士の功名心とも云ふべきものであつた。力次は先年

井藤泰弘公が手につけた女だとかいふ事で今だに何かあると藝者仲間の評判。當人は其當時から一足飛びに貴婦人になりすました様な氣位。俄に茶の湯に琴書畫までを習ふといふ有様。吉岡は折頃賣出した若手の實業家として、いづれどの道藝者の旦那になるなら、よかれ悪しかれ取られる金は同じこと。さすれば都新聞の藝種に出されても人を驚かさうなのがいよいと無鐵砲に力次を口説いた。ところが男振のよいのと切放れのいゝのとで力次はお高くとまつてゐるといふ評判にも即ち案外評なく落ちたのである。然し力次は吉岡より年も既にミツ上、白襟に紋付でも着て出る時には流石に押しも押されもせぬ本場所の藝者と見えるが、不離つくらずに居る時は小皺の寄つた目の縁の黒ずみ、額の廣い、口の大きい、どことなく底意地の惡さうな中年の婆さんである。吉岡は力次に對して最初からどういふ譯か一日置いてゐたので、いくら旦那になつたからとてさう何も彼も自分の自由にする譯には行かない。殊にどうかするとこの若造がと人を馬鹿にしてゐるやうな氣がしてならない事がある。又時にはもう少し年が若くて、根こそぎ男の自由になるやうな色ツばい女がと思ふ事もある。元はお茶屋の女中で萬

さんをつれて、春園へ歸つて来た。その晩、最終の電車では江田は東京へ歸る筈なのを胸代は一同と一緒に雑魚鞍をしようといふつて無理に引留めそして夜半過ぎまで流行の江田さんをも辟易させる程ウイスキーのコップをさしつ押へつして遂に其の場に打倒れ、やがて小間物店を出して一同に厄介をかけた舉句、翌日は一日水で頭をひやす始末、且那の吉岡もこれには閉口して、一先づ三春園を引揚げる事にした。元より狂言咄分の大病なので、胸代は藝者家へ歸ると其足ですぐにも日頃信仰してゐる新街のお稻荷さまへ行つてお伺を立て、吉岡さんの世話で今が今急に商賣をよしてしまつても大事はないか、一時はよくても以前のやうに不運な廻り合せになるやうな事はあるまいか、能く占つて貰つた上、家の十吉姐さんや待合濱のおかみさんとも相談して、それから旦那の方へ返事をしようと思案をきめたのである。

髪を結び直し鏡湯から歸つて来て、鏡臺の前に坐つたが、すると慌忙しく梯子を断上つて来たお酌の花子が、「胸代おさん、お座敷よ。」

「困つたねえ。また濱崎家さんぢやないかい。」

胸代は今方自動車で三春園を引上げた。岡さんがお屋敷へは歸らずすぐと築地へ廻つて其處

から又呼びよこしたものとと思つたのである。ところが、

「いゝえ宜春さんですよ。」

「宜春さん——珍しい家から掛つて来たんだね。間違ひぢやなくて。」と胸代は首をかしげながらも稍安堵の吐息を漏した。然し今まで一度も行つた事のない待合なので、胸代は髪も出来ませんし、それに少し加減がわるくて休んで居ますからと斷つて貰つたが、すると不斷のまゝ一寸でいゝから是非といふ再度の電話。お客様はどなたかとときとお馴染の方だといふ返事に、誰とも思當りはないが、さう情なくも斷りかね、しぶゝながら、又何となく半信半疑こはんゝながら農商務省の裏通り、大小の待合軒をつらねた其の中の一軒、宜春と嵯峨様で書いた柴折門の家へ車を走らせた。すぐお二階へと云はれて、おそるゝ梯子を上つて行くと、まだ表の事ではあり、葭戸を開放した表二階、廊下からも見通される一間の床柱に背を倚せかけて、唯た一人三味線を爪弾してゐるお客——誰あらう其れは圖らず三春園で忍び逢つた瀬川の子さんである。

「あら。と云つたまゝ胸代は嬉しいうら、恥しいやら餘りの意外に少時座敷へは入入りも得なかつた。

「昨日の真書中、人気がない三春園の喧下で、何方からどうしたともどうされたとも分らず、胸代は唯々嬉しい夢を見た。然し相手は何を言ふにも引手あまたの藝人衆の事、大方その場かぎりの冗談であらう。よし唯の一度その場かぎりの冗談にしても藝者してゐる此方の身に取つては此れにまじした冥利はないと思つてゐる矢先、まだ一日とたぬ中、突然向からちやんとお座敷にして人知れず呼んでくれるとは、全く思ひもよらない、何といふ深切な實情のある仕打であらう。さう思ふともう嬉涙が眼の中ばいになつて胸代はどうする事も、何と云ふ事も出来なくなつた。

わざとらしく待ちわびて「いふ小唄を弾いてゐた兄さんは三味線を膝の上に抱へたまゝ、

「此方が涼しいよ。こゝへお坐り。」

「えゝ、有りがたう。といふのも殆ど口の中、胸代はまるで見合につれられて行つた生娘のやうに顔を上げる事が出来ないのである。

この様子に、瀬川はすっかり嬉しくなつてしまつた。同時に又意外な好奇心にも驅られ始めた。瀬川は胸代をばこれほど初生な生まじめな藝者とは思つてゐなかつたのである。二十四五





行先さだめず唯人通りのない寂しい方へと通つて行つた。

通りすがの待合の二階の灯影、流して来る新内けふふまでもなく見るもの聞くもの、世の中はまるで今までは違つて了つたやうな心持がする。駒代は瀬川の兄さんには自分の外に深い色があるか否かを疑つて見る餘裕はなかつた。唯々うれしくてならないのである。秋田の田舎へ片付いて其處で落付いて年を取つてしまつたら、世の中にこんな嬉しい事のあるのをも知らずにしたつたのだと思ふと、今までの不仕合が何とも云へない程有難くなつて、人の身の上ほどわからないものはない。辛いも面白いも藝者してあればこそだと駒代は初めて藝者の身の上の深い味がわかつたやうに思つた。それと共に同じ藝者はしてゐても昨日までの藝者とけ譯がちがふ。今は引手あまたの人氣役者を色にしてゐる押しも押されぬ藝者だと、駒代は俄に藝者の位も上り貴目もついたやうな云ふに云はれぬ得意な心持になつて、折から行きちがふ藝者の車を見てもおのづからあれはどの妓だらうと云はぬばかり。向うが薄暗い街の灯影に振返れば此方も悪びれず振返つてやるやうな男氣が出て來た。

## 七 ゆふやけ

金春通の尾花家の二階、表通の出でにさげた簾にはそろ／＼残月の西日が、向側の屋根を越してさしそめる頃、皆さんお風呂が沸きましたよ。」と梯子の下から御飯焚の聲。二階にはいづれもごろ／＼亂次もなく寝そべつてゐる藝者達、手拭浴衣に伊達袴をしめてゐるのは駒代。白かなきんの西洋寝衣を被つてゐるのは菊千代。晒木綿の肌着に腰巻一ツなのは花助。それにお酌の花子にお鶴といふまだ仕込の子供總勢五人である。

菊千代は二十三の春丈の低い丸ぼちやで、皆から金魚と綽名をつけられてゐる通り、顔も圓く眼も圓く鼻も高からず、猪首の坊主髭、姿はよくないが、抜ける様に色の白いく／＼り頃の咽喉のあたり、猫のやうに撫でて見たいやうな氣がする程である。いつも極つて潰島田に結び油をこつてりつて鬢と前髪へアncyを入れて思ふさま張出させ、いかな髪中でも剥けるやうな厚化粧に無暗とはでな物を着たがる處から、お座敷へ出る時の姿とことなく華魁らしい心持がするとやら、その爲めに年も若く見られ却ていゝお客がつくのだと陰口を云はれてゐるの

である。

明礬裱一枚の花助といふのは髪のおびれた色の淺黒い眼のどんよりした不頼、身置付のがっしりした女で年は駒代とたいした違ひはないと云ふのであるが、誰が見てももう三十前後の年増としか思はれない。常人もそれはとうから承知。容貌や柄では千人近い新橋の藝者に立交つて到底賣れるものではないと悟り、自分の柄相應にお茶屋へ行けば女中よりも能く働いて見せ若くて綺麗な流行る故と一座すれば直に腰を低くして如才なくそのお取巻にと、また呼んで貰ふ様に立廻つてゐるので、結句一同から調法がられ、お座敷も割合にいそがしく、それに又、容貌がよくないから安心だと妙な處を買つてこの二三年引きつゞき世話してくれる金貨の旦那さへ付いてゐるので、懐はなかく、存福、郵便貯金の通帳をば肌身放さずお守のやうにしてゐる。

二人してお染をさらつてゐた花子とお鶴は三味線を片付ける。菊千代は潰島田の一を氣にしながら色氣のない大欠伸、花助は起ち上りながらに伸をした後、いづれも鏡臺の抽斗から毛筋棒を取り出し鬢を上げ風呂へ行く支度。駒代ばかりはまだ起きようとせず、壁の方を向いて寝

の年合から見て一人や二人藝人の肌を知らない筈はない。昨日の書日中一春園で其の場の冗談から思はずあゝ云ふ譯になつて見れば、何ぼ何でも其儘打揃つて知らぬ顔も出来まいと、云はゞ藝人の義理半分またお説半分に座敷へ呼んでやつた。お座敷へ来て自分の顔を見れば何の臆する氣色もなく、

「あら兄さん随分ねえ。」ぐらゐの事は云ふに違ひないと思つてゐた。ところが全く豫想外な駒代の様子、もうぞつこん自分に迷込んでしまつたらしい様子に此方は男の自惚れが手つたつて無上に嬉しくなり、唯一遍の冗談でこの位の結果を現はすなら、此の上斯うもしてやつたら先ほどんなに逆上るだらうと思ふと、もう面白半分瀬川は調子につて、此迄の経験で覺えのある祝儀のありたけを爲盡さずにはゐられなかつた。

駒代はもう夢に夢見る心地といふも愚果は狐にでも化されてゐるのではないかと云ふやうな氣もして口もきけず手も出せず、唯々うれしい有難いの一念が身にしみるばかりである。瀬川は何から何まで痒い處へ手の届くやうにさ自分も姿をとゝのへて風通のいい次の間の窓際に坐つた。遠くから夜廻の拍子木が聞え

出したので夜は十時を過ぎたと覺しい。

「駒ちゃん、お茶一杯ついでおくれ。」

「冷めてるわ、もう。入替へて來ませう。」とまめまめしく立掛ける其の手を取つて、

「いゝよゝゝ。女中が來るとうるさいぢや無いか。」

「さうねえ。」と駒代は手を引かれるまゝべつたり膝を崩して凭掛り、私も咽喉が渴いてしやうが無いのよ。それほど頂きもしなかつたのに。」

「それぢや駒ちゃん、いゝかい。きつと都合して逢つておくれ。」

「兄さん、きつとよ。きつと逢つて頂戴よ。兄さんが其の氣なら私どんな苦勞でもして見せるわ。」

「義母がやかましくなければ泊つて行くんだけれど、まゝにならぬええ。」

「ほんとねえ。兄さん、今度いつ逢つて下さるの。私は十一時過ぎならいつでも身體があいてますから。」

「うつかり泊つて旦那にでも目付かるといけないう。用心に用心が肝腎だよ。」

旦那は減多にお泊りになる事はないから大丈夫よ。それよりか兄さんの方が泊れないんだから。」

「何、泊らうと思へば泊れない事はないけれど、家の義母や野暮な女はありやしない。自分だつて舊々素人ぢやあるまいしや。ぢやア駒ちゃん、明日の晩逢はうよ。明日の稽古は大概八時か九時頃にはすむだらう。僕は少居からすぐ此家へ来るよ。此家でいゝだらう。それともつと人目につかないお茶屋を知つてゐないか。」

「此家でいゝわ。ぢやア私そのつもりで待つてますよ。若しか據所ないお座敷だったら貰つて来るまで屹度待つてゝ下さいよ。」

「ぢや約束したよ。」と瀬川は初めて遊びをする若旦那のやうに改めて女の手を握り、「それぢや車を呼んで貰はう。」

車の支度の出来るまで瀬川は猶も盛に甘い事を云ひならべた。駒代は瀬川を送出して帳場へ挨拶をすまし、不圖車を呼ぶのも忘れたまゝ、其れなり外へ出る。と初秋の夜は月影涼しく簀の毛を弄ぶ夜風何とも云へぬ良い味である。駒代は農商務省の前からやがて出雲橋の方へひとり、駒下駄を引揃りながら、唯

今満ぎてしまつた今夜の事をば、總度となく繰返し繰返し思返しながら、歩いて來たが、橋の向うに遠く銀座の灯を見るとき、もう一度、何ぞを思ふともなく思ひに沈んで見たい氣がして、

えがあるんだけれどと、其の身の上を繰返し繰返し述べ立て、男といふものはいゝ時はいゝけれど一つ氣が變ると實に薄情なものだからと、日頃駒代が考へてゐた男子輕薄説に有力な根據を興へた。二人はそれから別けて話が合ふやうになり、お互に稼げる中稼げるだけ稼いで男なんか當にせず行末は小商賣でもして氣樂に一人で暮して行けるやうな算をするが一宿だと云ふやうな事を語り合つた。

駒代は秋田の家を出てから身の振方に窮して舊の藝者にはなつたものの、何にしても六七年も素人になり而も遠い田舎へ行つてゐたので、妙に氣が陰氣に固くなつてゐて、自分では随分陽氣に馬鹿な事をいつてお座敷も恥につとめ、又お金になるお客の事なら随分我慢して見つもりではあるが、其の場に臨むとどうしても以前十代の時分に東西分らず何も彼もはいゝと云つて勤めてゐたやうな譯には行かない。いやに權柄つくなお茶屋の女中又は否應なしにお客を取れと云はぬばかりな符合の女將の素振がぐつと胸にこたへて、駒代は今日まで全く一閑さんの外枕席に待つるお客は一人も出来なかつた。花助はそれをば我が事のやうに、今の中うんと稼いで置かないと木へ行つて損だよ。私が

お前さんだけの容色さへあればと頻に惜しがつて意見をする。然し駒代にはそれほどにして稼ぐ必要もなく從つてり氣もなかつたのが、こゝに一夜にして其の必要と勇氣とは共に洩く如く差起つて來たのである。

菊千代が大急ぎで眞嗣のお座敷へ行つた後、二人は後れて風呂から上り西日のさし込む表の窓際から鏡臺を裏屋根の物干へ通ふ小窓のほとりへ移し仲よく竝んで化粧をしはじめた時、駒代は突然、

「花ちゃん、お前さん此頃あの方に目にかななくつて。」

「誰さ。と花助は今縮毛の髪を直す大苦心の最中である。

「そら、あたいが出た時分によくお前さんと一座した——あの千代本のお客様さ。」

「お島さんの御連中……」

「あゝ、さうく、お島さんさ。あの御連中は何なの。議員さんなのかい。」

駒代は一心に鏡の面を見詰めて髪をかいてゐる最中、突然何の聯絡もなく、お島さんと云ふ格の紳士からお弘めの當時淺慮となく呼ばれて口説かれた事を思出したのである。且那の吉

岡さんとは萬が一身請の品を承知せぬ事から

機嫌を損じるやうな事があつたら、もう香應いふべき時ではない。誰か、人其の代りと言つて瀬川の兄さんと逢引のし度をしなければと、今度で何か云はれたお客の名を改めて一人一人思返しはじめたのである。

「あの御連中はたしか大連だつたか知ら。何でも妾那の方にお居のある方なんだよ。」

「さう、それぢや此方にやお居でぢやないんだわね。」

「毎年お正月と夏中は此方にいらつしやるんだよ。さう云へばこの夏は一度もお目にかゝらないわねえ。私南京繩子と紋縮緬をお頼みしたんだよ。いつでも彼方へお立ちの時お頼みするのさ。そりやア品がよくつて安いんだよ。」

「さう、それぢや私も何か頼みやアよかつた。だけれど何だかネチ／＼した、助兵衛ツたらしいやうな朋な方ねえ。」

「お前さんにや随分惚れてたんだよ。何でもいから取持てツて仰有るんで、私アあの晩位困つた事はなかつたもの。」

「あの時分は、私も久しくひいてた後だつたからね、何だか氣まりが悪くつて、それにさつぱり様子が分らなかつたからさ。」

「見たとこは武骨なやうだけれど、あれで中々



そべつたまゝ、

「何時だらう、もうお湯の沸く時分なのかねえ。」

「さアお起きよ。際るよ。」

「はやく様ですが、斷つてお出でだ。」

「あら、おのろけかい。驚いたよ。此の人は。」

「お前さん昨日から餘ッ程どうかしてゐるよ。昨夜なんぞ大きな聲でお前さん寢言をお言ひだらう、わたしア誰かと思つてびつくりしたぢやないか。」

「あらさう。と駒代は流石にそれ程の事もあつたかと我ながら意外な面持。初めて大儀さうに起直つて、いゝわ。おごるわよ。」

「お前さん、いよゝゝ何か出来たんだね。」

「氣が早いよ、この人は。」昨日三春園でお前さんに大變世話をやかしたからさ。

馬鹿にしないねえ。

ロイスキーをあらかた一本呑ぢまつたんだもの。今だに頭がふら／＼してゐるわ。」

「駒ちゃん、一體お前さんどうする氣なんだえ。何だか如さんも内々心配しておゐるのやうだよ。」

「私、ほんとに困つちまふわ。彼方も今のところしくじり度くないし、さうかと云つて引くや

うな噂を立てられるのも困るんだしねえ。ほんとにやう、くさ／＼しちまふわ。」

「今夜、お前さんお約束なのかい。」

「いゝえ。あれツきりよ、だけれどきつと今に見るだらうと思ふのよ。全く何て御返事して

いゝか困つちまふわ。」

種子段に覺音がした。上つて来たのは内箱のお定である。年は四十五六、百丈はすらりとして、眼の大きい鼻筋の通つた面長の顔立、若い

時にはまんざら見られなくも無かつたらしく、今こそ髪は薄く前髪のあたりに早くも白髪が見えるが、白く焼した顔の色から着物の着こなし

一體の様子。元は洲崎の華魁であつたとやら。一時亭主を持つたが死別れ、七年程前に初めて

桔庵からこの尾花家へ下女奉公に仕込み、見やう見まれて自づと箱屋の遣口を覺えた時分、丁

度以前の箱が勘定を誤魔化して首になつた處からその後を引受けてもう三年程になる。

駒代はお定の顔を見ると、噂をすれば影のたとへ。もうお前さんが來た知らせかと思はず、

「お定さん。私……」

「いゝえ、菊千代さん。眞喃さんから掛りました。御座さんの御約束は六時ですから廻れませう。とお定は命令するやうな訓談するやうな一

種の調子で、相手の返事を待たず、お前は昨日の着換で能う御座んすか。」

菊千代は何にも云はず急いで風呂場へ下りて行つた。

菊千代と駒代とは別に仲のわるいと云ふ譯ではないが、一人は九世の年寄をましまし、去年から分になつた家中での古顔、某省の県長さんと地方の資産家なる議員さんとを日ばしい旦那にして、一人で羽振をきかしてゐた處、後から來た駒代の評判が稍ともすれば自分を凌ぎさうにするので、心甚平ならぬ處がある。それが自然と様子に現はれることがあるので、駒代の方でもあんな御多福のくせに生意氣なと腹の中

で冷嘲すると云ふ工合、この間に執つて容色美ならざる利口な花助はつかず離れず兩方へ愛想よくして取巻のお座敷を二ツなりとも餘計に稼がして貰ふ算段。然し何方かといふと其年齢からも、又いゝ／＼苦勞した其の境遇からして

も駒代とばかりにしんみりした話が能く合ふのである。花助は以前段町に出てゐたが引かさ

れて兩者になり、やがて其の旦那に捨てられて三年ほど前新橋へ出たのである。

吉岡さんが身請の語を持出した時駒代が第一に相談したのは花助である。花助は私も實は覺

對月と云ふ待合だと酒屋の返事に、一先づ歸つたが、またもや呼びに来る電話。

「兄さん、どこか遠出に行きたいわねえ。」と云ひながらも商賣なれば是非もなく、駒代は再び電話へ出ると、今度は花助の聲で、是非お前さんを見たいと云ふお客様がいらつしやるんだから、鳥渡でいゝから貰つて来てくれとの事、そして出先は先刻の對月である。

駒代は是非なく承知して瀬川には一時間ほどたてばきつと歸つて来るからどうか待つてゐるやうにと頼んで、しぶく車を呼び鳥渡家へ歸つて化粧を仕直し着物を着換へて對月へ出掛けた。

風通しのいゝ二階の十疊にお客は一人、藝者は家の如さんの十吉に房八といふ少し年下の老奴、それに花助、荷香、萩葉、柞子、おぼろなんぞと云ふ二十三四の年増四五人に半玉二人を交へた賑な座敷である。これなら直に貰つて歸れると駒代は内心喜びながらも、家の如さん十吉がゐてはさすがにさう我儘も出来ぬと思つてゐる中、十吉はそれぢや又お近い中にと丁寧に挨拶して何處か外の座敷へ廻つて行つた。

お客は五十年配の色の眞黒な海坊主のやうな大男である。羽織は脱いで紺飛白の帷子に角帯

を締め、右の小指に認印の指環、兜町のお客かとも思はれる様子。一座の老奴房八と花助とを兩傍に麥酒の酌をさせながら、別に話をするでもなく唯にやゝ笑つて、柞子、萩葉、稻香なんぞといふ色盛の藝者が手放しの癡言、またはお酌が遠慮もない子供役者の品定めを面白さうに聞いてゐるばかり。

駒代は時分を計つて座敷を貰はうと何気なく立つて階下の箱部屋へ行かうとすると、いつの間にか同じく座を立つて後について来た花助、「駒ちゃん、鳥渡。」と廊下の角でそつと駒代を呼び止めて、聲をひそめて、「駒ちゃん、お前さん、今夜都合が出来ないかい。」

駒代は何の事かと花助の顔を見る。花助はちつと近く寄添つて、「昨夜ね、實は宜春さんから貰つて廻るとあの方のお座敷なんだよ。その時は非お前さんを仰有つただけけど、昨夜はお前さんも兄さんがおゐでだし、其れにもう時間が時間だつたから、いゝやうにぶつて置いたのさ。ところが又今夜お出でになつて是非私がらつて仰有るのさ。横濱の人きな骨董屋さんなんだよ。以前日本橋にお店があつた時分から、葎町でちよい／＼お目にかゝつたんだよ。此方へ来てからも時々お目にかゝるんだけど、此

方にやまだ誰もお馴染はないらしいんだよ。」花助は一足二足と押すやうにいつか廊下の隅の丁度空いてゐる座敷へと駒代を誘ひ入れ、どうやら即座に話をつけてしまはうとするらしい。駒代は何しろ今夜初めて呼ばれたお客の事、さすがによいとも云はれず、さうかと云つて昨夜も昨夜わざ／＼花助を連出してビステキを食ひながら、何も彼も打明けて頼んだ事があるので、今夜になつてあれはみんな虚言だとも云はれず、返事に困つて立ちすくんだまゝ黙つてゐるより仕様がな。

「駒ちゃん、あの方なら萬が一瀬川さんの事がばれたつて、少しも心配する事はないんだよ。役者貫をするやうな藝者でなくつちや世話して面白くないつて、いつでもさうぶつておゐてもなさる位な、何しろ能美一方の方なんだからね。なまじツかな大因方や華族さんなんぞ足許にも追付きやしない。だからね。私ア打捨つて、ひよいと外の人に取られちやつまらないうと思つてさ、私ア餘計なやうだつたけれども昨夜、實はお前さんの話をしてお頼みしてしまつたんだよ。」

あら。と駒代は思はず顔を眞赤にして眼には涙を浮べた。然し空いた座敷は廊下の電燈に薄

女の兒には親切なんだとき。ずつと前に君川家の蝶七さんがあの方に出てゐた時分なんざ、三年も病氣でひいてゐたのをずつと別荘に置いて世話をしておやんなすつたのだと云ふ話だよ。「さうかい。さういふ方なら、何だらうねえ、大抵な事は我慢して大目に見て下さるだらうね。私ア男なんざどんなに悪くてもいいわ。唯長く變らずにチツトは我儘をしても怒らないで世話をしてくれる人がほしいのさ。」

「お前さん口でこそそんな事を云ふけれど、吉岡さん見たやうな綺麗な人を旦那にしてゐちゃア、とても外の人はつとまりやしないよ。」

「吉岡さんはそんなに綺麗がして、ちつともいい男だとは思つてゐないわ。唯以前に出てゐた人だからね。然し花ちゃん、私は吉岡さんも最う長つきはしまいいと思ふんだよ。」

「どうしてさ。外に誰か出来たらしいのかい。」

「いゝえ、さうぢや無いけれど……身請の一件もあるし、それに……と駒代はさすがに云渡んで俯向いた。實の處は昨夜宜春で瀬川一絲に再會していよく深く云ひかはしたからには、此の先長い間にはどうしたつて吉岡さんに知れずにはゐまい。並大抵なお客なら自分

の腕一つでどうにでも隠しおほせて見せるけれど、あの吉岡さんと来てはどうして……筋細で行くお客ぢやないかと、流行その人の持物になつてゐるだけ能く男の鋭い事がわかつてゐるので、駒代は先づ花助を身方に引入れて、外はお客、内は朋輩から姐さん初め萬事この戀の邪魔になるやうなものを、知れぬ先から巧くして置きたいものだと思つて定めたのである。

「いろ／＼話したい事があるんだよ。花ちゃん、お前さん、どこもお約束がないんなら、今の中因業家が何處かへ御助たべに行かないかい。私アほんとうにどうしようかと思案にあまる事があるんだよ。」

「さうかい、今夜はどこも受けぢやゐないから……」

「さう、それぢや急いで行かうよ。」と駒代は飛上るやうに立上つて「お定さアんと」箱屋のお定を呼び、「鳥渡因業家まで行つて来るわ。七時か八時頃に昨日の宜春さんから掛つて来るかも知れないわ。それまでにや歸つて来るけれども、電話が掛つたら知らして。いゝ事。」

「ばた／＼と二階を下りる。

入れちがひに上つて来たのは呉山老人。物干の朝顔に水をやらうと如露片手にすぎさま屋根

の上に出た。今まで彼方此方の二階でさらふ三味線もばつたり音をとめて、何處の家でも内風呂のわく時刻と見えて物干の浴衣を、さらす夕風ににつれてコークスの卓氣盛に張り電話の鈴次第にいそがしく鳴出す色町夕まぐれ。呉山は物干の上から空一面翻皮波る鱗雲のうつくしき、朝顔の蕾數へる事も打忘れしばらくはお漬御殿の森として歸り行く影を眺めてゐた。

## 八 枕のとが

その晩駒代は丁度花助と因業家から歸つて来て、煙草を一服してゐる處へ心待ち待つてゐた嬉しい宜春のお座敷、行くとすぐに花助を呼び瀬川の兄さんに引會はせて面白可笑しく十時過ぎまで遊んだ。花助は後から掛つた他のお座敷へ廻る。駒代は兄さんとそれなり奥座敷へ引けて十二時頃には起きるつもりで、何を云ふにも色になり立ての若い同志、つい別れにくく、其の儘泊れば翌日は丁度椿古が一日休みと云ふ嬉しい。晝寐の夢から覺めてすき腹に……杯酌みかはした時である。

駒代さん電話……と知らせに來た女中もさすがの毒さうに聲をひそめた。

駒代は電話口へ出てお座敷はどこだと聞くと



べてあつたが、南巢は一向氣にも留めぬらしい様子で直様あたりの混雑に眼を移した。劇場は今しも追々おくれ走せに押掛けて来る看客に廊下運動場は勿論東西の花道平土間の間の片みまで出入の人往交ふ人、挨拶し合ふ人々、混雑する上にも混雑する眞最中である。

倉山南巢は自作の淨瑠璃や狂言の演ぜられるのを見るよりも今は唯芝居の中の混雑や見物人の衣裳髪形の流行なんぞを何の氣もなく打眺めるのを遙に面白と思つてゐるので、劇場から劇評家として或は作者として招待される事があれば場末の小芝居だらうが本場の繪舞臺だらうが、そんな事には一向頓着せず必ず義理堅く見物に来る。然し十年前のやうにもう力荷を入れて議論はしない。實際見てゐられぬ程下手だと思ふ藝にも何とかな愛嬌をつけて褒めた批評を書かうと勉めるが、折々發めそこなつては巧まずして自然の皮肉に陥る事がある。それが知識ある方面の好作家を深く喜ばせるので、南巢の劇評家たる地位は今日では常人自ら輕じ切つてゐるに係らず意外な方面に却て意外な勢力を伴つてゐるとやら。そも／＼南巢が狂言や淨瑠璃の新作に苦心したのは、十年前熱心に劇場へ出入した頃の事で其の後年々に時代

の趣味の變遷につれ、劇場興行の方法や俳優の性行藝風やら看客の一般趣味やら萬事萬端自分の思ふ事とは全く反對してゐる事に氣がつき、世が世なれば是非もない、腹を立てるも馬鹿馬鹿しいからと力めて自分からこの方面の興味には遠さかるやうにしてしまつたのである。

ところが二三年前この方どう云ふ世の風か、十年前に書いたものが折々年に一二度はきまつて何處かの芝居で興行され始めた。それをば最初は誠に苦味々々しい事に思ひ、次にはその反對に世間もどうやら日が明いて來たのかと内心少し得意になり、最後に今の世の中はいゝも悪いも新しいも古いも全く無差別何が何でもおかまひなしと云ふ風潮から、これも一時のまぐれ當りと思定めて、南巢は唯その舊作の興行に逢へば獨り心の中にその若かりし日の事を思返して悲しいやうな又嬉しいやうな思に耽るばかり。その爲めに誘出されて再び梨園の人たらしんとする野心に更に起さないであつた。南巢は最早や何事ににがざらず活動進取の現貨よりも唯惘然たる過去の追憶に何とも云ひやうのない深刻な味を覺えるのである。

「おきねさん。」と南巢は連なる宇治の師匠を呼び、「あすこの、東の棧敷の二番目にゐるのは

萩江のお萬ぢやないか。年を取つたね。」  
「あらお萬さんが來てゐますか。奥さん一寸お眼鏡を拝借します。成程々々お萬さんですよ。見ちがへるやうになりましたね。その手前の棧敷にゐなさるのはアレは對月の女將さんですね。」

「家の親が盛んに存んだ頃にや、あんなに肥つてやしなかつたが、金が出來るとえらいもんだな、まるで相ひだな。」

見てゐると上地に勢力のある女將の處へはしつきりなしに藝者が四人五人と打連れて挨拶に來る。役者も藝人も替間も通りかゝりに腰をかぎめる。お遺物の水菓子鮓のたぐひが引きかへ取りかへ引きも切らず運ばれる有様。打眺める南巢の眼には舞臺の演藝よりも遙に面白く見えるのであつた。殊に、今日の見物と云へば平素興行の劇場とは又種ちがつて東西の棧敷鶴へづらりと並んでゐるのは新橋を中心にして、新橋への義理で東京中の重立つた茶屋待合の女將や藝者を網羅したと云つてもよい。それに加へて役者に役者のかみさん、音曲諸流の家元師匠の連中から相取扱もあれば替間もある。さう云ふ仲間から敬ひ尊ばれてゐる紳士旦那方御前なんぞぶ人達の顔も見える。或はそ

明く照らされてゐるばかりなので、花跡には駒代の顔色も眼の中もよくは見えない。それに一體が早台込の世話好で鹿々々かしい花助の事、駒代が思はずアアと云つたのは同じ驚いたにしてもそれは意外な好運に驚喜したものと一圖に早合點する方の組なので、この場合駒代がどうやら厭さうにもぢくしてゐるのは、唯今夜折角兄さんが来てゐる處をその儘他の座敷へ廻るのは何ぼ何でも流石に心持がよくないと云ふ位な事。それは女の身として花助も尤至極と推察はするものゝ、さうぶ間の悪い廻合せも其れが勤めの是非ない處と、その是非ない處を我慢してくれ、ばすぐにそれだけの云ふ芽は出るのだからと、何處までも泥水家業の深切氣。それに又花助は自分のローツで今、是が非にでも駒代を取持つてしまへば、待合の口へ入らないので、お客がぢかに出す御和儀が五十圓と相場を踏めば二十圓は自分のもの、百圓とすれば五十圓、こゝ等が面のよくない取巻藝者のいさゝかりをつく處と、銀行の貯金通帳をいっすも肌身放さず持つてゐる力だけに慾心満々。花助は兎角の返事をきくよりも、いや、そんな事で暇をつぶしてゐては却て出来る事も出来なくなる。何でも構はないから切破つまつた是非な

いハメにしてさへしきへば、自然に埒は明くものと、さすがに断れた道は先を見越して、一それぢや頼んでよ。よくつて。と花助はそれなり駒代を空いた座敷へ殘して附子段の方へ行つてしまつた早業に、駒代はまアお待ちよと云ふ暇もなく、唯胸のみどき／＼させながら冷方に置れてしまつたが、いつまでも此の空座敷にぼんやりしてもゐられず、折から丁度廊下に女中らしい聲音が聞出した處から方なくもと座敷へ立戻つた。見ると、老奴の房八はとうに居ず、稻香、おぼろ、杵子、萩葉など揃ひも揃つていつの間にか引さがり、居残つたのは僅に丸といふ半長一人、海坊主のやうな若輩屋の旦那女中に中をあふがせながら相變らず悠然として大杯を傾けてゐた。

## 九 おさらひ

毎年の春秋三日間歌々座で催す新橋藝者の演藝會もいよく秋期大會の初日となつて番組の第一番目花やかな總踊が今方丁度幕になつた處である。  
「あなた、早く来てようござんしたわ。お玉ヶ池はこの次の次ですよ。」と手にした摺物を南東に渡して、茶碗に茶をつぎかけたのは其の妻と

覺しい三十四五の丸髷。その側にはぼつかりした目付のすぐに母親と知れる十二三の可愛らしいお嬢さんに、五十前後の小さな丸髷小紋の狩織に宇治の紋所をつけた出入の師匠と覺しい四人連で場所は正面邊敷の少し東へつた一樹を占めてゐる。

「あら、奥さん、どうも二へりしました。」と宇治の師匠らしい方は茶碗を受取り、「もう十年近くになりませうね。たしか先代の瀬川さんがおやんなすつたんでしたね。あの淨瑠璃で御座ませう。」

「さうですよ。近年はどうした事か、折々時なれない時分に私の書いた碌でもない狂言や淨瑠璃が出るんで實は閉口してゐるんです。何しろ氣まりが悪くていけません。」

「字ではいつでも御自分のものが出るかと御機嫌が悪いんですよ。その位なら初めからお書きにならなけりやアいゝのに……ほゝゝゝ。と九齡は笑ひながらお嬢さんうつまめるやうに大きな義を楊杵でちぎり始める。

「はゝゝゝは。」と南東は番組の摺物を眺めて唯可笑しさに笑つた。番組には其の三番目に南東が舊作なるお玉ヶ池由来問書といふ淨瑠璃名題その下に常磐津連中と踊る藝者の名が二人並

それアさうと、まだなか／＼お前の番ぢや無いだらう。」

「えい。」

「表に誰か来てゐるかい。」

「〇〇さんも□□さんも（役者の本名を云ふと知るべし）みんないらしてよ。」

「さうかい。」

「みんなお二人づれよ。」と駒代は何といふ譯もなくつい言葉に力を入れて云つたのを自分ながら心付いて、「岡焼したつて始まらないわね。ほゝゝゝほ。」

その時床山が駒代の髪を見せに來た。

## 十　うづらの隅

吉岡さんは會社の江田と一緒に駒代の保名が出るすこし前に、待合濱崎のおかみと駒代の家の花助と半玉の花子をつれて東の鶴へ見物に來た。實はこの夏の末駒代が身請の相談に乗らなかつた時、吉岡は腹立ちまぎれに手を切らうと思つたが、さて差當つて駒代に代るべき氣に入つた藝者が見當らないので一圖に怒つて見たものゝ何うやら其の始末に困つてゐるのを、斯う云ふ事には馴れ切つた濱崎のおかみがいろいろに詫を入れたので、吉岡は従前通り駒代の世

話をしてやる事になつたのである。然し其後は餘程足が遠くなつた。仕てやるだけのものを仕てやればそれで旦那の顔にかゝる事はないと云つたやうに、吉岡は十日目位に江田をつれて飲みに来るばかりなので、駒代が瀬川と内證で逢つてゐる事も又別の旦那をこしらへた事も一向に感付かなかつた。長年遊びつづけた藝者遊びにもすこし疲れを覺えたといふ氣味で、吉岡は三春園を引上げてからは何といふ事もなく無事平凡な日を送つてゐた。會社からすぐ家へ歸つて早く寝る。そして日曜日などには奥さんと子供をつれて動物園にでも行くといふやうな、至極眞面目な生活を別に寂しいともつまらないとも或は又楽しいとも面白いとも、何方とも思はず唯ぼんやりとその日その日を送つてゐたのであるが、今日久しぶり歌舞伎座の鶴へ坐つて満場、悉く解語の花ともいふべき場内の光景を見渡すと、吉岡は目の覺めたやうな新しい心持になつて、世にある快樂は一つ餘さず食ひ取らねば氣がすまないといふ様な猛烈な欲求をば再び胸一ぱいに感じ始めた。吉岡は今日文明の社會に於て酒色の肉樂に對する追究は丁度太古草莽の人間が悍馬に跨つて曠野に猛獸を追ひ其の肉を屠つて舌つゞみを打つた

やうな、或は戰國時代の武士が華やかな甲冑をつけて互に血を流しあつたやうなものである。凡てこれ悲壯極りなき人間活力の發揮である。この活力は文明の發達につれ社會組織の結果として今日では富貴と快樂の追究及び事業に對する奮闘努力と云ふが如き事に變形した。名譽と富と女とこの三ツは現代人の生命の中心である。それをば殊更に卑しめ、或は憎みまた懼れるのは要するに奮闘の勇氣なき弱者か、さらば失敗者の曲解である。云はゞ先づこんな風に考へてゐるので、劇場内の光景がいさゝかでも活動の元氣を起させてくれた事を知ると共に、吉岡はまだなか／＼年を取りはせぬ、まだ自分は若くて働けるなと思ふ處から自然と深い満足を感じるのであつた。

拍子木が鳴つていよいよ駒代の踊るべき幕がゐた。清元の太夫が聲を揃へて語り始める。どこやらでもう手を叩くものがある。お酌が三人自分達の席へ戻らうと急いで吉岡の坐つてゐる鶴の後を翫過ぎながら、

「保名だわ。ちよいと。」

「駒代姐さんの保名、そりやいゝ事よ。」

「それア當然だわ。瀬川さんがついてゐるんですもの。」



れと反對に花柳界の寄生蟲とも云ふべきセル袴や洋服を着た一種の人間もろく／＼徘徊してゐる。藝者家の亭主瀬方女中箱屋もしくは藝者家の身寄のものは先づ大抵平土間の末の方に寄集つてゐた。

南巢はかう云ふ人達を見るため獨り廊下へ出てぶら／＼してゐると往交ふ人の中から花やかな聲で、

「先生ようこそ。」と呼びかけられ其の方を見返るとこれは白樺模様の襪下地にした尾花家の駒代であつた。

「お前さんの出し物は何だい。」

「保名です。」

「さうか、何番目だ。」

「まだなか／＼ですよ。五番目位でせう。」

「いゝ處だな。おそれから早からず、見物が一番氣乗りのする時分だ。」

「あら大變だわ。猶心配になつちまふわ。」

「吳山さんはお達者か。」

「ありがたう。もうその中参りませうよ。如さんと一緒に出掛けるツてさう云つて居りました。」

通り掛る同じ襪下地の藝者が駒代の姿を見て、「駒代姐さん、さつき御師匠さんがさがしてゐてよ。」

「あらさう。先生それぢや又後ほど。どうぞ御ゆるり。」と云捨て、駒代は人達の廊下を小走に駆けて行く折から、舞臺では番組の第二番目が始まると見え拍子木の音が聞えて廊下の往來は一層烈しくなるが中にも、駒代の襪下地を見付けて摺れちがふ人達は男も女も振返つて見ないものはない。駒代は氣まりの悪いやうな氣もするし同時に又何とも云へない得意な心持にもなるのであつた。此春の演藝會の折にはまだ弘めをしてから間もない時ではあり、それに肝腎な費用を出してくれる人がなかつたので駒代は猿廻しを出す藝者の相手にと、師匠から勧められて幾處なくお染をつとめたのであつた。ところが非常に評判よくその爲めにお扇子で呼んでくれるお座敷が一時はなかく忙しかつたので、駒代はすっかり氣がなくなり、此の秋の大會には見物をあつと云はせるやうな大物を出さうと意氣込むやうになつた。それに何より安心なのは今度は萬事の費用を吉岡さんと、それから吉岡さんには内々で新規に出来た他の旦那とこの兩方から出して貰へることである。そして藝の方にかけては専門の瀬川一絲がついてゐて、舞臺の呼吸を教へ、演藝の當日には瀬川の

弟子が後見につくと云ふので、駒代はもう立派な役者にでもなつたやうな心持。この演藝會で以前にも増して一層の好評を博すれば、いよいよ新橋切つて踊りではすぐに駒代さんと星をさゝれ、誰知らぬものなき第一流の名妓になれるは知れた事、さう思ふとどうぞ首尾よくやるやうにと、さすが幕の明くまでは心配で心配でならないのである。

廊下のはづれの出入口からすぐ舞臺の裏へ出て、駒代はいつも之居のある折には大抵瀬川の部屋と定められてゐる二階の一室へ急いだ。駒代はこの三日の間、瀬川の兄さんの部屋を借り兄さんの鏡臺で化粧をして、兄さんの使つてゐる男衆や門弟に世話して貰ふ其の心の中の嬉しさは、自分ながら何と云つていゝか分らぬ位である。瀬川の兄さんは今方樂屋口から遊びに来た處と見え、薄セルの外套を脱ぎかけてゐたが、駒代の急しうに這入つて来るのを見て、

「何だい。あんなに電話で人をいそがして置いて。お前今来たのか。」

「お氣の毒さま。と人前はゝからず其の側に坐つて、「いま表へ御挨拶に行つてゐたのよ。兄さん、今日はほんとにいろ／＼有難う。」

「何だい、それ／＼しく御禮を云ふぢやないか。」

に地を頼めば無事なのを、駒代はそれでは自然に師が引立たないと思ふ處から、莫大な御禮をも惜しまず本職の男の太夫連中をば瀬川一絲から頼んで貰つた。別に菊千代に歌はれるのがいやだとか、又は菊千代の藝がわるいからだとか云ふ譯ではない。駒代は唯只自分の藝を立派に引立たせ、この師一番で新橋中へ名を賣弘めたいばかり、兎角の事情を顧みてゐる暇がなかつたのである。然し菊千代に取つては之れ甚面白からぬ次第である。駒代の評判を目の前に見るのは如何にも癪にさはつて成らないと思ふ處から、この保名だけはどうしても見たくないとと思ふものゝ、日頃最良のお客とお茶屋の前に對してさうもならず、わざ／＼駒代の旦那の處へお義理の顔出し、何とか一言代はほめなければならぬ心の中、實に腹も立つ情なくて泣きたくもなる。

月夜烏にだまされて、いつそ流して居つづけは、日の出るまでもそれなりに。寢ようとすれど寢られねば、寢ぬを恨みの旅の空――

師は正に佳境に進んだ。濱崎のおかみと花助は旦那への御世辭「しつかりした好い藝になつたわねえ。何によらず勉強が肝腎だね。何し

ろちつとも厭な癖がないんだからね。」と頻にほめたゝへるのを聞くと、菊千代は唯溜息をつくばかり、吉岡はもう無暗に腹が立つて来て、無理遣にもこの菊千代を拉し去つて駒代に鼻をあかしてやりたいと思ふ心は次第に烈しくなる。師は「葉越しの木ごしの暮の内」と云ふあたり吉岡は菊千代の手をば何といふ事もなく突と握つてしまつた。

## 十一 菊をば花

演藝會は三日間大入を取つて目出度く千秋樂になつた其の翌日の事である。新橋の藝者町は年が年中朝早くから家毎に開え出す稽古三昧の音今日ばかりはばつたり途絶えて、稽古に通ふ女の往來もわけて少い處から、金春通を初め仲通板新道から向側の信樂新道まで祭のあの町内も同様何やらひつそりと疲れたやうに見えた。時たま忙しさに歩き廻る箱屋の姿と顔の賣れた老奴の三四人連立つて往來するのが餘所目には興行の後片付と云ふよりは新に何か又採事苦情の起つた知らせのやうに若い藝者達の目を聳たせるのであつた。

苦情と不平は事ある毎に此の仲間のつき物、但し政治家のやうに詭計を廻して紛擾を醸させ

之を利用して私腹を肥さうと云ふ程惡賢くないのが、まだしも藝者の議員より品格ある處かも知れぬ。されば此日は朝湯の洗場、髪結、家毎には抱妓のごろ／＼してゐる二階など、およそ女の集る處と云へば互に妬み半分の藝評を中心に有るかぎりの囁口、仲口、告口、そしり口、わけてもこゝに尾花家十吉が二階へと日頃おいらん様とか支那金魚とか云はれてゐた菊千代が突然身請になつたといふ噂を傳へたものがあつた。それは髪結さんから歸つて来たお酌の花子で、昨夜まだ演藝會がはねない中ふいと丸鬘を結びに來た菊千代の口からぢかに聞いた話だと云はれたまゝを、その通り居合はす駒代に傳へたのである。評判は忽火のやうに向三軒兩隣、それからそれへと廣まつて行くと共に、いづれも身請のお客はそも誰と論議に論議を擬さうにも、當人の菊千代は、昨夜大方歌舞伎座で地方の役を済ますとそれなり直に髪結へ廻つて丸鬘に結び、何處へかしけ込んでしまつたものと見えて家は昨日の午後に出たツきり今だに電話も何もかけて來ぬので箱屋のお定さへ「居處を知らぬ始末。『あの人の事だもの、日本人ぢやないよ。異人でなければチャン／＼坊主にちがひないよ。』」と尾花家の二階では論議のつかぬ口

「随分大變なんだつてね。」

「來の人のざわ／＼してゐる中から、不意と此の話聲が、どういふはずみか明瞭と吉岡の耳に這入った。吉岡は覺えず聲のした方へ振返つたが、斯過ぎるお酌達の後姿は消れちがふ人の中に只その帶と振袖の模様とを見せたばかり、何家の誰とも見定める事は出来なかつた。

然し吉岡にはふいと耳に入つた最後の一言――

「随分大變なんだつてね――これだけでもう十分の上にも十分なのである。面と向つて當付がましく言つたのならいざ知らず、先は無礼氣なお酌がしかも通りすがりに何の氣もなく、無論自分がこゝにゐるとは知らず、極めて自然に不用意に口走つた噂話、それは十分眞實として聽くべき値打がある。六ヶ敷云へば此れ即ち天に口なし人を以て言はしめたものである。大岡はまづ斯う斷定して然る後時代がその後の様子をおぼ／＼出来得るかぎり細密に思返し始めた。それと同時に吉岡は又、いつも一座の江田が自分より先に既にこの事を知つてゐたか、どうか。知つてゐても自分に氣の毒だと思つて黙つてゐたのか、どうか。或らう事なら此の事を知つたのは自分の方が初めてであつてほしい。さうでないといふ如何にも自分が甘く見えて氣がき

かないからと吉岡は目頭花柳道に以て大に自任してゐるだけ、周囲に對しては一倍深く恥辱を感じ、また駒代に對しては一倍烈しく憤怒したのである。

舞臺では右手の淨瑠璃臺の上に居竝んだ太夫が聲を擡へて――岩せく水とわが胸にくだけておつる涙にはかたしそでの片おもひと丁度置淨瑠璃を語り終つた處で、調へ始める鼓の音に場内の氣を引き締めていよ／＼保名の出、満場の視線は一齊に向揚幕の方に注がれた。

高い處では頻に手を叩くものがあつた。吉岡は野邊のかげろふ春草を素袍袴にふみくだき狂ひ狂ひてわが前に現れて來る駒代の姿をば、餘りのいま／＼しさにわざと見まいと廣い天月へ眼を移し、今度はゆる／＼駒代が落船の相談を避けた譯合を考へ始めた。考へまいと思つても考へずには居られないのである。今日と云ふ今日まで吉岡には駒代の云ふ事がどうもハツキリ腑に落ちなかつたが、初めて何も彼も明かに解釋がついた。いよ／＼駒代を捨すべき時が來た。わざと何事も知らぬ顔をして此方を出し抜けに鼻をあかしてやりたいたいものだ。さりとて今更舊の力次へ立戻るのは甚だ氣がきくまい。誰ぞ新橋南北壹千九百有餘名と數へられたる藝

者中駒代がそれを聞いて眞實口惜しがつて泣くやうな女はないか知ら、吉岡は眼のどやかんかぎり鶴棧敷高士間平土間から、その邊の廊下に立つてゐるのもまで滿ちらしい姿のものをば一時に見盡さうと思つた。見物は一齊に今しも駒代の保名が本舞臺へ來かり戀人をさがす狂亂の振を見詰めてゐる。折から靜に鶴の戸を明けて小聲に、

「どうもおそくなりまして。と挨拶して入つて來たのは尼花家の菊千代である。いつも口の悪い連中から何となく華豔らしい氣のする女だと云はれてゐる厚化粧の菊千代である。

菊千代は今日の演藝會の第二番目に傀儡師のワキを語つたので、高島田に裾極様の衣裳は標のあたりへまで金絲の緋を入れた模様を見せ、口頃の厚化粧を一段濃くさせてゐたので、鶴の戸のあく音にふと何の氣なく振返つた吉岡の眼には、つと首を伸した菊千代の顔がばつと場内の燈火を受け獅子板の押給のやうに見えた。吉岡は菊千代と駒代との間の兎角何かにつけて競争の氣味合になりたがつて居る事をば思ひ返した。現に今日の演藝會についても、立方の駒代が清元の保名を出すならば、同じ家の菊千代が藝は清元と云ふ事になつて居るので、それ



さては身請の噂は満更の虚言でもないのかと、十吉は早くも推察して二度びつくり、しげしげと菊千代の顔を見直しながら人のゐない奥の間へと立つた。

小半時して菊千代は丸詣ぐらゝ前さかりの裾だらしなく、両も大手を振つて二階へ上つて来ると、みんなはそれ〴〵お座敷への支度最中、菊千代はいかにも疲れたやうに二階の真中へ足を捻出して坐りながら獨言のやうに、

「私も最う今夜きりだわ。」

「如きさん、お目出度いんですつてね。」と半玉が先に聞き始めた。

「えゝ、おかげ様で。」と誰に云ふのやら分らぬ挨拶。「花ちゃん。家がきまつたら遊びにおいでよ。」

「さすが傍のものも黙つてはゐられなくなつて、

「菊ちゃん、お前さんほんとうにまアよかつたねえ。引くのかい。それとも自前かい……。」と花助がきゝ始めた。

「引いたつて、つまらないから自前でやるつもりなのよ。」

「あゝそれがいゝよ。勝手づとめで出てゐる位面白い事はないからね。」と駒代も言ひ添へた。

「菊ちゃん、これは……。」と花助は掲指を見せながら、「Oさんぢやない事……?」

菊千代はうゝむと駄々兒のやうに首を振りながら唯だ笑つてゐるので今度は駒代が、

「それぢや矢アさんかい。」

菊千代はやはり笑つてゐる。

「誰だよ。菊ちゃん。朋輩のよしみぢやないか。教へたつていゝぢやないか。」

「だつて氣まわりがわるいからさ。ほゝゝゝほ。」

「どうも、御尋常でいらつしやいますからね。」

「だつて、みんなの知つてゐる人なんですもの。随分爺屋さんだから今にすぐ知れるわよ。」

出先の茶屋からそろ〴〵御催促の電話に急ぎ立てられて、駒代はそれなり出て行つた。さすが此度の演藝會に物費を惜しまず保名を出した

效目は空しからず駒代が藝者の控所とも云ふべき箱部屋へ這入ると、居合す藝者衆一同から、

いづれも、駒ちゃん結構だつたね大したもんだねとの評判。さて宴會は十五六人のお客に藝者

者は老若大小二十人ばかり、餘興に駒代は浦島を踊つて喝采され、更にお客がたつての所望

で又一番。汐酌を踊つて程なく後からかゝつた座敷へ廻つた。

茶屋は濱崎、客は吉岡である。吉岡は鳥渡

他から聞いた話だが、お前の家の菊千代が自前

になるとやら、私も何か祝ふからお前も祝つてやるがよいと云つて、駒代が辭退するのを無理遣りに十圓渡して其夜は近頃會社が非常にいそがしいのだからと、酒も深くは吞まず一時間ばかりでお立になつた。

然し駒代は兎に角に吉岡さんが見えたのでお茶屋への手前もよく此れで演藝會初日の夜の心配もなく、快く菊千代への祝物もすました。菊千代は板新道に頃合の空家を見つけて菊尾花と云ふ分看板を出した。そして今まで結つけの同じ髪結さんへ来て時折駒代に逢へば別に以前と變つた様子もなく相變らず取り留のな

い事を言つてゐるので、駒代は其後しばらくの間菊千代を身請した旦那が誰であらう自分の旦那の吉岡さんであらうとは全く氣がつかずにゐたのであつた。

一ツ小袖の陽氣はいつか過ぎた。花月の膳には初芽しめぢの蕪も早や尊からず松茸は松本が腕にも惜氣なく煮込まれ、トしきり、日比谷公園に人足牽きつけた菊の花もいつの間にやら跡方なく、散敷く落葉は砂塵にまじつて舊の廣々した砂利場をば球投の學生と共に駈ずり廻る頃となつた。議會が開けて新橋の茶屋々々にはい

惜しさ。さう云ふ事に衆議一決して或はお参りに、或は湯に或は髪新に出かけた。

駒代は皆の出で行つた後を幸、簞笥の前に坐つて此の三日間歌舞伎座の舞臺に保名を出した費用——先づ師の師匠と清元連中への包金から劇場樂屋のものと大道具の幕引への心附、特別に瀬川一絲の門弟連への謝禮など已に拂つたものまだ拂はぬもの又は立替へになつてゐるらしいものなんぞ、凡てつけ落のないやうに調べ一先づやつとの事で、高六百何十圓と云ふものをよせ終り帳面を眺めてぼんやり煙草を一服してゐたが、急に何か思出したやうに帳面をば用簞笥の抽斗へ收めて待合の濱崎へ、おかみさんがおゐでなら此れから島渡お禮かたへ、伺ひますからと電話をかけ女中に風月堂の商品切手を買はせた。

駒代は一昨々夜演藝會の初日の晩、いつもならば濱崎へお寄りになるべき筈の吉岡さんが、自分の出し物の済むかすまぬ中に急用とやらでお歸りになつてしまつた其の事について、何か譯があるのでは無いかと、駒代は瀬川との關係から何かにつけて疵もつ足、その時から頻に心配してゐながら、然しその夜は吉岡がゐなければ結局瀬川とゆつくり出逢つて、舞臺の出來の

よしあしをきき、直すべき處はそのやうに手を取つて教へて貰へる嬉しさに、濱崎へはとうとう電話もかけずにしまつた始末、二日目は對月のお客横濱の骨董屋の旦那で全つぶれ、昨夜三日目の晩は突然思ひもかけない杉島さんと云ふ大連のお客——此の春弘めの當時頻に口説くのを無理に振つてしまつた其の人に呼ばれ、矢張體のいゝ事を云つて逃げるのに骨が折れた爲め今日まで心ならずものびくになつてゐたのである。

濱崎の女將は其の夜吉岡さんは別に怒つた御様子もなく、江田さんに何かお話しなすつて先へお歸りになつた。全く何か急な御用があつたらしい。江田さんはそれからお前さんも知つての通り後一幕見て獨りでお歸りになつたと云ふ。駒代はまあよくかつたと竊に胸を撫で撫で歸つて来て、用簞笥の上に安置したお稻荷様へ途中で買つた金つばをニツ俱へて一心にその御利益を念じた。

その夜は無事お座敷に行つて歸つて来たが、いつものやうに菊千代は泊込みと見えて姿を見せなかつた。その翌日になつても皆がそろそろ夕化粧にかゝる時分まで、まだどこからも居處を知らして来ないと云ふので、箱屋のお定は

萬が一の事でもありはしないかと心配し出す。身請の話はどうやら逃亡か自由廢業の風説に變じかけて来た。尤もこれまでも度々菊千代はお座敷からいきなり家へは何となく歸らずにお客のいふまゝ箱根伊香保はおろか、京都まで行つてしまつた事さへある位なので、如さんの十吉は案外驚かず唯菊千代のだらしが無さ加減、他のものゝ手前もあればどうにか爲なければ仕様がなと愚癡をこぼすばかり、身請がきいて呆れると云つてゐる處へふらりと菊千代は根の抜け切つた大丸鬚胡れ放題こはれ放題、眞赤な手柄がよくまだ落ちずにゐると思はれるのを平氣でぐら／＼させながら、顔は日頃厚化粧の白粉ところ斑にはげ落ちて、それなり湯にも這入らぬらしい襟裾薄黒く油じみたのも一向に構はず、今起きたと云はぬばかりだしもない着物の着やう、足袋には赤土のついてゐるのも其の儘なのに、流石人のいゝ十吉も困つたものだ、中年者は藝人ばかりではない、藝者も欠張り半玉から仕込まなければ到底人前へは出されないといつ／＼呆れて小言も出ぬ始末を、此方は一向に感じぬらしく、何やら得々とした様子、仔細あり氣に、

「如さん、少しお話ししたい事があるんですよ。」

入れ上げて金がほしくてならないとか、借金で首がまはらないとか云ふものは居ないかといつも物色するのである。

されば駒代が一方に瀬川と云ふ色のあるかざりこの海坊主を振切りたいにも振切り兼ねてゐるらしい様子、海坊主には又とないお詠ひ向の藝者である。海坊主は十二月の聲をきくと、誰しも道に落ちた金でもあらばと血眼になる時節柄と思へば、時分はよしとのそり／＼對月へ出かけて駒代をかけた。冬の日は短いながらも暮れきらぬ。駒代は出入の小間物屋へと板新道を抜けて行く折から隅らず電燈に菊尾花と叫いた家を見て自前になつてからついまだ一度も尋ねなかつたと思付き、門口から聲をかけた。内からはお上んなさいよと云ふのを、玉仙まで買物に行くから歸りに寄らうよと、その儘歩いて行く向から一挺の幌車、すれちがひに幌の間からチラと見えた横顔はまさしく吉岡さんらしいのに駒代は振返つて佇む間もなく、車は菊尾花の門口に止つて幌の中から降りる洋服のズボンの色には見覚えがある。をかしいなと思ひながら、さすがに、まさかに、さうとも疑ひかね、駒代は兎に角様子を窺ふにしくはないと、おそる／＼門口へ立戻る途端、使か買物か十四

五の女中らしい小娘格子戸がらりと明けて出るのを幸ひ、呼止めて、

「お客様なの。」

「え。」

「あの方姐さんの旦那……。」

「え。」

「それぢや又来るわ。姐さんによろしく……。」

「え。」

小婢は二三間先の酒屋の店先へお酒五合——

いつもの一番いゝのよ。」と云ふ金切聲は殆ど氣も顛倒した駒代の耳にもよく聞えた。

駒代は家へ歸つたがあまりの事に涙も出ない。今日が今日まで知らねばこそ、のめ／＼と

門口を通つたついでに聲をもかけた。内では今頃さぞ馬鹿な奴だと腹をか／＼て笑つてゐるだらうと思ふと實にもう何とも云ひ様のない心持になつた。

丁度菊屋のお定が對月からお座敷だと知らせたが、對月と云へばお客はどうせ海坊主と思へばまた更に腹が立つ。駒代は心持が悪いから今夜は自分で仕舞つて休むからと、その儘二階へ上つたが、三十分程すると何かまた思返したらしく、菊屋を呼んでお座敷へ出て行つた。

やがて間もなく燈火がつく時分、駒代は電話

口へ花助を呼出した。「私、これから水戸まで行つて来るわ。お定さんにも姐さんにも何と云い／＼やうに云つて置いて……ね、お願ひだから、たのんでよ。」とその儘切つてしまひさうなのに花助はあわてながら、

「まア駒ちゃん、お前さん、今どこにゐるんだよ。對月さんかい。」

「いゝえ、對月さんは一寸顔を出して宜春さん

にゐるのよ。身軽の事は宜春さんのおかみさんにお話したのよ。だけれども私から家へ電話をかけてさう云ふと面倒だからさ。明日か明後日の中には歸つて来るわよ。島渡兄さんに逢つて話したい事が出来たんだから。よくつて、後生だからたのんでよ。」

駒代は何と云ふ譯もなく、唯無暗に兄さんの顔が見たくなつたのである。このり惜しき無念さ——腹の中が煮えくり返つてしまひさうなのに、誰一人たよるものもない云慰めてくれるものもない悲しさを細々。駒代は瀬川一絲が水戸の興行元へと前後の思慮なく駆けつける氣になつたのである。

## 十二 小夜時雨

鶴鶴や戴鶯の来る頃にも植込のかげには絢



つもの顔に加へて更に田舎臭い顔やちむさい  
髯面が現はれ、引續く丸の内の會社々々の總會  
に、從つて重役連の宴會も毎夜に及べばまだか  
と思つた半玉の突然一本になつた噂の種もおの  
づと増える。銀座通には柳の葉黄みながらまだ  
散盡さめに商店の飾付がらりと變つて赤い旗  
や青い旗そこ等中何處といふ事なく日にまし目  
につき出すと、もう金切聲で叫ぶやうな樂隊の  
響が覺えず振返る人の歩みを急にくさせる。號  
外號外の聲。何かと思へば相撲の苦情が翌日  
から新聞の紙面を賑はしはめるのである。藝者  
はそろく春の支度の胸算用、お客の見る前も  
憚らず帶の間から手帳を取り出して一度も削つ  
た事のない古鉛筆の丸くなつた先をなめく手  
廻しよく春の座敷の日割を書き込む。

駒代はこの時分になつて初めて吉岡さんが其  
の後ばつたりお出にならないうが、どうなすつた  
のかと急に氣をもち出したのである。丁度折か  
ら吉岡さんの切廻してゐる保險會社の宴會があ  
つて、毎年きまつて呼ばれる藝者は大抵其の夜  
も呼ばれてゐたのに駒代だけには何とも沙汰が  
なかつた事を其の翌日聞き知つてさてはと一方  
ならず胸を痛めたがもう何とも仕様がないう。  
瀬川の兄さんは新橋の演藝會がすんでから一

週間ほどして水戸から仙臺へといつも一座の立  
役、團藏張りの法味と鐵枯聲を人氣にしてゐる  
市山重藏に、もとどんな帳役者だけに男女老少何  
でもやつてのける重寶な笠屋露十郎などと旅興  
行に出かけ歸りはぐつと押詰つてからの事にな  
らう。駒代は瀬川に旅立たれてから俄に心淋  
しくなつて、今までは忘れるともなく忘れてゐ  
た吉岡の事を初め何から何まで打撿てたまふに  
なつた商賣の事をゆつくり思返す暇が出来て  
きたのである。

對月で花助が無理に取持つた彼の海坊主のや  
うな骨董商、名からして潮門堂の主人は相變ら  
ず五日目十日目位に遊に來る。駒代はもと  
と花助の手前止むを得ず往生した事とて、其後  
逃げそこなつてつい二度目三度目となれば、い  
よいよかの菊千代さんなら知らぬ事、外の藝者  
では到底辛抱するものはあるまいと思はれる始  
末に、駒代はもう此度こそは、あの位手厳しく  
振付けば何程人のいゝお客でも二度と來はせま  
いと思切つた仕打度々に及んだのであるが、海  
坊主は泰然自若いつもニヤ／＼してゐるばかり  
來れば必ず駒代を中心に顔の賣れた藝者大勢呼  
集め殊に演藝會の折にはいやでも新橋中こそつ  
て駒代の評判をしなければならぬやうに土地の

老成を呼集めてよろしく頼むぜとぶつたやうな  
ソツのない仕方。瀬川の事は何も彼も打明けぬ  
先から承知して引續きへ贈る始末。この客一人  
あればまこと千人にもまさつて頼母しだけ、  
辛き厭きも並大抵のお客の千百倍。駒代はいつ  
とも今度ぎり、ふる／＼いやと身顫しながら  
咽喉元過れば、ついまた家業の慾、我れとわ  
が身の淺間しさに獨り口惜し涙をこぼすより仕  
據がない。

この口惜し涙。女が歯を喰縛りながら何と  
も出来ぬ見じめな様を見るのが潮門堂の主人の  
面白くてならぬ處なのである。海坊主は自分か  
ら色の眞黒なをよく承知して若い時から女  
には萬事強面で通して來た。横濱には世話をし  
てゐる待合もあり藝者家もある位なので別に女  
に不自由する事はない。然し多年遊びつけた習  
慣で、東京へ出て來る時と云へば何處かの茶  
屋へ立寄りねげ氣がすまぬのである。立寄つた  
處で女に喜ばれないのは承知の上なので、海  
坊主はいつともなく女をいやがらせたり困らせ  
たりいぢめたりする事を遊びとするやうになつ  
た。いやがる女を無理やり手込めにするのが面  
白くつてならないと云ふ厄介な品物となつた。  
海坊主は茶屋の女將に、誰か相應の女で役者に

器場裏に其名を知られたのである。それやこれやで、醫者をしてゐる時よりも案外に収入が多く、別に蓄財の道を講ずるといふ程の苦心もなく、いつか子孫をして長く世路の艱難を知らしめざる程の財産をつくつて幸福に世を去つた。其の時南巢は丁度二十五歳で既に馬琴風の小説一二篇を新聞に掲載してゐた。父なき後は其の知己中に新聞社の社長や主筆になつてゐるものも少なくなつたので以來南巢は操觚の人となつたのである。然し南巢は紅葉眉山等硯友社の一派にもさしたる關係なく、又透谷秋骨孤蝶等の新文學も知らず、逍遙不倒等前期の早稻田派とも全く交遊する機会なく、唯先祖代々住み古した根岸の家の土藏にしまつてある和漢の書籍と江戸時代の隨筆雜著の類から獨り感興を得て、或時は近松、或時は西鶴、或時は京傳三馬の形式に倣ひ、飽まで創作する傳來の卑下した精神の下に、丁寧沈着に飽く事なく二十幾年物語の筆を執つて來たのであつた。然し時勢はいよいよ變じて殊に大正改元以來、文學繪畫の傾向演劇俗曲の趨勢は日常一般の風俗と共に生來あまり物に熱中せぬ南巢をも流石に憤慨せしむべき事が多くなつて來たので、彼は初めてこれでは成らぬと氣がついたらしく、婦女童

幼を悦ばず續物の執筆に一生を終へべきではない。丁度晩年の京傳や種彦のなしたやうに、舊時の風俗容儀什器の考證研究に心を傾け、小説の述作は新聞社と書肆とに對する從來の關係上唯その責任をすまずだけの事にしてしまつた。

かくて今、南巢の身に取つて根岸の古家と古庭とは何物にも換へ難い寶物となつた。近隣は迫々に開けて呉竹の根岸らしい趣は全くなくなるにつけ、南巢はわが家の既に處々盡の喰つた縁側も、こゝには天明の昔、曾祖父が池邊の梅花を眺めて國風を吟じ、繼いで祖父は傾きかかつたこの土庇にさす仲秋の月を見て狂歌を味じたかと思へば、たとひ如何程無駄な經費を要しても、又いか程住むにくいにしても此の古家と古庭とは昔のまゝに保存して置きたい心持になる。出入の大工は折々の雨漏其の他の修繕に來る度、いつそお建て直しになつた方が長い中にはお徳になりますと云ふのであるが、南巢は唯笑ふのみで三年程前に土臺の根つぎをした時も殆ど自分が大工になつたやうに目を放さず監督したのであつた。されば庭中の一本一草も皆これ祖先の詩興を動した形見とて、土藏の中

植木屋の心なき鉄に切り折られる事を恐れて主人自ら春秋の手入れを怠らないのである。

かくの如き愛惜の情は獨り我家のみならず垣を越えて隣の庭にまで及ぼしてゐるのである。隣は吉原の妓樓が潰れた後久しく空家になつたまゝ誰も買手が無かつた。すると誰が云出すともなくこゝで死んだ華魁が雪女郎になつて化けて出るとか、或は狐狸がわるさをするとか色々風説が立つていよいよ買手がつかなくなる。然し昔から隣合になつた倉山の家では女子供を初として誰も不思議がるものはない。南巢の父秀齋老人は月のよい晩など、我が家の庭を歩み盡して、垣根の破れから構はず隣の空庭に入込み池の廻りを徘徊しながら、少時不識月。呼作白玉盤。又疑瓊臺鏡。飛在白雲。など大きな聲で詩を吟じる。依頼された篆刻の催促を受け返事に困るやうな時には、父はいつともそつと我家を抜出して隣の庭に隠れてしまふ。すると取次の女中や細君が挨拶に困つて家中をさがした末、これもいつか隣へ入り込む始末。父は遂に池のほとりなる松の大木をばあの儘長く手入せず捨て置き置いては折角の枝振も臺なしになつて、此末誰が買取るにしても勿體ないと自分の庭へ植木屋の來る時、仕事のつ

の股引はいた藪蚊の潛むかはり、池の水をば書齋の窓ぎはへと小流のやうに引入れる風流も何の譯はなく、眞菰花さく夏の夕は簾に雨なす螢を眺め、秋は机の煩悩に草の葉のそよぐ響居ながらにして水郷のさびしさを知る根岸の閑居。主人倉山南泉は早くも初老の年を越えてより朝夕眺慕らす庭中の草木にも唯呆るゝは月日のたつ事の早さである。

夕立に珠を轉ばす蓮の葉忽ち破るゝと見れば耳立つ風の響を徹かせて、葉錫頭より菊の秋、時雨に楓散盡せば早や冬至梅の蕾數へる年の暮、老樹をいたはる寒肥料に鼻を蔽ふかはり、大寒の頃は南天戴相子の實雪中に早より美しく夜半煎茶煮つめて冬籠樂しむ書棚の上水仙福壽草の花いつか凋めば早くも彼岸となつてまづ菊の根分、草の種蒔、庭好む人の一日はわけても暮れやすく、百花の開落は迎へていそがしく眼しばし新樹の梢に留むる間もなく颯と雨降る毎に庭暗く、梅の實熟して落初める晨は合歡の葉眠る夕となり、石榴の花燃え、凌霄の花地に落つる炎天の日盛も夜ふけては露結ぶ水草のかけに早くも一筋二筋絲のやうなる蟲の聲。春夏秋冬はまことに俳諧の歲時記一目に讀み渡すに異ならず。今年もまた去年の藪鶯いつ

か植込の奥に佇啼きわたり、池の水際に見馴れし鶴の長き尾振り歩く頃となつた。南泉は風俗人情日にく變り行く世の中なるをこれは毎年年時節をたがへず我が家の庭に訪れ来る小鳥のなつかしさ。そこらの杖伐除く花鉢の響にさへ心しつゝ植込の間をくぐりくぐりいつか隣と地境の垣根際へ出る。見ればところゝ烏瓜の下つた建仁寺垣の破れ目から隣の庭は一面に日のあつた明きに、泉水をひかへた母屋の縁先までもよく見通されるのであつた。

南泉はこの地境へ歩み來て隣の家をば植込越しに垣間見する時、母屋のつくり、柴折門、池にのぞんだ松の枝振人情本の繪に見る通りの有様にいつも心を奪はれしたゝ藪蚊に頬をさへれて初めて我に返るを常とする。隣は元古原妓樓の寮で今は久しく空家になつてゐるのであるが、南泉の家は三代程前から引つゞき此方の古家に住んでゐる事として、主人は自然に子供の折から年寄つた人達の話や何かを聞き傳へ近隣一帶の事情には精通してゐる。現に南泉はまだ母のふところに抱かれてゐた時分であつた。御維新前から引つゞいた隣の寮で或年大雪の晩久しく出養生してゐた華魁が死んだ事をば子供ながら聞き知つて何となく悲しい氣がした

事をばよく覚えてゐる。されば今も猶一株の松の古木、古池のほとりから縁先近くまで見事に枝をのばしてゐるのを見ると、南泉は幾歳になつても浦甲や三千歳の淨瑠璃をば單に作者の綴つた狂言粉譜だと云ひ捨てゝしまふ氣にはなれない。また世の風俗人情がいかに西洋らしく變つて來ても、短夜にきく鐘の聲、秋の夜に見る銀河の流れ風土固有の天然草木に變りなき間は男女が義理人情の底には今も猶淨瑠璃でできやうな昔のまゝなる哀愁があらねばならぬと思つてゐる。南泉はかゝる性情と併せて其境遇からもおのづと將來文藝の人たるべく生れて來たのであつた。曾祖父は醫を業とした傍學に通じ、祖父もまた同じく醫の業をついだ傍狂歌師として其の名を知られた。で父の秀庵が家督をついだ頃には既に多少の恆産もあり三代もつゞいた醫者として世が世ならば家門いよいよ榮えべき筈のところ、維新となつて漢法醫はすつかり廢つてしまつた處から、父は自然自然に醫者をよすともなく止してしまつて、日頃道樂に習ひ覺えた篆刻をばいつともなく専門の業とするやうになり、其名の秀庵を秀齋と改めた。秀齋は又詩を賦し書にも拙くなかつた處から、次第に朝野の紳士と交遊し一時東都の翰



明日は池の松が取拂はれはせまいかと心を悩  
しながら月日を過してゐるのであつた。

窓の外なる林蓮にばら／＼ツと音する夜の  
雨、南葉は取りちらした書物を片づけ机のまは  
りの紙きれを始末してもう寝ようかと銀のべの  
長煙草に煙草一服する折から、雨の響に何心  
もなく耳傾くる途端、つひぞ聞いた事のない三  
味線の音の聞えるらしいのに、更に耳を聳てた。  
近處に三味線の音は元より珍しいと云ふでは  
ない。南葉が不審に思つたのは三味線の曲であ  
る。仇つばい女の聲で蘭八節らしいものを語つ  
てゐたからである。聲曲の暗ある南葉は丸窓  
の戸を明けて見て更に驚いた。今まで空家だと  
のみ思込んでゐた隣の寮に灯影が見え、哀れ  
深い蘭八の一段島部山はそこから時雨そぼ降る  
庭趣しに分けてもしめやかな音メを聞かせてゐ  
るのであつた。

あまりの不思議に南葉はこの時ばかりは眞實  
隣の屋敷には幽霊が出るのかも知れぬといふや  
うな心持になつた。清元が長唄ならば如何に寂  
しい時雨の夜でもさういふ氣のする氣遣はない  
のであるが、浮瑠璃の中でも一番陰氣な哀ッば  
い聲調で夢か現のやうに心中物のみ語つて聞か  
せる蘭八節。どうしてもあの寮で死んだ遊女の

亡霊が浮ばれぬまゝに今宵時雨の夜深沙婆の恨  
を人知れず詠へるものとしか思はれない。

「あなた。お茶がはいりました。」と靜に書齋の  
襖を明ける妻の聲に南葉は振返つて突如に、

「お千代。成程怪しいな。」

「何です。」

「いよく幽霊だよ……。」

「いやですよ。あなた。」

「お聞きよ、そら、お隣の空屋敷で蘭八を語つ  
てゐるぢやないか。」

「夏のお千代は俄に安心した顔で、「いけませ  
んよ。もうおどかしても駄目で御座います。あ  
なたよりも私の方がよく知つてゐるんですか  
ら。」

南葉は日頃臆病なお千代が忽ちいつもと違  
つた平氣な様子に合點が行かず、「お前、知つて  
ゐるのか。あの幽霊を。」

「知つてますとも。あなた、まだ御覽なさらな  
いの。」

「まだ見ない。」

「さうねえ。二十四五位でせうか。若く見える  
けれどもつと収つてゐるかも知れません。下ぶ  
くれの色の浅黒い、あなたなんぞが御覽になつ  
たらきつとお褒めになりますよ。そりやア仇ッ

ばい意氣な年増です。ぶひながら耳を仰けて、  
「聲も鏗のあるいゝ聲ですわねえ。彈ひ鳴りでせ  
うか。」

お千代は全くの素人であるが、然し蘭八河東  
一中荻江節のやうなものに掛けてはなまなかの

藝者よりもずつとしつかりしてゐる。それは一  
時非常に豪奢な暮しをした文人畫の大家何某先  
生の家に生れ小さい時から、書家文人役者藝人  
衆との應接に馴らされてゐた爲めで、倉山の家  
に嫁いでもからもう十年許りになる。今は子供も

二人あつて年は三十五といふが、銀杏返に結つ  
て買物にでも行く折には今だに時々藝者に見ち  
がへられる。氣性もそのやうに若々しく物に頓  
着しない應場な處が、夫南葉の極く内氣な性  
質と相反して却てそれが琴瑟相和する所以とな  
つてゐる。

「お千代、お前どうしてそんなに委しい事を知  
つてゐるんだい。窺きに行つたのか。」

「いゝえ。ちゃんと知つてゐる調があります  
の。たゞちや致へません。」と笑つたが、やがて  
座をすゝめて、今日、夕方表へ買物に行つた歸  
りがけ、後から駆けて來た二臺の車がふと隣の  
門前で提桶を叩いたので、不思議な事もあるも  
のだと何心なく立止つて振返ると、やがて覗の

いでに其の古葉をふるはせるやら、又暴風雨で柴折門が倒れかゝつたのを、あれは今時の職人にはいかほど金を出しても出来ぬ仕事だと、捨て置くに忍びず、内證で修繕をしたりしてゐたが、やがて座敷の雨戸を明けて内へ上り込み、昔華魁がこゝで病を養ひ文をかき香を焚いてゐたかと思へば氣のせむか寂しい中に何となく艶しい心持のする家造りだと、獨で悦び我家から酒など運ばせて獨酌する事さへ度々で、買手のない妓樓の寮はまるで秀齋翁の別荘も同様の有様になつてしまつた。然し化物屋敷だといふ風説は相變らず傳へられてゐたが、倉山の家へ出入するものは主人に導かれて一度ならず隣の空家へ連れられて行く處から、いつか馴れて怪まず、兎角する中にさう云ふ來客の中から是非にと望む買手さへ現はれるやうになつた。それは瀬川菊如といふ歌舞伎役者であつた。即ち今の瀬川一絲の養父で、鐵筆の大家なる倉山秀齋先生とも交遊のあつた程故、役者に似氣なく文筆の嗜み淺からず、妓樓の寮を住居として家業の憂さを歌仙諧さては茶の湯の風流に慰め、長閑にその晩年を送盡した。菊如の歿後、後添ひの妻は年も大分ちがつてゐたので、出端のいゝ下町に住みたいと云つて一周忌をすまし

てから總て築地へ引越した。寮はこゝに再び元の空家になつたが、然し瀬川の家では別に賣拂ふ譯でもなく枯木屋一人を番人にして春や秋折遊びに來る別荘にしてゐた。

南巢の父秀齋は菊如の歿する數年前既に亡き人の數に入つたのであるが、隣家との交際には南巢の代になつて更に親密の度を加へた。南巢は夙に戲評家としても其の名を知られてゐたので菊如なき後其の養子一絲は毎日のやうに南巢の家に遊びに來る、南巢もその頃は内々戲壇に野心があつたので大に之を歡迎したのであつた。

然し養母が築地へ引移つてから二人の交際は次第に疎くなつた。一絲は道が遠いので亡父の舊邸へ來る事も殆ど稀に、又南巢は年々文學演劇の興味に乏しくなつて、朝夕隣の古庭を垣間見するのみに獨り竊に苦なつかしい思ひに耽りうが爲めで、今は別に若手の役者に逢つて話をしたいと云ふ氣も出なくなつた。

さうかうする中住む人なき隣の庭は年と共にますます森閑として落葉のみ堆高く、夏秋の刈込時になつてもつひぞ鉢の草のした事なく、秋は百舌鳥冬は鴨の聲のみ氣たゝましく聞えるばかり。丁度南巢が子供の折恐るゝ父の後に

ついて歩いて見た時と全く變りがないやうになつた。南巢は怠らず我家の庭の手入をしなから朝な夕なこの様を垣間見して、大方瀬川の家では養母を初め當主の一絲も妓樓の古い寮なんぞには何の興味も持たぬ處から、立ち廢れ同様に買手のつき次第賣拂ふ氣に相違ないと想像した。

南巢は戲壇の野心を全く去つてしまつたものの猶新聞社との關係から時折戲評だけは書かなければならぬので、たまゝ一絲の出でゐる芝居へ行當る時、樂屋の部屋をたづねて久し振話もしたい、それとなく隣の寮の處分をも聞いて見た。折好くば一歩進んで、同じ人手に渡すにしても、成らう事なら幾分か物の分つた人に賣拂ふがよい。兎に角あの古庭の松、あの柴折門は父が生前そつと人知れず手入れまでした位のものだからと、懇意づくに忠告もしてやりたいと思ふのであつたが、又考へ直していやそんな餘計な差出口をしたとて何の役に立たう。近頃は歴とした華族方でも、仙臺の伊達様を初め、さして困りもせぬのに御家代々の實什を惜し氣もなく賣脱してお金にする事が流行る世の中だからと其のまゝ黙して、唯朝夕の垣間見にのみ、今日は新しい買手が來はせまいか、

にいろ／＼な事を話す。

「あれですか、あれは新橋です。御存じでせう。駒代ッて云ふんです。」

「尾花家の駒代か……どうも聞いた事のある聲柄だと思つた。踊は度々見たが蘭八をやるのはたのもししい。」

「この頃二三段階古したんです。」

「瀬川君。此度は大分長つゞきがするやうだね。お噂は去年の暮からちよい／＼聞いてゐるんだが君も女房を持つ氣になつたかね。」

「もうそろ／＼持つて見ようかと思つてゐるんですが然しお袋のゐる中とはとてもまとまりませんよ。」

「さうかね、然し君、女房になつて其の家の姉に從つて行けないやうな女なら、まづ亭主にも從はない女だよ。其の邊は色戀を離れてよく考へないといけない。」

「それア私も考へてます。然し家ぢやお袋がまだ若いんですから、今年やつと五十一になつたのですから、どうも、うまく折合がつかないやうなですよ。實は二三度駒代を家へ連れて行つた事があるんですがね。お袋の云ふには柔順しきうで結構だけれど、藝人の女房にはもう少し愛嬌があつて働きがなければ身上の相談な

んか、私の居る中はいゞけれど後々何かにつけてお前が困るだらうとかう云ふんです。それも尤ですが其の實は新橋の藝者でまだ抱への身體でせう。それが氣に入らないんですよ。何しろ家のお袋と來たら何と云ひましたね先生掛取や京の女のおそろしい組ですからね。丸式のことと來たら到底お話にやならないんです。」

「さうかも知れないな。」

「地體死んだ親爺がゐるいんです……。江戸ッ兄の面汚しでさ。先の養母の死んだ後何もわさわざ上方から引張つて來ないだつて、東京にだつて女はいくらもありませう。」

「それアさうさね。然し君、生野暮の素人でないだけがまだしも仕合だよ、成田屋の家見たやうに物の分らない素人の女ばつかり残つた日にやア御難だ。折角藝道の名家も後が臺なしだ。上方の女と來たら商賣人もあんなり當てにや成りませんよ。一體女ッてえものは何故みんなしみつたれなんでしょう。つまらないことをい

やに何時までも思ひにかけたがるもんですね。」

「女子と小人養ひがたしかね。」

「全くですね。實は駒代を女房にしようかと思つたのも、あんなり色んな事を思ひにさせて煩

くつて仕様がなからなですよ。」

「惚れて女房にしようとか云ふのぢや無いのかね。これア少し話がちがつて來た。」

「別にいやな事はありません。もと／＼我慢して酌めたお客といふ譯ぢやなし、此方からお座敷をつけて呼んでやつた事もある位なんです。ね。さうかと云つて實のところを白狀すれば是が非でも女房にしなければならぬといふ程逆上せてゐる譯でもありません。」

「はゝゝは。そいつは心細いな。」

「何も彼も打明けてしまへばアそんなものなんです。が、然し私だつて一生獨りで暮らすときめた譯ぢやなし、頃合のがあつたら好加減な處で納まらうかと思つてゐるんです。先方ぢや去年の暮に私の爲めに大事な旦那をしくじつたばかりか、その旦那が當面に開帳の菊千代つて云ふのに手をつけて、間もなく自前にしてやつたと云ふんで、其の仕返に例ひ三日でもいゝか私に捨てられ、ばモヒネを飲むつて云ふ騒ぎ

なんで、私も其時は始末にこまつて親爺の十三回忌でも済んだらと、かう逃げたんです。」

「後生の障りだな。色男にはなりたくない。一先生までがそんな事を仰有つちや困りますな



中から瀬川一絲とついで藝者風の意氣な年増の下りるのを見た。「一番ようござんすわ。内證で別荘へ連れて来れば誰にも知れなくつて……ほゝゝほ。」

「さうさ。うまい事を考へたな。濱村屋もこの頃は大人變な人氣だつて云ふからね。はゝゝゝゝは。」

「藝者衆でせうか。それとも何處かのお妾さんでせうか。」

「大分小降りになつたやうだ。雪洞をつけてくれ。一つのぞいて来よう。」

「まア、御苦勞ですなえ」と云つたが、お千代は直様立つて縁側の押入から雪洞を取出して灯をつけた。

「子供はもう寐たらうな。」

「えゝゝ、とうに臥せりました。」

「さうか。ぢやお前も一緒に来ないか。提灯持は先だよ。」

「あなた、好鹽梅に止んでますよ。」と庭下駄はいて先づ沓脱石の上に下り立つたお千代は、雪洞持つ片手を差翳して足許を照しながら、「何だか芝居の腰元見たやうですね。ほゝほ。」

「燈火をつけて夜庭へ出るのは何となくいゝもさ。差詰め私の役は源氏十二段の御曹子とでも云ふ處だな。しかし、夫婦揃つて隣の垣間見と来ちゃ、とんだ岡焼沙汰だ。はゝゝゝゝは。」

「聞えますよ。そんな大きな聲でお笑ひなすつちや。」

「かはいさうに、まだ蟬が大分死なずに鳴いてゐるな。お千代、そつちは通れない。石榴の下はいつでも水溜りだ。そつちの百日紅の下を抜けるがいゝ。」

二人は飛石づたひに躰で植込の中へ潜り入つた。お千代は雪洞の光を片袖に蔽ひかくして息をこらしたが、園八の一段がふと途絶えた後は唯だ縁側の障子に薄く灯影の残るばかり、寮は寂々として話聲も笑聲も何も聞えないのであつた。

然し翌る朝、雨後の空一段鮮に晴れ渡つて濕つた土や苔の生えた隣草の軒からは盛に蒸發氣の立昇る小春日和、南巢は梅の根元や立石の裾に支那水仙の球を植えてゐた。その姿をば今度は向から垣間見して、垣根越に瀬川一絲が、

「先生々々。相變らずお丹精ですね。」と呼びかけた。南巢は土まみれの手に冠つてゐた古帽子を取りながら、聲のする方に進み、

「さつぱり掛けちがつてお目にかゝりませんでしたな。いつから此方にお居でんです。ちつとも知りませんでした。」

「いえ、昨日から一寸遊びがてら泊りに來たんで、まだ御挨拶にも伺ひません。」

「久振り、おはなしに入らつしやい。家内もしよつちうお暇をしてゐます。お機ひ申しませんからお二人連れで……」と南巢は少し聲をひそめ、

「實は昨夜しめく身につまされしました。いゝ音ででしたな。」

「聞えましたか。それぢやもう神妙に申上げてしまひませう。」

「是非拜見したいね。」

其の時縁側の方で「兄さん何處にゐるの。」と呼ぶ聲がした。

「先生後でゆつくりお話しませう。實はちつと御意見も何つて置きたい事があるんですよ。」と瀬川はそまゝ垣根際を離れて、「何だい。こゝにゐるよ。」と云ひながら聲する方へ歩いて行つた。

### 十三 歸りみち

翌る日一日置いて其の次の日、大方園八を彈いた女が歸つた後と覺しく、瀬川は一人ぶらりと南巢の家へ遊びに來た。そして問はれるまゝ

ひ覺えた女形の役者として、毎月彼方此方の興行にいそがしく、自分では別にさしたる苦心をしたといふでもなく、舞臺の年功をつむ中、いつか世間から一廉の役者らしく取扱はれ、自分もどうやら其の氣になりかけて來た時、丁度一時世間を熱狂させた女優の流行も漸く衰へ、日本の芝居には矢張女形は男でなければならぬやうな議論がちよい／＼聞え出すのに、又譯もなく氣が強くなり、急に自分の女形たる事に値打以上の値打があるやうに思ひなして、自然興行毎の役不足にだん／＼奥役を困らせるやうになつて來るのであつた。

「や、瀬川さん。何方のお歸りです。」

電車に乗ると入口の隅の方に腰をかけてゐた三十前後の、眼鏡をかけ、セルの袴をはいた書生風の男が、茶犬驚紙の中折帽を一寸脱つて挨拶した。

「おや、山井さん。吉原のお歸りですか。」と瀬川は笑ひながら、丁度席が明いてゐたので其の傍へ腰を卸した。

「はゝゝゝは。さう見えれば結構です。新富の初日は明日でしたな。」

「どうぞお遊びに……。」  
「是非伺ひます。」と山井は二重廻の袖の下に四

五冊抱へてゐた雑誌の一部を取出して、「まだお送りしませんでしたが、これがあの……いつかのお話した雑誌です。」

山井は二重廻のかくしから手帳を出して瀬川の番地を書き留めた。山井は所謂新しい藝術家なので、雅號も戲名も何もない。唯本名の山井安で知られてゐる。もと／＼中學校を卒業したばかりで別に何一つこれといつて専門の學術を修めたといふのではないが、生れつき器用な性なので、中學時代から青年雑誌に新體詩や短歌を投書してゐる中、いつの間にか哲學や美術學の用語を覚え、相應の學者らしく人生や藝術の問題を喋々と論ずるやうになつた。中學を出てから二三の仲間と或華族の馬鹿息子をだまして金を出させ新しい藝術雑誌を経営して短歌のみならず續々脚本や小説などを發賣し、三四年にして忽ち一廉の藝術家になりすましてしまつたのである。山井はまた劇場にも滿々たる野心を抱き、既に作り得た文壇の名聲を賣物にして女優を集め、自分も又役者になつて翻譯劇を演じた事も再三に及んだが、これは忽ち女優との醜聞を新聞に素破抜かれた事や又は芝居の小屋主を初め覺師や衣裳方道具方などへの諸勘定を拂はぬ爲め其の社會の鼻つまみとな

つて、誰も相手にせぬ處から自然おやめになつて、元の文學専門に立返る事となつた。

然し山井は今年三十一歳になつても二十代の書生と同様家もなく妻子もなく下宿屋を諸所方々食ひ倒して歩く藝術家なので、傍から見れば行末はどうなるかと思ふやうな事を一向平氣で爲通してゐる。山井の倒すのは下宿屋ばかりでない。出版商からは原稿料を前借して其のまゝ本は書かず、書いて出版すれば直ぐに其の原稿を他の本屋に持つて行つて二重賣をする。友達の書いたものは懇意づくに一言の斷りもなく自分の賣る原稿の紙数を増さんか爲めに之を一緒にして賣り飛ばす事も度々で、西洋料理屋も倒す、煙草屋も倒す、呉服屋も倒す、符合は新橋赤坂芳町、柳橋から山の手邊まで倒せるだけ倒して歩く處から、一度迷惑をかけられた藝者やお茶屋の女中は芝居の連中見物なぞで山井先生の顔を見ると前の貸を催促するよりも、うっかり口をきいて又其の後押しに來られては大變だと向から逃げる位。誰が云出したともなく誤では皆山井の事をば出雲州さんといふのである。これはいつも倒すと云ふ事をば芝居の作者の名前らしくもぢつたのである。然し世間は狭いやうで又廣い。冷酷なやうで

ア。私だつて薄情な事はしたかアありません。だから家へ連れて行つてもお袋の手前都合がわるし、外のお茶屋で逢へば商賣にさはるだらうしと、いろいろ氣を廻した末、内の寮が明いて居るので、こゝでゆつくり逢つてやる事にしてゐるんです。」

「静かでいゝやね。時に瀬川さん賃はとうからお聞き申さうと思つてゐたんだが、寮は矢ッ張りあゝして別荘にして置くのかね。」

「今の處では別に差當つて買手ありませんし、まアあのまゝにして置くより仕様がありませんまい。お袋もうつかり賣るなぞと云つて悪い周旋屋の手なんぞに引掛ると大變だと云つてゐます。」

「まア當分あゝしてお置きなさい。賣らうと思へばいつでも賣れるんだから。其の中に是非と云つて好んで望むやうな買手が出るまであゝして置く方が結構徳ですよ。周旋屋の手にかゝれば、地坪がいくらいらと勘定するばかりで、寮なんぞは破屋も同様、何んの値打もありやアしないが、見る人が見れば建具でも床柱でも換の紙でも一々骨董の値打があるんだからまア當分あゝしてお置きなさい。年数が経つに従つて益々値打が出て來ます。」

「御迷惑でなければ實は先生にお任せしたいんです。いつかもお袋がもし芝居か何處かでお目にかゝつたら、御懇意づくにお頼みしてくれと云つてゐたんですが、つい私も忘れてしまひましてね。」

「さうですか。それなら私にお任せ下さい。決して悪いやうには計らひません。」

南巢はもう駒代の事などは其方のけにして、庭の柴折戸や池の松の見事なこと抔を熱心に語り出した。

瀬川は明い中に南巢の家を辭し、今夜は築地の家へ歸つてゆつくり寢て、翌日から新宿座へ出勤するつもりであつたが、然し久振りのはなしについて長居して、小春の日のいつか暮れ掛けて來たのに驚き、立ち掛けようとした折から、晩飯の膳を出されて、すぐにも歸られず、食後又一時四方山の話に夜も八時過ぎ、寒山竹の茂つた南巢の家の潜門を出たのである。往來は眞暗で風は冷く、上野の森に月がかゝつて、通過ぎる汽車の響と汽笛の聲が云ひ知れぬ程物寂しく聞きなされた。瀬川は南巢の家の支關を出る時までは今夜は築地の家まで歸るのも道が遠いからいつそ空家の寮で唯た一人夜明しをするのも面白からうと思つてゐたがそんな氣は忽ち

何處へやら、今は息を切らすほど早足に電車通へ出た。そして三輪から來る電車を待つ間も、瀬川はこんな眞暗な場木に住む人の氣が知れない。南巢さんのやうな文學者とか又書家とか云ふ人達ならばいざ知らずわざ／＼こんな出端の悪い處へ引込んで茶の湯なんぞに凝つてゐた親爺の菊如は餘程變つた人間だつたなと考へる氣もなく一絲は自分と養父菊如との性質や氣風づいて世の中一體の様子の今とはちがつてゐた事などを比較しはじめた。

一絲は瀬川の家に養はれた役者として今でも女形を勤めてゐるのであるが、一時女形は女のすべき筈のもので、これを男がするのは女歌舞伎御禁止の爲めに止むを得ず生じた江戸時代の野蠻な遺風であると云つたやうな議論が盛に新聞や雑誌に出た頃には只譯もなく女形がいやで、昔氣質の養父とは度々衝突して、いつそ役者なんぞは止してしまはうかと考へた事もあり又新派の組合に加入して洋行でもして見ようかと思つた事さへあるが、然しそれもこれも要するに根柢のない一時の野心、新聞かぶれの出来心に過ぎないので、演劇に對する世間の議論が下火になれば、忽ちそんな事は忘れれるともなく忘れてしまつて一絲は矢張り子供の時から習



のも文壇の評判よく山井はその原稿料で病院の薬代だけは珍しく倒さなかつたとやら。

浅草公園花屋敷の裏手なる臭い溝縁に鶴菱といふ軒轅を出した銘酒屋がある。山井は待合で藝者も買へず、と云つて吉原洲崎まで乗出すのも大儀な折々、この鶴菱といふ銘酒屋へ泊りに来る。姉さんはお歳と云つて年は二十四五。かういふ賤業のものには珍しく頭髮と血色のいふ身丈の高い女で、ばつちりした眼と遠山形の濃い眉とが、鼻の低い口にしまりの無い平顔の缺點をも、どうやら見直せるやうに補つてゐる。

山井は或時吉原の朝歸り、お歳の家へぶらぶらやつて来ると、素裕の長衣に細帯もしどけないお歳が、店口の長火鉢で餘の干物を焼きながら、茶辨慶の銘仙か何かの襦袢を着た二十二三の色の白い好い男と猫足の膳を中にして一杓吞んでゐるのを見た。お歳は山井の姿を見るときはたばたと胸寄つて抱き付き、

一随分よ。旦那、あれツきりぢや餓ひひどい事よ。いゝからお坐なさいよ。さアお酌しませう。と引合すやうに猫足の膳の向へ坐らせる。と見ればかの若い男の姿は早くも何處へやら消えて跡もない。

山井は銅貨銀貨取りませどうやらからやら壹圓取りまとめて女に渡し、逃げるがやうに狐鼠

鼠と戸外へ出た。日の當つてゐる處へ出て風に吹かれると山井は全く異つた心持になつた。

腹さへ張れば寸時前の飢を忘れると同様、然と杖を小脇に公園の樹下を歩み、やがて立止つて煙草をふかしながら正面に聳ゆる觀音堂の建築をば、いかにも美術家らしい様子振りで眺め始めた。然しこれはわざと氣取つたのでも何でもない。山井は飽くまで眞面目なのである。

彼はいつぞや何かの雑誌で西班牙のゾラと稱せられるフランスコ・イバネスといふ小説家がトレド市の大伽藍を中心にして其の周囲の人々の生活を描いた小説伽藍の批評を読み、早速これをば浅草の觀音堂に移して一つ長篇の小説を作らうと考へてゐたからである。山井はいろいろの雑誌に出てゐる西洋文學の紹介からいつても暗示を得て直ぐにそれを自家範中のものにする敏捷な才がある。然し一度も原書を読んだ事がない。讀むだけの學力がないのが、つまり彼の幸福なる所以、剽竊の罪を免るゝ所以、原作の爲めに自己の空想力を制限せらるゝ虞のない所以である。

卷煙草の一本もやがて吸ひ終らうとするまで茫然と佇んだまゝ、觀音堂を打眺めてゐた山井は突然後から、

「山井先生」と呼びかけられて驚いて振返つた。そして呼びかけたものゝ顔を見るや山井は更に驚いたばかりか其の瞬間一種不快な恐怖に打たれた。呼びかけた男といふのは今方銘酒屋鶴菱の長火鉢でお歳と茶漬を食べてゐた色の白い若い男であつたからである。

「何だ、僕に用があるのか。」と山井は云ひながら顔に四邊を見廻した。

「先生、突然お呼びして全く相済みません。」若い男はひよこ／＼腰をかきめ、「私はあの……拙書家です……去年先生が選者になつてお居る時分、『』雑誌で當選しました。一度是非先生にお目に掛かりたいと思つてゐました。」

山井は稍安心した體で近くベンチへ腰を下した。この若い男が即ち尾花家の伴瀧次郎である事を山井は其の後委しく當人の口から話して聞かされたのである。

瀧次郎は十四の秋まで父なる講釋師楚雲軒吳山と母なる藝者十占の手計に置かれて新橋の藝者家から近所の小學校へ通つてゐたのであるが、いよいよ來年は尋常中學に進まうといふ年の秋長くかういふ處に置いてはよくないと父吳山の意見に、母の十占さんも餘儀なく、そ

又極めて寛容な處もある。役者や藝者の中でもまだ山井の事をばそれ程無信用な危険な人間とは氣のつかないものもある。二度ほどされても畫工や文士は仕方がないと善意に解して、却て氣の毒がるものもある。又は何も彼も承知の上で、内々は用心しながら唯物好きにさういふ下等な人間と知合になり、自分達には到底眞似さへ出来ないやうな陋劣な話を聞いて面白がらうといふ。其の爲めには野太鼓同様飲ませてやる人もないではない。瀬川一絲もかういふ人の一人である。顔を見ると直ぐに裸體畫を表紙にした雑誌「ピエロ」を賣付けられて、忽ち兎に入り、

「山井さん。近頃は活動もさっぱり面白いのが有りませんね。もういつかのやうな會員組織の封切はないでせうか。」

「ありますよ。尤もこん度の私は私が幹事をしてゐるんぢやないんです。」と山井は急に思出したらしく瀬川の顔を見て、「あなた、新橋の尾花家の倅を知つておめです。その男が世話人なんです。」

「尾花家の倅……知りませんよ。先年死んだ市川雷七なら知つてますが、まだ他に兄弟があるんですか。」

「雷七の弟ですよ。矢張尾花家の實の息子なんですが……親爺とは今ぢや久しく義絶同様になつてゐるんださうです。まだ若いんですが、二十三でせうが。悪い事にかけちや實に天才ですね。とても僕なんざ足下にも寄りつけないです。」

山井は吳山老人の二番目の倅のことをば長々と語り出した。

#### 十四 あさくさ

山井要が尾花家の倅と知合になつたのは淺草千束町の銘酒屋である。山井は芝居や宴會の歸りは無論の事、極く眞面目な用件で人を訪問した歸りにも、すこし夜が深けたかと見れば、もういかなる事に、眞直に下宿屋へは歸られないで、ふら／＼と當もなく其處此處の色町をぶらつく。然し待合は前々からの借金で雖よく斷られ、吉原洲崎へは懷中を逆さに振つても、車代にさへ足りないといふやうな場合になると、陰惨な魔窟も一向お構ひなく酔つたまぎれに一夜を明すのである。目が覺めてからは流石に慚愧後悔する事もあるが、多年放蕩無頼を盡した身はなか／＼意志の力に制御されるものではない。山井はその弱點に對する種々なる感情をば「肉

の悲しみ」だとか、或は「接吻の苦味」だとかいろいろ新しい言葉で綴出した短歌に咏じて、憚る處なく彼の所謂眞實なる生命の告白なるものを發表するのであるが、幸にこの告白はいつも新奇を追ふ文壇に歡迎され、龜タツかしい批評家から新時代の眞に新しい詩人は山井要である。彼こそは正しく日本のヴェルレーヌであると稱され、自分ながらも酔拂つて氣の少し大きくなつた時には、どうやら其らしい心持にもなつて、山井は遂にかゝる藝術的功名心の爲めに強ひてさういふ腹煩した感情の中に其の身を沈淪させようといふのである。もと／＼彼の學力は中學校もやつと卒業した位なので外國語の知識と云つては餘程覺えないのであるが、自分だけの心持では眞實偽でも見得でもなく、次第々々に西洋の藝術家らしい氣になりすましてしまふので、既に二三年前、梅毒にかゝつて兩横根を踏出した折も、いかなる書物で見知つたものか、佛蘭西の文家モーパッサンも梅毒の爲めに發狂したのである。それを思へば同じ惡疾の犠牲となつた自分は深甚の恐怖と慚愧の中にも自らまた烈しい藝術的熱情の興奮を禁じ得ないやと云つて得意の短歌數十首を咏みこれを「沃土保兒謔」と題した事もある。これ

の下ざらひも土地の古顔だけに折々は手傳つてやらねばならぬと云つたやうな始末。さうかうしてゐる中には髪を結び湯へ這入るべき期限、それをすましてやれ煙草一服といふ時分には、もう晩飯の支度である。抱の藝者もまづそれと同じ事。箱屋は玉帳の勘定と電話の挨拶、藝者の衣服や身の廻の雑用に身體が二つあつても足りない位。下女はかゝる多人數の食物と洗濯と風呂の始末にこれ亦一人の手ではなかく休む暇はない。

一體この尾花家は主人の吳山老人が昔ながら小言幸兵衛と綿名されてゐる位口八釜しいので商賣の事は勿論何から何まできちんと綺麗に取片づいてゐる事は新橋中おそく此の家に越す處はあるまい。して又藝事の稽古と來たらまるで劍術の修行も同様容赦なく厳しいので以前から名代な家である。それと云ふのも、吳山は癖癖のつよい酷な性質から何に限らず物事を好加減にして置く事が出来ない。談談師仲間では今一二の古顔であるが一人も弟子を取らず、又弟子もつかないのは修行が厳し過ぎるからだとの事。されば家の藝者の稽古も、稽古をするとなれば専門家の修行同様眞剣に仕込まねば氣がすまないの、餘所の二階でさらつてゐる

三味線をきいてもどうかすると、何だいありやアと云つて肩を擡める事も度々である。藝者と役者は世間の花だ。外へ出て萬一の事でもあつた時身だしなみがわるいと人に思はれちや未代までの恥だ。がらりと格子戸を明けて戸外へ出た時にや肌襦袢と腰巻だけは新しいのをしめて行け。着物や持物は決して奢るなと云ふのが藝者に對する吳山の家訓である。然しか房の十吉がこれは又いかにも當りの柔らかな氣のゆつたりした優しい女なので、偏屈な亭主の云ふ事をも程よく柔らげ、巧みに抱を初め家中の折合をつけて行くのである。

瀧次郎はかやうに家中皆それ／＼いそがしがつてゐる中に、その身一人は其邊にちらかつてゐる新聞や雑誌をば毎日欠伸をしながら讀むより外に何／＼なすべき事がない。吳山は今の中に厳しく意見をして心を入直させれば、まだ徴兵検査前の身や故、どうにか行末の日當もつくであらう、學校は中途でよされて今更任様もなければ、いづそそ氣の商家へでも奉公に出したらばといふ／＼其の方面の手足を求めた。が藝者家の傍で中學校を退校されたと知れては何處もまづ首尾である。母の十吉は諺にも蛙の子は蛙と云ふから、もう中年ではあるが何か藝

を仕込んで藝人にした方が間違ひがあるまいと云ふ。然し唯藝人と云ふばかりでどう云ふ種類の藝人になるべきものやら、これは瀧次郎の身になつても鳥渡即座には決心しかれる譯である。實の兄は既に役者で相應に賣出してゐるので今更下廻りの役者になつて其の下につくのも業腹だし、父吳山の弟子になれば、唯さへ八釜しい親戚に猶更手厳しくやつ付けられねばならない。三味線も今からこの大きな身體で一つとやの稽古も出來ず、さうかと云つて新派の役者や智我の一流の道化役者の弟子にもなる氣はない。瀧次郎は毎日手當り次第に雑誌や新聞を讀んでゐる中不圖小説家とか文士とか云ふものになつたらどうか知らと云ふ氣を起したが、然しどうすればその道の人になれるのやら全く當がつかないので、これも其のまゝ烟と消え、瀧次郎も今はつく／＼自分ながらも其の身の持扱ひ方に勵したやう、或は買の店へ兎に角口を聞いてくれるものがあるが儘當分氣を變へる爲めに仕込む事となつた。

おとなしく勤めたのはほんの當座半年ばかりの事、瀧次郎は手近な蠣殼町の賣春婦を買ひ散らし店の金をすこしばかり使ひ込んだのを忽ち發見されて解雇となり、再び新橋の家へ引取



れではといろ／＼御最良のお客様にも相談した末長年一中節のお相手に呼んで下さる法學博士辯護士何某先生に頼んで、其の書生部屋に置いて貰ふ事にした。何某先生は駿河臺に立派な屋敷を構へてゐる。瀧次郎はそこから中學校に通ふ事になったが、これがそも／＼瀧次郎の一生を誤らせる原因であつた。最初吳山はこれから勉強盛りの若いものを我が家とは云ひながら長く藝者家などに置いてはよろしくないと思つたのは尤の次第であるが、然し瀧次郎の一生は他人の家よりも寧ろ昔氣質の失せない頑固一點張な父の許に置かれた方がまだしもましてあつたらうと、後になつて吳山ははじめ母の十吉も諸共後悔したが、それは全く諺にいふ後のまつりであつた。

瀧次郎は博士先生の書生部屋に住込んで十六になるまで二年ほどの間は誠に行末頼母しい勉強家であつたが、其の年の暮に博士の家では奥様が心臓病になつて唯一人の御嬢様をつれて大森の別荘へ養生に行つてしまつた爲め、自然博士先生も其の方へ行つて泊ることが多くなり、本邸は遂に午前だけ事務を取りに来る出張所も同様になつた。さうなるや主人のぬない留守を幸い書生と女中はてんでに勝手次第の事を

はじめた。只さへあまり品行のよくないのは法學書生の常である。瀧次郎は忽ちの中に感化され、滿一年程たつて十八の時には早くも手のつけられない道樂者になりおほせてしまつた。夜になると我慢にも家にはゐられない。近所の米屋牛肉屋煙草屋などの女や娘を張りに行く。夜半には書生と競争で家の女中を引張り合ふ。日中も電車で通學の折々乗合はした女學生を誘惑しようといろ／＼苦心する始末。或夜神田明神の裏手へ近所の煙草屋の娘をおびき出さうとした處、逆惡く丁度その夜不良少年の檢擧で網を張つてゐた刑事に見咎められ存應なく拘留された。この事が自然學校へ知れて瀧次郎は早速退校を命ぜられると共に、博士先生の家からも亦體よく斷られるやうな始末となつた。

父の吳山は火のやうになつて怒る、母の十吉は何といふ情けない事だと云つて泣いたがもう仕方がない。瀧次郎は一新新橋の藝者家へ引取られ親の顔に泥を塗つた不屈者だと、父から厳しく禁足を申付けられたが、もう親の意見などおいそれと聞いてゐるやうな瀧次郎ではない。何しろ吳山は年飯をすませば毎日雨が降らうが風が吹かうが大きな信玄袋に羊羹色になつた五ツ紋の羽織と張屏を入れて、席へ出て行き、夕

飯頃に歸つて来てすぐ父夜の席へと出掛けねばならぬ。道の都合で書席から其のまゝと夜の席へ廻つてしまふ事もある。母は又藝者の事として毎夜御座敷へ出るどころから、いくら厳しく禁足を申附けたとて事實瀧次郎を監督するものは家中には一人もゐない譯である。其の時分尾花家には役者になつた長男の市川雷七がまだ達者でゐたが、これも朝飯をすますと芝居のあつた無しに係らず直ぐ師匠の家へ行つて終日働き夜も十時過ぎでなくては歸つて来ない。

藝者家と云ふと餘所日にはいかにもだらしが無きさうであるが、内へ這入つて見れば、主人夫婦を初め抱の藝者内箱の女から水仕の奉公人まで皆それ／＼に急がしい。女主人の十吉は毎夜十二時或時は一時過ぎるまで御座敷を彼方此方と勤め歩いて、ぐつたり疲れて歸つて来ても、其の翌朝は矢張それ相應に早く起きなければ其の日の稽古が間に合はない。十吉は毎朝常磐津清元一中河東蘭ハ萩江歌澤とそれ／＼諸藝者の家元へ稽古に行き、歸つて来てからは自分の家の半玉に稽古もしてやらなければならぬ。地の藝者衆の着物の世話を相談もしなければならぬ。御座敷で弾くべきもの、都合では他の藝者と豫め打合せもして置かねばならぬ。演藝會

と山井はいよ／＼腰を落着けようと云ふ心か胡坐をかいて紫檀の卓へ兩膝をついた。

「見かけによらず女は誰しも片意地なものですね。」

「それが女心と云ふんでせう。と山井は菓子鉢の乾菓子を摘み「瀬川さんこりやア餘所で聞いた噂なんですが、近々にいよ／＼御結婚なさるつて云ふ事ですが、ほんとですか。」

「駒代とですか。」

「えゝ。ちら／＼さう云ふ噂を聞きます。」

「さうですか、そんなに評判なんですか。困りますね。」

「何も困る事アないぢやありませんか。結構ぢやありませんか。」

「僕はまだ経験がないんですが、結婚つて云ふものはあんまり面白いもんぢや無さうですな。僕は何だかもう少し獨りで氣樂にして居たいやうな氣がするんですよ。何もあの女がいやと云ふ譯ぢやない、それとは全く別の話で……と瀬川は獨りで申譯らしく云ひ添へた。

結婚といふ事が何と云ふ譯もなく妙に窮屈に感じられ、又これまでの自由な華やかな生活の終了であるやうに思はれる事は、山井自身の経験に於ては矢張り事なので、

「結婚しようと思へばいつだつて出来る話なんですからな、何も急ぐにや當りません。然しづれ一度はこれも人生の経験でせう。」

女中のお牧が酒肴を運んで來た。

「駒代姐さん最う三十分ばかりしますと何ひますつて、お電話で御座います。」

「向で三十分と云へばまづ一時間半だね。それぢやお牧さん彼女の來るまで、誰か直に來られるのを呼びたいもんだね。新橋の藝者はどれもこれも待たせるからなア。」

「待たせた舉句に、來ればすぐ電話で後口でせう。はゝゝは。」と方々倒して歩いただけ山井もなかくの通人である。

「ほんとにねえ。」とお牧は眞實らしく溜息をついたが急に思出して、「今日お弘めの妓があります。つなぎに呼んで見ませうか。ぼつちやりました色の白い、何となく工合のよさうな人よ。ほゝゝゝほ。何でも立派な御醫者様の奥さんだつたんですよ。」

「それは奇妙だ。どうして藝者なんぞになつたんだらう。」

「人の話だから眞實だか虚言だか分りませんけれど藝者になつて見たくなつて無理に好んでなつたんですよ。」

「さうかい、そりやア見たいもんだ。山井さん、さういふ女は矢張り新しいハツて云ふんですか。」と瀬川は眞面目に質問する。

「さうでせうな。私の處へ短歌の添削を頼みに來る女には、随分藝者になり兼ねないやうなのがあります。」

「何しろあなたの方の商賣は羨しい。第一時間で身體を縛られるつて云ふことがないし、それに又遊びに行つても内證で好きな事ができるけれど、そこへ行くと私達はずぐに顔で知られてしまふから……さう馬鹿な驕き方も出來ないしつまりません。」

「その代り何處へ行つても吾々のやうに冷遇される氣遣はない……。」

「何ぼ役者だつてさうは行きませんよ。」二人は唯面白さうに笑つた。やがて靜に襖が

あいて、敷居に挨拶する島田が見えた。お牧が話をした弘めの藝者といふのはこれであらう。

白襟に裾模様紋付を着た年は二十前後、癖のない髪と濃い眉毛、黒目勝の大きな目には申分

がないが、額は半分廣く頃の短い丸顔。そして手の太い肉の多い大柄の身體には出の衣裳

がいかに着にくさうで、島田の髪を掻き工合、馬鹿に濃過ぎる白粉のつけやう、萬事が藝者ら

られたがおひく。自暴自棄になり出した瀧次郎は、もう我慢にも三日と長く窮屈な両親の元にある氣はなく、或夜の事無人な家の留守を幸へ、母と抱の藝者の衣類簪などをかつさらつて逃げてしまつた。

## 十五 宜春亭

山井がながく飽かずに語りつづける尾花家の作の話がまだ終らぬ中に、電車はいつか銀座通へ来た。瀬川はつと席を立つて降りると山井もついでに降りた。そして瀬川が乗換の電車を待たうと服部時計店の前に佇むと、山井もいつか其の後について同じ處に立つてゐるので、

「お宅は。」とときと、

「家は芝白金です。」

「矢張こゝで御乗換ですか。」

「いえ、いつでも芝の金杉橋で乗換へます。」と山井は云ひながら一歩瀬川の方へ進寄り、何時でせう。まだ家へ歸るのは少し早いやうだ。

「まだ十時にやなりません。」と瀬川は手首にはめた金時計と服部の店に並べた時計の時間とを見くらべる。

「この頃新橋の景氣はどうです。私はもうとんと近頃は遊びませんが……。」と山井はつづいて

二輛ほど電車が来て一向乗る様子なくいつまでも立つてゐる。

瀬川は初めて山井の胸中を推察した。どこへか遊びに連れて行つて貰はうといふに違ひない。困つたものだと思つたが、またこの場合知らぬ顔で山井一人を残して行くのも何となく可哀さうな氣もする。情は人の爲ならず今夜一杯飲まして置いたら後日何かの爲めにもならうと思直して瀬川は何ともつかず、「電車も遠いところへ乗らなければいけませんね、どこかで休みませう。」

云ひながら向側へと線路を横切つて行くと山井はもう喜悅満面、この鳥を逃しては大變と追掛けるやうに其の後に從ひながら、然し殊勝にも向から来る自動車をば、

「あぶないですよ。」と注意した。瀬川はすたすたライオンの前を行過ぎながら鳥渡振向き、

「山井さん、どこかお馴染のお茶屋はありませんか。」

「無い事ありませんが、僕の知つてゐる家はとても汚くついでいけません。あなたの名譽に關します。それよりか今夜はあなたの本陣を紹介して下さい。祕密は誓つて守ります。はゝゝゝは。」

瀬川は一寸行先に迷つたらしく首を傾けて歩

みをおそくさせたが、さうかうする中に忽ち三原橋へ来てしまつたので、もう仕様がなと思つたらしく、

「私の知つてゐる家もあんまり綺麗な方ぢやありませんよ。然し遊びはあまり豪勢な物よりか小じんまりした方が心持がいゝやうです。」

瀬川は行きつけた待合宜春へ山井を連れて這入つた。二階の表座敷へと案内する女中のお牧は手をついて挨拶するとすぐ後は懇意な調子で、

一旦那、たつた今お電話が掛りましたよ。」

「どこから。」

「わかつてゐるぢやありませんか。さう申しませうね。」とお牧はもう立掛ける。

「おい、お牧さん。駒代は駒代でいゝから、その外に誰か呼んでおくれ。」

「どなたにしませう。」と女中は再び坐り直して瀬川と山井の顔を見た。

「山井さん、誰がいゝでせう。」

「藝者はまあ駒代さんが来てからでいゝでせう。それよりお酒を願ひませう。」

「只今。畏りました。」と女中は座を立つた。「藝者ツてものは妙なもの、派の合はない同志が一座すると却て座がしらけていけません。」



も土間浅敷切申帳の札が下げられた。

駒代は樂屋で着到の大太鼓が鳴る時分既に本家茶屋の一間に詰めかけて、茶屋の出方の中で顔の知れたもの三四人に祝儀をやり、又瀬川の男衆綱吉といふのを呼んでこれには過分の祝儀まだ其の上に樂屋の頭取と口番には瀬川の部屋へ女房氣取で自由出入がしたい爲めにまた相應の心付けとして今度瀬川が初役の重次郎を討とめるといふ事から新橋中の知合を運動して引鼻一張を贈つたので其の爲め大道具へも洩りをよくした始末である。

駒代は朋輩の花助をさそつて東の鶏の三に陣取つて、今方馬盛が切れた後場内満員となつた暑氣を見ると、これは誰の力でもない、瀬川一絲一人の人氣の爲めだといふ氣がするのである。そしてこの大した人氣の役者に思ひ思はれた女は誰あらう此處にかうしてゐる私だよと思ふともう居ても立つても居られない程嬉しくもあり、又晴れて夫婦になれるのは何時の事だらうと思へば忽ち果敢いやうな悲しいやうな心持になるのであつた。

「如さん、先程はどうも。」とざわ／＼人の往來してゐる廊下をば鶏の戸口へ膝をついてそつと被だらけの顔を出したのは一絲の父先代菊如の

時分から相中の古い弟子菊八である。

「先程太夫さんがお這入りになりました。」

「さう。濟みませぬね。」と駒代は云ひながら煙草入を帯に納め、「花ちゃん、兄さんが來たつて云ふから今の中、一絲に樂屋へおいでな。」

何處までも取巻藝者に出來てゐる花助は黙つて柔順に後から席を立つた。相中の老優菊八は人込の中を先に立つて、奈落へ通ふ向揚幕の方へと歩いて行く。その後についた駒代と花助の姿をば摺違ひに認めて、

「や、駒代さん。」と聲をかけたのは春の低い眼鏡の洋服。

「おや、山井さん。昨夜あれからどうなすつて。」

「いや、どうも、大變な藝者に出ツくはしましたな。」

「随分見せつけましたね。今日はずちや濟みませんよ。」と笑つた。駒代は實の處山井を知つたのは昨夜初ての事であるが瀬川の兄さんの連れて來た人だと云ふ事からわざとらしい迄に親しく見せて愛嬌を振撒くのである。駒代は誰彼

の區別はない。瀬川の知己だと見れば一生懸命氣受をよくし、それほど瀬川の爲めに心を砕いてゐるかといふ事を知らせて、次第に周圍一帶

の同情を身に集め、行末はどうあつても夫婦にならなければ周圍が承知しないと云ふやうに仕掛けてゐるのである。されば山井が文士だと聞くだけに駒代は身方にすれば一層頼みしい人のやうに考へて「一晚や二晩の遊び位は承知の上で引受けてやらうと思つてゐる。駒代は世間をよく知らぬ藝者の考へで、文士といふものは辯護士が法律を商賣にしてゐるやうに、これはこまごまと人情を書くのが商賣だから人情に

らんだ事柄を頼めば間違はないと自分勝手にきめて居るのである。

山井は駒代と共に同じく奈落へ降りながら、「實は瀬川君に昨夜の話をしようと思つてゐたんです。」

ところ／＼に瓦斯の火がぼんやり點いてゐる地の下の奈落を過ぎて一同は樂屋へ出ると、こ

こは取分け初日の大混雜。駒代と花助は互に手を引合ひ、黒衣を着た男や所端の男達がいづれも忙しさに駆け上つたり駆け下りたりしてゐる梯子段をば廊下の左側、鴨居の上に瀬川

一絲と木札を下げた部屋の障子をあげると、半分は板敷になつた出入口の三疊、片隅の居纏裏で湯を沸してゐた男衆の綱吉がいつも御用儀

の利口、駒代の姿を見るより早く奥の間へ座蒲

の利口、駒代の姿を見るより早く奥の間へ座蒲

しくない處が二人の目には却て興味を引くのであつた。然し割合に人馴れてゐて山井が早速さす杯をも悲びれずに受け、

「急いで来たんだから呼吸が切れて仕様がありません。と飲み干して英語で「難有」と杯を返す、其の調子には何處の國とも知れず著しい訛りのあるのが耳立つのであつた。

何て云ふ名だえ。」

「蘭花ッて申します。」

「蘭花——支那の女の名見たいぢやないか。なぜもつとハイカナなのになかつたんだ。」

「私まつたくはすみれと付けたかつたのよ。ですけれど他にもうすみれさんて云ふ方があるんですつて。」

「今まで何處へ出てゐたんだ。霞町か、柳橋か。」

「いゝえ。あなた。と蘭花はどういふ譯か急に語調を強めて、地方訛の一層耳立つのも知らぬ顔で、「藝者は全く初めてですわ。」

「それぢや女優か。」

「いゝえ、然し私女優さんには成つて見たうござんすわ。藝者でもし賣れなかつたら女優さんになりますわ。」

瀬川は山井と顔を見合せて覺えず微笑み、

「女優になつたら蘭花さんはどんな役がして見たいと思ふね。」きくと女は更に應ずる様子もなく、

「わたしジュリエットがして見たうござんすわ。シエーキスピアの——あの窓の處でロメオと鳥の聲を聴きながら接吻する處が御座いませう、何とも云へませんわ。松井須磨子さんのサロメなんて私は厭ですわ。人様に裸體を見られるやうなものでもすもの。肉褌袴は着てゐるんでせうけれどもねえ。」

瀬川は少々煙に巻かれた體で黙つてしまつたが、山井は漸く重ねる杯と共にもう嬉しくてたまらないらしく、

「蘭花さん、あなたは實に藝者には惜しい。思切つて女優におんななさい。さうすれば僕も及ばずながら力になります。僕だつて藝術家の一人です。藝術の爲めなら誰彼の區別はないです。」

「あら、あなた藝術家でいらしつたの。何と仰有るの、お名前を聞かして頂戴よ。」

「山井要といふのは僕です。」

「あら山井先生でいらしつたの。それぢや先生の歌集はわたくし采皆買つて持つて居ますわ。」

「さうですか。と山井はますり、悦に入つて、「ぢや、あなたも何か創作があるでせう。え、蘭花さん。聞かして下さい。」

「いゝえ、とてもむづかしくつて出来ません。ですけれど煩悶のある時は歌でも咏むのが一番能御座んすわねえ。」

瀬川はいよいよ呆れて唯草をばくく、其の煙の中から山井と蘭花の顔を見遣るばかりであつた。

## 十六 初日

新當座は定めの時辰午後の一時に初日の蓋をあけた。一番目は繪本太閤記の馬盛に上役目、これは以前子供芝居の時分からいやに三河屋張の老役に唐界の麒麟兒と名を取つた市山重藏が出し物、それに女形の瀬川一絲が重次郎の初役で評判を取らせ、三幕目には筋の連絡なく忽然と琵琶湖の乗舟をつけて、これは活動式の大道具で子供をだます様に見物を喜ばす趣向。

扱中幕は二十四孝の狐火。二番目は大阪役者袖崎吉松の紙治といふ鼓方である。初日は士間様殿とも五十錢均一といふのに、幕間の長いのと狂言の出揃はないのは承知の上の大入。序幕が切れる頃には本家茶屋と芝居の木戸口には早く

見られる様子である。

「いつもえらいお骨折で。」と愛想よく駒代の方に笑顔を見せて、「大層よく出来ましたね。矢張佐渡屋ですか。何しろ毛がいくもんだから何に結つてもよくお似合ひだ。」

「あら大變。」と駒代は餘儀なさうに笑つて、「かもしでどうやら斯うやら結つてゐるんですよ。」

舞臺の方で拍子木が聞える。瀬川は一同に「御ゆるり。」と云ひながら笑と座を立つた。男衆の綱吉は朱塗の蓋のある湯舟を持つて後から廊下へ出る。山井は駒代と花助の顔を見遣つて、肝腎な瀬川君の初役を見そくなつちや大變だ。」と獨言のやうに座を立つので、二人は渡りに船とお半へ挨拶もそこ／＼、つゞいて廊下へ出た。そして一同元來た奈落へ降りかけた時、花助は小聲で、

「駒ちゃん。あの方が兄さんの阿母さんかい。」

「さうだよ。」

「品のいい綺麗な方ねえ。私とお花かお茶の先生かと思つたわ。」

「何かが萬事あの通り綺麗にきちんとしてゐるから私達のやうながさつた者ぢや、とても駄目なんだよ。だからさ。」と駒代は覺えず聲を高めたのに氣がついて後を振返つたが、薄暗い奈落

には誰も通らず、舞臺の上の方で大道具の金櫃の音が陰に籠つて反響するばかり。幕はまだ明かぬらしい。

「だからさ。いくらどうしようたつて駄目なんでしょう。第一あの阿母さんが不承知なんだつて云ふんだから。」考へると情なくなつちまふ。」

「まだ表面さうと極りもしない中から姉根性を出すのかね。」と花助は事の是非に關らず相手の話に調子を合せるのが癖なので、内心では瀬川の兄さんはあれでなか／＼浮氣者だから阿母さんばかりがさう悪いときまつたものでもなからうと思ひながら、そんな事を云つたつて夢中のぼせ切つてゐる駒代の耳に這入るわけはない。なまじつまらない事を云つて人の氣を悪くさせた上恨まれてはつまらないと、唯その場合場合いゝやうな事を云つてゐるのである。駒代は全くその通り。二人の仲は誰も知つての通り

これほど深くなつて居ながら、今だにどうともきまりが付かないのは内輪にあの阿母さんがあるからだと一圖にさう思込んでしまつてゐるので、表面は蟲も殺さぬやうな優しい事を云はれると此方は口が自由になけないだけ、唯もう痾痾が起つて口惜しくなるばかりである。

「世の中つてものはどうして斯う思ふやうにな

らないんだらう。」と獨りで嘆息したが、やがて奈落を出ると木が這入つて丁度幕のあく所、奈落とは全く世界のちがつた場内のやうに、駒代は忽ち其方へ氣を取られて小走りに鶉へいそぐと、其の後について山井は誘はれもしないのに黙つて同じ鶉へはいつた。芝居でも料理屋でも待合でも何處といはず知つた人の尻について黙つてぬツと這入つてしまふのは蓋し山井先生の得意とする所である。山井は駒代と花助を兩脇に敷島をば／＼悠然として舞臺と場内を見渡した。

## 十七 初 日 (つゞき)

重次郎の花やかな姿はやがて着替へる細織の襦にまた一段見榮して羽子板の押繪を其の儘の美しき。最良の見物一齊に重次郎が勇しく花道へ引込む後姿を見送る中に、駒代のある鶉の丁度眞上になつた東の棧敷に三人連の女客。一人は三十も越えたと思ふ瘦ぎす。根下の御査返に小粒な古渡珊瑚の根掛、ぢみな金紗のお召に小紋の下着、半襟は淺葱風に一粒鹿子のしぼり。黒縮緬の羽織、掛更紗の晝夜帯に帶留の金具は何やらいはれあるらしい素銀の日晷、そして大きからぬダイヤにプラチナの指環只一



團を敷きに立つた。

瀬川は八反の襦袍に平ぐけを止め、朱塗の鏡臺の前に緋綸子の大きな厚い座蒲團を敷き胡坐をかい、白粉を溶いてゐたが、鏡の面に映る一同の姿に、

「昨晚はどうも」とまづ山井先生へ挨拶。それと共に如才なく花助の方へも愛嬌を見せて、「お敷きなさい。」

「花ちゃん。お敷きなさいよ。」と駒代も花助に座蒲團を勧めながら、然しわざと自分は敷かず少し下座へ下つて綱吉が持つて来る茶をばまづ山井の前へすゝめるなぞ、萬事すつかり女房氣取りである。

瀬川は白粉を溶いた指先を手拭でふきながら、「昨夜あれからどうしました。お泊りでせう。」

「いや、歸るにや歸りました。」と山井はにやにや笑ひながら、「歸つたら三時です。」

「どうですか、怪しいもんですね。」

「あの鹽梅ぢや、先方で歸しやしませんわ。ねえ、あなた。」

「申譯をしてもいけませんかな。はゝは。兎に角變つてましたな。新橋にや時々不思議な藝者が現れますな。あなたの役者だつて、云ふ事は

とう／＼知れずじまひでした。」  
「あらまあ。」と駒代は眞から呆れたやうに目を睜つた。

「そいつアイ。」と瀬川は衝へてゐた巻煙草を火鉢へさして襦袍の兩肌をぬぎ、裸もなく兩手で顔から頸へと白粉を塗りはじめたので、一同は自然と話を途絶して鏡の面を眺める中にも、駒代はもう總身に力瘤を入れぬばかり一心に眼を据ゑるのである。

「山井さん。是非また出掛けませう。」と瀬川は云ひながら手早く眉を作り口紅をつけると、先刻から衣裳小道具を揃へてゐた男衆の綱吉は瀬川の立上るのを待つて、すぐと桔梗の紋を金糸で縫つた綺麗な袴を着せかける。床山は鬘の大きい前髪のある鬘を持つて後へ廻る。瀬川は忽ち錦綸にも晝けまいと思ふやうな美しい若衆になつた。駒代はあたりに人がゐなかつたら、初菊の役を横取して竊と寄添つて見たいと思ふ心をがつと我慢して、眞からほれ／＼と涎を垂さねばかり、どうしても目を離すことができないのである。これまで見馴れた女形とは又ちがつて水の垂れさうな若衆の姿。惚れ込んだ女の目にはいゝ上にも、更に何とも云ひやうのないほど、實に好く見えてならないのであ

る。駒代は自分ながら口惜しいと思ふほど、惚れる上にも又更に惚れ直してしまつたと、何ともつかず竊と人知れず溜息をついたが、そんな事には一向無頓着な瀬川は、

「綱吉。まだ廻りにやならないか。」と駄々ツ子のやうに云捨て吞みさしの巻煙草を口に衝へて立上る。

其時出入口に草履を揃へてゐた黒衣の弟子が何やら丁寧に挨拶してゐる様子に、一同は誰かと振り返ると、髪を切下にして鐵無地の袴を着た品のいゝ女が、「お日出度う。」と云ひながら這入つて来たのに、駒代は喫驚したやうに突と座を下つて、誰よりも先に、

「お日出度う御座います。其後はつい御無沙汰を致しまして。」と丁寧に挨拶をした。

先代菊如の後妻、今の一絲が繼母に當るお半である。

お半は目のばつちりした鼻の高い瓜實顔。髪こそ切つてゐるが色の白いつや／＼と皮膚の細い額にはさして鐵も目立たない。よく上方の美人にある顔立。人形のやうに唯綺麗ならばかりで表情に乏しい。然し綺麗といへば頸筋から手先まで年寄りとは思へぬ程綺麗で父どことなく品のいゝ處どうやら公家華族の御後室とも見れば

勢一座の座敷では打付けに自分の恥を云立て、食つてかゝるわけにも行かず、演藝會か何かの折をと思つても此れ又折悪く手合せをする機会がなかつたので、つい其の儘になつてゐた。ところが今日と云ふ今日、漸く復讐の段取がつきかゝつて來た。それは以前自分の家の抱であつた君龍といふ藝者がある實業家のお妾になつてゐた處、先頃旦那が死んで濱町の目抜き上地百坪ばかり地面付の立派な妾宅の外に現金で壹萬圓を頂戴してお暇となつた。そこで今度藝者家を出さうか、旅館を開かうか、待合をしようか、息料理屋を始めようか。それとも大事な壹萬圓に手をつけず其れを持參金にする代り、男がよくて程がよくて浮氣をせず自分ばかり可愛がつて我儘の仕放題にさしてくれるやうな家へお嫁に行つて見ようか、その方がなまなか商賣をして苦勞するよりか行木ともに安樂で心配がなからうと、都合のいい事ばかり考へる。其相談にと度々力次姐さんの海家へやつて來るついで、誘ひ合つて今日新富座の見物。君龍は身請をされてからこの三年といふもの自分ながらよく辛抱したと思ふほど白髪の日那一人を守り三味線も手にせず芝居へも滅多に行つた事のないだけあつて、旦那の御寵愛は遺言狀にまで

ちやんと君龍の事が書いてあつた有難さ。さて君龍の身になつては盡すだけの事は盡してしまつて、さて貰ふだけのものは貰つてしまつた心も自由になつて何かそはくちと落ちついてゐられぬ矢先久振の芝居見物、瀬川一絲が初役の重次郎を見るより忽ち逆上せしまつて成らう事なら今夜芝居がはねたら直ぐにもと力次姐さんへ我儘な頼み。力次は何ほ何でもさう急にはと困つたけれども駒代への意趣返しにはこれに越した事はないと思ふのでいゝよ私にまかしておくれとすつかり受合つてしまつたのである。で、力次はまづ座付の茶屋栞梗の女將と云へばこの仲間では顔の賣れた婆さんと懇意なのを幸ひ早速打明けた話をして、それからいゝやうに瀬川の方へ通じさせ、一夜一寸でも都合して築地の久津輪といふ待合へ來てくれるやうに頼んだ。

すると斯う云ふ事には聊切つてゐる栞梗の女將の取なし、案ずるより産むが安く、二番目の狂言河庄が切れる頃に嬉しい返事は早くも丸簡の君龍と銀杏返の力次が顔を躍らせたのであつた。一座じた久津輪の女將はこの返事を聞き一足先へ歸つて安座をして待つてゐるからと炬

燵の場が明くか明かない中に君龍の背中にぼんと一ツ喰はしながら鶏を出て行つた。君龍はいざ品がきまつたとなると以前の大口には似もつかず俄に心配らしく考へ込んでばかりゐるので女將にからかはれても唯顔を眞赤に何とも云ひ得ない始末である。されば幕が明いて瀬川の小登が舞臺へ出ると君龍はおのづと後じりに力次の身體を柵に手にしたハンケチで半分顔をかくしながらも、人知れず眼を据ゑ息を凝して瀬川の小登ばかりをぢつと見詰めるのである。する中に突然力次に袖を引かれハツと思はず又顔を赤く息をはずませた——力次はまるでおのれが事のやうに、

一そら又こつちを見てるよ。君ちゃん、もつと顔を出してよ。」

君龍も瀬川が藝をしながら折々向を見る振でそつと此方の棧敷へ眼をつけてゐると氣が付いてゐるので力次にさう注意されるゝ猶更氣まりが悪く顔を眞赤に唯俯向くばかりであつた。

## 十八 さのふけふ

いつも嬉しい逢瀬の場所と二人の中にきめられてゐる宜春の四疊半、瀬川一絲は江戸小紋の二枚重、結綿の二紋を腰にして目だにぬやうに

ッ、観目立たずして相應に物のかゝつたつくり、いづれ何家の誰といはれる如きんであらう。一人は年の頃二十四五、藤紫の絞の手柄を掛けた佐渡屋が並一、眞珠を入れた蒔繪の櫛、思ふさま荒い輪甲つなぎの大島の二枚襦に揃ひの羽織。縫取模様の鹽瀬の丸帯に寶石入の帶留、びつくりする程大きなダイヤに眞珠の指環これだけでも千圓以上と思はれた。ぼつちやりした長顔の色飽くまで白く、はでなつくりに釣合つて四邊の人目をひく程のまづは美人。衣紋のつくり方化粧の仕様矢張たゞの者ではあるまい。他の一人は待合のおかみらしい四十前後、もとは何處ぞの女中でもあつたらしく品のない田舎の人らしい顔付。各手にした双眼鏡を離して云合せたやうに顔を見合せて、「いゝわねえ。」と溜息をついた。

やがて夕顔棚の此方より市川重藏の武智光秀が立現れる頃、丸鬚の美人は突然年上の銀杏返の手を握り小聲ながら力をこめて、如きん、私もう岡惚だけぢやと濟まないわ。

「それぢや何處でもお前さんのいゝ處へ呼んだらいゝぢや無いか。」

一呼べる位なら苦勞しやしないわ、出てゐる時分なら私だつてそれア何とか漕ぎ付けるけれど、素人になると何だか氣まがりが悪くなつて何にも云へやしないわ。それに如きん、瀬川さんにや何ぢやないの、尾花家の一件が大變なんではう。」

「ふつ駒代かい。」と年上の銀杏返はいかにも卑しむやうな調子で、「胸がいゝんだつて云ふからね。お前さん見たやうな御趣さまぢや到底張合へまいねえ。」

「だから、私矢張あきらめるわ。なまじツか云出して愛想盡しなんぞされると猶悲しくなつてしまふから……」と舌の廻らないやうな甘たうい口のきゝ方である。

舞臺は手負の老母が述懐から少しだけ氣味になつて來るのを丁度いゝ事に、二人は舞臺をすつちのけにして何か頻と小聲に話し始めた。

重次郎が手負になつて花道から出て來る時二人は目がさめたやうに再び舞臺の方に向直り双眼鏡を取上げたが重次郎が落入つてしまふと直様もう舞臺に用はないとふふ風で又ひそ／＼話をつゞけるのであつた。

十段目が幕になると初日の事として琵琶湖の乗切はあづかりとなり直に中幕の二十四孝。是は瀬川一絲が奥庭狐火の宿乗まで大喧采の中に幕になると丁度時分時として食堂は今が一番込み

合ふ最中、三人の女客は出入口に近いテーブルに座を占め、出入の人の滑稽を眺めてゐたが、すると丸鬚は突然銀杏返の袖を引いて、

「力次如きん、矢張來てゐるわよ……」

云はれて其の方を見ると駒代に花助その後に執拗くつきまとつてゐるのは山井先生である。駒代は空いたテーブルと其の方へのみ氣を取られたせみか、力次の傍を通りながら心付かず、何か三人で笑ひながら向へと行つてしまつた。

すると銀杏返の力次はさき／＼憤らしさうに後姿を見送りながら鼻の先で笑つて、「御覽よ。いゝ女ぶつてき。たまらないねえ。」と聞えはせぬかと思ふほどの聲。

力次は年も違へば昨日もぐつと違ふ駒代が、土地の如きんと立てられる自分に對して挨拶、ツゼッ笑つて行過ぎるとは何といふ生意氣な仕打だらう。きつと自分が此處にゐるのを見知りながら挨拶するのがいやに人込を幸ひ氣づかない振をして行過ぎたに違ひないと力次は無暗に腹を立てたのである。それもその筈、力次にはいつぞや吉岡さんと云ふ旦那を取られた遺恨がある。その仕返には何か折があつたら思ふさま泣かしてやらねばと思ひながら、まさか大



の、若しこの上我儘を云つて無理に瀬川を引留めたなら平素から藝人には似合はない一本氣な我儘な御世辭のない瀬川のこと——それが又駒代に惚れる原因でもあるので、後でどんなに腹を立てるか分らないと思ふと何となく怖くもあるし、又あれ程立派な口をきくのだから矢張その云ふ通り眞に大阪の堅いお客かも知れないと初めの銀幕には似ず次第々々に弱くなつて、

「兄さん、だん／＼晩くなるわよ。早く行つて早く歸つて来て頂戴。兄さん、私もう何も云ひませんから……と寄添つて恐る／＼顔を差覗くのである。

「何、行かなければ行かないで済むことさ。」と瀬川は太儀さうに起直りながら、後であやまりに行きやアい。」

「それぢや私がこまつてよ。もう十一時過ぎよ。兄さん。ほんとに早く行つて来て頂戴よ。私も一人で待つてるのも氣まりが悪いから鳥渡家へ歸つて出直して來ますから。」

「さうかい。それぢや済まないけれどさうしておくれ。」と瀬川はわざと扶けられるやうに女の手を取つてしぶ／＼立上り衣紋を直す。

もう斯うなつてはたとへ身を切られる程辛くても表面は立派に綺麗に御座敷へ出してやるが

藝人を情夫に持つ女の心得だと妙な處へ意地をつけて駒代は後からびつたり寄添ふやうに羽織を着せ掛ける。鳥渡新派の芝居にでもありさうな様子。瀬川はその儘後へと凭りかゝるやうに身を反し、羽織の片袖通した手先に駒代の手を握りながら、

「ぢや、いゝねえ。きつと待つておゐで。」

其のまゝ機へ手をかける。駒代は廣ぶたに載せた男の二重廻と帽子襟巻を持つて續いて廊下へ出た。

「それぢや後程。」とおかみや女中の聲を後に瀬川は抱車の脚深く宜春の門を出ると我にもあらず手頭へはめた金時計を見た。いつもよりハネの暖い初日の夜に二場所掛持ちとは初めから無理なのは知れてゐる。然し瀬川は桔梗の女將から巧い調子に話込まれ男の持前なる浮氣の蟲を誘ひ出されると、まるで子供がほしいと思つた玩具を買つて貰はない中ば腰でも覺めても氣がすまないと同様、唯只無暗に氣ばかり急るのである。瀬川は駒代に悪いとは知つてゐながら、さう云ふ事には馴れきつた桔梗の女將が猫撫牌で駒ちゃんの方は私が後で何とでも詫を入れるよ。私が悪者にさへなれアいゝんだからと、それまで引受けられては替ひ氣がすゝまず

とも押し出さねばならない譯。ましてや棧敷の遠見には一層美人に見えた圓ぼちやの丸髭、且那に別れた後も久しく貞女を立てゝゐるのだから先は素人も同様と聞いては猶更に我から胸を躍す好奇心、瀬川は行つた先の首尾次第、もう宜春なんぞへは歸らずとも後は野となれ山となれといろ／＼さま／＼に新しい突然の戀の面白さを空想する間もなく築地川一筋越した久津輪の門へ着いた。

駒代は宜春の帳場でおかみさんに暫く遊んでおゐてよ、その中に私が電話を掛けるからとまで言はれたが、到底落ちついて坐つてはゐられぬので、ぶら／＼銀座まで歩いて歸つて來ますと、其のまゝ車も呼ばずぶらりと外へ出ると、門並待合のつゞいた狭い横町、後にも先にも自動車が二臺に人力車の四五臺道をふさぐばかりに供待してゐる間を、駒代は誰にも姿を見られぬやうにと急いで農商務省の方へ出た。

着然とけぶり渡つた初冬の夜は地震でもゆりはせぬかと思ふほど妙に暖く、照輝く月の光に物の影はつきりと乾いた道の上に横るさま何となく夏らしい心地して、贅の毛撫での微風の爽さ。思ふともなく駒代は、初めて瀬川の兄

絞出したは、桶町あたりの好みであらう。横坐りに崩した膝からちらと見せた長袴、鶴傘に白く片輪車の紋りはまづる圓の誂と似しい。帯はぐつと古風に幅狭く仕立てた獨針の唐織子、掛の端へ如源の二字を赤糸で縫はせたは大方濱町平野屋の品であらう。素人ならば随分いやみになる處を女形と云ふだけ却てよいと思付と見られた。きゆつと後手に締上げながら坐り直して、泰貞が水に紅葉の長門筒吉波の結みに紅の濃い人形手金革のかます、銀の蛇籠に金で細かく砂利の細工を見せた長手の金具は誰の作にや。無造作に取つて腰にさし、

お駒、それぢや鳥渡行つて来るぜ。一時間か二時間たつたらきつと返つて来るから、いゝかい、だまつてぢや困るなア。羽織を取つてお呉れ。」

駒代は黒縮緬の羽織もまだぬがず火鉢の灰へじれつたさうに火箸を突きさしながら俯向いたまゝ、

「えゝ。待つてます。」とすげなく云つたが、突と食卓の上の銚子を取り溢れるばかり茶碗につぎかける。一絲は早くも其の手を押へ、「どうしたんだよ。今もあれ程云ふのにお前にも似合はないぢやないか。先から親戚の時分か

ら最辰になる大阪のお客だ。袖崎さんが今度久振で此方へ来たんでわざ／＼一緒に出て来た最辰のお客だよ。」

「そんなら、兄さん、ずつと前から今夜のお座敷は分つてる筈ぢやありませんか、今夜ヘネが早かつたら山井先生も誘はうッて現在山井さんにも樂屋でさう云つてたくせに。急に外へお座敷だなんて、私ア決して疑るんでも何でもありませんよ。ですけれども、随分兄さんもあんまりだと思つて……」よく／＼口惜しいと見えて駒代は云切らぬ中に聲をくもらせた。

「それぢや、どうしても不承知なんだね。不承知なら不承知でいゝさ。行かないばかりだ。」と瀬川はぐつと強面に出て相手の様子を窺ふと、此方はさすがにそんならお行でなさるなとも云切れず、僅にハンケチで眼を拭ふばかり。

男はわざと急がぬ風を見せるつもりか腰へ収めた烟草入をまた抜出して一服しながら獨言のやうに、

「お前さんが行くなと云へば行かないまでの事さ。先様をしくじれば其れでいゝんだ。」と煙管をはたい、「お前さんも大事な吉岡さんをしくじつたんだからね、私の方もしくじりさへすりやアそれでお互に愚もなくなる譯だ。」

瀬川はどうでも勝手にしろと云ふ風にごろりと横になつた。かうなつては惚れた弱味のある女の方からは非どうか行つて下さいと頼むより外はない。色の紛擾には馴れてゐる瀬川一絲、初めからさうなるものとはとうに見越してゐる。よし又女の方が何でも彼でも放すまいと執拗く出れば此方も我儘一ぱい無理に振切つて出て行くまでの事、其場ではいくら愛想づかしを云ひもし又云はれもした處で、これまでになつた晩には女と云ふものはカラ意氣地のないもの。半年一年其の儘に放棄つて置いても折を見

て此方から優しく仕掛ければすぐころりとなるのは梅路の米八仇吉の條を見て知るまでもない事と、瀬川は先の先まで承知してゐる上に、内心質の處は少しもう飽が来てゐる。何かいゝ代りの出来次第、駒代とは手を切らう——きつぱり片がつかなくとも唯この上餘り深くないやうにしたい、今では人分借金もありさうな駒代にこの上半年一年と繋つてゐた日には厭でも應でも末は女房に背負込まなければならぬまい。それも是非ないハメになれば因縁づくだと諦めるまでだとちやんと度胸を据ゑてゐる事として、これは到底相撲にはならない譯である。駒代はどうあつても今夜は放すまいと思ふも

「さうねえ。一體瀬川さんには駒代如きさんとそれから誰なの。」

問はれて一人は何と答へるか、駒代は覺えず固唾を呑んだかひもなく、又向から驀地に走つて来る自動車に話はそれなり途切れたばかりか、二人の藝者は丁度來掛る待合何家の格子戸、外から女將さん今晚はと云ひながら這入つてしまつた。駒代はもう氣が氣でない。前後の事情は何の事やら分らぬが、兎に角耳へはいつた一語二語、これやからしては居られない。兄さんが自分に話をし出て行つた久津輪へ電話をかけ、兄さんが居るか居ないか聞正して見なければならぬ。差支のない唯のお座敷なら自分の聲と知れたとて、別に可笑しい事はない筈、何故早くさう氣がつかなくつたのだらうと、駒代は元來た道を駈けるがやうに宜春に戻り、矢庭に帳場の電話器を掴んだ。

然し流石に聲だけは落ちつかせて、「久津輪家さんですか。鳥渡恐れ入りますが瀬川さんを電話口まで……此方ですか、はい、此方は、あの瀬川の宅ですが。」

暫く待つても返事がない。遂に癪癪を起して無暗に相手を呼出すと折悪く混線と云ふ始末。側に居た女中のお牧が見兼ねて代り合つて掛け

直すところもうお宅へつく時分で御座います。」と云ふ返事。此方が瀬川の宅と云つただけにそんな答へありせんとも問返されず、駒代はがつかりしながら大方こつちへ来るつもりで其様事でも云つたのかと、暫く待つてゐたが、いつの間にか、時計は十二時を打出したのに、俄にまた急立つて今度は宜春で駒代がお待ち申して居りますからと大びらに名乗つて掛けると又しても好加減待たしぬいた後、矢張築地の「お宅へお歸りです」からの事。いよいよ「狂亂。築地の家へ電話をかける」と唯留守で御座います。

瀬川一絲が行方はこゝで全く不明になつてしまつた。兎に角十二時になつては待合の門は閉めなければならぬ。女中のお牧はさすがに氣の毒と思つてか門の扉を片方だけたて「もう入らつしやりさうなものだ。」とわざと獨言のやうに云ひながら往來へ立つてゐると、突然何處から出て來たのか丈の低い洋服の男大分酔つてゐるらしくよろ／＼とお牧の側へ寄りかゝつて來さうなのに、お牧はびつくり、周章で、門を閉めようとする、酔漢は猶周章で、

「おい／＼待つてくれ。僕ちや駒代さんは來てゐないか。どうも失禮。ほい、ほい。」

「僕だよ。山井だよ。」と云ふより早く馴れたもので山井はお座敷が生憎などと、斷られない先に早くも煙をぬぎ捨て、上つてしまつた。

## 千九 保名

二三日たつと都新聞に「狂亂心の駒代」といふ見出しで一段半程の體種が出た。去年の秋、歌舞伎座の演藝會で保名の「狂亂」今年の春は隅田川二度つゞいての「狂亂」當りを取りめつきり賣出して今では新橋中この名妓ありと誰知らぬはなき尼花家の駒代が、しかも芝居の初日の夜人事なく、濱村屋の太夫を横取りせられ寝ようとすれど寝られねば日の出るまでも待ち明かすあらうつゝな妙瀬川、土人形にあらざれば格氣もせずにおとなしう此の儘だまつちや居られぬと、舞のお扇子踏みしだき狂ひ狂ひし一夜の始末。すべて保名の淨瑠璃深山櫻兼及樹振の文句をもつた記者先生が筆のいたづら。然しこれだけの事なら元より眞偽は不明な新聞の記事。浮いた家業の仲間には更に珍しい筈もないので、普通ならは噂されるそばから直ぐに忘れられてしまふのであるが、不思議にも今度の事のみは湯屋、髪結、茶屋の相部屋、師匠の稽古場などおおよそ藝者の集る處には日を經



さんに呼ばれた宜春のお座敷、夢ではないか狐につまゝれたのではないかと、われと我身の嬌しさを疑ひながら別れて歸る夜の道、明い賑な通へ出て車や人の往來にその嬌しい思を亂されるのが惜しさに、兩方の膝節ぐらゝする程に草臥れてゐながら、暗い横町から横町へとわざわざ廻り道して歸つた時の事を思出した。

それは書間の残葉も夜と共に袂を拂ふ秋風の心地よく深けては露もそろ／＼身にしむ頃。時候は全く違ふが、書間一日多居の人込から颯てどの露さ夜深の空、月の光は澄みながら狭霧につゝまれた人家の屋根、夜深けた街に吹き通ふ川風の潮ざはり、向うの河岸通りを流して行く新内の撥音、又その邊の待合の植込越しなる二階の燈影――あたり一帯の様子が氣のせるか忘れようとて忘れられぬ初ての夜に似てゐる。さう思ふと駒代は歩いてゐながらも一度にわつとせき来る涙、あわて／＼ハンケチに顔を蔽ひ、竊とあたりを見廻したが、幸に廣大な農商務省の建物に片側は眞暗な往來。いつもならば丁度時間も場所も送迎ひの藝者の車。日吉、大溝、新竹、三原、中美濃なんぞの提灯屋の如くなるを、どうした拍子か後にも先にも見渡す往來は寂として、唯采女橋の方から自動車が一臺

と、ぶら／＼歩いて来る藝者三人が大分酔つてゐるらしい高語と笑聲、駒代は急いで木挽町の四角を左へ折れるが早いか、見當り次第に何處といふ事なく唯灯のない眞暗な露地へ身をかくし、兩袖を顔に押當てたまゝ其の場に蹲踞んで思ふさま泣きたいだけ泣いてしまはうと試みた。駒代は誰も人のゐない處で、誰にも慰められず妨げられず、たゞ自分の氣のすむかぎり泣いてしまひさへすれば、其の後はどうやら氣が落ちついて人の話も耳に入るやうになることをば、生付寂しい氣質の癖として自分ながらよく承知してゐるので、何か其場の思案に餘るやうな事があると先づ何より先に人のゐない處へ、それも出来ない場合には押入へ首を突込んで無理に泣き泣いてしまふのである。後になつて我から可笑しいとも思ふ此の妙な癖は、秋田の遠い田舎へ片付いた時、右を見て左を見ても、旦那の外はまるで話の通じない人ばかりの中に月日を送つた折、いつももなく習慣となつたのである。駒代はその事をよく承知してゐるが、一度妙な癖がついては直したいにもなか／＼直されるものではない。ましてやその後は今日が日まで泣きたいと思ふ事のみ年々増え行くばかりで直さうにも直す暇がない體。

駒代は露地の暗闇に泣き泣いてゐる中何の譯もなく不圖自分は一生涯泣いて暮すやうに生れて來たのかも知れないと思ふと、また更に悲しくなつて此間兄さんとお揃ひに洗へたばかりの長襦袢の袖をも絞る程にしてしまつた。自動車か砂をあげて馳過ぎると耳許近く犬の吠出す聲に、駒代は已むを得ず露地口を立出で足の向く方へと歩きかけたが、する／＼といき間先へお座敷の歸りと覺しい藝者二人、何の語かわからぬが、駒代の耳にはつきり聞えた濱村屋の兄さん。」と云ふ一語。駒代は急に空音を忍ばせ人家の軒下をさとられぬやうに一歩でも近く寄つて立聞きしようとする。それとも知らぬ藝者二人は遠慮なく、「たしかに濱村屋さんの兄さんよ。羨しいわね。何處へ行つたんだらう。それぢや賄しませう。わたし明日黙つて駒代姐さんとこへ電話をかけて見るわ。さうしてもしか濱村屋さんだつたら私活動をおごるわ。一それぢや私が負けたら私の方がおごるわ。然し鳥渡。もしか濱村屋の兄さんと外の藝者衆と二人だつた日にや大變よ。私達まで駒代如き人に疑られちまふから、幾多に電話なんぞ掛けない方がよくツてよ。

一兄さん。ほんとうに始終見捨てないで頂戴よ」と君龍は女心の譯もなくほろりと涙を落した。

瀬川は其夜誘はれるまゝ、以前は妾宅であつた濱町なる君龍の家に泊ると、一晩が二晩三晩になり遂に其のまゝ廿處から歩居へ出勤するやうになつた。すると男衆の綱吉に車夫の熊公、二人がついて其方へ引取られた。奥役初め其他之居の關係者で瀬川に急な用事のあるものは自然濱町の家へ尋ねて行く事になるので、築地の住居は隠居所、濱町は表向門札こそ出さぬがどうやら本宅らしく、いつも丸筋に結つた君龍はもう事實の女房である。

すると織母のお半は荷がさて置き君龍の財産を頼母しく思つた爲めか、わざ／＼濱町の方へ出向いて来て何分にもどうぞ倅をよろしくとの頼み、やがて返禮に來た君龍をば下へも置かずもてなした處から、君龍の方でも實の母同様に慕はしく思込むと云ふ風、二人は忽連立つて新富座のみならず帝國劇場や市村座なんぞ他の芝居へも見物に行く間柄になつた。

此の間に漢家の力次は新橋の茶屋々々藝妓仲間を初めとして知合の役者藝人達へも何とつかず満廻しに君龍の方へ利益のあるやうな、同

情のよるやうな噂の種をば絶えず振り蒔いてゐた。

## 二十 朝風呂

午前十一時頃、丁度浴客の途絶えた日吉湯の大きな湯槽を唯一人わが物にして、いかにも心持好さうに暖まつてゐるのは尾花家の主人吳山老人。ア、ハ、ハ、と遠慮なく大きな欠伸と諸共瘦細つた兩腕抜ける程に伸をした後、高い天井の明り取窓から麗かな冬の日の斜にまだ汚れぬ新湯の中へさし込んで来るのを面白さうに眺めてゐた。折から、がらりと表の硝子戸を明けて這入つて來た四十面、色黒く頸筋逞しく肩幅も廣いのに、似もつかぬお台の一つ小袖襟、少々目に立つをぞろりと滑流し、前の方だけ角帶の體裁をなした縮緬の兵兒帶、羽織は着ず鼻下には薄氈大事さうに生やした様子、新聞記者とも代言人とも見えざりてと元より堅氣の人とも受取りにくい。着物をぬぎながら壁にかけた芝居席なんぞの番附、眺めると云ふよりは檢閲するとも云ふやうな癖のある眼付で横目に睨み、中仕切の硝子戸手荒く明け放つて大股に浴槽へ歩寄り身體をしめしかける處へ、中から吳山老人思ふさま暖まつてゐつと立

上る顔を見て此方は、や、と無造作に書生風の挨拶。そのまゝ無駄まうとしたが、ちと無過ぎで這入り兼ねる様子。吳山はわざと當付けたやうに、

「寶家さん、湯は錢湯にかぎるね、便利なやうだが家の風呂桶ぢや鼻息も出ねえ。」と又もや出かゝる欠伸を噛みしめるも道理、吳山は別に怨も何もないが唯何となしに寶家の亭主の様子が嫌ひなのである。舊は壯年役者の下廻とやら。つい四五年前までは寶家と云へばお客も藝者もあゝ彼の家かと新橋中知らぬものなき水轉屋、その爲め忽の中に身代をこしらへたとすると、今度は俄に藝のいゝもの二三人を抱へて、日ばしい茶屋々々へは心付を惜しまず、いつの間にやらすつかり店を出し直し、去年組合にごたごたがあつて世話人改選の折運動して其の一人となり、そろ／＼羽振をきかし始めたのである。當世の新聞言葉を借りて云へば寶家の此の發展振りが、吳山老人には何處となく當世成上り紳士の成上り方と同じやうな氣がして胸が悪い。初手は見得も絲瓜もかまはず、さもししい事の有りたけ爲盡して少し上面がよくなると、忽ち利目利日へ金で手を廻し、以前の身分を忘れて人きな顔をし出す。それも政治家實業家株屋なん

るに従つていよいよ噂は噂を産んで行くのであつた。それは新橋から見物に行つた連中が誰も彼も一人として君龍の姿を見ないものはない。大入つどきの興行はいつかもう中日近くなつてゐるのに、お前さんとかい、私もよと云ふやうに、君龍の姿は初日以来毎日々々幾敷にあらざれば廊下樂屋にあらざれば茶屋か食堂、劇場内の何處かで必ず見掛けられるといふ事と、初二日目には見られなかつた立派な緞帳幕、濱村屋太夫さん江として漆家の力次を筆頭に其の家の抱五人の名を縫つたのが何でも四日目か五日目頃から中幕二十四孝の時に引下されるやうになつた其等の爲めであつた。する中に誰が云出すともなく濱村屋の太夫は來年の春先代菊如の名を襲ぐ折に君龍さんを女房にするとの噂が立始めると、現にもう取かはされた結納の品物まで見て來たやうな事を云出すものも出て來る。二人の夫婦約束は以前君龍が藝者に出てゐた時分からとうにできてゐたのだと傳へるものもあつた。

この最後の噂は誰の下にも至極尤もらしく聞えたと云ふのは昨日の浮いた噂が今日の結婚談になるのは何ぼ何でも事があんなまり早過ぎるやうに思つた連中もこれによつて初めてどうやら今點が行くからである。駒代はこの噂を聞くと共にいよいよもう自分は駄目だと覺悟した。瀬川の方では此上もない便利な口實として此の噂を申譯にした。されば二人の間にはこの噂が契して事實であつたか否かについては一度も爭論されずにしまつたのである。一圖にさうと思ひ詰めて逆上きつた駒代は男の薄情を怨んで泣く。男の方は逢ふ度毎に怒まれ泣かれするのが辛く、言譯してもなかなか承知しないまゝについて持て餘して迷足を踏む。それに引替へ君龍の方は新手の勢、何一ツ厭な事云ふ譯もないので、駒代との間がもつたればもつれるほど君龍との情交は濃になるばかり、或日二人はかの久津輪と云ふ待合で、一世間ぢや専ら僕達には結婚するんだつて言つてるぜ。何かと云ふとすぐ結婚の評判だ。」「ほんとに御氣の毒さすね。」「お前さんこそさぞ御迷惑でせう。相済みません。」「あら。どうして私が迷惑なんです。伺ひたいもんですね。」「かう評判になつちまつちや、當分お前さんこそ何處へも行かれやしないぢやないか。」「ですからさ。私はまことに兄さんに御氣の

毒だと此方からさうぶつてゐるんぢやありませんか。折角駒代さんと云ふ方がおあんなさるのに私ができた爲めに、その方の事がどうかなるやうだつたら私はほんとに申譯がありませんわ。」「駒じるしの話は禁句だよ。だが不思議な話があるもんだね。お前さんと私とはずつと以前にお前さんが力次さんの家にゐた時分夫婦約束をしたんだつて云ふ評判だよ。お前さんは其中旦那が出来て身請をされたんで一時別れになつてゐたんだとさ。力次さんもなか／＼人が悪いよ。現にその事を力次さんに眞實か虚言かッてきいた藝者衆があるんだとさ。すると力次さんはそれア全くだつて云つたさうだ。僕も人から何の彼のと聞かれると面倒臭いから皆ほんとうだつて、さう云ふのよ。駒じるしにもさうだと云つてやつたよ。」「さうしたら、どうしました。」「どうしたか、それきり逢はないから知らない。」「全く不思議ねえ。全く昨日今日のやうな氣がしないわね。どうしてこんなに成つてしまつたんでせう。兄さん。」「何だい。」「



んだが、もう稿中知れぬ者はねえ位だ。  
「へえ。話を聞いただけでも凄えねえ。」と髪結の御亭主興に乗つて顔に塗つた有職の眼にしみ入るのも洗ふ間なく、どんな女だ。いゝ女かい。」

「いけない。うっかり好いなんぞと云はうものなら、後でお幸さんに恨まれる。」

「さう言はれると猶の事見たくなるねえ。」

「はゝゝゝ。吾輩が見ちやテンデ藝者になつてやしねえ。まア二度びつくりの方さ。然し評判といふものはおそろしいもんだ。彼方此方で寄ると藝者と變な藝者だ、變なまねをする藝者だといふのが評判になつて、忽ちの中に賣出したんだからな、恥にや置けねえ利口な女さ。」

「一體どんな事をするんだい、裸體踊か。」

「裸體にや遊びないが、雨しよば見たい。下等な踊ぢやない。實は僕も家の妓に聞いた話なんだから、しつかりした事ア知らないが、踊るんでも何でもない、一口に云へば唯座敷で裸體を見せるんだね。西洋の客席にやさう云ふ藝をするものがいくらかあるんだとさ。西洋のこれは何處其處の何と云ふ名高い石像で御座いとか何とか口上をぶつて其の通りな形をして見せるんだとさ。眞白な肉襦袢を着て髪のもも石

像に見える様に眞白な髪をかぶるんだとさ。だから、此奴アうっかり苦情も持込めないんだ。兎に角新しい女とか云ふ奴で、理窟を云はせちや切のねえ奴に違ひない。現にお座敷で大層な事をぬかしてさうだ。毎年文展で裸體黨問題が起るのは要するに日本人には裸體の美がよく分らないからだ。實に歎はしい事だから上流の紳士に美術的修養をさせる爲めにかう云ふ事を思ひ立てやり始めたんだと言つてさうだ。」

「へえ、大變なものが現はれたもんだな。ちや、兎に角僕も一ツ美術的修養をしに行かうや。」

「振りが掛けたつて來やアしないとき。何でも毎日約束の三ツ四ツもあるんだつて云ふ事だ馬鹿々々しいぢやないか。」

「此方は鳥屋の市十と吳山。そんな色っぽい話とはちがつていづれも年寄の愚癡話。濕っぽい因果である。」

「此兒も今年十二ですが此始末ちや仕様がありません。此頃ちや小学校もよさめました。と市十は青さめた俵の背巾を流しながら、欠ツ張殺生の、なんでせう馬鹿にや出來ません。」

「子供は足のわるいばかりでなく全身の發育も甚だ不十分精神の働きの餘程萎縮してゐるも

のと見え、氣のぬけたやうにぼんやりして別に物も言はねば惡戯もせず、唯うつとりと有らぬ方を見詰めてゐる。吳山はいかにも氣の毒さうに親子を見くらべながら、

「昔からよくそんなことを云ふが、それがほんとうだつたら魚河岸の若衆はみんな不具でなくちや成らねえ筈だ。鰻屋をすると矢張りけな

と云ふものがあるが、鰻も有る生物に變りはねえ。氣は病びだよ。現に私なんぞも矢張り俵

の事ぢや今だに泣かされてゐるのさ。」

「流太郎さんと云ひなすつたッけね。どうしたい。」

「いやややお話にやなりません。三年前にちらと噂をきいた時にや、何でも公園の道酒屋にゐると云ふ話だつたから、餘所ながら様子を見ようと思ひ切つた俵だが、そこは血を分けた親の情だ。私やわざ／＼たよりたよつて近所の銘酒屋へお客のふりをして上り込んだよ。」

「ふむ。親の身になりや誰しも同じ事だ。」

「私ア近所の評判をきいてがつかりしたね。これア大魔が魅入つたにちげえねえ。なまじ顔を見たり意見をしたりすれア思ひがえすばかりで、とても望のねえものならこれア矢張り後生

ぞならばまだしもの事、全體養老家の亭主なんぞといふものは料が身を喰つた果の洒落半分、萬事垢抜のしたものと、吳山は若い時分の考へが今だに抜けぬ處へ、寶家の亭主の風を見れば第一に鼻の下に髭からが氣に入らず、世話人になつてからの働きやう、會計報告だの何だのと組合の相談をば株式會社の總會がなんぞのやうに何かと云ふと直ぐに演舌口調で辯じ立てる。それが唯片腹いたくて成らないのである。

然し寶家の方ではそれほど嫌はれてゐるとは氣のつかぬか、或は氣がついてゐても押の太いと如くないとが成功の秘訣と上手に出て行くつもりか、老人が欠伸噛みしめながらの生返事も一向平氣で、

「先生、席亭の方はあれ以來ずつとお休業ですか。」と湯槽の中から話しかける。

「もう此の年になつちや出たくも出られませんが。」と老人は流しへ坐つてあばら骨の出た横腹を洗ひながら、一出た日にや席亭は迷巻、御定連は猶御迷巻だ。

「近頃はいいものが掛らないせむか寄席は淋しくなりましたな。時に先生、實は其中御相談に上らう／＼と思つてそのまゝ私もいそがしいもので……」と寶家はそれとなく四邊を見廻した

が、元より男湯には一人きり、女湯は寂として物音なく、番臺の上には婆さんが眼鏡をかけて一心にときものをしてゐる。

「實は何ですよ。是非一つ世話人になつてお貰ひ申さうと云ふんです。席亭の方をお休みなら自然お暇もありませう、是非一ツ吉々の事業を助けて頂きたいんだが……。とそろ／＼例の演舌口調。寶家は組合中へ自分の勢力を張るには自分より古顔の世話人を段々によさせて、其代りに毒にも藥にもならない人物を推薦し、つまり自分一人いゝやうにしようといふ下心。吳山は新橋中では一二と數へられる古看板尾花家の名前主、頑固一點張の意地の悪い爺で通つてゐるが、然し其の代に極く淡泊で慾と云ふもの微塵もない善人である事も土地のものはよく知つてゐるので、寶家は自分の舌三寸で云ひまるめこの爺を世話人の數に入れよと、こまかい事は却て面ががつて口を出さぬは知れてゐるので結句なまじつかな者に知られて權力争ひをされるよりは餘程ましだと考へてゐる。それと知つてか吳山は情なく、

「いや、そいつア御免を蒙りたいよ。家の暇も近頃はめつきり弱つてゐるし私だつてもう取る年だ。とても世話人は勤まりやせん。」

困つたな。兎に角尾花家さんと云へば土地の古顔だ。何しろ人望家だから

其時三助が、大分お笑ひになりましたと寶家の背巾を流しに出て來たので、寶家はそれなり話を中止する。折から相前後して入つて來る浴客の一人は金縁の眼鏡をかけた色の生白い十年輩、土地で金満家と云ふ評判の女房結お嬢さんの男妾同様の亭主。舊は活動寫眞の精にとやら。他の一人はでつぷり肥つて頰の赤げた五十前後市士といふ料理屋の親方である。病氣らしい十二三の男の兒の片足脛に云ふ家鴨足になつたのを連れ、いづれも知合つた近所の人とて互に今日は／＼と挨拶しながら湯槽へはいる。自然話は二手に分れた。市士は吳山を相手に、髪結の亭主は寶家と、これは各地の藝者のはなし。やがて寶家は何か思出したやうに、近頃新橋にもさう云ふ藝者が現はれたんで、實は内々組合の中でも土地の名譽にかゝはると云つて苦情を云ふものも有る始末さ。

「へえ、何て云ふ藝者だれ。」

「まだ御存じがないのかね。巖花ッて云ふのさ。」

「どこの抱だ。」

「弘めをしてからまだ物の一月もたちやしない

「洋食にしよう、世話がないから。」と立掛けた途端に電話が鳴り出した。花助は進み寄つてハイ／＼と何か受答をしてゐたが、鳥渡待つて下さい——駒ちゃん、宜春さんのおかみさんよ。新亭座からですつて。」

駒代は電話口へ出て、「あら、さうですか、何とも申譯がありません。實はね、おかみさん、家にもちつと取込みがあつて——如さんが病氣なのよ。それで今まで電話を掛ける暇もないんでせう。ほんとに申譯がないわ。」それから何やらひそ／＼と暫く話をして、左様ならと電話を切つた。

「駒ちゃん、今日は新富の千秋樂だつたねえ。私やすつかり忘れてゐたよ。お前さん、行かないつちや悪いだらう。」

「今、私ももう斷つてやつたわ。何ほ何でも今日は出られないもの。」

「何、かまふものかね。素人家ぢやあるまいし。お座敷がかゝれば出て行くのが商賣ぢやないか。鳥渡行つておいでよ。今夜私は丁度、どこも受けてゐないんだから、御見舞に來る人の挨拶なら私がこゝでしてゐるからさ。構はないよ。如さんも人分靜にをさまつたらしいし、今の中ほんとに鳥渡顔だけ出しておいでよ。」

「今日はまだお湯にも行かないし。髪もこんなだし……と駒代はまだそれ程に亂れてゐない。銀杏返の眞中を指で摘んで、わざと毀すやうに手荒く揺動し、じれつたさうに頭を振つて、先の中見たやうなら、それアどんな無理をしても行かなくつちや悪いけれど、何しろ先が先だもの張合がありやしないわ。なまじツか顔を出して解な事を見たり口惜しい事を聞いたりするよりか、私や一層もう何處へも行かないでゐる方がいゝわ。」

「お前さんはそれだからいけないんだよ。そんな氣の弱い事を云つてゐるから、いゝ氣になつて勝手なまねをするんだよ。私なら人の前だらうが何だらうが構やしない。どし／＼面の皮を引ン剥いてやるから……」

「いくら何をしたつて、心變りがしちまつたものは仕様があまりやしないわ。私アもうつく／＼懲りたわ。」駒代はきつと思詰めたらしい調子で、「花ちゃん、私ア兄さんがいよく／＼さうと極まれば、何ほ何でも氣まりがわるくつて人様にだつて顔向けが出来ないから、もう此の土地にや居ないつもりよ。」

「まア、この人は、物事を悪い方にばかり考へるんだよ。男つてものは景色が出来ると其

の當座は誰しも夢中になつて逆上せるものださ。だけれども元木にまきさる末木はないやね、ちつと辛抱さへしてゐればいつか實意が通るからさ。まア何の彼のと云つてゐないで、早く鳥渡顔を出しておいでよ。悪い事は云はないから……」

駒代は行くの行かないのと口では云ふものの、欠張行かない中はどうも氣がすまないいで、花助にかうぶはれて見ると今まで我慢して居ただけに猶更欠も極もたまらぬやうな氣がしたして、

「それぢや私鳥渡行つて來ようか知ら、如さんは大丈夫だらうね。」

「用があれば私がすぐ電話を掛けるよ。」

「花ちゃん、ほんとにすまないわね。」

駒代はそつと勝手へ行つて自分から辯直しの湯を取り靜に二階へ上つて鏡に向つたが、今日に限つていつも騒しくて仕様のない程な二階に人氣のない淋しき。煙々とつけ放しになつた電燈のわが向ふ鏡の面に輝くのも氣のせるか薄氣味が悪い。いつもなら箱屋に着せて貰ふ浴物も箆筋から一人で取出し何も彼も一人でする身支度、帯のしまりやら衣紋のつくりやら何となく心持が悪いながら、駒代は人氣のない二階の寂



のさはりの無えやうに此儘逢はずにしまふがい  
いと、それなり歸つて来て、私ア十吉にもその  
事は今だに話をしないのさ。」

「へえ、どんな事ですえ。」

「いやはや、話にも何にもなりやしません。漣

の野郎は一ツ家に寝起してゐれアまア何が何だ  
らうとまアおのが女房も同様だ、その女房同  
様の女がお客を取るのを見ても平氣の平左衛門  
どころの事ぢや無え。自分が先へ立つて知合の  
友達へ出すやら、又其の女をば逢方もねえ活動  
寫眞の種に使つてお上の目をぬすみ、取つた金  
は右から左へとみんな博奕に使つてしまふんだ  
と云ふ話さ。近所ぢや同じ家業の白首までが、

流の事は養味噺にわるくぶつて、女が可哀さう  
だと云つて居る始末さ。人間さうまで勝が腐  
つちまつちやもう駄目だ。乃公アその話を聞い  
てきつぱり見かぎつてしまつたが、行末はお上  
へ御厄介をかける不屈者だと思ふとどうも氣が  
かりでならない。これも何十年博奕打の話で飯  
をくつた俵かそんな氣もするのさ。」

その時表の硝子戸をあわたりしく明けて、  
駈け込む女中らしい女、息をせい／＼切らしな  
がら、

「旦那、旦那、尾花家から参りました。」

「何だ／＼。いけ騒々しいな。」

「姐さんが大變です。」

「何だ急病か。よし／＼身體を拭いてくれ。」

## 二十一 とりこみ

尾花家の姐さん十吉は既に今年の春輕くはあ  
つたが腦溢血で出先の茶屋で倒れた事があつ  
た。それ以來好きな酒もばつたり止め煙草も成  
りたけ吸はないやうにしてゐたのであるが、今  
日も午後二時といふお座敷に間に合ふやう髪  
を結つて歸つて來るといきなり電話口でばつた  
り倒れたなり人事不省、たい大きな驚をかくば  
かりとなつた。

内箱のお定は丁度出先の茶屋待合へと期定  
取に歩いてゐる最中、お酌二人は稀古に花  
助はお参りに行つた後なので、家にゐたのは御  
飯焚のお重と駒代だけ、駒代も今日は新當座が  
千秋樂なので、そろ／＼湯にでも行つて來よう  
かと鏡臺から髪揚げを取下さうとした處へ、  
御飯焚が一誰か來て下さいよ。」と大聲に呼び騒  
ぐのにびつくりして駈降りるとこの始末。駒代  
はうろ／＼してゐるお重をば錢湯へ走らして哭  
山を迎ひにやり、醫者へ電話を掛け、倒れた十吉  
をば居間へ連れて行きたいにも一人ではどうす

る事も出来ないで奥から捲巻を取出して介抱  
してゐる中奥山とお重が息せき歸つて來たので  
三人してやつと一先奥の居間へ寝かしつけた。  
間もなく醫者が來ての診斷。今日一晩經過を見  
なければ何とも返事が出來ない。今のところ、

なまじ病院なぞへ身體を動かしてはいけない、  
唯靜にちつと寝かして置くより仕様がなないと手  
當の次第を奥山に言合めて歸る。やがて看護婦  
も來る。出てゐた家のものも追々歸つて來て看  
病の手順もどうやら揃ひ、ほつと息をつく間  
もなく今度はそれからそれと聞きたへて見舞  
に來る藝者、藝者家の亭主待合のおかみ、指問、  
箱屋の面々、格子戸の開閉絶ゆる間なく、電話は  
鳴りづめの有様、これでは大抵丈夫な人間も病  
氣になる程の混雜。内箱は電話の取次、飯を食  
ふ暇もなく、駒代と花助は表の店口で見舞の人  
達への應接にこれも煙草吸ふ暇もない程であつ  
たが、いつか家中の常燈に灯のつき初める頃に  
なつて、見舞の人の出入は稍靜になつた。  
「駒ちゃん。今の中に何かさう云つてお腹をこ  
しらへて置かうよ。お前さん、何がいゝ、  
一さうねえ。今日は朝からまだ何にも食へな  
かつたんだよ。何だか最う何にもたべたくな  
つて了つたわ。」

儘望むものに譲るか賣るかして、自分はどこかの二階でも借りもう一度高座をつとめて、この先長からう筈もない餘命を送らうと、それとなく決心の程を漏したのであつた。

出先の茶屋々々へ歳暮の進物は箱屋のお定が昨夜殆ど終ずに始末をつけ、今日は午前の中にまづ重な處へ配つて歩いた。吳山は毎日のやうに用簞笥や文庫の中の書付を調べるのに忙しい折から、冬の日ながらも顔に汗をかきつゝ歸つて来たお定の様子。

「いろ／＼御苦労だったな。と吳山は棒の太い眞鍮の老眼鏡をはづして、一たびにして休むがいゝぜ、あんまり身體をつかひ過ぎてこゝでお前に寝られでもしようものなら、それこそ法がつかねえからな。時にお定、手がすいてゐるなら鳥渡此方へ這入つてくれ。まだいろ／＼と聞いて置きたい事があるんだ。」

「なんで御座います。私で分ります事なら。」  
「實は藝者衆の始末だがな……二階ぢやアもう大概の事は知つてゐるだらうな。まだ改めて話はいしねえのだが、てんでに何か相談でもしてゐる様子か。」

「花助さんは旦那からお話があれは何處か外の家へ往替へようと云つてゐましたつけ。」

「さうか。菊千代は好盛梅に去年身請になつたし、今のところは花助と駒代と二人、後は小さいのだから此アどうにでもなるだらう。」  
「駒代さんは何ですか田舎へ行きたいつて云つてゐるさうです。」

「なに、田舎へ行きたいつて。氣でもちがつたんぢやねえか。乃公アいよく駒代が濱村屋の家へ乗込むと云ふ事に話がきまれば、これアここだけの話だが……此の際の事だ。丁度いゝから證文位はきれいに書いてやらうかと思つてゐるんだ。」

「あら旦那、もうそんな景氣のいゝ話ぢやありませんよ。もうとつくに駄目なんですよ。」

「へえ、さうかい。切れたのかい。乃公ア事によつたら及ばずながら支度もしてやりたいと思つてゐたんだが、もう縁が切れちまつたのか。」  
「その邊のことはよく分りませんが、兎に角お

かみさんにや到底大ケ敷さうですな。

「さうかい。これだから、萬事年を取つちや不可ねえや。色づぼい話と來たらちつとも様子がわからねえ。」

「濱村屋さんのおかみさんには、何ですか、來春早々以前津家で君龍さんと云つた人がなるんだつて、彼方でも此方でも人變な評判です。」

「ふうむ。さうか。それで此の土地にや居られねえから田舎へ行かうと云ふんだな。可哀さうに。然し駒代もあんまり意氣地がなさ過ぎるぢやねえか。何か文句の一つも言つてやりやアいいに。」

「私もよくは知りませんが、花助さんの話ぢや一時はハタで心配する程大變な騒だつたさうですよ。私も若しや萬一の事でもあつてはと内々心配してゐたんですが、丁度姐さんの御病氣やら御葬式やらで、それが爲め却て駒代さんも氣がまされたと見えて今ぢやどうやら、御自分で諦めをつけて御居でなさるやうですよ。」

「先の女ツて云ふのは別かい。」

「先の君龍さんなら知つてますけれど其れほど別嬪でもありませんね。然し人柄で身長も高いし、ぱつと目につく方ですよ。それにね旦那、御容色よりか何でも大變な持參金付なんだつて云ふ話ですよ。それで濱村屋さんもすつかり氣が變つてしまつたんだといふ事です。」

「ふうむ。さうか。金に目がくれたのか。そんな野郎なら此方から止す方がいゝ。然しこそがつかりしたらう。かはいさうに。」

「旦那がさう仰つてたと云つて聞かせたら駒代さんもうどんなに嬉しいと思ふか知れやませ

しさに少しも早くと逃げるがやうに立掛ける。その足許にぱたりと落ちた長いものは、はつと思はず後じさりして能く見れば、赤銅色繪細工の絲車の金具をつけた自分の帶留であつた。これはそも／＼兄さんと馴れそめた當初、宜春を出て散歩ながら家の角まで兄さんに送られて歸つて来る道すがら通りかゝる竹川町の小間物屋濱松屋の格子戸口、兄さんはがらりと明けて内へ這入りいろ／＼珍しい袋物や金具を見せて貰つた折、絲車の金具が日につき駒代は嬉しい一絲の名に縁があるからと早速それを買取ると、兄さんは駒代にちなむ春駒の金具をさがし出した。濱松屋といふのは兄さんの家へは先代の時分から出入する小間物屋で、成田屋音羽屋高島屋立花屋をはじめ名高い藝人衆の腰の物の懐中のものはこゝでなければ成らぬ様になつて居るとやら。

駒代は足許に落ちた大事な絲車の帶留を取上り締め直さうとしてよく／＼見るといつどうしたものか裏座の工合が悪くなつてゐて、締めてもすぐにはづれてしまふ。何かとつまらぬ事が氣にかゝる矢先、駒代は云ふに云はれぬ淋しい厭な氣がしたが、どうする事も成らぬので、以前から持古した眞珠の帶留にしめ替へて、様子

段踏む登香も忍び／＼悄然と出て行つた。

やがて向うへ行きつくつと駒代はすぐに今日ほど間の悪い期な日はない。矢張あれが争はれぬ前兆であつたと獨りで思ひ詰めてしまつた。まづ茶屋の店口へ車を乗りつけても時刻ちがひの事として誰も出迎へる者がない。仕方がないので黙つて上へあがり暫く待つてゐるとやつとの事で知つた顔の女中が急じさうに二階から下りて來たので、案内してくれといふと先聲宜春のおかみさんがお歸りの時もう後からは誰も來ないからと云ふので、場所はたつた今よん處ない外のお客へ廻してしまつたとの事、女將が出てひたあやまりに謝罪りやがて別の穴をさがしてゐた。駒代を案内したが、それは新高のしかもゼンと木の方なので、とても氣まゐりが悪くて駒代は一人ぼつねんと坐つては居られないやうな氣がしたのでその儘廊下の通口に佇立みそつと場内をのぞくとすぐ目についたのは東の鶉の中程に色敵の君龍が赤い手柄の大丸薙、竝んで漆家の力次と久津輪の女將、それから瀬川の繼母お半までが一緒にゐてゐて、何やら陸じ氣に話をしてゐる様子。駒代は君龍が已に繼母のお半までをあのやうに拘込んでしまつたかと氣がつくと、實に何とも云へない程情ない心持に

なつた。駒代つ日にはお半と君龍の口合つてゐる様子が既に仲のよい嫁姑であると思ふやうに見え、自分はいつか知らぬ間に赤の他人にされてしまつたやうな氣がしたのであつた。悲しいのも日替しいのも既に通り越してしまつたものが涙さへ出ず、唯大勢知つた人に顔を見られるのが恥しく、氣がして、駒代は丁度藤の明いてゐる無臺の狂言が何であつたか其様にはもう氣がつかず、夢中に芝居を出て、日散に家へ歸り、二階へ上るや否や眞鍮の鉤へ突伏した。

## 三十二 何やかや

尾花家の十吉は倒れてから、日目の晴方とうあのお世の人になつた。菩提所なる四谷鯨ヶ橋の〇〇寺といふへ葬り初七日の事もすまし香奠返の袱紗饅頭もくぼり終つて觀事の後片附もやう／＼済んだかと思ふと、今度はいふに及ばぬほど追る年の暮。商賣の事は、物馴れた箱屋があるとは云へど、何しろ姐さんがなくなつてしまつた後、呉山老人一人では抱の藝者下下に着せる衣の支度もどういふ風にしてよいやら、萬事途方に暮れるのみで、呉山は既に初七日の夜、無意な人達の寄合つたのを幸ひ、此の先男の子一つではどうにもならぬから、藝者家に此の



人のねえ田舎へ行つたつて心細いばかりで好い芽は吹くめえ。それよりか此の土地でこの處暫くつらいところを辛抱したらどうだい。實はもうお前も内々様子は知つてるだらうが、乃公も十吉に逃かれちまつて男一人ぢやとて此の商賣は出来ねえし又家の倅にやアよし行方分つたところで矢張男ぢや仕様がねえから誰か相應な望手があればこのまゝ家の株をそつくり譲つてやりたいと決心した譯さ。元より今さし當つて纏つた金があると云ふ譯ぢやねえ、乃公一人は何處へ行かうがその舌一枚で食つて行ける身だから、どうだいお前一ツ奮發してこの尾花家の姐さんになつて、土地のものにそれ見ると云ふやうに一ツ立派にやつて見る氣はないか。どうだ。」

あんまり思掛けない吳山の言葉に駒代は兎角の返事の出来やうもない。吳山は氣短な老人の癖、駒代が別にいやとも云はぬ様子を見ると何れも彼も獨りできめてしまつて、

「藝者家に年寄のゐるのは色消しでいけねえから、乃公はどこか近所へ引越すとしよう。なア、駒代。その代、この家は借家ぢやねえ、これでも十年前に乃公が建て直したんだ。地面が十坪で地代が五圓だから、乃公アお前から店の看

板ぐるみ家賃をいくらでも都合のいいだけ貰ふ事にしようや。それで花助初め今の抱や箱屋にも改めて話をした上で、萬一面白く行かなさうだつたら、他へ住替へさしてもいい。そして新規跡直しに新しい妓を抱へて、お前のいゝやうに商賣をするがよからう。さうなれば乃公もどんなに氣樂だか知れやしねえ。その中お前もみつしり商賣に身が入つて金庫の一ツも出来るやうだつたら、その時乃公に尾花家の看板代なり何なり好きなものを押ひなさい。なア、駒代、一先づ相談はさう云ふ事にきめて置かうぢやねえか。」

「旦那、それぢや何ぼ何でも、あんまりお話がよくすぎて、私一存では到底御返事が出来ません。」

「だから、何も彼も乃公がちゃんと筋を立て、やるんだわな。兎に角話さへきまれば、乃公も安心して肩が抜ける。済まねえが、お前、後で鳥渡按摩さんに電話をかけとくれ。乃公ア今の中一風呂浴びて來らア。」

吳山は呆れた顔の駒代を打撈つて古手拭片手にぶいと湯に行つてしまつた。

駒代は電話をかけてから、火鉢に炭でもついで置いて上げようものと靜に佛壇の前に坐つた

が、すると突然嬉しいのやら悲しいのやら一時に胸が一ぱいになつて來て暫し兩袖に顔を掩ひかくした。

(大正六年九月)

### そそろあるき

アルチニウル・ランボオ

蒼き夏の夜や  
麥の香に酔ひ野草をふみて  
小みちを行かば

心はゆめみ、我足さわやかに  
わがあらはなる顔、  
吹く風に浴みすべし。

われ語らず、われ思はず、  
われたゞ限りなき愛  
魂の底に湧出るを覺へし。

宿なき人の如く  
いや遠くわれは歩まん。

戀人と行く如く心うれしく  
「自然」と共にわれは歩まん。

『珊瑚集』より

ん。と云ふ折から電話の音に箱屋のお定は座を立ち出入口の襖を閉めると、六疊の居間は日の短い盛りのころとてさき程午飯をすましたばかりなのに早薄暗く、佛壇の燈明が金酒の新しい位障へびかく映るのが忽ち日に立つ。吳山は腰をさすりながら立上つて電燈を捻つたついで、消え残つた線香に火をつけ、再び抽斗の調べものに取掛つた。

「うむ、これア駒代の證文だ。」と吳山は公正證書に添へた戸籍謄本を眺め眞佐木コマ、明治二十一年一月一日生、父亡、母亡と讀みながら一兩親とも居ないのだな。

駒代は丁度小學校へ行きかけた頃母親に死別れてその後に来た繼母が邪険であつたとか云ふので、里方の祖母の方へ引取られ其處で成長する中左官であつた實の父も死んでしまひ祖母も駒代が秋田へ月付いてゐる中に死んでしまつたので、今は兄弟も何もない全くの身一ツである。

吳山は此れまで藝者家の事一切は十吉のなすまゝにして、たまさか相談される事があつても女の商賣に男が口を出しても仕様がねえ。女の事は女同志で收めるがいゝと云つて深く立入つた事がないので抱の證文など手に取つて見

るのも全く今が初めて。駒代の寂しい身の上を知つたのも從つて父今日が初めてである。吳山は女房の十吉が今度はどうとも助かるまいと思はれた時であつた。かの家出した倅瀧次郎の事を思出して、母が呼吸ある中もう口はきけないものゝせめて一日逢はしてやりたいものと、恥を忍んで見番の男に事情を打明け再び其の在家を尋ねさせたが、すると瀧次郎は公園六區の白首とこの春以來警察がやかましいので商賣が思はしくないとところから神戸の方へ行つたなり行方が知れないとの事、頑固一點張の氣丈な吳山もそれやこれやの事から、流石に老後の身の果敢なき、世のおぢきなさを一時に感じ出した矢先偶然駒代の子の上を知つて見ると、これもこの世に唯一人、身寄りも何もないと云ふ處から吳山は自然と深い同情を寄せずには居られなくなつたのである。

その日も暮れて、電線を吹鳴す木枯の響俄にすさまじく往來する車の鈴の音いかにも師走らしく耳立つ折から、吳山は二階の藝者半玉それぞれお座敷へ出てしまつた後、駒代一人氣分がわるいとして引込んでゐるのを幸そつと居間の六疊へ呼寄せた。

「どうした、風邪でも引いたのか。」

「たいした事はないんですけど、唯鼻の心が痛くてしやうががありません。」と云ふ聲も鼻にかり顔色もすぐれず、悄然と坐つて俯向いてゐる姿、吳山は佛壇の下なるケンドンに横に崩れた漬し烏田の後れ毛さへあり／＼映る影法師、いかにも淋し氣なるを見遣りながら、

「氣は病と云ふ位だから元氣を出さなくつちやいけねえ。時に外の事でもねえが、お前、田舎へ行きたいと云つてゐるこちや無いか。おらア別に意見をするんぢやねえが、餘り後先見ずの不料面は出さねえがいゝぜ。乃公ア實はもう何も彼も知つてゐるんだ。濱村屋の太夫の事もすつかり知つてゐるよ。お前が云ひかはした男を取られて世間へ顔出しが出来ねえから、それで旅へ出て稼がうと云ふ思はくも能くわかつてるんだ。そこで物は相談だ。お前の顔が立ちさへすれア何もすき好んで田舎へ行かずともいいんだらう。」

駒代はうつ向いたまゝ唯ハイ／＼と頷くばかり、吳山はいつか人情物の講釋をやるやうな調子になるとも心付かず、  
「實は今初めて證文を見て知つた事だが、お前は親も兄弟も何もねえ女の身一人ぢやねえか。何ば意地だからといつて、何處を見ても知つた

の高い容貌は愛嬌には乏しいかも知れぬが、泣  
服したやうな一重瞼の睫毛の長い潤みのある眼  
とまたきりとした口尻にも泣きそを作つたや  
うな處のあるのが、全體の表情に言はれぬ幽  
愁の趣を帯びさせてゐる。それはこの婦人の  
感情も官覺も共に平凡遲鈍でない證據のやう  
にも思はれた。今でこそ、却てあれがヒステ  
リイ性の特徴だつたと少し後悔もしてゐる  
が、初めて見た時には俊藏はまづこの女なら  
友達に見せても恥しくはあるまいと思つたの  
である。

千代子の方でも俊藏の丈高くあまり瘦せても  
むず肥満しても居ない釣合のいい體格に、仕立  
のいいモオニングコートを着た風采、肩の濃い  
日の大きい色の浅黒いさりとした面立、貴族  
らしくもあれば外交官らしくも見え、心から  
理想の人だと思込んだのである。それに加へて  
藤川の家には老父母の外には間もなく大學を卒  
業しようといふ弟が残つてゐるばかり、一人  
の妹は既に他へ縁付いてゐるとの事。千代子  
はこんな良縁は他をさがしても又とあるべき  
ものではないと思つた。結婚した冬に舅の老  
博士は死して其の翌年に姑も亦世を去  
つた。弟は去年の秋或銀行の上海支店へ行つ

たので、後には全く夫婦二人ざりとなつた。家庭  
の幸福は誰の眼にも羨しく見えてよい筈であ  
る。それは千代子自身にもよくわかつてゐる。

よくわかつて居るだけ千代子はいつからともな  
く良人の歸宅が兎角明くなり勝ちになつて來た  
事が、堪へ難いばかり氣にかゝつてならぬや  
うになつた。一時自分ほど幸福なものは世にあ  
るまいとまで思つた其の反動として、今は殆  
ど理由なく際限なく自分ほど不幸な悲慘なもの  
はないやうな氣がして來るのである。漠然とし  
て恐しい悲運が前途に横つてゐるやうな心  
持がするのである。良人の歸宅の報せいののは交  
際や所用の爲めばかりでない事はもう言はずと  
も知れきつてゐる。然し三年過ぎた今日まで、  
千代子はいろ／＼に手を廻して探つては見た  
が、まだどうしても確とした事情がわからない  
——これはと思ふ藝者も女優も見當らないので  
あつた。

千代子は手足の先が凍えてしまふのもかまは  
ず良人の襟衣にかじり付いて泣いて居たが、涙  
と水漬とを吸り上げる途端、ふと焦げくさい匂  
がしたので、流行に驚いて起直つた。

先刻のさわぎで掛蒲團の端が消えかゝつた炬  
燵の火の中に這入つてゐたのである。千代子は

障子を明け掛蒲團を縁側に抱へ出して焦焦し  
を採み消してゐた。すると突然深夜の寂寞を破  
る自動車の響に大に驚いて吠える聲。門のく  
ぐりを明ける音と砂利を踏む靴の音。千代子は  
夢中に玄關へかけ出して障子を明けた。風の  
ない凍つた夜の中にパツとさす家の燈火に良人  
は稍驚いたやうに、

「千代子、まだ起きてゐたのか。とすぐさま大  
股に式臺へ歩み寄つた。

「あなた。」と聲をふるはして言つたとき、千代  
子は良人が不意を喰つてすこしよろめいた程力  
まかせに抱きついた。ぱたりと西洋襦がはずみ  
を打つて石の上に飛ぶと共に、女優が男の胸  
の上に崩れかゝる。帯はいつか解けて羽織の下  
から引ずつてゐた。

俊藏は眉をひそめて、「おい、誰か來るとい  
ふんよ。」と言つたが、何と思つたかすぐに優しい  
調子に變へて、「千代子、さぞ寒かつたらう。」

「輕く千代子の背を叩きながら、とても訓をぬ  
ぐ事はできないので俊藏は千代子の身を抱きか  
かへながら土足のまゝ玄關の上へあがつて、無  
理に胸の上から千代子の襟を開放して援助しよ  
うとした。

「いゝ。」と千代子は駄々をこねる赤兒のやう



も居られないやうな心持になつて来るのであつた。

耳元近く目白の鐘が夜半過の一時を打つたのも早や小半時も前のことである。女中は件働に小間使の二人とも十二時を打つた時先へやすまして、千代子はたつた獨り、八疊の間に敷延べた夜具の傍の置炬燵に、二月半の夜の寒さを凌ぎながらまんじりともせず良人の歸りを待つてゐた。

今朝出掛けに良人は横濱まで行く用事があるから歸宅はおそくなる、待たずに先へやすんでゐるやうにと言つたのであるが、どうしてなかなか先へ寢られるものではない。夜の静になるにつれて口はいよゝ泣えて来るばかり。心あたりの待合へも既に二三軒電話をかけて見た。

氣がいら立ち目が洩えるにつれて千代子には良人の横濱行がだん／＼虚言らしく思はれて来る。——忽ち又打つて變つて良人の身に何か間違でも出来たのではあるまいか。汽車が常車に間違でもあつたのではなからうかと居ても立つて

あたりには都新聞に報知やまと朝日などの夕刊が五六種と、演藝雜誌の外に歌集や小説も幾冊となく散亂してゐるが、いづれも符の口から讀みあかしぬいた後である。羊羹もお煎餅も黒砂糖のブツ切餡も水菓子も、もう甘ずつばいおくびの込み上げて来る口へは入れやうがない。針仕事は晝一日分の凝るほどしてしまつた。良人の部屋の掃除は疊のさ／＼くれまで捲つて机の拵斗までも片づけた。廁の手拭も取り變へてしまつた。電気燈の球と笠も拭いてしまつた。

もう今更氣をまぎらす仕草はない。時計の音が恐しいほど音高く耳につくと共に、深夜の寒氣が剃刀で撫でるやうに襟元に浸み渡る。さつきから幾度火鉢へ炭をついだかわからない。その皮にどれほど鐵瓶へ水をさしたかわからない。炭取はまたしても空になつた。炬燵の火も今はどうやらぬるくなつて來た。

千代子は火鉢へさした火箸を取つて、掛蒲團

をまくり埋めた火を揺立てようとする、櫛の上から琉球絨に浴衣を重ねた良人の寝衣の片袖が、だらりと女優鬘に結つた千代子の顔の上に落ちかゝつたので、靜にそれをのけようとする、どうしたはずみか、袖口の縫綴が櫛のピンにからまつてなかなか取れない。稍しばらくしてやつと顔を上げた時、千代子はきり／＼歯ざしりをして、良人の寝衣を、まかせに引摺り出し、びり／＼と半分ほど其の袖を引き破つて夜具の上に叩きつけた。あまり力一ぱい叩きつけたので、千代子の中腰に立上つた身體の中心を失ひ、寝衣と共に前へのめつて倒れた。そのまゝ千代子は寝衣にしがみついて嚙に聲を立てて泣き出した。

千代子は今年二十五である。三年前二十二の時、其の父とは同業の辯護士藤川法學博士の長男藤川俊藏の妻になつた。俊藏は市俄古大學の出身で父と共に關口の屋敷から南佐桐本町の法務事務所に通つてゐたのである。最初信用町の交詢社に催された音楽會で見合をした時、俊藏の方では千代子のすりりとした後の殊に撫肩の形がよく、眞珠とルビイの指環をけめた指先の長くしなやかな處は日本の女には珍らしいやうにも思つた。また其の面長の色白く鼻

もと俊藏の父は辯護士には似もつかぬ極めて質素な學者肌の人物だつたので、南佐桐木町の事務所の如きも明治初年に建てられた煉瓦造の二階家を借りて内だけ造作を變へたばかり、年々近所の家屋が改築されるにつれて今では随分見すばらしく見えて來たが、然し其の業務に至つては、さすがに人望と信用のあつた老博士が多年基礎を固めて置いたおかげで、言はず若輩なる俊藏の代になつても以前と少しの變りもなく、二三の大會社や商店から法律顧問の依頼をも其のまゝに受續いてゐる。

尤も事務所には父のゐた時分から既に年輩の辯護士が二人通勤してゐる。二人共とは父の家の學僕であつたが、その一人の佐竹といふのは學生の頃から秀才といはれた男で、博士にならぬが私立大學の講師をも囑託されてゐる。又熱心な基督教の信者で世間にも名を知られ同業者の間にも重じられてゐる處から、藤川の法律事務所も佐竹の居る間は信用の落ちる氣遣はないと評するものもある位であつた。これは俊藏もない／＼氣がつかないのではない。俊藏はもと／＼高等學校の入學試験に合格する事が出来なかつた處から、私立の或大學を中途でよして米國へ留學したやうな譯なので、謹直

な佐竹の目から見ると、業務に對しても決して怠るといふ程でもないが然しまた熱心ともいはれない。まづあり來りの事務をあり來りのやうに取扱つて行くといふの外はない。

佐竹は殊に俊藏が職業以外の宴會や俱樂部などには誘はれれば大抵出掛けて行きながら、肝腎な辯護士大會を初め政治的社會的使命を帯びた集會にはほんの善理一片に顔を出すだけで何の意見も吐いた事はなく、唯にや／＼笑つてゐるばかりなのを見て、今の世の中は何につけ最う少し積極的に乗り出さなければ損だからと、いつもそれとなく忠告したり激勵したりするのであつた。議員選舉の候補にも其の成敗は兎に角一度は立つて見た方がよくはないかと勧めた事もあつた。辯護士などといふ商賣はいつも世間に名を知られる機会を逸しないやうに氣をつかつてゐなければならぬといふのである。この意見に對して俊藏は決して反對した事はないが、さりとて實行しさうな風も見せないであつた。

事務所にはもう一人鶴崎といふ辯護士がゐる。矢張以前は藤川家の書生であつた。女中の袖を引張る癖があつたので度々博士の夫人に心配をかけた男だけになか／＼の遊手である。

鶴崎は俊藏の優柔不斷な事を貴族的だと責めてゐる。吾々苦學生のやうに生活と奮闘することの出来ないのは無理もない話だと同情らしいことも言つてゐる。老先生がウンと財産を作つて置かれたのだからもうそんなに奮闘する必要はない。既に恆産あるものが働かずにゐるのはつまり此れから恆産を作らうとするものにそれだけの餘地を残す理窟だから、それも云はゞ社會奉仕の一端かも知れぬと面と向つて冗論もいふ。又或時は、どうです、俊君。今日あたりは、お宅の方さへお舊友がなかつたら行つて見ようぢやありませんか。などと正面から遊びをすゝめる事もある。

然し俊藏は謹直な佐竹の忠告通りにならぬいやうに、鶴崎の譏諷にもおいそれと乘つた事はない。

一何だね君、待合も座料を取るならもう少し疊を掃除して置いてもらひたいね。足袋の裏が汚れてたまらない。と言つたり、藝者も物價につれて實に高くなつたものさね。或は又、今時分行つたつて確な藝者は來なからう。などと文句だら／＼、結局行くにしても自分から進んで行くのではない。附合で己むを得ないといふやうな態度をするのが俊藏の癖であつた。

に首を振り、「お義理にそんな事して下さらなくつても能う御在ます。」

「そんなに怒るもんぢやないよ。酒くさくも何ともないぢやないか。今日はお前存むどころの騒ぎぢやない。」と蒲上靴の紐をとき始めて獨言のやうに、「終列車に乗つたもんだから、萬世橋にやタクシも何もないんだ。實に驚いたよ。やつと見つけて乗つたら江戸川でバンクさ。こんな晩に晩になると思へば初めつから家の車をよこして貰ふんだつた。」

「いつだつてお迎の車はいらないんですから。いつそよした方が宜うござんす。ほんとに無駄ですもの。」

千代子は矢張り獨言のやうに言ひながら式臺に置いた良人の折革包と自分の落ちた櫛とを取上げたが、その時誰か起きて来るやうな物音がしたので、二人はそまゝ靜に寢部屋へ還入つた。

隙子が一枚開放しになつてゐて、炬燵の蒲團は裏返しに縁側へ發出され、夜具の上には寝衣がさんぐになつてゐる。この有様に驚いたのは俊藏よりも寧ろ千代子自身であつた。俊藏にはこの位の粗糲はもうさして珍しくはない。千代子は玄關先の寒い風に當つて大分氣を靜つた今となつては、流石に氣ままりもわるく、又

何ぼ何でも良人に對して申譯がないやうな氣になり、座敷の入口の屏風の前に立ちすくんで崩れた鬚を押へながらそつと俊藏の氣色を窺つた。

俊藏は外套をぬぎすてながら輕く笑つて、「女中が起きてゐなくて仕合だ。乃公はい、がお前が笑はれるからね。」と蒲團のない炬燵椅を却て便利だといふやうに腰をかけてボタンをはづし始めた。

千代子はしをく歩み寄つて良人の膝に手を載せ、「あなた。堪忍してください。」

俊藏はこれで事が済めばまづ無事だと思つたばかりではない。いつも服れぼつたいやうな一重險の眼に一ぱい涙をたへて、ぢつと見上げる其の横顔と髪も姿も亂れた形、艶かしくもあれば又氣の毒にもなつて、膝に縋つた其の手を握り、

「お前、どうしてそんなに淋しがるんだらう。途中で電話をかけようかと思つただけれど、

外に人もゐたし用もあつたもんだからね。」

千代子の眼からは長い睫毛をつたはつて涙が一滴頬の上に流れた。俊藏は千代子が其の袂を取るより早く片手でハンケチを取出して拭いてやりながら、

「千代子、もう早くおやすみ。洋服は明日の朝でいゝよ。いつまで起きてゐても仕様がな。風邪を引くよ。」

「いゝえ、大丈夫です。あなたに衣裳をあつためませう。これぢや召されませんもの。」

千代子は良人のハンケチを取つてすつかり涙を拭いてしまふと、忽ち別の人のやうになつて、炭取と鐵瓶とを兩手にいそ／＼と隣の茶の間の方へと立ちかけながら振返つて、

「あなた、何にも召上りたくはありませんか。」と言つた。

## 二

俊藏は毎朝九時に關口臺町の家から抱車で南佐栢木町の法律事務所へ通ふ。時々飯田橋から有樂町まで院線電車に乗つたり、また江戸川端からあまり乗客の雜沓しない時には市内の電車に乗ることもあるが、いづれにしても時間がかゝつて不便な處から、いつそ他へ引越したいと思つてゐた。然しそれは控訴院の判事をしてゐる頑固な叔父が、故なく父の舊邸を賣るのはよくないと反對するのでまだ其の儘になつてゐる。いまだに自動車を買入れないのも矢張この叔父の手前を憚つた爲めであつた。もと



るやうです。

「兎に角會つて見よう。と頗で隣の間へ通すやうに言ひつけて椅子を立ちたいして經驗がなくていいでせうな。電話の取次さへはつきり出来たら。」

「さうさ。」

「給料も先の位でいいでせう。尤も會つて見た上の事です。」

隣の應接間へ通る覺音がしたので鶴崎は咳拂をしなが事務室を出て行つた。

俊藏はやはりストオガの傍に立つて窓の外を見てゐたが、電話の鈴の鳴り出す音に壁際へ立寄つて受話器を取り、

「もしもし……あ、千代子か……私だよ……」

これから出掛けるのか……さうか……もう別に用もなささうだから、わたしも時間を計つて行かう……それでは左様なら。」

俊藏は前々からその日は妻の千代子と帝國劇場へ行くことになつてゐたので、電話を切ると共に時計を見た。

### 三

幕が下りると舞臺の横手に休憩二十分といふ掲示が出た。幕毎に席を立つ癖のついた帝國劇場

場の見物は、そろそろ廊下へとあふれ出して思ひ思ひに場内の飲食店へ入込む。俊藏と千代子も群集に押されながら地下室の食堂へおりて行つた。然し食堂はもう大抵ふさがつてゐる。

あいてゐるのにはお客の名をい／＼しく書いて先約の机が立てゝある。

千代子は入口の階段から中を見渡して二掛けられさうもありませぬね。二階の方へ行つて見ませうか。」

「どこも込んでゐるだらう。まあ這入つて見よう。と俊藏は駄目とは知りながら階段を降りた。

俊藏は獨りこの帝國劇場ばかりには限らない、芝居はどこへ行つても食事の不便なものと粗惡なのに閉口してゐる處から、今日ほあらかじめ事務所を用ゐる前、時間も丁度三時過ぎた頃であつたのを幸風月堂からサンドキツチを取寄せ、鶴崎と二人で黒ビールを一本飲んで來たのでまだ空腹にはならない。それに又俊藏はさして芝居がすきといふではない。來て見れば相應に面白いと思ふ事もあるが、自分から進んで見ようといふ氣はないので、芝居見物はまづ細君を慰める良人の義務としてゐるのである。

「よしませう。あなた、後でまた來ませう。」と

千代子は良人が洋服の袖を引張つた。千代子はボオイが自分等二人が立つてゐるのを見ても一向に空いた食卓を見付けようとせず、又俊藏が二三度通りがかりのものを呼んでも、急いさうに行つてしまふので、殊には椅子にかけてゐる人達から一度に見られるやうな氣もする處から一度下りた入口の階段をまた上りかけた。

その時廊下の方から此れも其の良人らしい人と連立つた二十四五の丸髭に結つた女が千代子の姿を見て、

「あら、しばらく。もうお済みになりましたの。」

「いゝえ。あんまり一ぱいですから。」

「それぢや、あなた。わたくし達のテーブルが取つてある筈ですから、おいやでなかつたら、御一緒になさいました。わたくしと家の人だけで御座いますから。」と丸髭の婦人は千代子と俊藏の二人のみならず其の良人の意向をも伺ふやうに等分に三人の顔を見た。

「ありがたう御座います。後でもよろしいんですよ。と千代子も亦俊藏の様子と共に相手の良人の様子を見た。

二人の顔はもと／＼女學校からの友達と同じ年に卒業して、各結婚してしまつた後女學校

然し無崎は兎に角クリスチャンの佐竹とは違つて何の遠慮もいらない處から俊蔵には却て打明ければなしの相手になる事少くなかつた。

「今日は何だか眠くていけない。昨夜はまた弱らせられた。」と俊蔵はその日丁度佐竹が早湯飯をすませて私立大學の講義にと出掛けて行つた午後のこと、仕事も大抵すんでしまつたのでデスクを向合せにした無崎へ話しかけた。

何やら謄寫版で摺つた書類を見てゐた無崎は伸をするやうに反り返つて兩手に頭を抱へながら、「昨夜お出かけでしたか。」

「無崎へ呼ばれてゐたぢやないか。歸りの電車で辰鹿と桃助とそれからまだ二三人居たと俊蔵は次の間に給仕の書生か誰かゐるはせぬかと首を傾しながら椅子を立つて、無崎の芝居へ行つた歸りだつていふのだ。新橋へ來てから鳥渡寄つたもんだからね、家へ歸つたのはとうとう一時過ぎ。非常な低氣壓だつたな。」

「どういふ譯でせうな。そんなに氣になさるんでもいゝんですがな。家の喧と比較しちや失禮かも知れんが、家の奴などは今ぢやもうぼけて居ますがね、先の中でもさうやかましく言ひませんでした。尤も僕があんまり烈しくやるせぬで痺してしまつたのかも知れません。」

「君のところは子供が大勢だからね。餘程かふ。」とワスストオヴの傍へ竹立んで熾巻に火をつける。

「お宅ではまだどうして出來ないんでせう。僕の知つてゐる限りでは、あなたはまづ健全でせう。奥様の方があんまり神經質のせゐかも知れませんな。」

「去年あたりから殊にはげしくなつたやうだな。少しおそくなるとどうもいかん。」

「それぢや減多にお屋敷へは何へませんな。暫く御無沙汰して居りますが、大先生の時代から信用のない事は夥しいものですからな。」

「もうそんな事はない。機嫌のいゝ時はさげた事を言つてゐるから。」

「さうですか。然し御婦人のさげたのは實は當になりません。心からさげてしまへば却てさげた事なんだ殊更に言はないやうになるものです。」

「うむ。それア眞理らしいね。」

「そこへ行くと女よりも男の方が餘程正直です。うまく聞かれると男は調子に乗つて泥をはいてしまひますがね、僕の経験ぢや女にほんとの事を言つちやいけませんな。見え透いた虚言でもかまは無いから、嬉しがるやうな事を言つてゐるのにかぎりませんな。」

「はゝは。それで君の家庭は平和なんだね。」

「平和といふ事もないのですが兎に角外障にもなりませんな。僕は酔拂つて歸らうがよし又泊つたにした處が決して遊びに行つたとは言はないのです。その方がたしかに結果がいゝです。」

「佐竹君の家もなかく猛烈だつたさうだね。此頃はもういゝだらうが。」

「あれは例外ですな。あの逆直家をつかまへて何の彼と言つてゐたんですからな。あゝなつちやもう病氣ですな。どうも。」

椅子段を上つて來る麻裏早履の音がして十四五になる書生が扉を明けて、

「女の人が來ました。」

出し抜に言はれたので俊蔵も無崎も驚いたやうにその力を返つた。

「あの新聞の廣告を見て來たんださうです。」

「何だ。募集した事務員かと無崎は書類の上で落ちた巻煙草の灰をはきたながら、それを片寄せて、「どんな女だ。先にゐた人見たやうな女か。」

書生は困つたやうな面持で、もつと疲せてゐ

供が出来るとどうしてもふけますからな。」

「ほんとで御在ますよ。全く千代子さんはお變りになりませんね。いつ見ても羨しいやうなお髪ですわ。」

「あなたこそ。ほんとにいい恰好ですわね。玉子さんにお目にかゝると、わたしもほんとに日本髪に結つて見たいと思ふんですけれど、家の近處にはいい髪結さんがありませんし。」と千代子は首を仰して隣の椅子にかけた玉子の丸髻を後の方から覗くやうに見ながら、

「失禮ですけれど何處でお結び遊ばすの。」

「新橋で御在ます」と玉子は一寸髻を撫でながら髻の形を見せるやうに横を向きながら、「私の方から出掛けますけれどなか／＼込みますから一仕事で御在ます。」

「それでもお宅からならお近いぢやありませんか。築地で御在ませう。」

「築地でも、あなた。明石町ですから近いことも御在ません。」

ボオイがやつと食物を持運んで来た。

幕の明く知らせのベルが鳴つた時、各自の席は二階と下とに分れてゐたので二組の夫婦は「また後程。」と言ひながら廊下で別れた。次の幕間にまた席を立つた俊藏は千代子が化粧室

へと這入つて行つたので、一人廊下の人中に立止つて煙草をのんでゐたが、二人の雛妓が手を引合ひながら行過ぎるのを何心なく見送る途端、出口へ近い廊下の壁に背をよせ掛けるやうにして、誰やらハイカラに結つた女と話をし

したので、反対の方へと歩いて行くと、正面の出入口からつゞいた廣い廊下の方から千代子と玉子とが繪葉書と簪とを買つて歩いて来るのに出會つた。

#### 四

五六年前までのこの劇場の舞臺に出てゐた池原龜子といふ女優に相違ない。其の時分俊藏は新橋邊の宴會で度々その女優とは口をきいた事もあつたので、今川橋院長が話をしてゐたと少しも不思議な事はない。けれども俊藏は歩きながら不圖龜子が女優をよしたの洋行歸りの或ドクトルと深くなつて子供が出来た爲めだとかいふ噂のあつた事を思出すと共に、何の理由もなく其のドクトルといふのはあの川橋君ではないか知らといふ氣がした。急に其の場に立止ると同時に女優は肩掛を掛け直しながら人込を分けて急ぎさうに出口の方へと出て行つた。

俊藏は自分が遠くから見て居たと少しも氣がつかぬらしい川橋院長の様子に、却て後から行つて呼びかけるのも氣の毒なやうな心持がしたので、反対の方へと歩いて行くと、正面の出入口からつゞいた廣い廊下の方から千代子と玉子とが繪葉書と簪とを買つて歩いて来るのに出會つた。

「それでもお宅からならお近いぢやありませんか。築地で御在ませう。」

然し二人とも結婚して、一人は早くも母親になつてから、偶然帝國劇場で互に其の良人達と知合になつて見ると、二人は以前よりも却て一倍心安くなつたやうな氣がした。それと共に過去つた娘時分の話もしみ／＼として見たいやうな心持になつて、四五日たつた或日の午後、まづ玉子の方から先に千代子を尋ねに行



の同窓會で一年に一度は會ふ機會がある。今日のやうに偶然多居や三越などで會つた事もあれば、同じ電車に乗り合した事もあつた。然し結婚した先へはお互にまだ尋ねに行つた事はなかつたので、従つて其の良人達にはまだ知合ひにはなつて居なかつた處から、どうしたものかと躊躇した譯である。

良人の方でも一人は辯護士一人は病院長といふ異つた職業柄、各自その細君からの話でわづかに其の名前位を知つてゐるのに過ぎなかつた。然し女同士の親密な様子に自然と遠慮なく先に口をきつたのは院長である。

「御一緒にいただきます。さ、どうぞ此方へ。」

「それぢや御迷惑でもさう願ひませう。」と俊藏も快活に返事をした。

院長はボオイを呼止め其の案内で、川橋様と先づの机をつけたずつと奥の方の食卓へと俊藏夫婦を導いた。

「初めてお目にかゝります。お名前は承知して居りますが……。」

「いや、わたくしも、今日はい、機會でした。」

二人は挨拶して椅子につきながら細君達にも一寸會釋して明い食堂の灯にそれとなく其

の様子を眺めた。男の目には他人の細君は大抵自分のものより一段よく見えるが常として、川橋院長の眼には千代子が裾に模様のある濃いオリイブ色の紋付に荒いお召の二枚襷を着た姿は舞臺に見る女優よりも晴れやかに艶麗に見えた。それと同じやうに川橋の細君玉子の、年にしてはすこしシミ過るかと思はれる藍縞小紋の羽織に飛白縞の金紗お召の二枚襷、藤色の手柄をかけた少し薄手の丸鬘は、俊藏の眼にはいかにもしとやかに可愛らしい女のやうに映じた。

それも無理ではない。二人はまるで異つた型の女である。千代子のすらりと瘦立なのに對して玉子は十四五の小娘ほどの身長しかなく極く小作りの女で、顔も手先も身體に應じて皆小さく出来てゐるが、然し肉付は却て千代子よりも豊であるらしい。皮膚のこまかい色の白い同顔の頬は物言ふ毎に嚙めるほどふつくりとしてゐるし、額は二重のくまゝり額である。かなり衣紋をつくつてゐるが詰り翳が後の襟元へつかへるので頸も短いらしく、何處となしに精巧な御所人形を見るやうな心持のする愛嬌に富んだ女である。

良人の院長も變り地のモオニングコートが長長と見える程身長も俤い肥つた人で、小兒科專

門といふ其の商賣柄かも知れぬが始終にこ／＼してゐる圓顔は、額の廣い上に髪も大分禿げ上つてゐるので一層圓く見える。然しその血色や輕快な身動から年はまだ四十にはなるまい。元氣のいい調子で、

「藤川さん。何か上りませんか。日本酒はいかがです。何か飲むものがないと淋しいですな。」

「私はウイスキーが何かにいませう。」

「さうですな。とてもこの様子ぢやゆつくり一杯といふ譯にも行かなさうですな。」と院長は椅子から少し腰を浮して頻にボオイを呼ぶ。

「玉子さん。赤さんはさぞかはゆく成りでせうね。」

千代子の言葉をも機會に俊藏も初めて玉子に話しかけた。

「おい／＼におなりです。」

「丁度二つになりました。」と玉子も良人と同じやうに始終にこ／＼笑ひながら、牛乳ばかりでやつて居りますけれど、それでも手がかりまして仕様が御ません。」

「いや、それやお楽しみです。」

「お宅では。お幾人です。」と院長がきいた。

「まだ一人も御在ませんの。」

「さうですか。道理でお美しい筈だ。女は子

たらとてもお留守番はできませんわ。」

「お宅はさぞお暇かで御在ませうね。」

「病院と一緒で御在ますから一日ごたくして居ります。そのくせ別に用といふ用もないんですけれど……」言ひながら玉子は再び椅子に腰をかけ、ほんとに何處も彼處も綺麗にお掃除が出来て居りますね。よつぽどマメでゐらつしやるんですね。感心してしまひました。この刺繡もレヌも皆あなたがなすつたんでせう。」

「一日用が御在ませんもの。子供はありませなし良人一人きりで……それに夜がおそう御在ますからね。」

千代子はいつぞや良人の歸りの晩かつた時蒲團の刺繡をしてやつと氣をまぎらした事があつたので、何の氣もなく口に出して、すぐに心付き少し頬をも赧めながら玉子の顔を見たが、すると玉子は却て相手の言葉に釣り出されたらしい様子で、

「宅でも随分おそう御在ますの。然し何か言つても仕様が御在ませんから黙つて居りますけれど……」女はほんとに損で御在ますね。」

かう言はれると、片栗の強い勝氣な千代子も今は兎や角反省してゐる暇はない。日頃誰にも訴へる事のできなかつただけに今はつもらいつ

もつた胸の思惑を一時に打明けてしまひたいやうな氣になつた。

「ほんとに女ほどつまらない見じめなものに御在ませんよ。とちつと玉子の顔を見ながら、

「さうして見ると家ばかりぢや無いんで御在ますね。どうして男の方はみんなさうなんで御在ませうね。」

「それも、あなた。時たまお遊びにいらつしやる位の事なら、それア男の方ですから仕方がないと諦めますけれど、内證とお妾なんぞ置いたりなんかされますと、ほんとに心持がわるう御在ます。」

「お妾がお有りあそばすの。まア。」と千代子はわが事のやうに目を瞬つたが、先日お目にかゝつた時の御様子ぢや、そんな方のやうには見えませんけれどねえ……」

「わたしの片付かない前から深い關係があつたのだといふ話なんで御在ますよ。子供もあつたとかいふ噂ですから今更どうしやうも御在ません。」

「まアお子さんまで。」と言つたが千代子は急に動悸がして来るやうな氣がしたので胸に手を當てながら、「やつぱり何處かの藥者……」

ますの。愛宕下に圍はれて居るので御在ます。」玉子のはなしを聞いて居る中千代子はますます不安な心持になつて来た。良人の俊藏にも、今までこれぞといふ藥者や女優の噂も聞いた事がない處から思合せて、もしやさういふ隠し妻がありはしないかといふ疑念が起つて来たからである。

「玉子さん。あなた、最初にどうしてその事を御感付きになりましたの。」と千代子は参考の爲めにまづかういふ質問を出した。

玉子は迷入つた事件の何から先に話さうかと思索するらしく上目づかひに其の眼を瞬きながら、何しろ上手に隠しぬいてゐたんで御在ますからね。つい去年の暮やつとわかりましたの。大阪へ用があると申しまして出て行つたので御在ますよ。大抵月に二二度は病家や何か用をこしらへて長い時は一週間も旅行するんで御在ますね。その時は良人が立ちました其日の事なんで御在ますよ。家の堀ひが御在ますから女中を銀座の銀行まで使にやりますと、ぢきに歸つて参りまして、唯今銀行で綺麗な女の方が旦那様のお名前の書いてある小冊子を持つてお金を取りに来てゐらつしやいましたと言ふぢや御在ませんか。どうしてそんな事がわかつたのかと

つた。

二月も早や二三日を餘すばかりなので、千代子は丁度晝飯をすました後、小間使と仲働を手助けに土蔵から婦人形を運出して、茶の間の床に鋪段を組み立てゝ居るところであつた。

「あら、どうしたらいいだらう。髪もこんなだし、手もまア眞黒……。」と千代子は土蔵の中の際にまみれた兩方の掌を膝の上にひろげて眺めたが、すぐ急しうな調子で、

「應接間へお通し申してね。火鉢やお茶を持つて行く前に瓦斯ストオプを焚くんですよ。人氣のないお座敷は寒うござんすからね。」

いつもの癖として千代子は微細い處にまで氣をつかして一人でせか／＼しながら、茶の間に残つて鋪の箱の塵を拂つてゐた仲働のお由を顧み、

「由や、その箱はそのまゝにしてお置き。また後で手傳つて貰ふから、早く手を洗ひお湯を持つて来ておくれ。」

千代子はいそいで手を洗つて羽織だけ着換へ、その紐を結びながら應接間の方へ立つて行つた。

應接間は千疊の日本座敷へ埒段通を敷詰め柳の枝で編んだ小判形の卓子に揃ひの版掛椅子四

五脚、瓦斯燵の側には長椅子が据ゑてある。

玉子は椅子にかけて待つてゐる間それとなく見廻す座敷の様子。床の間にいけてある小米櫻に木瓜の花は自分達が學校にゐた時分替つた流派と同じである事から、たしかに千代子が活けたものだと思つた。綺麗にいろ／＼な物を載せた書棚の上の一輪挿しに、白いカーネーションの花のさしてあるのを玉子は直に以前から千代子の大好きな花であつた事を思合せた。長椅子の上に小蒲團がいくつも載せてある中に千代子が慰みに縫つたとおぼしい花形の刺繡をしたのが目に立つ。取分け良人のネクタイらしいものを丹念に縫合はして作つた小蒲團を見た時、玉

子はいかに千代子がこの家の主婦として幸福平和な月日を送つてゐるかを想像したのである。

閉めきつた障子には二月木の靜な日光が庭木の影をうつしてゐる。下町に住む玉子の目には障子の紙の座にも汚れず新しいまゝになつてゐるのも何となく物珍しいまで心持よく思はれる折柄、さら／＼と竹に戦つ風の音と共に、見えない庭の方で小鳥の囀る聲。

「ほんとにお静でよう御在ますわね。」と玉子は千代子の姿を見ると、挨拶よりも先に住居の事をほめた。玄關前にある山栢の花の見事なこ

とをほめた。

「お庭はさぞお廣いで御在ませうね。」  
「いえ、そんなでも御在ません。冬中は掃除も何もいたしませんから。」と言つたが、然し千代子は園藝の趣味もあり、又何事によらず人まかせにはして置けない性質から寒い日でも折々草箒を持つこともあるので、少しは得意の氣味で障子を明けて庭を見せた。

庭に多年男の博士が存命中絶えず植木屋に手入をさせてゐたので、今では全體に古びて錆がついてゐるばかりか、年々生える樹木に隣の家

の屋根や垣根もかくれ、往來の電信柱も遮られて見えない處から一層幽遠に見受けられた。

梅は日當のよい縁先に早やちらほら咲きかけ、手水鉢の鉢前には南天の實が日の光を浴びて染めたやうに赤く輝いてゐる。

「まあ、ほんとに氣がせい／＼しますわね。」と椅子から立つた玉子は障子陰に歩み寄つて暫く日を庭に移してゐたが「あんまり靜かすぎて夜なんぞお寂しくはありませんか。」

「馴れて居りますからそれ程にも思ひませんですよ。」

「わたしでしたら、先から臆病で御在ますからね、晝間はよう御在ますけれど、夜雨でも降ッ



「うむ。と言つたが俊藏は矢張り枕の上にその頭を載せてゐた。

「いくらお留めしたいと思つたつてね。わたしにはそんな我儘を言ふ資格がない位の事はね何ほ馬鹿でもわかつてますからね。安心してゐらつしやいよ。」

「もう御免だよ。厭味はよせといふのに。」

「お引留めしないからいゝ事よ。少し位いゝ事よ。」

「あんまりよくもないよ。折角遊びに来てさうぞ厭味を言はれてさ……。」

お宅へお歸りになつて奥様にですか。あゝ口惜しい。

「あ痛いッ。亂暴だなア。」

「痕がつくと大變でしたわね。」

「それこそ罪惡露顯だぜ。」

「ほんとに大丈夫か知ら。御免なさい。」と辰龍は男の二の腕に残つた自分の齒の痕を撫でながら眺めた。

「察しるがよいよ。僕の身にもなつて御覽。道瀬がない。」

「口先はつかり。それでも今夜は珍らしく電話がかゝらないことね。」

「今夜は有樂座へ行つてゐるから。」

「あらさう。何があるの。」

「研精會か何かだらう。」

「それぢや十一時頃までいゝわね。たまだからほんとにさ。少しゆつくりしてゐらつしやいよ。」

「十時としよう。その代りこの次は晝間から来よう。」

「えゝどうぞ。お氣が向いたら。當にしらずに待つて居るわ。」

馬鹿に信用がないんだな。」

不斷の仕付がよくないからよ。女は正直ですからね、何でも初が肝腎なのよ。」

「それぢや初ツからこんな正直なお客はありやしない。洩れない理由もちゃんと初ツから打明けてあるしさ。公明正大なものだ。」

「まつたくね。お宅の首尾をかこつてにして、わきへ行らつしやるやうな、そんな悪い事は決してなさいませんからね。」

「おや、妙なことを言出したな。」

「今までわるいから黙つてゐたのよ。然し随分惜しかつたわ。」

「日本橋の一件ならとうに止めちまつたから何と言はれても平氣だ。」

「虚言はつかり。あなたの方がよす氣でも先が

承知しませんとさ。ちやんと知つてますよ。

「それでもよしたものは止したと言ふより仕様がなないだらう。日本橋の人に聞いて御覽。」

「どうしておやめになつたの。」

「別に理由はないさ。もとゝ何でもないんだから。」

「あんまり仲が良過ぎたせゐでせう。お互に痴話がかうじたのね。さうでせう。」

「何をいふんだ。實はさう方々遊び歩いても居られないからな。それでよししたのさ。」

「フウさん、一體あなた幾人お馴染がおあんなさるの。」

「一人きりさ。お前だけだよ。」

「よして頂戴よ。誰がほんとにするもんですか。」

「そら御覽。いくら眞實の事をいつても皆うそにしてしまふぢやないか。冗談は置いて全くもうそんなに遊んで居たくないんだよ。日本橋は初から義理で行つたのだからね。待合も義理。

藝者も義理。お客もあゝなると辛いさね。」

「義理であの位なら、どうでせう。義理でなかつたら大變ね。」

「まづお前と乃公見たやうなものだらう。来るたんびさんゝ厭味を言はれたがら懲りずに来

聞きますと、銀行の窓の處へ並んでゐましたから何の氣なしにその方の小切手を見たのだといふんで御在ます。知れる時は可もかも一度に知れてしまふもので御在ますよ。いつもぼんやりした女中のくせに其の時はあなた、其の女の人が小切手の裏へ名前と所を書いてゐるのまで、家の女中がすつかり御を見て忘れずに覚えてゐたんで御在ませう。もつとも田村町に丁日だけて番地は分らなかつたんで御在すがね、池原龜子といふ名前が分つて居りますし、先から怪しいと思つた事がちよいと御在ましたからね、その日の晩そつと出掛けて交番や何かで聞いて、とうとう探し當てましたの。」

千代子は知らず／＼椅子を前へ進めた。一門はありましたけれど格子戸づくりの二階家で御在ましたからね。うちの人の聲も聞えまして子供達の泣く聲もみんな聞えましたの。玉子はこのまで語りつけて咽喉が乾いてしまつたか頻に茶を飲みながら俯向いてしまつた。

「あなた。それからどう遊ばして。お宅がお歸りになつてから其の事をさう仰有いましたか。」

「どうしたらいいだらうと思ひましてね。叔母の家へ相談に行きましたの。實家へ行つてそんな話をするのもいやで御在ますからね、心安い

叔母の家へ参りまして其の話をいたしましたと、この場合は我儘に我儘をして事を荒立てゝはいけないと申しますの。女の方から強ひて夫のわるい事をあばき出したやうに思はれると却て男は意地になるものだからとさう申しますから、萬事叔母にまかしましたけれど、今ぢや、あなた。その叔母ももう呆れ返つて居ります。わたくしとその後は随分面と向つてひどい事も言つてやるんで御在ますよ。そのせゐですか其後はあんまり泊つては來ないやうになりましたけれど、やつぱり手は切れませんの。」

「玉子さん、それでもあなた。ほんとによく我慢してゐらつしやるわね。お察し申します。」

「考へるとしみ／＼情無くなりますけれど、仕様が御在ません。今更わたくしの方からはどうする事もできないのを承知の上でして居るので御在ますからね。さう／＼煖餅らしい事を言つても却ていやがられるばかりでせうし……。」

「ですけれど、あなた、良人の品行ばかしは外のこととはちがひますからね。」

「わたくしの宅なぞから見れば、ほんとに此方のお宅などはお羨しいやうですわ。」

「傍から見ればさうかも知れませんが、内へ這入つて見れば同じ事で御在ますよ。外で勝

手なことをして來ながら少し何か申しますと、すぐにヒステリイだの何たのと反對に攻撃ばかりいたしますからね。男には女の眞情はどうしてもわからないもんだと見えますわね。」

「何にも知らない時分の方がよう御在ましたね。もう一度學校に行つてゐた時分のやうな心持になつて見たいと、しみ／＼さう思ふことが御在ます。」

「全くですわねえ。」

二人は顔を見合して同時に深い息をついた。静な庭の方で鶉が啼いてゐる。

## 五

「あらまた時計。いけませんよ。」と枕元の懷中時計を引寄せようとした男の手を遮り押へたのは辰龍といふ藝者である。

一つ夜具の中に腹帯になつてゐた俊藏はそのまゝ顔を枕の上に載せながら、「時間を見つけていいぢやないか。まだ歸るとも何ともいえない。」

「そんなら時計なんぞ見ないで頂戴。いつだつてちやんとお歸りするぢやないの。え、フウさん。氣がsekからちやんとしてお休みなさいつたら。」

人、事務員らしい若い女が一人隅の隅に乗つてゐるだけなので、佐竹は北國訛の失せない高聲で、

「その中あなたにも何か演説をしていただきたいと教會の委員から頼まれて居るのです。毎月一人づつ宗教家以外の方に社會的知識を得るやうな講演をお願いしてゐるのださうです。」

「何か考へて置きましょう。」と俊藏は生あくびを噛みしめて、然し僕はどうも演説や講演は得意でない。辯護士で饒舌することが嫌ひぢやあ全くいかんと思ふのだがね……」

「いや、眞實の辯論家といふものは却て平素沈黙寡言の人に多いさうですから。」

「それぢや純粋見たやうな元辯論家が望みがないわけだね。と俊藏は唯上の空で應答しながら車内の廣告に眼を移すと、化粧品品の廣告に藝者風の女の顔が描いてあるのを見て、俊藏はいよく辰龍をよすとしたら其の代りに誰を呼んだものかと今まで見た藝者のことをいろいろに考へ始めた。

「あなた。カルノオの雄辯論といふのをお讀みですか。非常に面白いものですな。辯舌といふ平和の武器は徳衆の群集心理を洞察する事が勝利の第一歩だと言ふですな……」

俊藏は佐竹が何か熱心に論じ出したら中途で横箱を入れても無益である。論じたいだけ論じさせてしまふより道のない事を知つてゐるので、「うむ成程、さうかね、さうかね。」と感心したやうに相槌を打つ。それと共に俊藏は今更のやうに佐竹の四角な顔を打眺めた。佐竹は程なく五十だといふのにいつも學生のやうに何か新しい本を讀むと直ぐに感激して、無理遣りにも其の感激を傍の人に傳へようとする。傍の人が別に何とも思はないでも佐竹は決して失望もせず怒りもしない。俊藏は現代の社會に活動するにはこの佐竹のやうな剛直な意志と幾分か神經運鈍な處がなければならぬ、佐竹は能登から出て來た人だ、こんな事を考へてゐる中俊藏は非常に咽喉の渇くのを覺え出した。待合で寄鍋と蒲焼を食べたせゐであらう。

俊藏は神保町の乗換場へ來るまで休まずに話しつづける佐竹の談話に返事はしてゐるが、心の中では家へ歸つたら何か冷めて甘い匂いといふものが飲みたいとその事はかり思ひ詰めてゐた。

## 六

電車の通つてゐる御宿町の表通で車を乗

り捨て、西洋家は屋と藥屋の間の新道を曲つて、川橋院長は兩件ともに同じやうな小さな門橋の二階家づくり、池原といふ藝妓を出した格子戸へ手をかけると、びつくりするやうに景氣よくチリチリンと鳴り響く鈴の音に内から狎の吠える聲。

「入らつしやいまし。急にまあ何ていふお暑いでせう。」と小さな丸髭に結つた五十ばかりの女が院長のぬぐゴム靴を神代杉の下駄箱へ仕舞つた。

川橋は硝子をぬつたまゝ上櫃から續いた鏡の神を明けて下座敷の八疊へ通ると、櫛の若木を二三本植ゑた小庭を前に障子を明け放した縁側には、早くも新しい簾が半卷に下してあつて、その下には硝子の金魚鉢に鐵砲百合が二鉢ばかり、見返る家の内の床の間には菖蒲がいけられ、壁際の衣桁には赤い襦袢をつけたセルの單衣が掛けられてゐる様子。五月の節句が過ぎたばかりなのに亥七はもうすつかり夏らしくなつてゐる。

川橋は縁側近く有合小座蒲團の上に胡坐をかき、鼻を明して寄添ふ狎の頭を撫でながら、「留守かね、母さん。」

「もう歸る時分で御座います。お稽古に参りまし



るやうなものだ。傍から見たら見つともない話  
さ。」

「まつたくな。藝者のくせに厭がられながらく  
ツついてるなんて、全く見つともないわ。」

「いゝ加減にお前もよした方がいゝかも知れな  
いね。」

「何ですフウさん。そんなに私の事が御迷惑  
なの。」

「怒つたのか。冗談だよ。」

「半分は冗談、半分は本気でせう。ちやんとわ  
かつてますよ。私が何か面倒な事でも言やしな  
いかと義理で入らつしやるのはよく分つてます  
よ。ねえフウさん、こんなつまらない藝者でも  
ね、あなたの御迷惑になるやうな事は決して致  
しませんからね。おいやならお脚でかまひませ  
んよ。はつきり男らしく仰有つて下すつた方が  
心持がようござんす。」

「お前の方からさう妙なことばかり言ふなら仕  
様がな。僕の方や何とも言はないのに。」

「口で言はれるより仕打で見せられる方がつま  
いものよ。」

「お前今夜は餘程どうかしてゐるぜ。兎に角そ  
の語はこの次にしよう。今夜はもう勘辨してく  
れ。」

俊藏は階下の時計が十時を打つと女にはか  
まはず先へ起きてさつさと出る友成をした。

この二三日引きついで暖過ぎる程の陽氣  
に、俊藏は車もひつつけずその邊から電車に  
乗らうと歩いて行く道すがら、あの藝者もあ  
いろ／＼な事を言出すやうになつてはもういけ  
ない。氣の毒だがもうそろ／＼河岸をかへる時  
分だらうと思つた。

俊藏の藝者といふものに對する希望は飽くま  
で他愛もなく面白可笑しく遊びたいといふので  
ある。殊更情事の關係なども見透いて輕薄に  
ならない限り又情味を損はない限り何處まで  
も淡泊洒落であつてほしい。男の方からは強  
ひて女の秘密を探つたり暴いたりしない代り、  
女の方からも事の起つた場合あんまりムキにな  
つて怒つたり泣いたりなぞしないやうにして貰  
ひたい。萬事さばけて斯秋がしてゐなければ藝  
者の値打はない。あの辰龍はもう呼ぶまい。そ  
の中待合のかみさんに頼んで綺麗に手切をやつ  
て貰はう。丁度敷寄屋橋まで來たので川向を  
見ると、有樂座にはまだ灯がついてゐた。長鳴  
研精會はまだ濟まないと思える。俊藏は千代子  
よりも今夜は先に家へ歸れる譯だと思ふと、自  
然に氣がゆつくりして、巻煙草に火をつけなが

ら空いた電車の來るのを待つてゐた。

「若先生」とその時後から呼ぶものがあるので  
振り返ると事務所の佐竹靖護主である。

どちらへ。と問はれて俊藏はまさか待合から  
の歸りとも言はれないので、

僕は、と問ひ返した。

「つい其處の教會で講演會があつたもので、  
その歸りです」

「何か演説したのかね。」

「はあ。法律の制裁と國民道徳の精神といふ題  
で一時間ばかり辯じました。先月青年會館で  
やつた演説と大體は同じやうな問題です。」  
身長の低い佐竹は鼻先へ滑つて來る近眼鏡を  
氣にしながら眉の濃い四角な顔を出しどうや  
ら講演の概略を辯じ立てさうな様子に、俊藏  
は折好く來掛る電車を見付けてわざと周章てた  
風で其の方へと駆け寄つた。佐竹もついで電  
車に乗込んだが腰もかけぬ中から、

「兎に角現代の日本人は政治や社會問題より  
もすこし品性を高尚にする事が必要です。も  
少し眞面目にならなければ社會問題も普選運  
動もお話にはならんです。」

電車の中には夜學校の歸りらしい學生が三人  
ばかり、辨當箱のやうな包を抱へた車掌が二

で川橋は言葉を切つたが、然しもうかうなれば是非にも話をしてしまはうと思つたらしく、「二階へ行かう。」

龜子も今は何か覺悟したらしく歸つて来た時の華やかな或儘な風とは變つて、おとなしく男の後について二階へ上つた。

二階は縁側も裏窓も共に障子がしめきつてあつたが、二人は風を入れようとせず又座蒲團も敷かずに暫くは互に顔さへ見合はさぬやうにあらぬ方へと眼を移した。狎の太郎が涎掛の鈴を鳴しながら様子段の上へ顔を出したが、誰

も呼んでやるものがないので途惑ひしたやうにすぐ下りて行くと、隣の蓄音機が常磐津の松島をやり出す。川橋はポケットから取出した

巻煙草もつけべき火がない處から吸口の紙を噛み締めながら、

「龜子、お前まだ……あの桐田と關係があるさうだな。あんなに立派な口をきいて置きな

ら……」

「まあ、あなた。一體誰がそんな馬鹿なことを言ふんでせう。」

「何分かに何をしてゐたか、證據を見せてもいゝ。龜子、お前にはわしの親切が分らないのか。もう子供であるんぢやないか。生活だつてさう

ぢやないか。お前と阿母さんと二人遊んで暮して行けるだけのものはもうお前に渡してある。それにわたしの目を忍んでさういふ事をする

といふのは一體どういふ料簡なんだ。え、龜子、言譯があるなら聞かう。」

「すみません。」

「唯すみませんぢや濟まないだらう。舞臺をよしてから、わたしの世話になつてからお前の不始末はこれで三度目だぜ。」

「もうあなた。そんな古い事……と龜子は袂で顔をかくした。

「ねえ、龜子、一度はあの築地の一件だ。二度目には箱根だ……」

「もうあなた。みんなわたしが悪いんですから。あやまりさへすれば、それでいゝと言ふもんぢやない。佛の顔も三度といふ事があるぜ。何ぼ僕が甘いからッて、さうく踏付けにばかりされたくないからな。」

「でそれからわたしが悪いんです。あやまります。あなた。ほんとにわたしが悪かつたんです。」

「ぢや龜子。こんでから決してさういふ不都合な事はしない。もしさういふ場合には何をされてもいゝといふ約束をしようぢやないか。」

「え……」

「口だけぢや駄目だから證文にしよう。こんでさういふ事があつたら、いゝか龜子、お前わたしの心持を誤解してはいかんよ。こんでお前に不都合な事があつたら、お前の名義に書換へてやつたあの郵船と鐘紡の株券だね……あれを此方へ返す……」

「まあ、あなた。それぢや……」

「だから、わたしの心持を誤解するなど言ふのだ。何もやつたものを返して貰ひたいからさういふのぢやない。さうでもしなければ全く始末がつかないぢやないか。龜子、兎に角こんで二度目だぜ。少しはぢや（へとも見るかい……」

突伏した龜子は其の顔をかくした兩袖の間からすかに泣く聲を漏した。外はまだ暮れきらぬが家の内にはいつか電氣がついてゐる。川橋は途方にくれたやうに龜子の突伏した姿を見てゐたが、次第に指寄つて靜にその肩を撫で、

「龜子、何もそんなに泣くことはないぢやないか。」

すると龜子は矢張り突伏したまゝ、赤子が母の

た。」

「坊や二階か。」

「女中と愛宕様へ遊びにやつて御在ます。」と簞笥から川橋の和服に白縮緬のしごきを出し、鳥渡電話をかけて参りませう。」

「何、歸るならいゝよ。」

「それでも、あなた。鳥渡掛けて参りませう。今日あたりはきつとお出でだらうって、さう言

つたんで御座りますよ。ほんとに幾歳になつても世話が焼けて仕様が御在ません。」と獨言のやうに呟きながら母親は裏口から出て行つた。その

聲音を聞きすまして川橋は何と思つたか、すぐに立上つて重簞笥の上に置いてある榮の用簞笥

の抽斗を明けて見ようとしたが、いづれも鍵がかゝつてゐるので、座敷中を見廻した後聲音ま

で忍ばせて二階の方へ行き掛けた。その時格子戸を明けて歸つて来たのは龜子である。川橋

の顔を見るといきなり。

「暑いね、今日は。」

「母さんは電話をかけに行つたぜ。」

「四時にはきつと歸るつて言つたのに。心配しないだつて。」と一寸眉を顰めながら、

「ほんとにととても暑いわ、どうしたんでせう。一

お召のコートを衣箱に引掛け裾にまつはる紳

を叱りながら帶揚げの結目を解きかけ、

「あなた。簞笥の上にビスケットの罐があるで

せう。太郎にやつて頂戴。」

川橋は少し呆氣に取られた様子で、言はれる

まゝにビスケットを紳の太郎にやりながら、龜

子が座敷の中央に立つて印度更紗の丸帯を解

き、荒い市松縞の大島紬袴をぬいで、手綱染の

長袴一つになる姿を見上げた。年はもう二三

年で三十になる事は、現に帝國劇場の舞臺へ出

てゐる同じ時代の女優の年齢から考へてもわか

る譯である。然し眼のぱつちりした圓顔に頬紅

をさした厚化粧、青竹色の伊達巻に長襦袢の胴

を堅く締めた肉付のよい身體付。川橋の眼には

舞臺をよさせて五年といふ月日もたゞ昨日のや

うに思はれる位であつた。

「あなた。ゆつくりしてツてもいゝんでせう。

わたし鳥渡浴びて來ますわ。とてもたまらない

の。」と龜子のかまはず紋羽二重の下袴一つにな

つて長襦袢を衣箱にかけると共にセルの單衣を

引掛けた。

「あんまりゆつくりもしてゐられないんだ。往

診の歸りだ。」

「御飯時分までにお歸りになればいゝんでせう。」

「だからさ。何時だと思つてゐるんだ。もうぢ

き五時だよ。と川橋は及腰になつて龜子が半帶

をしめようとする手を捉へ「後でゆつくり行つ

たらいいぢやないか。」

「べた／＼して心持かわるいのよ。こゝ御覽な

さい。ね、鳥渡あびて來るだけ。五分もかゝり

やしませんよ。」

「さうか。そんなに行きたけれゝ仕方がない。

ぢや、また晩にでも來よう。」

「あら、あなた。どうなすつたの。」

「正直して又來るから。かまはずお湯におい

で。」

「ぢや止しますわ。此頃はどうしてさう意地の

わるい事ばかり仰有るんでせうね。」

「何も意地のわるい事を言やしない。今日は診

察の歸りだからと言ふのに、お前の方が餘程意

地がわるい。」

「だつてあんまり汗になりましたからさ。」

「ダンスなんぞやるからだ。」

「誰が書問ツから。妙な事ばツかし仰有るの

ね。」

「龜子。今日はお前に、すこしお前に聞きた

い事があるんだけれど。」

その時裏口に母親の歸つて來る物音がしたの



愛と生命とを捧げる心になつた。自分のする事さへしてゐればよいと云ふ様な軽い心持にはどうしてもなれないのである。千代子は良人にその身とその生命とを捧げる代り又良人なる人からも男性的の強い熱情と眞實とを要求して止まないものであつた。幾度か折ある毎に千代子は良人の心持をきいて見た。きくと云ふよりは訴へても見た。然し一度も満足するやうな返事も聞かれず様子をみる事が出来なかつた。良人は月に一二度はきまつて一緒に芝居へ行く。日曜日は一緒に一緒に散歩する。いかに晩くならうが外泊は決してしない。細君の料理したものは小言をいはず皆喜んで食べる。家の財産と會計はすつかりまかしてある。今更になつて良人の心持をきく事はないと良人の方には覺ろ千代子の言ふ事が不思議に思はれる様子であつた。實家へ行つて兩親に話をしたとて矢張り解されよう筈はない。千代子は今の處唯その年輪とその境遇の同じやうな玉子より外には打明けて話をするものがない譯である。

隣のテエブルに紅茶を飲んでゐた男女はいつか席を立つた。千代子は待ち焦れた玉子がもしや下の方の休憩室にでも來てゐるはせぬかと思つて、今は何となくしを／＼とエレヴェエター

の方へ歩いて行つたが、すると折好く金網の戸口から運出される人達の中に玉子の姿が見えた。玉子の方でもすぐに千代子の姿を見つけて駆け寄り、

「おそくなりまして。大變お待ちあそばしたでせう。」

「いゝえ。それほどでも御座ません。」

「出掛けに人が來たもので御座ますからほんとに済みません。」とハンケチで靜に額の汗を押へた。

「お珍らしいことね。今日はハイカラにお結び遊ばして。」

「昨日髪を洗つたものですから。馴れませんが自分ではうまく結へませんの。變で御座せう。きつと」と玉子は丁度自分の姿の映つてゐる窓の硝子を鏡にして寛く來ねた髪を抑へた。

「見つけないせひですか、何だかお顔ちがひなすつたやうね。」と千代子は連立つて再び食堂の椅子についてからも、何といふこともなく玉子の顔を見た。髪の色がつかつたばかりでなく顔の色から眼の色までつひぞ見たことのない程、叫ばれてゐるやうに思はれたからである。

二月の末頃に初めて關口の家へたづねて來た時

の様子に思ひ較べると、どうやら別の人かとも思はれるので千代子は何の譯ともわからぬ所から大方屋根上の明るい光線的作用であらうと思つた。給仕人が紅茶を置いて行くと玉子は突然、

「千代子さん、今日晩には御用がおありになつて。」

「いゝえ。別に今のところでは。」

「わたくし晩には内と一緒に芝居へ参りますの。お宜しかつたら御一緒に。」

「どちらのお芝居……。」

「夜になつてからですから帝劇へ行かうかと思ひます。」

「帝劇……。」と千代子是不思議さうに鳥渡玉子の顔を見た。日頃玉子の一件から帝劇の見物は何となく心持がよくないと玉子の愚痴を聞かされてゐたからである。

すると玉子は一段深え／＼した顔色になつて千代子さん。あの、内ではとう／＼愛宕下のお友と手を切りましたの。」

「まア。」とばかり千代子はあまりの唐突に何と返事ができなかつた。

玉子は鳥渡あたりへ氣を配りながら、「いろいろゐる事があつたのださうで御座ます。内で

乳でも探るやうに手さぐりに川梅の手を捉へ、  
「一階音高く涙を咬り上げながら唯一言、

「あなた。」

川梅は兩手に女の身を押し起しながら、「もう泣かないでもいい。」と心から氣の毒さうな調子になった。

## 七

その後玉子と千代子とは姉妹のやうに親しく往來するやうになつた。顔を見ない日は電話をかけたたり手紙を書いたりする。三越や白木屋などへ買物にでも出る時には必ず誘ひ合ひ、一緒に夕方の食事をして歸つて來ることもあつた。

花が散つてから毎日のやうに降續いた雨と共に時候も一時は彼岸前のやうな寒さに立戻つてゐたのが、五月になつて天氣が定まると俄の暑さ。給は着すにいきなりセルの單衣を着るものもあつたので、千代子は夏物を見にと、いつものやうに電話で玉子をさそひ午飯をすますと直ぐに白木屋へ出掛けた。

いつでも道程がちがふので玉子の方が先に來て五階目の食堂で待つてゐることが多い所から、その日も千代子は下足札を受取るや否や急いでエレヴェエタアに乗つて屋根裏へ上つて行

つたが玉子の姿はどうした事かまだ食堂には見えなかつた。千代子は入口に近いテーブルに座を占め給仕の女に物をいひつける間も絶えず行來の人に氣をつけた。

やがて丸髷に結つた色の白い小作りの女が誰か待つてゐる人でもさがすらしい風で食堂の入口から内を覗いた。白渡見た時玉子によく似てゐたので、千代子は危く椅子から立たうとした時、隣のテーブルに煙草をのんでゐた學生らしい男が、口打斬をぬいでぬつと立上ると、丸髷の女は直様見つけて靜に歩み寄り、白渡あたりを見廻しながら、  
「随分待つて？」

「いゝえ。」

「さう。今日は随分心配したのよ。」

顔を見合して互に微笑んだ様子、最初千代子は姉と弟かとも思つたが直にさうでないと思つた。二人は近くのテーブルには千代子が居るばかりなのを幸てエアルの下で互に足を踏み重ね手を握るらしい様子であつたが、する中女の膝からハンケチが落ちるのを男はすぐに折屈んで拾ひ取り、ちよつと座まで拂つて渡してやる。給仕の女が紅茶を持運んで來ると、男は女の茶碗へ角砂糖は一つか二つかときゝなが

ら入れてやる。女はボイでも使ふやうに頗で返事をしながら男のなすがまゝに用をさせてゐる。

千代子は厭らしい氣がして一度は顔を外に向けたものの、男からあゝまで親切にされら女はどんな心持になるものであらうと思ふと、自然に再びその方へ氣を取られる。突然千代子は現在の良人の俊藏がもしあの男のやうに自分を取扱つてくれたらどんなに嬉しいであらう、何故良人はいつも自分を嫌ふといふでもなく愛するでもないといふやうな曖昧な冷靜な態度を取つてゐるのであらうと、目頃絶えず心に思つてゐる事を思返しはじめた。

千代子は五人の兄弟の中で唯一人の女の子であつたので生れた時から両親はじめ一家の愛情を獨り占にしてゐた。容貌も十人並よりは上であらうと思つてゐる。學校の成績は小學校から高等女學校までずつと優等で押通して來た。たまゝ自分の豫想したやうな成績を得なかつた時は狂氣のやうになつて口惜しがたり泣いたりするので、両親は却て學校の事などはどうでもよいからと容めるくらゐであつた。  
人の妻となつた後の千代子は、學校に於て最も學業に熱心であつた如く良人に對して全身の

滑りが好過ぎた爲め、障子はする／＼と走つて  
 ぱつたり柱へぶつかり二三寸も跳返つた。

いつも女中に戸障子の開閉の手荒いことを叱つてゐた自分が、こんな亂暴な明け方をしたかと思ふと千代子は一時にかつとなつて聲をふるはせ、

「早く簾をお下しなさい。」

小間使は始終叱られつけてゐると見えて、それ程恐れた風もせず、靜に縁先の簾を下した後は其の儘縁側に膝をついて千代子が一重の羽織をぬぐのを待つてゐた。

不斷着の袷に着換へて顔を洗ひ髪を捫付けて、西日のさし込まぬ片方の縁側に坐ると、いかに程蒸暑いといつてもまだ五月の事、樹の多い庭から流れて来る風の涼しさに汗もすぐさま収り焦立つた心持も自然に靜まつて行くやうな氣がした。小間使は疊んだ着物を箆筒にしまふと、

こそ／＼と逃げるやうに勝手の方へと立つて行つた。千代子は何を見ともなく、簾越しに若葉の庭を眺めながら、靜に玉子の談話や其様子などを思返すと共に、あの時自分はなせもつと熱心に玉子の話を聞いてあげなかつたのであらう。何故自分とも／＼心から嬉しがらなかつたのであらう。義理にも最少し何とか返事のし

やうがあつたであらうものを。玉子さんはきつと自分の事を妙な人だと思ひなすつたに違ひない。千代子は申すのないうやうな氣がするばかりか、友達達の幸福になつた事を羨み妬むやうな、どうしてそんな淺ましい心持になつたのであらうと、つく／＼自分ながら情ないやうな心持がし出した。すぐにも電話をかけて、それとお託をしようと思ひ掛けたが、今日はあるから御夫婦連で芝居へ行くとの話に今度は手紙を書かうとして、それでは餘り事があらたまり過ぎはしまいかといろ／＼に思惱んでゐた。

初夏の夕日は次第に袖垣を隔てた隣の屋根の方へと移つて行き、庭は一面若葉の茂りのかけになつたので、簾を下した家の内は少し薄暗いほどに思はれるやうになつた。

一奥様、御飯のお友度はどういたしませう。と四十ばかりのお金といふ御飯使が襖をあけて燈へ手をついた。

「今日は西洋料理の日だつたね。」

「はい、左様で御座います。」

姑がなくなつて若い夫婦ばかりになつてから夕方の食事は一日置きに西洋料理といふ事になつてゐる。そして獻立から料理まで大抵千代子が自分でする事になつてゐるので、千代子は

思に暮れた縁先から立上つて、  
 「ソツパは取つて置きましたか。」

「はい」  
 「それぢやマカロニと馬鈴薯でも茹でてお置きなさい。今行きますから。」

お金を先に立たせて、後から千代子は臺所へ出て行つた。

臺所は板の間だけでも八疊敷ほどく廣さで南を向いて日當りもよく風通しもよく出来てゐる。これは先代の博士が住宅を買取つた時客間や書箱などはどうでもよい。臺所と奉公人の寝起さする處とは明るく暖かにして働きよいやうにしてやらなければならぬといふ、出入の人達にも博士一流の家訓を實行して見せるつもりで新に建増した故である。然しその時分には今見るやうな西洋料理の道具や立派なストオブなどは置いてはなかつた。博士は攝生の爲めに粗食を主張した人なのでいつも引割を食べてゐた。

博士が先に世を去り續いて未亡人もなくなつてしまふと、家の内は客間から臺所まですつかり様子が變つてしまつた。親族の間には無論千代子の事を兎や角ぶふものもあつたが、然しそんな事は千代子の願ひする處ではなかつた。千代子は姑のなくなつたのに附込んで急に矢修



は子供に引かされて此れまで我慢に我慢をしてゐたのださうで御座ますがね、この先もう見込みがないときつぱり見つけたのださうで、子供は四ツになるさうで御座ますが、あんな品行のよい女につけて置いたら今にどんなものになるか知れないとそればかり心配して居りますから、わたくしの方から頼みましてね、わたくしの手元へ引取つて育てる事に致しました。その事で出掛に人が参りましたので今日はつい遅くなつてしまひました。」

「まあ、それは何よりで御座すね。玉子さん、あなた、ほんとに氣がせい／＼なすつたでせう。」

「え、何ですか、急に夜が明けたやうな氣が致します。」と玉子は胸一ぱいの嬉しさにちつとして居られぬといふやうに、椅子の上ながら身體を左右に揺つてゐる。

千代子は何が言はうとしたが、今まで顔へ見れば互に言慰め合つた玉子の身にはもう不仕合を言ふべき事情がなくなつてしまつたのだと思ふと、突然、淋しいやうな妙な心持がしたので唯その顔を見詰めたまま黙つてしまつた。

「千代子さん、お宅ではどう遊ばして。矢張新橋へいらつしやいますの。」

「はア……いえ。」と千代子は言葉を濁して俯向いた。いつもなら相手の問を待たず進んで話をするのであるが、千代子はもう内の事は一切玉子には話したくないやうな心持になつた。今までは境遇が同じやうであつた所から遠慮なく打明けて話をしたのであるが、玉子の身の上はもう以前のやうではない。今は自分一人愚痴をいひ聞かしてそして自分ばかり言慰められたり氣の毒がられたりするのはいかにも辛く忍びないやうな氣がしたのである。そんな事とは少しも氣のつかない玉子は靦／＼やうに相手の顔を見ながら、

「千代子さん、今夜ほんとにいらつしやいます。たまにはあなた、お一人でお氣晴しをなさいますしよ。」

「え、ですけれど少し用が御座すから。」  
「切符も失禮ですけれど餘つたのが御座すから。御遠慮あそばさないでも……。」

「玉子さん、この次お伴いたします。」と覺えず知らずきつぱりと言切つて、千代子はわれながら其聲に驚き玉子の顔色を窺つたが、別に何とも思つてゐない様なので稍安心はしたものの、もう何となく椅子に腰をかけてゐられなくなつた。

## 八

「すこし下の方へ参りませう。」

勘定をすますと玉子は千を引かぬばかり振り寄つて、

「玩具のある處は何處で御座ましたつねね。明日の朝中に這入つたものが要岩下から子供を連れて参りますの。宜真では眼のくり／＼とした可愛らしい兒で御座ます。千代子さん、その中お遊びがてら見にいらつしやいましたな。」

「はア、ありがたう。」と言ふのも殆ど口の中で、千代子はわざと遠くへ離れながら足に階段を下りた。

買ふべき筈の夏物もその儘にして千代子は出口に待たせて置いた車に乗つて家へ歸つて來ると、留守の中閉切つてあつた茶の間の障子には一面に夕日がさしてゐるので、疊の塵の匂と共に家の内はむつとするやうな暑さである。

「お花。昨日もさう言つたぢやありませんか、日が當つたら、わたしが留守でも簾を下して置くやうにと、さう言つたでせう。忘れたんですか。」

千代子はいきなり障子を明けて風を入れようとする、昨日イボタで拭いたばかりの敷居は

した。

お金は窓の下に据ゑた臺の上で馬鈴薯を裏返しに掛けながら身の上の事を話した。これまで奉公に出た先々で幾度となく話をしつけてゐるので、今では自然に馴れて話の順序も整ひ、簡單で明瞭なものになつてゐる。その代り話の調子には少しも感情の切迫して來る所がないので、どうやら他人の身の上でも話してゐるやうに聞える所もあつた。

千代子はお金の落付き拂つた話振りに氣の毒だといふよりは何となく不思議な心持がして、マイヨネズソオスを調味する其手を止めてそつとお金の顔を見た。千代子はお金がその亭主の變死を知つた時眞實涙が出なかつたものか、その瞬間の心持をばもう少し委し聞いて見たいのであつた。又亭主に死別してから斯うして奉公に出て此の先一生涯どうするつもりで居るのやら、それ等の事も聞いて見たいやうな氣もしたが、然しあまり立入つた事のやうにも思はれたので千代子は何も言はず、やがて眼を窓の外に移した。

## 九

俊藏は洋服を筒絨織の不鬚屑に着替へて、八

疊の間に据ゑた唐木の食臺の前に坐つた。電燈は食臺の上なる一輪さしにさした梔子の花をば一際眞白く照してゐるが庭はまだ初夏の黄昏に暮れやらす、雀もしきりに囀つてゐる。勝手の方から手を拭きながら出て來た千代子は坐ると共に食臺の上の葡萄酒を取上げ、

「あなた。お酒はこれでしょう御座いますか。何か外のにしませうか。シェリイも取つて御座います。」

「なにそれで結構だ。飯の時は葡萄酒の方がいい。」

小間使のお花がマカロニを入れたスウプを持運んで來ると俊藏は黙つてすぐに匙を取上げる。千代子は良人が何か面白いはなしでもしかけてくれ、ばよいのと思ひながら、さて自分の方からけ別に話しかける話題が見つからないので、同じやうに黙つて一口スウプを啜り、

「あなた。すこし鹽辛いやうですね。」

俊藏はさう云はれてから初めてスウプの鹽加減を見ようとするらしく改めて一匙口へ入れ、

「そんなに辛くはない。」

「さうですか。それぢや、わたしの口のせゐかも知れません。」と千代子もそのまゝスウプを啜つたが、俊藏の様子に對していつものやうに

確ない心持がした。千代子は自分の料理した晩食を強ひて變めてもらはうと思つてゐるのではない。うまいとも、まづいとも言はれずにむしやむしや食べてしまはれるのが、唯何となく張合がないやうに思はれるのであつた。結婚して既に三年になるが千代子にはまだ良人の食物の嗜好がはつきりと分らないのである。鹽がきき過ぎても別に小言もいはない。甘いものもよく食べればお酒も飲むので、何が一番好きなのか判然としなない。それが千代子の身になつては何となく氣にかゝるのである。自分より外のものが却てそれを知つてゐはしまいか、お馴染の藝者なんぞの方が自分よりも良人の嗜好をよく知つてゐるのであるまいかなと思ふと、時としては一歩進んで良人はわざと自分には黙つて知らせないやうにしてゐるのではないかと云ふやうな疑念も起つて來るのであつた。

スウプを啜り終つた時、俊藏は初めて食臺の上の花に氣がついたらしく、

「これは梔子だね。いゝ匂だ。」

「薔薇よりも涼しいやうな氣がしますわね。」

「さうだね。花屋で買つたのかね。」

「いゝえ。お庭に咲いて居りますのよ。お玄關の前からお庭の方へ行かうといふ垣根のそばに

な生活をしようと思つたのではない。夫の倭藏が成りたけ外で、食事をして来ないやうに、さうするには何がさて置き家の内をもすこし明るく賑かにするのが第一だと思つたのである。一日がはりに晚餐を西洋料理にして見たのも、唯に自分の嗜好からのみではない、良人の口に飽きの来ないやうにとの心遣ひからであつた。

「奥様、もうお芋が茹かりましたやうで御在ます。」とお金はストオプに掛けた銀の箸を取つた。

「それぢや裏渡しにしておくれ。いつものやうにお湯を切つてバタを入れてから漉すんだよ。」

「はい。奥様、それから鳥渡ソップのお鹽椒を見ていたいきます。」

「お金、今日は大變よく取れてゐるやうだよ。」

「左様で御在ますか。奥様、ソップが上手に取れるやうになればお料理は卒業だつて仰有いましたね。おかげ様でどうかからか加減がわかつて参りました。」

「お金、お前、先に何か食物商賣をした事があつてお言ひだつたね。」

「はい。」

「それだから直に加減がわかるんだよ。此頃の中女中やいくら教へたつて駄目だよ。」

「さうで御在ませうか……。」

「さうとも、家のお山なんか今だに紅茶の入れ方もわからないぢやないか。」

「年もいきませんし、空で御在ますからね。」

「何を言はれてもすぐ忘れてしまふんだから苦勞がなくなつて一番徳だよ。」

「左様で御在ます。」

「お金、お前食物商賣をしたつてお言ひだけれど何をしてゐたんだえ。」

「御菓子屋で御在ます。もう十年もむかしの事で御在ます。」

「何處で商ひをしてゐたんだえ。」

「麻布の六本木で御在ます。西洋菓子もカステラ位はこしらへて居たんで御在ますよ。本公人も三人は使つて居たので御在ますが、連合が相場に手を出しましてすっかり招つてしまひました。」

「御亭主がよくないと女は一生苦勞をしなければならぬんだね。」

「まったくで御在ます。御酒の上がよくないんで困りました。死んでくれてほんとに有難いと思つた位で御在ますよ。何が困るつて、奥様、お酒のわるいほど困るものは御在ませんよ。」

「女道樂の方がまだしも始末がよろ御在ます。道樂だけなら年をとれば段々直つて参りますけれど、お酒と賭博ばかりは一生直りツコが御在ません。」

「それもさうだね。然しあんまり家を外にして遊んで歩かれるのも困るぢやないか。」

「奥様、手前の連合なんぞはほんとにお話にも何もなつたものぢや御在ません。六本木の店を仕舞つて新宿の裏へ引込みましてから、わたくしとが内職をいたします。俵がその時分はまだ丈夫で電車の車になるといふ始末で御在ます。それなのに内ではあなた、朝服からぐでんぐでんになつて、娘を御女郎に賣るつて言出して聞かないんで御在ますよ。わたくしも持餘してしまひましてね、よつぽど警察へ説諭願ひでも出しに行かうかと思つたんで御在ます。さうからする中大雨の降る晩外へ出て行つたなり翌日になつても歸つて来ませんから、大方どこかで博奕でも打つてゐるんだらう、さうでなければ捕つて送られてもしたんぢやないかと思つて居りますと、夕方になつて巡査さんが傳馬町通の道普請の穴の中へ陥ちて死んでゐるから引取りに來いと知らせに参りました。家のものはじめお隣や近所の屋達もみんな不慮で御在ますから誰一人涙一つこぼしは致しませんで



類のものが集つてゐる方の席へ猫の子が一匹上つて来て人の顔を見てニヤアと鳴き始めた。家の叔母が御幣かつぎだもので氣にして追出さうとしても、子猫のことだから撲つ眞似をする、と猶の事鳴いてじやれようとするんだらう。實にをかしかつたよ。」

後藏は葡萄酒の酔も幾分か廻つて來た所から、さも可笑しさに話しつづけたが、千代子は何と思つたか唐突に、

「あなた、一番初め……わたくしの事をどんな女だと思ひ遊ばして。え、あなた。初めて御覽になつた時どんな女に見えました。」

「さうだね。千代子、そんな妙な事をきくものぢやないよ。何といつていゝか、返事に困つてしまふぢやないか。」

「遠慮のない處を話して下さいまし。悪く仰有つても構ひません。氣にしませんから眞實の事が何ひたいんですよ。」

「それなら、何も口に出して言はないでも分つてゐる筈ぢやないか。」

「いゝから言つて御覽遊ばせよ。」

「自分の女房をつかまへて、惚れてゐるの、愛してゐると、そんな馬鹿々々しい事が言へるかい。新しい芝居だの新聞の小説なんぞを見ると、そ

んな事を言つてゐる夫婦もあるやうだがね。

「あなた。わたしはちつとも可笑しい事はないと思ひますのよ。夫婦だつて戀人だつて同じ事ですわ。お互に愛してゐるとか愛されてゐるとか言つた方が親しい心持がしますわ。」

「さうか。然しどうも可笑しくつて言へない。夫婦になつて毎日顔を見てゐたら、そんな事を言ふ必要は無さうだがね。」

「いくら毎日顔を見てゐたつて、良人の心がわからない時はきいて見る必要が起つて來ますわ。」

「それぢや何だか僕の心が分らないといふやうに聞えるね。」

「あなた。まつたくの處わたしには分りません。」

「わかり切つた事をいろ／＼に考へ過すから、却てわからなくなるんだ。男の心なんでものは非常に單純なものだよ。女の考へるやうに複雑なものぢやない。お前は何と思つてゐるか知れないが、僕はいつでもお前に對して敬意を表してゐる。感謝してゐる。」

丁度食後の珈琲の持出されたのを啜ひ俊藏は話をまぎらすため食卓を離れて縁側へと立つた。俊藏は千代子が何かにつけてこんな事

を言出すのも、つまりは嫉妬からだと思つてゐるので、會話があまり激烈にならない中、二人とも感情を害さない中、兎に角この場を避けようと思つたのである。俊藏はかういふ場合には戀人に戀を打明けでもする時のやうに、千代子の手を握つて、世界の中にお前より外に私の愛する女はないといふ言つてやつたら、千代子の機嫌はすぐ直るだらうとは心付いてゐるのであるが、さて男のくせとして自分の妻に對してはどうもそんな日い事は言はれないのである。

俊藏は後向きに縁側に腰をかけ、明るいと思つたらいゝお月夜だ。」と獨語のやうに言いながら空を仰いだ。

# 十

「さうですか。それは大成功でしたな。やつぱり大も歩けば棒に當りますな。」

「自分ながら聊か意外だつたね。やつぱり押のつよいのが勝ちだ。」

南佐極木町の庄所へ歸り、俊藏は鶴崎と話しながら竝木のかげを土橋の方へと歩いて行く。

一女は押が強くなければア出來ません。一暇、二金、三男、四衣、五チャラといふ祓傳もあるさ

「さうだつたかね。つい気がつかかなかつた。」

「あなた。御自分のお家のくせに。よそから来たわたくしの方が餘程よく知つてゐます。ほゝ、ほゝ。」と千代子は高く笑つた。別に何の意味もなく笑つたのであるが、俊藏はすこし氣まりの悪いやうな心持がした。それと共にこの事を前提にして千代子はきつと自分が家の事にはかまはず遊んでばかりゐることを攻撃しはじめるだらうとも思つたので、先づ遠廻しに申譯のもりで、

「僕もすこし歌でもならつて趣味を高尚にしくつちやいけないな。」

すると千代子には何の事か譯がわからないので、

「あなた。何の唄がおならひになりたいんです。長唄ですか。」

「その方の唄ぢやない。歌さ。短歌さ。」

千代子はますます怪訝な顔をして、「それでもあなた、歌はおきらひだつていつだつたか然う仰有つたぢやありませんか。」

俊藏は返事に困つて、「そんな事を言つたことがあつたかね。」

「御在ますよ。歌を作つたり小説を書いたりす

る女は少し氣に入らない事があるとすぐにそれを材料にするから恐しいつて、さう仰有つた事があります。覺えて居りますよ。」

これは千代子に言はれるまでもなく、俊藏も決して忘れて居たのではない。或晩歸りのおそくなつた事から、例の如く二人言合つた時、俊藏は不圖千代子の枕元に何やら新刊の歌集が置いてあつたのを見て、歌なんぞを誦むとしますます神經が過敏になるからよした方がいゝと言つた事があつた。つまらない事をよくいつまでも覺えてゐると思ふと、俊藏も今はすこしむつとして、

「お前見たやうに物覺のいゝのも困つたものだね。うつかかり口もきけない。」

千代子も之に應じて何か言はうとした。然し幸ひ小間使のお花がスワブの皿を片づけ、續いて鳥のステウを持運んで來たので、二人とも

さり氣なく様子をつくつた。俊藏は固より好んで口喧嘩をしようとは思つてゐないので、お花が皿を置くが早い、

「此れアうまさうだ。何だ、ステウだね。」とすぐにナイフを取上げる。

「堅いかも知れせんよ。雛雞のいゝのを寄越すやうに註文してやつたんですけれど。」と言ひ

ながら千代子は胡椒と辛しの壘を良人の方へ押しすゝめた。

「むゝ。非常に柔い。」と一口頬張リながら、内で食べつけると外の西洋料理は食べられなくなるよ。實にわるい油を使ふからね。精養軒だの中央亭なんぞの宴會と來たら全く氣味がわるいよ。」

「それでもよく流行りますわね。婚禮の御披露なんぞは大抵精養軒にきまつてしまつたやうで御在ますね。」

「われ／＼の時も精養軒でやつたんだからな。あんまり悪くも言へない譯だな。」

「男の方は何ともないでせうけれど、御披露の宴會ほどのような事は御在ませんね。大勢の方に御挨拶するだけでも逆せてしまひます。わたくしのお友達で腦貧血を起した話が御在ます。」

「男だつて、あんまり有難いものぢやないよ。何となく氣まわりもわるいし、妙にでれるものさ。馬鹿々々しいやうな、持もするね。大神宮の儀式も我使してゐたけれど長つたらしくつて閉口したね。神主が幾人も／＼お三寶を持つて出たり入つたり、いつ濟むのかと思つた位だよ。千代子、お前はきつと氣がつかかなかつたらうが、神主が頻に何かやつて居る最中だ。僕の方の親

「一體この頃お多の手當といふものはどんな相場かね。」

「税務署の調査によると二百圓から七八百圓だとか云ふ話ぢやありませんか。妾の給金まで調べて税を取るやうになつちや、もうお仕舞ですな。その位なら博奕場でも公開して税を取つた方が堂々としてゐます。」

土橋の袂へ来かゝつた時、横合から走過ぎる自動車の砂ほこりに、二人はハンケチで口を押へた。

# 十一

降りついた入梅の空は珍らしく雲の間から青い空を見せた。庭の水たまりには常盤木の落葉が浮いてゐる。折々何ともつかず秋のやうな心持のする冷い風が濡れた植込の奥から流れて来る時何處ともなく強い椎の花の匂が鼻につく。千代子は入梅のうつつたうしさに加へて昨夜も一昨夜も俊藏の歸りの晩かつた事から今日はまだもう我儘にも一日家に閉籠つてばかりは居られぬやうな心持になつた。丁度いい、鹽梅に玉子から電話が掛つた。電話口へ出ると、是非ちよいとお目にかゝつてお話ししたい事があるといふ。

「どこでお目にかゝりませう。わたしも今日は久しく雨に降りこめられて居ましたから散歩に出たいと思つて居りましたの。」

電話で玉子は、「それではいつもの處までいらしつて下さいませ。わたし此れから三十分ばかりしてから出掛けます。」

いつもの處と云ふのは日本橋白木屋の食堂のことである。千代子は女中に午飯の支度をいそがせ着物を着換へる間に宿車と呼ばせた。白木屋のエレヴェエタを昇ると、食堂の入口には時間をたがへず玉子が立つてゐた。見れば白粉もつけず髪も亂れたまゝ着物もどうやら不斷屑のまゝらしい様子である。千代子は先刻玉子が是非お目にかゝりたいと言つた電話と、この様子とを思合せて眞實何か事件が起つたに相違ない。少し胸をはずませながら、

「玉子さん、どうかなすつて。」

「ええ。少しお腹をこはしまして伏せつて居りましたの。もういゝんで御座すよ。」

千代子は案に相違した玉子の返事に、何となく腹立しいやうな氣になり其儘黙つてしまつた。玉子は二三歩食堂の方へと歩きながら、

「千代子さん、わたくし、ほんとにどうしたらいいんだか困つて居るんで御座すよ。急にお

呼立てして御用がおり遊ばしたんぢや御座せんか。」

「いゝえ。」と千代子はスゲない返事をして有合ふ椅子に腰をかけた。二人はそのまゝ暫く黙つてゐた。隣のテーブルを取圍んだ東京見物の田舎者らしい四五人がどや／＼立去るのを待つて、玉子は飲みかけた紅茶を下に置き、

「千代子さん、内ではまた愛宕道と關係をつけたいしんで御座すよ。一時は綺麗に片をつけたんで御座すがね……。」

「まあ、ほんととう……。」と千代子は覺えず聲を高めて急にあたりを見廻した。

「まだ確かな證據はないんで御座すけれど、どうも様子がかしいんで御座すよ。」

さうですか。困りましたわね。と千代子は白粉もつけぬ玉子の青ざめた顔を見詰めたがら溜息をついた。溜息と共に千代子はどうか此れでやつと氣がすんだと云ふやうな心持がした。

丁度一月程前の同じ食堂で突然玉子から其の良人の身持の直つた事をさも嬉しうに話し出された時、千代子は何のいはれもなく嫉しいやうな目惜しいやうな心持がした。それ以来自分の良人の不身持を憎み恨む心の中にはおの



うです。口から出まかせにチャラツポコを言ふのも女の出来る道ださうです。」

「ぢや、鶴崎君。君なんぞは大に望があるね。チャラツポコは御得意だから。内の女事務員なんざ、どうだ、もう出来てもいい時分ぢやないか。」

「あれアいけません。もう何かついてゐるやうです。四十を越しちやもう駄目です。あなたなんぞも今の中だ。せいゝお遣んなさい。」

「悪いことをけししかけるな。」

「時に今夜はじこへお出かけです。」

「どこにしようかと思案してゐるんだ。實は待合よりもぢかに家の方へいらつしやいと云はれたんだがね。」

「どこです。家は。」

「愛宕下だとき。然し先の旦那とは僕もまんざら知らない仲ぢやないからね。今ぢや關係がないとは言つてゐるが、家へ乗り込むのは少し氣が咎めるんだ。」

「最初どこで話がまとまつたのです。」

「木挽町の芳川さ。まつたく偶然なひさ。一昨日事務所へ銀座の柴田が市區改正の事で相談に來ただらう。あれから午飯をくひに芳川へ行つたのさ。柴田は話がすむとすぐ歸つてしまつ

た。一時頃だったね。中途半端の時間で仕様が

ないから、斯う云ふ時を應用して誰か呼ばうと思つたのさ。何の氣なしに下へ降りると帳場で

おかみさんと話をしてゐる女がある。ハイカラに結つた襟飾が眞白で後姿が馬鹿によく見え

たね。顔を見てやらうと用もないのに電話を借り帳場へ行くと、あの女さ。女優の時分二二

度大勢で呼んだ事もあるから、無理やりに二階へ呼び上げた。それがはなしの始りだ。」

「以前からお馴染ぢやなかつたんですか。」

「先には唯座敷へ呼んだばかりさ。」

「怪しいもんですな。」

「どうして。」

「あの龜子さんなら、顔立や身體付があなたの好きなタイプです。舞臺へ出なくなつた

ので久しく見ないから僕もよく覚えてゐません。何で額が廣くつて眉毛が下つてゐて、下ぶくれで、口は受け口でした。さうでせう。そんなら一時お安くなかつたあの日本橋の小濱

なんぞと能く似た顔立ちやありませんか。」

「恐入つたね。系統を立て、論じられちや一言

もない。然し君、何も小濱に似てゐるから、それで龜子をくいた譯ぢやないよ。その場合に

と成程同じ型の女のやうだ。」

「俊さん。わたしの経験によると、女といふものは顔立や身體付が同じだと氣性から萬事の

取なしまで似てゐるやうな氣がするんですが、どうです、あなたの御實驗は。

「大變な事を質問するな。まだ君、昨日でき

たばかりだからよくわからない。然し話をする時首をかしけて目をぼろ／＼させて、じれつた

さうに物をいふ處なんぞは小濱とよく似てゐるね。」

「さうですか。兎に角いゝのが目付かつて結構です。

「君、参考までに一寸聞いて置きたいんだが、藝者とちがふからな。どの位やつたらいいもん

だらう。まだ何とも向うからは言出しやあしな

いのだがね。

「今の所、表向には旦那はないと言ふんですか。」

「さうだ。川橋院長とは手が切れたと云ふ事だ。」

「さうですか。それぢや向うから何とも言はない中に、だまつて此位も出して御覽なさい。なまじつか向うから切出すのを待つてゐると却て高いものになりますよ。」

な氣の弱い事をと承知しないのみか、横町や露地の角を通りかゝる毎に、曲るべき道をきくのであつた。

行手のはづれに電車の通るのが見通される廣い横町へ折れた後、大分歩いて、片側に一寸店構の目に立つ電燈屋の前まで來た。玉子はもう息を切らずやうにして、

「千代子さん、あすこの露地で御在ますよ。」と云ひながら恐るゝやうに四邊を見廻した。

「あゝ。あすこ。」と言つたきり千代子も立止つて同じやうに後先へ氣をくばつた。

雨は歇んでゐるが濕つぽい風のひや／＼する暗い日の午過。泥濘の街には人通りも至つて少く露地には子供の遊ぶ影も見えない。二人の立止つた向の荒物屋の二階からたるんだやうな響

の音が聞えるばかりである。一今時分まさか來てゐる筈はないんですから前を通過つてもかまやしませんけれど……どうしま

せう。千代子さん。」と玉子は絹張の傘の下からそつと千代子の顔を覗いた。その目容と物言ふ聲とは共に千代子に向つて、この露地を教へれば後は家までつき留めないでも、今日はもう此れで廻辨をして下さいと嘆願するやうに思はれた。これに反して千代子の方はいよ／＼恐いも

の見たさの好奇心に驅られるばかり、見渡す後先には人通りも少く露地からは豆腐屋が出て來たばかりと見定めるや否や、玉子の袖まで捕へて首を延しながら、

「さあ行つて見ませう。」

玉子も今は覺悟をきめたらしく傘をつぼめて一足先へ露地の溝板を踏んだ。

「右側ですか、左側ですか。え、どつちです。」後からきく千代子の間に玉子は、一左側だつ

たと思ひます。と答へはしたが、實は後にも先にもたつた一度忍んで來た事があるばかりなので、今は唯どぎまぎするばかり。

「千代子さん、露地がちがつたかも知れません。申譯がありません。」

「あなた。何か日じるしになるものを覺えて居らつしやらなくつて。」

「何でも楓の木か何かがあつたやうでしたわ。」

「それぢや、あの突當りの、あすこぢやありませんか。」

千代子が傘で指した時、何處の家かわからぬが突然格子戸のあく音と共に、洋服を着た男の後姿が狭い露地の行手に現れた。玉子と千代子が人の姿よりも格子戸のあく音にびつくりして思はず後じさりした其の間に、洋服姿は露

地から通ずる別の露地へと曲つてしまつた。全く隣する程の間であつた。然し玉子の眼にはあまり合の-highくなく、夏外套の地色とで良人の川橋院長である事け明白であつた。

「びつくりしましたわ。と千代子が大きな息をついて此方を見返つた時、玉子は眼の中に涙を一杯たゝへながら怨めしきうに千代子の顔を見詰めて、

「千代子さん、これでですから、わたし此様處へ來るのはいやだと言つたんで御在ますよ。」

千代子は初めてそれと氣がつくと、此の場合どうしていいのやら譯がわからず同じやうに唯涙を浮べるばかりであつた。

## 十二

俊藏はその夜十時過に日白の家へ歸つて來た。いつも歸宅のおそくなる時は前以て電話で知らせる筈になつてゐるが、もう度々の事なので申譯の種も盡きてしまつた處から其の日はその儘にしてしまつたのであつた。俊藏は其の日愛宕町の龜子の家で夕飯をすまして暫くたつてから虎の門まで歩いて自動車に乗つたのである。車の中から豫め千代子の攻撃とこれに對する辯解やら又鎮撫の手段やらを考へ、やが

づから玉子の幸福を羨みそれむ念を斷つ事が出来なかつた。何も強ひて玉子の身を元のやうに不幸にさせたいと冀ふわけではない。千代子は唯自分一人良人の不身持を氣に病んでいらした月日を送つて行くのが辛い所から、境遇を同じくした相手がほしくてならないやうな氣がしたのであつた。

「玉子さん、早くしつかりした證據をお見付けあそばせよ、ぐづ／＼して居らつしやる時ぢやありませんわ。」と千代子は自然と焚きつけるやうな調子になつた。

「愛宕下なら家もわかつて居りますから様子をさぐらうと思へばわけは無いんで御座います。ですけれど、千代子さん、何だかこはいやうな妙な氣がいたしますの。」

「何がおこはいんですよ。先にはあなた御自分お一人で方々番地をきいておさがしになつたのぢやありませんか。」

「その時はあなた、初めて聞いた話ですもの。一時にかつとして夢中で捜し歩いたんですけれど、今度はもうそんな事をして現場を見ないだつて分つて居りますし、それに又こんなやうな心持もするんで御座いますよ。どうせ男の方は一人の女ぢや満足しないものならもう仕方が

ありませんわ。わたしは良人の關係してゐる女が……誰だつていふ事がわからない方がよくはないかと思ふんで御座いますよ。誰だつていふ事がわかればいくらか氣がすむやうなものゝ、またそれだけいやな思をする事がふえますからね。」

「さう仰有ればそれもさうですけれど、玉子さん、それではあなた、御自分で御自分の心さ偽つて居らつしやるやうなもんですわ。知りましたと思ふ祕密をわざと知らずに置かうと仰有るのは、それはつまり卑怯ぢやないかと思ひますわ。」

「卑怯かも知れません。ですけれど、千代子さん、あなた、御存じがないからさう仰有るんですよ。それア實に何とも言へない粗な心持のするものですわ。自分の良人が外の女と平山戯てゐるのを見つけた時の心持はほんとに何とも云へません。それを思ふといつそ知らない顔をしてゐた方が……といふやうな弱い氣にもなるんで御座います。」

「それぢや玉子さん、あなた見す／＼愛宕下のおっさんと關係がついた事が分つてゐながら、此のまゝ打拵つてお置き遊ばすおつもりなんですか。」

「さア……それですからどうしようかと思つて電話をお掛けしたんです。千代子さん、どうしませう。わたしはこんな心持もしますのよ。内がどうせお妾を置くのなら愛宕下でなくつて、わたしの知らない別の女にしてくれゝばと、さうも思ふんで御座いますよ。」

「それなら、どつちにしても一度は愛宕下の方をたしかめて見なければならぬぢや御座いませんか。玉子さん、あなたのお一人でおいやなら、わたしも御一緒に参りますわ。今日は雨も歇んでますし涼しう御座いますから、わたしも御一緒に参ります。」

「それぢや……ですけれど御迷惑ですわね。」

「いゝえ、あなた。」

椅子から立上つたのは玉子よりも却て千代子の方が先きな位であつた。

二人は日本橋から乗つた電車を芝口で乗換へて虎の門で降りた。丁度學校歸りの女學生が三四人と連立つて電車待つてゐる時刻である。玉子は今更のやうに學校に通つてゐた時分樂しさを話し出す。そして愛宕下の通りを山内の方へと歩いて行く中幾度か後を振り返りながら、妾宅の様子を見に行く事はもうよしにしようと言出したが、千代子は折角こゝまで來ながらそん



して、しだらのない風をしてゐる程見つともないものはないからね。」

「ぢや、あなた。女優見たやうな人はどうなんでせう。素人と藝者の間見たやうなものですね。」

俊藏はいつの間に千代子が愛宕下の事を知つてゐたのかとびつくりして何とも返事が出来なかつた。然し千代子はいよく機嫌よく甘えるやうな調子で、

「ねえ、あなた。あの川橋さんね。いつでしたか帝國劇場の食堂でおはなしたつたでせう。面白い話がありますの。」

「何だ。」

「今日白木屋まで買物にまゐりましたんでしょ。さうしましたら、ひよつくり玉子さんに逢ひましたの。それからいろいろ話をしましたの。」

「さうか、それアよかつたね。」と俊藏は千代子の話がまだどうなる事かよく分らぬので、びくびくしながら「何かいゝものが有つたかね。」

「いゝえ、別に買ふ物も御在ませんでした。何しろ玉子さんがいろいろ旦那様の事だのお妾さんの事だのお話なさるもんですからね、わたしもお氣の毒だと思つて、買物はそつちのけに

していろいろ愚めて上げたんで御在ますよ。あなた。玉子さんの旦那様は……いつだつたかあなたにもお話したで御在ませう、一時お妾さんとすつかり關係を斷つたと思つたら、さうぢや無かつたんださうで御在ますよ。矢張愛宕下の女優さんの處へお出なさるんださうで御在ますよ。」

「へえ、さうか。」

「わたし今日玉子さんに連れられて愛宕下までそつと、あなた、様子を见に行つたんで御在ますよ。」

「お前、愛宕下へ行つたのか。何時時分だ。」

「白木屋から電車で廻つたんで御在ますから……電車が込んでなか……乗れないんで御在ますよ。虎の門で降りてから、歩きましたから、もう四時頃で御在ませう。玉子さんは旦那様のなさりやうが餘りだからお里へ歸つてしまふとさう仰有るんで御在ます。」

「一體どうしてそんな事が起つたのだ。」

「折悪しく、あなた。露地の中で川橋さんの後姿を見たんで御在ます。わたしにはよく分りませんでしたが、玉子さんは一時にかつとしてお仕舞ひなすつたのですよ。往來の眞中でお泣きなされるんでせう。わたし困つてしまひまし

た。」

俊藏は龜子が以前の旦那と關係のついでゐた事を初めて知つたものの、此の場合そんな事はおくびにも出せないで、唯腹立たし氣に、

「あのお妾はよくない女だ。兎に角人にそんな迷惑をかけるのは全くよくない。」

「ほんとにさうで御在ますよ。それに比べるとまだしも藝者の方がよう御在ます。公然商賣をしてゐるんで御在ますからね。」

俊藏は今夜千代子がいつになく寛大に自分の歸りのおそい事を咎めなかつたのは全く玉子の騒ぎのあつた爲めに相違ないと考へた。丁度酒飲が二人寄つた時一人が先に酔拂つてしまふと他の一人は氣勢を挫かれて酔へなくなつたのと同じやうなものであらう。果してさうならば玉子には氣の毒でも願はくば毎日さういふ騒ぎがあつてくれればよいと俊藏は心の中で笑つた。千代子はだしぬけに、

「あなた、何だか蚤がゐるやうですよ。」

「さうか、レこが痒いんだ。」

(大正十一年稿)

て敷居の高いわが家の門をくぐつた。  
すると其の夜はどうした譯か、千代子の様子は小間使と共に玄關の障子を明けて出迎へた其時からいつになく非常に平穩であつた。

俊藏は却て氣味悪く思ひながら、然しかういふ場合には此方も平然としてあまり申譯らしく機嫌など取らない方がよからうと、帽子と折革包を渡してすた／＼居間へ入るや否や無造作に、

「すぐ寝るよ。今日は非常につかれた。」

「さうで御座いますか。ぢやお寝衣を持つて参りませう。」とすぐに立ちかける千代子の様子に、俊藏はいよく氣味がわるくなつた。

「彼方へ行つて着換へるからいゝよ。時計と紙入を仕舞つて置いておくれ。」

俊藏はボケツトの中のものを千代子に渡しながら廊下を隔てた千代子の居間の襖を明けた。こゝが夫婦の寢間である。繻子の羽根蒲團を重ねた夜具が一つ敷延べてある。

俊藏は結婚後半年程たつた頃から實をいへば夫婦夜具を別にしたいと思ひ始めたのであるが丁度この頃から千代子が無かにつけて氣をいらいらさせ出したので、俊藏は言出しかねてそれなりにしてしまつたのである。俊藏は何も千代

子と一ツ寝する事がいやになつたといふのではない。唯外で人知れず悪い事をして歸つて来た晩など、酒の匂は勿論の事、香水や白粉の移香から祕密が露れては人變だとそんな事が心配で折折安眠する事が出来ないからである。既に一度かういふ事があつた。俊藏は歸りがけに待合の湯にはいつた。その時何心なく使つた石鹼が平素家で使ふものとは異つた香氣のするものであつた爲め、家へ歸つてから千代子に詰問されて返事に困つた事があつた。それ以來俊藏はいかに蒸暑い晩でも外では湯に入らず又藝者のハンケチでは手をふかない事にした位であつた。良人の注意が周到になるに従つて細君の検査も亦いよく嚴密になつて行く。それをば巧みに切抜けて行く事が人ではいゝから俊藏が放蕩に對する興味の中心であるやうになつた。又一

日の仕事のやうにもなつてしまつた。言葉に動作にいろ／＼と細君を慰めすかして工合よく宥めおほせた時はほつと一仕事したやうな心持になる。いかほど言ひ慰めて見ても駄目な時は此れほどまでにしても機嫌を直してくれないのかと憤懣の結果はつまり次の日また遊びに出かける原因になるのであつた。

小間使が俊藏の洋服と千代子の着物をとれた

たみ靜に襖をしめて出て行つた。千代子は寝衣の伊達巻を締直しながら片付け残した身のまはりのものを片付けつゐる。その後姿を俊藏は夜具の中から見遣つて、

「もう浴衣か。えらい勢だね。」

昨夜まで千代子は縞のフランネルを寝衣にしてゐたのが、今後は中形の浴衣になつたので何となく様子が變つて艶かしく見えた。

「昨夜蒸暑くつて寝られませんでしたもの。」

「今日はいやにひや／＼するぢやないか。明方きつと寒いぜ。」

「それでもフランネルはぼて／＼して寝にくいんですもの。ねえ、あなた。今時分の陽氣は長襦袢で寝るのが一番心持がよいんですわね。」

「さうかね」と俊藏は長襦袢の一言からそれと察して用心し出した。

「藝者が何かなら能う御在ますけれど、わたし達はまさか長襦袢ぢや寝られませんかから仕様がありません。」

「さうさ。何も藝者の眞似をするには及ばない。きちんとしてゐる方がいゝよ。」

「あんまりきちんとしてゐるのも男の方は好きぢやないんでせう。」

「そんな事があるものか。素人が藝者のまねを





# 散柳窓夕榮

天保十三壬寅の年の六月も半を過ぎた。いつもならば江戸御府内を湧立か返らせる山王大権現の御祭禮さへ今年に諸事御儉約の御觸によつてまるで火の消えたやうに淋しく済んでしまふと、それなり世間は一入ひつそり盛夏の炎暑に静まり返つた或日の暮近くである。修紫田舎源氏の版元通油町の地本問屋鶴屋の主人喜右衛門は先程から汐留の河岸通に行燈を掛けならべた唯ある船荷の二階に柳下亭種員と名乗つた種彦門下の若い戯作者と二人きり、互に顔を見合はせたまゝ、團扇も使はず幾度となく同じやうな事のみ繰返してゐた。

「種員さん、もう軈て六ッだらうが先生はどうなされた事だらうの。」

「別に仔細はなからうとは思ひますがさう申せば大分お歸りがお遅いやうだ。事によつたら御屋敷で御酒でも召上つてゐるのは御座いますまいか。」

「何さまこれア大きにさうかも知れぬ。先生と遠山様とは堺町あたりでは其の昔隨分御腕懸であつたとかいふ事だから、その時分のお話にいろ／＼花が咲いて居るのかも知れませぬ。」

「遠山様と云ふ方は思へば不思議な御出世をなすつたものですね。つい此間までは人のいやがる遊人とまで身を持崩してゐなすつたのが暫くの中に御本丸の御勘定方におなりなさるなんて、此まで御番衆の方々からいくらも出世をなすつた方はあらうけれど遠山様のやうな話はありませんまい。」

「どうかまア遠山さまの御威光で先生の御身の上に別條のないやうにしたいもんさ。萬一の事であらうものなら、手前なんぞは先生とはちがつて盡けり同然の素町人故事によつたら遠島かまづ輕いところで缺所は免れまい。」

「もし鶴屋さん、縁起でもねえ。そんな薄氣味の悪い話はきつい禁句だ。そんな事を云ひなすると何だか居ても立つても居られないやうな気がします。ぼんやりこゝで氣ばかり揉んでゐて

も始まらぬから私はその邊まで鳥渡ッ走り御様子を見て参りませう。」

種員は様留の一つ提を腰に下げて席を立ちかけたが、その時女中に案内されて椅子段を上つて來たのは何處ぞ問屋の旦那衆かとも思はれるやうな品の好い四十あまりの男であつた。彼後上布の帷子の上に重ねた紗の羽織にまで草書に崩した年の字をば丸く寶珠の玉のやうにした紋をつけて居るので言はずと歌川派の浮世繪師五渡學國貞とは知られた。鶴屋はびつくりして、これは／＼龜井戸の師匠。どうして手前共が爰に居るのを御存じで御座りました。

「實は今日さる處まで身中見舞に出掛けた處途中でお店の若衆に行き逢ひ堀田原の先生が日蔭町の御屋敷へしか／＼とのお話を聞き、私も早速先生の御返事が聞きたさに急いでやつて來ましたのさ。時に先生はまだ遠山様の御屋敷からはお歸りがないと見えますな。」

國貞は歩いて來た暑さに頻と團扇を使ひ始める。立ちかけた種員は再び腰なる煙草人を取出しながら、五渡亭先生も御存じで御座います。手前と相弟子の彼の笠亭仙果がお供を致しまして御屋敷へ上つて居りますから、私は今の中一走り御様子を見て参らうと思つてゐた

行つた。

夏の日には已に沈んで、空一面の夕焼は柳割の兩岸に立竝んだ土蔵の白壁をも一様に薄赤く染めなして居ると、其の倒なる家の影は更に美しく満潮の澄渡つた川水の中に漂ひ動いて居る。幾個と知れぬ町中の橋々には夕涼の人の團扇と共に浴衣一枚の輕い女の裾があはれのために殊更水面の高くなつた橋の下を潛行く舟の中から、何心なく頭の上をば見上げる時、一人心憎く川風に飄つて居るのである。

一同は種彦の語つた最前の話に百年の憂苦を一朝にして忘れ得た思ひ。酔月から取寄せた料理の重詰を開き川水に杯を洗ひながら、頻に絶景々々と叫んで居たが、肝腎な種彦一人は大きな日中を歩みつづけた老體につかれを覺えた故か、何となく言葉少く、片腕を舷に背を胴の間の横木に寄せかけたまま、簾越しに唯ぼんやり遠い川筋の景色にのみ目を移して居た。

然し船中の一人が不圖種彦の様子を怪しんで、何處ぞ御分でもと氣を揉むものがあれば、種彦は忽ちわざとらしいまでに元氣よく、杯を見事に吞下して、「いや、どうも年ばかりは取りたくないものさ。少し遠路でもいたすと直ぐにこの通りの始末で御座る。」といつものに變らぬ

輕い調子で、「然しアわれ等お互の身に取つて今日ほど日度い日はあるまいて。鶴屋さんが折角のお饗應だ。種彦も仙果も遠慮なく頂戴致すがよいぞ。」と云ひながら然しどうぶ譯か一同の如く心の底から陶然と酔を催す様子は更に見えなかつた。

種彦は先刻から遠山左衛門尉が事をばいかに思ふまいと方めて見ててもどうしても思返さずにはゐられなかつたのである。隨れば十幾年前之居町などで能く見た折の金四郎と今日の左衛門尉とを思ひ比べるに實に不思議な心持になる。遠山は辭を低うして其の邸に伺候した種彦をば喜び迎へ、唇に變らぬ冗談ばなしの中にそれとつかず泰平の世は既に過ぎ恐しい黒船は蝦夷松前あたりを騒がしてゐる折から世は下とも積年の餘弊に苦しみつかれて居る様を見てはわれ人共に公祿を食むもの及ばずながら其れ一廉の忠義を盡さねばならぬと衷心から湧起る武士の赤誠を仄見せて語つた其の態度其の風采、種彦はどうぶ機會かわが身の今日と彼れ遠山の今日とを思比べて、當座の旗本風情にもまだ／＼あんな立派な考へを持つて居るものがあるのか知らと思ふと、そも／＼我から意識して戯作者となりすました現在の身の上

がいかに不安に又何とも知れず氣恥しいやうな氣がしてならなくなつた。然しいかほど深い感慨に沈められても種彦は今更それをば船中のものに向つて語り聞かせる譯には行かぬ。よし話すにしても此の場合思ふやうに打明けて語り得られるものではない。さゝれた酒杯をばさゝれるまゝに吞み干しては返し話掛けられる話をも、心もよそに唯受答へをするばかり。船はいつしか狭い堀割の間から御船手屋敷の垣根下を廻つてひろ／＼とした仙の河口へ出た。

一同は既に十分の酔心地一覺えず聲を揃へて父もや絶望々と叫ぶ。夕焼の空は次第に薄らぎ鐵砲洲の岸邊に碇を下した親船の林なす帆柱の上にちちら／＼と星が泛び出した。仙島では例年の通り狼烟の積古の始まる頃とて、夕涼かた／＼それをば見物に出掛ける屋根猪牙舟は秋の木葉の散る如く河面に漂つて居ると、夕風と夕汐の此の刻限を計つて千石積の大船は又幾艘となく沖の方から波を蹴つて此の港口へと進んで来る。其の大きな高い白帆のかげに折折眺望を遮られる深川の岸邊には、思切つて海の方へ突出して建てた大新地小新地の樓閣に早くも燈火の光と湧起る絃歌の聲。すると櫓のやうに竝進つた其等の櫓橋へ

によつて此の春より御吟味になつた。それや此れやの事から世間では誰いふともなく好色本草双紙類の作者の中でも取分け修紫田舎源氏の作者柳亭種彦は光源氏の昔に譬へて畏多くも大御所様大奥の御事を漏したにより必ず厳しい御咎になるであらうとの噂が頗る喧しいのであつた。種彦はわが身の上は勿論若しや其の爲めに罪もない繪師や版元にまで禍を及ぼしてはと一方ならず心配して、斯うなるからは誰ぞ公邊の知人を頼り内々事情を聞くに如くはないと兼て芝居町などでは殊の外懇意にした遠山金四郎といふ旗本の放蕩兒が、いつか家督をついで左衛門尉景元と名乗り、今では御本丸へ出仕するやうな身分になつてゐるのを幸ひ、是非にもと絶付いて願内々に面會を請うた次第であつた。

「先生、早速で御座いますすが御屋敷の御首尾はいかゞで御座りました。」

一同は「先種彦を二階へ案内するや否や、茶を持運ぶ女中の立去るをおそしと、左右から不安な顔を差伸すのであつた。種彦は脇差を傍に扇を使ひながら少し身をくつろがせ、

「いや、もうさして御心配なさるにも及ぶまい。今日遠山殿の仰せには町方の事とは少々御役向

が違ふ故、あの方の御一存では随とした事は申されぬが、何につけお上に於ては御仁恵が第一。それに取分け此度の御趣意と申すは上下擧つて諸事御檢約を心掛けたいといふ思召故下々のものも其の心掛にてそれ／＼家業に精を出し贅澤なことさへ致さずばして厳しい御詮議にも及ぶまいとの仰せ。それだによつて此際はお互によく氣をつけ精々間違のないやうに慎しんで居るがよからう。」

「左様で御座りましたか。それでは別に差當つて御叱を蒙るやうな事はなからうと仰有るんで御座いますすな。いや、先生、其の御言葉聞きまして手前はもう生き返つたやうな心持になりました。」

版元鶴屋は機許の汗をばそつと手拭で押拭ふと、國貞も覺えずほつと大きな吐息を漏して、

「手前も御同様、やつと此れで安堵致しました。何事によらず根もない世上の噂といふやつほどいま／＼しいものは御座りません、初手からかうと知つてゐればこんなに疲せるほど心配は致しません。」

「へく鎖井戸の師匠の仰有る通りさ。手前なんざア其れが爲めあれからといふものは夜もおちおち睡眠りません。」と鶴屋の主人は全く生返

つたやうに心氣つき、先生、それではもうそろそろお船の方へお移りを願ひませうか、お歸りは丁度夕涼の刻限かと存じまして先程一挽明の酔月へつもらぬものを命じて置きました。

「それは／＼。いつもながら鶴屋さんの御心遣には恐縮千倍。」

「一言葉では却て痛み入ります。實はまだいろいろと御話を承りたいことが御座ります。」

「丁度今日は鎖井戸の師匠もおいでで御座りますし、着替唯今板木に取りかゝつて居ります田舎源氏の三十九篇、あれはいかゞ致したもので御座りませうか、いづれ船中で御ゆるり御相談致したいと存じて居ります。」

一同は種彦を先に棧橋につないだ屋根船に乗り込んだ。

## 二

昔中一面に一人は菊慈童、一人は般若の面の刺青をした船頭が櫓を解くと共にとんと一突棧橋から舳を突放すと一同を乗せた屋根船は丁度今が盛の上汐に送られ、滑るがやうに心持よく三十間堀の堀割をつたはつて、夕風の空高く竹間屋の青竹の蔭立つて居る竹河岸を左手に眺め眞直な八丁堀の川筋をば永代さして進んで



の川しめや月の友、と吟じられた程の絶景ゆゑ先づ兄たりがたく弟たり難き名木でせう。それから根岸の御行の松、龜井戸の御腰掛の松、麻布には一本松、八景坂にも鐵掛の松とか申すのがありました。」と國貞は鶴屋の主人と背向つて頻に杯を取交してゐた時、行き交ふ一般の屋根船の中から、

「月あかり見ればおぼろの舟の内、あだな二上り爪弾きに忍び逢うたる首尾の松」と心悪いばかり、目前の實景を其の儘中音の美聲に誦ひ過ぎるものがあつた。

先程から舳へ出て、稍呑み過ぎた酔心地を得も云はれぬ川風に吹拂はせてゐた二人の門人種員と仙果は覺えず羨望の眼を見張つて、過ぎ行く舟の奥床しくも垂込めた簾の内をば窺見ようと首を伸したが、かの屋根船は早くも遠く川下の方へと流れて行つてしまつた。然しいよいよ首尾の松が水の上にと長く、其の枝を伸してゐるあたりまで來ると、川面の薄霧さを幸に彼方に、も此方にも流れのまゝに漂してある屋根船の数々、其の間をば一同を載せた舟が小艇に連を立てつゝ、通抜けて行く時中にはあつた。どの船からと云ふ事もなく幽暗なる半

月の光に漂ひ聞ゆる男女が私語の聲は、近々向河岸なる椎の木屋敷の塀外から幽かに夜智籠の掛聲を吹送つて來る川風に得も云はれぬ匂袋の香を伴はせ、又途切れがちな爪弾の小唄は見えざる河心の水底深くざぶりと打込む夜網の音に遮られると、嚴重な御藏の襟内に響き渡る夜廻りの拍子木が夏とけびひながら夜も早や初更に近い露の冷さに、何とも知れず人戀しき秋の夜の風情を覺えさせるのであつた。

餘りに美しい邊の情景に、若い門人達ばかり誘ひ出される淫蕩な空想にもつかれ果てたのか、今は唯遺瀨なげに胸を組んで首を垂れてしまつた。國貞が鶴屋の主人を相手に何ける酒も早や盡きたらしい。御座河岸の渡を越して彼方に横はる大川橋の橋間からは遠い水上に散亂する夜釣の船の篝火さへ數へられる程になると、鼓木の茶屋の賑と町を歩く新内の流しが聞えて駒形堂の白い壁が月の光に蒼く見え出した。

### 三

一同は禁殺碑の立つてゐる御堂の裏手から岸に上つた。

國貞は爰から大川橋へ廻つて龜井戸の住居ま

で智籠を雇ひ、又鶴屋は兩國橋まで船を漕ぎ戻して通油町の店へ歸る事にした。種彦は遠くもあらぬ町原の住居まで、是非にもお供せねばといふ門人達の深切をも無理に斷り、夜涼の茶屋々々賑々鼓木の大道を横斷つて、唯一人薄暗い町家つゞきの小道をば三島門前の方へとぼとぼ老體の力を運ばせたのである。

種彦は先程からは非にも人を遠ざけ唯一人になつて深く己が身の上を考へて見ねばならぬ、この年まで云はれ何の氣もなく暮して來た其の長い生涯を回顧して見べき必要に迫められてゐたのであつた。昔は自分なぞよりはもう一層性の悪い無賴漢のやうにも思つてゐた遠山金四郎が今は公儀の重い御役を勤め眞實世の右様を嗜み愛へてゐるかと思へば種彦は床の間に先祖の鎧を飾つた遠山が書院に對座して話をしてゐる間から何時となく苦しいやうな切ないやうな結恥しいやうな何とも云へない心持になつたのである。一體どうして然う云ふ妙な心持になつたのであらう。まづその原因から考へて見なければならぬ。武士の家に生れた其身は子供の時から耳に腥脂のできる程云聞かされた武士の心得武士の道。然しそんなものは此の歲月唯お暢平のやうな狂言戯作の筋立にのみ必要な

と二挺槍いそがしく輻湊する屋根船猪牙舟からは風の工合でどうかすると手に取るやうに藤八拳を打つ聲が聞えて来る。

國貞は近頃一枚繪にと描いてやつた深川の美女が噂をしはじめると鶴屋の主人は父彼の地を材料にした爲永春水が近作の實行を評判する。その間もあらず一同を載せた屋根船は殊更に流れの強い河口の潮に送られて、夕霧の中に横る永代橋を滑るが早い、三股は高尾稻荷の鳥居を彼方に見捨て、魔方の雲の帯、なかなかずの時鳥と、蜀山人が吟詠のめいやすにそぐる天明の昔をしのばせる假宅の繁昌も今は唯だ蘆のみ茂る中洲を過ぎ、氣味悪く人を呼ぶ船頭頭の牌を指定めぬ水禽の鳴音かと怪しみつつ新大橋をも後にすると、さて一同の目の前には天下の浮世海船が幾人よつて幾度丹青をぬしても到底描き盡されぬ兩國橋の夜の景色が現はれ出るのであつた。

去年に比べると今年は御儉約の御願が出てから間もないためか、川一丸とか吉野丸とかいふ提灯を下げ連れた大きな屋形船に美女と美酒とを満載して、吹けよ河風上れよ簾の三下りに存めや唄への空遊を競ふものは稀であつたが、其の代り小艇に蘊子の空解も締めぬが無理

かと簾下した低唱淺酌の小舟は却ていつにも増して多いやうに思はれた。兩國橋の橋間は勿論料理屋の立並ぶあたり一帯の河面はさすがの大河も込合ふ舟に蔽盡され流るゝ水は簾から玉臂を伸べて、村を流ふ美人の酒に湧いて同じく酒となるかと疑はれる。

鶴屋の主人は、「先生。とよびかけて、いっ見ましても御府内の御繁昌は家勢なもので御座います。いかに御座います。どこぞ其の邊の移橋へ着けまして三人綺麗なところを呼寄せ久振で先生の美音を拜聴いたしたいもので御座ります。」

「これはとんでもない。かう年を取つては色氣よりも噴氣と申したいが、此頃ではその噴氣さへとんと衰へ、いやはや、もうお話にはなりません。折角の御酒も御覽の通り二三杯いたぐと唯うとくんと眠氣を催すばかりさ。さすがに蜀山先生はうまい事を書いて居ますよ。先達さる人から奴師勞之と申す隨筆を借りて見ましたがな……と種彦が先程から舷に脇をつき船のゆれるがまゝに全く居眠りでもしてゐたらし、稍坐住居を直して、今更のやうに四邊の眠ひを打見遣りながら、どうかすると、摺交ふ舟の唄又は岸の上なる見世物小屋の騒ぎにも打消

される程な静かな聲で、蜀山人が隨筆奴師勞之の終りに、老病ほど見たくもなくいまゝしきものはなし……酒のみでも眠ふくるゝのみにて微塵に至らず物事にうみ退屈し面白からず聲色の樂もなくなつた寝るをもて樂みとす奇書も見るにたらず珍事もきくにあきぬ。若き時酒のみでとろ／＼眠りし心地と抑れたる妓のもとに通ひし樂は世をへだてたるごとくなりきと書いた文章の事をしみぐと語り出して、其の終に添へた狂歌一首ながらへば寅卯辰巳己のばれん、うしとみし年今はこひしき。一それをば、我が身の上を詠じたものゝやうに幾度か繰返して聞かせるのであつた。屋根船は其の間にいつか兩國の眠を過ぎ過ぎて川面の稍薄暗い御藏の水門外に差掛つてゐたのである。

燈火の光に代つて蒼々とした夏の夜空には半輪の月。行手の岸には墨繪の如くにじんだ首尾の松。國貞は猪口を手にしたまゝ、「唐崎の松は花よりおほるにて」と感に堪へたる如く呟いた。「御府内には随分名高い松の木があるやうで御座いますが矢張あの首尾の松に留めを刺しますかな。」と答へたのは鶴屋右衛門である。「左様小名木川の五本松は芭蕉翁が川上とこ

して霞戸越しにも軽く匂はせる仙女香の薫と共  
に、髪は下り髻の縁巻くづし、銀胸の黄楊の櫛  
をさし、團十郎縞の中に丁子車を入れた中形  
の浴衣も涼しげに、小柳の縞の帯しどけなく引  
掛にしめた女の姿、年の頃はまだ二十ばかり  
と思はれた。

「お園か。」とやさしく種彦は机の上に脇をつい  
たま、此方を顧み、「おツつてもう子刻だらう  
に階下ではまだ寝ぬのかえ。」

「はい。只今御新造様ももうお休みになるから  
と表の戸閉りをなすつて被居います。」と女は  
漆塗の蓋をした大きな湯呑と象牙の箸を添へた  
菓子皿とを種彦の身近に薦めて、前插の簪の  
落掛かるのをさし直しながら、「お煙草盆のお火  
はよろしう御座りますか。」

「いや結構だ。何や彼やとよく氣をつけてくれ  
るから家のものも大助りだ。お園や、お前さん  
も一ツ摘みなさい。廊にゐて贅澤をした御前  
には珍しくもあるまいが、此頃は諸事御儉約の  
世の中、衣類から食物まで無益な手数をかけた  
ものは一切御禁止といふきびしい御觸だから、  
此の都鳥の落雁も當分は食納になるかも知れ  
ぬ。今の中遠慮なく食べて置くがよいぞ。」

新造様から澤山頂戴いたしました。時に旦那さ  
ま、さう申せば此頃は何とやら大層世間が騒々  
しいさうで御座りますが、此方様に私見たや  
うなものが居りまして萬一の事でもありました  
らと、それがもう心配でなりません。」

「何さ、その事ならちつとも氣を揉むには當ら  
ぬ。お前の事は初手から云はじ私が酔興でか  
うして隠つて上げてゐるの故、餘計な氣をさせ  
ずと安心してゐなさいがよい。」と種彦は取上  
げる銀のべの長煙管に煙を吹きつゝしみんとお  
園の様子を打眺め、「それにもうその風俗なら誰  
が見ようと大丈夫だわ。中形の浴衣に縁巻崩し  
晝夜帯の引掛といふ様子なり物言ひなり仲町の  
妓と思ふ人はあるかも知れぬが、つひぞ此間ま  
で廊にゐなすつた華魁衆とはどうして／＼氣が  
つくものか。」

「ほんに然うだと、何んなに嬉しいか知れませ  
ん。どうか一日も早く腰氣になりたいものと一  
生懸命に氣をつけてゐるのでありますが、どう  
かいたすといふ口の先へさうさますのありんす  
のと、思はず里の訛が出さうになりまして、御  
新造様とお話をしてゐましてそれ／＼もう  
心配でなりません。

「大きにさうであらう。まア何にしても當分は

世を忍ぶ身體。すつかり先方の話がまとまる  
までは大事の上にも大事を取るに越した事はな  
い。もう暫くの辛抱だによつて滅多に外なぞへ  
は出なさらぬがよいぞ。」

「はい。それはもう能くわかつて居ります。」と  
辭儀をしながらお園は猶何やら傍にゐて盡きせ  
ぬ身の上の話でもしたいやうな様子であつた  
が、言葉絶やすと其にそのまゝ腕を組む種彦  
の様子に、女は所在なけに其の後姿もしよん  
ぼりと再び靜かな贅音を梯子段の下に消してし  
まつた。

#### 四

家中はそれなり寂として物音を絶やした。今  
までは折々門外の小路に聞えた夜遊の人の鼻  
唄、遠くの町を流して行く新内の連弾、枝豆白  
玉の呼聲など、いつ深けるとも知らぬ町の夜の  
物音は忽ち彼方此方に鳴り出す夜廻りの拍子  
木に打消される折から浅草寺の巨鐘の聲はいか  
にも嚴かに又いかにも穩に寢靜まる大江戸の  
夜の空から空へと響き渡るのであつた。すると  
毎夜種彦の費を惜まず、三筋も四筋も燈心を  
投入れた修紫樓の圓行燈に、今こそとゞはぬ  
ばかり獨り此の戯作者の庵をわが物類に、その



ものとしてゐたのではないか。それが今どうして突然意外にも不思議にも心を騒がし始めたのであらう。思返せば二十歳の頃不圖安居の或夜野暮な屋敷の大小の重きを覺え御奉公の束縛なき下民の氣樂を羨みいつとしもなく身を其の群に投じて茲に早くも幾十年。今日しも遠山の屋敷の玄關に音づれる其の日まで夢にさへ見ることを忘れてゐた武家の住居。寒氣な程にも質素に悲しきまでも淋しい中にふふにはれぬ森嚴な氣を漲らした玄關先から座敷の有様。また其の進すがら横手遂に幸橋の見附を眺めやつた御廊外の偉大なる夕暮の光景が、突然の珍らしさにふと少年時代の良心の殘骸を呼聲したといふより外に有るまい。

然し種彦は今更にどうとも仕様のない此の煩悶をば強ひても狂歌や川柳のやうに茶化してしまはうと思ひながら、歩いて行く町とところどころに床几を出した麥湯の如き人達の厭らしい風俗それに戯れる若者の様子を目撃しては、以前のやうにこれも彼の式亭三馬が筆のすきみの其の儘にと笑つてばかりは居られないやうな氣になるのであつた。我が家に近い桃林寺の眞手では酒買ひに行く小坊主の大膽に驚き、大岡殿の堀外の暗きには夜鷹に挑む仲間の群に思はず

も眼を外向けつゝ、種彦は漸く其の家の門にたどりついた。

直様家内のものでをも遠ざけ、書ものをするからとて、二階の一間に閉ぢ籠つたが、見廻せば八疊の座敷狭しと置立てた本箱の中の書物は勿論、床の飾物から屏風の繪に至るまで凡て修紫樓と自ら題したこの住居のありさまは、自分が生れた質素な下谷御徒町の組屋敷に比べてそも何と云はうか。身に帶びる其れも極く輕い細身の大小より外には物の役に立つべき武器とては一つもなく、日頃身に代へてもと秘藏するのは古今の浮書、稗史、小説、過ぎし世の婦女子の玩具にあらずんば傾城遊女が手道具の類ばかり。嗚呼思へば唯うら／＼と喝渡る春の日のやうな文化文政の泰平に沈溺して天下の事は更なり、わが髪は白くなるのも打忘れ世にいふ惡所場をわが家の如く今日は青原明日は芝居と身の上知らず遊び歩いてゐた其の頃には、どういふ譯か人の道を忘れた放蕩惰弱なものゝ厭しい身の末が人相の鏡に散る花かとはかり美しく思はれて、われとても何時か一度は無常の風にさそはれるものならば今も猶冥輪心中と世に歌はれる藤枝外記又歌比丘尼と相對死の浮名を流した某家の侍のやうに、せめて利那の麗し

い夢に身を果してしまつた方がと、折等にも聞く淨瑠璃の一節にも人事ならぬ暗涙を催す事が度々であつた。日毎に刺る月代もまだその頃に青々として美しく、すらりとして丈高く長い頭に癖のある細面の俊しきは、時の名優東三津五郎を生寫しと到る處の茶屋々に云々書けるが何よりも嬉しく、わが名をさへも種彦と書き、いつかは老の寢覺にも忘れがたい思出の夢を過つて年毎に青線りては出す戯作のかずかず。心なき世上の若者淫奔なる娘の心を誘ひ、猶それにも飽き足らず是非にも弟子にと頼まれる勘當の息子達からは師匠と仰がれ世を毒する艶しい文章の講釋、遊里戯場の益もない故實の譚議。今更にそれを悔んだとて何としよう。自分を育てた時代の空氣は餘りに軟く餘りに他愛がなさ過ぎたのだ。近頃日光の御山が頻りに荒出して何處やらの尺館では螢や蛙の合戦に不吉の兆が見えたときやら。果せるかな恐ろしい異人の黒船は津々浦々を脅かすと聞けれど、あゝ此の身は今更に何としやうもないではないか……

種彦は書きかけた田舎源氏續篇の草稿の上に片肘をついたまゝ唯茫然として天井を仰ぐばかりである。物憂しい聲音が梯子段に聞えた。そ

か。仔細あつて我家にかくまふ其までは新吉原佐野槌屋の抱へ喜峰と名乗つた其の女である。おろ／＼しつゝ、庭の柴折戸に進寄り吾せぬやうに掻金をはずすと自ら開く扉の間から物腰のやさし氣な男が一人手拭に顔をかくし這はぬばかりに身をかきめて忍び入つた。二人は少時立ちすくんだまゝ互の姿をさへ恐るゝ如く息を凝して見合つてゐたが矢庭に雙方から倒れかゝるやうに寄添ひざま、ひしと抱合つて、そのまゝ女は男の胸に、男は女の肩の上に顔を押當て唯只聲を吞んで泣沈んだらしい様子である。

種彦は最初一日見るが早い、忍びつた彼の男といふは程遠からぬ鳥越に立派な店を構へた紙問屋の若旦那で、一時己れの弟子となつた處から柳絮といふ俳號をも與へたものである事を知つてゐた。若旦那柳絮はいつぞや仲の町の茶屋に開かれた河東節のお後ひから病付きとなつて、三日に上げぬ廊通ひの末はお極りの勘當となり、女の仕送りを受けて、小梅の里の知人の家に其日を送つてゐる始末。もしや此儘打捨て置いたなら心中もしかねまいと、種彦は知己の多い廊の事として適當の人を頼んで身請や何かの事は迫ての相談に一先づ女をわが家に引取り

男の方へは親許の勘當ゆりるまで少しの間辛抱して身をつゝしむやうにと云合めて置いたのである。然るをやつと半月たつたゝぬに若い二人はもう辛抱がしきれずに、いつ課し合したのか互に時刻を計つて忍逢はうといふ。誠に怪しからぬ事だと種彦は心の中に憤らうと思ひながら、自分にも幾度か覺えのある若い昔を思ひ返せば、何も彼も無理はない事と暗に同情してしまはなければならぬ。それと共にいかに懇めると云ひながらかほどまで義理も身も打捨て、櫛はぬ若い盛りの無分別ほど義理しいものはないと思ふのであつた。あゝ、あの無分別の半分ほどもあるならば自分は徳川の世の末がいかに成行かうと、或は自分の身がいかに處罰されようと、そんな事には頓着せず、自分の書きたいと思ふところをどし／＼心の行くまゝに書く事ができたであらう。悲しむべきは何につけても勇氣の失せ行く老境である。通り過ぎる村雲がいつの間にか月を隠してしまつた。すると最前から瞬きしてゐた石燈籠の火も心あり氣にはたと消えるを幸ひ、二人の男女は庭の垣根に身を寄せ合せて互の顔さへ見分けぬ程な闇の夜を却て心安しと、積る思ひのありたけを語り盡さうと急れば、一時鳴く音を

止めた蟲さへも今は二人が陰言を外へは漏さじと庇ふがやうに庭一面に鳴きしきる。やがて男は名残惜し氣に幾度か躊躇ひつゝも漸くに氣を取直し地に落ちた手拭に再び顔をかくし立上ると、女も同じく落ちた手拭に心付きたがら亂れた姿を恥らふ色もなく少時寄添ひ、やがて男が出て行く庭木戸を閉めた後までもなかく其の場を立ち去りかねた様子であつた。

## 五

登日の朝種彦は獨り下座敷なる竹の湯縁に出て顔を洗ひ食事を済ました後さへ何を考へるともなく折々正拔で頭髯を抜きながら昨夜若い男女の忍び逢つたあたりの庭面に茫然眼を移してゐた。折から、

「おや先生もうお目覺で居らっしゃいますか。」  
「大層お早いぢや御座いませんか。」といひながら愛雀軒といふ扇額を掛けた庭の柴折戸を遠慮なく明けて入つて來たのは柳下高種員、笠亭仙果と呼ぶ兩人の門弟である。全くいつもより朝はまだ餘程早かつたらしい。二人が押開く柴折戸の櫓に觸れて垣際に茂つた小笹の葉木からは昨夜のまゝなる露の玉が斜にさし込む朝日の光にきら／＼と輝きながら苔の上にこぼれ落

光はいよく、鮮かに其の影はいよく、涼しく、  
唐机の上なる書掛の草紙と多年主人が愛顧の  
文房具とを照し出す。

孟宗の根竹に槲花を閉つた筆の中に亂れさ  
す長い孔雀の尾は行燈の火影に金光燦爛として  
眼を射るばかり。長崎渡りの七食屋の水人は焦  
付の繪模様に遠洋未知の國の不思議を思はせ、  
赤銅色繪の文鎮は象嵌細工の織物を誇れば、  
倭なる茄子形の硯石は紫檀の蓋に刻んだ主人  
が自作の狂歌、

名人になれ〜茄子と思へども  
とにかく下手は放れざりけり  
といふ走書の文字までをあり〜と讀ませるの  
であつた。

種彦は忽ち今までの恐怖と煩悶に引替へて  
いかなる危険を冒しても、この年月精魂を籠め  
て書きつゞけて來た長い〜物語を、今夜の中  
にも一氣に完成させてしまはなければならぬや  
うな心持になるのであつた。思返すまでもな  
く、それは實に寛政の末つ頃ふと己れがまだ西  
丸の御小姓を勤めてゐた頃の若い美しい世界  
の思出されるまゝ、其の華やかな記憶の夢を物  
語に作りなして以來年毎に賣出す合巻の繪草紙  
の數も重つて天保の今日に至るまで早くも十幾

年といふ月日を闊した。其の間といふものは年  
毎に咲く花は年毎に散つて行つても、又年毎に  
賢の毛の白さは年毎に刻まれる額の皺と共に増  
つて行つても、この蔭紫樓の夜更に照す行燈  
のみは十年一日の如くに夜とし云へば、必  
ず今見る通りの優しい、麗しい光をわが机の  
上に投げ掛けてくれたのである。種彦は半ば春掛  
けた一春を下に置くと共に思摺る暇もどかし  
氣に筆を漬つたがやがて小半時たゝぬ中に忽  
ち長大の筆を漏して其のまゝ筆を投擲してしま  
つた。そして恐るゝ如くに机から身を退き、  
どつきりと床の柱に背を掛け眼をつぶり手を  
拭いたかと思ふと、またもや未練らしく首を延  
して、此方からしげ〜と机の上なる草紙を眺  
めるのであつた。

突然庭の彼方に當つて風の音とも思はれぬ怪  
しい物音がした。種彦は慄然としてわが影にさ  
へ恐れを抱く野犬のやうに耳を聳てたが、する  
と物音はそれなり聞えず二階の夜は以前の通り  
柔かな同行燈の光ばかり。けれども種彦が再  
び草紙の上に眼を注がうとした時今度は何者か  
竊に忍むるやうな音音が聞えたので、いよく  
顔の色を失ふと共に行燈の火を吹消すが早い  
種彦は一刀を手にして二階の丸窓をば音せぬや

うに聞き庭の方を見下した。半月が斜めに悲  
しみに丁度家の屋根の上に懸つてゐる。晴れ  
た空には早や秋の氣、十分に渡つてゐるせ  
か、河を渡つてゐる光はあちかゝる。種彦の  
月よりも却て明く石燈籠の火の消えたる小庭のす  
みずみまで限なく照してゐるやうに思はれた。  
犬の吠える聲もない。怪し氣な人影などは更に  
見當らう筈もない。手人を惹かぬ庭の樹木と共に  
飛石の上に置いた讀書の植木は涼しい夏の夜  
の露をばいかに心地よげに吸つてゐるらしく  
庭かなその影をば滑らかな苔と土の上に横へて  
ゐた。軒の風鈴をさへ定かには鳴らし得ぬ微風  
河に近い下町の人家の屋根を越して唯緩く  
大きく流動してゐる夜氣のそよぎは、窓から首  
を差延す種彦が髭の毛を何とも云へぬ程爽かに  
軽く吹きなびかせる。種彦はわが身の安危をも  
一時に忘れ果てたやうに、暫は茫然と此の得も  
ぶはれぬ夜の氣に打たれてゐたが、する中、忽  
然わが家の縁先から、こけ如何に、そつと庭の  
方へと降立つ幽靈のやうな白い物の影、  
再び刀を杖に半身を屋根の方へ突出してよ  
くよく見れば、消えようとして更に明く頻と瞬  
きする石燈籠の火影にそれは誰あらう先程湯呑  
に都鳥の菓子を持添へて來たかのお園ではない



「はゝゝは。幾程お前達が口惜しく存じても誂ない事さ。兎角人の目を引くやうな綺麗なものは何の彼のと如まれ難物を付けられるものさ。下々の人情も天下の御政事も早い話が皆同じ譯合と諦めてしまへば其れで済むこと。あんまり大きな聲で減多な事を云ひなされるな。口舌元來禪之基。壁にも耳のある世の中だ。まあア長いものには巻かれてゐるが一番だよ。」

「そりやアもう仰有るまでもなく承知いたして居ります。つまらない饒舌をして掛替のない首でも取られた日にや御前小法師が御座いませんや。かういふ時には何か一首巧い落首でもやつて内説でそつと笑つて居るが關の山で御座います。」

「落首といへばさうく、昨夜先生がお歸りになつてから鶴屋の旦那に聞いた話で御座りますが、あの和久町の一勇齋國さんが今度の御政事向の事をばそれとなく源の頼、御所の場に警へて百鬼夜行の圖を描き三枚續きにして出したとかいふ事で御座ります。」

「いやはや、あの男も持つて生れた悪い病がまだ直らぬと見える。國芳も國貞も俱に故人。國芳の高弟だが、二人はまるで氣性がちがひ國芳は喧嘩の好きな勇みな男いかさま其の位の

事はしかねまいて。一寸の蟲にも五分の魂といふが當節はその蟲をばちつと殺してゐねばならぬ世の中。ならぬ堪忍するが堪忍とはまづ此處等の事だわ。」

「何に致せいやな恐ろしい世の中になつたもので御座います。この分では先生、とても田舎源氏の後篇はいつ拜見致される事やら、情ない事で御座いますなア。」

「私も最う追々に取る年だ。世間の取沙汰の靜になるのを待つてゐる中には大方眼も見えず筆を持つ手も利かなくならう。」

淋しい微笑と共に種彦は言葉絶やした。二人の門弟も今は言出すべき言葉なく、道場のなゝい視線をば追々に夏の日のさし込んで来る庭の方へ移したが、すると偶然垣根の外には大方一月寺あたりから来る度無用であらう、逆答に吹き調べる虚空鉦慕の一曲か一座の愁をば一層深くさせるやうにいと物淋しく聞え出すのであつた。

## 六

夏の盛の六月もいつか晦日近くなつた。お江戸の町々を歩く帳帳賣の聲と定賣賣の環の音に日盛の聲は依然として何の變りもなかつたが兎に角眉の表だけはいよいよ秋といふ時節が來ると、道行く若いものゝ口々には早くも吉原の燈籠の聲が傳へられ、町中の家々にも彼方此方と軒端の燈籠が日につき出した。

上用の明ける其の日を期して、池上本門寺を初め諸處の古寺では賣物の蠱下旁々諸人の拜觀を許す處が多い。種彦の家でも同じく其の頃に毎年蠱書什器の蠱柳をする。そして其の日の夕刻からは極く親しい友人や門弟が召集つて主人柳亭が自置の古書珍本の間に酒を酌み妓を聘して俳諧又は柳風の連座を催すのが例であつた。けれども今年ばかりはわざ／＼等の蠱書什器を取り出して嚴しい禁令の世の風に曝すといふ事がいかにも空恐ろしく思はれた處から、種彦はわが秘藏の寶をもよし蠱が喰ふならば喰ふが／＼と打撿て、此く事にした。

實際種彦はもう何をする元氣もなくなつてしまつたのである。老朽て行く其の身とは反句に、年と共に却て若く華やかに成り行くその名聲をば、さしにも廣い大江戸は忘か三ヶ津の陣にまで喧傳せしめた一代の名をも、あた此儘完成の期なく打撿て、しまはなければならぬのかと思ふと、如何にしても癒しがたい憂憤の情は多年一夜の休みもなく筆を執つて來た精

ちた。種彦は機嫌よく、

「朝起は老人のくせさ。お前近こそ今日は珍らしく早起をしたもんだな。それとも昨夜の暮の引つ返しといふ圖かね。」

「てつきり恐縮と申上げたい處ですが折頃はどうか致しまして。どこもかしこも火の消えたやうでいやや情ない位で御座います。」

「いづこも同じ秋の夕暮かな。」と種彦は戯れながらふと朝風の植込に吹入る簷に「いや暑い暑い」と云つてゐる中も秋風が吹くと見える。」

「眼にはさやかに見えねどもと古歌にも申す通り、風の音にぞ驚かれぬるで御座います。」と云ひながら種彦は懐中の手拭を出して雪駄ばきの裾を拂ひ濡縁の上に腰を下したが、仙果は丁度己が佇んだ飛石の傍に置いてある松の鉢物に目をつけ、女の髪にでも觸るやうな手付で、盆栽の葉を撫でながら、

「先生。これアいつお求めになりました。木の太さと云ひ枝振と云ひ實に見事な盆栽で御座いますな。」

「それは此の中請地村の長身衛といふ松師に頼まれて庭木戸の額を書いてやつた返禮に貰つたのだが、賣買ひにしたらなか／＼吾輩の手に這入る品ではあるまい。」

「御屋敷方でも滅多に此んな名木は見られますまい。」と種彦も今は御簾管の俵庭の方へ眼を移したが突然思ひ出したやうに、「先生。かう云ふ盆栽なんぞはいかゞなものでせう。當節ぢや矢張御人形や錦繪なんぞと同じやうに表向には出せない品なんで御座いませうか。」

「勿論その筈だらうさ。」と種彦は無造作に云ひ捨て、銀の長簾管で軽く灰吹を叩いた。

「へーえ。やつぱり不可ないんで御座いますかね。かうなると手前共にやどうもお上の御趣意が分りかねます。」

「なぜさ、無益なものに贅を盡すなと申すのではないか。」

「それがで御座りますよ、大きな聲では申されませぬが私共の考へますには無益なものに手数をかけて楽しんで居られるやうなら此様結構な事はないぢや御座いませんか。天下太平國土安穩なりやアこそ楽しんで居られるんで御座います。もし此れが明暦の大火事や、天明の飢饉のやうな凶年ばつかり續いた日にやいくら贅澤がいたしたくつてもまさか盆栽や歌仙諸で目を送るわけには行きますまい。處が當節の御時世は下々の町人風でさへ鳥池雪でも降つて御覽じろ、すぐに初雪や犬の足跡梅の花位の事

は吟咏します。それと申すも全く以て治まる御世のおかけ、此様な日出度い事は御座いますまい。」

「成程これア種彦さんの云ひなると通り、恐れながら手前なども今度の御趣意についてや随分と腑に落ちない事が御座います。」

「盆栽に氣を取られてゐた仙果もいつか縁側に腰をかけ、あたりに聞く人もないと思ふ安心から種彦と一緒にたつて遠慮なくその思ふ處を述べようとする。」

「しぐの手前達が兎や角と御政事向の事を取沙汰致すわけでは御座いませんが、先生、昔から唐土の世には天下太平の兆には綺麗な鳳凰とかいふ鳥が無下ると申します。然し當節のやうにかう何も彼も一概に綺麗なものの手数のかゝつたもの無益なものは相成らぬと申してしまつた日には、鳳凰なんぞは卵を生む鶏ぢや御座いませんから、いくら出て來たくも出られなからうぢや御座いませんか。外のものは兎に角と致して日本一お江戸の名物と唐天竺まで名の響いた錦繪まで御差止めになるなぞは、折角天下太平のお祝ひを由しに出て來た鳳凰の頸をしめて毛をむしり取るやうなものぢや御座いますまいか。」

かゝつた女を人の家に隠匿つて置いたなら、わが身のみかは恩義ある師匠にまでいかなる難儀を掛けると測られぬ。それ故事の面倒にならぬ中わが身一つに罪を負つて死出の旅路を志し、何卒後の回向をたのむとあつた。

種彦は菱垣船や十組間屋仲間の御停止よりさしに手堅い江戸中の豪家にして一朝に破産するものゝ妙くない事を聞知つてゐた處から、今更ながら目の當り此度の法令の恐しい上にも恐しい事を思知るばかり。死に、行くといふ若いもの共の身の上については差づめ如何なる處置を取つてよいのやら全く途方に暮れてしまつた。

## 七

全くどうにも仕様のないこの場合に立至つては今更のめくく和樂が親元の紙問屋へ相談にも行かれず、同時に廊の方面にも云はゞそれとなく自分が身請の證人にもなつたやうな關係、柄うつかりと顔出しも出来ぬ。と云つて此儘知らぬ顔に打捨てゝ置かれまいと種彦は思案に暮れたあまり、ふらりと家を出で足の向く方へと歩いて行つた。歩いて行く中には何とかよい考へが出るかも知れぬとたよりにならぬ事をた

よりにするより仕様がなかつた。

さまゝ、大物賣の聲と共にその邊の櫓子窓からは早や摩古の唄三味線が聞え、新道の露地口からは艶かしい女の朝湯に出て行く町家つゞきの横町は、物案顔に俯向いて行く種彦をば直様廣い竝木の大通へと導いた。すると忽ち河岸の方から颯とばかり真正面に吹きつけて来る川風の涼しさ。種彦はさすがに心の憂苦を忘れ果てると云ふのではないが、思へばこの半月あまりは一步も戸外へ出す引籠つてのみ居た時に比べると、おのづと胸も開くやうな心持になり、少時は何の氣苦勞もない人のやうに目に見える空と町との有様をば謔もなく物珍し氣に眺めやるのであつた。

兩側ともに榮飯田樂の行燈を出した二階建の料理屋と、往來を往むるほどに立連つた霞簾張の掛簾屋、又はさまゝなる大道店の日傘の間をば士農工商思ひの扮装形容をした人々が後から／＼と引きも切らずに歩いて行く。それはこの年月幾度と知れず見馴れた上にも見馴れた街の有様ながら、然しこゝに住馴れた江戸っ子の馬鹿々々しいほど物好きな心には、一日半日の間も置きさへすれば忽ちにして十年も見なかつた故郷のやうに謔もなく無限の興味を感じ

させるのである。

早や蟲賣の荷が見える。花賣の籠の中にはも秋の七草が吹き亂れてゐる。然し其様事には目もくれずお蔵の役人衆らしいお侍は仔細らしい顔付に若黨を供につれ道の真中を威張つて通ると、指違ひざまに腰を曲めて急がし氣に行過ぎるのは札差の店に動く手代にちがひない。頭巾を冠り手に珠数を持ち杖つきながら行く老人は門跡様へでもお参りする有徳な隠居であらう。小猿を背負つた袴廻しの後からは包を背負つた丁稚小僧が續く。さいいた風な若旦那は俳諧師らしい十徳姿の老人と連れ立ち、角切しに日傘を翳した上つ方の御女中はちよこ／＼走りの虚無下駄に小腰を取つた藝者と行交へば、三尺帯に手拭を肩にした近所の若衆は襷古本抱へた娘の姿に振向き、菅笠に脚絆掛の田舎者は見返る商家の金看板に驚嘆の眼を睜つて行くくと、その建續く屋根の海を越えては二三羽の鳶が頻と環を描いて舞つてゐる空高く、何處からともなく勇ましい音上げの木遣の聲が聞えて来るのであつた。稍太く低いけれども極めて力のある音頭取の聲とそれについて大勢の中にも取分け一人二人思ふさま甲高な若い美しい聲の打交つた木遣の唄は、折からの穏な秋の日



魂の疲勞を一時に呼吸し、有るかぎりの身内の力を根こそぎ奪ひ去つてしまつたやうな心持をさせるのである。禁令の打撃に長閑な美しい戯作の夢を破らなかつた昨日の日と、禁令の打撃に身も心も恐れちどんだ今日の日のとの間には、劃然として消す事のできない境界ができた。そして今日といふ時流たる此方の境から花やかな昨日といふ彼方の境を打眺めて見ると、わが生涯といふものは今や全く過去に屬して已に業に其終局を告げてしまつたものとしか思はれない。何一ツ將來に對して豫期する力のなくなつた。何の程のいたましきは己が書齋の書棚一ぱいに飾つてある幾多の著作さへ、何等は早晩となく自分の著作といふよりは寧既に死んでしまつた或親しい友人——其の生涯の出来事を自分は盡く知り抜いて居る或親しい友人の遺著であるやうな心持がする。

師彦は日毎教を乞ひにと承ねて来る門弟達をも次第々に遠ざけて、唯一人二階の一間に閉籠つたまゝ、晝となく夜となく、老眼鏡の力をたよりに抑自分かまだ柳の風成など名乗つて狂歌川柳を口咏んで居た頃の草双紙から最近の隨筆用捨箱などに至るまで、凡て立派な套入にしてある著作の全部をば一冊々々取出し

て讀み返しつゝ、嗚呼あの双紙を書いた時分には何をして居た、あゝ此の物語を書いた頃には自分はまだ何歳であつたかと徒に耽る追憶の夢の中に、唯うつら／＼とのみ其の日其の夜を送り過した。宛ら山吹の花の實もなき色香を誇るに等しい放蕩の生涯からは空しい癡情の夢の名残はあつても、今にして初めて知る、老年の慰藉となるべき子孫のない身一りの淋しさ果敢さ。それを堪へ忍ばうとするには全く益もない過去の追憶に萬事を忘却するより外はない……

七夕の祭はいつか昨日と過ぎた。小夜更けから降り出した小雨のまた何時か知ら止んでしまつた翌朝、空は初めていかにも秋らしくどんよりと曇雲り、濡れた小庭の植込からは爽やかな涼風が動いて来るのに、師彦は何といふ譯もなく瓦焼く蟬も哀れに橋場今月の河岸に立初める秋の風情の暮れて見たく、臥床を出るや否やいそいで朝飯を準備しようとして下座敷へ降りかけた時出合頭にあつたどしく椅子段を上つて來たのは年寄つた宿の妻であつた。しかも容易ならぬ事件を種彦に傳へたのである。

小雨をば降る七夕の昨夜久しく隠まつて置いたかのお園は何處へか出外してしまつたものと

見え今朝方寢床は漢抜の襟となり、残るは唯男が二通の手紙ばかりといふ事である、何彦は机の上の眼鏡取る手も遅く男が手紙を讀み下した。海山にもかへがたき御恩を仇にいたし候罪科、來世のほどもおそろしく存じまのらせ候……とあつてお園の方の手紙にはたい二世も三世までも契りし御方の御身上に思ひがけない不幸の起りし爲め、とても此世では添はれぬ縁故、

一先づわが親中の知人をたより其處まで落延びてから心安く未來の冥加を祈り共々にあの世へ旅立つと云ふ事の次第がこま／＼と物哀れに書いてあつた。覺えず涙に曇る眼を拭ひ師彦はやがて男の手紙を開くに及んで初めて深い事情を知り得た。先頃から、此れも要するに此度の御政事向御改革の影響と云はねばならぬ。若旦那の親元なる紙問屋は江戸中問屋十組の株が突然御廢止になつた爲めそれやこれやの手違ひより俄に莫大の損失を引起し家計を人手に渡すも今日か明日かといふ悲運に立至つた。親の家が潰れてしまへば頼みに思ふ番頭から遊びを入れて身請の金を才覺して貰はうと云ふ望も今は絶えた譯。さらばと云つてどうして今更お園をば二度と愛き川竹の苦界へ沈められよう。身請する力も望みもなくなつて唯いつまでも大金の

「さうさな。人の難儀を見て置くも氣の毒ながら又何ぞ後の世の語草にならうも知れぬ。どれぶら／＼参らうか。」

三人は歩き出した。雷門前の雑沓はどうやら静まつた様子であるが、まだ此の邊をば彼方此方と不安な顔付して行交ふ人達の口々に、町木戸の大番屋で召捕れた賣女の窮命されてゐる有様が片に鰭添へていかにも酷たらしく言傳へられてゐる最中である。種彦を先に種良と仙果は雷門を這入つて早足に立並ぶ珠數屋の店先を通過ぎ二十軒茶屋の前を歩いて行つたが、いつも五月蠅ほどに客を呼ぶ女共はやがて仁王門を濟入つた楊枝店も同じ事で、いづれも眞直な顔をして三人四人と寄合ひながら何やらひそひそ話合つてゐると、土地の顔役らしい男がいかにも事あり氣に彼方此方と歩き廻つてゐた。然し何と何つても流石は廣い觀音の境内、今方そんな騒ぎのあつたとも心附かぬ参詣の群集は相も變らず本堂の階段を上り下りしてゐると、いつものやうに、これも念佛堂の横手に陣取つた松戸源水、又はかの風流志道軒の昔より境内の名物となつた辻講釋を初めとして、其邊に同じやうに霞笠張の小屋を仕つらへた金食屋や桶抜け籠扱などの輕業師も追々に見物を呼び集

めてゐる處であつた。

一同はそれ等の小屋をも後にして俗に千本櫻と云はれた櫻の立木の間をくぐり抜け金龍山境内の裏手へ出るとそとる本山開基の畠を思はせる程の大木が鬱々として生茂つてゐる。其の木蔭に土の場と水茶屋の小家は幾軒となく低い鱗葺の屋根を並べてゐるのである。毎夜煩々として吉原の河岸通をぞめて歩く其連中と同じやうな身なりの男が相も變らず其の邊をぶらりぶらり歩いてゐたが、さすがに唯今方世にも恐ろしい騒動のあつた後とて女共は一齊に聲を潜め姿を隠してしまつたので、いつもは其程に耳立たない裏田圃の蛙の啼く音と梢に騒ぐ蟬の聲とが今日に限つて全く此の境内をば号院らしく幽邃閑雅にさせてしまつたやうに思はれた。さながら人なき家の如く堅くも表口の障子を閉めてしまつた土弓場の軒端には折々時ならぬ病葉の一片二片と閃き落ちるのが殊更に襟深く、霞笠を立掛けた水茶屋の床几には從に磨き込んだ眞鍮の茶釜にばかり梢を漏れる初秋の薄日のきら／＼と反外するのが云ひ知れず物淋しく見えた。何處か見えないイ立の間から頻と笑ふが如き鳥の聲が聞える。種彦は何といふ譯もなく立止つて梢を扨仰い

だ。枯枝の折れたのか乾いた木の皮と共に木葉の間を滑つて軽く地上に落ちて来る。大方蜘蛛を啄まうとして鳥は其の餌を追うて梢から梢にと飛移つたに違ひない。仙果は人氣のない水茶屋の床几に置き捨てゐる煙草盆から勝手に煙草の火をつけようとして、灰ばかりなのにちよつと舌鼓を打つたが、其儘腹を下し懷中から火打石を搜出したながら、

「先生一服いかゞで御座います。いつもなら、なう種良さん。この邊は河岸縁の一日月長屋も同然減多に素通の出来る處ぢやないんだが、今日はかうして安閑と煙草が吞んでゐられるたア何だか拍子抜けがして狐にでもつまゐれたやうだ。」

「眞直なこん／＼様は何處の御穴へもぐり込んだのか不思議に参らうございましたもんさな。何しろ涼しくつて閑靜でいい。それにいくら涼んでもお茶代いらすといふんだから此れがほんに有難山の時鳥さ。と腰な提を取出して種良は仙果の煙管から火をかりて一服した。

成程涼しい風は絶えず梢の間から湧き出つて輕く人の袂を動かすのに種彦もいつか門人等と並んで、思掛けない水茶屋の床几に腰を下し卓臥れた歩を休ませた。近から相ひの噂

に對して、これぞ正しく大江戸の勤かぬ當を作  
り上げた町人の豪傑と云ふはもう用をなさぬ太  
平の世の喜びとを、江戸中の町々へ歌ひ聞かせ  
るやうな心持がするのである。

種彦は唯だんよりした初秋の薄暮り、此の男  
しい木遣の聲に心を取られながらぞろ／＼と歩  
いてゐる町の人々と相前後して駒形から並木の  
通りを雷門の方へと歩いて行く中何時ともな  
しに我も亦路行く人と同じやうに、二百餘年の  
泰平に撫育まれた安樂な逸民であると云はぬば  
かり、知らず／＼いかにも長閑な心になつてし  
まふのであつた。今更こと／＼しく時世の非な  
るを憂へたとて何にならう。天下の事は微祿な  
我々風情が兎や角思つたとて何の足にもならう  
筈はない。お上にはそれ／＼お願々の方々が居  
られるではないか。われ／＼は唯其の御支配の  
下に治る御世の樂しさを歌にも唄ひ給にも寫し  
ていつ葉れるとも知れぬ長き日を、われ人共に  
夢の如く送り過ごすのがせめてもの御奉公では  
あるまいか。種彦は丁度興後節今盛の昔に流  
行した文金風の遊治郎を見るやうに兩手を懷中  
に肩を落し何處を風がといふ見得で、いつの程  
にか名高い隅田川といふ酒問屋の前邊まで來た  
が、すると、忽ち向うに見える雷門の新橋と

昔いた大提灯の下から、大勢の人がわい／＼と  
つて駈出して来るのみか女の泣き顔を聞け  
た。ソラ暗嘩だ人殺だといふが早いか路行く人  
人は右方左方へ逃惑ふものもあれば、我近れじ  
と駆けつけるものもある。その後について町  
の犬が幾匹ともなく吠えながら走る。  
種彦は依然として兩手を懷中に此の騒ぎも繁  
華な江戸ならでは見られぬものと云はぬばかり  
街の角に立止つて眺めてゐたが、然し走交ふ群  
集に遮られて實は何の事件やら一向に見定め  
る事が出来なかつたのである。  
「先生。」と突然横合から聲をかけたものがあ  
る。  
「いや。仙果に種員か。あの騒ぎは一體どうし  
たものだ。」  
「先生。大變な騒ぎで御座ります。奥山の姐  
さんが朝服お客を引込ましたので、奥山の姐  
付かりお纏を前戴いたしたので御座ります。  
「ふうむ左様か。」と種彦も流石事件の意外なる  
に驚いた様子。奥山の茶見世などは昔から好か  
らぬ處ときまつたものでないか。今更隠賣  
女の一人や二人召捕へた處で仕様もあるまい。  
先生其れではまだ昨夜からの騒ぎを御存じが  
ないと思えますな。」

「はて、昨夜からの騒ぎといふのはア何  
事だ。お前達も知つての通り私は先月以來外へ  
出るのけ今日が初めて。」  
「實は此れから二人して御機嫌伺ひに上らうと  
思つてゐた處で御座ります。今日はもうどこへ  
参りましたも其の話をかりで持切つて居りま  
す。昨日の晩花江戸の寄席で娘淨瑠璃が導ら  
れる。それから今朝になつて廣小路の藝者家で  
女髪結が三人まで御用になりました。何でも  
い二三日前御本礼で御役所がありまして、人日  
附の戸原様が町奉行にお成遊ばしてから俄に手  
嚴しい御一説が始まつたとやら。手前供の町内  
などで名主や家主が今朝はもう尻ツ頭から御奉  
行所へお伺ひに出るやうな始末で御座います。」  
「成程、それは全く容易ならぬ次第だな。」  
「先生、まだ其ればかりでは御座りません。昨  
夜一寸櫓下の方へ参りましたら、何でも近い  
中に御府内の岡場所は一ツ残らずお取押にな  
るとかぶふ騒ぎで、さすがの辰巳も霜枯れ同様  
寂れきつて居りやした。」  
「さうか。世の中は三日見聞の櫻ではない。  
櫻を散らすとんだ夜嵐。」  
先生、兎に角境内を一まはり奥山遊までお供  
を致さうぢや御座りませんか。」



に大勢の客が一度に立込んで手が足りぬと云ふのでも無いらしい。どうした事かと仙果は二三度続けざまに烈しく手を鳴らしたが、すると、以前の女中が銚子だけを持つて來ながら息使ひも急しく甚くも狐へた様子で、

「どうも申譯が御座いません。どうぞ御勘辨を……とばかり前髪から滑り落ちる簪もその儘に只管額を疊へ摺付けてゐた。

「かう、姐さん。どうしたもんだな。さう無暗矢鯉に謝られても始まらねえ。お煙はつけずお有はなしといふのぢや、どうもこりやアお話にならないぢやねえか。」

「唯今帳場からお託に出ると申して居ります。どうぞ御勘辨をなすつて下さりませ。」

「それぢや姐さん、酒も肴も出来ねえと云ひなされるんだね。」

「出来ない何のと申す譯では御座いませんが、旦那。實は大變な事になりましたので御座います。今が今として、定巡の旦那衆がお出で遊ばしませて、其方どもでは時節ちがひの走物を料理に使つては居ないかと仰有りまして、洗場から帳場の隅々までお改めになつてお歸りになるかと思へば、今度は入道に傳法院の御役所と町方の御役人衆とお目になり、お茶屋へ奉公する

る女中達はこれから三月中に奉公をやめて親許へ戻らなければ隠賣女とかいふ事にいたして、吉原へ追遣つてお女郎にしてみふからと、それはそれは嚴いお觸で御座います。」

「種彦初め一同は一時に酒の醉を醒ましてしまつた。女中はもう涙をほろ／＼滾しながら相手選はず事情を訴へようとする。

「お上の旦那衆もあんまり御慈悲が無さすぎるでは御座いませんか。かうして手前共がお茶屋へ奉公いたして居りますのをどうやら好きこのんで猥々な事でもいたすやうに仰有いますが、まアお聞きなすつて下さいまし。かうして私がお茶屋奉公でもいたさなければ、母親や亭主が日干しになつてしまふので御座います。亭主は足腰が立ちませんし母親は眼が不自由な因果な身の上で御座ります……」

「先程手を鳴らし立てた元氣は何處へやら、一同は左右から女中を慰め一刻も早く此の場を立去るより仕様がな。わづかに其の場の空腹をいやす爲めもう誂ふべき料理とてもない處から一同は香物に茶漬をかき込み、過分の祝儀を置いてはふ／＼の體で茶飯茶屋の門を出たのである。

「種員さん、いよく薄氣味の好くねえ世の中

になつて來たぜ。岡場所は残らずお取拂ひお茶屋の姐さんは吉原へ追放、女髪結に女藝人はお召捕り、かうなつて來ちやどうしても此の次は役者に戯作者といふ順取だ。」

「かう／＼仙果さん。大きな聲をしなさんな。その邊に八丁堀の手先が徘徊いてゐねえと制限ねえ……」

「鶴龜々々。しかし二本差した先生のお供をしてゐりやア與力でも同心でも滅多な事はできやしめえ。と口には云つたけれど仙果は全く氣味悪さうに四邊を見廻さずにはゐられなかつた。それなり種彦を初め一同は默然として一語をも發せず、譯もなく物に迫はるゝやうに雷門の方へ急いで歩いた。

## 九

久振の散歩に思の外の疲勞をおぼえ種彦はわが家に歸るが否や風通しのいい二階の窓際に眩枕して猶さま／＼に今日の騒ぎを噂する門人達の話を聞いてゐるが、する中にいつか知らうと／＼と坐睡んでしまつた。

疲れ果てた戯作者の魂は怪し氣なる夢の世界へとときまよひ出したのである。

最初に門人等の話聲が近くなり遠くなりし

音をも一時に止めるばかり耳。近く響き出す辨天山の時の鐘。數ふれば早や正午の九つを告げてゐる。種彦はどこ此の近邊に閑靜で手輕な料理茶屋でもあらば久振門人等と共に晝食を準へたいと言出すと、毎日のぞめき歩きに至極案内知つたる柳下亭種員心得たりといふ見得で、雪駄の爪先に煙管をばんとはたき、

「では先生、早速あの突當りの茶飯茶屋などはいかで御座いませう、山東翁が近世奇跡考に書きました金龍山奈良茶の昔はいかにか存じませんが、近頃奥山の奈良茶もななくこつたものを食はせやす。夫に先生御案内でも御座いませうが、お座敷から向う一面に裏田圃を見晴す景色はまた格別で御座いますよ。丁度今頃は田圃に薔の花が咲いて居りませう。」

# 八

一同は早速水茶屋の床几をはなれ、こゝにも生茂る老樹のかげに風流な柴垣を廻らした茶飯屋の柴折門をくぐつた。成程門人種員の話しした通り打水清き飛石つたひ、目を避ける夕顔棚からは大きな木瓜の三つ四つもぶら下つてゐる中庭を隔て、茶がかつた離れの小座敷へと通るや否や明放した漏瀝の障子から一目に見

渡した裏田圃の景色。これは全く格別の趣きである。これは即ち南宗北宗より上佐住吉四條田山の諸派にのみ顧みられず僅に下品極まる町繪師が版下繪の材料にしかなり得なかつた特種の景色である。狂歌川柳の俗氣を愛する放蕩背倫の遊民にのみ云ふべからざる興趣を催させる特種の景色である。即ち左手には田町あたりに立續く繩笠茶屋と覺しい低い人家の屋根を限りとし。右手は遙に金杉から谷中飛鳥山の方へとつゞく深い木立を境にして、日の届くかぎり淺草の裏田圃は一面に稻葉の海を漲らしてゐる。其の正面に當つて恰も大きな船の浮ぶがやうに吉原の廓はいづれも用水桶を載せ頂いた鱗葎の屋根を聳してゐるのであつた。薄く曇つた初秋の空から落つる柔かな光線は快く延切つた稻の葉の青さをば照輝く夏の日より却て一段濃くさせたやうに思はれた。彼方此方に浮んだ蓮田の蓮の花は青田の天鵝絨に紅白の刺繡をなし打撃ぐ稻葉の風につれて得も云はれぬ香氣を送つて来る。鳴子や案山子の立つてゐる邊から折々ばつと小鳥の飛立つ毎に、稻葉に埋れた畦道からは駕籠を急がす往來の人の姿が現れて来る。それは田圃の近道をば田面の風と蓮の花の薫りとに見残した昨夜の夢を託

しつゝ、曲輪からの歸途を急ぐ人達であらう。種彦は眺めあかす此の景色と、久振に取上げ杯の味と、埒もない門弟達の雜談とに、そとる今日の外出の無益でなかつた事を喜んだ。全く氣に入つた景色。氣に入つた酒、氣に入つた雜談。この三拍子が遺憾なく打揃ふと云ふ事は人生容易に遇ひ難い偶然の機を以てばならぬ。偶然の好機は紀文奈良茂の富を以てしてもあながちに買得るものとは限られぬ。女中が持運ぶ蟬汁と夜時の胡瓜の酢の物秋茄子のしぎ焼などを肴にして、種彦はこの年月東都一流の戯作者として凡そ人の羨む場所には飽果てるほど出八した身でありながら、考へて見れば雨や風のさばりなく主客共に能く一日半夜の歡會に逢ひ得たる事幾何ぞと、さまぐなる物見遊山の懷舊談に時の移るのを忘れてゐたが、折から一同は中庭を隔てた向うの小座敷に先程から顔と手を鳴らしてゐたお客が遂に亭主らしい男を呼付けて物荒く云罵り始めた聲を聞付けた。客は詭へた酒肴のあまりに遅い事を憤り、亭主はそれをばひたあやまりに謝罪つてゐると覺しい。さう心付いて見れば一同の座敷も同じ事、先程詭へた初華の女物も又は鈍子の代りさへ更に持つて來ない始末である。別

つてゐた。

果せるかな。忽然川岸づたひに駆ける一人の女がハタとわが足許に蹶いて倒れる。抱き起しながら見れば金銀の精ある襦袢を着、兵庫に結った黒髪をば簾甲の櫛に飾した傾城である。いかなる譯あつて夜道を一人何處へといったはりながら聞く間もおそし後から飛んで来る追手の二三人物をもふはす襦袢を御取つてずた／＼に引裂き、簾甲の櫛や珊瑚の簪をば惜氣もなく粉微塵に踏碎いた後、女を川の中へ投込んだなり、いかにも忙しうに川岸をどん／＼駆けて行く。種彦はあまりの事に少時は其の方を見送つたなり呆然として佇立んでゐたが、すると今までは人のゐる氣もなかつた屋根船の障子が音もなく開いて、「先生。柳亭先生。お久振で御座ります。と親し氣に呼びかける男の聲。見れば濃い眉を青々と剃り眼の大きい口尻の圓々しい面長の美男子が、片手には大きな螺旋の煙管を持ち荒い三升格子の襦袢を着て屋根船の中に胡坐をかいてゐると、其の周圍には御殿女中と町娘と藝者らしい姿した女がいづれ劣らず此の男に魂までも打込んでゐるといふ風にしなだれ掛つてゐた。種彦は驚き、

「これはお珍らしい。貴公は木場の白猿子では御座らぬか。」  
「いかにも七代目海老蔵に御座います。久しくお目にかゝりませぬが先生には相變らず御壯健、恐悦至極に存じます。」  
「いや、拙者などもこの時節柄いづどのやうな御谷を蒙る事やら落人同様風の音にも耳を欲て居ます。それやこれやで其後はつひぞお尋ねもせなんだが此間はまたとんだ御災難、とうとうお江戸構ひとやら聞きましたかと思掛けない、今時分どうして此處へはお出でなすつた。」  
「其の不審は御尤も。實は今日まで先祖の菩提所なる下總の在所に隠れて居りましたが是非にも先生にお目にかゝり、折入つてお願ひ致し度い事が御座りまして、夜中そつと中川の御番所をくゞり抜けわざ／＼爰までやつて参りました。」  
「はて拙者のやうなものに折入つてお頼みと。」  
「外の事でも御座りませぬ。あれなる二艘の屋根船に積載せました金銀珠玉の手で御座ります。實は當年四月木挽町の舞臺にて家の狂言景清半破りの場を相勤め居ります。突然御用の身と相成、遂に六月二十二日北御番所のお白洲にて役者海老蔵事身分を擲へず安修僧上の趣、不届至極とあつて、家財家寶お取壊の上江戸十里四方御追放御付けられましたがいづれはかやうの御咎もあらうかと木場の生居お取壊に相成らぬ中、弟子其が皆それ／＼に押隠しました家の寶、それをば取集め、あれなる船に積載せて参つた次第で御座ります。先生へ折入つてお願ひ申しますは何卒あれなる事をばいか様にも致し、後の世まで残しお傳へ下さるやう御計らひなされては下さるまいか。諸行無常は浮世のならひ某の身の老朽行くは、さらさら口惜しいとも存じませぬが、わが國は勿論唐天竺和蘭陀におきましても、滅多に二つとは見られぬ珊瑚琥珀やまんの類、又は古人が一世一代の名作と云はれた細工物はいかにお上の御意とは申しながらむざ／＼と取壊されるがいかにも無念で相成りませぬ。人の生命にはまた生れ替る來世とやらも御座りませうが、金銀珠玉の細工物は一度壊れては再び此世に不出で参りませぬ。先生。海老蔵が折入つて御願ひと申しますは斯様の次第で御座ります。」  
「言ふ言葉と共に海老蔵を載せた屋根船はおのづと岸を離れ、見る／＼狭きの中に隠れて行く。種彦はまづ暫く／＼と聲を上げ、岸の上をば行



て、いかにも慚く又心地よく耳許に残つてゐたがいつか知らぬ風の消ゆるが如く潮の退く如くに聞えなくなつて仕舞ふと、戯作者の魂は忽ちいづこからとも知れず響いて来る幽かな金棒の音を聞付けた。今時分不思議な事と怪しむ間もなく、かの金棒の響は正しく江戸町々の名主が町奉行所からの御達を家毎に觸れ歩くものと覺しく、何方からも此方からも互に相呼應しつゝ宛ら嵐の如くに湧起つて来るのである。それと共に突然川水の流るゝ音が譯もなく高まり出した。種彦は屋根船の中に搖られながら眠つてゐるやうな心持もすれば、また高い青樓の二階の深い積夜具の中にふうはりと埋まつてゐるやうな心地もする。兎に角驚いて顔を上げると、自分の身體のある處よりも遙に低く、雨氣を帯びた雲の間をば一輪の明月が矢の如くに走つてゐるのを見た。町の木戸が嚴重に閉ざれてゐて番太郎の半鐘が叩く人もゐないのに獨で勝手に鳴響いてゐる。種彦は唯々不審の思をなすばかり。通過する人でもあらば聞質したいと消えかかる辻番所の燈火をたよりに、頻と四邊を見廻すけれど、大の聲ばかりして人影としては更になく。何となく胸騒ぎがして何處といふ當もななく一生懸命に駈出し始めると、忽ち目の前に

大きな橋が現はれた。種彦は足にまかせて瞬時にも早く橋を渡り過ぎようとするが、突然後から兩方の袂をしつかりと押へて引止めるものがある。何者かと思つて振り返ると、心中でも仕損じたり落着きとおぼしく、橋際へ晒者になつてゐる二人の男女があつて、其の兩手は堅く縛められてゐる處から一心に種彦の袂をば商で衝へてゐたのであつた。あまりの氣味惡さに覺えず腕を空に舞飛んで鞠の如くにころゝと種彦の足許に轉落した。其の拍子にふと見れば、こはそも如何に男は紛ふ方なく若旦那柳絮、女はわが家に隠匿つたお園ではないか。しまつた事をした。情ない事をした。許してくれと、種彦は地に跪づいて落ちたる二つの首級を交々に持ち上げ活ける人に物云ふ如く詫びてゐると、何時の間にやら、お園と思つた其の首は幾年か昔己れが西丸のお小姐を勤めてゐた時、不義の密通をした奥女中なかにがしの顔となり、又柳絮と思つた其の首は幾年の昔堺町の樂屋道邊で買馴染んだ男娼となつてゐた。再び胸にしめて二つの首級をハタと押出し唯茫然として其場に竹立んでしまふと、いつの間に寄集つて來たものか、菰を抱へた夜鷹の群が雲霞の如くに身

のまはりを取巻いてゐて一齊に手を拍つて大馬に笑ひ罵るのである。而も種彦の眼には數知れぬ夜鷹の顔がどうやら皆一度はどこかで見覚えのある女のやうに思はれた。恐ろしいやら氣味悪いやら、種彦は狂氣の如く前後左右に切退け切拂ひ、やつとの事で橋の向うへ逃げのびたが、もう呼吸も絶えぬゝになるばかり疲れ果て有合ふ松石の上に倒るゝやうに眼を落した。昏ひ四邊は靜で、もう此處までは追掛けて來るものも無いらしい。明月の光が軟に夜の流を照してゐる。種彦は初めてほとと息を漏し、口切れのする苦しさに石垣の下なる杭につかまり身を這はせるやうにして掌に夜の流を抛上げようとするが、偶然にも木の葉のやうに漂つて來る一個の杯。今の世に何人の戯れぞ紙文が杯流しの昔も忍ばるゝ床しきと思ふ間もなく、早や二三艘の屋根船が音もなく流れて來て石垣の下なる亂杭に繋がれてゐるではないか。閉切つた障子の中には更に人の氣勢もないらしいのに唯だ朗かに河東節水調子の一曲が奏でられてゐる。種彦は先程の恐ろしい光景をも全く忘れてしまひ、今何といふ譯もなく二十歳の若い姿を昨夜の河岸に忍ばせて、こゝに尋ね寄る戀人を待構へるやうな心持にな

と小遣錢にも窮してしまつた爲め國貞門下の或  
 論師と相談して、専ら御殿奉公の御女中衆が貸  
 本屋の手によつてのみ竊に購ひ求めると云ふ秘  
 密の文學の創作を思ひ立つたのであつた。

早や大引とおぼしく、夜廻の金棒降來る夕立  
 のやうに五丁町を通過する頃、屏風の端をそ

つと片寄せた敵娼の華魁、  
 「主ア、まだ起きてゐなんしたのかい。おや何  
 を書いてゐなます。何處ぞのお馴染へ上げる文  
 でありんせう。見せておくんなんし」と立膝の  
 長炮管に種員が大事の創作をば無造作に引寄せ  
 ようとする。種員驚き、

「華魁、文ぢやねえ、悪く氣を廻しなさんな。  
 疑るなら今讀んで聞かせやせう。だがの華魁。  
 あんまり身を入れて聞きなさんと、とんだ勤め  
 の邪魔になりやす。」

こんな口説よろしくあつて、種員は思ひも掛  
 けぬ馬鹿に幸福な一夜を過ぎ翌朝ぼんやり大門  
 を出たのであつた。

土手八丁をぶらりくへ行盡して、山谷堀の  
 彼方から吹いて來る朝寒の川風に懷手したわ  
 が肌に移香に酔ひながら山の宿の方へと曲つ  
 たが、すると丁度其邊は去年の十月火災に罹  
 つた堺町葺屋町の替地になつた處とて、茲

に新しい芝居町は早くも七分通普請を終へた有  
 様である。中村座と市村座の櫓にはまだ足場が  
 かゝつてゐたけれど其の向側の操人形座は  
 結城座陸奥座の二軒ともに早や其の木戸口に彩  
 色の海具さへ生々しい看板と當八月より興行  
 する旨の口上を掲げてゐた。されば表通り軒  
 竝の茶屋はいづれも普請を終つて今が丁度移轉  
 の最中と見える家もあつた。彼方此方に響く鑼  
 金槌の音につれて新しい材木の脂の匂が鋭く  
 鼻をつく中をば、引越の荷車は幾輛となく三  
 升や櫛や銀杏の葉などの紋所をつけた荷籠を  
 運んで來る。あちこちと往來する下廻らしい役  
 者の中にはまだ新しい御觸が出てから間もない  
 事とて、市中と芝居町との區別を忘れて、後生  
 大事に冠つたまゝの編笠を取らずに歩いてゐる  
 ものもあつた。それが見馴れぬ口にはいかに不  
 思議に思はれるのであつた。

種員はつい去年の今頃までは待乳山の樹の茂  
 りを向うに見て、崩れかゝつた土塙の中には甚  
 間でも狐が鳴いてゐるとばはれた小川伊勢守様  
 のお下居敷が、驟く中に女形の振袖なびく綺羅  
 音楽の悲になつたかと思ふと、此の邊の土地を  
 ばよく知つてゐる身には全く狐につまゐれたよ  
 りも猶更不思議な思がして、用もないのに小路

小路の果までを飽きずに見歩いた後やがて淺草  
 隨身門外の裏長屋に存氣な獨世帯を張つてゐる  
 笠笠仙果の家へとやつて來た。仙果は何處へか  
 慌忙で出て行かうとする出合頭朝顔の種員  
 を見るや否や、いきなりその胸倉を取つて、「乃  
 公ア今お前を捜しに行かうと思つてゐた處だ。  
 氣をたしかにした。氣をたしかにした。」

「かう仙果さん。どうしたもんだな。お前こそ  
 氣でもちがつたんぢやねえか。痛え／＼。まア  
 放してくんな。懷中から大事な草稿がおつち  
 るに。」

「氣をたしかにしなければ。腰でも抜かさぬやう  
 に用心したがい／＼ぞ。堀田原の師匠がの、今朝  
 おなくなりになつたのだ。」

「嘩然としていふ處を知らぬ種員に向つて仙果  
 は泣く／＼一伍一什を語り聞かせた。

柳亭種彦先生は昨夜の晩おそく突然北御町奉  
 行所よりお調の筋があるにより今朝五ツ時まで  
 に通油町地本間屋鶴屋喜右衛門同道にて常磐  
 橋の御白洲へ罷出よとの御達を受けた。それが  
 爲めか、あらぬか、先生は今朝病中の髪を結直  
 して居られる時突然卒中症に襲はれ、  
 散るものに極る秋の柳かな  
 とぶふ離世の一句も哀れや六十一歳を一期とし

きつ戻りつ、消え行く舟を呼び戻さうとして居ると、忽ち生暖かい風がさつと吹き下りて、振亂す幽霊の毛のやうに打なびく柳の蔭からまたしても怪し氣なる女の姿が幾人と知れず彷徨ひ出で、何とも云へぬ物哀な泣聲を立て、縁のやうに疲れた裸足のまゝ、頬と地上に落ちた何物かを拾ひ上げては限りもなくさめんと泣き沈みありさま、何事の起つたのかと種彦はふと心付けばわが佇む地のうへは一面に踏碎かれた水晶瑪瑙琥珀鴉血孔雀石珊瑚龍甲ぎやまんびいどろ杯の破片で埋め盡されて居る。そして一足でも歩まうとすれば此等の打壊された碧玉の破片は身も戰慄かゝるばかり悲惨な響を發し更に無數の破片となつて飛散る。其の處分に女の群はさも／＼恨めし氣に此方を眺めては、身も世もあらぬやうに聲を立て、泣くのである。種彦も今は覺えず目目がくらんで其の儘水中に轉び落ちてしまつた。彼方に流され此方へ漂ひする中に、いつか氣も心もつかれ果て、遂に脆くも顔を閉ぢ水底深く沈んで行つた。かと思ふとやがて耳許に聞かれた聲がして、頬と自分を呼びながら身體を搖動かすものがある。ふツと眼を開けば何事ぞ、埒もない一場の夢はこゝに盡きて老いたる妾がおのれを呼覺して居るの

であつた。

成程水の中に沈んだと思つたのも無理はない。秋の夕陽は欄干の上にし込んで居て、吹き通ふ風の冷さに蔽ふものもなく轉寐した身體中は氣味悪い程冷切つて居るのである。種彦は二度も三度もつゞけざまにする嘔と共にどうやら風邪を引込んだやうな心持になつた。

## 十

家毎に焚く孟蘭盆の送火に物淋しい風の立初めてより、消行く人々の下駄の音夜廻りの拍子木犬の遠吠また夜荷麥賣の呼聲にも俄に物の哀れの誘はれる折からわけても今年には御法度厳しき浮世の秋、朝な夕なのお寒さも一入深く身に浸む七月の半過ぎ。修紫樓の燈火は春よりも夏よりも、徒に其の光の澄み渡る夜も稍深け初めて来た頃であつた。主人はいつぞや怪しき甚床の夢から引込んだ風邪の床に今宵もまだ枕についたまゝ、相も變らずおのれが戯作のあれこれをば彼方を一二枚此方を二三枚と讀返して居た折から突然愛雀軒と題した彼の風雅な庭木戸を叩いたものがある。茶の間の長火鉢に妙振出しを煎じて居た妻何心もなく取次に出て見ると堀田原の町名主を案内にして仲間提灯持たせた中

年の侍小普請組々頭よりの使者と名乗つて一封の書狀を渡して立去る。と間もなく横山町邊の提灯つけた辻留籠一挺飛ぶがやうに駈來つて門口に止るや否や中から轉出る商人風の男、先生は御在宅で候居いますか、鶴屋喜右衛門の手代で御座います。と聲もきれ／＼に言ふのであつた。手代は主人の影所に通つて何やら密談に耽つた後門外に待たせた辻留籠に乗つて再び何處へか飛び去つてしまつたが、其れからと云ふもの修紫樓の家の内は俄に物氣立つて、咳嗽を交ふる主人の聲と共に其の友の彼方此方と立廻くらしい物音が夜の深け渡るまでも止まなかつた。

丁度其の刻限、そんな騒ぎのあらうとは露知らぬが佛、門人の柳下種員は新吉原の馴染の計に泊つて居たのである。竹格子の裏窓を明けると三輪田圃から續いて小塚原の灯が見える河岸店の二階に種員は昨日の午過から長き日を短く暮す床の内引廻した屏風のかげに明六ツならぬ暮の鐘。敵娘の女が店を張りにと下りて行つた隙を窺ひ薄暗い行燈の火影に頬と矢立の筆を噛みながら折々は氣味の悪い思出し笑ひを漏しつつ一生懸命に何やら妙な文章を書きつつ居た。種員は草紙類御法度の此頃いよい



雨

瀟

瀟

その年の二百十日はたしか涼しい月夜であつた。つゞいて二百二十日の厄日も亦それは殆ど氣もつかぬばかり、いつに變らぬ残暑の四日に、蝸の聲のみあわたしく夜になつた。夜になつてからは流石厄日の申譯らしく降り出す雨の音を聞きつけたものゝ然し風は芭蕉も破らず紫菀をも鶏頭をも倒しはしなかつた——わたしはその年の日記を繰り開いて見るまでもなく斯く明に記憶してゐるのは其の夜の雨から時候が打つて變つてとても浴衣一枚ではゐられぬ肌寒さにわたしはうろたへて襦袢を重ねたのみか、すこし夜も深けかけた頃には袷袴まで引掛けた事があるからである。彼岸前に羽織を着るなどとはいかに多病な身にもつひど覺えたこととがないので、立つ秋の俄に肌寒く覺える夕といへば何ともつかず其の頃のことを思出すのである。

その頃のことと云つたとて、いつも單調なわが身の上、別に變つた話のあるわけではない。唯その頃までわたしは數年の間さしては心に

も留めず成りゆきの儘送つて來た孤獨の境涯が、つまる處わたしの一生涯の結末であらう。此れから先わたしにの身にはもうさして面白くない代りまたさして悲しい事も起るまい。秋の日のどんよりと曇つて風もなく雨にもならず暮れて行くやうにわたしの一生は終つて行くのであらうといふやうな事をいはれもなく感じたまでの事である。わたしはもう此の先二度と妻を持ち去る苦へ奴婢を使ひ家畜を飼ひ庭には花窓には小戸縁先には金魚を飼ひなぞした裝飾に當んだ生活を繰返す事は出来ないであらう。時代は變つた。禁酒禁煙の運動に良家の兒女までが狂奔するやうな時代に在つて俳句煙草盆の灰吹の清きを欲し煎茶の滋味と酒の爛の程よきと思ふが如きは愚の至りであらう。衣も濯滌の如く自ら縫ひ酒は隠士を學んで自ら落葉を焚いて煖むるには如かじと云ふやうな事を、不圖ある事件から感じたまでの事である。十年前新妻の愚鈍に來れてこれを去り七年前には妾の情氣深きに辟易して手を切つてからこ

の方わたしは今に獨で暮してゐる。興動けば直に車を狹斜の地に驅るけれど家には唯幽と鶯と青葱とを置くばかり。いつか身は不治の病に腸と胃とを冒さるゝや寒夜に獨り火を吹起して藥飲む湯をわかつ時など親切に世話してくれる女もあらばと思ふ事もあつたが、然しまだ其頃にはわたしは孤獨の倦しさをば今日の如くいかにするとも忍び難いものとはしてゐなかつた。孤獨を嘆ずる寂寥悲哀の思は却て盡きせぬ時興の泉となつてゐたからである。わたしは好んで寂寞を追ひ悲愁を求めんとする何さへあつた。忘れもせぬ或年……矢張り二十日の頃であつた。夜半瀟のやうな大雨の屋根を打つ音にふと目を覺すとどこやら家の内に雨漏の滴り落ちるやうな響を聞き寝就かれぬ儘起きて手燭に火を點じた。家には老婢が一人遠く離れた膝手に寝てゐるばかりなので人氣のない家の内は古寺の如く降子模や壁壘から湧く濕氣が一際鋭く鼻を撲つ。隙漏る風に手燭の火の揺れる時や物のやゝなわが影は蜥蜴の匂ふ疊の上から壁虎のへばり付いた壁の上に蠢いてゐる。わたしは影衣の袖に手燭の火をかばひながら廊下のすみゝ座敷々々の押入まで残る隈なく見廻つたが雨の漏る様子はなかつた。柱に

て清然この世を去られた。

種員は顔冠りにした手拭のある事さへ打忘れ  
今は情氣もなく大事な祕密出版の草稿に流るゝ  
涙を拭拭つた。そして仲果諸共堀田原をさして  
金龍山の境内を飛ぶがごとくに走り行く。

(大正元年初冬稿)

## 腐 肉

シャル・ポオドレエル

わが魂などか忘れん、涼しき夏の  
晴れし朝に見たりしものを。

小徑の角、砂利の褥に  
みにくき屍。

毒に蒸されて血は燃ゆる  
淫婦の如く脚空さまに投出し  
此れ見よがしと心憎くも  
汗かく腹をひろげたり。

照付くる日の光自然を肥す  
百倍のやしなひに  
凡てを自然に返すべく

この屍を焼かんとす。

青空は麗しき奇麗を

咲く花かとも眺むれば、

烈しき惡臭野草の上に

人の呼吸をも止むべし。

青蛇の群衆を鳴らす腐りし腹より

蛆蟲の黒きかたまり湧出でて、

濃き膿の如くどろ／＼と

生ける襦袢をつたひて流る。

此れ等のも凡て寄せては返す波にして、

鳴るや、響くや、揺くや。

吹く風に五體はふくらみ

生き肥ゆるかと疑まる。

流るゝ水また風に似て

天地懐しき樂のかんで、

節づく動搖に節の中なる

穀物の粒の如くに舞ひへば、

忘れし繪絹の面に

ためらひ描く輪廓の、

繪師は唯だ記憶をたどり筆をとる、  
形は消えし夢なれや。

巖の彼方に恐るゝ牝犬

いらだつ眼に人をうかどひ、

残せし肉の屍より

再び噛まんと待構ふ。

この不淨この腐敗にも似たらずや、

されど時として君も亦、

わが眼の星よ、わが性の目の光、

君等、わが天使、わが情熱よ、

さなり形體の美よ、そもまた此の如けん。

終焉の齋戒果てゝ、

肥えし野草のかげに君は逝き

白骨の中に若むさば、其の時に、

あゝ美しき形體よ、接吻に、

君をば噛まん地蟲に喟れ。

分解されしわが愛の清き本質と形とを、

われは長くも保ちたりしと。

(珊瑚集より)

に膽炙すの小杜の詩なり。また憶ふ杜荀鶴が、半夜燈前十年事。一時隨雨到心頭。然り雨の窓を打ち軒に流れ樹に滴り竹に濺ぐやその響人の心を動かす事風の香木に叫び水の溪谷に咽ぶものに優る。風聲は憤激の聲なり水聲は慟哭なり。雨聲に至りては怒るに非ず啖くに非ず唯唯のみ訴ふるのみ。人情千古易らず獨夜枕上これを聴けば何人か愁ひを催さざらんや。況やわれ病あり雨三日に及べば必ず腹痛を催す眞に斷腸の思といふべきなり。王次回が疑雨集中の律詩にいへるなり。

病骨眞成二嶠一方  
呻吟燈背和心端  
凝塵落葉無妻院  
風軼殘香獨客牀  
附贅不嫌如二豆  
徒瘧安忍累枯腸  
唯應三復南華語  
鑑井井蟬是藥王

この詩正しくわれに代つて病中獨居の生涯を述ぶるもの。故に復これを録す。

その年二百二十日の夕から降出した雨は残りなく萩の花を洗流しその枝を地に伏せたが高く延びた紫菀をも頭の重い鶏頭をも倒しはしなかつた。その代り二日二晩しとく〜と降りつづけ

に舉句三日目になつても猶晴れやらぬ空の暗きは夕顔と月見草の花のおづ〜晝の中から咲きかけた程であつた。物の濡ることは雨の降る最中よりも却て甚しく机の上はいつも物書く時手をつくあたりの取分け濡つて露を吹き筆の軸も煙管の羅字もべた〜判り障子の紅はたるんで隙漏る風に剥れはせぬかと思はれた。彼岸前に給衣織を取出す程の身は明日も明後日も若し此のやうな濕つぽい日がつづいたならきつと醫者を呼ばなければなるまい。病骨は眞に雨を驗するの方となる。然しわたしは床の間に置き捨てた三味線の不圖心付けば不思議にもその皮の裂けずにゐたのを見ると共に、わが病軀もその時は又幸側、腹痛を催さぬ嬉しさ。三日ほど雨に閉籠められた氣晴しの散歩かた〜わたしは物買ひにと銀座へ出掛けた。

わたしはその雅號を彩霞堂主人と稱へてゐる知人の愛妾お半といふ女が父本の藝者になるといふ事を知つたのは鳩居堂で方言千言といふ常用の第五十本線香二束を買ひ龜屋の錦から白葡萄酒二本ぶらさげて外濠線の方へ行きかけた折であつた。

曇つた秋の日は暮れるに早い。家の門を明けると軒にはもう灯がついてゐた。わたしは抱へ

て戻つた葡萄酒の栓を抜いて直様夕飯をすますと煙草のめすずに巻紙を取り上げた。

拜呈其後は御無言に打過ぎ申譯も無之候。諸處方々無沙汰の不義理重なり中には二度と顔向けさへならぬ處も有之候程なれば何卒禮節をわきまへぬは文人無頼の常と御寛容の程幾重にも奉願上候。實は小生去冬風勞に罹みそれより減切り年を取り萬事甚懶く去年彩霞堂竣成祝宴の折御話有之候蘭八節新曲の文章も今以てそのまゝ筆つくること能はず折角の御厚意無に致候不才の罪御詫の致方も無御座候。されば本業の小説も近頃は廢絶の形にて本屋よりの催促斷りやうも無之儘一字金一回と大きく吹掛け居候ものゝ實は少々老先心細くこれではならぬと時には顔にハの字よせながら机に向つて見る事も有之候へども一二枚書けば忽筆盡りて痼癪ばかり起り申候間まづ〜當分は養病に事寄せ何にも書かぬ覺悟にて唯折節若き頃讀取りたる書冊等もなく讀返して僅に無聊を慰め居候次第に御座候。寢ては起き起きては物食ひその日〜を送行く事さ



聞いたそれらしい響は雨だれの庭から溢れ落ちるのであつたのかも知れぬ。わたしは最後に先考の書齋になつてゐた離れの一間の杉戸を開けて見た。紫檀の唐机水晶の文鎮青銅の花瓶黒檀の書架。十五疊あまりの二室は父が生前詩書に親しまれた當時のまゝになつてゐる。机の上にひろげられた詩箋の上には龍甲の眼鏡が亡き人の来るを待つが如く太い片方の夢を立てゝゐた。本棚の蓋を防ぐ樟腦の目にしむ如き匂は久しくこの座敷に來なかつたわたしの怠慢を詰責するものゝやうに思はれた。わたしは瑤竹の榻に腰をおろし燭をかざして四方の壁に掛けてある聯や書幅の詩を眺めた。

翠樹如煙瀟湘波清秋無盡客重過  
故園今即如二樹樹鴻雁不來風雨多

これは今猶記憶を去らぬ書幅の中の一首を記したに過ぎない。わたしはいつか燭もつき風雨も夜明けと共に鎮まる頃まで獨り默想の快夢に耽つてゐた。

正月二日は父の忌辰である。或年の除夜翌朝父の墓前に捧ぐべき蠟燭の枝を伐らうとわたしは寒月皎々たる深夜の庭に立つた。その時もわたしは直にこの事を筆にする氣力があつた。長年使ひ馴れた老婢がその頃西班牙風邪とや

ら稱へた感冒に罹つて死んだ。それ以來これに代るべき質直な奉公人が見付からぬ處からわたしは折々手づからパンを切り珈琲を沸かしまた葡萄酒の栓をも抜くやうになつた。自炊に似た不便な生活も胸に詩興の湧く時はさして辛くはなかつた。わたしは銀座の近邊まで出掛けた時には大抵精養軒へ立寄つてパンと罐詰類を買つて歸る。底冷りする雪もよひの夜であつた。二斤程買ったパンは焼いたばかりのもので見えて家へ歸るまで抱へた脇の下から手の先までをほか／＼と好い工合に暖めてくれた。精養軒の近處は夜となれば藝者の往來がはげしい。わたしは曾て愛訥した春濤詩鈔中「六扇紅窓掩不開」妙妓懷中取暖來といふ絶句を憶ひ起すと共に妓を擁せざるもパンを抱いて歩めば寒からんやと覺えず笑を漏らした事もあつた程である。

詩興湧き起れば孤獨の生涯も更に寂寥ではない。貧苦病患も例へばかの郎子阿が車馬難嫌難。鶯花不棄貧といひ白居易が貧志士節。病長高人情。といふが如き句あるを思ひ得ば又聊か慰めらるゝ處があらう。然し詩興はもとより神秘不可思議のもの招いて來らず叫んで應へるものでもない。されば孤獨

のわびしさを忘れようとして只管詩興の救を求めても詩興更に湧き來らぬ時憂傷の情に初めて慘憺の極に到るのである。詩人平素獨り味ひ誇る處のかの追想の何とて詩興なければ徒に女々しき愚癡となり悔恨の根となるに過ぎまい。

わたしは街を歩む中吳服屋の店先に閃く友輪の染色に愕然日をそむけて去つた事もあつた。若き日の返らぬ歡びを思ひ出すまいと欲したが爲めである。隣の家から惣菜の豆莢の匂の漂ひ來るにわたしは腹立たしく窓の障子をしめた事もあつた。曾てはわれも知つた團圓の樂しみを思ひ返すに忍びなかつたからである。庭に下りて花を植ゑる時街の角に立つて車を待つ時、さては唯窓の簾を捲かんとする時吹く風に輕く袂を拂はれても忽征人郷を望むが如き感慨を催す事があつた。かくては風よりも月よりも蟲の聲よりも獨居の身に取つて雨ほど辛いものはあるまい。わたし或は日の日記に、久雨尙止まず輕寒腹痛を催す夜に入つて風あり燈を吹くも夢成らず。そぞろに憶ふ。雨のふる夜はたゞしん／＼と心さびしき寢屋の内、これ江戸の俗語なり。一夜不眠孤客耳。主人窓外有芭蕉。これ人口

候 話も今明日中には通すべき筈芝  
○番に御座候 由午御面御貴客に接す  
るを得ば幸甚々々

金泉先生硯北

彩霞堂主人

二伸 かの六疊土庇のざし太鼓張模紙  
思案につき 候 まゝ先年さる江戸座の宗  
匠より賣付けられ 候 文化時代吉原遊女  
の文藝反古張に致候 處 妾宅には案外  
の思付に見え 申 候 依てかの家を彩霞  
堂とこぢつけ候へども元より文藻に乏し  
き拙者の出鱈目何か好き名も御座候は  
御示教願はしく萬々面敘を期し 申 候

ヨウさんは金持であるが成金ではない。品格  
もあり學問もあり趣味には殊に富んでゐる。わ  
たしの處へ寄越す手紙にはその用件次第によ  
つて時々異つた雅號が書かれてあるが其れを見  
てもヨウさんの趣味と學識の博い事が分る。い  
つぞやわたしが天明時代の江戸の書家東江源麟  
の書帖の事について問合した事があつた時ヨウ  
さんはその返事に林檎庵頓首と書いて來た。澤

田東江の別號來食堂から思ひついた戯れであ  
らう。自動車が衝突した時見舞の返書に富田塞  
南と書いて來た事もあつた。次に録する手紙に  
半兵衛とあるのは口舌八景を稽古してゐた爲め  
と又藝者小半の事にかゝはつてゐるからであら  
う。

昨夜はまた／＼無理に御引留致しさぞか  
し御迷惑の段御容赦被下度 候 人生五十  
の坂も早や間近の身を以て 娘同様のもの  
のいつも側に引付けしだらもなき體たら  
く恥し氣もなく御目につけ 候 傍若無人  
の振舞いかに場所柄とは申半ら酒醒めて  
は甚 赤面の至に御座 候 然し放蕩紳士  
が胸中を披露致 候 も他日雅兄小説御  
執筆の節何かの材料にもなるべきかと昨  
夜け下らぬ事包まずお尋のまゝ懺悔致  
候 次第に御座 候 明後日は會社の臨  
時總會にて残念ながら半輪亭のけいこ休  
みと致 候 但當月中には是非とも口舌  
八景上げたきつもり貴處もせい／＼御勉  
強の程願はしくお花半七掛合今より樂し  
みに致居 候

金泉先生さま

半兵衛

その頃までは何の彼心といつても私にはまだ  
若い氣が残つてゐた。四十の聲を聞いて日記雜  
録等筆を執る毎に頻に老來の嘆をなしたのも、  
思へば猶全く老いるには到らなかつた 證據で  
あらう。愚癡不平をいふ元氣のある中はまだ眞  
に絶望したとはいへれない。今の藝者の三味線  
などは聞かれたものでないなど人前で恥し氣  
もなくそんな事が言はれたのはまだ色氣もあり  
遊びたい氣も失せなかつた證據である。遊びた  
い氣があれば勉學の心も失せない譯である。  
述作の興味も洩くわけである。一夜或人の蘭  
八節を語るを聞きわたしもその古訓を味ひ學び  
たいと思立つて藥研堀の師匠の家に通つてゐた  
事がある。その時分ふとした話から舊友のヨウ

さんも長明歌澤清元という／＼道樂の擧句が蘭  
八となり既に二三年も前から同じ師匠を木挽町  
の待合半輪といふへ招き會社の御掛け稽古に  
熱心してゐる由を知つて互にこれは奇妙と手を  
拍つて笑つた。それからわたしはヨウさんに勸  
められるまゝ朝の稽古通ひを止めて夕刻木挽町  
の半輪へ向う事にしたのであつた。  
ヨウさんは稽古の日といへば缺さず十四時半頃

九月 日

金阜散人拜

へ實は辛くて成らぬ心地致され候。それ故三味線も切れたる絲掛換へるが面倒にてそのまゝ打捨て驚も先日鳥屋へ戻し遣申候。有樂座初め諸處の演奏會は無論芝居へも意氣な場所へも近頃はとんと顔出し致さず從て貴兄の御近況も承る機会なく此の事のみ遺憾に堪申さず候。然しその後は蘭八節再興の御手筈だんく御運びの事と推察仕居候。處實は今夕偶然銀座通にてお半様に遭遇ひ彩院堂より御暇になり候由承りあまりと云へば事の意外に甚以て驚愕仕候次第もとより往來繁き表通の事わけても雨もよひの折柄とて唯兩三日中には鑑札が下りませうからとのみ如何なる譯合にや一向合點が行き申さず餘りに不思議に候まゝ御無沙汰の御託に事寄せくだしくお尋申上候も兎角人の噂聞きたがるは小説家の癖と御許被下度いづれ近々參堂御機嫌伺上度く先は御無沙汰の御託まで 勿々不一

封筒に切手を張つて居る時折好く女中が膳を取片づけに襖を開けた。食事をしたせぬか燈火のついたせぬか或は雨戸を閉めたせぬかも書齋の薄寒さは却て晝間よりも凄き易くなつたやうな氣がした。然し雨はまたしても降出したらしい。點滴の音は聞えぬが足駄をはいて女中が郵便を出しにと耳門の戸をあける音と共に重さうな番傘をひらく音が鳴きしきる蟲の聲の中に物淋しく耳についた。點滴の音もせぬ雨といへば霧のやうな糖雨である。秋の夜の糖雨といへば物の濕ける事入梅にもまさるが常としてわたしは畫帖や書物の蟲を防ぐため煙草盆の火を掻き立て、若朧を焚き押入から桐の長箱を取り出して三味線をしまつた。そのついでに友人の來書一切を藏めた柳行李を取り出し其中から彩院堂主人の書柬を擇み分けて見た。雨の夜のひとり様こんな事でもするより外に用はない。彩院堂主人とは有名な何某株式會社取締役の一人何某君の戲號である。本名はいさゝか憚あれはこゝには妓輩の口吻に擬してヨウさんと云つて置かう。わたしとは二十年程前米國の或大學で初めて知合になつた。ヨウさんは日本の大學生に在つた頃俳人としてその道の人には

知られてゐた。今でも折々名刺を吐くので若しヨウさんの俳號をいへばこの方でも知る人は必ず知つて居るに違ひない。然し彩院堂なる別號は恐らく私の外には誰も知らないであらう。況や今では彩院堂なるその家は在つても住むものなくヨウさんは再びその名を用ゆる折がなくなつてしまつたのである。彩院堂の由來は左の書簡中に自ら説明せられてゐる。

拜啓御新作出勤の途次車上にて拜讀致候。倉皇の際俚に前半の一端を窺ひたるのみに御座候得共錦繡の文章直に感嘆の聲を禁じ得ず身屢々自動車客たる事を忘れ候次第忙中却てよく詩文の徳に感じ申候。日ト新緑晩鶯の候明窓淨几の御境涯羨望の至に有之候。投舊臘以來種々御意匠を煩はし候。赤坂豐狐祠畔の草庵やつと壁の上塗も乾き昨日小半橋を引拂ひ候。間明後日夕景よりいつもの連中ばかりにて聊か新屋落成のしるしまで一酌致度存候。間午御迷惑何卒御任駕の榮を得たく懇請奉候。當夜は宮園千齋は無論の事宇治紫仙都吾中等も招飲致候。間お互に親類のおつきあひ其の御覺悟十分然るべく



の、少い爲め今の中どころかし置いて置かなければ早晩滅しはせぬかと危ぶまれてゐるものである。ヨウさんがその趣味と其の富によつて衰滅せんとする江戸の古曲を保護しようといふ計畫には異議のあらう筈がない。又小半の腕前もその年齢に似つ望を囑するに足るべき事はわたくしとくに認めてゐたので、其の通り思ふ處を述べるとヨウさんは徐に一盞を傾けつゝ事の次第を話した。

「何ほ何でもこの年になつて色氣で藝者は買へません。藝でも仕込んで樂しむより仕様がな。あなたの前だから遠慮なく氣焰を吐きますが僕はかう見えても此でなかく道徳家のつもりです。今の世の中の紳士や富豪は大嫌です。富豪も嫌ひなら社會主義者も感心しません。眞面目な事を言つたつて用ゐらるべき世の中ぢやありませんから、わたしは寧ろそれをいゝ事にして毎晩かうして遊んでゐるんですが……アそんな事はどうでもいいとして……わたしが藝者に藝を仕込んで見ようなどと柄にもない事を思ひ付いたのはいさゝか譯があります。茶碗や色紙に萬金を撒つのも消樂だ。藝者に藝を仕込むのも消樂にかはりますまい。わたしはこれまで随分大勢の人を世話しまし

た。眞面目に世話をしましたがその結果は要するに時勢の非なるを悟るに過ぎません。現に家には書生が三人居ます。惣領の伴も來年は大學にはいる筈です。わたしは人の世話をしたからとて其人から禮を言はれたいなどそんな卑劣な考へは微塵も持つては居ません。失敗成功そんな事はわたしの深く問ふ處でない。唯いつまでも心持よく話の出来るやうな人物になつてもらひたい。わたしの世話をしたものは皆成功してゐます。然しわたしには其の成功振りが甚だ氣に入らんです。

名前は言ひませんがもう七八年前の事です。人から頼まれ又わたし自身も將來有望と思つて或青年の書家に經濟的援助を與へた事がありました。燕利とか華山とかいふやうな清廉な畫家になるだらうと思つたら大ちがひでした。展覽會で二度褒美を貰ひ少し名前が賣れ出したと思ふともう一廉の大家になりました氣で大門生を養ひ黨派を結び新聞雑誌を利用して盛んに自家吹聴をやらかす。まるで政治運動です。然しその效能はおそろしいものです、素戔の貧の書生は十年ならずして谷文晁が寫山樓もよろしくといふ邸宅の主人になりました。

もう一人成功した家の書生でわたしの閉口し

てゐるものがあります。これは教育家です。大學に通つてゐる時分或日わたしに俳句を教へてくれといふからわたしもとく嫌ひな道ではないので藏書も貸してやる。又時には此方からどうだ句はまだ出来ないかと催促して直してやつた事もありました。然し後になつて考へて見ると其の男は別に俳句が好きといふのではない、わたしが時々句をよむから御氣に入らうと思つてそんな事をきいたのでせう。兎に角さういふ抜目のない男の事です。それから學士になつて或地方の女學校の教師になると間もなく其の土地の素封家の婿養子になつて今日では私立の幼稚園と小學校を經營して大分評判がよい。それ大の話なら何も悪くいふ處はない。わたしも大に感心しなければならんですがどうも氣に入らないのはその男のやり方です。教育の事業をまるで商店か會社の經營と心得てゐるらしい。毎年東京へ來て朝野の有力者を訪問する三年日には視察と稱して米國へ出張し半年位たつて歸つて來ると盛んに演説をして廻る。まあそれも結構です。わたしの甚だ氣に入らないのは去年の事だ。やつと四十になつたかならずの年配でありながら自分の銅像を其地方の公園に建て、己れの功績を誇らうとした事です。天下の

に會社からお抱の自動車で駆けつけ稽古をす  
ますと其儘わたしを引留め最良の藝者を呼んで  
晚餐を馳走した。そして十時半といふと規則正  
しく歸り交度をする。雨の降る晩なぞわざ／＼  
わたしの家の門前まで自動車で送つて来てくれ  
る事もあつた。ヨウさんの座敷に呼ばれる藝者  
は以前は長唄清元などの名取連も交へられてゐ  
たさうであるがその頃は自然河東一中蘭八とい  
ふ組のものばかりに限られてゐたので若いとい  
つても二十五六より下はない。既に藝者として  
は師匠らしく見える老妓もあつた。さればその  
頃初めて十九になつたとやらいふ小半の姿は正  
に萬緑叢中の紅點あまり引立ち過ぎて何と  
なく氣の毒にも見えまた問はずしてこの女がヨ  
ウさんの御世話になつてゐるものと推量される  
のであつた。

小半はいかにも血色のよい大柄ながつしりし  
た身體付。眼はばつちりして眉も濃く生際もよ  
いので顔立は浮彫したやうにはつきりしてゐる  
代り口の稍大きく下顎の少し張出してゐる缺點  
も共に著しく目に立つて愛嬌には至つて乏し  
く愁もまづきか顔立であつた。豊麗な女をば  
いつの時代にも當世風とするならば小半も勿論  
その型の中に入れべきものである。當世風の

半がヨウさんの持物である事を知つた瞬間に  
はわたしは實をいへば意外な氣がしないでも  
なかつた。然しその心持は小半が年に似ず當  
世風に似ず蘭八の三味線も大分その流儀になつ  
てゐる事を知るに及んで直ちに取消されてしま  
つた。

或晚いつもの如く稽古をすましてから勧めら  
れる座敷敷をかねてヨウさんと盃を交した。  
小半を初めいつも来るべき筈の藝者はいづれも  
歌舞伎座に土地の藝者のきらひがあるところ  
九時近くまで一人も姿を見せず、其晩は又師  
匠までが少し風邪の氣味だからと稽古をすま  
すと直様車を頂戴して歸つてしまつた。ヨウ  
さんとわたしは女中に酌をさせながら却て話  
に遠慮のいらぬのを幸、江戸俗曲の音楽として  
の價值及びその現代社會に對する關係から將  
來の盛衰に就てまで、互に思ふ處を論じ合つ  
た。三味線は言ふ迄もなく二世紀以前實色の  
巷に發生し既に完成し盡した纖弱悲哀なる  
藝術である。現代の社會に花柳界と稱する前  
代實色の遺風が其まゝ存在してゐる間は三味  
線も亦永續すべき力があらう。三味線は浮世  
給歌舞伎等と同じく現代一般の社會觀道徳  
觀を以て見るべき藝術ではない。生きた現代

の聲ではない。過去の味であるが故に愁あ  
るもの此を聞けば却て無限の興趣と感慨とを  
催す事恰も商女不レ知亡國恨。隔レ江獨唱  
後庭花の趣がある。是當に江戸俗曲の現代に  
於ける價值であらう。これは以前からわたしの  
持論である。ヨウさんは日々職務の勞苦を思  
める娛樂としては眼に看る書畫の鑑賞よりも  
耳に聞く音樂が遙に簡易である、豐太閤は茶を  
立てたが茶よりも淨瑠璃がよい、淨瑠璃も諸  
流の中で最もしめやかな蘭八に越すものはな  
い、蘭八節の凄麗にして古雅な曲調には夢の中  
に浮世繪美女の私語を聞くやうな趣がある  
と述べた。二人の言ふ處は何れにしても江戸の聲  
曲を骨董的に愛玩するといふ事に歸着するの  
である。

女中が欠伸をそつと噛みしめながら鏡子を取  
替へにと座を立つた時ヨウさんは何か仔細らし  
くわたしの名を呼んだ。そして「實はこの間か  
らおはなしたいと思つてゐたのです。あの、  
小半のことです。小半はどうでせう。うまく成  
るでせうか。みつしり蘭八を稽古させて行々  
家元の名前でも繼がせて見たいと思つてゐるの  
ですが、どんなものでせう。」

蘭八節は他派の淨瑠璃とは異り稽古するも

大に氣に入り申候。地勢東北は神社の森かげとなりまづ西南向に相見え候間、古家建直しの折、西日さへよけるやうにすれば風通しも宜かるべくまさか田福が「わが宿は下手のたてたる暑かな」の苦しきも無かるべくと存じ候。兎に角山の手は御存じの如く都の中にも桃隣が「市中や木の葉も落す富士盛」の一句あり冬の西風と秋の西日禁物に有之候。方角は磁石失念の爲しかとわからず今一應檢分のつもり何卒貴下御全快を待ち御散歩かたへ御鑑定希望の至に御座候とんだ御迷惑甚恐縮しかし昔より道樂は若い時に女中年に藝事老いては普請庭づくりこれさへ慎めば金が出來るとやら申す由なれど小生道樂の階程も古人の戒に適合致候は誠に笑止に御座候とてもの事に道樂の仕納めには思ふさま凝つた妾宅建てたきもの何卒御暇の節御意匠披下まじくや同じ江戸風と申しても蘭ハ一中節なぞやるには梅曆の插繪に見るものよりは少し古風に行きたく春信の繪本にあるやうな趣ふさはしきやに存ぜられ候。江戸趣味は萬事大明振あり

がたしありがたし  
冬來るや氣儘頃中もある世なら  
御病氣御全癒の程この際一日千秋の思  
に御座候

十一月 日  
金阜先生  
半兵衛

その頃世の中は歐洲戦争のおかげで素破らしい景氣であつた。株式會社が日に三ツも四ツも出來た位なので以前から資本のしつかりしてゐるヨウさんの會社などは利益も定めし莫大であつたに相違ない。養澤品は高ければ高い程能く賣れる。米が高いので百姓も相場をやるといふ景氣。妾宅の新築には最も適當した時勢であつた。その頃舊華族が頻に家什の入札賣立を行つたのもヨウさんの妾宅新築には甚好都合であつた。ヨウさんは地形もまだ出來ぬ中から賣立のある毎にわたしを誘つて入札の下見に出掛けした。勿論興味を專とする處から大きな屏風や大名道具には札を入れなかつたが金持籠、膳櫛、火桶、手洗鉢、敷氈、更紗、廣東綢の古片など凡て妾宅の器具裝飾になりさうなものは價を問はずとし引取つた。やがて普請が

來上ると祝宴の席でわたしは主人を初め招かれた藝人達にも勸められ辭退しかねて彩霞堂の記なるものを起草した。そののみならず蘭八節新曲の起稿をも依頼される事になつた。

その翌日からわたしは早速新曲の資料となるべき事蹟を求めたいと例の燕石一種を初めとして國書刊行會藏刻本の中に蒐集された舊記隨筆をあさり始めた。そしてこれと思ふ事蹟傳説が見當つたならすぐにも筆を執る事ができるやうに毎夜枕許に燈火を引寄せ松の葉を初め色竹蘭曲集都羽二重十寸見要集のたぐひを讀み返した。その頃わたしには江戸戯作者のする様な斯うした事が興味あるのみならず又甚意義ある事に思はれてゐたので既に書きかけてゐた長篇小説の稿をも惜まず中途にしてよしてしまつた。二葉亭四迷出でて以來殆ど現代小説の定形の如くなつた言文一致體の修辭法は七五調をなした江戸風詞曲の連作には害をなすものと思つたからである。このであるといふ文體についてわたしは今日猶古人の文を讀み返した後など殊に不快の感を禁じ得ないノデアル。わたしはどうかしてこの野卑蕪雜なデアルの文體を振棄しようと思ひながら多年の陋習遂に改むるによしなく空しく紅葉一葉の如き文才なきを歎



絲平の石碑がいかにか大からうがそれは子孫のやつた事だから致し方がない。自分の道樂からわが銅像をわが家の庭に立てる位の事なら差支へないがその男の遣方はそれとなく生徒の父兄を説いて金を出させ地方の新聞記者を籠絡して輿論を作り自分は泰然としてゐるやうに見せ掛けるのだから困ります。

わたしは一體に今の人達の立身出世の仕方が氣に入ります。失敗して金を借りに来てても心持さへさつぱりしてゐれば、わたしは喜びます。いくら成功しても正義堂々としてゐないものはいやです。わたしはそれ等の事から眞面目に人の世話をするのがいやになり馬鹿々々しくなりました。それ等の事が直接の原因といふ譯ではありませんが小半に蘭ハの稽古をさせてゐる中わたしはいつか此の女を自分の思ふやうな藝人に仕立てゝ見たらばと柄にもない氣を起すやうになつたのです。世の中を相手にする眞面目な事は皆駄目でしたから今度は藝人を養成しようかといふのです。今の藝人は男も女も御存じの通りで皆仕様がありません。この先名人上りの出よう筈もない。それに蘭ハなどは長唄や清元とはちがつて今の師匠がなくなれば一寸その後をつぐべきものも無いやうな始末で

すから、もし小半がわたしの思ふやうにみつしり修行を積んでくれればわたしの道樂も眞面目くさつて云へば俗曲保存の一事業にもならうといふわけです。

ヨウさんが小半をひかせる事に話をきめ妾宅の普請に取かゝつたのはそれから三月程後のことである。その折の手紙を見ると、

御風邪の由心配致し居候。蒲柳の御身體時節相殊に御養生第一に希望致し候實は少々御示教に與り度き儀有之昨夜はいつもの處にて御目に掛れる事と存じ居候。處御病臥の由面鏡の便を失し遺憾に存じ候。まゝ酒間亂筆を願みずこの手紙差上申候。御相談と申すはかの妾宅の一件御存じの如く兼々諸處心當りへ依頼致置候。處昨日手頃の賣家二軒有之候。由周旋屋の手より通知に接し會社の歸途一應見歩き申候。一軒は代地河岸一軒は赤坂豊川稻荷横手裏に御座候。本來は築地邊一番便利と存じ最初より註文致置候。處いまだに頃合の家見當り申さぬ由あまり長延候ては折角の興も覺め勝になる恐も有之候。間御意見拜聴の上右淺草か赤坂かの中いづれにか取極め度

き考へに御座候。當人の小半は代地は場所柄として便利なだけ定めた近隣の噂もうるさかるべく少し場所はわるけれど赤坂の方望ましきやう申居候。

赤坂の賣家は庭古びて樹木もあれど家はまづツツシと存ぜられ候。代地の方は建具造作の入替位にでどうにか住まへるかと存じ候へども場所柄だけあまり建込み目當あしく二階から一向に庭の景色見え申さず値段も借地にて家屋丈建坪三十坪程にて先方手取一萬圓引ナシとは大層な吹掛様と存じ候。江戸向は庭はなくとも我慢は出来申候へども川添ならでは奇妙ならず。さて赤坂の方はこの邊もとく成金紳士の妾宅には持つてこいといふ場所なれば買った上でいやになれば却て値賣の望も有之候。由周旋屋の申條に御座候。地所七十坪程家屋付壹萬五千圓の由坂地なれば庭平ならぬ處自然の趣面白く垣の外すぐに豊川稻荷の森に御座候。間隱居所妾宅にはまづ適當と存ぜられ候。昨日見に參候折參詣人の柏手拍つ音小鳥の聲木立を隔てゝかすかに聞え候。趣

されるばかり。しばし朱筆を抛つて、

收拾殘書剩幾篇。

輕狂蹤跡廿年前。

笑倚犀首花間盡。

醉扶蛾眉月下船。

黃神忽時偏自喜。

紅兒癡處絕堪憐。

如今興味銷磨盡。

剩留銅鑪一炷烟。

と疑雨集中の律詩なぞを思ひ出して、僅かに愁

を遣る事もあつた。かくては手づから三味線と

つて、淨瑠璃かたる興も起らう筈はない。彩

霞堂へはそのまゝ忘れたやうに手紙の返事さへ

も出さず一夏を過して、秋もまた忽ち半に及

んだ其の日の夕、わたしは突然銀座通りで小半

の彩霞堂を去つた由を知りやおのれが無沙汰は

打忘れたと事の次第を訝つたのであつた。

點滴の趣をつたはつて濡縁の外の水瓶に流れ

落ちる音が聞え出した。もう襟雨ではない。風

と共に木の葉の雪のはらりと軒先に拂ひ落さ

れる聲も聞えた。先程から焚きつづけた若朧

と、煙草の煙の籠り過ぎたのに心づいてわた

しは手を伸して瓦塔口の襖を明けかけた時彩霞

堂へ宛てた手紙を出しに行つた女中がその歸り

がけ耳門の箱にはいつてゐる郵便物を一掴みに

して持つて来た。郵便物を皆しつとり濡れてゐ

た。葉書が三枚その中の二枚は株屋の廣告一

枚は往復葉書で貴下のすきな練者と料理屋締切

までに御返事下さいと頼の無禮千万な雑誌編

輯者の文言。その外に書狀が二通あつたその

一通は書體で直様彩霞堂主人と知られた。わた

しは此の際必ずお半の一條が書いてあるに相違

ないと濡れたまゝの封筒を干す間もなく開いて

見た。

久しく御消息に接せず御近況如何に候哉

本年は残暑の後意外の冷氣に加へて昨今

の秋寒御健康如何やと懸念に堪へず候

この分にてもう二三日晴れやらずは諸河

況漸鐵道不通米價いよ騰貴可致と存

候。扱突然ながらかのお半事この程いさ

さか氣に入らぬ仕儀有之彩霞堂より元

の古巢へ引取らせ申候。古人既に閑花只合

閑中看一折簾來便不鮮と

か申候。間鬼や角評議致すは却て野暮

の骨頂なるべく又人に聞かれては當方の

恥にも相成申可き次第と申せば大通の貴

兄大抵は早や御推察の事かと存じ候。拙

者として讀者に役者はつきものなり大概の

事なれば見て見ぬ度量は十分有之候。況

や外の興事とはちがひ心中物ばかりの蘭

八筋けいこ致させ憶ねばならぬ願ふり

に宵の口説をあしたまで持越し髪をつや

ぬけて採申すところ取分け情をもたせ

て語る様口頃註文致居候事として口舌

八景の口舌ならねど色里の諸わけ知らぬ

無粋なこなきんとは言はれぬつもりに候

へども相手が誰あらう活動の辯士と知れ

候ては我々成難く御拂箱に致申候。

同じいやなものにても壯丁役者か曾我の

家位ならまだ／＼どうにか我慢も出来

可申候へども自動車の逆轉手や活動辯

士にてはいかに色事を淨瑠璃模様に見立

てたき心はありても到底色と意氣とを立

てぬいて八丈綺のかくし裏などといふや

うな心持には成策申候。この邊の心事

は貴下平素の審美論にも一致致すべき次

第一層御同情に値する事かと愚考罷

在候。

お半二度左袂取る氣やら又晴れて活辯

と世帯でも持つつか其の後の事はさつぱり

じてゐる次第であるノデアル。わたしはその時  
新曲の執筆に際して竹婦人が玉菊追善水調子  
「ちぎれ」の雲見れば或は又蘭洲追善浮瀬の  
「傘持つ程になけれども三ツ四ツ満る」と云ふ  
やうな凄艶なる章句に當んだものを書きたいと  
冀つた。既にその前年一度醫者より病の不治  
なる事を告げられてからわたしは唯自分だけの  
心やりとして死ぬまでにとどろかして小説は西鶴  
美文は也有に似たものを一二篇なりと書いて見  
たいと思つてゐたのである。

鶴衣に收拾せられた也有の文は既に蜀山人  
の嘆賞措かざりし處今更後人の推賞を俟つに  
及ばぬものであるがわたしは反復朗讀する毎に  
案を拍つて此文こそ日本の文明滅びざるかぎり  
日本の言語に漢字の用あるかぎり千年の後に雖  
も必ず日本文の模範となるべきものとなすの  
である。其の故は何かといふに鶴衣の思想文  
章ほど複雑にして蘊蓄深く典故によるもの多き  
はない。其れにも係らず讀過其調の清明流暢  
なる實にわが古今の文學中その類例を見ざるも  
の。和漢古典のあらゆる文辭は鶴衣を織成す  
緯と成り元祿以後の俗體はその經をなしこれを  
彩るに也一家の文藻と獨目の奇才とを以て  
渾成完璧の語こゝに至るを得て初て許さ

るべきものであらう。わたしがヨウさんに勧め  
られ彩霞堂の記を草する心になつたのも平素  
鶴衣の名文を慕ふのあまりに出でたものであ  
る。彩霞堂記の拙文は書終ると直様立派な額に  
されたが新曲は遂に稿を脱するに至らず。その  
断片は今でも机の抽斗に藏はれてある。

わたしが新曲に取用しようと思ひ定めた題材  
は江戸名所圖會に記載せられた浅草橋場采女塚  
の故事遊女采女が自害の事であつた。ヨウさん  
の賛成を待つて筆をつけようと思つた時は丁度  
七月の盆に近く稽古は例年の通り九月半まで  
休みになる。ヨウさんは家族をつれて大磯の別  
荘に行く。わたしは憂氣にあてられて十日程寝

る。秋涼を待ち彩霞堂の稽古が始まる頃にもな  
つたら机に向はうと思つて居ると、今度は師匠  
が病氣になつた。十月に入つて師匠が稽古に出  
られる頃にはその年は折悪しく主人のヨウさん  
が會社の用で滿韓へ出張といふ次第。歸京す  
れば間もなく歳暮に近くそれから正月一ぱい  
此れは又藝人の習慣で稽古は休みである。

心中采女塚はそんな事ですつかり執筆の興が  
失せてしまつた。二月に至つて彩霞堂から稽古  
始めの勧誘狀が來たが毎年わたしは餘寒のき  
びしい一月から三月も春分の頃までは風のな

い暖か午後の散歩を除いては成るべく家を出  
ぬことにしてゐるので筆硯多忙と稱して小袖の  
一枚になる時節を待つた。獨居の生涯は日頃人  
一倍氣樂なかり病に臥した折の不自由もまた  
人一倍である。それもいつそぐつと寢就いてし  
まふ程の重患なれば兎や角ふ暇もないが看  
護婦雇ふほどでもない微恙の折は醫者の來診を  
乞ふ折にもその車屋にやるべき祝儀も自身に包  
んで置かねばならず醫者の手を洗ふべき金盥や  
手拭の用意もあらかじめ女中に命じて置かねば  
ならぬ。養痾の爲めに却て用事が多くなるわけ  
なので風邪引かぬ用心に寒氣を恐るゝ事は宛ら  
温室の植物同然の始末である。

その年は矢張り凶年であつた。日頃の用心  
もそのかひなく烏啼き花落ちる頃に及んで却て  
流行感冒にかゝりついで雨の多かつた爲めか  
新竹伸びて枇杷熟する頃まで湯たんぽに腹あた  
ためぬ日とはなく食事の前後數ふれば日に  
都合六回水薬粉藥取交せて服用する煩はし  
き。臥して書を讀まうにも續く手先早くつかれ  
坐して筆を執らうにも興を催すによしなく、わ  
づかに書肆の來つて舊著の改版を請ふがまゝ反  
古にもすべき舊稿の整理と添削とに日を送れば  
却て過ぎし日の樂しみのみ絶え間もなく思ひ返



くて退屈だといふ時何といふ氣もなく手近の三味線を取上げて忘れた手でも思出して見ようといふ氣にはならないらしい。それなら何が好きなのかといふと別に之と云つて好きなものものないらしい。針仕事は勿論讀み書きも好きではない、唯芝居へ行つて友達と運動場をぶら／＼すると三越や白木へ出掛けて食堂で物を食ひ浅草の活動寫眞を見廻るといつたやうな事がまづ樂しらしい。小言を云ふと遂には反抗する。面倒な思をして三味線の師匠などになつた處で何が面白いと云はぬばかりの様子を見せるやうになつた。これでは到底望がないと思つて暇をやつた譯だが然しこれはあの女ばかりに限つた話ではない。今の若い女は良家の女も藝者も皆同じ氣風だ。會社で使つてゐる女事務員などを見ても口先では色々生意氣な事をいふが辛い處を辛抱して勉強しようといふ氣は更らない。今の若い藝者に蘭八なんぞ修行させようとしたのは僕の方が考へれば間違つてゐたとも云へる。家の娘は今高等女學校に通はしてあるがそれを見ても分る話で今日の若い女には活字の外は何も讀めない。草書も變體假名も讀めない。新聞の小説はよめるが假名の草双紙は讀めない。蘭八節古本の板

木は文久年間に彫つたものだ。お半は明治も三十年になつてから後に生れた女だ。稽古本の書體がわからないのはその人の罪ではない。町に育つた今の女は井戸を知らない。勿論釣瓶の竿に残月のかゝつた趣などは知らう筈もない。さういふ女が口先で「重井筒の上越した粹な意見」と唄つた處で何の面白味もない譯だ。一盛りがにくい「迎駕籠」といつたところで何の事だかわかりはしない。分らない事に興味の起らう筈はない。五元集の古板は其角自身の板下だからいくら高くてもかまはない買ひたいと思ふのは吾々の如き舊派の傭人の古い證據で、新傾向の傭人には六號活字しか讀めないのだから木板の本はいらない譯だ。今の藝者が三味線をひくのは唯昔からの習慣と見ればよい。丁度新傾向の傭人が其の吟詠にまだ俳句といふ名稱を棄てずにゐると同じやうなものだ。僕はもう事の是非を論じてゐる時ではない。それよりか吾々は果していつまで吾々時代の古雅の趣味を持続して行く事ができるか、そんな事でも考へたがよい。僕の會社でもいよく昨夜から同盟罷工が始つた。もう夕刊に出る時分だが今日はそんな騒で會社は休みも同然になつたので、もつめの幸と師匠を呼んで二三段さら

つたわけさ。」

ヨウさんは溜池の三河屋へ電話をかけたらしいに晚餐を馳走してくれた。わたしは家へと歸る電車の道すがら丁度二日前から讀みかけてゐたアンリイ・ド・レニエが短篇小説

# MARCELINE OU LA PUNITION

## FANTASTIQUE

の作意とヨウさんの話とを何がなしに結びつけて思ひ返したのであつた。レニエの小説といふのは新妻の趣味を解せざる事を悲しみ憤る男の迷懷である。男は日頃伊太利亞もヴェニズの古都を愛してゐたので新婚旅行をこの都に試みたが新妻は何の趣味をも感じない。男は或骨董店で昔ヴェニズの影繪之居で使つた精巧な切子人形を見付け大金を惜まざ買取つてやがて佛蘭西の舊邸へ歸る。夫婦の仲はだん／＼離れて来る。新妻の友達に下卑てゐながら妙に女の氣に入る醫者があつて此人をば精神病の患者と診斷し新妻は以後主人を狂人扱ひにする。或日主人は外から歸つて見ると先祖代々住古しだ邸宅は一見新に建直されたのかと思ふばかりその古びた外觀を改め又昔の懐しい家具は椅子卓子に致るまで悉く巴里街頭の家具店に見られるやうな現代式のけ／＼しい製造品に

承知致さず折角の彩庭堂今は主なく去年尊耶より頂戴致候秋海棠坂地にて水はけよき爲め本年は威勢よく西瓜の色に咲亂れ居候折桐實の處錢三百落したよりは今少し惜しいやうな心持一貫三百位と思召被下べく候まづは御笑草まで委細如件

彩庭堂舊主

金卓先生

雨はやつと霽れた。霽れさへすれば年の中で最も忘れがたい秋分の時節である。残暑は全く去つて單衣の裾はさわやかに重ねる細の羽織の袂もうるさからず。簾打つ風には悲壯の氣満ち空の色怪しきまでに青く澄み渡るがまゝ、隠君子ならぬ身もおのづから行雲の影を眺めて無限の興を催すもこの時節である。曇つて風靜まれば草の花蝶の翅の却て色あざやかに浮立ち濛の水には城市の影沈んで動かず池の水溝の水雨水の溜りさへ悉く鏡となつて物の影を映すもこの時節である。

昨來風雨鎖書樓一得此新晴二簾可鉤。

籬菊未開山桂落  
雁來紅占一園秋。

黒田すまゝ、先人の絶句を口ずさみながら外へ出た。足の向くまゝ、彩庭堂の門前に来て見ると櫓の自然木を打込んだ門の柱には「萬とした表札まだそのまゝに新しく節板の合せ目に胡麻竹打ち並べた澤門の月は菱宅の常とていつものやうに外から内の見えぬやうにびつたり閉められてあつた。久しく訪はなかつたのでいはいれなく入つて見たいやうな氣がした。普請の好きになわたしは廊下や縁側の木地にも幾分かさびが出来たであらう庭の土も落ちつき石にも今年は雨が多かつたので苔がついたであらう、わたしの家から移植した秋海棠の花西瓜の色に咲きたる由書越された手紙の文言を思出しては猶更其慢がならず耳門の戸に手をかけるとすら／＼と明いたのみならず、内にはいれば此れはいかに、萩垣の彼方から聞える臺風の三味線、丁度二を上げて一撥二撥當てた音緒。但し女にあらず。女にあらずとすれば正しく師匠の千齋である。わたしは二の絲の上つた様子から語つてゐるのは何かと耳を傾けるとも知らず内ではおもむろに、

おもひきらしやれもう泣かしやんな――

と主人が中音。さては浮橋逢の助互に顔と顔とを見合せて一度にわつと一嘆きさへすれば後は早間に追込んで鳥邊山の一段はすぐさま語り終られると知るものから、わたしは無遠慮に格戸戸明けて中座させるも心なき業と、丁度日についた玄關の庇に秋の蜘蛛一匹類に網をかけてゐるさまを眺めながら佇立んでゐた。

「いや君實に馬鹿々々しい話さ。活辯に血道を上げるとは實にお話にならない。あれは全く僕的眼鏡ちがひだつた。活辯の一件がないにしてもあの女は行末望みがないやうだ。藝者をしてゐる時分藝事には見込みがあるやうに思はれたのはつまり非常に勝氣な女で何事によらず人にまける事が嫌ひだからそれで自然稽古にも精を出したのもらしい。だから商賣をやめたとなると競争する張合がない。一月二月とたつ中三味線の稽古はわたしへの義理一方といふ事になつた。初めはわたしもいろ／＼小言をぶつた。生れつき質のわるい方ではないのだから今の中みつしりやつて置けと云聞かしても當人には自分の天分もわからず従つて藝者の面白味も一向に感じないらしい。たとへば用がな

夢も見ず快眠を貪り得た夜の幸福はおそらく美人の膝を枕にしたにも優つてゐるであらう。然しフト思立つてわたしは生前一身の始末だけはして置かうものとまづ家と藏書とを賣拂つて死後の煩ひを除いた。閑中いさゝか多事の思をなしたのは唯この時ばかりであつた。

住み馴れた家を去る時はさすがに悲哀であつた。明詩綜載する處の茅氏の絶句にいふ。

壁有蒼苔一甕有塵

家園一旦屬西鄰

傷心畏見門前柳

明日相看是路人

その中實生記とでも題してまた書かう。

(大正十年正月稿)

## ロマンチックの夕

伯爵夫人マシユウ・ド・ノワイユ

夏より久しかりけり。われ夏の恵み受けじといどみしが、今宵は遂に打負けて、身中つかるゝまでの快き。

われ小崎きりラの花近く、やさしき様の木陰に行けば、見ずや、いかで拒み得べきと、わが魂はさゝやく如し。

よろづの物われ惑しわれを疲らす。行く曇輕く打顫ひ、慇懃の亂れ、ゆるやかなる小舟の如く、しめやかなる夜に流れ来る。

列車は過ぎたり。燃ゆるよろこびよ。その響空氣をつんざく。神經は破れて死ぬべくも覺えつゝ、いかにせん、又生きんとする願ひになやむ。

あゝわれ此宵、わが肩によりかゝる、若き男の胸こそ欲しけれ。ロマンチックなる事

柳のかげにも優りたる吾心の懶き疲れを、かの人は吸ふべきに。

われ彼の人に、誘ひしは君ならず。それはあらゆる夜のさま、わが胸をして鳩の如くにふくれしむ。

されど君はあまりに若ければ、黄金の血潮と溶け行く心、骨に徹する肉のかたしき、われそれを訴へん夜にのみ。

あらゆる櫛木は官能鋭く、あらゆる夜は打ち解けて、絶えざる啜り泣きの聲、煙りし空に上り行けり。

うるはしき夜の眺め語りたまふな。傷しくも憐める君をのみわれは求むる。狂ひて叫ばん唇に消えも失せん心して、わが愛する人よ。泣きにまへ。唯泣きたまへ。と語るべし。

(「珊瑚集」より)



取替へられてゐる。有様、男は憤怒のあまり周囲のものを打壊して卒倒してしまふ……

……わたしはヨウさんに別れて家に歸ると直様讀掛けたこの小説の後半をば戦帳の中で讀んだ。……篇中の主人公がヴェニスの骨董店で買取つた秘藏の人物は留守中物置の中に投込まれてゐたが折から照り渡る月の光に動き出して話をしだす。感情の興奮してゐる主人公は夢とも現ともわけが分らなくなつて遂にはどうやら自分ながらも日頃周囲のものゝ云つてゐたやうに眞の狂人であるが如き、心持になつてしまふ——といふのが此の小説の結末であつた。

蚊帳の外に手を伸して燈火を消した時遠く鐘の音が聞えた。數へると二時らしかつた。秋の夜毎にふけ行く夜半過わけて雨のやんだ後とて庭一面蟬の聲をかぎり鳴きしきるのにわたしは眠つかれぬまゝそれからそれといろゝの事を考へた。一刻も早く眠りたいと思ひながらわけもなく思ひに耽る思ひである。あくる日起きてしまへば何を考へたのやら一向に思ひ出す事の出来ない取留めのない思ひである。

その後わたしは年々暑き寒きにつけて病をい

たはる事の中にこそがしく再び三味線のけいこをするやうな氣にもならず又強ひて著作の興を呼ぶ氣にもならなくなつた。生がひもなき身と折々は憂傷悲憤に堪へなかつた其思ひさへも年と共に次第に失せ行くやうである。たまゝ思當るのはフェルナンデレイが詩に、

J'ai trop pleuré jadis pour des légères !

Mes Douleurs aujourd'hui me sont étrangères……

Elles ont beau parler à ma mystérieux ……

Et m'appeler dans l'ombre leurs voix légères;

Pour elles je n'ai plus de larmes dans les yeux.

Mes Douleurs aujourd'hui me sont des inconnues;

Pasantes du chemin qu'on eut peut-être aimée;

Mais qu'on n'attendait plus quand elles sont venues;

Et qui s'en va là-bas comme des inconnues,

Parce qu'il est trop tard, les âmes sont fermées.

わけなき事にも若き日は唯ひた泣きに泣きしかど。

その「哀傷」何事ぞ今はよそしくぞなりける。

哀傷の姫は妙なる言葉にわれをよび。小ぐらきかげにわれを招ぐもあだなれや。

わがまなこ涙は枯れて乾きたり。

なつかしの「哀傷」いまはあだし人となりにけり。

折もありなりなば語らひやしけん辻君の。寄りそひ來ても迎へねば。

わかれし後は見も知らず。何事もわかき日ぞかし心と心今は通はず。

成程情は消え心は枯れたにちがひない。歐州亂後の世を警むる思想界の饞鐘もわが耳にはどうやら街上鈴を賣る翁の簾に同じく食うては寝てのみ暮らすこの二三年冬の寒からず夏の暑からぬ日が何よりも嬉しい。胃の消化よく

の食料品の甚だ拂底であつた頃にもわたしは  
百方手を盡して佛蘭西製のシヨコラを買つてゐ  
たのである。

巴里の街の散歩を喜んだ人は皆知つてゐるで  
あらう。あのシヨコラミニエールと書いた卑俗な  
廣告は、セーヌ河を往復する河船の艇や町の  
辻々の廣告塔に芝居や寄席の番組と共に張付  
けられてあつた。わたしは毎朝顔を洗ふ前寢床  
の中で暖かいシヨコラを啜らうと半身を起す  
時、枕元には昨夜讀みながら眠つた巴里の新聞  
や雜誌の投げ出されてあるのを見返りながら、  
折々われにもあらず十幾年昔の事を思出すの  
である。

巴里の宿屋に朝目をさましシヨコラを啜らう  
とて起き直る時窓外の裏町を角笛吹いて山羊の  
乳を賣行く女の聲。ソルボンの大時計の沈んだ  
音。またリヨンの下宿に朝な／＼耳にしたロオ  
ン河の水の音。これ等はすべて泡立つシヨコラ  
の暖かい煙につれて今も尙あり／＼と思出され  
るものを。醫師の警告に今や飲食に關する凡  
ての快樂と追想とを奪ひ去つた。口に甘きも  
のは和洋の別なくわたしの身には全く無用のも  
のとなつた。

たしかリユギザンブルの畫廊だと覺えてゐ

る。クロード・モネが名畫の中に食事の佳人  
は既に去つて花壇に近き木蔭の食卓には空しき  
盞と菓子果物を盛つた鉢との置きすてられた  
さまを描いたものがあつた。突然わたしは此の  
油畫を思ひ起したのは木の葉を縫ふ夏の日光の  
眞白き卓布の面に落ちかゝる色彩の妙味の爲め  
ではない。この制作に現はれた如き幸福平和に  
して而も詩趣に富んだ生活に對する羨望と質感  
との爲めである。

父の世に在つた頃大久保の家には大きな紫檀  
の卓子の上に折々支那の饅頭や果物が青磁の鉢  
や籐編の籃に盛られてあつた。わたしはこれを  
ば室内の光景局、額書幅、題詩などと見くらべ  
て屢々文人畫の様式と精神とを賞美した。

浮世繪を好む人は蕙薺や北薺等の掛ける掛物  
に江戸特種の菓子野菜果實等の好圖畫あるを知  
つてゐるであらう。櫻花散り来る竹縁に草餅を  
載せた盆の置かれたる、水草螢籠などに心太を  
あしらひたる、或は銀杏の葉散る掛糸屋の床  
几に團子を描きたる、此等の圖に對する鑑賞の  
興は蓋し狂歌俳諧の素養如何に基く事、今更  
論ずるまでもない。

栢庭が老の樂に、くす砂糖水草清し江戸だよ  
りといふやうな句があつたと記憶してゐる。

作者の名を忘れたが、これも江戸座の句に「隅田  
川はる／＼來ぬれ瓜の皮」といふのがあつた。  
詩文の興あれば食ふもの口舌の外更に別種の  
味を生ず。袁隨園全集には料理の法を論じ  
た食單なる者がある。明治初年西田春耕と云  
ふ文人畫家は嗜口小史を著して當時知名の士の  
嗜み食ふものを説明した。いづれも當時文化の  
爛熟を思はしむるに足る。

われ等今の世に趣味を説くは木によちて魚を  
求むるにひとしい。わが醫師わが身に禁ずるに  
甘きものを以てしたるは或は此の上もなき幸  
ひであるやも知れぬ。最早都下の酒樓に上つて  
盃盤の俗惡を嘆く虞なく、銀座を散策して珈琲  
の匂ひなきを憤る必要もない。

(大正十年九月稿)

砂

糖

病めるが上にも年々更に新しき病を將すわ  
たしの健康は、譬へて見れば雨の漏る古家か蟲  
の喰つた老樹の如きものであらう。雨の漏るた  
び壁は落ち柱は腐つて行きながら古家は案外  
風にも吹き倒されずに立つてゐるものである。  
蟲にくはれた老樹の幹は年々うつろになつて行  
きながら枯れたかと思ふ頃、衰れにも芽を吹く  
事がある。

先頃掛りつけの醫者からわたしは砂糖分を含  
む飲食物を節減するやうにとの注意を受けた。  
たれが言ひ初めたか青春の歡樂を甘き蜜に  
酔ふといひ、悲痛難苦の經驗をたとへて世の辛  
酸を嘗めると言ふ。甘き味の口に快きはいふ  
までもない事である。

わが身既に久しく世の辛酸を嘗めるに飽きて  
ゐる折から、今やわが口俄にまた甘きものを斷  
たねばならぬ。身は心と共に辛き思ひに押しひ  
しがれて遂には鹽麩の如くにならねば幸であ  
る。

午にも晩にも食事の度々わたしは強い珈琲に

コニヤックもしくはキューラッオを置き、角砂糖  
をば大抵三ツほど入れてゐた。食事の折のみ  
ならず著作につかれた午後または讀書に倦んだ  
夜半にもわたしは屢々珈琲を沸かすことを樂し  
みとした。

珈琲の中でわたしの最も好むものは土耳其の  
珈琲であつた。トルコ珈琲のすこし酸いやうな  
濃い味は埃及烟草の香氣によく調和するばか  
りでない。佛蘭西オリヤンタリズムの藝術をよ  
ろこび迎へるわたしにはゴーチエーやロツチの  
文學ビゼやブリュノオが音楽を思出させるたよ  
りとも成るからであつた。

いつ時分からわたしは珈琲を嗜み初めたか明  
かに記憶してゐない。然し二十四歳の秋亞米利  
加へ行く汽船の食堂に於てわたしは既に英國風  
の紅茶よりも佛蘭西風の珈琲を喜んでゐた事を  
覚えてゐる。紐育に滞留して佛蘭西人の家に  
起居すること三年、珈琲と葡萄酒とけ歸國の後  
十幾年に及ぶ今日迄遂に全く廢する事のできぬ  
ものとなつた。

蜀山人が長崎の事を記した瓊浦父線に珈琲の  
ことをば豆を煎りたるもの焦臭くて食ふべから  
ずとしてゐる。わたしは柳橋の小家に三味線を  
ひいてゐた頃、父は新橋の駄家から手拭ぎで  
朝湯に行つた頃——かゝる放蕩の生涯が江戸戯  
作者風の著述をなすに必要であると信じてゐた  
頃にも、わたしはどうしても珈琲をやめる事が  
できなかった。

各人日常の習慣と嗜好とは凡そ三十代から  
四十前後にかけて定まるものである。中年の習  
慣は永く捨てがたいものである。捨て難い中年  
の習慣と嗜好とを一生涯改めずに済む人は幸  
福である。老境に入つて俄に半生慣れ親んで  
來たものを棄て排けるは眞に忍び難い。年老い  
ては古きをしりぞけて新しきものに慣れ親しま  
うとしても既にその氣力なく又時間もない。

珈琲と共にわたしはまた數年飲み慣れたシヨ  
コラをも廢さなければならぬ。數年來わたしは  
獨居の生活の氣儘なるを喜んで代り、炊事の  
不便に苦しいといつとはなく米飯を廢して麵麩の  
みを食してゐた。鹽辛き味噌汁の代りに毎朝甘  
きシヨコラを啜つてゐた。歐洲戦争の當時舶來



人力車通ずる程の露地一筋あり。このはづれにおのれが借りたる二階建、上は十疊六疊下は三疊八疊六疊にして家賃二十六圓、近き頃まで待合なりしとか、大家さまは園菊盛の頃歌謡伎座の留場に顔の賣れたるよき老人と、聞いて見ればどうやらわが身も櫻痴先生在世の頃見覚えあるやうな顔。不思議な縁なり。

露地の内には待合ま宅のたぐひ多し。さればや屋根裏の物干竿に下弦の月かゝる頃酔客を扶け送る妓女の嬌聲溝板に眠る犬を驚し、眞晝間且那といちやつく御妾の鼻聲は屋根つたひに脊をのす猫の鳴聲にまがふ。爪弾の小唄は常にわが壁隅につゞき新内の流しは夜毎窓外に雨の來るが如し。

露地を抜けて裏通に出づれば八百萬とよぶ八百屋が店を取拂ひて杵屋勘五郎が住居當世風のいかめしき破風造の普請最中、鑿金槌の響朝まだきより向側なる岸澤式佐が家の稽古三味線に打交りしもしばしが程なりけり。秋立ちそむるより早くも普請は出来上りて上方風なる土塀のはきに稽古通の美女が姿忽ち道行く人の目をぞ惹きそめる。

轉宅の翌日は鐵砲洲波除稻荷の御祭禮に當りけり。しかも今年は例年になき賑ひの由

電車通には飾物二三箇所及びたり。一丁目紺屋が店のほとりには御祭佐七を見立てたる造り庭、不折一流の六朝文字に碧梧桐一派が新俳句の二三句も見えたるは一丁目の地主益谷氏が好みとぞ聞えし。晝中は行列組んで町内の若い者獅子頭引出で練り歩む騒ぎ名所緒に見る昔のさまに異ならず。暮れては岸澤式佐が家のほとりに踊臺臺引据ゑて已佐吉が三味線に太夫も皆名あるもののみ出語りせしはこの町内ならでは出来ぬ事と土地の自慢も道理なり。

一 われ胃を病むこと久しければ朝まだき居留地を歩み佃の渡わたりて住吉神社の参詣をばその日ぐのつとめとなしぬ。佃島今は全く漁村の趣を失ひたれど猶貝殻捨てし路のほとりに碇を引上げ人家の軒に投網を干したるなど佃賣賣家の小旗と共に捨てがたき眺なり。渡船にて折々眺めかしき姿したる女と乗り合ふ。漁家の娘の身を賣りたるが親の病なぞ訪ひ來るにやあらんかとわれ例のわけもなき空想に耽るもをかし。梅雨となりて今年はわけて暴風模様の日多かりしかば住吉詣もいつしかおろそかになりぬ。其頃より新富町の裏手を流るゝ堀割づた

ひ八丁堀の講釋場に半日を暮しけり。八丁堀には向ひ合ひて講釋場二軒もあり。露地の奥なる壽亭とかよぶもの家も古びて薄暗く昔めきてよし。勝手口に葡萄棚ありしと覺えしが其のさま人情本の挿繪なぞ見るやうにて今に忘れがたし。

一 講釋といふもの久しく聴きたる事なかりき。今はいづれも故人となりし呂井一小金井廣洲なども知らぬにはあらねど、そは話しか家の圓朝義太夫の播磨太夫など聞き歩みし頃のことにて數ふれば二十餘年の昔なり。然るに去年ふと須田町の四辻にて俄雨に逢ひ柳原の小柳亭に駆け込みし時一立儼文磨が村井長庵の一番聞きしより講釋をば此の上もなく嬉しきものに思ひそれよりは長久保の家の遠きをいはず折あれば金車小柳福本あたりの破臺に半日を寝そべりぬ。

一 當今の世都下の劇場電気短徒に明くして俳優の技藝ます／＼邪道に陥り、落語は只一人の真打を待たせんが爲めに數番のステ、コを演ぜしめ、長唄は諸曲を模して至れりとなし清元は一中河東を犯して上品がる。皆その本領を没却して騙みざるの有様、かゝる藝道の末世にありてわれ偶然一立儼文磨が講釋

# 斷腸亭雜稿

## 序

一、丙辰の年二月金養海の故を以て慶應義塾教授並に三田文學編輯を辭し大久保の舊宅に蟄居するや無聊の餘庭後啞兩三子と戯に雜誌文明なるものを刊行す。一、本書收む所の雜草皆連月文明の爲に執筆せしもの。唯築地草は岡鬼太郎君編輯する所の月刊雜誌娛樂世界 正月に出せるものなり。

一、わが斷腸亭のこと庭後君の記掲げて文明第四號にあり才筆つぶさに敵愾のさまを記して餘すなし。唯過賞敢て當らざるものあるのみ。今請得て卷首に轉載す。

一、雜草蒐め來つて一看すれば我一家身邊の事に係らざるものなし因て初めわがみひとつと題せしが後改めて斷腸亭雜稿となしぬ。

大正六丁年十月初三大風驟來後二日斷腸亭前權樹の下にて  
荷風小史

## 築地草

一 築地草とはついちにおひまつはりし草とな思ひたがひそ。すこし譯ありて半歳ばかり築地一丁目のとある露地裏に獨樹せし折の事ども後の日の笑草にもせばやと埒もなく書き記す文反古ぞかし。寺院の塔に生ひまつはる藨なりせば秋は楓に劣らず錦を繞りぬべし。閑庭の四阿にからむ郁子美男葛なりせば冬猶緑の葉裏薄紅添ふる美しさ言ふばかりなかるべきに我がちび筆の穂にたよるこの雜草に至りては夕日にぶらさがる烏瓜、露の中なる書顔の風情さへいとく覺來なかるべし。

一 序文めきたる筆癖にこんな事書出せば、無駄な文句はそれこそなか／＼築地川、汐と眞水の逢引橋に鐵者が鬚の永き日もいつか恰の輕子橋、裾吹き拂ふ川風に艶めく土地の有様をのぞきて見るも一興と、世を牛込のはづれ

より誰やらが四十で知つた四谷を過ぎ室の花なる桃町、外櫻田の城端つたひ三時間あまりの道のりを家財道具其座右の書物車四輛ほどに積載せてはる／＼こゝまで引移りしは、乙卯の其の年も半に近く、銀座通の柳かげには最寶の早や荷をおろす頃なりけり。

一 近くば寄つて目に宮川と云はずとも、これのみは遠くからでも句で知れる鰻片の隣に高き夏木立廣石あまた置き添へし思ひがけなき閑靜は庭師何某が住居とかや。電車行きかふ路ばたまで一樹の老柳珊瑚樹と枝交す小暗き蔭を幸と其また蔭は知る人のみぞ知る潮御橋、名前は大層唐めきたれどもことは藝者の出入致さぬ待合、素人専門女中が萬事の御用をたす家とかや。俱待の自動車夕暮より河岸通に居並ぶかの藝家と背中合せぞ浮世なる。一 さても此方の側には雜屋の物干、橋の彼方なる新宮座の景氣も葉を喰へと空中に四季不斷の轆を繰す。その手前には青竹の駒寄いつも新しきナグリの板塀越し、椎の老木の枝、折しも若芽の綠道のほとりにさし翳したる一櫺、これ先代の衣鉢をついで其の名をすますあがの清元梅吉が住居とぞ。隣には佛師屋の硝子戸口佛壇佛置き並べたる處僅に

正流齋南窓は今幾代目を継ぎし人にや、われ其の技よりも先其の怪偉なる容貌と風采とを喜び迎ふ、海坊主のやうなる肥満の老人黄八丈の二枚重に牡丹餅大の五紋つけたる淺葱羽二重の羽織着て、便々たる太腹より音吐朗朗として讀出る修羅場の軍談兩國の昔も思出らるゝ心地す。總じて講談師の風采老壯の別なく當世らしからぬこそよけれ。伯山のにがみ走りし面長の兩鬢深く抜け上りたるは何となく親分らしく典山の貉顔して客を馬鹿にしたやうなる蘆洲の書生羽織に白縮緬の兵兒帶太く巻きつけたる、或は英昌が市樂の小袖ひけらかしたるなど皆當世のものならず。

一 義太夫語は故人大隅の如く偉大なるこそ頼もしけれ、三味線弾きは背圓くかゞみて顔ひよつくりと突出し肩衣も取つてつけしがやうに似合はしからぬなど却てよきものなり。講釋師の美男なるは高座に適應せず風采間の抜けざるは却て藝にすぎある虞あり若手の連中心得べき事ぞかし。

一 われ講釋場に通ひそめてより漸く心付きしは講釋と芝居狂言との關係なり。狂言の筋立を講談續話などより取れるものは兩者を比較對照せん事實に作者が技倆の如何を知らしむるのみに止らず、引いて俳優の技藝を見るにも亦思ひの外的心得となること多し。流石に岡鬼太郎君は劇評家の泰斗なり。先頃帝國劇場變新二の狂言に鬼太郎君は尾上松助の太屋を稱揚するに當りて此の話を得意とせし落語家某が事を合せ語られき。何にかがらず藝評といふものほど六ヶ敷はなし。わけもなくあれは面白からずこれは陳腐なりと獨天下の藝術論する人の心ほど推測られぬはなし。

一 芝居と淨瑠璃と講釋とは其の演藝各類を異にすれども動作を現し傳ふる事を専らとしこれを興味の中心となす處一なり。人物の心理を描寫し解剖せんとする時あれば之れが爲めに殊更にまた或る動作を設出して常に外面の變化よりして内面の如何を窺はしめんとす。錦城齋典山は往々人物の胸中を語出して猶且つ人を飽かしめざる處あり。非凡の藝といふべし。

一 芝居の殺し捕物立廻りは講談にても亦興味の中心なり。近頃の芝居は變挺に西洋がかりて糊紅を見せる事稀にとんぼ返りも綺麗には行かぬやうになりたる折から流石講談界には猶江戸傳來の特技を磨く者の絶えざること嬉

しき限りなれ。

一 佐野治郎左衛門が吉原百人斬荒木又右衛門が伊賀越の仇討など耳にきく講釋と日に見る芝居の立廻りを思ひくらぶるに日に見るものよりは耳にきくものこそ氣合迫りて凄味深けれ。怪談に至りて更にこの感あり。

一 盆過ぎてよりは炎天の日盛り歩むに苦しければ講釋場へもおのづと足遠くなりて、我家の二階の窓南向の風人よきを幸獨棲みの家の中憚るものなければひろく明け放ち唯午夢をのみ食るに今年の夏ばかり蟬の聲聞かねば、寐覺の手枕何となく異様の心地して、折々は遠く旅に在るが如き思するものをかしかりけり。

(乙卯臘月稿)

## 矢はずぐさ

一 矢筈草と題しておもひ出るまゝにおのが身古疵かたり出でて筆とる家業の責ふさがばや。

## 二

さる頃も或人の戯にわれを捉へて詰りたま



を聴きそむる感涙を催しけり。

一 かへすゝ文慶は惜しき事してけり。文慶が計世に傳はりしは今年の春かと覺ゆ。都新聞の紙上にそのころ委しき傳出でたれば人猶記憶すべし。われ文慶を尊敬して止まざるは此人三十年來紳士の宴席に招かるゝ事あるも決して行かず、これ其の藝を縛るゝ事を

快しとせざるが爲めなりとて、高座にても憚る所なく當世紳士の無智を罵り併せて新聞屋の藝評を嘲るが故なり。文慶は實井馬琴と共に誠に痛快なる當世の罵倒家なり。そも〴〵嘲世罵俗以て人の頤を解かしむる

は男根の形したる木を以て机を叩きしかの風流道軒以來此の道の本意ならん歟。諺釋通の説を叩くに當今斯道の上手は錦城齋典山に肩をならぶものなしか。われこの人の小夜衣双紙大保六歌仙伊賀の水月

佐野治郎左衛門など皆心して聴きたり。誠に人のいふごとく上手には相違なれど何となくその藝に街氣あるが如く思はるゝは大人惜むべし。典山はおのれの藝をばあまりに無駄なきやうにと心掛け、聞くものをして深くおのれの藝に感服せしめんものとあまりに苦心し過ぎるが爲めか、却て自由奔放の氣を失

ひ手綺麗な細工物のやうになりて其の藝往々せゝこましく小さくなるの傾を免れず。これ正に五代日菊五郎の無臺にも比すべきにや。われ典山の技を以て上手過ぎたりと云はんとす。

一 世人屢神田伯山を以て典山に對せしめんとするが如し。然れども今日の伯山は決して典山に頌頌し得べきものならず。もし伯山を論ぜば伊東陵潮こそ其の好敵手なるべけれ。伯山が清水の次郎長を聞くに其の藝愛嬌もあり勢もありて誠によしと雖そは唯一晩の事なり。二晩三晩とつづけて聞けば其の調子いつも同じやうにて忽人を飽かしむ。花やかなるのみにて實少きは伯山の技未至らざる所ならずや。彼は辯舌極めて流暢なれども種々なる階級の人物を舌頭に活躍せしむる事典山に及ばず。典山に至りては片言隻語よく町人武士大名俠客妓女妻妾の面目を聴者の眼前に髣髴たらしむ誠に得がたき藝なりといふべし。典山をして今一步を進めて所謂名人の域に入らしめんとせばそは唯無邪氣になりて人に聴かすといふ心を失らしめん事のみ。願くはあまりに細心に過る事勿れ。然らば圓熟老練の技おのづから自由自然の餘裕を生

じて天下一品のものたるに至らん歟。

一 松鯉馬琴は所界の古老なりと云ふ。われ松鯉の水滸傳を聞きて漫に國方が錦繪の筆力と彩色を思出でたり。松鯉の藝は一席二席位にてはこれと感心する處なれど日毎日毎に聞き行けば何處と云はれぬ處にうま味生じ來りて忘れられずこれ等を以て眞の老練と云ふならんか馬琴は松鯉に比すれば一廻りも若きだけはでな處あり。この人辯舌もさして流暢と云ふにはあらず音聲も濁りて調子に變化少なれどいつも元氣よく高座にでしやべる事如何にも愉快さうに見え聞く人自ら愉快となる。江戸兒の痛快なる罵倒は文慶なき後この人を除きてまた他に聞くべからず。幸に老いてますゝ壯なれ。小金井蘆洲を聴きしは僅兩三度に過ぎず。果してその得意とする處の讀物の何たるや定連ならぬ我には知る由なれど其の技其の年配おのづから斯道一方の棟梁たるを示して餘りあり。一體の讀み振り伯山の如くはでならず又典山の如く纖巧ならざる處自ら悠然として迫らざる趣を生じ樂に話を聞かせる事此人の一流と覺えたり。蓋し多年熟練の功なるべし。

より開きて初めて知りしなり。八重その頃明治三四年新橋の庭亭花月の裏手に巴家といふ看板をかけて左棲とりてゐたり。好まぬ酒も家業なれば是非もなく吞過して腹いたむる折々日本橋通一丁目反魂丹賣る老舗念したりに人を遣して矢筈草購はせ土瓶に煎じて茶の代りに呑みたりき。われ生來多病なりしかど頃頃腹痛む事稀なりしかば八重が頻にかの草の效驗あること語出でて更に心に留むる事もなく打過ぎぬ。然るをそれより三四年にして一夜激しき病に襲はれ一時は快くなりしかど春より夏秋より冬に時候の變り目に雨多く降る頃ともなれば必ず腹痛み出で懣きがちとはなりけり。嘗ては寒夜客來茶當酒竹爐湯沸火初紅と云へる杜小山が絶句なぞ口ずさみて殊更煎茶のにがきを好みし朱泥の茶餅、今は矢筈草押込みて煎じつめ夜毎眠につく時持薬にする身とはなり果てけり。

## 五

およそ人の一生血氣の盛を過ぎて、その身

はさまぐの病に冒されその心はくさぐさの思に悩みて今日は昨日にまして日一日と老い衰へ行くを、時折物にふれては身にしみんとと思知るほど情なきはなし。

宿昔青雲志、蹉跎白髮年、誰知明鏡裏、形影自相憐とはこれ人口に膾炙する唐詩なり。鏡に照して白髮に驚くさまは佛蘭西の小説家モオパッサンが終局といふ短篇にも書綴られたり。

われ髮未白からず。而も既にわれながら老いたりと感じること昨日今日のことはあらず。父を喪ひて其の一週忌も過ぎける翌年の夏の初、突然烈しき痼病に冒され半月あまり枕につきぬ。元來酒を嗜まざれば従つて日頃惡食せし覺えもなし。強ひて罪を他に及さしむれば廣應義塾にて取寄する辨當の洋食にあてられしがためとも云はんか。そも三田の校内にては奢侈の風をいましめんとて校内に取寄すべき辨當にはいづれもきびしく代價を制限したり。されば料理の材料おのづから粗惡となりてこれを食へば終日胸苦しきを覺ゆ。紅がらにて染めたるジャム鬢のやうなるバタなんぞ見る折々いづも氣味わるしと思ひながら雨降る日などはつい門外の三田通まで出て行くに懶く、其日も何

心なく一皿の中少しばかり食べしがやがて二日目の夕方突然腸擗らるゝが如き痛に日さむるや、それよりは夜の明放るゝころまで幾度なく廁に走りき。

其の頃わが住める家はいと廣かりき。われは二階なる南の六疊に机を置き北の八疊を客間、梯子段に臨む西向の三疊を寢間と定めければ、幾度となき昇降りに疲れ果て兩手にて痛む下腹押へながらもいつしかうととまどろみぬ。目覺むれば早や午に近し。召使ふものゝ知らせてに瀝れの一間に住み給ひける母上控で置きてはよろしからずと直様醫師を呼迎へられけり。われは心緒に赤痢に感染せしなるべしと思ひ付くや人の話にて此の病の苦しさを知り心は戦々兢々たり。幸にして醫師の診斷によればわが病はかゝる恐ろしきものにてはなかりしかど、晝夜絶ゆる間なく弱病にて腹をあたまめよ、肉汁とおも湯の外は何物も食ふ可からず、毎朝不淨のものを検査すべければ薬局に送り届けよなぞ、醫師はおごそかに云置きて歸り行きぬ。わが家には父のませし頃より二十年あまりも召使ふ老婢あり。このものの醫師の命ぜし如く早速弱病あゝめて持來りしかばそれをば下腹におし當てゝ再びうとと眠りき。

ひけるは今の世に小説家といふものほど仕合せなるはなし。晝の日中も誰憚るおそれもなく茶屋小屋に出入りして女に戯れ遊ぶこと、これのみにても堅氣の若きものゝ日には羨しきかぎりなるべきに、世の常のものなれば強ひても包みかくすべき身の恥身の不始末、亂行狼藉勝手次第のたけをば尾に鱗添へて大袈裟にかき立つれば世の人これを讀みて打興じ遂にはほめたゝへて先生と敬ふ。實にや人倫五常の道に背きて却て世に迎へられ人に敬はるゝ卿等が渡世こそ目度けれ。かく虧れたまひし人もし深き心ありてのことならんか、この矢筈草口にせば遂にはまことに憤りたまふべし。矢筈草とは過ぎつる年わが大久保の家に在りける八重といふ妓の事を記すものなれば。

八重その頃は家の妻となり朝餉夕餉の支度はおろか、聊かの暇あればわが心付かざる中に机の座を拂ひ、硯を清め筆を洗ひ、或は蘭の鉢物の蟲を取り、或は古書の綴絲の切れしをつくるふなど、餘所の見る目もいと殊勝に立働きてゐたりしが、故あつて再び身を新橋の敷地に置き藤間某と名乗りにて兒女に歌舞を教ふ。浮瑠璃の言葉に琴三味線の指南して「後家の棟も立つ月日と。八重かくて其の身の晩節を全うせ

んとするの心か。我不知。

### 三

そも小説家のおのれが身の上にかゝはる事ども其儘に書綴りて一篇の物語となすこと西洋にては十九世紀の初つ方より漸く世に行はれ、ロマンセルソネルなどと稱へられて今にすたれず。即ちゲーテが作者きウエルテルの愁、シャトوبرリヤンが作ルネエの類なり。わが國にては紅葉山人が青葡萄などをや其の權輿とすべしか。近き頃森田草平が煤煙小栗風葉が歌瀬など殊の外世に迎へられしより此の體を取れる名篇佳句漸く數ふるに遑なからんとす。わけても最近の文藝俱樂部十一月に出でし江見水蔭が水さびと題せし一篇の如き我身には取分けて興深し。されば我今更となりて八重にかゝはる我身のことを種として長き一篇の小説を編み出さず事却てたやすき業ならず。小説を綴らんには是非にも篇中人物の性格を究め物語の筋道もあらかじめは定め置く要あり。かゝる苦心は近頃病多く氣力乏しきわが身の堪ふる處ならねば、寧ろ隨筆の氣儘なる體裁をかるに如かじとてかくは取前めもなく書出したり。小説たるも隨筆たるも旨とする處は男女の仲のい

きさつを寫すなり。客と藝者の悶着を語るなり。亭主と女房の喧嘩犬も喰はぬ語をするなり。犬は喰はねど煩惱の何とやら血氣の方々之を讀みたまひて其の人もし股方ならばお客となりて藝者を見ん時其人もし藝者家ならば客座敷かゝりてお客の前に出でん時前車の覆轍以てそれゝ身の用心にもなしたまはば此一篇の矢筈草豈徒に男女の癡情を種とする賣文とのみ蔑むを得んや。

### 四

矢筈草は俗に現の證據といふ藥草なること、江戸の人山崎美成が海録といふ隨筆第五卷目に見えたり。曰く「矢筈草俗に現の證據といふこの草をとりみそ汁にて食する時は痼病に甚妙なり又瘧病及び疫病等にも甚效あり云々。」この草また御興草と呼ぶ。萩の家先生が辭典ことばのいづみを見るに「げんのしようこ。魁牛兒。植物。草の名。野生にして葉は五つに分れ鋸齒の如き刻みありて長さ一寸ばかり對生す。夏のころ梅の如き淡紅の花を開き後葉をむすび熱するときは裂けて御興のわらびの如く卷きあがる。莖も葉も痼病の妙藥なりといふ。みこしぐさ」とあり。我この草のことをば八重



盆子の如く其の莖蔓のやうに延びてはびこる。四谷見附より赤坂喰造の土手に澤山あり。青山兵營の裏手より千駄ヶ谷へ下る道のほとりにも露草草前草など打交りて多く生ず。採り来りてよく土を洗ひ莖もろともに程よく刻みて影干にするなり。

われは東京市中の閑地遑々土木工事のために伐り開かるべきことを憂ひて止まざるものなれば、やがては矢筈草生ずる土手もなくなるべしと思ひ、其の一束をわが家の庭に移し植ゑぬ。われその年の秋母の許を得て初めて八重を迎へ家を修めしめしが、それとても僅半歳の夢なりけり。其の人去りて庭の籬には摘むものもなくて矢筈草徒に生ひはびこりぬ。萬事傷心の種ならざるはなし。其翌年草の芽再び萌出る頃なるを、われも一夜大久保を去りて築地に獨棲しければかの矢筈草もその後はいかになりけん。近頃新に住む人ありと聞けば廢園の雜草と共に大方は刈除かれしや知るべからず。

## 八

事新らしく自然主義の理論説き出づるにも及ぶまじ、この世をよしと言ひあしと觀る十人十色の考その人々によりて異り行くも、一つに

はその人々の健康によることなり。われその身の衰行くを知るにつけて世をいとふの念抑へ難く日に／＼彌増さり行くこそ是非なけれ。わが知れる人々の中にはいかにもして我國の演劇を改良なし意味ある藝術を起さんものと家人の誤解世上の誹謗ものかは今に尙十年の宿志をまげざるものあり。聞くに涙こぼるゝ美談ぞかし。然るにわれは早くも心挫けて只管隱栖の安きを求めんとす。しかもそは取立て／＼云ふべき程の絶望あるにもあらず、將悲憤慷慨の爲めにもあらず。唯劇場の燈火あまりにあかるく目を射るに堪へざるが如き心地したるがためのみ。それに引換へて父の世より住古せし我家の内の薄／＼書齋の青燈影もおぼろに床の花を照すさま何事にもかへがたく覺初めたるが爲めのみ。茶屋といふものなくなりて、劇場内の食堂の料理何となく氣味わるき心地せられしが爲めのみ。雨の降る夜などとぼ／＼と遠道を歸り行くことの苦しくなりしが爲めのみ。これ等のこと其身すこやかなれば元より云ふにも足らぬことなれど、寒さを恐れて春も彼岸近くまで外出の折には必ず懷爐入れ歩く程の果敢なき身には、以上の事實觀劇の爲めに抑ふべき大なる犠牲の如くに感ぜらる。新聞屋

の種取りにと尋來るに逢ひてもその身丈人にて人の顔さへ見れば臆面なく大風呂敷ひろぐる勇氣あらば願うてもなき自慢話の相手たるべきに、しからざる身には唯やうるさく辛きものとなるなり。世上の文學雜誌にわが身のことども口きたなく惡しざまに書立つるを見てさへ反駁の筆執るに慚きほどなれば、見當違ひの議論する人ありとて何事も只首肯のみにてその非をあげる勇氣もなし。況やその誤を正さん親切氣に於てをや。時折遠國の見知らぬ人よりこまごまと我が拙き著作の面白き節々書きこさるゝに逢ひてもこれ亦其儘に打過して厚き志を無にすること度々なり。

心地すぐれざるも打臥す程にもあらねば病めりとは云ひがたし。病なくして病あるが如き身のさまこそいぶかしけれ。下谷の外祖父發堂先生の詩に小病無名性暮寒一と云はれしも此の如き心地にや。老杜が登高の七律にも萬里悲秋常作客百年多病獨登臺の句あり。

正月二月の寒風に吹かれて家に入れば、眼くるめくばかり頭痛を催し、八月の炎天を歩み汗を拭はんとて物かげに憩ひ風を迎ふれば涼しと思ふ間もなく、忽ち肌ひや／＼として氣味わるき寒さを覺ゆ。冬の日はいわれ人共に寒きものな

南向の小窓に雀の子の母鳥呼ぶ聲頻なり。梯  
子段に誰れやら昇り来る足音聞付け目覺むれば  
老婆の踞弱取換へに來りしにはあらで、唐棣綺  
のお召の半纏に襟付の袷前掛締めた八重なり  
けり。根下りの丸髷思ふさま髷後に突出し前髪  
を短く切りて額の上に垂らしたり。こは過る  
日八重わが書齋に來りける折書棚の草雙紙繪本  
の類取卸して見せける中に豊國が繪本時勢粧  
に「それ者」とことわり書したる女の前髪切りて  
黃楊の横櫛さしたる姿の仇なる、今時の藝者も  
かうありたしとわれの戯れに云ひけるを、何事  
も氣早の八重、机の上にありける西洋鉄手に取  
るより早く前髪ぶつ切り切落し、鏡よ／＼とて  
喜びさわぎし其の名残りなりかし。

八重その年二月の頃よりリウマチスにかゝり  
て舞ふ事叶はずなりしかば一時山下町の妓家  
をたゞみ心靜に養生せんとて殊更山の手の邊  
鄙を選び四谷荒木町に隠れ住みけるなり。わが  
家とは市ヶ谷谷町の窪地を隔てしのみなれば日  
毎二階なるわが書齋に來りてそこに積載せた  
る新古の小説雜書のたぐひ何くれとなく讀みあ  
さりぬ。彼女元北地の産。年十三にして既に名  
を其の地の教功に留めき。生來文體の戯を愛  
しよく風流を解せり。讀書に倦めば後庭に出で

茶間を歩み、花を摘みて我机の上に飾る。今わが  
家藏の古書法帖のたぐひ其の破れし表紙切れし  
綴絲の大方は見事に取つぐのはれたるは、皆其  
頃八重が心づくしの形見ぞかし。八重かくの如  
く日毎わが家に來りて夕暮近くなる時は、われ  
と共に連れ立って芝口の歌澤芝加津といふ師匠  
の許まで端唄ならひに行くを常としたり。

前の夜も歌澤節の稽古に出でて初夜過る頃四  
谷字の丸横町の角にて別れたり。さればわが病  
臥すとは夢にも知らず、八重は横引明けて初め  
て打驚きたるさまなり。

六

八重申しけるはわが身曾て伊香保に遊びし頃  
谷間の小流掬み取りて山道の渴きをいやせし故  
か圖らず病病に襲はれて命も危き日に逢ひた  
る事あり。其後は幾年月人の酒興を助くる家業  
の哀れはかなき、其身の害とは知りながら客の  
勧むる盃はいなまされず、家に歸らば今宵もま  
た苦しき明すべしと心に泣きつゝも酒吞みてく  
らせし故腹の病はよく知れたり。養生の法と  
ても、わが身却て醫師にまさりて明ならん。  
醫のとゝのへ勧むる薬は元より怠り給ふな。  
さりながら古老の昔より云傳ふるものには何事

に限らず靈驗ある事あり。わが身未だ妓籍を脱せ  
ざりし頃絶えず用ゐたるかの矢筈草今も四谷の  
家にあり。煎じて參らすべければ聊かその句の  
惡しきを忍びたまへとて、直に人を走せて矢筈  
草取寄せ煎じけり。

われ生れて煎藥と云ふもの存みたるはこれが  
初めてなり。この藥たしかに效能あるやうに覺  
えければ其後は風邪心地の折とてもアンチファ  
リンより葛根湯妙振出しなぞあがなひて煎  
じる事となしぬ。例へば雪みぞれの廂を打つ時  
なぞ田村屋好みの唐棣の襦袢に辛くも身の惡感  
を凌ぎつゝ消えかゝりたる炭火吹起し孤燈の下  
に煎藥竈立つれば、夜氣沈々たる書齋の中に藥  
烟漲り渡りて深けし夜のさらにも深け渡りしが  
如き心地、何となく我身ながらも涙ぐまるゝや  
うにてよし。

七

八重が心づくしにて病は程もなく癒えけり。  
芍藥の花散りて世は早くも夏となりぬ。梅雨の  
あくるを待兼ねてその年の土用に入るやわれは  
朝な／＼八重に誘はれて其處此處と草ある處に  
赴きかの藥草摘むにいそがしかりけり。  
矢筈草は一寸見たる時其の葉蓬に似たり。覆

らすらと讀下しける才識に母上このもの全く世の常の女にあらじと感じたまひて此の度の婚儀につきては深く其の身元のあしよしを問ひたまはざりき。

八重竹相國に遊びて和歌を學びしは久しき以前の事なり。近頃四谷に移住みてよりは不圖東坡が醉餘の手跡を見其の應遼豪邁の筆勢を懷慕し法帖多く購求めて手習致しける故唐人が行草の書體譯もなく讀得しなり。何事も日頃の心掛によるぞかし。

十

八重家に來りてよりわれはこの世の清福限無き身とはなりけり。人は老を嘆ずるが常なり然るにわれは俄に老の樂の新たなを誇らんとす。人生の哀樂唯此の人の心一ツによる。木枯さけぶ夜すがら手摺れし火桶かこみて影もおぼるなる燈火の下に煮る茶の味は紅樓の綠酒にのみ酔ふものゝ知らざる所なり。寢屋の屏風太鼓張の櫺など破れたるを、妻と二人して今迄は互に補置きける古き文反古取出して讀返しながら張りつくるふ樂しみも亦大廈高樓を家とする富貴の人の窺知るべからざる所なるべし。菊植うる籬または風の怒の竹格子なぞの損じた

るを自ら庭の竹藪より竹切來りて結びつくるふ戲も亦家を外なる白馬銀鞍の公子達が知る所にあらざるべし。わが物書くべき草稿の罫紙は日頃暇ある折々われ自らバレン持ちて板木にて摺りて居たりしが、八重今は襷がけの手先還にまみるゝをも厭はず幾帖となく之を摺る。かかる樂しみも近頃西洋紙に萬年筆走らせて議論する文士の知らざる所とや云はん。

わが家に亡父の遺し給ひし書籍盆栽文房の器具尠からず、八重はわれを助けて家を修めんが爲め林園月令、遊漫錄、草木百種、庭造秘傳鈔、日本家居祕用などいふ類の和漢の書取出して讀みあさり、硯の海の底深う巖のやうにこびりつきたる墨のかす洗ひ落すには如何にすればよき、詩繪の金銀のくもりを拭清むるには如何にせばよきや、堆朱の盆香合杯その彫の間の塵を取るには如何にすべきや、盆栽の梅は上用の中に肥料やらねば來春花多からず、山百合は花終らば根を掘りて乾ける砂の中に入れ置けかし、あれはかくせよこれはかうせよと終日擧げず暇たになかりけり。わが父は此の上なく物堅き人なりき。然れども生前自ら選みたまひし其の詩稿來青園集といふを見れば、

良辰佳會古難並。玉手參差酒幾巡。  
休道詩人無艷分。先從花國迎春。  
春鳥無心映友啼。蘭舟繫在水祠西。  
暖波一面花三面。眞個溫柔鄉此堤。

の如き體の詩を誦し得るなり。又曾て中國に遊び給ひける時姑蘇城外を過ぎて妓に贈り給ひし作多きが中に

麗質嬌姿本絕羣。蘭房別占四時春。  
相逢無語翻多恨。桃花桃根畫裏人。  
如在沉香亭北看。妖姿冶態正春闌。  
多情鄉是傾城種。不信小名呼電鵲。

の如き能くわが記憶する所なり。現に城南新橋の畔南御街の一牌亭にも銀屏に簡簡の筆を残したまへるがあり。われ家を継ぎいくばくもなくして妓を妻とす。家名を辱しむるの罪元より輕きにあらざれど、如何にせん此の痴心ざま素直にて唯我に事へて過ちあらんことをのみ愛ふるを。何事ぞ宿世の因縁なりかし。初手は唯かりそめの契も年經ぬれば人に云はれぬ深きわけ重りてまことの涙さそはるゝ事も出で來ぬるなり。これ等をや迷の夢と悟りし人は云ふなるべし。世の謂人



ればさして悲しと思はねど夏はつく／＼情なき事のみなり。夕方の行水にも湯さめを忘れ、咽喉の湯きも冷きものは口に入ること能はざれば、これのみにても人並の交りは出来ぬなり。人にさそはれ夕涼に出づる時もわれのみは豫め夜露の肌を冒さん事を慮りて氣のきかぬメリヤスの襦衣を着込み常に足袋をはく。洒樓に上りても夜少しく深けかゝると見れば欄干に近き座を離れて我のみ一人葭戸のかげに露持つ風を避けんとす。をちこちに夜番の拍子木聞えて空には銀河の流瀾く鮮ならんとするに猶もあつしあつしと打叫びて電氣扇正面に置据る貸浴衣の襟ひきはだけて胸毛を吹きなびかせ麥酒の盃に投入るゝブツカキの水ばり／＼と石を割るやうに噓咄く當代紳士の豪興、われ是を以て野蠻なる哉や没趣味なる哉やと嘆息するも誠はわが由弱の妬みに過ぎず。何事に限らずわが言ふ處生まじめの議論と思給はゞ飛でもなき買冠なるべし。

## 九

應義塾のつとめもかくては日に／＼大儀となりぬ。朝早く出掛間に腹痛み出づることも度々にて、それ懷中の湯婆子より懷爐より温石よ

と立騒ぐほどに、大久保より札の辻までの遠道、東角に出勤の時間おくれ勝とはなるなり。時雨そぼふる午下火の氣乏しき西洋間の教授會議または編輯會議も唯々わけなくつらきものゝ中に數へられぬ。何時の幾日には遊びに行かんと親しき友より輕き約束申出でられても若しや其日に腹痛まば如何にせん、雨降らば出にくからんなぞ取越苦勞のみ重れば折角の興もとく消えがちなるこそ悲しけれ。

心柄とは云ひながら強ひて自ら世をせばめ人の交を斷ち、家へのみ引籠れば氣隨氣儘の空想も門外世上の聲に妨げ覺まざるゝ事なれば、いつとしもなくわれは誠に背も圓く前にかどみ頭に御置く翁となりけるやうの心とはなりにけり。

八重も女の身の既に三十路を越えたり。初めの程はリウマチスの病さへ癒えて舞ふに苦しからずなりなば再び新橋にや歸らん新に柳橋にや出でん或は地を選びて師匠の札をや掲げんなぞ思ひ企つる處さま／＼なりしかども、いか我が懶惰の習ひにや馴れ染めけん、且つは日頃親しく尋來る向島の隱居金子翁といふ老人のすゝめもありてや、浮世の夢をよそに、思出多き一生を大久保の里に埋め、早衰のわが身が

朝夕の世話する事となりぬ。そは甲寅の年も早や秋立ち初めし八月末の日なりけり。日出度き相談まとまりて金子翁を八重が假の親元に市川左團次夫妻を仲人にたのみ山谷の八百屋にて形ばかりの盃事いたしけり。金子翁名元助に保子屋數回同心家にて三條の三絃をよくし文字の太夫となりて金銀と儲する凡牌の歌となり機織に出で産を起し還上には有馬温泉を三たびあり坂東秀綱八百屋屋四郎が其長子藤間金之助はその次なり。家は其の時庭の地揚げ上臺の根つきなぞ致す爲め客をことりてゐたりしかど金子翁曾て八百

屋が先代の主人とは懇意なりける由にて事の次第を咄して頼みければ今の若き主人心よく承知して池に臨む下座敷を清め床の間の軸も光琳が松竹梅、三幅對をかけ其の日のみ吾等が爲めに一日間賣の面商をいとはざりけり。この日残暑の夕陽烈しきに山谷の遠路をいとはずしてわが母上も席に連り給ひぬ。母は既に父在せし頃よりわが身の八重といふ妓に押れそめける事を知り玉ひき。去歲わが病伏しける折日々看護に來りしより追々に言葉もかけ給ふやうになりて竊に其の立居振舞を見たまひけるが、痼疾強く我儘なるわれに事へて何事も意にさからはぬ心立の殊勝なるに加へて、殊に或日わが居間の軸を拵ふる折過上當今の書家高邨といふ人の書きける小杜が茶煙禪榻の七絶す

折かむ背中もやがて圓火鉢

かどのとれたる老を待つかな  
それは扱置き八重わが家に來りてよりはわが  
稚き時より見覺えたるさまの、手道具皆手入  
よく綺麗にふき清められて、昨日までは兎角家  
を外なる樂しみのみ追ひ究めんとしける放蕩の  
兒も此に漸く家居の樂を知り父なき後の家を守  
る身となりしこそうれしけれ。

## 十二

大凡の人は詩を賦し繪をかく事をのみ藝術な  
りとす。われも今まではかく思ひたり。わが  
藝術を愛する心は小説を作り劇を評し聲樂を  
聴くことを以て足れりとなしき。然れども人間  
の欲情もと極る處なし。我は遂に棲むべき家  
着るべき衣服食ふべき料理までを藝術の中に  
數へずば止まざらんとす。進んで我生涯をも  
一個の製作品として取扱はん事を欲す。然らざ  
ればわが心遂にまことの満足を感じる事は  
ざるに至れり。我が生涯を藝術品として見ん  
とする時妻は其の最も大切な制作の一要件な  
るべし。

人はかゝる言草を耳にせば直に榮耀の餅の皮  
と云捨つべし。されど藝術を味ひ樂しむ心は

もと貧富の別に關せず。深刻の情致は何事に  
よらず却て富者の知らざる處なり。わが衣食  
住とわが生涯を以て活きたる詩活きたる藝術  
の作品となすに何の費を要せん。裏露地の怪  
住居も自ら安する處あらば又全く畫興詩情  
なしと云ふ可からず、金殿玉樓も心なくんば  
春花秋月猶瓦礫に均しかるべし。

わが家山の手のはづれにあり。三月春泥容  
易に乾かず。五月早くも蚊に襲はる。市ヶ谷  
の喇叭は入相の鐘の餘韻を亂し往來の軍馬は門  
前の草を食み塀を蹴破る。昔は貧乏御家人の跋  
扈せし處今は田舎紳士の奥棟でこく丸鬚を  
髯かすの地、元より何の風情あらんや。然れど  
もわが書庫に蜀山人が文集あり山手閑居の記  
はよくわれを慰む。わが庭廣からず然れども屋  
後猶數歩の菜圃を餘さしむ。款冬、芹、蓼、葱、  
苺、薑荷、獨活、芋、百合、紫蘇、山椒、枸杞  
の類時に従つて皆園房の料となすに足る。ハ  
重日々菜園に出で纖手より之を摘み調味してわ  
が口頃好みて集めたる器に盛りぬ。

つらく按ふに我國の料理ほど野菜に富める  
はなかるべし。西洋にては巴里に赴きて初めて  
菜蔬の味稱美すべきものに遇ふと雖その種  
類尙我國の多きに比すべくもあらず。友朋には

果實の珍しきもの多けれど菜蔬に至つては白菜  
菱角藕子筍等の外れ又多く其の他を知ら  
ず。菜蔬と魚介の味美なるもの多きは是日本  
料理の特色ならずとせんや。

食器の清酒風氣なる亦大に誇るに足るべし。  
西洋支那の食器金銀珠玉を以て之を製するあ  
り、其實堅牢にして其形の壯麗なる元より我國  
の及ぶ處ならず。洋人銀の肉叉を用る洋人翡翠  
の箸を把る而して我俗杉の丸箸を以て最上の禮  
式とす萬事皆此の如し。又思ふに西洋支那の食  
卓共に華麗莊嚴の趣あれども四時を通じて其  
の模様大抵同じきが如く、その料理と之を盛る  
食器との調和對照に意を用ゆる事我國の如く  
甚しからざるに似たり。我國の膳部に於ける  
や食器の質と其の色彩紅様の如何によりて其の  
趣合く變化す。夏には夏冬には冬らしき盃盤  
を要す。誰か鮪の刺身を赤き九谷の皿に盛り新  
漬の香物を蒔繪の椀に盛るものあらんや。日本  
料理は器物の選擇を最も緊要となす。此に於て  
其の法全く特殊の藝術たり。盃盤の選擇は酒  
樓にあつては直に主人が風懷の如何を窺はし  
め一家にあつては主婦が心掛の如何を知らせし  
む。八重多年教坊にあり都下の酒樓歌亭にして  
知らざるものなし。加ふるに骨董の鑑識淺しと

の蔑も迷へるものは願す。われは唯この迷ありしが爲めに所謂當世の教育なるもの受けし女學生上りの新夫人を迎へる災厄を免れたり。盃持つ妓女が纖手は女學生が體操仕込の腕力なければ、朝夕の掃除に主人が愛玩の什器を損はず、歳先の盆最も榊枕に杖引折らるゝ虞なかりき。世の中一度に二つよき事はなし。

## 十一

親しき友にも八重との婚儀は改めて披露せず。祝儀の心配なぞかまじとてなり。物堅き親戚一同へはわれ等四人が身分を省みて無論披露は遠く致しけり。人のいやがる小説家と世の卑しむ妓女との野合、事々しく通知致されなば親類の奥様や御嬢様方却て御迷惑なべしと察したればなり。然れども世は情知らぬ人のみにはあらず。我等が此度の事目出度しとして物祝ひ賜はる向も趣からざりしかば、八重は口やかましき我が身が世話の手すきを見計らひて諸處方々返禮に出歩きけり。秋も忽過ぎ去りぬ。菊の花萎るゝ籬には石菫花咲き出で落葉の梢に百舌鳥の聲早や珍しからず。裏庭の井のほとりに栗熟りて落ち縁先には雨天の實、石燈籠のかげには梅撥色づき初めぬ。

初冬の山の手ほどわが家の庭なつかしく思はるゝ折はなし。人は樹木多ければ山の手は夏のさかりにしくはなけん折思ふべけれど、藪蚊の苦しみなき町中の住居こそ夏は却て物干臺の夜涼縁日のせざる歩きなぞ興多けれ。簾捲上げし二階の窓に夕榮の鱗雲打眺め夕河岸の小鱗賣行く聲聞きつけて俄に夕餉の支度待兼ねる心地するも町中なればこそ。翻つて冬となりぬる町の住居を思へば建込む家にさらでも短き日脚の更に短く長火鉢置く茶の間は不斷の管閑なるべきに、山の手は庭は木々の葉落盡すが故に夏よりも明るく晴々しく、書齋の丸窓も芭蕉朽ちて穩なる日の光終日斜にさすなり。露時雨夜毎にしげくなり行くほどに落葉朽ち腐るゝ植込のかげよりは絶えず土の香薫じて、鶺鴒四十雀驚なぞ小鳥の聲は春にもまして賑し。げに山の手は十一月十二月かけての折ほど忘れがたく住心地よき時はなきぞかし。

八重諸處への禮歩きもすまして今は家にのみ在り。障子は皆新しく張替へられたり。家の柱縁側など時代つきて色色に黒みて輝りたるに障子の紙のいと白く糊の匂も失せざるほどに新しきは何となくよきものなり。座敷も常よりは明くなりたるやうにて庭樹の影小鳥の飛び影

の穩かなる夕日に映りたるも亦常よりは鮮なる心地す。夕風裏窓の竹を叩して目覚めれば、新しき障子の紙に恰火の光も亦清く澄みて見ゆ。冬となりてこゝに又何よりも嬉しき心地せらるゝは桐の火桶、爐、置炬燵、枕屏風など春より冬にかけて久しく見ざりし家具に再び遇ふ事なり。去年の冬より今年も春猶寒き折までは毎朝つやぶきん掛けてよく拭き込みたる火鉢、夏の中仕舞ひ込みたる押入の座に大分光澤うせながら而も見馴れたる昔のまゝの形して去年在りける同じき處に置据えられたる宛ら舊知の友に逢ふが如し。君もすこやかなりしか、我も亦幸に餘生を保ちぬと言葉もかけたき心地なり。寔に初冬の朝初めて火鉢見るほど、何ともつかず思出多き心地するものはなし。わが友江月庵が句に、

冬來るやまたなつかしき古火桶  
これ聊かも巧む所なくして而も其意を盡したる名吟ならざや。去歳の冬江戸庵主人畫帖一折携へ來られ是非にも何か繪をかき句を題せよとせめ給ひければ我止む事を得ず机の側にありける桐の圓火鉢を見て其の形を寫しけるが、俳想乏しくて即興の句出でざる苦しさに、何やら譯もわからぬ文句左の如く書流したる事あり。



からず。此に於いてか無事石橋を歩むものゝ知らざる處を知る。話の種多く持つ身とはなるなり。

# 十七

藝者その朋輩の丸鬚結ふを見ればわたしもうぞ一度はと茶斷斷神かけて念ずるが多し。藝者も女なり。いやな旦那をつとめて好きな役者狂ひの口直しにも少し飽きが来れば定まる男一人にかしづいて見たい殊勝の願ひを起す。是は波瀾より平坦に入るもの蓋し自然の人情なるべし。決して咎むべきにあらず。さればそんじよそこの如き達それ〴〵よい客見付けて足を洗ひ、中には烏子餅くばるもあれど、其の噂朋輩の口よりまだ消えもやらぬに、早くもあゝくさ〴〵しちまつたと、泣いたり笑つたりした擧句の果は復舊の古巢に還るもの。甚煩々。去就出沒常ならず。さればお上にては一度藝者の鑑札返上致せしものには半歳を経ざれば再び之を下げ渡さるの制を設くと謂ふ。善役人衆の警戒を防がんが爲めなるべし。

そんな事はどうでもよいとして、藝者何が故にかくは出たり引込んだり致すぞや。通人云ふ一度商賣したものは辛抱の置き處が違ふ故當

人いかほど殊勝の覺悟ありても素人のやうには行かぬなり。之を巧みに使つて身を落ちつかせてやるは章主となつた男の思遣り一ツによる事なり年時盛を過ぎて一度商賣を止めた女、また二度出るは氣の毒なものと察してやるが譯知つた人の情なり。男の顔に泥塗るやうな事さへせぬかぎり大抵のことは大目に見てやるがよし。滿學者のやうに子曰くで何か事あれば直ぐに七去の教桶に取るやうな野暮な心ならば初めから藝者引かせて女房にするなぞは大きな間違ならんと。

駁するものは言ふ。藝者したものは酸いも甘いも知つてゐる筈なり。茶斷斷華の味を知つたもの故多居も着物もさして珍らしくは思はぬ筈なり。何があつても素人のやうにけ立騒がずともすむ咄なり。潮事さばけて石込み早かるべき筈なり。亭主の癪癪も巧にそらして機嫌を直すべき筈なり。素人では氣のつかぬ處に氣がつく故にそれ者はそれ者たる値打があるなり。若し夫れ持參金つきの箱入娘貰つたやうに萬事適度我儘して連添ふ位ならば何も世間親類に後指さゝれてまでそれ者を家に入るゝの要あらんや。いやに済ました人おつに咄擲ひして進み出で

て曰く兩君の言ふ所各理あり。皆其のひと其の場合とに因つて之を施して可なるべし。素人も藝者も元此れ女なり。生れて女となる。女の身を全うするの道古來唯從ふの一語のみ。從はざれば今の處日本にては女の身は立ちがたし。藝者氣隨氣儘勝手次第に其の目を送り得るやうに見ゆれどもきにあらざ、元是れ愛嬌商賣なれば第一に世間に從つて行かねばならぬなり。お客に從はねばならぬなり。出先の茶屋の女中に從はねばならぬなり。足を洗つて素人となる。則旦那に從はねばならぬなり。其の家に從はねばならぬなり。同じく皆從ふなり。一人に從ふと諸人に從ふとの相違のみ。其のいづれかを選ぶべきやは此れ其の人の任意なり。素人となれば素人の苦樂其にあり商賣に出れば商賣の苦樂亦共に生ず。無事平坦の望まば素人たるべし。變化を欲せば藝者たるべし。これ亦其の人と其の場合によつて論すべきなり。孔明兵を祁山に出す事二度なり。匹婦のし現七世何ぞ改めて怪しむに及ばんや唯其身の事よりして人に累を及したために後生の障となる事なくんばよし。皆時の運なり。素人とならば其の日其の日の金銭出入帳書く事怠らぬがよし。商賣に出でなば勤めべき處よく勤むべし。朝

せず。わが晩餐の膳をして常に詩趣俳味に富ましめたる敢て喋々の辯を要せず。いつも痒いところの手が屈きけり。されば八重去つてよりわれ復者儀のことを云々せず。机上の花瓶永へにまた花なし。

### 十三

八重何が故に我家を去れるや。われ又何が故に其の跡を追はざりしや。矢笠草の一篇もこの事を書綴りて愛讀者諸君のお慰みにせんと欲せしなり。新聞紙三面の記事は世人の喜ぶ所なり。實録とさへ銘打てば下手な小説もよく賣れるなり。作者くだらぬ長談議にのみ耽りて容易に本題に入らざる所以のもの夫れ果して何ぞ。

### 十四

目出度き甲寅の年は暮れて新しき年もいつか鶯の初音待つ頃とはなりけり。一日われ芝邊に所用あつて朝早くより家を出で歸途築地の庭後庵をおとづれしにいつもながら四方山の話にそのまゝ夜をふかし車を頂戴して歸りけり。門の戸あく音に主人の歸りを待つ飼犬の裾にまつはる事のみ常に變らざりしが家の内何となく

寂然として、召使ふ小女一人のみ残りにて八重は既に家には在らざりき。八畳の茶の間に燈火の煙々と輝きて、二人が日頃食卓に用ひし紫檀の大きな唐机の上に、簞笥の鍵を添へて一通の手紙置きてあり。初め小婢のわが歸るを見るや御新造様は御風呂呂めして九時頃お出掛になりやがて何處よりも知らず電話にて今夜はおそくなる故歸らぬ山中越されぬと告げけるが、其折にはわれさまでは驚かず、大方新橋あたりの他家ならず藤間が弟子のもとに遊べるならんと思ひしに、唐机の上の封書開くに及びて初めて事の容易ならぬを知りけり。

### 十五

矢笠草いよくこれより本題に入らざるべからざる所となりぬ。然るに作者俄に惑うて思案投首煙管銜へて腕こまぬくのみ。

その年の櫻咲く頃八重は五年振りにて再び舞扇取つて立つ身とはなれるなり。好奇の粋客もしわが矢笠草の後編を知らん事を望み玉は喜樂可なり香雪軒可なり縁屋またあしからざるべし。隨處の旗亭に八重を聘して親しく問ひ玉へかし。八重唯舞ふ事を能くするのみにあらず習澤節は既に名取なり近頃また河東を修むと聞く。

彼女若し問ふものに向つてあらはに事の仔細を語る事を欲せずとせんか、代るに低唱微吟以て其所思を託せしむべき歌曲に乏しからざるべし。凡そ人其思ふ所を傳へんとするや必ずしも田舎議員の如く怒號する事を要せざるべし。何ぞ又新しき女に倣つて矢鱈に告白し無暗に懺悔するに及ばんや。われ近頃人より小唄なるものを教へらる。

「三ツの車に法の道ソウラ出た：：：恰氣と金貨や罪なもの  
亦以てわが一時の情懷を託するに足りき。」

### 十六

昨日となれば何事もたゞなつかし。何ぞ事のは是非を究めて彼我の過を明にするの要あらんや。青春まことに一夢。老の寢覚めに思出の種一つにても多からんこそせめての慰めなるべけれ。活きがひありしと云ふべけれ。石橋をたいて五十年無事に世を渡り得しものは誠に結構と申すの外なし。一度足踏みすべらせて橋下の激流に陥れば渾身の力盡して泳がんにみ。彼岸に達せんとすれども流急なれば速に橋斷すべくもあらず。或は流に従つて漂ひ或は巖角に攀ちて憩ひ徐に其道を求めざるべ

想像し、鹹つてわが日本の現在を日撃する時常に不可思議の思なくんばあらず。露西亞の小説家ゴルキイは貧しくして家なきものなりといふ。然るに猶妻を伴ひて久しく伊太利亞に遊べり。日本人にして家族と共に伊太利亞に遊び得るもの果して幾人かある。ピエール・ロッチは佛國海軍の士官たり。長崎に泊して妓女に親しみ、この事を小説についで文名を世界に馳せしめき。若しロッチをして日本帝國の軍人たらしめんか風紀問題は忽ち彼をして軍職を去らしむるに終りしならん。われ嘗てウキルヘルム・テルの劇を見たりし時、虐げられしと云ふ瑞西の士民、其の暴主と問答する態度の豪氣ある事、決してわが佐倉宗五郎の如き戦々兢兢たるのに比に非ざる事を知り。ハムレットはその伯父を刺す事につきては多く煩悶せざりしに似たり。泰西文學は古今の別なく全く西洋的にして二千年來の因習を負へるわが現在の生活感情に關係なき事、恰も鵬程九萬里の遠きに異ならず。

わが身常に健ならず。寒暑共に苦しみ多し。嘗て病褥に在りてダンマンチオの著作を読むや紙面に熾溢する作家の意氣甚だ豪壯なるを感じ、若し余にして彼の如き名篇を出さんとせば

藝術の信念を涵養するに先立ちてまづ猛烈なる精力を作り、曉明駿馬に鞭打つて山野を跋渉するの意氣なくんばあらずと思ひ、續いて廬に駿馬を養ふ資力と、走るべき廣漠たる平野なからざる可からざる事に心付きたり。これよりしてダンマンチオの著作は余に取りて恰も炎天の太陽を望むが如くになりぬ。

西洋近世の藝術は文學は云ふも更なり、繪畫彫刻音樂に至るまでもまた昔日の如く廣漠たる高遠の理想を云々せず概念の理論を排して只管活ける生命の泉を汲まんとなす。信仰の動搖より來りし厭世懷疑の世は過ぎて、生命の力の發揮する處爰に深甚の歡喜と悲痛を求む。われ元より世界の思想に抗せんと欲するものに非ずと雖、わが現在の生活を以てしては彼のヴェルハアレンの詩に現れしが如き生命の力は時として餘りに猛烈莊嚴に過ぐるを如何にせん。西洋近代思潮は昔日の如くわれを昂奮刺戟せしむるに先立ちて徒に現在のわれを嫌惡せしめ絶望せしむ。われは決して華々しく猛進奮闘する人を思ひに非ず、われは唯自らおのれを省みて心ならずも啼く淋しき日を送つて、而も願し氣に嘆かず憤らず悠々として天分に安んぜんとする支那の隱者の如きを崇拝すと云ふの

み。こゝに於て江戸時代とまた支那の文學藝術とは無限の慰安を感じしむるに至れり。此れ等の事吾既に幾度かわが浮世繪論の中に述ぶる所ありき。

我は今、わが體質とわが境遇とわが感情とに最も親密なるべき藝術を求めんとしつゝあり。現代日本の政治並びに社會一般の事象を度外視したる世界に遊ばん事を欲せり。社會の表面に活動せざる無業の人、または公人としての義務を終へて隠退せる老人等の生活に興味を移さんとす。牆壁によりて車馬往來の街路と隔離したる庭園の花鳥を見て憂鬱の情を忘れんとす。人生は常に二面を有すること天に日月あり時に晝夜あるが如し。活動と進歩の外に靜安と休息もまた人生の一面ならずや。われは主張の藝術を捨てて趣味の藝術に赴かんとす。われは現時文壇の趨勢を顧慮せず、國の東西を問はず時の古今を論せず唯最もわれに近きものを求めてこゝに安せんと欲するものなり。伊太利亞未來派の詩人マリネッチが著述は兩三年前われも既に其の聲名を傳聞きて一讀したる事ありき。然れども其の説く處の人生發達の意氣餘りに豪壯に過ぐるを以てわれは忽ちこれを捨て願みざりき。われは戰場に功名の死



起きた時奥歯に物のはさまつたやうな心持する事なく其の口へを送り得ば妓となるも妻となるも何ぞ選ばん。あれも一生これも一生ぞかし。いづれにしても柔和は女徳の第一なり。加ふるに格氣を慎まば妓となると人に愛され立てられて身を全うし得べし。況や正路の妻となるに於てをや。

おつにすました人辯出して盡くる所を知らず。これでは作者よりも皆様が御迷惑とこゝに横槍を入れて矢筈草を終る。  
(西辰 春稿)

## 失立のちび筆

### 或る人に答ふる文

思へば千九百七八年の頃のことなり。われ多年の宿望を遂げ得て初めて巴里を見し時は明くる日を待たず死すとも更に怨む處なしと思ひき。泰西諸詩星の呼吸する同じミ都の空氣をばわれも今は同じく吸ふなり。同じき街の敷石をば響も同じくわれも今は踏むなり。世界の美妓名媛の摘む花われも亦野に行かば同じくこれをつむことを得ん。われはヴェルレーヌの如くにカツフェーの盃をあげレニエーの如くに古

城を歩み、ドレーデの如くにセーヌの水を眺め、コッペエの如くに舞踏場に入り、ゴーチエーの如くに書廊を徘徊し、ミュッセの如くに履を泣きけり。かくてわれは世に最も幸福なる詩人となりぬ。如何となればわれは崇め祭るべき偶像あまた持つ事を得たればなり。十七世紀以降二十世紀に至る佛蘭西文藝史上に其名を掲げられしものは悉くわが神なりけり。然れどもわれは佛蘭西語にて物書く事能はざりしかば已むなく日本語を以てわが感想を述べ綴りき。この弱點は忽ち怪我の功名となりぬ。もし吾にして恣に佛蘭西文をもし得たらんには、輕々しくジャン・モレアスを學びて外人にして佛蘭西文壇に出づるも豈難からんや、抑法外の野望を起したらんも知るべからず。然れども幸なる哉、わが西洋景程の詩作は盡く日本文となりて日本の文壇に出づるや、當時文壇の風潮と合致する處ありければ忽ち虚名を贏ち得たりき。蓋し偶然の事なり。歲月勿々十歳に近し。われ今當時の事を顧れば茫として夢の如しと云はんのみ。如何となればわれまた當時の如き感情を以て物を見る事能はざればなり。物或は同じかるべきも心は全く然らず、われは當初日本の風景及び社會

に對しても勉めてビエール、ロッチの如き放浪詩人の心を以てこれを見る事を得たりしが、氣候、風土、衣服、食品、住居の類は先づわが肉體を冒して漸次にわが感覺を日本化せしむると共に、當代の政治、並に社會の狀態は事ある毎に宛然われをして封建時代に在るの思あらしめき。蓋し封建の語を思まば封建の美點を去りて其の惡弊をのみ保存せし劣等なる平民時代と云はんこそ更に妥當なるべけれ。空想は漸次に破壊せられぬ。われは或一派の詩人の如く銀座通の燈火を以て直ちにパウルヴァールの賑に比し帝國劇場を以てオペラに比せしや。なぞらへ日比谷の公園を取りてルキザンブルに擬するが如き誇張と假設を喜ぶ事能はずなりぬ。それは江戸時代の漢學者が文字の快感よりしてお茶の水を茗溪と呼び新術を甲斐又は峽驛と書したるよりも更に意味なき事たるべし。われは舶來の葡萄酒と葉巻の甚高價なるを知ると共に、蓄音機のワグネルと寫眞板のゴッガンのみにては、到底西洋の新藝術を論ずる事能はざるに心付きぬ。日本の文學者の事業は舶來新著の雜誌新聞に出でたる小説評論を読む事のみには限らざるべし。われは西洋の小説を讀み其の作家の生活を

ず。眼は柳腰蘭臉の美女を見て却て驚き心は青唱翠歌を聴いて徒に戦々兢々たりしのみ。本年再び綺筵に陪す。わが心恐懼する事また當時に異らず。

然れども歸り來つて竊に當夜の事を思ふに老公の屢々兩聲會を開き賣文車馬の徒を召し給ふ所以のものは平生公が身邊を圍繞する所のものと全く別様の人物に接し聊か平素の心勞を忘れ給はんと意なるべし。嘗て文部省の官吏が小説家を集めて文藝委員會を起し著作家に賞金を惠與すと號して世を騷したるが如き或は内務省の官吏が佛徒と耶蘇信者を會せしめて衆生濟度の事を論ぜしめしが如き詭計に基くものに非ずして、唯浮世半日の閑を得んとするものならずして何ぞや。

この夜老公花袋小波兩先生に向つて、久しく某處の勝景を探らん事を希ふと雖未だ果すこと能はず、蓋し屢其地を過ぐと雖車を停めて親しく其の山谷水姿に接せんと欲すれば郡村の政治家群集し來りて道路の改良橋梁の掛替聽ては租税の高下を説くが爲め一度も滯留する事能はずと笑ひ給ひき。老公の京都を愛し給ふは來客みだりに其門前を騷す事なきが爲めなりとかや。

そも今日文人たるもの今日の政治家と將又今日の畫伯とに比して其の人品の高下胸襟の清俗果して幾何の差別ありや是世間を知らざる年少の余輩の未だ能く識別する所にあらざるなり。然れども陶庵公已に一夕の清興を得んとし給ふや獨り文人を遇して甚厚し。文人たるもの感佩せざらんとするも得べけんや。われ席上最も年少の後輩なり。筵に陪するも書生の黃吻一語感謝の意を述べべき辭柄を知らず。況んやこの會ひ難き歡筵を賦するの詩歌に於てをや。然るが故に此に聊か當夜の事を手記して自家の記念とするのみ。(丙辰暮春記)

## 一 夕

一 小説家二三人打寄りて四方山の話したりし時一人の云ひけるはおよそ藝術を業とするものゝ中にて我國當世の小説家ほど氣の毒なるはなし。それらもまじ西洋文學などうかひひて新しきを産物にせしものこそ哀れは露のひぬ間の朝顔路ばたの權の花にもまさりたれ。もし畫家たりとせんか梅花を描きて一度名を得んには終生唯梅花をのみ描くも更に飽かる

る虞なし。年老いて筆力つかれば看るもの却て俗を脱したりとなし聲價いよく昇るべし。伊優には市川家十八番の如きお株といふものあり。演ずる事たびくれば、観客ますく喜びて爲めに新作を願ふの暇なきに到らしむ。吾曲家について見るも亦然らずや。聴衆の音曲家に望んで常に聴かんと欲する處は其の人によりて既に幾回となく聴馴れしもの。即荒木古章が殘月、今川崑松が新曲啊し、朝太夫がお俊傳兵衛、紫朝が鈴ヶ森の類是なり。神田伯山扇を叩けば聴客清水の次郎長をやれと叫び、小さん高座に上るや一睨み返し鍋焼うどんを願ひますとの聲頻にかゝる。小説家の新作を出すや批評家なるものあつて何々先生が新作例によつて例の如しと云へば讀者忽ちそんなら別に讀むにけ及ばまじとて手にせず。畫工俳優音曲の諸名家例によつて例の如くなれば益よし。小説家例によつて例の如くなれば文運ここに盡く。小説家を以て世に立たんことまことに難し。

一 詩歌小説は創意を主とし技巧を賓とす。技藝は熟練を主として創意を賓とす。詩歌小説の作掛は老練に過ぎて創意乏しければ輕浮と

をなす勇者の覺悟よりも、家に残りて孤兒を養育する老母と消しき煖爐の火を焚く老婦の心をば、更に哀れと思へばなり。世を罵りて憤死するものよりも、心ならず世に従ひ行くものゝ胸中に一層の同情なくんばあらず。

世に立つは苦しかりけり腰折風

まがりなりには折りかゝりめどもわれ京傳が掛ける狂歌五十人首の中に掲げられしこの一首を見しより、初めて狂歌捨てがたしと思へり。

されど我は人に向つて狂歌を吟ぜよ浮世繪を描け三味線を聴けと主張するものに非ず。われは唯西洋の文藝美術にあらざるも猶時としてわが情懷を託するに足るものある可きと思ひ、故國の文藝中よりわが現在の诗情を動かし得るものを發見せんと勉むるのみ。文學者の事業は強ひて文壇一般の風潮と一致する事を要せず。元是れ營利の商業に非ざればなり。一代の流行西洋を迎ふるの時に當り、文學美術も亦師範を西洋に則れば世人に喜ばるゝ事火を見るより明かなり。然れども余はさほどに自由を欲せざるに猶革命を稱へ、さほどに幽玄の空想なきに類に泰西の音楽を説き、さほどに知識の要求を感じざるに漫りに西洋哲學の新論を主張し、

或は又さほどに生命の活力なきに徒に未來派の美術を迎ふるが如き輕舉を為す。況や無用なる新用語を作り、文藝の批評を以て宛ら新聞紙の言論が殊更問題を提出して人氣を博するが如き機微をのみ事とするに於てをや。

われは今自ら退きて進取の氣運に遠ざからんとす。幸ひにわが戯作者氣質をして所謂現代文壇の急進者より排斥嫌惡せらるゝ事を得ば本懷の至りなり。因つて茲にこの一文を草す。

(甲寅初秋)

### 雨聲會の記

陶庵老公本年復雨聲會を舊柳橋の酒樓常盤に開かれたり。時正に季春四月十九日なり。われ亦招かれて末席に陪するの榮を得たり。この夜小波先生席上の吟に、さればこゝに雨聲會も十年に及びければとありて、

雨聲さし昔語りやおぼろ月

また桂月先生が七絶の起句に十載重疊舊酒樓と云ふ。雨聲會初めて陶庵老公が駿河臺の館第に開かれしよりこゝに十星霜を経たるを知るべし。

歲月匆匆たること真に驚くべし。十年は俗に一言なり。我亦多少の感なるべけんや。十年のむかしわれは一介の書生たりき。當時われはいかにして一代の文豪と席を同うして親しく天下の宰相に謁するの榮ある事を知らんや。わが今日までの生涯に全く豫想外の事を數ふ。

其一は西洋に遊學し銀行員となつて五年を送りし事なり、其二は學校の教師となりて七年を経し事なり、其三は即雨聲會の賓客に選ばれし事とす。

雨聲會は元より風流文酒の燕集なり。然るに世人屢是を以て佛蘭西の翰林院に比せんとするものあるは、賓客の中逝くものあれば投票して新來の文人を逐へ其の空席を滿たさしむるの例ありしが爲めなるべし。川上眉山多年詩に瘦せ酒に悲しみ遂に自刃するやわれ選ばれて其席を襲へり。これ五年前四月初十のことなり。

われ其時まで一度も貴人の前に出でたる事なかりき。曾て米國に在りし時日露議和全權大使高平公に見えたる事ありしと雖も親しく「警款に接したるにはあらず。されば五年前初めて陶庵老公を拜するや所謂野人禮にならざるもの流汗煩に背を潤すのみにして金龜玉鱗の仕肴も書生の黃腸よく其の味を辨すること能は



て鮮妍なれども其の趣淡してダリヤと同じからず、石榴花凌霄花、宛ら疾火の交々たるが如しと雖もそは決して赤インキの如きにはあらず。牡丹の紅は加賀友禪の古色を思はしめ、石榴花の赤きけ高僧のまとへる緋の衣の色に似たり。日本花はいかほど色濃く鮮なるも何となく古めて云ひがたき滋味あり。庭後庭主人好んで小鳥を飼ふ。嘗て語りけるは小鳥もいろ／＼集めて見る時は日本在來のものは羽毛の色皆鮮しと。まことや鶯、繡眼兒、鶺鴒、蒿雀の羽の緑なる、鳩、竹林鳥の紫なる皆何物にも譬へがたき色なり。今や世を擧げて西洋模倣の粗惡なる毒色しき色彩衣服に書籍に家居に器具に到處人の目を脅すにつけて、僅兩三年前まではさほどにも思はざりける風上固有の溫和なる色調、漸く其のなつかしさを増し行かんとす。氣早の人家に吾等を以て好古癖に捉はるものとなす莫れ。吾等眞に良きものなれば何ぞ時の今古と國の東西を云々するの暇あらんや。西班牙に固有の橙紅色あり。佛蘭西に固有の銀鼠色あり。伊太利亞に固有の紅色あり。是旅行者の一度其の國上に入るや天然と藝術との別なく漫然として而も明瞭に認むる

所なり。一國の風土は天然と人爲とを包含しで必ずこゝに固有の色を作らしむ。吾等は我邦日本來の面目の何たるかを知り之を失はざらん事を慮るに過ぎず。おのれの面目を知はるは是即ち進んで他の面目の何たるかを窺ふの道たればなり。

(丙辰仲夏稿)

## 初硯

一 家聲來青山人世に在せし頃よりいかなる故にや我家にては嘗て松のかざりせし事なし。雜詩鮮乾鯉數ノ子など正月の支度とて唯召使ふものゝ爲めにしつらへ置くのみにて家内の我等は唯形ばかり箸取るなりけり。大正改元の歳雪中に盡きて新春の第二日父失せ給ひければそれよりして我家にはいよ／＼新玉の春といふもの來らずなりぬ。

一 われは今世の交全く絶果てし身なり。門扉常に掩うて閑く事稀なり。春めかぬ寂しき正月も久しきならはしとなれば更に怪しき心地もせず。年改りぬと知れば獨り靜に若水波み來りて先考遺愛の古硯を洗ひ、香を焚き燭を點じ、其の詩を祭りて後おもむろに

雜詩々谷の墳墓に詣づるのみ。無爲無能の身の正月更に無爲なるこそ哀れなれ。

一 墓に詣る折には必ず蠟梅兩三枝を携へ行き捧ぐ。蠟梅は蘇東坡が好みし花なりとか。先考深く坡公の詩を愛し後園に蠟梅兩株を植ゑ。年々十二月十九日坡公の生日となれば桃南石埭雲川等の諸先生を初め檀藥會の詩人を招き赤き蠟燭つけて祝ひたまひき。今や桃南生久既になし石埭先生もまた玉池の仙館を去つて遠く故山にかくれ給ひぬ。あゝ當年來書閣上の賓客恙なきもの幾人ぞや。

一 年々歳々人同じからざるに庭前の蠟梅冬至の節來れば幽香依然として馥郁たり。蕉栞れ楓葉枝を辭して庭上俄にあかるく、菊花山茶花共に憔悴して冬の庭は庭後庭が句に、石露八手ほかに花なし冬の庭と吟じられたる寂しきおもむき示す頃ともなれば、蠟梅はそが枯瘦の枝振り飽くまで友那めきたる枝頭に、蠟の如く黄き色したる花をつくるなり。われこの花に對する毎に不肖の身を省み不幸の罪を悔いる事淺からず。あゝ我が庭前の蠟梅、もし其花に精靈の宿る事あらば、希くは深くわが罪を尤むることなか

なる。然れども未だ全く振棄すべきに非ず。演技をなすものに創意する處を示さんとして其の手に作はざれば全く取るなきに。翻譯劇を演ずる俳優の技藝の如き、或は又公設展覽會の賞牌を獲んとする書家の新作の如き即ちこれなり。

一 角力取老後を養ふに年寄の材あり。若し四本柱に坐する事を得ばこれ終を全くするもの。一身の幸福此より大なるはなけん。小説家其筆漸く意の如くならず其作また世に迎へられざるを知るや轉じて批評の筆を取り他人の作を是非してお茶を濁す。事は四本柱の監査役と相同じくして其の實は然らず。一は退いて權威いよく強く一は轉じて全く其面目を失ふ。

一 吾等折々人に問はるゝ事あり。先生いつまで小説をかくおつもりなるや、よく根氣がつくものなりよく種がつきぬものなりと。はお世辭なるや冷嘲なるや我知らず。およそ小説と稱するもの其の高尙難解なると通俗平易なるとの別なく共に世態人情の觀察細微を極むるもの無からざるべからず。高遠なる理想を主とする著作時として全く架空の事件を綴るものあるが如しと雖、行文の中自

ら作者の人間世間に對する觀察の歴然として窺ふべきものあり。されば作者老いて世事に倦み只青山白雲を友としきたきやうな考起り來れば文才の有無に係らず、小説の述作は自ら絶ゆべし。小説の生命は俗なる所にあり、人間に接する處にあり、世事に興味を有する所にあり。西洋の文學小説に重を置けども東洋に於ては然らざる所以蓋し尋ぬるに難からず。

一 柳亭種彦田舎源氏の稿を起せしは文政の末なり。然れば其齡既に五十に達せり。爲永春水が梅曆を作りし時の齡を考ふるに亦相似たり。彼等江戸の戯作者いくつになつても色つばい事にかけては引けを取らず。浮世繪師について見るに歌麿吉原青樓年中行事二卷の板下繪を描きしは五十前後即ち晩年の折なり、我今彼等の藝術を品評せず唯其の意氣を嘉し其の勞を思ひその勇に感ず。

一 今の小説家筆持つ事をば勞作なりと稱す。推敲は苦心なり固より樂事にあらざ然れども苦悶の中自ら又言外の樂樂の作來るもの無きにあらず。文事を以て恰も蟻の物を運ぶが如き勞働なりとなす所以吾等の到底解する能はざる所なり。工匠の家を建つるは勞働

なり。然りと雖盤龍を手にするもの欣然として其の樂を樂しみ時に覺えず清元でも口ずさむはどなれば其の術必ず拙からず。昔日の普請と今日の請負工事を比較せば思半に過ぐるものあらん。

一 市川松建君この頃本草圖譜草木百種繪本野山草等に載する所の我邦在來の花卉を集めて庭に栽う。君語つて曰く古めかしき草花は植木屋にたのみでも中には間々その名をさへ忘れられしものなぞありて可笑しと。さもあるべし。向島の百花園などにて我國從來の秋草ばかりにては客足つかぬと見えて近頃は盛に西洋の草花を植栽へたり。日本の草花は西洋温室室咲の草花に比すればその花淡洌その形滿潤にて自ら又別種の趣あり。當世風の厚化粧入毛澤山の底髪にダイヤモンドちりばめ女優好みの頬紅さしたるよりも洗髪に湯上りの薄化粧うれしく思ふ輩にはダリヤ、ベコニヤなんぞ呼ぶものよりも雪の下螢草などのさやかなる花こそ夏には殊更好ましかれ。

一 つら／＼四季を通じてわが國草木の花を見るに、西洋種の花に引比ぶれば、こゝに自ら特殊の色調あるを知る。牡丹芍藥の花極め

春來澄盡如泉淚。病肺除非引淚澇。  
前路無涯愛有涯。一心趨向妙蓮華。  
眼前俗屬休悲戀。九品同生也一家。

悲遣十二章

錢二首

悼亡非爲愛緣牽。儼敬如賓近十年。  
疏澗較多歡洽少。信添今日淚綿綿。  
醉時感慨醒來悶。貧川奔波病卻眠。  
自白無聊更無暇。黃昏獨到總帷前。  
悼亡之情何ぞこれより切なるものあらんや。  
感慨流露いさゝか偽る所あるを見ず。

今年丁巳の元旦風なく暖かなりしかど夜  
来の寒雨曉より雪となりぬ。二日蟻梅數衆  
を携へ雪を踏んで雜司ヶ谷の墓地に抵る。  
途上晋羽護國寺門前の景繪の如し。雪午下  
に及んで歎みしかど、其れより寒威遽に加  
り硯の水初めて凍りぬ。空齋孤食、寒いよ  
いよ堪へがたし。たまゝ窓を開いて庭上  
を窺へば、皎月枯木を照して影殘雪の上に婆  
娑たり。宿痾酒を用ゆべくもあらず。獨り  
纔に茶を煮て疑雨集申の寒詞を詠じて曰く  
「娟娟霜月上梅枝。正是明燭熱酒時。  
爲有「群寒香玉在。不能三若芋過三」。」

(丁巳新春稿)

築地がよひ

一 築地一丁日なる清元梅吉のもとに通ひそめ  
てより早くも三年越しとはなりけり。われ去  
んぬる卯年の春、鶯の聲もやうく老い行  
く頃なり、ふと世をあぢきなく思ふ事あり  
て、生涯再び妻といふもの持つまじ、これよ  
りは獨居開適の一生、但し老後に及んで甚  
しく寂寥の悔あらしむべからずとさまゝ案  
じ煩ひけるが中に、一日も早く三味練習ふべ  
き事これ何よりも急務と感じけるこそ笑止な  
れ。われ今さへ既に世とそむき果てたる身の  
老後に到らばいよく承れ來べき友もなく、  
訪ひ行きて語らん人もあらずなりぬべし。か  
くては雪の日のさびしき、雨の夜のつれな  
いかにすべき。消えかゝる炭團果敢き置炬  
燵の獨り居も、もし三味線持つ道知りたらん  
には、よしや勘處すこし位はづれても、獨絃獨  
吟過ぎし日の夢思出でて自ら慰むたよりと  
もなりなんと思立つ日を吉日に、それよりは  
盆と正月の休みを除きて鴉の啼かぬ日はあ  
るも築地の椿古場に顔出さぬ日とはなし。  
一 梅吉がもとに通ひ来る弟子皆妓なり。柳

橋最も多く新富町霞町これにつぐ。素人に  
して而も男たるもの蓋しわれ一人のみ先生の  
來る事なきにあらず毎朝格子戸口の土間に抜きす  
てらるゝ女の彫物幾足とも知れぬが中に、鬼  
の如き日和下駄唯一足目に立つも可笑しき限  
りなり。その頃われ猶三田の文學にかゝはり  
有りける故にや、誰云ふともなく人々わが事  
を先生々と呼びぬ。新に入門する雛妓等わ  
が名は知らで唯半鐘泥棒の先生とのみ、電車  
の中に顔見るも忽ち先生と呼びかく。蓋し  
先生の稱たるや、昔は知らず今は講釋師も  
先生なり、壯士役者も先生なり、活動寫眞の  
辯士も先生なり、三百代言も亦先生なり。獨  
教育家に限らざる事聊か以て自ら安ずるに  
足らんか。

一 今日遊藝一流の名家の門には大抵一人多き  
は二三人先生と呼べるゝ厄介なる門弟ありと  
云ふ。濱町藤間勘右衛門のもとにも先生あり  
藏前若柳壽章のもとにも亦先生ありとか。察  
する處銀座の花柳、新富町の文士兵衛、築  
地の式佐、これ等の門にも亦各々先生なるも  
のあらん。  
一 教授の勞は聽講の苦にまさる事萬々なり。  
叱られるものより叱るものゝ心勞、使はれる



一 丙辰の年は春秋かけて四時雨多かりければ  
果實甘からず秋草菊花共に其の色あざやかな  
らざりき。殊に秋熟の甚しき近年にためし  
なく疫癘流行し彼岸を過ぐるも夜毎のむし暑  
さに眠り難きことさへ屢なりけり。されど

何事も過ぎぬれば夢なり。冬至の頃より風な  
く暖き日のみ打ちつゞく程に恐しき疫病  
の略も忽忘れ果て丙辰の年はいつにも増し  
て穩に暮れ行くが如き心地せられぬ。

除夜百八の鐘聲響き出づるを待ち、われ斷  
腸亭の小さき床の間に過ぐる年庭後庵が贈り  
給ひける

禾原忌や夜深く歸る雪の坂 庭後  
の一軸。又先考の書齋來青閣の壁には其の  
絶筆

閑梅初放雪猶殘。樹下閑尊欲醉難。  
吹徹江頭風幾日。可憐花與酒人寒。  
一幅を懸け香を焚きて後、銅餅に臘梅さゝ  
んとて戸戸押開き雪洞つけて庭に出づれば、  
上弦の月低く屋根の上にあり。門外には往  
來の人の足音絶間なく破れし垣のかたには  
隣家の燈火明く輝きて人の聲すれど、わが庭  
のみ寂然として、樹木皆霧につつまれ行年の  
夜も知らぬ顔に打愈ひたり。雪洞片手に飛石

づたひ松下の臘梅に近けは甘くして口にも  
入れたき程なる花弁脈々として面を撲つ。  
ふれやばとてかんとて花を截るの思ひ詩  
興自ら胸に満ち來りて寧ろ堪へがたきに似  
たり。

一 思ひ出づ、我家に召使ふものあまたありけ  
る年の今宵には、佛手柑荔枝龍眼菓子など支  
那産の果物あまた買ひとの支那の繪蠟燭  
も取り寄せて心ゆくばかり祭の支度したり  
しを。今は何事も不自由勝なる獨棲み、誰や  
らの句に寂しさや獨り飲くふ秋の暮。寂寞何  
ぞ唯にこの事のみ止まらんや。

一 明人王次回が疑雨集にわが心を打ちたる詩  
數首あり、錄して以て聊か憂を慰む。  
「歲暮客懷に曰く「無父無妻百病身。孤角  
風雪閉二銅壺。殘冬欲盡歸猶懶。料  
是無三人望二倚門。」また「強歡」の作に曰く「悲  
來填臆強爲歡。不覺花前有淚彈。閱世  
已知寒暖變。逢人眞覺笑啼難。詩  
堪當哭哭何惜。酒果排愁病也  
排。無限傷心倚案牘。東南枝下獨盤桓。」  
われ元より深く詩を知るものならず。唯漫  
に讀みて楽しむのみ。わが文壇西洋の藝術を  
喜ぶもの、支那の詩と云へば清淑枯淡を街

ふにあらざれば強ひて豪壯磊落の氣概を示さ  
んとするもののみにして、一も人間胸中の秘  
密弱點を語るものなしとなす。これ或は然  
らん。然れども一度王次回が疑雨集を繙か  
ば全集四巻悉くこれ情癡、悔恨、追憶、  
懺悔、憂傷の文字ならざるはなし。其の形式  
の端麗にして辭句の幽婉なる而して又其の感  
情の病的なる往々ボオドレルの詩に對す  
るの思あり。支那の詩集中われこの疑雨集  
の如く其の内容の肉體的なるものあるを知ら  
ず、ボオドレルが惡之華集中に横溢せる倦  
怠衰弱の美感は直に移して疑雨集の特徴と  
するを得べし。「愁遣」と題する作に曰く「本  
爲無聊一借酒澆。酒邊情味更無聊。不知  
何事緣何事。但覺歡情日漸消。」ま  
た「不寝」と題する絶句に「惡抱千端集夜深」  
同眠人已睡沈沈。夢中驚問題邊冷。  
かへて是れ人の涙濕る金。」この類の詩篇擧げ  
て數ふべからず。そが妻の病をいたはり其の  
死に接し幾度か往時を追回し悲嘆する方なき  
思を述べたるものに至つては慷慨の情濃艶  
の辭鬼氣、麗人に迫るものあり。

述婦病懷 錄二百  
消渴還愁骨亦消。玩冰銜玉總無憐。

からざる可からず。音曲師匠の稽古場には修行練磨の氣風凜然として此に來るものをして漫に熟達の難きを思はしむるものありて然るべし。若し此の如き特殊の感覺に觸れしむるもの無しとせんか、これ無味凡庸惰氣満々として長く居るに堪へざる處なりとす余の昨今劇場に出入する事を好まずなりたるは此の故なり。罪伽優にあらず。興行者の廣告手段常に劇場の内外をして淺草奥山の如くならしむるが爲めのみ。

一 形に現はれたるものを去りて獨り耳に過云の聲曲を聴くや、屢江戸三座の舞臺を眼前に剪影たらしむる事を得。浦里を聴きて阪東しうかの容姿を思ひ喜撰をきゝて芝翫紫若等の藝風を想懐するの類なり。わが築地に通ひて清元を聴く心は蓋し浮世繪を展べて其の古びし色彩を賞するの情味と異なるなし。築地の師匠は美妙なる幻影の紹介者なり。われ感謝せんとして其の辭を知らず。(丁巳仲春稿)

# 草 帚

一 白日門を閉ぢて獨閑庭に飛花落葉を掃ふ

時の心ほど我ながらなつかしきはなし。いへより憂を拂ふもの酒に如かずと云へど酒も時に醉を成さざる事あり。酔ふもまた醒めたる後の悲しみあり。詩歌よく酒の如くに憂を忘れしむと。然れども筆硯また世渡る便となり果ては市氣俗念先立ちて身の淺間しさいよいよ切なく却て悔のみ多からしむ。さても我れ取立てゝいふべきほどの憤りも悲しみもあらぬにいつとはなく世と人にとそむき果て今は何事も見ず何事も聞かざらん事を願へり。かくては無聊極りなくわづかに隣家の飛花わが家の落葉を掃いて茫然として歲月を送るのみ。

一 飛花は春に限らず落葉また獨り秋のみならんや。山茶花の落つる時冬漸く寒くハツ手の花雪ならぬ雪を降らせば梔子の實落霜紅と共にいよ／＼赤し。榎櫻桃李のながめ昨日と過ぎ垣には卯の花の雪つもりて藤棚のかげに紫の房もやう／＼落ちつくせば雀の子既に巢立してあたりは夏なり。五月松の花は閑庭の苔に金砂を撒き、七月石榴の花は散りて緑蔭に緋の毛氈をのぶ。

一 落葉は新樹の綠潮の如く湧出づる時より庭のすみ／＼垣のきはに掃き盡さぬばかりうづたかし。これ去年一冬の霜を忍びし榎、檜、扇骨木の如き常磐木の古葉若葉の伸ぶるに従ひ風をも待たで落散るなり。春盡きんとして雨多く、世には流行風邪の噂もありて、ひと重の小袖俄に薄寒き夕暮など、かゝる常磐木の落葉窓の障子にはら／＼と音づるれば、心は忽ち時雨の夕に異ならず。思はずとも事ども何くれとなく思ひ出さる。

一 扇骨木の古葉は落ちんとする時秋の楓の如く紅となり、青葉に交りてちらほら花の如く日立ちて見ゆるも風情あり、竹の落葉に夏の暑さは漸く烈しく、榎椎の古葉は土用に入りても猶散りて止まず。兎角する中早くも秋立ちて芭蕉の葉破れ桐の葉落つ。

一 桐の一葉に秋を知るとは誰もふふ事なれど桐よりも早く散り落つるは梅櫻の葉なるべし。桐の中にては碧梧の如きは十月の半其の葉黄ばみて猶枝上にとゞまれるを見る事珍しからず。

一 柳も梧葉荷葉芭蕉と共に秋には脆きものの中に數へられたれど、初冬十一月山奈花も早や咲出でんとするに、御堀の柳を見れば青き葉猶落盡さざることあり。越前北が詩にも「初冬柳色」を詠じて、「古語由來木可聴」。

ものより使ふものゝ氣骨折れるは經驗あるものゝ能く知る所なり。先生と云はるゝ弟子に三味線教ふる師匠の勞多き一度こゝに思到れば流石氣の毒となりて深く身の不心得を悔いずんばあらず。

一 清元梅吉年猶三十に滿たず而も其の技風に名人の域に達せる事天下遍く知る。今親し見臺を中にして對座し毎朝その彈する處の曲を傾聴す。得る所なからざらんや。

一 およそ藝術諸般の鑑賞音樂よりかたきはなし。泰西の事は今暫く言はず。試にわが繪畫を看んとするや、先づ其の歴史を知り、又古來存する處の諸家の論說を繕かば鑑賞の眼識自ら定り来るものあらん。書道に於けるも亦鑑賞の知識を養ふに足るべき書籍尠ならず。即ち國書刊行會翻刻する所の日本書畫苑の如き甚だ便利あり。演劇には評判記あり、陶磁器漆器の類に至つては鑑賞の法頗る備り盡せり。然るに獨り三絃の俗曲に於ける、未だ嘗て鑑賞の便、品評の法あるを聞かず。清元の北州は何故に名曲なりや、常磐津の靱猿は何故に面白きや、殆ど説明する事能はず。又演奏者の技藝に對するも、門外漢は唯演奏者の藝名によりて、某は何代目の家元な

り然るが故によしと云ふが如きに過ぎず、一つとして確たる批判の尺度あるなし。

一 藝術の制作と其の批判とは元より其の道に異にす。然れども試に和歌を論ぜんとせば十一文字の規定を知らざる可らざるや、明なり。詩を評せんとせば押韻の法に通ずる事を要す。俳諧の判者多くはこれ吟咏に巧みなものならずや。今古來鑑賞の方法全く組織せられざるが俗曲に對するや恐らくは實行以外また他に道あるなけん。

一 清元歌謡江節はわが三絃曲中最も新しきものなり。既往の聲調盡くこの中に存し能く脱化渾成せり。さるが故に之を修めなば自ら過去諸流の聲曲の特徴をも併せ知るの便なしとせず。これ余のまづ清元に赴きし所以とす。

一 劇場或は宴席にて名人の藝に接するや、圓轉滑脱、抑揚自在にして一點苦心の痕なし。聽客唯恍惚として我を忘るゝのみ。これ恰も古寺戸刹の堂宇を望み見て其全景の好畫圖をなすを悦び、建築構造の如何を究むるの道なきに至るものと相似たり。由來音樂と建築

とは共に其の構造の數理を基とするの點屢々相似たる所あり。毎朝見臺を間にして師匠に

つぐや、嘗て聽く所の名人の藝の圓轉は實に千萬無量の苦心あつて初めて其の餘に出たる事を知るべし。これ即ち古院全景の眺望より一度恍惚の眼を轉じて天井、柱、欄干等個々に分析して匠苦心の後を尋ね見るに等し。

一 毎朝、曉紀直ちに築地に赴く事、今は殆どわが日課となりぬ。梅吉の家は先代より住み古して二十餘年に及ぶといふ。家造り清酒輕快、擬つて滋味ある事家具建具と相俟つて漫に電車なき時代の風流幽雅なる築地の片をしのばしむるに足れり。當今藝人の家多くは成金紳士の居第と選ぶ所なからんとするの時、古びし梅吉の家はなつかしき限りならずや。加ふるにわれは又築地に來りてこゝに専門家の居宅にあらざれば味ふ事能はざる一種云ひがたき空氣に觸れ得る事を悦ぶなり。何をか一種云ひ難き空氣といふや。吾人古刹の山門に入れば閑庭、自ら幽邃の氣あるを知るべし。劍術の道場を窺はんか、白木の板敷と羽目と竹窓と而して又竹材木材の類整然として打ちかけられたる様一見して節省自ら引續まるが如き心地すべし。晝にの家を訪ひて破疊の上に筆硯紙絹顏料水盃の類狼藉たるを見るや、制作の苦心自ら人を叩すものな



葉亦三四寸のびて春風を待てり。閑居年々景物相同じ。然れども看來つて異常に新なれば草木のよく人を幸ならしむる事蓋し黄金と戀愛にとも優れりと謂ふべき歟。かくては我も早や老いそめたり。(丁巳初夏稿)

## 何ぢややら

寝つ起きつ痛みつ鳴りつ下りつゝ、我が腹のなやみも久しきものとはなりけり。人病めば誰しも醫を迎へて藥を乞ふ。藥吞めば病必ずゆるものと思へる中はまこと病も病の中には入らざるべし。されど二月三月やがて半歳と長びけばそろ／＼じれ出してさう／＼醫者のいふ事ばかりきいては居られぬ、死ぬも生きるも身體は此方のものと、自暴半分に打捨つる勇氣まだ／＼頼母しきかぎりなり。半年は一年となり病或時は殊の外によく或時は又俄然として險惡のさまを示すに驚き、一憂一喜遂にまた思返して醫者の藥求むる程にいつしか嗚呼われも遂に不治の病持つ身になりけるよとの一念次第に定まり來るや之に伴ふ萬種の感慨心を打つ事類となる。かくては平癒の日を望むが

如き思は全く心を去りて藥も養生も只管病のこの上に進まざらん事のみ冀ふ爲めとは成果つるなり。即類勢また挽回すべくもあらぬさまならずや。デカダンスの状況なり。夜ならんとする薄暮の微光なり。沈痛の感慨いよいよ深きを加ふ。

人に逢へば親疎の別なく談話は必病のことより始まり日々書信封を開けば亦病の文字を見ざるはなし。或人はわが爲めに醫者のよしあしを論じ或人は醫者の方角を占ひ或人は某處に家傳の妙樂あるを告げ或人は其の經驗談を傳へて移し用るよと説き或人は御符を持來り手づから湯をつぐさへあり。人さま／＼の厚情いづれか嬉しからざるは無き中に有難迷惑の混する事あるも浮世の常の是非もなし。

われ幼き頃より病にはよく馴れたる身なりき。十六七の頃には二十四五まで生き得たらば幸なりと思ふ事頻なりしかば、今の中早く青春を樂しみ置かずば悔いをも及ばざるべしと、十九の春龍泉寺村に知る人たづねし歸るき獨り北里に遊びて楚腰纖細掌中輕とうたひぬ。二十三になりて文學の志いよ／＼止みがたかりし頃には二十八にて身まかりしといふ事より譯もなくバイロンにあこがれぬ。然るに身は

いつしか三十路の春を異郷の都に迎へて猶死せず、故國の花に餉きたる後は異郷の酒に新しき生命のかぎりを樂しみ得たり。但にこの事のみを以てするもわが世何ぞ今更に甚しく執着するに及ばんや。

わが母今尙すこやかなり。孝心深き一弟日夜その傍に侍して遠く遊ばざるの教を守れるあり。われ妻なし従つて兒なし。時に笑を蓄へて藥を乞しむる事あるも幸にして皆子宮内膜炎の女のみ。親戚とは夙にわれ小説家戯作者たるの故を以て來往を避けたり。孤身まことに飄然一の繁累をなすものなし。たゞ／＼獨り靜に身邊を顧れば慈母の愛春光の暖きが如く舊友の深情酒の濃なるが如きものあるを感じるのみ。思うてこゝに至れば涙禁せず。われ何ぞかく幸なりや。

刀圭家大石君はわが舊友なり。わが病を看る事本より世上一般の醫家病者をまつ類ならんや。われ世上一般の醫家を信ぜざる事其の博士たると學士たると、又千葉の醫生たるとの別を問はず。彼等各々門戸を張つて實名に汲々たるや其の爲す所自ら輕薄となるを免かれざればなり。或者は倨傲或者は卑陋なり。昔人間本來の面目ならず。凡そ事一度職業的となるや其術

争傳弱柳望二秋零一 誰知霜露凋傷候  
萬木丹黃此何青。」といへり。

一年中の景物およそ首夏の新緑と晩秋の黄葉といづれをか選ぶべき。この時節雨ながら夕陽甚だ美なり。一は密葉の間を染めて友禪の如く、一は黄葉に映じて錦繍の如し。然れども新緑は花にも似て束の間の眺めなり。その軟き緑は長からず梅雨晴の日の光漸く強くなり行くに従ひて緑は黒ずみて遂に盛夏の座を浴ぶ。やがていつともなく朝夕の寒さ身にしみ來れば、風打騒ぐ梢のいたゞきより木の葉は其の縁薄く黄ばみ出して次第に日蔭の小枝にも及ぶ程に初めに色變へし木の葉まづひら／＼と閃き落つ。われ何とは知らねど譚無きに、日毎夜毎の物思ひ朝な夕なの変さ辛さ身につもる此ごろ、唯木の葉の果敢なく色かはり行くさま打眺むれば、花にも若葉にもいや増して云ひ知れぬ心地するなり。

一 去年の秋より冬にかけて、われ人なき庭に唯一人落葉掃きつゝ木々の梢の色かはり行くさま仔細に打眺め、つれ／＼のあまり手帳に控へ置きけり。春より夏にかけて若芽青葉の緑、木々により濃淡強弱さまざま／＼に湧き出づるを、若し西洋の音楽に譬へて、緑の管絃樂

とも名付け得たらんには、憔悴の詩情云ひがたき黄葉の管絃樂はまづ十月より其の序曲をば奏で出づるなり。

一 梅櫻は盛夏の候早く病葉の黄ばみ落つる事多けれどそれは數へざるべし。後の彼岸に残暑も今は全く去りぬる夕、碧梧、楸、槐、皂莢の葉はいつしか打ち黄ばみたり。わが庭に一樹の木蘭あり。木蘭は人その花をのみ愛づれども黄葉またなか／＼に捨てがたし。櫻の高き梢に鵲啼き叫ぶ十月となるや大さ柏の如き木蘭の葉は淡くほかに黄ばみ出づ。其の色曇りし日の夕まぐれ夜將に來らんとする境には白く影の如くに浮き立つさま果敢なくも又おそれなり。さても十一月となり冬いよいよ迫り來れば色深き黄葉は次第に褐色となるより早く枝を去るなり。

一 萩もわれ花のみならで枯れ行く葉をも愛づ。十一月半より萩の葉は黄ばむと共に散りかけて十一月に至れば一葉をも留めず。凋落まことに早し。これに比ぶれば秋草の中にて葉頭の十一月半菊花盛の頃まで衰へながら立ちすくみたる、潯陽江頭琵琶に泣く老妓の心にもたとへつべし。

一 藤棚に藤の葉の淺く黄ばみしも趣あり。

蠟梅の葉黄は黄の微光を得て安れいと深く皂莢の細き葉は落花に異ならず。櫻の落葉はそぞろに賸路の鈴ひやく街道の夕を思はしむ。これ皆十一月の光景にして此の月柳の葉紅に染まり葛の葉また赤し。

一 楓葉は菊花と並びて可憐の秋をなす事云はずもあれ、公孫樹の黄葉また初冬十一月の美しき眺めをつくる。こゝに石榴の黄葉看來れば其の美政て公孫樹に劣るものならず。石榴の葉は柳の如く細きが晩風に誘はれて紛紛として雨の如く散落するや、满地皆黄く色となり短き日の暮れはて、常磐木の木蔭遑早く暗くなり行くに、石榴の葉散り敷く處のみ長く暮れやらねば、月の光照り添へるかと疑はる。この葉池の水に散り積りて朽ちたる葉を蔽ふ時はいづれが水いづれが岸とも見えわかず。敗荷殘柳と相俟つて蕭條たる池邊の趣いよく／＼深し。

一 楓葉は搖落の趣をなすものなり。菊花凋み盡して蠟梅の蕾點々數へ來んとする時、常磐木のかげに木枯しをよけては、極月猶楓葉の枝にあるを見る事あり。されど冬至に及びてあらゆる樹木いよく葉なきに至れば、菊は早く其の切株に新緑の芽を生じ水仙の

大方取擲はれし由聞きつたへて誰なりしか好事の人の仔細らしく言ひけるは、かゝるいふせき處のさまこそ忘れやらぬ中繪にも文にもなしに寫し置くべきなれ。後に至らば天明時代の草弱本とも相並びて風俗研究家の好資料ともなるべきにと。此の言それ或は然らん。かの唐人孫紫が北里志また崔令釐が教坊記の如きいづれか才人一時の戲著ならざらんや。然るに千年の後、今猶風流詩文をよるこぶもの必ず之を一讀せざるは無し。われ曩に大窪多與甲と題せし文中いさゝか淺草のことを記せり。其一節に於て、楊弓場の軒先に御神燈出すこと未だ御法度ならざりし頃には家名小さく書きたる店口の障子に時雨の夕なご風の落葉する風情捨てがたきものにていひき。その頃この邊の矢場の奥座敷に書遊びせし時脇掛窓の側に置きたる盃洗の水にいかなるはずみにや屋根を蔽ふ老桐の栂を越して、夕日に染みたる空の色の映りたるを、いと不思議に打眺めし事今だに記憶致居ゆ。其の頃まではこの邊の風俗も若きは天神齋三ツ輪又つぶしに結締なぞかけ年増はをさふねお望なぞにゆふもあり、半纏のほか羽織などは着ず傳法なる好みにて中には半元服の姿

き手取りもありと聞きしが今は鼻唄の代りに唱歌唄ふ田舎の女多くなりて唯わけもなく勤めすまを第一と心得し故遊びが樂になりて深く迷込む恐れもなく誠に無事なる世となり申す。後藤宙外子が作中たしか松葉かんざしと題せし一篇あり。淺草の風俗を描破する事猶一葉女史が濁江の小石川柳町に於けるが如きものとおぼえたり。天外子が楊弓場の一時間には好個の寫生文なり。今戸心中と淺瀬の波に明治時代の二遊里を寫せし柳浪先生の實て一度も筆をこの地に染めたる事なきは寧ろ奇なりと云ふべくや。湯島詣の著者また淺草を描きたること無きが如し。巷に秋立ちそめて水菓子屋の店先に葡萄の房涼しき火影に照さるゝを見る時、わが身にはいつも可笑しき黒田の浮び来るなり。およそ見る物同じと雖看る人の心異れば其の趣も亦同じからず。一茶が句には、一番の富士見ところや葡萄棚といふがあり。葡萄の棚より露重げに垂れ下る葡萄を見上れば小暗き葉越しの光にその房の一粒一粒は切子硝子の珠にも似たるを、秋風の稍ともすればゆら／＼とゆり動すさま、風前の北

丹花にもまさりて危くいたましく又やさしき限りなり。島崎藤村子が古き美文の中にも葡萄棚のこと記せしものありしやに覺ゆ。今わが胸に浮出づる葡萄棚の思出はかの淺間しき淺草にぞありける。二十の頃なりけり。どんよりと曇りて風なく雨にもならぬ秋の一日、淺草傳法院の裏手なる土塀に添へる小路を通り過ぎんとして忽ちとある銘酒屋の小娘に袂引かれつ。大きな濃島田に紫色の結締かけ、まだ肩揚げし浴衣の撫肩ほつそりとして小づくりなれば十四五にも見えたり。氣の抜けし麥酒一杯のみて後娘はやがてわれを誘ひ公園の人込の中をば先に立ちて歩む。其の行先いづこぞと思へば今區役所の立てる通の申程にて、町家の間に立ちたる小さき寺の門なりけり。門の中に入るまで娘は絶えず身のまはりには氣をくぼりて居たりしが初めて心おちつきたるさまになりてひとしとわが身に寄添ひて手をとる、そのまゝ案内も請はず勝手口を廻りて庫裡の裏手に出づ。と見れば葡萄棚ありてあたり薄暗し。娘は奥まりたる離座敷とも覺しき一間の障子外より押開きてづか／＼と内の上り破れし襖より夜のものを取出して煤けたる疊の上に敷きのべたり。



咬みなれば其の心いよ／＼下る事恰も傭書家の手蹟往々氣品に乏しく賣文者の文章常に精神なきが如し。若し大れ方非家にして其の術巧みなに馴れ卻て過を生ずる事、獲狐の木より落つる事なきにあらざるの譬を思へばいよ／＼以て危しとなすべきなり。身其の職に馴れて而して終始誠實眞摯の心を失はざるものあらば實に稀世の人物、獨り醫界に止らず世上ず般求めて容易に得べからざるものなり。故にわれ人の屢々某博士の誤診某先生の不注意を非難するを聞きて更にその罪の問ふべきを思はず寧ろ感服して弘法筆のあやまりとなさんとす。

醫者に醫者の癖あり病人に病人の癖あり。病人の醫者に於ける嫖客の娼妓に於けるが如し。遊客は娼妓の勤めはなれた待遇を望む事病人其の醫者の親切通一遍商賈以外に出でん事を冀ふものに似たらずや。事實はどうでもよろしきなり。遊女にしてお客につとめ放れたもてなししたやうに思はるれば全盛並びなく速に苦界を脱し得べし。醫者にして病人に通一遍のあつかひにあらざるが如き思をなさしむれば病人満足して醫の信用漸く篤きに至らん。遊客は日夜敵娼の胸中を洞察せん事を思うてやまず病人は日夜その病の如何を知らんとして焦

慮するものなり。たま／＼病人醫につきて病狀を問ふや醫者先生きまりきつた挨拶を以てし病人をして深く根問する事能はざらしむるが如き態度を示さんか、これ恰も女の心をたしかめんと圖りて離むる事能はざる時男のやきもきするに似て、病人の病を思ふ一念一段沈痛の度を加へ果はあの先生もどうやら思ふやうでないといふ病よりは醫を疑ふに至る事あり。

一度カ房を取替へるや二度三度にも及ぶものなりとぞ。引越の癖がつくと引越さでは氣がすまなくなるものとや。醫者を取替へる人また此の類ならん歟。

人間萬事天命のいたす所なり。華魁にして聖むものあり戦争に行つたとて十人が十人死ぬものとも限らず、直る病は打捨つて置いても直るなり。名醫の妙藥悉く效あらば王侯にして死するものなかるべき譯ならずや。およそ病の身に發するや其の來歴蓋し一朝一夕の事にはあらざるべし。醫者は建築家にあらざして修繕の大工なり。下手な大工來りて無暗に土臺の根つぎなぞすれば押付け卻て悪くなる事まゝあり。奥州某堂の格天井は修繕の折取はづしたるが最後本のやうには散らぬ故大工之を切縮めしか云ふ話近頃の事なりと聞けり。日本政府が古美

術の保護人抵此の如き歟。修繕即破却、學手をつけざるを以て保護の念きものとなすべきなり。

恐るべきは術の巧拙にあらず事に當り手を下すに臨みて深く意を用ゆる事の有無にあり。今天下名醫渺しとせず。術に巧なるもの擧げて數へがたかるべし。然れども事に當つてよく意を用ゆる事を忘れざるもの果して幾人ぞや。病者の醫を選んで己れの生命を託せんと欲するや深く慮る所なからざるべからず。大石君はわが舊友なり能くわが偏癖の性を知る。その診断その眼力有形の肉體より進んで直に無形の精神に入る。方劑の妙頗る驚くべきものあるや云ふをまたず。わが宿痼早くも三年に及ぶと雖も讀書散策今猶思のまゝなるは偏に君が妙樂の效驗にあらずや。昨夜後子君が照影と題辭を携へ來つて示さる。燈下に均もなき此のよまひ言を記し得るも定にみんな院長さんのおかけとしかいふのみ。

(丁巳秋)

## 葡萄棚

淺草公園の矢場館酒屋のたぐひ近頃に卒りて

一 電車の雑沓は正に我邦文明の程度を知らしむるものなる可し。日當よく風通しよき窓を明けて頻に頭をかき雲脂を飛す人あり。釣皮にぶらさがりてスカシ尻をする人あり。酔拂つてゲロを吐き傍人の衣服に蛆蟲を引掛け不然たるものあり。赤坊に小便させる女と南京豆蜜柑の皮を捨て散す小僧の如きは敢て咎むるに足らざるなり。

一 余の舊知己中に一奇人あり。平生人に語つて曰く當今の世舉げて禮を知らざること服は左和言は侏離たりと謂つ可し。郷に入つて郷に従ふべくんば此の時代に生れしものは須くこの時代の生活をなすべきなりと。即ち衣服は草衣の褌袍と外着のフロックコートを用意するのみ。老いるも家をなさず、下宿家の二階に住みて顔を洗はず湯屋に行かず小便は窓より隣家の屋根に垂流しとなし、雨少くして臭氣稍甚しきに至るや、飄然として去つて他の下宿に移る。此の奇士また能く人に戯れて曰くこの土手に昇る可からずとは警視廳の立札にしてこの處に小便無用は餘計な大屋の心配なり。草青々たる土手は砂利を敷いた往來より歩きよく、打水したる横町は共同便所の不潔にまさる。火鉢の灰は以て咳唾の園

子をつくる可し、酒屋の徳利は用ゐて尿瓶となすべし。障子のサンは巻煙草の灰をはたき載せるに便にして、階子段の手すりも鼻糞をなすりつけるに適す。西洋料理屋の下足はわが古下駄を捨て、人の新しき下駄と履き換ふるによろしく、待合は手拭とシートと兵兒帶とを取り来る處にして、銀行はペンを盗む處、區役所は筆と墨とを持来る處なり。公園の花を折るが如きは實に無用の事なりと。

一 われ等今の世に人となりしもの禮について知ることなし。禮の何たるや學ぶにあざれば知るに道なく、知るも尙修め習はざれば行ふによしなし。今日の學校なるもの小學より大學に至るも禮について深く教ふる處なく、今日の社會上下を通じて禮を修め習はしむるの機會稀なり。われ等禮を知らざる者省みて愧づる所深しと雖又如何ともすべからず。冠婚葬喪の事に會ふや爲す所を知らざるが故に唯唯に心を正し意を誠にし謹愼危懼過あらん事を慮るのみ。たま／＼尊長者の人に引見せらるゝ事あるも喜を陳ぶべき辭柄を知らず黙々として心中唯世の新聞記者なるものと同一視せられん事をのみ憂ふるなり。

一 およそ人にして禮をないがしろにするもの帝都の新聞記者と興信所の探訪員と保險會社の勸誘員より甚しきはなし。その自ら禮なきを知つて愧ぢ恐るゝものは未全く禮を蔑視するものにあらず、野人の野に在るものを捉へて誰か禮の有無を責めんや。知らざるを以て知らずとすこれ知るものへり。然るに新聞記者の輩に至つては其の無禮遙に奇類より甚しきものあり。看すや縁の下に餌はれたる犬を疊の上に置き來れば就々尾を垂れて長く居るに堪へざる様を示す。臺所を家とする猫を書院につれ来るも亦然り。世の諺に借りて來た猫の如しと言はずや。畜生と雖おのれの分を知つて過ぎたるに安ぜざるなり。然るに獨り人間にして新聞記者の輩世を憚らず人を恐れず疫病の如く天下に横行す。憎まざるべけんや。三田文學新年號に永上流太郎君の新聞記者を叱責するの文あり。余讀みて以て近來の快事とす。然れども泥棒を捕へて拷問するものは泥棒と相距る事甚遠からざるものゝ敢てよくする所なり、乞食を統御するものは××なり、私窩子をいぢめるものは刑事にして、倒すものは當世文士なり。社會不良の徒をして屏息せしむるもの

あまりといへば事の意外なるにわれはこの  
精舎のいかなる譯ありてかゝる淺聞しき女の  
隠家とはなれるにや、問はまく思ふ心はありな  
がら、また寸時も早く逃出でんと胸のみ謙かす  
程に、やがて女はわが身を送出でて再び葡萄棚  
の蔭を過ぐるに熟れる一房の取分けて低く垂れ  
たるを見、栗鼠のやうなる聲立てゝわが袖を捉  
へ忽ちわが背に攀ぢつ。片腕あらはに高くさし  
のべ力にまかせて葡萄の房を引けば、棚おそろ  
しくゆれ動きて、蛇あまた飛出づる葉越しの秋  
の空、薄く曇りたれば早やたそがゝかとも思  
はれき。本堂の方に木魚叩く音いとも慚し。  
われ其頃より友人に教へられてかのモノパツ  
サンが短篇小説讀み始むるほどに、曇りし日の  
葡萄棚のさま、何となく彼の文豪が好んでもの  
する巴里の好事の中にもあり氣なる心地せら  
れて遂に忘れぬ事の一つとはなりけり。怪しき  
かの寺尙有りや否や。  
(大正七年八月)

## 松の内

一 わが草廬の新年例によつて無聊なす事な  
し。たまゝ新聞紙を手にするに東京日日

新聞紙上繪入諸談筆記と株式相場表との間に  
鵜外先生の文章あるを見出したり題して禮  
儀小言といふ。余先生の文章に接すればおの  
づから標を正し端坐して反覆精讀するを常と  
す。今日文士の文にして措詞用語の信じて模  
範となすべきもの實に先生の文章を措きて他  
にこれ無ければなり。先生の文章は平素の博  
識容易に漢文の精と拉甸文の粹とを糅れり打  
つて一九となせしものゝ如し。格調峻嚴毫  
も扮飾の辭なく理路整然聊か晦澁の跡なき  
が故に讀過するや其の快いふべからず、恰も  
西洋古代彫刻の名作に對するが如き思あり。  
西洋彫刻の美感は清涼平寧の極崇高の情を  
催さしむるものなり。我が鵜外先生の文章  
人をして自ら標を正さしむるもの所以なき  
にあらず。

一 先生久しく東京日日新聞紙上に幕末儒家  
の傳を連載せらる。一家の傳終れば他の一家  
これにつぐ。其の間自ら脈絡あるものゝ如  
し。去年秋に至つて北條霞亭の傳小島實素に  
つぎて現れしが未終らざるに年早くも盡き  
ぬ。新聞社新春正月の紙上に儒家の傳を  
載する事を喜ばず先生に請うて他の文を以て  
せんことを謀る。先生輒平素の所感を記し

て與へられしもの禮儀小言の一篇なり。

一 禮儀小言は我邦維新の後舊時の諸禮悉く  
頽廢し而して新時代の新禮遂に成るの違な  
く、天下今や舉つて禮なきに至れることを説  
かれしもの。而して余の特に先生の言ふ所に  
敬服するは、先生が邦人の禮なきを嘆ぜらる  
るは外國人に對し外に顧みてこれを云ふす  
るに非ず、文明の人として内に省みて自ら  
愧つといふに在り。これ當今漫に社會改良  
策を稱へて議論を賣物にする人士の説と全く  
その精神を異にする所なり。

一 我邦の政體大小を論ぜず一として西洋人に  
對する見解と外聞とに基かざるはなし。曾  
て代々木に萬國博覽會開催の計畫あるや四  
谷穀ヶ橋の貧民窟はその通路に近く見物の西  
洋人に對して見つともなければ宜しく取拂ふ  
べしとの風説盛なりき。博覽會の計畫お流  
れとなるや穀ヶ橋の貧民窟は其のまゝ依然と  
して今日に及んで尙在り。この一事以て萬事  
を推量するに足らずや。然りわが邦社會百般  
の改善進歩なるものはこれ邦人のためにはあ  
らずして只管外國人に對する虛榮に過ぎず。  
果してこれ眞の進歩か眞の改善か。吾人内に  
省みて慙然たるものなしとせんや。



れ今病苦に兼ぬるに詩魔を以てす。寂寞たる孤  
身何ぞ能く堪へんや。  
(大正七年六月)

## 來 青 花

藤山吹の花早くも散りて、新樹のかげ忽ち小  
暗く、盛久しき躑躅の花の色も稍うつろひ行く  
時、松のみどりの長くひびて、金色の花粉風來  
れば、烟の如く飛びまがふ。月正に五月に入つ  
て旬日を経たる頃なり。もし花卉を愛する人の  
たましくわが廢宅に訪來ることあらんか、蝶影  
片々たる閑庭異様な花香の脈々として漂へ  
るを知るべし。而して其香氣は梅、梨花、花の高淡  
なるにあらず、丁香、薔薇の清涼なるにもあら  
ず、將又百合の香の重く惱ましきにも似ざれば、  
人或はこれを以て隣家の厨に林檎を焼き蜂蜜を  
煮詰むる匂の漏來るものとなすべし。此れ便  
先考來青山人往年滬上より携へ歸られし江南  
の一奇花、わが初夏の清風に乘じて盛に甘味  
を帯びたる香氣を放てるなり。初め鉢植にてあ  
りしを地に下してより俄に繁茂し、二十年の今  
日既に來青閣の檐邊に達して秋暑の夕よく斜陽  
の窓を射るを遮るに至れり。常磐木にてその葉

は楠木に似たり。閑丁これをオガタマの木と呼  
べどもわれ未オガタマなるものを知らねば、一  
日座右にありし萩の家先生が辭典を見しに古今  
集三木の一古語にして實物不詳とあり。然れば  
閑丁のふふところ亦遽に信するに足らず。余  
屢先考の詩稿を反復すれども詠吟いまだ一首  
としてこの花に及べるものを見ず。母に問ふと  
雖また其の名を知るによしなし。此に於てわ  
れ自ら名づくるに來青花の三字を以てしたり。  
五月薰風簾を動し、門外しきりに黃鶯の聲も  
長閑によび行くあり。滿庭の樹影、青苔の上に  
こたはりて清夏の逸興遽に來るを覺ゆる時、  
われ年々來青花のほとりに先考所藏の唐本を曝  
して誦讀日の傾くを忘る。來青花その大さ桃  
花の如く六瓣にして、其の色は黄ならず白なら  
ず恰も琢磨したる象牙の如し。而して花瓣の内  
甚厚く、仄に臘脂の隈取をなせるは正に佳人  
の爪紅を施したるに譬ふべし。花心大にして菊  
花の形をなし、臘脂の色濃く紫にまがふ。一  
花落つれば一花開き、五月を過ぎて六月霖雨の  
候に入り花初めて盡く。われ此の花に相對して  
寂郁たる其の香風の中に坐するや、秦淮林陵の  
詩歌おのづから胸中に浮來るを覺ゆ。今試  
に菩提樹の花を見てよく北歐の牧野田家の光景

を想像し、楓樹の花に南歐海岸の風光を思ひ、  
リラの花香に巴里庭園の美を眼前に彷彿たらし  
むることを得べしとせんか。月の夜寂とどきの影  
おのづから環給の模様を地に掛けけるを見れば、誰  
かわが詩歌俗曲の洒脱なる風致に思到らざら  
んや。われ茉莉素馨の花と而してこの來青花に  
對すれば、必先考日夜愛讀せし所の中華の詩歌  
樂府、史の類を想起せずんばあらざるなり。先  
考の深く中華の文物を懷慕せらるゝや、南船北  
馬その遊跡十八省に遍くして猶足れりとせず、  
遙に異郷の花木を携歸りてこれを故園に移し  
植ゑ、悠々として餘生を樂しみたまひき。物一  
度愛すれば正に進んで此の如くならざる可から  
ず。三昧の境に入るといふもの即ちこれなり。  
われ省みてわが疎懶の性遂にこゝに至ること能  
はざるを愧づ。  
(大正七年六月)

## 曝 書

五月某日梅雨に入るに先立ちて天氣晴朗輕  
風爽快の日を選び、先考が書齋の牖戸を開放し  
人に書を曝す。たましく袁子才が隨園詩話を看  
るに隨園年食へて子無し賓朋來る者やゝもすれ

はまた甚善良なるものならず、毒を制するもの唯毒のみ。水上君は良家の子その文鋭鋒當るべからずと雖果してよく新聞記者輩をして畏縮せしむるに足るや否や、吾人唯嘆息せんのみ。

一 遺羽子の音漸く稀に破風さびしく横町の電柱に引かゝつて松の内早くも過ぐ。然るに森先生の健筆日々回を重ねて容易に盡きず、婚嫁の禮より移つて葬喪の儀に及びつづさに當代履行はるゝ所の種々なる異例を擧げられたり。就中葬喪のことに關しては近頃中根香亭、町井臺水の二家共にその遺骨を拾はしめざりし事を説かれたり。余既に不治の病を抱く。終焉の事心を去らず。平生葬喪の事について聽かんと欲するもの趣からざりき。然るに今偶然先生の禮儀小言を讀みてわが知らんと欲する所を知り、感謝の情措く能はず。余曾て江東回向院に戯作者京傳兄弟の墓を展するや京山百樹その生前自ら墓を建て亡後の勞を除くといふ辭を讀み余も亦ひそかに此れに倣はんとするの意ありき。然れども今に至つて思へば孤獨の一身その最後を申ふもの唯唯々樹頭の啼鳥あらは足る。何ぞ墓碑を要せんや。余元來參禪の意なし。

然れどもわが醜骸宜しく空に歸して一物の留むるなきを欲して止まず。  
(大正七年正月)

## 夏ごろも

今年もまた垢じみし小袖ぬぎすつる頃とはなりぬ。葛籠の底より取出す袷もわづか三旬ばかりにて、またしても夏の單衣に着換ふ世のなりはし、男やめめの身にはこの時節ほど煩しく腹立しくまた情なき折はなし。正月は年賀の應答甚わづらはしきに加へて人々あまりにたわいも無く喜び騒ぐが故か、われ居蘇一盃の用意とてまなき空齋にこもりゐてもさして獨棲のわびしさを嘆かんとはせず。緣先の南天落霜紅の枝に寄來る色鳥打眺めて頻に南軒曝背の樂しみを思へり。また秋より冬にかけては溶渡る燈火に心もおのづと打靜りて、夜半の雨に獨り昔を思ひつゝ机に向へば、却て獨居の境涯をこの上もなくうれしきものに思ひなすことさへあり。然るを春風やがて日に日にあたゝかく、梅咲く梢の夕月に黃昏の空夢の如く暮れなんとし暮れかねる頃ともなれば、永晝の無聊に倦み果てし身は唯只わけもなく遺瀾なき心地して、

見るともなく窓に倚りて茫然空打仰ぐ時、無限の愁忽如として身を蔽ふ事しばゝなり。かくては屋後の竹林に鳩求めて鳴き騒ぐ雀の聲、門外を笛吹きならしつゝ行く書生の笑語、蘆洛を隔て、隣家の少女の歌うたふ聲、いづれか深くこの身の孤獨を思はしむるよすがならざらんや。嗚呼何が故ぞ、一片の春愁かくは堪へがたきが中に、わけても我は荒れ果てたる庭一面雨後の草色一夜にして漲るばかり湧出づるを見る時、また更に一段の悲愁を催すなり。花落ちて綠蔭忽忽冥々たらんとする時、老杜の幹もうつろに枯れしと覺えし枝頭に、いたくも遅れて弱弱しき若芽のいさゝか萌出でたるを見んか、此の悲しみ又ふびがたし。およそ荒蕪廢類の悲哀は風雨落葉の時節よりも却て薄木發芽繁茂の候に於ていよゝ切なるを覺ゆ。張翥が荒祠に春草空祠暮といひ、吳融が廢宅の詩に幾樹好花空白晝、滿庭荒草易黃昏といふが如き、古來廢址を賦するに春夏の景物を配合するもの多きも亦宜なりと云ふべし。樊川が子規に絶に蜀地曾聞子規鳥。宣城父見杜鵑花。一叫一回腸一斷。三春三月憶三巴。子規一叫すればその哀音原聲の及ぶ所にあらず。あゝ子規啼くの時節子規を聞かざるも天地皆懷鄉の愁に満ちたり。わ

らしからず。是れ無聊を慰むる一快事なり。

(大正七年八月)

## 立秋所見

心づけば軒裏くどりて斜にさし込む西日ま  
すます斜になりて、日の暮れざま 遽にあわ  
たし。

日盛の暑さはもとより昨日に變らねど吹く風  
にあやしき力こもりて、掛物の軸床の間の壁を  
打ち、煙草盆の灰飛び散り、机上の瓶花また落  
つ。庭樹のそよ音折々高き處より水打捨つる  
が如き響す。

空には雲おびたゞしく湧出でて崩れつ動きつ  
異様の形をなせり。空の色雲の間より見れば云  
ふばかりなく澄みて青し。

渴を覺ゆること却て夏にまされり。汗ばみ  
たる肌にさと吹く風心地わるきまでつめたし。  
蟻類に縁に上る。雀庭の飛石の上に恐しきま  
で肥えふとりたる芋蟲を爭ひ啄む。

新竹漸く伸び其の皮風に落つ。梅櫻のたぐ  
ひ既に病葉の夕風に散るあり。青木の古葉黄い  
ろし。

蚯蚓鳴く。蝶を見ること春夏にまさる。  
夜々火取蟲讀書をさまたぐ。

夜初めて長きに驚く。

窓を開けば天高く星斗森然たり。是立秋の後  
に見るところ。

(大正七年八月)

## 音楽と色彩と匂ひの

### 記憶

エミル・ヴオーケエル

音楽と色彩と匂ひの記憶われに宿る。

逝きし日と呼び返さんとせば、

花をつみとれ。われに匂ひの記憶あり。

音楽の記憶われに宿れば、

怪しき律のうごきは

ノスタルヂヤのわが胸に昔を覺す。

花をつみとれ。樂を奏でよ。

何人か、何事か。忘れしものを想起すに、

われには色の記憶あり。

われ思ひ出づ、紅の黄昏に、

わが戀人は打笑みわれは泣きけり……

われには色の記憶ぞ宿る。

『珊瑚集』より

## 秋のいたましき笛

ア・エフ・ニコオル

秋のいたましき笛は泣く、

おだやかならぬ夕まぐれ。

空は涙を啜る時

ぬれし樹木はをのゝきぬ。

花はおもむろに枯れしほみ、

小鳥は飛び去る彼方の野邊。

そこには四月の色もある

うれしき歌の聞ゆべし。

寒さ恐るゝ君は悲しく、

わが生命の君は小徑を行く。

色蒼ざめて旅する君は

聲も曇りし歌を求むる。

あゝ二人して喜び聴きし其の歌は

秋と云ひなば返り來じ。

何時の日かわれは又笑ひて眺めん、

今ははや涙となりし君が眼を。

『珊瑚集』より



は語るに此事を以てす。随園深くこれを厭ひ一詩を賦していふ。解聽人。詢得子。無。些。些。小事。不。關。渠。逍遙公有兒孫累。未必雲烟得自如。と隨園また王次同が最是。服人當面問。鳳凰何日却將雛。の句を引き大に其の詩風を賞せり。この明清の兩名家ともに老いて子なきを悲しまざりしなり。第五卷中衡山の令許公の僕人張彬といふもの年二十あまり詠詩の外他に好むところなし。その主人婚禮の費を給與せしに張彬妻を娶らずその金を以て盡く詩書を購ひし事を記せり。狂癖かくの如くして初めて物の蘊奥を究め得べし。人一度輾轉不遇孤獨寂寥の悲境に沈むや、わづかに慰むことを得るものは唯書冊のみ。妻にして果してよく書冊の如く人を慰むることを得るもの幾人かある。余自家の経験にかんがみてかの張彬の賢なるを思ひ自家の愚を嘲ふ事甚だ深し。

(大正七年六月)

## 夕立

白魚、都鳥、火事、喧嘩、さては富士筑波の眺めとともに夕立もまた東都名物の一つなり。

浮世繪に夕立を描けるもの甚多し。いづれも市井の特色を描出して興趣津津たるが中に

鉾形意匠が祭禮の圖に、岩衆人勢夕立にあひて花車を路頭に捨て見物の男女もろともに狼狽疾走するさまを描きたるもの、余の見し驟雨の圖中その冠たるものなり。これに強ぐものは國芳が御慶河岸雨中の景なるべし。

狂言碑史の作者しばし男女命縁を結ぶの仲立に夕立を降らしむ。清元淨瑠璃の文句にまた一しきり降る雨に仲を結ぶの神鳴や互にいだき大川の深き坂ぞかはしけるとは、その名も夕立と皆人の知るところ。常智淨瑠璃に二代目治助が作とやら鉢の木を夕立の雨やどりにもぢりたるものありと知れど木その曲をきく折なきを感みとせり。

一歳われ代地河岸に假住居せし頃の事なり。築地より電車に乗り茅場町へ來かへる折から赫々たる炎天俄にかきくもるよと見る間もなく夕立襲ひ來りぬ。人形町を過ぎやがて兩國に來れば大川の面は望湖樓下にあらねど水天の如し。いつもの日和下駄履きしかど傘持たねば歩みて柳橋渡行かんすべもなきまゝ電車の中に腰をかけての雨宿り。淺草橋も後になし須田町に來掛かる程に電光洩じく街上に閃きて雷鳴止まず雨には風も加りて乾坤いよく暗澹たりしが九段を上り半藏御門に至るに及んで空初

めて暗る。虹中人に懸り富溝の垂楊油よりも碧し。住み憂き土地にはあれどわれ時折東京をよしと思ふは偶然かゝる佳景に接する事あるがためなり。

巴里にては夏のさかりに夕立なし。晩春五月の頃順都の兒女家客を競つてロシヤンの賽馬に赴く時、驟雨驟來つて紅圍粉圍更に一段の雜香を來すさま、巧にゾラが小説ナ、の篇中に寫し出されたりと記憶す。

紐育にては稀に夕立ふることあり。盛夏の一タわれハドソン河上の綠林を歩みし時驟雨を渡頭の船に避けしことあり。

漢土には白雨を詠じたる詩にして人口に膾炙するもの東坡が望湖樓醉書を初め唐儋儋が夏夜雨清吳錫麟が澄懷園消夏樓詩などその類妙からず。彼我風土の光景互に相似たるを知るに足る。

わが斷腸亭奴僕次第に去り園丁來る事また稀なれば庭樹徒らに繁茂して軒を蔽ひ苔は階を埋め草は牆を沒す。年々鳥雀昆蟲の多くなり行くこと氣味わるきばかりなり。夕立おそひ來る時窓によつて眺むれば、日頃は人をも恐れぬ小禽の樹間に迷惑ふさいと興あり。眞立して間もなき子雀蟬とともに家の中に迷入ること珍

り。金港堂といへば人に知られし教科書や類の版元なり。此の書肆の資金を以て文藝その他諸雑誌の發行に着手せんか此れまで獨天下の春陽堂博文館ともくに顔色なからんとわれ人共に第一號の發刊を待ちかねたり。やがて現はれたるものを見れば文學雑誌は其の名を文藝界と稱し佐々蘭雪を主筆に平尾不孤草村北尾齋藤中花の諸子を編輯員とし巻首にはたしか廣津柳浪泉鏡花等の新作を掲げたり。されどこれ等の新作さして評壇の問題とならず雑誌はまた徒に杉大なるのみにて一貫せる主張といふものなく甚緒り無しとの非難ありき。されば從來の文藝俱樂部と新小説、依然として一通俗的に一は専門的な本來の面目を保持して長く雑誌界に覇をとなへ得たり。

金港堂の文藝界は第一號の發刊と共に賞を懸けて長篇小説を募集しぬ。敢て選者の名を公にせざりしかど蘭雪子以下同誌編輯の諸子なりしや明なり。余が地獄の花とよべるいかゞはしき拙作はこの懸賞に應募したるもの。選に入ることは是れが編輯諸子の認むる所となり單行本として出版せらるゝの光榮を得たるなり。原稿料この時七十五圓なりき。さてこの折選に入りしもの一等に米光開月の千石岩二等に

齊藤溪舟の殘菊田口鞠江の某作等ありしと記憶す。これ等の作家皆功成名遂けて早くも文壇を去りしに思へばわれのみ唯一一人今に浮身を築毀の巷にやつす。哀むに堪へたりと云ふべし。懸賞小説といへばその以前より毎週萬朝報の募集せし短篇小説に余も二三度味をしめたる事あり。選者は松居松葉子なりしとも云ひ又故人齋藤雨なりしといふものもありき。應募者には知名の大家折々小遣取りにいたづらするもの多かりし由。當時懸賞小説さまゝありしが中に萬朝報の短篇最もすぐれたるを見ればかかる暇もまんざらの根なしごとにはあらざりしが如し。

金港堂より單行本出せし後はどうやら斯うやらわれも新進作家の列に數へ入れらるゝやうになりぬ。たしか明治三十六年の春なりしと覺ゆ。新俳優伊井蓉峰小島文齋の一座市村座にて近松が壽門松を一番目に鵜外先生の詩劇兩浦島を中幕に紅葉山人が夏小袖を大喜利に据ゑたる事あり。また此の一座この度の興行にはわれ等の知友たりし畠山古瓶といへる早稻田出身の文士、伊井の弟子となり初めて舞臺へ出づべしと云ふに、いさゝか氣勢を添へんものと或日風葉菜山活東の諸子と共に、おのれも市村座

に赴きぬ。恰好しその日は與謝野鐵幹子を中心とせる明星派の人々兩浦島を囑采せんとて土間敷に集れるあり。暮いよゝ明かんとする時畠山古瓶以前は幕むじやの男なりしを綺麗に刺りて羽織袴の様子より幕外に出でうやくしく伊井一座この度鵜外先生の新作狂言上場の計を得たる光榮を述べき。一幕二場演じ了りてやがて再び幕となりし時、わが傍にありける某子突然わが袖をひき離れる淺敷に葉巻くゆらせし趣ある人を指してあれこそ森先生なれ、いで紹介すべしとて、わが驚きうろたふるをも構はずわれを引き行きぬ。われ森先生の聲に接せしはこの時を以て初めとす。先生はわれを顧み微笑して地獄の花はすでに讀みたりと言はれき。余文壇に出でしよりかくの如き歡喜と光榮に打たれたることなし。いまだ電車なき世なりしかど其の夜われは一人下谷よりお茶の水の流にそひて麹町までの道のりも速しとは思はず樂しき未來の夢さまゝ心の中にゑがきつゝ歩みて家に歸りぬ。かくて文藝界をはじめ新小説文藝俱樂部など原稿を持ち行きても三度に一度はしづゝ乍ら買つてくれるやうになりぬ。されど原稿は三月半年と買はれたるまゝ公にせられざれば賣

# 書かでもの記

一

身をせめて深く懺悔するといふにあらざず、唯臆面もなく身の恥とすべきことどもみだりに書きしるして、或時は閱歴を語るに就し、或時は思出をつづるなどと稱へて文を賣り酒沽ふ道に馴れしより、われ既にわが身の上の事とし云へば、古き日記のきれはしと共に、尺八吹きける十六七のむかしより、近くは三味線けいに築地へ通ひしことまでも、何のかのと潮の浮くやうな小理窟つて物になしたる程なれば、今となりてはほとく書くべきことも盡き果てたり。然るを猶も古き机の抽斗の底、雨漏る押入の片隅に、もしや撒場二十年の夢の跡、あちらこちらと遊び歩き茶屋小屋の勘定書、さてはいづれお目もじの上とかく賣女が無心の手紙もあらばと、反古さへ見れば鵲の目鷹の目。かくては紙屑拾もおそれをなすべし。

つら／＼こゝにわが賣文の由來を顧み尋ねるにわれ初めて小説の單行本といふもの出せしは

わが友巴山人赤木君の經營せし美育社なり。數ふれば早十七年のむかしとなりぬ。巴山人は早稲田出身の文士にて、遊山人門下の秀才なりしが明治三十四年同門の黒田湖山と相圖り麹町三番町二七不動のほとりに居をかまへ文學書類の出版を企てき。其の頃文學小説の出版といへば殆ど春陽堂一手の専門にて作家は紅葉露伴の門下たるにあらざんば殆ど其の述作を公にするの道なかりしかば義侠の巴山人奮然意を決してまづ吾等木曜會の氣勢を揚げしめんが爲めに貨を投じ美育社なるものを興し月刊雜誌徳舌を發行したり。徳舌は寸鐵却て人を殺すに足るとて三十二頁の小冊子とし黒田湖山主筆となりて毎號巻頭に時事評論を執筆し生田葵山とわれとは小説を掲げ西村清山は泰西名著の翻譯を金子繁草は海外文藝消息を井上嘯々は俳句と隨筆とを出しぬ。これと共に美育社は青年小説叢書と題してまづ生田葵山の小説自由結婚次に余の拙著野心西村清山の小間使黒田湖山の大學政撃等を出版し又星野夢人をして古

今俳句大觀四巻を編集せしめき。翌年美育社ます／＼業務を擴張し神樂坂上寺町通に書籍雜誌の賣捌店をも出せしが突然社主赤木君その郷里に事ありて歸省せざるべからざるに及び惜しい哉事皆中絶するに至りぬ。雜誌徳舌は湖山一人の手に残りてハイカラと改題せられしが氣煩また既往の如くなる能はず幾何ならずして廢刊しき。

是より先生田葵山書肆大學館と相知る。山人岩崎氏を説いて文學雜誌活文壇を發行せしめ井上嘯々と共に編輯のことを掌りぬ。活文壇は木曜會同人の作を發表するの傍汎く青年投書家の投書を歡迎して販賣部數を多からしめんことを試みたり。然れども當時この種の投書雜誌には小島烏水子の文庫山口柳江氏の新聲等その勢力甚盛なるあり。新刊の活文壇は再三上野三宜亭に誌友懇談會を開き投書家を招待し木曜會の文士交々文全の講演を試むる等甚勉むる處ありしが、書肆早くも月々の損失に驚き文學を疎じて赤本を迎へんとするに至つて活文壇は忽ち廢刊となりき。

こゝに本町一丁目の金港堂明治三十五年の頃突然文學婦人少年等の諸雜誌並に小説書類の出版を廣告して世の耳目を驚かせしことあ



下宿屋にて草稿をとりまとめ序文並に挿絵にすべし給葉書を取揃へ市立美術館の此方なる郵便局より書留小包にして小波先生のもとに送り出版のことを依頼したるなり。この稿料いかほどなりしか記憶せず。翌年秋歸國せし時あめりか物語は既に市に出でゐたりき。われは直に佛蘭西滞在中及び歸航の船中にもせし草稿を訂正しふらんす物語と名づけ著者出版の關係よりして請はるゝまゝに再び博文館より出版せしめしが忽ち發賣禁止の厄に會ひてこれより出版書肆との談判甚面倒になりけり。わが方にては最初出版契約の際受取りたる原稿料金百貳拾五圓を返済すべしと申送りしを博文館にてはそれだけにてはこの損失はつづのひがたし出版契約書の第何條とやらに原稿につきて不都合のことあり發行者に迷惑を及したる時は著作者はその責任を負ふべき旨明記しあれば既に御承知の筈なりと手強く申出で容易に譲らざる模様なればわれはこの喧嘩相手甚よろしからずと思ひその儘打捨て如何様に申來るも一切返事せざりき。わが家の玄關には毎日のやうに無性髯そらぬ洋服の男來りて高聲に面會を求めさう／＼留守をつかふならば已むを得ぬ故法律問題にするなどと持前のおどし文

句をならべて歸るなぞ言語道斷の振舞度々なりき。博文館編輯局にはその折木曜會の知友多かりき。小波先生は即編輯總長の椅子にあり。太陽には淺田空花子中學世界には西村清山人文藝俱樂部には思案外史石橋氏各その主筆なりき。これ等の人々と會合せし折博文館の文士に對する甚禮なき事を語りしに出版課に雇はれるものは皆此の如し物のわかるものは一人も無ければ打ちすて置きて心に留めたまはぬがよしと云ふ。かくてふらんす物語損害賠償の談判は八年に渡りて落着せず大正五年楓山書店荷風傑作鈔なるものを出版し該書の一部を採録するに至り重ねて懸合面會とはなりけり。かの薄氣味あるき博文館使用人は再び頻々としてわが玄關に來りて文句をならぶ。不愉快云ふばかりもなし。さすがの余も遂に譲歩してこゝに舊著に類似したる新ふらんす物語なるものゝ編纂と出版發賣を默許しその代りとして舊著の版權を著者の方へ取り戻すことゝなしぬ。されば過經博文館より發賣せし新ふらんす物語なるものゝ藝術並に文學上の責任に至つては毫も原著者の與り知る所にあらず。かの一書は實に原著者の意志に反して出版せられたるものなりかし。此事ありてより余は書肆

を恐れ憎むこと蛇蝎の如くなりぬ。今の世士農工商の階級既に存せずと雖利の爲めに人の道を顧みざる商賈の輩は全く人の最下に位せしめて然るべきなり。毎朝勝手口にて御用きゝに來る出入商人初めはいかにも正直らしく見せ掛け次第々々に品物を落して不正の利を貪るを常とす。米屋酒屋新屋皆然らざるはなし。書肆の月刊雜誌を發行するや最初は何事も唯々諸々主筆のいふ處に従ふと雖號を追ふに従つて恰も女房の小うるさく物をねだるが如く機を見折を窺ひ倦まず撻まず内容を俗にして利を得ん事のみ圖る。理想は文士の生命にして利は商人の生命よりも首よりも更に大事とする所なり。兩者到底水火相容るものにあらざるは蓋しむを得ざるなり。わが著書の其の筋より發賣を禁止せられしものふらんす物語について歡樂と題せし短篇集あり。後にまた夏姿といふものあり。歡樂の一篇は初め新小説に掲載せし折には何事もなかりし故其頃飯田町六丁目店を持ちたる易風社の主人に請はるゝまゝ其他の小篇と合せて一巻となし出版せしめたるに忽ち發賣禁止となりぬ。易風社はその以前謝禮として壹百圓を贈り來りしが發賣禁止となるも博文館の如く無法な

名にのみ心あせるもの、長く堪ふべき所ならず。こゝに詩人蒲原有明子新聲社の主人と相知れる由を開き子を介して新聲社に赴き夢の女と題せし一作三百枚ほど持てあましたるものを原稿料は無用なればとて、こゝに再び單行本一冊を出版したり。新聲社は即いまの新潮社が前名にて當時は神田錦町區役所の横手にささやかなる店をかまへゐたり。この一書として版元の損にもならざりしと見えつゞいて女優ナナの出版にこたひは原稿料三拾圓を得たり。これ明治三十六年初夏のことにてその年の秋蟲の聲やうやく繁くなり行く頃われはふと亞米利加に渡りぬ。

わが實文のむかしがたりの中こゝに書漏せしはやまと新聞社に雇はれ雜報とつゞきもの書きで月々貳圓を得しことなり。そは明治三十四年なりしと覺ゆ。松下某と云ふ人やまと新聞社を買取り櫻痴居士を主筆に迎へしよりその高弟櫻本破笠從つて入社しおのれも亦驥尾に附しけるなり。その時まで一年ほどわれは既に人にも語りし如く櫻痴居士の門弟となり歌舞伎座にて拍子木打ちてゐたりしが今の歌行衛門福助より芝巻に改名の折から小紋の羽織貫ひたるを名残りとして樂屋を去り新聞記者とはなりぬ。過ぎ

しことなれば身の恥語りついでに語り出せば樂屋通ひよりまた二三年前のことなり。われ諸釋と落語に新しき演劇風の朗讀を交へ人情咄に一新機軸を出さんとの野心を抱きその頃朝寝坊むらくと名乗りし三遊派の落語家の弟子となりし事もあり。當今都下の席亭にむらくと看板かゝぐるものは其の頃の人とは同じからずといふ。

余のやまと新聞社に入りし時三面雜報欄を受持つたるは探菊山人と阿本綺堂子なりき。探菊山人は即山々亭有人にして假名城魯文の歿後吾等後學の徒をして明治の世に江戸戯作者の風貌を窺知らしめしもの實にこの翁一人在りしのみ。さればわれ日々編輯局に机を連ねて親しくこの翁の教を受け得たる事今にして思へばまことに涙こぼるゝ次第なり。阿本綺堂子はその頃頻にユーゴー、デユマなどの傳奇小説を讀まれりたり。子は半藏門外に居を構へおのれは一番町なる父の家に住みければ新聞社の歸途堀端を共に語りつゝ歩みたる事度々なりき。子は

その頃より甚謹嚴寡言の人なりき。日比谷には公園いまだ成らず銀座通には鐵道馬車の往復せし頃尾張町の四角今ライオン珈琲店ある處には朝野新聞中央新聞毎日新聞などあ

りけり。やまと新聞社は銀座一丁目の横町、いま見る建物なりしかば、表通り谷天狗の煙草店に雇はれたる妙齡の女店員いつもこの横町に集りて緋の蹴出しあらはにして頻に自轉車の積占するさま折々目の保養となりしも既に過ぎし世のこととぞなりぬ。女の自轉車と馬乗りとはその頃の流行なりしにや吉原品川樓の抱が和鞍に乗りての遊山また新橋藝者が自轉車つらねて花見に出かけし噂なぞかしましき事ありけり。

さてわが新聞記者たりしもわづか半年ばかり社員淘汰のためとやらにて突然解雇の知らせを得たり。わが記者たりし時世に起りし事件にていまに記憶するは足亭の刺客に害せられし事と清元お葉の失せたりし事との二つのみ。新聞記者をやめたる後は再びもとの如く歌舞伎座の樂屋に入らん事を冀ひしかど敬して遠けらるゝが如くなりしかばこゝに意を決し志を改め佛蘭西語舊古にと略星學校の夜學に通ひ始めぬ。巴山湖山兩子の美育社を興せしは恰もこの年の秋なれば話の順序こゝにて初めに立戻るものと知るべし。

あめりか物語は明治四十年紐育より佛蘭西に渡りし年の冬里昂市ワンドオム町のいぶせき

て八疊か十疊らしき奥の一間こそ客間を兼ねたる先生の書齋なりけれ。床の間には遊女の立姿かきし墨繪の一幅いつ見ても掛けかへられし事なく、その前に据ゑたる机は一閑張の極めて粗末なるものにて、先生はこの机にも床の間に書翰といふものは一冊も置き給はず唯六疊の間との境の襖に添ひて古びたる書棚を置き麻絲にてしばりたる古雑誌やうのものを亂雑に積みおのせたるのみ。これによりて見るも先生の平生物に頓着せず襟懷常に洒落々たりしを知るに足るべし。

初めて余のおそる／＼格子戸明けて案内を乞ひし時や／＼暫くにして出で來られしは鼻下に髭を落へし四十年配の眼大きく色淺黒き人なりき。その様子その年配正しくこの家の主人らしく見ゆるにぞわれはこの人こそわが崇拜する今戸心中の作者なるべけれどと思へば俄にをの／＼胸押鎮め漸くに名刺差出し突然ながら先生に目にかゝりたき由言出でしに髭ある先生らしき人は譯もなく主人は唯今不在なれば歸宅次第其の趣申傳ふべしと云はるゝに我は是非なくさらば明朝また御邪魔にお伺ひ致すべしと其の盛格子戸を立去りしが、どうも今の人が柳浪先生らしき氣がしてならぬ故そつと建仁寺垣の

破れ目より庭越しに内の様子を窺へば、殘暑猶去りやらぬ九月の夕暮とて障子皆明け放ちし座敷の縁先、かの髭ある人は煙草盆引寄せ悠々として煙草のみつゝ夕風さそふ庭打眺めつ。さてはわが想像にたがはざりけり。何人の紹介狀をも持參せず突然たづね行きける故主人自ら立出でしまゝ不在と云ひて謝絶せしなるべし。かくてはわが熱心の先生に通ぜん日まで幾度となすね行くより外に道なしと翌日の夕暮再び案内を乞ひしにこの度は女中らしき嬬取次に出でて直に此方へと奥の間に通されぬ。見れば床の間の前なる一閑張の机に物書きある人あり筆を擱きて此方に向直らるゝに、昨日取次に立出でられし人に瓜二つとも云ふべき程よく似たれども、近く對座して重ねてよく／＼見れば年も少しく若く身體つきも亦さし瘦せる別人なり。後日に至りて先生の話に聞けば取次に出てし人は先生の令兄にて日頃地方を旅行せらるゝ肖像畫家なりとの事なりき。

さてその夕われは是非にも門人となりたき由懇願せしに先生なか／＼承知したまはず。小説家なぞにならんと思立つは大なる心得違なり。君今學業を抛擲してかゝる邪道に踏み迷はば他日必ず後悔胸をかむ事あらん文筆を好ま

ば唯正業の餘暇これをなして可なり日は又われは尾崎や川上とは異なりてかの人々の如く多く門生を養ひ教ふるの煩に堪へざるものなり。今までも度々人に頼み込まれし事あれど皆ことわりぬ。されば到底貴下の満足する如く丁寧に教ふる事は叶ひがたかるべし。もしそれにてもよければじむを得ざる故唯折々暇あらん時遊びに來られよ。我も亦いそがしからずば君が草稿の字句假名遣の誤ぐらゐは正すことを得べしと云はれけり。わがよるこび誠に筆紙のつくすべき處ならず幾重にもよろしくとてその日は携へ來りし草稿簞の月一篇を差置きもち／＼して歸りけり。

柳浪先生の繡眼兒を伺ひて樂しみとせられしは恰も余の初めて先生を見たりし其の頃より始まりしなり。最初簞の月一篇を置きて歸りし折には胸のみとゞろきし故にや小鳥の籠の有無には更に心もつかざりしが、その後重ねて教を乞ひに／＼行く度々鳥籠は一つ二つと増え來りて其年の冬には六疊の間の月障一間の壁に添ひて繡眼兒の籠はさながら鳥屋の店の如く積重ねらるゝ事二三段にも及びやがて鶯の籠さへかの墨繪の遊女が一幅かけたる薄暗き床の間に二つまで据ゑ置かれぬ。先生がその内相を失はれ



る談笑をなさざる故わが方にて重々氣の毒になりいそぎ荷風集一巻の原稿をつぐのひととして送りけり。この著幸にして版を重ねき。易風社店を閉ぢし時、親山書店、歡樂の紙型を買取り、店員某の名義を以て再びこれを出版す。然る處この度は何の御咎めも無く今に至つて尙販賣せりといふ。

夏すがたの一作は、大正四年三田文學正月號に掲載せんとて書きたるものなりしが稿成るの後自ら讀み返し見るにところへいかゞにやと首をひねるべき箇所あるによりその儘發表する事を中止したりしを、親山書店これを聞知り是非にも小本に仕立てて出版したしと再三店員を差遣されたればわれもその當時は甚だ罷悶の間柄むげにも其の請を退けかね草稿を渡しけり。然れどもその折出版局にわが名は出すまじ萬一の事ありても當方にては一切責任を負はざればその邊よく御承知あれと念に念を押してやりけり。果せるかな此の小冊子、實禁止となりしのみか、親山書店は其後へ始末書を取られ、厳しきお叱を蒙りけり。親山書店今に折々人に語りて永井さんのおかげでは度々ひどい目に逢ひますと。かくては罪まつた作者にあるが如し。

寛政のむかし山東庵京傳洒落本をかきて手鎖はめられしは板元、菅屋重三郎お觸にかまはず利を得んとて卓傳にすゝめて筆を執らしめしがためなりと云傳ふ。兎角に作者あまり板元と懇意になるは間違のもとなり。

伊波傳毛乃記と云ふものあり。此れ曲亭馬琴暗に人を誹りて己れを高うせんがために書きたるものなりとか。おのれが此の嘉加傳毛乃記いさゝか名は似たれどもゆめ／＼さる不都合の下心あるにあらず。書かでもよきこと書くは唯いつもの筆くせとしか云ふ。

## 二

このごろ雜誌新潮の記者見るにも足らぬわが著作を採りこれを基として余が文學年表なるものを編輯し、誌上に掲載すべければとて過ぎし日のことどもさま／＼問合せ來りぬ。これによりて日頃は全く忘れ果てたりし事どもこゝに再び思ふぶる節々多くなりぬ。

そもわが文士としての生涯は明治三十一年わが二十歳の秋、簾の月と題せし未定の草稿一篇を携へ、牛込矢來町なる廣津柳浪先生の門を叩きし日より始まりしものと云ふべし。われその頃外國語學校支那語科の第二年生たりしが一

ツ橋なる校舎に赴く日とは罕にして毎日前かず諸處方々の芝居寄席を見歩きたまさか家に在れば小説俳句漢詩狂歌の戯に耽り兩親の嘆きも物の數とはせざりけり。かくて作る所の小説四五篇にも及ぶほどに専門の小説家につきて教を乞ひたき念漸く押へがたくなりければ遂に何人の紹介をも俟たず一日突然廣津先生の寓居を尋ねその門生たらん事を請ひぬ。先生が矢來町にありし事を知りしは其の前電話にて春陽堂に開合せたるによつてなり。

余は其頃最も熱心なる柳浪先生の崇拜者なりき。今戸心中、黒蜥蜴、河内屋、龜さん等の諸作は余の愛讀して措く能はざりしものにして余は當時紅葉山露伴諸家の雅俗文よりも遙に柳浪先生が對話體の小説を好みしなり。

先生が寓居は矢來町の何番地なりしや今記憶せざれど神樂坂を上りて寺町通をまっすぐに行く事數町にして左へ曲りたる細き横町の右側、格子戸造の平家にてたしか門構はなかりしと覺えたり。されど庭ひろ／＼として樹木多からず手水鉢の鉢前には梅の古木の形面白く蟬りたるさへありき。格子戸あけて上れば三疊ついで六疊(こゝに後日門人長谷川濤涯机を置きぬ)それより四枚立の機を境にし

噂に聞く大家の事なれば最初はまづ門前拂なるべしと内々覺悟せしにわけもなく二階の書齋に通され君等は巖谷の門生なりとか、是までに何か書きたる事ありやと話は容易く先方より切出されぬ。嘸々子はその頃頻に齋藤録雨が文をよるこび雅號を破垣花守と稱し屢々縁雨がおぼえ帳に似たるものを作りたり。この夜も一文を懷中にせしまゝおそるゝ取出して閱覽を請ひけるに青軒子仔細らしく打見て墨を濃く摺り書體を丁寧に書かるゝは若き人に似ず感心なりとそれよりそろゝ世の新進作家なるものの生意氣なる事をさまゝ口きたなく痛罵したる後君達文章を書かんと思はゞ何はさて置き漢文をよく讀み給ふべしそれも韓柳の文のみにて足れりといふにあらざる體史小説の類殊に必要な。されば支那小説の事に關してはわれも亦露伴子と共に決して人後に落つるものならずと言ふ。嘸々子は嘗て文學博士島田實村翁の家塾に在り漢學の素養淺からざるの人。おのれも亦所謂門前の小僧習はざれども父より聞きかじりたる事無きにあらずしかば問はるゝがまゝに聊か答ふる處ありしにぞ大に青軒翁の信用を博し其の夜携へ行ける我が原稿は嘸々子のものと共に即座に文藝俱樂部誌上に掲載の快諾を

得たりき。

この青軒先生こそはやがてわれをば櫻痴居士福地先生に紹介の勞を取られし人にてありけれ。されど此度の訪問は初めて硯友社の諸先輩を應訪せし時とは異りて容易に望を遂ぐる事能はざりけり。福地先生の邸はその時合引橋手前木挽町の河岸通にて五世音羽屋宅の並びにてありき。一番町のわが家よりかしこまでは電車なければかなりの遠路なりしを歩みゝて朝八時頃われは先生が外出したまはざる前をと思ひて三四度、また夕刻歸邸の時分をはかりて五六回先づ青軒翁が紹介狀を呈出し面談の榮を得ん事を請願せしが、或時は不在或時は多忙或時は不例或時は來客中とばかりにて遂に望の叶ふべき模様もなかりけり。さすがの我も聊か疲労し且は又この上強ひんには體を失するに至らん事を慮れせめてわが芝居道熱心の微衷をだに開陳し置かば又何かの折に望を達するよすがにもなるべしと長々し論文一篇を草しそつと玄關の式衣に差置きて立ち去りぬ。やがて半月あまりを経たりしに突然福地家の執事榎本破笠子より豫て先生への御用談一應小生より承り置可しとの事に就き御來車ありたしとの書面に接し即刻破地を目前に同じく木挽町の河岸通り

なる破笠子が寓居に赴きぬ。此れ明治三十三年わが二十二歳の夏なりき。

さて破笠子はおのれが歌舞伎座作者部屋に入り芝居道實地の修行したき心底篤と聞取りし後俱に出でて福地家に至り勝手口より上りて稍暫くわれをば一間に控へさせけるが態でこなたへとて先生の書齋と覺しき座敷へ導きぬ。川風涼しき夏の夕暮は燈火正に點ぜられし時なり。福地先生は風呂より上りし所と見えて平袖中形牡丹の浴衣に縮緬の兵兒帶を前にて結び大なる革蒲團の上に坐し徐に銀のべの煙管にて煙草のみて居られけり。破笠子は恭しく手をつき敷居際より稍進みたる處に座を占めければ伴はれしわれは又一段下りて僅に膝を敷居の上に置き得しのみ。破笠子の口添を待ちわれは今夕圖らず拜顔の望を達し面目此上なき旨申述ぶる中にも萬一先生よりわが學歴その他の事につきて親しく問はるゝことあらば何と答へんかなぞ宛ら警察署へ鑑札受けに行きし藝者の如く獨り胸のみ痛めけるが、先生は更にわが方には見向きもしたまはず破笠子を相手に今朝巴里の川上郎が事な言次より新聞を郵送し來れりとて巴里劇界の消息を語出されぬ。かくて三十分ばかりにて我は再び破笠子に伴はれ福地家を辭して歸

たるはこの前年なりしといふ。されば守るにその人なき家の内何となく物淋しく先生獨り令息後郎和郎の兩君と靜に小鳥を飼ひて娛みとせられしさまいかにも文學者らしく見えて一際われをして景仰の念を深からしめしなり。それより後明治三十六年に及びてわれ亞米利加に渡らんとするの時暇をひに赴きし折に先生は麻布六本木に居を移され既に二度目の夫人を迎へられたりき。

先生が矢來町の閑居には小鳥と共に門人も亦加はり來りぬ。最初に長谷川瀧君次に中村春雨君また女流の作家にてその名失念したれど妙齡の人代るゝかの六疊の間に机を据ゑたり。余は一番町なる父の家より一週に一二度程は缺かざす草稿を携へて通ふ中稍讀むに足るべきもの二三篇先生の添削を経た後博文館または春陽堂の編輯局に送られき。これと共にわれはまた川上眉山、小栗風葉、徳田秋聲等の諸先輩折々矢來の閑居に來るを見ておのづから辱友となることを得るに至れり。かくて明治三十二年十一月わが小説薄衣と題せし一篇柳浪先生合作の名義にて初めて文藝俱樂部の誌上に掲げられたり。當時文壇に勢力ある雜誌はいづれも新作家が作を掲ぐる事を好まざりしよりかくは

先生の許を得てその名を借用せしなり。この年朝日新聞記者栗島狹衣君牛込宮下比町の寓居に併入谷浩東子と提携して文藝雜誌編輯文庫なるものを發行せんとするや矢來に來りて先生の新作を請へり。時に先生筆硯甚多忙なりしがため余に題材を口授し偶に短篇一章を作らしむ。この作夕蟬と題せられ再合作の署名にて同誌第一號に掲げられぬ。伽羅文庫は二號を出すに及ばずして廢刊しき。

その頃わが一番町の書齋に大山吾童とよぶ人屢遊びに來りぬ。當時尺八の名人荒木竹翁の門人にて吾童といふはその藝名なり。余も亦久しく淺草代地なる竹翁の家また神田美土代町なる福城可童のもとに通ひたる事あり度々鹿の遠音月の曲なぞ吹合せしよりいづくともく親意になりしなり。この人生れてより下二番町に住み巖谷小波先生の門人とは近隣の誼にて自然と相識れるが中にも取りわけ羅歐雲とて清人にて日本の文章俳句をよくするものと親しかりければ互に往來する中われも亦羅君と語を交るやうになりぬ。羅氏併號を蘇山人と稱す。大清公使館通譯官浙江の人羅庚齡の長子なり。この人或日の夕元園町なる小波先生の邸宅に文學研究會あり木曜日の夜湖山葵山南岳新兵衛なんぞ呼

ぶ門人多く相集まれば君も行き見て見ずやとわれを伴ひ行きぬ。これ余の初めて木曜會に赴きしいはれなり。木曜會の事はこゝに云はずとも既にその主人が手記せるもの「駒のいなゝき」と云ふ書の中に掲げられたれば就きて看るこそよけれ。

### 三

乙羽庵主人大橋氏逝きて後文藝俱樂部の主宰に三宅青軒といふ小説家ありけり。日頃人に向ひて文藝俱樂部はわれを戴きて主筆とせしより忽發行部數三四萬を越ゆるに至れりと誇顔に語るを常としき。又人の文學を談ずる事あれば當今小説家と稱するもの枚舉に遑あらざれど眞に文章をよくするものに至つては若し向島の露伴氏を措きなば恐らくは我右に出づるものあらざるべしと傍若無人しきりに豪語を放ちて自ら高うせしかば新進氣鋭の作家一人として青軒を憎まぬものはなかりけり。されど文藝俱樂部によりて其の作を發表せんには是非にも主筆の知遇をまたざる可からずとて怒を忍び辭を低うして虎の門外なる其の家を訪ふものも妙なからず。一日おのれも菓子折に生田葵山君の紹介狀を添へ井上嘯々子と打連れ立ちて行きぬ。日頃



屋場となる二幕目は竹本連中出語にて吾等聞馴れし炬燵の場引返して天満橋太兵衛殺の場となる。當時の向界いまだ鷹治郎を知らず紙治はいと珍しきものなりしが如し。菊五郎と鷹治郎とはもとより雲泥の相違あるものなれば並べて云出るは誤りなれども近頃鷹治郎を見馴れし目より當年の菊五郎を思へば幕明きし時定木を枕に後向きに横はりし音羽屋の姿は實に何とも云へたものにはあらず小春が手を取りよろ／＼と駈け出で花道いつもの處にて本釣を打ち込み後手に角帶引締め向を見込むあたり全く二度とは見られぬものなりけり。この狂言書卸の事として稽古に念を入れし事到底今人の思ひも及ばぬ處なるべし書坂の讀合濟みし日音羽屋は茶屋三州屋二階に竹本相生太夫を招き置きて紙治一段を語らせこれを登場俳優一同に傾聴せしめ、猶淨瑠璃すみし後は親しく役々言葉の語りやうをば太夫へ質問するなど苦心の程察するに餘あり。初日を出せし後にも二三度合方を替へそれにても猶落ちつかぬ模様なりけり。

藝談に耽らば限りなき事なれば筆をとむ。歌舞伎座今は殆どその外觀を變じたれど元より改築したるにあらねば樂屋の部屋々々今猶舊てわが見たりし當時に異ならず。十年の後われ遠

國より歸來してたま／＼知人をこゝに訪ふや當時の部屋々々空しく存して當時の人なく當時の妙技當時の藝風亦地を拂つてなし。正に國亡びて山河永に在るの嘆あらしめき。長々しく昔をのみ語るの愚を笑ふ勿れ。當時樂屋口を入りて左すれば福助松助の室あり右すれば直に作者頭取部屋にして八百藏の室これに隣す。それより小道具衣裳方あり。廊下の端より離れて團洲の室に至る。小庭をひかへて宛然離家の體をなせり。表梯子を上れば猿藏染五郎二人の室あり家橋染三郎此れに隣して又鏡臺を並ぶ。それより床山を間にして間口甚ひろきものは即ち菊五郎の室にして隣は片岡市藏それよりやがて裏梯子の降口に秀調控へたりき。三階は相中大部屋なれば云ふに及ばざるべし。團八梅助頭取をつとめき。

## 四

秋景の一日物かくことも苦しければ身のまはりの手箱用簾筒の抽斗など取片付くるにふと上田先生が書簡四通をさぐり得たり。先生逝きて既に三年今年の忌日も亦過ぎたり。駒光何ぞ駛るが如きや。

おのれ初めて上田先生が辱知となるを得たり

しは千九百八年三月先生の巴里に滞留せられし時なり。是より先わが身猶里昂の某銀行に勤務中一日公用にてソオン河上の客棧に嘲風姉崎博士を訪ひし事ありしがその折上田先生の伊太利亞より巴里に來られしことを聞知りぬ。わが胸はいまだ其人を見ざるに先立ちて怪しくも轟きたり。何が故ぞや。そも／＼其の年月わが身をして深く西歐の風景文物にあこがれしめしはかの即興詩人月草かげ草の如き森先生が著書とまた最近海外文學文藝論の如き上田先生が著述との感化に外ならざればなり。わが身の初めてボオドレエルが詩集惡の華のいかなるものかを知りしは上田先生の太陽臨時増刊「十九世紀」といふものに物せられし近世佛蘭西文學史によりてなりき。かくてわれはいかにかして佛蘭西語を學び佛蘭西の地を踏まんと心の心を起せしが、幸にして今やその望み半既に達せられし折柄、恰も好し先生の巴里に來れるを耳にす。わが欣喜聲へんに物なし。やがてわれは里昂の銀行を辭職し巴里に入りて拉甸區の一客舎に投宿したり。然れども巴里にはもとより知る人ひとりも無かりしかば先生の旅館も知るによしなく紹介を求めんにもそのつて無かりき。

われは初めて北米に遊びてよりこの年月語るに

りしがそれより三四日にして歌舞伎座盆興行の稽古となるやわれはこゝに榎本氏諸人にて歌舞伎座へ證文を入れいよく梨園の人とぞなりける。證書の文言左の如し。

一私儀狂言作者志望に就き福地先生門生と相成貴座樂屋へ出入被差許候上者劇道の祕事樂屋一切の密事決而口外致間敷候依而後日の爲一札如件

歌舞伎座稽古は後々まで三階運動場を使用するが例なり。稽古にかゝる前破笠子より樂書にて作者部屋のものと呼集め手分なして書拔をかく。當日われは破笠子より作者の面々に引合はされついで翌日本讀に先生出勤の折には親しき皆のものへよろしく頼むとの一言これまことに御前の御聲掛りにして作者の面々自らわれをば別格の客分たらしめんとするにぞわれは破笠子に計りて客分の待遇は小生の願ふ所にあらず且那藝は却て甚しき恥辱なれば何卒樂屋古来の慣例に従ひ寸毫の遠慮なく使役せられん事を請うて止まざりしかば破笠子さればと重ねて先生へ申上げわれをば竹柴七造といふ作者の預弟子となしこの人より樂屋萬端の心得拍子木の入力など見習ふ事となしぬ。時に歌舞伎座作者部屋には榎本氏を除きて四人

の作者あり。竹柴七造竹柴清吉は黙阿彌翁の直弟子にて一は成田屋付一は音羽屋付の狂言方とて重に團菊兩優の狂言幕明幕切の木を所持つなり。他に竹柴賢二瀬貞砂助と云ふ作者ありき。賢二といへるは寺内河竹新七の弟子なれば猶血氣盛の年頃なりしが眞砂助は先代瀬川如阜の弟子とやら餘程の高齡なるに寒中も帽子を冠らず尻端折にて向脛を出し半合羽日和下駄にて淺草山の宿邊の住居より木挽町樂屋へ通ひ衣裳覺大小の道具帳を書き又番附表看板等の下繪を綺麗に書く、此の老人猿若町三座表飾の事なぞ委しく知りゐたり。

さてわが初めて劇部の人となり親しく稽古を見たりし盆興行は團菊兩優は休みにて秀調染五郎家橋榮三郎松助等一座にて一番日は染五郎の景清中藏は福地先生新作事女辨慶(秀調の出物)二番日家橋榮三郎松助の玄治店大喜利家橋榮三郎の女鳴神常磐津林中出語りなりき。作者見習としてのわが役目は木の稽古にと幕毎に二丁を入れマハリとシャギリの留を打つ事幕明幕切の時間を日記に書入れ、樂屋中へ不時の通達なすべき事件ある折には役者の部屋部屋道具小道具方衣裳床山囃子方等樂屋中洩れなく觸れ歩く事等なり。着到の太鼓打込みてよ

り一日の興行済むまでは嚴冬も狐繻を着ず部屋にても巻簾を遠慮し作者部屋へ座元もしくは來客の方々見ゆれば丁寧に茶を汲みて出し其の草履を揃へ又立作者出頭の折はその羽織をたゝみ食事の給仕をなし始終つき添ひ働くなり。わが屢草履をそろへ茶を汲みて出せし樂屋のお客様には大槻如電永井素居などありけり。

九月となりてわれはこゝに初めて團菊兩優の素顔とその稽古とを見得たり。狂言はたしか水戸黄門記通しにて中藏大徳寺燒香場なりしと記憶す。團十郎はその年春興行の折病に罹り一時は危篤の噂さへありし程なればこの度再び菊五郎との顔合大芝居といふにぞ景氣は蓋を明けぬ中より素破らしきものなりけり。ついで十一月には一番目太閤記馬場より本能寺討入まで團洲の光秀菊五郎信長なり中藏團洲の法眼にて菊卿。菊五郎の虎藏福助の息女を相手にしその仕草六十餘の老人とは思へぬ程若々しく水もたれさうな鹽梅さすがに古今の名優と樂屋中にも人々驚嘆せざるは無かりけり。二番目は菊五郎の紙治これは丸本の紙治を舞臺に演ずるやう河竹新七のその時新に書卸せしものにて一幕目小春髪すきの場にて伊十郎一中節の小春をそのまゝ長唄にしての獨吟あり廻つて河庄茶

候まゝ明日は明日はと思ひつゝ今日迄に相成候が今月末は是非とも東京へ参りて御眼にかゝりたく存居候實は只今直にても御面會致し親しく懇願致度事件出来候が何分意に任さず候故手紙にて申上候

昨年御手紙にて當地高等學校佛蘭西語學教師の件御話有之候が早速其向を探り申候處今年九月よりの事なれば何分まだ人選等の事は校長にも深く考へ居らず従つて御尊父様の御親交ある松井博士の紹介あらば自然御就任の事となるべしと考へ小生もあまり騒立てぬ方反つてよろしからむと控居候然し小生の心の底には別に一種の考へありて貴兄の御入洛を小生自身にとりて非常なる幸福と存ずると共に只今帝都にて新藝術の華々しき活動を試みさせ給ふ貴兄をして教育界の沈滞したる空氣中に入れ而も京都の如き不徹底古典趣味の田舎へ移す事は貴兄自身にとりてもわが文學の爲めにも不得策にはあらざるかと稍心進まざる向も有之種々熟考仕候其内段々時日を經て其後の經行を觀察仕候處一二

の候補者も出来たれど、どれもまだ確定せず教授の細目も聞合せ候が佛語の極めて初歩のみを教へる事に重に當地或は東京の佛蘭西法科へ入學する者の爲めの如く隨て狭い田舎の事なれば自然大學の教師などよりも幾分か註文も出るならむと考へ候旁々取集めて考へればあまり面白き事業とは思へず又たとひ忍び得る事としても貴兄の如き藝術家をかかる刺戟の少き田舎に置く事はどうして口惜しい事ならむと確信の度ます強く相成申候それ故御返事を今日まで怠り居申候此段まことに失禮に候ひしが何かもつと華々しき事業をと心掛けつゝ今日に相成候然るに一月三十一日に至りて急に東京より來信有之珍らしき事を聞込候

此事は非常に秘密に致居候やうに承居候が實は今度東京の應應義塾にて其文學部を大刷新しこれより漸々文壇に於て大活動を爲さむとする計畫有之それにつき文學部の中心となる人物を定むる必要を感じ候趣に候そこで三田側の諸先輩一同交詢社にて大會議を開き

森鷗外先生にも内相談ありしやうに覺え候が、義塾の専任となりて諸の畫策をする文學家を選び候處夏目漱石氏か小生をといふ事に相定候由然るに夏目氏は朝日新聞の關係を絶つ事難くして交渉繼らず又森先生より小生に頼むやうにと義塾の人が千駄木を訪問したる時、森先生のいはるゝには、京都大學の關係上小生の交渉もむづかしからむと申され候由、そこで先方の言ふには小生のことわりたる時誰がそれならば適當ならむとあるに答へて、森先生は貴兄を推薦なされ候、先方の申すには然らば小生に頼む時いつ事情を打明けて小生の身上動き難き場合には直ちに小生より貴兄へ此事件交渉して貰ひたしとの事に御座候、小生は森先生の手紙に對し種種考を述べ置候が要するに只今京都を去る事は出来兼ね候趣返事いたし、又貴兄を推薦されし森先生の眼光に服し居る旨申送り候、右様の次第萬事打明け候が貴兄は此交渉に御應じの御心如何にや、三田の中心となりて文壇にそれより御雄飛の御奮發は小生の偏に懇願す



友なき境涯に馴れ果て今は強ひて人を咄ねもとむる心もおのづからに薄らぎのたりしかば、唯ひとり巴里の巷の逍遙にうつら／＼と日を過すのみなりき。

ある夜元老院門前の大通なる左側小紅亭とよべる寄席に行きぬ。此の寄席も亦巴里ならでは見られぬものゝ一なるべし。木戸錢安く中賣の必酒珈琲など賣るさまモンマルトルの卑しき寄席に異ならぬと演藝は極めて高尚に極めて新しき管絃樂又はオペラの斷片にて毎夜コンセルヴァトアルの若き樂師來つて演奏す。折々定連の客に投票を請ひ新しき演題を定め或は作曲と演奏との批評を求むるなどこの小紅亭の高尚最新の音樂普及に力をつくす事一方ならぬを察すべし。おのれドビュッシー一派の新しき作曲大方漏すことなく聴き得たるはこの小紅亭のタナリ。初めて上田先生を見たるも亦この小紅亭のタナリ。

小紅亭の定連は多く拉甸區の書生畫工にして時には落魄せる老詩人かとも思はるゝ白髮の翁を見る。その夕中入も早や過ぎし頃ふとわれは職業の中にわが身と同じく黄いろき顔したる人あるを見しが、其の人亦われを見て互に隔たりし席より訝しげに顔を見合せたり。

然れども何人なるやを知らざれば言葉もかはさで去りぬ。これ即上田先生にして、其夕先生は英吉利西風の背廣に髭も亦英國風に刈り桌眼鏡をかけてゐたまひけり。

次の日われサンジェルマンの四つ角なる珈琲店パンテオンにて手紙書きてゐたりしに、向側なる卓子に二人の同胞あり。相見れば一人はわが身嘗て外國語學校支那語科に在りし頃見知りたりし佛語科の瀧村立太郎君、また他の一人は一橋の中學校にてわれより二年ほど上級なりし松本恭治君なり。この舊友二人は其のタダリユニイ博物館前なる旅館に在りし上田先生のもとにわれを誘ひゆきたり。

翌年(明治四十二年)春も猶參かりし頃かと覺えたり、われは既に國に歸りて父の家に在りき。上田先生一日鐵無地羽二重の羽織博多の帶着流しにて突然言づれ來給へり。この時のわがよろこびは初めて巴里にて相見し時に優るとも劣らざりけり。なべて洋行中の交際としいへば多くは諺にいふなる旅は道づれのたぐひにて歸國すれば其の儘に打絶ゆるを、先生のわが身に對する交情こそさる通一遍のものにてはなかりしなれ。火鉢を間にしわかれ等は互に日本服着たる姿を怪しむ如く顔見合せ今更の如く昨日となりにし巴里のこと語出でて悠然たりき。

明治四十三年の初森上田兩先生應義塾大學部文學科刷新の事に參與せらるゝやわが身もその驍尾に附して聊か爲す所あらんとしぬ。事既に十年に近き昔とはなれり。當時はあからさまに言ひがたき事なきに非ざりしかど十年一昔の今となりては、いかに慎みなきわが筆とて最早や果を人に及ぎざるべし。その頃われは父への手前心はもとより進まねど何處か學校の教師にてもやせんと思煩へる折かなりなり。ふと第三高等學校佛蘭西語の教師に人を要するやの噂ちらと耳にせしかば早速事を京都なる先生に謀りしことありき。これに對する先生の返書今偶然これを篋底に見出しぬ。再讀するにまのあたり生ける先生の言を聞くが如し。妄に之を左に錄する所以感慨全く禁ずべからざるが爲めなり。

拜啓久しく御無沙汰に打過ぎ候段平に御有免被下度候然し毎度新聞雜誌にて面白き御作拜見仕り吾等藝術主義の徒の爲め且は徳川の懐かしき趣味の爲め御奮闘難有奉感謝候、小生事去年の秋よりついで上京の機を得ず帝都の眼覺しき活動に遠ざかりて残念至極に

型や主義は要らず縦横に書きまくるが可  
しと考ふる小生は貴兄の作物が鳥の歌ふ  
如く自然に流れでるのを羨ましく思居  
候今後種々の方面へ筆を向けて、あと  
から追付かむとする評論家の息をはずま  
せてやり給へと遙かに囑望仕候

有樂座にて二十六日はギニエツチ氏の音  
樂と他に椿姫の芝居有之候由もし上  
京して間に合はゞ幸福と存候がちと  
むづかしく候

過日同座にて一度御眼にかゝりしのみな  
れど何卒御尊父様並に御母堂へよろしく  
御鳳聲被下度候 勿々

二月十一日朝

上田 敏

永井荷風様 侍史

かくの如く先生はわが拙作の世に出るごとに  
或は書を寄せ或はわが家に來給ひて激勵せられ  
三田文學第一號漸く出でんとするや先生の  
書簡はます／＼細事に涉りて懇切をきはめぬ。

拜啓益々御清適の段奉 賀 候 其後三  
田文學御經書のこと如何に相成 候や 過日  
大倉書店番頭原より他の事にて二回ほど  
書面有之候序にははじめは談判不調(尤

も與謝野君との間の略式の話について)  
次にはまた再度貴兄及び岩と談合をはじ  
めたる 趣を書添へ居候 兎に角雜誌御  
經書の困難御察申候

是につき森先生の意見は如何に 候や 小  
生の考にては原稿料は多小他よりも高く  
見積りて置く事必要なるは先日申したる  
如くに 候が何れもつぬけて高くするにも  
及ばずはじめよりあまり多く賣らむと計  
りても無益かと 存候、要するに二百頁  
の雜誌とすれば毎月三百圓の總入費あら  
ば事足りむか、自營にすれば其幾分は確  
に戻つてくる筈、書肆の方には一年に月  
數拾圓の損として他方に廣告機關とも  
なる利益もある筈此條件に近い所にて大  
倉もうけ合ひさうなものに 候がどうい  
ふ工合にて謝絶せしやら何はともあれ來  
月中旬にいづれ雜誌發刊の運び存候つ  
いてはほゞ原稿締切期限等御示致被下度  
候 小生も何か一文寄稿したく 候 一昨  
日より家内および娘とともに宇治川に遊  
んで河沿の宿にとまり翌朝奈良へまかり  
こして新築の奈良ホテルといふに休み、  
そこより車を雇ひて春日社頭の鹿をはじ

め名所遊覽仕候がホテルの赤旗をつ  
けた車にのつた所はまるでめりけんの觀  
光團に御座候 ひき、夢見の里とも申  
可き Kura In Norte にはかりよんの音

ならぬ梵鐘の聲あはれに坐る 古を思は  
せ 候其時またおもふやう安部仲磨がこ  
の小きき邑を出でて大陸の支那しかも唐  
代の支那を見た時、とても歸られなくな  
りて今歐洲の大都に遊ぶ人の心の如く  
に日本を呪詛せしものと存候このつぎ  
御來遊のせつは御一所に奈良へ出かけた  
きものに 候妻よりよろしく 勿々

三月二十一日

上田 敏

永井荷風様 侍史

大正五年われ既に病みてつかれたり。將に退  
いて世の交りを斷たん事を欲し妓家櫛比する淺  
草代地の横町にかくれ住む。たま／＼兩國大  
相撲春場所の初日に當りてあたり何となく色め  
き立てる正午近くなり。われ錢湯より手拭さげ  
て歸り來る門口京都より東上せられし先生の  
尋ね來らるゝに會ひぬ。さては先生の寛容深く  
わが放蕩無賴を咎めたまはざるかと、思へばい  
よいよ喜びに堪へず、直に筋向なる深川亭に

る所何卒御快諾の吉報に接したく存

居候もより御内意を伺ふまでにて事

定らば別に正式の交渉は可有之候

委細の事は御面晤の節と存候が小生の

聞込みたる處にては、唯學校を盛にする

だけの事では無くもつと大なる運動の

序幕かと存居候例へば帝國劇場の如

きは義塾の側より殆ど自在に使ひ得られ

べきやう見受けられ餘は言はずとも種々

面白き事がありさうに候、藝術家最高

の事業はどうしても劇部にありと信ずる

小生はこれを聞いて直にモリエールや

グリックやゲエテ、ワゲナアさてはアン

トワンを思ひ出し何かの形にて此愉快

なる事業に助力したく自分でも大に心

を動かし候なほ委しくは森先生と御相

談あるもよろしかるべきが、以上の成行

筆紙にてニュアンスを盡し難く候がご

つと如斯に候條件については決して

不満足のないやう可致の方は殆どカ

ルトブランジュの如き様子に候、これ

また御承諾さへ相成らば森先生が萬事

候勿々

二月五日

永井荷風様侍史

上田 敏

張目飛耳の徒多き今の文界なれば萬事決

定迄何分内密に願上候

悦子よりもよろしく申上候、田舎にあ

りて曾遊の地を思ひつけ居候まゝ嘗

てとまりしホテルの紙を用ひ候

此書信は維納の客棧ホテルプリストルの記

章を印刷したる書簡箋にペンにてこまゝと認

められたり文中悦子とあるは令夫人なり。諄々

としてわが身のことを説き諭さるゝさま宛ら慈

母の兒を見るが如くならずや。此の一書により

てわが三田に入りし當時の消息も亦おのづから

分明なるべし。わが返書に對し折返して到着し

たる先生の書次の如し。その全文を掲ぐ。

二月七日の御手紙拜見仕候、先は過日

の唐突なる願事御聞届被下候段深く

感謝仕候、其後森先生とも種々御打合

せの御事と察し申候が何卒折角の壯舉

ゆゑ三田の方御助力を懇願仕候、御

謙遜の御手紙なりしが決して貴兄ならば

成功せざる筈無しと確信仕候殊に御

自身教鞭を執らるゝのみならず其上向後

の發展に一種の Plan を與へ奮心を惹起

する任務は普通の學究にては出来にくか

るべしと思へばこそ貴兄へ懇願仕候

ひしかと存候、小生は本月末か來月早々

上京の積に候、故其時篤と御話申上

ぐべく候

京都にては全く話相手無く困却仕候

唯宅の者と散歩して食事でもするより他

に致方無く候、只本年は元日より今日迄

毎日拙作を起草しそれにて紛れ居候、此

地はとにかく讀書にも創作にも不適當な

るぶるじよあじいの國にて御話にならぬ

無聊の郷に候、唯此頃はルギエといふ伊

東さんのお嬢さんを娶つた若い海軍士官

と往來し此他に先月より二三人急に佛蘭

西人が加はつて稍おもしろく相成候

きのふの御作中柳橋の藝者が新橋といふ

敵國を見る處おもしろく拜見仕候、又

先日モリス・パレスが故郷の白楊の幼

木をおもふ一節感服仕候、當地の平田

禿木氏はボオブラムメルの處を見て英國

好の人なれば甚だ嬉しがり居候、文藝に



# 小説作法

一 小説はいかにして作るものなるやどういふ風にして書くものなりやと問はるゝ人屢あり。これほど答へにくき問はなし。畫の道ならば芥子園畫傳をそのまゝに説きもいづく油畫ならばまづ寫生の仕方光線の取方繪具の調合など鴈外西岸兩先生が洋畫手引草にも記されたりと逃げもすべきに、小説かく道といひては原稿紙買ふ時西洋紙はよしたまへ、日本紙ならば反古も押入の壁や古鳥籠が張れて徳用とも答へがたく、さりとて萬年筆は何じるしがよしといひにくかるべし。

一 おのれいまだ一度も小説家といふ看板かけた事はなれど思へば二十年來くだらぬもの書きて賣りしより、稅務署にては文筆所得の稅を取立て、毎年の跡疏も遂に聽入るゝ氣色なし。舊視聽にては新聞圖書檢閱の役人衆どうかすると榮書にておのれを呼出し小使に茶を持運ばせて、此の小説は先生のお作ですな此の邊は少しどうも一般の讀者には烈しすぎるやうです此の次からは筆加減とすつかり黒人扱なり。

かうなつては遠慮も無用と先は宗匠家元の心意氣にて小説のつくり方いかゞとの愚問に對する愚答筆にまかせて書き出すと雖これ元より具眼の士に示さんとするものならず。初學の人の手引ともならばなれかし。實をいへば税金を稼ぎいださん窮策なりかし。

一 小説は日常の雜談にもひとしきものなり。どういふ話が雜談なるや雜談は如何にしてなすべきものなりやと問はれなば誰しも返事にこまるべし。世間の噂もはなしなり己が身の上愚癡も不平もはなしなり。日常身邊の事一として種々ならざるはなし。然れども長屋の噂が金繰引くは聞くに堪へず識者が茶話にはおのづかに聞いて身の誠となるもの多し。田舎者の口は話の前後多くは顛倒してその意を得がたし。談話の善惡上品下品下手上手はその人に在り。學ぶも得易からず。小説の道亦斯くの如き。

一 人口あれば語る。人情あれば文をつくる。

春來つて花開き鳥歌ふに同じ。皆自然の事なり。これを究むるの道今これを審美學といふ。森先生が審美綱領審美新説を熟讀せば事足るべし。佛蘭西人ギョオが學說亦既に譯著あり。學者の説は皆聽くべし。月刊の文學雜誌新聞紙等に掲載せらるゝ小説家また批評家の文藝論は悉く排斥して可なり。其の何が故なるやを周ふなかれ。唯蛇蝎の如く忌み恐れよかし。

一 小説をかゝんと志すものにおのづから二種の別あるが如し。其の一は十七八歳まだ中學に通ふ頃世に流布する小説を讀み行く中自分もいつか小説かいて見たくなりて筆を執り初め、次第に興を得やがて學業の進むにつれ遂に確乎として此の道に志すに至るもの、其二は既に高等専門の學業をも卒へ、志定りて後感ずる事ありて小説を作るものなり。櫻痴福地先生は世の變遷に經綸の志を捨て遂に操觚の人となりぬ。柳浪廣津先生は三十を越えて後初て小説を書きし由聞きたる事あり。夏目漱石先生は帝國大學教授を辭して小説家となりし事人の知る所なり。然るにわれ等が如きは二十前後日常の書簡文も満足に(今でもさうですが)書けぬ中早くも小説の筆とりぬ。唯書いて見たかつたといふまでの事、同級の生徒が眞實ヴァイオリン録

いざなひしが、何ぞ圖らんこの會飲永劫の別宴  
とならんとは。心ゆくばかり半日を語り盡して  
酒亭を出でしが表通は相撲の打出し間際にて  
電車の雑沓甚しかりければ、しばしが間とて  
再びわが隠家の二階に詣じて初夜過ぐる頃ま  
でも語りつづけぬ。わが家の近くには豊澤松太  
郎竹本播磨太夫の住居嫁家の間に交りて在りけ  
ればにや、女の音々には似も寄らぬ正しき太極  
の響折々漏れ聞ゆるにぞ談話は江戸俗曲の事  
また先頃先生のさる書肆より翻刻を依頼せられ  
しといふ絲竹初心鈔がことより、やがてはわが  
其の頃の作品の批判に移りて、かゝる種類のも  
のにては笠森お仙が一篇詞最もおだやかに想  
最もやはらかに形亦最もととのひしものなる  
べしと語られけり。

數日の後先生再び京都に赴かんとせらるゝや  
我いかにしけん今までは一度も先生を停車場に  
送りたる事なかりしを。後にて思合すれば蟲が  
知らせしなるべし。この夕ばかりは怪しくも中  
央停車場に出で行く心起りて、食堂の卓子に  
汽車出づる間際まで令夫人令嬢と共に珈琲をす  
すりこの次夏の休みの御上京を待たんと言ひ  
しがそれは全く仇なる望にてありけり。

大正五年七月九日先生の計いまだ公にせ

られざるに先立ち馬場孤蝶君非報を二三の親友  
に傳ふ。余倉皇として車を先生が白金の邸に  
走らするに一片の香烟既に寂寞として鐵板のほ  
とりに漂へるのみ。われ此れを見し時咄嗟の感  
慨恰も萬巻の圖書咸陽一炬の煙となれるが如  
き思ひに打たれき。わが當代の文化や先生の計  
によつて其失ふところ殆ど計り知るべからざ  
る事を思ひたればなり。  
(大正七年稿)

### ありやなしや

シアル・گران

よし反響はきかれずとも、物には凡て隨ふ  
影あり。

夜來れば泉は星の鏡となり、  
貧しきものも人の恵に逢ひぬべし。

澄みて悲しき笛の音に土牆は立ちて反響を  
傳へ、

歌ふ小鳥をさそひて歌はしめ、

蘆の葉は蘆の葉にゆすられて打頭ふ。

憂ひは深きわが胸の叫びに答へん人心、  
あゝ、そはありやなしや。

(珊瑚集より)

### 池

エドモン・ピカール

わが胸は濕りし土地に水は死したる古池  
か。

凍りし風其處に絶え間なき叫びを放つ。

恐ろしき襲撃の跡を留る落石の木立に、

岸のながめの哀れなるかな。

忘れし戀と消失せし友の讀みと、

酩酊運命のいたましき寶物は、徐ろに

黒き泥土と色さめし花と共に、

眠りたる此の花瓶の底に朽ちて行く。

陰鬱なる一隅かな。されど寂たる此深淵の  
中よりは、

もしそれ、吾が弱き心、測量の綱を抛つ  
ちて、

沈滞の濁水を突如として打つ時は、

震動起りて一道の光閃き渡り

底知れぬ愁情を照す水百合の花の星、

數ある記憶の明るき色水の面に浮びて來  
る。

(珊瑚集より)

何ぞ近きにあらんや。平素その心を失はずば半生世路の辛苦は萬卷の書を讀破するにもまさりて眞に深く人生に觸れたる雄篇大作をなす基ともなりぬべし。支那の文學は離騷を初めとして韓柳の文李杜の詩に至るまで皆副業の産物なり。西洋の文學を見るもモリエールは旅役者なりけり。バルテール、シャトオブリアンの如き一代の文豪終生唯机にのみ向ひたる人にはあらず。

一 清の名家袁隨園が詩話卷四に「詩ハ淡雅ヲ貴ブト雖亦郷野ノ氣有ル可ラズ。古ノ應劉鮑謝李杜韓蘇皆官職アリ。村野ノ人ニ非ラズ。蓋シ士君子萬卷ヲ讀破スルモ又須ラク廟堂ニ登リ山川ヲ看交テ海内名流ニ結ブベシ。然ル後氣局見解自然ニ闊大ス、良友ノ琢磨ハ自然ニ精進ス。否ザレバ鳥啼蟲吟ヲ沾沾シテ自ラ喜ビ仕處アリト雖邊幅固已コリ狭シ。人ニ知黨自好ノ士アリ。詩ニモ亦鄉黨自好ノ詩アリ。恒寛ガ鹽鐵論ニ曰ク鄙儒ハ都士ニ如カズト。信ズベシ矣。」とあり初學者よく讀み味ひて前條おのれが言ふ所と照し見よかし。

一 わが日本の文化は今も昔も先進大國の模倣によりて成れるものなり江戸時代の師範は支那なり明治大正の世の師とする所は西洋なり。

然れば漢文歐文そのいづれかを知らざれば世に立難し。兩方とも出来れば虎に翼あるが如し。國文はさして要なけれど若しこれを知らんとせば矢張漢文一通の知識必要なり。本店の内幕を知らば支店の事はすぐわかる道理。大正現代の文學は其の源一から十まで悉く西洋近世の文學に在り。

一 東京市中自動車の往復頻繁となりて街路を歩むに却て高足駄の必要を生じたり。古きもの猶捨つべきの時にあらず。日本現代の西洋模倣も日本語の使用を法律にて禁止なし、これに代ふるに歐州語を以てする位の意氣込とならぬ限り此國の小説家漢文を無視しては損なり。漢字節減など稱ふる人あれどそれは社會一般の人に對して言ふ事にて小説家には當てはまらず。凡そ物事その道々によりて特別の修行あり。櫻紙にて長羅子を掃除するは娼妓の特技にして素人に用なく、後門服賂をすゝむるは御用商人の呼吸にして聖人君子の知らざる所。豆腐々々と呼んで天秤棒かつぐには肩より先に腰の二合が肝腎なり。仕立屋となれば足の拇指を働かせ、三味線引となれば茶碗の底にて人さし指を叩いて爪をかたくす。漢字は日本文明の進歩を阻害すと云ひたればふもよし、在來

の國語存するの限り文學に志すものは歐州語と併せて漢文の素養をつくりたまへ。翻譯なんぞする時どれほど人より上手にやれるか物はためしぞかし。

一 小説と云ふ語はもと日本語にあらず、戯曲院本などいふも皆漢文より借り來れるもの。此れだけにて日本の小説家たるもの歐州語の外に漢文も少しはのぞいて置く必要があるべし。小説の語は張衡が西京賦に「小説九百本自廣初」といふに始り院本の名は金に始まる事陶九成が輟耕錄に「唐有傳奇。宋有戲曲、南詞、說、金瓶院本、雜劇其實一也。」とあるによりて知る。是れ簞津發堂先生が親燈餘影に出でたり。

一 鴨外先生若き頃バイロンの詩を譯せらるゝに何の苦もなく漢字を以て韻を押し平仄まで合せられたり。一藝に秀づるものは必ず百藝に通ず。これ一事を究め貫かんと欲すればおのづから關聯して他の事に及ぶが故なり。細中廣澤は書家なれど講談で人の知つたる井部安兵衛とは同門の劍客にて繪も上手なり。當世の文士小説かくと六識活字の文壇消息に憎まれ口きくだけか能とはあまりに潰しがきかな過ぎる話、物價騰貴の世の中どつちへ轉んでも少しは金の取れる餘技一二種ありてもよきさうなもの也。



などに擬りしも、同然、當人だけは、大に志あるやうに思ひしかど、大人から見れば、矢張、少年の遊戲に過ぎざりしなるべし。されば、仲間のものには、其文才を惜まれながら、中程より止めてしまふ人もまゝあるならひなり。

一 その初め、少年の遊戲より起りたればとて、後年其の人の作を輕ずるにも當らず、成人の後、大に感奮して書いたものなりとて、亦、あながち尊ぶには及ばぬなり。善惡は、唯其の著述につきて見るべきなり。

一 好きこそ物の上手といふ、諺、文學藝術の道に名をなす、視誤と知るべし。下手の横好きとは譯ちがふなり。文藝の道は、天賦の才なくてはかなふべからず、其の才なくして、我武者羅に熱中するは、迷ひにして、自信とは云ひがたかるべし。これ已を知らざる愚の證據なり。我武者羅に押一手で成功するは、唯、地女を口説き落す時ばかり。黒人にかゝつては、佐野治郎左衛門のためしあり。迷はおそろし。

一 文壇の治郎左衛門、矢張、田舎の人に多きやうなるは、わが僻目か。無暗に大作を携へ來つて、月刊雜誌の編輯者を口説き、斷られて、憤怒すると雖、而も思切れずして、金あれば、遂に自ら雜誌の經營を思立ち、性の悪い文士の喰物となる話

珍しからず。

一 女をくどくや、先づ小當りに當つて見て駄目らしければ、退いて様子を窺ふ氣合、これ已を知るものなり。文藝の道、亦、色道に異るなし。およそ物事やつてゐる中に、何といふ事なく、自分で自分がわかつて來るものなり。其のわからざるは、反省の力、乏しきもの、成功の見込みなき、豈、文藝の道に於てのみならんや。

一 小説の創作は、感情の激動ありて、後沈黙、回想の心境に立戻り得て、初めて爲さるゝものなり。例へば、白薇傳の執筆の如き、わが身の上をも他人のやうに眺め、取扱ふ餘裕なくんば、いかでか精緻深刻なる心理の解剖を試み得んや。フロマンタンが小説「ドミニック」ゲーテが小説「ウエルトの愁」の如き、萬世この種の制作の模範となるべきものを、熟讀して、初學者よく考ふべきなり。

一 讀書、思索、觀察の三事は、小説かくもの寸毫も怠りてはならぬものなり。讀書と思索とは、劍術使の毎日道場にて、竹刀を持つが如く、觀察は、武者修行に出でて、他派試合をなすが如し。讀書、思索のみに耽りて、世の中間實地の觀察を怠るものは、やがて古典に掟はれ、感情の鋭敏をかくに至るべく、己が才をたのみて、實地の觀察

一點張にて行くものは、その人非凡の天才ならぬ限り、大抵は行きづまつてしまふものなり。前の二事は、草木に於ける肥料に等しく、後の一事は、五風十雨の效あるもの。肥料多きに過ぎて、風に當らざれば、植木は蟲がつきて腐つてしまふべし。されば、此の三つ、兼合ひの使ひ分けむづかしむづかし。

一 讀書は、閑暇なくては出来ず、況や、思索、冥想、觀察に於てをや。されば、小説家たらんとするものは、まづおのれが天分の有無のみならず、又その身の境遇をも併せ、顧ねばならぬなり。行く／＼は、親兄弟をも養はねばならぬやうな不仕合の人は、縱ひ天才ありと自信するも、斷じて専門の小説家などにならんと思ふこと勿れ。小説は、卑しみてこれを見れば、遊戲、雜技にも似たもの、天性、文才あらば、副業となしても、亦、文名をなすの期なしとせず。昔、奈意氣旺盛の頃、一二の著作、評判よきに夢中となり、其の境遇をも顧ず、文壇に乗出で、これからといふ、肝腎な所にて、衣食の爲めに、濫作し、折角の文才も、すきみ果て、末は新聞記者、雜誌の編輯人などに雇はれ、碌碌として一生を終るものあるを思はゞ、一たん正業に就きて、文事に遠ざかるとも、やがて相應の身分となり、幾分の餘裕を得て、再筆を執るも

一 小説の價值は篇中人物の描寫如何によりて定まる。作者いかほど高遠の理想を抱きたりと人物の描寫掛ければ唯理論のみとなりて小説にはならず。人物の描寫は筆先の仕事にあらず實地の觀察と空想の力とありて初めてなざるものなり。

一 脚色の變化に重を置き人物の描寫を輕んずるものは所謂通俗小説にして小説の高尚なるものにあらず。人物の描寫を骨子とすれば脚色はおのづからできて来るものなり。

一 人物描寫の法一個人の性格生涯をそのまゝモデルとなす事あり。甲乙丙丁數人の性格を取捨按排してこゝに特別の人物を作出す事あり。別に定法なし。唯何事も内面より觀察するを必要とす。外面より觀察して之を描寫するは易く内面よりするは難し。ゾラの小説は人物の描寫兎角外部よりする傾を憾みとす。フロローが「マダムボヴリー」、「トルストイの「アンナカレーナ」」、「アナトール・フランスの「紅百合」、オクタヴ・ミルボーが「宣教師の叔父」、「アンリ・ド・レニエ」が「貴族ブレオーの交遊」などいふ作は各作風を異にすと雖いづれも主として内面より人物の描寫に力めた名著なり。

一 こゝに人物を主とせざる小説にして其數直

前條述べる所のものに劣らざるものあり。即ち都市山川寺院の如き非情のものを捉へ來りて之に人物を配するが如き體を取れるもの或は群集一團體の人間を主とし却て個人を次となせるが如きものあり。ローダンバックの「廢市ブリュージ」、「ゾラの「坑夫ゼルミナル」、グラスコ・イバネスの「五月の花の如きを其の一例」とす。象徵詩家が散文の著作には、怪異の體裁をとれるもの多し。此等は初學者の學び易きものに非れば例外として言はず。

一 およそ小説の作風抒情を主とするもの、敘事に重を置くもの、客觀的なもの、主觀的なもの、空想的なるもの、寫實的なるもの、千變萬様の、一々説明しがたしと雖、その價值は唯作者の人格に在りといはゞ一言にして盡くべし。

一 人誰しも若き時は感激し易く、中年となれば感激次第に乏しくなる代り、世の中の事明に見ゆるやうになるものなり。されば小説家たるもの其の年齢に従ひて書きたしと思ふものを書くがよし。文壇の風潮たとへば客觀的小説を藝術の上乗なるものとせざとて強ひてこれに迎合する必要はなし。作者輒ちおのれの柄になきものを書かんとするなかれ。さりといつてもいつも十八番の紋切形を繰返せと云ふには

あらず。人間身體の組織も七年ごとに變るといへば作者小成に安せず平素研鑽怠ることなくんば人に言はるゝより先に自分から不足を感ぜ出し、作風は自然と變化し行くべし。

一 小説は人物の描寫敘事敘景何事も説明に憚かぬやう心掛くべし。讀む者をして知らずく編中の人物風景ありくゝと目に見るやうな思をなさしむる事、これ小説の本領なり。史傳は説明なり。小説は描寫なり。

一 説明七くどき時は肩が張り描寫長たらしき時は欠伸の種となる。いづれも上手とはいひがたし。筆を執るものこゝに於て或は文勢を遷じ或は省略の法を取り、或は敘事の前後を顛倒せしめて人を飽かしめざらん事をつとむ。この呼吸は讀書に創作にいろゝとこの道の經驗をつむに従つて會得するものなり。

一 史傳といへども終始説明の文體を以てのみするものならず、屢小説風の描寫を交ふ。小説亦微細徹底描寫をのみつゝくるものにあらず、傳記めきたる説明即ち箇古の功を奏することあり。落語講談時に他山の石となすに足る。

一 小説作法の人物描寫に欠きて苦心すべきは敘景なり（對話は人物描寫の一端と見るが故にこゝに言はず）。小説中の敘景は常に人物と密

一 たま／＼柳里恭の書談といふものを、見しに、次の如き條あり。曰く總じて世の中には非の蛙多し、梁唐宋元明の名ある畫を見ることなき故に繪に力なし。千里を行くも爪先の向け様にて始まる者なれば、物事は日の附けやうこそ大切なれ。善き所に目を附けて學ぶ人は早く其の可を悟り、惡しき所に目を付け學ぶ人は老に至るも其の不可を知らず。例へば彼の蛇は一町か二町許りは精出して飛びそれより外に飛ぶもならぬ者なれど馬の背などにひよつと止まりぬれば一日に千里も行くが如し云々。

一 おのれ初學のものに、月刊文學雜誌又は新聞紙文藝欄などにいづる批評を日にする勿れと、戒むるは世に有益なる書物聞くに足るべき學者の説あるに、それは扱て置きかゝるものに目をつけるは即ち惡しき所に目をつけるものなればなり。文學雜誌の投書欄に小品文短篇小説なぞの掲載せらるゝを無上の喜びとなすものはまづ大成の見込なきものなり。柳里恭が所謂「爪先の向けやう」にわるきものにして十里を行くものにあらず。

一 論より證據は今日文壇の泰斗と仰がるゝ人々を見よかし森先生の弱冠にして讀賣新聞に投書せられしは今の所謂地方青年投書家の投

書と同じからず。紅葉露伴、樗牛、逍遙の諸家初めより一家の見識氣品を持して文壇に臨みたり。紅葉門下の作者に至りても今名をなす人々皆然り。

一 學歴なんぞはどうでもよきものなれど今日の大學は明治中頃の尋常中學校位の程度のもになり下りたれば、まづ何事をなすにも學士若くはそれに相應する教育を受けてより後の事なり。さるを學士の位を得たりと安心するやうな人は話にならず。學問藝術はます／＼究むるに従ひていよいよ疑を生ずるものなり。疑を抱かざる人は其の道未だ進まざるものと見て誤なし。

一 おのれ曾て井川滋君と三田文學を編輯せし頃青年無名の作家の其の著作を、公にせん事を迫り來れるもの頻々應接に遑あらざる程なるに、一人として草稿の辭句など正したまはれといふものはなかりけり。此れ淺學の余七年間大學部教授並主筆の重職に在りながら別に恥一つかゝずお茶を濁せし所以ぞかし。道場破りの宮本武藏來らず、内弟子ばかりに取巻かれて先生々々といはれてゐれば劍術使も樂なもの。但しかういふ先生芝居ではいつも敵役。華魁にはもてませぬデ。

一 おのれが觀る處にして誤らずんば今日の青年作家は雜誌に名を出さんが爲めに制作するもの、活字になる見込なければ制作の興會は湧かぬと覺し。

一 どうやら隠居の口小言のみ多くなりて肝腎の小説作法はお留守になりぬ。初學者もし小説にでも書いて見たらばと思ひつく事ありたらばまづその思ふがままにすら／＼と書いて見るがよし。而して後添削推敲してまづ短篇小説、長篇小説二篇ほどは小手調筆ならしと思ひて公にする勿れ。その中自分にてても一番よしと思ふものを取り丁寧に清書してもし私淑する先輩あらばつてを求めて其の人のもとに到り教を乞ふべし。葉子折なぞは持參するに及ばず。唯草稿を丁寧に清書して教を乞ふ事禮儀の第一と心得べし。小説のことなれば悉く清書にて書くにも及ばじ、草行の書體を交ふるも苦しからねど好加減の崩し方は以ての外なり。疑しき所は草訣辨疑等の書について自ら正せ。一 小説は獨創を尙ぶものなれば他人の作を讀みてそれより思ひつきたる事はまづ避くるがよし。おのれの經驗より實地に感じた事を小説にすべし。腹案成りて後他人の作を參考とするはさして害なからん。



# 年譜

明治十二年

十二月三日、東京市小石川區金富町四十五番地に生る。壯吉と命名。當時先考は帝國大學書記官たり。

明治十六年

(五歲)

某月令弟貞次郎の誕生あり。爲に翌十七年六月まで下谷竹町なる祖母の實家鷺津氏方に起居し、其處よりお茶の水高等師範學校附屬幼稚園に通學す。

明治十八年

(七歲)

小石川の舊邸に戻り、黒田尋常高等小學校に入學。別に漢學の師に就て素讀を學ぶ。

明治二十一年

(十歲)

黒田小學校より、竹島町の東京府立尋常師範學校附屬小學校の高等科に轉ず。

某月某日末弟威三郎生る。

明治二十三年

(十二歲)

初秋の候、家尊時の文部大臣芳川顯正伯の秘書官に就任、一家を擧げて、麹町區永田町三平坂上なる文部省官邸に移る。恰も前文相森有禮が、刺客西野文太郎の兇刃に斃れて後半歲に至らざりし當時とて、未だ玄關の礎石に血痕見ゆなど、小吏の眞しやかに語るあり。胸中忽ち寒きを覺ゆ。  
冬の初めより半藏御門を抜け竹橋を渡りて、神田錦町の東京英語學校に通學す。講師に志賀勉川などありたり。

明治二十四年

(十三歲)

官邸に在る事半歲にして内閣の更迭あり。即伊藤春猷が首相の下に西園寺陶庵最初の

文相たり。先考亦同省會計局長の椅子を占む。由つて家族一同は官邸より小石川の本邸に戻れり。  
四月、神田一つ橋の高等師範學校附屬尋常中學校に入學。

明治二十九年

(十八歲)

誕生の地小石川金富町を去つて、一家と共に麹町區飯田町の鶴の木坂に轉ず。この頃より荒木竹翁、福城可童等に就て八八の教へを受けしが藝道の師に就きたる初めなり。

明治三十年

(十九歲)

鶴の木坂より更に一番町四十二番地に居を移す。先考が官途を辭して日本郵船會社に入り、直に支店長として上海に赴任せるの年なり。

八月末、上海に渡航、先考と共に西湖の月を賞す。繁華の中心地なる四馬路と雖、極だ自動車の便なく、紳士は皆二頭立の馬車を驅つて往來せり。  
十一月末、歸朝。東京高等商業學校附屬外

接の關係を保たしむべし。其の巧みなものは却て直接に人物の説明をなすよりも效能ある事あり。アナトール・フランス作中屢見る處の學者の書齋庭園等の描寫の如し。

一 敘景も外面の形より寫さず内面より描く方法を取るべし。ハイカラに言へば繪畫的方法より、音樂的たるべし。この處、即南畫の筆法と見てよし。寫生に出て寫生を離るゝ事なり。

一 寫生を離れんと欲すればまづ寫生に力むる事初學者の取るべき道なるべし。小説は萬事に涉りて細心の注意を要するものなれば一人物を描かんとするや、まづ其の人物の活動すべき場面の中街路田園等寫生し得べき處は一應寫生して置くがよし。筆にて記さずとも實地に觀察して心に記憶すれば足るべし。或小説家返子の海岸にて男女の相逢ふさまを描くや明月海の彼方より浮び出て繪之島おぼろにかすみ渡りなどとしき景色をあしらひしに、讀巧者の人これを見て返子の地形東に山あり西に海ありその彼方より月の出づる理なし。沈むの課ならずやと言はれて言句につまりしとの話あり。寫生を念頭に置けばかゝる誤はおのづとなくなるなり。

一 小説かゝんと思はゞ何がさて置き一日も早く佛蘭西語を學びたまへ。但し手ほどきは日本人についてなす事禁物なり。曉星學校の夜學にでも行き其の國人についてなすべし。何事も手ほどきが肝腎なり。踊三味線などもくだらなき師匠につきて手ほどきしたるものはいやな癖つき其後はいかなる名人の弟子となるとも一度つきたる癖は一生直らぬものなりとぞ。日本人の兎角語學に不得手なるやうにぶはるゝは中學校にて日本の教師に英語の手ほどきされるが爲めなるべし。小學中學の恐るべきはこれだけにても知らるゝなり。

一 小説家たらんとするもの辭典と索引にて差支なければ一日も早くアンドレ・ジイドの小説をむやうにしたまへかし。戦後以來多く新刊の洋書を手になせば近頃はいかなる新進作家の現れ出でしやおのれよくは知らねど、まづ新しき小説の模範としてはジイド、レニエあたりの著作に、新しき戯曲の手本としてはボオル・クロードあたりのものに目をつけ置かばたいした間違ひはなきものゝやうに思はるゝなり。

(大正九年三月)

## 夕ぐれ

アンリイ・ドレニエ

夕暮の空遠くして海のほとりに  
われ嘗て都をのぞみき。

鮮かなる銀色と隠れたる紅の  
夕暮の底遠くして海のおもてに  
その影を流す大理石と黒鐵の  
都をわれは嘗てのぞみき。

扉と家をもわれは見たりき。

(血の夕暮はその時海にあり)

風は明き燐燐の火も見ゆる

戸口の篝火をいらだたしめ

はたとばかりに扉をとざしぬ。

「死」と「望み」とは過ぎ去りぬ。

暗き空の下、秘めたる銀色の海の面に

その影と影とは漂ひぬ。

わが身には此の時よりして

海に昇る夕暮の悲しかりけり。

(『珊瑚集』より)

十月、「新任知事」を「文藝界」に發表す。

明治三十六年 (二十五歳)

五月、「夢の女」を新聲社より出版。

七月、「戀と刃」を大阪毎日新聞に「燈火」を文藝俱樂部に寄す。

八月、「夜の心」を「新小説」に發表。

九月、「女優ナ、梗概」洪水「エミール・ゾラ

とその小説」の三篇を合せ「女優ナ」と題して新聲社より上梓。而してこの月二十二日、信濃丸にて横濱を出帆す。秋陰雨ならんとし

て故國を離るゝの思切なり。

十月十日タコマ市の一旅舎に笈を解く。

十一月、船中にて執筆せる「船房夜話」を「文藝俱樂部」に發表。

明治三十七年 (二十六歳)

渡米後、胸中に漸く藝術上の革命起れる

を覺ゆ。執筆意の如くならず。篋底より「平

家物語」「榮華物語」等を取り出して、獨り爐

邊に坐せし儘夜半に至ること屢なり。

一月、牧場の道(野路の歸り) 改題を「太

陽」に寄す。

二月、九日、雪中の旅舎にて日露開戦の報

を聞く。

六月、日本の新聞雜誌齊しく齋藤綠雨の計を

傳へ来る。「あゝ江戸狭斜の情趣を喜び味

ひたるものは、遂に二十世紀社會の生存競

争には堪へ得ざるもの歟。

十月、古屋商會の一員となりて、タコマよ

り聖路易の萬國博覽會に赴く。

十一月、ミシガン州なるカラマツのカレッジ

に入り、哲學及佛蘭西語を専攻す。

明治三十八年 (二十七歳)

一月、二日、旅順口陥落の報を耳にす。

六月、カラマツを去る。

七月、華盛頓日本公使館の小吏となりて勞

働に従事す。即一日も速かに佛蘭西に渡

りて、彼の國の文學を研究せんとの下準備に

外ならず。

八月、家尊より佛蘭西行には如何にすると

同意し難き旨の來書あり。

九月、ボトマツク河上の公園に於て、妓女イ

デスと識る。

十月、イデスとの親交益々深きを加ふ。日記

に曰く、余は明日をも待たで死するも更に憾

みなし。」と。

十一月、日本公使館を辭して、獨り紐育

に到る。

十二月、再び家書に接す。紐育の正金銀

行に入るべしとの命なり。憤慨幾夜、遂に意

を決して銀行員たり。

同月、佛蘭西の名優サラ・ベルナル夫人來

米。連夜リイリツク劇場にその技を見て深き

感動に打たる。

この年、「市俄古の二日」夏の海」の二篇を脱

稿す。

明治三十九年 (二十八歳)

一月、紐育西區八十九丁目なる佛蘭西人

の家に轉す。

六月、銀行の勤務漸く苦痛の度を増し来る。

支那町の魔窟に赴きて無賴漢と卓子を共に

し、酒杯を傾くること夥からず。

七月、妓女イデス紐育に來る。相見ざるこ

と既に九ヶ月、再びベルモント・ホテルに相

會す。心魂夢を追ふに似たり。



國語學校の支那語科に入學す。

明治三十一年 (二十歲)

四月、書肆金港堂の子息龍泉寺村の寮に訪ねし歸るさ、遊意熾み難く獨り北里に遊びて、楚腰纖細掌中輕と諷ふ。この遊興費正に金夢園也。——創作の意大いに動く。  
九月、短篇小説『簾の月』一篇を携へて、牛込矢來町なる廣津柳浪の門を叩けり。(この事本書中の「書かでもの記」に詳し。)

明治三十二年 (二十一歲)

外國語學校に籍を置くと雖、登校極めて稀にして、清元、踊、尺八等の積古場通ひに日も猶足らぬ有様。しかもこの間、人情の機微を知らむとて落語家朝葉坊むらくの門に入り、市内各區の寄席に出入す。元より電車の便あるなく、下谷佐竹ッ原のむらくの家より、連日品川或は深川扇橋の席亭まで徒歩にて通ひしが、殊に雨雪の日の困難言語に絶せり。偶九段坂の席亭藤本に出演中家僕夫妻の來るに會し、忽ち事發覺に及びて、即夜邸内

の一室に遊藝を命ぜらる。涼風立初めし頃の出来事なり。

これより先、一月、處女作「おぼろ夜」を「よしあし草」に發表し、三月「烟鬼」を「新小説」に寄す。五月、柳浪の代作「三重櫓」を脱稿。十月、柳浪と合作の名義にて「薄衣」を「文藝俱樂部」誌上に掲げ、更にその翌月「合作タセミ」を「伽羅文庫」に掲載す。  
冬の初め清人羅臥雲の紹介を得て、巖谷小波の木曜會に出席せり。

明治三十三年 (二十二歲)

二月、「闇の夜」を「新小説」に、六月、をさめ髪」を「文藝俱樂部」に、九月、「花ちる夜」を「關西文學」に發表す。「山男浪治」幼年世界、「船中の盗人」柴田流星共譯、「中學世界」、「山谷當垣」等の諸作を爲せしもこの年なり。

六月、狂言作者榎本破笠の請人にて福地櫻痴居士の門生となり、歌舞伎座の作者部屋に入る。芝居道の禮儀作法嚴格にして寧驚嘆に價せり。  
秋、富士見町の旗亭萬源に於て、義和團事件

に出征すべき黒田湖山の送別會あり。紅葉、小波、風葉、谷活東等と共に出席す。

明治三十四年 (二十三歲)

三月、「文藝俱樂部」に「小夜千鳥」を發表す。五月、歌舞伎座を去つて日出國新聞に入社、月俸十二圓を給せらる。恰も補助が少く、改名の時なり。之れ櫻痴居士が同社の主筆となりしに因る。當時雜誌欄の責任者たりしは、鍋木清方の先德探菊山人竝に岡本綺堂の兩氏なりき。入社後直ちに「新梅曆」を同紙に連載せり。

明治三十五年 (二十四歲)

二月、長篇小説「野心」を美術社より上梓。三月、社員淘汰の名の下に日出國新聞社を解雇さる。しかも再び歌舞伎座に戻るを得ず。意を決して曙星學校の夜學に通ひ、佛蘭西語の稽古に専心す。

六月、「闇の叫び」を「新小説」に寄せ、長篇『地獄の花』を金港堂より出版。この稿料金十五圓は、執筆に依りて得し最初のものなり。

上田敏兩氏の推薦にて同輩文學科の教授に就任す。

この前後より金春の「妓女」と親を爲せしが、幾許もなく妓はさる大盡に落籍の身となりて、切齒扼腕すと雖、力及ばず、忿恨心魄に徹す。

二月、「西班牙料理」を屋上庭園に寄す。  
「東京朝日新聞」に連載中の「冷笑」この月に完結せり。

四月、「三田文學」發刊。「發刊の辭」有樂座にて、「幕見」片鱗等を創刊號に掲載す。

五月、「五月」倦怠「錦掛松」を「三田文學」に、單行本「冷笑」を左久良書房より出版。

六月、「三田文學」に、靈廟「櫻の落葉」を發表し、「中央公論」に王昭君を寄す。この頃より新橋の妓八重次に馴染みて交情蜜の如し。

七月、「傳通院」八月、「夏の町」九月、「平維盛」冷笑につきて九月「流霞の樂土」絶望なるかな。十月、「樂器」希望。

十一月、「歌舞座」の棧敷にて或劇場の運動場にて。十二月、「自由劇場」の歸り。以上を各々「三田文學」に發表す。

九月、明治座に「平維盛」上演。先代左團

次の七回忌流善興行の時なり。

明治四十四年 (三十三歳)

「新年」秋のわかれ「浮世世」銀座「あの人達」蟲干「海洋」の腕「わくら葉」夏居小景等を追次「三田文學」に發表し、日本の庭「煙」星君「改題」を「中央公論」に寄す。この間「すみだ川」牡丹の客「紅茶の後」等を榎山書店より上梓せり。

明治四十五年—大正元年 (三十四歳)

一月、「散柳窓夕榮」(戯作者の死)「改題」を「三田文學」に書く。  
二月、八重女との交益々深し。しかも八重女はリウマチスにて舞扇持てぬを幸、新橋の妓家をたのみて四谷荒木町なる字の丸横町に隠れ住み、日夜大久保の書齋に現る。  
「掛取」を「三田文學」に發表。

三月、「色男」(若旦那)「改題」三田文學。  
四月、「風邪ごうち」中央公論。「淺瀬」三田文學。「妾宅」朱鷺。  
五月、突如として腸の病起り耐へ難し。八

重女來つて煎藥、矢筈草を喫む。早速試るにその效著し。

「名花」松葉芭「五月間」短夜「甚すぎ」等を順次「三田文學」に掲載。

九月、「新橋夜話」を榎山書店より出版。この月某商家の息女を娶る。琴瑟相和すに至らず。

十二月、三十日夜、八重女と共に箱根に到る。翌日突然父君危篤の悲報ありと雖、所在全く不明也。一二の知友急遽心當りを索ねれど遂に知り難し。

大正二年—三十五歳

一月、元旦、前夜の夢を追ひつゝ欣然として家に歸れば、家尊既に亡し。  
中央公論に「浮世世」の鑑賞を掲ぐ。  
二月、令室との仲益々親ならず、遂に破鏡の不幸を見たり。

四月、「珊瑚集」を榎山書店より出版。

五月、「父の恩」、六月、「浮世世」の山水と江戸名所を共に「三田文學」に發表す。

九月、「大津多與里」を執筆、翌年七月まで「三田文學」に連載す。

八月、從兄永井松三の家の一室に行きを移す。從兄は當時、紐育駐在副領事なり。九月、病床に在ること二旬、十月初旬に至りて漸く全快す。  
『後半の酒場』『醉美人』『長髮』の三篇を「太陽」に寄せ、更に「落葉」「林間」等を脱稿す。

#### 明治四十年 (二十九歳)

一月、「歌劇フォーストを聴くの記」を、新小説「」に寄稿。  
四月、「寢覺め」「夜の女」「夜あるき」等を大執筆す。  
五月、「舊恨」を「太陽」に、「雪のやどり」を「文章世界」に發表。「一月一日」「曉」等を脱稿。

六月、「惡友」を執筆。  
七月、「六月の夜の夢」「船と車」の稿成る。この月突如として勤務先なる正金銀行紐育支店より、佛蘭西里昂出張員たることを命ぜられ、感極りて言ふ處を知らず。九日夜イデスと別杯を酌む。然れども胸中既に藝術の功名心以外何物もあるなし。十八日佛國汽船ブルタンヌ號にてハドソン河口を出帆す。

す。——二十七日夜アール港着。  
「ローン河のほとり」「春と秋」「秋のちまた」等はこの年の作品なれど、何れも在米中の物なり。

#### 明治四十一年 (三十歳)

里昂着後、銀行の仕事益々堪へ難きを覺え、半歳にして三月遂にこゝを辭し巴里に到る。四月、巴里の小紅亭に於て初めて上田柳村と會す。

六月、「巴里のわかれ」を「新潮」に發表。  
七月、「あめりか物語」を「博文館」より上梓。  
八月、歸朝、人久保余丁町の邸に入る。  
「雲」「放蕩」改題「支那街の記」「蛇つかひ」  
「霧の夜」おもかげ「再會」「沙漠」「ひとり旅」  
「黄昏の地中海」等を執筆す。

#### 明治四十二年 (三十一歳)

歸朝後専心創作に従事したれば、その作品漸く多きを加ふ。即ち  
一月、「祭の夜がたり」を「新潮」に、「狐」を「中學世界」に、「惡感」を「秀才文壇」に、「晚餐の

後」を「趣味」にそれぞれ發表し、

二月、深川の唄を「趣味」に、

三月、「曇天」を「帝國文學」に、監獄署の實を「早稲田文學」に「春のおとづれ」を「新潮」に寄せし外、短篇集「ふらんす物語」を「博文館」より出版す。されどこの「ふらんす物語」直に發賣禁止となりし爲、博文館との間に面倒なるいきさつを生じ、遂に大正五年までの満八年間紛糾を重ねるに至れり。

五月、「祝盆」を「中央公論」に發表、  
七月、「歡樂」を「新小説」に、「牡丹の客」を「中央公論」に寄す。

八月、すみだ川を「新小説」に掲載。  
九月、レニエーの泉のほとりを譏笑して「趣味」へ。

十月、「新歸朝者の日記」を「中央公論」に掲げ、續いて「荷風集」を「易風社」より上梓す。

十一月、「見果てぬ夢」を「中央公論」に發表、

十二月、「冷笑」を「東京朝日新聞」に連載し始む。これ唯一の新聞連載小説なり。

#### 明治四十三年 (三十二歳)

廣應義塾の文學科刷新の事起り、森田太郎



この月、春陽堂の『荷風全集第一卷』出づ。

大正八年 (四十一歳)

梅吉が許に連日清元の稽古に通ふ。

六月、『荷風全集第二卷』出来。

七月、小説『花火』を『改造』に寄す。

十一月、麻布市兵衛町に偏奇館を建築すべく地所を選定。

十二月、『荷風全集第三卷』上梓。

大正九年 (四十二歳)

二月、『江戸藝術論』『おかめ恒』の二著を春陽堂より出版。

三月、『小説作法』を『新小説』に寄稿。

五月、偏奇館の新築成り、築地より老婢一人を作ひて移る。帝國劇場に『三柏葉樹頭夜風』を上演中の事なり。偏奇館内和室を作らず、總て椅子卓子を用ゆ。これより全然和服を廢し、寢るに猶洋衣を棄つる莫し。

『荷風全集第四卷』出づ。

『開花一夜劇』二百十日、『偏奇館漫夜』

八、九の三ヶ月に互りて『新小説』に掲載。

十一月、『荷風全集第六卷』出版さる。

大正十年 (四十三歳)

一月、『雨瀟瀟』を『新小説』に發表。

三月、『歡樂』を春陽堂より上梓し、戯曲『夜網誰白魚』を左團次の爲に執筆、直ちに明治座に上演さる。

七月、『三柏葉樹頭夜風』を春陽堂戯曲選集として上梓。

九月、『砂糖』を『趣味』に寄せ、十二月、『寫況雜記』を『明星』に掲ぐ。

大正十一年 (四十四歳)

二月、『早春』を『明星』に發表。

三月、『秋のわかれ』を春陽堂より出版。『雪解』を『明星』に執筆す。

五月、『春雨の夜』『明星』

六月、梅幸、羽左衛門に依りて淨瑠璃旅姿思損稻』を帝劇に上演。この月より九月まで『二人妻』を『明星』に連載す。

七月、『伯爵』を帝劇に上演。『雨瀟瀟』を春陽堂より出版。

八月、『森先生の事』を『明星』に書く。

十二月、『秋のわかれ』を帝劇に上演。俳優は左團次一座なり。『十年振』を、中央公論』に、『隱居のこころ』を『明星』に寄す。

大正十二年 (四十五歳)

『平無草』を十三年一月迄女性に連載。

四月、『藝者の母』を『女性』に發表。

六月、『二人妻』を東光閣より出版す。

猶『寢顔』梅雨晴』を共に『女性』に掲ぐ。

九月、大震災の當時、妓女二三偏奇館に避難し來る。變時卻て館内に嬌聲を聞くもをかし。

大正十三年 (四十六歳)

二月より『下谷通波余志』後に『下谷談話』を『女性』に連載せしが、五月に至りて中止す。

五月、『狐談』(後に『幸中喜話』)を『苦樂』に寄す。

九月、『麻布襟記』を春陽堂より出版。

十一月、『凡邊の記』を『女性』に寄す。

十二月、『下谷通波余志』脱稿。

十二月、『戀衣花笠森』を『三田文學』に掲載したれど、其筋の忌諱に觸れて忽ち發賣發布を禁止さる。

『鈴木春信の錦繪』泰西人の見たる葛飾北齋「ゴッホ」の歌麿及北齋傳は何れもこの年の『三田文學』に發表せし物なり。

### 大正三年 (三十六歲)

三月、『散柳窓夕榮』を榎山書店より上梓。  
四月、『日和下駄』を『三田文學』に連載し始む。

他に『歐米人の浮世繪研究』『浮世繪と江戸演劇』『衰頹期の浮世繪』『江戸演劇の特徴』等を『三田文學』に發表。

八月、市川左團次夫妻の審修にて八重女を正妻と爲す。

### 大正四年 (三十七歲)

一月、書おろしの單行本『夏委』を榎山書店より出版したれど、風俗上良しからずとて發賣禁止の厄に遇ふ。

二月、八重女突如として去り、再び煙火の

地に現る。

四月、戯曲『三柏樹頭夜嵐』を『三田文學』に掲載す。この月、築地一丁目なる清元梅吉の裏隣に移りしが、八重女との交情再燃して復舊日の如し。

五月、『荷風傑作鈔』を榎山書店より上梓。

十一月、『日和下駄』を同誌。

十二月、築地より柳橋代地河津に移る。句あり。——石菖や窓から見える柳橋。——

筆『築地草』を『娛樂世界』に寄す。

### 大正五年 (三十八歲)

一月、『花瓶』を『三田文學』に掲載。

三月、腸の病常に思はしからず、教授の責任盡し難きを知りて慶應義塾を退き、同時に『三田文學』の編輯を辭す。

四月、雑誌『文明』を發刊し、創刊號に隨筆『矢はずぐさ』連載、矢立のちび筆を書く。

これより『雨聲會の記』『うぐひす』『支那人』『夕長篇』『腕くらべ』(連載)等を連月『文明』誌上に發表す。

七月、大久保の邸内に普請中の新廬成り、斷腸亭と名づく。

### 大正六年 (三十九歲)

一月、『初硯』。二月、『築地がよひ』。四月、『西遊日記抄』連載。五月、草紙。九月、『何ぢややら。』いづれも『文明』に掲載。

十二月、『腕くらべ』を單行本として十里香館より上梓。同月『文明』を廢刊す。

### 大正七年 (四十歲)

一月、『斷腸亭雜藁』を榎山書店より出版。『おかめ笹』(前篇)を『中央公論』に、『松の内』を『三田文學』に寄す。

四月、雑誌『花月』を創刊。書かでの記『夏ごろも』(來居花)『曝書』(ポートセツト)『夕立』(立秋所見)等を連月同誌に發表し、併せて『おかめ笹』の續篇をも連載す。

八月、『荷菰棚』を『中央公論』に寄稿。

十二月、『花月』廢刊。大久保の邸宅を某に譲り、築地二丁目三十番地に移る。これ恰も冬至の日にて、下町の湯屋より柚戸の移り香合みし手拭下げて出て來る奴女數多あるに遇へり。

昭和二年十月二十日

昭和二年九月一日 印刷  
昭和二年九月五日 發行

現代日本文學全集 第二十二篇

著 者 永 井 壯 吉

發 行 者 山 本 美

印 刷 者 杉 山 愛 二



發 兌

東京市麹町區内幸町一丁目參番地  
幸ビルデイング堂階

改 造 社

東京市  
銀座一八  
〇五七四  
四五三〇  
八八三二  
金邊番



大正十四年 (四十七歳)

一月、『七月九日の記』、二月、『ちぎれ髪』を共に『女性』に發表。四月、『つくり話』を『苦樂』に、『菖菴漫筆』(至十月連載)を『女性』に寄す。六月、『絲のもつれ』、『苦樂』。この月『重印荷風全集第五卷』出づ。

大正十五年—昭和元年 (四十八歳)

三月、『下谷叢話』、四月、『荷風文藝』、『重印荷風全集第三卷』、六月、『重印荷風全集第四卷』、九月、『重印荷風全集第二卷』、十二月、『重印荷風全集第六卷』何れも春陽堂より發行。七月、『貸間の女』を『苦樂』に書く。

この年初夏の候より銀街の一茶肆虎樓の客となりしが、昭和二年盛夏の今日に至るも連夜登樓を怠らず。嗜好きの文壇人類に之れを猜むと雖更に意に介する事なし。

昭和二年 (四十九歳)

四月、成島柳北の日記につきて、五月、『柳

北仙史の柳橋新誌につきて』を共に『中央公論』に寄す。

五月、『重印荷風全集第一卷』上梓。

六月より『荷風隨筆』と題して、連月『中央公論』に隨筆連載。

七月、『やどり蟹』を『中央公論』に發表す。

八月、俳優市川左團次に誘はれて市て信州輕井澤に暑を避く。

今回改造社と日本文學全集の出版契約成

るや、荷風先生本集に必要な編輯、年譜略傳の執筆等一切を舉げて余に一任せらる。余不敏にしてその任に適せざるを知るに難、師恩の深きを思へば又徒ちに

辭すべくもあらず。乃先生の作品中より小説隨筆合計十三篇を選び、輯めて本書を成す。傍學素より能く爲す無し。讀者の譴責を買はずんば幸なり。

邦枝完二

ましろの月

ホオル・ヴェルレエン

ましろの月は

森にかじやく。

枝々のさゝやく聲は

繁のかげに

あゝ愛するものよといふ。

底なき鏡の

池水に

影いと暗き水柳

その柳には風が泣く。

いざや夢見ん、二人して。

ひろくやさしき

しづけさの

降りてひろがる夜の空。

月の光は虹となる。

あゝ、うつくしの夜や。

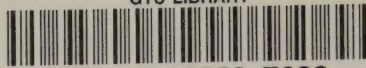
(『柳橋新誌』より)



**GTU Library**  
**2400 Ridge Road**  
**Berkeley, CA 94709**  
**(510) 649-2500**



GTU LIBRARY



3 2400 00559 7632







改造社